四竜帝の大陸

林　ちい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
四竜帝の大陸

【Ｎコード】
Ｎ９７１４Ｆ

【作者名】
林　ちい

【あらすじ】
２６歳で異世界トリップしちゃった鳥居りこ。
普通は女子高生なんじゃないのかな？って思いつつ、王宮に居候生活開始。
お約束のように王子様に会ったけど、彼女が恋したのは小さな白い竜。
可愛い見た目を裏切る性格難有りのおちび竜の＜つがい＞になって、のんびりひっそり暮らしたかったのに。
ちょっと変わった旦那様との新婚生活は、異界人のりこには色々と

大変で……。

世界最強最悪の竜ハクと平凡なりこの、人間と竜族……世界の行く末までも巻き込んだ傍迷惑な恋物語。

プロローグ

鳥居りこ。
うん、私の名前。年は２６歳、独身！
来年の秋に挙式予定！
現在は仕事を辞めてアパートを引き払い、実家にて暮らしています。
えーっと、今日は家族と夕飯後にお笑いのテレビを見て馬鹿笑いしてお風呂入って、寝て。
いつもと同じ生活だったよね？
なのに……なんで？
こんなだだっぴろい広間で座ってんのよ！？
しかも目の前には外人の青年が青い目を見開いて、まぬけ顔してるし！
誰よ、あんたは！
うわわっ！
私、パジャマだ～！
高校生から愛用のぼろパジャマだし！
「ぎゃーっ！　見ないで、変質者！」
鳥居りこ・２６歳にして初めて人を殴りました。

第1話

殴った側も心が痛いんだ……とか、青春ドラマで言うよね？
実際、殴ったら心よりまず、手が痛かった。
ぐーで殴ったから第一関節が痛いかも。
だいたいさ、殴った私が逆にダメージを受けてるし。
床に座り込んで痛い右手をかばいつつ、涙がどんどこ溢れて……。
痛い・寒い・怖い・恥ずかしい……もう、ごちゃごちゃだ。
鼻水をずずっとすする音が、静まりかえった室内に響く。
最悪だよ！
きらびやかに着飾った外人達の姿が涙で歪んだ眼に映る。
映画で見る様な……舞踏会かなんかなの？

『これは……どういう事だ！　ミー・メイ！！』

私に殴られた青年が大声で怒鳴った。
言葉はわかんないけど、怒ってるのは口調と表情で分かった。
その青い瞳は殴った私を見ていなかった。
私の……左？
あ、気がつかなかったけど……女の子が立ってる。

『ミー・メイ！　お前は……異界から人間を連れてくるなどしてはいけないことだ！　すぐにこの娘を返還しろ』

青年が女の子に、言葉を叩きつける。
すごい剣幕だから私は左にいる女の子が気の毒に思えて……他人が怒られ（？）てるからか涙も止まり、頭が冷静になってきたかも。
ちらりと女の子の様子をうかがう。
かわいそうに。

可愛らしい顔が真っ青！
妹がいるせいか年下の女の子に弱い私は、彼女が気の毒になった。
何か言いたげな唇は震えて声が出てこない。
まだ高校生位の歳に見える……妹より下かな。
「ちょっと、青年！　やめなさいよ。可哀想だしさ！」
思わず意見してしまった。
石の床に座りつつね。
青年はぎょっとした顔でこちらに顔を向けて……あたふたと自分の肩からマントを外して、私にかけてくれた。
片方の膝をつき、そっとかけてくれたマントからはふわりと柑橘系の香りがした。
初めてちゃんと確認した青年の顔は……。
「……イケメン君、殴ってごめんなさい」
さっき殴った顔は俳優みたいに整っていた。
私が殴った程度では、赤くすらなってなくて安心した。
イケメンだけど顔は硬くて丈夫なんですね！

『貴女は被害者だ。わが国の術士のせいで異界から連れてこられてしまった。言葉は通じてないようだが……。セイフォン・デイ・シーガズ・ダルド、心の底から謝罪する』

はあっ？　イケメン君、何？
全く理解不能だよ……あ、頭を下げた。
謝ってる感じがする。
ひえ、女の子が私に土下座したよ！！
なんか……こうまで謝られると逆に怖いんだけど。

言葉を勉強し始めてから知ったのよね。
事の詳細を。

あの日はダルド殿下の二十歳のお祝いで……王宮術士であるミー・メイが余興で異界の物を出す術式を披露したんだって。

出すのは害の無い小さめな無機物のはずが、私が出てきてしまったわけだ。

ミー・メイは異界から引っ張ってきた物を返すことは考えてなかったから……。

一方通行の未完成な術式は禁術に指定され、私は殿下のお客扱いで王宮生活になった。

自分の誕生日の余興で私の人生をめちゃくちゃにしたと彼は後悔しているから、私にとっても良くしてくれた。

あれから１０年たったけど、今もそれは変わらない。

１０年たって、私は毎日とっても幸せだけど……殿下とミー・メイとも仲良くしてるけど許してはいないの。

こんな理不尽なことが二度とおきてほしくないから。

だから私は、彼らを許さない。

私はここで本当に愛する存在を手に入れたけど、私を失った家族の嘆きを想うから。

第2話

薄暗い廊下を歩いて案内された。
静かな石畳みの廊下に間抜けな音が響く。

ぺたぺた……ぺたぺたぺた。

ああ、思い出した！
寝付けなかったから一階の台所に向かってたんだ。
ポカリでも飲もうかなって。

ぺた……ぺたぺたぺた。

だからスリッパを履いてたんだ。
妙に頭が冴えてきた。
周囲の観察より、今後の自分の処遇が気になるよ！
う～ん。
これって、高校生のときに夢中で読んだライトノベル的に言うなら‘異世界トリップ’ってこと？
殴った手がまだ少し痛いから、現実ってことになる。
さっきの青年の様子からすると、望まれての事じゃないね……絶対。
ライトノベル的筋書きなら……魔王を倒すためとか、世界を救う鍵とか、封印を解くとか。
で、王子様・騎士・魔法使い・勇者等のうさんくさい職業の美形イケメンとハッピーエンドになるんだよね。
私はどうせなら職人さんとかを希望したい。
庶民の私じゃセレブ人種とは、価値観が絶対合わないし。
う……って、言うか私は来年の秋に挙式予定！

帰れなかったら？
どうしよう……家族や安岡さんに迷惑かけちゃう。
安岡さん……一応、婚約者だし。
お母さんの知り合いの息子さん。
紹介されて感じの良い人だったし、大手企業のお勤めだってお母さんが喜んでたから結婚してもいいかなって決めちゃったんだよね。
恋愛感情は無かったけど、結婚してから好きになるだろうって。
これって……友達がどんどん結婚してたから、焦っちゃったのかな。
こんな考えで結婚しようとしたから、ばちが当たったのかな？
ばち……。
もしかして生け贄とかで連れてこられたとか？
２６歳の私に恋愛ファンタジーが用意されてるなんて、思い上がりだよね……。
ぴちぴち女子高生の役割だよ、それは！
やっぱり生け贄コース？
だから頭を下げたの？

『どうぞ。こちらでお休みくださいませ。御用の時は呼び鈴を遠慮なくお使いください』
おっと！　そうでした。
侍女（？）さんにしょっぴかれてる最中でした。
木のドアが開かれ、背中を優しく押され……、ドアを閉めて侍女さんは去って行った。
「なんて言ったのかな？全く分かんないし」
でも、背中を押してくれた手は優しかった……温かかった。
悪意は感じなかった。
見回した室内は薄暗かった。
電気が無いんだね。

壁のランプだけが頼りで……。
広間はとても明るかったのに。
薄暗い部屋より、窓の外の方が明るい……月明かりだ。
ソファーとベットがどーんと置かれた薄暗い部屋は、なんか不安で……。
月明かりに誘われるようにベットを乗り越えて、テラスへ出た。
あ、ガラス戸……ガラスはあるんだね。
外側に押すと簡単に開いたから、ちょっとびっくり。
閉じ込める気は無いんだ。
逃げられないようにしないってことは……生け贄説は除外だ！
外は見事な庭園だった！
うわ～。
入場料を払ってもいいよ、ここ！
雑誌で見たイングリッシュガーデンみたい。
満月の下で……幻想的な風景に絶句。
あ、月は１つだ。
地球からの眺めと同じで……なんか安心した。
東屋を発見！
さっきのベッドから毛布とか持ってきて、ここのベンチで寝よう！
気温はそんなに低くないし。
薄暗い部屋より、明るい月の下のほうが良い！
私は急いで部屋に戻り、毛布を抱えて寝床を作った……大満足。
枕は羽枕でちょっと柔らかすぎるけどね。
周りは花がいっぱいで、良い香り……。
「……え？」

薔薇に似た花々の上を何か飛んでる……。
白くて、きらきらして……？
なんだろう？
蛾かな？
蛾にしてはでっかいし。
小型犬位ありそう。
危ない生物だったら、どうしよう。
でも、はっきり見たい！
確認したい！

あの飛んでる生き物……私には竜に見えるんだよね。

胴長のアジアっぽい龍じゃなくて、西洋の龍に見える。
さすが異世界トリップ！
竜がいるなんて……定番だよね、うん。
せっかくの機会だし、やっぱり近くで見たいし触ってみたいな～。
私、爬虫類は好きだし。
特に鱗のある蛇・トカゲが好きなのよね。
ひんやり・つるつるで……ううっ、あの竜が鱗系生物ならぜひぜひタッチング希望です！
不安で落ち込んでた心が、美しい庭園と竜らしき生物のおかげで急浮上してきた。
ずぶとい神経っていうよりも……精神の自己防衛機能で、私は逃避したんだと思う。
「りゅ……」
一歩を踏み出すと同時に、驚くべき事がおこった。

「お前は何者だ？　……異界の匂いがする」

日本語……だ。
日本語！
一瞬のうちに、竜が目の前に居た。
瞬間移動ですか？
「違う。普通に移動しただけだ」
金色の眼に私が映ってる……きれいな目玉だね～、うっとりしちゃう！
うっとりしてる場合じゃないよ、私！
「ねえ！　日本語しゃべってるよね？　ぎゃー！　やったー！　言葉が通じてるよう……うううううえ～ん！」
感極まって変な声が出て、涙が噴き出してしまった。
これが嬉し泣きってやつだ！
初めての体験！
「うえっつ、うえ～……うぐうぐ！　わ、わた……しここで、一人で、うう……どうしていいかわからなくて怖くて……えぐえぐっつ、ぐふっ」
多分、かなり見苦しく汚らしい泣き顔になってるはず。
涙・鼻水がどわーっと出てるし、うまく息つぎが出来なくてむせちゃってるし。
２６歳の大人の女としては……女として終わった感じの有り様かも。
でもでも、止まんないよ～、うれしいよ～～！
げふげふっ！　うう、苦しいなあ。
「すべての思考を我に向けるな、異界の人間よ。うるさくてかなわん！」
鼻が触れ合うほど、眼と眼が覗き込めるほど近くにあった竜（た

ぶん竜・しかも鱗系だ！）が、くわっと口を開けた。
かわいい歯と牙が見えた。
真珠で作ったみたいなきれいな……まるで宝飾品のような。
ああ、体もきれい。
真珠の光沢を持った純白の鱗！
触りたい、触りたい……触りたい！

「変な人間だな。この我に触れたいとは」

すーっと、私から距離をとった竜は首を傾げながらそう言った。
小型犬サイズの竜のそのしぐさは私にとって、悩殺ポーズに等しかった……うん。
あんまり可愛いから私の涙腺と鼻水が、ぴたりと止まる。
思考回路も回復したみたい。
だって、すごいことに気がついたし。
「……もしかして、私の考えてる事がつつぬけ？超能力？」
竜の金の眼が細くなる。

「つつぬけではない。お前が我に伝えたいと念じたことのみだ。我は声を理解したわけではないし、日本語とやらも喋れん。念話でお前と喋っている状態だ」

パジャマの袖で顔を拭きながら考えてみた。
むむ。
そういえば、声はしない……聞こえてこない！
だからこの超かわいい子の声質はわからない。
ただ頭で会話の‘意味’が理解できてるだけって感じ。
本を黙読している感覚に近いかな？
「この我は‘声’を持たぬからな」
「声がない……。でも念話っていうことができるんだね！」

しかもすっごく、賢い気がするの。
ちょっと古風で俺様っぽいけど。
知性の高さは私なんか及ばない感じ。
羽を動かし浮いている小さな体。
小さいけれど、すごい存在感があるし。
動作もかわいい……ううん、優雅で品がある。
高校生から愛用のパジャマに3足980円のスリッパを履いた私には、触ることなど許されない高貴な……。
袖に涙と鼻水も付いてる26歳。
悲しさを通り越して、笑えるかも。
「満点大笑いです！　みたいな？」

「おい。意味がわからんぞ」

とにかく……せっかく出会えた意思疎通のできる存在！
離れたくない……ってか、逃がすか！
「あ、あの。もしも可能ならば私と一緒に居て欲しいの！　あなたの存在が必要なの」
どう言ったら良いんだろう。
この子にはこの子の生活があるわけだし。
でも、私も追い詰められた状態っていうか……。

「……我と居たいと？　この我を求めておるのか？」

金の眼をくりんと回して私に合わせた竜は、またまた首を傾げた。

うわっ！
ホントにラブリーだよ～！
念話にならないように……自分自身に語りかけるように心がけた。
だってこんなマニアックな目線で見てるのがばれたら、変質者と思われて逃げられちゃうかも！
「うん、うん！ずっと一緒にいたいの。私でできることは何でもする！」
「ふむ。……では、我に名前を与えてくれ」
え？
名前？
この子は名前が無かったの？
こんなにかわいいのに！
なんて役得なんでしょう。
おいしい展開だよね、これ。
こんな可愛い竜（鱗系！うれしー！）に私の考えた名前をつけれて、一緒にいられるなんて。

「無理ならよい。我はいままでもそうだったのだから」

ほんの一瞬、金の眼が揺らいだように見えた。
「はい、決定しました！白からとって＜ハク＞に決定！」
「お前……名前を……」
私は即決してた。
安直な名前だけど、これしか浮かんでこなかったし。
何より名前を……て言われたら＜ハク＞がぱっと出てきたし。

「あなたはハク。私は鳥居りこです。これから末永くよろしくね！」

「……我はハク。そうか、そうだったのか！　くくっ……はは」

ハクが笑った。
金の眼が細くなって、かわいい歯と牙が見えるほど口が開いてたけど声は聞こえない。
ちょっとだけ寂しい気がした。

「あのね、鳥居は名字で、りこが名前なのよ」
「……しばし待て」
ハクは小さな手を合せ、お祈りでもするかのように眼を伏せた。
私はその動作があんまり可愛くて凝視してしまった。
あれ、指の隙間から淡い光が。
ハクがそっと手を開いた。
「わ～、きれいだね。真珠みたい」
直径は2センチ位かな。
きらきらしてる球体……淡く発光してて、すごっく綺麗。
「なに、それ……うがあっつ！」
口にハクの手が！
ぎゃー！
いきなりグーをつっこむ？　普通さ！
悶絶する私の口の中でハクはゆっくり手を開き、舌の上に何か置いた。
置いた瞬間、砂糖菓子の様にそれは消えた……少し甘かったかも。
ハクが手を私の口からずぼっと取り出し、べろんと舐めた。
な……なっ、何？
ぎゃー、私の唾液の付いた手を舐めてるよ！
しかも丹念に！
だいたい何をつっこんだの？
あ、もしかして……さっきの真珠みたいの？
「あ……あ、飴をくれるなら普通にちょうだいよ！　びっくりしたよ」
「飴ではない。竜珠だ」

竜珠って……お菓子の名前かな？
こっちの世界のお菓子か！
なるほど。

「我の名を呼べ、りこよ！」

手を腰にあて、ふんぞり返ったハクが妙に偉そうに言った。
ナイスポーズ！
これまたかわゆい。
デジカメも携帯も無いのが悔やまれる。
「ハク……ハクちゃん、うう。デジカメ～！」
「？　でじかめ……とは何だ？　しかも＜ちゃん＞とは何だ。女・子供じゃないぞ」
まずい。
思わず言ってしまった。
だって、かわゆいからさ～。
誤魔化さねば！

「わ、私の国では親しい相手に愛情を込めて使うのよ！　愛情表現だよ。うん！」
「なるほど。我もりこちゃんと呼ぶべきなのか？」
「ううん。必要ないよ。りこちゃんはにこちゃんみたいで好きじゃないの。だからりこって呼んでくれたら嬉しい」
小学生の時にニコチャンマークってからかわれたのが、辛かったんだよね。
今、考えてみるとたいしたことじゃないんだけど。
当時は泣いたな……くすん。
「わかった。りこだな。で、これからどうする？」
「え？　どうするって？　もう夜だから寝ようよ。明日はハクちゃんの力を借りて、今日会った人達にいろいろ質問したいし」

さすがに、疲れました。
ハクちゃんという味方ができたからか……張ってた気がふにゃふにゃだよ。
私はふらふらと東屋に戻り、スリッパを脱いで毛布に潜り込んだ。
「おい、りこ！　こんな場所で寝るな……りこ、りこ！」
うう……だめ。
意識朦朧って、このことだ。
すべては、朝になったら考えて……。
とにかく、寝よう。
「おやす……み、ハクちゃん」

第3話

りこがぐーすか寝ている同時刻。
セイフォン国の中枢は……荒れていた。
世継ぎの王子の誕生日で浮かれていた彼等の心は、奈落に落とされていた。
が。
心理的にはそうでも、足掻かなくてならない。
彼等には国を、民を守る義務がある。
「陛下！　殿下の意見は国を滅ぼします！」
大臣の一人が顔を真っ青にしつつ叫んだ。
初老のゼイデ伯は普段は物静かな紳士だが、髪を掻き毟り唾を飛ばし叫ぶ様は彼から＜いつも　温厚な紳士の手本のような大臣＞という看板をぶち壊してしまった。
ゼイデ伯の変わり果てた姿に周りの人間達は逆に冷静さを取り戻していった。
「落ち着け、ゼイデ。あの方は意味の無い虐殺などはなさらない。国も民も安心だ。術式を行ったミー・メイの主で国の王である余の首で……駄目かの？」
見る見るうちに青から赤に変化したゼイデの顔を見てしまった国王ロイバウドは口を閉じた。
ゼイデは乳兄弟で半世紀以上の付き合いだ。
王として覇気・能力が足りないが善人なことだけが救いだと近隣諸国から言われている自分を助け、補佐してくれている忠臣……友人なのだ。
「陛下の首を差し出すなら私も腹切って自害します！……このぼんくらが！俺様の案を聞いてなかったのか？＞監視者＜に連絡して異界人を差し出す！ミー・メイと一緒にな！」
態度と口調が豹変した彼から一同が一斉に距離をとった。

ここに集った上級官僚は知っていた。
ゼイデ・ガロ・フイが普段は猫を被っていることを。
「＜監視者＞は秩序に重きを置く存在だ。原因と結果を差し出せば他は気にも止めないだろうよ！てめえのしわしわの首なんぞ、必要はまるっきりねえんだ！」
ぼんくら・しわしわと言われた王は……微笑んだ。
自分を守る為に非情な決断を叫ぶ友人に。
「異界の娘は被害者だ。＜監視者＞に渡せば処分される。髪1本残さず……存在を消滅させられる。それにミー・メイはお主の一人娘だ。命だけは助けてやりたいのだ」
「父上。私を＜監視者＞に罪人として渡してください。異界の娘は一生を城内で監禁・監視するので命は助けていただきたいと＜監視者＞に申し上げ……」
「このクソ餓鬼！　てめえの意見は却下だって言ってんだろうが！ぶち殺すぞ！」
なんかもう……この場に居たくない。
他の三人の大臣達は会議室からそっと退室した。

三人の大臣が隣室に移動すると同時に、扉の向こうから破壊音が響く。
「ゼイデ殿……だな」
イラスは財務大臣として冷静に判断する。
たとえ同僚でも容赦なく。
「この音から察するに。……テーブルを壊したな。あれは青の竜帝様お抱えの職人による逸品だぞ。いくらしたと思ってるんだ、あの二重人格怪力男め！　弁償請求書を至急用意せねば！」
「イラス、今はそれどころはない。国家の一大事真っ最中だ。逃避したいのは分かるがな」

1番年若いイラスの肩を叩き、なだめるのは大臣の中で最年長のリシサス老。
「しかし……。あの異界の娘はほんに憐れ。なんの罪もない、まだ若い娘。助けたい気持ちはあるが庇えば＜監視者＞は容赦しないでしょうね」
扇で口元を隠し、ため息をついたのは妖艶な熟女。
彼女はこの国初の女性の大臣となったセシー将軍閣下。
将軍職と大臣職をこなす女傑だ。
ゼイデと組み手ができる最強の女戦士。
「この世界に居る限り＜監視者＞からは逃げられないもの。殿下や陛下だって、分かっているはずだわ。お優しいから認めたくないんでしょう。ゼイデ殿の案が最も現実的で最良だわ」
三人が複雑な思いで黙り込んだ時……騎士が廊下を走ってきた。
緊急時以外、王宮の廊下は走るのは禁止されている。
つまり、緊急事態だ。
騎士は三人の前で膝をつき、荒い息で報告した。
「＜監視者＞様の離宮の門に明かりが灯されたのを確認致しました！」
息切れするなど鍛錬不足と普段なら一喝するセシーだが、さすがに声が出なかった。
あれは＜監視者＞の入宮を感知し、自動的に反応する術式の灯りだ。
すでに＜監視者＞は王宮内……離宮に居る。
「やっぱり会議は無駄だったわね。きっともう彼女はいない。」
紫色の瞳を閉じ、短く黙祷する。二人の大臣も同じように黙祷した。
「・・・陛下にお伝えしなければ。あと、ミー・メイの安否確認を！　まだ無事ならば牢からだし明朝、＜監視者＞に引き渡します」
結局、事態の決定は王の居る会議室ではなく隣室（避難所ともいう）で行われた。
報告に来た三人の大臣に王は疲れた顔で言った。

「……分かった。残念だがな。所詮、人がどう足掻こうと‘世界の理’には逆らえぬ」
深々と頭を下げた三人から目線を戻し、‘忠臣な友人’に‘お願い’をした。
「ゼイデ……いや、フイ。今夜は娘の側に。父親としてな」
ゼイデ・ガロ・フイは深いため息をつくと一礼し退室した。
「さて、陛下と殿下。そのお姿はどうなさったの？」
この国で最も高位にいるはずの男とその息子は椅子に座っていた……縄で幾重にも固定され。
簡単にいうなら……縄でぐるぐる巻きで椅子に捕縛か？
解こうと激しく抵抗した形跡のある皇太子は、体力を使い果たしたのかぐったりとして顔を上げる余力も無い有様で。
「フイ……ゼイデは余と皇太子が勝手な行動をすると危惧したのだ。まあ、忠義心による結果なので。皆、見なかったことにするように」
「（はあ、まあ……いいですけど）はい、陛下」

〔補足：りこが喋る日本語は「　」にし、りこが理解できてない異世界言葉を『　』にしています。りこが居ない場での異世界通常会話も「　」にしました。ややこしくて申し訳ないのですが……。りこの語学力がアップしたら徐々に異世界言葉を「　」に統一していきたいと思います〕

「・・・ここ、どこ？」
爽やかな朝の光の中で……吐き気がした。
気分は全く爽やかとは程遠い。
なんでベットで寝てるの？
私は庭園で寝たはずだよ！

なんでこのベットは六畳位でっかいの？
私の部屋は四畳半だった！
なんで天蓋付きお姫様仕様なの？
私でなく、某姉妹のお姉さまがまっ裸で寝るべき豪華さじゃん！
なんでなんでなんでなんでよ！
なんで、また知らない場所なのよ！
怖い、恐い……こわいよ！
もう駄目、もう……ほんとにだめだ！　耐えられないよ！
「りこ、りこ！我に念を向けてくれ！」
何かが私のパジャマの袖をひっぱった。
「……竜……ハク？」
「りこ！　念を向けてくれないと、言葉が分からんのだ。不安と混乱、恐怖を漠然と感じるしかできない。りこ、りこ！　心を我に向けてくれ。」
あ。ハク、ハクちゃんだ。
なら、昨日と同じ異世界？
言葉……分かってくれる。
ハクちゃんが居る。
居てくれる。
もう一人じゃないんだよね？
「そうだ、りこ。我はりこの側に。りこは何も心配するな。不安も恐怖も我が払ってやる。りこを傷つける総ては我が＜処分＞する」
頭の中がぐるぐるする。
感情がぐらぐらして……ごめん、ハクちゃん。
よく分からないよ。
細かいことが考えられないの。
「分からなくても、大事ない。我が側に居る」
そっか～。
そうだった。
ハクちゃんが居てくれるんだもん。

なんとかなるよね？
「なんとかどころか、世界を手に入れることだって可能だ。りこ、我のりこ。お前の望みは我が総て叶えてやろう」
望み……願い事？
うーん、そうだね……うーん。
「触ってもいい？　ハクちゃん」
ハクちゃんの金の眼がくるりくるり。
返事を待たず触れた。
触れたっていうより、抱きしめた。
ああ……なでなでしたかったのに、抱きしめちゃったな。
頭がぐらぐらする。
思考がめちゃくちゃだよ。
もう吐き気はしない……まぶたが重いよ。
「……もうちょっと、寝るね」
眠い眠い……ね……むいなあ。

りこは我を抱きしめたまま、再び寝入った。
我は反省した。
初めてだな、反省したのは。
りこは自分の意思に反してこの世界に‘落とされた’のだ。
知らない場所・知らない言葉・知らない人間……さぞ恐かっただろう。
だから目覚め、そこが寝入った場所と違うと認識したときの恐怖はいかほどだったであろうか？
恐いという感情は今まではよく理解してなかったが、先ほど理解した。
目覚めたりこは様子がおかしく、最初は我の念話も届かなかった。
この我の念話が届かぬ程の狂気がりこを捕らえていた。
このままではりこが狂ってしまう……壊れてしまう！

そう感じ、恐怖した。
我に対して多くの者が感じているらしい‘恐怖’とは若干、異なる気がするが。
我はりこにしか興味が無いからその他の者との差異は放置することにしよう。
「りこ、りこ。我の‘つがい’！我に名を与えた唯一の者よ！」
丸めていた手を開きそっと……そっと伸ばす。
硬い鱗が鋭い爪が、りこの弱くて柔らかな肌を傷つけぬように。
そっと、そっと……。
我は竜。
人間とは比較にならぬ程の力がある。
「駄目だ。りこの涙をぬぐってやりたいのに、加減が分からぬ。自信が無い」
りこの口に、竜珠をつっこんだ我。
あの時だってそっとした……つもりだったのに。
「あの時、りこは苦しそうだったしな。つまり、あの時以上の‘そっと’が我には必要なのだ」
頬に伸ばした指を下げ、拳をぎゅうっと握りなおした。
情けない……いや、悲しいのか？
これもまた初めての感情だ。
さすがの我も初めて尽くしで少々疲れたような？
疲れたことが無かったので、これは推測だが。
よし、当面の目標が決まったな。
ふむ。
りこを傷つけずに触れることが出来るようになること！
これしかないな。
しばらくはりこの方から触れてもらうことにしてだな。
「待っててくれ、りこ。我の‘つがい’！　我は必ずりこをこの手で……！」

我はこの時は想像すらしなかった。
りこに自分から触ることへの長く、険しい道程を。

第４話

「やっぱり、夢落ちは……なしか」

起きて、がっくり。
爽やかな空気はちょっと寒い。
外だしね。
ま、晴れで良かった！
うん。
雨だったら部屋に毛布を戻しにいけないし。
借り物だから濡らすわけにはいかないよ。

あ、ハクちゃん　！

抱っこして寝ちゃった、私？
「おはよう、ハクちゃん。ごめんね、窮屈だったでしょう？」
体を起こしつつ、ハクちゃんを膝の上に置いた。
ハクちゃんが夢じゃ無くて、良かった！
「いや、窮屈ではなかった。少し困っただけだ」
ハクちゃんは私の膝の上に……変な格好で座った。
お尻をついて両足を上げ、手はグーにして万歳していた。
ありゃ、足先もグーにしてる。
変だけど、かわいい！
体重は軽い……恐ろしく軽い。
膝に乗ってるのを感じる程度。
鳥とかって飛ぶために骨がすごっく軽く出来てるって、中学生の時に習った気がする。
ハクちゃんもふわふわ飛んでたし。
骨はすかすかで、肉はぱさぱさだったりして！

「ぱさぱさお肉か。……まずそうだね、ハクちゃんって」
しかも乱暴に扱ったら、骨が折れたりして？
「我を食いたいのか？　味は保障できぬが良いぞ。どこが喰いたい？　りこの好みの部位をもぐから。さあ、遠慮なく言え」
ハクちゃんは両手両足をにぎにぎしつつ、ホラーなことを言った。
私は絶句した。
まずそうだねって言ったのに、何で食べたいのかって答えるかな。
いやいや、つっこむのはそこじゃ無いし！

「た、食べたくない！」

「人間は朝食なる習慣があるのだろう？　異界人が竜を食べるとは知らなかった。竜の他は何を食べるのだ？　今後の為にも聞いておきたい。我の身体ばかりでは栄養が偏るだろう？　ああ、我としては一番美味な部位を食させたい！　りこが‘もうハクちゃんしか食べたくない’と思ってくれたら！」
私の食べたくない発言を綺麗にスルーしたハクちゃんは、握っていた手を開き自分の真珠の様な輝きのある体をせわしなく触り始めた。
ぽっ。
かわいいな～、この動き。
かわいいからちょっと様子を見よう。
訂正はすぐ出来る！
この超かわいい姿を堪能しようではないか～い！（某男爵か～い）
「どこも硬いな。しかも鱗があって、食べにくそうな……。鱗を剥がさねばりこの口腔が傷つく。ああ、人間は料理をし、食べにくい食材を食するに適した状態にするのだな。料理人を調達し、そやつに我の最も柔らかく美味そうな部位はどこか助言をさせるとしよう！　りこ、すまないがちょっと待っててくれ。急いで料理人を確保し、速やかに調理させるゆえ」

金の眼をくるっと回し、ふわりと浮かび背を向けたハクちゃんを私は慌てて引き止めた。

この子の思考回路はどうなってんのよ！

竜なんて食べないし、私の世界には存在しないし……てか、ハクちゃん死ぬ気？

たかが朝ご飯のために自分を犠牲にするなんて、キリストも真っ青の博愛精神？

そんなのノー・サンキューです！

「ごめん。ハクちゃん！　私の世界も竜は食べないし！朝食、今日はいらない。お腹すいてないし」

「遠慮はいらぬぞ？　我は竜族の中でも最高の再生・治癒能力がある。肉を取られたとて平気だ。試したことは無いが、確信している！」

手を腰に当て、何故か偉そうに言うハクちゃん。

そのポーズ、ナイス・ラブリー！　……じゃなく！

「ハクちゃん。私はあなたを食べるなんて無理だよ。もうペット感覚というより、友達みたいに感じてるんだから。それに私は肉は少し、苦手なの。気持ちだけで充分」

私はちょっとうるっときた。

ハクちゃんは私の為に自分を食料に……。

ハクちゃんが人間だったら即・恋愛な気もする。

竜だから友達だけど。

待て、私！

そうだった。

婚約者がいるんだった。

こっちの世界で恋愛する権利が無いかも。

私が帰れない場合、せめて手紙を送れないかな。

お母さん達に無事を知らせたいし。

「りこ！　りこは友達では無いぞ？勘違いしているな」

なんですと？

私の朝ごはんに立候補するほどだったじゃないのよ！

あっ、ため息をつきましたね。

ちょっと、感じ悪いな～。

ため息姿も可愛いけどね。

「私が違う世界の人間だから、友達不可なの？　親切（なんか違うかな？）にしてくれたから私、てっきり……」

ううう～。

へこんできちゃったよ。

まさに‘凹’って字な感じ。

「りこは‘つがい’だ。友達関係ではない。……感情が暗くなったな。なぜだ？我はりこの思考を勝手に読むことはしたくない。我に向かって‘話’をしてくれ。りこは大切な‘つがい’だ。永遠の‘伴侶’なのだから」

ちょっと待て。

「人間社会では夫婦とも言うんだったな。ふむ。夫と妻か。だが人間は相手を自由に変えるが竜は違う。我の妻はりこだけだ」

ちょ……ちょっと待って！

ハクちゃんの言ってる内容って、かなり重要だよね？

つがい・伴侶・夫婦・夫・妻……妻！

このおちび竜の妻？

妻って……こっちの世界って異種結婚ありってこと？

いやいや、そこじゃなくてさ。

いつ、ハクちゃんとそのようなロマンスに？

まったく無かった気がする。

高校生の時に呼んだ異世界トリップ小説だとラストはイケメンと結ばれるけど、その前にいろいろ主人公達の甘酸っぱいエピソードが……。

「落ち着け、私！　第一、私には安岡さんっていう恋人（一応）が、婚約者がいるじゃない。ハ……ハクちゃん、困るよ。私、秋には結婚が決まってるの」

元の世界に帰れたらだけど。

あ、早く昨夜のイケメン君と美少女に詳細を確認しなきゃ。

帰れるのかどうなのか。

すぐに帰れるのか、時間がかかるのか……帰れないのか。

「だから、ハクちゃんの妻には……！」

固まってた。

ハクちゃんが。

私の眼を下から覗きこむ姿勢で。

金の瞳を見開いて。

精巧な人形のように。

「ハ、ハクちゃん。あの、その」

罪悪感を感じた。

きっと、私がこちらの世界のことが分からないから。

知らないうちに私から、プロポーズ的な言動をしたのかも。

思い当たるような甘いやりとりは無かったけど。

きっと、なんか勘違いさせることをしちゃったんだ！

「えっと、そのね。あのね…あ」

びっくりした。

ハクちゃんの金の眼から小さな真珠？

みたいなものがぽろぽろと溢れ出て、地面に転がっていく。

金の眼は瞬きすらしていない。

金から純白が生まれる。

とめどなく生まれ・溢れ・転がる……。
幻想的で美しく……悲しい光景だった。

ああ、泣いてるんだ、ハクちゃんが。

綺麗なハクちゃん。
綺麗な……綺麗な涙。

朝の日差しが反射して、きらきら光ってる。
「ごめんなさい……ごめんね、ハクちゃん。私……」
言葉に詰まっってしまう。
なんて言ったらいいのか。
どうしよう。
傷つけた。
私はハクちゃんを、とっても傷つけたんだ！

「……許さない」

頭の中に強く響いた。
痛いくらいに、強く、深く。
怒ってるんだね、無理ないよね。
瞬きをゆっくり一回した金の眼から、溢れていたものが止まった。

「りこは我の‘つがい‘だ！　りこを我から奪う者は＜処分＞する！　りこが元の世界に帰るなら共に行く。恋人も婚約者も消す」

なっ？

「りこを帰す術式は存在しないから、婚約者とやらの＜処分＞は後回しだ。禁を破って完成させる術士がいるかもしれんな。では、世

界中の術士を殺してしまえば良い！才能のある者から＜処分＞するのがよいな。この国なら……まずはミー・メイからだ。うむ、よい考えだ」

ハクちゃんは何を……＜処分＞とか殺すとか、どうしてそんな怖いこと。

「りこ、りこ！安心するがいい。我が憂いを片付ける。我は＜監視者＞。この世で最も力ある竜。これからは‘つがい’であるりこの為に力を使おう！りこさえ居てくれれば世界の秩序などどうでもよい」

ハクちゃんは私の否定を聞いてなかったの？

ああ、そうか。

受け入れなかったのね。

どうして……私なんかに執着するの？

女子高生みたいに若くないし、絶世の美女でもない。

スタイルだって並みなんだよ？

２６年間、彼氏無し。

恋愛経験無しの私なんだよ？

ハクちゃんなら竜の女の子にもてもてで、選り取り放題なんじゃない？

「りこ。りこ！」

ハクちゃんが私の顔に手を伸ばした。

でも小さな手は触れる前に握られ、降ろされた。

「どうしたの？」

今、気がついた。
私は泣いてるんだ。

この世界に来てから、泣いてばっかり。
もしかしてハクちゃんは涙を手で拭いてくれようとしたのかな？

「すまぬ。我が泣かしたのだな、きっと。……拭いてやりたいのだが、できない」
「なんで？」

ハクちゃん両手・両足を丸めてた。
それ、よくやってるよね。

「……我の手は竜の手だから。硬くて鱗があり、爪が鋭い。りこを傷つけてしまう。我はりこを傷つけたくない。触れたいが……怖い」

意気揚々と物騒な事を言いまくったハクちゃんは、身を縮めるようにしてつぶやいた。

ああ、だめだ。

もう完敗！

この子はすごいよ。
うん。
敵わない。
こんなに想われたこと、無いから。
こんなに想ってくれる人は、きっともう現れない。

ごめんなさい、お母さん・お父さん。
安岡さん、許してなんて言いません。

軽蔑してください。

「ハクちゃんの手、可愛くて好きだよ」

私から手を伸ばす。
硬い鱗。
４本の指。
真珠の爪は確かに少し尖ってるけどね。

「私は平気だけど。ハクちゃんが怖いなら……だんだん、慣らしていこうね。練習したら自信がつくよ」
ハクちゃんの手を私の頬にそっと添えた。
握ったままの小さな竜の手に、力が入ったのが分かる。
緊張しなくたっていいんだよ。
２６にもなると、面の皮も厚いんだから。

「……柔らかいな」

まだ洗顔すらしてない顔だけどね。ちょっと汚かったかもよ。

「りこは汚れてなんか無い。綺麗だ」

駆け落ちする人の気持ち……ちょっとだけ、分かった。

この時、ハクちゃんは自分自身についてけっこう重要なことを口にしたんだけど、私は理解してなかった。

正しくは……聞いちゃいなかった。

聞き逃していたことがけっこう大切で後々、大問題になってしまった。

昔からよく、注意されたのよね。

話はよく聞きなさいって。

第5話

「そんなものをどうするのだ？」

ハクちゃんの涙（涙だと思うんだよね。あの状況だと）を拾い集めていると、不思議そうに聞いてきた。

首を右に少し傾けて言うその姿……！

ああ、なんてかわゆいんでしょう。

普通の人間同士の夫婦とかとは、私達は全く違う。

ハクちゃんとは‘うふふ’‘あはは’的恋愛物語は成立しないわけだし。

お互いを思いやり、大切にして一緒に生活……生きていく関係かな？

私はこっちの世界で人間男性と恋愛する可能性は無い……と思う。

２６年間彼氏無しなのは、私自身の恋愛感情の未発達が問題だった気がする。

姉妹しかいないせいか、基本的に男性は苦手。

だから私から異性に近寄ることは、必要以外しなかった。

別に彼氏が居なくたって、不便は無かった。

出かけるのだって女友達がいるし、ドライブや旅行は一人で気ままにするのが好きだった。

でも。

友人達にどんどん彼氏ができて、遊んでもらえなくなって。

中には結婚する子までいて。

そうなってくるとさすがに……焦った。

恋愛はともかく、結婚はしないとって。

いつまでも恋人の一人もできない私に、お母さんが心配し始めて。

私は自分と親のために、安岡さんを利用したんだ。

だから結婚がこんな形で駄目になって……安心している私は最低だよね。

「ハクちゃんの涙、とっても綺麗だから貰っていいかな？」

５ミリ程のそれを、１粒１粒拾い集めた。

意識をハクちゃんから反らしながら。

頭の中を勝手に読んだりしないのは、分かってるけど。

感情の波は自然と伝わってしまうみたいだったから。

「涙？　それがか？　我も初めて出したから確信は無いが、違うと思う」

おいおい、何をおっしゃる！

私の感動を壊す気？

「だって、眼からでてきたよ。人間でいうなら涙じゃない」

せっせと拾いながら反論した。

人間は液体状だけど、竜なら固体もありな感じも……。

ハクちゃんは指を１本だけ伸ばし、くいっと曲げた。

すると、私の手のひらに白い粒が一瞬で集まった。

左手で地面の粒を拾って、右手にのせてたそれが一気に山盛りになる。

山が崩れる前に、慌ててパジャマのポケットにしまった。

こんなこと出来るなら、最初に言ってくれたら良かったのにな～。

腰をかがめての地味な作業は、短時間でもけっこう辛いもんなのに。

腰がちょっと固まって、痛い。

なんか悲しい。
腰が痛いなんて、異世界トリップ・ラブストーリーには普通は出ないよね。
ま、ラブストーリーじゃないか。
相手がちっちゃい竜だし。
ハクちゃんをちらりと見ると涙の粒（私的には涙認定）を1粒、口に放りこむところだった。

「やはりな。これはかけらだ。我の‘かけら‘」

「……かけら？」

なにそれ？

「我の‘かけら‘。さきほどは無自覚のうちに少し崩れてしまったんだろう。存在が壊れかけたのだ。だから身体が崩れてこぼれた」

な……？
身体が崩れて、壊れた？

「内部から壊れたために、眼から落ちたんだろう」

たっ大変！
この粒はハクちゃんの内臓の成れの果てって事？
早く戻さないと死んじゃうとか！
ぎゃーっ！
やばいではないか！
ひええ～！

「念が強すぎだ、りこ。少々うるさい」

「何、落ち着いてるのよ！　急いで全部食べなきゃ」

ポケットに突っ込んだ手が震えた。

ああ、なんてことだろう！

「必要ない」

何を言ってんのよ！

「……朝食のくだりで再生能力が高いと言ったが。聞いてなかったのか？」

「え？」

言われてみれば……そんなような事をきいたかな？

細かくは記憶してないけど。

「その‘かけら’は必要無い。すでに再生し終わっている」

「じゃあ、平気なんだ。良かった～」

焦って損しちゃった。

でも、竜って凄いっていうか……私の常識外生命体だ。

これから色々と教えてもらわなきゃ。

うん。

‘つがい’なんだから相互理解が早急に必要だよね。

昨夜の部屋は、すぐ近くだった。

寝ちゃった場所からテラスが確認できた。

毛布と枕を抱えて戻った。

ハクちゃんは自分が持つと言ってくれたけど、辞退した。
だって私が使ったものだし。
それに小型犬サイズのハクちゃんに運ぶのは無理だと思ったから。

「我はかなり力があるのだぞ」

とか言ってたけど、疑わしい。
体重はめちゃくちゃ軽いし。
しかも精神的ショックで壊れ、崩れるような身体の作りとは！
繊細というか……ガラス細工みたいな生き物に違いない。
その脆い身体だから、再生能力が発達したのかな？
今後ともハクちゃんの取り扱いは注意しなきゃ。
力いっぱい抱っこしたら、ぼろぼろと砕けちゃうかもだし。
「さて、毛布は畳んでここに置いてっと。ここに洗面所とかついてるかな？」
顔と手を洗いたい。
そういえば……トイレにも、行きたくなってきた。

この世界のトイレ文化って、どうなってるのかな？
トイレはそもそも存在するの？
日本レベルは無理だとしても、便座のあるトイレであって欲しい。

私は部屋を観察した。
昨夜は薄暗くて、見えてなかったから。
「なんかけっこう豪華だったみたい。うわー、損したかな」
旅行雑誌でみた、ヨーロッパの古城ホテルみたい！
猫足の家具がまたメルヘンだ。
暖炉まである。
ファブリックは全体的に、緑系のカラーで統一されてる。
品があり、暖かみも感じられる素敵な部屋だった。

テラスに向かって右に扉を発見し、早速確認！
「やった。良かった」
洗面所だよね、ここ。かなり広いけど。
おお、あそこにあるのは洋式便座！
きゃー、猫足バスタブじゃありませんか！

「ハクちゃん、ハクちゃん！　ちょっと来て」
ぱっと見は素敵だったけど。
なんか違和感を感じて、ハクちゃんに聞くことにした。
だって、どことなく私の世界の洗面所と違うんだよね。
「このトイレ、どうやって使うの？」
便座事体は蓋が無いだけで、同じっぽい。
壁から1メートルは軽く離れてて……タンクが見あたらないんですけど。
水洗じゃないの？
しかも便座の横には、洒落たサイドチェストがある。
3つある引き出しの1段目は、桃色の紙が入っていた。
2段目も紙。
これはクリーム色だった。
3段目もやっぱり紙……水色だ。
「まさか……この硬い紙がトイレットペーパー？」
いや、硬すぎるよね。
お尻が痛いって、絶対！
私はトイレットペーパーはソフト・ダブル派なのです。

「りこ。なあ、ここはどういった用途に使う場所だ？我は初めて見たのだが」

なんですと！
ハクちゃん、知らないの？

「ハクちゃんは外で済ましてるとか？」
竜だもんね。
確かに便座サイズが合わない。
っていうか、人間とは生活様式が違って当然だった。
人間じゃないんだ、ハクちゃんは……。

「済ます？」

「トイレ。はっきり言えば排泄行為かな」
こんな単語を躊躇い無く口にする私って……女子高生なら、恥らってもじもじすべき場面だったよね。
しかし、そんな事に恥らってたらやってらんない。

漏らしたら、本末転倒！

漏らすとか言っちゃうような性格も、彼氏が出来なかった一因かも。

「我は動物と違って糞尿は作らない」

「糞尿……」
上には上がいるもんだ。
はっきり言い切ったね。

「案ずるな、りこ。これを使え」

渡されたのは銀色のハンドベル。
ベッド脇の小さなテーブルに置いてあったやつだね、これ。

「鳴らせば侍女が来る。部屋の担当は対になる鈴を持っているから、すぐに現れる」

「へー。便利だね！　仕組みは分かんないけど」

私の‘分かんないけど、まあいいや’は話をちゃんと聞きましょうに次ぐ欠点らしく、家族・友人・教師にさんざん注意されてきた。

治る兆しゼロで現在に至るけど。

ハンドベルを振ってみた。

イメージは商店街福引コーナーで、当りが出た感じ。

振ってからしまったと感じた。

お姫様が呼び鈴を鳴らす……あのイメージにするべきだった！

呼び鈴だよ！

ハンドベルじゃ無い。

「ねえ、音がしなかったよ。壊れてるのかな？」

ハンドベル……ではなく呼び鈴は鳴らなかった。

「鳴るのは侍女の鈴だ」

「ふ～ん」

まだトイレは我慢出来る状態だったから、侍女さんを待つことにした。

洗面・お風呂の使用方法も知りたい。

それでもって、昨日の人達に会わせてもらい説明を……。

「……りこ。もっと奥に」

ベットに並んで腰掛けてたハクちゃんが、ふわりと浮きながら言

った。
金の眼を細めて扉を見てる……睨んでる。
私はスリッパを脱ぎ、ベットに上がって隅に移動した。

「どうしたの？」
「足音が雑だ。侍女とは思えない。しかも複数で駆けてくる」

侍女さんじゃないの？
女性ならトイレの事が聞きやすかったんだけど。
複数って……何人か来ちゃうのかな。
1人で充分だけど。

「男……が三人。女が二人」

私の耳にも足音が聞こえた。
部屋のすぐ側まで来たってことだよね？
数秒後、音を立てて開かれた扉から飛び込むように入ってきたから驚いた。

ノックなしかい。

乱暴だな、この国は。
あれ、なんか知ってる顔が！

『何故、生きている？……＜監視者＞？』

先頭で入ってきたのは、昨夜のイケメン君ではありませんか！
他の人達は……あ、美少女もいる。
金髪だったんだ。
眼は紫だ。

綺麗〜。
おじ様二人と、やたら色気のある熟女は初顔だ。
なんか、迫力あるメンバーです。

女性が2人いるから、トイレの使用方法をきこう！
ハクちゃんに通訳してもらって……。
「な、なになに？」
全員が片膝をつき、頭を下げた。
どうなってんの？
ハクちゃんは私に訊ねた。

「りこ。こやつ等に何を望む？責任を取らせるが良い。我はりこの望みの結末を用意する」

「言ってる意味がよく分からないよ！」
もう！
望みとか責任とか……そんなことより！

「トイレの使い方を聞いてよ！」

怒鳴ってしまった。
だって……とうとう限界間近になっちゃったんだもん！

第6話

「なるほど！　すごいね、ここのトイレって」
セクシー熟女の教えてくれたトイレの使い方は近代的というより未来的……いや、ミラクル？
私は便座に座って桃色の紙をくしゃくしゃ揉みながら、扉の向こうで待っているハクちゃんに話しかけた。ハクちゃんにはかなり離れてても私の声が聞こえるみたい。
ハクちゃんに意識をきちんと向ければ、声に出さなくても念話は成立してるし。
「りこ、りこ。早く出て来い」
「はいはい。ちょっと待ってね」
さっきのやり取りを思い出し、急ぐことにした。
揉んでいた紙はとても柔らかくなり、ソフト・ダブルのトイレットペーパーみたいな感触だ。
ふむ、これは快適。
次に水色の紙を便座に入れると……おお！　紙が水に変化し、一気に流れたよ。
けっこうな水量ですね～。
マジックみたい！
だからタンクがなかったんだね、不思議な紙！
クリーム色と桃色の紙はつまりトイレットペーパー。
クリーム色は男性用。桃色は女性用。
使用感は同じだけど、そういう決まりだそうだ。
そして水色は水！　これは本当にびっくりした。
摩訶不思議よね～。
洗面台に移動し（広いんだよね、ここ）手を洗った。
陶器製で薔薇の絵が全体に施されていた。
庭園で見た花かな？

蛇口は二つ。
ピンクの取っ手はお湯。
青は水。
お湯が出るなんて科学力は日本と同じ……？
でも電気が無かったし、服装も中世みたいだったな～。
「まだか？　りこ、りこ～！」
ハクちゃんが痺れを切らす前に急がねば！
私は顔を適当に洗い、備え付けのタオルで拭き拭き洗面所の扉を開けた。
「無事か、りこ！　困らなかったか？　うまくトイレはできたか？」
当たり前でしょうが！
いくつだと思ってんの、２６だよ。
しかし……君は困ったちゃんだね。
さっきも大変だったし。

私のトイレ宣言にハクちゃんはかなり慌てた様子で、彼等（イケメン君・美少女・他３人）に念話を使い言ってくれた。
ハクちゃんが彼らに向けた念話の内容は知らないけど、すぐに美女が顔を上げ何か言った。
うわぁ……すごい胸！
肩がむき出しのセクシードレス。
スリットから艶かしい脚が……なんかエロかっこいい人だ。
「りこ。この者がトイレの使用方法を説明する。我が通訳するから問題ない。こい」
「うん」
他の人は顔も上げず、全く動かない。
なんか異様だけどトイレが先だし。
言葉と身振り手振りで美女が説明してくれる。
それをハクちゃんが私に教えてくれた。
さあ、やっとトイレタイム開始……にしようとすると困った事態

になった。
　ハクちゃんが出て行ってくれない。
「外に行っててよ。トイレは1人でするんだよ」
「我らは‘つがい’だ。離れるのは許可できん。それに危険が迫ったらどうする！　我はりこを護るのだから」
　トイレで危険？
　なんだそれ？
　配管の故障で逆流が起こり、私が汚物の波に攫われるとか？
　んなこと、あるはずない！
「駄目。絶対に駄目！　早く出て行ってよ」
　美女がそっと1人で出て行った。
　あっ！
　ハクちゃんも連れてってくださいよ～。
「とにかく駄目なの！　私は人間なの！　竜の決まり事を押し付けないで」
　トイレ我慢が限界に達した私はハクちゃんの胴をがしっとつかみ、ドアの外にぽいっと放り投げて乱暴に鍵を閉めた。
　よくよく考えたら酷い態度だったけど、その時はそれどころじゃなかったから……。

　洗面所から出で来た私に、ハクちゃんは羽（翼？）を忙しなく動かしながら言った。
「すまなかった、りこ。我は人間の生活について不勉強だった。今後はもっと知識を得て、りこの役に立てる我になるぞ！　……だから嫌わないでくれ。側に置いてくれ」
　ハクちゃんがトイレの使い方を知らなかったから、怒ったと思ったのかな？
「嫌いになんて、ならないよ。ただ、トイレはこれからも入ってこないでね。私はそういう生活をしてきたの。分かってね？」
　また手をにぎにぎしてる。私に触りたいのかな。

やっぱり、可愛いな。
私から手を伸ばし、ハクちゃんをそっと抱っこした。
金の眼が細くなった。
人間と違って表情は無いけれど、この眼がこの子の感情を伝えてくる。
安心したのかな？
「ハクちゃんが通訳してくれたから、すごく助かったんだよ？ハクちゃんのおかげだよ」
「りこ」

この世界で私の味方はハクちゃんだけ。

身体の、心の奥から染み出してくる想い。じんわりと……でもそれは濃く、深い。

ワレハ　ツガイ　ワレハ　リュウジュ　ワレハ　ハンシン　ワレハ　セカイ

「りこ……りこ？」
「……なんでもないよ、ハクちゃん」

ハクちゃんを抱っこしたまま私は固まった。
な、何事？　何が始まったの？
次々に運び込まれるきらびやかな布。服？
いつの間にか室内が様変わりしてる。
あれ、面子も変わってるし！
おじ様2人が居なくなって……侍女さんらしき人達が群れをなしているではありませんか。

白いブラウスに紺のロングスカートの女性達は服（ドレス？）・靴・花・装飾品らしきジャラジャラしたもの等々をきびきびした動きで運び、ハンガーラックのような物に服をかけたり箱から下着（？）のセットを取り出したりと忙しそう。

そんな部屋でイケメン君と美少女はさっきと変わらない……片膝ついて、頭をさげたまま。

トイレ先生の美女は侍女さん達に指示を出してる。

言葉は分からないけど、雰囲気で察する。

『それ、色味はいいけどサイズが大きいわ。下げて。入浴の準備！はやくなさい。ああ、そのドレスはだめね。露出が多いわ。竜族は嫉妬深いからデザインは清楚・可憐な物だけにして』

深々と頭を下げ、三人の侍女さんが洗面所に入っていった。

なんか少し……震えてなかった？

気のせいかな？

「ハクちゃん。皆さん、どうしたの？」

まさか……あの貸衣装屋状態って、まさか。

「ふむ。りこの着替えだな。人間は着替えを毎日すると聞いたぞ？あの女に用意するように言ったのだが」

「え？いつの間に……ってか、こんなの困る」

あんなぶりぶり・ひらひらなドレス、恥ずかしい！

貸してくれるなら侍女さんの着ている様なのを希望したい。

ああ、そうだった。

これも重要だし。

「ねえ、あの２人。何であのままなの？」

どう考えたって変。

不自然だよ。

「ああ。あれは＜処分＞を待っているのだろう」

処分待ちってこと？

なんで？

悪いことしたの？

「悪い人には見えないけど。昨夜も親切にマント貸してくれたし」
マントを返さなくちゃね。
すっかり忘れてた。
確かソファーにかけて……。
「ふむ。＜処分＞対象は娘の方だがな。男はりこ次第だ」
「ハクちゃんが処分するの？　なんで？」
そういえば、ハクちゃんって何者？
ただの竜じゃないってこと？
さっきだってハクちゃんに跪いたんだよね。
もしかしてすごっく偉い地位にいるとか……。
言葉使いも偉そうだし、基本は俺様だし……。
「りこはどうしたい？」
へっ？
「あの娘。ミー・メイが術に失敗し、りこはこの世界に落とされた。そしてミー・メイは男の希望で異界から無機物を取り出す術式を行った」
失敗……失敗？
「くだらない誕生会の余興だ」
余興……余興？
「異界から無機物を取り出す術は許可されている。だが生物は禁止だ。虫１匹でもな。この世界の生態系に影響が出るとまずい。我は禁を犯した者を＜処分＞する。この世界の決まりだ」
世界の決まり……。なんでハクちゃんがそんな重要な事をしてるの。
小さい竜のハクちゃんは、この人達にとっては何なの？
「ハクちゃんって……神様？」

日本では竜……龍は神様とか神獣だった。
空想上の。
「我は‘神’などという不確かな存在ではない」
ハクちゃんは小さな頭をそっと私の胸に寄り添わせて、言った。
「我は＜監視者＞。＜秩序＞の＜管理者＞。監視し、管理する者。永久の存在」
念話の‘言葉’が頭に響き、心を震わせる。
「我はりこの‘つがい’。ずっと……りこを探していた」

「わかった？絶対だからね、ハクちゃん」
私達はまださっきの場所に居た。
洗面所前で会議中。
私は決めた。
私は私のやり方であの二人……美少女ミー・メイとインメン君に、責任をとってもらうのだ。
誕生会の余興。
しかも、失敗なんて酷い。

「通訳は私の言葉をそのまま伝えて。ハクちゃんの言葉・考えは混ぜないで」
ここの人達はハクちゃんを敬う……っていうより恐れてる気がして念を押した。
洗面所に行った侍女さん達はハクちゃんの近くを通るのが怖かったから、震えてたんだよね。
「分かった。我はりこの望むままに。で？　処刑方法が決まったか？」
やっぱり＜処分＞って、そういうことか！
ハクちゃんは今まで沢山の人を……？
でも、ここは異世界だ。
そういうものだと言われたら何もいえない。

それに私の世界にだって処刑……死刑はある。
死刑があるってことは、それを執行する人が居るってことだし。
仕事として行う人達が、日本にも海外にも存在してる。
私には処刑を否定する知識も、権利も……勇気も無い。
「違うよ。私は今後の私達の為に良いこと考え付いたんだよ」
ああ、視線を感じる。
侍女さん達が不安そうにチラ見してるし、美女がこっち来るし～。
『お待たせしました。お気に召すものがあれば良いのですが』
「好きな物を選べと」
ハクちゃんの通訳はニュアンスが間違ってると思う。
だってこの人は、優しく丁寧に喋ってる感じがするのに。
「ハクちゃん、約束守ってね。私の言葉で伝えてね」
「うむ」
私はハクちゃんを信じてるよ！
俺様は封印だからね！
「先ほどは、有難うございました。衣類も用意してもらい感謝します。でも、着替えの前にあそこの二人に大事な話があるんです。他の人は退室して下さい。話が終わったら声をかけますから」

頑張れ、私！
ここで生きてくために……踏ん張れ！

第7話

セクシー美女と侍女軍団は部屋から出て行った。
一斉に礼をして退室する姿はかなりひいた。　だって、されたことないし。
ま、私にじゃなくハクちゃんにしたんだろうけどさ。……去り際に見た美女の微笑みがちょっと気になるな～。
何故か楽しげだったのよね。
トイレ先生の美女はハクちゃんに対する感じが……態度が侍女さん達と全く違うし。
怖がってないし、堂々としている。
洗面所でハクちゃんと念話してる姿は怖がるどころかなんというか……親しげ？
うん、そんな感じが近い気がする。
ハクちゃんの知り合いだったとか？
あ！　名前聞くの忘れてた。
私も名のらなかったじゃないですか。
トイレ使用方法を教えてくれた恩人なのに。
後で確認しなきゃ。……あの人には今後もお世話になる気がすごくするんだよね。
最初にトイレを教えてもらったから親近感が。
それにハクちゃんにびくびくしてないから……。
「りこ？」
「あ、ごめんハクちゃん！　次の言葉を考えるからちょっと待ってね」
今は目の前に集中しなきゃ。

螺鈿細工が素晴らしいテーブルを挟んで座っている2人……美少女とイケメン君。

彼らにはハクちゃんが私の言葉を代わりに伝えること・跪くのはやめて席に着くことを了解してもらった。
次の段階だね。
えーっと、自己紹介してもらい彼らの名前とか立場とかを知らなくちゃ。
私の計画を成功させるには彼らの名前より立場が重要なのだ！
よし。念を送るよ、ハクちゃん。
『　私の名前は　とりい　りこ　です。何故、私がこちらの世界に来ることになったかはハクちゃんに聞きました。謝罪はこの場では必要ありません。昨夜、謝ってくれたのは私にも伝わっていますから　』
二人の眼が私をじっと見ている。次にはハッとしたような表情でハクちゃんに視線を移した。　すごくびっくりしてるみたい。
なんでかな？
ね、ハクちゃん～なんで？
「この二人は先程の女のように聡くは無いからな。最低限の補足をりこの言葉の後に足した」
え！　なんて言ったの？　でも念話って内緒話に便利だね。
口に出したって意味は伝わんないけど、相手を余計に警戒させるかもだし。
念話なら目の前で打ち合わせしてることすらバレないしさ！
で、なんて？
「‘りこ‘‘ハク‘はつがい名だから貴様らが口にする事は許されない。それと我のりこを凝視するな。減る」
減る発言は今はスルーしておこう。
つがい名ってはお互いしか使わない名前ってこと？
竜の決まりごと？
「そうだ。他人が口にしたらそやつは殺されても文句は言えん。死んだら文句も何も無いがな。この竜族の風習は幼児だって知っている」

えー！　じゃ、鳥居って呼ばれなきゃだね。りこはハクちゃん専用ってことで。竜の文化は大変だね。気を付けないと！
さ、念を送るよ。むむ～。
「力まずとも聞こえるんだがな」

『私はセイフォン・デイ・シーガス・ダルド。セイフォン王国皇太子だ。この者は王宮術士ミー・メイ』
ハクちゃんの通訳を聞いて、心の中でガッツポーズをした。
やった、やっぱりだ！
やたら長いイケメン君の名前なんかどうでもいいのよ。
重要だったのは立場……社会的地位。
つまり、早い話が財力だ！
あんな着飾った人たちと広間でお誕生日会してたって事は、お金持ちだろうと推測できたし。
着ている物もお金がかかってるに間違いない。
白いタイツじゃないけど、いかにも王子様だしさ。
ま、王子様じゃなくても財力さえあれば良かったんだけど。
美少女のほうは公務員ってことかな？
『私は禁を犯しました。故意では無くとも許されません。この身は＜監視者＞様に＜処分＞されるので貴女への償いが充分に出来ません。以後の事はダルド殿下にお願いしてあります。ご安心くださいませ』
儚い笑みにぎょっとした。
あ、そうだった。彼女は＜処分＞対象なんだ。
ハクちゃん、この件に関しては私が決めていい？　被害者の私にだって権利あるはず！
「何度も言った。我はりこの望みを優先する」
うん。ありがとう。では、伝えてね。これが私の彼等への＜処分＞だから。

りこが入浴する為に洗面所なる部屋に入ってしまい、我は再びりこと離れ離れになった。
我はその場所が嫌いになった。
りこと引き離されるのは辛い。
人間のりこには理解できてない様だが。
『そのように扉に張り付かなくても、トリィ様の念話は届くでしょうに。未練がましくてよ、ヴェルヴァイド様』
相変わらず煩い女だ。
『黙れ、‘魔女’。お前の‘言霊’は強い。りこの念が聞き取りずらくなる』
皇太子達は王の元に報告に行き、入れ替わりにこの女が戻ってきた。
入浴・着替え助ける為に残った侍女2人はりこと共に洗面所だ。
室内に我と二人だけになった途端、女は猫かぶりをやめた。
王の臣下ではなく‘魔女’にもどった。
セシー・ミリ・グウィデスは魔女。竜族なら周知の事。
人間達は知らないようだが。
『うふふ。可愛らしいお嬢さんね。それに強い。異界から‘落とされた’のに落ち着いて状況を把握しようと努力しているわ』
りこが強いだと？
貴様には分かるまい。りこがどんなに泣いたか、悲しんだか。
今だって無理をしている。
この世界で生きていく為に、憎悪を押さえ込んで……我にも微笑んでくれている。
りこは術士と皇太子を罵ったりはしなかったし、厳罰も望まなかった。
ただ、要求しただけだ。
身の安全を保障すること。

衣食住の提供。
それと教育。
生まれた世界から愚か者達のせいで‘落とされ’たのだから、もっと望めば……望んでくれたら我は安心できたのに。
りこが失ったもの以上の対価を与えねば、りこを我の世界に引き止めるのは難しい気がしている。りこがここで多くの望みを叶え、多くの物を手に入れれば……この世界に留まらせることができると。
対価を得たのだから、失った‘世界’はあきらめろと。
りこは我と‘つがい’になってくれたが生まれた‘世界’を捨て切れていない。
『ヴェルヴァイド様。昨夜は1度、宮に入られたのに何故こちらに？そのまま宮に居てくだされば私達も楽でしたのに。日の出の頃、私はミー・メイを宮に連行したのよ。宮から出てきてくださらないし、3時間も待たせた挙句に宮から消えてしまわれて。私達が門の前にずっと居るのは分かってたくせに。酷いですわ……何してたのかしらね？　うふふ』
『下世話な想像はやめろ。頭蓋を破裂させるぞ』
古い通り名で我を呼ぶ人間は、この‘魔女’くらいだ。
‘魔女’はテーブルに朝食を並べ、暖かな茶を白磁のカップに注ぎながら勝ち誇ったように笑った。
『やれるもんなら、やってごらんあそばせ。脳髄を撒きちらせた私の死体をトリィ様に御見せになるなんて、どうなるか分かってらっしゃる？　それに私は彼女に好印象を持たれてるわ』
そうなのだ。忌々しいことに。りこの中でこの女は頼りになる人という刷り込みが行われている。トイレ使用方法の伝授は高得点らしかった。
我には教えられなかった。
ますますこの女が嫌いになった。今日は嫌いなものが増える日なのか。
手際よくりこの為に朝食を準備出来ることも忌々しい！

くっ……我にはとてもできぬ。
我がりこに食べさせようとした我の硬い肉なんかより、見るからに美味そうだ。
焼きたてのパン。
新鮮な野菜・果物。
焼いた玉子は白と黄色のコントラストが美しい。
そして優しい香りのスープ。
茶は鮮やかな紅色……南方産最高級茶葉だな。
黄の竜帝も好んで飲んでいた。
ああ。どうあがいても、どんな高名な料理人を使っても我の肉ではこのようにはならん。
我の肉よ、完敗だ！
『さぁ、もうトリィ様が出てくるわ。そこどいてくださいな』
扉に張り付いていた我を豪腕で引き剥がし、女は静かに扉を開けた。
『お疲れ様でした、トリィ様。ああ、‘私が選んだ’お洋服がとてもお似合いだわ。……さっさと通訳してくださらない？　ヴェルヴァイド様』
我は少しばかり惚けていた。
現れたりこは……。
「りこ、りこ！　とても綺麗だ」
白く光沢のある生地に金糸の刺繍。刺繍は裾・袖・詰襟に丹念に施され、派手すぎず品が良い。白はりこの真っ黒な髪をいっそう引き立てた。髪に飾られた生花も白。
八重咲きのフィスカはこの国が誇る貴重な植物だ。
「え～。ちょっとやりすぎだよ。お姫様じゃないんだから普段着を貸してほしかったよ」
そう言いつつも……りこは照れた様に笑った。頬がほんのり赤くなっていた。
豪華な服やフィスカの花が無く、今まで着ていた異界のパジャマ

という衣装で現れても我は同じように感じ思うだろう。
たとえ泥にまみれていようが、涙でぐちゃぐちゃだろうが。
「りこは綺麗だ」
りこがりこでなくなっても。

「いただきま～す」
軽く手を合わせてから食事を始めた。うわ、美味しそう。
ナイフ・フォークなんだ、ここ。異世界だって人類なんだから文化は地球と同じ感じに発達するよね。多少の違いはあっても、人類同士なんだし。
見たところ食材だって、同じだ。奇天烈な物は一切無い。
「食欲が無いと言ってなかったか？」
膝の上からハクちゃんが言った。むむっ……やばい！
「お風呂に入ったからかな～。さっぱりしたら食欲も回復したみたい」
だってさ、ハクちゃんの肉なんて食べたくなかったから。
実はお腹が空いてたんだよね。
朝食はしっかり食べる派だし。
あ、このパン美味しい。胡桃が入ってる。
『トリィ様。果物はどれがよろしいかしら？　アダの実が旬でお勧めなのよ』
侍女さん達はクローゼットやチェストに衣類やら何やらを収納し、必要の無かった装飾品等を抱えて去っていった。
残ったセシーさん（名前を教えてもらった。自分を指差しセシーを連発したのでセシーさんで合ってるはず）が私と朝食をとっている。
ハクちゃんは食べないんだって。
ハクちゃんは排泄しないし食事も無し。……竜って霞を食べて生きてるのかな？
仙人みたい。

セシーさんは私の隣に座り、いろいろ世話をみてくれる。
果物の盛り合わせから私のお皿にりんごに似たものを乗せてくれた。
言葉は分からないけど……これが美味しいのかな？　わざわざ選んでくれたんだし。
「ありがとうございます。いただきますね」
私は鳥居……とりいって名乗ったらトリィに聞こえたらしい。
そんなに違いは無いから良しってことにした。
トリィの後になんか言葉が毎回ついてるのは、さん、とか、ちゃん、かな？
ま、いいや。
ハクちゃんが反応しないからスルーしていい言葉なんだってことで。
「りこは果物が好きだったな。アダの実はセイフォンの名物だ。気に入ったか？」
「うん。私の世界のりんごにそっくり。味も同じだよ。美味しいね」
食文化が似てるって素晴らしい！　ああ、米と麺があるといいなぁ……。
あれ？
なんで私が果物が好きって知ってるの。
話してないよ、好物についてなんて。
「りこは野菜も好きだからセイフォンの食事は合うな。この国の人間は肉より野菜を好んで摂取する。だが肉も多少は食べるようだから、脂身はなるべく除いて出すように指示しておく。りこはそれが大嫌いだからな」
ハクちゃんは私の膝からふわりと飛び、セシーさんの前に移動した。
同時にセシーさんが頷く姿を見て、ハクちゃんが私の好き嫌いを彼女に伝えたんだと推測する。
「ねえ、ハクちゃんはなんで知ってるの？　私の好き嫌いをさ」

絶対そんな話はしなかったよ。変だよ。
「体液からの情報だ」
――はっ？
「唾液。昨夜舐めたからな」
――はい？
「体液にはその固体の情報が詰まっている。唾液のみでもりこの体質や嗜好性、体調や疾患はある程度まで解る」
――唾液のみでもって！　血液を舐めたら家族構成・学校の成績までばれたりして！　あ、そういえば舐めてたっけ。お菓子を口に突っ込まれた時だ！
人間の異性にそんな発言されたら気持ち悪いけど、ハクちゃんは竜だし。
竜には当たり前のことなのかもしれないから、意見するのはやめておこう。
うん。
郷に入ってはなんとかってことわざがあるしね……。

『トリィ様の食事の嗜好を把握なさってるなんて。ヴェルヴァイド様もやっぱり竜族ね。お手が早くていらっしゃるわ。うふふ』

セシーさんが爽やかな時間帯に全く似合わない妖艶な笑みを浮かべ、私に視線を流してきた。
何て言ったのかな、今。……知りたいけど、ハクちゃんに聞くのはよそう。
知らないほうがいい。
うん。スルーだ。
「ごちそうさまでした。おいしくいただきました」
フォークとナイフを置き、セシーさんに軽く頭を下げてみた。
伝わったかな？　あ、頷いてくれた。分かってくれたみたい。
セシーさんが優雅な仕草で呼び鈴を左右に軽く動かした。

あれが正しい使い方だね、うん。
すぐに侍女さんが2人現れて馴れた手順で食器をワゴンに収納し、テーブルの上には紅茶とクッキーが用意された。
私はハクちゃんに手を伸ばし、自分の膝に座らせて侍女さんの動きを見ていた。
私が抱っこしとけばハクちゃんのことが怖くても少しはましかなって。
侍女さんはハクちゃんをなるべく意識しないようにしているようだったけど……私の前にカップを置くときに軽く指が震えてたみたい。
なんか気の毒かも。
私は衣食住の提供を要求したけど、贅沢をさせろって言ったつもりはない。
侍女さん達を使うような生活じゃなくていい。
ハクちゃんを怖がっている侍女さん達に世話をかけるのは抵抗あるし。
それに……イケメン皇太子君が私の衣食住にかける資金って、つまりは税金でしょ？
国民の収めた税金を私が浪費しちゃ駄目だよ。
だから、ほどほどでいいんだけど。
ほどほどにたかるつもりなのに。
豪華はまずい。
有無を言わせずこんなドレスを着せられちゃったけど。
お姫様になりたいわけじゃない。
お姫様に憧れるほど若くないよ。
身の丈にあった、ほどほどの……ここのほどほど基準値が不明だけど。
早く語学を身につけ、自分の生活を確立しなきゃ。
どうやらハクちゃんは人間の日常生活には疎いらしいから、あてになんないし。

今の状態では侍女さん達に面倒をみてもらわなきゃ何もできないのが現実だよね。
「りこ？どうかしたか？」
膝の上で手足をにぎにぎしながらハクちゃんが首をかしげた。
うう～、きゃわゆいの～！

ハクちゃんは可愛い。
侍女さん達は反論するだろうけど。
私にとってはかわゆい竜なの。
だけど……ハクちゃんには生活能力が無い。
管理者だか監視者だかって仕事で収入があるとも考えずらいし。
つまり、プーだ。
プー太郎だ。
経済力ゼロ竜だ。
ご飯も食べない・服もいらないんだからお金が必要ないんだろうね。
だけど、私は人間だもん。
生きてくにはお金がかかる。
だからこそ、私を異世界に引っ張りこんじゃった責任として当面の間は皇太子君に援助してもらう計画なんだよね。
ミー・メイちゃんには私の家族に手紙を届けることができるような術式を完成させることを要求した。
これはかなり難易度が高いらしいけど。
ハクちゃんがぽろっと言ったんだよね。
「ミー・メイの寿命が足りんかもな」
これって、すごい年月がかかるだろうってことで……。でも、やってもらわなきゃ！
お母さん達に私の無事を知らせたいもの。
ミー・メイちゃんだって死ぬ気で頑張るって言ってるってハクちゃんが教えてくれたしね。

「ちょっと、今後について考えてただけだよ。ね、セシーさんとお話したいの。通訳お願いしていい？」
「嫌だ」
なっ……即答かい！
「なんで、手伝ってよ」
私の望みはきくとか言っといてさ。
ひどいよ、ハクちゃん。
「我はこの女が嫌いだ。前から気に入らなかったがな。先ほど、はっきり嫌いになった」
は？
「現段階では我よりこの女のほうがりこの役に立っている。屈辱だ。忌々しい」
ハクちゃんは私の膝で身体を丸めて顔を隠してしまった。
「我のりこなのに」
拗ねた。
これは拗ねたに違いない！
子供か、あんたは。……ま、歳は知らないけど。
まずい、まずいよ～。
ハクちゃんが通訳してくれなきゃ、話が進まないんだから。
「ハ……ハクちゃん、あの、その」
「トイレも風呂も嫌いだ。りこと離される」
うひ～！　すねすねだし！　ど、どうしよう。
「あ、あのさ。トイレは駄目だけど、お風呂は次からは一緒に入っていいからさ！」
「……」
「お湯の出し方も温度調節の方法も習ったから！　次は一緒だよ！ね？」
ハクちゃんを撫でながら話しかけた。
洗面所から追い出したことをこんなに気にしてたとは！
そうでした。眼から内臓の涙を出しちゃうほどの繊細っ子でした

ね、君は！　ママ（？）が悪かったです。
だから通訳して～！
「……りこ」
ハクちゃんが顔を上げた。
金の眼がくるんと回った。
「楽しみだな。次の風呂」

もしや……計算か？
まさかね。

第8話

異界の娘を案内した部屋付きの侍女の鈴が鳴ったという報告を聞き、駆け出した。

走りながらセシーとミー・メイを離宮から連れてくるように指示をだす。ミー・メイの術式を使えばすぐに合流できるはずだ。

黒い髪・黒い瞳の小柄な娘だった。ミー・メイを叱責した私ににやら言ってきた勝気な娘。　だがよく見ればか細い身体は小刻みに震えていて……。

マントを外し、急いでかけた。

多数の眼が彼女に注がれていた。好奇の眼差し。

それと好奇以上の困惑と恐怖。

異界からの生物……それを察知して＜監視者＞がこの国に現れるには確実なのだから。

ミー・メイが異世界から害の無い無機物を複雑な陣を用いずに‘落とす‘術式を考案し、私は２０歳の生誕祝いの余興としてそれを希望した。

異界の物はとても珍しく、貴重だ。王族といえど眼にすることは少ない。幼い時に青の竜帝様に見せていただいたことがあったが、とても興味深いものだった。

掌にのる程度の大きさをした立方体。色とりどりの小さな四角の面の集合体で、前後左右に面を移動させることができた。

青の竜帝様が仰るには異界の玩具らしいと……。

一　ほれ、こうすると面の色が揃う。全部の面の色を合わせるのだと思うんだが……俺は2面までしか揃わんな。いらいらしてやってられんわ。

私に玩具を放り投げられたので慌てて受け取り、たずねた。

―　竜帝様。私も挑戦してもいいですか？
―　かまわんぞ。ダルドは親父に似ず賢いからな。
かなり時間をかけたが揃ったのは3面だった。竜帝様は褒めて下さったが、悔しかった。
―　俺よりうまい。充分だ。ヴェルはあっという間に全面揃えやがって、つまらんかった。
―　ヴェル？　竜族の方ですか？
竜帝様は私の頭を撫でながら教えて下さったが、私は質問したことを後悔した。
―　ついさっきまで此処に来ていたのさ。ヴェル……、ヴェルヴァイド、ってのは【古の白】って意味だ。＜監視者＞の通り名だがお前は使うな。
―　はい。竜帝様。
ぞっとした。あの＜監視者＞がさっきまでいたなんて。恐ろしくて……歯が音を立てた。震えてしまった私に竜帝様は苦笑しながら仰った。
―　あれを恐れる心が世界に秩序をもたらす。恐れ、敬い、頭を垂れろ。……さあ、あっちで茶にしよう。俺様が作ったアダのタルトは絶品だぞ！

幼い頃から徹底的に教えられた礼儀作法も頭から消え乱暴に扉を開け放ち、踏み込んだ。
そこには黒い髪の娘が居た。
寝台の上でこちらを見ている。黒い眼・髪。見慣れぬ衣服。確かに昨夜の異界の娘だった。
そして彼女を私の視界から隠すように白い竜が……。
白い竜はこの世で唯一の存在。疑いようもない。

『何故、生きている……＜監視者＞？』

私はよほど焦っていたのか父とゼイデが着いて来ていたことは隣に父が跪いてから知った。
セシーとミー・メイも居た。
跪き、頭を垂れて沙汰を待つしかない。ほんの一瞬、頭の中に風を感じた。
『なるほどな。視点の差はあるが、結果は1つ』
頭に言葉が浮かぶ。
声ではないが、聞こえる、……これが念話というものか。
ここにいる全員の記憶を読み取り、暴く。＜監視者＞には隠し事は不可能なのだから。
子供は母親に必ず言われて育つ。
――嘘をついたら駄目よ。母さんと＜監視者＞様には通じないのよ。お前の頭の中が丸見えよ。
ああ、その通りですね……母上。
『術士ミー・メイが実行。示唆したのは皇太子。常ならば術士のみ＜処分＞するところだが。今回は皇太子にも罪がある』
隣にいた父の肩が動いたのがわかった。全員に聞こえてるらしかった。
『皇太子の罪は我の、つがい、の心に傷をつけたこと。お前の浅はかさが我のりこを悲しませた。術士は＜監視者＞として＜処分＞する。お前は、つがい、として報復する。我にとっては初めての私怨だな。楽に死ねると思うな、セイフォン・デイ・シーガス・ダルドよ』

セシーを伴い、異界の娘と＜監視者＞は洗面所に移動した。
＜監視者＞はセシーに念話で何か命じたようだった。先ほど異界の娘が何か言ったので、それが関係してるのだと思うが……。
父とゼイデは立ち上がり、沈痛な顔で私に語りかけた。

『あの娘が＜監視者＞様の‘つがい’とは……。なんということだ』
父が私の頭を強く抱きしめた。震えてますね、父上。
『だが、娘の命は失われず済んだ。彼女は被害者だ。助かって良かった』
『お父様！　でも殿下が！』
ゼイデの言葉にミー・メイが声を上げた。
『いいんだよ、ミー・メイ。ゼイデ。父上を頼む』
父の腕に力がこもる。……泣かないで下さい。
ゼイデが無言で父に手刃を落とし、昏睡させて肩に担いだ。昨夜から仮面が剥がれっぱなしだな、ゼイデは。
『殿下は殺されたりしませんわ』
セシー……戻ってきたセシーが自信満々に言った。気配なく動くのは戦場だけにしてくれ。心臓に悪い。
『そんなことがなぜ言える。＜監視者＞は私を私怨で殺すと』
『‘つがい’の娘は殿下の死を望んだりするような娘では……。私が見た感じでは心優しい娘に思えましたわ。とにかく、陛下とゼイデ殿は急いで退室を。‘つがい’を得たばかりの雄竜は自分以外の‘雄’を排除したがるもの。あの方とて竜。危険ですわ』
セシーは竜の生態に詳しい。彼女の言うとおりにゼイデは行動した。退室する背にセシーが声をかけた。
『ゼイデ殿！　侍女達に衣装を運ぶように指示してくださいな。時間が無いから急がせて』
『承知した』

眼を疑った。
娘が＜監視者＞を無造作に放り、扉を閉めたのだ！
小さな白い竜は床に転がり……。
見てはいけないものを見てしまった気がした。慌てて跪き頭を下げ‘見てませんでした’を装ってしまった。ミー・メイはずっとうつむいていて気が付いてないようだった。

＜監視者＞はよろよろと起き上がり、扉に駆け寄って……前をうろうろしていた。
顔を伏せつつ盗み見てしまう。

変だ。かなり、おかしい。
これが先ほど私に死刑宣告した竜とは思えない！
『殿下。あれが‘つがい’を得た竜なのです』
この情けない姿が？
『今のあの方は我々の存在など頭になく、娘のことだけ。娘から離れたために
不安でいっぱいなんでしょうね』
『そんな、おおげさな。扉の向こうに居るのにか？』
『‘つがい’を得たばかりで身体を離す雄竜なんて、普通はいません。あの方だから理性が勝ってるんですわ。しかも相手は人間で、異界人。どう扱って良いやら戸惑ってらっしゃるわ。うふふ……だからそこを利用しましょう』
セシーは不敵に宣言した。
『‘つがい’の娘を取り込みます。娘をこちらの味方にすれば＜監視者＞を抑えられます』
真っ赤な唇を自らの舌でぺろりと舐め、にやりと笑む。
『勝ってみせますわ。この‘戦’はセシーにお任せくださいませ』

セシーの言った通り、私は死ななかった。
異界の娘が望んだのは身の安全と、生活の保障。そしてここで生きてくための教育。
ミー・メイには異世界の家族に手紙を届ける術式。
娘の言葉を伝える＜監視者＞からは異論はきかれなかった。……‘つがい’とはこんなに影響力を持つものなのかと驚きより、恐怖した。

世界最強といわれる竜をこの異界の娘は手に入れたのだ。彼女の言葉ひとつで世界の行く末が決まるといっても過言ではない。

＜監視者＞が‘つがい’を得たことは徐々に世界に広まるだろう。彼女を唆し、利用しようとする者が多数現れるだろう。

実際、セシーは動き始めた。

王の執務室に行き、ことの次第を報告しつつ策を練る。

父達が無事を喜んでくれるが私は他の事で頭がいっぱいだった。

『父上に申し上げます』

私に何が出来るだろうか？

彼女を人間の欲望から守ることが可能だろうか？

『青の竜帝様にお会いしたい。早急に』

助けてください。義父上様。

第9話

「私としては豪華すぎると困るの。他の人達から見て反感を買うのは避けたいし、税金の無駄使いは良くないし。ここの生活水準が分からないけど、この服とか贅沢品でしょ？」

こんなドレス……結婚式くらいしか着ることないよ。

しかもこの触り心地の良さ！　結婚式の予約をしたホテルの貸衣装を選ぶ時には無かったな。

ウエディングドレスもカラードレスもデザイン優先で素材は二の次って印象だった。

ちなみに白ドレスは１５万。レンタル代も高いもんだ。色ドレスは結婚式セットパックで数着の中から選んだっけ。お母さんの希望で淡いピンクのふりふりドレス。

はっきり言って２６の私には可愛過ぎるドレスだったけど、お母さんが喜んでくれるなら何だって着るつもりだった。お色直しで着ぐるみを着てみたいと高校生から考えてたんだけど。

安岡さんみたいなタイプは絶対にひく……。

あぁ、もろもろのキャンセル代。私の貯金から払ってね、お母さん。

「ふむ、贅沢品ではあるな。だが豪華ではない。黄の竜帝がいる大陸にあるリーセチル共和国の貴族を見たらセイフォンの衣装が質素に思えるぞ。豪華がすぎて道化の域に達していてる」

道化？　ピエロってことだよね？　ちょっと見てみたいかも。おもしろそう。

言葉を覚えたらこの世界の国々を観光（？）したいな～。

お金無いから働きながら旅して。

先のことより……今は目の前の事を考えなきゃだぞ、私！

「他の国と比べるのは無しにしようよ。当分はここでやっかいになるつもりだから。ハクちゃんがセシーさんに伝えてね。豪華・贅沢

は困るって。あ、角の立たない言い方でお願いします」
「まかせておけ！我もりこの役にたってみせるぞ」
そういえば、竜帝って何？　竜の王様のことかな～後で詳しく教えてもらおう！
王様も……鱗がある竜だといいな。

『つまり、妬みを買わない程度の生活をご希望ってことですの？』
セシーさんは綺麗に結い上げた髪からのぞく耳から下がっている赤い石のピアスを右手で触りながら……むむ、色っぽいなぁ……ハクちゃんと念話している。白い肌。紅い唇。春の日差しのような柔らかな金髪に紅茶色の瞳……。
ピアスをいじる細く長い指には整えられた爪。塗られたネイルは可愛らしい桃色。意外な色だったけど（真っ赤とか好きそうなのに）似合ってる。
私……着替えの時に軽くメイクしてもらってるけど。セシーさんは口紅以外はそのままっぽい。なのにこの美しさ、色っぽさ！
私が男だったら彼女にめろめろへろへろ～んになるね、うん。ハクちゃんが竜で良かったぁ。　人類だったら私と彼女を比べて内心がっくりしちゃうよ。
ハクちゃん、なんて言ってるのかな？　早く言葉を覚えて自分で会話したいな。
英語が赤点の私だって生活に必要ってことになれば頑張れるはず！
『りこはお前と違って慎ましやかなのだ』
『慎ましいと言うより賢いというべきかしら。簡単に取り込めると思ってたのに、残念ですわ』
紅茶色の眼が私をちらりと流し見た。
なんだろう？　ため息をついてるし。
お、こちらに近寄って……私の左手をとって軽く撫でた。背が高いな～。１８０はあるかも。　モデルさんみたい。
『貴女の手はとても綺麗な皮膚をしているわ。労働をしていない手

ね。異界では恵まれた生活をおくっていたはず。こちらでそれ以下の生活をさせるわけにはいかないわ。それに貴女の生活費は殿下の私財を使います。国庫に関係ございません。……ヴェルヴァイド様、貴方様とてトリィ様に苦労をさせたくないはずですわ。貴族の姫のように何一つ不自由無く過ごして欲しいとお考えでしょう？』

彼女は私から手を離さず、顔だけハクちゃんに向けて微笑んだ。

蕩けるような美しさ。

あぁ、いい香りがする。甘い香りの香水はセシーさんに似合ってる。

『りこが……苦労？』

なんか身体がふわふわしてきた……。不快じゃないけど、なんか変。

『貴方様は人間の生活に疎い。若い娘を物質的にも精神的にも満足させる術など分かりますまい。第一、金銭さえお持ちで無い。トリィ様を路頭に迷わせるおつもり？』

ふわふわでぽかぽかする。身体の中からあったまるよ……。

『トリィ様のためにセイフォンを利用なされませ。セイフォンも貴方様の‘つがい’の君の後見という見返りがあります。それにダルド殿下は幼い面もありますが慈悲深く、責任感もお強い。トリィ様に総ての私財を消費されようと彼女を邪険に扱うことはないとこの‘魔女’が保障致しますわ。トリィ様が生まれた世界に帰りたいなどと考えないような満ち足りた生活をセイフォンは提供するとお約束しますわ』

セシーさんにとられた手がじんわり……冷たくなってきた。

身体はぽかぽかしてきたのに、変なの。どうしちゃったの、私。

『確かに我は人間の生活には疎い。興味が無かったからな』

ハクちゃんがふわりと飛んで、私に並んだ。金の眼がセシーさんと私の手を見下ろした。音を立てないホバリング（？）で……。

うぅ、なんか瞼がぴくぴくしてるぞ私。身体が変！

『暫くはお前の策に付き合っても良い。りこをこの世界に馴染ませ

る為にもな。だが……』
ハクちゃんが指を一本軽くはじいた。
同時に……爆音。
爆音？　え！
『我のりこに触れたうえに＜魅了＞しようとしたな？この痴れ者が』
一瞬で身体がもどり、意識もクリアーになった。
でも、でも！
ガス爆発でも起きたの？　部屋の中がめちゃくちゃ！　瓦礫の山、まさにそれ！
天井が無いし！　青いお空が丸見え……って、そんなことよりセシーさんだよ！
「た、大変！　セシーさん、セシーさん！」
私は瓦礫を見回した。
いた！
うそ……正面の壁にめり込んでるよ、セシーさん！
駆け寄りたいのに足が動かない。膝が震えて……立ってるのがやっと。
「ハクちゃん、ハクちゃん！　どうしよう、セシーさんが」
「この女はそんなに軟ではない。わざと受けたな。我が手加減するのはお見通しか」
な……手加減？　今のガス爆発（？）はハクちゃんの仕業なの？
『うふふ……』
セシーさん？
ぎゃあ！　自力で壁から手足を引き抜き、すたすた歩いてる！
露出の多いドレスだったのに肌には傷１つ無い。ドレスには埃すらついてない。
なんなの？　セシーさんって、サイボーグ？
『あらあら。御眼がまん丸になって……。驚いたでしょう、御かわいそうに』
扇子で口元を隠して優雅に微笑む姿に安心した。

サイボーグだろうとターミネーターだろうと、無事でよかった！
「ハクちゃん、なんてことすんのよ！　セシーさんは無事だったけど、部屋が壊滅状態だよ」
「我は悪くない。全く、悪くないぞ！　この女が……」
「理由はあったって、こんなのダメ！　壊したもの、弁償請求されたら払えないよ！」
ぐわっつ、大ダメージだよ！
借金持ちに転落とは！
総額はどれくらいになっちゃうのかな。ダルド君、申し訳ないけどお金貸してー！

『この部屋はもう使えませんから、変えましょう。そうですわ！離宮に移って下さいな、ヴェルヴァイド様』
『最初からそのつもりだったのだろう、‘魔女’。本当に嫌な女だ。先代の‘魔女’は鬱陶しい存在だったが実害は無かった。だがお前は違う。我にとって邪魔だな』
セシーさんは何事も無かったようにハクちゃんと念話している。
彼女はサイボーグではなく、武将なんだそうだ。
この世界で戦に出る人間は一般人よりかなり強く……頑丈なんだって。頑丈にも程がある！
生まれ持った才能と鍛錬の成果で強くなるらしい。
セシーさんのドレスの素材は特注品で蜥蜴蝶っていう貴重な生き物の翼の皮で出来てるそうだ。刃物でも切れない素材だから竜族の仕立て屋さんしか作れないドレスだってセシーさんが教えてくれた（ハクちゃんに通訳してもらった）。
「ね、セシーさんは何だって？　弁償の件は？」
セシーさんが無事だった理由は教えてもらったけど、部屋を壊したことについては今後どうしたらいいのかな。
「部屋を移るぞ。離宮まで歩くには少し遠い。術式を使おう」

ちょっと。
私の質問は？
「部屋を壊したんだよ。ハクちゃんは！　もうちょっと気にしようよ」
「確かに壊れた。だが過失はあちらにある。あの女も過失を認識している。りこが心配している弁償責任は発生しない」
は？
「過失は我のりこに我の許可無く触れたことだ」
はぁ？
「着替え等を手伝う侍女には必要なことだから許した。だが、あの女は確信犯だ」
確信犯って……。
「あの女は我がりこの皮膚に直に触れられぬのを見抜いて、嫌がらせを兼ねてりこの手に触れたのだ。まったく忌々しい」
へっ？
「我はあの女を殺さなかった。傷もつけなかった。りこがあの女を気に入ってるからだ。消してしまいたいが、我慢した。あれが死んだりしたらりこが泣くと思ったからだ」
「ハクちゃん……」
ううん、いい子だね。優しいんだよね。
ちょっとずれてるけどさ。私以外にもその気づかいを使ってくれるとお母さん（？）は助かるんだけどなぁ。
ま、借金が出来なかったことにはホッとした。
今後はハクちゃんが物を壊したりしないように私が気をくばらなきゃだね。

我は言わなかった。
セシーが手をとった時、りこを＜魅了＞しようとしたことを。
嫌がらせは‘おまけ’だ。

我は言えなかった。
真っ青になり、震えながら‘魔女’の心配をするりこの姿を見たから。

我が言ったら。
りこの心が痛むのではないかと推測した。

人間の心が脆く傷つきやすいこと。
我はこの数時間で学んだ。

りこにはもう傷ついて欲しくない。

人間共よ。

生き延びたければ我らを放っておけ。

もし薄汚い欲望を我の‘つがい’に押し付け、りこが耐え切れず壊れたら。

世界を終わらせよう。

第１０話

『お茶、飲みます。ありがとう……ですカイユ』

カイユさんは身の回りの世話をしてくれる侍女さんで、長身の美人さんなのだ。

１９０ｃｍ近くあるんじゃないかな？

腰まで流れるさらさらの銀髪に空色の瞳。

白人より黄色人種に近い肌。

顔つきも東洋人っぽくて、親近感が持てるのよね。

だって、セシーさんやミー・メイちゃんは完璧な欧米系だし。

しっかし、皆さん背が高い。

１３歳のミー・メイちゃんだって私より背が高い……。

１６くらいかと思ってたのに、１３歳。

大人っぽいなぁ～。

カイユさんはこの国……セイフォンの人じゃなくて帝都って所の出身。

帝都の人達はセイフォン人と違って＜監視者＞を怖がらないから、私の侍女さんに抜擢されたらしい。

ダルド殿下の誕生会に上司の代理で出席してたってくらいだから、身分の高い人なのかもしれないけど。

『だいぶ上達しましたわね。この１ヶ月間、とても頑張って語学を学ばれましたものね。教えがいのある生徒に恵まれて、私も嬉しいですわ』

セシーさんは毎日のように、私に言葉を教えるため離宮に来てくれた。

本当に感謝です！

本職の語学教師は最初の３日間で１６人が来て、全員アウトだっ

た。

原因はハクちゃんだ。

男性教師は門前払い（よぼよぼのおじいさんでも）をし、離宮に入れない。

おかま系も駄目（おかま・ゲイなら平気かもとミー・メイちゃんのパパが必死で探してきてくれたらしい）だった。

で、女性教師はハクちゃんも文句は言わなかったけど……彼女達のほうが無理だった。

この国では教師は裕福な家柄の出身者が多く、つまりお嬢様な女教師達はハクちゃんの前では震えたり、泣き出したり……腰を抜かした人もいた。

こうなることはある程度は予測されていたらしく次々に新しい教師が来て、去っていき（むしろ運び出され？）３日間で１６人の候補者が総て消えた。

ダルド殿下、ごめんなさい。

せっかく集めてくれたのに。

こんな訳でセシーさんが私に言葉を教えてくれることになった。

彼女には世話になりっぱなしです……。

「りこ、りこ！　見てくれ！　上手だろう？」

ハクちゃんが私の眼の前にノートを突き出した。

鉛筆である部分を指し、私に言った。

「‘りこは風呂が好き’って書いてみた。今回はかなりのできばえだ」

私はしずかちゃんか？

まぁ、いいか。毎日、毎回、必ず長風呂の私は確かにお風呂が大

好きなんだし。

「うん。さっきのより上手だね」

ハクちゃんは文字の練習に夢中だ。

今までは必要が無かったから筆記用具に触れたことすれなかったそうで、私が四苦八苦しつつ書き取りをしてるのを見て自分もやってみたくなったみたい。

でも竜の手でペンを持つのは大変そうで、初めは線をまっすぐ書くことすら危なかった。

最近は文字っぽくなってきてる……すごいぞ、ハクちゃん！

人類である私はいまだに、文字がみみず状態なのに。

漢字が書けるんだからここの公用語（アルファベットに似てる）だって、いつか書ける！

と、自分を励ましつつ頑張ってるんだけど。

うむむ…状況は芳しくないのでございます。

午後のお勉強タイムが終わり、お茶をまったりいただくこの時が私の楽しみになっているんだよね～。

私達は離宮（ここに居候中）の中庭で午後のティータイム中。

真っ白な石で作られたテーブルの面子は私とハクちゃん、そしてセシーさん。

カイユさんはかいがいしく給仕をしてくれている。

一通りの給仕を済ますと、カイユさんも席に着いてくれる。

最初は承知してくれなかったけどハクちゃんが何か言ってくれたらしく、最近は一緒にお茶を飲んでくれるのからますますお茶の時間が好きになった。

カイユさん、セシーさんと簡単でたわいも無い会話が出来るこの時間！

女の井戸端会議。

うん、最高！

『セシー、感謝。いっぱい、ありがと』

彼女は大臣と将軍を兼任している。

すごく忙しい身なのに……。
『うふふ。トリィ様の語学を受け持ってる間はどうどうと会議も休めますもの。それに私がいなくたってこの国は機能します。現在は他国との関係も良好ですしね』
あ、ちょっと難しい言葉があってわかんなかった。
ハクちゃんにきこう！
「ね、セシーさんはなんて？」
「仕事をサボりたいからりこを利用してると言っている。だからこの女に恩を感じる必要は無いぞ」
絶対、違うな。
ハクちゃんって、セシーさんにはなんか態度が変だよね。
この二人はどんな関係なんだろう？
前にハクちゃんにたずねたら……。

「関係？　あの女と我の間には関係など無い。あるのは関係ではなく＜記憶＞というべきか」

ハクちゃんは時々、意味が分からないことを言う。
こういった場合、私に分かるように説明することは難しいらしく聞けば聞くほど私は混乱することになる。
「え？　ハクちゃん？　記憶って？」

「繋がりは途切れることなく、世界を巡る。あれ自身の意識は無く、力が移る。＜記憶＞は継がれて永久に重なる」

ごめん。
すみませんでした。
聞かなきゃ良かったね、うん。
「その件は、もういいや。ま、いいかって感じになっちゃった」
私のお得意‘ま、いいか’……ハクちゃんと出会ってから使用頻

度が増してます！

『セシー。お仕事、たくさんある。私のため、困るは駄目です。国のお仕事の邪魔。国民の邪魔になる同じ。私、異界で国民。政治の人、働く重要におもてる』

自分で書いた単語帳を見つつ、言ってみる。

セシーさんは柔らかな笑顔を浮かべて答えてくれた。

『そうですわね。でも、気になさらないで。ここに通うことは貴女の為だけじゃないの。国益にも関係してるのよ。……私、計算高い嫌な女で有名なのよ。ねぇ、カイユ殿』

『ええ。そうですね。全くその通りです！　トリィ様、ご安心ください。このカイユがお側におります。この女などにお心を許されますな。……トリィ様、私と帝都に参りましょう。我が主もそれを望んでおられます』

二人の美女が私を挟んで、睨み合う。

ひえ～！

なんか今日の二人は朝からずっと険悪ムードなんだよね。

昨日までは、こんなじゃなかったのに。

『え、えと。帝都、そのうちです。今、私、覚えることたくさんあり、移動は大変』

『カイユがお連れ致します。快適で楽しい旅になりますわ！　帝都までは大小４つの国を通りますから観光しながら参りましょう。我が主が費用を総て負担すると申しておりますし』

『お黙りなさい。貴女は今は侍女でしょう？　お下がり！』

セシーさんが扇子を音を立ててたたみ、さらに言う。

『第一、会ったことも名前も知らぬカイユ殿の主になんでトリィ様が？　必要ありませんわ。他国観光をご希望なら、こちらでいくらでも用意致します。ね、トリィ様。遠慮なさる必要は無いわ。貴女にはその権利があるのよ？　貴女をこの世界に落とした責任はこの

国の王子達にあるのだから』

『私はトリィ様の侍女であって、お前の侍女では無い！　この1ヶ月、大人しくしていれば付け上がりおって、この〝魔女〟が！』

カイユさんとセシーさんの会話は早口だし、知らない単語が多くて私にはほとんど理解不能の域だった。

雰囲気と拾った単語から察するに……私のことでもめてんの？

ど、どうしよう！

私の憩いのティータイムが！

『あら、やる気？　よろしくてよ。このところ戦も無くて、身体がなまってたから。丁度いい準備運動になるわ』

セシーさんが優雅な仕草で足を組み替え、にやりと笑った。

ああ、会話が早くてついていけない～！

自分のヒアリング能力の低さが恨めしいぞ！

「ハ……ハクちゃん、なんとかしてよ」

仲裁できるのは、この場にはハクちゃんしかいない。

多少の不安はあるけどね。

ハクちゃんは書き取りしていた手を止め、私に顔を向けて金の眼を細めて言った。

「わかった。この二人を黙らせればいいのだな？　殺さぬ程度にな」

ちょっと待て。

『勘弁して下さいよ。相変わらず使えん方ですねぇ』

え？

この声！

「ダルフェさん！　お帰りなさい、グッドタイミングです！」

思わず日本語で言ってしまった。

やばい！
『姫さん……俺に異界語は禁止だよ？　今夜のデザートは無しだな』
『はい、です』
ああ、やってしまった。
彼の作る食事はすごく美味しいの。
中でも一度に数種類が綺麗に盛られたデザートが最高なのに！
『で、閣下と俺のハニーは何をもめてんの？』
そう。
神出鬼没に現れても誰も驚かないこの人は、カイユさんの旦那様なんです。
気配無く現れたり、いつの間にかいなかったり。
最初はびっくりしたけど……慣れてしまった。
なんたって竜のいる世界だ。
私の常識を超えちゃってることが多すぎるから、害の無い事柄に関してはスルーする方針にした。　ちなみに。
この人は大変貴重な存在なのだ。
ハクちゃんが離宮に入ることを認めている、唯一の男性！
『えと、あの！　帝都に行くとか話してた。そしたら二人、もめる開始。その後は会話、聞き取れ無いです』
『ふーん。ま、察しはつくねぇ。……おい、ハニー！　あまり興奮するな。胎教に悪い』
スマートな動作でカイユさんの手をとり、キスをした。

ハクちゃんが彼を許可した最大の理由が、これ。
妻であるカイユさんが妊娠しているからだった。
だけど、ハクちゃんは人道的考えから許可を出したのでは無かった。
悲しいかな、ハクちゃんはそんなに甘くなかった。
（ま、杖をついて現われた語学教師にも容赦無かったしね……）
カイユさんの種族は伴侶以外にあまり性的興味を持たないこと。

特に妻が妊娠期間中（長命な種族のため、なんと１０～１５年！）は夫の生殖機能が止まること……ひたすら奥さんとお腹の赤ちゃんの為に尽くすそうだ。

つまり生物学的見地から許可を出したわけだ。

なんでハクちゃんはそんなに他の異性（つまり雄）を私の周りから排除しようとするのか？

セシーさんが言うには、それが竜の性質だからで済んでしまった。

う～ん。

竜同士なら納得できるけど。

私は人間だし。

何よりハクちゃんは私と繁殖（？）しようとは考えてないと思う。

１ヶ月間、お風呂もベットも一緒だけど何も無い。

って、いうか無理！

小型犬サイズの竜が人間の私にむらむら……あり得ない。

妻……というよりお母さん気分だし。

『閣下。鍛錬の相手が欲しいなら俺が引き受けますんで。ハニーと手合わせしたいなら出産後にしてもらえます？　ま、その頃まであんたが生きてりゃの話ですがねぇ。さ、ハニーは奥で休んでおいで。あと３時間であの方が到着する。そうしたら忙しくなるからね』

長い指でカイユさんの銀髪をすくい口付け、微笑む。

ダルフェさんの真紅の髪が太陽に光でまるで燃えてるように見えて、私は眩しくて眼を細めた。

この人、眼が鮮やかなグリーンで……初対面の印象は‘クリスマスみたい’だったっけ。

カイユさんはため息をつき、席を立った。

『ヴェルヴァイド様、トリィ様。私はこの場を離れますが‘これ‘がおりますから、何なりと‘これ‘にお申し付け下さいませ』

‘これ‘と言われたダルフェさんはにこにこしながらカイユさんを見送った。

『残念ですわ』

セシーさんがカップに口をつけ、紅茶を飲みながら言った。

『１０年前の御前試合でカイユ殿に負けてからずっと再戦の機会を狙ってましたのよ？　あの方は帝都からあまり出られませんからチャンスでしたのに。トリィ様にも私の勇姿を御見せしたかったんですのに』

『セシー、強い人。戦える人ですよね？　カイユも？』

ハクちゃんに吹っ飛ばされて無傷なセシーさんより強いの？

背は高いけど儚げで細身の、あのカイユさんが！？

『俺のハニーは強くて美人で冷酷で最高なんですよ！』

ダルフェさんが私のカップに紅茶のお変わりを注ぎながら、うっとりと呟いた。

『あぁ、愛しい俺のハニー。今夜もストレス解消に俺をいたぶってくれ。殴って蹴って、踏みつけて欲しい……』

聞こえなかったことにしよう。

あ、そういえば！

『ダルフェ。後でここに来るですか？　誰？』

ダルフェさん、セシーさん、カイユさんとこちらの言葉で会話する時は‘さん‘をつけない。

敬称をつけるのは不可と拒まれたからだ。

ハクちゃんの‘つがい‘ってポジションはいろいろあるんだね。

‘様‘をやめっていうのも聞き入れてもらえなかったし。

『あぁ、姫さんには伝えてなかったんですかい旦那』

ハクちゃんの通り名はヴェルヴァイド（なんか凄く偉そうで派手な名前だ）。

セシーさんとカイユさんは使うけど、ダルフェさんは、旦那、って言う。

言葉使い・態度も独特だし。

ちょっとたれ眼だけど、はっきり言って美形だと思う。

2メートルはありそうな長身にそれに見合った長い手足。

小さい顔。……こういうのは何頭身っていうのかな？

モデルを通り越して、まんが体系だね。

ハクちゃんが言うには彼の種族は、これが平均体系。

むむ、日本人の敵だな！

ナイススタイルで長身・長命なんてすごい。

まさに異世界。

ファンタジーだ。

「ハクちゃん。お客が来るの知ってたの？」

黙々と字を書いてるハクちゃん手は止めずに答えた。

「知ったというより、気付いていたが。そんなことよりもっと紙をよこせ、ダルフェ」

ダルフェさんにも聞こえるように念話したらしく、ダルフェさんが額を抑えて空を仰いだ。

『旦那……。まったく使えないねぇ、ほんと。姫さんは苦労するよなぁ、こんなんが相手じゃなあ～。旦那があの方の念をずっとシカトすっから御大自ら出てきちゃったんですよ？　分かってますか、そこんとこ』

あの方？

念？

ねえ、ハクちゃん。

どういうこと？

「この離宮に来てから五月蝿く念を送ってきていた。我は忙しいから相手をしなかっただけだ」

「ちょ……誰かがハクちゃんに念を送ってきてたけど、無視してたってこと？　１ヶ月も！」

『忙しいって、どこが！　旦那は俺らと違って働いてないでしょうが。あんたがこの１ヶ月やってるのは文字書き練習と姫さんを傷つけず触る力加減の為にやってるラパンの果実を潰さず握る訓練ぐらいでしょう！』

えっ？

初耳ですよ！

力加減の訓練？

『あんたが潰した大量のラパンを使ってムース・ババロア・シャーベット・ジャムを俺がどんだけ作ったか分かってんですか！　姫さんとハニーじゃ食い切れんから毎日毎日、王宮厨房に俺が運び込んでるんじゃないですか』

だからデザートの中に１品は、ラパンのお菓子が必ずあったの！？

旬だからじゃないかなんて、しれっと言ってたねハクちゃん。

でも、いったいいつやってるの？

そんな姿は見たこと無かったけど……。

『きっと、トリィ様が寝たのを確認してからこそこそしていたんですわね』

セシーさんがテーブルに置かれたプレートから私のお皿に焼き菓子を１つ乗せてくれた。

『これ、生地にラパンを刻んだものが入ってましてよ。私はラパンが苦手ですの。お茶菓子に毎回出てきて……カイユ殿の嫌がらせかと思ってましたが、誤解でしたわね』

ひえ～。

私が気付かなかっただけで、セシーさんとカイユさんは、嫌がらせかしら、これ、って思うような関係だったとは……。

なんて答えていいか困って、とりあえず焼き菓子を口に放り込んだ。

生で食べると白桃に似ていたラパンは加熱されたせいか、ちょっ

とすっぱく感じた……。

『では、私はこれで失礼いたします。少々問題も発生したことですし』

セシーさんはそう言うと足早に去って行った。

問題？

「問題って何かな？」

「こいつの軽い口だ！」

へっ？

ハクちゃんは筆記用具をハクちゃん専用筆箱にきちんと仕舞うと、ダルフェさんに向かって跳び蹴りを……跳び蹴り？

ハクちゃんの小さな足は彼に届いていないのに。

なのに！

『て……。右肩がいっちゃったじゃないですか』

５メートル位は飛ばされたダルフェさんが地面に腰をついて、肩を押さえていた。

『りこには内緒で訓練すべしと進言したのはお前ではないか』

ちょっと前の私ならこう思うことはなかったけど。

最近は……またかって感じですよ。

この二人は日に何回も、こんなやりとりがある。

最初は慌てたり心配したけど。

彼はハクちゃんとの過激なスキンシップ（？）を楽しんでるふしもあるので……。

『よいせっと。……姫さん、もう治ったからそんな顔しなさんな。しわが増えちまう。人間の２６は曲がり角を曲がったお肌なんだっ

て自分でこないだ言ってただろう？』

『しわ、余計！』

ダルフェさんもセシーさんと同じでやたら頑丈だ。

しかも再生能力が高い。

骨が折れても数分で治ってしまう。

再生能力。

竜と同じ……。

『さて。旦那、どうしますか？』

にっこりしながらダルフェさんはとんでも無い発言をした。

『青の竜帝自ら乗り込んで来ますよ？　‘魔女’閣下は姫さんを竜帝に渡したくない。あの女なら竜帝にも喧嘩売るくらいしそうですがねぇ』

青の……竜帝？

竜帝！

『さあな』

さあなじゃない！

『ダルフェ！　お客は竜…帝？　こないだ習った。この大陸、青の色の竜！』

習ったばかりだ。

この世界は４つの大陸があり、それぞれの大陸に竜帝って呼ばれるでっかい竜が存在する。

青・黒・赤・黄の４頭。

このセイフォンがあるのは青の竜帝の大陸で、この大陸には大小合わせて８４ヵ国もあるらしい。

一番大きな大陸だからかな？

竜帝がいるから人間と竜族が共存できていて……あれ？

竜帝って、帝都に城があるって習ったよね。

カイユさんとダルフェさんは帝都の出身……。

カイユさんの上司って帝都に住んでて、私とハクちゃんに帝都に住むように薦めてくれてるんだよね？

ーなぜ私なんかを？

竜帝はハクちゃんに念を送ってたけど無視されて、乗り込んでくる。

ーなぜ竜帝なんて凄い存在がわざわざ？

セシーさんは竜帝に私を渡したくない。

帝都に行かせたくない。

さっきもそれでもめた。

ーなぜ……他国観光はいいけど帝都は駄目なの？

うう～、まとまらない！

落ち着け、私！

『カイユの主、誰？　なぜ私を帝都へ？』

私の言葉にダルフェさんの秀麗な顔が歪んだ。

『は？　今更……いや、もしや』

ダルフェさんはハクちゃんに迫った。

ぎゃー、顔が怖い！

絶対に怒ってるし！

『旦那、何も言ってなかったんですか！　何も教えてやらなかった

んですか！　あんたの大事な伴侶でしょうが！なんで……』

何かいいかけたダルフェさんが急に黙った。

ハクちゃんと念話で会話しているみたい。

私に聞かせたくないってこと？

『分かりました。旦那の気持ちも理解できるが賛同はできませんね。こっちはこっちで動くことにしますよ。手遅れになる前に。……姫さん』

わわ！

ダルフェさんが私に深々と下げた。

『旦那が使えない奴だと知っていたのに確認を怠った俺の失態だ。すまなかった』

『ダ……ダルフェ？』

さらりとひどい事をいってるし。

『俺とハニーの主は青の竜帝だ。旦那から聞いてると思っていた』

え？

『＜監視者＞の〝つがい〟を帝都で〝人間から守る〟ために保護下に置く』

人間から……守る？

『これが【四竜帝】……全ての竜帝の判断だ。なぁ、これが人間・竜族にとって最良の案だと俺も思っている。姫さんが人間側についたら世界のパワーバランスが崩れる。俺達竜族は姫さんを政治に利用したりしない。だから一緒に帝都へ……』

竜族……俺達？

俺達って！

『檻に入れる気か』

私とダルフェさんの間に、ハクちゃんがふわりと浮きながら言った。

『我はりこの自由を望む。りこの自由を奪おうとするなら竜帝だろ

うと許さん』
『そんなつもりはない！　ただ、姫さんを人間の権力争いから隔離を』
『ならば人間を滅ぼす……竜族も潰す！　この世界には我とりこだけでよっぐがげ！』
最後まで言わせるかい！
この超危険思考ちび竜め！
「そういうこと、堂々と発言しないの！　まるで悪役みたいだよ？」
私はハクちゃんの胴を両手で掴み、頭を下にしてぶんぶん振った。
「悪い子ハクちゃんにはお仕置き！　しかも私に教えてくれなかったことといっぱいあるでしょうが！　わっ……わ、私にはハクちゃんしかいないのに！　貴方だ……けなのにっ」

うう、我慢できない！
泣いちゃう、溢れちゃう！

「り、りこ。ちょ、まて、り……」
「どうしてよ！　どういうことよ！　権力争い？　バランス？　ダルフェさんは竜族？　竜帝が私を保護？　人間を滅ぼす？　なんでそんな怖いこと言うのよぉ」

頭の中がぐちゃぐちゃ・どろどろだよ。
だって、だって！
気づいたの。
分かっちゃったのよ！

「わ、私の存在は人間にも竜族にも迷惑なんでしょ！　私がいるとハクちゃんが……」

心臓の音が頭をガツンガツン叩く。

「私が……ハクちゃんを世界の敵にしてしまう！」

ハクちゃんは前に言ったもの。

「りこの望みは何でも叶えてやる」って。

＜監視者＞は世界の＜管理者＞。
世界の＜秩序＞を監視し、管理する。

一望みは何でも。

ハクちゃんは強い。
私の望みを叶えるためなら他人を傷つけることに、躊躇いすらないのだろう。

でも、それは世界の秩序を壊してしまう。
秩序を守るべき存在のハクちゃんが。

「私、この世界にいたら駄目なんだね。ハクちゃんの側にいたら駄目だったんだね」

「り……り、こ」

勝手にこの世界に落とされたのに。
もとの世界に帰る術式も無いのに。

「この世界に私の居場所なんて無い」

ねぇ、ハクちゃん。
私は貴方を駄目してしまう。

出会わなければ良かったのに。

第11話

『なに痴話喧嘩おっぱじめてんですか？　姫さん、そんなに逆さにして振ったら旦那の内臓が出ちゃいますぜ？』

＝ダルフェ、何を言ってる！　我のりこが泣いて錯乱し、とんでもない事を考え始めたぞ！

『はぁ。異界語で捲くし立ててるから俺にゃ、意味不明です。ま、この形相じゃろくでもないことに気づいて、悲観してパニック状態って感じですかねぇ～』

＝見とらんでりこを助けろ！　このままではりこが……！

『思うんですがねぇ。この自体は旦那の後ろ向きな姿勢が招いたのでは？』

＝後ろ向きだと？　我はりこの心を守る為に、余計な情報は伝えなかっただけだ。

『それがまずかったから、こうなってんですよ。ほんとに、使えないねぇ旦那は』

我の身体を振り続けるりこは大きな黒い眼から涙を流し、唇を震えさせながら嗚咽を漏らしている。

我が念話で話しかけても、弾かれてしまい意志の疎通が出来ない状態だ。

りこの叫ぶような念は一方的に我に叩けつけられ、その支離滅裂ながらも核心をついた内容に我はとんでもなく焦った。

我の‘つがい’になるということは我を……我の【力】を手に入れるということだ。
我も竜族の性質を強く持っている。
‘つがい’が関係する事柄になると‘つがい’を最優先に考えてしまい、しばし……いや、ほとんど冷静な判断が出来ない。
りこが考えたように、我はりこの為ならばなんだってしてしまう。
壊すことも、殺すことも、滅ぼすことにもなんの抵抗がない。
それが世界の敵というなら、その通り。
りこに‘お願い’をされたら我は四竜帝だって引き裂くし、大陸を海に沈める。
普通の竜にはそんな【力】は無い。
だから竜のこの性質ははた迷惑なだけで、大した害は無い。
それにこの異常なまでに雌本位な性質は一過性のもの。
繁殖能力が低い竜族は、1組のつがいから生まれるのは生涯1体のみ。
長命種によくある事だ。
普通の竜同士はつがいに出会うと竜珠を交換し、名づけを行う。
その後は雌が妊娠するまで交尾をし、懐妊後は雄は雌と胎の子に尽くす。
つがいを得たばかりの雄が危険なのは雌が妊娠するまでであって、懐妊後はもとの性格にもどる。
判断能力も通常の状態になる。
1週間、長くても1ヶ月程で雌竜は妊娠する。
雌は雄とは異なり、つがいに出会って蜜月期に入ろうとも通常の思考を維持しているから雄のように見境が無くなることは無い。
つまり危険な状態の雄を制御するのは雌の役割なのだ。
竜の雌はそれを重々承知しているため、暴走しがちな雄を上手く扱う術に長けている。
だが、りこは人間だ。
しかも異界人。

竜の性質も生態も知らぬ。
りこに我を制御するのは荷が重い。
我は【普通】の竜ではないのだから。
それに……。
竜と人間の間には子が出来ない。
過去、数頭の竜が人間のつがいを得たが……結末は不幸なものが多い。
子を成すことが出来なけい雄竜は、危険な状態のまま……雌の奴隷になり下がる。
人間の雌は思いのままに操れる竜を得たことが分かると、大抵はろくでもないことに雄竜を利用する。
そうでない場合もあるが……悲惨で凄惨な事態になる確立が高い。

女の望みのままに富を他人から奪う。
女の希望を叶えようと邪魔者を全て殺す。

最も凄惨なのは雄竜が狂うことだ。

つがいとの子が得られないことに悲嘆し、苛立ち、壊れてしまう。
壊れた雄竜は女を喰い殺し、暴れ狂う。

竜は強い種族だ。
人間達にはなす術が無い。

【蛇竜】となった竜を始末するのは竜帝の仕事だ。
竜帝が【蛇竜】となると我が始末する。

竜帝より強いのは、世界に我のみ。
過去に1度だけ、竜帝を始末した。
奴はつがいの女を喰らい、同族を殺し……自分の大陸の半分を焦

土と変えた。
人間をつがいにした竜の悲劇をりこには……知られたく無い。

人間共が我のつがいになったりこを利用しようと群がってくることは、予想していた。
しかし、りこに注意を促すことすらしなかった。

りこはこの世界が綺麗だと……美しいと言っていた。
空を見ては眼を細め、庭を散歩しては褒め称えた。
離宮を本で見た伝説の神殿みたいだと言い、探検しようと笑った。
魔女が揃えた衣類を眺め、ドレスばかりで困ると苦笑していた。
ダルフェの作った食事に感激し、奴に料理を教えてもらいたいと願い出て……。

‘おとぎの国にきたみたい’

害意の無い、暖かく平和な世界。

我はりこをこの世界に縛り付けるために‘おとぎの国’を用意したかった。

‘おとぎの国’……りこに都合のよいものだけで作った‘虚構の世界’を。

魔女は我の考えを見抜いていた。
この1ヶ月の間。
我が人間のつがいを得たことを知った内外の王侯貴族・商人などがひっきりなしにセイフォン王にりことの謁見を求めたが、セシー

はりこには告げなかった。
セシーは何処の誰が来たかを我に細かく報告し、言った。

ーこの者達はトリィ様にとって害虫ですわ。どうなさいます？
私どもで処理するもよし、御自ら処分されるもよし。現段階では我が王が竜の蜜月期の性質を理由に全ての謁見を断ることができていますわ。でも、長くは持ちません。１２０年前の大戦の折に国土の半分を列強に奪われた現在のセイフォンでは、大国に逆らうことは不可能。
彼等がトリィ様を自国に招きたいと言い出せば、彼女を差し出すしかありません。
でも、彼女自身がセイフォンにいることを希望すれば彼等も強く出られませんわ。
たった1度で良いのです。
トリィ様が貴方様と共に公の場にて宣言して下されば。
‘セイフォンが気に入っている‘
そう言って下されば、セイフォンはこの大陸で確固たる立場を手に入れることが出来るのです。
＜監視者＞のつがいが‘気に入ってる‘国を蔑ろにすることは＜監視者＞に盾突くに等しいのですから。
私はこの国を守りたい。戦うことは好きですが‘戦わせる‘のはもうしたくない。

魔女の心に嘘偽りは無かった。
我を欺くことは不可能なのだから、魔女は本心を隠さない。
あれは嫌な女だが、愚かではない。
我がりこに与えたいものを良く理解しているからこそ、今のままのりこ……我の【力】を欲の為に使おうなどと思いつきもしない、

無知な娘でいさせようとしている。
反対に青の竜帝はりこに知識と情報を与え、自分がこの世界において非常に重要で危険な存在であるか認識させるべきと考えている。
この1ヶ月、竜帝はりこに必要な事を全て隠さず話せと念を送ってきていた。

出来なかった。

我はりこにそのような重責を負わせてしまったことを、りこに知られたくなかった。
それを知ったらりこがどう思うかが、怖かった。

恨まれ、嫌われ、憎まれるのが恐ろしかった。

『で、旦那。俺はどうしたらいいんですか？　取りあえず姫さんを気絶させるとか？』

＝この、愚か者が！　りこに乱暴なまねは許さん。身体が傷ついたらどうする！

『俺は力加減を間違えたりしませんよ。……それに姫さんを傷つけたのは旦那じゃないですか』

＝我が？　……我はっ！

「なんで、なんでよ！　私がこんな目にあうの！」
「分かんないことばっかり！　知らないことばっかり！」
「ハクちゃんだって……私に言ってくれないことがあって！」

「来たくて来たんじゃないわよ！　つがいになりたくてなったんじゃないわよ！」

りこが叫ぶ言葉は我を打ちのめす。
世界最強の我の身体が、恐怖に凍りつく。

「もう帰りたい！　こんな世界はもう、居たくない！　家に帰してよ！」
「つがいなんて、やめる！」

『わ……我を捨てないでくれ！』

我はりこにしがみついた。
このまま離れたら、離したらりこを失うと思った。
【両腕】をりこの背に回し、我の【胸】にりこを閉じ込める。
隙間無く身体を合わせ、逃すまいと縋りつく。

『捨てないでくれ』

背に回した【指】に、りこの髪がさらりと触れる。

『捨てないでくれ……』

我の【髪】の色とは対照的な漆黒の髪。
ずっと触ってみたいと思っていた。
体温の無い我の身体と違い、温かなりこの肌。
ずっと。抱きしめたいと思っていた。

『りこ』

知られたくなかった。
傷つけたくなかった。
泣かせたくなかったのに。

『りこ。我が悪かっ……ぐあっ！』

下半身に衝撃がはしった。

「ぎゃー！　変態！　いやあぁ～！」

りこの蹴りをくらった我は痛みよりもショックで、りこの身体を離してしまった。

「ひぃ！　まっぱ！　真っ裸！　触んないで、あっちいって！　変質者！」

りこは駆け出し、なにやら叫びながら去っていった。
我は呆然とその姿を見送ることしか出来なかった。

本気で蹴ったぞ、今の！

りこが我を本気で蹴ったぞ！
そんなに嫌われてしまったのか！？

『旦那……使えないどころかここまでいくと憐れというか』
『うるさい！　我はそれどころではない！』

我は顔にかかった髪を右手で払いながら言った。
む？
髪？
右手……5本の指がついてるぞ？
『よっぽど慌ててたんでしょうねぇ』
ダルフェがあきれたように言った。
『人型に戻ってますよ』
『！』
我はりこを掴まえたくて……。
『いきなり変化したもんだから、もちろん素っ裸です。突然のことに姫さんはびっくりして正気に返ったようだし、ま、良かったんじゃないですか？』
人型。
まずい。
非常にまずいぞ！
『姫さんはなんか言いながら行っちゃいましたねぇ。異界語だったから分かりませんが推測するに』
この姿は知られたく無かったのに！
『まぁ、変質者とか変態とか言ってたんじゃないですか？　なんたって素っ裸ですし。あの様子じゃ、あんたの顔すら見てなさそうでしたね』

変質者。
変態。

あぁ、また眼から内臓が溶け出しそうだ。

第１２話

変質者だ！

私は自分が普段使っている部屋までダッシュした。
こんなに思いっきり走ったのは、中学の運動会以来だし！
高校の体育祭はやる気が無く、だらだら走って担任が激怒したっけ。

と、とにかく部屋まで逃げよう！

私は白い石で出来た廊下を抜け、離宮の最奥にある部屋まで急いだ。
重厚な扉は見た目とは違い、私の力で難なく開く。
この扉は術式が施してあり、ハクちゃんと私が許可した人しか開けられない。
なので変質者は絶対に入ってはこられない。
『あら、トリィ様……どうなさったの！　お泣きになったのですか？』
部屋に居たカイユさんが私の顔を見るなり青ざめた。
『なんてこと！　何があったんです？』
カイユさんは私の肩を優しく撫でながらソファーへ座らせてくれた。
『大変ですカイユ！　は……裸の大男、出た！　いきなり出た！　怪しい。危ない、です！』
『裸の……変質者ですか？　この離宮に進入できる程の【力】のある者が……。ダルフェとヴェルヴァイド様は？　その変質者を処理中ですか？』
繰り返された単語は初めて聞いたものだったけど、絶対に‘変質

者、って単語に違いない！
『へ……へんしつしゃ、とハクちゃん達？』
カイユさんは衣類を詰めていた大きな皮製の鞄を軽々と持ち上げ窓際に移動させつつ、窓から外の様子を確認して言った。
『外の気配は二つ。夫とヴェルヴァイド様ですね。侵入者の処理は終わったのでしょう。あの二人なら全世界と戦争したって勝ちますものね。心配は無用ですわ。あ、帝都への道中に必要な最低限のものは荷造りしましたの！　途中で購入も可能ですし、これくらいで……』

帝都。

そうだった！
私は帝都から青の竜帝が来るってきいて……いろいろ考えて悲しくなって。
それで……。

それで？

ハクちゃんが物騒な事を言ったから。
頭にきて、悲しくて、辛くて……取り乱したと思う。

で。

気づいたら変態に捕まってて、びっくりして逃げた。

逃げてきた。
変質者から。

ハクちゃんを置いて。

『わ、私は戻るです庭！』
ハクちゃんは強い。
分かってるけど。
あの子はあんなに小さい竜なんだもの。
まだまだ幼い子（歳は知らないけど）を、変態と置いてきちゃった！
教育上、まずいでしょ！
さっきは喧嘩というか揉めてたんだけど、置いて逃げるなんて……。
私は扉に駆け寄り、開けようと取っ手を掴んだ。
『うおっつ？』
同時に廊下側から扉が引かれたので前につんのめってしまった。
『おっと。危ないねぇ。姫さんが転んで怪我でもしたら俺は旦那に八つ裂きにされちまう』
私を受け止めてくれたはダルフェさんだった。
『ダ、ダルフェ！　へ、変質者は？』
『やっぱりそうきましたか。ろくでもない単語、覚えちゃいましたねぇ』
ダルフェさんは私を床に立たせ、ざっと怪我がないか確認してからカイユさんに声をかけた。
『休んでなかったの？　あぁ、荷造りしてたのかぁ。俺のハニーは働き者だからね』
ダルフェさんはカイユさんの手を取り、いつものようにキスをしようとして……。
『この役立たずが！』
一瞬で床に倒され、カイユさんに背中を踏まれていた。

ひえぇぇ～！
早業すぎます、カイユさん！
『ハ、ハニー……ぐがぁ！』
鈍い音がしましたよぉ～！
ちょっと、まずいんじゃ。

『お前がついていながら、トリィ様がお泣きになる事態が起こるとは！　この無能めっ』
『ハニー、泣かしたのは旦那で……ごふっつ』
『言い訳はするな！　トリィ様に死んでお詫びしろ！』

カイユさんの空色の眼がきらりと光る。
本気？
カイユさん！？
ぎゃー！
やめてやめて～！
『カイユ！　だめ、やめて！　怖いよ、やめてぇ』
私は必死でカイユさんにしがみついて、とめた。
半泣きの私を見て、カイユさんが慌てて笑顔を作る。
『ほほ、冗談ですわ！　こんなんでもお腹の子の父親ですもの。殺したりしませんわ、まだ』

まだ？
まだ……って何！？

『気にすんな、姫さん。ハニーの愛情表現は激しいんだよ。刺激的だろぉ？　最高だなぁ』
口の隅からもれた血を、慣れた仕草で拭きながら言う彼の笑顔は幸せそうだった。

『なぁ、ハニー。奥の衣装室の鍵を開けてもらえるかい？』
『奥の？　あそこは……まさか、裸の変質者って』

庭に行くことをダルフェさんに止められた私は、洗面所で顔を洗っていた。
カイユさん達の声は聞こえてくるけど、内容までは分からなかった。
冷たい水を顔に叩き付けるようにして、乱暴に洗った。
都内の百貨店で化粧品を売っていた時、お客様にはやってはいけない洗顔方法の１つだと言っておきながら……。
肌に悪くても、心には効いた。
冷たい水はしおしお・ぐるぐる・どろどろになっていた思考回路をもどしてくれた。

私はハクちゃんの側にいたら、駄目だ。

でも、元の世界にもどることが現時点では不可能。
ダルド殿下にお世話になるしか生活の術が無い今の私では、ハクちゃんから隠れるために王宮の敷地から出ることも難しい。
ここを飛び出してこの世界で……知らないことばかりの場所で、言葉も知識も無い状態でうろうろ彷徨うなんて自殺行為だ。

２６にもなると冒険より平穏。
挑戦より安定なのよ。

ハクちゃんと話し合って‘つがい’を解消させてもらおう。

あぁ、気が重いな～。
前に‘つがい’になれないって言ったら泣いちゃった（内臓が溶けたらしい）し、言動もやばかった。
穏便に解決するには、どうしたらいいの？

本音を言えば。
ハクちゃんといたい。

私の事を……私だけを大事にしてくれる人（ハクちゃんは竜だけど）なんてこの先、絶対にいないのに。
ハクちゃんは私がからんだ事柄になると、途端に凶暴（？）になるから……最初の頃はかわいい焼きもち程度にしか考えてなかった。
でも。
それが最近は特にエスカレートしてきていて、離宮の敷地から私が出ることすら許してくれなかった。
ダルド殿下が来ても門前払いだし、彼がセシーさんに預けた私宛の手紙も読む前に燃やされた。
どうしてと怒った私に、ハクちゃんは言った。

＝我以外の雄がりこの眼に映るなど……手紙など寄越しおって！　りこに懸想しておるに違いない！　りこだってあの王子はイケメンだと言った。イケメンは顔が好ましいという意味なんだろう？　我は＜かわゆい顔＞で王子は＜イケメン＞。我が不利ではないか！　手紙とて文字を書いたことの無い我への嫌味か？　そうなのか？

頭を抱えて地面をごろごろ転がる姿を見ていたら……なんか、かわいそうになってきて。
ダルド殿下は確かにイケメン。
別に私のタイプじゃないけど、世間一般的視点で見たらもてそう

だ。
背も高く（ダルフェさんは高すぎ）顔良し、家柄良し、多分性格良し。
経済力もある。
人間の女性なら惹かれて当然の要素が、てんこ盛り。
ちび竜のハクちゃんがかなう相手じゃない（条件的にはね）。
私が人間の女性だからハクちゃんはコンプレックスを感じ、自分に自信が無くなり過剰に男の人に反応してるのかもって思ったら……。

おちびの竜で、経済力ゼロで、はっきりいって性格に難有りのハクちゃん。

人間の私をつがい……伴侶だと、妻だと宣言した変でかわいい竜。
好きだとか愛してるとか言わないけど、私のことを想ってくれてるのは充分に伝わってきてた。
恋愛関係とは違っても、私だって。
私だって！

『姫さん、話がある。……だいじょうぶか？』
『はい、です。平気』
手招きされ、洗面所から出て彼の側に行くとダルフェさんは整った顔に困ったような……戸惑うような表情を浮かべた。
『異界人はこちらの人間とは成長速度が違うのかね？　姫さんは26にはとても見えないなぁ。二十歳前後って感じだ』
日本人は外国人から見ると実年齢より若く見えるらしいけど、異世界でもそうなんだ……。
『私の人種、小柄で小さい。そう見られること多いです』
『俺は見た目だけじゃなく、内面もって言いたかったんだが』
あぁ、そうか。

そう意味か……。
精神的に大人として成長してない。
言われても仕方ないよね。
今まで衣食住に困ったり、大きな困難に立ち向かった事も無い。
日本で生まれて、のほほ～んと育ってきた。
仕事だって、結婚するまでの腰掛でいいやって決めた。
やりたくない事は避け、楽なほうばかりに流されて。

『だが、旦那はもっと餓鬼なんだよ』

『だんな。ハクちゃん？　あの子、身体が小さい。竜の子供ですね？』
私の言葉にダルフェさんは深いため息を吐いてから、言った。
『旦那は世界の始まりから存在していると【創世神話】でも語られている。とんでもない爺さんというか爺さんを超えてるっつうか』

へっ？

『旦那の事で姫さんには言わなきゃ……知ってもらわなきゃならない事は山ほどあるんだが。取りあえず緊急事項だけな』

ちょっ、ちょっと待ってよ！　ハクちゃんって……！

『ダ、ダルフェ！　あっ、あの』
ちょん。
ダルフェさんの長い指が私の唇を軽くつついた。
うおっ？　なにするんですか！
『まぁ、俺の話を聞きなって。質疑応答の時間は後な。時間が無いんだ』
『うっぅ、はい』

笑顔だけど、眼が怖い。
言うことを聞いたほうがいい気がする……。
『事実を簡潔に言う』
『はい』

『さっきの素っ裸の変質者は、旦那だ』

『……え？』

ハクちゃん。
ハクちゃん？

『竜族は人型にもなる。と、いうか人間と共生している現代社会では人型でいるのが普通だ。旦那みたいに竜体で過ごす者はほとんどいないな』

な……！　なんですと！

『ハニーは旦那に衣類を持って行った。……鍵のかかっていた奥の衣装室には、旦那の為に用意された服がわんさかある。先々代のセイフォン王は旦那に貢ぐのが生きがいみたいな女王だったしな。豪華絢爛、すごいもんだ。よその国だってそうだぜ？　各国は旦那の為に【竜宮】を建て、宝石・衣類・庭園……なんだって揃えて滞在を待っている。これは＜監視者＞を恐れているからだけじゃない。人間の女……男も旦那の寵を望む者が多い』

女王？　み……貢ぐ？　寵？

『あの、単語、よく理解が。知らない単語いっぱいです』
『ま、今はざっとでいいんで。つまりだ』

ざっとじゃ困ります！
そんな適当な！
『旦那は人型も持っている。俺みたいにな』
人型……。
ダルフェさんみたいな、大人の男の人、ってこと？
『つまり、姫さんの、夫、になれるってことだ』
夫？
『お……おっと？　夫！』
『だからもう、愛玩動物扱いはやめてくれ。旦那が可哀想だ』
愛玩動物扱い。
『わ、私。でもっ』
知らなかった。
ハクちゃんが人型になるなんて！
だって、だって。
『旦那はそれでもいいと言った』
え？
『姫さんが望むなら、愛玩動物でいいと。側に置いてもらえるならこのままでいいと』
ハクちゃんが、そんなこと……。
私は。
私は？
私は！

『旦那は姫さんの為なら、自分を貶める事も厭わない。あの人をどうしたいんだ、どうなりたいんだ？　異界の人間よ』

ダルフェさんの顔から笑みが消えた。
緑の眼が冷たい色に変わる。

『わ……私』

本心を。
偽りのない心を！

『私、ハクちゃんと』

逃げるな！
ここで逃げたら、本当に欲しいものを失う！

『ハクちゃんといたい』

私がそばにいるとハクちゃんが駄目になっちゃうのに。
分かってるけど、でも！

『そばにいたいの』

この世界を壊しちゃうかもなのに！

『ハクちゃんが、欲しい』

私は両手で顔を覆った。
だって……醜いから。

世界のことより自分の望みを選んだ私は汚い人間だよね？
こんな私を必要としてくれるんだよね、ハクちゃんは。

『了解。じゃ、行きましょうか』
ダルフェさんが私の頭をぽんぽんっと軽くはたいた。
『旦那、きっと泣いてますよ？　歳だけいやんなるほどとったのに、中身はお子様ですからねぇ。あの方を‘大人’にするのは姫さんなんですから』
大人……私もハクちゃんといたら‘大人’になれる気がする。
二人でなら頑張れるよね。
うん。　きっと。
この世界に落とされた……来た意味はあるはずだよね。

『ま、姫さんの身体が壊れないことを祈ってますがね』

聞き逃したことがけっこう重要だったってこと、あるんですよね。

ーあると思います！

第13話

こんもりした布の山。
『申し訳ございません、トリィ様。お声をかけても反応なさらず、その……』
カイユさんが私に困惑した顔を向けて言った。
『取りあえず、外套だけかけさせていただきましたが。その』
『つまりマッパで四つんばいってことだろ、外套の下の旦那は』
マッパで四つんばい。
実も蓋も無いっていうか、容赦ないですねダルフェさん。
頭から四肢の先まで外套に隠れて顔も全く見えない。
でも髪の毛らしきものが地面に少し流れ出ている。
うわ～白いよ！
白髪？
良く見ると白髪とは違って艶やかで光沢があり、まるで真珠で出来てるみたい。
真珠。
ハクちゃんの鱗と同じ色。
軽くウェーブがかかった髪は推測するに、かなり長いのでは？
外套から出るくらいだし。
「ハ、ハクちゃんなの？」
布の山が微かに動く。
やっぱり、そうなんだ。

どうしよう？
なんて言ったら……。
私、ひどいこと言ったよね。
「その。あのっ！　私はハクちゃんと……ハクちゃんが」
『言葉がわからぬ。人型は念話能力が使えん』
ひょぇ！
喋ったよ、ハクちゃんが！
声……初めて聞いたハクちゃんの声。
深くて重くて、響く声だ。
ん？
言葉が分からないって言いましたか？
『言葉だけではない。我はりこの事が何も分からぬ』
ハクちゃん？
『りこを喜ばせたいのに、守りたいのに。幸せにしたいのに』
ハクちゃん……。
『我の【力】はりこを泣かせるのか？　我の存在がりこの幸せを奪うのか？』
ハクちゃん、ごめん。
『我はりこを苦しめ……不幸にするのか』

『ち、違う！　ハクちゃん、そうじゃない！』
私はハクちゃんを両腕で強く抱きしめた。
念話が通じないなら身体で表せばいい！
放したくない、離れたくないって！
『ごめ、なさい。そば、いたいの。‘つがい‘やめない』
ごめんなさい。
ハクちゃん。
ごめんなさい。
この世界の人達。
皆が不幸になるかもしれない。
でも。
『ハクちゃんは私の‘つがい‘。伴侶。大切な、たった一人の……』
『蹴ったではないか』
へっ……？
『りこは本気で蹴った。それほど我が疎ましくなったのだろう？』
蹴った？
そういえば、そんな気も……。
『人型の我は‘かわゆく‘ない。りこの好む鱗も無い』
は？
『容姿とてイケメン王子とは全く似ていない。りこに好意を持たせる要素が皆無だ』
容姿って顔？
私の好みはイケメンじゃなくて、釣り馬鹿日誌のハマちゃんです

よ。

どっちかというと整った顔は苦手。

『ね、私はハクちゃんがイケメンじゃ無くたってかまわないよ？鱗だって……』

人型で鱗があったら半魚人だよ。

逆に怖いしさ。

しかし……うじうじだね。

でかい男が、うじうじと！

さすがにイラッときちゃいますよ。

『しかし。しかし、りこが……』

がぁー！

まったく、この子（？）は！

「まだ言うか！　私が悪かったって言ってんでしょうが！　このいじけ虫めっ！」

思わず日本語で言ってしまったけど。

「顔なんか、どうでもいい！　んなに言うなら見せてみろってのよ！」

私は頭部と思われる場所を探り当て、乱暴に外套をずらした。

『りっ、りこ！　やめっ』

「ふぉぇ？……ひっ！」

なに、これ？

なんなの、これ！

あまりにびっくりした私は地面に座りこんでしまった。

大急ぎで視線をハクちゃんから逸らす。

し……心臓に悪いよ。

これは。

直視出来ない。

無理。
無理です！
『おい。姫さん？　……やっぱり異界人から見ても、旦那の顔って凄いのか？』
手、布から離れない。
指が固まって、動かせない。
『ダ、ダルフェ！　わた、わた、わたし！　は、はなせなっ。ゆ、指』
ダルフェさん、助けて。
ヘルプ・ミーです！
『‘傾国の美貌’は異界人にも通用するようですねぇ。良かったですね、旦那』
ダルフェさんの馬鹿！
前もって教えてくれたら心の準備が……。
私は精一杯の恨みがましい視線でダルフェさんを睨んだ。
『そんな眼で見なさんな。異界人の美醜基準が俺には分からなかったからなぁ』
にやにやしながら言う。
確信犯だ、こいつ！
絶対、おもしろがってるよ！
『り、りこ？　怒ってるのか？　やはり小竜の我が良いのだな』
あ。
あまりの衝撃に忘れてた。
いじけモード真っ最中だったんだ。
でも。
直視できない、これ‘’は……。
『見るのも嫌か。人間は皆、我のこの姿を眼にすると顔を伏せるな』
そりゃ～、まぁ。
そうだろうね。

この顔は駄目だよ。
はっきりいって怖い。

すごく怖い。

無表情なのだ。
あるはずのものが無い。

いじけたことばかり言ってるのに眉1つ動かない。
精巧に作られた彫像のように。
真珠のような長い髪に縁取られた、白皙の美貌。
切れ長の眼は人間にはありえない黄金で。
完璧すぎて、冷たい印象しかない。

冷酷な美。

人間らしさやあたたかみの全く無い……。
これ、が……生きて動く?

『私……私は』
ハクちゃんに視線を戻した。
かなり頑張って。
気を抜くと視線を脇へ逃がしてしまう。
『ダルフェは我の容姿が人間に好かれるものだと言う。だが、我はそうは思えない。昔、我のこの姿を‘化け物’と罵った者もいる。‘悪魔’と叫んだ者もいる』

化け物。
悪魔。

『りこの前では二度と人型にならぬと誓うから。一度だけ』

外套の間から白く長い腕現れ、私にむかって伸ばされた。

『もう一度だけ、抱きしめさせてくれ。小竜の我では不可能だから』

ハクちゃん。

ハクちゃん！

私……！

『駄目に決まってんじゃないですか。姫さんを壊す気ですか？』

ダルフェさんが私をひょいっと持ち上げ、カイユさんにパスした。

カイユさんは軽々とお姫様抱っこ（うお！　初体験です）して微笑んだ。

『危ないところでしたわ。今回はあの無能夫も上出来です』

え？

なに？

今、人生初のラブシーンぽかったんですが！

『ダルフェ！　貴様……』

ハクちゃんがゆらりと立ち上がった。

外套を羽織ったハクちゃんはかなりの長身で、ダルフェさんより大きい。

軽く２ｍを越えてるよ！

なんだってこっちの人はこうなの。

ますます私が小さいのが、目立っちゃう！

１５６ｃｍはね、ヒールを履けば高すぎず低すぎずの女としてはなかなか使える身長なんだぞ！

日本人男性のコンプレックスを刺激しない、ナイスサイズなのに！
『旦那、自分の握力制御がド下手くそでしょ？　ラパンの実みたいに姫さんを潰したらどうすんですか。抱きしめたりしたら壊れて死んじまう』

なっ。

『先ほどは壊さなかったぞ。きっと上手くでき……』
『黙れボケ。ビギナーズラックじゃ！』

カイユさんが私を抱っこしたまましみじみ言った。
『本当に良かった。あのままヴェルヴァイド様に抱きしめられてトリィ様にもしものことがあったら……世界が終わるところでしたわ。貴女様が死んだりしたらあの方は狂ってしまう。世界を滅ぼしてしまわれるでしょう』

死ねない。

私、死ねない！

『さ、トリィ様。いろんな事があってお疲れでしょう？　カイユとお昼寝いたしましょうね。竜帝陛下が到着するまで2時間程ありますから』
『はい。カイユ』
幼児かいって思いつつも、うなずいてしまった。

だって、疲れたよ。
身体も心もへろへろです。

『りこ！』

りこはカイユに抱かれたまま去っていった。
おのれ、カイユ。
我だってりこをあのように運んでみたい！

『ハニーを睨むのは止めてくださいよ。さっさと服着て俺らも休憩しましょう。馬鹿馬鹿しい痴話喧嘩につきあわされて俺の硝子の心臓が砕けそうですよ、まったく』

なにが硝子だ。
だいたいお前が……。

『人型の旦那は念話が使えんのでしょう？　言いたいことがあるなら口を使ってくださいよ。そんな凶悪な眼で睨まんで喋って下さい』

『……』

『だんまりですか。姫さんにはぺらぺら喋ってたじゃないですか。やればできるんでしょうが』

我は術式を使い衣類を身につけ、りこの気配を探った。
ふむ。寝室……ではないな。
あぁ、あそこか。
デルの大木。
りこはその木陰が気に入りのようだったな。

『姫さんがいないと旦那は以前のままですね。綺麗な面だが死人みてぇに無表情。他人に全く関心のない【美しき氷の帝王】。情など持たない【冷酷なる魔王】。人間共はうまいこと言いますよねぇ』

りこ。
りこ。
一度だけでいい。
『見た目は以前のままですが旦那が‘変わった’のは俺には分かってます』
りこ。
りこ。
りこ。
もう一度。
『だから泣かんで下さいよ』
りこに触れたい。
『俺が必ず旦那を姫さんの‘夫’にしてみせます。旦那が赤の竜帝の大陸から俺を連れ出してくれたから‘つがい’に出会えた。……俺に幸せを与えてくれたのは、ヴェルヴァイド様です』
りこ。
我の愛しい女。
『貴方に永遠の忠誠を。竜帝陛下を裏切ることになろうとも』
りこ。
我を拒むな。

りこ。
お前に捨てられたら、我は狂うだろう。
りこ。
狂った我はお前を喰らってしまうだろう。
りこ。
我を離すな。
生き延びるために。

第１４話

『全軍、戦闘態勢に入れ！　これより青の竜帝を迎え撃つ！』
セシーの言葉に室内が凍りつく。
私が異論を唱える前に、リシサス老がたしなめた。
『冗談はよしなされ。ほれ、王がちびりそうだぞ？』
『だって。言ってみたかったんですもの』
真っ青な顔で口元を押さえる父の背をゼイデがさすりながら叫んだ。
『このクソばばあ！　王をショック死させる気か！』

平和だなと思う。
この平和が続くように皇太子として、何が出来るのだろうか？

セシーの報告で青の竜帝様がセイフォンにもうすぐ到着なされることがわかり、対応を協議するために集まったはずだった。
『話し合ったって無駄でしょう。結論は出ています』
イラス・ドウ・ゲドリルは帳簿から眼を話さず続けて言った。
『竜帝様が異界の娘を帝都に連れて行くと言うなら、我々には拒むことは出来ない。ま、他国に取られるよりもずっとマシです。セシー殿だって分かってるんでしょう？』
『分かっているわ。……殿下』
ゼイデに担がれて医療室に向かった父を見送っていた私に、セシーが恨めしげな顔を向けた。
はっきりいって少々、怖い。
この女傑に私は頭が上がらない。
去年亡くなった母上の従姉妹である彼女。
母にとてもよく似ている……容姿だけだが。
母はこんなに苛烈な性格ではなかった。

『殿下が竜帝様にトリィ様のことを相談されたから、カイユ殿達がトリィ様付きになってしまったんですわよ？　彼女の周りは‘親切で優しいセイフォン人’で固めたかったのに。お恨みいたしますわ』

『……セシー。私は彼女には誠実でありたい。セイフォンの為に利用するつもりは無い。それにそのようなことは＜監視者＞様が許さないだろう？』

‘つがい’とは……伴侶だときいた。

我々王族では婚姻も政治の一部だが、竜族にとっての伴侶は神聖で絶対なものらしいから利用される事を知ったら逆鱗に触れてしまうのでは？

セシーは耳飾りを右手でいじりながら言った。

『あの方には頭の中が丸見えですのよ？　何の報復も無いということは黙認なさったからですわ！　もっとも……それももう終わりのようですが』

耳飾を引きちぎるように外し、セシーは叫んだ。

『ミー・メイ！　急いで！……来るわっ！』

私の前にミー・メイが現れ、術式を展開した。

足元から青白い光が溢れ、円状に広がり……霧散した。

『閣下！　駄目です、結界がっ』

『……っち！』

耳飾りが変化した長剣を構えたセシーが会議室の中央に走り、何も無い空間に剣を振り上げた。

私とリシサス老。そしてイラスはただ呆然と立ち尽くし……。

『意外と早く手合わせすることになったなぁ、閣下』

赤い髪の竜族。

青の竜帝の使者として一ヶ月前に会った。

確かカイユ殿……竜騎士の夫だと紹介された人物だ。

セシーの大剣を細身の優美な剣で軽々と受け、弾いた。
金属特有の甲高く澄んだ音が響く。
激しい剣技のやり取りが繰り広げられているというのに、私の眼はある一点から離れない。
離すことが出来ない。

白。
真珠の輝き。
氷の冷たさ。

金。
黄金の光り。
灼熱の炎。

『＜白金の悪魔＞……‘ヴェルヴァイド‘？』
リシサス老のかすれた声。

しろがね　の　あくま

私でも見上げてしまう長身。
金糸の刺繍が施された漆黒の長衣。
純白の長い髪は緩やかに波うち、流れ……。
身震いするほどの白皙の美貌は微動だにせず。
金の瞳に移るのは、血の気の引いた私の顔。

『そ、そんな馬鹿な！　大昔に＜監視者＞様に＜処分＞された伝説の悪魔？』
イラスの震えた声。
一‘ヴェルヴァイド‘ってのは【古の白】って意味だ。＜監視者＞の通り名だが、お前は使うな。

＜白金の悪魔＞は御伽噺だ。
名前は偶然の一致に過ぎないはずだ。
＜悪魔＞は美麗な姿で人を惑わせ、堕とす。
＜監視者＞は世界で唯一、白、を持つ竜。
全く違う存在なのだからと気に留めた事も無かった。

『旦那！　いきなり術式で連れてこられて……閣下が切りかかってきたから相手してますけどね。俺的には全く状況が分からんのですが』

セシーは無事か？　まさか！

赤い髪の……確かダルフェ殿だ。

ダルフェ殿はセシーの大剣を細い剣で受け止め、左手を大剣の刃に垂直に振り下ろした。

『くっ！』

音を立てて折れた刃が床に落ちた。

セシーは剣を捨て、ダルフェ殿の頭部に回し蹴りを……。

『きゃぁ！　閣下！』

ミー・メイが悲鳴をあげる。

ダルフェ殿はセシーの足首を掴み、そのまま壁に向かって放り投げた。

セシーは壁に激突……せず、壁を足場にし着地した。

『ふふ。お優しいのね、ダルフェ殿は』

ほつれた髪をかきあげて妖艶な笑みを浮かべたセシーにダルフェ殿は苦笑しながら答えた。

『閣下は姫さんの〝先生〟ですからねぇ。あんたを殺したら姫さんに嫌われちまう。俺はあのおちびちゃんには嫌われたくないんですよね』

『殺せ』

深く艶のある声が室内をめぐり、落ちた。

『それも。あれも。これも……不要だ』

『旦那？』

＜白金の悪魔＞はまったく表情の無い顔で、感情の感じられない声で言った。

『セイフォンはいらん』

＜冷酷なる魔王＞が告げた言葉に私は……。

『んっ……。あれ？』

いろいろあって疲れたせいか、ちょっと寝ちゃった？

カイユさんが用意してくれた敷布に横になったら、すぐにとろ～んって……。

『お目覚めですか？　トリィ様、ご気分はいかがです？』

『あ、はい。平気、です』

少し寝たら頭もすっきりした感じ。

手渡されたグラスに口をつけると、爽やかな柑橘系の香りがした。

柑橘系の香り。

ダルド殿下のことが頭に浮かんだ。

借りたマントがハクちゃんのせいで瓦礫に埋まって、使い物にならなくなった事を謝る私に彼の方が慌ててたっけ。

怪我が無くて良かったって、微笑んでくれた。

女の子が憧れる理想の王子様。

異世界トリップした女の子って８０％は王子様とハッピーエンドなパターンだよね、普通。

ま、私も女子高生の時なら彼に惹かれたかも。
２６歳の私は王族なんてややこしそうな存在と恋愛なんかまっぴらだと思ってしまう。
王族の豪華な暮らしは国民に支えられている。
王族は国の利益・安全を追求する義務があるはずだ。
命さえ、国のものだろう。
個人でいることなど許されない。
私はそう考える。
そんな重責を負った王族と結ばれるなんて若い情熱がないと駄目だよね、うん。

ん？

ハクちゃんも重いのかな？
国どころか世界的問題？
しかも私がしっかりしないと、問題児、は暴走しちゃうし。
竜で人型（しかも全くプラス印象の無い超絶美形）ありなんて。
さすが異世界！　……そう思わないとやっていけないよ。

『トリィ様、御髪を直しましょう。さ、竜帝陛下が到着なされる前に化粧直しも……』
そうでした！
お客様……竜帝が来るんだった。
うはぁ～、どきどきしちゃう！
「ハクちゃん！　青の竜帝ってどんな竜な……ハクちゃん？」

ハクちゃん？
あれ？

『ハクちゃん、どこ？　カイユ？』

いつだって側にいたのに。
目覚めた時はいつも私の顔を覗き込むようにして……。
私が起きると金の眼を細めて‘りこ。おはよう’って。

教えてあげたの。

お願いしたの。

眼が覚めて独りは怖いから。

だってここは私の世界じゃないもの。
怖いんだもの。
不安なんだもの。
‘おはよう’って言って。

目覚めた時に……独りにしないで。

『カイユ……ハクちゃん。ハクちゃん！　どこ？』
『トリィ様、ヴェルヴァイド様はすぐ戻ると言って夫と……トリィ様！』
私はグラスを投げ捨て、走り出した。

ハクちゃん。

ハクちゃんがいない？
嘘。
そんなはずない。
部屋にいるよね？
ちょっと離れただけだよね？

「ハクちゃん！」
乱暴に扉を開き、室内を見回した。
いない。
寝室かな？
「……ハクちゃん！」
天蓋付きの大きなベット。
駆け寄って布団を剥がし、枕を床に放り投げた。
「ハクちゃん？」
初めてこのベットを見たときはすごく驚いた。
なんかあの有名姉妹が使ってそうで……テレビで見たのか、前にもこんな事を考えたような気がしたっけ。
あぁ、どうしてなの。

どうして、いないの？

「嘘つき」

『ト……トリィ様、どうなされまし……トリィ様！』

ぐるぐる　ぐるぐる　まわってる
世界が　まわって
ゆらゆら　ながされ　おちていく

『トリィ様！　トリィ様！』

トリィ
なにそれ
ちがう　ちがうよ
とりい　だよ
とりい　りこ　だよ

「私は鳥居りこだよ」

なまえ　ほんとの　なまえ
よんで　わたしの　なまえ

「ひとりにしないで」

『トリィ様！』

全身の力が抜けてベッドに倒れこんでしまった私に、カイユさんが何か言ってる。
分からない。
苦しいの。
息が……できないよ。
苦しいの。
怖いの。
助けて。
ハクちゃん。

私を独りにしないで。

『殺せって……んな、無茶な』
俺は剣を鞘に収め、旦那の顔を見た。
ありゃ～。
まずいな。本気か？

ま、旦那に冗談を言う余裕なんか無いか。
姫さんが目覚める前に戻りたいんだろうし。
まどろむ程度の浅い眠りでは、時間は無いに等しいからなぁ。
『セイフォンを消す。無かったことにする』
旦那は眼だけ動かし‘魔女’を見下ろした。
『そんなこと……トリィ様が許しませんわ！　彼女に嫌われましてよ』
精一杯の強がりにしたって、すごいなぁ閣下。
‘この’旦那と渡り合おうとする根性は賞賛に値する。
『すべて消す。りこを知る者は。……りこに真実を告げる者など残さない』
旦那が動いた。
一瞬でダルド王子のもとに移動し、片手で首を掴み軽々と持ち上げる。
『ぐっ！』
『ちょっ。旦那、王子が死んじまいます』
王子の首は折れてはいない……旦那はもともと力加減の制御ができない人じゃない。
姫さんに関しては特例中の特例だ。
恋焦がれるあまり……ってやつだな、うん。
『殿下！』
術士の少女が悲鳴をあげる。だが、腰を抜かし床から立ち上がることすらできない。
老人と男……大臣だったな。
この二人は昏睡状態だ。
＜悪魔＞なんて言ったからなぁ。
旦那もカチンときて意識だけ落としたんだな。殺しちゃいない。
なんでだ？

殺せって言ったよな？
自分でできるだろ、簡単に。
『まさか……そのために俺を連れてきたんですか！』
旦那は王子から眼を放さず言った。
『我はりこに怒られたくないし、嫌われたくないからな』
『うがぁー！　汚いですよ！　俺に罪をなすりつけようって？　この人でなしが！』
なんという自己保身！　自己中にもほどがある！
『お断り……』
『我に忠誠を誓っていたのは誰だ？』
へ？
聞いてたんですか？　無反応だったですよね？
『我とりこの幸せの為に喜んで捨て駒になると宣言したではないか』
してない。
『りこの存在を知る者は全て消せ。他国の者も』
＜白金の悪魔＞の言葉に王子が暴れだした。
そりゃ、そうだろう。
虐殺。
そんな事を聞かされたらなぁ。
『ん……ぐっつ』
旦那に咽喉を掴まれているから言いたいことも言えん状態だが。
『ヴェルヴァイド様！　おやめくださ……！』

‘魔女’が床に崩れ落ちた。
旦那が意識を‘落とし’たか。
『我は以前に言ったはずだ。楽には殺さぬと』
俺には旦那を止められない。
それができるのは‘つがい’である姫さんだけだ。
連れて……間に合わない！
『四肢をもぎ、目鼻を抉れば我の気分も多少は晴れるやもしれんな』
『ふざけんな！　この色ボケじじい！』
青い閃光。
ダルド王子の身体が、石の床に落ちる。
『ぐはっ……げほげほ！』
激しく咳き込む王子は咽喉に手を当てようとして、硬直した。
無理も無い。
旦那の腕が、首にくっついたままだからな。
『陛下……ぎりぎりでしたね』
俺は固まってしまった王子から、旦那の腕を外してやった。
肘から切断された旦那の腕からは血の一滴すら、流れていない。
精巧に作られた人形の腕のようだった。
『で。これどうします？　新しいの再生すんなら捨てときますが』
『んなもん、ほっとけ！　おい！　ヴェル、貴様よくも俺様をこけに……ぐわ！』
小さな青い竜は床にめり込んだ身体をさすりながら、短い2本の足で立ち上がり……。
『青の竜帝である俺様になんてことしやがる！　このじじ……ぎゃっ！』

旦那は＜青の竜帝＞を長い足で踏みつけながら俺に残った手を差し出し、言った。

『それはりこに触れた腕だ。変えはきかぬ。使うからよこせ』

俺が【それ】を投げると旦那は残った腕で受け取り、切断面を眺めた。

『ふむ。綺麗だな。＜青＞よ、褒めてやろう』

白い肌とは対照的な赤い舌で切断面を舐め、肘をもとの場所にくっつけた旦那は感覚を試すかのように指を動かしながら青い竜を見下ろした。

『お前が帝都から出向くなどあまりないことだ。セイフォンで問題でも？』

旦那。

天然なのは知ってますが。

しかし、しか～し！

『……問題はお前に決まってるわ！』

足元で叫ぶ陛下に俺は同情した。

いろんな意味で。

第15話

『我が？』
青の竜帝が帝都から出向くほどのことがあっただろうか？
ふむ。
なるほど。
『念を無視したからか。だが、我はいろいろ忙しかったのだ』
最近は特にな。
文字の練習が佳境に入り、もうすぐ恋文の下書きに突入する！
りこを感激させるような素晴らしいものを完成させるのだ。
書物によると人間は恋文なるもので想いを伝えあうとあった。
我は恋文がどのようなものかは詳しくは知らぬが。
なんとかなるはずだ。
『＜青＞の用件は後できく。少し待て。すぐ終わらせ……』
『終わらせんな！　ダルドに手を出すな。虐殺計画も却下だ、却下！　ってか足をどけろ』
ああ、そうだった。
我は＜青＞を踵で落とし、床に踏みつけて……。
『我の邪魔をしたな？』
踏みつける足に力を加えた。
『ぐぎゃー！　や、やめろこの馬鹿！　おい、ダルフェ！　なんとかしろ！』
『陛下。俺になんとかできるならこんな事態になってないです』

咳き込み続ける王子の背を摩りながらダルフェは我に言った。
『とにかく、一度もどりましょうよ。陛下の来訪に合せてハニーが姫さんを起こすはずですし』
りこが起きる。

りこ。
目覚める時は側に居なくてはならない。
りこはこの世界に‘落とされた’せいで‘不安定’なのだ。
特に眠りから覚めた時が……。
『帰る。りこのもとに』
一‘おはよう’って言ってね。
目覚める瞬間、りこの黒い瞳は絶望の色を滲ませる。

孤独。

『トリィ様！　しっかりなさって！　今、医師を……』
‘世界’を奪われたりこは‘世界’を憎んでいる。
『必要ない』
我は術式で寝室に移動し、寝台に歩み寄った。
『ヴェ、ヴェルヴァイド様』
『出て行け』
『……はっ、はい』
カイユには後で話をしなければならないか。
面倒だが今後のことを考えると必要なことなのかもしれんな。
りこは寝台の上で小刻みに振るえ眼をきつく閉じ、両手で胸をかきむしり……。
『りこ』
我は頬に指を伸ばそうとして……触れる寸前で拳を握り耐えた。
寝台に上がり、触れぬように注意して覆いかぶさる。
我の身体は檻のようにりこを外界から遮断し、我の髪はりこの小さな顔を包むように流れ落ちていく。
『りこ。だいじょうぶだ。ゆっくりでいい……ゆっくりで』
我は竜体の時と同じようにりこの涙を舐め取り、味わう。
味覚を感じることのない我なのに、甘く感じる。

甘味を知らぬ我だが、甘い、と認識する。
不思議な感覚だ。
『りこ。息を……ゆっくりでいい』
涙……体液からの情報に安堵した。
大事には至っていない。
軽い混乱状態だ。
‘壊れた’わけではない。
りこの中の‘竜珠’よ。
我の‘核’よ。
りこの魂を慰めよ。
嘆きの淵よりりこを引き上げよ。
『りこ。眼を開けて我を見ろ』
りこの濡れた目元が揺らぐ。

『りこ。我をその眼に映せ』
涙に溶けた黒い瞳に我を。
我を捕らえ、囲い、奴隷にするがいい。

『りこ。我は全て、りこのものだ』
失った‘世界’の変わりに。
りこには‘全て’を。

「……ハクちゃん？」

『おはよう。りこ』

「おはよう。ハクちゃん」

りこに‘全て’を。

「りこ。おは…よう？」
『あ、日本語！　すごい！』

「おはよう。りこ」
りこが笑ってくれるなら。
＜悪魔＞と呼ばれたとてかまわない。

『カイユ、ありがとう。ベットに運んでくれましたね。重い、ごめんなさい』
髪を梳くカイユにりこが申し訳なさそうに言う。
『いいえ。竜族の私にとってトリィ様の体重では羽毛と大差ありませんよ。さぁ、化粧直しも終わりましたから……』
我に視線を流し頷いて……りこを椅子から立たせ、その細い肩にショールをかけてカイユは退室した。
あれは賢い女だ。
こちらの意図を察しうまく話を合わせ、りこの【思い違い】を肯定して不安を与えぬように振舞うことが出来る。
りこはカイユを見送ると我を見て言った。
『人型のハクちゃん、大きい。私、小さい。カイユとハクちゃんはちょうどの感じ。私……』
我に歩み寄り、見上げて言う。
『私、小さい。美人ちがうよ？　でも、いいの？』
りこが何を言いたいのか、我には分からない。
小さい……背が低いということか。
なるほど。
この身長差ではりこの首が辛そうだ。
りこはセイフォン人よりも小柄で華奢な身体をしている。
黄の竜帝の大陸に住む少数民族が人種的には近いかもしれん。
人間より体躯の大きな竜族と並ぶとまるで子供のように見える。
我は両膝を床に着き、りこと視線を合わせた。

『こうすれば、良いか？』
これで首が辛くないか？
『え、えっと！　そのっ。か……顔、顔が！ちかっ』
顔？
『やはり顔……容姿が嫌か？　黒の竜帝の大陸では顔を変える外科手術が進んでいる。だが再生能力がある竜族には無理があってな。りこが好む容姿に変えるのは難しいのだ。すまない』
『ち、ちがう！　意味、ちがう。えっと、その、触っていい？　顔』
触ってくれるのか？
りこが我に。　触る。
こういう気持ちは……嬉しいという感情だ。
りこに会ってから知った。
『触るがいい』
撫で回し、頬擦りしてくれるとさらに嬉しいのだが。
『……この顔でその口調。似合いすぎ』
何がおかしいのかりこは声をあげて笑った。
我の顔は笑えるほど変なのか？
ま、りこが笑うと我は‘嬉しい’からな。
りこの細い指が我の頬に触れ、ゆっくりと柔らかな手の平の感触が……。
『本物だ。作り物みたいだったから、確かめてみたかった』
黒い瞳が我の眼を覗き込む。
『同じ。同じだね。竜のハクちゃんと同じ』
りこは視線を落とし、我の手を見て眼を細めた。
『手をにぎにぎするのも同じ。ハクちゃんは同じ。……変わったのは私。変わらなきゃいけないんだと思うの』
りこは我の顔から手を離し、両手を我の‘にぎにぎ’している手に添えた。
『竜でも人でもいい』
我の手をりこの小さな手が。

『離さない』
強く握る。
りこの精一杯の力で。
『離せない』
りこは我の胸に顔をつけ、言った。
小さな声だったが、はっきりと。
『りこ』
あぁ。
我は歓喜する。
捕らえられたのは我。
鎖で繋がれ、首輪をつけられ飼われてもいい。
りこ……我は！
我は、りこが欲し……。
『あれ？　ここ切れてる！』
腕を斬られたからな。服も斬れ……。
『こんな高そうな服！　借り物でしょう？　ど、どうしよ！　カ、カイユ～！』
りこはさっさと我から離れ、カイユの名を叫びながら去っていった。

りこ。
服が切れて無かったら、りこと我はダルフェがいう‘いいムード’が進行していたのではないか？　さすがに我だって分かるぞ。
＜青＞のせいだな。
踏んだついでに、止めを刺すべきだった。
そういえば、途中で戻ってきてしまったな。
りこを知る人間を全て＜処理＞すれば、りこを利用しようとする者は居なくなる。
りこの憂いを減らせると思ったのだが。
目障りな王子も消えて一石二鳥の案だと……。

帝都に行くなら王子の援助もいらぬし。
だが今、思うと……少々短絡的行動だったやもしれぬ。
りこと痴話喧嘩（ダルフェ曰く）という初めての事に遭遇し、我も思考能力が鈍ったか？
やりかけ……殺りかけ状態だが。
『ダルフェがどうにかするだろう』
それに我はなかなか良い気分なのでな。
我が思うに……。
愛玩動物から格上げされたのだ、我は！
多分。
『……りこに触る訓練を再開せねば』
ラパンの実はまだ在庫があっただろうか？

第１６話

『死人が出なくて良かったですね～』
しみじみと言うと陛下に殴られた。
『ダルフェ！　てめぇがさっさとヴェルのつがいの娘を帝都に連れてこんからこんなことになったんじゃねえか！』
医務室に大臣達を運び込み、王子を医師に見せ。
腰の抜けた少女を立たせてやり、のびてる〝魔女〟をたたき起こし……。
忙しく動く俺に陛下は容赦ない。
『この無能！　役立たず！』
さすがハニーの主。
罵倒台詞も同じだ。

『青の竜帝様、これは一体』
医務室には大臣の一人に付き添われた王がいた。
咽喉に薬を塗られ、包帯を巻く息子を見て絶句している。
大臣……ゼイデは陛下に説明を求めた。
だが、陛下は瑠璃色の眼を細めて……無視した。
ゼイデの眉がぴくりと動いたが、それだけだった。
異議を唱える権利は〝人間〟には無い。
『義父上』
ダルド王子は咽喉に手をやり、呟くように言った。
『私は【人間】が知らなくていいことを、気づくべきでは無いことを……』
この王子は６歳から１０歳まで帝都で過ごした。
ある理由から〝特例〟としてそうなったらしいが、俺は興味が無かったから詳細は知らない。
ただ、親代わりに面倒を見ていた陛下が王子を今でも特別扱いな

のはハニーから聞いている。
側近中の側近であるハニーを派遣するほど……。
『そうだな。お前は昔から賢かった』
陛下は王子の額に小さな手をかざした……陛下の竜体は旦那とそっくりだ。
色が違うだけで大きさ、姿形は全く同じ。
俺やハニーの竜体とは違う……最上位竜だけがとれる【凝縮体】。
青の竜帝には旦那さえ持っていない特殊な能力がある。
『忘れろ。【人間】として幸せに生きる為に』
記憶消去。
王子が意識を失い垂れ込むのを小さな青い竜が軽々と支え、静かに横たえた。
『ヴェルヴァイド。これは1つ貸しだな』
陛下が青い指を軽く弾くと、一人を残し全員がその場に崩れる。
『陛下。やっぱ‘魔女’の【記憶】は陛下でも消せないんですか？』
俺は‘常世の魔女’を指差し、陛下に尋ねた。
‘魔女’は笑った。自嘲のそれはどこか悲しげだった。
『くくっ。竜帝でも私の【記憶】は消せませんものね』
『お前の【記憶】は【記録】だからな。すまんが俺様にも無理だ』
陛下は‘魔女’の髪を撫でる。
その優しい仕草。
『辛いなら、言うが良い。死を望むがいい。俺がお前にしてやれるのはそれだけだ』
『……逃げるのは性に合いませんわ』
強く美しく、悲しい女だと思う。
『そうか。……今回の件、後始末を頼む。消したのは先ほどの騒ぎの記憶だけだ。ヴェルの‘つがい’の後見人にはセイフォン皇太子ダルドを。＜竜帝＞が認める。ダルド一代限りのものであり、次代への引継ぎは無し。各国への告知は‘帝都’が行う。異論は認めん』

王子は２０歳。
つまり数十年はこの国は安泰ってことだな。
ま、セイフォンが栄えようと滅びようと俺はどうでもいいんだが。

『陛下。無理なんじゃないですかぁ？　旦那が許可出すはずないと思うんですが』
離宮へ徒歩で（陛下は飛んでるが）向いながら、俺は陛下に進言した。
どう考えたって旦那が姫さんと陛下を会わせるとは……。
ハニーが陛下と姫さんの対面を楽しみにしているようだったから、言えなかった。
が、ここには俺と陛下の二人しかいない。
遠慮なく、言わせてもらおう！
『旦那も一応は竜族ですから。他の雄、しかも‘つがい’を得ていない陛下を姫さんに近づけるはずないですよ。無理に会おうとすれば今度こそぶっ殺されますよ』
旦那は強い。
しかも……日に日に凶暴化している気がする。
以前の旦那はあらゆることに無関心だったせいか何を言われてもされても、反応が無かった。
それが今じゃ拳・蹴りを使うのも日常茶飯事だ。
姫さんの手前、殺さないように加減してるにしたってなぁ。
俺だからなんとかなってるが普通の竜族だったら死んでるって。
『なんとかしろ』
おい。
『会わずに帰ってくれませんか？　必ず帝都に連れて行きますから。帝都に着くまでには姫さんが旦那の手綱を取れるように……』
『なんとかしろ』
あぁ、ハニー。
俺の死期は近いかも。

陛下と俺は旦那と違って術式を使えないので、離宮までの道のりは自力での移動になる。
術式は人間のものだ。
竜族はあらゆる面で人間より優れているが、この二点では脆弱な人間共に負けている。
繁殖力。
そして術式という【力】。
竜族が世界の覇者として君臨しない……出来ないのはそのためだ。
最も人間と違い竜族は殺戮を好まない穏やかな生き物ということもある。
人間から見れば異論もあるだろうが。
他種族を虐げてまで繁栄しようなどと野望も無く、人間との共存を選んで。
人間は同属同士殺しあうが、絶対数が少ない竜族は同属殺しはしない。
まぁ、例外が旦那と四竜帝だが。
旦那……そういや随分と久しぶりにきいたな。
＜白金の悪魔＞か。
『陛下、人間は勝手ですねぇ。旦那を自分達の都合で神にしたり悪魔にしたり。ダルド王子は旦那が姫さんの名を口にしたもんだから＜白金の悪魔＞が＜監視者＞だって気づいちまった。旦那は世界を守る存在なんかじゃないって事を』
『＜監視者＞が秩序のために‘強く高慢な竜族‘と人間の均衡を守ってるなんて、どっかのいかれた預言者の妄想だ。数百年前からそれを信じている人間のなんと滑稽で哀れで……幸せなことか。だが、それでいい。幸せなままで』
世界最強の竜が人間の味方だというおめでたい勘違い。
あの人は人間が滅びようと気にしない。

それは……竜族に対しても同じ。
竜族の姿をしているが、旦那は‘違う’のだ。
術式を人間以上に使いこなし、竜族すら超えた‘存在’。
『旦那はいったいなに者なんですかねぇ、陛下』
神。
昔はそう考えたこともあったが。
『さあな。ま、神様なんてお綺麗な存在じゃねぇのは確かだな』
これは俺も素直に頷ける。
‘つがい’の姫さんと風呂に入り続ける為にも人型を知られたく無かったなんて。
そんな神様、嫌だ。

第17話

＊ここからは日本語を『　』にし、異世界の言葉を「　」で表していきたいと思います。
ややこしくて申し訳ありませんが、ご了承下さい。

「選ぶの？　これから？」
私は自分の眼がぎらつくのを感じたよ、うん。
だって、だって！
『ファ……ファンタジーだよう！　うきゃー！　コスプレだ！』
ものすごい量に圧倒されつつも、興奮してしまう。
ハクちゃんの服の腕がスパーンと切れているのに慌てた私をカイユさんは優しくなだめ、寝室の奥にある衣裳部屋（なんとハクちゃん専用！）に連れて行ってくれた。
ここにはハクちゃんが‘もらった’服があるんだって。
かなり昔にもらったらしいけど、説明されても単語がいまいちわからなかったので‘ま、いいか’ってことにした。
細かいことを気にしないのが異世界生活のこつのような……。
『ふあ、ふぁ？……こすぷ？』
ハクちゃんは人型になったら‘声’を出せるようになった。
私の日本語も喋れるようになるつもりか、鸚鵡返しで質問してくるんだけど。
「ごめ……なさい。説明、まだむずかしい」
「わかった」
ハクちゃんは衣装室の中にあるソファーに長い足を組み、座っている。
偉そうだ。すごく。
見た目のせいか、性格のせいか。

黒地に金の刺繍が眩い詰襟の長衣を着たその姿は。
絶対、悪役だ。
地球を征服しにきた遠い惑星の皇帝陛下か、勇者に立ちはだかるラスボスの魔王様か。
「りこ？」
はぁ～、しかし怖い顔だよね。
綺麗すぎるって逆に損なんだって知りました。
大きな手が遠慮がちに伸ばされ、真珠色の爪で飾られた優美な指が私のスカートをつまんだ。
「りこ。怒ってるのか？　我が服を斬られたから」
竜の時と同じ。
ハクちゃんは私に直に触らないようにしているみたい。
力が強いからしいけど……。
ん？
今、斬られたって言った？
斬られ……。
「トリィ様。これなんかいかがです？　ご覧になって下さいな」
「あ、は～い。見ます！　わっ、すごい。どれも似合ますです！」
私の聞き間違い。
だって、私がうたた寝してる間も側に居たんだし。
それにハクちゃんは強いみたいだから誰かに服を切られるなんてね。
しかもあの切れ方。
まるで腕を切断したみたいだった。ありえない。うん。
「ね、ハクちゃんはどの色が好き？　沢山あるので。色を選びます！」
ハクちゃんは金の眼を細めて言った。
「黒」
え～！
今着てるの、黒だし。

黒いといかにも悪役って感じが強くなるのに。
黒は似合いすぎというかはまりすぎというか。
「ハクちゃん、この薄い紫とか可愛い（？）ですよ。あと、このベージュも品があって」
「黒」
スカートを掴む指に力が入ったのが分かる。
むむ。
折れない気だね、ハクちゃん。
人型のハクちゃんも表情がほとんど無いけれど、竜の時と同じで眼が感情を伝えてくれる。
それと私の服を握る強さ。
むむむ。
「トリィ様。ヴェルヴァイド様は黒をお選びになったでしょう？私、そう思ったから最初に今の服をお持ちしたんです」
カイユさんが両脇に黒系の衣類をごっそり抱えて私の前に現れて言った。
「なんで？　黒？」
私はハクちゃんを平和的イメチェンさせたいのですが。
「りこの色だからだ」
「え？」
私の色？
「りこの髪と瞳の色だ。我はりこの色に染まってしまいたいとすら思う」
まるで恥らうかのように眼を伏せたハクちゃんに、私は言葉が出なかった。

乙女か、お前は。

「まぁまぁ、御熱いことですわ！　私はダルフェの馬鹿を迎えに行って参りますから、後は御二人で。ただし、トリィ様に直に触らな

いで下さいね。わかってますか？　お怪我させたくないでしょう？」
　無言で頷くハクちゃんにカイユさんはさらに言った。
「抱きしめたりしたら骨が折れて、内臓破裂です。絶対に駄目です。どうしても接触したい場合はトリィ様に触れてもらって下さいませ。トリィ様！」
「は、はい！」
　カイユさんは真剣な顔で私に、竜の雄の取り扱い、についてアドバイスをくれた。
「いいですか、トリィ様。御自分の身を守るために必要なのは、飴と鞭、です」
　へ？
「毅然とした態度で優位を保ちつつも、ご褒美、を与えるのをお忘れなく。それと竜の雄はつがいに【お願い】されると大抵の事は叶えようとしてくれますから、【お願い】を上手くお使い下さいね」
「お、お願い？」
「はい。では、失礼致します」

　竜の雄の取り扱い。
　なにそれ？
　飴と鞭って。
　犬じゃないんだし……。
「ハ、ハクちゃん。今のは……」
　しかも本人の前で言うことじゃないんでは。
「カイユの言うことは正しい」
　ハクちゃんは私のスカートから手を離して立ち上がった。
　う～ん。背、高いなぁ。手足、長いし。
　腰の位置といい、何等身なんだろうか？
「りこ」
　優美な仕草で膝を付き、目線を合わせてからハクちゃんは言った。
「りこの寵を得るために我はなんでもしてしまう。我がりこに危害

を及ぼすことは無いが、我の行動がりこの心を傷つけるやもしれん。
……我は表情が乏しいだろう？　りこに出会うまで【感情】があまり無かったせいか表情を作る機能が動かないというか、動かし方が分からない。我は【感情】に疎い。りこの感情を察し、行動するにはまだ‘足りない’のだ」
　ハクちゃん……。
「だからりこが我を制御する必要がある。我はりこを害する存在になりたくない。だが‘足りない’のだ。りこの望むのがどのような我なのか」
　ハクちゃんは竜の時と同じように首を傾げた。
　この姿ですると、なんか……微笑ましい。
　表情が無くても。
　肌が冷たくても。
　好みの顔じゃなくても。
「単語、難しくてよく分からない。ごめんなさい」
　見た目が悪役みたいでも。
「やっぱりハクちゃんって、かわゆいね」
　両手をにぎにぎし、首を傾げる悪役顔の超絶美形。
　ありえないギャップが、私の心を暖かくしてくれる。
「りこ。あのだな、その」
　にぎにぎしていた手がぎゅっと握られた。
　何かに耐えるように。
「この姿も‘かわゆい’ならば、人型でも風呂は一緒で……」
「……は？」

第18話

服を着替えたハクちゃんと衣装室から出ると、ダルフェさんが居た。
彼はハクちゃんを見ると緑の眼をまん丸にし、口をパカーンと開けた。
「だ、旦那……」
ハクちゃんは私を‘お姫様抱っこ’していた。
私は恥ずかしいよりも緊張で、顔がこわばってしまう。
「ダルフェ、駄目！　ハクちゃん、精一杯！　刺激だめ！」
私を支える腕が小刻みに震えているし！
力加減を間違えないようにハクちゃんは必死なのだ。
無表情だけど。

「姫さん、無事か？」
ほっとしたようにダルフェさんが息を吐いた。
ご心配かけて、すみません。
「平気です。ハクちゃん、頑張ってます」
腕が痙攣してんじゃないのかってくらい、ぷるぷるしてはいますが。
なんとか私を潰さずできてます！

私は先ほどのやり取りを思い出し、引きつった笑いを浮かべてしまった。
お風呂の件で私はハクちゃを泣かせてしまった。
本当に‘泣いた’のだ。
私は男の人とお風呂に入るなんて現時点では考えられない、ってか無理だし。

ハクちゃんは伴侶……一応夫だから将来的には平気になるかもだけど。
今は駄目、無理！
夫ったって、これから世間で言う、お付き合い、を始める関係なんだから。
いきなりお風呂なんて、ハードルが高すぎる！
「い、嫌！　絶対、駄目！」
私はハクちゃんから距離をとり、叫んだ。
「変態！……変質者！」
語彙の少ない私は取り乱したせいで今日覚えたばかりの単語を使ってしまった。
言ってから、しまったと思う。
ここで使うのは間違ってる。
違う。
恥ずかしいから、まだできないって言うべきだよね。
「わ、私、えっと」
い……言えない。
なんか、すごく恥ずかしくて。
ど、どうしよ。
「り……」
金の眼を見開き、ハクちゃんは固まってしまった。
そして。
ぽろ。
水滴が眼から落ちた。

たった一滴。だけどこれは涙。
透明な雫。
前の涙が＜かけら＞だったと、はっきり分かった。
「ご、ごめんなさい！　ごめ」
今のは、私が悪い！
「ハクちゃん、あ、あの」
飴と鞭。
飴。
飴！
「お風呂はそのうち！　しばらくお休みなだけ、ね？　他、違うことで。出来ることを」
あわあわと焦る私にハクちゃんは言った。
「……竜体の時にりこは我をよく‘抱っこ’してくれた」
え、うん。
確かに。
抱っこしたり膝にのせたり。
だって可愛かったし。
「我も、したい」
「え？」
「風呂は‘お休み’。我は我慢する。我は変態や変質者では無いので我慢できる」
根に持ってるな、むむ。
「で、でもハクちゃんは力が強いから。カイユが危険だからって」
そうなのだ。
恥ずかしいとか照れるとか、そんな甘い理由ではなく。
‘抱っこ’は身の危険……命に係わる大問題！
「りこ」
金の眼が私を見る。
すがるような眼差し。

「……りこ」
ああ、駄目だ。
私はこの種の眼差しに弱いからペットショップには絶対行かなかった。
妹はかわいい子犬や子猫を見れるからって、よく行くみたいだけど。

きゅい～ん

「う、うん。いいよ！　な、なんとかなるよ、うん」
撃沈。
完敗です。
骨折、いやだな。せめて打撲で済むといいな……。

「姫さん。あんまり旦那を甘やかすと痛い目みるぞ」
ダルフェさん。あの‘きゅい～ん’の眼を見てないから、そんなこと言えるんですよ。

雨の中に迷う子犬。
ダンボールの中の子猫。
買い手を求めるペットショップの小さな生き物。
勝てるわけがない。

「何用だ、ダルフェ」
結局、また黒い服を着た‘悪役決定’みたいなハクちゃんがダルフェさんを見て言った。
横柄に言うハクちゃんにさっきの‘きゅい～ん’の面影は皆無。
「何って。陛下が来てんですよ。門のとこで旦那の許可待ちです。

ハニーが旦那は必ず許可を出すって言ってましたが……」
「陛下って王様？」
私の質問にダルフェさんは疲れた顔で言った。
「青の竜帝が到着したんだよ。あの方は姫さんに会いたいそうだ」
青の竜帝！
「駄目だ」
なんですと～！
「＜青＞は、つがい、を得ていない雄だ。りこに会わせるなどできない……」
「なんで？」
私はハクちゃんの腕の中で抗議した。
せっかく来てくれたんだし、なんたって竜帝なんてなかなか会えないんじゃない？　普通は。
「駄目だ。嫌だ」
会いたい、見たい！
あ、こういう時に使うのか。カイユさんはハクちゃんが駄目って言うのを分かってたんだ！
「ハクちゃん、お願い」
ハクちゃんの金の眼が私を見下ろす。
「お願い、です」
「りこ」
ハクちゃんはため息をつくと、私の首筋に顔をうずめるようにして……。

「我から離れるな、りこ。……死人を出したくないのならな」
物騒な言葉に絶句する私にダルフェさんが追い討ちをかけた。
「竜帝と旦那が本気でやりあったら巻き添えで俺とハニーはあの世行きです。セイフォンも消えると思いますよ。姫さん、頼みましたよ？」
勘弁してよ、もう！

私たちは離宮の門まで移動することにした。
ハクちゃんは会うことは許してくれたけど、竜帝さんを敷地内にいれるのはどうしても嫌だと言って譲らなかったから。
傍らを歩くダルフェさんが言うには、会うことを許可したことが奇跡に近いらしい。
竜族の雄である彼がそう言うのだからハクちゃんの譲歩は、感謝すべき事なんだろう。

でも。

「私、歩け……」
「駄目だ」

ハクちゃんは私を降ろしてくれなかった。
ずーっと、お姫様抱っこ、なのだ。
加減をつかんだらしく腕は震えてないけど。
こんな状態で竜帝さんに会うなんて、かなり恥ずかしい。
どんだけ、らぶらぶ、なのよ、バカップルかいな。
自力で降りようとした私にダルフェさんがげっそりした顔で懇願した。
「姫さん、頼む！　俺とハニーと胎の子の未来の為に耐えてくれぇ！」
しかたないか。

竜帝さんにあきれられたって、それで皆が助かるなら。

それに。

門が近づくにつれ、ハクちゃんが変なのだ。

体格差のせいで顔がよく見えない。

ハクちゃんが意識して私に目線を合わせてくれないと……。

「ハクちゃん？　どうしたの？」

なんかぴりぴりしてるっていうか。

警戒？

不安？

私が呼んでもこっちを見てくれない。

いつもは私が呼べば必ず返事をしてくれるのに、一点を見たままで。

何を見ているんだろう。

広間を抜けると、ダルフェさんが扉を開けてくれた。

この扉の向こうには見事な庭園が門まで続いている。

多種の花は白で統一されていて、幻想的な雰囲気で……。

あ、カイユさん発見！

彼女は門の内側に立ち、私たちに向かって一礼してからとんでもなく重そうな鋼鉄の門を軽々と押し開いた。

「あ」

完全に開けられた門から見えた小さな青。

それはふわふわと漂う小さな……。

きらめく青。

「竜。青い……」

小さな青い竜が、竜が……やった！
鱗だ、う・ろ・こ～！

「うっきゃー！　かわいい、かわゆ～い！　触りたぁい！　抱っこした」
私は口をつぐんだ。
ハクちゃんの視線が頭頂部に突き刺さるのを感じた。
さっきは無視したくせに……と言いたかったけど無理だった。
凍りついた空気にさすがの私も黙った。

チリッ。
ピカッ。

視界の隅に何か光ったような？

「だ、旦那！　ハニー、退け！」
それは一瞬だった。
真っ白な光が青い竜に向かって伸び、意思を持つかのような動きで避けようとした小さな身体を締め上げた。

「……だ」

ハクちゃんがつぶやく。
え？
なに？

「りこの‘かわゆい‘も‘抱っこ‘も我だけだ！」

ちょっ！

「‘かわゆい‘のは世界に我だけでよい！　お前は消えろ＜青＞！」

ぶちぎれたように言うハクちゃんには‘表情‘があった。

冷徹な美貌が浮かべたのは憤怒。

見てるこっちの心臓が止まりそうな怖い顔だし！

「おい！　姫さん、なんとかしろ。陛下が殺されちまう！」

「トリィ様！　陛下をお助け下さい！」

初めての表情が憤怒って。

普通は笑顔のほうが物語的展開としておいしいんじゃない？

「こら！　逃避してる場合か。姫さん、旦那を……うわっ」

何かに弾かれたようにダルフェさんが後方に跳んで行った。

地面に叩きつけらる寸前でカイユさんが受け止め、その勢いのままさらに後方へ投げた。

カイユさん、ダルフェさんが死んじゃいますよ！

あ、離宮の壁に……刺さってる！

ひえ～！

「トリィ様！　お教えしましたよね、飴と鞭ですわ！」

晴れやかな笑顔で手を振り、言った。

「中庭に茶会の準備をしておきますから。お二人を連れてきてくださいね」

にっこり微笑んでダルフェさんを回収しながら、カイユさんは去っていった。

そ…そんなぁ！

第19話

「ぐぎゃー！　なにしやがる！　このじじい、放しやがれ！」

白い光の帯に引きずられた青い竜がハクちゃんの足元でもがく。

小さな手足を激しく動かして脱出しようとしているのに、光は益々強く発光し締め付ける力を増したようだった。

「おい、お前！　なんとかしろ……っつ！　いてて」

青い眼が私を見て、言った。

「ヴェルを‘抑え’るんだ！　‘つがい’であるお前の役目だろうが！」

「わ、私……」

止めないと。

私はハクちゃんの肩に手を伸ばし、服を掴んで引っ張りながら【お願い】した。

「やめて、ハクちゃん！　竜帝さんが怪我しちゃうよ！　お願い、止め……」

ハクちゃんの金の眼は足元の竜に向けられたままで、私を見てくれない。

何も言ってくれない。

「ハクちゃ……」

ショックだ。

いつだって私を最優先にしてくれたのに。

どうして？

「ぎゃぎー！　や、やめ！　こ、の馬鹿」

あがった悲鳴にびっくりして竜帝さんを見ると……。

「な……！」

ハクちゃんの足に頭を踏まれた竜帝さんが短い手足を使って、懸命に足を退かそうとしていた。

「潰れちゃうよ、死んじゃう！　やめて、やめて。こんな酷いこと」
私はハクちゃんの胸を叩いた。力いっぱいに。
「……＜青＞を庇うのか。我より＜青＞が、かわゆい、からか」
「ち、ちが」
ハクちゃんは私を見ずに冷たい声で言う。
「我の腕にいるのに、我以外の雄に心を向ける。今までの女は皆、自分から我に媚、擦り寄ってきたのに」
い、今までの女？
女！
「＜青＞よ。りこの心を我から奪わせはせぬ。消えろ」

お・ん・な。

「……ハ、ハクちゃんの馬鹿！　最低、最悪！」
私は暴れた。めちゃくちゃに。
なによ、なんなのよ！
女？
過去の恋人と私を比べてたってこと？
「放して、触んないで！」
「り、りこ？」
ハクちゃんの胸や腕を思いっきり蹴り、二人の間に無理やりに隙間を作る。
「放して、降ろして！　早くして！」
他の女の人と比べないでよ。
「りこ、危ない。分かった、降ろすから待っ……」
腕の力が緩んだのが分かり、私は自力で飛び降りた。
「う、いっ……痛！」
ここ何年も運動してなかった私がうまく着地できるはずはなく。
地面に腕をついて落ちてしまった。
手のひらを擦り剥いたのか、じんじん痛む。

痛い。
痛いよ。
痛いよ、ハクちゃん。
「う、う……うっ。ひぇっぐ」
こんなみっともない私。
ハクちゃんと並んだ時につりあうような背も無くて、美人じゃなくて平凡で。
きっと凄い美女と付き合ってきたんでしょう！
私なんて、ちんちくりんのおちびだからさぞ珍しかったでしょうよ！
「う……うぅ……ぇぐ」
地面に座り込んで、自分の両手を開いて確認した。
手首から親指の付け根まで、擦り切れて血が滲んでいた。
膝も痛い。こちらも血が出てるかも。ずきずきする。
どこもかしこも痛い。
「お、おい。大丈夫かよ、おちびちゃん」
青い竜が私の手を見て、頷いた。
「よし。骨折はしてない。立てるか？」
「……竜帝さん、怪我は」
青い眼がくるりと回り、細められた。
似てる。
ハクちゃんに。
「俺様は四竜帝だぞ？　こんなのなんともない。ヴェルに踏まれるのは慣れてるしな！」
にかーって笑うと青い歯が見えた。
歯も青いんだね。
それに、笑えるんだ。
ハクちゃんとは違う。
違う。
「光の帯みたいのは消えた、ですね。良かった、竜帝さんが無事で」

袖で涙を拭いながら立ち上がり、ハクちゃんに文句を言うべく振り返り……。

「え」

ハクちゃんは金の眼を見開き、私を凝視していた。

前屈みで、右手を私の方へ伸ばした姿勢で固まっていた。

「ハクちゃん？」

私が呼びかけると全身がびくりと跳ねた。

「ハクちゃん、あのね！　女の人って」

「血」

ん？

「りこ、血の匂いが」

ああ。そうですよーだ！　手を擦り剥きましたから！

「私、手のひらを擦り剥い……」

「け、怪我をしたのだな？　血が……」

ハクちゃんはへなへなとその場にしゃがみ込み、私から眼を離さずに言った。

「わ、わ……我がりこに怪我を。血をなが、なが、な……」

わなわなと震える口……。

「りこが怪我をした！　血がー！血が！」

四つんばいで私ににじり寄り、スカートの裾にしがみ付きながら言うその姿を見たら……。

見た目と中身のギャップが酷くて、過去の女の人に捨てられたんではないかとすら思えた。

「　た、大変だ！　今、医者を……りこ、りこ。血が、血が出っ！」

「てめぇのせいだぞ、ヴェル。あ～ぁ、可哀相になぁ。人間には再生能力がねぇから、しばらく痛むぞ」

竜帝さんの言葉を聞いたハクちゃんの両手がびくんと震えた。

「い、い、痛むのか？　り、りこ。血、血が」

ハクちゃんの取り乱しようを見ていたら、逆に私のほうが冷静になってきた。

見た目は悪の帝王（？）みたいな成人男性が私のスカートを握ってぷるぷる……。
しかも切れ長の眼は今にも洪水を起こしそうだし。
私が手を擦り剥いただけでハクちゃんは……。
ちょっと、嬉しいかも。
うん。
過去の女の人に嫉妬したって、しょうがない。不毛だよね。
「痛いけど、これくらい平気」
それに、気づいたの。
私はやきもち焼いたんだよね？
嫉妬したんだよね？

ハクちゃんが好きなんだ、私。
好きなのは分かってたけど。
すごく、すごく。すごく好きなんだね。

「りこ、すぐに医者を」
立ち上がろうとしたハクちゃんの首に腕をまわししがみついた。
頬と頬を合わせ、腕に力をこめる。
「ごめんね。不安にさせて」
ハクちゃんもさっきの私みたいな気持ちになったのかな？
比べられるように感じて悲しかったのかな？
どんなに美形だって力があったって、不安なんだね。
私のことを本気で好きでいてくれるから……。
「私の一番はハクちゃんだから」
本当は愛してますって言いたかったけど。
言葉が分からなかったから。
「大好き。私の白い竜」

愛してる。

かわゆくて、綺麗で、怖い貴方を。

「ちょっと擦り剥いただけだから……わぁわぁっ？」
瞬きをする間も無く景色が変わった。
あれ？
寝室だ。ベットの上。
術式で移動したんだ……。
腕の中にはハクちゃんはいない。
「ハクちゃん？」
私の左脇にこんもりとした黒い山。
これ、ハクちゃんが着てた服？
もこもこと中央部分が動き、布の間から白い竜の顔がぴょこんと現れた。
金の眼が私を見て、くるんと回った。
私は重みのある黒い生地から小さな身体を引っ張り出し、自分の膝に座らせた。
あ。
手足……丸めてる。
「カイユがすぐに来る。手当てをしよう」
念話だ。
竜の姿だとハクちゃんは‘声’が無い。
私は手の平をハクちゃんに見せた。
「血、止まってる。平気」
ハクちゃんは私の手の平を見て、数回瞬きをした。
小さな手を伸ばし、触れる寸前でギュッと握りこんだ。
「我は……」
「トリィ様！」
カイユさんが部屋に飛び込むように入ってきた。
小ぶりな木箱を抱えている。

私の手を確認してから箱を開け、中から小瓶と包帯を取り出した。
「傷薬を塗りましょう。お手をこちらに」
「傷、軽いです。平気ですよ？」
薬なんて大げさな！　逆に恥ずかしい～。
「りこ。手当てを」
ハクちゃんはふわりと浮いて膝から離れ、窓へ近寄り小さな手を器用に使い窓を開けた。
ひんやりした風が室内に入ってきた。ほんのり花の香りがした。
「我は中庭にいる」
「え？　ハクちゃん、あの……」
「＜青＞には手を出さぬ」
「あ、う、うん。ありがとう」
あの～。
私がしたさっきの告白はスルーですか？
しかも竜に戻ってるし。
なんか微妙な気分です。
窓から外にふわふわと飛んでいったハクちゃんを見送った私の手をカイユさんがそっと掴んだ。カイユさんは綺麗な顔をしかめながら濡れた布で土をふき取り、小瓶の薬を少量ずつかけて指の腹で優しく塗りこめてくれた。
「足のほうからも血液の匂いがしてます。膝も擦り剥いてしまったようですね。まったく、ヴェルヴァイド様ったら何やってるんだか」
「ハクちゃん、悪くないです。私、自分から落ちたの」
「直接では無くても結果的にはお怪我をなさった。つがいに怪我をさせるなんて、竜族の雄として最低ですわ」
手厳しいです、カイユさん。
竜族の女性って強い。
「カイユ。ハクちゃんを怒らないで？　ハクちゃんは意外と繊細。かわいそう」
カイユさんは水色の瞳を細め、微笑んだ。

「トリィ様。あの方を‘繊細’と言うのは、言えるのは世界に貴女様だけです。ヴェルヴァイド様の伴侶がトリィ様のような方で本当に良かった……」

会話しながらも手際良く手当てをしてくれたカイユさんは木箱に薬をしまうと、私の脇にあったハクちゃんの服を手に取った。

「カイユ。ハクちゃんは竜に戻ったの。なぜ？」

慣れた手つきで畳むカイユさんに聞いてみる。

「さぁ。あの方の考えは私などには……。あら？」

カイユさんが服の中から何かを見つけたらしく、片手を入れて動かした。

「何かしら？　真珠？」

彼女の手には１０粒程の白い球体。

小さなそれは。

「……真珠ちがいます。内臓です」

「は？」

ハクちゃん。

かなりへこんでますね。

第２０話

我はりこの手当てをカイユにまかせ、窓から外へ出た。
離宮に植えられた多種の花々の香りが混ざり、いっそう甘く香っている。
だが我の鼻孔も口内もりこの血の匂いが残り、脳髄まで侵食するかのようだった。
酒に溺れた愚かな人間のように……視界が揺れ、鼓動が早まる。
甘いのは花の香りではなく、血の匂い。
我が溺れるのは酒ではなく、りこ。

我の頬に重なった柔らかなそれを喰いちぎったら、どんなに美味いだろうか？
温かな血液を啜り、飲み干し。
黒い目玉を噛み砕き。

「駄目だ」
りこが死んでしまう。
再生能力が無いのだから。

「駄目だ」
甘い、甘いりこの身体。
砂糖菓子のように甘く、脆い肉体。

「駄目だ」
逃げたのだ、我は。

初めて感じた、食欲、から。

「おい！　じじい！　おいって！」

我は下賤な獣のように、りこを貪り咀嚼し飲み込み……。

「この色ボケじじい！　……ヴェル？」

「……＜青＞か。なんだ？」

＜青＞は我を見て、首を傾げた。

全く、微塵も‘かわゆく‘無い。

りこはこれのどこが‘かわゆく‘見えるのか。

我には1万年経ったとて理解できそうにないのだが。

「ヴェル。お、お、お前、ど……どうしたんだ？　よ、よ、よだ、よっだ！」

青い爪を持った小さな指が我を指す。

「よっ、よだれが垂れてるぞー！」

よだれ？

よだれとは【涎】のことか？

「ぎゃー！　よだ、よだ、よだれが出とる！　じじい！　とうとう頭がいかれたのか？　ボケたのか？　あの【ヴェルヴァイド】が……涎垂らしとるー！」

貪り喰って、1つになりたい。

「ヴェル。なぁ、お前……」

我は気づくと地面に転がっていたらしい。
青い眼に映った我の姿を見て気づいた。
身体を浮かべようとしたが、手足に力が入らない。
酷い脱力感。
だが、不快ではない。
むしろ心地よいというか……。
＜青＞は我を指でつついた。
つつかれた我はそんなことはどうでもよく、眼を閉じて……。
眼を閉じても浮かぶのは、りこ。
我を好きだと、大好きだと言った。
我が1番なのだと言ってくれた。
そんなりこに我が感じたのは‘食欲’だとは。
血の匂いのせいか？
　いったい……我はどうしてしまったのか。
「ふ、ふははー！　積年の恨みを思い知れ！　とうっ！」
＜青＞の短い足が我を踏みつけるのを感じたが、我は眼を開けることすら面倒になり好きにさせることにした。
「なんというか。卑怯なんじゃないですか？　陛下」
ダルフェか。

「こんなチャンス、10万年待ったってこないぞ？　お前も記念に踏んどけよ」

＝ダルフェ。聞きたいことがある。

「旦那？……意識はあるんですね？　どしたんです」

＝カイユに‘食欲’を感じたことはあるか？

「食欲？　ハニーに？」

＝我はりこに‘食欲’を感じている最中だ。身体が動かんのはりこを守ろうとする防衛機能が無意識に働いたためだと思う。りこの血液の匂いを嗅いでから変なのだ。

「あぁ、なるほど。そういうことですか。ちなににハニーに‘食欲’を感じたことは無いです。が、食べられてしまいたいとは常々考えてます」

＝カイユに喰われたいと？

「ええ。ハニーは俺より寿命が長いですから。俺は土に還るなんてごめんです。ずっとハニーと居たいんです。1つになってしまいたい」

＝我は……。

「ま、俺のことは置いといて。‘食欲’の件ですが俺が推測するに旦那は‘欲望’に免疫が無さ過ぎるんですよ。姫さんと居るようになっていろんな事を感じたり、望んだり……今までの旦那は‘無関心’と‘無欲’で‘存在’していた感じでしたから。姫さんに好かれたいとか、幸せにしたいとか触れたいとかね。普通の事が旦那にとっては全部が‘初めて’だったわけだ。そりゃ～、混乱しますよ。‘欲望’に慣れてないんですから」

＝混乱。

「初めて嗅いだ‘つがい’の血に過敏に反応したんです。程度の差はあれ雄竜なら‘つがい’の体液には本能を揺さぶられるもんですよ。そのうち慣れますって」

＝りこには……知られたくない。りこに、食欲、を感じたなど。

「あの姫さんなら……知っても旦那から離れたりしないと思いますがねぇ。ま、旦那はこれから、育って、いくんですよ、きっと。姫さんと一緒にね」

「ちょっと！　ハクちゃんに何すんのよ！」

りこの声。

「どわっつ！　この暴力女！　何しやがる」

「ひ、姫さん。ちょっ」

＝ダルフェ。りこが来たんだな？　我は身体が動かぬ。りこを守れ。

「……はぁ、必要なさそうですよ」

「ハクちゃんを蹴ってたでしょ、あんた！」

私が中庭に着いたとき、ぐったりと地面に倒れてるハクちゃんを青い竜がげしげしと踏みつけていた。

無抵抗でされるがままの小さな白い竜。

私は急いで近寄り、青い竜を掴んでハクちゃんから離しその勢い

のまま放り投げた。
そしてお茶の準備が整っているテーブルから椅子を取り、青い竜に思いっきり叩き付けた。
見た目より軽かった椅子はまだ四つあった。
全部を投げつけてから、慌ててハクちゃんを抱き上げる。
「しっかりして！　ハクちゃん、ハクちゃん！」
だらりとした手足。
閉じた眼。
半開きの口からは赤い舌が……。
しかも、しかもぉ！
「よ、よだ、れ？　ちょっと、あんた！　頭を踏んだわね？！　脳に障害が出ちゃったとか？　ハクちゃん、ハクちゃん……やだ、しっかりして！」
私は怖くなって、不安になって……。
「う、うぇっ」
今日は泣いてばかりだよ。
ハクちゃん。
ハクちゃん。

＝泣くな、りこ。

「ハクちゃん？　ハクちゃん！　ねぇ、だいじょうぶ？　どうしたの？」
身体はぴくりとも動かない。
念話で話しかけてくれても身体がこんな状態では、私の不安は消えない。
意識はあるのに動かないなんて、ますます心配になった。
「姫さん。旦那はだいじょうぶだ。ちょっと酔っ払ってるだけさ」
ダルフェさんさんが椅子の山から青い竜……竜帝さんを引っ張り出しながら言った。

「初めて酒を飲んだ餓鬼と同じだよ。姫さんの血の匂いに当てられただけだ。しばらく休ませれば回復するさ」
「血？　よく分からないけど休んだら治るの？　よかった！」
＝すまない、りこ。我は。我は……。
「今日はいろいろあったから、疲れちゃったんだね。ハクちゃん、繊細だから」
「おい！　おちび～！　てめぇ、俺様を……ほぎゃっつ！」
カイユさんが竜帝さんの青い頭に拳骨を落とした。
ゴインと鈍い音が聞こえてきた。
「陛下が悪いです」
「カ、カイユ。その、俺はそのだ、あの」
「言い訳無用です！」
「いいなぁ～、陛下。ハニーの拳は最高でしょ？　癖になりますよお～」

第２１話

「砂糖を減らして、蜂蜜を入れろ。生地にヘゼの実の粉末を少々加えると高貴な味になるんだよ。てめぇもまだまだだな、ダルフェ」

テーブルに置かれた焼き菓子を咀嚼しながら言う竜帝さんに、ダルフェさんが苦笑した。

「ヘゼの粉末なんて貴重品はセイフォンじゃ手に入りませんよ。蜂蜜か……次から使います」

小さな手で器用にカップを持ち、紅茶を飲む竜帝さんは記念撮影したいほど可愛かったけど。

私はハクちゃんの事が気になってそれどころじゃなかった。

厨房から借りてきた平鍋に柔らかな布を重ねて敷いた簡易ベット（？）で休んでいるハクちゃんの身体にタオルをそっとかけ、様子を確認した。

眼は閉じたままだけど半開きだった口は閉じられ、涎も止まっている。

「ヴェルを鍋に入れるなんて、凄い女だな～。そのまま蓋して、じじいを煮込んじまえよ」

竜帝さんは紅茶のお替りをダルフェさんに注いでもらいながら言った。

ハクちゃんと違って飲んだり食べたりしているし。

しかも、声があるんだよね。

竜帝さんは普通に喋れる。ハクちゃんとは違う……。

が！　口が悪い。

‘竜帝’のイメージが壊れてしまった。

「じじい、じじいってなに？　ハクちゃんのどこがじじいなわけ？」

そりゃ、長く生きてるみたいだけど（詳しい事は良くわかんないけれど）。

人型は２０代後半の青年だったよ？

小竜の姿だってものすご～っく、ラブリーだし。
まったく……かっちーんだ！
なんでこの子（口調とこの感じからして若い、絶対！　餓鬼決定！）はハクちゃんに対してこうなの！　頭くる～！
「じじいは、じじいだ！　おい、おちび。そのタルト、食わんなら俺様が食べてやるから寄越せ。ダルフェ！　晩飯は？　ちょっと早いが腹減ったぞ。帝都から道中、なんも食って無かったしな」
私のお皿からタルトを強奪した青い竜に私は抗議した。
「あぁー私のタルト！　あんた勝手に……ちょっと、焼き菓子全部食べちゃった？　私はまだ一個も食べてない！　それに‘おちび’って失礼！　あんたの方がちびです」
「俺様はちびじゃねー！　それに、あんた呼ばわりすんな。俺様を誰だと……」
「ふんだっ。私はあんたの部下じゃないです」
あぁ、もっと語彙が豊富ならこいつに罵詈雑言を浴びせてハクちゃんの仇を……。
「陛下。飯を食いにわざわざ帝都から来たんじゃないだしょうが。さっさと本題に入って下さいよ。姫さんが気に入ったからって遊んでないで……」
ダルフェさんの言葉に竜帝さんは即、否定を叫んだ。
「こんなおちび、趣味じゃねぇ！　俺様は乳がでかくて腰のくびれた大人の女しか興味無い！　こんなちびで、鶏がらみたいな身体の子供に発情できんのは鍋ん中のじじいぐらいだー！」
言葉が良くわかんなくても、悪口を言われるとピンとくるというか。
なんかものすご～く、侮辱的な発言をされたような。
でも、ここは分かったのだ！　子供って言った。子供？
「私、２６歳。成人してます！　子供じゃない。身体が小さいのは人種」
この青い竜の目はどうなってんよ！

サイズは小さいけど顔とか身体つきとかで大人だって分かるでしょう？　普通は。

こっちの世界の他の人は私がちゃんと大人だって分かってたよ？

こんな老けた（自分で言うのは悲しいけど）子供はいないって！

「２６？　人間の２６って子供を３～４人は産んでるような歳だろう？」

青い眼が細められた。疑ってるのかな？　まったく失礼な竜だよね。

もう、いい。　この人に説明するの疲れるし。

「ふ～ん。そうか、うん」

なにやら一人勝手にうなずき、納得している。　ほっとこう。

「ダルフェ。竜帝さんの用事なに？」

私は餓鬼竜を無視し、ダルフェさんに聞いた。

「おい、おちび！　俺様にきけよ、俺様に」

無視だ、無視。

かわいいけど。鱗だけど。

無視。

「姫さん。陛下も調子に乗りすぎたが、許してやってくれないか？　旦那はさっき本気で陛下をぶっ殺そうとしたんだしあいこってことで。な？」

そうだった。言われてみれば。

ハクちゃんは竜帝さんに酷い事してたんだ。

ううう。

ハクちゃんと竜帝さん……どう考えてもハクちゃんのほうが容赦なかった。

一方的に攻撃し、踏み潰そうとしたのは鍋のベットで丸くなって休んでいるこのラブリーな生き物……あぁ。なんてかわゆい姿！

猫鍋なんて目じゃないよ。やっぱり竜のハクちゃんは最高にかわい～い！

おっと。

ずれちゃった。
えっと。
つまり、どっちが悪かったといえばハクちゃんが悪かった。
冷たい美貌に浮かべた憤怒の表情は、ものすごっく怖かった。
もともと悪役美形顔だけど。
ああなると魔王様だか大魔神だかっていうか……。
世界征服を狙ってるんじゃなくて、世界を滅ぼしに来た悪役的かも。
似合いすぎだ！
て、いうかハクちゃんの思考・行動ってまさにそうだし。
わ……笑えない。ひぇ～。
「え、えと。うん。ハクちゃんもちょっと、いけなかったね。乱暴だったかも」
「あん？　‘ちょっと‘　‘かも‘　あれがか？　俺様じゃなかったら瞬殺だったんだぞ。おちびは分かってねぇな。……ま、分からせるために俺様が来たんだがな」
竜帝さんはカップを置き、テーブルの上を歩いて私の目の前に来て言った。
「帝都に来い。いや、来てくれ」
青い竜は小さな頭を深々と下げた。
「この世界を……【ヴェルヴァイド】から【世界】を護る為に」
竜帝さんと同時にダルフェさんとカイユさんも地面に膝をつき、頭を下げる。
先ほどまでの穏やかな（？）雰囲気は一瞬で消え、緊迫した空気に変わった。
切り替えについていけない私は間抜けな声しか出せない。
「へ……へぇい？」
ハクちゃん。
貴方は悪者決定ですか？

「じじい、いや【ヴェルヴァイド】は最強の存在だったが今では‘最凶最悪’だ。原因はお前だ、おちび。この世界にヴェルの‘つがい’は存在しなかった。だから【ヴェルヴァイド】は最強ってだけで世界にとって脅威でも災厄でも無かったが」

竜帝さんは顔を上げ、青い目を私に向けた。

硝子玉のようでもあり、宝石のようでもある不思議な瞳。

「全ては‘つがい’であるお前次第。あの猛獣を繋いでおける鎖はあんただけだ」

「わ、わたし……っ」

分かってる。

私だって、分かってる。

私がしっかりしないと駄目だって。

「唯一の頼みの綱である‘つがい’が人間……しかも異界人であるおちびじゃ鎖どころか蜘蛛の糸だ。見た目は綺麗だが細く柔で……油断するとすぐ切れる」

私が頼りないってことだよね？

反論の余地無しだよ。

さっきだって止めたのに、ハクちゃんは竜帝さんを……。

「だから、俺達がおちびを支える。竜族はおちびの‘糸’を最高最強の‘鎖’にして世界を【ヴェルヴァイド】から護る。つまりだ」

青い目がくるりと回り、きらりと光る。

「おちびがいつも笑って幸せで過ごしてくれれば、あの凶悪じじいも世界をどうこうしようなんて考えねぇよ。……おちびがこの世界を愛してくれれば、な。愛するって言葉分かるか？　好きになる、大好きになって大切になって……かけがえの無い、失えないものだ」

愛するって単語……言葉。

さっきは分からなくて、使えなかった言葉。

これで覚えた。

けど……。
愛する？
この世界を？
「わ……わ、わたしは。私は」
私は。
この世界を。
この世界を愛せるだろうか？
「それにヴェルの……＜監視者＞の‘つがい‘が異界人だってことはセイフォン王宮から情報が駄々漏れだったせいで各国の上層部に知れ渡ってる。＜監視者＞が果たすべき‘役目‘よりも‘つがい‘に重きをおいた行動をとっている事実が一部の奴等を浮き足立たせるんだ。おちびを懐柔して＜監視者＞の力を手に入れようって人間をな」
ハクちゃんは‘つがい‘である私には優しい。
なんたって自分の身体を私の朝食に提供しようと考えるくらいの……。
彼の最優先は私。
うぬぼれとかじゃなく、この一ヶ月間一緒だったからはっきり分かる。
ハクちゃんは私を幸せにしたいと言ってくれた。
でも、ハクちゃんは‘りこの幸せ‘が分からないと……。
幸せにしたいのに‘幸せ‘が理解できないハクちゃん。
幸せ。
私の‘幸せ‘って？
家からパジャマ姿で連れてこられて。
生まれた世界から余興の失敗で‘落とされ‘て。
言葉も文字も勉強しなきゃならなくて。

生活するにはダルド殿下の‘良心の呵責’につけいらなくちゃ一文無しの私は生きる術が無くて。
お気に入りの服もバッグも、ローンがやっと終わった車も秋に予定してた結婚式も。
お母さんもお父さんも姉妹も友達も。
私の生きてきた２６年間でこの手にあった全てを失ったのに。
奪われたのに。

この世界を愛する？

ふざけんな、だ。
私はそんなお人よしじゃない。
聖人君子じゃ無い。

幸せ。
私の幸せ？
持ってたものを全部失った私……。
この世界での‘私の幸せ’って？

ねぇ、ハクちゃん。
私にも分かんないよ。

私の……私達の‘幸せ’が。

第２２話

「わ、私。この世界の偉い人に利用されたくないです。ハクちゃんとひっそり、こっそり生きていきます。言葉とか常識をセイフォンで勉強させてもらって……。働ける知識を身に着けて将来的にはどこかの街中で普通に暮らしたい」

幸せ探しは自分探しだって、誰か言ってた気がする。

２６で自分探しって、なんかあれだけど。

私の場合、しょうがないよね。

異世界に来ちゃったんだし。しかも不本意に。

ひっそり、こっそり……穏やかに生活していけば‘幸せ’もそのうち分かってくるかな？

「あのな、おちび。そのじじいが一緒じゃ人間の‘社会’には混じれない。２歳児だって＜監視者＞が白い竜だってのは知ってる世界だぞ？　人型も駄目だ。あの姿はいろんな意味で有名だからな。しかも働くだって？　おちびが出来るような仕事はほとんどないぞ？　店の売り子や給仕の仕事ならできるかもしれないが稼ぎは微々たるもんだ。１年働いたって今着ている服一枚買えない。てっとり早いのは娼館にでも入って身体を売ることだ。異界人で女で力も美貌も無いおちびが‘普通に暮らせる’ほどこの世界は甘くないんだよ」

竜帝さんの言葉は知らない単語があったから、私はハクちゃんに聞いてみた。

さっきから目を閉じて静かなハクちゃんだけど意識はあるようだし。

鍋の中で丸くなった身体を撫でると、うっすらと眼を開けて私を見てくれた。

＝どうした、りこ？

念話……あ、この感じは他の人には聞こえない‘内緒話モード’

だ。
　ハクちゃんの念話は‘内緒話モード’と‘他の人にも聞こえるモード’があって、しかも聞こえる人を選別可能だっていうから凄い。
　でもここで私が喋らないで内緒話したら竜帝さんに失礼だから私はこちらの言葉で質問した。
「ねぇ、‘娼館’で‘身体を売る’って私にも出来る仕事？」
＝なっ？
　がばっと鍋ベットからハクちゃんが立ち上がり小さな身体がぶるぶる小刻みに震えだした。
「私もそのうち働く必要があるから。‘娼館’で雇ってもらおうか？」
「げ！　お、おちび！　お、お前は何言って」
　竜帝さんは激しく両手を振りながら後ずさりした。
「？　だって、私にできる仕事はあんまりないんでしょう？　‘娼館’ってお店はすぐに雇ってもらえて‘身体を売る’仕事は給仕の仕事よりお給料が良いって言ってたよ。私、働いてハクちゃんと暮らそうと思って」
　あ、でもハクちゃんは有名人（？）だから街は駄目って言ってたかな？
　全部は聞き取れなかったんだよね～。
「ち、ちがう！　今のは例えであってだな。俺様が言いたかったのは……！　つまり、おちびが働くのは現実的じゃない選択肢ってことだ。世界平和の為に働くのは勘弁してくれ！　‘働かない’のがおちびの‘仕事’だ！　あ、いや、そうだ！　雇い主は俺様……ってか四竜帝全員だ！四竜帝がおちびを雇う！さすが俺様、天才だ！」
　む？
　雇うって言ったよね、今。
「竜帝さんが私を雇うの？」
　青い竜は頭をぶんぶんと上下に動かして言った。
「雇う、雇うぞ！　俺様はこの大陸一の貿易会社を持ってるから、

金なら腐る程ある。良し、おちびはじじいのコネがあるから本社勤務だ。本社は帝都にあるから、引越し決定だ！」

青い眼をきらきらさせて言う竜帝さんはとってもラブリーだったけど、なんとなく胡散臭い感じがして私はカイユさんに確認せずにはいられなかった。

雇ってくれるのは分かったけど、細かいとこは単語が全く理解不能だし。

雇う・帝都・引越しは分かったけど。

「カイユ。竜帝さんが私を雇うって言ってるの。どう思う？」

カイユは竜帝さんの部下だけど私に嘘をついたりしない。

なんでか分からないけど私のことを真剣に考えてくれる人だ。

カイユさんは空色の瞳を見開き……嬉しそうに言った。

「トリィ様。私を信頼して下さってありがとうございます。その信頼を失わぬよう、カイユの率直な意見を述べさせていただきます」

カイユさんの顔から笑みが消えた。

「トリィ様がどうしても仕事をしたいとお考えなら陛下に雇われるのは現時点では最善の策でしょう。各国の権力者も陛下の庇護下にあるトリィ様には直接的に接触できなくなります。後見人として認定されたダルド殿下の面子を保ちつつ、セイフォンの政治からも距離が置けます。それに陛下の貿易会社は竜族で構成されておりますから‘つがい’のヴェルヴァイド様がご不快な思いをされぬ様な労働条件・労働環境の提供可能です。人間社会ではまず無理でしょう。竜族の雄の特性は同じ竜族しか正しく理解されません」

むむ～。

単語が難しいです、カイユさん。

あ、そうか！　彼女はハクちゃんの通訳があることを前提にしたんだ。

私だけに言ったんじゃない。

ハクちゃんに向けて言った言葉でもあるんだね、きっと。

「ハクちゃん！　通訳し……え？」

通訳してもらって、意見をきいて相談を……と思った私はハクちゃんを見て、びっくりした。
「ハ、ハクちゃん？」
鍋が蓋をされていた。
蓋は使うつもりがなくて、テーブルの隅っこに置いといたのに。
ピタっと、しっかり蓋が！
まさか自分で蓋したの？
しかも、かたかたいってる。
鍋がかたかた……振動？
「ハクちゃん、どうしたの？　具合、悪い？」
だいぶ落ち着いたようだったのに。
＝りこ。我は、我が情けない。りこに合わせる顔が無い！
「え？」
鍋の揺れは激しくなった。
かたかたが、がちゃがちゃになり……変な楽器みたい。
＝我は今まで仕事で金銭を得、りこを養うという発想が無かった！　りこが‘身売り’を考えるまで……うぅ！　りこが身売り、身売り？　娼館？　我と暮らすためにりこが！
え？
えぇ～！！
念話だから分かりました！　私は‘娼館’で‘身売り’して働こうかって言ったのか！
ぎゃー！　うそうそ、なしですよ！
有り得な～い！
「や、ち・が～う！　勘違い、間違いです！」
＝り、りこに身売りさせるくらいなら我が……我が男娼になって働くぞ？　りこの為なら女も男も獣も抱くぞ！　いや、抱かれるのか？　うぅ、まぁ何とかなる！
「ぎゃー！！！　やめて～！」
だ、だん、男娼？

女……男と、け、けもっ、獣って何?!
がたがたがちゃがちゃ音を立てて揺れる鍋を私は凝視しつつ私は叫んだ。
『ハクちゃんを‘娼館’で‘身売り’させるなんてやだー！　竜帝さんの会社に就職します、そうします！　帝都だってどこだって転勤オッケーですぅぅう!』
てんぱったせいか……思わず日本語になってしまいました。

「よし!おちびは本社勤務決定だ。帝都はいいぞ~！　大陸の中心都市だから活気に溢れ、賑わっている。定住してるのは竜族が多いからヴェルだって堂々連れて歩けるぞ」
「は、はぁ。そうなんだ」
取りあえず竜帝さんに雇ってもらうことにした。
仕事内容は不明だけどハクちゃんが反対しないから、私に不利じゃないってことだと思うんだけど……。
私達は室内の食堂に移り、晩御飯を食べることにした。
すっかり陽が落ちた中庭は人間の私には肌寒く、小さいくしゃみをしてしまったらカイユさんが慌てて撤収を開始した。
私はハクちゃんの鍋を抱え、竜帝さんを食堂に案内した。
食堂っていっても３０畳位あり、長方形のやたらでっかいテーブルが中央にバーンと設置された‘食べることだけに使う’部屋だ。
ハクちゃんはご飯を食べないから私と離宮に来て初めて食堂に入ったと言ってたっけ。
私は定位置の席に座り、テーブルの上にハクちゃん鍋をそっと置いた。
竜帝は向かいの椅子……ではなくテーブルの上にちょこんと座った。
そりゃそうだよね。
椅子に座ったらご飯に手が届かないし。
ダルフェさんは厨房で忙しそうに働き、出来上がった料理をカイ

ユさんが給仕してくれている。食堂と厨房は扉で繋がってるから開けっ放しの扉の向うで手際よく料理を仕上げる姿が覗けるし、食欲をそそる香りも漂ってくる。

いつもは私も料理を少し手伝わせて（習いたいし。もともと台所仕事が好きだし）もらえるんだけど、竜帝さんが来てるから今日はダルフェさんに‘余裕’が無いから駄目なんだそうだ。

竜帝さんは味に煩いうえに大食いだった。

野菜とソーセージの煮込み、川魚のから揚げと数種のプチパン、小エビのサラダというメニューの私とは対照的な肉が中心の料理を信じられないような速さで食べていた。

骨付きステーキも鳥の串焼きも小さな手でフォークとナイフを上手に使い、次々とお皿を空にしていく。

カイユさんは慣れた様子で次々とお変わりを差し出す。

あの小さな身体のどこに入るんだろうか？

お腹は特に膨らんではいない。

テレビに出ている大食いタレントは食べれば食べるだけお腹が大きくなってたのに。

この子の身体はどうなっちゃってるんだろう……摩訶不思議だ。

「ハクちゃんはご飯を食べないのに。竜帝さんはいっぱい食べるね？」

素朴な疑問。

見た目は良く似た小型犬サイズの竜なのに。

あれっ？　カイユさんとダルフェさんも竜族。もちろんご飯を食べる。

食べないのは、ハクちゃんだけ？

「あ？　ヴェルは、まあ、その～なんだ、特別だな。規格外竜族っつうか。ほれ、念話だってヴェルだけの能力だろ？　念を送るのは誰でも出来るが念を受信し、会話を成立させるなんて芸当はじじいだけだ。ちなみに俺様達は‘電鏡伝達法’を使って遠く離れた相手と会話をすることができるんだ。電鏡石は俺様所有の鉱山からしか

採れないから、うちの会社の稼ぎ頭だ！」

うーん。半分位しかわかんないですよ。

竜帝さんはカイユさん達と違って私の低い語学力に合わせて喋ってくれないから、かなり難しい。それに、中庭での件も中途半端だし。

私の頭の中で整理してみると……。

1：帝都に行くと、ハクちゃんを暴走させないように頑張る私を竜族の皆さんがサポートしてくれる。

2：私を使ってハクちゃんの力を利用しようという多くの人間がいる。帝都に行けばそういった人達から距離を保てる。

3：私では独立生計を営むほどの収入を得られる職種につくのは難しい。やばさげな仕事くらいしか無い。

4：どうやら竜帝さんは会社を運営していて私を雇ってくれることになった。たいへんな優良企業であるらしい。

5：私の後見人はダルド殿下で、私の籍はセイフォンに属することになった。ただし後見人であるダルド殿下が死亡後は無籍となり、どこにも属さない。

5に関しては竜帝さんがカイユさんに伝え、カイユさんが分かりやすく噛み砕いた内容で教えてくれた。ハクちゃんが通訳してくれればよかったんだけど、今のハクちゃんは様子が変なのでみんなはあえて刺激しないようにしてるというか、無視しているというか。

鍋の震えは止まり、へんてこな楽器のような音もやんだ。

しかし。

しかしですよ。

微動だにしない鍋。

しかも蓋をしたまま、ぴくりとも動かない。

中にハクちゃんがいるはずなんだけどな～。

さすがに私も話しかけづらくて、放置状態なんだよね。

「で、おちび。俺様は飯食ったら帝都に帰る。後の事はカイユに任せてあるからな。それと俺様がおちびに会いに来たことは内緒だ

ぞ？　ダルドに言うなよ？　セシーだけは俺が来たことを知っている。何か質問されたらそのまま話していいがな……」

え？

帰る？

「もう外、暗いよ？　帰るの危ないと思う。泊ったほうがいいよ」

帝都って、けっこう遠いみたいだし。

こんなちっちゃい竜が一人で夜道（夜空？）を帰るなんて……。

「泊る？　冗談じゃねぇ。俺様もさすがにそれは……」

離宮は広いけど居住スペースは少なく、１つだけある客間はカイユさん達が使っている。

私の使ってる部屋は二間続きですごっく広いから、泊まれるよ？

「私の使ってるベット、大きいから私とハクちゃんと竜帝さんと寝れるよ！」

なんて素敵！

白い竜と青い竜と……両手に花だ！

鱗のある竜と川の字で寝れる～。

鱗・私・鱗！

うふふ～ん。

うわ～、ナイスアイデア。　まさに鱗パラダイス！

「なっ？　お、おちび！　てめぇ、俺様を殺す気……ぐぎゃっつ？！」

白く長い指が竜帝さんの細い首を締め上げていた。

そのまま持ち上げ、白い石の床に叩きつける。

お約束のように青い竜を踏みつけるのは……。

「＜青＞、貴様……りこと同衾すると？」

真珠色の長い髪。金の瞳に黒い長衣。

「だ、だめー！　ハクちゃん、やめてー！」

世界を滅ぼす悪の帝王登場ですか！

鍋の中に居たんじゃないの？

鍋、鍋～！

「やめなさーい！」
がしっと掴み投げつけるとそれは見事、顔面にヒットし床に落下、高い音を立てて転がった。

カーンカラカラカラカラ～ン。

鍋の蓋は人に向かって投げてはいけません。

「姫さんってけっこう乱暴だよなぁ～。豚、焼けましたけど食いますか陛下？」

第２３話

テーブルの上に１メートルはありそうな、子豚の丸焼き、が銀製の角皿に乗せられ、どどーんと置かれた。
子豚がこんなに大きいなら親は牛より大きいのでは……。
「姫さんは豚肉は苦手だから、これな」
ダルフェさんが私の前に置いてくれたのは４種類のお菓子が盛られたお皿だった。
「異界語を俺に使ったから本来はデザート無しなんだが、特別な。姫さんには糖分が必要だ。今日は大変だったもんなぁ～、お互いに」
うん。
大変でした。
でもね、ダルフェさん。
「ありがとうダルフェ。でも、大変、はまだ終わってない」
そうなのです。
、大変、は現在進行形です。
「おちびー！　じじいをなんとかしろよっ」
竜帝さんが床で叫んだ。
「……足、どけなさいハクちゃん！」
「しばし待て、りこ。＜青＞に止めを……」
「手出ししないって言ったでしょう？！」
「うむ。手は出してないぞ？」
屁理屈言ってるし！
寒気がするような美貌は無表情。
鍋の蓋を顔面にうけたのに変化なし。
痛くないの？
「足も駄目。蓋、ごめんなさい。やりすぎました」
一応、謝っておこう。
大人気なかったし。

「蓋？　＜青＞がりこを誘惑したことに気をとられてたからな。気がつかなかったぞ？　蓋がどうかしたか？」
はっ？
なんですと？
そのお綺麗な顔面にヒットしたんですけど。
しかも誘惑って何。
「トリィ様。ヴェルヴァイド様は雄の本能に従い他の雄を排除するほうに意識が向いているようです。先ほどまでは抑えていたようですが、トリィ様がその……陛下をお二人の寝所に招くとおっしゃったので。陛下は‘つがい’を得ていない独身の成竜です。お怒りになるのも無理ないことと……」
カイユさんが苦笑しながら言った。
ダルフェさんが追い討ちをかけるように付け加える。
「あのなぁ姫さん。大事な大事な‘妻’が他の雄をベットに連れ込もうとしたら人間だって怒るだろう～が。誘った妻じゃなく‘被害者’を責めるってのは竜の雄の悲しい性っていうかなぁ。蜜月期中は特に雌至上主義だからどんなに理不尽だろうと旦那が姫さんを怒ることはないんだよ」
わ、私が悪いの～？
ベッドに連れ込む？
そんなつもりじゃなくて……うひゃー、よく考えたら竜帝さんだって竜族なんだから人型になるのか！
成竜って人間でいえば成人ってこと？
つまり餓鬼竜だと思ってたけど、竜帝さんって大人なのか！
がきんちょだと……１０代後半位だと思ってたよ。
む？　１０代後半だって大人か！
「お、おちびぃ！　言動には気をつけろ！　ってかさっさと助けろぉおお！」
はい。
私が悪かったです～！

こんがり焼けた豚さんをダルフェさんが手際よく切り分け、竜帝さんのお皿に乗せていく。
それをぱくぱくと食べる小さな青い竜。
数分で豚は残り三分の一程になっていた。
肉食竜だ、絶対そうだ。
付け合せの野菜やサラダは全く口にしてないもん。
しっかし、かわゆいの～。
川の字計画挫折は非常に残念なのだ。
私の視線に気づいた竜帝さんはフォークをくるくるっと回しながらぶーたれた口調で言う。
「あんまり俺様に見蕩れんじゃねぇよ。おちびの熱い視線に比例してじじいの視線が冷てぇを通り越して痛いんだ。ちったあ学習しろ」
「う、うん。ごめんなさい」
ううう。反論できません。
その通りでございます。
「あ、あの。ハクちゃん、今のはっ、その、あのっ」
隣に座ったハクちゃんは殺人光線的視線を竜帝さんに放つのを止め、私に視線の高さを合わせるために首を傾げた。
真珠の髪がふわりと揺れる。
とんでもなく綺麗なのに無表情。
この顔に微笑まれたら……腰を抜かす自信が私にはある！
「りこ。我が一番‘かわゆい‘のだろう？　りこは我のことが‘大好き‘なのだろう？　ならば他の雄は必要ないのだから＜青＞は片付けても問題ないではないか。どうして駄目なのだ？」
冷酷悪役美形顔で‘かわゆい‘って……。
しかも大好き発言を此処で言いますか。皆様の前で！
ガチャーン。

「し、失礼」
豚さんを切り分けていたダルフェさんがナイフとフォークを落としてしまい、慌てて拾うと早足で厨房に戻っていった。
カイユさんをちらりと見るとにこにこしている。
竜帝さんは……。
「俺様は帰る。今すぐ帰る……ぶぶっつ」
フォークとナイフをきちんと揃えてお皿に置き、ふわりと中に浮いて言った。
「くくっ……ヴェルに踏み殺される前に笑い死にしそうだ。飯も食ったしな。じゃあな、おちび。帝都で待ってるぞ。カイユ、後を頼む」
青い手を軽く上げた瞬間に、竜帝さんの姿は消えていた。
「えっ、竜帝さんっ！　き、きえっ？」
消えちゃった！
「消えてはない。通常の動きの範囲内の動作だがりこの視力では捕らえられまい。で、りこ。
何故＜青＞を始末したら駄目なのだ。あれがいなくなったとて次代はすぐに〝発生〟する。世界の秩序になんら影響は無い。我はりこが少しでも〝かわゆい〟と思った者は目障りだし、とてつもなく不快な気分になるので処分したいのだ」
ハクちゃん。
なんだってこんなに心が狭いというか、器が小さいというか。
竜族の雄だからってあんまりなんじゃない？
ハクちゃんは普通の竜族じゃないって竜帝さんが言ってたけれど。
その自己中思考回路はなんとかならないのかな～。
さっきの中庭でのやりとり、忘れたの？
聞いてなかった？
ハクちゃんがそんなんだから、世界を滅ぼす悪キャラ認定されちゃうんだって！

それを止める勇者役が私になっちゃってるんだよ～。
私はそんなキャラじゃなぁ～い！
平穏・平凡・平和が好きな小市民キャラですって。
なのに、なぁ～のぉ～にぃい。
うう。顔が引きつるのが自分でも分かるよ。
口の端がぴくぴくする。
「……怒るよ？」
私の言葉にハクちゃんは大げさなほどびくりと肩を揺らした。
「お、怒るな。りこ、我が悪かった。我が全部悪い！　すまなかった」
顔色を伺うように言うハクちゃんにますます私はイラッ～としてしまう。
「悪かったと思うなら、どこがどう悪かったか言って。説明して」
悪の大魔王様はおっしゃった。
「……一人で部屋に行き、着替えてきたことだな？　りこに何も言わず離れたうえにまた、黒い衣服を選んだから……。しかし、我はやはりりこの持つ色を身につけたく……」
違うよ。
違うよ、ハクちゃん。
やっぱり。分かってない。
さっきの会話と繋がってないし。
その頭の中はどうなってるの。
なんだか……可哀相になってきた。
可哀相で、悲しい。
ハクちゃんは自分でも言っていたから。
‘足りない‘んだって。
感情が乏しかったから人の気持ちを察することが難しいって……
出来ないって。
「術式を使ったから気づかれないと思った我が浅慮だった。着替えれば分かるものだ……りこ？」

両手を伸ばした。
私の動作に合わせるようにかがんでくれたハクちゃんの首に腕を回し引き寄せる。
男に人に自分から抱きつくなんて以前の私なら考えられなかったけど、ハクちゃんに関しては違う。綺麗過ぎて人間っぽくないからか、おちび竜の印象が強いせいか……自然と触れるできてしまう。
もっとドキドキするものだと思ってたけれど。
ドキドキではなくて……安心感に近いかな。
「体調が変なの治った？　もうなんともない？」
金の眼が細められた。
微笑んだようには見えない。
ハクちゃんは微笑まない……微笑む表情が作れない。
他の人から見たら眼を細めたハクちゃんはかなり怖い顔かもしれないけど。
でも、私には。
「うむ。全器官復旧したぞ。痺れも無い。心配をかけてすまなかった。だが……何故か嬉しかった。りこが我を‘心配’してくれて。すまないと思うのに、それ以上に‘嬉しい’のだ。こういったことは‘普通’なのか、それとも‘異常’な思考なのかが判別できぬのだが」
私には……はにかんだように見えるの。
金属のような冷たい印象の金の眼も、私にはお日様のように優しく暖かく思えるの。
「異常じゃ無いよ。それは」
心配してもらうと、愛情を感じるから。
私が手を擦りむいた時、ハクちゃんの取り乱しようを見て私もちょっと嬉しいって思っちゃったもの。
白状すると……私のことで大魔王（？）になっちゃうハクちゃんを見ると心がぽわ～んってなっちゃうの。
あぁ、この人は私のこと本当に好きでいてくれてるって安心する

自分がいる。
こんな私でもハクちゃんは本気で‘つがい‘にしてくれたんだって実感してしまう。
愛情確認方法としては間違ってるのかもしれない。
でも。
だって。
私はハクちゃんみたいな‘特別‘な存在じゃない。
なんの力も持ってないし、ハクちゃんと釣り合う美貌も無い。
ハクちゃんに豪華な衣装を買ってあげれる財力どころか無一文で、居候だし。
自信なんか持てる要素ゼロ。
‘つがい‘という言葉に縋るしかないんだもの。
「ハクちゃん、ハクちゃん。私、私ね……ハクちゃんのことが好きなの。好きになっちゃったの。だから、だから……」
あれ？
なんか、おかしい。
「りこ？」
身体に力……入らない。
「りこ！」
瞼が重い。
頭の中がふわわ～んって。
あれ？
私、どうし……。

「お？　薬が効いてきましたね。姫さんの意識が完全に落ちたら出発しますよ旦那。んなに睨まんで下さい。ハニーが姫さん用に調合したもんだから安心ですって。ハニー、駕籠を中庭に廻してくれ。俺が飛ぶよ」
え？　く……くすりって、薬？

「ごめんな、姫さん。説明は目が覚めたらな。おやすみ」

ちょっ！

あ、あれれ……。

「……安心して眠るが良い。我の愛しい、つがい、よ。りこ、我もりこを……りこだけを愛している」

冷たいのに柔らかで優しい感触。

それが顔のいたるところに何度も落ちて来るのを感じながら、私は意識が溶けていき……。

ねぇ、ハクちゃん。

今、言ったこと。

目が覚めたら、もう一回言ってね。

あれは夢だったなんて、言わないでよね？

あ。

デザート……まだ全部食べ終わってない。

第２４話

すっかり寝入ったはずなのだが。
りこの両腕は我の首に巻かれたままだった。
まるで離されるのを拒むように細い……細く華奢な身体が隙間無く我に寄り添う。
このまま抱き上げて連れて行きたいのはやまやまだが、もし……もしも落としてしまったらと思うと恐ろしく行動に移れない。
我の腕から落ちたりこは怪我をした。
脆く柔らかな皮膚から出血するという大惨事があったばかり。
やはり我はまだまだなのだ。
‘抱っこ’はまだ早かったのだ。
我の愚か者。
欲望に負けて‘抱っこ’を強行し、結果的にりこに怪我をさせるなど最悪だ。
なので。
今はりこの上半身に手を添えているだけで我慢している。
我は健気だな。
「旦那。いいかげんにやめなさいな。……止まんなくなったら困るの旦那でしょうが。薬で寝かされてる間に手ぇ出されたりしたら姫さんが可哀相です」
りこの頬から口角にかけてゆっくりと滑らせた唇を離し、我は反論した。
「手を出してなどいない。少々、舐めただけだ」
りこの小さな顔に何度も唇を落としたのはりこを安心させようとしただけで。
りこの暖かな咥内から体液を摂取したのは正当な理由があってのことで。
投与された薬剤が身体に悪影響、または副作用がないか確認した

にすぎない。
やましいことなどない。
うむ。
少しはあったのか？
ま、些細なことはよしとしてだ。
唾液からの情報によると薬は問題無し。
ただ、カイユが推測していたより効果が持続しそうだが。
疲れていたのだろう。
＜青＞の馬鹿がきて騒いだからな。
我の所為では無い……と、思いたい。
通常よりも体力が落ちているところにカイユ特製の薬を盛られたのだ。
このままだと7日間は目覚めまい。
ダルフェは5日間必要だと言っていたが。
よくよく考えてみると……。
長すぎるのではないか？
我は我慢できるのか？
5日間もりこの声が聞けないなど、拷問だ。
5日間もりこの黒い瞳が我を見ないなど耐えられない。
駄目だ。
無理だ。
我は、もたん。
「ダルフェ。3日だ。それ以上は我の気が狂う可能性が高い。途中、メリルーシェの支店に降りろ。そこでりこを目覚めさせる」
ダルフェの顔が引きつった。
メリルーシェは4つの通過国の中間よりも帝都に近い位置にあるが、ダルフェの計画では途中はどこにも降りずに帝都に行くつもりだったからな。
「3日？　姫さんを5日間【繭】に入れて帝都まで飛ぶつもりだったんですがねぇ。旦那～、最高速で飛ぶとしてせめて4日……無理

っすね。その様子じゃ。分かりましたよ」
再びりこの顔中に接吻しはじめた我を見たダルフェが額を押さえ、言った。
「【繭】に入れちまったら、触れることも姿を見ることも出来ませんからねぇ～仕方ないか。好きなだけ味見してて下さい。俺は竜体に戻って中庭に待機してますから。くれぐれも力加減を間違えないで下さいよ？　人間はすぐ壊れますからね」
中庭に向かうために退室したダルフェがカイユに日程変更を告げる声がしたが、我はそれどころではなかった。
少しでもりこに長く触れていたかった。
りこを【繭】に入れたら3日も会えないのだ。
考えただけで辛く、内臓を吐きそうになる。
りこの顔面に臓腑をぶちまけるわけにはいかん、耐えろ我！
りこを【繭】に入れたくはないが、こればかりは仕方の無いことであって。
異界人であるりこの肉体は竜の高速移動に、耐えられない可能性がある。
慎重にならざるえない。
体液の情報から推測して……りこはこの世界の人間と比べるとかなりの虚弱体質だ。
免疫力も信じられないくらい低い。
こんな弱い生物が食物連鎖の頂点に立つ人類として進化したりこの世界。
平和で……無菌なのだろうか？
我が与えた竜珠の力がなければりこは簡単に感染症にかかり、あっけなく死んでいたかもしれんのだ。
そういった‘生物’なのか、りこが単体として弱いのかは分からないが。
とにかく、強靭な身体を持つセシーのような軍人などとは違うのだ。

あやつらは竜の背に直に乗り、戦場に駆けつけるくらいは平気でするからな。

術式での移動も考えたが……。

空間移動系の術式は心体に負担がかかる。

王宮内での移動程度なら我の術の精度であれば、りこに負担をかける可能性はゼロ。

だが……距離が伸びるに従い危険度が増す。

我の術は人間の術士とは比較にならん精度があるが、万に一つの事を考えるとりこを長距離移動させるのに用いようとは思わない。

人間共の移動手段として術式があまり使われないのはそのためだ。

最も重宝がられるのは戦場であって、まともな神経の持ち主は日常では使わん。

移動した先に手足ばらばらで着く危険を犯してまでやろうと思うまい。

再生能力を持たない人間は確実に死ぬしな。

馬車ならば1ヶ月の旅程が必要な帝都に竜なら5日間。

りこの身体の弱さを考えると1ヶ月の長旅はリスクが高すぎた。

他の大陸にあるような列車や空挺と違い馬車は慣れぬ者には辛いはずだ。

りこの身体に負担をかけてしまう。

カイユは当初、観光しつつ馬車での旅行をりこに楽しんでもらうと言っていたが寝起きの錯乱状態を見て考えを改めたようだった。

思いのほかりこの心身が弱っていると認識したからだろう。

りこが竜帝の口車にのり、帝都行きを承諾してから念話で竜帝・ダルフェ・カイユと話し合った結果が【繭】でりこを保護し、駕籠で運ぶというものだ。

りこの肉体を強化する方法もある……が、まだ早い。

失敗する確立のほうが高い。

これに関しては我に問題がある。

ダルフェも承知している事実なので、提案すらしなかったな。

‘抱っこ’すら完遂できなかった未熟な我には、無理だ。
「……はぁ」
ため息が出た。
む？
我が、ため息？
この我が。
「りこ。我は今‘ため息’が出たぞ？」
意識の無いりこからはもちろん返事など無かった。
返事を期待して言ったつもりではないのだが、やはり寂しい。
うむ……‘寂しい’か。
この我が‘ため息’をつき‘寂しい’と感じるとは。
我の感情は全てりこから生まれ、りこに向かう。
我の‘世界’はりこで埋められ、他の入る余地など無い。
「りこ、りこ。我は‘寂しい’。これからの3日間……きっと、とてつもなく‘寂しい’のだな？」
りこの背を撫でる手の力加減に注意しつつ、黒い髪に顔をうずめた。
あぁ、離れたくない。
「……我も共に【繭】に入り」
「駄目です」
我の言葉を途中で遮り、カイユは我からりこを奪い抱きかかえた。
もう準備が終わったのか。
早すぎるぞ、カイユ……。
「ヴェルヴァイド様が一緒に【繭】入ったら内部溶液濃度がめちゃくちゃになります。トリィ様に後遺障害が出てしまいますよ？　さ、トリィ様。カイユが【繭】に入れて差し上げます。ご安心くださいね」
ダルフェよ。
お前の‘つがい’はりこの役に立つ。

だから殺さぬが。
が！

「ああも容易くりこを、抱っこ、しおって。我は、我は……あっ！」

し、しまった！
我としたことが！

「ちょ、ちょっと待たんか！　もう一度、りこを舐めさせ……カイユ、待ってくれ！」

りこが寝た後、内緒でしている、お休みの接吻、をまだしていないぞ、我は！

第２５話

月明かり中、真紅の竜が東に向かって飛んでいく。
その大きな身体は後ろ足に貴人運搬用の駕籠をしっかりと持ち、背には人影が二つ。
高速で飛ぶ竜は瞬く間に視界から消え、夜空には何事も無かったかのような静寂。
「行ってしまわれたのね、トリィ様。ふふ……明日から寂しくなりますわ」
王宮の４つある尖塔の中で最も高い尖塔の先に立ち、セシーは軽く眼を伏せた。
＜監視者＞とその‘つがい’はセイフォンを去った。
別れの挨拶すら出来ずに。
優しい異界の娘としては不本意な事だろう。
娘の意思と関係なく物事を進められての旅立ちだろう。
竜帝がわざわざ帝都から出てきたのだ。
こうなることは予想の範囲内。
＜監視者＞・竜帝・竜騎士が揃っていてセイフォン側に死者は無く、損害も大したことはないという幸運。
しかも‘つがい’の娘の後見人の立場をダルドは得たのだ。
自分が望んだ以上の結果を手にした。
隣国ホークエの奴らが地団駄踏む姿を想像すると笑いが止まらない。
遅くても１週間で大陸中の国に竜帝から告知されるはず。
これでダルドが存命中はセイフォンは安泰。
国力を回復させ、溜め込むことに専念できる。
問題はダルドの暗殺だ。
竜帝はダルドが‘生きている間’とはっきり言った。
つまり、死んだら‘終わり’なのだ。

‘つがい‘の後見の座を手に入れたいと考える者には邪魔になる。
これからは日々、暗殺者を片付けなくてはならないが……戦をするよりずっと楽だ。
セイフォンは後見人という見返りの変わりに＜監視者＞の‘つがい‘を利用しようと目論む不埒な輩を狩り出す餌として皇太子を差し出した。
記憶消去の影響でダルド達はいまだ目を覚ましてはいないが、彼らも今回の竜帝の計画に異議は無いだろう。
王族の命は国家のもの。
国家のために王族はあるのだから。
「うふふっ。忙しくなるわ……‘お客様‘をこの私が全て‘おもてなし‘してあげましょうね」

「これからセイフォンには各国の暗殺部隊が勢ぞろいする状況が長く続きます。そのような物騒な国に一分一秒たりと長居は無用。トリィ様に血なまぐさいセイフォンは似合いません。愛らしいトリィ様には人間なんて野蛮で凶悪な生き物の社会より、穏やかな竜族の元の方が過ごしやすいはずです。ヴェルヴァイド様もそう思われるでしょう？」
セイフォンの国境を過ぎホークエの首都ベルツェ上空でカイユが問うてきた。
ダルフェの額に立って術式を行使している我は進行方向を向いたまま答えた。
「我が選ぶのではない。決めるのはりこだ」
面倒だったが、りこに関することだったからな。
「しかし、トリィ様はっ」
「黙れカイユ。気が散る。次は許さん」
何か言いかけたカイユが口を噤んだ。

ダルフェが飛行する高度は雲より遥か上。
下界のホークエの姿は全く見えないが、どうも大気が不安定だ。
この下は雷雨かもしれんな。
我自身は風圧などに足元が揺らぐことはまったく無いのだが……
駕籠は違う。
りこを運ぶ貴人用駕籠は素材や内装は良いが、快適さを求めるために風圧を避ける構造とはかけ離れている。
そのために術式を使って風が駕籠に触れる直前に、転移させている。
風の‘力’だけを抜き取り転移し、後方に流す。
りこの駕籠に少しの振動も与えたくない。
丸みを帯びた長方形のそれは品の良い宝石箱のように繊細な装飾が施され、朝日を反射しきらきらと輝いている。
高速移動においては通常、細長い流線型の軽金属製のものを用いるのだが。
カイユが手配してあったのは‘空飛ぶ宝石箱’のこれだった。
最初から我を‘風除け’として使うつもりが丸出しだ。
まぁ我としても実用一点張りの‘空飛ぶ棺おけ’より、りこには宝石箱の方が似合うと思うので文句は無い。
しかし……りこの顔を見ずに過ごした昨晩は辛かった。
我は睡眠が必要ないので毎晩、りこの寝顔を見て吐息を感じて楽しい夜を過ごしていたのに。

りこ。
我は‘寂しい’の真っ最中だ。
このままでは……また泣いてしまいそうだぞ？

「りこ……りこが側に居てくれないと我は、寂しい」
我の腕の中にあるのは暖かくて柔らかなりこの身体ではなく、りこが異界から落とされた時に着ていた‘パジャマ’という衣服と‘

スリッパ、なる履物と我の、かけら、が入った絹の巾着袋。
りこが前に言っていた。
この3つだけが、自分の物、だと。
「我だって、りこの、もの、だ」
りこの、パジャマ、に顔を埋めると、りこが、抱っこ、してくれたような気がした。

りこ。
、寂しい、という感情はとても辛いのだな。
家族を、世界を奪われたりこは、寂しい、はずだ。
りこがこんなに辛い思いをしていたのに。
我が、寂しい、をきちんと知ったのは、感じたのは昨夜からで。
我はまだ、駄目、だ。
、寂しい、を抑えられない。

「りこ。我は、寂しい、のだ……りこ」
我の、寂しい、はりこが救ってくれる。
りこの、寂しい、を……我は救えるようになりたい。

第２６話

「支店長～！　カイユ様から連絡が入ったから伝えてってミチ君が……。到着時間は予定より早くて、なんと夕方には着いちゃうかもって！　どうしましょう～」

メリルーシェ王国東部最大の都市フィルタにある青印商事メリルーシェ支店。

２階の事務所で午後のティータイムの準備をしていたバイロイトは＜今週の副支店長＞の言葉に耳を疑った。

事務所に駆け込んできた少女は今、なんと言った？

子持ちの自分ではあるが、聴力が衰えるほど老いてはいない。

幻聴か？

あまりの忙しさにやられたのか？

「落ち着きなさい、コナリ副支店長。そんなに早く着くはずがないよ。君の聞き間違えだろう」

巻き毛を頭頂部で１つにまとめ、大きなピンク色のリボンで飾ったコナリ嬢は大きな瞳をうるうるさせながら頷いた。

「コナリも早すぎると思いますぅ。でも、でも～」

セイフォンを出たのは一昨日の夜だと報告を受けている。

ここまでは通常飛行速度で丸３日以上かかる。

あわてん坊のコナリのことだ。

憧れの人であるカイユが関係した伝言に舞い上がってるだけだろう。

茶器をテーブルに並べ、昨日の昼間に買ってきておいたアチア菓子店の焼き菓子数種を器に盛り付けた。

「ほら、コナリの好きなアチアのお菓子ですよ？　先に食べていいですからね。私はミチ課長達を呼びに行ってきますから」

事務所の扉を開けた支店長に副支店長が慌てて注意をした。

「違いますよ！　今週の課長はラーズ君ですぅ。ミチ君は係長です

よ～。支店長はいっつも間違えるんだもん。ジャゼさんを見習ってくださぁい！　ジャゼさんは半年先の役職当番まで暗記してますよお」

「……すみません。善処します」

今週は副支店長がコナリ、係長がミチ。ラーズは課長。

どうでもいいような気もするが、彼等にはこだわりがあるようなのでバイロイトが合わせるしかない。

コナリ達三人はまだまだ幼いのだから。

幼竜は絶対数の少ない竜族にとっては宝物。

愛情を注ぎ庇護してやる存在の可愛い遊びに付き合うのは、なかなか楽しいものだ。

階段を降り、１階の店舗で納品された新商品の展示作業をしている少年二人の姿に自然と顔が綻んでしまう。

２０年もすれば自分の息子も共に働けるようになるのだろうか。

想像しただけで幸せな気分になれる。

「ラーズ課長、ミチ係長。お茶にしましょう。あ、ミチ係長。電鏡を貸してください。後でカイユに確認したいことがあるんです」

濃茶の髪を後ろで三つ編みにしたミチは、にこにこしながら電鏡をバイロイトに差し出した。

「はい、支店長。カイユ様は予定より早く着いちゃうみたい。楽しみです！　僕、お会いするの初めてでドキドキして……。昨夜は興奮しちゃって寝れませんでした」

「僕も、僕も！　竜騎士の中で１番強いんでしょう、カイユ様って？　母様に自慢しちゃいます。きっと驚きます！」

普段は大人しいラーズもぴょんぴょんと飛び跳ねて、落ち着きが全く無い。

「事務所で休憩しておいで。今日は皆、気が高ぶってるようだから店は早く閉めることにするよ。私が戸締りしておくから」

「はーい！了解で～す」

仲良く手を繋いで階段を上っていた二人を見送り、受け取った電

鏡を上着の胸ポケットに入れてから店の鍵を閉めた。
簡素な鍵は外から強く押せば壊れるような脆い作りだが、此処に強盗に入るような命知らずは居ないので十分だった。
青印商事メリルーシェ支店などという地味な名前ながら珍しい４階建てで、なかなかに洒落た外観を持つ建物の主が青の竜帝であるということは誰でも知っている。
店舗入り口の扉は所有者を知らしめる為に特殊な装飾が施されていた。
青い扉に浮かび上がるように彫られた羽ばたく竜の紋。
何を表すかは一目瞭然。
「さて。ジャゼリズには暫く出勤は無しと連絡してあるからよしとして」
シャゼリズ・ゾペロは最近契約した術士で昨日から休んでもらっている。
風邪をひいたらしくずいぶんと咳き込んでいたし、カイユが滞在中は休業していいと帝都の社長から指示が出ていた。
あの金儲け大好き社長らしくない指示だが……。
忙しかったので正直な所、助かった。
休業して、カイユの任務をちょっと手伝うだけでいいというし。
「さて。カイユは何泊するのかな？　そういえば何の任務中なんだろうか。社長はカイユの指示に従えってしか、言わなかったしな。私は電鏡とあまり相性の良くない体質だから、ミチにカイユからの連絡はまかせっきりにしていたけれど……。高速移動中のせいか、ミチもカイユの言葉が聞き取りずらいと漏らしていたな」
電鏡は手の平に乗る程度の小さい物を、この支店では使っている。
携帯に便利なことが売りの製品だが、大型の物より１回の使用時間が短いのが難点なのだ。
カイユが使っているのも同じ物だから１回に３分程度しか使えないし、１度使うと１時間程休ませないと音声がぶれてしまう。
携帯用電鏡はいくつかを使いまわしするのがこまめに連絡をとり

たい場合のコツだが、カイユは運悪く1つしか持っていなかった。
帝都から4つも持って出たが、割ってしまったらしかった。
電鏡はガラスほどの強度しかない。
見た目より乱暴で凶暴な性質をカイユが持っているのを知っているバイロイトは驚くこともなく、そうだろうなと思っただけだったが社長は怒っていた。
電鏡は高級品だ。
カイユが壊した3つ分の金額は……考えると頭痛がしそうなので考えない。
頭痛。
バイロイトは電鏡と相性が悪く、使用中は酷い頭痛がするからなるべく使いたくなかった。
が、そうも言ってはいられない。
ミチから伝えられたカイユの希望は最上階を貸し切ることと、新鮮な魚介類と野菜などの食料品の備蓄（なぜか大量のラパンの実も）。
はっきり分かってるのはこれだけだ。
他にも要求はあるようだが……ミチには聞き取れなかったのだから、仕方ない。
カイユが電鏡を1つしか持っていないので、1時間程しないと連絡事項の確認も不可能。
「ゆっくりとお茶をして、こちらから連絡を入れてみましょう。あせっても無理なものは無理。不確かな音声では、重要なことを間違えてしまう恐れもありますからね」
細身の長身に品の良い顔立ち。
灰色の髪はきっちりと後ろで1つに縛られている。
珍しい藍色の眼は、彼の妻のお気に入りで。
華美ではなくすっきりとした衣服は最近流行っている黒の竜帝の大陸風の背広の上下。
性質は穏やかで優しく、生まれてから1度も声を荒げたことすら

ない。

そんな支店長を悲劇が襲うのは数十分後。

彼は頭痛ぐらい我慢するべきだったと、死ぬほど後悔することになった。

「今の、なんですかぁ？」

のんびりと紅茶と焼き菓子を楽しんでいた４人は窓の外を上から下に落ちていった物体を目撃し、カップを置いた。

人間よりも優れた視覚を持つ彼らだが……コナリは一応、支店長に聞いてみた。

「私には扉に見えました……ね」

「それはコナリだってわかりましたよぅ！　なんで扉が空から降ってきたんですかぁって質問したんですぅ。だって、あの扉って特１等級貴人用駕籠のじゃないですかぁ！　高級品ですよぉ、もったいないから拾ってきます」

扉を回収すべく事務所を出て行ったコナリは階下への階段に向かったが、バイロイトと少年２人は逆方向を目指して走った。

あれは空から降ってきたのではない。

支店の屋上は竜の発着所になっている。

つまり、屋上から落下したのだ。

「支店長！　この時間に竜の着地予約は入っていません。今日はカイユ様が来るから、他の予約は僕、みんな断りました！」

ラーズの言葉にバイロイトは確信した。

カイユが到着したのだ。

早すぎる上に、静か過ぎる着陸がなんとも不気味だ。

彼女らしくない。

しかも駕籠だと？

単騎できたわけではない……同行者がいるのだ。
特1級を使うような、とんでもない上客。
食料の件もこれで納得がいく。
陛下……社長と同じく肉を好むカイユにしては野菜と魚介類など、おかしいと思っていたのだ。
あの粗暴なカイユがそこまで気を使う客。
陛下の使いでセイフォンに行っていたカイユ。
カイユはいったい、誰を連れて？
「ミチ、ラーズ。二人はここで待っておいで。私が良いというまで動かないようにね」
「はい、支店長」
屋上まで数段の所で足を止め、不安げな少年達の頭を撫でてやってからバイロイトは一人で足を踏み入れた。

第27話

「振動が1つでもあればお前の首を落とすぞ、ダルフェ」
「トリィ様の【繭】が微かでも動いたら心臓を抉って、踏み潰す！
わかった？　返事はどうした役立たずがっ」

メリルーシェの都市フィルタ上空を旋回して支店屋上に降りるタイミングを計る俺に、先ほどから容赦ない罵声と脅しの言葉が浴びせられている。
竜体の俺は反論する気力も体力も残っちゃいなかった。
とにかく姫さんの駕籠を屋上に無事に降ろすことだけに集中する。
眼下に見える屋上には、用意されているはずの着地衝撃吸収効果のある特殊な絨毯が無かった。
並みの客には用意される事の無いその超高級絨毯が当然敷かれていると思っていた俺は、内心かなり焦った。
【繭】を使用しているから多少乱暴に降ろしたとしても、姫さんに傷1つ付きはしない。
はっきり言って、この高さから地面に放り投げたって平気なのだ。
駕籠は壊れるが【繭】は問題ない。
だが俺の背と額にそれぞれ仁王立ち（飛んでいる竜に乗ってるのに微動だにせず立っている化け物級のお二人）している旦那とハニーには通用しない。
先ほどからピリピリを通り越し、ビリビリ…こっちが感電死しそうなほど苛立っていた。
旦那は姫さんに会えないために道中ずっと、ずう～っと不機嫌だった。
不機嫌な旦那。
最悪だった……普通の竜なら旦那の＜気＞にあてられて心臓麻痺してるって、絶対！

ハニーはハニーで支店との通信状況に不満が爆発状態で。
メリルーシェ支店長が部下に電鏡での連絡通信を任せっぱなしで、ハニーの指示がきちんと伝わらなかったらしい。
着地準備が全くされていない屋上の状態からも分かる。
重要なことは何も伝わっていないってことが……。
通信担当がまだ幼い竜族だったためにハニーも強く言えず……竜族は幼い者に甘いからなぁ。
一生懸命なミチという少年に「お前は使えないから支店長を出せ」とも言えず、ハニーは相当困ったようだった。
妊娠中の雌竜は母性本能が数倍あがるからハニーはミチ少年には強くでられない。
姫さんを異常なまでに可愛がるのも多分、そのせいだ……と思うのだ。
1ヶ月前に初めて姫さんに対面した時、ハニーの中で護るべき対象に分類されたのには俺も驚いた。
基本的にハニーは人間が嫌いだし、竜としては珍しいほどの残虐さと凶暴性を持っている。
この大陸で竜帝につぐ攻撃能力を誇るハニーが姫さんあれほど懐くとは、陛下も誤算だったはず。
旦那の‘つがい’の座を得、あの最強竜騎士カイユを侍女にしている異界の娘。
王侯貴族なんか比べ物にならない稀有な存在。
ＶＩＰ中のＶＩＰなんだぞ？
この俺様が直々に運んでるほどのな！

なのに衝撃吸収絨毯すら用意されてないのかー！
俺に恨みでもあるのか？　ミチ少年よ。
そして俺を殺す気か？　会ったことすらない支店長よ。

「とっとと降りろ！　我にりこを返せー！　りこ、りこ、りこぉー

！」

＜白金の悪魔＞の狂ったような叫びと。

「さっさとしろ、のろまめっ！　トリィ様の午後のお茶は三時だぞ！　間に合わないのはお前が役立たずだからだー！」

愛しい妻の心のこもった声援を受け、俺は降下を開始した。

「ヴェルヴァイド様！　お、お待ち下さい！　【繭】は専用の器具と手順で開ける必要がっ」

天才的技巧で‘宝石箱’を屋上に降ろした俺はへなへなとその場に座り込んでいた。

人型をとる力も残っちゃいないから、でかい竜のままだった。

そんな俺に見向きもせず、ハニーと旦那は駕籠に駆け寄り姫さんの開封処置を始めたようだが……ハニーの焦った声から察するに旦那が切れて暴走してんのか？

あぁ、駄目だ。

目ぇ開ける気力も残ってないわ、俺。

ちょっと寝かせてくれ。

後はまかせたよ、ハニー。

駕籠が無事に屋上の床に着いたと同時に、我は動いた。

扉を引きちぎり放り投げ、中に入る。

３部屋に区切られた駕籠の内部の最も奥に位置する寝室に真っ直ぐ向かう。

後ろでカイユが何か言っているが今の我の頭にはカイユの言葉を理解しようという意思も無ければ、余裕も全く無かった。

術式で寝室に移動することすら思いつかなかった。

我の頭の中はりこをこの手に取り戻すことしかなく。
【繭】に駆け寄ると白くふわりとしたそれに両手を差し込み、左右に引き裂いた。
内部に満たされた特殊な溶液が噴出し、飛び散った。
赤く、粘度の高い溶液が邪魔でりこの姿が目視できない。
カイユの甲高い悲鳴が響いたが、どうでもいい。

りこ。
りこ、りこ……りこ、りこりこりこ！
我のりこ！

裂け目から腕を深く入れ、探り当てたりこの裸体を強引に引きずり出す。
りこの小さな身体はどろりとした赤い溶液にまみれ、生まれたての赤子のようだった。
【繭】から取り出したりこを我はかき抱き、しゃがみこんだ。
膝が震え、立っていられなかった。
しっかりと抱きたいのに腕が我の意思に反し小刻みに揺れ、りこの濡れた身体を落としそうになったので我は自分の身体を床に倒しりこを上に乗せた。
震えが止まらぬ手で溶液に濡れて重くなったりこの髪をすいてやり、赤く染まった顔を舐めて綺麗にしてやると睫毛が微かに動いた。
「りこ。目覚めろ、りこ」
りこの意識が浮上し始めたのを感じると我の身体も落ち着き、震えが徐々に収まっていく。
我はりこの中にある竜珠に目覚めを促すため、微弱の力を送り込んだ。
常より低下していたりこの体温が元に戻るまでゆっくりと力を分け与えながら、りこの目覚めを待った。
りこを取り戻したのだ、我は。

地獄の2日半は終わったのだ。
我の‘寂しい’は終わり、りことの蜜月期が再開するのだ！

「うわぁっ、この部屋、溶液まみれじゃないですか！　何があったんですか？　カイユ？」
ダルフェではない男の声。
「バイロイト！　この馬鹿が！　死にたいの？　外へ出て、早く！」
カイユが素早く反応し、部屋から引きずり出したようだが。

今の気配は。
雄だ。
しかも成竜で生殖能力のある雄が侵入した。
我のりこがいるここに！

我以外の雄の存在など……許せん。

消す。

「……ハクちゃん？」
りこの声。
我は侵入者に向けようとした力を散らし、りこに意識を戻した。
我の最優先は、りこ。
「りこ。りこ……おはよう。あぁ、『おはよう』だな、りこ」

雄は後で片付けることにして。
『おはよう、りこ』
ゆっくりと開かれた黒い瞳に我の顔が映っている。
それに吸い寄せられるように顔を寄せ、頬を摺り寄せた。
「りこ。我のりこ。会いたかっ……りこ？」
りこの眼が一気に見開かれ。

「き……きゃぁああ！　血、血まっみっ、ハクちゃん、血が、血～！ハクちゃんが血ぃいい！」

悲鳴が響いた。

なるほど、こういうことかカイユよ。

【繭】に使用する生態保持用溶液は確かに血液に似ている。

まして、りこは何の説明もないまま【繭】に入れられていたのだからな。

起きたら血まみれと勘違いするのも無理はない。

りこの意識を戻す前に溶液を洗い流して処理しておかねば、このようにりこが不快な思いをしてしまうのだな。

ふむ。

我としたことが。

我も溶液をまともにかぶったしな。

りこの眼には血まみれに見えたのか？

「りこ、落ち着け。これは血ではないのだ。溶液というものでな。可哀相に驚かせてしまったのだな。あぁ、りこは我がすぐ綺麗にしてやるので安心するがいい」

耳元で囁くように言ってやると、りこの身体がぴくりとはねた。

「んっハ、ハクちゃん……血じゃないの？　怪我しちゃったんじゃないの？」

眼に涙を浮かべ震える声で我を気遣ってくれるりこに、我の心がじんわりと熱を持つ。

人間よりも冷たいはずのこの身体がまるでりこと同じように暖かくなれたと、錯覚してしまいそうだ。

まだ少々意識が混濁しているりこは溶液という言葉を理解することはなく、我が流した血ではないということだけに安心したようだった。

「なら、いい……。ハクちゃんが無事なら、いいの」
薬が抜けきっていないせいかしっかりと動かすことのできぬ身体を我に摺り寄せ、笑みを浮かべながら言った。
「なんかね、まだ眠い……の。もう少し、いいかなぁ寝てて？」
りこの眼は眠気に耐えられないようで、再び閉じられてしまった。
我の身体の上で胎児のように手足を丸めて……。
「好きなだけ寝るがいい。我の側でなら、いくらでもな」
さて。
顔同様に、りこの全身を舐めて綺麗にしたいところだが。
したいが……。

「洒落にならん事態に陥りそうなので、やめておくか」

第２８話

お腹が空いた。
あ、ケーキが食べかけだったような。
ダルフェさんのケーキ。

「りこ」

ん？
ハクちゃん？
ハクちゃ～ん、私はお腹が空いたよぉ。
がじがじ。
硬いね、これ。
がじがじ。
硬いよぉ、味も無いよ。

「りこ？　空腹なのか？　何が食べたいのだ？」

がじがじ。
こんな硬いのじゃなくて、軟らかいのがいい。
すご～くお腹が空いてるから、がっつり食べたいかも。
久しぶりに、カレーが食べたい。
ハクちゃん、カレー……カレーがいい。

「かれー？　かれー……？」

私はカレーにするね！
ハクちゃんはなにがいい？
ハクちゃんは食べたいものある？

「我か？　言わないと駄目か？　できるならば内緒にしたかったのだがな」

教えてよ。
他の人には言わないから。
秘密にするよ、二人だけの秘密。
ハクちゃんはなにが食べたいの？

「……りこ」

え？

「りこが食べたい」

私？

困ったね～。
食べられたら死んじゃうよ。
死んじゃったらハクちゃんといられなくなっちゃうもの。
あ！
私が死んじゃったら食べていいよ。
新鮮なうちに召し上がれ！

「りこは死なない。我が死なせない。永遠に我と生きるのだ」

ふ～ん。
よくわからないよ。
でも死なないと食べさせてあげられないよ？
ハクちゃん、お腹が減っちゃうよ？

「かまわない」

そう？
なら、いいかな？
生きていて、いいかな？
ハクちゃんの側にずっと、ず～っといていいのかな？

「そうだ。りこは我の側に。りこがこうして腕の中にいてくれるならば、我の飢餓は満たされる」

ずっと？

うん。
離さないでね。
置いていかないでね？

「二度と離れない。約束だ」

約束。
うん。

お腹、空いたなぁ。
がじがじがじ。

【繭】から無理やり出されたりこはずっとこの調子だった。
睡眠状態が混じったような不安定な意識。
支店４階の賓客用特別室に移されたりこは我の腕の中で、１日の

大半を過ごしていた。
抱きしめると壊してしまいそうなので、我の腕はりこの身体に軽く添えられた状態。
りこはカイユの用意した身体を締め付けない作りをした前合わせの部屋着姿で、長椅子に横になった我の上でまどろんでいた。
ふと目を覚ましたかと思うと、寝言のようなたどたどしい口調で空腹を訴えながら我の手をとり……指を齧り始めた。
我としては指などいくら喰われようと、全く構わないのだが。
「もしヴェルヴァイド様の肉を食べたりしたら、トリィ様が正気に返ったときにお嘆きになります！　絶対、駄目です」
がじがじの感触を楽しんでいた我の指をりこの口から抜きながらカイユが言った。
「だいたい、貴方様のせいです。トリィ様がこんな状態になってしまわれたのは。明日の昼までには回復されるはずですが……。おかわいそうなトリィ様。身体機能回復治療のために2日も絶食なんて。空腹のあまり、こんなものなど口にされて御労しい」
こんなもの。
我の指のことか？
まぁ、確かに硬くて不味そうなので異論は無い。
我はりこの齧っていた指に目線を落として、あることに気づいた。

これは……おもしろい！

「カイユ。見てみろ……齧られた痕が残っているぞ？」
我の言葉にカイユが激しく動揺した。
「な！　そんなっ……ありえっつ、嘘！」
我の指に残る痕を確認したカイユは絶句した。
「傷痕など見たのは初めてだ。我の再生能力は桁外れだからな。りこの可愛らしい歯形がしっかりと残っている……再生能力が利いていないようだ」

つまり。
「りこは我を殺せる」
りこが我の咽喉を食いちぎり、心の臓を噛み砕いてくれたなら。
「我は死ぬことが出来るのだ」
あぁ、りこ。
りこは我に死を与えることができるのか。
なんと素晴らしい！
我の至上の存在。
我の神。
我の生も死も。
すべてはりこの意のままに。
なんと甘美で幸せなことだろう！

「カイユ……りこは‘かれー’が食べたいそうだ。食事がとれるようになったら‘かれー’を出してやれ」

りこ。
異界から落ちてきた我の女神、我の支配者。
りこの望みが我の望み。

取りあえずは‘かれー’なのだ。

で……‘かれー’ってなんだ？

寝息をたてているりこに聞くわけにもいかず、我とカイユは顔を見合わせた。

かれー。

飽き飽きするほど長く存在してきたが、初めて聞く単語だった。

「りこ、どうだ？　それがかれーなのか？」
金の眼がきらきらして見えるのは錯覚じゃないと思う。
美貌の無駄遣いみたいな無表情な顔の中、金の眼だけが感情豊かに変化する場所で。
このきらきらは……期待かな？
食卓の上の自称カレー（？）に戸惑う私に気づいたハクちゃんが、壁に背中をくっつけるようにして立つおじ様……バイロイトさんに視線を向けた。
バイロイトさんはここの支店長さんで、すらりとした長身のナイスミドルなのだ。
濃いグレーのスーツがすごく似合っているの。
セイフォンよりも衣服が近代的な国なのかな？
ハクちゃんの格好もファンタジー丸出し風（？）からかなり変化していたし。
細身の革パンに黒いブラウス。
足の長さにびっくり仰天しちゃったよ……日本人の敵だ！　悔しいぞ！
相変わらずの全身真っ黒コーディネート。
悪の大魔王様からマフィアのボスか殺し屋かって！
あ、ホラー系でもいけそう。
せっかく美形なのに。
美形過ぎるからか？
確かに性格はちょびっと難有り、いや、かなり難有りだけど基本は素直でかわいい俺様君。
黒じゃなくて、柔らかな色を今後は着せてみたいなぁ。

ま、白状するとマフィアのボスみたいなのもかっこいいけどね。
「あやつが……それがかれーだと。もしや違ったのか？　かれーじゃないのか、それは」
うっ！
目の前の物体から逃避している場合じゃな～い！
私から見てもはっきり分かるほど青くなった顔に放たれた殺人光線的視線に、これはまずいと直感した私は急いで宣言した。
「カレー、うん、‘かれー‘です！　これはかれー！　美味しいです！　支店長さん、ありがとうございます～！」
私はトマトケチャップとマスタードらしきものがたっぷりかかった……見た目焼きうどんな物体を思い切って口に入れた。
むむっ……ぐぇっ？
甘酸っぱいのはケチャップとして。
チョコレートの風味はまさかマスタードみたいなやつ？
不味い。
なんなの、これ？
麺料理の1種だろうけど。
炒めたバナナに似た果物と青菜そして海老にチョコ味がねっとりとからみつき、咽喉越しも最悪じゃぁー！
でも、食べないとバイロイトさんが危険なのだ！
人の命がかかっているのよ、りこ！
頑張れ、私！
息を止めて、飲み込むのよ！
ごっくん。
ハクちゃんはバイロイト支店長を睨むのを止め、金の眼を満足そうに細めて言った。
「うむ。でかしたなバイロイトよ。生きるのを許す」
出た、出ましたよ～天井しらずの上から発言！
「こらっ、ハクちゃん！　ごめんなさい、支店長さん。お世話になってるのに迷惑ばかりかけてしまって……」

今日の午後に起きたら、知らない場所だった。
目覚めて最初に見たのは金の瞳。
いつもと同じようにおはようの挨拶をして。
あ、いつもとは違ったんだっけ！
ハクちゃんが人型だった。
しかも、しかもぉ！
思い出すと、こっ恥ずかしさにのた打ち回りそうだよ、ううー。

ハクちゃんの上だった。

長椅子に横になったハクちゃんを敷布団にしてましたー！
ぎょっひぃい～！
ハクちゃんがにこりともしない無表情フェイスでおはようって言うから、こっちが照れるのもなんだしと平静を装って私もおはようって言ったけど。
内心は……その、えっと、うん。
察していただきたいのです。
「トリィ様。2日間も絶食なさった後ですから、重たいものは味見程度にして下さいね。さ、こちらは終わりですよ」
ナ～イス！
さすがカイユさん！
感謝です！
カイユさんは謎の物体Xを自然な感じで下げ、優しい香りが食欲を刺激するリゾットとポタージュ、そして小ぶりなプリンが乗ったトレーを私の前に置いてくれた。
眼だけで感謝を伝えると、カイユさんはちゃんとわかってくれた。
軽く頷き、ハクちゃんに言う。
「ヴェルヴァイド様。もう、バイロイトは下がらせましょう。かれーは彼のお手柄ですから約束通り、彼以下支店従業員の処分は不問に。よろしいですね？　行っていいわ、バイロイト支店長」

私も詳しいことは説明されていないからよくわからないんでけど。
なんか手違いがいろいろあって、ハクちゃんがぷりぷりしてたらしく。
ハクちゃんのぷりぷりって……怪我人も物損壊も無くて良かった！
私の寝たきり（？）状態が心配なハクちゃんは他の事が全て後回しになり、暴れることも無く大人しかったのが幸いしたようで。
「わかった。我は処分しない。カイユにまかせる」
私の横の椅子に座っていたハクちゃんはトレーからスプーンを取り、リゾットへ無造作に突っ込むとぐるぐる回した。
激しく、ぐるぐるぐるぐる回す。
これって、もしかして冷ましてるつもりなのかな～。
そんなに乱暴にぐるぐる……あぁ、こぼれてるし！
「りこ。あ～んだ。あ～ん」
は？
リゾットをてんこ盛りにしたスプーンを私の口元に持ってきたハクちゃんは口を開けない私に
首をかしげた。
「りこ、どうした？　あ～んだぞ？」
な……なにぃ？！
「この2日間、こうして蜜薬を与えてたろう？　あぁ、意識があやふやだったから覚えていないのか。スプーンであ～んするのをカイユに習ったのだ」
く、薬……？
そんでもって、あ～ん？

記憶無いです。
まったく、1ミクロンも！

この2日間……私、どうしちゃってたのぉお～お！

「ヴェルヴァイド様。スプーンに盛る量が多すぎるのです。だからトリィ様は御口を開けないんです」
カイユさ～ん！
ち、ちが～うぅ！
「なるほど。多量を口に入れたほうが効率が良いかと思ったが、我が間違っていたな。確かにりこの咥内容量を考慮すべきだ」
カイユさんの指摘を素直に受け入れたハクちゃんはてんこ盛りリゾットを半分以下に減らして、再びスプーンを差し出した。
「りこ。あ～ん」
追い詰められた私は室内にすばやく眼を走らせた。
ダルフェさん……あぁ、彼は厨房か。
誰かこの状況をなんとかしてぇ～！
あ。
支店長さん。
おじ様は私と眼が合うとにっこりと微笑んだ。
そしてうんうんと頷きながら軽い足取りで部屋を出て行った……。
あぁ。
孤立無援。
自力で切り抜けなくては！
「ハ、ハクちゃん！　私、元気。だからご飯は自分で食べれるよ。気持ちだけで充分だから」
ハクちゃんの手からスプーンを奪おうとしたら……避けられた。
む！
「我はあ～んがしたい。我もりこの役に立てて……嬉しかったのだ」
ハクちゃんは私の顔を覗き込むようにして続けて言う。

「我はダルフェのように料理もできぬし、カイユのようにりこの世話もできぬ。抱っこも失敗してりこに怪我をさせる無能者だ。しかも我の我慢のなさがりこの身体に負担を強いてしまう結果を招き、りこに怒られるのは当然。名誉挽回の為にも、この‘あ～ん‘は今後も精進を重ねていきたいと考えている。さあ、りこよ！　あ～んだ。あ～ん」

やっぱり。
ハクちゃんて、素直なんだよね。
でも。
ポイントがずれてるっていうか。

「りこ。あ～ん」

まったく。
かなわないよ。

「……あ～ん」

私の口に慎重にリゾットを運び入れたハクちゃんは、びっくりするくらいゆっくりとスプーンを引いた。
私が嚥下したのを確認すると、金の眼を細めて空になったスプーンを眺める。

「あと2品ある。何回もあ～んができるな」

新しい遊びを覚えた子供のように、ハクちゃんの金の眼が輝いていた。

ど、どうしよう。

第２９話

罰ゲームのような食事を終えると、カイユさんがお風呂を勧めてくれた。
起きたばかりは手足が少しだるかったけれど、食事を終えるころには治っていたので入浴に支障はなさそうだっだ。
ハクちゃんは私が１人で入浴することに対して体調面での心配は口にしたけれど、一緒に入るとは言わなかったのでほっとした。
自分のせいで私の体調がおかしくなったことが、かなりこたえているのか……いつもより若干おとなしい気がする。
「りこ。我は扉の前で待っている。体調に異変を感じたらすぐに呼べ」
「うん。ありがとう、ハクちゃん」
ハクちゃんが……まともな事を言ってるし。
まともなハクちゃん。
なんか調子が狂うというか。
正直に言うと、ものたりないというか。
う～ん。
私もすっかりハクちゃんの強烈&奇天烈に慣らされてるなぁ～。

カイユさんに寝室の隣にある浴室に案内され、大急ぎで髪と身体を洗い用意されていたワンピースを着た。
白地にカラフルな小花の刺繍が裾から太もも辺りまで丁寧に施された可愛らしいデザイン。
長袖で、丈はやはり長い。
竜族の男性は奥さんが露出の高い服を着るのを嫌がるという事で（奥さんなのかな?私も一応は）セイフォンで用意されたのも、長袖で裾の長い物ばかりだった。

首・胸元もしっかり隠れるデザインは見た目ほど苦しくも暑くも無い。
きっと素材や縫製方法に工夫がされているんだと思う。
私の趣味とは違うけど、せっかく与えられたものにけちをつけるほど子供じゃないし。
衣食住全て面倒見てもらっている立場だし、与えられてる物や環境がとてもお金がかかってるレベルの物ばかりなのは私にも分かっていたし。
このワンピースだって、文無しの私が着るものとしては高級過ぎる滑らかな手触り。
竜帝さんの会社でお給料はどれくらい出るのかな？
お給料が出たら自分の服を買いたいかも。
この１ヶ月、さし出された衣類を身に着けてきた。
久々に自分の意志で洋服を選んでみたいな。
今まで出されてきたような上等な物じゃなくて、身の丈にあった服を。
お手ごろな価格ラインで商品を揃えてるお店が帝都にあるといいんだけど。
まぁ、それは置いといて。
私としては記録的な速さで入浴を終えた。
離宮のお風呂より狭い浴室だったけれど、内装は豪華で湯船には薄いブルーの花びらが無数に浮かんでいた。
セイフォンとは違い、湯船はバスタブタイプでは無く床と一体になった固定式。
深さがあり、座ると鼻下までお湯に浸かってしまう。
花びらを掻き分けると隅に腰掛用らしき部分があった。
つるりとした滑らかなラインをしていて、ここに座れば長湯するのに快適そう！
薄いブルーの花びらはミチコ（同じ名前の先輩が職場にいたっけ）といって、保湿効果のある美容成分が出てるらしい。

長風呂派の私に最適な低めな湯温。
あぁ、もったいないな～。
いつもの私だったら1時間はかる～く入るのに。
ほんのり甘い香りが素敵だったけれど、ゆっくりはしていられない。
濡れた髪をタオルでふきふき、空いた手でドアにを開けようとしたら……。
私が開ける前に反対側から引かれ、全開状態になった。
「りこ、りこ！　無事か？　転ばなかったか？　だいじょうぶか？」
ハクちゃんが私に伸ばした手をにぎにぎしながら言った。
「わ、我は心配で心配で。りこが風呂で溺れたらどうしようかとっ！」
溺れるか！
パワーダウンしているようだったけれど、やっぱりハクちゃんは超過保護だ。
「心配しすぎ、ハクちゃん。それに私は泳ぐの得意。だから溺れません」
「そうなのか？　りこは泳げるのか。なら、安心だな」
両手をにぎにぎしつつ首を傾げる美形無表情男に嫌味は通じていなかった。
言った私が自己嫌悪を感じるほどの素直さで。
「手……にぎにぎしなくていいよ。力加減、うまくなってるし。触っても平気だと思うよ？」
心配されて本当は嬉しいのに、嫌なこと言っちゃった。
ハクちゃんみたいに素直になれない。
私、嫌な女だね。
ハクちゃんは「ゆっくり入浴してくるがいい。人間は風呂で疲れがとれるのだろう？」って言ってくれたのに、私はすごく早く出てしまって。
うう～、恥ずかしくて、言えない。

ハクちゃんの姿が見えないから……早く出たなんて。

意識の朦朧としていた2日間、私はずっとハクちゃんにくっついていたらしく。

その影響か……私はちょっとおかしいのだ。

ハクちゃんから離れるのが怖い。

ハクちゃんの姿が見えてないと不安で。

これって分離不安ってやつだろうか？

小さい子供とか室内犬がなっちゃう症状だよね。

お母さんや飼い主にべったりした生活を送っているとなるって聞いたことがある。

考えてみると……この2日間だけじゃない。

出会ってから1ヶ月、まさにべったり生活だったかも！

お手洗い以外は常に一緒。

竜のハクちゃんはとにかくラブリーだったから抱っこしまくりだったし。

分離不安。

やばい。

２６の大人として、それってどうよ！

「りこ？」

私は無言でハクちゃんの左手を握り、居間に向かった。

照れと焦りで早足になってしまったけれど、歩幅が違うハクちゃんはゆったりとした動作で私のなすがままについて来てくれた。

ハクちゃんの手はひんやりしていたけれど。

どんなに冷たくても。

離したくないと思ってしまう私はかなり、重症かもしれない。

これが分離不安によるものなのか。

恋愛感情から発生するものなのか。

どうやって見分けたらいいんだろう？

「トリィ様。今日は大事をとって休みましょう。明日、支店従業員に会う時間を作りますね。市内観光を午後にして……夕食後に出発いたしましょう」

バイロイト支店長さんや他の人に挨拶をしたいと言った私に、カイユさんが今後の予定を話してくれた。

私をソファーに座らせ、何枚ものタオルを使って丁寧に髪の水分をとってから結い上げて仕上げに鮮やかな黄色の生花を挿してくれる。

モモチというこの花はさわやかで優しい芳香にリラックス効果があるそうだ。

リラックス。

カイユさんから見て、今の私はリラックスが必要だと感じる状態なのかな。

手鏡に映ったカイユさんと眼が合い、ドキリとした。

ばれてるのかな。

ううん。

「だいじょうぶですわ、トリィ様。もう【繭】は使いません。ヴェルヴァイド様と駕籠に乗ってのんびり帝都に向かいましょうね」

優しく微笑むカイユさんの眼は、私の右手の様子をしっかりと確認していた。

うっ……ちょっと、あの、これはですね～。

私はハクちゃんの指を握っていた。

だって、どこか触れてないと不安というか……。

白く長い指には真珠色をした爪がついている。
人差し指をぎゅっと握られているハクちゃんは、相変わらずの無表情。
長い足を組んで大きなソファーに並んで座り、なにかの書類を見ている。
私に指を握られてるのも全く気にならないらしく、特になんのリアクションも無い。
好きにさせてくれてるんだか、無視してるんだか……。
無視は無いかな、うん。
だって私が手を伸ばさなくても握れる位置に手を置いてくれてるもの。
こういうさり気なく優しいところが大人の男って感じ……大人どころか竜帝さんがいうには、おじいさん年齢らしいけど。
見た目は若くて、思考も子供っぽくて。
でも、かなりの高齢。
ききづらくて確認してない……歳はいくつかって。

ま、いいか。
異世界なんだし。
細かいことは、流そう。

「トリィ様。お茶の支度をしてまいります。この支店は珍しい茶葉を取り扱っていますから、楽しみにしていてくださいませ」
私から手鏡を受け取りながら言うカイユさんに、ハクちゃんが書類から眼を離さず声をかけた。
そういう俺様態度が違和感無いどころか似合ってしまうハクちゃん……。
こんな感じの悪い人を好きになちゃうなんて、以前ならありえない。
「カイユ。メリルーシェ皇室から使者が来たら追い返せ。第2皇女

は我が国内に入ったことを察知している。あれは術士として使えんが探知能力だけは並以上だからな」

単語……難しい。

よくわかんないや。

ま、いいか。

私の名前が入ってないから関係ないことだろうし。

「承知致しました」

カイユさんもいつもと同じ感じだし。

問題が発生したわけじゃないってことだよね。

「カイユ。髪、ありがとう。お茶、ダルフェも誘ってね」

起きてから、彼にはまだ会ってないし。

ダルフェさんが竜体になって、運んでくれたらしいからお礼を言わなきゃ。

ダルフェさんの竜体。

見たかった！

あ、次の出発の時に見られるか。

楽しみ～！

ハクちゃんの策により、ダルフェさんの竜体を全く見ることが出来ずに帝都に着いちゃうことになるなんて思いもしなかったけど。

第３０話

「支店長～！　こっちの確認、お願いしま～す」
ミチの声にバイロイトは作業の手を止めた。
使用していた工具を皮製の収納袋にきちんと閉まってから、ミチのいる寝室に向かう。
「よく頑張ったね……ミチ係長、ラーズ課長。すごく綺麗になったからカイユも喜ぶよ」
血だらけ……いや、溶液だらけだったここを少年２人で完璧に修復してくれたことにバイロイトは感謝した。
昨日の早朝から作業を開始し、徹夜で進めて……なんとか間に合った。
竜族は人間とは体力が違うため、強行軍で作業をこなしても特に問題は無い。
駕籠の中の寝室は寝具から壁紙まで全て入れ替え、張替えのリフォーム作業。
ミチとラーズは一言も不満を口にせず、黙々と働いてくれた。
自分は扉の補修、取り付けにかかりきりでほとんど手伝ってやれなかった。
駕籠の……しかも特１等級貴人用の扉の取り付けなど専門家の仕事だ。
手先の器用さに自信があり、過去に特殊駕籠補修技能講習会に出ておいたのが幸いした。
過去……６０年程前のことだが。
ま、飛行中に取れなければ上出来だ。
帝都には講師クラスの職人が多く常駐しているのだから、そちらに後は任せることにして。
「ねぇ、支店長。ヴェルヴァイド様ってあわてん坊さんなの？　【繭】を素手で開封するなんて。それは部屋が汚れちゃうよね～」

にこにこと言うラーズにミチがあきれたように言う。
「ラーズはのんきだな、もう！　【繭】を手で千切るなんて、とんでもない腕力ってことだよ？　普通は竜族だって無理だし。【繭】は感触は柔らかいけど、めちゃくちゃ丈夫なんだって研修で習ったじゃないか。……あ、あのぉ支店長」
張替え終わった壁紙のチェックを終えたミチはバイロイトに不安げな瞳を向けた。
「僕がカイユ様の連絡をしっかり聞けなかったから、支店長は怒られたんでしょう？　ヴェルヴァイド様の奥様がご一緒だったのに着陸用絨毯も出さなくて……僕が、僕がっ」
ミチはこのことを気にしていて、ずっと落ち込んでいた。
泣き出しそうなミチの頭を撫でてやりながらバイロイトは首を振る。
「ミチのミスじゃないよ。私が電鏡を避けたのが原因だからね。それに怒られたりしてないから、安心しなさい」
怒られてはいない。
殺されそうになっただけだ。
だが、こうして生きている。
つまり、問題なし。
と、バイロイトは思うことにした。

「駕籠の補修が終わったら、奥様とお茶する予定でしたよね！　楽しみ～！」
奥様。
黒髪の娘は彼の、命の恩人。
今回の失態の責めをおい、自分はヴェルヴァイドに処分……殺されることを覚悟していた。
だが、カイユがヴェルヴァイドの不興から逃れる術を用意してくれた。

ヴェルヴァイドは食物を摂取しないために料理名など全く知らず、かれーなるものが分からない。
そこで世界中の物産・文化に詳しいバイロイトに任せるようにカイユが進言してくれたのだ。　延命のチャンス到来！
が。
バイロイトはかれーを知らなかった。
なので書物を調べ、カリールという料理を参考にかれーを作ってみた。
作りながら「これは絶対に不味いな」と思った。
バイロイトの作業を覗き込んだカイユの夫が絶句したのを見て、他の者から見ても不味そうなのだなとちょっと不安になったが。
異界人とは味覚が変わっているんだろうと……作業を進めた。
よくよく考えたら彼女の希望したかれーとは異界の食べ物であって、カリールでは無いんじゃないか？
気づいたがすでに遅く……異臭を放つ皿は食卓に運ばれていた。
皿を凝視した娘の姿に自分は死ぬんだな、確信した。
だが。
彼女はバイロイトの危機を察知し、あのカリールを食べてくれた。
世界４大珍料理として本に載っていたカリールを。
なんと優しい心の娘だと感心した。
あのヴェルヴァイドの‘つがい’ならばどんな我儘も贅沢も許されるのに。
怪しげな料理を提供してしまった自分に叱責ではなく感謝の言葉をくれたのだ。
だから今、こうして生きていられる。

「そういえば……あぁ。なるほど」
バイロイトは昨日の昼食時に見た小柄な娘に対するヴェルヴァイドの様子を思い出した。
他者に奉仕などしたことが無い彼が、娘に給餌行為を強いていた。

雌に食物を与える……あれは竜にとっては求愛行動の1つ。
近年、若い世代ではすっかり廃れていたが。
古代種に近いといわれているヴェルヴァイドなら、給餌行為に執着するのも頷ける。

バイロイトは確信した。

あれはまだ、娘に手をつけてはいない。

「……ミチ、ラーズ。奥様にお会いする前に注意点がいくつかあります。着替えたら事務所にきて下さい」
「はい、支店長。コナリちゃんにも声かけますか？　厨房でダルフェさんとお菓子を作ってましたけど」
ミチの申し出にバイロイトは頷いた。
「ええ。お願いします。とても大切な話ですからね」
駕籠から出て、少年二人は飛び跳ねるように屋上を後にした。
残ったバイロイトは工具の袋を小脇に抱えながら、空飛ぶ宝石箱の扉を閉め、輝く外観を眺め……深いため息をついた。
つがいに求愛行動中の雄竜に近寄るなどというのは自殺行為だ。
かわいい部下達にはこれがどんなに危険な事か、きちんと説明しなくてはならない。
通常はありえないことだとしっかり認識させないと彼らの命にかかわる。
竜族は幼竜に寛大で、危害を加える事はない。
が、求愛行動中は雌以外は眼中に無い。
雌の気を他の者が少しでもひけば怒り暴れ狂う。
そんな状態の雄、しかも世界最強竜ヴェルヴァイドの求愛行動中

にその対象者とお茶。
カイユの話ではあの娘の希望でそうなったらしく。
同じ竜族として……ヴェルヴァイドが気の毒になった。
無表情な美貌の内面は煮えくり返り、のたうち回るほど苦しく辛く……切ないはずだ。
それを押さえ込み、つがいの希望を優先させるなど。
本能を上回る理性の強さに脱帽する。
自分には無理だった。
「やはりあの方は、我々とは違いますね」

バイロイトは４００年程前にヴェルヴァイドに会った事がある。
その時は人間達のつけた数々の仇名がぴったりの氷の彫像のようだった。
だが、今は。

「とてもお幸せそうで……。よかった」

人間が‘つがい’相手と知ったときは今後を憂いたが。
あの娘なら、なんとかなる気がする。
人間を‘つがい’とした竜の悲劇を繰り返さないだろう。
ヴェルヴァイドが愛しい娘に悲劇の結末を与えることは、きっとない。
彼はその為に全ての力と知識を惜しみなく使うだろう。

「グウィドリア。君のような悲しい結末はもう、たくさんだ」
蛇竜と成り果て竜帝に討たれた幼馴染。
優しく穏やかで、気高く美しい竜騎士だった。

その彼が。

人間の女の望みのままに人を殺し、同族を引き裂いた。
竜の肉は万能の薬。
竜の生き血は肌を若返らせる。
竜の心臓を食せば不老不死になれる。
そんな馬鹿馬鹿しい迷信を信じた女に請われ、グウィドリアは……。

両親の心臓を生きたまま引きずり出し、女に捧げたのだ。

愛されたい。
愛したい。
生きたい。
死にたい。

狂気の中で苦しみ、悲しみ、憎み。

愛しい女を喰らって、蛇竜になった。

「ねえ、グウィドリア。君もそう思うだろう？」
異界から落とされた哀れな娘。
幸せになって欲しい。
いや、してやらなければ。
竜族には彼女を幸せにするべく努力する義務がある。

‘贄’の代償を支払う義務がある。

彼女は‘生贄’なのだ。

ヴェルヴァイドという存在をこの世界に繋ぎ止める為の。

すべては必然。

仕組んだのは……。

「さて。着替える前に社長に定期連絡を入れておこうかな」

それは必然。

世界の意思。

第３１話

昨夜はなかなか寝付けなかった。
お世話になっていたセシーさんやダルド殿下に挨拶せずセイフォンを出たことも気になっていたし……いろんなことを考えてしまったせいもあるけど、この２日間は寝てばかりだったわけだから無理ないとことで。
だからハクちゃんとお話しでもしようと思ったら……。
「寝るのだ。身体に障る。……りこ、頼む」
ハクちゃんに懇願されてしまった。
人型のハクちゃんは睡眠が必要無いと言って、ベットに腰掛けていた。
私はなるべくハクちゃんに近づいて……枕元に置かれたハクちゃんの大きな手に自分の手を添えて寝た。
そんな私にハクちゃんは……。
「我の手は……冷たい。人間のりこには不快であろうな」
金の眼が揺らいだ気がした。
今のハクちゃんは念話が出来ないから、私は少々恥ずかしくても口に出して言った。
「冷たいけど、いいの。ハクちゃんの手、好きだよ。触ってると安心するの。寝付くまで貸していてね」
ハクちゃんからの返事は無かったけれど。
私は添えるだけだった手を、しっかり握り直した。
それから……いつの間にか寝ていて。
朝、目が覚めた時もそのままだった。
カイユさんが起こしに来る前に自力で目が覚めて、良かった。

「トリィ様。これがトリィ様の乗ってきた駕籠です」
支店の皆さんとのお茶会は屋上ですることになった。
屋上は想像していたより広くかった。
天気も良く、風も無い。
４階建ての支店は周りの建物より高く、眺めがいい。
下にはヨーロッパの古都を思わせる町並み。
遠くには青白い山脈。
空は澄んでいて、日差しがやわらかで暖かい。
景色に見蕩れている私にカイユさんが見せてくれたのは……。
「駕籠？　これが」
屋上にきたときから何これ？　とは思っていたけれど。
丸みを帯びた長方形の箱？
しかも、すごい大きい！
う～ん……大型バスを４台くっつけた位かな。
まるで美術品のように装飾がされ、青い宝石のような石がざ全体に散りばめられている。
側面には小さな窓があり。
白っぽい銀色の金属で出来ているようだから、さぞ重いに違いない。
これを運んだってこと？
竜ってあんなに小さいのに？
良く見ると上部真ん中に輪がついてるけれど。
体格的に無理でしょう！
「陛下や旦那の竜体が特別なんだよ。俺のがごく普通。この駕籠を持つのに全く支障の無い大きさわけ。……旦那を基準で竜族を考えるのはやめたほうがいいぜ？　四竜帝と旦那は特別だからなぁ」
私の表情を見たダルフェさんが折りたたみテーブルの真ん中に空いた穴に大型のパラソルの支柱をはめながら言った。
彼はお茶会ためにテーブルやイスを手際よく準備してくれていた。
なるほど……ハクちゃんタイプは珍しい大きさなんだ。

へぇ～！
なんと、なんとですよ。
じゃあ……ダルフェさんは背中に人が乗っかる位、大きいんだ。
竜の背に乗るなんて、すってきー！
映画やゲーム、漫画で見るたびに憧れたっけ。
人類の夢（？）ではないですかぁ！
私の妄想を察知したダルフェさんは先手をうってきた。
「竜に直乗りで移動可能なのは人間だと閣下みてぇな武人、訓練された軍人だ。姫さんじゃ死んじまうぞ？　飛ばなくてちょっと背に乗せるんならいいが……ぐぎゃっつ！？」
ダルフェさんが視界から消えた。
え？
「りこを背に乗せるだと？　我へのあてつけか！　我だってやろうと思えばっ……！」
私がまさかと思い、マッハで隣を見るとハクちゃんのやたらに長い足が地面に戻されるとこだった。
蹴った。
御蹴りあそばされましたよ、大魔王様が～！
「ちょ、ハクちゃん！　あれ？　ダルフェさ～ん！　どこに飛んでったの？　いない」
きょろきょろと周囲を見渡す私にカイユさんが微笑みつつ、教えてくれた。
「あの馬鹿でしたら落ちましたわ、下に。そんな事より、お席にどうぞ」
そんな事ですか。
はぁ、まあ……平気ってことですね。
どんだけ丈夫なんですか？　竜族って……。
カイユさんが椅子をひいてくれたから反射的に座ってしまった。
ハクちゃんとダルフェさんのじゃれ合い（？）に動じなくなった自分が怖いよ～。

鉄柵の無い屋上で良かった。
そんなものがあったら、俺の身体に刺さったかもしれない。
心臓を貫通したら流石に死ぬ。
それに愛しいハニーが選んでくれた服に、穴が開いてしまう。
ハニーの瞳の色と似た空色のシャツ。
赤い髪・緑の眼の俺が着ると色合いが変だとコナリ嬢が言っていたが、余計なお世話だ。
このシャツにはハニーの愛情が……。
「今日は臨時休業だよ？　支店に用なら明日にしなよ。明日は通常営業予定らしいぜ」
支店の屋上から目の前の通りに着地した俺は、そこいらにいた人間達の好奇の眼を一切無視して青い扉の前に立つ男に声をかけた。
振り向いた男の右手には携帯用電鏡。
男は俺が屋上から落ちてきたことには全く驚いていないようで、視線は俺の顔……頭部を凝視していた。
「赤の‘色持ち’？……まさか、そんなっ」
男の言葉に俺は笑った。
声を出さずに。

こいつ。
余計なことを知っている。
人間のくせに。

消しとくか？

此処では駄目だな。
人目がある。

さて。
どうするか。

「お待たせ～シャゼリズさん！　あれ？　ダルフェさんもいる」
青い扉を開け、小さな顔をぴょこんと出したのはラーズ少年だった。
小さな手には電鏡。
ふ～ん。
なるほどなぁ。
支店の関係者なんだな、この人間は。

始末するには陛下の許可がいるなぁ。
めんどくせ～なぁ。
「あんた、シャゼリズっていうのか。俺はダルフェ」
飛び切りの笑顔で言ってやると、男は見る見る青ざめた。
どこまで知っているのか。
気になるが、取りあえず保留だ。
「中に入って、二人とも！　シャゼリスさん、支店長は事務所にいるよ。今、時間無いから急いで用件を済ませてね。あっ、ダルフェさんに頼まれてた茶葉とか、朝のうちに駕籠に積み終わってます。日持ちのするお菓子もね」
「ありがとな、ラーズ君。ハニーも喜ぶよ」
３０前後で中肉中背。
典型的なメリルーシェ人の容貌。
この国の８割の人間がそうであるように、この男も癖の強い明るい赤茶の髪に薄い茶色の眼をしていた。
癖の強い髪はメリルーシェの風習により、肩につかない長さで揃えられている。

全く喋らず2階への階段を早足で上っていった男を眺めていた俺に、ラーズが屈託の無い笑顔で教えてくれた。
「彼は新しい契約術士のシャゼリズ・ゾペロさんです。ちょっと人見知りさんだけど、国内で5本の指に入る術士なんですよ。支店長がスカウトしたんです。休業中は自宅待機にしてもらってたんですが、支店長に急用があるって……」
あの支店長が選んだのか。
側で見張るためか？
偶然か？
「さぁて。まずは……お茶会だなぁ。俺は屋上に戻らないと」
「僕達もすぐ、行きます！　どきどきします。支店長に言われた注意事項を忘れないように、頑張ります」
「は？　注意事項？」
思わず聞き返してしまった。
「はい！　‘死にたくなかったら注意事項を厳守しなさい。私では守りきれませんから‘って支店長が」
支店長。
すまないなぁ。
苦労をかけて。
旦那は幼竜だろうと赤子だろうと関係なく、迷いも無く処分しちまうからなぁ。
保護者として、お茶会なんざ大迷惑だよな、うん。
「姫さんが一緒だから、旦那は子供にゃ手を出さない。ま、気楽にな！」
姫さんの前では世間一般に残虐非道と言われる行為を旦那はしない。
旦那はちゃんと理解している。
姫さんは暴力を‘見る‘ことを怖がる、普通の人間だってな。
だからこの1ヶ月、誰も死なずに済んでいる。
俺を吹っ飛ばす程度は旦那にとっちゃ、暴力という意識すらない

レベルだ。
「今朝、コナリ嬢と作った菓子を出すから楽しみにしてな」
あ。
そういや。
「電鏡くれ。最後のも割れちまった。俺のハニーがちょっと力入れたら粉々だ。もっと強度を改善しろって開発部に言っといてね」
俺のハニーは悪くない。
弱い電鏡が悪いのだよ、少年よ！
「請求書はどちらに？　帝都の竜騎士団本部ですか？」
「うんにゃ、陛下にだよ」
竜騎士団の予算が残り少ないのは、俺のハニーのせいじゃない。
最初っから額が少ないから……と、いうことにしといてくれ～！

第３２話

「支店長。自宅に皇室から使者が来て、これを……」
おずおずと差し出された封書を受け取り、バイロイトはため息をついた。
カイユから皇室関係の者は取り次ぐなと言われていた。
本来なら無視すべきなのだが……。
内容を確認し、ますます気が重くなってしまった。

異界の無機物が国内の闇市で取引されていた。
組織は潰したが、押収した数点の品物がこの世界にとって害有る無機物か判別できない。
現在、市庁舎に保管中。
＜監視者＞の判定を求む。

貴族特有のやたらに飾られた無駄な単語を省いてしまえば、内容はこんなものだ。
「あの、支店長。皇室はなんと？　使者は支店長に渡すようにと。なぜ、私に……」
「昨夜来た使者を追い返したからですよ。……４階に滞在している御方の事を皇室が嗅ぎ付けたんです。貴方を介せば＜支店長＞にはこれが届きますからね」
床に視線をさまよわせ、ぼそぼそと言うシャゼリズに藍色の眼が向けられる。
金箔で花模様を施された最高級の紙を軽く掲げ、バイロイトは言った。
「＜監視者＞が来てるんですよ。あの御方への鑑定依頼書を装った招待状のようなものです」
薄い茶の眼が見開かれる。

バイロイトはうっすらと笑みを浮かべた。
上品な容姿に不似合いな……嘲りの笑みを。
「なんと愉快で愚かなことでしょうね？　あの御方に近づこうとする王族という生き物は。あぁ、貴方はどうしますか術士殿？　＜監視者＞に会いたいと望むならば＜支店長＞である私が責任を持って会わせて差し上げます」
弾かれたように顔を上げ、食い入るように自分より頭2つ分は背の高いバイロイトを凝視した。
「し、支店長……私はっ」

「命の保障はできませんが」

シャゼリズ・ゾペロという偽名で生きてきた男。
母親は稀代の術士ソフェ・ルイシャン
術士なら皆、彼女の名を知っている。
彼女が天才的な才能を持っていたからではない。
＜監視者＞に＜処分＞された術士として記録されているからだ。
小さな小さな羽虫1匹のために＜処分＞された術士。

「……どこまで‘私’の事をご存知なんですか？　バイロイト支店長」
バイロイトは不似合いな笑みを消し、いつもの柔らかな微笑みを浮かべて答えた。
「さあ？　まぁ、今回は＜監視者＞に会うのはお止めなさい。貴方は失うには惜しい術士です」
優雅な仕草で書状を折りたたみ、胸ポケットにしまう。
「シャゼリズ・ゾペロとしてこのまま生きていきなさい。協力は惜しみませんよ。ソフェの望みは君の幸せな未来だったのだから。……今日はお帰り。明日からは通常営業ですから出勤時間はいつも通りでお願いしますね」

藍の眼は幼竜達に向けているものと同じ……深い慈愛をたたえていた。
シャゼリズは何か言いかけた口を手で押さえ、2回程深く息を吸った。
もっと……もっと早くにこの竜族に会えていたならば。
自分はここまで堕ちていなかったかもしれない。
だが、手遅れなのだ。
「はい。支店長」
契約期間中は、腕は良いが人見知りでおとなしい術士、でいよう。
それが自分にとって……幸せだったと思える最後の時間になるだろう。

「これ、コナリが作ったんですぅ～！　早起きして、ダルフェさんと頑張ったんですぅ」
「この変な形の焼き菓子、コナリ作でしょ！　トリィ様のお皿に入れちゃ駄目。ラーズが食べなよ！」
「え～、ずるいよミチ！　僕、こんな不気味な形のイヤだよ。コナリちゃんが責任とって自分で食べればいいじゃないか」
お茶会は支店長さん抜きで始まっていた。
三人のお子様達は元気良く挨拶をし、自己紹介をしてくれて。
見た目はまだ小学5～6年生のこの子達が従業員として勤務してるなんて、内心はびっくりしたけれど……。
日本じゃない。
私のいた世界じゃないのだから。
私の常識で考えちゃ駄目だと思い、顔には出さないようにした。
こんな子供のうちから親元を離れて働いてるなんて。
支店の3階従業員用居住区で支店長さんと4人で暮らしているそうだ。

「コナリちゃんの作ってくれたお菓子、いただくね。ありがとう」
私がぐーすか寝てる間に作ってくれたなんて。
感激だよ！
私がクッキーを取ろうとすると、お皿ごと奪われた。
賑やかだったお子様達がおしゃべりをやめ、固まった。
「ハクちゃん……？」
私の隣に大人しく座っていたハクちゃんが動いたのだ。

緊張しながら話かける子供達を完全無視して、分厚い書類を見ていたのに。
その失礼な態度を注意しようとしたら私がお子様3人に……注意することを止められた。
「いいんです！　僕達は、その、あのっヴェルヴァイド様を怒らないで！」
リーダー格らしいミチ君が手をぶんぶん振りながら言う脇で、ラーズ君とコナリちゃんが激しく頭を上下させていた。
あわあわする3人の希望に従い、ハクちゃんは放っておいたんだけど。
何故にお皿を強奪しますか～！
「これは駄目だ」
冷ややかな金の眼がお皿の上の謎めいた形をしたクッキーに注がれた。
クッキーが瞬間冷凍されちゃうような冷たい声音と視線にお子様達が凍りつく。
ま、まずいよ！
怖がらせてるよ～！
「な！　ハクちゃん、駄目ってなんでっ」

「これはスプーンが使えん」

はい？
スプーン？
「りこには、スプーンを用いる食物を希望する」
ダルフェさんとカイユさんが顔を見合わせ、困惑した表情を浮かべた。
お子様三人は凍りついたまま動かない。
「スプーンが無くても給餌はできますよ。菓子を指で摘んで彼女にお与えになれば良いんです」
遅れてすみませんでしたとニコニコしながら空いていた席に腰を下ろした支店長さんは、ほっそりとした長い指でクッキーを１つ挟み……。
「ラーズ君。あ～ん」
固まっていたラーズ君の口を強引にぱかっと開けて、クッキーを入れた。
「ね？」
上品に微笑むナイスミドルなおじ様に、悪魔の尻尾が見えた気がした。
「りこ。あ～ん」
白い指がクッキーを私の唇にむぎゅっと押し付けた。
皆の視線が私に集中した。
ひぃい～っ！
お子様達の前でですか？
昨日の昼・晩ご飯……そして今朝の朝食と‘あ～ん’され続けてきた私ですが。
ハクちゃんのきらきらお目目に負けてきた私ですが。
支店の人達に私を「見せたくないが、りこの望みなら耐える」と、うるうるの瞳で言われて思わず自分から進んで‘あ～ん’をしちゃ

った私ですが。
無理。
駄目。
嫌。
こんなかわいい子達の前で……い・や・だぁー！
私にだって２６の大人としてのプライドが～！
「い、いや……むぎゅがっつ？！」
唇に押し付けられていたクッキーが口に不法侵入した。
最悪なことに……クッキーだけじゃなく、指まで入ってきてるぅうう～！
押し込められたクッキーと、二本の指。
恥ずかしいどころじゃない。
そんなかわいい事態じゃないよ！
く、苦しい！
「ぐ、がっ、ごほごほっつ！」
クッキーが気管に入りそうになり、盛大にむせた。
さっさと抜いてくれない指のせいで変なむせかたになり、呼吸ができない。
私は死に物狂いでハクちゃんの手を掴み、引き抜いた。
「うっつ……げぇっ」
吐き出されたクッキーが床にぽとんと落ちる。
咽喉を押さえて咳き込み涙を流す私にカイユさんが駆け寄り、背中をさすってくれた。
ひゅーひゅーと変な息と咳が止まらない。
なんなのよ、これ。
新手の嫌がらせか拷問かぁ～！
「わかりました！　だから、まだ……もごっ」
悶絶する私の姿に、支店長さんが何か言いかけた。
カイユさんのおかげでかなり楽になった私が顔をあげると、支店

長さんの口をダルフェさんが塞いでいた。
「世界平和の為に黙れ！　このお節介オヤジがぁ！」

世界平和。

まずい！

ハクちゃんだ！

「ハ、ハクちゃん！　……ハクちゃんっ」
隣に居たはずのハクちゃんがいない。
立ち上がって見回したけれど、目に付くと所には姿が無い。
「トリィ様、ヴェルヴァイド様は……」
カイユさんが不安げな声をあげた。
私は支店長さんに抗議すべく彼の側に早足で移動し……。
ダルフェさんが彼の口から手を離すと同時に。
頬を引っ叩いていた。
私、この世界に来てから手が早くなった気が。
ハクちゃんの影響かな？
でも。
だって！
「ハクちゃん、傷つきました！　貴方があんなこと教えたからです！」
ハクちゃんは素直で、不器用で。
自分の手が私を傷つけるのをとても怖がっていたのに。
苦しそうに咳き込む私を見て、どこかで自分を責めているに違いない。
不用意にあんなことをハクちゃんに教えるなんて。
未だに手をにぎにぎしている彼に。
どこかでまた、内臓を眼から出しちゃってるかもしれない。

泣いてるかもしれない。
私の可愛いハクちゃんは繊細なのだ！
支店長さんの藍色の眼が細まる。
温和そうな顔が一瞬で鋭い印象に変わった。
「貴女が給餌行為に抵抗したからでしょう？　傷つけたのは貴女でしょう？」
なっ！
「貴女を独り占めしたい、隠しておきたい彼の気持ちを理解せずこうして暢気に他の雄竜と会っている。貴女の軽はずみな行動が彼を苦しめるんです」
支店長さんはゆっくりと私に向かって両腕を伸ばし。
「自覚をしなさい。貴女自身の為に」
意図を察した私が下がろうとする前に、支店長の腕に捕まり引き寄せられた。
端正な顔が私に落ちてきた。
キス。
キスされた。
口に。
支店長さんに。
他の男の人に。
「い……い、や」
ハクちゃん。

悪寒が身体を走り回る。
思いっきり手で押すと、支店長さんはすんなりと腕を離した。
両手で口元を抑え、言葉を失う私に彼は言う。
「貴女はとても弱い生き物なんです。常に守られていなければ。簡単に殺すことも犯すこともできる」

ハクちゃん。
私、キスしたこと無かったの。

「貴女はあの御方の全てを受け入れるしかないんですよ。貴女自身と、貴女に関わって＜監視者＞の怒りを買い消される者達を出さない為に」

私。
２６だけど、大人のお付き合い、はしたこと無かったから。

「バイロイト！　貴様、狂ったか！　トリィ様に……！」
カイユさんがダルフェさんに羽交い絞めにされている。
「離せ……殺す！　私の大事なトリィ様になんてことを！　四肢を引き裂いてやる！」
「待て、ハニー！　ここに居たらやばい。おい！　ちび共、逃げ……っつ」

ハクちゃん。
初キスはハクちゃんと。

ハクちゃんとしたかったのに。

「りこ。泣くな、りこ」

ハクちゃん。
来てくれた。
恐ろしい程、綺麗な顔が下から私の顔を覗くようにして言った。
「りこの心が我を呼んだからだ。竜珠が‘心’を我に送ってくるほど悲しかったのだな？」
床に両膝を付いたハクちゃんは蕩けるような金の眼で。
「ハ、ハクちゃん！　ハクちゃん……わ、私っ」
私はハクちゃんの首に両腕で抱きついた。
「誰に泣かされた……我以外の雄がりこに触れたな。この匂い。あれか」
え？
匂い？
「連帯責任という便利な言葉を知っているか？　幼竜達よ」
初めてハクちゃんが子供達に喋りかけた。
冷たい声だった。
「支店ごと全て潰そう。建物も、愚かな雄も……お前達もな」
「都市……いや、メリルーシェごと潰すか。今の我はとても気分が悪いので。全て消してしまいたいほどだ」
私の身体に慎重に触れ、抱き上げたハクちゃんは……微笑んだ。
その笑顔を間近で見た私は凍りついた。
こんな微笑みがあるんだ。
ぞっとした。
「りこから他の雄の匂いがする。……あぁ、怒りのあまり世界をめちゃくちゃにしそうだぞ」

こんな微笑み。
させたくなかった。

第３３話

ぶち切れＭＡＸな旦那の【気】に押し付けられ、身体が動かない。
その場にいる者全てがそうだった。
幼竜達はすでに意識が無く、テーブルに倒れこんでいる。
支店長が姫さんに触れた意図は想像できる。
だが、ちょっとやりすぎだ。
旦那にとって姫さんは＜聖域＞だ。
大事で大切で。
傷つけるのを恐れるあまり、手を出せないでいる。
その姫さんに他の雄が触れたんだ。
そりゃ、怒るに決まってる。
竜族だったら当然だ。
でも。
でもなぁ、旦那。
連帯責任で幼竜どころか国まで潰すって？
どんだけでかい連帯なんだよ！
使い方、間違ってます。
旦那を抑えられるのは、姫さんなんだが。
なんとか眼をこらして姫さんの様子を確認すると……。

泣いてた。

＜白金の悪魔＞の笑顔を見て、ぽろぽろ……小さな子供のように。

多くの美姫を虜にし、堕とした悪魔の微笑みを見て。

悲しそうに涙を流し、悔しそうに唇を噛んでいた。

「そっか、そうだよ……なぁ」
あんたの‘可愛いハクちゃん’に、あんな笑顔は似合わないよな。

たとえどんなに冷たい無表情な顔だって。
姫さんを見る時の眼は、いつだって柔らかかった。
金の眼はずっとずっと1日中、姫さんに囁いてたもんな。

大事だ
好きだ
大切だ
愛してる

なあ、姫さん。
つがい名は人前では使わないんだぜ、普通。

特別な名前だから、隠しておくもんだ。
愛しい相手と二人で過ごす時にしか使わない。
二人だけの睦言。
なのに旦那は姫さんとつがい名しか使わない。
つまり。

旦那にとって‘存在’してるのは姫さんだけなんだよ。
俺もハニーも、陛下も誰も彼も。
旦那にとってはそこらの草や虫と同じなんだよ。
旦那には姫さんしか‘存在’してないんだ。

姫さん。
頑張れ！
あんたの可愛いハクちゃんを取り戻せ！

「りこ。我の、りこ。りこ。我だけのりこ」
私の名前を口にするのに、私を見ない。
竜帝さんを離宮で踏み潰そうとした時より、様子がおかしい。
寒気がするような冷たさと、眼にした誰もが囚われる様な艶めく微笑。
「どれだけ殺せばこの吐き気は治るのだろうか。どれだけ破壊すればこの苦しみは消えるのか。あぁ、りこ。我のりこから我以外の雄の匂いがする！　りこ、りこ、りこよ」
殺す？
破壊？
だめ、そんなの駄目だよ！
匂いって？
キスのせい？
支店長さんが言ってたこと。
もしかして、こういうこと？
私が他の男の人に会うのがハクちゃんにとって、すごく嫌なことで。
軽く触れただけのキスでこれだ。
それ以上だったら？
考えたくない！
竜帝さんは言ってたよね。
竜族がこれからは私をサポートしてくれるって。
支店長さんは私に＜自覚＞しろって……。
私がハクちゃんを傷つけ、苦しめる。
私だけが。

「ごめんね」
クッキー、すぐに食べてあげれば良かった。
「ごめんなさい」
人目を気にして。
ハクちゃんはいつだって私だけを見てくれてるのに。

キス。
言えなかった。
抱きつくのが精一杯で。
竜族のハクちゃんが人間の私をそういう対象として見てるって、思わなかったから。
だって。
なんでお風呂に一緒に入りたいのって聞いたら……たおるぶくぶく（タオルに空気入れて沈める遊び）と、りこちゃん歌謡オンステージ（私がひたすら歌っている）が面白いからだって。
その答えに確信したのよね。
だから、よけいに言えなかったし言っちゃ駄目だと思ったの。
「ハクちゃん、ごめんね」
そうだ。
前にダルフェさんが言ってた。
ハクちゃんは私の夫になれるんだって。
そっか。
そういうことだったんだ。
私、よく分かってなかった。
支店長さん。
ありがとう。
でも、もうちょっと穏やかな方法が良かったです。

「ハクちゃん。ね、ハクちゃん！」
白い髪を引っ張ると妖しい笑みを浮かべた人外の美貌が私を見下

ろした。
こんな顔、させたくないよ。
させたのは、私。

あ。
まずい。
単語がわかんない。

キスって単語。

うっ。

誰か言ってたよね。
女は度胸、男は愛嬌って！
ん？
ちょっと違うような気もしますが。
今の私に必要なのは度胸だ！
「りこ。我は非常に気分が悪い。すぐに全て潰して……！！！」

金の眼の中心にある瞳孔が開いて、真ん丸くなった。
普段はちょっと縦長な瞳孔が。
ひーっ！
眼、閉じてよ～ってか、私も閉じようよ！
がぁぁ～だめだぁ！
緊張のあまり閉じれな～い！

ハクちゃんとの初ちゅーは、お互い眼を開いたまま。
カチンコチンになり。

気づいた時には屋上には私達だけしかいなくて。

あわあわとした私にハクちゃんが言った。

「……りこ」

「ふわぁいいぃ！」

てんぱった私からは変な声が出た。

ぐぎゃーん、最悪！

なんで、私ってこうなのよぉ～。

「結婚してくれ」

は？

「りこは人間だ。だから人間の男のように恋文で求婚しようと考えていたのだが……書きかけをセイフォンに忘れてきてしまったのだ。出る前はその、忙しくてだな」

い、いま。

今、なん……。

「恋文はやめだ。間に合わん」

ハクちゃん。
ねぇ、なんて言っ……。

「りこを我の妻に。……我と結婚してくれ。とりい・りこ」

‘結婚してくれ’

「……はい。ハク」

うん。

私……ハクちゃんの妻になりたいよ。

「私と結婚して下さい。ハクちゃん」

この世界に落とされた。

貴方に会うために。

貴方といるためだったら。

どんなに堕ちてもかまわない。

第３４話

俺達は2階の事務所で茶を飲んでいた。
気絶しちまった幼竜達を3階にあるそれぞれの部屋に寝かせ、疲労困憊の俺達はぐったりと椅子に座っている。
姫さんの思い切った行動に旦那は固まっちまったし。
怒気が一瞬で消えたので、もう安心だと判断し。
このまま良いムードが続くと良いですねぇ～とか喋くりながら撤収してきた。
「バイロイト。後でトリィ様に謝れ、死んでお詫びしろ」
ハニーは水色の瞳に殺意を浮かべた。
「まぁまぁ、ハニー。取りあえず支店長のおかげで姫さんも自覚したようだしさ。な？」
「はぁ、まあ私は殺されてもいいかなって思ってたんですが。連帯責任なんてことになって焦りましたよ」
のんびり言うオヤジの頭に拳を落としかけて、やめた。
俺の前にハニーの鉄拳制裁を加えたので。
「痛い……頭蓋骨にヒビが入りましたよ。相変わらず乱暴ですね」
ヒビ？
俺なんかいつも複雑骨折&粉砕だぜ。
やっぱり、俺は愛されてるなぁ。
愛の深さが拳の重さだ！
「おい。役立たず！　……もう夕方だ。トリィ様は昼食もとられていない。呼び鈴も鳴らない。心配だからお前が見て来い」
ハニーが流れるような動きで俺の首を締め上げながら、お願い、してきた。
「ぐっつ！　わ、分かった。行きます、すぐ行きます！」
この後。
気を利かせ過ぎたと全員が後悔した。

あまりに静かな貴賓室を不信に思った俺が、旦那に蹴り飛ばされる覚悟で入室し。

瀕死の姫さんを旦那から救出した。

俺が発見した時。
旦那は動かなくなった姫さんを。

喰らおうとしていた。

「りこが言ったのだ。死んだら食べていいと」

「トリィ様、トリィ様！　なんてこと……私のかわいい娘がぁあああ！」
娘。

やはりハニーが姫さんに執着するのは胎の子と重ねているからか。
シーツで包んだ姫さんに半狂乱で縋るハニーを押さえ込み、支店長に指示を出す。
「人間の医者だ……女医だぞ！　急げ！」
バイロイトは飛び出して行き、俺は【繭】に使う溶液を満たした浴槽に姫さんをシーツごとゆっくりと沈めた。
この溶液には生命維持機能成分が含まれている。
俺が応急手当をするよりも確実に姫さんの身体を……。
「ハニー？　駄目だカイユ！……アリーリア！」
ハニーが寝室へ向かおうとした。
＜母親＞として娘の復讐を。
駄目だ。
旦那に殺されちまう……俺の愛しいアリーリアが！
俺は旦那の元に走ろうとした腕を取り、首に手を当て意識を落とした。
倒れこんだハニーを居間のソファーに寝かせ、寝室に居る旦那の様子を確認した。
部屋の隅にしゃがみこんだ白い塊に、ガウンをかけてやる。
「旦那……姫さんは死んじゃいませんよ、まだね。かなり壊れちまいましたが」
こうなる可能性が高かったから。
旦那は姫さんに手を出さなかった。
今まで我慢できてたのに、なんだって……。
「求婚したのだ……人間のように。結婚してくれと」
おい。
言ってなかったのか。
あんだけ我のりことか、連呼してたのに！
「待てなくなった。誰かに盗られたらと」
支店長。
あんたの策はこっちまで効いちまってたぞ。

やっぱり、やりすぎたなぁ。
「結婚してくれと言ったら、りこが［はい］と。それから……止められなかった」
旦那。
最悪だぜ、そりゃ。
普通の人間なんだぞ、姫さんは！

気づいたら呼吸停止状態で。

殺しちまった。
そう思ったのか。
それで……喰おうとしたのか。
まだ完全に死んでなかったことすら判断できないほど、動揺したんだろうが。
「姫さんは……抵抗しなかったんですね」
ハニーが言っていた。
姫さんは旦那の肌に傷をつけることが出来ると。
なのに。
白皙の美貌にも、ガウンを肩にかけた時に見えた肌にも。
爪のひっかき傷ひとつ無い。
あぁ。
怖かったろうに。
痛かったろうに。
辛かったろうに。
えらかったな、姫さん。
すごいよ、姫さん。
本当に……凄い女だよ。
「りこは我を……許さないだろうな」
こんな馬鹿な男に、もったいないぐらいの良い女だよ。
姫さんに‘守られた’ことすら気づかないような愚かな男には。

「さぁ？　どうですかねぇ」

「ハク……ハクちゃん。どこ？」

旦那が弾かれたように立ち上がる。
今の声。
姫さん？
馬鹿な！
身体中の骨が折れてるんだぞ？
内臓だって損傷してる。
酷い出血量だった。
生きてたのが奇跡なほどの状態だった。
「どこぉ？　ハクちゃ……ん、ハクちゃん」
俺の耳がおかしいのか？
旦那は浴室へすっ飛んでいった。
俺の耳が正常ってことだな。
驚愕のあまり、俺は動くことが出来ずにいた。
有り得ない。
姫さんは人間だ。
こんな……。

溶液独特の重たい水音。

俺が旦那よりかなり遅れて浴室に戻って眼にしたものは。
赤い溶液に濡れたシーツごと、旦那に抱きしめられた姫さんで。
だんなの肩にのった小さな顔。
俺を見て、はにかんで言った。
「あれぇ、ダルフェ。あ、おはよ……うございます」

金の眼に。
パカーンと口を開けた俺の間抜け顔が映っていた。

支店長の連れてきた医者が診察を終え、2階の事務所に降りてきた。
かなり高齢の女医はこの町で1番の名医と評判なのだという。
扉1つ挟んだ向こうに旦那の気配を感じながら姫さんを診察するなんて、賞賛に値する肝っ玉だ。
「人間の娘が竜族に乱暴され瀕死の状態だと仰ってましたが。彼女ははっきりと、否定しましたよ？　……怪我1つしていませんでした。支店長殿が嘘をつくとは思えません。長い付き合いですしね。見つけた当初はそういった状態だとして、【繭】の溶液に入れただけで回復するなんて有り得ません。かなり小型の種のようですが貴方達と同じ竜族ではないのですか？　……それに彼女の夫だという竜族。あの御方は……」
支店長は老女医の震える手に金貨の詰まった袋を持たせ、言った。
「今日の事はお忘れ下さい。貴女自身の為に」
「……そうします。孫の結婚式までは生きてたい」
早足で支店を去った医者の言ったことに俺は頭を抱えた。
どういうことだ。
竜族のつがいとなった人間の身体がこんな風に変わった例など聞いたことが無い。
確かに……竜珠を与えられ、その竜と性交渉を持つと通常の人間よりも肉体が強化される。
長命な竜族の核である竜珠を宿すことで寿命も飛躍的に伸びる。
大昔に竜の血肉が不老長寿の秘薬だと誤解されたのは、そのせいだ。

だが。
再生能力は移行しないはずで。
姫さんの身体の変化は異常だ。
あの状態から完治するなんて。
しかも短時間で。
竜族の再生能力としては、普通の竜を超えている。
竜騎士級と同じか……それ以上かもしれない。
1番の問題は、あの眼。
金の眼だ。
「旦那と同じだぜ？」
支店長は腕を組み事務所の壁に寄りかかると、眼を閉じた。
「取りあえず陛下に連絡をしましょう。我々の手にはおえません」
深いため息をついてからゆっくりと眼を開け、俺に言った。
「……貴方を尊敬しますよ、ダルフェ。あのカイユをつがいにしただけでも凄いのに。あの御2人と1ヶ月以上も居るなんて。よく生き残ってますよね。私は既にギブアップ気味ですよ」
よく言うよ。
この狸オヤジが。
「慣れですよ、慣れ。それにカイユほど良い女はこの世界にゃいません。……異界には居たようですが」

姫さん。
もう、あんたは俺とハニーのかわいい娘同然だ。
なのに。
こんな事態になっちまって。
あんな天然俺様男の嫁に……。

父ちゃん、泣いちゃいそうだよ。

第35話

眼が覚めたらハクちゃんが居なかった。
寝起きのせいか、視界がぼんやりするし身体がだるくて……感覚がひどく鈍い。
一生懸命に両腕を動かしてみたけど。
ハクちゃんに触れることは無かった。
あれ？
あれれ？
おかしいなぁ。
側に居るって約束したのに。
離れないって言ったのに。

私達、恋人……通り越して夫婦になったのに。

どこ？
どこなの、ハクちゃん。
ハクちゃん、ハクちゃ～ん！

「りこ！……りこ、りこ」
あ、ハクちゃんだ。
「ハク……ハクちゃん。私……」
声は出るけれど、眼は霞んでる。
だから両腕を伸ばした。
ハクちゃんの声のする方に。
すぐに腕をとられ、引き寄せられた。

ぎゅって。
ハクちゃんがぎゅって、してくれた。

やっぱり、ちゃんといてくれた！
嬉しい。
すごく、嬉しいよぉ。

私のハクちゃん。
私の……。

ハクちゃんが抱きしめてくれたら、安心したせいか身体の感覚もしっかりしてきた。
眼の調子も戻ってきた。

数回、瞬きをしたら。
ドアのとこに立っている人と眼が合った。

あ、ダルフェさんだ。
ううっ、照れちゃうな～。

「おはよ……うございます」

ダルフェさんはパカーンと口を開けていた。
ちょっとタレ眼だけど端正な顔が、台無しですよ？

なぜか、お医者様が来た。
ハクちゃんはお医者様が私を診察すると言ったら、私から離れてしまった。
「我は隣室に居る。……我が妻に触れることを許可する。人間の医

者よ」
何がなんだか分からなくてハクちゃんのガウンを掴んで引きとめようとする私に、お医者様は言った。
私が竜族に乱暴され、瀕死の状態だと言われ連れてこられたって。な?!
なんてこと言うのよ、このお婆さんはっ!
「ち、違います! そんなことありません」
否定した私にお婆さんは言った。
「怪我をしていたそうですよ? 診察はしましょう。一応ね」

ハクちゃんはダルフェさんと居間に行ってしまった。
項垂れてとぼとぼ歩くハクちゃんは、小さな子供のようだった。

診察前にカイユさんが来て、真っ赤な液体を手早く洗い流してくれた。
泣いてた。
カイユさんは泣きながら私を綺麗にしてくれた。
「カイユ。この赤いのなに? 血みたいで気持ち悪いね。……なんで泣いてるの?」
聞いたんだけど、カイユさんは答えてくれなかった。

バスローブを着て、ベットに横になった私をお医者様が診察した。
すごく嫌だったけど。
我慢した。
私は乱暴なんかされてないって証明したかったから。

怪我してたって言われても。
今はどこも痛くない。

そういえば。

どうして。
なんで私は無事なわけ？

お医者さんは診察を終えると言った。
「白い髪の竜族は貴女の何？」
「つがいです。ハクちゃんは私の夫です」

ハクちゃんは、私の。

お医者さんが帰った。
カイユさんが言った。
「私は許せない」
もう泣いてなかった。
許せないって何を、誰を？

私、ハクちゃんの妻になったの。

「カイユ、ねぇカイユ。もうハクちゃんのとこに戻っていい？　診察は終わったんだし」
カイユさんは微笑んだ。
優しくて柔らかなそれは……とっても懐かしい気がした。
「貴女の望みのままに」
あぁ、そうだった。
カイユさんは、お母さん、なんだ。
お腹の赤ちゃん。
生まれたら抱っこさせてもらおう。

居間に行くとダルフェさんは居なかった。
ハクちゃん。
居た。
真っ赤に染まったベージュのガウン。
あ、そっか。
さっきついちゃったのか。
「ハクちゃん、ハク」
床に丸まったガウンの間から小さな白い竜が顔を出した。
「かわいそうに。また……まだ泣いてたんだね」

床一面に転がる無数の真珠。

「おいで。ハクちゃん」

よたよたと短い足で私に駆け寄ってきた白い竜は、後一歩という距離で止まり。
うずくまってしまった。
手足を丸め。

震えていた。

私は床に膝をついて。
腕を伸ばした。

震える小さな身体を膝に乗せ、身体を前にかがめた。
いつもよりさらに冷たくなってしまったハクちゃんを暖めたくて。
卵を抱くように。
ハクちゃんの小さな身体をそっと、包み込む。

「大好きよ。大好き……私の泣き虫な旦那様」
私の膝からこぼれた真珠が床に転がっていく。
ころころ、転がる。
無数に。
星のようにきらきら輝いて。
「……私に触れながら、泣いてたもんね。怖かったでしょう？　とめられなくて辛かったよね？」
私。
ハクちゃんを助けられなかった。
あんなに泣いてたのに。

りこ
まだ、駄目だ
我から、逃げろ
りこを傷つけてしまう

りこが壊れてしまう

りこ
りこ
我を、拒んでくれ

嫌だと、言ってくれ
我を、止めてくれ

あの時。
竜の姿じゃないのに、頭にハクちゃんの声が響いていた。
頭の中も身体の中も……心の底まで。
ぐちゃぐちゃのどろどろで。

ハクちゃんでいっぱいになった。

「ごめん。ごめんね」

ごめんなさい。

「許して」

ハクちゃんが苦しむって分かってたのに。

‘やめて‘って言えなかった。

私が‘やめて‘って言えばハクちゃんは自分を抑えられたのに。

私が……言わなかったから。

ハクちゃんは私を傷つけるのをとても怖がってたのに。

抱きしめられて。

身体中が悲鳴をあげた。

すぐに意識がぼんやりしてきて。

手も足も動かなくて。

だんだん感覚が……無くなって。

目を開けることもできなくて。

痛みを感じることすらなくて。

このまま。

ハクちゃんと全部が混じって‘私‘が消えてなくなると思った。

死んじゃうのかなって。

それでも、いいかな。

そう思ってしまった。

「ハクちゃんの身体にも、赤いのがちょっと付いてるよ？　お風呂、入ろうよ。たおるぶくぶくをバスタオルでやってみない？　す

っごいぶくぶくが体験できそうじゃない？」

もし。

私を自分の手で殺してしまったら。

もしも。

私が死んだりしたら。

ハクちゃんは……。

「りこちゃん歌謡オンステージも本日はスペシャルです。リクエスト、ＯＫですから！　なにがいいかな？」

ごめんなさい。

貴方の心を傷つけた。

でも。

どうしても。

貴方が。

「……さぶちゃんの」

ん？

「とんとんとーんっていうのが良い」

ハクちゃん。

なかなか渋いチョイスだね～。

「了解！　よし、お風呂で遊んで歌って踊ってパーっといきましょうぉ！」

私がちゃんと覚えてるのは。

しっかりと思い出せるのは。

ハクちゃんがしてくれたキスだけで。

ひぃえぇえー、うわぁ～っ、うひょぉおお～って思ってたら。

思ってたら……うん、まあ。

秘密です。

浴室に行くと浴槽には清潔なお湯が張られていた。
赤い液体はすでに綺麗に処理されていて。
カイユさんがお風呂の支度をしてくれたようで、籐の脱衣駕籠には数枚のタオルと着替えが用意されていた。
寝室からも廊下へ直接でるドアがあるから、カイユさんはそこから出たのかな？
居間には来なかったし。
私はハクちゃんを湯船に入れてから、あることに気づいた。
うっ！
盛り上がって（？）ここまで来ちゃったけれど。
一緒に入る……入るのか、私？！
す、すんごいちゅ、ちゅうした仲なんだし！　よし、行ってしまえぇえええ～！
ちゅうどころか……もっとすごいこと、しちゃったんだし。
記憶無いけどね。
バスローブを勢いよく剥ぎ取り、お湯に入った。
よっし！　さぁ、歌うぞ～！
恥ずかしいのは、ここまでだった。
よく考えたら1ヶ月間ずっと一緒だったんだし。
元気が無いハクちゃんの様子に奮起した私はサブちゃんメドレーを熱唱し。
計画通りにバスタオルでぶくぶくをした。

お風呂で気分をリフレッシュした私が着替えて居間に行くと、難しい顔をしたダルフェさんとカイユさんが居た。
ハクちゃんを抱っこしている私を見て、ダルフェさんは額に手をあてた。
「やっぱりすげーよ、　姫さんは」
カイユさんは……。
「いけません。そんなケダモノ、捨てていらっしゃい。うちでは飼えませんよ」
にっこりと笑いながら言った。
カイユさんが冗談言うなんて、珍しい。
冗談……だよね？
眼が怖いけど。
床に散らばったハクちゃんのかけらを箒で集めていた手を止め、私を手招きした。
「カイユ？」
近寄った私を壁にある大きな鏡の前に誘導し。
「ご覧下さいませ」
へ？
何を？

てぇえええええ～！
「う、うそぉおおお～！」
顔が変わっていた。
あ、顔の作りは変わってなかった。
日本人・２６歳・鳥居りこの顔。
眼。
目玉。
目玉がっ！

「き、き、……金いろぉおお！」
鏡に写ったのは。
平凡な容姿に不似合いな、ド派手な金の眼をした私だった。
愕然とする私にカイユさんがさらに追い討ちをかけた。
「理由は私どもには分かりません。そのケダモノにお聞き下さい」
氷点下の視線は私の抱いているハクちゃんに向けられていた。
どういうこと？
金の眼。
透明感ゼロの黄金。
ちょっと縦長の瞳孔。
ハクちゃんとそっくり。
と、いうか同じ。
ハクちゃんのせい？
ハクちゃんの……。
「ま、まさか……っ」
腕の仲のハクちゃんが嬉しそうに手足をぶらぶらさせて。
言った。
「うむ。りこと我が交わったからだな」

ぐげっ？！
なっ！

『な、なんで皆に聞こえる念話で言うのよ！　ハクちゃんの馬鹿馬鹿！　あんなにめそめそうじうじしてたくせに、なに開き直ってんのよっ？！　馬鹿馬鹿ぁああー責任とれぇえええ～つ！』
思わず日本語で叫び、私はハクちゃんを放り投げた。
ハクちゃんは空中で1回転し、ふわふわ飛びながら言った。
「おい、ダルフェ。これも前に言っていた痴話喧嘩というものか？」
ハクちゃんの言葉にダルフェさんが叫んだ。

「俺らがどんなに深刻だったか……。分かってんのかぁーぁあああ！！」

‘やめて‘って言わなかった。
なんて酷い女なんだろう、私は。

悪いのは、私。
罵られるべきなのは、私。

「痴話喧嘩か。ふむ、悪くないな」

切れたダルフェさんがハクちゃんにドロップキックをしかけて。
ハクちゃんの小さな手で軽く払われ。
窓ガラスに豪快に激突し。

盛大な音とガラスの破片とともに、夕焼けに染まった茜色の街に消えた。

悪いのは、私。
どうしても。

どうしても、欲しかった。
この世界に来た意味が。

貴方が、欲しかった。

番外編

セイフォンの竜宮は王宮の離れの１つを改築したものだ。
初代セイフォン王が妾妃の為に建てた離宮は女の好きな色である白で統一されていた。
高価な白い石を素材にし、庭には白い花の咲く植物が植えられ。
異国から取り寄せられた純白の孔雀が放されていた。
好色で名を馳せた王は数年でその妾妃に厭き、家臣に下げ渡そうとしたために女は自殺した。　咽喉を自ら切り裂き、白を血で赤く染めて。
そのため、この離宮は不浄のものとして放置された。
その離宮を＜監視者＞の竜宮としたのが４代国王ヒュートイル。
無能な上に暴君であった父王を殺害し、若干１２歳で即位した。
その頃は世界中の国で我の為に竜宮なる建物を造るのが流行していた。
我が望んだのでは無い。
権力者達が権威の象徴・富の証としてこぞって建築したのだ。
関係ないと一切関与をしないでいると、人間達の中である決まりができていた。

どの国においても我が入国した場合は竜宮に滞在する。

いつのまにそうなったのか。
なぜ、そうなったのか。
我には全く分からなかった。
まあ。
どうでも良いので、そのように行動した。

「なぁ、化け物。僕の国は現在、金が無い。馬鹿親父が桁外れに浪費してくれたからね。だからって竜宮を持たないと諸国にセイフォンの実情がばれる。攻め込まれたりしたら困るから、あそこを……＞血塗れの離宮＜を使ってよ」

セイフォンの王宮術士が異界から生物……鼠に似た小さな動物を召還したので＜処分＞しにセイフォン王宮に行くとヒュートイルは言った。

臣下である術士の命のことは興味が全く無い様子だった。

「あそこは花がなかなか綺麗なんだよ。化け物にはもったいないくらいだよ」

「承知した」

ヒュートイルは成人しても、老人になっても我を、化け物、と呼んだ。

ヒュートイルの使う、化け物、は他の者が我に言う、化け物、とは違った。

少女のような＜親殺しの少年王＞はその異常なまでの利発さのためか、臣下に影で、化け物、と囁かれていた。

「ねぇ。僕は君という、本物の化け物、がいてくれて嬉しいよ」

ヒュートイルは死に、遺言通りに離宮の庭に埋葬された。

墓石ではなく植物が植えられた。

デルの小さな苗木だった。

ヒュートイルの【孫】が即位した。
血は繋がっていない。

ヒュートイルの息子は王妃が三人目を孕んですぐ死んだ。
王妃は三人目の子が産まれると、その男子を皇太子とした。

ヒュートイルの孫である兄弟は相次いで死んだ。

王妃と6代目の王が存命中はセイフォンに入国することは無かった。
彼らは国内の術士に異界に関する術式を禁じた。
破った者は処刑された。
我が＜処分＞する必要が無いように。
我がセイフォンに……王宮に近寄らないように。

この時代には我が頭の中の思考・記憶を読み取れることが広く認識されていた。
王妃が誰の子を産もうが、誰を殺そうが興味が無いのだが。

デルの木は花が咲くほど育っただろうか？

我は基本的には暇だ。

我自身は、暇、との認識は無かったが。
「貴方は暇なんですわ。最近は＜監視者＞の＜処分＞を恐れて術士達も異界研究を敬遠する傾向が強いですもの。だからこうして……妾の元に居て下さる」
赤の竜帝の大陸にあるドラーデビュンデベルグ帝国の女帝シュノンセル。
なぜだが分からぬが、人間の中には我を手元に置きたがる者がいる。
この女もそうだ。
我は女が欲しいと思ったことは無い。
だが我を欲しがる女は多かった。
我の身体だけでなく、心、も欲しかったと死の間際、女帝は言った。
我には意味が分からなかった。
術士でもあった女帝が異界から生物を召還した。
我の目の前で。
「名も知らぬ貴方を、愛しているわ」
薄紅色の花弁を持つ植物。
女帝と植物を＜処分＞し終わると赤の竜帝の城に移動した。
「何か我にくれ、＜赤＞よ。新しい＜青＞が赤の大陸の土産が欲しいと喚いて五月蝿いのだ」
我はここ数百年、基本的には青の竜帝の大陸を中心にして動いていた。
理由は＜青＞が現在最も幼い四竜帝だからだ。
遥か昔の契約に基づき、我はその時代で1番若い竜帝の大陸を拠

点としている。
「土産？　……たった今、１０年来の情人を殺してきた自覚あるの？　ヴェルヴァイド」
＜赤＞の赤い眼が我を睨み付けた。
はて？
情人？
「我に情人がいたことは無いが。……それを貰おう」
我は＜赤＞の履くヒールに踏まれ失神している〝それ〟を指差した。
〝それ〟は＜赤＞の髪と同じ色を持っていた。
赤の大陸の土産として分かりやすいように思えた。
我は＜赤＞が返事をする前に術式で〝それ〟を＜青＞の元に転移させた。
「ちょっ……なんて事をするの！　こんな距離で使ったらあの子、ばらばらになってしまうわ！」
「手足が取れたって構わない。死体でも良いのだからな。赤い髪が土産なのだ」
「……普段口をきかないヴェルが喋るといっつも、ろくでもない事ばかりね」
そういえば。
我は女帝の前で喋ったことは無かったな。
「こんな最低男の心を欲しがるなんて……ねえ、シュノンセル。貴女が愛しい男の手での自殺を選んだ事すら、この白い竜は気づかないのよ？」

「我は精霊では無い」
「えー！　だってこのご本の絵と似てるよ。精霊さんでしょう？」
デルの木に花が咲くころ、セイフォンに行った。
処分対象があったのではない。
気が向いたからだ。
我としては非常に珍しいことだった。
離宮でデルの木の下で座っていると、小さな人間が話しかけてきた。
子供。
幼い人間の女。
幼女は抱えていた本を我に見せ、我を精霊だと言った。
本はほとんど文字の無い挿絵ばかりの絵本だった。
雪の精霊の童話。
どうでもいいと思うのに。
なぜか訂正してしまった。

この幼女の瞳の色は、ヒュートイルと同じだった。

数年の間。
我は離宮に滞在した。
暇だったので幼女の希望のまま留まった。

いつの間にか女になったイレイッタ。
当代王の第４王女。
ある日。
イレイッタは言った。
「私、貴方の花嫁になりたいの」
イレイッタは次の春に輿入れが決まっていた。
「我の名を呼べたなら」

咽喉を掻き毟っても我の‘名’を口にすることが出来ず。
狂ったように泣き叫び。
冬の凍てつく湖に身を投げた。
王女は悪魔に魅入られたのだと、人々は噂した。
イレイッタが湖に落ちるとき。
我が傍らにいたのを何者かが目撃していたのだろう。

王女は＜白金の悪魔＞に恋焦がれ。
愛しい悪魔に魂を捧げた。
後に吟遊詩人がそう歌った。

悪魔など。
絵本の中にしかいないのに。

「魔女よ。我にお前は不要だ」

サーテメルンは青の竜帝の大陸の一番西に位置する小さな国だ。
呪術が盛んな古い国であり、王ではなく巫女が統治する。
サーテメルンに異界の生物が落ちてきた。
術によるものではなく、世界の境目から。
極稀だが。
我がその地を訪れると魔女がいた。
巫女は魔女だった。
魔女は世界に一人のみ。
同時に複数存在することはない。
魔女が死ぬと他の女に【記憶】が移行し、その者が魔女となる。
魔女とは世界の記録媒体。

前の魔女が死ぬとそれまで普通に暮らしてきた女が突然に魔女になる。
魔女になっても平凡に生きて死ぬ者も多い。
中には【記憶】を駆使し、栄華を求める者もいた。
この巫女が魔女になったのはごく最近のことのようだった。
魔女に懇願され、我はこの魔女の用意した竜宮に暫し滞在した。
我が魔女の願いをきいたのは。

暇だったからだ。

シュノンセルよ。
我は暇なのだろう？
世界の秩序を管理するというのは、暇なのだな。
お前が我に教えてくれた。
他にも何か……教えようとしていたようだったが。

魔女は我を愛していると言い始めた。
意味が分からん。
何故、我を愛せる？
‘つがい‘でもないお前が。
お前だけではない。
我にまとわりつく女は大抵の者が言う。
我を愛していると。
熱病に侵されたように。
我はお前達の愛などいらない。

愛など、知らない。

「なぜ、私を抱いてくださらない！　侍女達には望みのままにお与えになるのに……巫女王たる私のどこが下賤な女に劣ると言うので

す！」

我に触れた侍女達は魔女に消された。

それでも次々に女が寄ってくるのは、我と交わると不老長寿になるとされたからだ。

呪術が盛んなこの国では古い迷信がまだ、庶民の間でも生きていた。

魔女がどんなに喚こうと。

魔女とは閨を共にしなかった。

あれは記録の媒体。

そう思うと女として認識できないのだから仕方が無い。

男を相手にするより、無理だ。

異界の玩具らしきものを商人から手に入れたから帝都に来い。

＜青＞がそう言っていると、使者として来た竜は言った。

「旦那～。そろそろ帰ってきて陛下と遊んでやって下さいよぉ。なんだかんだ言って、あのお子様は旦那に懐いてますからねぇ～」

運良く生きていた、赤い髪、は＜青＞の元でつがいを得、竜騎士となっていた。

「＜青＞の城でラパンの花は咲いたか？」

「えぇ、満開ですよ」

ラパンは食用の実がなるのだが、我は食べたことは無い。

食物を摂取する必要がないからな。

ただ。

花は気に入っている。

「帝都に行くことにする」

我は、赤い髪、と共に帝都に行った。

我に走り寄ってきた＜青＞が顔をしかめた。

「じじい。すごい【呪】を背負ってるな。巫女王に呪われたな」
【呪】か。
そういえば我が飛び立つ前に何か叫んでいたな。
興味が無いので無視したが。
【呪】をかけていたのか。
「すげえ【呪】だな。まあ、人間がじじいをどうこうできやしないが。重たそうだし、うざったくねぇか？　巫女を殺してすっきりしちまえよ」
ラパンの花を見ていた我に＜青＞が言った。
うざ、うざ……うざったい？
今の時代はかわった言い回しをするのだな。
こういう状況に使う言葉なのか。
＜青＞は意外に物知りだな。
少し前までは我の膝ほどの背丈だったのに。
四竜帝の中で最も若い＜青＞だが。
じきに老いて、土に還る。
人間も。
竜も。
花も。
我から見れば、大差ない。
我はラパンの花の香りを嗅いだ。
不快ではない。
良いとか悪いとかは、分からない。
不快ではない、それだけだ。
「あの魔女もこの花と同じ。すぐに散り、土になる。放っておけ」
＜青＞は青い髪をがりがりと掻き毟り、ため息をついた。
「たくっ。冷酷なんだか優しいんだか……」
冷酷？
優しい？
我が？

「どうでもいいだけだ」

青が瞠目する。

「あの巫女王は、自分を殺しに旦那が戻ってくるのを待ってますよ、きっと」

‘赤い髪’が言った。

「あの女。何年でも……死ぬまで待ってるでしょうに。相変わらず酷い男ですねぇ」

女帝にくれてやる心など無い。
王女の精霊になる気も無い。
魔女は‘うざったい’が殺すほどでもない。

お前達の愛など。

興味も関心も無い。

我が想うのは。
我が欲しいのは。

「＜青＞、異界の玩具をかせ」
「これだ。けっこう難しいぜ……って、おい?!」

我は玩具を＜青＞に放った。

「つまらん」
すぐに揃った色。
あんなにばらばらだったのに。

つまらん。

暇だ。

暇で、つまらない世界。
無くしてしまおうか。

ふむ。
もう少し。
もう少し、待ってみるか。
竜の始祖が言っていたしな。

いつか。
いつか、きっと。
我の‘暇’は消えると。

＜古の白＞よ。
お前が言ったのだ。
竜になれば我の望みが叶うと。

我の望み。
時間が経ちすぎてはっきりと思い出せないが。

暇を望んだんじゃないはずだ。
我が望んだのは。
我が欲しかったのは。

「あなたはハク。私は鳥居りこです。これから末永くよろしくね！」

我の欲しかったもの。

「我はハク。そうか、そうだったのか！くくっ……はは」

見つけた。

「我の名を呼べ、りこよ！」

見つけた。

我の。

我の、りこ。

我のすべてを、りこに捧げよう。

だから。

もう。

我を。

「大好き。私の白い竜」

独りにしないで。

愛しい貴女に、永遠という監獄を。

第３６話

「そこで反省してなさい！　窓、壊しちゃうなんてぇえ～。無一文なんだから弁償できないでしょうがっ！」
私は鉄鍋に蓋をして重石をのせた。
会話は念話で出来るので問題無いし。
鍋を貸してくれたカイユさんは微笑みながら言った。

「火にかけときましょうか」

いや。
さすがにそこまでは……。

「灼熱の石釜に突っ込んどくか」
ダルフェさん。
容赦無いですね。
まあ、さっき窓から落とされたしね。
「えっと。重石だけで！　ね、許してあげて」
あぁ、結局。
「姫さんは旦那に甘いからなぁ～。っち」
これが惚れた弱みってやつでしょうか。
重石をのせられた鉄鍋に大人しく入っている‘夫’に声をかけた。
「前みたいに術式で出てきたら駄目だよ？　いい子にしていてね」
「うむ。分かった。我はここで己の不甲斐無さをかみ締め、反省する」
素直で良い子なハクちゃんなんです。
「んで？　いたいけな姫さんを襲ったケダモノ君。眼の変化理由はなんすかぁ？」
「トリィ様に大怪我を負わせたこのケダモノ野郎。再生能力の移行

について、どのような見解をお持ちで？」
ひいぇえええ～。
完全にこの2人を敵にまわしちゃってるし。
鍋の中のハクちゃんは念話で話し始めた。
「おそらく……竜珠と体液と気の副作用だ。我もはっきりとは言い切れぬ部分もあるが。過去に我と身体を繋げた女達には、このような変化は無かった。他の女達とりことの差は、竜珠と我の意志、つまり……やる気か？　我は自分から望んでしたことは無いのでな。あぁ、そういえば！　りこは異界人だが身体の造りはこの世界の人間と同じだったぞ？　確認した我が言うのだからこの点は間違いない。違いは……しいて言えば、乳が小さい位だな。ふむ、つまりだ。りこの変化は我がりこを深く想ってる証な……」
私の不穏な気配を察知したのか、ハクちゃんは念話をとめた。

「最低だな、この男」
「こんな生き物、鍋ごと処分いたしましょう」

鉄鍋を涙目で睨み付け、ぶるぶる震えながら。
私は低い声で言った。

「そこの窓から捨てちゃって！」
ダルフェさんとカイユさんが息ぴったりの動作で鉄鍋を外へ投げた。
2人の共同作業で壊れた窓から放り投げられたそれは。
夕暮れの空に吸い込まれ、消えた。

「さ、飯にしようぜ、飯！　姫さんの好きなでっかい海老あるからな！　オーブンで殻ごと焼いて溶かしバターで食べると最高だもんな。急いで支度すっから、な？」
ダルフェさんはごしごしと目をこすっている私にそう言うと、部

屋から走って去って行った。
残ったカイユさんが優しい手つきで頭を撫でてくれた。
「ううぅっつ、カイユ～」
そっと抱き寄せ、背中をトントンと穏やかなリズムで軽くたたいてくれる。
小さな子をあやすように……。
「竜の雄は馬鹿揃いで。申し訳ございません……でも」
カイユさんは目をこすっていた私の手をとり身をかがめ、水色の眼を私の金色に変わってしまった眼に合わせて微笑んだ。
「でも。どんなに馬鹿で愚かでも。竜の雄は‘つがい’しか愛しません。夫にするには人間の男なんかより、ずっとお勧めです。彼らは私達を絶対に裏切らない。カイユが保障いたしますから」

「何が……どの言葉がりこの気に触ったのだろうか？」
我は鉄鍋の中で考えた。
我がりこをとても想っていることを話したつもりだが。
肉体の変化も我が‘つがい’であるりこを深く愛しているという証明だと言いたかった。
が。
りこは怒った。
怒っただけではない。
悲しみも混じった感情だった。
怒らせ、悲しませた。
我はまた、失敗したのだ。
我の‘足りない’部分がまた、りこを傷つけてしまった。
あぁ我の愚か者！
「おい。すっかり鍋がお気に入りみてぇだな、じじい」

街外れの緑地に落ちた我の鉄鍋を＜青＞が蹴り飛ばした。
転がる鉄鍋の中で我は蓋に爪を立てて、取れぬように努力した。
蓋をしたままの状態を維持せねばならぬのでな。
りこが出ていいと言うまでは。
む？
術式も使ってはいけないと言われた。
どうやって帰るのだ、りこの元へ。
さすがに我も鉄鍋に入りつつ移動するには術式がいるぞ。
「じじーいぃいい！　無視してんじゃねぇっ」
＜青＞か。
ふむ。
＝＜青＞よ。我をりこに届けろ。届けたら速やかに去れ。我のりこに2ミテ（2メートル）以上近寄れば眼を抉る。触れたら殺す。
「あ～のなぁ～。それが人にモノを頼む態度か？　鍋の中なのに偉そうにっ！　誰のせいで俺様がまたまた帝都からカっ飛んで来たと思ってる！」
＝知らん。そんなことより、りこだりこ！　我をりこに運べ。
「この色ぼけじじいがっ！　おちびの元に連れてく前に話がある。バイロイトから電鏡で連絡が来た。ヴェル……お前、とうとうおちびに手をつけやがったな。しかも金の眼だって？　いったいおちびに何しやがった?!」
＝何とは？
「とぼけやがって……。おちびはもう人間には戻れない。竜にもなれない。【異端】の存在だ。ああなったら……死んでも元の世界に魂が帰れないぞ？　異界の生き物はこちら側で殺してやることで、魂をあっちの世界に帰してたのに！」
1番年若いとはいえ、竜帝の1人。
＜青＞は気づいたか。
まあ、かまわんが。
我がりこを逃すわけなかろう？

我から……この世界から魂だけになろうと逃したりせぬ。
もっとも、魂だけになることなどないが。
死なせるものか。
りこは我のものだ。

永遠に。

「ヴェル……お前、まさか」
＝我はずっとお前ら竜族の願い通りに行動し、人間共の望むように振舞ってきた。我の自我はあって無いような希薄なものだったからな。だが……りこに関する事で我に口出しするな。あれは我の宝。我の全て。我の怒りを買い、いずれくる竜の滅びを早めたくはなかろう？　四竜帝よ、＜青＞の竜よ。
「……おちびのとこにじじいを運ぶ前に、もう1つ話がある」
鉄鍋が浮遊するのを感じた。
＜青＞が鉄鍋の蓋についた取っ手を掴んで飛んだので、我は蓋が取れぬように爪を内側からさらに食い込ませた。
よりしっかりと食い込ませるために爪を伸ばしたら、突き抜けて＜青＞の鱗に刺さったらしく＜青＞が悲鳴をあげた。
「ぎゃーあぁあ！　さ、刺さったぞ？　痛い、痛いってぇじじい！」
惰弱な。
竜帝のくせに。
我は鍋本体が落下しないように足の爪を側面にも突き立てた。
＝で。＜青＞よ、我に話とは。
「腹立つじじいだな～、ほんと。おちびの前じゃかわい子ぶりやがって……うぎゃーっつ！　おい、爪が俺様の指を貫通したぞ！」
＝で。話は。
「ううっつ。バイロイトに皇室から文書が来た。押収した非合法の異界の物品の確認をして欲しいってな。じじいの頭の【網】にひっかからないようなモノだったから残ってるわけだろ？　無視しても

いいかと思ってたんだけどな。文書寄越した第二皇女って、その、あれだろ？」

＝あれ……とは？

「てめぇの愛人連中の1人じゃねえか！　セイフォンでおちびに会うまで、あのデカ乳のとこで爛れた生活してただろうがっ。あの女、じじいにかなり執着してたからな。文書を無視したら支店に乗り込んでくんじゃねぇ？　まずいだろ、さすがによ」

＝まずい？　何故だ？　それに愛人などいない。あれらが勝手に寄ってきただけだ。

「竜帝たる俺様が、愛人の定義をじじいに講釈するなんて嫌だ。だからそれは後回しだ！　とにかく、おちびに知られたら困るだろう～が！」

＝何故？　どこら辺が困るのだ？

「だあぁぁあ～あ！　これだからじじいは駄目なんだよ、最低男めっ」

考えても全く分からん我に＜青＞が怒鳴った。

「じじいの過去の女って存在は、おちびの心を傷つける……多分、嫌な思いをさせるし、きっと悲しませる。じじいの腐った女遍歴がばれたら大変だ。おちびみてぇな、すれてないお嬢ちゃんには嫌悪の対象になりそうだしな。おちびにじじいを嫌わせるわけにはいかんだろ？　それに大抵の男ってのは過去の女のことは隠すもんだ。特に比較なんか厳禁だぜ？」

ん？

過去の女？

過去……。

先ほど。

愚かな我はりこを怒らせ、悲しませた。

女。

過去。

比較。

乳。

「……おい。どうした、じじい」

我は失敗したのだ！

やってしまったのだ！！

＝＜青＞。お前もたまには役に立つのだな。

「へっ？　て、おい！　じじい……」

りこ。

我が悪かった。

言い方が悪かったのだな。

＝我が好きなのは、どんなに小さかろうとりこの乳だけだと言えばよかったのだな。

「言うな！　……＜赤＞の姉ちゃんが言うとおり、じじいは男として最低最悪だな」

第37話

「姫さん？　どうした……海老、好きだろう？」
壊れた窓に応急処置として、板を数枚打ち付けた居間での昼食件夕食（諸事情により、昼ご飯をとってなかった私でした）がテーブルに並べられていた。
大きな海老は丸ごとオーブンで焼かれ、真っ赤に光っていた。
平鍋で炊き上げた魚介たっぷりのパエリヤそっくりの炊き込みご飯。
レースのような繊細な葉が使われたサラダ。
琥珀色のコンソメスープ。
色とりどりの果物が食べやすいようにカットされ、ガラスの器に盛られている。
一口サイズ可愛らしいケーキが金の模様が施された白いお皿に何種類ものせられて……。
いつもだったらうきうきで食べる私がフォークを手に取ることすらせず、項垂れているのを心配したダルフェさんが側に来て言った。
「もしかして、身体が変なのか？　具合が悪いのか？」
私は首を横に振った。
「ううん。違うの。……ハクちゃん、帰ってこないから。だから、その」
あれから1時間以上経ってるのに。
ハクちゃんが戻ってこない。
なんで？
ご飯の時間だよ？
ハクちゃんの好きな‘あ～ん’がいっぱい出来るのに。
私達、新婚（？）さん的状態になったはずなのに。
やることやったら、どっか行っちゃうわけ？！
私の胸が貧弱だからかぁ～って、ふざけんなってんだ泣き虫めそ

めそ竜め！
日本人じゃ標準だ！
一応Cカップだよ、私……ぐっすん。
「トリィ様……」
カイユさんがダルフェさんの首を片手で掴み、軽々と持ち上げ微笑んだ。
「ねえ、ダルフェ。あのケダモノを回収してきて。……言われる前に行け！　この役立たずがぁぁあああ！」
「ハ、ハニー、分かった！……って、おいっ。あれ！」
次の瞬間。
破壊音とともに、応急処置をした窓が吹っ飛び。
カイユさんが私を抱えて瓦礫から守ってくれて。
ダルフェさんが凄い勢いで窓から入ってきた黒い物体を、左手で床に叩き落し。
黒い物体は鈍い音をたてて床にめり込んだ。
すべてが瞬く間に行われた。
見えた。
ダルフェさんの動きも瓦礫が舞うのも。
何かが起こったことより、見えた事のほうが衝撃的だった。
私の眼。
色が変わっただけじゃないかも。
「ちゃんと届けたからな、じじい！　じゃあな、おちびっ。帝都でな！」
窓の外にふわりと浮いた青い影。
右手を私に軽く振って、消えた。
え？
あれって。
「竜帝さん？……ちょっ」
窓。
さっきよりも、めちゃくちゃだよ？

あんたの会社の建物だよ？
いいのか？
社長だから、いいのか？
「トリィ様。お怪我はありませんか？」
カイユさんが私を抱えたまま部屋の隅に移動した。
椅子ごと。
こんな細くて美人なのに、怪力ですよね。
「カイユ。竜帝さんが……何、どうしたの？　あぁぁぁ～！！」
ダルフェさんが叩き落した未確認飛行物体。
斜めになって床に半分埋まっているあれはっ！

「ハクちゃん！」

鉄鍋の蓋の隙間から。
２つの金の眼が光っていた。

「すまぬ、りこ。……重石を無くしてしまった」
「お……おも、し？」
あ……謝るの、そこなわけぇぇ～！？

ハクちゃんのせいで壊滅状態になってしまった支店の部屋。
まあ、竜帝さんが止めを刺したって感じだけどね。
あの惨劇の中。
ダルフェさんはテーブルクロスを引き抜き、料理にかけていたためにご飯は無事だった。
凄すぎるよ、ダルフェさん！
床にめり込んだ鉄鍋に冷たい視線を落として、ダルフェさんはカイユに言った。
「ハニー。ここはもう駄目だ。姫さんを駕籠に連れてってくれ……料理は俺が持ってくよ」

いろんな意味で呆然とする私を抱き上げて、カイユさんはさっさと部屋を出た。
屋上へ続く階段を軽やかな足取りで進み、昼間に見た駕籠の扉を開けて中に入り。
駕籠の一番奥にある寝室のベットに私を降ろしてくれた。
「準備をしてきます。私が迎えに来るまでここでお待ちくださいませ」
そう言うと足早に部屋を出て行き……。
行かなかった。
視線を下に落とすと……開けた扉を勢い良く閉め、私の方を向いて言った。
「トリィ様。ご許可下さればカイユが、あれ、をトラン火山に捨ててまいりますが」
は？
あれ？
捨て……って、まさか。

カリ。
カリカリ。
カリカリカリ……。

猫がドアをひっかくような音がした。
まさか。
「りこ～、りこぉおおお」
念話。
私はベットから慌てて扉に走り、開けた。
床にいた。
そこに居たのは。

蓋をした鉄鍋。

底の部分から白い鱗に覆われた2本の足が突き出ていた。
小さな真珠色の爪には木屑が……この扉と同じ水色の。
絶句した私にカイユさんが言った。
「どこへ捨てても戻ってきますね、これは。……埋めてしまいましょうか？」
「え、えっと。あのっ……」
あきれたように言ったその顔は……柔らかな笑みを浮かべていた。
「トリィ様のお好きなようになさいませ。‘これ’は貴女様のモノですから」
足の生えた鉄鍋を掴んで無造作に部屋に放り投げ。
静かに扉を閉めて。
カイユさんの足音が遠ざかり。
寝室には私と……。
「すまぬ、りこ。＜青＞に探させたが重石が、そのっ……どうしても見つからなかった。せっかくりこがのせてくれた重石だったのに。不甲斐無い我を許してくれっ」
足の生えた鉄鍋と2人きり。
なんなの、これ。
なんだ、これはっ！
「……ぶっ！」
だ、だめ。
我慢できな～い。
「ぶぶっつ……うははひゃひゃあぁぁ～！」
「りこ？」
だめ、やっぱり……だめだ。
この子にはかなわない。
「な、なんで鍋のままなの？　うう、おもしろすぎるよ」
ハクちゃんは金の眼をほんの少し蓋をずらした隙間から覗かせ言った。

「出てはいけないからだ。りこが許してくれるまでは駄目だから。術式も使わなかったぞ？　我は反省中なのだ」
鍋の底の足が引っ込み、蓋が完全にしまった。
床にあるのは一見すると普通の鉄鍋になった。
「我は……我は、りこを傷つけてばかりだ……心も、身体も」
ハクちゃん。
「我はりこを、りこだけを愛してる。傷つけたくない……大切な、大切な我のりこなのに」
ハクちゃん。
やっぱり。
貴方にはかなわない。
「ハクちゃん。初めての‘愛してる’が鍋の中からじゃ、さすがにちょっとね。感動が笑いに傾いちゃうよ」
私は鉄鍋に近寄って、しゃがんだ。
蓋をそっと外して中を覗き込む。
白い竜が身体を丸めていた。
お腹にくっつけるように曲げられていた小さな頭がゆっくりと持ち上がり。
金の眼に私が映る。
「……りこ」
きらきら光る金の眼の中。
私が笑っていた。
ハクちゃんとお揃いの金の眼で。
幸せそうに。
微笑んでいた。
「もう1度。‘愛してる’って言ってね。抱きしめて、言って。私だけを愛してるって」
ハクちゃん。
大好き。
可愛い貴方も、怖い貴方も。

「愛してるよ、私のハクちゃん」

「こ、こ、このケダモノがー！　トリィ様から離れろっ」

人型になったハクちゃんに抱きしめられて。
顔中に……ひんやりとした唇の感触。
柔らかで優しいそれに、心が蕩けてしまいそうで。
キスの合間にたくさんの「愛してる」をもらった。
だんだん深くなるキスに意識がぽわ～んとなって……身体がふわふわなんだかじんじんなんだか、訳が分からない状態になってきた時。

カイユさんの怒声で我に返った。

「えっ……ちょ、な、うっきゃあぁぁ～！？」
なんでベットの上？
なんでワンピースがぬ、ぬぬ……脱げかけてんのよっ！
うわっ？
な、なんてところを触ってんのよ、このでかい手は！
て、ていうか。
なんで、いつの間にこの体勢に持っていったんだぁあ～！！
「出て行け、カイユ。我は昼間の失態を挽回す……ぐがあっ！」
私はのしかかっていたでかい身体のお腹に、両足をそろえてキックを入れた。
もちろん手加減なしだ！
敵（？）がひるんだ隙にベットからダッシュで逃走し、カイユさ

んの腕の中に避難した。
「トリィ様！　お怪我はありませんか？」
カイユさんが乱れた服を手早く整えてくれた。
ううぅ……は、恥ずかし～い！
「り、りこ！　今度こそ、我は必ずりこに最高の悦楽を与えてみせよう！　誓う！　だから、もどって来い。な？　さあ、こっちに……」
ハクちゃんの金の眼が細められ。
無表情だった美貌が……艶やかな笑みを浮かべた。
男の人なのに。
とんでもなく、色っぽい。
その顔を直視した私の全身に震えが走った。
本能が危険を叫び、脳内にサイレンが鳴り響く。
危険。
近寄るべからず！
速やかに退避せよ！！
「りこ。さあ、我の愛しい妻よ」
白く長い指が私を手招く……。
ひっいぃいいぃ～！
「りこ……」
金の瞳がきらりと光った。
ぎ……ぎゃあぁー！
い、い、いやー！
怖い、怖すぎるぅうう～！
「ハ、ハクちゃんの馬鹿、最低！　……何考えてんのよ！？　ちっとも反省してないじゃない！　もうっ！　……当分の間、駄目なんだからね！」
ベットの上でお腹を押さえる素っ裸の旦那様を残し、私はカイユさんの手をひいて部屋を出た。

駕籠の中はまるで豪華なホテルのようだった。
さすがに異世界！
飛行機のファーストクラスよりすごいんじゃない？
ま、そんなのテレビでしか見たことないけれど。
後で探検しようっと！
中央部分のリビングスペースに行くと、テーブルにはさっき食べそこねた料理が並べられていた。
「カイユ。ありがとう。ダルフェが来たら皆でご飯、食べよう！」
なるべく皆で食卓につくようにしてもらっていた。
一人でカイユさんに給仕されながら食べるのは嫌だったから。
カイユさんは私がにこにこしていることにほっとしたような顔をした。
「トリィ様。無理していませんか？　あのような事があったのですから、触れられることすら恐怖なのでは……。私からヴェルヴァイド様にはっきりと言いましょうか？　あの方にはトリィ様の心情を察して行動するなんて高等なことは無理ですわ」
「ううん、いいの。あの時は……無理やりとかじゃない。ハクちゃんは、悪くないの。それに、えっとね。その……私」
あ。
言わなきゃ。
カイユさんには。
この人は本当に私のことを考えてくれている。
だから。
言わなきゃ。
「私、やめてって……あの時、言わなかったの。ハクちゃんを止めなかったの」
「トリィ様……」
言わなきゃ、駄目だ。
「私。欲しかった、あの人が。傷つけるの分かってたのに、泣いて

るの知ってたのに。ハクちゃんが欲しかった。これで、この人は私のものになるって思った。……ずるいでしょう？　酷いでしょう？」

自己嫌悪で顔を伏せた私の頭を、カイユさんが黙って抱いてくれた。

「この世界に勝手に連れこられて。……大切だったもの、全部無くなったの。なんにも持ってない私になっちゃって」

カイユさん。

私を軽蔑しますか？

「こんな世界、嫌い。大嫌い」

優しい手が、頭を撫でてくれる。

「帰りたい。でも、ハクちゃんが……ハクちゃんが私を、私に」

カイユさんは、良い香りがする。

抱っこされるたびに思ってた。

懐かしい香り。

記憶には無いのに、懐かしいと感じる。

懐かしいの。

すごく、すごく……懐かしい。

「私に……全てをくれるって。私の望みは全部かなえてくれるって」

ハクちゃんは言った。

望めば。

私に‘世界’をくれるって。

「世界なんかいらないの。私の望みは」

ずっと。

ずっと、探してた。

私だけの誰か。

私だけを想ってくれる人。

私だけを。

あきらめてた。

夢物語だと。

そんな人は、いないんだって。

有り得ないって。
でも。
見つけた。
やっと、見つけた。

私の全てを捧げます。
家族も、世界も捨てるから。

だから。
お願い。
もう。

独りにしないで。

「カイユ。私はあの人の全てを、手に入れたいの。全部、欲しいの」

髪の毛1本も、鱗の1枚だって。
誰にも渡したくない。
私だけの貴方にしたい。

カイユさんが私の耳にそっと囁いた。
「……仰せのままに。私のかわいいお姫様」

カイユさんの長い銀色の髪が。
さらりと流れた。

《異界にいたのね、可愛い私の娘。愛しい子。母様は貴女の味方よ。
私が土に還っても、胎の子が貴女の側に。アリーリアの血は貴女と
共に。……竜族が滅びるその時まで》

この時の言葉は私の耳には届かなかった。
竜族のみに聞き取れる特殊な周波のそれを、聞いていたのは3人。
壁の向こうに居た白い竜と。
駕籠を足に持ち、夜空に飛び立った真紅の竜と。

そして。

カイユさんのお腹にいた、あの子。

私がカイユさんの【誓約】を知ったのは。
ずっと先のことで。

‘母様’に、2度と会えなくなってからだった。

第３８話

「えー！　もう支店を出発しちゃったの？」
聞いてびっくり！
私が寝室でハクちゃんと……その、えっと、むにゃむにゃ（？）してる間に離陸準備が終わっていて。
カイユさんに頭をなでなでしてもらってる間に、竜体になったダルフェさんが駕籠を持って飛び立ったなんて。
振動１つ感じなかったから、気づかなかった。
あ！
ダルフェさんの竜体、見損ねた～。
でっかい竜。
ううん、残念。
駕籠には小さな窓がいくつかあるようだったけれど、外はもう暗いし……。
それに支店の人達にお別れもしてない。
お世話になったどころか、部屋を壊しちゃって。
コナリちゃん達に怖い思いさせた（ハクちゃんがね）のに、謝ってないし。
バイロイトさんには複雑な思いがあるけれど。
キス。
ま、欧米人なら挨拶ですし。
好きな人とのキス以外はカウントしないってルールが、乙女にはあるって言うよね。
乙女。
ちょっと、ずうずうしいかな？
う～ん。
かなり、ずうずうしいか。
ま、勘弁してもらって。

乙女ルールの適用を申請致します。
「トリィ様」
どうやら1人でぶつぶつ言っていたらしい私にカイユさんが言った。
「あれ。どうなさいますか？」
へ？
カイユさんが指差した扉の隙間から。
小さな白い頭が……。
「食事……我はあ～んがしたいのだ、りこ。我はあ～んがっ」
うるうる、きゅいーんな金の眼に。
私が勝てるはずも無く。
「あぁもうっ、しょうがないなぁ～。早くおいでよ。あ～ん、してくれるんでしょう？」
ぱたぱたと走りより、私の足にしがみ付いた白い竜。
私を見上げるかわゆい姿。
上目遣いの視線は私の理性を溶かしてしまう。
なんてずるいの。
これって天然？　計算？
「りこ。我が悪かった。全部、全て我が悪かった」
ワンピースの裾に小さな顔をこすり付けるようにしながら。
「りこ……我を捨てないで」
ぐはっ！
駄目、もう我慢できなぁあああいぃぃ～！！
「か、かわゆいよう！　あん！　もう堪んないっ！　はあぁぁ～んっ……ハクちゃん、かわゆすぎるぅうう！」
ハクちゃんを抱きしめ、悶絶する私にカイユさんの冷静な指摘が聞こえた。
「トリィ様。それの正体はあの素っ裸のケダモノ野郎ですよ？」
わかっちゃいるけど。
やめられない。

とまらない。

かっぱ海老せん以上の。

麻薬のようなかわゆい貴方。

「りこ。あ～ん」

小さな手に握られたフォークが私の口に苺に似た果物を運んだ。

形は苺なのに色は紫のそれは、巨峰の味がした。

巨峰。

大好きなのよね。

「カチはりこの嗜好に合うか？　先程のオルの実とどちらが好みだ？」

左右にゆらゆらとしっぽを揺らし。

テーブルの上から私を見上げるきらきらお目々。

小さな竜が身体に不釣合いなサイズのフォークとスプーンを使っている姿は。

めっちゃ、ラブリー！

天国極楽。

まさにファンタジーなのだ！

「カチのほうが好きかな。でも、さっきのも美味しかった。もうお腹いっぱい」

カイユさんと私でダルフェさんの作ってくれたご飯をなんとか完食。

すごい量だったけれど、カイユさんがほとんど食べてくれた。

長身で細身の身体。

どこにあんなに入るのか。

カイユさんは私の数倍は軽く食べてしまうのだ。

「ご馳走様でした。ハクちゃん、ソファーでころころしててね。食器を洗ったらテーブルを片付けるんだから。分解して床下に収納するんだって……あ、カイユ！　私がやります」
私は食卓にのっていたハクちゃんをソファーに座らせた。
「うむ。ころころして待てば良いのだな？　承知した。ころころするぞ」
ころころ。
意味、わかってんのかな？
ま、いいか。
かわゆいから。
４人は軽く座れそうなソファーで何故かでんぐり返しを始めたハクちゃんを残して、私はカイユさんと食事の片付けを開始した。
ワゴンに食器をのせ、厨房に移動して。
厨房は居間に隣接されていて、廊下に出なくても移動できる配置だった。
８畳ほどの広さに備え付けの食器棚や作業台・流しに……オーブンつきの焜炉。
離宮の厨房には薪を使う石釜もついていたっけ。
焜炉は同じタイプで少し、小ぶりなサイズ。
この世界のエネルギー事情はさっぱり分からないけど、これは凄いと思う。
ぱっと見は私にも見慣れたガスコンロ風。
使い方も簡単。
レバーで点火・消火そして火力の調節をする。
違うのは燃料。
五徳の下に不透明な赤い石が埋め込まれている。
これが火の元。
ダルフェさんが前に説明してくれたけど、詳しいことはよく分からなかった。
火と術式。

固化がどうのこうのって。
この燃料は持ち運びもでき、安全性も高くて便利。
ただ、高価なものらしい。
むむ。
使用するさいは節約を心がけよう。
「トリィ様。手のお肌が痛んだら大変ですから。はい、どうぞ。これもしましょうね」
カイユさんが差し出してくれたのはゴム手袋。
と、エプロン。
ピンクの花柄でかわいいデザインのゴム手袋は子供用らしい。
実は私に提供されている衣類は全てキッズサイズ。
私、この世界じゃ子供サイズみたいで。
人間の標準体格が欧米。
竜族にいたっては２ｍ越えが普通。
しかも。
ハクちゃんはダルフェさんよりもちょっと背が高い。
並んで街を歩いたら。
手を繋いで歩いたら。
他人から見たら。
親子？
それか……ハクちゃんがロリコン疑惑をかけられちゃうの？
あ、でも。
私の顔は子供には見えないよね。
なら、平気かな？
「トリィ様？　どうなさいました？」
ピンクの花柄ゴム手袋に、真っ白なふりふりレースのエプロンという姿で。
流しの前で固まってしまった私にカイユさんが言った。
「あ！　踏み台が必要でしたね、申し訳ございません」
さっと用意してくれたのは。

離宮でも愛用していたダルフェさん作、木製の踏み台。
持って来てくれてたんだ、これ。
嬉しいような悲しいような。
「あ、ありがとうカイユ」
このエプロン。
かなり抵抗があるんだけど。
これもダルフェさんの力作なので。
「帝都に着いたら新しいエプロンをダルフェに縫わせましょうね。支店で最高級の生地を手に入れてまいりましたから。花紅染めで、素敵なんです。レースを多めにしたデザインにしましょうね」
カイユさんが私の洗った食器を拭きながら優しく微笑んだ。
もうちょっと、シンプルな感じにて欲しいなぁ。
うう、言えないけどさ。

「あのでか乳皇女、やけにあっさりひきやがったな。お前はどう思う、バイロイト」
おちびにじじいを届けた後。
俺様は2階に行きバイロイトに指示を出した。
＜監視者＞は押収した物品に危険性を感じていないので、好きに処理しろと言っている。
そう、皇女に伝えろと。
バイロイトは自ら市庁舎に出向き皇女に＜監視者からの使者＞として謁見した。
第2皇女はバイロイトの言葉に。
「わかりました。あの御方がそう判断されたなら……。ふうん、そうねぇ。これらの品は貴人への贈り物にでも使うことにしますわ」
にっこりと笑って、答えたと報告を受けた。
が。

俺様としては、腑に落ちない。
じじいに群がってる女の中でも、でか乳は新顔で。
じじいの‘怖さ’を理解していない、頭の悪い女という印象を持っていたからだ。
この大陸でのじじい関連のことは女の事から＜監視者＞としての行動まで、全て竜帝である俺様が把握……監視していた。
いろんな意味でおっかねぇじじいに近づく女は、なかなかの女傑揃いで。
財力が有り、顔や身体に自信を持ち……知能も高く。
じじいに切られないように、うまく立ち回る。
じじいとの関係をおおっぴらにせず、都合のいい女を演じきる。
内心はどうだろうと。
そんな女達の中で、あいつは異質だった。
数年前に。
あの第2皇女はじじいを追いかけて、俺の城まで押しかけてきた。
今まで、そんな馬鹿は1人も居なかった。
あまりの愚かさに。
かえってその恋心が哀れに思った俺様は。
会う気ゼロのじじいを引きずって行き皇女に会わせてやった。
しかし、あの女はっ。
腕を引っ張って強引にじじいを連れてきた俺を見て。
こともあろうに……この俺様がじじいの恋人だと勘違いしやがった!
あっけにとられる俺に宣戦布告して、皇女は去った。
あれ以来。
人型にはなっていない。

小腹が空いたと訴えた俺様にバイロイトが菓子を出してきた。
飯を食いたかったが、取りあえず出されたそれを口に放り込んだ。
謎の形をした焼き菓子は、見た目と違って味はまぁまぁだった。

支店の幼竜がおちびの為に作った菓子で。
優しく素朴な味がした。
「なあ、バイロイト。俺様は乳が大きい女が好きだ。けどよ、あのでか乳皇女はごめんだ。１００００ジンの金を積まれても無理、嫌だ」
「お金大好きの貴方がそこまで言いますか。皇女、なかなかの美女でしたが……相変わらず口が悪いですね、社長。子供達の前では下品な言葉は許しませんよ、竜帝像が崩れてしまいます。あぁ、ラーズ達は明日には目覚めるはずですから、その前に帝都に帰って下さいね、陛下。あと第二皇女の件ですが今後の動向には注意を払っておきます」
バイロイトはこめかみを指で軽く叩き、続けた。
「まあ、人間の女の嫉妬は恐ろしいと聞きますし。あの皇女が彼の愛人だったとは。知っていれば違ったアプローチでお嬢さんの自覚を……」
「じじいが言うには、愛人じゃないってよ。じじいの感性は俺ら常識人には理解できない域に達しているぜ。継続的肉体関係を結び、あらゆる贅を貢がせておきながら……」
おちびの所に戻る前に。
皇女に話を付けに……別れ話に行こうと提案した俺様に。
言いやがった。

何故だ？
何故、りこ以外に時間を使う必要がある。
別れ話？
言っている意味がよく分からん。
我は非常に忙しいのだ。
重石だ、重石。
りこが我にのせてくれた大事な、重石だぞ！
重石を探せ、重石！

おかしいって。
俺様が、竜帝が重石……漬物石を探すのか？
て、いうか。
じじいよ。
でか乳は漬物石以下なんだな。
「じじいは、昔っから何考えてんのか分からなかったが」
俺様が餓鬼の頃。
じじいは庭の一点に視線を置き、ずっと動かない事があった。
微動だにせず。
丸3年間、突っ立ってた。
どんなに話しかけても無反応で。
3年たってやっと返事をしたじじいに俺は理由を聞いた。
じじいは言った。

この葉に虫がついていたのだ。
虫と虫につかれた葉がどうなるのか見ていた。

虫？
葉？

両親が死んで大泣きするいたいけな俺様を完全に、シカトぶっこいた理由が？
蛇竜になってしまった同属を殺して自己嫌悪に落ちいった繊細な俺様の嘆きを一切無視した理由が？

虫と葉っぱ。
んなもの数日で決着ついてたんじゃないのか？

じじい曰く。

虫と葉っぱの攻防は3年間で数回繰り返され、目を離す暇がなかったらしい。

痛感した。

このじじいには、違う、のだと。

「彼は……何も考えてなかったんじゃないですか？　で、今は考えるようになったんです、あのお嬢さんの事だけを」

バイロイトはこめかみを叩く手を止め、封書を差し出した。

「お子様の陛下にも、つがいが現れたら分かりますよ。あ、これカイユに渡した新しい電鏡代と貴賓室の修繕費見積もり、その他いろいろの請求書です」

にやりと笑ったバイロイトの頭に踵を落とし、俺様は帝都に帰るべく窓へ移動した。

「うるせー。俺様はつがいなんて当分、いらねぇよ！　もっと遊んでたいからな。腹減ったから、帰るわ。あ、おい……バイロイト！　例の術士、しっかり見張っておけよ！」

バイロイトは藍色の眼を細めて笑って、俺に手を振った。

「我々には遊んでる余裕など無いんです、さっさとつがいを探して下さい。……帝都にいる妻と息子をお願いしますね、陛下」

俺は尻尾を振って、返事をし。

事務所の窓から飛び立った。

2時間後。

帝都に戻った俺様は。

請求書を確認し、絶叫した。

第３９話

夕食の片づけが済むと、カイユさんが今後の予定を話してくれた。
帝都までは４泊。
もっと早く着くことも可能だけど、速度と高度をあげすぎると人間の身体には負担になる恐れがあるので、最も一般的で安全な速度と高度を維持して……遊覧飛行みたいにのんびり進むことを選択したこと。
道中は寄り道なし。
ダルフェさんは無休憩・飛びっぱなし。
それを聞き、慌てた私にカイユさんはにっこり笑った。
「これぐらいのこと、私達には全く問題ありませんわ。竜騎士は普通の竜族より頑丈ですから。この私ですら、２週間絶食し無睡眠の後に御前試合で魔……セイフォンのセシー閣下をぶちのめしたんですよ？　うふふ、手足をぶらぶらにしてやりました。あぁ、陛下が止めたりしなければ、ばらばらにしてやったのに。惜しいことをしました」
ダルフェさんは問題なしで……セシーさん？
セシーさんが手足をぶ、ぶち、ぶちちでぶらぶら？
分からない単語があったために首をかしげた私に、カイユさんが簡単に言い直してくれた。
「セシー閣下に試合で勝ちましたの。快勝でした」
なるほど。
なんかのスポーツで試合して、カイユさんが勝ったんだね。
「すごい、カイユは運動も得意なんだ～」
美人で優しくて、運動神経も良いなんて。
完璧だよ、うん。
「はい。私、‘運動’は強いんです、かなり」
運動は強い？

何か変だけど。
ま、いいか。
「りこ、りこ」
私の膝で丸くなっていたハクちゃんが顔をあげた。
「ハクちゃん、どうしたの？」
小さな頭を撫でてあげると、金の眼を細めて。
私の手のひらに頭を押し付けてきた。
もっと撫でて欲しいらしい。
「ダルフェが念で伝えてきた。この先に雨雲が発生しているらしいのだ。風も強まるだろう」
お天気が悪くなるってことかな。
ダルフェさん、だいじょうぶかな？
「大変っ、雨が降ったらダルフェさん、濡れちゃう。風も強くなるなんて……駕籠も揺れるの？」
ダルフェさん、風邪をひいちゃうかも。
それに。
ちょっと、怖い。
前に飛行機で北海道に言ったとき悪天候で揺れて、すごく怖かったし気分が悪くなって吐いたっけ。
ううん、吐いたらどうしよう。
思わず手で自分の口を押さえた私を見て、ハクちゃんは首を右に傾けた。
膝からふわりと飛び、私と目線をしっかりと合わせて。
「駕籠は揺れぬ……ダルフェも濡れないようにする。りこは何も心配することは無いのだぞ？　我が居て、りこの乗る駕籠が揺れるなど有り得ぬ」
ハクちゃんの小さな手が私の顔に伸ばされ。
触れる寸前で、硬く握られ。
「この手では、触れられぬな。……風雨を避ける術式は外で操らねばならぬ。その為、りこと同衾できない、すまぬ。……カイユ、今

宵は我が妻の側に。片時も眼を離すな。まだ、身体が安定していないはずっ、りこ？」

私はハクちゃんの両腕を掴んで、小さな身体を抱きしめた。

思いっきり。

精一杯、強く。

「ハクちゃん。駕籠とダルフェさんを守ってくれるのは、嬉しい。でも、そのせいでハクちゃんが1人で雨に打たれるの？　1晩中？　そんなの、駄目だよ……嫌」

私に抱きしめられたハクちゃんの身体がほんの一瞬硬くなってから、ふにゃりとなった。

「駕籠とダルフェはどうでもよいのだ、我はりこを護る。他はついでだ。あぁ、我は嬉しい……我のこの手がりこを傷つけるのでなく、護ることが出来るということが。とても、誇らしい」

ハクちゃんの言葉に。

貴方のまっすぐな愛情に。

胸が。

息が。

心、全てが。

「ハクちゃん……ありがとう」

引き寄せられ、飲み込まれる。

「ありがとう」

想いを込めて白い鱗に覆われた口元にキスをした私に、ハクちゃんは言った。

尻尾をくるくる回して。

「人型の我にもしてくれ。……沢山だぞ」

うん。

いっぱいする。

貴方がもういいって言っても、やめてあげないんだから。

ハクちゃんは術式で駕籠が揺れないようにしてくれた。
１晩中、ずっと。
ダルフェさんと駕籠……私を強い風と打ち付ける雨から守ってくれた。
朝、私が目覚める時には枕元に居て。
金の眼を私のそれとしっかり合わせて。
念話で「おはよう」って言ってくれた。
天気は良いけれど風が強いからって言って、すぐにダルフェさんの所に戻っちゃったけど。

「うっわー！　わ、あれ湖？　きらきらしてるね。あ、あれ何？　牧場？　きゃーっお花畑かな」
午前中は、窓の外を見て過ごした。
小さな丸い窓（直径３０ｃｍくらい）に張り付いて。
角度的に無理があり、真上は見えないのでダルフェさんの勇姿（？）は確認できなかった。
眼下に流れていく点のような町並みに、次々現れる雄大な景色に見入った。
「トリィ様。お茶にしましょう。コナリの作った焼き菓子をもらってきてますから」
カイユさんがテーブルに茶器を並べ、焼き菓子を缶から取り出しながら言った。
わたしは窓から離れ、２つのカップに紅茶を注いだ。
「カイユ。皆にお礼の手紙書きたいから、字を教えてくれる？　ハクちゃんは字は読めるけど、書くのは苦手だから」
「ええ、いいですよ。ヴェルヴァイド様の希望で支店から便箋も数種類持ってきました。発送は帝都に着いてからになりますが」
ハクちゃんが便箋。
手紙。
恋文。

「ぶほっ！」
むせてしまった私の背中をカイユさんがさすってくれた。

あれからハクちゃんはずっと帰ってこない。
でも、念話で会話が出来るので。
「ハクちゃん、ハクちゃーん！　ねえ、今はどこら辺なの？」
天井に向けて言った。
よく考えたら念話だから上を向いて大きな声を出さなくたっていいし、心の中で言えばいいんだけど。
私はふかふかのラグマットの上でカイユさんが貸してくれた地図を広げ、指でなぞった。
世界地図ではなく、この大陸の地図。
セイフォン、セイフォン……あった。
セイフォンの綴りはセシーさんに習ったから知っている。
書けないけどね。
会話はハクちゃんが常に側にいてくれたから、もの凄く上達したと思う。
必要なことだったし、必死でやっている。
字は……後手後手でございます。
読む事はもちろんほとんど出来ないし、書き取りにいたっては最悪だった。
書けなくても日常で困らなかったせいもあるかな。
「マジという中規模の都市上空……まだメリルーシェ領内だ。大陸で最も広い面積を持つのでナポールに入るのは明日の深夜になるな」
ハクちゃんの念話は皆に聞こえるモードだったので、カイユさんが側に来て地図を覗き込み。
「ここがナポール王国です。セイフォン・ホークエ・メリルーシェ・ナポール・シャイタン。シャイタンを過ぎたら帝都上空に入ります」
ほへ～……後3泊で帝都かぁ。
あれ？

そういえば。
竜帝さんを支店で見たよね。
「カイユ。竜帝さんより私達のほうが早く着く？」
「いいえ。陛下はもう帝都ですよ。支店からの距離なら……２時間程で城に帰ってるはずですから」
に、２時間？！
私のびっくり心（？）が伝わったのか、ハクちゃんが教えてくれた。
「＜青＞はあれでも竜帝なので他の竜族に比べ飛行速度が格段に速い。人間には目視できんほどにな」
へー！
凄いんだ、ちっちゃいけど。
竜帝。
ハクちゃんと同じ小さな竜。
青・赤・黒・黄の４匹（人？）いるんだよね、確か。
ずらーっと勢揃いしたら、素敵。
うっとりしちゃいそう。
「……りこ？」
は！
いかん、いかんのよ。
妄想してる場合じゃない。
「ね、ハクちゃんは帝都でも離宮みたいなお家（？）があるの？」
住む場所。
気になるんだよね～、やっぱり。
離宮みたいな所は落ち着かないな。
重要文化財に住んでる感じで、気疲れしちゃうんだよね。
竜帝さんの会社は社員寮とかあるのかな？
寮が無いなら住宅費補助が欲しい。
賃貸探すなら……１ＬＤＫで充分。
ハクちゃんだって、竜でいれば場所とらないし（人型はでっかい

からね）。
あぁ、ペット可物件……ペットじゃない、旦那様なんですって大家さんに言えば平気か！
考えてたらおかしな思考になってきた私を現実に引き戻したのは、ハクちゃんの言葉だった。
「竜宮を造るのは人間だけだ。帝都ではそういったものは無い。我は城の野外……庭で過ごしているな」
なっ。
野外。
に、庭？
「ふむ。ラパンの木の根元は落ち葉がふかふかしてなかなか具合がいいし、ユネの植え込みの陰は少々湿っているが……冬でも葉が落ちないので雪や雨避けに最適だ。それと……りこ？」
ひ、ひどいよ。
なにそれ？
野良猫生活？
ハクちゃんは帝都でそんな酷い扱いを……。
ぎがー！
あの竜帝小僧、でこピンだ！
「あの……部屋はあったと思いますよ？　ヴェルヴァイド様が全く使ってなかっただけで」
カイユさんがきょとんとした顔で言った。
「え？　ハクちゃん、そうなの？」
「確かに指定された部屋はあるが。我は睡眠をとらぬので寝台もいらん。部屋を使う必要性が皆無だったので……必要性……む？」
ハクちゃんの念話が途切れた。
「ハクちゃん？　ハクちゃーん？」
呼びかけると、すぐに返事が帰ってきた。
「りこ！　我は部屋に必要性を感じた。今回は使う事にする」
そうですとも！

そうしようよ、うん。
ハクちゃんのお部屋に私を居候させて下さいませ。
とにかく安上がりな生活をせねば。
「じゃ、決定ね！　私も一緒で良いよね、私達は夫婦なんだもん！」
良かった～。
住む所があって。
社員寮が無くてもＯＫだ。
部屋ってことは離宮みたいな浮世離れした建物じゃなくて、お城の中の部屋かぁ～。
居候の居候（？）っぽいけど、夫婦なんだからいいよね。
「うむ。我はりこと使うぞっ」

「あ、あのっトリィ様！　ヴェルヴァイド様のお部屋って、塔の最上階です。階段も無く、人間の足では辿り着けないかと」
なんですとー！
カイユさんが遠慮がちに教えてくれた内容に、私は言葉を失った。
そんな私にハクちゃんが。
「我が術式を使わねば、りこは部屋から一歩も出れないな」
どことなく、　嬉しそうに言った。

ちょっと。
ちょっと、ちょっと……ちょっとおぉぉ！

帝都にレオパレス２１、ありませんかぁあああ？

第４０話

４泊５日の旅は、あとちょっとで終わりだった。

「りこ。帝都上空に入った。すぐに＜青＞の城が見えてくるぞ」

ハクちゃんが念話で教えてくれたので、私はペンを机に置いて窓を覗いた。

「……見えないよ、ハクちゃん」

こんな条件じゃ、マサイ族だって無理だと思うよ？

まるで台風のような天気なうえに夜だし。

うーん。

街の明かりが微かに見えるかなって程度。

横殴りの雨と稲妻の閃光。

轟く雷鳴。

でも、駕籠は揺れ１つ無い。

ハクちゃんのおかげで。

支店を出た晩は強い風が吹き、雨が降った。

朝になったら晴れたけれど。

風が強くて、その日もハクちゃんは外で術式を使って駕籠を揺れから守ってくれた。

日に日に……風はおさまるどころか強くなる一方で。

ハクちゃんに会えるのは朝の挨拶の時だけになってしまい。

１５分位しか顔が見れなかった。

それ以上だとダルフェさんの上に‘置いて’きた術式が不安定になるからって。

不安定。

私もそうだった。

支店で目覚めてからハクちゃんへの依存度が増していた私にとって、この状況は辛くて。

でも。
ハクちゃんが私の為に頑張ってくれてるから。
我が儘は言えないって思ってた。
だけど。
３回目の朝。
先日からの悪天候は、台風のようになり。
術式を強化するからって。
おはようって言ってすぐに転移しようとしたハクちゃんに。
縋って、泣いてしまった。

行かないで。
離れないで。
もう、いや。
離れるの、いやだよ。
もう、だめ。
ハクちゃん、側にいてよ。

小さなハクちゃんを抱きしめて、年甲斐も無くわんわん泣く私に。
＝りこ。りこ、あ～ん。
条件反射で開けた私の口に。
ハクちゃんは、ほんのり甘い砂糖菓子のようなものを入れた。
私の舌の上で溶けたそれは。
出会ったときにくれた竜珠の味に良く似ていて。
うっとりするような上質な甘みが。
口から咽喉へ。
咽喉から全身に広がって……。
ハクちゃんが足りなくてカラカラだった心に。
じんわりと染み入った。
涙も止まり、落ち着いた私にハクちゃんは言った。
＝我ももっとりこに触れていたいが……。

私の顔を……涙を優しく舐めとって。
ちょんって。
とがった口先でキスしてくれた。
＝りこを悲しませるのは、泣かれるのはとても辛い。しかし……
我が恋しいと泣かれると。
唇に、頬に。
目蓋に、耳に。
＝喜びを感じてしまう。震えがくるほどに歓喜と痺れる様な愉悦に満たされて……全てを放り出し、りこに溺れてしまいたいと思う。だがな、りこ。我は少々、賢くなったのだ。
くすぐったいキスに、思わず微笑んでしまう。
「賢く？」
＝賢くなった我は気づいたのだ。最初はりこが得られるならば他はどうでも良く、世界の秩序・管理もやめるつもりだった。が、りこを幸せにするには……りこが幸せだと思えるようにするには‘世界’が必要であり、りこに適した‘環境’を用意することが重要であり。
「世界と環境？」
＝そうだ。その環境を形作るのに、部品がいるのだ。りこが好む‘部品’がな。
「部品？」
＝部品は無数で多種多様。我はそれらを吟味し篩にかけ、さらに選別する。まあ、詳しく語るのは後日にして……。外は雷雨だ。ダルフェが雨に濡れると、りこの心が痛む。今、我がりこの言葉に従えば……後でりこが苦しむのだろう？　自分を責めるはずだ。
「ハクちゃん……」
＝我は少し賢くなっただろう？　りこのおかげだぞ？　これからもっと賢くなって、りこを幸せにするのだ。
金の眼を細めたハクちゃんは。
しっかりと握った小さな手で、私の頬をくりくり押した。

＝りこと会ってから、我はとても忙しい。脳は常にりこの事を考え、眼はりこに釘付けで。心はりこだけを想い……この身体はりこが欲しいと、喚き立てる。

真珠色の口から現れた真っ赤な舌が、ぺろりと。

私の唇を舐めあげた。

＝りこ。我のりこ。帝都に着いたら、健気な我に褒美を。

「ぶぶっつ！　健気って自分で言う？」

思わず吹き出した私に、ハクちゃんは眼をくるんと回し。

＝ふむ。泣き顔もかなり惹かれるが。やはり笑っているほうが良いな。では、行って来る。

「うん。……ごめんね、ハクちゃん」

ハクちゃんは首を傾げて言った。

＝違うぞ、それは。「いってらっしゃい、頑張ってね！　あ・な・たっ」って言うのだろう？先日読んだ＜実録・新婚生活２４時！これであなたも円満家庭　第１巻＞に書いてあったぞ

「な、なにそのタイトル～！　うぷぷっつ」

＝もしや違うのか？　ダルフェが読めと……おのれ、ダルフェめっ！　蹴り殺してやるっ。

「きゃー！　ま、待って！　うん、そうだよね、ごめんねじゃないよね！」

そうだよ、うん。

本はともかく。

ごめんねは、違う。

「えっと……今日もありがとう、ハクちゃん。ダルフェさんから落っこちないように、気をつけてね。いってらっしゃい、頑張ってね。あ、あ、あなた」

あなた。

なんか、照れるなぁ。

＝うむ。我は頑張るぞ！　りこに褒めてもらい、褒美を手に入れるのだ！

尻尾をぶんぶん振って、術式で、出勤、した頼りがいのある小さな旦那様を見送り。
私は思案した。
褒美。
ご褒美。
う～ん。
私、基本的には私物がほとんど無いし。
お金も、もちろん持って無い。
でも。
ご褒美を……あっ！
「良い考えだよ、それ！」
私はベットから降りて、居間で朝食を準備してくれているカイユさんに向かって駆け出した。
ハクちゃんに贈り物を。
今の私に出来るもので。
「おはようございますっカイユ！　裁縫道具、貸してください」

竜体では、人型のように共通語を発音することが不可能だ。
旦那とは念話で意志の疎通をする。
竜族が使う特殊な音波による会話も可能だが、旦那相手だと念話が手っ取り早い。

＝旦那が俺まで雨風から守ってくれてるなんて、陛下が知ったらぶったまげますねぇ。ま、姫さんの為とはいえ今回は助かりますよ。

この悪天候はセイフォンにいるときすでに、ある程度の予測が出来ていた。

だからこそ【繭】を使い高速飛行でさっさと帝都に着いてしまいたい、という考えもあった。
竜族の気象予報はかなり正確だ。
陛下が大陸中に気象観測官を配置し。
他の大陸の竜帝と気象情報を交換し、専門機関で予報をたてる。
何の為か？
金儲けのためだ。
気象情報はあらゆる分野の商売に重要な＜武器＞になる。
特に、気象条件が輸送に必須な貿易による利益は莫大で。
国を持たない竜族は、現時代では四竜帝により＜会社組織＞としてまとめられている。
世界最大の大企業。
人間より圧倒的に数が少ない俺達は竜帝達に雇用され、守られている。
充分な収入に社会保障制度。
それに比べ。
この大陸の人間共は、古い体制に縛られている。
愚かな貴族に飼われ、搾取され続ける民達。
国によっては奴隷制度の残るところさえあるのだから。

＝我のりこはお前を気に入っている。お前はりこの‘部品’として役に立つしな。そういえば……りこに泣かれたぞ。側に居てくれと。……我が染め上げた瞳が涙に濡れるさまは、思わず貪り食いたくなる程に魅惑的だったが我慢した。‘褒美’は後にとっておき、たっぷりと……ゆっくり時間をかけ、しっかりといただくことにしたのだ。うむ、我は賢くなったな。

＝うわぁ、姫さん可哀相に。ほどほどにして下さいよぉ、旦那。
カイユにまた怒られちまう。

＝カイユ……あれは良い‘部品’だ。りこにとって、とても良い。りこは今後も、あれには執着するだろう。あれの血には末々まで、りこは執着するぞ？

旦那は俺の額にちょこんと座り。

笑った。

声無いそれに、背筋が凍る。

＝もっと、もっとだ。この世界にりこを閉じ込める餌が必要なのだ。我の愛しいりこの執着する‘部品’がな。以前……我はりこに世界をやろうと言ったのに、断られた。欲しがらぬなら、欲しがるようにしむけるだけだ。

ああ。

可哀相な人だ。

旦那は、まだ分からないのか。

姫さんが、どんなにあんたを愛しているか。

気づかない……気づけないのか。

解らないのか。

どんなに想われても、愛されても。

足りないのか。

不安なのか。

怖いのか。

＝ま、そりゃそうと。ねぇ、旦那、陛下はどうです？　姫さんの‘部品’になれますか？

＝審議中だ。りこにふさわしくないなら＜処分＞して、新しい＜

青＞に替えるだけだな。

＝まったく、旦那はおっかないっすねぇ。腹、真っ黒なんじゃないですかぁ？

俺の言葉に。

旦那は自分の腹に視線を落とし。

「白いぞ？」

と、言った。

翌日も暴風雨で。

旦那は朝の挨拶の時だけ寝室に帰り。

常に念話で姫さんと繋がりながら。

俺の額で術式を展開し続けた。

天候は酷くなるばかりで。

まるで。

世界が叫び狂っているかのようだった。

陛下の城にある発着所には、衝撃吸収用の装備が完璧に整えられているのが上空から確認できた。

明かりは無い。

竜族は人間よりも眼が良いし、竜体の時は夜目がかなりきくので問題は無かった。

人影は……小さな竜がわたわたと走り回っているなぁ～、陛下だな。

駕籠の固定器具を準備しているらしいなぁ、１人で。

ま、仕方ねぇよな。

旦那が雄の存在を嫌がるから担当の奴等は、使えないし。
女子供を夜に……こんな悪天候の野外に出すわけにゃ、いかんし。

＝さあ、着陸体勢に入れ‘赤い髪’よ。我は風雨と気流の調整をする。振動1つ許さぬ。もし、揺れあらば……カイユの腹を引き裂くぞ？

無駄に‘賢く’なった＜白金の悪魔＞は、脅し文句も進化した。
俺自身を傷つけられるより、ハニーに何かされることのほうが……愛する者を傷つけられる事のほうが恐ろしいと。
この悪魔のように美しく、天使のように無知な男は知ったのだ。

＝降りたら……我は、りこにご褒美をおねだりするのだ。……カイユはお前が抑えておけ。次に邪魔されたら流石に我も、カイユを殺しそうだ。りこに嫌われたくないので、カイユは手にかけたくない。

腹を引き裂くという極悪非道最低最悪発言で、すでに嫌われるんじゃないのかと思ったが。
俺の額の上で。
短い足を使ってステップを踏むご機嫌な様子に、口を噤んだ。

第４１話

カップのお茶がこぼれる事もなく。
「あら？　城に着地したようです。私が様子を見てきますから、少々お待ちくださいませ」
「え？　着いたの？」
晩御飯後のお茶をカイユさんと楽しんでいた時だった。
外は暗いし雨が酷くてなにも見えないから着地見学はあきらめて、カイユさんとお喋りして過ごしていて。
部屋を出て行ったカイユさんと入れ違いに、ハクちゃんが目の前に現れた。
わっ、びっくりした！
居間に現れたハクちゃんの第一声は。
「りこ、ご褒美だ。ご褒美！」
小さな手足をにぎにぎしながら言う白い竜の旦那様は。
それはそれは、かわゆかった。
かわゆくて優しく（私には）、頼りになる旦那様。
「お疲れ様でした、ハクちゃん。ありがとう」
私はハクちゃんを抱きしめた。
ずっと外にいたハクちゃんの冷たい身体を暖めてあげたかった。
「りこ。我にご褒美……」
金の眼がきらきらと輝き、私を見上げた。
ご褒美。
そう、ご褒美よ！
「ちょっと待ってて！　すぐ持ってくるからね」
「持って……？」
ハクちゃんをソファーに降ろし。
寝室にダッシュし、ベットの上に置いてあった目的のモノを掴んで。

「喜んでくれるかな～、ハクちゃん」
ハクちゃんの待つ居間に戻った。

「はい、これ！　ご褒美っていうより、感謝の贈り物です」
ソファーにちょこんと座ったハクちゃんの前に膝をつき、目線の高さを合わせてから。
贈り物を両手で、差し出した。
私の手にあるそれを見たハクちゃんが、金の眼を見開いた。
「こ……これは」
赤いチェックの生地で作った、パジャマ。
竜のハクちゃんが脱ぎ着しやすいように、ベストみたいな形にした。
ボタンじゃなくて、はぎれで作った紐で結べるようになっている。
私の自信作だ。
「ハクちゃん用のパジャマだよ。まあ、ハクちゃんは寝ないけどね。帽子もあるの。ほら、かわいいでしょ？」
三角形の筒状で、すぽっとかぶれるのだ。
「ね、着せてみて良い？　サイズ、どうかな～っ……わ！　ぴったり、良かったぁ」
眼を見開いたまま固まってしまったハクちゃんに、ちょっと強引に着せてしまった。
帽子もかぶせ、完了。
でも。
ハクちゃんは何も言ってくれなくて。
「あ……」
うきうきしていた気分が急激に冷めた。
あぁ、そっかぁ。
そうだよね。
セイフォンでハクちゃんが前の女王様に貰ったっていうたくさんの豪華衣装を見たのに。

離宮の衣装部屋には宝飾品も溢れていた。
ダルフェさんが言ってたもの。
多くの人達がハクちゃんに高価なモノや服を……。
ハクちゃんの期待したご褒美とは、レベルが違うのかも。

これの材料。
私のぼろパジャマだし。
高校生から愛用してたパジャマのズボンを、リフォームしたわけで。
上は残ってるから……なにげにお揃いのパジャマとか考えて。
２６にもなって、なんてとんちんかんな事しちゃったんだろう。
ふと。
思い出した。
会社の後輩が彼氏にプレゼントしてたのは、高価なブランド物で。
ランチ代を切りつめて、いろいろ節約して頑張ってたな。
ううっ。
なんか……鼻の奥がツーンとしてきちゃった。

「りこ。これは……りこが異界から着てきた、ぱじゃま、では？」
分かっちゃいますよね、そりゃあ。
離宮生活になってからはセシーさんが（ダルド殿下のお金で）用意してくれたネグリジェを使っていた。
帰れないって知って……。
特売スリッパとぼろパジャマが。
とんでもない貴重品に思えて。
これ以上、痛むのが怖くて仕舞い込んでいた。
賢いハクちゃんには、ばればれですよね？
「う、うん。そうなのっ、あのね、私……え？」

言葉に詰まった。
微動だにしなかったハクちゃんが、ソファーの上でうずくまる。
自分で自分を抱くような格好で。
「ハ、ハクちゃん？　どうしたの？　そんなに期待はずれで、残念だった？　ご、ごめんね。ごめんなさい。働いてお給料が貰えたら、もっといいの買ってあげられるから。ちょっと待ってもらっていいかな？　ごめん、ごめんなさい」
ご褒美、楽しみにしていたもんね。
豪華なプレゼントになれてるハクちゃんからすれば、がっかりだよね？
私だって、貯金あったんだよ？
でも、こっちに連れてこられちゃったから。
何も持ってなくて。
あぁ。
こんな気分。
最悪だよ。
あんまり情けなくて。
「あは……は。本当に、ごめんね」
情けなさ過ぎて、笑えるよ。
さすがに。
さすがに、この場にはいらんないよ。
ハクちゃんの前に。
恥ずかしくて、居られない。
「そ、外。外が気になるからっ私！　ど、どんなお城か見てくる！」

私は。
逃げた。

自分のおかれた状況を思い知らされた。
大好きな人に。

ろくなプレゼントが出来ない。
情け無い、私。

私だって最近までちゃんと働いてた。
一人暮らしをして。
自分のお給料で生活して。
ボーナスでお母さんとお父さんに、温泉旅行をプレゼントしたこともあった。
普通の社会人だったのに。

こんなに。
惨めな気分。
誰のせいなの？

私は恵まれている。
くだらないミスで連れてこられたけれど。
牢に入れられたり、放り出されたり……殺されたりしていない。
衣食住全てを保障され。
いい暮らしをさせてもらってる。
ハクちゃんも側にいてくれる。
私をお嫁さんにしてくれた、白い竜。
あの人といるためなら、元の世界に帰れなくても。
2度と家族に会えなくても。
それでも、いい。
そう思ったのは、嘘じゃない。

私は恵まれた状況なんだから。

まるでお姫様のように。

恵まれている。

全てを、恵んで、もらっているのだから。

胸の中が。
どす黒い何かに。
覆われた気がした。

駕籠の中は探検してあったから、出入り口の場所は知っていた。
カイユさんが先に出たので鍵が開いていた。
重く厚い扉を両手で少し押し開け、外の様子を見ようとして。
その途端。
強い風に扉が全開になり、身体が外へ出てしまった。
横殴りの雨にバランスを崩し、つんのめってノブから手を離してしまい。
へっぴり腰の体勢で、左によろよろと足をもつれさせながら倒れこんでしまった。
叩き付ける雨で、眼を開けてられない。
風が重たくて、立ち上がれない。
風に重みがあるなんて、初めて知った。
鼓膜が破れるような雷鳴に、心臓が震えた。
一瞬でずぶぬれになり、寒さに歯が鳴った。
寒い。
セイフォンとは気温が違う。
秋、ううん。
冬の冷たさだ。
かろうじて薄目を開けて、周りを見た。

雷の光だけが照明で。
私が確認できたのは。
青白い光に浮かび上がる大きな駕籠。
ああ、こんな酷い天気の中を。
ダルフェさんは、この重たい駕籠を持って飛んでくれたんだ。
ハクちゃんは、こんな寒い外でずっと私達を守ってくれてたんだ。

ハクちゃん。
ハクちゃん。
ごめんね、ごめん。
こんな私がつがいで、ごめん。

パジャマを喜んでもらえなかったのがショックなんじゃない。
当然のことだから。
私がショックだったのは。
貴方の側にいられるなら。
元の世界も家族も全部あきらめるって思ってた私の……。
その気持ちは嘘なんかじゃない。
なのに。
なのにね。

捨て切れてない。
ずるい、私。
汚い、私。
ちょっと情けなくて、悲しかっただけなのに。

ハクちゃんの反応が自分の想像と違っただけなのに。
たったそれだけのことで。
こんな世界、やっぱり嫌い。
帰りたいなって、少し思った。

これって、裏切りだよね。
ハクちゃんに対しての。

嫌な女。
私って、こんなに高慢だったんだ。
あぁ、自己嫌悪。
最低だ。

素直で無垢で。
強く揺ぎ無い貴方の愛に比べて。

私の愛って。
打算的で貪欲で。
薄っぺらくて不安定で。

貴方を裏切る。

この世界にきてから。
嫌な私が増えていく。

自分が思ってた以上に、醜い心の人間だったことが。
けっこう。
かなり、ショックで。
泣けてくる。

雨で涙は分からない。
叫んだって雷が消してくれる。

『ーーーーーー！』

思わず口から吐き出された言葉は。
この状況では自分の耳にさえ、聞こえない。

貴方には。
聞かれたくない。

貴方の世界に来てから。
自分が嫌いになっていくなんて。

貴方には、知られたくないの。

泣いて叫んで。
かなり、すっきりした。
２６にもなると、切り替えも早くなる。
いつまでもうじうじしてたって無駄だって。
経験上、身に染みている。
「さ、寒っ！　あは、びしょ濡れだぁ。駕籠に……ハクちゃんの側に、帰らなきゃ」
ハクちゃんの側に。
私の居場所は、そこ。
そこしかない。

そうだ。
大好きなお風呂に入って。
さぶちゃんの‘祭り’を熱唱して。
少し、へこたれたちゃった心を元気にしよう。
自己憐憫に浸るのはやめて。
可憐で儚いヒロインなんて、ごめんだ……と、いうか無理です。

柄じゃないし。
高貴で気高いお姫様にも、なれないわけで。
「心のちょっと汚い、強欲で腹黒な２６歳か？」
異世界トリップ物語のヒロインとしては、失格っぽいけれど。
しょうがない。
これが私なんだから。
ごめんね、ハクちゃん。
こんな女が妻で。
でも。
もう、返品不可ですよ？

りこがくれたご褒美は。
ぱじゃま。
りこのぱじゃまを切って、縫ってくれた我のぱじゃま。
帽子まで。

りこの宝物を。
切ったのか。
我のために、壊したのか。
もう2度と元に戻らないのに。
我の、ために。

りこのぱじゃまを。

大事に大事にしまっていた。

元の世界の衣服。
大切に大切に扱っていた。

りこのぱじゃまを。

我の、ために。

ああ。
我は。

身体の中が。
頭の芯まで。
真っ白に。
真っ白になり。
りこが眩しくて。
目玉が焼かれる。
何も見えない。

あまりの衝撃に脳も壊れ、溶けた。
りこの言葉が理解できない。
鼓膜も弾けてしまったようで。
何も聞こえない。
全ての感覚が遠のいて。

死んでいくというのは、こんな感じなのか？

「ｘｘｘｘ！」

雑音。
「ｘｘｘｘｘｘっ！」
雑音だな。
「おいっ、じじい！　おちびがいねえぞ！　どこに隠しやがった、エロじじいっ！」
雑音……む？
＜青＞の気配だな。
うむ？
だいぶ復旧したな。

歓喜と感動のあまり、死にかけたぞ。

さすが、りこだ。
我の女神よ！

「がーっつ！　じじい！　死んだ振りして何、遊んでんだよ？！　珍妙な格好してるしよぉ～、おちびは無事か？　抱き潰して……ぐぎゃっつ！」
＜青＞が我に触れようとしたので、蹴り飛ばした。
＝ぱじゃまに触るな、愚か者めが！　これはりこの我への愛の証な……
「んなことより、おちびはどうした？！　ダルフェがカイユをうまく誤魔化してるが限界だぞ。３０分しかご褒美タイムは取れなかったが、後で仕切りなおすって事で勘弁してくれよ」
ご褒美。
りこ。
りこ？
りこ……？！
「ってか。その様子じゃ、ダルフェの言ってたご褒美はなしか？　最中に邪魔したらぶっ殺されるからって俺様に呼びに行かせるなん

てよ。あいつは臣下としての心構えゼロだぜ！　なぁ、じじいよぉ。
盛んのは、城でおちびを休ませてからにしてやれよ。おちびが可哀相って……で、おちびは？　寝室にもいねえじゃん。かくれんぼかよ」

りこ。

「ダルフェ達は俺の執務室だ。外はひでぇ天気で、とてもおちびを歩かせられん。じじいが術式で執務室に連れて……じじい？」

りこ。

我の。

我の、りこ。

気配。

少し離れている。

外？

りこ。

外に。

外に出たのか！

雨からも。

風からも。

りこを護りたい。

柔らかな身体も。

暖かい心も。

りこの全てを。

護りたいのに。

何故。
りこは外に出た？
我を、置いて。
我から、離れて。

我は。
また。

りこを傷つけたのか？

そして。
愚かな我には。

その理由すら、分らないのだ。

我は無知で無能な愚か者だったのだと。
りこに会ってから知った。

我は我が、嫌いになった。

愛しいりこに、会ってから。

第４２話

りこはいた。
駕籠に寄りかかり。
膝を抱え。

「りこ」

我が呼びかけると。
ゆっくりと。
ゆっくりと顔を上げた。

普段は黄みがかったりこの肌が。
白くて。

「はは……。さ、寒い、ねぇ。駕籠に、も、もどろうと、したんだけ、どね」

言葉よりも。
歯の鳴る音の方が、大きかった。

「あ、あ……あし、足がうごかな、か、らだが冷えた、から……かなあ？」
そう言って。
顔を。
我の視線から隠すように、両手で覆った。

「りこ」

我には分からない。
何故、りこが。

外で。

雨にうたれ。
風にたたかれ。

「りこ」

我のりこが。
何故。

ぱじゃまを差し出したりこは。
笑ってたのに。

我の眼が。
焼かれるほどに眩しい笑顔で。

あまりに綺麗で。
それは。
心臓が潰れるほどで。

「わ！　おちびっ？　こんなとこに……じじい、ほうけてんな！
さっさと術式でおちびを医務室に連れて行け……急げ！」

城の医務室にりこを寝かせてすぐ。
カイユが現れ。
りこを一目見るなり。

我を殴った。
無言で。

我の身体は床にめり込んだが。
ぱじゃまは術式で守ったので。
ほこり1つ付かなかった。

もっと殴られてもいいと。
そう思った。

駕籠へ戻ろうとしたのに。
体が思うように動かなくて。
駕籠の側面で身体を支えるように、這いずって扉に近寄ろうとしたけれど。
強い雨と風に邪魔されて。
冷え切った体が痺れて。
これは自力では無理かもと。
ハクちゃんを念話で呼ぼうって思ったら。

目の前に白い竜が居た。

ハクちゃんを包んだ淡く白い光に、雨も風も弾かれていた。
良かった。
ハクちゃんが濡れないで。
すぐに呼ばなかったのは。

ずっと外で頑張ってくれてたハクちゃんを、また悪天候の場所に出したくなかったから。
あ。
パジャマを着てくれてる。
やっぱり、似合う。
とっても、かわゆいよ。
呼ばなくても、来てくれたね。
嬉しくて。
涙が出た。
ちょっと恥ずかしくて。
顔を隠した。

運ばれた時はぐったりしちゃってたらしく。
よく覚えていないけれど。
濡れた服を着替えさせてくれたのは多分、カイユさんだと思う。
何か言ってたけど、うまく聞き取れなくて。
取りあえず。
うんって、言っといた。
翌朝。
鳥の声で目が覚めて。
「おはよう、りこ」
金の眼。
ハクちゃん。
「おは……ごほっつ！」
咽喉、痛い。
「りこ！　すぐに医者をっ」
枕元に居たハクちゃんが、慌てたように言った。
「へ、平気。咽喉がちょっと痛いだけ。気分も悪くないし」

上半身を起こし、周囲を見回した。
ほのかに漢方臭い。
簡素なベットの周りは白いカーテンで囲まれていた。
まるで病室。
木のサイドチェストの上には水の入ったピッチャーとふせられたコップ。
「ハクちゃん、ここって」
「城の医務室だ」
そう言ったハクちゃんは。
パジャマを着てはいなかった。
ちょっと、いや。
かなり残念。
「ハクちゃん、あの……え？」
ハクちゃんは。
枕元で正座をして。
私が使っていた枕の下から、赤いチェックの布を取り出した。
パジャマだ。
私の作ったパジャマ。
「りこ。これは返す」
小さな両手が。
パジャマを私に差し出した。
「そっか……」
仕方ないかな。
気に入らないなら。
「我はりこに褒美をもらうに値しない。だから、これはもらってはいけないのだ」
もらっちゃだめって、なにそれ？
「ハクちゃん？」
正座をしたハクちゃんは。
眼を瞑って。

「今の我には、りこからぱじゃまを与えられる資格が無い。だが、だが……」
パジャマをのせた小さな手が。
ぷるぷると、震えていた。
「だが、欲しい。とても、このぱじゃまが欲しいのだ。我はこれからもっと努力する、賢くなってりこの全てを護れるようになる！　だ、だから」
ぎゅっと眼を瞑ってるのは、私の返事が怖いから？
「返したくはないが、返す！　しかし、その、りこが我にご褒美を与えても良いと判断するその時まで、時間が長くかかるとしたらだ、その、ま、ま、ままっ」
まま？
私は妻であって、ママじゃない……。
「ま、ま……前借を申請いたしたくっー！　その、多少ずるになるが。我は、ぱじゃまが、欲しくっ、それでっ！　ま、前借をっ」
ご褒美。
前借。
パジャマ。
それって。
「ええっと、もしかして。パジャマを気に入ってくれたの？」
正座をし、土下座状態のハクちゃんは言った。
「喜びのあまり……脳は溶け、心臓は破裂した。臨死体験をしたぞ？　かなり激しく内部が壊れたので復旧に時間がかかり、りこを迎えに行くのが遅れた。本当に、済まなかった。で、前借の件は……その、やっぱり駄目か？」
心臓破裂って？
リ、臨死体験……強くて脆い、不思議な貴方。
薄目を開けて。
金の眼が。
私を見上げた。

ハクちゃん、貴方は。

「貰ってくれたら、すごく嬉しい。こんな物しかあげられない私だけど、貴方が……ハクちゃんが好き。世界で1番大好き……ねぇ今、ここで着せてもいい？」

ぱっと顔をあげた白い竜は。

小さな胸にパジャマを抱いて。

ぽろぽろと。

金の眼から。

涙を。

真っ白で綺麗な貴方。

貴方はいつも。

私の心を救ってくれる。

「知らなかった、我は。……嬉しい時も涙が分泌されるなど」

どんどん貴方が好きになる。

ますます貴方と離れられなくなる。

「我も、りこが大好きだ。我もりこが1番……いや、りこだけが」

私はパジャマを大事そうに胸に抱いたハクちゃんを、そっと膝の上にのせ。

零れる涙を。

舐めてみた。

眼の際から、顎の先まで。

丹念に舌を這わすと。

「り、りこっ？」

金の眼が真ん丸くなって。

涙が止まってしまった。
むむ、ちょっと残念。
ものすごっく、可愛かったんだけどな。
頭から噛り付きたいくらい、可愛かった。
「ふふっ、ハクちゃんの涙ってキリンレモンの味がするよ？　ぜんぜん、しょっぱくないんだね～」
真ん丸くなった金の眼をくるんと回し。
「きりんれもん？　よく分からぬが。……りこは涙も血液も、唾液も汗も。全ての体液・分泌物が甘いぞ？　我の好物だな」
うーん。
なんか微妙。
まあ。
まずいより、いいか。
「ハクちゃん。パジャマを着て、一緒に寝ようよ。寝るまねっこでいいから、ね？」
私はパジャマを素早く着せ。
小さな頭に帽子をかぶせたハクちゃんを抱いて、布団に潜り込んだ。
頭からすっぽりと。
そうすると。
布団の中は。
2人だけの小さな世界みたいで。
ハクちゃんを独占した気分。
嬉しくて。

ハクちゃんにキスをした。

「風邪が移ったら、ごめんね？」

竜って風邪、ひくのかな？

～おまけ～

りこ中日記（りこ中心・りこ中毒のハクちゃんの日記です）

＜＊月＊日＞

本日はりこと風呂に入った。

湯舟は竜体の我に深かったので、りこが抱っこをしてくれての入浴となった。

りこは異界の歌を唄ってくれた。

タオルに空気を含ませ湯に沈め、気泡を出す遊びを教えてくれた。

りこが笑っていた。

りこは楽しそうに笑っていた。

我は風呂が好きになった。

「ハクちゃんが小さな竜で良かった～。大きかったら一緒に入れないもんね。うん、かわゆい竜だからこうして一緒にお風呂に入る気

になるけど……もし人間の姿だったらさすがに無理だったなぁ～」
人間の姿。
人型だと、りこと風呂に入れないのか。
ふむ。
人型の我は暫らくは内緒だな。
我はりこと風呂に入りたい。
ずっと、これからも。
この笑顔が見たい。
「ね、ハクちゃん！　身体を洗ってあげるね。この石鹸、すごくいい香りだよ」
ああ。
我は風呂が、大好きになったぞ。

第４３話

カイユさんが朝ご飯を持ってきてくれたので。
ハクちゃんは張り切って、あ～んをしてくれていた。
私はベットで上半身を起こして、あ～んをされていた。
ほんのりチーズ風味で、赤いお豆の入ったリゾット。
冷ますためにスプーンを高速回転しようとしたハクちゃんに、‘ふーふー‘を教えてあげた。
小さな手がスプーンを握り、真剣にふーふーする姿は。
私が思ったとおり、ものすご～くかわゆかった。
ハクちゃんに食べさせてもらいながら。
ふと、考えた。

こんな私って、もしや変態？

「りこ？」
呆然とする私にハクちゃんが、首を傾げた。
あぁ……めちゃくちゃ、かわゆいです。
変態でも、いいや。
「なんでもない。もうお腹いっぱいになっちゃった。ご馳走様でした」

食後はカイユさんが私の髪をブラッシングしてくれた。
とても気持ちよくて、うっとりしてしまう。
「食欲もあるようですし、熱も無いですね。大事にならなくて、本当に良かったです」
「ごめんなさい、心配かけちゃって。もうぜんぜん平気です！　あんな酷い天気の中、ダルフェさんは飛んでくれたんですね……お礼言わなきゃ」

髪をサイドにまとめてから薄紫の花をつけてくれたカイユさんは、着替えのワンピースを私に手渡して言った。
「すっかり元気なようですし、病室とはさよならしましょう。ここは殺風景でトリィ様もつまらないでしょう？　きっと、すぐに陛下が現れます。ずっとそわそわしてましたから。お嫌でなければ相手をしてやって下さいませ」
カイユさんは、ハクちゃんに視線を移し。
「パジャマ、良くお似合いですわ」
ちょっとずれた帽子を直してくれながらそう言い、微笑んだ。

カイユさんは咽喉がちょっと痛い私のために、薬を調合しますと言って病室から出て。
私は着替えを始めた。
スリップドレスの上にちょっと厚めの生地で出来たワンピースを着る。
ハイネックで袖は手の甲まで隠れるデザインで。
全体が薄い紫で、袖と裾に白い花の刺繍。
当然のように長い裾にも慣れて、踏んだりすることも少なくなった自分に関心してしまう。
ちなみに。
ハクちゃんの前で着替えるのは抵抗がほとんど無い。
でも、さすがに下着を脱ぎ着する時は後ろを向いてもらってる。
お風呂も一緒に入っている（竜体でだけど）仲ですが。
目の前でパンツをがばっと脱いだりはいたりするのは……なんか、こう、ちょっとねぇ。
パンツっていっちゃう私。
大人の色気ゼロだね。
せめて、ショーツか？
なんか違うな、うん。
色気は、あきらめよう。

柔らかなシフォン素材の帯を腰に巻いて、端を間に仕舞って。
帯止め用の細い飾り紐を結んで出来上がり～っと。
帯の締め方も、すっかり上手になりました。
「常々思っていたが……りこはすごいな。自分で全ての衣類を身に着けることが出来るとは」
「え？」
この発言から。
新たなハクちゃんの生態（？）が発覚した。

私が着替えて数分程で竜帝さんが、ふわふわ飛びながら入ってきた。
お行儀悪く。
右手に持った大きなソーセージを齧りながら。

そして。
ふいた。

「おはよう、竜帝さん。もうっ、なにふきだしてるの。汚いなあ」
吹き出すと同時にハクちゃんが振り返りもせずに、指をちょいって曲げたら。
ソーセージの雨は全て、竜帝さんに集中して飛んでいったので私は被害ゼロ。
ソーセージの残骸まみれの青い竜。
情け無いうえに、非常に汚かった。
「だ、だってよ、じじいが妙な帽子を被った姿で服を畳んでるんだぜ？　ぐっふふ、　高慢ちきで底なしの自己中俺様の！　あ、あのヴェルヴァイドがっ！！　正座して嫁の脱いだ夜着を、たたんでるーっぎゃあははは」
床に転がって笑い続ける竜帝さんの言葉は早口で。

聞きとれなかった。
ハクちゃんは竜帝さんを1度も見なかったけれど。
だが！
私はぴんときた。
こいつ、またハクちゃんの悪口を言ったに違いない。
ハクちゃんのことに関しては、鈍い私も感が良くなる気がする。
実は。
ハクちゃんは自分ではパジャマの脱ぎ着が出来なかったのだ。
紐をといて、腕を抜く。
袖口に腕を入れ、前の紐を結ぶ。
ベストタイプだから、脱ぎ着は簡単なのに。
なんでもないような事なのに。
どうしてもうまくいかなかった。
そして、驚くべき事実が！
人型の時も自分では衣服が着れないらしいのだ。
術式を使って済ましていたので、普通の着方を全く理解していなかった。
手を使って着ようと思った事すらないと……。
紐をリボン結びに出来ないどころレベルじゃない。
さすがに言葉に詰まった私に。
「我は、これは出来るのだぞ？　かなり上手なのだ」
私が脱がしてあげたパジャマを丁寧に畳んで。
「うむ、完璧だ。我はなかなか、できる男、なのでな」
得意げに言った。
ううん。
あまりに可哀相で指摘できなかった。
裏表、逆だよって。
ハクちゃんは私の脱いだネグリジェを手に取り。
「りこのも、我が畳んでやろう！　ふむ、りこが着ていた衣類……りこの、脱ぎたて……りこの……」

「え？　あ、うん。ありがとう」
頷きつつ、なにやら1人でぶつぶつ言いながら。
ハクちゃんが丁寧に畳み始めた時。
ソーセージ小僧がやってきたのだ。
床にソーセージまみれで転がって笑う、この腹立つチビ竜が。

「竜帝さん、笑うのやめて下さい……なんかムカッってしちゃうし。
それに床、汚れちゃったところは自分でお掃除して下さいね」
私はハクちゃんの畳んでくれた服とハクちゃんのパジャマを持ち、ベットから降りた。
足元には先の尖ったショートブーツが置いてあった。
内側がもこもこしていて、暖かそうだった。
カイユさんが用意してくれたそれは、セイフォンより帝都が寒い土地なのだと再認識させてくれた。
今まではこじゃれたつっかけのようなサンダルを履いてることが多かったけれど……。
帝都に着たんだ、私は。
このソーセージまみれの小汚い竜帝さんが雇用主となるのだ。
ちょっと、不安。
んにゃ、かなり不安ですが。
「この服も、とても似合っている。りこは何を着ても綺麗で、愛らしいな」
ハクちゃんが私の右袖を掴み、言った。
金の眼を細め、翼をぱたぱたさせて。
赤面するようなことをさらっと言えちゃうって、すごいよね。
でも、嬉しい。
ハクちゃんはお世辞が言えるほど器用な人じゃないから。
他の人から見たら綺麗でも愛らしくも無い私だけど。
ハクちゃんがそう思ってくれて、言ってくれて。
すごく、嬉しいな。

「ありがとう、ハクちゃん。ハクちゃんもかわゆいよ。何も着てなくたって、1番かわゆい」
ハクちゃんは尻尾をふりふりしながら言う。
「りこもだぞ！　何も身に着けていない時だって、我のりこは世界一綺麗で愛らしかった」

「がぁぶぶごぉっぶぶうー！」

再び、盛大にソーセージを吹き出した青い竜を。
今回は私も注意できなかった。

オヤジっぽいぞ、ハクちゃん。

～おまけ～

りこ中日記（りこ中心・中毒のハクちゃんの日記です）

＜x月x日＞

我は睡眠をとらない。
りこが寝ている間も起きている。
枕元に座り、寝顔を見ている。
触れるぎりぎりまで顔を寄せ。
肌のきめ細かさや。
睫毛の長さや。
時々ぴくぴく動く鼻や。
柔らかそうな唇を観察し。
そして。
穏やかで規則正しい寝息を嗅いで、楽しんでいる。
不思議なことに。
我の眼にはりこがきらきら輝いて見える。
まるで宝石のように。
きらきらして、眩しくて。
りこが眩しいので、最近の我はよく眼を細めるようになった気がする。

りこは我の宝物だ。
初めてであり、唯一の。

我はそっと、りこの唇に接吻した。
今宵もりこの側に居られることが、とても幸せで。

「おやすみ、りこ」

おやすみの接吻（キス）は。
明日も愛しい貴女と過ごせるための、おまじない。

第４４話

「いいか、　よ～く聞けおちび！　おちびには竜族の義務教育を受けてもらう。毎月末に試験をし、ちゃんと知識をつけてから本採用だ。阿呆を雇うほど俺様は寛大じゃねぇ。教育期間中も手当ては支払う。正雇用時の7割り出す。ダルドからも毎月定額が送金されるから、けっこうな額になるはずだ。財産管理は当分は俺様がしてやるから安心しろ。じじいには無理だからな。働かなくとも豪遊できる立場のおちびが、自分から働きたいって言い出したんだ……覚悟しろよ！　働かないで大人しく、お姫様をしててくれるのが1番助かるんだが。まあ、だんだん理解すんだろうしな。まだ‘普通’にこだわるのも仕方ねえし……優しい俺様はおちびの意志を尊重してやる。この俺様に感謝するがいい！　そしてじじいっ！　てめぇは今までの爛れたヒモ生活を反省し、女関係を整理整頓清算するんだな！　この小市民で貧乏性な嫁を見習い更生しろってんだっ」

竜帝さんの執務室。

医務室からハクちゃんが術式で連れてきてくれた。

重厚な応接セットと執務机だけの飾り気の無い部屋だったけど、大きな窓から庭の風景が見られて……。

壁は天井まで届く本棚で占められ、机の上と違ってきっちりと本が整頓されていた。

本と書類が乱雑に積み重なった机の上で。

やたら偉そうにふんぞり返った青い竜の言葉はすごく早口で、まったく意味不明。

いつもそうだけど、竜帝さんの言葉はとても聞き取りずらい。

一気にどばどばーっと言われても、分かりませんって！

「で、分かったのか。おちび！」

無理。

今のとこしか聞き取れなかったです。

「分かりませんでした。だって、その……ごめんなさい」
早口なうえに、1度にいっぱい喋られたらお手上げでございます。
あ、言い訳は良くないよね。
私が悪いんだ。
セシーさんが熱心に教えてくれたし、ハクちゃんだってつきっきりで通訳してくれて。
分からないのは、自分の努力が足りてないって証明だ。
周りに甘え過ぎて……。
「よし。わざと分からんように言ったんだから、それでいい」
へ？
ちょ、ちょっと。
「カイユ。お前が必要だと思うとこを要約して、おちびに教えてやってくれ。……突っ立ってないでそこに座れ、おちび。本調子じゃねえんだしよ」
今度はゆっくり言ってくれたので。
「はい、ありがとう竜帝さん」
竜帝さんの指差した応接セットのソファーに腰を降ろした。
向かいにカイユさんが座った。
ハクちゃんが私の隣にちょこんと座って、手足をにぎにぎしながら言う。
「りこ、咽喉の具合は？　のど飴とやらは効いてるか？」
カイユさんが持ってきてくれたのはのど飴だった。
ほのかなミント味のそれは、咽喉をとても楽にしてくれた。
「うん。すごく効くのど飴だよ、美味しいし。カイユ、ありがとうございます」
カイユさんは優しく微笑み、クリーム色の飴が入った蓋付きのガラスポットをテーブルに置いた。
「咽喉の痛みが完全に無くなるまで、小まめに舐めていて下さいね」
私はうなずきながら……ふと、気になった。
あれ？

ハクちゃんもこないだ飴というか、お菓子のような物を口に入れてくれたっけ。
ハクちゃんがお菓子を持ち歩いてるとは、思えない。
口ですぐに溶けて、ほんのり甘くて。
1粒食べたら気持ちも落ち着いて。
安定剤とか……薬だったのかな？
「カイユとおちびは此処にいろ。俺様はじじいに話がある……庭に出ろ、じじい」
竜帝さんは短い腕を組み、ふんぞり返りながら言ったけれど。
ハクちゃんは返事をしなかった。
テーブルに置かれたガラスのポットに魅入っていた。
小さな身体を乗り出すようにして、金の眼を細めながら。

「我も欲しい」

「え？」
「は？」
「じじい？」

ハクちゃんの言葉に皆が反応した。
食べ物に全く興味を持たないハクちゃんが。
飴が欲しいって言ったのだ。
それは驚きますって、うん。
「のど飴、舐めてみたいの？」
私の言葉にハクちゃんは首を振った。
「違う。入れ物だ、これが欲しいのだ」
入れ物。
この小さなガラスポットが？
「カイユ、くれ。我にこれをくれ！」
ハクちゃんは両手でポットを掴むと上下にぶんぶん振った。

「ちょ、ハクちゃん。　駄目だよ、そんな風にしたら蓋が取れて、中身が出ちゃうよ」
おもちゃを欲しがる駄々っ子のように、ハクちゃんは乱暴にポットを振り続けた。
「欲しい、我はこれが欲しい！　これに入れたい、我もこれに入れてみたい！」
これに……何か入れてみたいのかな？
「わ、わかりましたヴェルヴァイド様。同じ様な物が幾つかありますから、お持ちしますわ」
ハクちゃんの奇行にカイユさんは、ちょっとびっくりした表情を浮かべたけれど。
すぐに席を立ち、部屋を出て行った。
まだポットを離さないハクちゃんを、私はなだめるように背中をゆっくりと撫でて言った。
「ハクちゃん、これは置こうね？　新しいのをカイユがくれるから、ね？」
ハクちゃんは私を見上げ、金の眼をくるりと回した。
「うむ、わかった。これは置いておく。……りこ、抱っこ」
握った両手を私に向かって差し出したので、腕をとって抱っこしてあげた。
ハクちゃんは小さな頭をすりすりと私の身体にこすりつけ。
「りこ。我は良い考えを思いついたのだ」
金の眼をきらきらと輝かせ、言った。

「おい。俺様はシカトかよ」

あ、そうでした。
竜帝さんはハクちゃんにお話が……。
「ハクちゃん、竜帝さんが呼んでるよ？　お話があるんだって」
「我は今、忙しい。＜青＞と話す事など無いしな」

忙しい？
えっと、抱っこされてるだけだよ？
「はぁ、ったくよぉ～。おちび、じじいに俺様と話をするように、言ってくれ……そこの庭で待ってるからよ」
疲れたように言い。
青い竜は、窓を開けてふらふらと外へ飛んで行った。
ここは1階なので、すぐ地面に降りて。
そのまま芝生にゴロリと寝転がった。
芝生は青々としている。
日本の年末のような寒さなのに。
不思議……そういう品種なんだろうけど。
開けた窓から入ってくるひんやりした風に、思わず震えてしまう。
「りこ、寒いのか？　我のりこを寒がらせおって……＜青＞め。窓を開けたままとは……仕置き決定だな」
ハクちゃんは私の左右の頬にちょんちょんって、キスをしてから。
「すぐ戻る」
そう言って。
開いたままの窓から、ふわりと飛んで行った。
ハクちゃんは小さな手で外側から、きちんと窓を閉めてくれた。
冷気はこれで入ってこないけど。
「し、仕置きって……大丈夫かなぁ、竜帝さん」
私としては、その事の方が気にかかるんだけどな。

我は＜青＞が何を話したいのかは予想がついていた。
芝生に寝転ぶ＜青＞の隣に座ると、＜青＞が起き上がり我に言った。
「なあ、ヴェル。おちびの身体、強化に失敗したんじゃねぇのか？」
やはりな。

＜青＞もそう思うのか。
「あれくらいの条件下で身体の自由がきかなくなって、熱を出すなんてな。どう考えたって、弱い人間のままだぜ。先代の残した資料だとよ……つがいの竜と交わると武人並みに肉体が強化される事がほとんどだ。個人差があるとしても、おちびは弱すぎる。異界人だからか？」
先代の＜青＞は異種である人間と竜が極稀につがいになる事に深い興味を抱き、研究していたからな。
資料か。
りこの眼には触れさせたくないな。
処分しておくか……。
「そんな弱いおちびだが……再生・回復能力は格段に高くなってる、有り得ないほどな。深夜に４０度越えの高熱出して周りをびびらせておいて、朝にはケロッとしてやがる。瀕死の状態になるまでじじいに犯されても短時間で再生しちまっ……っぐがあ！」
我は＜青＞の口に手を突っ込んだ。
舌を掴んで捻じ切り。
その舌をそのまま咽喉の奥へ、押し込む。
犯した？
誰が？
誰を？
りこを？
我が？
この我が。
りこを。

犯しただと？

犯したなどと言ったな＜青＞よ！

「違う」

あれは、違う。

「りこが我を抱いてくれたのだ」

りこが。

命を懸けて、全てで。

我を。

「りこが我を愛してくれたのだ」

りこの愛を。

我に与えられた愛を。

「貴様は、侮辱したのだ」

痙攣し、のた打ち回る＜竜帝＞の首を右手で掴み。

締め上げた。

我の手を外そうともがく腕を、左手で反対に折り曲げた。

鈍い音が連続して、聞こえた。

「お前はりこの部品として失格だ、ランズゲルグよ」

第４５話

竜帝さんがわざわざ庭で話すってことは。
つまり、私に聞かれたくないって意味だよね。
私に関係することかな？
かなり気になるけれど。
ま、仕方ないか。
諸事情あるでしょうし。
ハクちゃんに、おまかせしようっと。
「そういえば……また、キスしてくれた」
さりげに。
ほっぺに。
「うっうわ～、なんか照れちゃう」
この数日。
ハクちゃんがキスしてくれるようになった。
手はにぎにぎしてるけど。
かわいい小さな竜のお口で。
チュッて、してくれるのだ。
竜のハクちゃんに関しては変態の域に達しつつある（？）私には、すごく嬉しいことで。
「いかにも新婚さんって感じだよね……」
家族に知ってほしい。
ハクちゃんと結婚して、とても大事にしてもらってるって。
一ヶ月以上行方不明で、きっとすごく悲しませて……とても心配をかけてる。
警察にも届けただろうし。
帰れなくても、私が生きて元気でいると伝えたい。
お母さん達を少しでも早く安心させたい。
私の世界に手紙を送る術式、早く完成して！

ミー・メイちゃん、頑張って。
ハクちゃんは異界関係の術式は専門外らしいから、貴女にかかってるの。

品のいいノック音が響き。
カイユさんが扉を開けて現れた。
「お待たせいたしました……あら？」
まるでお盆を持つように、左の手のひらに大きな木箱を軽々とのせていた。
「カイユ、お帰りなさい。あ、ハクちゃん達はお庭で話を……わっ、すご～い」
床に置かれた木箱の中にはガラスのポットや瓶が沢山入っていた。
色、大きさ、形も様々で。
「ハクちゃん、喜びます！　ありがとうカイユ！」
私は窓に視線を移し、ハクちゃん達の様子を見た。
ここからだと後姿で……ん？
２人でじゃれて遊んでるのかな？
青い竜の上に白い竜がのって……プロレスごっこしてるよ！
プロレスごっこがお仕置きなのかな？
うわ～、ほのぼのしてかわいいねぇ。
「ハクちゃ～ん！　カイユがいっぱい持ってきてくれたよ、入れ物。遊びは終わりにして、こっちに帰ってきて～」
私は窓を開けてハクちゃんを呼んだ。
竜のハクちゃんは念話が使えるから、大声を出す必要は無いんだけど。
ちょっと距離があったし。
つい、ね。
ハクちゃんはすぐに振り向き、ふわふわと飛んできた。
竜帝さんは芝生の上にひっくり返ったままだった。
その姿に私はちょっと心配になった。

プロレスごっこだって、怪我することあるだろうし。
「ねえ、竜帝さん……動かないよ？　お仕置き、やりすぎたんじゃないの？」
ハクちゃんは金の眼をくるりと回して、言った。
「りこはランズゲルグをどう思う？」
ランズゲルグ？
誰？
「あそこに転がってる馬鹿の通り名だ。で、どう思うのだ？」
なんだろう、突然。
「竜帝さん？　どう思うかって言われても。うーん、まあ、ちょっとお子様っぽいけど嫌いじゃないよ？　口は悪いけど、私を気遣ってくれてるの分かるの。これから仲良くしていきたいって思うよ？」
私の言葉を聞いたハクちゃんは、軽く頷いた。
「ふむ、‘これから‘か……分かった。カイユ！　＜青＞を回収して溶液に入れろ。濃度を限界まで上げて放り込んでおけ」
え？
私は後ろを振り返り、カイユさんを見て……。
「カ、カイユ？　真っ青だよ、顔！　どうしたの、具合悪いの？！」
血の気の引いた真っ青な顔をしたカイユさんは、がたがたと震えていた。
見開いた水色も眼は、１点を凝視していた。
外？
庭を見てる……竜帝さんを見てる。
なんで、どういうこと？
「急げ。もたんぞ」
ハクちゃんの言葉に、カイユさんは動いた。
外へ飛び出し、竜帝さんを抱えて。
そのまま足早に庭の奥に消えた。
１度も振り返らなかった。
私と……ハクちゃんを見なかった。

カイユさん、どうしたの？
「ハクちゃん……まさか、竜帝さんに怪我させちゃったの？」
木箱の中を覗き込んでいたハクちゃんは。
「少々仕置きしただけだ」
怪我について否定しなかった。
不安になってきた私を小さな白い手が、手招きする。
「心配無用だ。＜竜帝＞はとても丈夫な生き物なので、再生能力も高い。……どの入れ物がりこの好みだ？　こちらに来て教えてくれ」
私に向けられた金の眼は。
お日様のように暖かく。
「カイユ、真っ青だった。震えてたよ？」
「カイユは＜青＞に仕えてる。主の怪我に動揺しただけだろう」
私とお揃いの金の眼は。
いつもと変わらず、優しかった。
「さぁ、我の側に。我のりこよ」
私は白い手に引き寄せられるように、隣に膝を付いてハクちゃんの眼を覗き込んだ。
「竜帝さんに、酷いことしたの？　カイユがあんなに真っ青になる位の怪我を……窓、ちゃんと閉めなかったから？　私が寒がったから？　私のせいでっ」
ハクちゃんは優しい、とても優しい。
私には、私にだけだ。
だから気をつけなきゃいけなかったのに。
「そうか、窓の件の仕置きを忘れてたな」
え？
窓の閉め忘れでこうなったんじゃないの？
「今回の仕置きの理由は……我は言いたくないっ！」
ハクちゃんは両手で頭を押さえ、吐き捨てるように言った。
あれ？
ちょっと、様子がおかしい。

「りこ、りこ！　我はりこに愛されてるのだろう？　りこは我を愛してくれた。我を愛してくれている！　だから違うっ！　我は、あの時、我はっ……我はっ！」

あ。

分かった。

知ってたんだ。

竜帝さんは。

「我はっ！」

支店長さんが報告したのかもしれない。

お医者様が来たものね。

私の眼の色も変わってるし。

竜帝さん……ランズゲルグは。

その事で何か言ったんだ。

そして。

ハクちゃんを怒らせたんだ。

とても。

ハクちゃんを怖がらせたんだね？

「大丈夫。大丈夫だよ、ハクちゃん」

私はハクちゃんを抱きしめ、胸に……心臓に押し付けた。

「ほら、ちゃんと音がするでしょう？　私、生きてるでしょう？」

ハクちゃんの背中を、撫でながら。

「あの時、私達は愛し合ったんだもの。えっと、実は、その、細かいことは覚えてないんだけどっ……ハクちゃんが私に触れてくれたの、嬉しかった。幸せだった、すごく。私、嬉しいって思ったの。その気持ちはずっとずっと、忘れない」

「りこ」

忘れない。

ハクちゃんの愛を。
私の罪を。
「あの時。お互いの意志で、私が望んで貴方にちゃんと愛されたんだって、あの餓鬼んちょ竜帝に自慢してやる！　誰にだって言えるよ、誇りを持って」
大声で。
世界中の人に言えるよ。
「私達、愛し合って結ばれたんだって。ハクちゃんは、ハクは私の……私だけの人になってくれたんだって、お城のてっぺんで叫んじゃおっか？」

「姫さん、そりゃ勘弁してくれよぉ。父ちゃん、なんか切なくなっちまう」

へ？
「ダ、ダルフェっ！」
ひえ、いったいいつからそこに居たんですか！
「ちゃんとノックしたぞぉ？　２人の世界に浸りすぎ。ちったぁ周りを気にしなさいって、あんたらは」
にやりと笑ったダルフェさんはいつもと感じが違った。
むむ。
あ、服のせいか！
セイフォンではわりとだらしない格好をしてることが多かった。
今の彼は、違う。
鮮やかな青の服は詰襟でかっちりとしたデザイン。
膝までの長さがあり袖と襟には白いラインがはいっていた。
腰には細身の剣。
硬質な足音の正体は黒いブーツで。
髪もきっちりと結ばれている。
まるで、軍人さん……騎士？

床にぎりぎりつかない長いマントは、まるで本の中の騎士みたいだ。
「か、かっこいい……！　ダルフェ、その服って？」
思わず、見蕩れてしまうほど。
ダルフェさんは格好良くて。
ああ、私。
ちょっと制服フェチの気があるから……こういうの、弱いのよねぇ。
「あぁ、これかぁ？　仕事着だよ。俺、竜騎士なんだよ。一応ね」
竜騎士？
うっひゃー、本物じゃありませんか！
「……かっこいい？」
あれ？
地を這うような念話が……。
「我は‘かわゆい’で、ダルフェは‘かっこいい’だと？」
私の腕からゆらりと飛んだ白い竜は。
ダルフェさんの姿に頬を染めてしまった私と、ちょっとタレ眼だけど端正な顔を青ざめさせたダルフェさんをゆっくりと見て。
「‘かわゆい’と‘かっこいい’……どっちが雄、いや男として上級なのだ？」
え、あの。
「りこ。どっちなのだ？」
お、男としてって。
そのですね、えっと。
「りこ」
ううう～。
「りゅ、竜のハクちゃんはかわゆくて！　人型のハクちゃんはかわゆいプラス、ものすんご～っくかっこいいです！　とっても綺麗で美人な、世界一かっこいい旦那様ですぅ！！」
がぁー！

とうとう言ってしまった！
おのろけのも程があると思って、心の中で思うだけにしてたのにい。
こんなにべた惚れなんて、本人の前で……恥ずかしい～！
しかも綺麗で美人って、普通は旦那様に使わない褒め言葉では？
でもね実際、ハクちゃんは作り物みたいに綺麗であって！
悪役系の顔だけど、美人は美人でしてえぇぇ！
うう～っつ。
こ、こういうのを世間では羞恥プレイっていうのかな？
顔に血が集まって、熱い。
きっと、真っ赤になってるよ。
「そうか」
ハクちゃんはうんうん頷き。
「つまり……我は、かわゆくて・ものすんご～くかっこよくて・綺麗で美人。そして世界一りこ好みということだな」
ううぅ～、好みとは、言ってないんだけどな。
西田敏行さんとか、タイプなんです。
ほんわかとして、ふっくらして。
ハクちゃんと間逆な……。
で、でも！
私が好きになったのは、ハクちゃんだったから……実は面食いだったのかな？
いやいや、そもそも竜のハクちゃんに惹かれたってことでして。
「では、我は着替えてくる。　午後はりこを抱っこして、でぇとをするのだ」
私が内心で、プチパニックしていたら。
ハクちゃんがすばやく私の唇に、チュッとキスをして消えた。
ハクちゃんって、ちょっとキス魔っぽいかも。
ん……あれ？
いま、なんて言ってた？

着替えてくるって……そして。
「で、でぇと？」
しか～も！
抱っこで？
「あぁ、なるほどぉ！　こないだ渡した＜年の差なんて怖くない！年代別恋愛必勝法＞を読んだんだなぁ。じゃ、次に読ませるのは何がいいかなぁ～」
「は？」
私はダルフェさんを凝視した。
今、なんておっしゃりました？
「まあ、取りあえずは昼飯にしましょう。ね、姫さん」
持参した大きなバスケットを開け、ニカっと笑い。
「帝都名物の揚げ鯰のサンドだ！　姫さんの好きなダルフェさん特製タルタルソースがたっぷり使ってあって、美味いぞぉ～。この鯰は滋養に富んでて有名なんだ。　あの旦那の嫁さんになっちまったんだから、がんがん食って体力つけないとな。父ちゃんに任せなさい！　精のつく食材を揃えてやっからなぁ」
と、父ちゃん？
そ……それに精のつくって何？！

ダルフェさん。
変な新婚本といい、あなたのチョイスは少々難ありです！

第４６話（前書き）

本文中に性的表現が含まれています。苦手な方はご注意下さい。

第４６話

「部屋に衣服が無いぞ？」
ハクちゃんはすぐに戻って来て、ダルフェさんの頭にぺたりとくっついて言った。
ダルフェさんはバスケットの中身をテーブルに並べていた手を止め、頭から白い竜を剥してソファーに置き……。
「あ、言ってませんでしたっけ？　旦那の部屋、引越しました。城の南棟に部屋を用意したんですよぉ。城内には南棟立ち入り禁止令が出てます。姫さんの世話関係者は後でリストを出しますんで、目を通しといて下さい。竜族は蜜月期の雄の怖さを分かってますから近づく馬鹿はいませんが……人間の間者はできるだけ俺らが片付けますが、術士が出てくると分が悪い。さしの勝負じゃ負けませんがねぇ～、こそこそされんと見つけんのが難しいんで。取りあえず、片付ける前に頭の中を確認してから捨ててくださいよ？　情報がほしいんでね」
緑の眼を細めて言った。
う～ん。
いつもより早口だし、単語もいまいち分からないな。
でも、引越しは分かった。
「ねえ、ハクちゃん。お部屋、引越しなの？」
「そのようだな。……あぁ、りこは昼食の時間か。どれ、あ～んを……む？」
ハクちゃんはテーブルに並べられた物を見て。
「これではスプーンもフォークも使えんではないかっ！」
一瞬で移動し、ダルフェさんの後頭部に蹴りを入れた。
「痛っ！　ったく、良く見なさいって。デザートにプリンがあんでしょうがぁ！　ふふっ……しかぁもぉ！　カカエの卵で作ったんですよ？　滋養強壮満点の、あのカカエの卵です！」

何故か勝ち誇ったように言うダルフェさんに、ハクちゃんはささっと動き。
プリンの器とスプーンを握り、テーブルの上から私を見上げた。
「りこ。パンは残してもいいが、プリンは食べるのだぞ？」
金の眼がきらきら……なんか変だなぁ。
ま、いいか。
なんか色味がいつものプリンより、赤みが強いけど。
美味しそうだしね。
「あ！　ダルフェ。竜帝さんにハクちゃんが怪我を……。カイユがどこかに連れてったけど、大丈夫かな？」
向かいのソファーに座って、鯰サンドを齧っていたダルフェさんはちらりとハクちゃんを見た。
「怪我ねぇ～。飯を作ってたらハニーから電鏡で、陛下を溶液にぶち込むって連絡きたっけな。ま、姫さんは気にしなさんな。陛下は旦那にやられなれてっから。俺より頑丈だし心配ないよ。さ、飯食ったら新しい部屋に行こうな」
ダルフェさんより頑丈って……すごいんだ、竜帝さんって。
あ、そうだ！
「ダルフェ！　支店から飛んでくれて、ありがとうございました」
ぺこりと頭を下げた私にダルフェさんは。
「うん、うん。やっぱり娘って、いいねぇ～」
そう言って私の頭に手を伸ばし、撫でてくれようとして。
「ぎゃー、痛っ！　噛みなさんなって、旦那」
ハクちゃんにがぶっと手を噛まれていた。

「これ、可愛い形だよ！　かぼちゃみたい」
昼食後、木箱からハクちゃんと一緒にガラスポットを選んだ。
手のひらサイズで、ぽってりとしててすごく可愛い。
蓋はツマミ部分がまるでビー玉みたいで、意外と持ちやすい。

「では、これにしよう」
ハクちゃんは選んだガラスポットとのど飴を持ち。
私はパジャマとネグリジェを抱え。
ダルフェさんはバスケットを下げて。

お城の中を見学しながら歩いて行きたかったけど。
そう言った私にダルフェさんは、ちょっと困ったような笑みで「ごめんな」って……。
言うべきじゃなかったと、思った。
ダルフェさんを困らせたくなかったのに。
竜族はハクちゃんの事をよく分かってるって言ってたもの。
私が好奇心でふらふらお城の中を歩いたら、沢山の人に迷惑をかけちゃうよね。
ごめんなさい、私……これからもっと、気をつけますから。
ちょっと落ち込んだ私は、気づかなかった。
私を見る金の眼が。
ほんの少し、揺らいだことに。

ハクちゃんはこのお城に詳しいみたいで、部屋の位置をダルフェさんに聞いたらすぐに術式で連れて行ってくれた。
瞬きと同じ早さで景色が切り替わり。
「ここ？　……わあ～！」
別世界だった。
明るく暖かな光に満ちた緑の空間。
眩しいほどの陽の輝き。
見上げると、ドーム型の天井から澄んだ空が見えた。
「これって……温室？」
しかも、すごく広い。
中央に長方形の池。

水音……近寄って覗くと小さな赤い魚が数匹泳いでいた。
尾とヒレが長くて、まるでドレスを着ているみたいな綺麗な金魚。
静かな水面には睡蓮のつややかな葉が浮かんでて。
「姫さん、あそこの扉の向こうが居住区だよ。居間・寝室・洗面所・衣装室・納戸・書斎あと簡単な厨房設備もある。風呂だって離宮よりでっかいのがあるんだぞぉ」
「え、あの、ここに住むの？」
な、なんか凄すぎないかな？
私的にはワンルームとかで良くて。
光熱費とか水道代とか払えるのか、私～！
それに、そんなにでっかいお風呂じゃ、掃除とかが旅館並みに大変なんじゃ。
ちょっと心配が顔に出てしまったのか、ダルフェさんが説明してくれた。
「ま、細かい事は気にすんなって。南棟の維持管理は専門の者達がする。姫さんは手を出すなよ？　素人には無理だし、人の仕事を取るもんじゃない。姫さんには姫さんのやるべきことがある」
「私の？　あ、勉強ですね」
ダルフェさんは苦笑した。
あれ？
「勉強もだがね。１番はあの困ったチャンの相手だなぁ」
「……こまっ？　あぁー！　ハクちゃん、なにやってんのよっ！？きゃーっ」
大きな布袋をどこからか持ってきた白い竜は、私が止める間も無く小さな手で袋を左右に切り裂いた。
パンパンになっていた袋はその中身が一気に弾け出し。
きらきら輝く真珠の雨が。
温室の中に。
降り注ぐ。
太陽を反射して。

きらきら、きらきら。
「真珠……ハクちゃんの、かけら」
幻想的な光景に見蕩れてしまった私に、ダルフェさんは言った。
「俺達で片付けんのか、これ？　徹夜か？」

ハクちゃんの破いた袋に入っていたのは、支店で出しちゃった‘かけら’だった。
カイユさんがちゃんと袋に入れてくれていた。
温室全体に散らばった無数のかけら。
うんざりした顔で眺めるダルフェさんを尻目に。
ハクちゃんはかけらを拾い、ガラススポットに詰めはじめた。
小さな指を使って丁寧に作業をし、蓋を閉めて。
「りこ！　どうだ？」
私にかぼちゃ型のガラスポットを両手で差し出した。
「すごい綺麗～、素敵！」
ガラスの入れ物に入れられたハクちゃんのかけらは。
艶やかに煌めいて、真珠をつめたみたいだった。
「のど飴を見て、思いついたのだ」
小さな手からガラスポットを受け取り、お日様にかざして喜ぶ私にダルフェさんが言った。
「はは……俺、箒を取りに行ってきますよ」
「ほ、箒なくて平気です！　ハクちゃん、自分で片付けなきゃっ。前みたいにささっと出来る？　何か大きな入れ物借りないとだね。あ！　ダルフェ、大きいお鍋ありますか？」
ハクちゃんはふわふわ飛びながら。
首をかしげて。
「りこは鍋が好きだな」
と、言った。

別にそういうわけじゃないんだけどな。
ま、いいか。

ダルフェさんが深くて大きな銅鍋をお城の厨房から借りてきてくれて。
炊き出しに使うようなそれに、ハクちゃんのかけらをしまった。
思ったより量があり……。
ハクちゃんがあの時、すごい量の内臓（ひえ～）を出していたのだと痛感した。
「姫さん、午後の茶の時間まで寝てなさいね。一応、病み上がりなんだから」
ダルフェさんはそう言ってくれたけど、体調はなんとも無い。
咽喉の痛みも治ったし。
カイユさんの飴、素晴らしいです。
「ダルフェ。私、元気ですよ？　あ、お部屋を見てきていいですか？」
「ああ、ここは姫さんの部屋なんだからご自由に。旦那ぁ、衣装室に搭から移動した衣類ありますからね」
ハクちゃんの服。
今度こそ、平和的なイメチェンをせねば。
魔王様は卒業なのだ！
「ありがとう、ダルフェ！　ハクちゃん、行こう！」
ふわふわ飛んでいたハクちゃんをささっと捕まえ、抱きかかえた私にダルフェさんが言った。
「俺は陛下の様子を見てくっからね。あ、昼寝はしときなさい。環境が変わると疲れるもんだぜ？　旦那、姫さんをしっかり休ませて下さい。あんたは夫なんですから、妻の健康管理を怠っちゃいけません」
ハクちゃんはダルフェさんの言葉に頷いた。
「分かった。きちんと体調を確認し、昼寝をさせる。休養だな」

私のお昼寝は決定みたいですね。
「お昼寝、ここでしていい？　温室、ぽかぽか気持ちいいから。……竜帝さんとカイユの様子、後で教えて下さいね」
「了解！　んじゃ、また後でな」
片手を軽くあげて温室から出て行く後姿は。
いつもと違う騎士姿のためか。
遠い存在に感じられてしまい。
ちょっと、寂しかった。

居住空間は想像していたよりも、各部屋がこじんまりとしていた。
コンパクトにまとめられ、居心地が良さそうで……ほっとした。
広すぎると、落ち着かないし。
置かれた家具も木製の暖かみのある物だった。
漆喰の壁はバターイエロー。
とても暖かな印象。
豪華でやたらに何でも白く、大理石ばかりだった離宮。
綺麗だけど冷たい印象しかなかった。
ここは……違った。
「わあ、いいね～ここ。うん、素敵」
るんるん気分で寝室へのドアを開け。

「う？」

閉めた。
中に入らずドアを閉め。
今、見えた物を頭の中で反芻した。
なんだ？
あのでっかい……ちょ、ちょっと大きすぎないか？！
「りこ、どうしたのだ？」
腕の中で私を見上げるハクちゃんを、直視出来なかった。

そうだった。
この超ラブリーな竜は。
「衣装室は寝室から入るのだろう？　ほら、行くぞ。りこ」
するりと私の腕から抜けて、ハクちゃんは寝室のドアを開け。
ふわふわ飛んで、先に中に入ってしまった。
そう、つい忘れてたというか。
実感がイマイチだっだというか。
この小さな白い竜は、私の旦那様でして。
人型になると、２メートル越えの長身で。
そりゃ大きなベットが必要でしょうが……大きすぎるでしょ、あれ！
「着替えてきたぞ。ん？　りこ、どうかしたのか？」
どうやら数分間、固まっていたらしい私を。
腰をかがめて覗きこみ、魔王様は仰った。
「黒い服にしたから怒ってるのか？　だが、だがな！　我はりこの色がっ、りこが大好きなのでだな！　その、あのっ」
チャイナ服に似た黒い長衣は、銀糸で細やかな刺繍が施され。
割とすっきりとしたデザインで、ハクちゃんに似合っていた。
ハクちゃんは、私に伸ばした腕を寸前で止め。
白い手を。
にぎにぎ・にぎにぎ・にぎにぎにぎにぎ。
「りこ……さ、触っていいか？　我はずっと竜体だったので……この手でりこに、触りたくてだな！」
にぎにぎする手と。
冷たい美貌。
やっぱり、ハクちゃんは。
かっこいいより、かわいいかも。
「うん」
にぎにぎする手に、自分の手を添えて。
「私はハクちゃんの妻なんだから」

ハクちゃんはゆっくり手を開き。
その手で私の頬にそっと触れ。
「そうだ。りこは、この我の愛しい妻だ」
おでこにキスをしてくれた。
うへへ。
なんか、こういうのって嬉しいなぁ。
「そうだ、りこ。なかなか良い感じの寝台があったぞ。体調が良いなら昼寝は中止して、我と交わっ」
「ス、ストップ！　取りあえず、温室で昼寝しましょう！」
ま、ま、交わっ？！
あまりに直球すぎないか、それ～！！
さ、さすがにちょっと。
こう、もっとちょっとさり気な～く誘ってくれると……ううううっ～ハクちゃんって、内臓の涙が出ちゃうくらい繊細なのにデリカシーが無いというか。
「ふむ。りこは鍋も温室も好きなんだな。……共通点は暖かさか？」
1人でぶつぶつ言っているハクちゃんの謎めいた思考回路には触れずに。
私はダッシュで寝室に入り、お昼寝に必要だと思われるものを集め。
「ハクちゃん、先に温室に行ってるよ！」
速やかに退却した。

「気に入ったか？」
かけらの入ったガラスポットを手に乗せ、眺めていたら。
ハクちゃんの長い指が、私の前髪に触れ。
大きな手でそっと……髪を梳いてくれた。
優しい感触が気持ち良くて、嬉しくて。
「うん！　ありがとう、ハクちゃん」

ぽかぽかの温室にふかふかのラグマットを敷き、小ぶりなクッションを枕にして。
眩しい日差しは隣で横になったハクちゃんが遮ってくれて。
お腹もいっぱいで、うとうとしてしまう。
ハクちゃんが毛布かけ直してくれながら、言った。
「りこは昨夜、熱が出たのだから。ダルフェの言うようにでぇとは止め、休養することにしよう……うむ。それが良いな」
私の手からガラスポットをとり、蓋を開けて。
中から1粒取り出して。
「りこ、あ～ん」
あ～んって……え？
条件反射で開けた口に、ハクちゃんはかけら（元・内臓）をころんと入れて……。
ほんのり甘く、舌の上でふわりと溶けたその味は。
「あ……あれ、これって駕籠でくれたのと同じだ」
「そうだ、我のかけらだ。元は我の一部なので微量だが気が残っている。りこにとって、我の気を補充する方法の1つになるはずだ……美味いか？」
「うん。おいしいけど……」
かけらを食べさせられたことに驚きは感じても、嫌悪感は全く無かった。
それより、気の補充ってどういう事なの？
人型のハクちゃんはもう数粒取り出して、自分の口に入れた。
「……りこ」
唇に。
ひんやりした感触。
見た目よりも柔らかだって事を、私はもう知っている。
「っん……」

口移しでくれたかけらは。
いっそう甘くて。
貴方の。
冷たい唇。
熱い舌。
どこまでも優しく。
私を絡めとリ、離さない。

「ん、あっ？　ちょっ……ハ、ハクちゃ…ん?!　や、やめっ！
だめ、だめだよハク！　ハク、ハクちゃんったら！　ちょっと、な、
あっ……！」

真珠のカーテン。
羽毛のような、穏やかで優しいキスが。
額に、こめかみに、目元に。
顔中に降り注ぎ。

「りこ……」

輝く金の星。
滴るように、艶めいて。

「や、ハクちゃ、あぁ！　……な、なに？　な、んで？……ひっ！
あ、あっ、んぁ！」

大きな手で。

「りこ、りこよ……あぁ、ちゃんと憶えているではないか」

長い指が。

「大丈夫だ。りこは我を、憶えているぞ？」

わかんないよ、知らないよ。
私はハクちゃんのしてくれたキスしか憶えてなかった、本当に！
こんなの、知らないよ。
こんな風になっちゃう私、知らないよ！

「はっ、あ、あぁん……ハ、ハクちゃんっ！　な、んで？　わ、私？　うそ、なん……でぇ、こんなの、へ、変だよぉ。こ、こわいよぉも、もう、やめて、もうっ……んっ！　こわっ、いよ私、変っう、うぇっ……うえっ、ひぐっ」

知識としては知ってた。
そういった話が好きな友達もいたし、女性雑誌にだって特集がよく載っている。
でも、それを自分で体験するとなると。
どうしていいか分からなくて。
死ぬほど恥ずかしくて。
泣き出した私の顔を。
真っ赤な舌が優しく舐めあげた。
丹念に、執拗に。

「怖いことなど何も無い。あぁ、我のりこ……やめてほしいと？
我に偽りの言葉は通じない……りこの体液が我に本心を明かしてくれる」

耳を銜えられ。
全身を震えが襲う。

「我が欲しいのだろう？」

囁きは、甘く。
残酷で。

「りこは我が……欲しいだろう？」

縋るような、瞳で。

「我はりこが欲しい」

潤んだ金の星。

「我はりこに愛されたい」

ずるい、貴方。

「ん、あぁっ！　私っ、ハクちゃ、ハク！　……ひぁっ！！」

言葉も息も。
心も身体も。
全部。
全て、貴方に奪われて。
縋りつくしか、出来ない私。

「もっと。もっと我を欲しがって、りこ」

「我だけを」

ねえ、ハクちゃん。

午後は。

休養するんじゃなかったの？

第47話

「……りこ？」
ぐったりとしたりこは、我の声に反応しなかった。
柔らかで温かな身体をまさぐっていた手を止め。
「りこ」
耳元で囁くように呼んでも、反応なし。
「……む？」
健康管理の為に体液を採取しようと思い。
うむ。
まあ、その。
健康状態を確認しつつ、少々（？）交わろうかなと。
いや、逆か。
交わりつつ、健康状態の確認を……。
我は欲張りすぎたか？
健康状態は問題なしだったが。
我はかけらを1度に与えすぎたな。
馴染むまで、身体機能が一部停止状態に陥ったか……。
りこの小さな肉体では日に3粒程度にすべきだった。

せっかくの機会を自ら潰すとは。
我の馬鹿。
なんたる失態！

「まだ……加減がどうにも、難しいな」
かけらを人間に投与するのは初めてなので。
まあ。
かけらを作り出したこと自体、りこと出会ってからなのだ。
こういうのを試行錯誤というのだな、多分。

意識の落ちてしまったりこの顔をじっくり眺めた。
閉じた瞳。
濡れた睫毛。
ほんのり染まった頬。
我に貪られ、光る唇。
汗ばんだ額に張り付いた黒髪。
「どう見ても……りこのほうが我より‘かわゆい‘が似合うと思うのだが」
りこは我をかわゆいと言うが。
我にとってはりこここそ‘かわゆい‘の頂点であり。
あまりにかわゆくて、無いはずの食欲を刺激されるほどだった。
「りこの血液……」
無意識に舌なめずりしてしまう自分に反省しつつ、りこの事を考えた。
もっとも、我の脳内はいつだってりこでいっぱいなのだがな。
甘い体液から得たりこの情報を、脳内で整理してみると。
「うむ……与えすぎたかけらが馴染むまで、1時間弱か」
りこは我の血肉を摂取するのは抵抗があるようだったが（以前、朝食に志願したら食べてもらえなかった。硬くて食べずらそうだしな）。
かけらは美味いといっていた。
我のかけらを味わう表情が。
菓子を食べる時に浮かべる微笑みよりも。
どことなく艶めいて見えるのは、常に我がりこに飢えているからか？
「あぁ、りこよ。我はもう、りこ以外の女はいらん。他の女には触られたくない……りこだけに触れて欲しいのだ」
りこは、我が初めての男だった。
竜珠を与えた時に採取した唾液からの情報は多岐にわたり、しか

も正確だ。
人間は寿命が短いので（他の動物よりは長いが）２６年も生きていれば、未通の女はめったにいない。
貴族階級になると、初潮を迎えぬ幼い娘すら嫁に出す。
この世界では２６前後の女は母親となり、数人は産んでいるな。
だが、りこは違った。
唾液からもたらされた情報に、どんなに我が歓喜し感謝したことか！
他の者の‘気’が全くついていないまっさらな状態。
都合が良かった。
我の‘気’でりこを染め上げ、作り変えるのに。
非常にやりやすくなる。
りこの世界は晩婚が主流なのだな、きっと。
まあ、婚約者がいたらしいがな。
我のりこに婚約者……考えただけで内臓を吐きつつ、暴れ狂いそうになるな。
そやつが腑抜けで良かった。
接吻の仕方すら、りこに教えていなかったようで。
支店の屋上でりこがしてくれた接吻は、唇を合わせただけのものだった。
我は。
あのような接吻は初めてで。
衝撃のあまり、息をすることも忘れた。
どんな女の官能的な接吻も、りこがくれたあの接吻（キス）にはかなわない。
我は陶酔の中で。
我慢しきれず求婚した。
今思えば……既にあの時、我の理性は切れてたな。

恐るべし、りこ！
なんの技巧もないりこの‘ちゅう’1つで、我はおかしくなってしまったのだから！
「……りこが命懸けで我を愛してくれたのに、我は肉体強化に失敗したのだ。……あのような目に合せておきながら」
我は自分の能力の限界を知った。
四竜帝を引き裂き、世界を壊すことは可能でも。
愛する女に不死を与えることは不可能で。
「りこ、りこよ。我を責めて、罵れ」
りこが憶えていなくとも。
我は憶えている。
我はりこのか弱く、脆い身体を欲望のままに貪ったのだ。
力の加減も忘れ、骨を砕いた。
意識を失ったりこを。
りこの身体を。
狂喜し、抱いた。
りこの肉に溺れ、血に酔いしれ。
それでも。
りこは。
嬉しかった……幸せだったと言ってくれたのだ。
だから。
我は決めた。
りこが欲しがってくれなくては、我はりこと身体を繋げてはいけないと。

身体は我を拒んでいないと、体液で分かる。
人間の肉体は強い快楽を与えてやれば、容易に陥落するものだ。
快楽に弱いからこそ繁殖能力が高いともいえる。
そのような造りの生物なのだから。
でも、我は。
快楽により求められるのではなく。
心の底から。
存在全てで、求められたい。
りこの口から。
言って欲しい。
この唇で。
我が欲しいと。
我だけが欲しいと。
「りこ。我を欲しがってくれ……」

我はりこから身体を離し、術式で温室の外に出た。
振り返ると。
強化ガラスのむこうで。
小さなりこが毛布に包まり、寝入っている姿が目に入る。
気象条件の厳しいこの地で過ごすため、＜青＞が用意したこの温室は。
りこ専用の豪華な鳥籠だ。
＜外＞では長く生きられぬ、か弱い小鳥の為の。
我の宝を護る宝石箱。
脆く弱い、我のりこ。
救いは。
再生能力の移行だ。
りこは我の再生能力を受け取ることが出来る。
再生能力に付随し、回復力が高まっているために今回も大事に至らなかったが。

肉体強化は全くなされていないので風雨に負け、高熱を出した。
再生能力が高まったとしても。
か弱いりこは、容易く死ぬ。
我と違い、心臓を刺されれば即死し。
致死量の毒を摂取すれば助からない。
それに加えて。
りこは心が弱い。
過度の心労は肉体だけではなく、精神も破壊してしまうだろう。
自分が世界中の者からどのような目で見られるているか、まだ大まかにしか理解できていない。
現実は、厳しく残酷だ。
この我の‘つがい‘となった者が人間で、しかも本来は＜処分＞対象であるはずの異界の生物。
多くの者が好奇の視線を向け。
地につくほどに深く頭を下げながら、心中はりこを羨み妬み。
化け物の妻だと蔑み、嫌悪するだろう。
暖かで優しく弱い、我の妻を。

いつの日か。
我のせいだと。
りこが我を疎み、罵るのだろうか。

りこの心が我から離れるなど。
許せない。
耐えられない。
だからこそ。
りこの周りは綺麗で美しく、温かなモノで覆い隠して。
真実から遠ざけた。

「我の‘つがい‘を探りに来るか、人間共よ」

潜む気配は術士のもの。
人間共はりこを殺したりはしない。
我を恐れている限り。
間者を忍ばせるのは、りこの情報が欲しいからだろう。
りこの姿、衣食住の好み、そして。
＜監視者＞がどれほどまでに‘つがい’に重きをおいているか。
人間の‘つがい’に支配されているか知りたいのだろう。
りこの利用価値を探っているにすぎん。
「くだらんな。さて、りこに触れるこの手は汚したくないのだが」
りこが好きだといってくれた、冷たい手。
りこに触った、この手は。
だが。
引き裂いてずたずたにしたい。
「目障りすぎて、癇に障るな」

「だから、俺を使いなさいな。旦那」

ダルフェが音もなく、傍らに降り立ち。

「引きずり出しておいてくれりゃ、こっちで処分しときます。旦那の望み通りの殺り方でね」
ダルフェと。
「お久しゅうございます。ヴェルヴァイド様」
ダルフェと同じ竜騎士。
群青の髪を持つ竜族の雌。
灰色の眼は、幼い頃と変わらないが。
あんなに丸かった顔が、ほっそりとしたものになっていた。
「ヒンデリンか。なるほど……＜青＞の采配か」
前に見たときは幼竜だったが。
あれから成竜になるほどの時が、過ぎていたのか。

花も、人も、竜も。
どれも同じ。
我の前を足早に通り過ぎて行く。
違うのは、ただ1つ。
愛しい半身のみ。
「術士は3人。うち、1人が＜星持ち＞だ。北棟の地下室に転移させておく。多少ばらばらになっているだろうが。口がきけぬほど損壊していたら、頭だけ残して捨てろ」
「了解。ま、旦那が暇なときにでも、視、に来て下さい。腐んないようにしとくんで」
「我に暇なときなど無い。りこに会ってから、我は毎日が忙しいのだ。りこが寝入った深夜にでも時間を作る」
ああ、そういえば。
「りこの茶は3時なのだろう？　ダルフェ、茶はどうするのだ」
りこは茶が……茶の時間が好きなのだ。
いつも楽しそうにしている。
我にはそれが何故かは、まだ理解できていないのだが。
りこが楽しい気分になると、我は嬉しいのだ。
「ああ、茶か！　ハニーと陛下の事も姫さんに教える約束しましたっけねぇ。しっかし、今回はやりすぎですよ旦那。様子見てきましたがねぇ～陛下の身体の中、あんなにぐちゃぐちゃにしちまって。殺されたほうが楽でしたね、ありゃ。まぁそこんとこは、姫さんに内緒ですね」
内緒？
あの時の会話から察するに。
りこは。
支店での性交について＜青＞がけちをつけ、我が仕置きをしたと察したようだった。
仕置きしたことは怒られなかったぞ？
「なぜ、りこに内緒なのだ？　仕置きしたことはばれてるぞ？」

「旦那……あのですねぇ。仕置きの限度を軽く越えて、拷問の域に達してた自覚あります？」

拷問？
「ないな」

ダルフェは大きく溜め息をついて、ヒンデリンに言った。
「な？　やっぱりだろ？　すげーだろ、旦那って」
「……」
ヒンデリンは答えなかった。

すげー？
我のことか？

意味が全く分からんのだが。
取りあえず、優先すべきは。
「ダルフェ。茶だ」
竜騎士2人は我の顔を凝視して。

ヒンデリンは一礼して去り。
ダルフェは笑い転げた。

はて？
我は特に面白いことなどなかったが？

～おまけの小話・ハクちゃんの秘密～

りこが寝入ったのを確認し。
我はデルの木の下へ術式で移動した。
根元に座り。
両手を月明かりにかざした。

硬い鱗。
４本の短い指。
鋭い爪。

りこの手を思い出す。

柔らかな皮膚。
ほっそりした5本の指。
小さな貝殻のような可愛らしい爪。
我を抱き、撫でてくれると気持ちが良くてうっとりしてしまうのだ。

それに比べ。
我の手は……。
見慣れたこの竜の手が。
醜くおぞましく感じてしまう。

「我だって」
爪で鱗をむしりとる。
むしっても、むしっても。
一瞬で再生されて。
「我だって、りこに触れたいのに！」
毎朝、我のりこの髪に触れているのは。
我のこの手ではなく、＜青＞が送り込んできた竜族の雌の手で。
黒い髪を梳かし、結い上げ。
花を飾り……。
「我のりこだ！　この我のつがいだ！　我の、我のっ！」
あの髪に触れ、肌に触り。
「こんな爪は、いらん！」
鋭い爪は。
剥がしても、剥がしても。
減ってくれない。
再生するなと命じても、我の意のままにはならなくて。
「……指ごと落とせば」

「やめときなさいな。指だって生えるに決まってますよ、旦那」

ダルフェは我がむしった鱗と剥がした爪を拾い集め。
デルの木の根元に埋めた。
「不毛な自虐行為はやめましょうや。姫さんが知ったら悲しみますよ？」
「なぜ、りこが悲しむ？」
ダルフェは土の付いた手を掃いながら言った。
「相変わらず使えない頭っすね」
ますます分からなくて首をかしげた我の隣に、ダルフェは腰を下ろした。
「あの姫さんは感性がずれてるっていうか、なんというか。不思議

な事に、旦那の竜体に惚れ込んでますからねぇ～。傍から見ると、ちょっとやばいくらいあんたの竜体に執着してます」

そんなこと、分かっている。

だから、この姿でいるのだ。

「りこは鱗が好きなのだ」

ダルフェは額を押さえた。

「まあ、鱗趣味はおいといて。姫さんは旦那を好いてます……雄としての認識は無いとしてもね。だから旦那がこんなことしてたって知ったら、泣きます。絶対に」

我は焦った。

「り、りこが泣くなど駄目だ！　我の宝物なのだ！　りこを泣かせるなどっ」

「じゃ、練習しましょう。ラパンの硬さがちょうどいいっすから！」

はて？

「姫さんを傷つけないで、触る訓練ですよ。俺、天才！　さっそく今夜からしましょうねぇ」

なんだか良く分からぬが。

りこに触れるようには、なりたいので。

「やる」

待っていてくれ、りこよ！

必ず成功（？）させてみせるぞ！

「姫さんには秘密で頑張りましょうぜ、旦那。ある日突然、優しく手を握り……指に接吻して甘い言葉を囁くんですよぉ！……これで姫さんは落ちますって」

「そうなのか？！　ダルフェは物知りなんだな」

感心した我にダルフェは言った。

「俺は＜これで貴方もモテ男！　月刊・恋愛サバイバル＞の購読者ですからねぇ～。任せてください！」

意味がさっぱり分からんが。

こやつも妻帯者だから、女心には詳しいのであろう。

『ねえ、ハクちゃん。最近、ダルフェさんが作るお菓子って同じ果物ばかり使ってるよね？　お買い得だったのかな～。安くて美味しいなんて、いいよね！　なんていう果物か知ってる？』

違うぞ、りこ。

ラパンは高級品なのだ。

庶民は一生見ることさえないような果物で。

＜青＞の会社の力でダルフェが買占めた。

時期はずれで、入手困難な貴重品なのだ。

「ラパンだ。よく使うのは……旬だからではないか？」

『ふ～ん。ラパンっていうの。美味しいね』

ラパン。

それは秘密の実。

『どんな実なのかな～？　いつも刻んであったりペースト状のものが厨房にあって、原型を留めてるのが見当たらないのよね』

「そ、そうなのか？」

甘酸っぱい、秘密の果実。

第４８話

「おはよう、りこ」
金の眼だ。
「ん……おはよう」
ハクちゃんだ。
ハクちゃん……ん？
私、さっき。
かけらを……キスしながら貰ったりして。
それで。
ハクちゃんが。
うわぁっ。
今度はちゃんと憶えてますよ、私！

あれは、その。
と、途中だったよね？

それって……ま、まずいよね？
「ハクちゃっ！　私っ、いたぁっつ！」
勢い良く上半身を起こしたら。
私の顔を正座して覗き込んでいたハクちゃんに、額を強くぶつけてしまった。
「ご、……ごめんなさいっ！」
鼻を両手で押さえたハクちゃんは。
ちょっと涙目で。
私はますます焦ってしまう。
正座をし、鼻を押さえて涙目の悪役顔美形様は。
「ふぇ、ふぇこ。……わふぇは、ふぁなっ」
ふぇこ、ふぁな？

え？
「うっわ？！　きゃーっハクちゃん！」
白く長い指の間から。
真っ赤な液体が一筋、つつーっと。
「ハクちゃん、鼻血が出てるぅぅー！」
どんだけ石頭なのよ、私の頭ー！
私は大急ぎで洗面所に走り、タオルを濡らして強く絞り。
正座したまま上を向き、鼻を押さえているハクちゃんの姿に半泣きになりながら。
「痛かったでしょう？　すごい音したものっ。ごめんね、ごめんね」
ほくろ1つ無い白い肌に、真っ赤な血。
綺麗な爪を持つ長い指にも、大きな手の平にも。
夢中で拭き取った。
血。
ハクちゃんの。
ハクちゃんの血。
匂い。
花のように香る、甘い……甘い香りがする。
これが……血液の匂い？
血って、錆みたいなんじゃないの？
思わず深く吸い込むと。
「あ、あぁれれ？　私、私っ……あれ？」
頭の中が。
ぐわーんと回った。

「もう、鼻血は止まったぞ！　我は世界一丈夫なのだ。全く気にすることは無い。……泣くな、泣かないでくれ。りこ、りこよ」
「な、泣いてないもの！　ひぐっつ」

毛布に潜ってしまったりこに、我はどう対処して良いのか分からず。

側にしゃがみ、取りあえず声をかけ続けた。

「鼻血は貴重な経験だったぞ？　礼を言いたい程にな」

「よだれといい、りこのおかげで我は色々体験させてもらっているぞ！」

「内臓を眼から出したり、本物の涙を出したりして大変だったぞ？」

「先日など臨死体験をさせてもらい、なかなかおもしろかった！」

むむ？

言ってるうちに我自身もよく分からなくなってきたな。

慰めているつもりが、ずれてきたような。

『ひぐっ、こんな凄い超絶美形顔なのに鼻血とか、涎とかぁ！　内臓溶けちゃうしぃいいー、えっぇ。わ、私のせいで。ご、ごめんなさっ！　そ、それにぃ』

異界の言葉だな。

全く意味不明だぞ？

『エ、エッチの途中で寝ちゃったから唯子が彼に捨てられたって、美恵子が言ってたものっ！　ハクちゃん、捨てないでよぉおおお～！』

お、毛布から顔が出てきたな。

うっ！

やはり泣いてるではないか。

『うえ～ん……胸無いから離婚なんて、ひどいよぉ。このおっぱい星人め！　エッチなんてしません的な、綺麗で怖い顔してるくせにぃいい～！　どうせ巨乳美女と付き合ってたんでしょう？　ううぅ……ぶえええぇ～んっ！』

まるでセイフォンで出会った時のように泣きじゃくるりこに。

自分の胃に穴が開くのを感じつつ。

りこがしてくれたのを真似て。

毛布ごと、りこを抱き寄せた。

「りこ、泣くな。りこに泣かれると我はとても辛いのだ。心も痛むし、身体も内部から崩れそうになる」
りこが竜体の我にしてくれたのを思い出し。
膝にのせ、背を撫でてやる。
りこがこうしてくれると、我はとても気が安らいだので。
「ほら、あまりに泣くから鼻水が出てるぞ？　顔も真っ赤で、アダの実のようだ」
『ど……どーせ私は、鼻水垂らしたアダモちゃんですよぉ！　ぶえうぅううえええーんっ』
「ひっいぃ……な、泣かないでくれぇ、頼むから。な、りこ、りこよ」
我はりこを落ち着かせようとしたのに。
りこはいっそう激しく泣き。
『アダモちゃんの私と大魔王様じゃ、ひぐっ、ぜんぜんつりあわなーい！　うわぁああんっハクちゃんの奥さん、首にされちゃうよ～！　嫌だよう、慰謝料積まれたって別れてあげないんだからね……やだよぅ、別れたくないよぉ』
りこは我の腹にしがみつき。
『結婚式しなくたっていいの、ウエディングドレスもダイヤの指輪も無くていいから！　うえっうう……ひっく。ハクちゃんがいてくれれば、ハクちゃんだけで』
今度は悲しげにしくしく泣きはじめ……。

あぁ。
我も泣きたくなってきた。

「旦那～。何事ですか？　ノックしても返事ないから心配したんですよぉって、お取り込み中でしたか！　じゃ、失礼しましたぁ」
ダルフェ、待て！
おい、ちょっ……。

「た、助けてくれダルフェ！」
「へ？」
緑の眼が見開かれ。
「だ、旦那が‘助けてくれ’？　嘘だろ？」
言った我も少々驚いた。
我が助けを求めるとは。
が、細かいことを気にしている場合では無いのだ。
「りこが変なのだ！　何を言っても泣くのを止めん。我はそろそろ限界だ、このままでは内臓を生のまま吐くぞ！」
我の腹にへばりついて、泣き続けるりこの姿にダルフェは眉を寄せ。
足元に落ちているタオルに目を留めた。
「これ……血液っすね？　まさか姫さんのっ」
「りこのものなら我が舐めてるだろうが。これは我の鼻血だ」
りこの血液をタオルで拭き取るなど、もったいない。
「は、鼻血？」
ダルフェは恐ろしい物体でも見るかのように、タオルを凝視した。
「そう、鼻血だ。りこの頭突きをくらい、鼻血が出た。りこは凄いだろう！　この我に鼻血を出させたのだぞ？　衝撃的な痛みにぞくぞくした。もう少し強くして欲しいほどだ」
自慢した我に向けられた視線は。
「あんたやっぱ、変。というか変態だな」
冷たいものだった。
何故だ？
最強竜の我に鼻血を出させるなんて、とても凄い事ではないか！
四竜帝が全員で掛かってきたとて、我に傷1つつけられんぞ？
我の身体を傷つけることが出来るのは、小さくか弱いりこだけだ。

あぁ、我のりこは本当に凄いのだ。
「ダルフェよ。りこは最高の妻だな。今まで我の知らなかったものを与えてくれる。愛しい者と交わる快楽も、肉体を損傷する痛みも。ああ、我は幸せ者だ」
ダルフェは無言のまま血の付いたタオルを拾い、居間に向かった。
どうやら暖炉に火をいれ、タオルを燃やしたようだった。
足早に戻ってくると、壁にある排気装置を作動させた。
無駄の無い動作で天窓だけでなく、開けられる所は全て開け。
一気に下がった室温に、りこの身体が震えだした。
「りこが寒いだろうが。お前も仕置きだな、ダルフェ」
「は？　全く自分勝手ですねぇ、旦那は。……血ですよ、血液が原因です。換気したらすぐ閉めますから」

血。
我の鼻血か？
「む？」
そういえば。
我もりこの血の香りで……。
「首かしげても、ちっとも可愛くないっす。逆に怖いんでやめて下さいよ」
だが。
「りこは人間だ。血の芳香に酔うなど……ん？」
人間。
人間？
微妙だな。
我の竜珠を宿し、我の体液を体内に注がれて。
大量の気を与えられ……瞳の色が我と同じになったりこ。
まあ、我の思惑通りとはいかなかったが。

人間の枠から少々……かなりはみ出ているな。

「旦那は姫さんを＜自分に近い生き物＞に変えようとしたんでしょ？　……続行中ですかねぇ。ま、それについちゃ俺に意見する資格は無いんで流しますが」

ダルフェはいつの間にか寝てしまったりこを見て。

「旦那にしかこの小さな身体がどう変わってしまったか、変わっていくのか分からないんですから。もっと気をつけてやって下さいよ。これ、泥酔状態じゃないですか。こんなに泣かせて可哀相に……。健康管理は夫の仕事だって教えたでしょうが、ったく」

泥酔状態。

そういえば、体温が平常時より高いな。

「先ほど摂取した体液からの情報では我の血に対する反応までは読み取れなかったな。なるほど、全てを把握可能では無いということか」

ふむ、我は自分の能力を過信しすぎる傾向があるようだ。

今後はもっと注意しなければ。

「は？　体液って、旦那……」

「お前が言った健康管理の一環だ。急ぎで確認したいこともあったのでな」

確認したかった。

りこが、りこの身体が我を本当に忘れているのか。

手酷く扱われた記憶が身体に刻まれ。

我に恐怖を感じないか、拒絶しないか。

不安で、怖かった。

りこは。

りこの身体は。

我を憶えていた。
我が触れると、素直に反応し。
悦んでくれた。
我を欲しがってくれていた。
心も身体も。
我を拒絶しなかった。
恐れなかった。

「ったく。旦那は姫さんの事となると駄目駄目ですねぇ。今日の茶は中止にしましょう。晩飯まで奥で寝かせてやんなさいな。あぁ、さっきの術士達の処理はヒンデリンに任せました。あいつはハニーと違ってやり過ぎるなんてこたぁ無い。適任ですよ」

ダルフェは苦笑を浮かべた。

「竜騎士なんて聞こえはいいが、しょせんは監視対象者の集まりですからねぇ。その中でもヒンデリンは飛びぬけて理性が強い。手加減が出来るし与えられた仕事を毎回、きちんとこなします。ハニーはすぐにばらばらにしちまうんでこの手の仕事には向きません」

竜騎士。

穏やかな性質を持つはずの竜族だが、時には強い凶暴性を持つ個体が現れる。

そういった個体は力も強く、他者を傷つけることに全く抵抗が無い。

人間と共存している現代社会にそれらを野放しにすることは、人間の竜族への恐れと嫌悪を増徴させることになるので竜帝により管理・監視されている。

強すぎる力と凶暴性。

他種族との共存を選んだ竜族の進化過程において、かなり薄らいできたその性質を濃く持つ個体。

先祖がえりの現象だと見られているが……我はそう思わんのだが。

種の進化や退化に口出しするほど、我は竜族の未来に興味が無い

のでな。
　はっきり言って、どうでも良いのだ。
「旦那。夕食は運びますがね、今夜は姫さんと一緒できません。陛下不在で下の奴等がてんやわんやでね。俺とハニーも手伝いに回ります」
　力の強い個体は自分より強いものに服従する性質があるために、竜帝により竜騎士として管理されている。
　全ての大陸の竜騎士が我に服従するのは、本能的な恐怖心によるもので。
「分かった。あぁ、夕食にはカチの実も用意しろ。りこはカチが気に入りのようだった」
「はいはい、それとカカエの卵料理っすね」
　我がりこにカカエの卵を食べさせたいのは、その高い栄養価にある。
　温暖で過ごしやすかったセイフォンと違い、帝都は寒冷地なうえに高地なので人間には厳しい環境なのだ。
　しっかり食べて身体を強くし、毎日健康でいて欲しい。
　昨夜のように熱で苦しむ姿はもう見たくない。
　元気で、笑っていて欲しいのだ。
「……やはり、我はりこから一時も離れたくない。身体の変化が気に掛かるのだ。先ほどの間者はもうどうでも良い。通常の処置で聞きだせぬなら捨てろ。変わりは次々に沸いてくる」
「はぁ、いいっすけどねぇ。じゃあ……雇い主を吐かせてまだ生きてたら、新人訓練用に貰いますわ。間者としては殺されるほうがましだったでしょうねぇ」
　生餌を使った狩りの訓練は、餌側にとっては地獄だからな。
「今回は＜星持ち＞が混じってましたから。楽しめますねぇ、くくっつ……あいつらも喜びます」
　りこを気遣い、りこの喜ぶ菓子や料理を作るこの竜は。
　竜騎士などと比較にならぬ、特異な個体。

「りこの前で＜色持ち＞の顔は見せるな。＜赤い髪＞よ」

我は術式で寝台の上に移動し、りこを寝かせようとしたが。
りこは両腕を腹にしっかりとまわしていて。
無理に引き剥がすことなど、我には出来ない。
もったいないではないか。
「ふむ、こういうのを役得というのか？」
枕を背にし、りこを腹にくっつけたまま座り。
手を伸ばしてりこの靴を脱がしてやり、適当に放った。
「りこ……こうして髪に触れられて、我は嬉しい。ラパンでの練習は卒業なのだ」
今の我は。
髪を梳き。
頬に触れ。
柔らかな肌に手を這わす事ができる。
深く交わったことにより、我の身体がりこを憶えたためだろう。
我の匂いを染み込ませたことで、我の不安感も薄らいで。
「今夜は風呂に入った後に、りこのくれたぱじゃまを着よう」
む？
今、我は。
微笑むことが出来ていたような。
そんな気がするのだが。
りこが寝ていて確認してもらえないのが、少々残念だな。

ダルフェが夕食を持ってくる前に起きたりこは。
酔いは醒めているはずなのに。
衣服の隙間からかすかに見える首まで赤く染め、金の瞳を潤ませ

て。
視線を我からそらし。
我の身体に回した腕に力を込め。
消え入るような。
震える小さな声で言った。
「私っその、あの……ハクちゃんが、えっと、イヤじゃなかったらね？　さ、さっきの続きをっ、そのぉ……だ、駄目かな？」
続き？
さっきの続き？
泥酔の？
意味を判断しかねて首を傾げた我を。
りこの眼が不安げに見上げて。
「やっぱり、怒ってるの？　あきれちゃった？　……ふうぇっ」
見る見るうちにかさを増した涙に、我はあせってしまい。
「お、怒ってなどいないぞ？　素晴らしい頭突きであった！　りこは凄いな、さすがなのだ！」
りこは一瞬固まり。
「頭突き？　ぶっつ……！」
笑った。
りこが笑うと、我は嬉しい。
とても。
「……えっ？　うわっ！」
りこが我を見、笑いを止めた。
む？
なぜだ？
「ハクちゃん、今……今っ！」

我の頬に小さな手を伸ばし。
「わ、笑って……微笑んでたよ？」
柔らかな手のひらで。
「一瞬だけど。すごく、優しくて綺麗だった」
笑えたのか、我は。
「そうか。りこのおかげだな……りこ、笑えた我にご褒美の、ちゅう、をしてくれ」
「ふふっ、ハクちゃんが、ちゅう、って言うとなんか変なの～。……眼、つぶっててね」
りこの唇は温かく、柔らかで。
触れるだけの口付けも。
我の心を満たしてくれる。
あぁ。
我は今も、微笑んでいることだろう。
「私……ハクちゃんが大好き。好き……好き、好きなの」
りこは何度も、ちゅう、してくれた。
眼をつぶれと言われてたので、ばれぬようにそっと薄目を開けて。
我に、ちゅう、するりこに見惚れた。
染めた頬、硬く閉じた目蓋。
羞恥の為か、眼を閉じた可愛らしい妻に我の表情が見えるはずもなく。
確認してもらえなかったが。
きっと、微笑むことが出来ている。
我の笑顔も、涙も。
全てりこのものだ。
鼻血も、内臓も。
髪も鱗も。

我の全てを捧げよう。

「……ハクちゃん、ちょっと。これっつ！」

りこの‘ちゅう’にうっとりしていた我の髪をひっぱり。

「靴を履いたまま布団に入っちゃ駄目！　私のは脱がしてくれたのに、どうして自分はそのままなのよ？　もうっ！　ごめんなさいは？」

靴のまま寝台に入ったと、りこに怒られた。

「ご、ごめんなさい」

この我に、ごめんなさいをさせるとは。

うむ。

やはり、我のりこは凄いのだ。

第４９話

寝具は全く汚れていなかったので、ほっとした。
いかにも高そうだから焦っちゃいましたよ。
「りこ。気分は？」
ベットから降りたハクちゃんは床に膝をついて、寝具の汚れを確認していた私を見つめて言った。
「先ほど、りこは我の血に酔ったのだ。見たところ、もう大丈夫そうだが」
血。
酔う？
血に酔うなんて、変なの。
ま、眼の色が変わったんだし体質もちょっと異世界仕様（？）に変わったのかなぁ。
ハクちゃんも私の血の匂いでべろ～んってなってたし。
眼の色が移るんだから体質も……。
ん？
酔った私……うわぁっ、最悪！
泣き上戸が炸裂しちゃったんじゃ？！
「りこは酷く泣きながら、異界の言葉で喋っていた。なんと言っていたのだ……ん？　人間はああいった場合は記憶力が落ちるのだったな。では、りこも憶えていないのか？」
わ、私……ひぃいいい！
憶えてます、しっかりと。
酔ったときの記憶が無いっていうのは、必ずしもそうではなくてですね。
人それぞれだし、その時の体調とかも関係してててですねっ。
今回は感情が抑えられなくて、喚いちゃった自分をしっかり憶えてます！

うう〜、憶えてたくなかったよ。
「え、う、うん。えへへ……」
ハクちゃんは緩やかなウェーブを持つ真珠色の髪をかき上げながら、立ち上がり。
内心大恐慌の私に両腕を伸ばし。
「抱っこだ」
は？
「今日は休養予定だったのに、あまり休んでないだろう？　だから我が抱っこをし、りこに楽をさせるのだ」
休養……したと思いますが。
今も寝てたし、その……途中でも寝ちゃったみたいで。
結果的にはけっこう寝たんじゃないでしょうか。
抱っこされっぱなしじゃ……かえって疲れる気も。
「……抱っこしたい」
な、なるほど。
単に抱っこしたいだけなんですね？
ハクちゃんって、本当に不思議な人だ。
交わるとかって平気で言ったり、ちょっと強引に迫ってきたりするのに。
あんなに凄いキスするくせに、私の〝お子様ちゅう〟が気に入ってて。
抱っこされるのも、するのも好きで。
しかも、ほらね？
いまだににぎにぎしちゃってるし。
温室で身体に触ってきた時は遠慮ゼロで、恐ろしいほど手早く手際よく。
こういう事に慣れてる人なんだって思った。
途中で終了したことについては、全く気にして無いみたいだし。
これが大人の余裕というのかな？
ん？

大人は靴のままベットに上がらないか。
大人と子供がごっこ煮みたいなすご〜く、不思議な人だよね。
「りこ」
私から動くのを待っている貴方は、ちょっと不安げな瞳で。
「ち、誓うぞ！　我は、二度とりこを落とさない」
ずっと、気にしてたの？
あれは暴れた私が悪かったのに。
「……うん」
この歳で抱っこは恥ずかしい。
だけど、特別だもの。
ハクちゃんは、特別。
私はハクちゃんの首にしがみついた。
頬にあたる髪は柔らかくて、少しひんやりして。
光沢があって、つるつる艶々。
それにとってもいい香り。
私の大好きな、ハクちゃんの香り。
香水とかは使ってないハクちゃんだけど、いつもとってもいい香りがするの。
離れてると分からないけど、こうして身体を合わせていると。
私を包み込むように、優しく香る。
どこか懐かしい、花のような甘い香りで。
「りこ、りこ。明日は夕焼けを見に行こう。帝都の夕焼けは美しいと有名なのだ」
私を抱っこしたハクちゃんは、おでこにキスを落とし。
金の眼を細めて、言った。
「夕焼けも、朝陽も。海も空も。この世界の美しいもの全てをりこに」
また。
微笑む貴方。
ああ。

ハクちゃんの微笑みは。
白い雪を優しく溶かす、春間近のお日様みたいに。
柔らかく、穏やかで。
奇跡のようで。
この世界に。
きっと。
貴方のその微笑み以上に美しいものなんて、無い。
「世界も我も。りこのものだ」
心臓が止まりそう。
息が出来ない。
眼が離せない。
「我はりこのものだ」
世界なんて欲しくないの。
貴方しか、いらない。
「……明日、晴れるといいね」
欲しいのは、貴方だけ。

窓の外は、すっかり暗くなっていた。
けっこう寝ちゃってたんだね、私。
室内は天井から提げられたガラスで作られた植物をモチーフにした照明器具で照らされ、蛍光灯と違うオレンジがかった優しい明かりがなかなか素敵で。
セイフォンや支店は植物油や専門の術士が作っているという固形燃料（高価らしい）で大小さまざまなランプや照明器具をつけていた。
この居住空間にもランプはいくつか置いてあるけど、明かりの為じゃなくてインテリアとしての間接照明って感じ……。
ここは電気なのかな？

でも吊るされた照明器具には電球は見当たらない。
全体が淡く発光してて、すごく綺麗。
けっこう大きいのに作りは繊細で、優美。
花びらまで精巧に作りこんであって蔓と葉が絶妙に絡まりあっていた。
居間のソファーで本（備えけの本棚にあった植物図鑑。難解で説明は読めないけど、絵が綺麗なので選んだ）を読んで……見ていた私は温室に続くドアがノックされたので、立ち上がろうとしたら。
「りこ、立つな。入れ、ダルフェ」
向かいのソファーで皮の表紙の付いた分厚い本を、完璧な無表情で読んでいたハクちゃんは視線を動かさず言った。
その姿、口調……横柄で偉そうなのに、似合いすぎて違和感が無い。
「よっ！　復活したみたいだねぇ、晩飯持ってきたから」
爽やかに笑うダルフェさんの言葉……。
ま、まさか！
みっともない姿を彼にも見られたの？
「あ、あの！　そのっ」
焦る私に。
「酒弱いからって食前酒もいらないって言ってたもんな、姫さんは。正解だったな、うん」
ああ、最悪。
くっすん。

昼間と同じ大きなバスケットからいろいろ取り出し。　厨房の作業台に並べていく。
私はそれを手伝いながら、気になっていた事を質問した。
「ダルフェ、竜帝さんの怪我の具合は？　もう治った？」
ダルフェさんの答えに私は絶句した。

「うんにゃ。全治1週間だな、ありゃ～。でも、ハニーと医療班が付いてるから心配しなさんな」

それって、すごい怪我だったって事なんじゃ。

ダルフェさんはハクちゃんやカイユさんにボキボキ（？）されても、すぐに治ってた。

その彼より丈夫だっていう竜帝さんが、完全治癒まで1週間って……。

重症だ、重症！

ダルフェさんは気にするなと笑ったけれど。

私が呆然としている間に、ダルフェさんは持参した食材（下ごしらえは完璧に終わらせてあったらしい。炊いたお米も蓋付きの器に入ってた）を使い手際よく仕上げていった。

ちょっと赤みの強い卵のオムライス。

小鍋で温め直した野菜スープ。

カラフルなお豆と黄色の葉野菜で作ったサラダ。

数種類の果物の盛り合わせ。

小ぶりなケーキが2種類。

「姫さん、朝飯用のパンとかここにしまっとくから。果物、生野菜はここ。ハムと牛乳は保冷庫で……棚ん中に焼き菓子と茶葉があるからね？　調味料は容器に名前書いてあるけど、字がわかんなかったら旦那に確認してな。使い方は知らなくても字は読める人だから」

ダイニングテーブルに並べられた晩御飯は、もちろん1人分で。

銀のスプーンもフォークも1本ずつ。

「はい。ありがとう、ダルフェ……そうだ！　ハクちゃん、竜帝さんのお見舞いに行った方がいいんじゃない？」

長い足を組み、横柄な態度で椅子に座っていたハクちゃんは。

テーブルの上のオムライスのお皿を自分の側引き寄せ、スプーンを豪快にずぼっと刺した。

「りこ。あ～んだ、あ～ん」

むむ～、聞いちゃいないな大魔王様は。

「ハクちゃん！　まだ、いただきますしてないでしょ？　それにダルフェとお話してるから、ちょっと待って。……ハクちゃんだって、竜帝さんの事気になるでしょう？」
だいたいさ。
ハクちゃんがお仕置きしすぎたせいで、竜帝さんは入院（？）になって。
竜帝さんは大きな会社のトップだから業務に支障が出てしまい。
カイユさんとダルフェさんもサポートに回らなきゃならないくらいで。
ご飯も一緒に食べれないほど忙しくなちゃって。
明日からの勉強会も、延期。
竜帝さんが教師の手配からカリキュラムのことまで1人で仕切ってたから、彼が居ないと進められないそうで……。
ハクちゃんは冷たい美貌にぴったりの、冷た～い口調で言った。
「自分が居ないと円滑に回らない組織にしていた＜青＞の無能さについて、我は興味が無い」
ひえぇ～っ、冷凍庫を開けた時のような冷気があぁぁ。
はまりすぎです、ハクちゃん。
「ったく。旦那ぁ、んなおっかねぇ顔しなさんなって。大人気ねえんだから……んじゃ、姫さん。また明日！」
「え？　あ、ありがとうございました！　カイユによろしく」
もっといろいろ聞きたかったけど。
私と違い、彼はお仕事があるわけで。
引き止める事は、してはいけない。
晩御飯を持ってきてくれたダルフェさんは、忙しそうに去って行き。
厨房に隣接した食堂には私とハクちゃんが残った。
2メートルくらいの正方形のテーブルには椅子が四つ。
ちょっと、寂しいかも。
「りこ。早く、いただきます、をするのだ。冷めてしまうぞ？　我

はりこに温かい物を食べてもらいたいのだ」
ハクちゃんはオムライスに躊躇い傷（？）を作りながら言った。
テーブルは４人がけ。
なのにハクちゃんは私のすぐ隣に強引に椅子を移動していた。
「……うん。いただきま」
言い終わる前にスプーンが差し出され。
「りこ、あ～ん」
いつになったら、あ～んに飽きてくれるのか。
ちょっと不安になってきたよ。
こんなんじゃダルフェさんとカイユさん以外の前じゃ、ご飯を食べれないし。
外食なんて絶対出来ないよ！
まあ、一文無しの私ですから外食は当分はありえないか。
「りこ？」
口を開けないことに首をかしげるハクちゃんは、先ほどの冷気ビシバシ魔王様とのギャップがとても微笑ましくて。
私は‘ま、いいか’って思ってしまう。
「私、そのトマトソースと一緒に食べたいな」
「うむ。わかった」
真剣な顔で、卵の上に無理やりフォークでトマトソースを乗せようとするハクちゃんの姿は。
なぜか無意味に格好良くて。
美形は何してもさまになるんだなって、感心してしまった。

「これ、こないだ食べたね……カチの実？」
果物の盛り合わせの中に、見覚えのあるものを見つけた。
形は苺で色は紫の……。
「りこが気に入ったようだったので、ダルフェに言っておいた」
ハクちゃんは長い指でカチを摘まみ。

私の口に、ころりと入れた。
噛むと、果汁があふれ。
なじみのある味が広がった。
「美味いか？」
「うん……うん、とっても美味しい」
カチの実は。
巨峰の味に似ているの。
こっちに落とされた日は。
晩御飯の後に家族揃って、テレビでお笑いを見た。
3日前に買ったばかりの地デジ対応のでっかい薄型テレビ。
お父さんが2ヶ月かけて選んだ機種で。
週末にＤＶＤをレンタルしてくるって、妹が言ってたっけ。
お母さんがデザートですよって、立派な巨峰を出してきた。
いっぱい取り寄せたから明日、お姉ちゃんのマンションに持って行くって。
『りこちゃん、明日車を出してね』って言った。
お母さんは免許が無いから、私がいつも運転手で。
私はお気に入りの芸人さんを観ながら、適当に返事して。
コンビニで買った杏仁豆腐を食べてたから、巨峰は食べなかった。
食べとけば良かった。

巨峰。
いっぱい、食べとけば良かったな。

「りこ？……りこっ！」
ああ、今日は泣いてばっかりだ。
ごめんね、ハクちゃん。
ハクちゃんは笑ってくれたのに。

「ふぇぐっ……私、ご、ごめっ」
ハクちゃんは何も言わず、私を抱えて居間に行き。
ソファーに座って。
私を膝に乗せて。
広い胸に引き寄せて。
背中をゆっくりと撫でてくれた。
何も聞かず、そうしてくれた。
こういう所は。
やっぱりハクちゃんは大人で。
私は甘えてばかり。
２６なのに、大人の女性になれなくて。
貴方にこうして寄りかかってばかりで。
「りこ。我はりこが泣いてるのに、どうしたらその涙を止められるのか分からない」
ハクちゃんは背を撫でていた手を止め、言った。
深く響く、艶のある声は抑揚が無く平坦な口調だけど。
私の身体の奥の奥まで、染み入るようで。
「慰めたいのに、どうしたら良いか判断できず、気の利いた言葉の１つさえ出てこないのだ。背を撫でる事も、抱っこも……りこの行動を模倣したに過ぎない」
大きな手が私の頬を包み込み。
「りこが我にしてくれた時、心が落ち着き気持ちが良かった。だから真似ている。我は……腕の中で愛しい妻が、悲しげに泣いているというのに」
人のそれと違い、真っ赤な色をした舌で。
顎先から目元まで涙を舐め。
「涙を見て咽喉の渇きを感じ、こうして舌を這わしてしまうのだ。りこが悲しんでいるのに、その悲しみの感情を理解せず。涙の甘さに心奪われ、もっと欲しいと……獣のように浅ましく、逃げ出したいほど情け無い」

ハクちゃんは私の頬からそっと手を離し。
私を長い腕で囲い込むように、抱きしめた。
「泣かせたくないと思う心に、嘘はない。慰めたいと感じるのも…
…信じてくれ。我はりこの心を護れるように、りこの悲しみが分か
るようになりたいのだ」
ああ。
やっぱりハクちゃんは、すごいや。
家族を想い、悲しみに沈んだ私を。
引き上げ、捕らえ。
「ハクちゃん、ねえハクちゃん。貴方が望むなら涙なんていくらだ
ってあげる。血も肉も、飲まれたって食べられたっていいの。うん、
痛く無いようにしてくれるならね」
ハクちゃんの髪を掴み、顔を引き寄せ。
金の瞳を覗き込み。
「いっぱい話そう。お互いのこと、もっともっと知ろうよ。ね、私
が泣けるのはハクちゃんがいてくれるからなの。だから安心して、
甘えて泣いちゃうの。これからも泣いちゃうことたくさんあると思
う。そういう時は……こうしていてくれれば十分。言葉がなくても、
いいの」
側に居て。
抱きしめて。
「我は」
名前を呼んで。
「りこをもっと理解したい」
私は、笑える。
微笑むことも、大笑いだって。
もし、元の世界に帰ったら。
貴方と引き離されたら。
二度と笑えない気がする。
私が笑えるのは、ここ。

貴方が居てくれれば。
「ありがとう、ハクちゃん。……ふふっ、涙とまちゃったよ。もっと欲しい？　ほっぺ抓ったらでるかな？」
自分の頬に伸ばした手は、大きな手に遮られ。
「そのようなこと、するな。りこが痛いではないか」
「だって、後は玉ねぎとか……悲しいこと考えるとか？」
「痛みも、悲しさも却下だ」
む～ん。
どうしたらいいのよ、もうっ！
「我は本日、ぱじゃまが嬉しくて泣いたな……なるほど、うむ」
ハクちゃんの金の眼が私をじーっと見た。
な、なんですか？
「……今夜は駄目だな」
なに、なんなのよ。
「りこ。風呂だ、風呂に入ろう。我は早くぱじゃまが着たいのだ」
ぱじゃま。
そうでした。
朝からいろいろあったから忘れてた。
今夜はお揃いのパジャマ（私はズボンが無い恥ずかしい状態だけど）を着て、超ラブリーな竜のハクちゃんと……っく、デジカメ、携帯が欲しい！
この世界にカメラって無いのかな？
白黒でもこの際、我慢します！
「ううっ……写真集とか作りたいかも」
「りこ？」
私のこと、いっぱい知って欲しいけど。
竜の貴方のかわいさに、変態になってく私は内緒です。
よくよく考えると。
初めて会った時からそうだったかな？

第５０話

お風呂の前に晩御飯の片付けをしようと思い。
シンクにお皿を運び、壁のフックにかけてあったダルフェさん作の私用エプロンをして。
ダルフェさんは簡易だと言った厨房……台所は実家よりずっと広いし、使い勝手も良さそうだった。
白い陶器の流しは広く、深さも適度で。
流し付きの大理石製作業台に、コンロが横並びに３つ。
下部が収納になっていて、メープルシロップ色をした木製の扉を開けると調理器具が整然と並んでいた。
右端に置かれた半透明の箱の中には、例の固形燃料がたくさん入っていて。
「ねえ、ハクちゃん。これって高価なんでしょう？　こんなにあったら凄い金額になるんじゃない？」
無収入のせいか高いものに過敏になってしまう。
今の恵まれた生活が確実にずっと続くという保障は無いし。
世界の監視者だか管理者という正義の味方……とは言い難い、＜処分＞が仕事で世間から怖がられている旦那様は。
「さあ、我には全く分からん」
こういったことに全く興味が無く……経済観念ゼロらしい。
ま、仕方ないよね。
ご飯も食べないし、竜体でいれば服もいらない。
物欲もほとんど無いし、美形の癖におしゃれ心も無い。
鏡を見る習慣も無く。
あんなに綺麗な長～い髪なのに、自分で梳かしたことが無いって言ってたし。
カット等のお手入れを全くせず、きらきら艶々……美容院の敵だな。

服も私にあってから、生まれて初めて色を選ぶ気になったそうで。
しかも。
どうやら……（実年齢と同じく非常に聞きづらく確認してないけど）貢がれてたようだし。
セイフォンの離宮には、過去の女王様からの贈り物がいっぱいあった。
離宮は【竜宮】で、世界中に……各国にあるって。
世界中の王様達がハクちゃんの為にいろいろ用意してるってことだ。
権力者が貢ぐのは……ハクちゃんが怖い存在だから？
それとも……。
敬意、好意？

女王様。
好意。
それって……恋愛感情とか？

いや。
これ以上考えるの、嫌だよ。

知るのが、怖い。

「……りこ？」
「え……あ、ごめんね。ちょっとぼーっとしちゃった」
背後の壁に寄りかかって腕を組み、私のやることを観察していたハクちゃんは。
「りこは、物価について興味があるのだな。ふむ……今度、市街を見に行くか？」
素晴らしい提案をしてくれた。
「はい！　行きます、行きたいです！　……でも、いいの？」

セイフォンでは離宮から、一歩も出してくれなかった。
ハクちゃんは自分以外の男の人を嫌がるから、語学の先生選びも苦労したし。
帝都のお城に着いてからだって……竜帝さん以外の帝都の人には1人も会ってないどころか、見かけても無い。
完全にハクちゃん、ううん、私の周りから人が排除されてた。
廊下だって避けて、術式での移動しか……。
ハクちゃんに嫌な思いをさせてまで‘外’に出たいとは、思わない。
「良い。……今のように、りこに笑って欲しいからな。我は世界一りこ好みの男な上に、りこの自慢の夫なのだろう？　つまり、りこは我以外の男に興味が無いということだ。……雄が一定範囲以上接近したら蹴り飛ばし排除すれば良い」
さ、左様でございますか。
人ごみは無理だね、うん。
「お、穏便にお願いします」
でも、すんご～っく楽しみです。
やっぱりハクちゃんはなんだかんだいっても大人で、私に優しい。
うん、自慢の旦那様です！
「ありがとう、ハクちゃん」
さあ、早く洗い物してっと。
離宮や駕籠の流し台に比べて、ここは低いから踏み台はいらな……う、ぎりぎりだ。
愛用の踏み台は……。
踏み台が見当たらないな。
駕籠の中かな～？
明日、ハクちゃんに乗ってきた駕籠に連れて行ってもらおう。
「ま、なんとか届くし。よいせっと……うぎゃっ？！」
いきなりガシッと腰を掴まれ。
足が宙に浮いた。

「ハ、ハクちゃん！　びっくりしたよ、もうっ」
振り返るとすぐ側に作り物のような完璧な顔があり。
無表情なのに、私を見る眼の色はどことなく……嬉しそう。
ハクちゃんは目元も全く動かないけど、眼が……目玉というか眼球というか。
その部分に、感情が滲むのだ。
他の人には分からないかもしれないけど、私にはなんとなく伝わってくる。
自分でも不思議だけど。
還暦迎えた夫婦なら、長年の経験で分かっても不思議じゃないと思うけれど。
竜体で出会った時から眼を見て、彼の感情を大まかに察っする事ができてたし。
これは、つがいだからなのかな？
人間の夫婦とつがいって、もしかして根本的に何かが違うのかな……。
「高さは？」
あ、はいはい。
まずは洗い物ですね。
「もっと降ろしてくれる？　この台に私のおへそがくる位でお願いします……それと、密着やめて。なんか気になってお皿割っちゃいそう」
「そうか？　安定するかと」
「と、とにかく！　腕、かるく伸ばす感じでお願いします」
「わかった、これでいいか？　りこ」
「うん！　ありがとう、丁度いいよ」
ふと、窓ガラス見ると。
背の高いハクちゃんに大きな両手で腰を掴まれ、流しに突き出され。
足をぶら～んとしながら食器を洗う、おちびな私。

まったくの無表情で、私の手元を眺める魔王様。
甘さは皆無な光景で。
とても夫婦には見えない。
第三者から見れば捕獲された宇宙人が皿洗いしてるみたいだよ、きっと。
うん、決めた。
朝一で、踏み台を取りに連れて行ってもらおう。
朝食後もこんなことになったら、恥ずかしいを通り越して情け無いもの。
「うむ。我もりこの役に立てて、良い気分だな。今後は我がこうして‘お手伝い‘をしてやろう」
お手伝い……。
ううっ、食器運びとかは、見てるだけだったのに~！
なんでここで、お手伝い心が出ちゃうのぉ？
ああ。
眼の色が移るより、身長を分けて欲しかったかも。
「あ、ありがとう。ハクちゃん」
あと１０センチ……ううっ、５センチでいいんだけどな。

食器を洗い、すべて備え付けの食器棚に戻し。
お風呂に入る事にした。
私はこの世界に来てから、早寝早起きになった。
時計は字が違うけど、同じように目盛りが付いてるので私にも分かる。
だいたい８時前に寝て、５時半くらいに起きている。
離宮では７時過ぎるとカイユさんが来るから、語学の教材（絵本だけど）を見たりハクちゃんとおしゃべりしていた。
明日は……ハクちゃんがいいって言ったらお庭を散歩して、それから朝食にしようかな。

「さあ、お風呂入って寝ようっと！　あ、ハクちゃんは竜体に戻ってね」
ハクちゃんは支店を出てからお風呂に入ってなかったから、今夜はゆっくりお湯に浸かって身体を休めてもらわなきゃ。
で。
ここのお風呂は凄かったのだ。
他の部屋は広すぎず、豪華すぎない感じだったのに。
まあ、ベットはとんでもない大きさだったけどね。
脱衣所と思われる空間の広さにびびりつつ服を脱ぎ、浴室をおそるおそる覗いた私が見たのは。
「わ……あれ？」
真正面に見えた湯船は小ぶりなプールのような大きさで。
白濁したお湯が猫っぽい動物の顔をした注ぎ口から勢い良く溢れ。
しかし。
全体の面積の４分の３は湯船で。
身体を洗うスペースはそんなに広くない。
「これじゃあ、大人数は入れないね。せっかく湯船は広いのに」
「りこと我以外は使わんから問題ないのではないか？」
竜体のハクちゃんはとてとてと濡れた床を走り。
お湯を覗き込み、言った。
「帝都は火山帯にあるので湯は温泉なのだ。りこは温泉が好きだと前に言っていたな？　良かったな、りこ」
そのまま頭から一切音をたてずに、すべるようにお湯に入っていった。
で、消えた。
「ハクちゃん、保護色で分かんないよ。ねえ、ちょっと」
急いでかけ湯をして、私も湯船に入った。
ぼんやりとした照明しかなく、薄暗い浴室はちょっと怖くて。
窓は高い位置に４ヶ所。
壁や床はタイルが張られていた。

青を基調にいろいろな濃淡のタイルで飾られた浴室。
エキゾチックだけど暗くて、細かな模様や壁のモザイク画ははっきりと見えなかった。
お湯に浸かり、周囲を観察していると。
目の前の水面に、音もなくハクちゃんが浮かんできた。
そっか、潜って遊んでたのかな？
「あったまったら、身体洗おうね？　ハクちゃんはお風呂入るの、久しぶりだもんね」
「うむ！　りこに洗ってもらう」
尻尾が揺れて、お湯に波紋が広がった。

しっかり温まってから、ハクちゃんを洗ってあげた。
石鹸で手に泡をたっぷり作り、つるつるしたハクちゃんの身体を鱗の流れに沿ってマッサージするように洗ってあげると。
ふにゃ～っとして眼をつぶり、可愛いお口を微かに開けて。
隙間から真っ赤な舌が、ほんの少し覗いて。
いかにも気持ち良さげなその姿に、嬉しくなってしまう。
とにかく、ラブリーなのだ。
かわゆいの～、うんうん。
さすがに人型になると分かってからは、この作業中だけは私もバスタオルを巻いている。
だって。
座った私の太ももに寝かせて洗ってあげるのだ。
知らなかったとはいえ、真っ裸で直に乗せて洗っていた私……お、恐ろしい程大胆でございましたね！
「ハクちゃん、お湯かけるよ？　眼、しっかり閉じないと染みるよ？」
「う……うむ？」
まるで寝ぼけたように、手をゆっくりと動かし。

小さな手を自分の眼にのせて。
「湯、……いいぞ」
っぐ！
か、か、かわゆ～い。
帝都に移動中はハクちゃんはお風呂に入ってなかったので、今夜は特に念入りに洗ってあげた。
ハクちゃんは身体の構造が根本的に普通の生き物と違うらしいから、いつも清潔なんだけど。
汗もかかないらしい……汗腺が無いってこと？
だから人型の時、お肌が異常に綺麗なのかなぁ。
人間っぽく無い、作り物みたいな……触るとつるつるして。
「りこ」
泡を流し終わると。
太ももの上にちょこんと座った白い竜は、言った。
「我もりこを、このように洗えるようになれるだろうか……これはかなり、高度な技術なのだろう？　あまりに気持ち良く、我はぐにゃぐにゃになってしまう。涎もでそうだぞ？」
「き、気持ちだけでじゅうぶんだよ！　さ、しっかり温まってから出ようね」
じょ、冗談じゃないよ～そんなこと！
私を洗うって……竜の時は鋭い爪をすごく気にしてるから、人型でって意味だよね？
ひいぃっ！
考えちゃ駄目、りこ。
想像しちゃ駄目よー、私の脳！
「さ、お湯に入ろう！」
私はハクちゃんを鷲掴みにして、慌てて湯船に入った。
大浴場のようなお風呂に、小さな竜と私だけ。
広すぎて、落ち着かない。
肩まで白濁の湯に浸かった私の前を、眼元だけ湯から出して尻尾

を左右に揺らした竜が通過した。
ワニ……イグアナの泳ぎに似てるかも。
何度も往復している。
遊んでるのかな？　かわいいな。
「りこ、りこは泳がんのか？　りこは泳げるのだろう？」
すいーっと近寄って。
金の眼をくるんと回して言うハクちゃんに、私は頷いた。
「うん。でもハクちゃんが泳いでるのを見てるほうが楽しいもの。すごく上手に泳げるんだね～長い距離も泳げるの？」
「暇だから大陸間を泳いで渡った事も、何度かある。外海は珍しい海獣がいてな、飽きん。飲み込まれて排泄されるまでも、なかなかおもしろかった」
なっ……！
大陸間って……しかも海獣に排泄？
「ハクちゃん、食べられちゃったのー！？」
「飲み込まれただけだ」
世間ではそれを食べられたと言うんですよ。

これまた広い脱衣所……脱衣所と言っていいのかな。
洗面設備にドレッサーもあり、籐のソファーやテーブル……蔦を模したアイアン製フレームがおしゃれなシングルベットまである。
側に置かれたキャスターつきの小ぶりなチェストの中には色とりどりの液体が入った瓶。
ニッパーに爪ヤスリ、コットン、大小の刷毛……ああ、このベットはエステに使うのかな？
一通り確認してからパジャマに着て、髪をタオルで巻いて。
まだ＜1人水泳大会＞をしているハクちゃんに声をかけた。
竜のときは念話なので浴室に戻らなくてもちゃんと聞こえるから安心。

「ハクちゃん、寝室で待ってるからね！　タオル置いておくよ。ちゃんと拭いてきてね、パジャマ着せてあげるから」
ふと。
大きな鏡に写った自分の姿が眼に入り。
高校生時代から愛用のチェックのパジャマ。
しかも上だけ。
丈が長めで良かった……。
「しっかし、色気無いな～私って」
ハクちゃん、ごめんね。
色気も胸も無い私がお嫁さんで。
しかも人型の美形姿より、ちび竜のハクちゃんにメロメロなんて。
変な嫁だと世間は思うだろうね……ビジュアル的にも不釣合いだし。
世界中の王様達が頭を下げ、とんでもなく強く、桁外れに綺麗（怖い顔だけど）なハクちゃんの奥さんがちんちくりんの異界人なんて。
この世界の人達から大ブーイングどころかリコール対象レベル？
「……考えるの、やめよう」
寝室に行き、やたら大きなベットの上に座ってハクちゃん用のパジャマを眺めた。
裁縫が苦手な私の渾身の作品。
思ってた以上に、うまく出来たと思う。
縫い目がちょっと汚いのは、手作りならではの味があるってことで見逃してもらおう。
「喜んでくれて、嬉しいかった……貰ってくれてありがとう、ハクちゃん」
そういえば。
臨死体験がどうのって言ってた？。
う～ん……ま、いいか。

細かいことにこだわってたら、へんてこ奇天烈思考回路のハクちゃんについていけないのだ。
「ハクちゃん、珍しく遅いな。ここのお風呂、気に入ったんだね～、きっと」
いつもは一緒に出るか、ハクちゃんが先に出るのに。
今日はずいぶんとゆっくりで……。
「お風呂が温泉なんて、凄いけど。一般家庭もそうらしいから、帝都って湯量豊富な温泉地なんだね」
ハクちゃんは帝都について、お風呂で少し教えてくれた。
私に居る室内は、暖房が効いている。
これも温泉を利用したもので。
驚くべき事にこの居住空間は、全て床暖房だった。
床下に温水パイプが張り巡らされてるので、空気も汚れない。
石油ファンヒーターやエアコンだと咽喉が少し痛む私には、すごくありがたい。
帝都は温泉や地熱を生活にうまく使用していて、温泉保養施設も数箇所あるらしい。
治安が良いので、王侯貴族の保養地として人気も高く。
お金持ちの方々に人気のセレブ湯治場……フランスのアベンヌ地方みたいな感じかな？
セレブ相手は単価が高くて儲かるからって、今の竜帝さんが本格的に始めて。
地元にお金がざくざく落ちて大成功！
なんか、私が想像してた＜竜帝＞とかなり違うけど。
竜帝さんはずいぶんと優秀な、商売人だった。
帝ってつくのに、実際は社長。
あんまりファンタジーっぽくないぞ？
かすかに残念気分を感じた私の前に。
「りこ！　我はぱじゃまを着るぞっ」
転移してきたハクちゃんは、ベットにぽてんと正座をし。

いそいそと、パジャマを手に取り。
「我の第一目標は達成された。次はぱじゃまの脱ぎ着を1人で出来るようになろうと思う」
第一目標？
しかも達成済み？
ちょっと気になるな。
「ぱじゃまの脱ぎ着は、りこに教えを乞うとして」
ハクちゃんは帽子をちょこんと被り。
「うむ。これは出来るな」
金の眼が、くるりと回った。
首をかしげて私を見上げる、白い竜。
あまりのかわゆさに、悶絶してしまった。
ああ、こんなにかわゆい旦那様は世界中探したっていないよ。
美形はいるかもだけど（ハクちゃん好感度ゼロ美形だし）、かわゆさでは世界一と断言できます！
「りこと揃いだな、このぱじゃまは。これが世間で言う、らぶらぶ、ということか？」
あ、またダルフェ本情報かな？
「う、うん。まあ、そうかな？」
間違っては無いけれど、微妙……。

サイドチェストの上にある小さなランプをつけ、天井の照明器具を（ハクちゃんが指をくいってしたら消えた。念動力？）消してもらうと。
寝る前にハクちゃんとお喋りしようと考えてたのに、部屋が暗くなると睡魔はすぐにやってきた。
やっぱりいろいろあって、疲れてたのかな？
私の枕に顎をのせて、こちらを見ているハクちゃんは。

眼を細めてて。
微笑んでるんだねって、思った。
「ね、ハクちゃん。明日、夕焼け……見に……んっ」
ああ、駄目。
まぶた、重いよ。
一緒に寝られるの、久しぶりで。
やっと落ち着いて……安心して寝られそう。
「街、ありがと。うれし……おやすみな……さい、ハクちゃん」
パジャマを着たハクちゃんに手を伸ばし。
「おやすみ、我のりこ」
差し出された小さな手を握り。
朝までぐっすりと、寝た。

朝もやの残る外は、ひんやりとしていた。
息が、白い。
衣装室から借りた女性物の外套は、内側に柔らかな毛皮が付いていて温かかった。
朝焼けの残る空は、ほのかなピンク。
凛とした空気。
庭は秋色で。
セイフォンの緑溢れる庭園とは全く違った。
でも、秋のお庭もとても素敵だと思う。
足元は、黄色や赤の落ち葉。
見上げれば木々に残った葉が朝日に輝いて。
「晴れたね、ハクちゃん。夕焼けが楽しみだね」
「そうだな。さすがに我も、気象はいじれぬからな」
竜体のハクちゃんと、ベンチに並んで腰掛けて。
穏やかで、優しい時間を楽しんで。

そろそろ朝ご飯の支度をしに戻ろうかと……。
「出て来い、ヒンデリン」
ハクちゃんがふわりと飛び、言うと。
木々の間から、1人の女性が現れた。
ダルフェさんと同じ騎士服。
私が見上げるほどの長身……竜族の女性だ。
眼に焼きつくような、群青の長い髪は高い位置で結わえられ。
細い身体の背に流れていた。
甘さが一切無い、きつい顔立ちの人で。
「＜黒の竜帝＞がヴェルヴァイド様にお話があると。それと……では」
ん？
後半はハクちゃんと念話したのかな？
黒って単語、分かったよ……竜帝も。
黒の竜帝！
「お手隙のときに、電鏡の間までお越し下さい」
一礼して、踵を返して去った彼女……ヒンデリンさん？
黒の竜帝さんが、ハクちゃんにお話って、言ったよね？
「ハクちゃん……」
まさか。
青の竜帝さんに怪我させたから、怒られるとか？
「ふん、面倒だな。＜黒＞め……。りこ、朝食後に我は電鏡の間に行く。電鏡の間の側には通年花が咲く庭園があるので、そこで待っていてくれるか？　すぐに済ませる」
残念。
私は、会えないんだ。
黒の竜帝さんは、真っ黒のちび竜なのかな？
「うん、待ってる。いつか私も黒の竜帝さんに会えるかな？」
「いずれは全ての竜帝に会うことになるが……むっ！我のほうが奴等より、数段かわゆいぞ！」

こぶしを握り、いかに自分のほうがかわゆいか力説するハクちゃんは。

やっぱり世界一、かわゆいのだ。

第５１話

「うん、薬草園からは出ない。ここで待ってるね」
約束した私にハクちゃんは、長身をかがめ。
おでこにキスを落として。
「すぐ戻る」
地面に着くほど長い真っ黒な外套を翻し、消えた。

「う～ん。まんま悪の帝王様って感じ。吸血鬼っぽくもあるけど……」
朝食後。
電鏡の間って場所の近くにあるという庭園……薬草園に、ハクちゃんは術式で私を連れてきてくれた。
薬草園の敷地から出ては駄目だと、私に何度も念を押し。
何かあったら呼べって……ハクちゃんの気が私の中にあるから、かなり離れても名前を呼ばれれば分かるんだと言っていた。
竜体になれば念話が使えて、離れてても会話が出来るのにと指摘したら。
ハクちゃんは。
「竜体だと表情が作れん。……人型の我が微笑むと、りこの頬が染まって可愛らしいのだ。目元までほんのり赤くなって、とても良い。知っていたか？」
さ……さようでございますか。
か、か、かわいいですか？
「そんなの、しっ……知らないっ！」
あんな顔見たら、誰だってそうなっちゃうよ。
茹でタコみたいで、間抜けな顔をしていたに違いない。
ハクちゃんはちょっと審美眼がずれてるから、私のことを褒めて

くれるけど。
「早く、行っておいでよ。黒の竜帝さんが待ってるよ！」
照れ隠しで下を向いてしまった私の顔に。
ひんやりとした大きな手が添えられ。
ぐいっと上を向かされた。
「おかしいな？　笑んでいないのに、顔が赤いぞ」
大真面目に言うハクちゃんは、やっぱりデリカシーが少々足りないのだ。

ハクちゃんが側から居なくなり、本当はちょっと寂しい。
でも。
名前を呼べばすぐに来てくれるって分かってるから、不安感は無く。
「なんか、この1週間は激動の1週間だったな～。昨日もいろいろあったし」
支店でプロポーズ直後に奥さんにしてもらって、眼が金色になっちゃって。
ハクちゃんのかけらを美味しく食べちゃったり、旦那様の鼻血でべろんべろんに酔ったり。
ん？
なんか人間離れしてきたかも。
「ま、いいか！　人間じゃないハクちゃんと結婚したんだし。……黒の竜帝さんは、ハクちゃんになんの話があるんだろう？　青の竜帝さんの件で怒られる事は無いって、ハクちゃんは言ってたけど」
なぜなら。
ハクちゃん曰く。
黒の竜帝さんは青の竜帝さんとは、先代から犬猿の仲らしいのだ。
竜帝さん同士もいろいろ複雑な事情があるんだろうけど。

小さな竜が全員揃って仲良く遊ぶ姿を見るのは、無理ってことだね……残念。

「それと、電鏡って道具に興味あるんだよね～。今度、詳しく教えてもらおうっと」

黒の竜帝さんとのお話は、大陸間通話用の特殊な電鏡を使うのだという。

性能が高い分とても大きいので、専用の部屋に備え付けられてて。

その部屋が電鏡の間と呼ばれてて……つまり、遠距離通話会議室ってことかな？

「他の大陸も、いつかは行けるのかな？　でも飛行機ないから駕籠？　海を渡るのは大変そうだし、お客さんが少ししか乗れないから船……大型客船？」

この世界の交通機関について、そのうち調べてみよう。

ハクちゃんは泳いで大陸間を往復可能らしいけど、私には無理だし……。

ふと。

思い出したくないことを、思い出してしまった。

朝食後、お皿を洗う私を人型になったハクちゃんが‘お手伝い’してくださった。

ふりふりエプロンに、花柄のゴム手袋をした私を。

あの格好で、お手伝いして下さいました。

詰襟の黒一色の長衣に、一般人には絶対着こなせないゾローッと長く重厚な外套。

垂直に立った襟は金糸で縁取られ、生地は厚めで金属のような光沢を持ち。

黒ずくめなのに、地味さゼロ。

ある意味、ド派手だ。

このまま世界征服に出勤できますよって感じ。

悪の帝王様なハクちゃんに、がしっと掴まれての皿洗い。

食器が1人分だからすぐに終わって、良かった。

やっぱり、帰りに駕籠に寄ってもらおう！
「さて。竜帝さんの薬草園を見せてもらおうっと」
見慣れぬ花々が咲く庭園は。
お城の北棟の隅にあって。
ハクちゃんが言うには、ここの薬草園で植えられてるのは薬効成分のある植物ばかりで。
１年中野外で栽培できるように、品種改良している場所らしいのだ。
これも竜帝さんの発案で、彼の計画では将来的に莫大な利益になる予定。
お城の建物からはちょっと離れてるけれど。
この薬草園は基本的に、竜帝さん以外立ち入り禁止で誰もこない。
だから、ここを選んだようだった。
もちろん、私が花や植物を見るのが好きだってことを考慮してくれたんだけど。
私はハクちゃんに、そんな話をした事はなかった。
でも、ハクちゃんは気づいてくれていた。
すごく、嬉しかった。
おしゃれな街で過ごすより、公園や植物園が好きだった。
温かい缶コーヒーを飲みながら、ぼーっとしたり。
気に入ったものはデジカメで撮ったり。
今の私の手には、愛用のデジカメは無い。
だから、よく見るようになった。
私の不出来な脳を駆使し、記憶させようと努力するようになった。
携帯やデジカメを失って。
私はちょっと、変わった気がする。

電鏡の間に転移すると。
ダルフェが居た。
「おはようっす、旦那ぁ」
気だるげに右手を挙げた＜赤い髪＞は。
迷いの無い歩みで北側の壁から、漆黒の覆いを剥がし。
その布を無造作に、床へ捨てた。
南の壁には真紅、西には黄の覆いがされている。
それぞれの竜帝の気に合わせて調整された壁一面程もある大型の電鏡。
我がこれを前に使ったのはいつだったか……。
電鏡の性能を上げる特殊な岩盤を資材に用いた狭い部屋。
照明も窓も一切無く。
漆黒の闇。
それが電鏡の間。
このような陰気な場所に、我の宝を連れてくる気にはならない。
我やダルフェは暗闇も視えるが、りこにとっては恐怖心すら感じるであろうこの闇の間は。
我のりこには、似合わない。
「おーい、黒の爺さん。旦那が来ましたよぉ～」
ダルフェが電鏡をつま先で軽く蹴った。
鈴の転がるような音が、微かに響く。

「お久しゅうございます、ヴェルヴァイド」

背の曲がった老人が電鏡を背に、揺らめきながら現れ。
深い皺に覆われた顔は、前に見た時より小さくなっていた。
顔だけでなく。
全体が小さくなり、まるで人間の老人のようだった。
違うのは、その髪の色。
人間は老いると白髪になるが。

「また、萎んだな。＜黒＞よ」
＜黒の竜帝＞は髪だけは幼竜の時から変わらない。
艶のある漆黒の髪。
老いた現在は身長より、髪のほうが長かった。
簡易な作りの黒衣の合わせ目から覗く肌は土色で、袖から出た手首から下は枯れ木のようだ。
寿命に従い、これも土に還る。
そして新たな＜黒＞が、どこかの雌の腹に【発生】する。
「ふふっ……貴方は初めて会った時から変わりませんな。しかし、それを羨ましいとは思いませんよ、永遠などという地獄に堕ちる勇気は小心者の私には無い。……地獄へ道連れ予定の花嫁は、ここにお連れにならなかったようですな？　悪魔に捕らえられた哀れな姫君に、お会いしたかったのですが」
＜黒＞の言葉に反応したのはダルフェだった。
「言葉に気をつけろ、老いぼれがっ！　てめぇ、ぶっ殺すぞ！　姫さんは地獄に堕ちたりしない、幸せになるんだよ！」
「おや、居たのか？　＜赤い髪＞の坊ちゃん。今の私なら坊ちゃんでも殺せるだろうな。ふふっ、どうぞ、ご自由に」
おどけた様に言う＜黒＞に、ダルフェが猛獣のように唸った。
＜黒＞が居るのは別の大陸だ。
妊娠中のつがいに縛られた雄竜は、雌から遠く離れることは本能が拒む。
つまり＜黒＞殺すのは不可能だ。
＜黒＞は全て分かって、からかったにすぎない。
この＜黒＞は。
四つんばいで歩いていた頃から、捻くれていた。
どんなに捻くれた性格だろうと我には関係ないので、注意したことは無い。
諫めてくれと黒の一族に散々乞われたが、無視した。
放っておけばいずれ死んで、代替わりするのだ。

竜帝の性格が良かろうが、悪かろうが。
我は全く気にならん。
「＜黒＞よ。我はつがいを得て、非常に忙しい身なのだ。さっさと用件を言え」
りこを待たせているのだ。
あそこなら安全で、りこの暇つぶしにもなると思い。
我が思うに。
りこは植物観察が好きなのだ。
価格調査も好きらしいので、市街に価格調査でぇとに行くことにした。
我の提案を、とても喜んでくれていたな。
良くやった、我よ！
賢くなった証拠だな。
「貴方から‘忙しい’なんて言葉が聞けるとは。先代達への良い土産になりますな」
死に片足を突っ込んでいる老竜は。
皺だらけの顔をさらに皺くちゃにし、嬉しそうに笑った。
「お察しの通り、私は死期が間近です。次の＜黒の竜帝＞が最も若い竜帝になります。古き盟約に従い＜青の大陸＞から＜黒の大陸＞にお移り下さいませ……奥方様と共に」
「……それが本題では無かろう？　言え、ベルトジェンガ」
りこを連れ、大陸を移る場合の手筈を整えねばならんな。
安全で、負担の無い。
最良の手段を。
芝居がかった動作で頭を下げた＜黒＞は。
ゆっくりと顔を上げ。
「はい。一点は術士による‘珠狩り’の発生と被害の拡大。これにつきましては＜青＞より資料が渡っておりますな？」
我にとってはどうでも良いことだが。
竜族にとっては死活問題だからな。

「道中の支店で確認した。我はこの件には興味が無い、関わる気も無い。お前達でなんとかするんだな」
我の返答は＜黒＞には予想の範囲内だったのだろう。
＜青＞と違って異議を唱えたりしなかった。
＜青＞より長く生きているので、我の事をあれよりは理解している。
我は竜族の味方ではない。
人間の味方でもない。

りこのモノなのだ。

「ふふふっ……そう仰ると思っておりました。で、もう一点。ある意味、こちらのほうが私個人としは気になっているのですが」
ほう。
竜帝が‘個人’としてか。
珍しい事だな。
竜帝は帝位に付くと同時に‘個’で居られなくなるからな。

「貴方なら……異界の娘を、人間の雌を孕ませられますか？　＜古の白（ヴェルヴァイド）＞よ」
「……それが貴様の本題か。ベルトジェンガ」
先代の＜青＞は竜族の‘つがい’に極稀に人間がなることに着目し。
竜族の減少に、人間を利用できぬか考えた。
竜族の雌は進化の過程で、繁殖能力が劣化し。
卵子を決まった時期にしか作れない。
つがいに出会い、竜珠を交換することで卵巣が活発化し排卵する。
蜜月期中しか、妊娠できないのだ。
それに比べ。
人間の雌……女は非常に高い繁殖能力を持ち、毎月排卵し毎年子

が産める。
先代の＜青＞は。
人間の女の腹を使って、竜族を効率的に増やすことを思いついた。
混血となろうと、竜の血が絶えるよりはましだと。
その研究に先代は没頭した。
狂人のように。
人買いから人間の女を買い漁り。
徹底的に調べ、壊し。
人体実験を繰り返した。
竜族の民はそれを知らぬが、四竜帝達は知っていた……実験結果は逐一報告していたからな。
＜黒＞は先代の＜青＞の行動を批判し、糾弾した。
竜族がいずれ滅びる種ならば、竜族の誇りを持って潔く消えるべしと。
竜族の未来という大義名分の為に、人間を【材料】とした残忍極まりない行いは竜族の恥であり汚点だと。
他の竜帝は……＜赤＞は静観し、＜黄＞は幼すぎた。

「……爺さん、あんた何言って？　姫さんは……四竜帝達は、まさかっ！」

＜赤い髪＞は頭の回転が速いな。
もちろん、ダルフェも知らなかった。
今の＜青＞は先代から受け継いだ実験を人知れず放棄した。
まだ幼竜の頃に、研究棟ごと【材料】を燃やした。
泣きながら、生きてるモノも死んでいるモノも燃やした。
執務室に残した数冊の資料以外、全て。
我は、資料も燃やしたと思っていたが。
＜青＞がどういう意図で処分しなかったか、出来なかったのか。

ランズゲルグの葛藤など。
我にはどうでもいい事だ。

「無意味な問いだな」

ダルフェは＜黒＞と……我を見て。
凍りついたように、動きを止めた。
やはり。
連れてこなくて良かった。
我は今、笑みを浮かべているだろう。
りこの好きなそれとは、真逆な笑みを。

「我がりこを孕ませるはずなかろう？」

＜黒＞が皺だらけの顔で問うてきた。

「やはり、貴方様といえど不可能ですか？」

可能か不可能かなどという問いは、無意味なのだ。
なぜ分からない、＜黒＞よ？
簡単なことではないか。

「りこは我だけの、りこだ。……子になど、渡さない。　共有など許さない。りこの愛も血肉も、我だけのものだ。……万が一にでも、奇跡が起きて孕んだならば」

りこ、りこ。
我を嫌いにならないで。

「……我のりこに入り込んだ異物を引きずり出し、この手で引き裂

いてやろう」

我は。

りこだけで、いい。

貴女しか、いらない。

第52話

薬草園は私が通ってた小学校の校庭ほどの広さがあった。
色とりどりの花。
さまざまな形の葉。
奇妙な形の実。
『これ、ヤマモモそっくりなのに、サッカーボールの大きさなんて。よく木から落ちないよね』
私だけしか居ないから、日本語で喋った。
はやくこちらの公用語が喋れるようになりたくて、使わないようにしてたんだけど。
1人だから、いいかな～って。
薬草園の中央にある木に近寄り、下から見上げた。
私の腕では抱えられないような太い幹。
青い空に映える鮮やかな黄緑の葉が茂って。
無数の巨大な実が……落下した実に直撃されたら、死んじゃいそう。
私は慌てて木から離れた。
『ヤマモモか……』
父の実家の畑には大きなヤマモモの木があって、毎年6月になると赤くてまん丸の可愛らしい実がたくさん採れた。
生で食べたり、ジャムにしたり。
今年も祖父と収穫して、2人でジャムをいっぱい作った。
祖父も私が行方不明になり、きっと……すごく心配してる。
3年前に祖母が交通事故で亡くなって、そのショックからまだ抜け切れていない祖父。
『……ごめんね、お祖父ちゃん。私の花嫁姿、楽しみにしてくれてたのに。披露宴で詩吟するんだって、毎日練習してくれてたのに』
ごめんね。

ごめんなさい。
私、この世界で生きていきます。
ハクちゃんの側で。

いつの日か。
私の命が終わったら。
魂だけになったら。
もとの世界に帰れるのかな?

私、ちゃんと分かってるの。
竜のハクちゃんとは、寿命が違うって。
そのこともあって、ハクちゃんに歳を聞けないでいる。
私がお婆ちゃんになっても、きっと彼はあのままで。
綺麗だと、かわいいと言ってもらえるのは短い時間で。
彼の前で老いて、死ぬ。
寂しがりやで泣き虫な、あの人を残して。

魂だけになったって、側にいたいけど。
私が居なくなった後。
他の女性を愛する貴方を見たくない。
あの微笑を、私以外に向ける貴方の側にいたら。
私は自分勝手で嫌な女だから、相手の女性を憎んでしまう。
大好きな貴方を、憎んでしまいそうだから。

心の狭い、嫌な女だから。
貴方への未練いっぱいで、醜いお化けになっちゃうよ。
貴方に軽蔑され、嫌われる前に。
元の世界に、帰るね。

だって。

嫌われたくないんだもの。
貴方に。
嫌われたくない。

私より背の高い、タンポポに似た花や。
小指の先くらいしかない白い百合。
5センチ位のミニミニかぼちゃが鈴なりの木は、葉がプラスチックみたいで。
見るもの全部が、すご〜くおもしろい。
『でも、触ったり香りを嗅いだら駄目なんだいね。うう〜、我慢我慢』
薬草の中には、毒性のあるものもあるから絶対駄目だってハクちゃんに言われていた。
確かに……このりんごなんで紫に茶のマーブル模様で怪しすぎるよね。
しかも地面から螺旋状の青い茎が伸びて、その先に逆さまにくっついて。
『き、気持ち悪いかも』
綺麗な花、変な草、気持ち悪い実。
かなり、楽しい。

周りの木々は秋の風情なのに、ここだけは緑に溢れて。
綺麗だけど、不自然だった。
時期外れのものは、旬のものより美味しくなくても高い値段でスーパーに並ぶ。
私はそういった果物は、買わなかったけど。
薬草……必要な薬なら。
高くても買わなきゃならないから、売れると思うけど。

お金持ちしか買えないんじゃなく、一般人にも買えるように生産力を高めて欲しいな。

『ん、これも面白い！　葉っぱが分厚い手袋みたいで、花が私の頭サイズ級紫陽花だよ』

色はスタンダードな青で、綺麗だった。

今度は図鑑を持ってこよう、うん。

名前や効用を調べながら見学すれば、もっとおもしろ……え？

突然。

目の前の空間が歪んだ。

グニャって、曲がり。

ドスンッ。

重い音と同時に。

布の塊が……これって。

『……に、人間？』

今の、術式で移動してきたんだよね？

ミー・メイちゃんが離宮に来た時は、こんな歪みはなかったけれど。

「ううっ」

しゃがみ込んでいた人……中年の男性で、着ているものは元の色が分からないほど汚れていて。

黒っぽい赤茶染みだらけの衣類は所々が切れていて……酷い匂いがした。

体臭とか、そんなレベルではなく。

私が今まで嗅いだ事の無い。

逃げ出したくなるような本能的な怖さを感じる、嫌な匂いだった。

いきなり人が現れた驚きと、衝撃的な匂いに動けずにいた私を。
よろめきながら立ち上がった男の人の眼が捉え。
泥と血で汚れた顔……血、血なの？
私の5倍はありそうな、かなり太ったおじさんは。
私を見て、笑った。
ぞろりとした長い服の裾からは裸足の足が見え。
変色した血液？
つ、爪……無い？
なに、なんなの？
このおじさん、怪我してるの？
でも、笑ってる。
とっても嬉しそうに。
誰？
と、取り合えず。
このおじさんは怪我してるみたいだし。
「あ、あの！　怪我、してますよね？　私、お城に詳しくないのでお医者さまの居場所が分らないんです」
おじさんは笑うのをやめ、私に向かって一歩進んだ。
私は思わず後ろに下がった。
臭いし、なんか怖い。
私を見る眼が、怖い。
「えっと、私の夫を呼んで助けてもらいましょう！　彼なら医務室に転移してくれ……ひっ！」
どす黒く変色し、爛れ膨れあがった手が。
私の右腕を掴んだ。
「あぁ、俺はなんてついてるんだろうな。お嬢ちゃん、俺を助けてくれよ。あんた竜族だろ？　小さいから人間かと思ったが、眼が違うもんな」
おじさんは薄ら笑いを浮かべ、媚びるように言った。
「医務室に連れてこうと思ったんだね？　良い娘さんだ。普通の竜

族は大人しく、優しいもんな……奴等と違って」
掴まれた腕。
力が強くて、痛い。
「あの、腕を離して。ちょっと、痛いです！　夫を呼びま……」
あ。
駄目。
この人。
私に触った。
ハクちゃんが怒るかもしれない。
怪我してるのに、ぶっとばされ……それじゃ済まないかも。
「な、俺は怪物に追われてるんだよ。この怪我も奴等だ、仲間も殺された。ここにいちゃ殺されちまうんだ。だから逃げるのに、協力してくれ。な、いいだろ？」
怪物？
仲間の人、殺され……！
大変。
やっぱりハクちゃんを呼ぼう。
このお城に、人を襲うような怪物が入ってきたなんて！
他の人にも知らせて、避難とかしなきゃ。
警察とか警備の人とかに連絡……！
「夫を呼びますから、腕を離して！　私に触ってちゃ、駄目。夫に見られたら、貴方が大変なことに……きゃっ？！」

バンッって音。
なに？
顔……左側。
じんじん、ずきずき。
どくどくして、熱い。

私、叩かれたの？

「騒ぐな、雌蜥蜴！　雄を呼ばれちゃ困るんだよ！　雄竜はつがいの雌の事となると、とたんに凶暴化するからな」

叩かれたんだ。
左の頬。
嘘。
なんで？

「この大蜥蜴の巣から逃げるには、幼竜か雌を盾にするしかねえんだよ！」

蜥蜴……巣？
この人、何言ってるの？
わからないよ。

怖い。
頬、痛い。
掴まれた腕も、痛いよ。
怖いよ。
怖いよハ……駄目、呼んじゃ駄目！
おじさんが、危ない。
私の頬。
きっと腫れてる。
すごく熱を持ってるもの。

ハクちゃんは、すごく怒るはずだ。
自惚れじゃなく。
支店長さんにも言われたもの。
ハクちゃんは私の為なら、簡単に他人を傷つける。

竜帝さんの怪我だって、原因は私に関する事だ。

あの人に。

人殺しなんて、させたくない。

私のせいで、人が死ぬなんて。

「来いっ！　奴等が来るっ」

どうしたらいいか迷う私を、おじさんは荷物のように脇に抱えた。

「なっ！……きゃっ？」

抵抗するまもなく視界が歪み、回転し。

とても眼を開ける事は出来なくて。

ぎゅっと閉じた。

頭の中がぐにゃぐにゃになり、ぐるぐる回り。

酷い眩暈と貧血を起こしたような感じで。

「はあ、はあッ！　ちいっ……街へ出るには、後3回は転移しなきゃ駄目だな。畜生めっ！」

荒い息で。

おじさんが言った。

転移って、今のが？

ハクちゃんのと、全く違う。

こんな……うっ、気持ち悪いよ。

吐きそう。

「や、やめて。私……うっ」

口を抑えて、足をばたばたと動かした。

自分では、かなり暴れたつもりだったけど。

吐き気と眩暈と貧血で。

ふにゃふにゃした動きしか出来てなく。
おじさんを苛立たせただけだった。
「大人しくしてろっ、手足を折るぞ！」
私を見る血走った眼が。
おじさんは本気で言ってることを伝えてきて。
怖くて、動けなくなった。
このおじさんは、いったい何者なの？
悪い人？
でも、怪物から逃げてるって。
怪物から逃げるのに、なんで私を無理矢理連れてくの？
叩いたり、手足を折るなんて怖い事を言うの？
怪物から逃げたいなら、竜族の人達に助けてもらえばいいのに。
お城から離れるなんて、おかしいよ……どうして？
怒鳴るように喋るから、単語が聞き取りづらいし。
ハクちゃんを呼ぶべきなのかな？
「ったく、こんな仕事引き受けるんじゃなかったな。お宝の情報を集めに来ただけで、別に危害を加えにきたわけじゃねぇのによ。……まあ、それだけ特別扱いってことの証明か」
仕事？
このお城で？
「早く転移しないと奴等に追いつかれるな。急がんと、次こそ嬲り殺しにされちまうぜ」
私、どうしたらいいの？
頭の中がパニックで、考えがまとまらない。
お宝？
この人、もしかして泥棒？
逃がしちゃいけない犯罪者？
でも。
私を叩いたことは、ハクちゃんに知られたら絶対駄目。
とにかく私を放して、１人で逃げてもらわなきゃ。

ハクちゃんはすぐ戻るって言ってたから、時間が無い！

「見〜つけた」

「来るな、狂犬ども！　雌を殺すぞっ！」
声と同時におじさんは私を抱え直し、叫んだ。
目の前の木から、２人の……男の子が飛び降りて。
「見〜つけた！　僕の勝ちだよオフラン」
底抜けに明るい声が響き。
「これは同時だろう？　パスハリス」
対照的に落ち着いた口調。
金茶で癖の強い髪の中学生位の少年の言葉に、もう1人の薄い茶色の髪をした小さな男の子が言い返し……。
ダルフェさんと同じデザインの青い騎士服。
腰には剣。
まだ子供だから、見習いさんとかなのかな？
「来るな、化け物！　こっちにゃ雌がいるんだぞ！」
２人はまるで今、私の存在に気づいたかのように。
薄いブルーの眼と翡翠色の眼が、それぞれ私に視線を……。
「ねえ、オフラン。僕が想像してたのと、かなり違うんだけど？」
「そうだな。もっと凹凸のある妖艶な美女だとばかり……こんなミニマムな生き物だとは」
呆けたようにいい。
見る見るうちに、２人の顔が青くなった。
「けど、金の眼だよっオフラン！　そんで思わずちびりそうな、おっかない【匂い】と……心臓吐きそうな位やばいこの【気】は」

「「ヴェルヴァイド様の奥方様だ」」

あれ？
ハクちゃんと私のことを知って……？
「なっ？　まさか！　嬢ちゃん、あんた……ひいいぃっ！」
私を放り出したおじさんは。
何か叫びながら、転移して消えた。
「あ、待てっ！　追うぞオフラン！」
「そうだな。……ここに居たら、俺達も死ぬしな。奥方様、ヴェルヴァイド様を呼んで南棟にお帰り下さい。後日、お詫びに伺います」
そう言って。
２人は木々の間を駆けて行った。
残ったのは。
地面に投げ出された私１人。
「……う。た、立てない」
立ち上がろうとしたけれど、足に力が入らない……これが腰が抜けるって事？
気分も悪いし、まだ眩暈も残ってる。
自分一人じゃ、薬草園に歩いて帰るなんて無理。
あそこで待ってるって約束したのに……。
おじさんはどっかに行っちゃったから、ハクちゃんを呼んでもいいかな？
黒の竜帝さんとのお話の途中かもしれないけれど。
ごめんなさい、私。
もう、限界です。

泥棒（？）のおじさんに会って。
叩かれて。
転移されて、放り出されて。
どうしていいか分かんなくて。
体調最悪で。

怖かった。
凄く、怖かった。
今も身体が。
震えてる。

怖かったよぉ、ハクちゃん。
まだ、怖い。
怖いよ。
「ハクちゃん、……ハク！」
帰ってきて！
側に来て！
私の、側に。

「りこ」

包まれる。
甘い花の香りに。
大好きな、貴方の匂い。
優しい腕、硬くて広い胸。
ここにいれば。
もう、大丈夫。
怖いことは、もう何も無い。

「りこ、どうし……なっ？！　りこ、りこ！」

夕焼けを見に行くの。
貴方と2人で。

真っ白な貴方の髪が、夕焼けに染まったら。
きっと。
すごく綺麗だね。

「りこ！」

きっと、とても綺麗。

～おまけ～
りこ中日記（りこ中心・中毒のハクちゃんの日記です）

＜ｘ月ｘ日＞
りこが言った。
『ダルド殿下って、イケメンだよね～。王子様だし、もてるんだろうね』
念話なので会話は成立しているが。
単語が分からず、聞き返した。
念話は万能ではないのだ。

『イケメンとはどういう意味なのだ、りこ？』
夜着に着替え、寝台に腰掛けたりこは。
我を膝に乗せ、優しく撫でてくれながら。
『イケメンって？　いけてるメンズと面を合わせた言葉で、格好良い男の人のことなの。俗語っていうのかな？』
か、格好良い男？
それは、女に好感を持たせる男を表す言葉だな。
あの皇太子が、イケメン。
で。
我はかわゆい。

我が、不利ではないかー！！

『りこ！　りこは……あ、あいつのような男が好みなのか？』
まずい。
人型の我の容姿は皇太子に全く似ておらんぞ！
同じなのは目鼻の数だけだ。
つまり、我の顔は……りこに好かれる要素ゼロなのか？！
『ダルド殿下が好み？　イケメン君だと思うけど、恋愛対象には……う～ん』
恋愛。
りこと皇太子が、恋愛？

あの餓鬼、殺す！

『恋愛感情は持てないよ。良い人だと思うけど……許せないもの』
りこの顔から、笑みが消えた。
『りこ』
ああ、我のりこ。
愛しい女。

我の宝の心に闇を植えつけた者達よ、覚悟しておけ。
いつの日か、我は必ず報復する。
りこの膝に顔をこすり付けて誓う我に。
『慰めてくれるの？　ハクちゃんは、優しくてかわゆくて……とっても好き』
好き？
りこは我が好き？
かわゆいから？
『よし！　りこ、我は世界一かわゆくなるぞ！』
イケメンは無理だからな。
りこの好むかわゆさを追求しようではないか。
拳を上げ、宣誓した我を見て。
『ふふっ、そのポーズ！　メチャクチャかわゆ～い』
りこは、笑った。
笑ってくれた。
りこの笑顔。

我が世界一かわゆくなれば。
もっと好きになってくれるだろうか。
もっと笑ってくれるだろうか。

でも。
本当は。
世界一かわゆいのは、我のりこ。
我は2番目。

世界一かわゆいのは、貴女。

第５３話

「御子を望まれないと…。ならば奇跡など起こらぬほうが、良いですな。無用な奇跡は災厄となる。貴方にとっても、奥方にとっても」

＜黒＞は枯れ枝のような指を皺で弛んだ顎に添え、軽く頷き。

「ふふ……竜と人の間には、天地以上の種の違いがある。自然交配など、有り得ない。貴方が御子を疎むなら、まず安心ですな。……今後、人間との混血実験を貴方は許さないでしょうから」

今までの我は。

先代の＜青＞の実験に、意見も興味もなかったが。

「なぜ、そう思う？」

＜青＞の憂いた竜族の未来。

緩やかだった滅びへの道は、数代程前から加速し。

つがいの間に子が１人しか出来ぬという、最悪のところまできて。

ようやく足掻き始めたが。

「貴方には＜竜と人の間に子は出来ない＞という、揺ぎ無い事実が必要です」

その通りだ。

もし。

万に一つの可能性が存在し。

それを知ったりこが子を得たいと強く望んだなら。

りこが本気で、心から望んだら。

我は、負ける。

勝てるはずが無い。

りこは我の女神であり、支配者なのだから。

我は、負ける。

我の子に、りこを奪われる。

この世に存在し得ない、我とりこの子が。
我の、唯一の敵。
絶対に勝てない、最強の敵だ。

「私の願った誇り高き滅びを、貴方は与えて下さるでしょう。人間との混血？　冗談ではありませんよ！　あのような下賤で野蛮な種と血を混ぜるなど我慢なりませんっ……ふふっ、黄泉でセリアールの馬鹿が、地団駄踏んでますな。あぁ……全て異界の姫のおかげですなぁ、感謝しなければ」
＜黒＞の人間嫌いは相変わらずか。
黒の大陸の科学力を駆使すれば、セリアールの実験成果も違ったやもしれん。
だが、＜黒＞は一切の生体科学の提供を拒んだ。
その大陸の竜帝の許可がなくば、他の竜帝は書物一冊、葉の一枚さえも手に入れられぬ。
同族での争い……殺し合いを避けるために、竜帝には多くの枷が科せられている。
この件に関しては、それが幸いしたな。
セリアールよ、今は亡き＜青＞よ。
我を呪いたければ、呪え。
もっとも、お前に呪われたぐらいでは。
我はなんともないどころか、気づきもせんが。
我は、強い。
竜の叫びも、悲しみも……未来も、叩き壊せるほどに。
逃げ道など、残さず。
完膚なきまでに、消し去ろうか。

む？

このような思考は。
りこが怒るか？
りこは鱗のある生物が、お気に入りなのだ。
我のりこが、竜族を残したいと願うなら。
「……もし当代の＜青＞が実験再開を希望した場合。人間以外を使うのなら、我は一向にかまわんぞ？　ふむ……豚が良いのではないか？　実験に使った後、食えるしな。竜族は家畜の肉を好むから一石二鳥だな」
珍しく慈悲深い我の提案に。
「な、なんですと？！　誇り高き竜族にぶ、ぶ、ぶぶっつ！」
妙に甲高い声で言う＜黒＞に、我は親切にも訂正してやった。
赤子だったこれも、枯れ木になったのだ。
思考も劣化したのやもしれん。
天才と賞賛された捻くれた頭の内部も、もはやスカスカか？
「ぶぶっつでは無い。豚だ、ぶた。老いて脳も萎んだようだな＜黒＞よ」

「ぶ、ぶ、ぶ……ぶた」

＜黒＞は激しく震え。
真後ろに倒れ。
消えた。
「忙しい我を自分から呼び出しておいて、会話を勝手に止めるとは。＜黒＞め、大陸を移ったら仕置きだな」
りこの元に転移しようとした我を。
ダルフェが引き止めた。
「旦那。教えてください。竜族はいったい、何処に向かってるんですか？　あんたなら分かる……知ってるんじゃないんですか？！」
分かっている？
知っている？

そんなはずなかろう。

我は神ではない。

我は、ハク。

りこの、ハク。

「我に未来は読めぬ。我は創り出すことは出来ぬ、破壊するのみだ。お前も知っているだろうが」

ダルフェは真紅の髪を掻き毟り。

「……っち、全く。やっぱり、あんたは使えない人だよっ。……黒の爺さん、頭の血管がぶち切れちまったんじゃないっすか？　死んじまってりゃスッキリしますがね。竜族至上主義の爺さんに、あの豚発言はかなり威力があったでしょうよ」

床に放ってあった掛け布で黒専用電鏡を覆いながら、ダルフェは言った。

「姫さんとの子の件は、旦那らしいと思いますよ。あんたの姫さんに対する執着は、竜の雄と比べたってちょっと異常ですからねぇ。……時機を見て姫さんに、竜である旦那とは子供が持てない話をきちんとしたほうが良い。竜が人間とつがいになること事態がかなり稀な事だって話も、どうせしてないんでしょう？　普通の娘は、結婚したら家族を持つのを夢見るもんです。あんまり長引かせちゃ、姫さんが可哀相ですよ？　あの子はもう、２６だ。家庭を持って、３～４人の餓鬼のいる歳なんですからね」

竜と人。

子と家庭。

家族。

「……何故、互いだけでは駄目なのだ？　竜も人も……何故、愛する者が１人だけでは足りないのだ。数が増えれば愛が分散され、薄まってしまうのではないのか？　お前達……限りある命の生物の愛とは無尽蔵なのか、無限なのか。何故、愛する者が自分以外の者に

愛を与えるのを許せるのだ……それが真実の愛ならば、我の愛は？
りこに感じるこの愛は、何なのだ？」
子が欲しいとは思わない、思えない。
家族など、興味も無い。
りこしかいらない。
りこしか、愛せない。
我が感じているのこの強い想いは、愛では無いのか？
「……んな難しく考える必要あるんすか？　旦那は旦那でいいんじゃないっすかぁ。考えたって、結果は１つなんでしょう？」

そうだ。
１つだ。
これが愛であろうとなかろうと。
我には、りこだけ。
貴女だけ。

「え……うわっ旦那、良い顔できるようになったんですねぇ！　そんな風に、微笑むことが出来るようになるくらい、姫さんのことが好きなんだなぁ。かなり遅い青春満喫っつーか、微笑ましいっつーかなんというか。あんたのその妙に素直なとこ、俺は好きですよ」
「好き？　我は男と交尾する趣味は無いので、好くな。昨日は微笑むことが出来るようになった褒美に、りこにちゅうをしてもらったのだ。りこのちゅうは最高なのだぞ……りこ？」
りこの声。
少々。
薬草園から、ずれているな。
「りこが我を呼んでいる。ダルフェ、昼食にはカイユを連れて来い」
薬草園に飽いて、散歩でもしたのだろうか。
「俺だって男は無理っす。……ハニーを？」
「りこにはまだ、母親、がいる。脆い精神を安定させるのに、カイ

ユの母性が役に立つ……りこ？　りこっ！」
気配。
気が、揺らいでいる。
何かあったな！
「旦那？　ちょっ……！」
りこ、りこ！
我のりこ。

我の、宝物。

薬草園から北門へ向かった林の中。
りこは蹲っていた。
「りこ」
我は膝を付いてりこを引き寄せ、胸に抱いた。
りこの身体からは。
雄……人間の男の臭いがした。
触れた。
我のりこに。
男が。
穢れた血の付いた、薄汚い手で。
怒りに脊髄を焼かれながらも、耐えた。
りこが震えている。
顔を上げることすら出来ぬほど、憔悴していた。
制裁は後回しだ。

りこの身体に何がおこったのか。
我の腕の中で、意識が朦朧としているようで。
震えは止まったが、全身の力が抜けていた。
体調の変異を確認するため、唾液を採取しようと。
小さな顔に手を添えて、上向かせ。

「りこ、どうし……なっ?!　りこ、りこ！」

我の大切な、大切なりこ。
その左頬が。

赤く、腫れていた。

「りこ！」

血の気の引いた、白い顔。
なのに、頬は赤く。

「ば……ば、かな。わ、我の……り、りこに」

先ほど。
我との会話の途中で。
急に、顔を……頬を染めたりこは。
とても、愛らしく。
とても、綺麗で。
その。
柔らかな頬を。
打ったのか。
我の宝に。
手を上げたのか！

華奢で、可憐な我の花。
不用意に触れれば、簡単に折れてしまうのに……散ってしまうのに。

「……っ」

怒りを超える哀しみが。
我を飲み込む。

りこの小さな顔に。
我の涙が、降り注ぐ。
白い頬に。
赤く腫れた痛ましい頬に。

柔らかで甘い唇に。

止められぬ、溢れる涙が。

胸が。
痛い。

りこ。
怖い。

我は、怖い。
腫れた頬が。
我に、突きつける真実は。

りこの死。
その、可能性。

哀しみを超える恐怖が。

我を喰らい尽くす。
りこ。
われは、こわい。
こわい。

キリンレモン。
シュワーっとして、甘酸っぱいの。
夏になると、飲みたくなる炭酸飲料。
最近飲んだのは、いつ？
今、９月だったから……ん？
違う。
一番最近は、あれです。
涙。
ハクちゃんの、涙。
竜のハクちゃんの涙は、キリンレモンの味がした。
これは。
涙の、味。
「……ハクちゃん？」
眼を開けると。
鼻が付くほど近くに、ハクちゃんの顔があって。
ちょっと、びっくりした。

「な、泣かないの、私、だいじょうぶだから、ね、泣かないで」
私は慌てて、彼の頬に手を沿え。
袖で涙を吹いてあげた。
ハクちゃんが、泣いていた。
ぽろぽろを通り越し。
ぼろぼろと。
涙を止めてあげたくて。
「あっ……ほっぺ腫れてたから吃驚しちゃったの？　ごめんね、ごめんなさい。もう痛くないから、心配しないで。泣かないで、ハクちゃん」
目元や頬にハクちゃんの好きなちゅうをしても。
全く止まる気配がなくて。
何も喋ってくれなくて。
精巧な蝋人形のように、微動だにしない。
金の眼をこれ以上はないって位、見開いて。
いつもはちょっと縦長の黒い瞳孔が、真ん丸く。
あれ？
真ん丸になっただけじゃない。
「ハ……ハクちゃ、ハク？！」
見る見るうちに瞳孔が、大きくなって広がって。
ハクちゃんの金の眼が。
真っ黒に変わった。
「……きゃっ！」
黒い外套を、白い光が包み。
眩しくて、眼をつぶった。
私を抱いていた腕がなくなり。
「ハ……ク？」
そっと眼を開けた。
尻餅を付いてしまった私の目の前には、白い竜。
服は見当たらない。

きらきらした粉が風に舞って消えて……。
「ハクちゃん？」
地面にぽてんと座って。
私を見上げる小さな竜の眼は。

真珠。
中央に、細い金の線が１本。

「なっ！　……ハクちゃん、どうし」

ハクちゃんの口が。
限界まで開き。

真珠色の歯。
真っ赤な舌が見え。

「ーーーーーーーーーーーーー！！！」

声の無い、絶叫が。
青い空に向かって、放たれた。

大気が揺れ。
振動となって、木々を押し潰し。
青かった空を。
白い稲妻が縦横無尽に引き裂く。
ガラスが割れるような音が絶え間なく響き。

全てが凍りつき、割れ、壊れ。
消え去る。

ホワイトアウトのように真っ白な視界。
白く、激しく、残酷に。

なのに。
私の周りには。
暖かな、春の空気。
優しく甘い、花の香り。
貴方の、匂い。
胃液が逆流して苦かった口の中は。
爽やかで、ほんのり甘いキリンレモンの後味が。

貴方はいつも、いつだって。
私を護ってくれる、助けてくれる。

初めて会ったときから。
私の心を支えてくれて、護ってくれた。
異界から間違って連れてこられたんだから、都合が悪くなったら牢に入れられたり殺されたりするんじゃないかって。
ダルド殿下に身の安全を約束してもらっても、内心は疑心暗鬼で。
不安で、怖くて。
これから自分はどうなるんだろうって。
毎日、考えてた。
ハクちゃん以外は信用しちゃ駄目だって、びくびくしてた。
そんな私を、ハクちゃんは。
誰からも危害を加えられないように、いつだって側にいてくれて。
全てから……ハクちゃん自身からも護ってくれてた。
小さな爪が、私を傷つけないように。
強い力で、壊さないように。

すごく強いのに、脆くて繊細で。

優しくて、怖がりな貴方。

とっても怖がりな、愛しい貴方。
「ごめんね、怖かったね……」
多分。
このままだと。
ハクちゃんは、本物の魔王様みたいになってしまう。
とっても怖がりだから。
もう、怖いことが起こらないように。

壊してしまう、無くしてしまう。

なんで。
私はこんなに落ち着いてるんだろう？
大変な事が起こってるって、分かるのに。

ああ、そうか。
優先順位。
私の一番大切なもの。
貴方。
帝都が無くなっても、世界が壊れても。
貴方が側に居てくれるなら。

いらない。
何もいらない。
欲しいのは、貴方だけ。
私の方が、まるで悪魔。

この世界にとって。
恐ろしいのは貴方じゃなく、私なのかもしれない。

「ハクちゃん、ハク」

氷で作られた人形のような小さな身体に、手を伸ばし。

抱き寄せ。

「もう、怖くないよ？　こうしてれば、怖くない。２人でいれば、怖くない」

真珠色の瞳に、私が映ってる。

金の眼の、私。

貴方に愛された、私が。

「怖くない。私は貴方の側にいる……永遠に」

決めた。

魂だけになったって、醜いお化けになったって。

離れない。

貴方から、離れることなんて。

やっぱり、私には無理だよ。

「ずっと、２人でいよう」

小さな貴方を、私の腕の中に閉じ込めて。

「２人だけで」

貴方を。

誰にも渡さない。

貴方が。

私以外を愛するなんて、許せない。

魔王は私。

この世界を壊す悪魔は。

「ハクちゃんだけで、いいの」

それは、私。

『病める時も、健やかなる時も』
私は、誓う。
『死が2人を分かつ時がきても』
この身が土に還り。
魂だけに、なろうとも。
『貴方を離さない』

大きく開いた、白い竜の口に。
唇を寄せ。

赤く長い舌に。
貴方が、私にしてくれたように。
自分のそれを絡ませて。

愛しい貴方に。
誓いの接吻を。

第５４話

「……んっ」

鱗に覆われた小さな身体にも、キスを落として。

「ハクちゃん、ハク……ハクっ」

ああ、私。
この人が好き。
好きで好きで、堪らないの。

真珠色の、輝く鱗。
鋭い爪を持つ４本の指。
可愛らしい短い手足。
小さな翼。
全部、好き。
大好き。

貴方は私の宝物。

「私の、ハク」

想いを込めて。

「ハクを、愛してる」

貴方が私の‘世界’なの。

「我も、りこを愛してる」

え？

一瞬で、視界が反転し。
柔らかな、白い髪が。
私に流れ落ちてきて。
怜悧な美貌が、私を見下ろし。
蕩けるような金の眼が……。
ハ、ハクちゃん？
「ハ……っ」
「ここでしたいのか？」
ちょ、あれ？
なんで？
「ま、我はどこでもかまわんが。あぁ、頬は治ったか。……回復能力は安定していないようだな。治癒時間にばらつきがある」
左の頬に、優しくキスをして。
「まあ、良い。我が気の調整を……さて」
艶やかな微笑を浮かべて、言った。
「りこを地面に這わせるわけにはいかんな。肌が痛んだら大変だ……ふむ、我が下になれば良いか？」
治癒？
気？
よく分かんないかも。

思考停止状態の私の視界が、また変わり。
「これで良し。さあ、りこ。続きをしてくれ」
わけが分からず、説明を求め。
ハクちゃんの顔を、見下ろすと。
「りこ。続きだ、続き。さあ、遠慮は無用だぞ？　好きにするが良い、我はりこのものなのだから」
遠慮？
えーと。
この展開に私の脳が、ついていけてません。
まず、現状を把握してですね。
私はゆっくりと、周りを見回した。
「……うわっ！　な、なにこれ？」
私達を中心に。
まるで白い砂漠……異様な景色が広がっていた。
秋色の木々の姿は、ずいぶんと離れた距離に……３００ｍ位ありそう。
つまり。
半径３００ｍ程はこの状態って事？
あ、あれはお城の北棟部分だ。
わっ！
廊下見えてるし！
４階建ての建物の外壁がスパーンと斬られた様に、消失してる！
薬草園……きっと無い、絶対無くなってる～。
あそこも白い砂漠状態だぁあああ！
竜帝さん、ごめんなさーい！
「ハクちゃん！　ど、どうしよう？」
わ、私のせいだよ。
ハクちゃんの力を止めることより、私は貴方を選んでしまい。
「些細なことは、気にするな。２００年も放っておけば、元通りになる……多分な」

些細！
にっ、２００年ですかぁ？！
しかも……多分って言いましたね？
ああっ、お城の外壁工事費用ってどんだけかかるのよー！
「そんなことより。りこ、続きをしてくれ」
そんなことって……ああ、でも今回は私が悪いよね。
ハクちゃん１：私９で、私が悪いです。
世界が無くなってもいいなんて、思ってしまったんだもの。
世界とハクちゃんの二者択一を迫られたら。
私は迷わず彼を選ぶ。
改めて、自覚した。
私は、私って。
この世界にとって……。

「りこ」

ハクちゃんの大きな手が、私の顔に添えられて。
いつも通りの金の眼が。
きらきらと輝いて、私を見た。
うん。
元に戻ったんだね、良かった。
私の大好きな、私とお揃いの眼だ。
結婚指輪なんかより、強く２人を結んでくれる。
貴方がくれた、貴方の色。

「続き」

だ～か～らぁ、さっきから貴方は何を言ってるんですか！
今はハクちゃんの眼のこととか、白砂漠化とか、修繕費の問題がですね。

「ハクちゃん。続きって、なんの続きよ？」

「交尾」

こうび。

交尾？

「こ……交尾って、なっ？！」

支店から帝都への道中で。

ハクちゃんが側にいないから丁度良い機会ですわと、カイユさんが私に竜族の繁殖行動について説明してくれてたので＜交尾＞という言葉は知っていた。

竜族の夫婦は結婚すると、１週間から１ヶ月程交尾に専念して（ひえぇ～っ）子供を作る。

でも、人間の私にとっては非常に危険な事なので（絶対、死んでしまうよ！）それは不可。

この１ヶ月のハクちゃんの様子をみると、そのことはちゃんと理解しているようなので心配いらないって。

ーヴェルヴァイド様は二度と、トリィ様を傷つけるようなヘマは致しませんわ。あの方は人間の女性の扱いに、慣れているはずですから。……竜と人は確かに種が違います。戸惑うこともあるかと思いますが、今後の結婚生活を心配する必要はありません。ご安心下さいませ。もし不安や疑問があれば、いつでもカイユにご相談下さいね。

カイユさんがいてくれて、本当に良かったと思う。

だって、こういうデリケートな問題は誰にでも相談できることじゃないもの。

カイユさんは、頼りになるお姉さんというか……。

竜族って、やっぱり人間とかなりいろいろ違うんだと感じつつ。
ちょっと、ひっかかった部分もあった。
ハクちゃんは人間の女性の扱いに慣れてるはずって、カイユさんは言った。
人間の私が竜のハクちゃんに触れられるのを不安に感じないよう、言ってくれたんだと思う。
でも、つまり。
それって……やっぱり、そういうことだよね。

「りこ」
おっと、いけない！
少々、現実逃避を……。
「我は少々取り乱してしまったようで、記憶が曖昧なのだが……。愛しいりこの情熱的なおねだりに、意識が深淵から引きずり出されたぞ？」
少々取り乱した……少々なんだ、あれで。
それに、おねだりって……なによ、それー！
ま、まさか。
さっきのは、そのっ！
「ハクちゃんっ、あれは、その！　ちがっ……んんっ？！」
噛み付くように、キスされて。
逃げられないように、しっかりと捕まえられ。
いつもと違って、乱暴な。
貪るような、激しいそれに。
縋り付くような、必死な感じが伝わってきて。
胸が、締め付けられる。
ハクちゃん。
ハクちゃん、ハク…私のハク！

「んっ……はぁっ、ん……んっ」
息をする余裕すら与えられず。
苦しくて思わず離した唇はすぐに捕まり、囚われる。
こんなキス、ずるいよ。
切なくて、苦しくて。
やめてなんて、言えないよ。
今の貴方を、突き放すなんて出来な……。

「この鬼サドじじいー！！　てめえっ俺の城、壊す気かぁあああー！」

え。

「んっ……うきゃあっ！　ハクちゃん、ストップ！　は、放してー！　人が来た、人がー！」
こちらに向かって、怒鳴りながら駆けてきたのは。
青い髪の美女。
腰まで届くまっすぐな長い髪、同じ色の瞳は長い睫毛に縁取られ。
優美な眉、官能的な唇。
まるで牡丹の花のような、艶やかさと気品のある美貌。
２０歳前後かな？
すらりとした肢体はアイボリーのガウン一枚。
大またで動くから、合わせ目から色っぽい足が見え……。
足……あれって、包帯だ。
ガウンから出ている肌は、包帯だらけで。
きっと身体中、包帯を……怪我？
「おちび！　しっかりしろ、流されるんじゃねえ！　ったく、じじいの気が異常に溢れたから、慌てて溶液から出ててみれば……なんなんだよ、この真っ白砂漠はっ！」
この声、竜帝さん？！

嘘！
私のことおちびって言ってるから、やっぱり竜帝さんなの？
この美女がー！
竜帝さんって、女の子だったの？
でも、声は男の子……あれ？
「え、あ、あのっ！　竜帝さんっ！？　これは、そのっ、薬草園とか、消えちゃってるかもでっ！　私が悪いのっ、ごめんなさ……」
私達の側……2メートル位で美女はとまり。
荒い息で言った。
「はぁっ……つ、謝るな。詳細は確認済みだ。……くっ、痛ってぇな……侵入者で遊んでた、餓鬼共が悪い。あいつ等は俺様の部下だ、つまり今回の事は俺のミスだからな。じじいの力が漏れてこれだけの被害で済んだのは、おちびのおかげだ。礼を言う」
私？
私……。
ハクちゃんにのっかってますね。
いつにもまして、真っ白な……ひいぃっつ？！
ハクちゃんの服、無い！
はだ、はだ、裸じゃありませんかい！
真っ裸のハクちゃんの、お腹に乗って。
広くて硬い胸に手を着いてて。
こんな風に直に触った事なんて、無くてですねっ、あの、その！
「消えろ＜青＞。見ての通り、我とりこは忙しい。見物人が居ては奥ゆかしいりこは恥ずかしがって、続けられんのだ。……まさか貴様、りこの艶姿を見る気なのか！？」
私をひょいっと脇に下ろし。
つかつかと美女に歩み寄り。
そのままガツンと、乱暴に押し倒した。
「ハクちゃんっ！」
女性に、なんてことを！

しかも大怪我してるのに……ハクちゃんがしたんだよ、その怪我！
美女の真っ青な髪が、さらりと宙を舞い。
真っ白な砂の上に、海のように広がった。
「な、なにしやがる……言われてた通り、2ミテ以上近寄らなかっただろうがっ！　じじいっ、どきやがれ！」
ハクちゃんに、のしかかられて。
指先まで包帯を巻いた腕が、懸命にハクちゃんを押し返そうとしたけど。
体格差のせいか、びくともしなくて。
ハクちゃんの長い髪が、竜帝さんの身体を包み。
海のような青い髪と絡まり、混じり。
ハクちゃんの真珠色がより鮮やかに、輝く。
白い世界の中で、幻想的な美しさ。
睨み合う……見詰め合う美男美女。
なんか映画のワンシーンみたい。
はっきり言って、似合ってる。
違和感無いです。
体格的にも、丁度いいし。
ビジュアル的にも、完璧ですし。
なんか、こう。

私がお邪魔虫？

「ランズゲルグよ。……二度とそのような破廉恥極まりない考えが出来ぬように、女を抱けぬ身体にしてやろうではないか」
ハクちゃんの髪がやたら長くてよかったな～、後姿もなんとか髪の毛でカバー出来て。
な～んて、のんきに思ってる私の脳味噌は。
立て続けに起こる事態を処理しきれず。
美しすぎる2人を、ぼーっと見ることしか出来なくて。

「ひぃいいいいー！　やめ、やめろ、じじい！　んなとこ触んな、この鬼畜野郎！」
ハクちゃんの手がガウンの中に。
きゃあ～っ、そんな際どい場所に手を入れっ！？
「うわっ、やめ……っ！　おちびぃ、ヴェルを止めろおぉぉ！　ぎゃあああ？！　イヤだー！　じじい、やめろー！」
「喚くな。舌を噛み切るぞ」
ハクちゃんが、叫ぶ美女の顔に唇を寄せ。
「やめ、じじ……んんっー！」

え？
うそ。

キス。

キスした。

なんで。
なんで？
私が居るのに、ここに居るのに。

私が見てるの、知ってるくせに。
なんで、その人にキスするの？

「……な……んでよ」

さっきの乱暴だけど切ないキスは、なんなの？
愛してるって。
ハクちゃんは私のものだって、言ったくせに。
そう囁いた唇で。

「ば……かぁ」

他の人に、キスしてる。
他の人にも、キスするんだね。

「……ハクちゃんの、馬鹿！」

何が、続きよ、交尾よ！
誰とでもキスするんでしょ……誰とでも交尾できるんでしょう！？
過去の事は、当たり前だと思った。
ハクちゃんは大人だし、長生きしてるし。
恋人が過去にたくさんいたって、不思議じゃない。
悪役魔王様みたいだけどとんでもなく美形だし。
ちょっと変な人だけど、絶対に女性にもてたはずだ。
でも、今は。
今は、貴方がキスするのは私だけだと。
私だけだと、思ってたのに！
「交尾の続きは、竜帝さんにさせてもらえばいいのよ！」
ばっちり、見えたんだからね！
ハクちゃんは、竜帝さんに。

べ、ベロちゅうしてた！

信じられない、どういう神経してんのよ。
私、奥さんなんだよ？
貴方の妻なんだよ？
貴方が私をつがいに選んでくれて、結婚してくれってプロポーズしてくれたんじゃないの！
いつだって、りこりこ、我のりこって……。
その私の目の前で。

美女を押し倒して、ディープキスって。
これは、デリカシー無いとかのレベルじゃないよ？
「りこ？　何を言っているのだ。我が＜青＞などと、交尾するはずなかろう？」
竜帝さんを押し倒したまま、顔を私に向けて首をかしげる貴方。
私の大好きな可愛い動作も、今はちっとも可愛いと思えない。
「……取りあえず、竜帝さんからどいてあげて。嫌がってるし、怪我してるんだから」
見たくなくて、2人から眼をそらして言った。
「お、おちび！　これはその、このじじいはっ、感性がだなっ！」
ハクちゃんの下で美女が……竜帝さんが何か言ってるけれど、私は頭ががんがんとして聞きとれなかった。
「りこ、どうしたのだ？　うむ、分かった！　＜青＞がりこの邪魔をしたから、怒ってるのだな？」
「違うよ！　私……ハクちゃんの馬鹿！」
「＜青＞のせいではないのか？　りこ、りこよ。では、何を怒っているのだ？　うむ、我が悪かったのか？　我が、悪いのだな。理由は全く分からんのだが、我が悪いに決まっておる！　りこ、許してくれ。な、涙が出そうだぞ？　泣くな、泣かないでくれ」
なんで分かんないなんて、言うのよ。
ハクちゃんは瞬き1つに間に竜体になり、竜帝さんから降り。
私のスカートの裾を、小さな手で握り締め。
私を見上げて。
「我は怒られるような事を、りこを悲しませるような事をしたのだな？　いったい……」
その眼は金。
私達を結ぶ色。
「理由？　そんなの……ハクちゃんが竜帝さんに、キスしたからに決まってるじゃない！」

ハクちゃんの眼を見て言った私に。
彼は。
きょとんとして。
「接吻（キス）？　噛み付いただけだぞ？」
と、答えた。

「なっ」
言葉を失う私に。
「手がふさがっていたから、口で黙らせただけだ。我が＜青＞などに、接吻するはずなかろう？」
してたじゃないの！
「我が、我から接吻したのは今までりこだけだ。もちろん、これからもな」
え？
あれ、えっと？
混乱する私に、よっこらせっとあぐらをかいた青い髪の美女が。
「おちび。じじいは、こういうとこ、昔からちょっと変なんだよ。俺らとは、感性が違うっつーか、ずれてるというか」
竜帝さん……。
「このじじいは、どっかいかれてんだよ。……おちびみたいなまともなお嬢ちゃんには、理解しがたいだろうが。さっきのはヴェルにとっちゃ、蹴りや殴るのと変わんないんだ。おちびが見てるからこそ、怪我した俺様をぼこったらまずいと思って手法を変えただけだ」
「だって、おかしいよ。さっきのは、キスでしょ？」
しかも、身体に触ってた。
「じじいにとっちゃ、本当に噛み付いた程度のことだ。キスなんて、これっぽちも思っちゃいねえって。節操なしのじじいだが、男とは絶対やんないしな」

男。

男ー！

「竜帝さんっ！　おと、おと、男の人なの？　だって、顔が、顔が！　だって、背が……身長が！」

そりゃ、声が女性にしてはちょっと低いけど。

ハクちゃんとお似合いの、絶世の美女！

並ぶと理想の一対というか。

しかも。

背が、低いし。

竜族の成竜男性は、２メートル超えで。

皆、ハクちゃん位でっかいんだよね？

竜帝さんは、カイユさんより少し低いような……。

あ、でも。

セイフォンの離宮で。

竜帝さんが成竜の雄だから、ハクちゃんと揉めたんだった。

れっきとした大人の男性なんだ、見た目は美女だけど。

「ぎゃあああー！　背の事は、言うなぁ！」

耳を塞ぎ叫ぶ竜帝さんに、ハクちゃんは冷めた視線を送り。

「＜青＞は竜族の雄では稀なちびなのだ。幼い頃に菓子しか食わんかったからだな、きっと」

ちび。

「こやつは、雌の平均身長以下なのだ」

女性以下ってこと？

竜帝さん、ちょっと可哀相かも。

長身の竜族の中で、普通より背が低いなんて……親近感が。

「ばらすなーっ、じじい！　てめえと違って俺様はまだ若いんだ！　飯を沢山食えば、まだ伸びる可能性があんだよ！」

「あるわけなかろう。成長期は終わったのだから」

ハクちゃん、容赦無いですね。

「俺様は奇跡にかけるんだぁ～！　じじいに異界からつがいが現れるなんて奇跡が起こったんだから、俺様の身長にも奇跡の可能性がある！」

竜帝さんは包帯の巻かれた指で、びしっと私を指して言った。

「我のりこを指差すな」

ハクちゃんはふわりと飛び。

竜帝さんの指を、小さな爪で軽く弾いた。

「ぐわーっつ！　また骨折れたじゃねえか、くそじじい！　やっと骨が、くっついたのに……この鬼サドがぁ！」

奇跡。

貴方と会えた、奇跡。

「ハクちゃん！　意地悪しちゃ、駄目。あ！　こら、蹴っちゃダメー！」

貴方が、私の奇跡。

第５５話

ハクちゃんは私を温室に連れ帰ってくれた。
竜帝さんも一緒に。
竜帝さんは温室中央の池の淵に腰掛け、ガウンのポケットから鏡のような物を取り出して指先でトントンと数回叩き。
「カイユ、カイユ！　あぁ、避難命令解除だ。それと、南棟に来るとき俺様の服を持ってきてくれ。鎮痛剤はいらねえ、あれは動きが鈍るからな。で、ダルフェは？　餓鬼共んとこか？　……分かった、じじいには俺が伝えとく」
あ、もしかして。
あれが電鏡なのかな？
カイユさんと喋って……。
竜帝さん、綺麗だな～。
青くてさらさらの髪に青い眼の、美人さん。
さすがに胸は無いようだけど、ハクちゃんやダルフェさんよりずっと華奢だし女顔で。
ああして腰掛けてると、まさに女神様というか……。
「りこ」
竜帝さんに見蕩れていた私の裾を、ハクちゃんが軽く引っ張った。
「我は＜青＞がりこに2ミテ以上近寄ればあれの眼を抉ると、前もって忠告してある。が、りこからも、あれには必要以上に寄らないでくれ。でないと我は……今の我は、反射的に＜青＞の首を落とす可能性がある。りこの前でそのようなことは、したくないのだ。我はりこに……怖がられたくない、嫌われたくない」
なっ……首を落とす？
「ハクちゃん、なんでそんなっ」
ハクちゃんは小さな両手で裾を握り締め、言った。
「今の我は……常より押さえがきかんのだ。りこ、悪いが1人で風

呂に入ってきてくれるか？」
「え？　お風呂って……あ！」
そうだ、他の人の匂い。
服も、おじさんに掴まれた場所が汚れてるし……。
「他の男の匂いが、我の理性を引き裂き弱くする！　出来ることならこの手で、りこを隅々まで徹底的に洗い清め……我の匂いを、深く濃く染み込ませたい！　ああ、その身体の奥の奥まで、我を……！」
私を見上げる金の眼は、きらきらを通り越してぎらぎらしてきて。
スカートを掴んでる手が、ぶるぶる震え……。
ちょ、ちょっとハクちゃん？
なんか様子がっ。
しかも何気に、凄いこと言ってるんじゃないの？
人型で言われてたら、流石に引くような過激な内容じゃありませんでした？
「おい、おちび。じじいの理性がきいてる間に、風呂に入って来い！　とっとと余計な匂いを処理しねえと、ヴェルにとんでもない目に合わされんぜ？」
ハクちゃんの異変に気づいた竜帝さんが、私を追い払うかのようにしっしと手を振った。
ひえっ～！
「わ、わかったです！　今すぐ、入ってきます！」
私はハクちゃんの手からスカートを引き抜き、お風呂場へ走った。
そうでした、うっかりしてました！
バイロイトさんの時だって……。
脱衣所に飛び込み、大急ぎで服を脱ぎながら。
ふと、気づいた。
「そういえば……頬、痛くない」
あんなにじんじんしてたのに。
ん？

ハクちゃんが治ったなとか、回復能力がうんぬん言ってたよね？
「鏡、鏡っと……え？」
脱衣所の姿見を覗き込んで確認した頬は。
「治ってる」
叩かれた痕は無く。
いつもと同じで。
これ、どういうこと？
支店でハクちゃんとした時、怪我をしたはずなのに……私、なんとも無くて。
治療技術が進歩した世界なのかな～と、暢気に考えてた。
帝都に着いて雨に打たれた後、高熱が出たって言われた時も。
起きたら咽喉がちょっと痛いだけだったし、ハクちゃんは私に過保護だからオーバーに言ってるんだろうって思ってた。
でも。
頬の件は、おかしいよね？
竜の貴方とお揃いの、金の眼になって。
貴方の鼻血で、酔っ払った私。
気・甘いかけら・回復能力。
「ハクちゃん……貴方は私の身体に、何をしたの？」

「じじい……」
おちびが浴室に消えると。
じじいはその場に蹲り。
おちびを無意識に追うかのように伸ばされた右手を、左手で床に押さえつけていた。
鋭い爪を常より数倍伸ばし、右手の甲に４本全て貫通させ。

床に左手を縫い付けていた。
「＜青＞、我を踏めっ。早くしろっ！　……けっして我に、りこを追わせるな！」
「分かった」
俺様は身体の内部損傷がいまだ完治には程遠く、動くたびに激痛が走る状態だったが。
正直に言えばこのまま座っていたかったが、なんとか腰を上げ。
じいいの小さな身体を踏みつけ、押さえた。
おちびの周りから雄を排除したがるじじいが、俺様をここへ連れてきたのは。
じじいが俺を同行させたのは、この為だと分かっていた。
おちびを他の雄に……人間の男に触れられた、ヴェルは。
人間のおちびにとって、とんでもなく危険なのだ。
じじいは自分自身からおちびを護るために、俺様を連れてきた。
竜の雄は、雌をとても……とても大事にする。
その分、独占欲が強い。
まして、じじいは蜜月期中で。
他の雄の存在を一切許せないはずだ。
つがいに触れられたら激怒し、その男を引き裂き。
強い独占欲に支配され、雌を激しく求めてしまう。
肉体強化に失敗したおちびに竜の激情をぶつければ、かなり辛い目に合わせることになる。
いくら強い回復力があるといったって、辛いことには変わりない。
「……なんで、異界人のおちびがつがいだったんだろうな、ヴェル」
普通の竜の雄ならば。
北棟の庭で、雌をとっくに押し倒してる。
おちびは男にただ触れられただけじゃない。
どす黒い血を、体液を付けられたんだ。
じじいがぶちぎれても、しょうがない。
だが、このじじいはそうはしなかった。

おちびに無理強いをせず。
邪魔した俺を、殺しもしなかった。
つがいに触れた男を引き裂きに行きたいだろうに、我慢して。
「やっぱ、じじいは……ヴェルはすげえなぁ」
俺様に踏まれてる、小さな白い竜は。
本能を理性で抑え。
心も身体も脆いおちびを自分自身から護るため、他の雄竜に足蹴にされる事すら厭わない。
世界最強の竜である、じじいが。
この世の全てが恐怖にひれ伏す、最凶最悪の男が。
どこにでも居るような、平凡で小さな娘の為に。

じじいは……ヴェルはずっと、独りだった。
ヴェルは特殊な存在だから、つがいなど存在するはずがないと誰もが思っていた。
氷で創られたような外見と、全く温度の無い内面を持つヴェルには誰かを愛する感情など……心など無いのだと。
だが、どうだ！
ヴェルのおちびに向ける愛情は、竜族のそれより強く深い。
もし。
もしも、じじいがおちびとの子を望むなら。
セリアールの実験を……俺様は引き継ごうと思う。
子が出来れば。
もし、おちびが死んだとしても子が残り。
子が子を残して、おちびの血がずっとヴェルに寄り添ってくれるのだから。
「……ランズゲルグ！　この愚か者めがっ、手加減するな！　我の臓腑が潰れるほど踏まんか！　しくじったら今度こそ貴様を引き裂くぞ！」

「へいへい、わかりましたよ～」
俺様はじじいを踏む足に、さらに力を込めた。
竜帝である俺が、個人（ランズゲルグ）でいられるのは、それが許されるのは。
このじじいの前でだけで。

早くに両親を失った俺様の側に、今まで居てくれたのは。
このじじいだったのだから。

おちびが戻ってくる気配を感じ。
足元のじじいに確認してみた。
「おい、じじい。もう落ち着いたか？　おちびが来るぞ」
じじいはきつく閉じていた目を開き、鼻をくんくんと……。
「うむ。大丈夫だ、どけ＜青＞」
言いながら俺様を片手でひょいっと、ぶん投げ。
「痛ってぇな、じじい！　俺様はてめえのせいで大怪我してんだぞっ？　ほんと、自己中って言うかなんというか……おい！　待て、こら！」
じじいは温室と居住区を仕切る扉に向かって、短い足で駆け出した。
それと同時に扉が開き。
「ハクちゃん！　ね、もう匂わない？　髪の毛も洗ったよ？　全部着替えたし」
風呂から出てきたおちびは、黒髪を拭きながら膝を付き。
じじいはその膝に両手でしがみ付き。
「りこ、りこ！」

まるで母親にすがる子供のように。
小さな頭を、おちびに甘えるように擦りつける。
じじいの頭の中は、つがいのことでいっぱいで。
俺の存在など、これっぽっちもありゃしない。
おちびの前にいるのは【ヴェルヴァイド】ではなく【ハク】なのだから。
「りこ、我のりこ！　うむ、もう匂わない。我の好きなりこの体臭しかしない」
なあ、おちび。
人間をつがいにした竜の末路を知ってるか？
知るわけないか、じじいが教えるわけないもんな。
「体臭？　ちょっと、ハクちゃん！　もっと違う言い方ないの？」
おちびは笑いながら、じじいを抱き上げ。
細い腕で、大事そうに閉じ込めて。
「私も、ハクちゃんの匂いが大好き……」
じじいと揃いの金の眼を、細めて。
柔らかい微笑みを浮かべた。

おちびよ、異界の女よ。
竜の雄はけっしてつがいを裏切らない、裏切れない。
だが、人間は違う。
違うということを、俺様は知っている。
蛇竜となった同属を殺した俺は、知っているから。
もし、お前がじじいの想いを裏切る時がきたら。
じじいの愛を私利私欲の為に、利用するようになったら。
このランズゲルグが、お前を殺そう。
お前を失ったじじいが狂い、世界が壊れたってかまうもんか。

この俺の手で、じじいの【りこ】を殺そう。

「おい！　おちび、ちょっと早いが昼飯にしようぜ。肉食って、体力つけなきゃ俺様は倒れちまう。背の為にも肉だ、肉！」

俺がお前を、殺す。

番外編　～七夕～

『ハクちゃん。この絵本のお話って、けっこう大人向けじゃない？悲恋物でしょ？』

りこが我のつがいになり、2週間程たった。

魔女に言葉を習っているりこは、昼間は意識して公用語を使おうと努力しているが。

『ハクちゃん、ハクちゃん？　聞いてるの？』

2人だけで過ごす夜になると、異界語で我と念話を用いて会話をしていた。

我としては。

苦労して公用語など喋れるようにならずとも、我と念話が出来るのだから良いのではないかと思うのだが。

りこは我だけと……。

＝うむ。すまぬ、りこに見蕩れておった。

りこの身に着けている夜着は、上品な光沢のある絹で。

柔らかな肌をすべるような生地は、りこの小さく華奢な身体の線を露にし。

魔女が用意したそれは、りこにとても似合う。

が。

少々、……我としては複雑だ。

昼間は竜族の妻らしく、露出の一切無い衣服を身に着けているりこだが。

寝台で我と過ごす時の、りこの夜着は。

なんというか、その……おのれ、魔女めっ！

我がりこに未だ触れられぬことが分かっていて、このような夜着を……どこまで嫌がらせをするつもりだっ！

あやつは、先代魔女の恨みを引きずっているのか！？

我は細かいことを気にせん性質だが、男と魔女は無理だと昔から公言していただろうがっ！

『またまた～、私……見蕩れる要素なんか無いもん』

寝台に座っていたりこは、そう言って本を閉じ。

『ね、このお話って昔の御伽噺なの？　とっても綺麗ですごく冷たい＜氷の帝王＞って呼ばれた魔物に恋したお姫様が零した涙で、神様が＜星の河＞を作ったなんて』

＝……人間の女の涙が、星になることは有り得ない。くだらない昔話だ。

我の前で、多くの女達が泣いたが。

女が出した涙は、単なる分泌物であり。

それ以上でも以下でもない。

涙が星になるわけがない。

『ハクちゃんって、見た目はめちゃくちゃ可愛いのにな～。ふふっ、意外と情緒無いタイプ？』

苦笑したりこは、寝台から降り。

ソファーにかけてあった上着を羽織った。

『ちょっとだけ、夜のお散歩しようよ。東京の夜と違って、星が綺麗だし。うちはぎりぎり東京都みたいなとこだったけど、あんまり

星は見えなかったな……』

とうきょう。
りこが住んでいた都市。
りこの家族が居る場所。

＝りこ……抱っこ

そう、りこに言うと。
すぐに我を抱きあげてくれた。
我はりこの胸に顔を埋め、りこの香りを嗅いだ。

りこ、我のりこ。
もとの世界になど、帰さない。
家族になど、渡さない。
りこは、我のものだ
我だけの、りこなのだ！

『ハクちゃん……ごめんね、大丈夫だよ。私、帰れないんだから。
だからハクちゃんとずっと一緒だよ？』

りこは優しい。
もとの世界の話をすると、我が‘不安そうな眼をする’と言い。
そういった話は、避けてくれていた。
我はそれに甘えるばかりで。
りこに甘やかされることは、とても気持ちが良く。

＝りこ。ぎゅってしてくれ。ぎゅって……して。

『うん。ハクちゃんは甘えん坊さんだもんね～。抱っこ大好きだも

んね、まだ小さいんだから無理ないよ』

りこは我の体躯から、我を幼竜と勘違いしてるようだったが。
都合が良いので、特に訂正はしなかった。
我は‘抱っこ’が大好きなので。

『うっわー！　綺麗だねぇ。今夜はお月様が隠れてるから、星が良く見えるね』

中庭の中央近くに小ぶりな敷物（りこが庭でまどろむ時に使用している）をしき、寝転がって夜空を見上げて。

『まるで天の川……本物は見たこと無いけど。こんな感じだよね、きっと。……七夕とかって、こっちもあるのかな～』

我が見惚れるのは、夜空ではなく。
りこだ。
りこの黒い瞳の中に、無数の星が輝いていて。
それはあまりに綺麗で、幻想的で。
もっと近くで見たくて。
我はりこの顔を覗き込んだ。
ああ、りこの美しい瞳から零れる涙なら。
天に昇り、星になっても不思議は無い。
それほどに、美しい。
綺麗で甘い、りこの涙なら。

『……ハクちゃん。ごめん、ちょっと近いよ。空が見えないよ』

むっ、りこの瞳に吸い込まれ。

つい、無意識に身体が……。

＝すまぬ、あまりにりこの眼が美しかったのでな。

正直に言うと。

『ハクちゃんって、情緒無いんだかあるんだか……。まあ、審美眼はずれてるよね』

そう言い、笑った頬がほんのり赤くて。

間近でそれを見た我の心臓は。

まるで、直に握られたほどの衝撃で。

ぎゅぎゅーっとなってしまい。

＝わ、我はそのっ！　り、りこをあい……あ、七夕とはなんなのだ！？

いかんぞ、我よ！

思わず求婚してしまうところであった！

まだ、我に‘結婚’は早いのだ。

未だラパンの実を潰してしまう我には、りこと巧く交尾する自信が全く無いのでな。

愛しいりこを傷つけるくらいなら……ずっと交われなくても良い。

側に居てくれるなら、我は愛玩動物でも良いのだ。

どんな形であれ、りこが我の側に……それだけで。

『七夕？　えっと、あっちの世界の行事というか伝説というか……話していいの？』

りこは少し困ったような顔をした。
りこにこのような顔をさせてしまう、自分の弱さが憎い。
我はりこと出会ってから、自分が嫌いになった。
世界最強の力があっても、りこの役にはたてなくて。
りこの心の動きを察して行動することも出来なくて。
我は愚かで、無力だと思い知った。

＝うむ。我に、教えて欲しい。

甘えてばかりの、我だが。

心の底から、全てをかけて。
貴女を愛している。

『恋人同士の織姫様と牛飼いの彦星さんが、年１回だけ会えるのが七夕なの。さっきの絵本にあったような、星の川を渡って会うの』

りこが言うには、それは古い御伽噺で。
その恋人同士はあまりに仲睦まじく、２人でいると仕事をもせず愛を語らうために天帝が怒ってしまい。
年１度しか逢瀬が出来ぬようにしたのだという。

＝変な話だな。しかも、男が情け無い。そんなに愛しい女なら、天帝とやらを無視すれば良いのだ。

『う〜ん。彦星さんは一般人だから、神様みたいな天帝には逆らえないというか』

りこは起き上がり、我を膝に乗せ。
温かな手で撫でてくれながら言った。

『ハクちゃんだったら、どうするの？　無視しまくるの？』

もし。
りこと年1回しか会うななどと指図されたなら？
この世界最強竜の、我に？

＝無視？　まさか。……即、この爪で引き裂いてやる。我からりこを奪おうとするものは、全て処分する。

許さない。
我からりこを奪うなど。
天帝だろうと、神だろうと。

蹴り飛ばし、ぶち殺してやろうではないかっ！

『ひょぇ〜そ、そっか。……うん、ありがとうハクちゃん』

拳を掲げ誓う我の頬を、りこは細い指でつんつんと突付き。

『こんなに可愛いのに、ハクちゃんって凶暴だよね〜。ね、七夕は短冊に願い事を書くの。部屋に戻って、やろうよ。ハクちゃんは私より、字を書くの上達してるんだし』

りこは敷き布を素早く畳むと小脇に抱え。

我を抱っこし、部屋へと歩き出した。

術式を使えば一瞬だが。

我はりこに抱っこされて移動するのが、好きなのだ。

りこと出会い、好きなものがいろいろ出来た。

嫌いになったり、好きになったり。

我は、とても忙しいのだ。

寝室に戻ると。

りこは鋏みで書き取り練習の用紙を長方形に切り、我に差し出した。

『はい、どうぞ。ハクちゃんの願い事を書いてね』

我の願い？

我の願いは……。

＝りこは？　りこは何を願うのだ？

とても気になる。

りこの願いが。

それは我の力では叶えられぬものなのだろうか？

我は、りこの望みを全て叶えてやりたい。

家族の元に帰るという願い以外は、全て。

『私？　私は……』

りこはもう1枚、用紙を長方形に切り。

机の上で紙を1度撫でてから、迷いなく書き込んだ。

それは異界の文字で、覗き込んだ我には解読不能で。

不安になった。

＝りこ……これは、なんと？

帰りたいと書いてあったら、我のような竜……いや、化け物のつがいなど辞めたいと書いてあったらと。

濃い闇のような感情が、身体の奥底から沸いてくる。

もし、そのようなことが書いてあったなら。

我は、我は……我はりこをっ！

『こっちの文字がやっぱりわかんないから、日本語で書いちゃった。えっと、ちょっと恥ずかしいんだけど……』

りこ、我はっ！

『ハクちゃんとずっと一緒に居られますようにって、書いたの』

りこ。

『私、竜じゃないから。ハクちゃんは私をつがいにしてくれたけど、でも……ハクちゃんだっていつかは大人になって、竜の女の子が良くなって、私は、その……』

我の、りこ。

『私、邪魔したりしないから。ハクちゃんに竜の女の子の恋人が出来ても、一緒にいていいかな？　私、この世界で信用できるのは、安心できるのはハクちゃんしかいなくてっ』

我の、つがい、よ。

『ハ、ハクちゃん？』

我はりこの手から筆記用具をとり。
りこの書いた異界の文字をなぞった。
異界の文字は＜かんじ＞という部分が特に細かく、難しいが。
時間をかけて、丁寧になぞって……。

＝うむ。我の望みも書けた。

『……ハクちゃん』

＝最後に、ここに‘ハク’と署名して。……りこ！？

書き終わった用紙に、雨が降ってきた。

りこが泣いていた。
用紙を見て、唇をかみ締めて。
書いたばかりだったため、りこの涙でインクが滲み。
異界の文字はぼやけて、紙に広がって……。

＝りこ、どうしたのだ？　どこか痛むのか？　腹が減ったのか？

我は取り乱して、りこの顔に手を伸ばしそうになり。
慌てて手を握り、ひっこめ……むむっ？
りこが我の両手を掴み、自分の頬に……ああ、りこの涙はなんと温かいのか。

『あ、ありがと……ありがとう、ハクちゃん。私を側においてくれるんだね、私を捨てたりしないんだね。わ、私……っ』

抱きしめたい。
りこを。
この手で。

だが、我の身体は小さくて。
りこの頬を撫で、涙を拭ってやりたいのに。
我の爪は鋭くて。

竜体ではなく。
人型でこの場に居たのなら。

やはり、愛玩動物ではなく。
我は、りこの夫になりたい。
小さな身体をこの腕に抱き、りこの柔らかな頬にこの手で触れたい。

＝りこ、我は竜の女などいらぬ。りこだけで良いのだ……ずっと、りこ1人だけでいい。
りこは黙って涙を流し。
我は、りこの涙を舐め続けた。

綺麗で甘い、りこの涙。
切ないほど美しいそれを、星になどさせるものか。

りこの涙は、我のもの。
りこは、我のもの。

我は、りこのもの。

「トリィ様は、今朝は御眼が腫れてたわね……夕べ、トリィ様はずいぶんとお泣きになったのね？　ヴェルヴァイド様ったら！　いやあねぇ～、うふふっ」

午後の語学授業が終わり、りこはカイユと厨房に茶の用意に行き。
中庭のテーブルに座ってるのは魔女だけで。
いつもなら我も、りこと共に取りあえず厨房に行くのだが。
我は術式で寝室にあった本……絵本を取り出し、魔女に放った。
「ああ、先日お貸しした絵本ですわね？　挿絵がとても綺麗でしょう、これ」
まったく、むかつく女だ。
りこの気に入りでなければ、とっくに処分しているぞ。

＝持って帰れ。

「うふふっ、＜美しき氷の帝王＞に恋した美姫の悲恋話は女性に人気があるんですわよ？」

＝貴様……。

「氷の心しか持たない魔物は美姫の愛に全くなびかず。哀れな姫の涙が＜星の河＞になった……ふふっ、実際はこの星の数ほどの女が貴方様に焦がれて、泣いたことでしょうね」

＝……さあな。とにかく、二度とりこに見せるな。今度このよう

な戯れをしかけたら、セイフォンを潰して帝都に移るぞ。

「……御意。＜美しき氷の帝王＞様」

それは御伽噺ではなく、古い古い昔話。

もう、どこにもいない。

美しい氷の魔物の物語。

第５６話

「あん？　……なんだって？　もう1度言ってくれるか、パス」
俺は床に転がした術士の右手首を踏みつけ、血と泥で汚れた手のひらに短剣を刺した。
床に固定させる為に、深々と差し込む。
左手と両足にも同じ処置をした。
薬を打たれ意識の無い術士は、全くの無反応で……つまらない。
術の起動には手のひらの＜基点＞が重要な役割を持つので、こうしておけば術式は使えない。
ま、最高位クラスの術士になると＜基点＞を潰しても無駄なんだが……。
「え～、だからぁ！　これで追いかけっこしてたらちっこい人間の女が捕まってて、匂いと気がヴェルヴァイド様ので……金の眼してて。一応、陛下にはこいつを捕まえてすぐに、電鏡で連絡いれといたけど。陛下が逃げろって言ったしさ～」
「……姫さんか」
ああ、全く……なんてこった。
姫さんと鉢合わせしたのか。
だから、旦那は。
「そういえば……奥方様は拉致される際に、頬を打たれたらしく顔が腫れていました。術士の男は我々が彼女はヴェルヴァイド様の奥方様だと言ったのを聞きとり、彼女を捨てて逃げたので追いました」
おい。
なんだってー！
「オフ、姫さんは怪我してたのか？　てめえら、怪我したあの子をほっぽらかして術士を追ったのか！」
オフランは首をかしげた。
「いけませんでしたか？　大した怪我ではありませんでしたし、何

よりあの場に留まっていたら我々が殺されていました……ぶち切れたヴェルヴァイド様に。陛下から退避命令も出ましたし」

「このクソ餓鬼が！　旦那は姫さんの目の前じゃ、殺しはしねぇんだよ……ちっ、ややこしいことになっちまったなぁ」

そのぶち切れた旦那の気に飛び起きた陛下は、まだ不安定な皮膚を特殊な包帯で固定して。

避難命令を出し、旦那のもとに駆けて行った。

内部損傷が激しく、竜体になれない最悪の状態の身体を無理矢理に動かし。

たった1人で。

＜竜帝＞に旦那を止める力は無い。

陛下は城の竜族を逃がすため。

盾になるために……死にに行ったんだ。

今回は被害も大したことは無く、陛下も死なずに済んだが。

だが……。

パス達の会話から、姫さんが＜監視者＞のつがいの娘だと察したと？

だと？

つまり、そいつは＜監視者＞が＜ヴェルヴァイド＞だと知っていたということだ。

旦那は自分から＜ヴェルヴァイド＞と名乗ることはしない。

竜族が昔からそう自分を呼ぶから、便宜上容認しているというか……。

近年の人間の中で＜ヴェルヴァイド＞と＜監視者＞を同一の存在だと知っているのは、気づいているのは極少数で。

が、この術士は知っていた。

この程度の術士が、何故だ？

「そいつ、殺しとかなくていいの？」

パスハリスは俺が＜基点＞の処理だけで終わらせたことに、不満げな声をあげた。

「……つがいに害を加えた者に報復する権利は、夫のもんだ。こい

つは旦那の獲物なんだよ。もう、お前らの玩具じゃねぇんだ」
北棟に地下室の床に縫い付けられた術士は、薬が効いて……ったく、暢気に寝てやがるなぁ。
こいつに待つのは。
世界最強竜……最凶最悪の男の復讐だ。
つがいを……大切な妻に触れられたうえに傷つけられた蜜月期中の雄竜の怒りは、人間の想像以上のものだ。
しかも、この術士が怒らせたのは旦那で。
旦那を本気で怒らせた者は、今まで1人も居なかった。
基本的に旦那は物事に無関心で、感情も動かない。
……以前は、な。
姫さんを得て、旦那は変わった。
＜感情＞を知って……泣いて、怒って、微笑むことも出来るようになったんだ。
あの人は変わった。
ある意味。
この術士は人類史上、英雄なのか？
あの＜監視者＞に喧嘩を吹っかけたというか……ま、故意じゃねえが結果的にというか。
「ねえねえ、ダルフェ。僕達、どうなるの？　ヴェルヴァイド様にぼこられちゃうかな？　あ、でも最初にやられんのはこの術士か！　その間に逃げ……逃げ切るなんて無理だよね～、ううっどうしようー！　母様、父様。先立つ不幸を許して～！」
あわあわと喚くパスハリスとは対照的に。
年下のオフランは翡翠のような眼を、細め。
「パスは本当に低脳だな。ダルフェが言ったのをちゃんと聞いて……聞いてても、理解出来なかったのか。なら、仕方ない。生き延びる術は、ただ1つ！　つまり、奥方様に取り入るんだ。一刻一秒も早くな」
俺は自信満々に言い切った餓鬼の薄茶の髪を持つ頭に、拳骨を落

とした。
「……痛いです、ダルフェ」
「てめえは、まったく……。しかしまぁ、その案が確実で手っ取り早いかぁ。魔女閣下もその手で旦那を抑えて、やりたい放題してたしな～。姫さんの優しい心に付け込むみたいで、俺は嫌なんだが……カイユも怒りそうだなぁ」
俺の言葉に、2人はすばやく反応した。
「カ、カイユさんがなんで怒るのっ？　あのカイユさんが怒る……ぎゃあああー！　想像したくないようぉ！」
俺は呼び捨てで、ハニーは‘さん’なんだよなぁ～。
ま、いいけどな。
パスハリスは無造作に編んだ金茶の髪を両手でかき乱し、叫んだ。
パスハリスより年下で、頭1つ分背の低いオフランは一言。
「地獄絵図」
と、小さな声で呟いた。
おい、お前ら。
何故に旦那の話してる時以上に、取り乱してんだよ。
ま、確かに。
俺の愛しいハニーは、綺麗で強くて。
青の竜騎士の中で、ぶっちぎり1位の冷酷非情な武闘派だが。
そこがチャームポイントの1つなんだぜ？
「光栄に思え、餓鬼共。カイユの拳は最高だぞぉ？　あんまり良すぎて、意識飛びっぱなしになっちまうだろうな～」
俺は震え上がった2人を放っておくことにし。
壁際に黙って立っていたヒンデリンに声をかけた。
常より険しい表情から、こいつなりに反省してるとは思うが。
青の竜騎士の頭であるカイユが、姫さんの侍女を辞める気が無い現状では。
こいつらの手綱を絞めんのは、俺の役目だしな。
「おい、ヒンデリン。俺はお前に、術士3人の処理をしとけって言

ったよな？　２人がばらばらで使えなかったから、この星持ち野郎から依頼主を聞き出し旦那に報告した。そこまでは良かったが……最後まで後始末しとけ。てめえが餓鬼共に甘かったから、こんな事態になったんだぜ？　現陛下を失いそうになり、帝都を壊滅の危機に晒したんだ」

俺は対術士の訓練として星持ち野郎を使うつもりだったが。

ヒンデリンは可愛がっている餓鬼共の‘玩具’として術士を扱った。

玩具を貰った2人は訓練としてではなく、狩りごっこで遊んでしまい。

すぐに仕留められたくせに、遊びの時間を無意味に長引かせ。

油断した隙に、短時間だが見失い。

結果が、この様だ。

「ダルフェ！　ヒンを怒らないで、僕達が悪かったんだよ！」

「ヒンは悪くない、我々が……！」

パスハリスとオフランは、俺からヒンデリンを隠すかのように間に入ってきた。

こいつ等は。

お前らはっ！

死ぬ気で駆けて行った陛下には謝罪も、感謝の言葉１つさえ出てこないのに。

陛下に……竜帝はっ。

「……陛下の変わりはすぐに【発生】するからか？　陛下は……竜帝は、竜族を命がけで守って当たり前だから……お前らにとっては竜帝は捨て駒で。普段、可愛がってくれるヒンデリンの方が何倍も大事なんだな」

「ダ、ダルフェ？」

パスハリスが薄いブルーの眼を、戸惑うように俺に向けた。

根本的に。

俺と、こいつ等は……違うのだ。

こいつ等は、自分達の失態で陛下がどうなるかなんて考えもしない。
陛下……竜帝が竜族の為に死ぬことに、なんの疑問も感じない。
＜竜帝＞なんだから、竜族の為に死んで当たり前だと。

ブランジェーヌ。
貴女は。
それで良いのだと。
本望なのだと。
真紅の瞳で、笑っていたっけ。

「済まなかった、ダルフェ。私のミスだ。陛下とヴェルヴァイド様には、私が罰を乞う。パス達は許してやってくれ」
深々と、群青の頭が下げられて。
逸れてしまった思考を力ずくで、戻した。
今、考えなければならないのは。
＜竜帝＞達の事じゃない。
旦那と姫さん。
この2人が最重要だ。
カイユ……アリーリアと胎の子の為に。
世界を、遺す。
旦那に、世界を放棄させたりしない。

姫さん。
頼むから、世界を見捨てないでくれ。
俺は、アリーリア達を最後まで護ってやれないから。

俺に残された時間は、けっして長いものじゃない。
姫さんに、託すしかない。

「……お前ら全員、風呂入って血の匂いを落として来い。姫さんの昼食後、顔合わせをすんから。俺が旦那に許可とっとく」

愛しているよ、アリーリア。
そして、胎の中で眠る俺の子よ。

「姫さんが側にいりゃあ、旦那はおとなしいもんだ。お前らをく処分>しやしないさ」

今も昔も、これからも。
愛しているよ、ブランジェーヌ。

「ヒンデリン！　手土産に花を持って来い。姫さんには宝飾品なんかより、そーゆーもんが効果的だかんな」
「……承知した」

愛しい君達に、この世界を遺す。

～おまけ～

りこ中日記（りこ中心・中毒のハクちゃんの日記です）

＜ｘ月ｘ日＞

我の手により、無理やり繭から引きずり出されたりこは。

身体機能が、未だ正常に戻らない。

眠っているか、焦点の合わぬ瞳でぼんやりとしているかで……。

まるで生きた人形のような、我のりこ。

我に視線を合わす事も、我の名を呼んでくれることも無く。

我はとても寂しく。

辛くて、辛くて。

支店の者達の不手際に、制裁を加える気力も沸いてこない。

ああ、りこが元気で笑っていてくれなければ。

今の我は……ダルフェが言うには、ふにゃふにゃのへろへろなのだ。

初体験の、ふにゃふにゃのへろへろ、に、戸惑っていた我だが。

「トリィ様、お薬ですよ？　あ～ん」

我はりこと離れる気になれず、りこを自分の身体の上に乗せて過ごしていた。

その我の目の前で、それは行われた。

あ～ん

カイユが小さな銀のスプーンで。

蜜薬をりこに与えたのだ。

それは、脳天に雷撃を受けたような衝撃で。

あ～ん……あ～ん?!

「カカカッ……カイユ！　そっ、それを、我にやらせるのだ！　我がやるっ！」

最初は緊張のあまり手が震え、スプーンを数本折ってしまったが。
なんとか成功した時は。
歓喜のあまり。
蜜薬を与えたばかりの唇を貪ってしまい、カイユに怒られた。

あ～んは、とても良い。
我の冷たい身体の奥底から、温かい何かが浮かび上がってくるようで。

「りこ、我のりこ。我は今後もずっと、あ～ん、をしたい」

この温かな何かが。
我の冷たい身体を。
りこに触れる、我の手を。
冷たい、この手を。
貴女の温かで優しい手のように。

いつか。
変えてくれるかもしれない。

「りこ。あ～んだ、あ～ん」

第57話

お風呂から出て。
温室に戻って数分で、カイユさんがやって来た。
「カイユ！」
アオザイに良く似たデザインの服は薄いブルーで、とても素敵。
儚げで清楚な雰囲気の彼女の美しさが、ますます引き立って。
艶やかな牡丹のような美人である竜帝さんと対照的な、睡蓮の花のような美しさで。
ハクちゃんを抱っこしたまま、私はカイユさんに駆け寄った。
会えなかった時間は丸1日……けれど、なんか久しぶりに会えた感じがして。
「カイユ、お仕事は？　あっ！　竜帝さんを迎えに来たの？」
細い腕で、ロッカータンスに車輪が付いたような大きな物を軽々と押している。
相変わらず、見た目から想像不可能な怪力なのです。
カイユさんは私の好きな、透明感のある微笑を浮かべて。
「私は溶液調整を担当していたので……溶液から出た後の陛下の面倒は、医療班にまかせます。トリィ様、カイユがお側にありますからご安心下さいませ。気の利かない雄共ばかりで、お困りだったでしょう？」
カイユさんが居ない間？
ま、まさか……ダルフェさんとハクちゃんの事？
「え、ううん！　大丈夫でしたよ！　ダルフェもハクちゃんも、良くしてくれてるもの」
カイユさんは私のまだ、乾いていない髪に手を伸ばし。
「そうですか……さ、お部屋で御髪を結いましょうね。トリィ様に似合いそうな飾り紐を、幾つか持ってきましたの。生花もありますよ？　ヴェルヴァイド様にも見てもらいましょうね。　……陛下、

この中に衣服が入ってますから適当にどうぞ」
え？
適当にって……それはまずいんじゃ。
竜帝さんは怪我してるんだから、着替えを介助してあげなきゃっ！
あんなに包帯だらけじゃ、身体が動きにくそうだし。
「カイユ。私のことより、竜帝さんを助けてあげて。あ、私も手伝いますっ」
私の意見は本人により、速攻却下されてしまった。
「……俺様に止めを刺す気かよ？　カイユ、おちびをさっさと連れて行け」

「我が＜青＞に手を貸そう」

一瞬。
誰もが幻聴かと……。

「我は＜青＞とこの場に残る。カイユ、我が妻には生花が似合う。そうだな……我の鱗に似た色の花が良い」
幻聴じゃない！
この念話はハクちゃんだっ！
「ハ、ハクちゃんが竜帝さんを……！　偉いよ、ハクちゃん！　やっぱりハクちゃんって、優しいんだよね」
感激だよう～、ううっ。
なんだかんだ言ったって、竜帝さんに怪我させたことを反省してたに違いない！
包帯だらけの痛々しい姿を見て、後悔してたんだね？
「じゃ、私はカイユに髪の毛を結ってもらうから。ハクちゃんが言うように、白いお花をつけてもらうね！　ハクちゃんは竜帝さんをお願いします」

この時、私は。
私以外には少々冷酷な所があるハクちゃんが、初めてみせた他人を思いやる言葉に感動し。
カイユさんと竜帝さんの表情は、全く見てなくて。
「……では、ここはヴェルヴァイド様にお任せしましょう。トリィ様、参りましょうね」
カイユさんの優しい手が背に添えられて。
「はい。ありがとうカイユ、行ってきますハクちゃん」
あんまり嬉しくて、お風呂で気になった身体のこととかどうでも良くなって。
それに。
多少、身体が変わったとしても。
私の事を1番に考えてくれるあの人が、私に害のあるような事をするはず無いんだし。
時間とタイミングの良さそうな時にでも、質問すればいいし。
他の人が居るところじゃ、ちょっと聞きにくい内容だし。
支店での初エ……エ、エッチ（ひいえぇ～！）が原因で、眼以外にも私の身体は何か変わったのかなんて。
うう～っ、皆さんの前じゃ聞けないよ！
ハクちゃんは繊細で泣き虫なのに、デリカシー無いんだもの。
ダルフェさん達に私……異界人の身体の造りは、こちらの人間の女性と同じだったって平気な顔で報告するくらいだし。
恐るべし天然っぷりだよね、くっすん。
「りこ、カイユと行ってくるが良い。花を髪に飾ったりこは、とても愛らしい。我は大好きだぞ」
ハ、ハクちゃん……地球に生まれてたらイタリア人だね、きっと。
この言動は絶対、日本人じゃなーい！
ハクちゃんは私の左の頬にキスをして、ふわりと飛び。
竜帝さんの青い頭の上に、ちょこんと座った。
小さな竜を頭に乗せ、温室の床にぺたんと座ったちょっと膨れっ

面の青い髪の美女……美人。
なんか、すごく微笑ましくて。
ハクちゃんは竜なんだし。
同じ竜族の帝都に移動してきて、やっぱり正解だったな～って思った。
支店でも感じたけれど、竜族の人達はセイフォンの人達とは違う。
カイユさん……特にダルフェさんは、ハクちゃんに始めからフレンドリーで。
小さなミチ君達だって、ハクちゃんを怖がるってよりは興味津々って感じだった。
セイフォンでは……セシーさん以外はハクちゃんを見る眼が、恐怖心に満ちていて。
悲しかったし、こんなあからさまな反応は嫌だなって思ってた。
ハクちゃんは＜監視者＞っていうお仕事（私は未だに、彼の仕事内容がよく分かっていない）してるらしいんだけど。
理由無く他人を傷つけたり暴れたり、物を壊したりなんかもしないし。
私の事で揉めなければ、基本的には大人しくて良い子（あの頃は大人だと思ってなかった）だったから。
セイフォンの人達のあの眼、反応は……ショックだった。
帝都……竜族の都であるここでは、ハクちゃんをあんな眼で見る人はいないよね？
私さえ、注意して行動すれば。
ハクちゃんと2人で……微笑みながら、穏やかに暮らせるはずだ。
竜帝さんとも、なんだか良い関係みたいだし。
友達……じゃなくて、歳の離れた兄弟？
んー、なんか違うなぁ。

「トリィ様？」
足を止めてしまった私を、カイユさんが……ちょっとだけ不安そ

うな顔をして言った。
「どこか痛みますか？　ご気分は大丈夫ですか？」
痛み、気分……。
あれ？
そう言えば。
泥棒（？）のおじさんはどうしたかな？
化け物に追われてたって言うのは、嘘だったんだよね？
なんか、変かも。
ハクちゃんは私に一言も聞かない。
誰に頬を叩かれたか。
約束したのに、どうして薬草園から出たのかすら聞かない。
心配性で超過保護の、ハクちゃんが。
「へ……平気です。行こう、カイユ」
私はカイユさん手をとり、早足で部屋に向かった。
あの時、ハクちゃんは少々取り乱したなんて言ってたけれど。
本当は、かなり危ない状態だったはずで。
ハクちゃんの頭の中も、混乱しちゃっただろうし……だからかな？
せっかく落ち着いてる状態に戻った彼に、わざわざその原因になった事をこちらから話すのもなんだし。
見習い（？）騎士さん達が追って行ったんだから、捕まってるだろうし……。
もう、ハクちゃんを刺激したくない。
彼から何か言ってくるまでは、その事には触れずにいたほうが……うん、そうしよう。
「この部屋、お気に召しました？　気に入らないところがあったら、遠慮なく仰って下さいね？」
カイユさんは寝室にあるドレッサーの前に私を座らせてくれ、髪を梳いてくれた。
優しく、丁寧に……。
「ここ、素敵です。でも、あの……そのベッドがっ。お、大きくて

びっくりしちゃって！　あ、お風呂も大きくて凄いなってっ」
言いながら、顔が熱くなる。
だって、だって……思い出してしまったのだ。
今朝の事を。
朝、起きて。
ハクちゃんがパジャマを脱ぐのを手伝ってあげて、ハクちゃんが小さな手で丁寧に畳んで。
私も着替えよ～って……思ってたら。
思ってたら……ハクちゃんが、ハクちゃんがぁあああ～！

ハクちゃんって、変わってる人だとは思ってた。
でも……あの人、ちょっと変なんだろうか？
ちょっとどころじゃなく。
もしかして、かなり変なんじゃ……。
竜帝さんも、ハクちゃんの感性がどうのって言ってたよね？

「トリィ様？　……どうなさいました？」
「えっ、いえ！　なんでもないです、うん！　問題無しです、た、多分っ！」
思わず両手で、顔を隠した私に。
「……もし、‘問題‘を感じたら、カイユに仰ってくださいね」
にっこり笑って、カイユさんは言った。

カイユさんったら、勘が良すぎます！

第５８話

「じじい。……で、どうする気だよ？　おちびに触った術士は北棟地下室にダルフェが‘保管’してあるぜ」

我は＜青＞の頭の上に乗ったまま、カイユの持ってきた衣類を＜青＞の元に転移させた。

＝……そいつは我のりこに汚い手で触り、おぞましい体液を付けただけではない。

「あ？」

＝我がりこに呼ばれ戻った時、左頬が腫れていた。やつはか弱いりこに手を上げたのだ。

「……なるほどな。俺様が見たときには治癒が終わってたのか、ちっ！」

＝寝てたお前は知らぬだろうが。ヒンデリンの報告で、あれはペルドリヌの者だと分かった。

我は＜青＞の頭から飛び立ち、池の淵に降りた。

覗きこむと、赤い小魚が数匹泳いでいた。

その姿は舞い踊る女のようでもあり、戦場で見た武人の剣技のようでもあり……。

りこは小魚が気に入ったようで、朝食のパンを小さくちぎり与え。

小魚がパンをつつくのを、楽しそうに眺めていた。

どこらへんが楽しいのか、我には分からなかったが。

りこが楽しければ、我は満足だ。

「ペルドリヌ？　あの狂信者共かっ！　あいつ等は術士こそが選ばれた存在だとかほざいて、同属である普通の人間を見下してる。一番むかつくのは、俺様達竜族を大蜥蜴呼ばわりしやって、蔑みやがる！　いくら温厚な俺様でも、ぶっ殺したくなる奴等が造った新興国家だな」

肩にかかる青い髪を乱暴な仕草で払い、＜青＞は吐き捨てるように言った。

この＜青＞は乱暴な口調を好んで用いるが、実際は非常に温和で暴力を好まない。

それは人類との共生を選んだ近代種の特徴であり。

この個体の欠点、そして長所なのだ。

＝お前に人を殺すことは出来ぬ、諦めろ。

ペルドリヌなどという小国は、竜帝程の力ならば簡単に滅ぼせる。

術士で構成された国家だろうと、竜帝が本気になれば容易い事だ。

ランズゲルグの性質では難しいが、手持ちの竜騎士達を投入すれば数日で片が付く。

だが、こやつはそうしない……出来ないのだ。

＜青＞がペルドリヌと今まで事を構えず、竜族への誹謗中傷に耐えているのは。

四竜帝の総意で＜人間との共存＞を選択しているからだ。

人間という生き物は。

自分達より遥かに強く長命な竜族に、世界の覇権を握られぬか常に警戒している。

これは、生物として致し方ないことだ。

だからこそ。

竜帝は人間に、恐怖を与え過ぎてはならない。

畏怖されることは必要だが……強い恐怖心を持たれてはいけない。

最近……この千数百年程は、竜族と人間はうまく共存してきた。

我を＜監視者＞とすることで。
竜族……竜帝への恐怖は、それ以上の恐怖……竜帝を殺せる＜監視者＞の存在が、人間の恐怖心を竜帝から逸らし。
我の存在が、竜族と人間の均衡を保つ。
だが。
もし竜族が、怒りに任せてペルドリヌを滅ぼせば。
それは人間の恐怖心を煽り、竜族への迫害となって返ってくる。
過去に何度も繰り返された、事実だ。
過ぎる恐怖は、殺意を生む。
我は竜と人のそれを、長い……永い間、見てきた。
だから、思ったのだ。
我を手に入れたりこを、必要以上に人間共に‘恐怖’させるのは得策では無いと。
今回の間者は竜騎士共に下げ渡したが。
今後送られて来る間者には、意図的に＜監視者＞のつがいの情報を流し。
りこに対する人間共の感情を操作・管理できればと……。
あの時。
りこが温室で寝ている間に、全て処分すべきであったのか？
そうすれば……頬を打たれるような惨事も起こらなかった。

＜監視者＞のつがいに取り入ろうなどと、権力者共が考える余裕も無いほどの‘恐怖’を人間共に与えるべきなのか？

＝ランズゲルグよ。感情に疎い我では、人間共の複雑な心情を考慮し、判断することが難しいな。力で抑え付けるのは簡単だが、加減が分からぬ。我が間者とそれを使った者達を引き裂けば、人間は原因となったりこを恐れるのだろう？　我は……人間がりこを見る眼を、我に向けられるようなものにしたくない。我はなんとも思わぬが、りこは違う。りこは、我とは違うのだから。

「じじい……。俺様に出来ることはなんでも協力する。だからっ」

＝……お前は＜竜帝＞だ。竜族の事だけ考えていれば良い。この件は今後、一切口にするな。

「でもっ！」

＝黙れ、＜青＞。

「……わかったよ。もう言わねぇし、聞かねぇ。この事に、＜青の竜帝＞は関わらない」

衣服を握り締め、俯く＜青＞は。

成竜になっているはずなのに、何故か常より幼く見えた。

ちびだからだろうか？

それとも、我が変わったのだろうか？

＝ランズゲルグ、早く衣服を身に着けろ。カイユは仕事が早い。りこが戻ってくるぞ？

「おい！　やっぱ、手伝う気ゼロじゃねえか！　おちびには、良い子ぶりやがってよぉ～」

＝衣服を手元に移動してやったではないか。我はきちんと手を貸したぞ？　今朝、りこにも言ったが……我は脱がすことは出来るが、着せることは出来ん。他人の身体に、術式で衣服を着せたことも無い。試術が面倒だから、自分で着ろ。

「この腐れじじいがっ！　脱がすって……おいっ」

＝りこがぱじゃまを脱ぐのを補助してくれたのでな。我もりこのぱじゃまを脱がして、畳んでやったのだ。我とりこのぱじゃまはお揃いなのだぞ！　つまり、我とりこはらぶらぶという状態なのだ。

「世界最高齢の年寄りが朝っぱらから、何やってんだか……聞くんじゃなかった。俺様が馬鹿だったぜ」

＜青＞は緩慢な動作で、衣服を身に着け始めた。

溶液に1日入っただけで、ここまで回復するとは……。

＝ふむ。身体中の神経を捻じ切り、溶かしてやったわりには良く動くな。ランズゲルグよ、我は手加減しすぎたのか？

「あのなぁ。……あれが限界点だ。ったく、死ぬかと思ったぜ。この鬼サドじじい！」

ん？

気づいたのだが。

こやつは名を呼んでやると。

＝ランズゲルグ。

「……んだよ、じじい」

うむ、やはり。

＝お前は未熟児だったせいか……今でも時々、幼子のような顔をするな。それとも発育不良のせいか？

「おい！　だれが発育不良だ、このぼけがっ！」

小さな小さな＜青＞は、ちびの成竜に成り。
我の裾を握り締めていた手は、いつしか離れ。
我がりこを得たように、これにもつがいが現れて。

＝……我は近いうちに、りこを連れ黒の大陸に移る。お前が寝てる間に＜黒＞と電鏡越しに会ったが、奴は1年持たん。

「……っ！」

ランズゲルグの手は、つがいと繋がれるだろう。

「ヴェルッ、まだ黒の爺は生きてる！　移動は爺が死んでからだって、いいんだろう？　まだっ……！」

りこ、りこよ。
貴女は我を変えた。
我が思っていた以上に。
我は、貴女に変えられてしまったようだ。

＝お前がこのようにちびなのは、菓子ばかり食っていたのを放置した我にも非があるやもしれん。……ふむ。餞別に、お前に贈り物をしてやろうではないか。光栄に思え、ランズゲルグよ。我が贈り物をしたのは、今までにりこだけだぞ？

温室に戻ると、女神様がいた。
「りゅ、竜帝さんっ！　ああ、なんて綺麗～、うっとり～！」
カイユさんが着ているのと同じような服だけど。
彼の着ているアオザイ風の服の色は、深海を思わせるような深い青。
全体に細かな銀糸で、蔓のような優美な刺繍。
まっすぐでさらさらの長い髪は、前の世界では絶対に有り得ない青で。
「こんなに美人だったなんて！　あんまり美人過ぎて、美女に見え……ん？」
私の裾を、何かが引っぱって……、あ、ハクちゃんでしたか。
「ハクちゃん、どうしたの？　あ、竜帝さんの着替えを手伝ってくれて、ありがとう！」
床に2本足で立ち、私の裾を小さな両手で握った旦那様は。
皆に聞こえる念話で言った。
「……＜青＞が綺麗で美人だと？　りこは昨日、我を世界一美人だと言ったではないかっ！　しかも今、これに見蕩れていたな？　わ、我はもう、りこの一番ではないのかっ？！」
世界一の美人？
そんなことは、言ってないと思うけど。
「え？　そ、そう？　そ、そんなこと、ないよっ、ね？　ハクちゃんだって、とっても美人だよ？　でも、あのっ」
世界一美人って、ミスユニバースじゃないんだしさ。
だいたいハクちゃんは男の人だしね。
美人っていうより、美形っていった方がいいのかなって。
「り、りこ……！」
私を見上げていた金の眼が。
うるっって、なったかと思うと。
「ぎゃー、痛ってぇえええ！　何すんだよ、じじい！」

女神様、ではなく竜帝さんが叫んだ。
一瞬で移動した白い竜は。
彼の口に両手を突っ込み、その手を左右に……！
「ひゃ、ひゃめろうっ～！　ひゃめ、じじっつふふぃがはけるうー！」
口が裂けるって、言ったのかな？
口が裂け……！
「きゃあっ！　なにしてるの、ハクちゃん！」
ああっ！
女神様の麗しいお顔が、台無しだよっ。
「何って……。これの顔を不細工にしようと思ってな。りこが見蕩れてしまうような顔ならば、再生できぬほど細切れにしようかと」
くりんとこちらを振り返ったかわゆい竜は、そう言って。
さらに腕を左右に……まずい、それ以上はまずいよハクちゃん！
「へめりょー！！」
「陛下っ！」
「やめてぇえ～ハクちゃん、やめてー！」

「なんか楽しそうですねぇ。なんかの罰ゲームっすかぁ、陛下」

この声、ダルフェさんだ！
ダルフェさんはキッチンワゴンを押し、昨日も使っていた籐のバスケットを担いで現れた。
本日も青い騎士さんの格好をしてて、かなり格好良い。
今度、人型のハクちゃんにも着てみて欲しいな～。
絶対に似合うと思うんだけど。
「ちょっと風呂に入ってきたんで遅くなりましたが、飯にしましょうやぁ。陛下ぁ、ご希望通りに肉てんこ盛りっす」

ダルフェさんは目の前の状態に全く動じず、言った。
「旦那～、遊んでないで姫さんに飯を食わせてあげなさいな。今日は夕焼けを見に行くんでしょう？　食わなきゃ体力つきませんって」
あ、本日は夕焼け見学！
ん？
体力って……山にでも登って、夕焼け見るってこと？
「むっ！　そうであった」
ハクちゃんは竜帝さんを、そのまま横にぽいっと投げ捨て。
「ふぎゃっ！　こ～の、鬼サドじじいーっ！」
尻餅を付き、赤くなってしまった頬をさする竜帝さんを完全無視して。
私に向かってトテトテと走り。
「りこ！　抱っ……むっ！」
小さな手を私に伸ばし……ささっと、引っ込めた。
「ハクちゃん？」
くるっと方向転換し、またトテトテ走って。
お池の淵にぺろ～んと腹ばいになり。
ぱしゃぱしゃ。
ばちゃばちゃ。
両手を水に入れて、何かしていた。
「じじい？　おい、てめえはアライグマかよ?!　それは観賞魚だから、食っても不味いぜ？」
竜帝さんは、優美な眉を寄せて言った。
それとは対照的に。
ハクちゃんの行動を見たカイユさんは、にこにこしながら。
「……ああ！　そうですわね。さすがヴェルヴァイド様です……さ、これでお拭き下さいませ」
ハクちゃんに歩み寄り、薄いピンクのハンカチを差し出した。
ハクちゃんは身体を起こし、カイユさんからハンカチを受け取る

と丁寧に手を拭き。

「我としたことが。＜青＞の汚らしい唾液の付いた手で、大事なりこに触れてしまうところであった！　ああ、なんとおぞましいっ」

薄いピンクのハンカチで、お手手を拭き拭きする小さな白い竜の姿はめちゃくちゃ可愛かった。

可愛かったんだけど……。

「おい、じじい！　何気に俺様をばい菌扱いしやがったなー！」

竜帝さんはダルフェさんに手を借りながら、よろよろと立ち上がり。

「まあまあ。こんなりでも陛下も一応、雄竜なんすからぁ。旦那が手を洗ったって当たり前ですってぇ～！　しっかし陛下ぁ、３年ぶりに人型拝見しましたが、相変わらずちびっすねぇ」

ダルフェさんはにやりと笑って、竜帝さんの頭を撫で撫でして言った。

「こんなんだから、人間の男に求愛されたりするんすよ？　背が無いんだから、もっと筋肉つけましょうや～」

え？

きゅ、求愛ー！

女神様な竜帝さんだけど、男の子だよね？

ちょ、ちょ、ちょっと～っそれって！

うふふ……ちょっと、詳しく聞きたいかも。

「ダルフェ！　てめっ、それはっ！……ちが、違うんだおちびっ、そんな眼で俺様を見るなぁ～！」

竜帝さんは宝石のような青い瞳で、まだ手を拭いているハクちゃんを睨み付け。

「おい、ヴェル！　俺様になんかくれるんってんなら、てめえの身長をよこしやがれー！　２０……１０セテでいいから、くれ～！！」

その悲痛な声に。

魂の叫びに（なんのこっちゃ）。
私はまたまた、親近感を感じてしまった。

第59話

私的には。
お昼ご飯には、ちょっと時間が早いと思ったんだけど。
竜帝さんの強い希望により、ランチタイムになった。
陽の光が燦々と射し込み、ぽかぽかと暖かな温室でのランチ。
木製の折りたたみ式テーブルセットは、ダルフェさんが居住スペースの納戸から出してきてくれた。
私も椅子なら持てたので、人数分の椅子を並べて……ハクちゃんの分も用意したんだけれど。
「りこ。あ～ん」
彼は竜体のままで、テーブルの上から私にスプーンを差し出した。
銀のスプーンには、カカエの卵で作られたプリンが……。

しっかりと朝食をとっていたし、なんだかいろいろ大変だったせいか。
私は食欲が出なくて。
椅子を運びながら、野菜スープだけでいいと言ったら。
ハクちゃんの金の眼が真ん丸くなり。
黒い瞳孔が、1本線になってしまった。
この世界に来てから、食べ物が美味しくて。
いつもご飯を楽しみにしている私の「あんまり食欲無いんです」発言に、ハクちゃんはとても驚いてしまい。
医者を呼べ、薬を出せと騒ぎ出し。
いつもの昼食より時間が早いからと、彼をなだめて。
ハクちゃんが、せめてプリンは食べてくれと言って。
カイユさんとダルフェさんも、ハクちゃんと同意見で。
竜帝さんも、巨大なフライドチキンにかぶり付きつつ。
「ちゃんと食え、お前だって食えば背が伸びるかもなんだぞ?」

って、言って。
私は２６だから、縦に伸びるんじゃなくて。
横に広がるんじゃないかな、きっと。

私から一番離れた席に座った竜帝さんが食べてるのは、みかん箱サイズのフライドチキン。
美女系美人（男の人っぽさゼロなので美男じゃなく美人で）が、巨大チキンを両手で掴んでがつがつと食べる姿は。
うう～、なんか切ないです。
そんなに背が高くなりたいなんて……頑張って、竜帝さん！
私は貴方を応援しています！
「りこ？　まさか……プリンも口に出来ぬほど、体調が？！」
あ、まずい。
ハクちゃんに、心配かけちゃ駄目。
「ううん、食べるよ。体調はなんともないし、時間が経てば自然にお腹が空いてくるから心配いらないよ？　……でも、えっと、そのお」
竜帝さんがチキン越しに、私とハクちゃんをじーっと見ていて。
あ～んはちょっと……いえいえ、かなり抵抗がっ勇気がっ！
ああ、女神様の視線が痛いです。
「なぁ、おちび。飯の時は、いつもこうなのかよ？　お前も災難だよな～、ま、勘弁してやってくれよ。じじいは古代種系だから、雌への給餌行動に執着すんのもしょうがないっつーか……」
竜帝さんは青い眼を細め、言った。
んー、ちょっと知らない単語が混じってたな。
首をかしげた私に、竜帝さんは。
「これは古～い求愛行動の１種でよ。ま、今時こんなことする竜族はめったにいねぇんだ。　俺様も初めて見たな～。ええっと、つまりだ！　じじいは飯の度におちびに求愛……交尾させて下さいって、お願いしてるようなもんだ。超俺様節操無し自己中鬼サドじじいに、

そこまでさせるとは。すげえな、おちび！」
「きゅっ、求愛……こ、こ、こう？！」
な、なんですとー！
私はテーブルの上でスプーンを差し出している小さな旦那様を、凝視してしまった。
確か……カイユさん達の前だけじゃなく、支店の子供達の前でも！
ひいぃぃ～っ、なんてことを！
「へ～、そうなんすかぁ。知らなかったなぁ、俺。単に旦那の趣味なのかと……ハニーは知ってた？」
「ええ。トリィ様……実は私の父が、その古い性質が強く出た珍しい個体だったんです。でも、ほとんどの者は知らないと思います。博識なバイロイトは、すぐに察したようですが」
カイユさんは大皿に盛られたサラダを竜帝さんのお皿に取り分けながら、言った。
「野菜もお食べ下さい、陛下。……それに、陛下の言葉は大げさですわ。ヴェルヴァイド様の行動は求愛というより愛情表現のような、可愛らしいものです。父の給餌行為による求愛は、見るに耐えない様でしたから。ヴェルヴァイド様はきちんとカトラリーを使用なさいますが、父は口移しでの給餌を強要して最悪でしたわ。普通の竜だった母は、竜騎士の父に力で抵抗することは敵わず。いつもいつも、家中逃げ回って……あの2人が居ると落ち着いて食事をとることは、全く出来ませんでした」
うわ～、それは凄いというか大変というか。
ハクちゃんはそこまではしないもの、良かった……。
上には上がいるんですねぇ。
カイユさんのご両親……いつか会ってみたいな。
私は娘さんに、お世話になり通しなんですってご挨拶を……。
「あのセレスティスが？　俺様には、想像出来ねえな～。ミルミラも大変だったんだな。……その異常な家庭環境が、カイユの性格をここまで凶悪凶暴にし……ぼぐぎゃっ？！」

竜帝さんの口に。
メロンが、メロンが丸ごと突っ込まれっ？！
「ほほ、陛下ったら……食物繊維を補うために、皮付きで食べたいなんて！　しょうがないですわねぇ……さあ、どうぞ」
カイユさんはにっこりしながら。
メロンを竜帝さんの口に、押し込んだ。
「ほい、姫さんもどうぞ」
ダルフェさんが一口サイズにカットしたメロンをガラスのお皿にのせて、私の前に置いてくれた。
ハクちゃんはそのメロンを見て、眼を輝かせた。
「おお！　これはココラテではないか。りこ、プリンも良いがココラテもぜひ食べてくれ！」
あの、ダルフェさん、ハクちゃん。
竜帝さんとカイユさんの様子が、なんか変なんだけど気になりませんか？
「う、うん。分かった。ね、竜帝さんとカイユって……」
ほっといて、いいの？
「ん？　あの2人は幼馴染で、いっつもああなんだよ。気にすんなって」
ダルフェさんはサンドウィッチを頬張りながら、二カッと笑い。

「りこ、りこ！　あ～んだ、あ～ん」
痺れを切らしたハクちゃんは、プリンののったスプーンで私の下唇をつんつんし始め。

「あら、陛下ったら。もう1個、入れてくれ？　ココラテは免疫力を高め、さらに疲労回復効果がございますから怪我人の陛下にぴったりですわ。はいはい……何個でも召し上がれっ！」
なんと2個目を竜帝さんの口に無理やり押し込もうとして……。

「ほぎぇほぎぇーへめろーががっんが！」
竜帝さんは、カイユさんの腕を掴んで必死な顔（あんなに美人さんなのに、お口が……お口がああああ）で抵抗し。
これはこれで。
平和な日常なのかな、うん。

「りこぉ！　早くあ～んだ、あ～ん」
「うん、ごめんね。……あ～ん」
ダルフェさんの作ってくれたプリン。
濃厚で、なめらかで。
とっても美味しい。
食べると元気が沸いてくるような、優しい味。
思わず微笑んでしまう。
「そうか、美味いか。良かったな、りこ」
そんな私を見るハクちゃんは、金の眼をくるりと回し。

「しっかり食べて体力をつけ、身体を丈夫にし……我と毎日、交尾できるようになろうな？」

「へ？」

なっ……うひぃっ～！！
出た、出ちゃいましたよ！
周囲完全無視のデリカシーゼロ発言がぁぁぁぁああ！

「旦那～、そんなにがっついたら、姫さんに逃げられちゃいますぜ？　こないだ貸した＜これで彼女も必ず落ちる！　さり気に誘おうラブライフ　初級編＞、ちゃんと読んだんですかぁ？」
ダルフェさん！

またまた、そんな変な本をハクちゃんにー！

「ヴェルヴァイド様……なぜ貴方様はそうなんですかっ！　トリィ様への言動・扱いは慎重になさって下さいませ！　人と竜は色々と違うんですよ？　ダルフェっ、お前の貸した本は全く駄目じゃない……この役立たずがっ！」

カイユさんは立ち上がると、ダルフェさんの頭に拳骨を落とし。

鈍い音が不気味に響き……ひええ～！

ダルフェさん、テーブルに突っ伏して動かなくなったんですが！

「ぶごぎゅげー！！」

ごとん。

ごろごろ～ん……。

あ、竜帝さんのお口からメロン（ココラテ？）がっ！

吐き出されたメロンが、床をコロコロと……。

「＜青＞！　口に入れた物を出すな、汚いぞ」

ハクちゃんは、両手を腰にあて。

ふんぞり返って、むせている竜帝さんを注意した。

「ごふ、ごふっつ！　……て、てめえのせいだろうが、じじいー！」

こ、これはこれで……。

平和な日常？

「まったくお前達が居ると、騒がしいな。落ち着いて、あ～ん、が出来んではないか！　……なあ、りこよ？」

あ、あのですね、ハクちゃん。

一番の問題は貴方のその、謎の感性、かもよ？

「に、賑やかでいいんじゃないかなぁ～。うん」

これは、これで。

ま、いいか。

って、ことにしましょう！

十数分後。

意識を取り戻したダルフェさんは。

幸せそうな笑顔を浮かべ、頭を左右に軽く振って。

「やっぱ、ハニーの拳は最高だなぁ～！　おかげで大事な件を思い出したよ。旦那と陛下が面白くて忘れてたなぁ～。……姫さん、飯が終わったら会って貰いたい奴等がいんだけど、いいかい？」

ダルフェさんの言葉に返事をしたのは、私ではなく。

ハクちゃんでもなく。

「あら？　ダルフェ、お前は……この私に相談も無く、決めたのね」

カイユさんが、空いた食器をワゴンに下げながら言った。

涼しげな水色の瞳が、涼しいを通り越して冷たい印象に一瞬で変わり……。

ひえ～っ。

カイユさんのこういう眼は、とんでもなく迫力満点というか。

そんなカイユさんに、ダルフェさんは優しく微笑み。

「ごめんね、ハニー。ハニーだって、パス達を見捨てられないだろう？」

ダルフェさんは、立ち上がると。

カイユさんの華奢な手を取り、細い指にキスを落として。

「……後で好きなだけ、教育的指導をしたらいいよ。ハニーの気が済むまでね」

「……そうさせてもらうわ」

カイユさんはそう言うと。

ダルフェさんの手から、自分の指をするりと引き抜き。

ごすっ。

「ぐおっつ！」
ひょえ～！
ダルフェさんのお腹に、拳を1発入れて言った。
「あの馬鹿共を、さっさと呼んで来い！」
2人のやり取りに口を挟めず、はらはらしながら見ていた私に。
「おい、おちび」
ゆっくりと椅子から腰を上げた竜帝さんは。
「俺様は執務室に戻る。ま、後はよろしくな」
片手に骨付きソーセージを持ち、齧りながら温室から南棟廊下へ続く扉に向かって歩き出し。
ドアノブを包帯に包まれた手で回しつつ、振り返り。
「明後日から、教師を此処に寄越す。詳細は後でカイユに伝えとく。……これから大変だが、頑張れよ、おちび」
「は、はい！　ありがとう、竜帝さん」
柔らかく微笑む美貌に、くらくらしつつ。
私は思わず、頭を深々と下げた。
だって。
竜帝さんの怪我の原因は、私が関係しているはずで。
しかも、彼のお城の一部や薬草園を壊してしまった。
でも。
竜帝さんは私を一言も、責めない。
きっと、彼には分かってるのに。
私がこの世界を一瞬でも、見捨てたことが。
親切にしてくれた皆を切り捨てて、あの人の事だけを……。
私は、私はっ！
そんな私に竜帝さんは、ソーセージをくるくる回し。
「……俺様に、そんな礼をとるんじゃねぇよ。ったく、自分の立場

を全く分かってねぇな。ま、それがお前の良いとこか」

頭を上げられない私に。

「おちび、じじいをよろしくな。前にこの世界を愛してくれと言ったが、撤回する。お前はじじいだけ、想ってくれてれば良い。そのほうが良いんだ、きっと……じゃ、またな！」

私は何も言えず。

竜帝さんが扉から出て行くのを、見送った。

第６０話

ダルフェさんに連れられて、昼食後に現れた3人には見覚えがあった。
泥棒のおじさんを追いかけて消えた少年達と。
今朝、ハクちゃんとお話してた女性……ヒンデリンさんだ。
高い位置で結われた群青色の長い髪、雪が降る前の空のような灰色の眼。
「旦那、姫さん。こいつ等は……おいっ、ヒンデリン！」
彼女はダルフェさんが何か言おうとしてるのを遮るように、進み出て。
「私の名はヒンデリン。青の竜騎士です。今回、私の愚かさが貴女を危険にさらす結果を招きました。この剣で、私をお好きになさって下さい。……ヴェルヴァイド様。幼い2人の分も、私が罰を受けます。この幼竜達は、お許し下さいますよう……」
腰から剣を抜き、銀色に反射するそれをテーブルに置いて。
ヒンデリンさんは、深々と頭を下げた。
見慣れぬ大きな刃物と言われた内容に、ぎょっとした私の様子に気づいたカイユさんが。
「ヒンデリン……トリィ様は、剣など触ったことのない方よ？　こんな物騒なもの、置かないで。トリィ様が怪我でもしたらどうするの。ここに居る全員の首が飛ぶだけじゃ、済まないわよ？」
カイユさんはテーブルから細身の剣を取り、それヒンデリンさんに投げ返した。
剣は縦にゆっくり1回転し、ヒンデリンさんは慣れた仕草で柄を掴み。
「……配慮が足りず、済まない」
カチンッと、腰の鞘にしまった。
か……かっこいいです、ヒンデリンさん！

お侍さん（ちょっと違うかな？）みたいです。
「へ～！　カイユさん、マジで奥方様の侍女やってんだ。かなり意外なんだけど。あ、僕はパスハリスだよ。パスって呼んでいいよ。で、これはオフラン。オフは僕の舎弟だよ、ぱしりに使っていいからね」
ヒンデリンさんの後ろから、ひょこんと顔を出したのは。
癖の強い金茶の髪を無造作に編んだ、中学生位の男の子。
いたずら好きな子猫みたいなアーモンド形の瞳は、薄いブルー。
子供らしい丸みが残った輪郭は、支店のミチ君達と同世代のように見えたけれど。
身長は……なんと、竜帝さんと同じくらいある。
だからミチ君達よりも、年齢がいくつか上だと……それにしても、この子は背が高い。
ハクちゃんにちびと言われた竜帝さんだけど、日本人から見たら長身で……１８０センチはあったと思う。
パスハリス君は顔付きはすごく幼いのに、背だけがひょろりと高くて……。
パスハリス君の言葉に、隣に立っていたもう1人が反論した。
「誰が舎弟だ！　黙れ低脳竜。　奥方様、先ほどはこの馬鹿共々失礼致しました。俺はオフランと言います。以後、お見知りおきくださいませ」
パスハリス君より頭1つ分背の低い彼は、子供らしからぬ優雅な動作で挨拶してくれた。
柔らかそうな淡い茶の髪がふわりと揺れ、大きな翡翠色の瞳が私の膝に視線を……。
「……」
彼は何も言わなかった。
どうやら「見なかったことにしよう」と考えたらしく、不自然に眼を逸らしたのを私は見逃さなかった。
ううん、ハクちゃんったら子供にまで気を使わせて～！

ごめんね、オフラン君。

昼食に使ったテーブルは長方形で、かなり大きい。
納戸にある椅子を足せば、全員座れるのに。
ダルフェさんがすぐに帰るから、必要無いって言って。
座ってるのは、私だけ……かなり居心地が悪い。
座った私の右隣にはカイユさんが立ち、その表情はいつもより少し険しい。
ダルフェさんはテーブルの向こうに、3人と共に並んでいた。
お揃いの青い騎士服を着ているせいか、4人並ぶと迫力ありますね。
皆さん、長身ですし……幼竜の2人だって大きくて。
私って竜族の人達から見たら、子供以下のおちび……だからハクちゃんだけじゃなく、カイユさん達も私に過保護気味なのかな～。
それにしても、ハクちゃんや竜帝さんもそうだったけど。
竜族の人達って髪と眼のカラーが、1人1人全く違う。
クリスマスカラーのダルフェさんに初めて会った時も、かなり驚いたっけ。
セイフォンの人達は、普通の西洋人と変わらなくて。
異世界も人類は地球と大差ないんだって、思ってたから。
今までの常識で有り得ないダルフェさんの色の組み合わせに、ここは異世界なんだって改めて思って……。
このヒンデリンさんの群青の色も、すごく綺麗。
ついつい視線が……。
そんな私に気づいたヒンデリンさんは、髪色に見蕩れてるとは考えなかったらしく。
眼が合うと、ちょっと不思議そうに灰色の眼で私を見返して。
微かに首を傾げた。
その仕種がちょっと意外で……可愛くて。
彼女の印象は、私が今朝感じたものとずいぶん変わった。

さっき。
剣を鞘にしまってから、ヒンデリンさんは私の側に来て。
「緊張して、忘れてました。どうぞ」
微かに微笑みながらくれたのは、淡い黄色の小花が可愛らしいピンクのリボンでまとめられた花束だった。
そういえば、ずっと左手に下げてましたね。
内心、気になってました。
だって、初めて見る種類のお花だったから。
無数の金平糖で出来たみたいなそれは、すご〜っく可愛くて。
窓から差し込む日光にきらきら反射して、とっても不思議で。
もしかして私にくれるのかな〜って、期待してました。
こんなずうずうしい女で、すみません。
お礼を言って受け取ると。
柑橘系の良い香りがした。
憶えのある香り……。
あっ、ダルド殿下のマントだ。
彼への……セシーさんとミー・メイちゃんへの手紙、まだ書き終わってなかったっけ。
今夜、続きを書こう。

「姫さん、こいつ等は俺と同じ竜騎士だ。城の警備も俺等の仕事なのに、捕まえてた侵入者を不手際で逃がしちまった。姫さんを怖い目に合わせて……すまなかった。で、まあ。早い話が、姫さんから旦那に、ちょこっとお願いしてくんないかなぁ〜」
ダルフェさんは私の膝で丸くなったまま、微動だにしないハクちゃんを緑色の眼で……チラリと見て言った。
そして……端正な顔に似合わない、引きつった笑みを浮かべた。
どうしたんだろう？
もしかして、ハクちゃんと念話で話したのかな？

「私がハクちゃんに、お願い……あっ、分かりました！」
なるほど、そうだよね。
ハクちゃんは、私の夫だもの。
「ハクちゃん！　ハクちゃんからもお礼言って、お礼！　私、この子達のおかげで攫われなかったの。この子達が泥棒のおじさんを追い払ってくれたから……ね、ハクちゃんも皆さんに、ご挨拶して下さい」
「へっ？　姫さっ……ま、いいかぁ」
私は膝の上で円くなっていたハクちゃんを、ひょいっとテーブルの上に移動させた。
ハクちゃんは昼食が終わってからずっと私の膝で丸くなって、眼を閉じ静かで。
寝てはいないはずなんだけど……疲れちゃったのかな？
目玉が真っ白になったくらいだし、ここへ戻って来た時もなんか様子が変だった。
ダルフェさんがヒンデリンさん達を連れて来ても、体勢を変えず。
一瞬薄目を開けてちらりと見ただけで、完全に無視していた。
私の膝で丸くなって、動かない。
疲れてるにしろ、あんまりなその態度。
でも。
失礼極まりないその態度を、諫める人は誰もいなくて。
全く普通に会話が進められていき……。
私は内心はらはらしていたので、これはチャンスと……。
「パスハリス君とオフラン君、さっきはありがとう！　ヒンデリンさん、お花をありがとうございました。とっても嬉しいです！　えっと、私はとりい・りこです。トリィって呼んで下さい。ご、ご存知かと思いますが、このハクちゃ、ハクのつがいです。先日からここで、お世話になっています。夫共々、ご迷惑をかけることも多いかと思いますが。あ、もうかけちゃってるんですがっ……よ、よろしくお願いしますっ！」

立ち上がって、頭を下げて挨拶した。
かなり緊張してしまう。
帝都に来て早々に、竜帝さんを病院送りにしちゃったし。
薬草園周辺も、めちゃくちゃにして。
私とハクちゃんはお城の人達に、迷惑掛けてる……ものすごく。
それに。
一ヶ月以上この世界に居るけれど。
ハクちゃんの妻として誰かに挨拶するのは、初めてでして。
ううっ、結婚後に旦那様の友人や上司に挨拶するのって、こんな気分なのかな？
語彙が少ない私には、この程度のレベルの挨拶しか……だ、大丈夫だったかな。
恐る恐る顔を上げた私が見たのは。
生真面目な表情のままのヒンデリンさんと。
ポカーンと口を開けた少年2人と。
額を押さえるダルフェさんだった。
え、やだっ！
私、失敗しちゃったってこと？
うろたえる私に、カイユさんは水色の眼を細め。
頭を下げたときにずれてしまった、髪に挿した白い八重咲きの花に手を伸ばし。
丁寧に直してくれながら、言った。
「トリィ様がヴェルヴァイド様の〝つがい名〟を口にされたので、少々驚いただけですわ。貴女様は人間で……異界人ですから。人前でヴェルヴァイド様を〝つがい名〟でお呼びになっても、全く問題ございません。ヴェルヴァイド様だって、トリィ様を〝つがい名〟でお呼びになってるんですし……ねぇ、役立たずもそう思うでしょう？」
カイユさん……なんか無理やり感が。
「う、ま、まあなぁ。餓鬼共にはちょっと、刺激が強かった気も…

…」

ちょっと、やっぱりどこかおかしかったんじゃないですか！

はっきり言って下さいよぉ～、今後の為に！

「カ、カイユ！　私っ」

「りこ」

私の言葉を遮ったのは。

テーブルの上に座った、小さな旦那様だった。

気だるげにだらりと伸ばしていた短い足で、ピョンッと立ち上がり。

顔を私に向け、金の眼をくるりと回し。

「りこ、我は着替えてくる」

え？

着替えって……人型になるってこと？

全員の視線が、テーブルの上から私を見上げる白い竜に集中した。

ハクちゃんの姿がテーブルの上から消えると。

「はぁ～……ったく、参ったなぁ。完全無視ときたかぁ……ありゃ、かなり御機嫌斜めだぜ」

ダルフェさんが腰に手を当て、深いため息を吐き出して言った。

ヒンデリンさんは、灰色の眼を細め……ゆっくりと頷き。

パスハリス君とオフラン君は。

「うぅ……僕、吐きそう。ちびらなかった自分を、褒めてやりたい！　怖かったよぉ～」

「俺も、同感……はぁ、限界だ」

その場にストンと、しゃがみ込んでしまった。

あれ？

ハクちゃんは今までで1番、大人しかったと思うんですが？

挨拶とか、会話とかは、やっぱり無理だったけど……文句の1つも言わなかった。

支店でのお茶会前みたいに、うじうじもしてなかった。

あの時は承諾してもらうのに、けっこう大変で……うう～、思い出すと赤面しちゃいそうだから考えるの止めよう。

で、今回は。

竜騎士の皆さんに会うのは「かまわん」って、すんなりオッケーだった。

私の周囲から、他人を排除したがった彼も。

きちんと結婚したら、そんな態度も少し軟化してきて。

街に私を連れ出してくれる気になるほど、気持ちに余裕が出て……。

良い方向に変わってきたかもって、私はそう感じてたんだけど……あれれ？

心配になり、側に立つカイユさんを見上げたら。

「トリィ様。気になさらないで下さい。この子達は……緊張しすぎただけですから。ね、そうよね、ダルフェ」

カイユさんはそう言って、ダルフェさんに水色の眼を向けた。

「あ～、まあ、そういうことで。うん。……おい。パス、オフ！

お前ら、旦那の人型を見るの初めてだったなぁ？　旦那の顔見て、ちびんのだけは勘弁してくれよぉ？」

ダルフェさんが座り込んだままの少年達の頭を、ぱしぱしと叩いて言った。

ううっ、私はすっかり慣れちゃったけど。

ハクちゃんの顔、確かに怖いもんね……一応、美形だけど。

基本的に無表情で、愛想皆無。

甘さのない冷めた美貌は、好感度どころか……いや、でもですね！

よ～く観察してもらえれば、微かな変化があるんだけどな。

感情で眼差しも変わるし、目元もちょっと動いたり……けっこう可愛いの（ぽっ）。

なんたって、微笑むという必殺技も習得できたんですよ、ハクちゃんは！

「……さあ、＜ヴェルヴァイド＞のお出ましだぜ」

ダルフェさんの言葉に、皆の目が居住区へと繋がる扉に集まり。
内側からゆっくりと開いた扉から。

現れたのは、白。
全てを覆い、染め替える様な強い純白。

まるで。
絵本に出てきた、綺麗で冷たい＜氷の帝王＞と呼ばれた魔物のような。

「……ハクちゃん？」

白い服を着ていても。
貴方はやっぱり、魔王様だった。

なんで黒い服より、魔王様パーセントが上がっちゃうの？

第６１話

着替えて戻ってきたハクちゃんは、全身真っ白。
真珠色の長い髪が白い外套に流れ、揺らめき。
緩やかに波打つ髪の間から覗く襟には、優美な曲線が眼を引く金細工の装飾が施され。
外套の下も白い服で、ダルフェさん達の着ている騎士服に良く似たデザインだけど……丈が少し長い。
うわ～、似合う。
すごく、似合ってます。
天使のように白づくめなその姿。
なのに、なぜ。
天使とは、全く逆の方向に？
白い服を着たのに……ミカエル様じゃなく、ルシフェル様になっちゃった。
ああ、魔王様をイメチェンさせるには。
こうなったら、ピンクしかないのかも。
ピンク……ハクちゃんに、ピンク？

「ひいぃっ～ぃ！　な、なんつうか、そのっ……怖いって、これは！　直視はヤバイでしょ？　魂抜かれそうだし。すんげぇ～良い男なんだけど、だけどぉ～！」
パー・ペー系のピンクを着たハクちゃんを、脳内で想像しかけ……パスハリス君の高い声のおかげで、完成はしなかった。
彼は座り込んだまま腕で顔を庇うようにして、何気に酷いことをさらっと言った。
うう～、確かにハクちゃんは悪役系美形だけど、微笑むとすごく綺麗で、素敵なんですから！
「俺……陛下がじじい、じじいって言ってるから、実は老人を想像

していた」
青ざめた顔のまま、オフラン君がぼそりと呟いた。
な、なんですってぇー?!
確かにハクちゃんは超高齢らしいけど。
あ！　おじいちゃんでよぼよぼだから、私の膝で休んでるのも仕方ないかって思ってました?

少年達の少々失礼な感想など、まったく気にする様子はなく。
こちらに向かって、ゆっくりと歩きながら。
ばさりと外套を払い。
長い指を持つ手に、白い手袋をきゅっとはめて……。
え……手袋?
初めて見た……何故に、今ここで手袋が必要?
「ハクちゃん?」
「……りこ、ここへ」
ハクちゃんは片膝をつき、両手を広げて私を呼んだ。
私は立ち上がり、魔王様度5割り増しで登場した旦那様に駆け寄り。
抱きつく寸前で、止まった。
どんなに　魔王様パーセントが上がっても。
貴方を怖いとは、思わない……思えない。

でも。
少し不安になって、貴方の胸に飛び込むのを躊躇ってしまった。

黒い服にこだわっていた貴方。
貴方は、言ったよね?
私が好きだから、黒い服を着るんだって。
今朝も黒を選んだ貴方が、自分の意思で白い服を……。
不安になってしまうのは、私は自分に自信が無いから。

貴方が私を愛してくれてるのは分かってる、知っている。
でも、私……貴方と釣り合うような人間じゃ無いもの。
パスハリス君達だって、おじさんに抱えられた私が貴方の妻だと察して……意外そうな表情をしたのよ？
さっきだって、変な挨拶しちゃったみたいだし。
こんな私が、貴方の奥さんで……貴方はどう思った？
「……わ、私……きゃっ？！」
ふわりと身体が浮き。
大きな手で腰を抱かれて、高く掲げられた。
2メートルを越えた長身のハクちゃんにそうされると、視界がとんでもなく高くて……。
おちびな私でも貴方の金の眼を、怜悧な美貌を見下ろせてしまう。
「どうした？　そのような浮かぬ顔をして」
そう言って。
切れ長の眼を細め、首をかしげる貴方。
蕩けるような優しい金色に、情け無い顔をした私が映っていた。
「りこ、我のりこよ。我の可愛い人、愛しい宝物。どうしたら、笑んでくれるのだ？　我はりこの笑顔が大好きなので、笑んでくれるなら何でもするぞ？」
言われたこっちが困るような甘い言葉と、おでこへの優しいキスで。
ハクちゃんは私の不安を、すぐに消してくれた。
摩訶不思議な思考回路で、デリカシー皆無なハクちゃんだけど。
私の変化に、妙に聡い時もあって。
やっぱりハクちゃんは、大人の男の人なんだと思う。
私は、そんな彼に甘えっぱなしで……。
「ハクちゃん、あのっ……うひゃっ！」
いきなり。
ぺろりと左頬を舐められた。
その舌は、私が知ってるものより熱くて。

セイフォンに居た時から、ハクちゃんは舌をよく使っていた。
だから普段との違いは、すぐに分かった。
ハクちゃんは私が泣くと一生懸命に涙を舐め、慰めてくれて……。
彼は自分の鋭い爪を、とても気にしていた。
だから柔らかく温かな舌を、手の代わりにしていたんだと思う。
私を傷つけない為に、小さな手をいつもぎゅっと握っていた優しいハクちゃん。
私はハクちゃんが発熱してるんじゃないかと、心配になり。
竜騎士の皆様の視線を気にしている場合じゃないと、ハクちゃんの顔に両手を伸ばした。
おでこや頬をぺたぺた触って、体温を確認してみる。
う～ん、お肌はいつもと同じ。
ひんやりつるつる、シミ1つ無い完璧な美肌でございます。
おでこにキスしてくれた唇も、いつもと変わらずひんやりしていたし。
「大変、ハクちゃん！　舌だけ、すごく熱いよ？　熱があるのかもっ。……きゃ！　ちょっ、やぁ……んっ！」
右の耳を咥えられ、熱すぎる舌で丹念に舐られて。
自分でも驚くほど、全身がびくびくと跳ねてしまい。
慌てて手で、自分の口を押さえた。
へ、変な声が出ちゃったというか、その、あのっ！
「そうか、舌が……ふむ。なるほどな」
ハクちゃんは、私の耳に冷たい唇を軽く触れさせたままで言った。
う、うわぁああ～！
耳に息が、息が……ひえぇ～っ！
私はますます焦ってしまった。
ううっ……昨日のこと、思い出しちゃうよ。
考えちゃ駄目、私！
思い出したら駄……。
「りこよ、知っているか？　りこは我に耳をこうされるのが、好き

なのだぞ？　他にも……もっと詳しく、いろいろ聞きたいか？」
ひっ……ひいいいい～！
なんですとぉ？！
普段以上に艶のある声音は、私の鼓膜まで溶かしてしまいそう。
聞き惚れちゃうような良い声だけど、言ってることは……そんなこと、ここで言わないでよ！
まったく、恐るべし謎の思考回路です。
「お、教えてくれなくていいから！　うう～、心配したのに……ハクちゃん、元気みたいだね？」
子供のように縦抱きにされてるから、私の視界にはハクちゃんだけですが。
あ、あのですねっ……後方には、未成年2名と大人3人のギャラリーがいるんですよー！
貴方からは、皆さんの様子がよ～っく見えてますよね？！
「真っ赤だな、りこ。その顔、とても良い……顔だけでなく、全身を染めあげてしまいたい。……次はりこが寝入っても、我は止めてやれんぞ？」
魔王様はほんの一瞬、目元をうっすらと染め。
私にだけ聞こえるような、小さな声で囁いた。

そ、それって、あのっ……？！

もし2人っきりだったら……流されて、恐ろしいことを口走りそうです、私。

だって、改めて自覚したんだもの。
私はどんなに貴方が好きか、貴方が大切か。

もし私が、人間じゃなくて竜族だったら。
1週間でも1ヶ月でも、赤ちゃんが出来るまで。

貴方に毎日、いっぱい愛してもらえるのに。

私のお腹に、貴方の赤ちゃん……。
貴方が望んでくれるなら。
私はハクちゃんが欲しいだけ、何人だって産んであげる。
曾お祖母ちゃんは、頑張って8人も産んだんだから。
私だって、頑張ります！

なんか……いろいろ恥ずかしくて、ハクちゃんの肩に顔を押し付けた私の髪を。
大きな手が、優しく撫でてくれた。
「大丈夫だ。寝かしてしまうようなヘマは、二度とせん」
えっ～と、その話題はもう止めましょうよ。
勘弁してくださいませ。
「……先ほど、言いそびれたが。その白い花、とても似合う。我と‘お揃い’だな」
お揃い？
ハクちゃんの鱗と……あ、もしかして白い服も髪飾りとの‘お揃い’を意識したの？
髪を撫でていた手が、私の顔にそっと添えられて。
肩から離され、怜悧な美貌の正面へ導かれた。
「金も白も……あぁ、ぱじゃまも‘お揃い’だな。我とりこは、らぶらぶなのだ」
言ってる内容に合わない、平坦な口調と……真摯な眼差し。
貴方が冗談を言えるほど、器用じゃないって知っているから。
私もちゃんと、答えるの。
「うん、そうだね。とっても、らぶらぶだね」
大きな手が、そっと……優しく左頬を撫でた。
艶のある素材で作られた白い手袋は、見た目と違い柔らかな肌触り。

でも、私は。
ひんやりとした貴方の手に、直に触れて欲しかった。
白い手袋が、私から貴方を遠ざけてしまったみたいで……少し寂しい。
「りこ。……食後の〝おやつ〟だ」
「え？　おやつ……んんっ？」
いきなり、口の中に。
あ、これ……ハクちゃんのかけらだ。
私の口の中に直接、転移させちゃったの？
甘いかけらは、数粒あった。
口の中ので、ほろりほろりと溶けていく。
「りこ。＜我＞は美味いか？　ダルフェのプリンより、美味いか？」
プリンよりって……なにもプリンに、対抗意識を持たなくても。
ハクちゃんって、そういうとこ……妙に可愛いよね。
うふふっ、プリンと張り合う魔王様なんて。
「うん。ハクちゃんが、１番美味しい。　貴方のかけらは、ほんのり甘くて……すご～く優しい味がするの。私、ハクちゃんのかけらが大好きよ」
私を見つめる金の眼に。
指を伸ばして、そっと目元に触れた。
「私は貴方が……どんな貴方も、大好きよ」
かわゆい竜の貴方も、ちょっと怖い魔王様の貴方も。
きっと貴方の想像以上に、私はハクを愛してるのよ？
「どんな我でも……か。ならば、これからも我を側に置いてくれ。りこの温かな手で、こうして我に触れてくれ」
金の眼を閉じ、冷たい頬を。
私の左頬にそっと合わせて、囁く貴方。
あぁ、そうだったんだ……だから貴方は。
ハクちゃんは温室に帰ってきてから、左頬ばかり触れていた。
やっぱり、気にしてるんだね。

もうすっかり治ってるのに、すごく、すごく……気にして。
貴方のその綺麗な金の眼には、私はあの時のまま……頬を腫らせたままに見えてるの？
繊細で泣き虫で……怖がりな貴方。
まだ、怖いの？
まだ、不安なの？
だから……何があったか、誰に叩かれたかすら私に聞かないの？

私、貴方を護ってあげたいのに。
傷つけてばかりだね。

思いのほか数があったかけらは、1粒1粒が時間差でゆっくりと溶けていった。
心に染み入るような甘さを、眼を閉じて味わってると。
徐々に身体の奥底から、じんわりと熱が生まれて……広がって。

「ハ……クちゃ、ん。ハ……ク」

頭の芯が、とろりと溶けていくみたい。
この感じ、知っている。
私、憶えてる。

似てるの、あの時に……。

あぁ、私は憶えてる。
貴方と溶け合い、深く……深く混じり合う、この感覚を。

「ハクちゃっ……んっ」

温室には皆がいるのに、ちゃんと分かってるのに……そんなことはどうでも良くなって。
貴方のことしか考えられなくなってしまい。
心地よい……甘い痺れを全身で味わう。
漏れる吐息を、抑えることも放棄して。

「ふあっ……ん、ハクちゃ……」

身体の内側からも貴方に優しく包まれるみたいな、不思議な感じ……。
貴方で満たされ、溢れそう。
なんだかすご～く、幸せな気分。
ほわほわ、ぽかぽかしてあったかい。
優しく微笑む貴方が……私を身体の内側から、抱いてくれてるみたい。
これが【気】の補充ってことなの？
前より強く貴方を感じられるのは、かけらの数が多かったから？
身体の内も外も、貴方に抱かれて……嬉しくて、幸せで。

「ハク……だい……す……き」

すごく気持ち良くて……気持ち良すぎて、目蓋が徐々に、重くなる。

「りこ……我は」

あぁ、寝ては、駄目。
だって、夕焼けを見に行くんだもの。
貴方とお出かけするの。
普通の恋人同士みたいに、手を繋いで歩いて……。

ハクちゃん、ハク……私、眠りたくない。

「我は、狩りに行かねばならん。夕暮れ前には必ず戻る」

ん……ハクちゃんは、お出かけするの？

狩り？

狩り……お肉を獲りに行くの？

お肉。

あ、竜帝さんにあげるのね？

お見舞いに、お肉をあげるんだ……。

竜帝さんは、お肉が好きだもの。

晩御飯に間に合うように、今から狩りに行くんだね。

うん、待ってる。

帰ってくるのを、此処で待ってる。

貴方が側に居ないと寂しいから、お昼寝してるね。

次に眼を開けたときには、絶対に帰ってきてくれてるでしょう？

いつもみたいに「おはよう」って、言って……キスしてね。

「カイユが側に居る。安心して休むが良い」

うん。

いってらっしゃい。

がんばってね、あ・な・た。

「おやすみ、我の宝物（りこ）」

我の腕の中で寝入ったりこは、うっすらと微笑を浮かべていた。

意識して多く与えたかけらの影響で、思考が少々乱れていたようだが……。

「りこ……」

我の鱗に似た白い花がとても、とても似合っていて。

誰にも見せたくないと思うほど、綺麗だった。

この腕から離したくない。

ずっと、こうしていたい。

百年でも、万年でも……このままで。

そう、強く思う。

しかし、りこを連れては行けない。

連れては……知られてはいけない。

「カイユ」

我はカイユを呼んだ。

「カイユよ、我は自分が思っていた以上に＜竜＞であったようだ。これ以上、抑えがきかん。夕暮れまでは時間があるので、さっさと片付けることにする。お前は、りこの側に。我が留守の間、お前以外が我が妻に近寄ることは許さない。人間も竜も……雌だろうが、幼竜だろうが例外は認めん」

「はい。ヴェルヴァイド様」

カイユも竜騎士。

現時点でこの個体に勝てる竜は、竜帝であるランズゲルグと＜色持ち＞のダルフェのみ。

それほどに、強い雌竜なのだ。

大陸最高位の術士が相手ならば、さすがに分が悪いが……あれが出てくることはない。

あやつは世俗に興味が無い。

ペルドリヌにいくら金を積まれようと、あの埃臭い部屋から動かんだろう。

「……りこ」

我はりこの小さな身体を、壊さぬように抱きしめ。
愛しい香りを胸に吸い込んでから、カイユに預けた。
先ほど、我が与えたかけらは6粒。
数時間は眠り続けるだろう……何も知らず、気づかずに。
カイユが寝室へ移動し、寝台にりこを横たえたのを気配で確認してからダルフェに声をかけた。
奴は竜体の我に念話で詳細を報告し。
幼竜とヒンデリンへの慈悲を、繰り返し懇願してきていた。

「……ダルフェよ。＜青＞は犬の躾けに失敗したようだな」

我は床に座り込んでいる幼竜を見た。
竜騎士はその特異な性質から、ある程度の恐怖心を常に与え御す必要がある。
まだ若いランズゲルグは竜騎士の＜飼育方法＞が身についていないのか、それとも……。

この場で幼竜を縊り殺すのは容易いが……、まずはこやつだな。
「旦那、勘弁してやって下さい。青の竜騎士は俺を含めて、現在8人しかいねぇんです。竜族全体の個体数が激減してる状況じゃ、こんな馬鹿餓鬼でも失うのは痛いんですよ。姫さんに面通しもしましたし……ぐがっ！」
我は＜赤い髪＞の頭部を正面から掴み、床に叩き付けた。
これはりこの‘お気に入り’なので壊しはせぬが……。
「貴様……りこの心を利用したな？」
動かなくなったそれは放っておき。
幼竜に歩み寄り。
身を屈め、一方の……翡翠の眼をしたほうの幼竜の左頬に手を伸ばした。
「我のりこは、人間だ。お前等と違い、弱く脆い身体は簡単に壊れ

……命が消える」
幼竜は石の様に硬くなり、微動だにしない……動けぬのだろう。
怯えることすらできぬ状態に陥ったのか。
一瞬でも抗えば、首をねじ切ってやろうと思っていたが……つまらんな。
「青の猟犬共よ。真実から遠ざけられている我が妻は、お前等の過ちを全く理解しておらぬ。それゆえ、礼まで口にした。我がお前等を処分する可能性があるなど、考えもしない……りこは、それで良い。気づかぬままで、無知なままで良い。……今回は見逃してやろう。だが、次は無い」
我は意識して【気】を抑えることにした。
りこが側におらぬと、感情に引き摺られ【気】が常より強まってしまうようだ。
感情……か、この我が。
りこが我に‘感情’を与えてくれた。
愛しさも喜びも……恐怖も怒りも、貴女が我に教えてくれたのだ。

さて。
これらを使い物にならん状態のまま、放置するわけにはいかんな。
生かしておくなら……使うとしよう。

もう1頭の幼竜の頭が、壊れた振り子のように動き。
ダルフェがゆっくりと、立ち上がった。
頭蓋を砕いた程度では、堪えておらんか。
＜青＞もダルフェも、我の思っていた以上に頑丈だな。
ふむ、次はもう少し強くするか。
「ダルフェよ。その愚かな猟犬共を、市街に放て。ヒンデリンは城内に入り込んだ鼠を始末しろ」
「御意」
幼竜に手を貸し、立たせていたヒンデリンは我の命に従うべく退

室した。
ヒンデリンは、りこを喜ばせた。
りこは花が好きだ。
とても嬉しそうだったので、ヒンデリンの過ちは不問だ。
ダルフェは赤い頭を擦りながら、言った。
「いててっ、……手加減感謝しますよ、旦那。で、方針転換ってことですかぁ？　ま、旦那がそう言うなら。でもねぇ、本当にそれでいいんすか？　もし、姫さんに知られたら……」
鮮やかな緑の眼に、戸惑いが滲む。

「かまわん」

りこは何も知らぬまま。

「誰がりこに教えるというのだ？　そのような者、この我が見逃すはずなかろう？」

我が用意した＜世界＞の中で。
我の側で、微笑んで……りこは我を、愛してくれるだろう。
虚構に気づいた時には、我から離れることなど考えつかぬほど……我は貴女に愛されてみせる。
我はりこの全てを。
心も身体も魂も。
あの人の全てを、手に入れるのだ。

「帝都に入った間者は、全て消せ」

過ぎた恐怖は得策ではないと思い。
他にも策はあると、最善のものは何かと考えていた。
だが、もう考えるのは止めだ。

考えられぬほど、我を怒らせたのは人間共だ。

「現在、帝都にいる者も。今後、入ってくる者も」

抑えようと思った。

貴女の為なら、脊髄を焦がし焼き切るような怒りにも耐えられると。

「殺せ」

だがな、りこ。

頬を腫らした、貴女の痛々しい姿が。

脳裏に焼き付き、消えない。

このままでは、狂いそうだ。

貴女の好む‘優しいハク’になりたかったのに。

我には無理だ。

所詮は模倣。

安っぽい鍍金と同じで……偽りのそれは、簡単に剥がれ落ちる。

これが感情を得た、代償なのか。

「……仰せのままに、ヴェルヴァイド様」

＜赤い髪＞が恭しく頭を下げ。

幼竜共もそれに習い、恭順を示す。

我への敬いの心など、この幼竜共には欠片もない。

我に対する本能的な恐怖から、深く頭を垂れるのだ。

恐怖。

皆、我を恐れる。
それでいい。

りこ、りこよ。
もし。
我の判断が……我のみに向けられていた恐怖心に満ちた瞳を、＜監視者の妻＞である貴女にも同様に向けられる切っ掛けとなり。
貴女の脆い心を、傷つける結果になったなら。

この我が、貴女のハクが。
それを塗り替える程の恐怖で、世界を満たそう。
貴女に目を向ける余裕も無いほどの恐怖と狂気を、人間共に与えよう。
大切な貴女は、宝箱にしまって……けっして外に出したりしない。

全ての憎悪は、この我に。
りこ……愛しい貴女には、優しく綺麗な＜世界＞をあげるから。
安心して、まどろんでいて。

本当は。
黒い衣服が着たかった。

愛しい貴女の髪……。
我が染め替えてしまった、優しい瞳。

我の好きな、聖なる色。

だが。
今の我は。
貴女の色を身に纏うことなど出来ない、してはいけない。

怒りの為か……爪は常より鋭さを増し、鋭利な刃物のようになり。
触れたもの全てを凍らせてしまいそうなほど、冷たくなったこの手では。
貴女の肌に、触れられなかった。
こんな我を知られたくなくて。
手袋で覆い、貴女から隠した。

「さあ、猟犬共よ。【狩り】を始めようではないか」

我は＜白金の悪魔＞

「我の宝に群がる獣を狩り尽くせ」

我は＜冷酷なる魔王（ヴェルヴァイド）＞

貴女に愛されたい、泣き虫な白い竜（ハク）。

第６２話

猟犬共を市街に向かわせ、我は北棟の地下室へと転移した。

「……これか」

北棟の地下室に転がる術士は＜基点＞に短剣を深々と刺され、床に縫い付けられていた。

簡素な木製の柄のそれは、術士の肉だけでなく石の床までも貫いている。

世情に疎い我ですら、一目で量販品だと分かる粗悪な短剣。

混じり物だらけの鋼で作られた柔な刃で、こんなまねが出来る器用な竜騎士は……＜基点＞を見出し、処理したのはダルフェだな。

極めて単純な作業だが、此処まで正確無比に＜基点＞を貫くことは熟練の技がいる。

りこを喜ばせる料理から＜基点＞の処理までこなすとは……ああ、奴は裁縫も得意のようだったな。

つまり。

器用……刃物の扱いに長けているという事か。

＜赤＞と。

ブランジェーヌと同様に。

「……醜いな」

自らの血液と吐瀉物にまみれ、異臭を放つ物体。

人間。

人間？

この醜い物体が、我のりこと同じ種だと？

有り得んな。

却下だ。

これは蛆虫に決定だ。
黄の大陸に生息する大型の蝿の子と、同じような胴回りをしておるしな。
「起きろ蛆虫」
我は＜基点＞の短剣と投与された薬剤を体内から術式で抜き、床に捨てた。
同時に、絶叫が響き渡る。

「ぎぎぃ……ぐぎゃあああああぁぁ！！」

蛆虫が石の床を激しく転げ回る。
その様はまさに、腐肉から転げ出た蛆虫そのものだった。
術式でわざと‘適当’に薬剤を転移させたので、他のものも付随していたのだろう。
小さじ1杯程度であるはずの薬剤だが、床に広がったそれらは面積だけでなく体積もあった。
耳障りな奇声を発し、のた打ち回る蛆虫は未だ我の存在に気づかない。
転げ回り、我の足元に自ら移動してきた。
我は左足で蛆虫を踏みつけ、固定した。
力をこめたつもりは全く無かったが、肋骨他を粉砕したようだった。
その感触は、何故か。
りこが可愛らしい前歯で焼き菓子を噛む時の、さくりとした音を思い出させた。
りこが食物を摂取する光景を思うと、恍惚感すら沸いてくる。
ああ、我も焼き菓子やカチの実のように。
柔らかな唇で銜えられ、あの小さな歯に再び指を食まれた……。
「う、うひぃっ！　か、か、かんしっ！？」

意識を取り戻した術士が靴底で騒ぎたて、支店での‘がじがじ‘を思い出していた我の思考を中断させた。
「うるさいぞ、黙れ蛆虫」
我の一言で蛆虫は静かになり、今度は震えだした。
奇声を発しつつ転げ回り、騒ぎ立て、震えるとは。

「……随分と元気だな」

不公平ではないか？
貴様のせいで、りこは体調を崩したのだぞ？
薬剤と共に臓腑の一部を千切り取っても、このように動けるとは……予想外に丈夫な蛆だ。
ふむ。
極僅かだが、武人の能力も兼ね備えておる。
これは、不公平決定だな。
こやつは異界人であるりこよりも、はるかに頑丈な肉体に恵まれているわけだ。

蛆虫の分際で。

我のりこが昼食で口に出来たのは、プリンだけだっだのだぞ？
食事することを、楽しんでくれていたのに……異界人のりこは普通の人間共より身体が弱く、体力が無い。
だからこそ多くの食物を摂取し丈夫になって欲しいと、食には細心の注意を払うようダルフェに命じていたのに……邪魔しおって！

「貴様は凄いな、蛆虫よ。……この我を、ここまで不快にさせるとは。褒めてやろう」

我は微笑んだ。

人間共が望んだように。
それらにふさわしいであろう種類の笑みを作り、顔にのせる。
悪魔や魔王などという、居もしない＜役＞を我に与えた人間共よ。
その望み、叶えてやろうではないか。

「蛆虫よ、我が思考を読み取れることは知っておるな？」

充血し、濁った目玉が我を見上げ。
前歯を折られた口が、黄色い泡を作り出す。

「触れずに必要な情報を読み取るのは、今の我にとっては造作ないことだが」

昔過ぎて、いつだとはっきり憶えていないが。
ふと、人間という生物の思考回路に興味を持った。

「自分がそのような事が出来ると気づいておらぬ我は、とりあえずこうしてみたのだ」

蛆虫が再び絶叫したが、我はかまわず指をさらに奥まで進めた。

「このように、直接触ってな」

記憶を探り、抉り、掻き回す。

「皮膚を使って読み取ったのだ。何故方法を変えたか？　手が汚れてしまうからだ」

訊かれもせぬのに、喋ってしまう。

我の右手を頭部から生やした蛆虫には、質問することなど不可能なのに……。

そのまま腕を掲げ、眼の高さまで持ち上げる。
指先で脳を弄り、閉じた眼を強引に開けさせた。
汚水の塊のような目玉に、我の顔をしっかりと映させるために。
痛覚・聴覚そして視覚を保つ必要がある。

恐怖をより強く感じさせるには、感覚を鈍らせてはならないのだ。

「我を見よ。恐れ恐怖し、生まれてきたことを後悔し絶望に沈め。安心しろ、貴様はまだ死なん。我がうまく‘中身’を調整しているので、舌を噛み切ろうと死ねんぞ？　ゆっくりと……地獄を楽しむが良い」

何か言いたげに、蛆虫の口角が動いたが。
蛆と会話を楽しむ趣味は、我には無いので無視した。
それに。
喋りたいから喋ってるだけであって、返事は無用だ。
我が常より饒舌なのは。
こうして少しでも感情を吐き出さねば【気】が暴走し、帝都を潰しそうだからか？
もはや、自分でも分析できぬな。
脳髄が煮えたぎり、最近自覚した‘心’が咆哮を上げ……思考力が鈍る。
まずいな。
我はまだ、この世界を壊すわけにはいかんのだ。

りこと夕焼けを見に行く約束をしたのだ。

失くすわけには、いかない。

でぇとが出来なくなってしまうからな。

「……我の大切な妻を」

蛆からは、脳を触らずとも既に記憶を読み取っていた。

こやつがりこに何を言い、何をしたのか。

我のりこに。

「雌蜥蜴と罵り、手を上げたな？　りこのような愛らしい生き物の頬を躊躇い無く打つなど、貴様はこの上なく冷酷な鬼畜だ。……我など、貴様の足元にも及ばぬな」

蛆の記憶の中で、りこは。

頬を打たれたことをすぐには理解できぬ様子で……金の眼を見開いて、呆然としていた。

暴力など知らず、親にさえ手を上げられたことなど無く育ってきたのだろう。

慣れぬ暴力に恐怖し、動けなくなり……。

「さらに稚拙な転移術で、りこの身体を痛めつけるとは……」

この我でさえ……りこを伴う術式での移動においては、徹底した安全管理を心がけているのだぞ！

尽きず湧き出る怒りのために、蛆を殺しそうになるが……耐えた。

まだ、早い。

「まったく……憤死しそうだな。死ねん身体で良かった、りこを未亡人にしなくて済む」

蛆の記憶から、りこに関する全てを奪った。
簡単なことだ。
脳の一部を溶かせば良いだけだ、術式を使うまでも無い。
蛆の脳内に我のりこの姿を置いておくことなど、断じて許せぬからな。

蛆は蝿の子。
子の不始末は親の責でもあると、人間はよく言っておることだし。
ペルドリヌ。
異端の神を崇める、狂信者達の国。
蛆の罪は、蝿の罪。
蝿を放置すれば、蛆虫は増えるばかりだ。
「セイフォンより遠いが、転移すれば一瞬だ。……この距離で術式移動をすると、到着時にはこやつの手足は一本も残っていないであろうな」
本来、蛆とは手足の無いものだ。
それが自然な姿なのだから。
手足など、蛆虫にはいらぬ。

「……手袋は正解だったな。汚らわしい蛆の肉に、直に触らず済んだ」

さて。
まずは、猟犬共の様子を見に行くとしよう。
与えられた仕事がこなせぬような駄犬なら。

「全員＜処分＞だな」

「なんでそれの頭に、手をぶっこんでるんすか？」
答える必要性を感じなかったので無視し、西街を見下ろした。
市街に来たのは何年、何十年前だろうか？

ん？　まだ＜青＞が赤子だっだような……つまり百年以上前か。

ダルフェの視線が我の右手に向けられ、不快感丸出しの体で言った。
「旦那。そんなもん引きずって転移してきて、しかも手を頭に突っ込んだままなんて。……んなのさっさとばらして、どっかに捨てちまえばいいのに」
帝都は中央にある湖の小島に竜帝の城が建ち、城から４本の橋が街へと繋がっている。
市街は東西南北に分けられ、それぞれの街が特色と役目を持っていた。
我とダルフェが立っているのは西街中央にそびえる、この街で最も高い塔……時計台の上だ。
このように高くしては人間には目視できないが、これは帝都上空を行きかう竜の為のモノなので問題は無い。
「これは持ち主に返す。……礼と共にな」
「礼っすか？……旦那のお礼参りを受ける奴等に、さすがに同情しちまいますねぇ。俺だったら旦那が来襲する前に、さっさと自分で死んでます」
眼下に広がる西街は、商いの街だ。
数箇所に市場が常設され、大小数え切れぬ程の商店が並ぶ。
竜族だけでなく人間の出入りも激しい。

単なる買い物客や観光を楽しむ者、取引に来た商人。
それらを収容するための簡易な宿泊施設も多い。
帝都で最も賑わい、雑多な街。
「で、成果は？　返答次第では貴様ら全員の首を落とし、西街を焼き払うぞ」
ダルフェは緑の眼を細め、額を押さえた。
「ったく、勘弁してくださいよぉ。荒れまくってんのは分かりますがねぇ～。……ま、狩りは滞りなく進行してます。半時もありゃ、現在帝都にいる連中は一匹も残りません。今のところ術士１１人、武人８人処理済みです。死骸はまとめてトラン火山にでも、捨ててきますよ」
今日の狩りは恙無く進行し、そして今後も続行される。
我がりこを連れ、大陸を移るまで。
「隠れていた獣まで、うまく見つけたようだな。が、手際が良すぎるな……短時間で事が運びすぎる。＜青＞の契約術士を使ったのか？」
＜青＞が個人契約を結んでいる術士は、我から見てもなかなかの逸材だった。
大陸上位の術士であり、セイフォンの魔女以上に優れた武人の才を併せ持っていた。
＜青＞は良い買い物をしたな、あれは掘り出し物だ。
「いえ、奴は関わってませんよ。……ハニーが先手打ってました」
カイユ？
帝都に到着してから、あれは城から一歩も出ていないはずだが……。
カイユはりこに必要なので、常に城に居るように命じてあった。
気配も常に城内にあったぞ？
「どういうことだ、ダルフェ」
我の問いに、ダルフェは苦笑した。
「さすが【団長】ですよ。陛下が姫さんの後見人の件を諸国に告知

すると同時に、帝都に間者共が押しかけるだろうって、親父殿を市街に配置してたんです。……やっぱ、母親は強いですねぇ～。陛下も俺も……旦那すら出し抜いて行動を起こしてたってわけです」

なるほどな。

りこに対し誓約をするだけのことはある。

カイユが何故、異界人のりこにそこまでするのか、我にも分からぬが……。

「カイユは自分の父親を使ったのか」

「ええ。親父殿が間者共の居場所から何から全て把握済みで、あの人の指示通りにパス達は狩りを行ってます。あの親父殿が出てきたんなら俺の出る幕なんぞ、ありませんよ。……なんたって前団長ですからねぇ」

我はカイユの父親と面識は無いが、ダルフェがそこまで言う相手なら大丈夫だろう。

ダルフェは＜赤＞に似て、個体の能力を的確に判断できる。

近年、益々似てきたな。

血が繋がっているからか？

まあ、そんな事はどうでもいいことだ。

猟犬共の狩りは、問題無いようだ。

ならば……我は、ペルドリヌに行くとしよう。

この蛆を伴ってな。

「ダルフェよ、お前は知っているか？　ペルドリヌが崇める異端の神を」

額に掛かった赤い髪を鬱陶しげにかき上げ、吐き捨てるようにダルフェは言った。

「あ？　興味無かったんで、あの国のことはほとんど知りませんよ。どうせ、ろくでもないモノを神だとか言ってんでしょう？　異端の神？　って……まさかっ？！」

見開かれた緑の瞳に映るのは、我。
＜監視者＞でありながら、時代や地域によっては魔王や悪魔とされてきた人型の我。

「異端の神……ペルドリヌは魔神信仰の教団が興した国だ」

奴等の崇める魔神とは。

「自ら崇める神に、滅ぼされるならば」

我が神？
あまりに馬鹿馬鹿しくて、放っておいたのだが。

「奴等も本望なのではないか？」

神になど、なりたいとは思わない。

「我は、神などではない。……＜ハク＞だ」

なりたいものは、ただ1つ。

第６３話

我が転移した先は、ペルドリヌの王宮にある聖堂内だった。
セイフォンの離宮と同様に白い石材のみで作られ、円錐型の天井を支える太い柱には過度な装飾が施されている。
金銀の彫金細工に色とりどりな貴石が無数に埋め込まれ、それが隙間なく柱を覆い下品な光を放っていた。
中央には祭礼用の純金製の台座が置かれ、絹布の上には赤子の頭程の水晶の珠。
そして……板ガラスで作られた巨大なステンドグラスが最奥の壁を飾り、陽光に輝きながらペルドリの神を浮かび上がらせている。
「これが我だと？　……有り得んな」
白い髪に金の眼。
そして竜の翼を背に生やした異形の魔神。
しかも……頭部に、やたら長い角が２本ときた。
阿呆らしい。
我は牛ではないぞ？
このような化け物が、いるはずなかろうに。
人間の想像力とは、我には理解しかねるな。
「蛆よ、お前もそう思わんか？……む？」
やけに軽いと思ったら。
我の右手に残っていたのは、蛆の頭部のみだった。
蛆よ、貴様……死んでるではないか。
この、根性無しめっ。
まあ、首から下を失えば普通は死ぬな。
頭部以外、どこかの空間に千切り取られてしまったのか。
正直に言うと。

転移中に細切れになってもそれはそれで可、と考えていた。
経験者であるダルフェによると、転移中に肉体を損傷するのは通常時より痛みが増すらしい。
時間の感覚も狂うため、一瞬が永遠にも感じられるのだと……。
――あんたにゃ想像不可能な、この俺でも発狂しそうなとんでもない苦痛ですよ。
以前、恨みがましい目をして言っておった。
つまり。
我が直に手を下すより、数段上の地獄を蛆は味わったということだ。
なので、良しとしよう。
実は……聡いダルフェも流石に気づいておらんので、黙っていたのだが。
我が転移に他者を同行させる場合、また他者のみを転移させるとしても。
どんな長距離移動だろうと、無傷で済ませることが我には可能なのだ……多分。
ようは【やる気】の問題だ。
基本的に、我は【やる気】が無く生きてきた。
【やる気】を知ったのは、りこに会ってからだ。
我がりこに長距離転移の術式を使わないのは、万が一の事を考えると試す気にもなれぬからであって……我は繊細で怖がりな男なので、そのような恐ろしい事は無理だ。
(そして泣き虫なのだと、りこが言っていたな)
【やる気】があっても全てがうまくいくわけではないことを、りこと出会ってから我は学んだ。
それまでの我は【やる気】などとは無縁だった。

そのせいか、どうにもうまく使いこなせてない。

記念すべき初抱っこではりこを落としてしまい、怪我をさせた。
念願の初性交においては、りこの肉体強化に失敗した。
ぱじゃまも我なりに頑張っておるが、まだ1人では着れん。

どれも我としては【やる気】に満ちておったのに……。
「我は【やる気】初心者だからか？　ふむ……あぁ、やっと来たか。反応が遅かったな、探知能力はメリルーシェの皇女以下か」
空間が揺れ、一人の術士が転移してきた。
近距離での転移術に‘揺れ’があるなど、セイフォンのミー・メイの方が術士の才は上だな。
あれは特に転移に優れていた。
魔女を伴った転移においても、まったく‘揺れ’が無かった。
我の気配を感知し現れたその男はペルドリヌの国王であり、教主でもある術士。
りこがこの世界に落とされるまで我が滞在していたメリルーシェの竜宮に、この男は数回訪れていた。
ペルドリヌに新たな竜宮を建立したので居を移して欲しいと願い出て、第二皇女と揉めておった。
だから顔は知っていた。
名は、知らぬ。
名乗っていたが聞く意志が無かったので、聞き流していた。
ダルフェ同様、我もペルドリヌに興味がなかった。
初代教主とは面識があったが。
面識といっても……あの女とは数回、身体を繋げただけだ。
顔すら憶えておらぬし、名も知らぬ。
憶えようとも、知ろうとも思わなかった。
今回の件がなくば、思い出すことも無かっただろう。
あの女は優秀な術士だったが、徐々に我が神だとか訳の分からん

妄想を言い始めた。
あまりに煩いので他へ移り、それっきりだったのだが……こんなことになるのなら＜処分＞しておけば良かったな。
竜体を持つ我が人間以上に術式にたけ、強い力と永遠に等しい時間を生きるのは竜族でもなく、神であるからだ……などと言い。
我は特別な存在で、いつの日か世界を粛清するのだとほざいておった。
そして我を古の魔神信仰と結びつけた……狂った女だった。
我と出会う前から狂っていたのか、我に出会った所為で狂ったのか。
まあ、どっちだろうと関係ないが。
ペルドリヌが他国より我に関して詳しいのは、あの女が異常なまでに我を＜研究＞していたからだろう。
監視者・魔王・悪魔など、どれが最も我の存在を表すのに適したものなのか。
我はいったい何者なのかと、古い文献を掻き集めていた。
我に直接問うてきたこともあったが、我だとて自分の事を全て知っているわけではないし、答えてやる気も無いので無視していたが。
そういえば……我が名乗らずとも女は＜ヴェルヴァイド＞の名もどこからか調べ上げ、我をその名で呼んでいたな。
数多くの人間の女と接してきたが、それは非常に希な事だった。
だから顔は憶えておらぬが、存在は記憶に残ったのやもしれぬ。

いつのころからか、人間共は＜ヴェルヴァイド＞は禍々しい存在……魔王や悪魔などに当てはめるようになり、竜体の我……＜監視者＞とは別物だという考えが広まっていた。
一部の研究者達は＜ヴェルヴァイド＞も＜監視者＞も同一のものだと理解しているようだが、それを声高に叫んだりせず、沈黙している。
今の状態の方が人間共に都合が良いからだと、我は思うのだが。

＜青＞は異を唱えておったな。

一じじいが怖ぇーからに決まってんだろうが！　知れば知るほど怖くなって、黙っちまうんじゃね？

我としては、我のどこら辺がそんなに怖いのか分からんのだ。

長い間、生きてきた我から見ても＜人間＞が最も残虐な生物だったぞ？

我を恐れながらも狂女のくだらん妄想を受け継ぎ、国を興すとは。

人間とは、まったくもって不可解な生き物だ。

「おお！　＜監視者＞様！　御降臨なさって下さったのですな」

声は歓喜に満ちていた。

その男は跪き、言った。

「至高の神よ……お待ち申し上げておりました」

そう言って上げた喜色満面な顔は、次の瞬間には真っ青に変わった。

我が右手の蛆、いや、もう蛆ですらない物体を家畜のような見てくれの中年男……教主に転がしたからだ。

蛆の親は蝿ではなく、豚だった。

まあ、蛆はすでに蛆ですらない状態なので豚でもかまわんがな。

ごろりごろりと白い床を汚しながら、転がった物体。

「返す」

教主は蛆のなれの果てを凝視し、言った。

「こ、これが何か粗相をいたしたので？　末端の術士ゆえ、貴方様への信仰心が足りずご無礼を……？！」

信仰心？

そやつの脳にそのようなものは、欠片も存在してなかった。

あったのは欲望だけだ。

手柄を立て金と地位を得たいという、ごくありふれた欲望だ。

「それは我の妻を侮辱し、手を上げた。つまりお前等ペルドリヌの

民は神と崇める我に、唾を吐きかけたわけだ」
我の言葉に教主……剃りあげた頭に趣味の悪い金細工の冠をのせ、宝石をちりばめた純白の法衣に身を包んだ豚は、震えながら答えた。
歯が鳴る音が、耳障りだった。

カチカチ、カチカチ。

まるで、狂った時計のような音だ。
「ち、違います！　決してそのような意図はっ……異界の姫君を娶られたときき、祝いの品をお送りしたく姫君の好みなどを少しでも把握できればとっ」
喋りながらもカチカチと歯を鳴らす。
さすが二足歩行が出来る豚だ、器用なものだ。
「……我の妻に婚儀の祝いを？」
我の反応に冠を飾った豚は、急に生き生きと語りだした。
「竜族などという原始的な生き物の住処では、奥方様もさぞご苦労されているのではございませんか？……大蜥蜴共になど貴方様の大切な奥方様のお世話を、お任せなされますな。そのお役目、ぜひ我らペルドリヌに賜りますよう。我らは異界の姫を＜女神＞としてここへお迎えいたしたく……」
術士こそが選ばれた存在だという選民思想は、あの女には無かった。

８０年に満たぬ短い期間で次々と教主が変わり、自分達の利益になる教義を増やしたのか。
「このペルドリヌは歴史も浅く、国土も広いとは言えませんが術士を他国に貸し出すことで莫大な富を得ており、奥方様には王侯貴族以上の贅をご用意することが出来ます。選ばれし民の国こそ、貴方様に相応しいのです！　わが国には、世界を統べる＜監視者＞様の手足となる優秀な術士が揃っております。我らと貴方様で無能なる旧人類を排除し、人の皮を被るおぞましい大蜥蜴共を一掃し、新た

な世界を……ひぃっ！」

我は腕を伸ばし、教主の法衣で右手を拭った。

豚の話には興味が無かった。

我は蛆虫の時と同じく、豚と会話を楽しむ趣味は無いのだ。

豚の陳腐な野望より、白かった手袋の汚れの方が気になっていた。

脳やらなにやらで酷く汚れていたので、近くにあった布……教主の白い法衣を使った。

汚いのは、嫌だ。

我は綺麗でいたい。

りこが洗ってくれているこの身体を、汚したくない。

「……落ちんな」

蛆の肉は染みとなり、白かったそれは赤茶に変色してしまった。

内側に滲みてこなかったのが、せめてもの救いだな。

「汚れは、落ちんのだな」

いくら拭いても我の手は、けっして……本当の意味では綺麗になれはしないと分かっていても。

りこの前では、綺麗でいたい。

「か、か、かんっし……さ、ま?!」

りこに触れるこの手は、貴女が好きだと言ってくれた冷たいこの手は。

どんな高価な石鹸で洗ったとしても。

「豚よ、礼を言う」

毎晩風呂で、りこが一本一本丁寧に洗ってくれても。

「お前等のおかげで、我は思い知った」

柔らかであたたかな貴女の手で、指で……我の全身を優しく、優しく擦ってくれても。

我の‘穢れ’は落ちはしないのだ。

「我は＜ヴェルヴァイド＞なのだ」

冷酷なる魔王。

白金の悪魔。

氷の帝王。

世界の【闇】は、我の中。

りこ、りこよ。

どんな我でも、側に置いてくれるのだろう？

どんな我でも、愛してくれるのだろう？

「教主よ。特別に我の妻が好きなものを、教えてやろう」

異世界から落ちてきた、我の宝物。

小さな花のような貴女。

我は貴女の虜。

もっと……もっと、我を貴女に縛り付けて。

「おぉ、なんと光栄なっ！　どのような宝飾品がお好みでしょうか？　すぐに取り寄せ……」

「鱗だ」
「……は？」

我の手を、離さないで。
この手は、汚れているけれど。
そして、これからも汚れ続けるけれど。

「我の可愛いあの人は、鱗が好きなのだ」

我は、貴女を離さない。

「う、うろ……うろこ？」
我の言葉が理解出来ぬのか、弛んだ口角をひくひくさせて呟いた。
頭部だけとなった蛆のものと良く似た色の目玉を、忙しなく動かしてから我を見上げた。
「う、うろことは、希少な宝石の一種ですか？　そ、それとも……ああ、珍しい果実ですかな？」
教主の言葉は、我を少々驚かせてくれた。
鱗も分からんのか、この男。
このような低脳が教主である宗教の神が、この我なのか！
最悪だな。
「鱗は、鱗だ。貴様は脳まで豚並みか、見た目通りだな。りこの世話は今後も、竜族に一任する。……りこが竜族を気に入ってる限りな」
「う、うろ……鱗？」

愚かな人間共。
何故、分からない？
何故、気づかない？

「……りこがこの世界で憎んでいるのは、お前等人間だ。【世界】を奪ったお前等を、りこは永遠に許さぬだろう」

りこの意に反し、この世界に落とされてしまったからこそ、我はりこを手に入れることが出来た。

セイフォンの愚か者共には、その点は我とて感謝している。

が、そのせいでりこの心の底には消せぬ【闇】が漂い続ける。

その【闇】は永久に貴女を苦しめ、泣かせるだろう。

だが。

貴女の中にある【闇】も、我にとっては狂おしいほど……愛しい。

あの時、我には聞こえていたのだ。

貴女はこの世界を見捨て、我を選んでくれた。

そう。

真の魔王はりこ、貴女だ。

世界を滅ぼすのは、貴女。

＜ヴェルヴァイド＞は貴女の心に潜む【闇】。

我（ヴェルヴァイド）は、貴女。

「り……り、り、りこ？」

豚の口からこぼれ落ちた、それに。

脳が指令を下すより早く、手が動き。

豚の頭をもぎ取り。

返り血を弾く術式を使うことすら忘れたまま、豚の胴を踏み潰した。

「その名は……＜りこ＞は夫である我だけのものだっ！！」

数分後、脳が正常に動き始め。

楽な死を与えてしまった事に気づき、後悔したが。

挽き肉となったそれを元に戻すことは、神ではない我には不可能だった。

第６４話

「ほら、＜青＞よ、【贈り物】だ。受け取れ」
「ん……じじい？　うわっ！」
執務室にある長椅子でまどろんでいた＜青＞の腹の上に、我は贈り物を置いてやった。
せっかくの贈り物であるのに、＜青＞はそれを床に払い落としてしまった。
＜青＞の馬鹿が力を加減せずに払い落としたので、せっかくの贈り物は竜の腕力で床に叩きつけられ……半分以上、潰れてしまった。
目の前で贈り物を潰された我は、少々……いや、かなりがっかりした。
この我に‘がっかり’を経験させるとは……歴代＜青＞でもお前が初めてだぞ、ランズゲルグよ。
＜青＞が我からの贈り物を喜べば、りこが褒めてくれると考えていたのに。

「……っ！」

長椅子から身を起こし、潰れた贈り物を青い目で凝視する＜青＞には喜びの欠片も感じられなかった。

おかしいな、我の想像と違うぞ？

「じ、じじい！　これ、なんだよ？　ってか、これ誰だよ！　いったい何を仕出かしやがったんだ、ヴェル！！」
＜青＞は元の容姿が分からぬほど潰れた頭部から眼を離さずに、声を荒げた。
「誰だと？　ペルドリヌの国王だ。お前が潰したから、顔が分から

なくなってしまったのではないか。竜帝ともあろうものが自分の落ち度を棚に上げて我を責め……っ！」

＜青＞の後ろにある窓から見えたそれに、我は言葉を失った。

ペルドリヌから術式で転移してきたので、空模様に全く気づかなかった。

雨。

雨が降っておるではないか！

我は昨夜、りこを先に風呂から出し、竜体でダルフェに天気予報を確認しに行った。

ー明日っすかぁ……多分、晴れるんじゃないですかぁ？　今夜は見事な星空で、雲１つ無いですし。ま、俺の管轄は基本的に荒事ですから、庶務課に請求しなけりゃ手元に気象関係の資料なんざ回ってきませんしねぇ～。

南棟３階にダルフェとカイユは居を移していた。

竜騎士の宿舎は南棟から離れているために、カイユの強い希望でそうなったらしい。

荷解きの終わらぬ雑然とした部屋で、床に胡坐をかいて座ったダルフェの手元には小花模様の生地と、裁縫道具があった。

ダルフェは我の視線に気づき、垂れた眼をさらに下げた。

ー姫さんのですよ。可愛いでしょう、これ？　ふっふっふ……男の浪漫ですよねぇ～。

りこの新しいエプロンを縫いながら、ダルフェはそう言った。

はて？　我はエプロンに浪漫など見出せないのだが……。

一旦那ぁ、今夜は姫さんに手ぇ出さんで下さいよ？　一応、病み上がりだってことをお忘れなく。……俺の貸した本を熟読して、お勉強しといてください。俺が思うに、あんたはあの子に関しちゃ変態の域に達してます。しかもあんたのつがいへの執着は、竜の俺から見てもちょっと異常ですしねぇ。変なことして、姫さんに嫌われたくないでしょう？　あんたら2人の痴話喧嘩は周囲にとっちゃ、隕石級の大迷惑なんです。

我が変態？

それに……変なこととはどういう事だ？

抽象的に言われても、我にはさっぱり分からんな。

エプロンの浪漫といい……ダルフェの言うことは時々、我には少々難解なのだ。

「おいっ！　俺様の話を聞け、クソじじい！」

＜青＞は立ち上がり、潰れた贈り物を跨いで我に近寄り……りこが女神のようだと賞賛した顔を歪めた。

「……全身、返り血だらけじゃねぇか。こんな、こんなの……らしくねぇよ、ヴェル。ほら、こんなとこまで」

包帯に包まれた指が我の顔に伸び、右目の下に触れた。

我はちびな＜青＞を見下ろし、聞いた。

「何故、喜ばん？　ペルドリヌの当代教主の首だぞ？　ぶち殺したいと言っておったではないか」

我の疑問に＜青＞は答えなかった。

ただ、唇を噛みしめただけだ。

＜青＞は無言で我の右腕を掴み、執務室に隣接する私室に我を連れて行くと浴室に押し込んだ。

そして、音を立てて浴室の扉を乱暴に閉めた。
常より大きい足音が、徐々に遠ざかり……どうやら廊下を駆けていったようだ。

ふと、備え付けの鏡に自分の姿が映っていることに気がつき。
何故ここに押し込まれたか、理解した。

我は、非常に汚れていた。
しかも、臭い。
我が汚く臭いから、＜青＞はあのような顔をしたのか？

「……なるほどな。＜青＞は綺麗好きなのだな、きっと」

だから贈り物を喜ばなかったのか、確かにあれも汚かったな。

ペルドリヌの聖堂で、教主の首をもぎ取った後。

国ごと消すか、民の頭を一気に刈取るか思案していたら数十人の術士が転移してきた。

我の気配と教主の異変を察知したのだろう。

それらに我への敵意は無く……あるのは強い恐怖心のみだった。

ならば望みのままに、と。

恐怖を与えてやっただけだ。

面倒なので、手当たり次第引き裂いて投げ捨てた。

それはほんの数秒で終わり、白かった聖堂内は赤く染まっていて……汚かった。

我は、ペルドリヌは消さなかった。

この聖堂の惨状を、残しておくことにした。

＜監視者＞がつがいの為に動いた事は、一部の者はすぐ悟るだろう。

それらの者達は世界の安寧を維持する為に、各国に働きかけるはずだ。

我を刺激しないよう……＜監視者＞のつがいには、必要以上に接触すべきでは無いと。

りこを……存在を諦めていた我のつがいをこの世界に落としてくれた礼に、暫しの猶予をお前等に与えてやろう。

今後、お前等人間がどう動くかで世界の行く末が決まるのだ。

「……風呂に入るか」

外は雨。

りこはまだ、目覚めない。

「ふむ。1人で風呂に入るのは、初めてだな」

我は風呂が好きになったはずなのに、やる気が全く沸いてこない。
我のやる気は、何処にいってしまったのだろう？

やはり、我は。

「りこが側に居てくれないと、ふにゃふにゃのへろへろ、だな」

「カイユ！　おちびを呼んでくれっ……ヴェルが、なんかやばいんだ。つがいであるおちびの協力が……カイユ！！」

南棟に戻ると、温室から居住区に繋がる扉の前で＜青＞とカイユが揉めていた。

「お下がり下さい、陛下。私は貴方の竜騎士ですが、竜騎士であるからこそ絶対的強者であるヴェルヴァイド様の命が＜竜帝＞の命より優先されてしまうのです。……申し訳ございません」

雌である自分より背の低い＜青＞に深々と頭を下げたカイユの右手には、剥き身の刀。

細身の刃は緩やかに湾曲しており、小波のような刃紋が冷たい金属に優美な印象を持たせていた。

使い手によっては金属さえも切断可能な片刃のそれは、通常の剣より軽量なうえに強度においては他の追随を許さない。

普通の竜族より強力な力を有する竜騎士達は、剣より刀を好むものが多い。

一般の剣では竜騎士の力に耐えられんからな。

「＜青＞よ。何を騒いでいる？　とっとと執務室に帰り、我からの贈り物をもっと堪能しろ」

我は後ろから＜青＞の頭を右手で掴み、持ち上げてこちらを向かせた。
「うわっ！　じじい？！」
足をばたつかせながら、＜青＞は言った。
「離せよ！　てめぇ、俺に断りもなく竜騎士共を動かしやがったな……って、ヴェル！　頭から足まで全身びちゃびちゃじゃねえか！　足元、水溜りできてんぞ」
青い眼が床と我を交互に見て、数回瞬きをした。
「まさか……このまんま、湯に入ったんじゃねぇだろうな？」

「入った」

「なっ！？　風呂に入る時は、服を脱げ！　ったく……常識欠落しまくりだよな、じじいは。せめて拭いてこいよ、タオルあっただろうが」
衣類を脱ぐ？
汚れてるのは外側だったので、衣類を脱ぐ必要性を感じなかったのだ。
蜥蜴蝶を使った衣類は表面で全ての汚れを受け止めるので、簡単に洗い流せる。
戦闘服や軍服の素材として蜥蜴蝶が重宝がられるのは丈夫さだけでなく、そういった利点があるからだ。
だからこのまま、湯船に入った。
それのどこが悪いのだろうか？

「お帰りなさいませ、ヴェルヴァイド様。……何か拭く物をお持ちいたしますか？」
朱色の漆が塗られた艶やかな鞘に刀をしまい、カイユが我に問うた。
その鞘には見覚えがあった。

＜赤＞が同じような物を持っていたな。
「いらぬ。カイユ、りこはじき目覚める……ちょうど茶の時間だな？　我のかけらが身体になじめば体調も回復し、食欲も出るはずだ。菓子だけでなく、軽食も用意しろ」
「承知いたしました」
一礼し、温室を去ろうとしたカイユに＜青＞を突き出した。
「これも、持って行け。＜青＞よ、我の許可無くりこに近づくな。次は殺すぞ？　止めてくれたカイユに感謝するがいい」
もし、りこの眠る居住区へ一歩でも踏み込んでいたのなら、我は＜青＞を殺していただろう。
ランズゲルグは我を殺せぬが、我はこれを躊躇い無く殺せる。
カイユはこの若い竜帝よりも、我の事を理解しているからこそ＜主＞を守ることができた。
「お、俺は……」
そのカイユを見る＜青＞は、またも唇を噛んでいた。
癖なのか、それとも……言うべき言葉が見つからないからか。
薄く紅をさした女のような唇に、うっすら血が滲む。
ふと、思いつき。
＜青＞の血液を、舐めてみた。
やはり、我の味覚はりこ専用なのだな。
「味を全く感じんな……ん？」
＜青＞はもう、唇を噛んではいなかったが。

「どうした、顔が真っ赤だぞ？」

＜青＞に問うた我に、カイユが言った。
「……トリィ様の前でそのような行為は、絶対にしないで下さい」
ああ、そうだったな。
むやみに口を使うと、りこは怒るのだ。
＜青＞を黙らせるのに、口を使ったらとても怒られた。

怒った姿も可愛くて、もっと怒られてみたいと感じたのは秘密だな。

「わかった、今後は気をつける。で、お前は何故赤くなったのだ？」

＜青＞の顔は赤から青へと一瞬で変化し、我の手を振り解き叫んだ。

「う、うるっせぇー！　んなの知るか、このエロじじい！」

ばたばたと走り去る姿には、竜帝としての威厳は欠片も無かった。

幼い時もああして、我の周りをぐるぐると走っていたな。

成竜になっておるのに、落ち着きが無いというか。

「……＜青＞の成長不良は、脳にまで及んでいたのか？」

走り去った＜主＞を苦笑で見送ったカイユの言った言葉は、我には少々難解だった。

「ヴェルヴァイド様の前以外ではきちんと＜竜帝＞ですから、ご安心ください。ただ……ご両親を早くに亡くされたせいか、陛下は大人の雄に‘弱い’んです。早くつがいの雌と巡り会っていただかないと……いろいろ心配で」

弱い？

いろいろ心配？

カイユもダルフェも時々、訳の分からん事を言う。

「……お前等夫婦は、よく似ているな」

「貴方様とトリィ様も私から見れば、よく似ていらっしゃいますわ」

我が分かりたいのは、りこの心。

「……そうか」

りこの心を分かる我に、なりたい。

寝室まで歩くと、我の通った跡はくっきりと濡れていて……まるで自分が蝸牛にでもなってしまった様な気がした。
ドアノブを掴もうとして、赤茶に変わってしまった手袋をしたままだった事に気づいた。
とても不快だったので剥ぎ取り、居間にある暖炉へ放った。
りこには、こんなモノを見せたくない。

「りこ」

寝台で眠るりこを眼にした途端、あたたかなものが我の中に満ちる。
これがなんなのか、我はそれを表す適切な言葉が分からない。
りこと居ればそのうちに、必ず分かる時が来るだろう。
それは予感などという不確かなものではなく……。

「りこ。貴女と離れた数時間は、我にはとても辛かった」

布など使わずとも、術式を用いれば一瞬で乾くのに。
我はそれはせず寝台に歩み寄り、りこの寝顔に魅入った。
寝台の端で……扉の方に寄って眠る姿は、我の帰りを待ちわびてくれてるかのようだった。
可愛く、綺麗な我のりこ。
我は帰ってきた。

貴女の元に、帰ってきた。

「りこ。我はびしょぬれなのだ。目覚めたら……いつものように、拭いてくれるか？」

風呂上りの我を柔らかなタオルで包み、りこは優しく丁寧に拭いてくれる。

それはとても気持ちが良く、心が和むのだ。

我はタオルなどを使わずとも、乾かすことが可能なのだが……‘ふきふき’してもらうのが大好きなので、りこには内緒にしている。

我はりこに＜内緒＞にしていることが、多くある。

総てを貴女に曝け出せるような勇気など、我は持っていない。

穢れなど気にならなかったのに、貴女に会って我は変わった。

確かに我は変わったのだが……変わらぬ部分の方が、多いのだ。

どんなに壊しても、多くを殺しても我は何も感じない。

罪の意識など、我の中には存在しない。

貴女のことを知りたくて、もっと貴女に好かれる我になりたくて。

貴女の言葉や行動を、我なりに注意深く観察してきた。

セイフォンの連中を心の底では憎んでいるのに、我に報復を願わなかった。

我が魔女を軽く弾いただけで、真っ青になっていた。

離宮で初めてダルフェの骨を砕いた時は、悲鳴をあげた。

りこは我と違い他者を傷つけること、それを目にすることに強い抵抗感があるのだと知った。

破壊・暴力・殺戮……そういったものに関わらず、穏やかに生きてきたであろう貴女。

つがいの雌に対する竜族の性質は、人間の……しかも異界人のりこにとっては好ましいとは言えぬだろう。
ましてや我は、普通の竜ではない。
見た目は竜族だが、中身は……我の思った以上に中身も竜族になっていたようだが。
我がりこの為に何人、いや何千と殺したとしても竜族達は異論を唱えない。
穏やかな気質を持つ竜族だが、つがいの雌に危害を加えられた場合に相手を許すという選択肢は存在しないのだから。
四竜帝は人間と竜族の均衡を考慮し、意見してくるやもしれぬが……我の場合は力が強い分、報復の規模が一般の竜族もより大きくなるからな。
まあ、我は四竜帝のことなどどうでもいいのだ。
我が気にかけるのは、りこの反応だ。
異界人であるりこの目に、心に……我はどう映るのか、どう思われるのか。

貴女に、嫌われたくない。

我は愚か者だから。
好きだと、愛していると言ってもらえても。
貴女は世界より、我を選んでくれたのに……不安が消えない。

こんな愚かな我だから、自分に自信など持てぬ。

「りこ。我は贈り物で、ランズゲルグを喜ばすことは出来なかった」
呆れるか？

「りこ。我は1人では、うまく風呂に入れなかった」

軽蔑するか？

「りこ。我は、たくさん殺してきた」

嫌悪するか？

「我は……」

「ん……ハクちゃん？」

ゆっくりと開いた金の眼は、寝起きのためか潤んでいた。

「おはよう、りこ」

その眼の中に、りこの好む微笑を浮かべた＜ハク＞が居た。

りこの頬がほわりと染まり、はにかむような笑顔が浮かぶ。

「お、おはよう、ハクちゃん。　……きゃぁっ！　どうしたの？」

髪から水を滴らせ、葡萄酒色の絨毯に染みを作る我を見たりこはあたふたと寝具をどかし、寝台から出ようと動いた。

「ハクちゃん、びしょびしょじゃない！　風邪ひいちゃう……雨？」

雨音で外の様子に気づいたりこは、窓に視線を向けた。

「ハクちゃん、雨に降られちゃったの？　そっか、雨になっちゃったんだ……残念だけど、夕焼けはまた今度にしようね。私、タオルを取ってくるから、ちょっと待ってて」

「行くな、りこ」

我はりこの腕をとり、細い腰を捕まえるとそのまま寝台へと引き戻し、頬に口付けた。

おはようの接吻だけして、‘ふきふき’してもらうつもりだったのに。

「ハ……ハクちゃん？」

触れてしまったら、そんなことは吹き飛んでしまった。

カイユが着替えさせたのだろう。

すべるような手触りをした薄い夜着に包まれた身体を、壊さぬように抱きしめた。

「りこ、我のりこ」

柔らかな身体に手を這わせ、常より早い鼓動を刻む胸に顔を埋め……懇願した。

「我は、貴女が欲しい」

小鳥のような貴女。

翼を折って、飛べぬようにしてしまおう。

鳥籠から逃がさぬように、雁字搦めに縛ってしまおう。

「鳥居りこ」

穢れたこの身体を貴女の綺麗なそれと、交ぜてしまおう。

交ぜ合わせ、１つにしよう。

我から、離れられぬように。

「共に濡れ、堕ちてくれ」

第65話

私は、ハクちゃんといたした。
まさに＜水の滴るような良い男＞状態のハクちゃんと……今度はちゃんと、最後までした。

もちろん、怪我なんかしていない。
記憶も無くならなかった。
ちょっとあやふやな部分もあるけれど、それは……私の所為じゃないと思う。

いたした後は心身共に、疲れ果てた。

ハクちゃんが寝ても良いって言ってくれたので、お言葉に甘えてぐーすか寝た。

そして、気分爽快すっきり目覚めると……アイボリーのガウンを羽織り、ベットに腰かけて私を覗き込んでいたハクちゃんがおはようって言って、キスしてくれた。
ハクちゃんの目元が、普段より微かに色づいてることに気がついて……心臓がドキドキした。
そこに触れてみたくなり、寝たまま手を伸ばそうとして自分の身体の異変に気づいた。
寝起きは悪いほうじゃないのに、なぜか身体がうまく動かせない。
身体の内側がほわほわというか、じんじんというか。
気分はとっても良いのに……唇もしっかり動かせなくて、おはようって言えなくて。
「……ぁ、ハ……？」
ハクちゃんは戸惑う私をそっと引き寄せ膝に乗せ、顔中に唇を落

となが ら髪や背中を優しく撫でてくれた。
素肌に触れる大きな手の感触に内心、かなり照れつつも……眼を閉じて、うっとりしてしまった。
とても気持ちが良くて、自分が猫にでもなった気分だった。
咽喉を鳴らして、もっともっととおねだりしちゃいたいくらい。
身体にたいしての不安感はなかった。
この感じは……ハクちゃんのかけらを食べた時に、良く似ていたから。

あぁ、私はこの人に愛されたんだ……って、改めて実感した。

徐々に感覚もしっかりしてきて、身体も動かせるようになってきたので自分からハクちゃんにキスをした。
心を込めて、‘ちゅう’をした。

ハクちゃん的表現だと、まさにらぶらぶな良い雰囲気だったのに。

ぐぐぐぎょ〜うぅ。

「りこ……今、腹が鳴ったな？」

私のお腹が鳴った。
恥ずかしさのあまり、あわあわと寝具に潜ってしまった私にハクちゃんは言った。

「我の所為だな。りこを飢えさせてしまって、すまない。すぐに食事を用意させる」

いたたまれなくて、顔を出せない私を寝具の上から優しく撫で、ハクちゃんは寝室を出て行った。

パタンと扉の閉まる音を聞き、慌てて掛けふとんを跳ね除けた。

ハクちゃんが悪いんじゃない。

彼は途中で、ちゃんと聞いてくれたものっ！

一りこ、りこ。カイユが居間に、茶を準備したと言ってるぞ。茶菓子にアダのタルトを用意したと……どうする？　茶にするか？

私、それどころじゃなかったから、いらないって返事を……だって、えっと、そのですねっ！

だから、お腹空いたのは自業自得なのであってハクちゃんのせいじゃ……。

あれ？

あ、あの状態で普通、お茶がいるとか聞く？

さすがハクちゃん、恐るべし！

しかも、カイユさんがってことは……。

ま、まさか……！

扉の向うでハクちゃんに「お茶ですよ」って、言ってたってこと？

私は全く聞こえてなかった。

ハクちゃんの事しか考えられなくて、彼の声しか耳に入らず……は、は、恥ずかしすぎるっ。

そういえば今、何時？

うわわ～六時過ぎてる！

「まずいっ……晩御飯の準備に、ダルフェ達が来てるかもっ！」

うっとりタイムと、お腹を鳴らすという失敗に気をとられてましたが。

あのハクちゃんを1人で行かせるなんて……誰に何を言うか、考えるだけで恐ろしい！

またも、エッチについてべらべら喋ってたらっ……あの人ならやりかねない！

私は大急ぎで服を着て、居間に向かった。

お風呂に入りたい気もしたけれど、意外にも身体中さっぱりとしていた。

ま、まさか……ハクちゃんが、拭いてくれたんだろうか？

私が着替えて居間に行くと、ハクちゃんとカイユさんがいた。

何か話していた2人はぴたりと会話を止め、私を見た。

「あ、う、えっと……」

挨拶、なんて言うべきでしょうか。

「見るが良い、カイユ。ほら、りこは無事だろう？」

ハクちゃん金の眼を細め、顎を少し上げ得意げに言った。

ガウンをだらしなく着て、ふんぞり返ってソファーに座ったハクちゃんは相変わらずの無表情。

でも、その眼は……いつも以上に柔らかく蕩けるようで、彼が非常に御機嫌なのだと私にはわかった。

基本的に無表情なハクちゃんだけど、彼は眼に感情が表れる。

瞳孔の変化が最たるもので、今日の午前中もびっくりしたし。

今の彼の眼は、ずぶぬれの姿で私を求めてくれた時と全く違う。

あの時は……とっても綺麗に微笑んでたのに、瞳はどこか悲しげだった。

それを見た私はなんだかとっても切なくて、愛しい気持ちがぶわ

わ～って込み上げてきて。
私、自分から……。
「りこ。立っていないで、ここに座れ。まだ身体が安定しとらんのだから」
人生最大の大胆行為を思い出してしまい、脳が沸騰しそうな私にハクちゃんが自分の隣をぽんぽん叩いて言った。
「あ、う、う、はいいぃっ！」
とりあえず、ハクちゃんの隣に腰を下ろした。
背筋をびしっと伸ばし、ぎゅっと握った両手を膝の上に置きカチンコチン状態の私に、カイユさんがいつもと変わらぬ優しい笑顔で言った。
「トリィ様。クッションを……こうするとほら、楽な姿勢をとりやすいですよ？　食事の仕度や片付けのお手伝いは、今日は無しです。カイユとダルフェにお任せ下さいませ。さあ、もう少しここで横になって休んでいて下さい」
カイユさんは私の身体に手を添え、ゆっくり撫でてくれた。
「カイユ、ありがとう。……お茶、ごめんなさい」
そう言った私に聞こえてきたのは、カイユさんの澄んだ声ではなかった。
「カイユよ。今回は巧く交尾できたので、心配は無用だと言っただろうが。まったく……お前は何故そう、疑り深いのだろうな。我はりこの身体に、噛み跡１つすら付けなかったのだぞ？」
ちょっ！？
「ヴェルヴァイド様には前科があるからです」
カイユさんは、即答した。
「……前科だと？」

額にかかる真珠色の長い髪を鬱陶し気にかき上げていた白い手が、ピクリと止まった。

そんなハクちゃんを綺麗に無視し、カイユさんは私の顔を覗き込んで言った。

「お腹、空きましたでしょう？　今夜は特別な料理ですから、いつもより準備に時間がかかります。紅茶と焼き菓子を用意してありますから、ここでのんびり待ってて下さいね」

カイユさんとハクちゃんの微妙な空気にあせる私に追い討ちをかけるように、ハクちゃんは謎の思考回路発言を開始した。

「カイユ……いいか、良く聞け。りこはお前と茶をするよりも、我との交尾続行を選んでくれたのだぞ！　お前にも茶菓子にもプリンにも、我は勝ったのだっ！」

「……は、はあ。そ、そうですか」

カイユさんは自分にかけられたハクちゃんの言葉に、非常に困惑したような表情を浮かべていた。

どちらかというと、困惑を通り越して……呆れの域に到達してそうだった。

そんなことはお構いなしに、御機嫌な魔王様は突っ走って下さり……。

「さあ、りこからもカイユに言ってやるが良い。りこにとって＜世界一愛している大好きな、大切な人＞である我は、今回はちゃんとりこを気持ち良くさせて、りこは大満足なのだとな」

ひ……ひいぃぃっ！！

な……なに言ってんですか、ハ、ハ、ハクちゃん。やめっ……！

「我はりこの体のことは、既にりこ本人より詳しいのだ。今回摂取した体液からの情報も、とても参考になった……いろいろな意味でな」

大魔王様から次々飛び出す言葉に脳を連打され、私は意識を失い

そうに……あぁ、気絶できたら良かったのに。
あのお綺麗な顔に付いている危険な口を、塞いでしまいたい……縫い付けてしまいたいのに、ショックのあまり身体が硬直して動かな～いっ！
「あぁ、我は幸せ者だ。我はりこにとって、初めての男だったのだ。人間の女で２６なのにだぞ？　うむ、まさに奇跡だな」
２６で処女って、こっちの世界でもあんまり無いってこと！？
ってか、ばらすなー！！
顔が引きつるのが、自分でも分かる。
文句を言いたいのに、言葉が……声が出ない。
「先ほどのようにりこの体力に合わせ、きちんと加減すれば身体への負担が無いであろう？　しかも、１回で我慢したのだから……りこ、我はえらかっただろう？」
どわわわあぁーっ！
その１回だってとんでもなかったくせに、何言ってんのよぉ！
やだよぉ、もう言わないで。
奇天烈で謎の感性を、今だけでも引っ込めてー！
お願いだから、やめ……！！
「それに……やはり乳は、大きければ良いというものではないな。乳牛では無いのだし」
ちっ……ちちちっ、乳！
「気にするな、りこ。りこのささやかで愛らしい乳が世界で一番好きだぞ？」
さ、ささやか！？
「む？　人間の女の乳は揉むと大きくなる可能性があると、ダルフェの本に書いてあったような……」
ハクちゃんの両手が私の胸に伸び。
下からすくい上げるようにして、添えられ……。
ふにふに、ふにふに。

「ふむ……りこ、我に任せるが良い！　りこが乳の大きさを気にするようならば、夫である我が協力を……ぶはっ！？」
クッションを掴み、力いっぱい振り落とした。
「なっ、何すんのよ！？　ハクちゃんの変態……ばかばかぁ～！乳を気にしとんのは、お前だー！！」
私はクッションでハクちゃんを連打した。
「へ、変態……何故だ？　先ほどは、あんなに悦んでいたではないかっ」
よ、よろこっ！？
このデリカシー無し君めっ！

「さ……さっきは、交尾真っ最中だからでしょうがっ！」
ああ、私まで交尾なんて言葉を叫んでしまうなんて！
かなり、ハクちゃんに感化されちゃってるよぉおおお！

こんな私、い・や・だー！

お腹鳴っちゃうし、ハクちゃんはデリカシー皆無な奇天烈発言連発だし。
私と貴方は、さっきまであんなに良い雰囲気だったのに。
私だって、もっとこう……ロマンチックな恋人同士の会話がしてみたいのに。
なんで交尾とか、乳とか言ってんのよぉ！
「うぅ……ぐすっ」
「り、りこ！　我は前回の失言を挽回せねばと……そのっ、あのだな！　あぁ、泣くな、我が悪かった。　泣かんでくれっ……カ、カイユよ。見てないで、なんとかしろ」
大魔王様の様子を呆然と見ていたカイユさんが、あきれ返ったよ

うに深いため息を吐き出して言った。
「ヴェルヴァイド様……。貴方様は学習能力が無いのですか？」
ちらりとハクちゃんを意味深な瞳で流し見てからキッチンに入って行き、入れ違いでダルフェさんが現れた。
「あ～あ、やっぱりねぇ。だから昨夜言ったでしょうが、旦那ぁ。ったく、勘弁してくださいよぉ」
青い騎士服じゃなくて、支店で着ていたブルーのシャツにコットンパンツというラフなスタイル。
そして、白いフリフリエプロンをしていた。
ダルフェさんのエプロン姿は見慣れているので、驚きはしないんだけど……。
彼の左手に大きな魚がぶら下がっている事にびっくりして、出かかっていた涙が止まった。
お魚は生きていて、びちんびちん動いてる。
しかも、私の身長位ありそうな、巨大魚だった。
「おう姫さん、無事で何より……ん？　ある意味、無事じゃねえのか？　まあ、細かいことはいいって事で。今夜はこの尾頭付きの朱紅魚で、お祝い膳だぞぉ！」
ぶんぶんとお魚を振り回して、ダルフェさんは言った。
「竜族は子がつがいと結ばれた祝いに、この朱紅魚を家族で食うんだ。これは四大陸全域に生息しているんだが、最近じゃめったに獲れない高級魚なんだぜ？　旦那にゃ親はいないし、姫さんの家族も異界だ。俺とハニーが代役ってことで勘弁な。姫さんの両親だって、娘の結婚を祝いたいだろうに……ごめんな」
結婚？
お祝い？
「……わ、私とハクちゃんの？」

結婚のお祝い……！

「う、うん。うん！……ダルフェ、ありがっ……ふぇっ」
止まっていた涙が、溢れ出た。
涙腺が壊れちゃったのかと思うくらいの勢いで……自分では制御不可能だった。

結婚。
お祝い。
両親。
家族。

「りこを泣かせたな、ダルフェ！　貴様っ……りこ？」
立ち上がろうとしたハクちゃんの腕を掴み、止めた。
「……だ、だめぇ！　ち、ちがうよハクちゃ、ひっぐ……うぅ」
ハクちゃんは床に両膝を付き、大きな手をそっと私の頬に添えて言った。
「りこ、りこよ。ダルフェの何が、りこを泣かせたのだ？　魚が怖かったのか？　耐え切れぬほど腹が空いたのか？」
ハクちゃん。
ハク。
貴方はもう、知ってるはずよ？
「うれし……とっても、嬉しいからよ」
ハクちゃんは金の眼を少し細めて、首を傾げた。
「……嬉しい？」
その動きに合わせて真珠色の髪が揺れた。

綺麗。
この人はなんて綺麗で……真っ白なんだろう。
そう、思った。

「うん。すごく、嬉しかったから。嬉しい時も涙が出るって、ハクちゃんは知ってるよね？」

私は頬に置かれたハクちゃんの手に、自分の手を重ねた。
２人の金の眼をしっかりと合わせ、言った。

「私は嬉しくて、泣いたの」

真っ白な貴方の心に、このあたたかな気持ちが届きますように。

「……そうか。りこは、嬉しかったのか」
ハクちゃんは赤い舌で私の涙を舐めとり、言った。
「りこの涙は出された時の感情で、甘さが違うな。どれも美味いが……嬉しい時の味は格別だ。嬉し泣きするほど朱紅魚が気に入ったのか？　では……今度は我がもっと大きいのを、獲ってきやろう」
お魚……あれ？
う～ん。
なんか、ポイントがちょっとずれちゃったけど。

「……うん」

お互いゆっくりゆっくり、進んでいこうね。
ゆっくりでも、確実に。

変わっていく貴方に置いていかれないように、私も変わりたい。
不思議な貴方をもっと理解できるような、私になりたい。
大好きな貴方の心を、もっと知りたい。

「うん、ハクちゃん。私も一緒に連れてってね？　釣りしたこと無

いから、教えて欲しいな」
狩りは無理だけど、釣りなら……。

「我もない」

「えっ……そ、そうなの？」
そうきましたか……さすが、ハクちゃん。
未経験なのに、自信満々で巨大魚ゲット宣言したんですね？
ま、まあ。
なんとかなるよね。
鯵とかなら、1匹くらい釣れるかもだし！

「ははっ……微笑ましいというか、笑えるというか……あんたらしいねぇ。痴話喧嘩も丸く収まったことですし、俺は魚を捌きに行っていいっすか？　姫さん、俺が最高に美味いの作ってやるからな！」

「はい！　ありがとうございます……ありがとう、ダルフェ」
にっこり笑ったダルフェさんに掴まれたお魚の鱗が、天井の明かりに反射して……初めての1人旅で行った伊豆で見た、海に映った夕日みたいにきらきらと輝いていた。

お刺身・蒸しもの・から揚げ・すり身団子のスープがそれぞれ朱色の漆器に品良く盛られて、私の前に置かれた。
「うわ～っ！」
お花の形をした小さな蒸しパンにの中央には、まるでサファイアのようなお豆（宝石かとびっくりしたけれど、甘く煮たお豆だった）が飾られている。
今までの洋風なものと違って、アジア……中華料理のようだった。

「どうぞ、これをお使いください」
席に着いた私にカイユさんが手渡してくれたのは、お箸だった。
家で使ってたものより3倍は長く、金属でできていて見た目以上に重かった。
全体に細かな模様が……花と蝶が彫られていた。
「ありがとう、カイユ。これ、綺麗ですね……ハクちゃん？　ちょ、なにするのよっ」
芸術品のようなお箸をすいっと私の手から奪い、お箸を真剣な眼で見ながらハクちゃんは言った。
「箸でのあ～んは、難易度が高いな。……奥に入れすぎてしまわぬよう、気をつけねば」
うぅ……さ、刺さないでね、ハクちゃん。

食事の時間はとても楽しく、あっという間だった。
ハクちゃんが街に連れて行ってくれる事になった話をしたら、2人はすごくびっくりしていた。
諸問題により、皆で行こうってことに決まった。
ダルフェさん達が帝都の見所をいろいろと案内してくれることになり、ますますお出かけが楽しみになった。
そういえば……ハクちゃんは意外にもお箸の扱いが上手で、当初心配したような失敗は無かった。
不器用なんだか、器用なんだか。
箸は上手なのに、パジャマの紐が結べないなんて……なんか、それはそれで可愛いかも。
お料理もすご～く、美味しかった。
お魚の裁き方……今度はぜひ、教えてもらわなきゃ。

お腹も……心も満たされた夕食後は、居間に移ってお茶をいただ

いた。
　カイユさんがテーブルにお菓子がのった銀のお盆を置いて、白地に小さな青い花が描かれたカップにお茶を注いでくれた。
　ふわりと、ハーブの爽やかな香りが広がった。
「ありがとう、カイユ」
　カイユさんがいれてくれたハーブティーは、お砂糖が入ってないのにほんのり甘かった。
　ああ、心が落ち着く良い香り～。
「トリィ様。実は、この数日いろいろ刺激的だった所為か……どうやら予定より早くこの子が産まれそうなんです」
　まったく膨らんでいないお腹をさすりながら、カイユさんはそう言った。

　なっ！？

「ごほっ！　カ、カ、カイユ……赤ちゃん、産まれ！？」

「う、う、う、産まれそうなのかっ！　ハ、ハニー！？」

「ふむ、茶菓子はこれか？」
　私とダルフェさんは、ものすごくびっくりしてソファーから立ち上がったけれど。
　ハクちゃんだけはカイユさんの言葉にまったく反応せず、スプーンをくるくると回して並べられた数種のお菓子を見ていた。

「トリィ様……」
　カイユさんは私の背後にゆっくりと移動して、後ろからぎゅっと抱きしめながら言った。
「出産のために、明日からしばらく城を離れなくてはなりません。トリィ様のことが心配ですわ」

あ、この香り。
カイユさんの香りだ。
どこか懐かしくて……安心する。
「カイユ、私は大丈夫。ハクちゃんがいるし、竜帝さんも良くしてくれてるから、安心してお産をしてきてね」

赤ちゃん。
カイユさんと、ダルフェさんの赤ちゃん……絶対、美形だ。
私も結婚したんだから、そのうちハクちゃんと家族計画を相談したりするのかなぁ？
ハクちゃんの赤ちゃんかぁ……そういえば、この世界に来てから一度も生理がきてないんだよね。
精神的にもショックを受けたし、環境が変わったからリズムが乱れちゃったのかも……。

「……あぁ、小さな貴女をまた1人にするなんて。悪い母様ね……許してちょうだい。貴女の弟を産んでくるわ。ふふっ……お腹のこの子も、早く姉様と遊びたいって言ってる。ここから出せって駄々をこねてるわ」

え？
今、なんて……。

「いいこと？　約束してちょうだい。母様が居ない間は、ヴェルヴァイド様から絶対に離れないで。ここから……城から出ては、駄目よ？　私の父様が＜害虫＞を毎日お掃除してるから、まだお外に出ては駄目なの。もう少ししたら、＜害虫＞も集まってこなくなるわ。父様はお掃除がとっても上手だから……あとちょっとだけ、我慢しましょうね？」

カイユさん？
なんか、言ってることが……どうしちゃったの？

「母様？　ね、ダルフェ。カイユが……ダルフェ！？」
ダルフェさんは緑の眼を見開いたまま、椅子にストンと腰を下ろしてしまった。
急にどうし……きゃあっ！
ダルフェさんの顔、真っ青！

「なるほどな」
私の隣に座ったハクちゃんは、淡雪のようなムースをスプーンにのせ、私に差し出しながら言った。
「我はカイユをりこの＜母親＞として、どの大陸に居を移そうと同行させるとしよう。……竜帝共には我から伝えておく。そんなことより……さあ、りこ。あ～んだ、あ～ん」

母親？
ハクちゃん、……どういうこと？

「りこ。あ～んだぞ？　ん？　どうしたのだ」

恐ろしいほどマイペースな旦那様は困惑する私に、言った。

「ああ、りこはこっちのタルトのほうが良かったのか？　それともこの星型のチョコレートか？」

ち、ちが～うっ！

言動がなんかおかしいカイユさんに、真っ青な顔で動かないダルフェさん。

そして、この超天然な旦那様。

だ、だめだ……私1人じゃ対処できない事態だよ！

どうしっ……あっ！

「竜帝さん……。ハクちゃん！　竜帝さんを呼んで来て、お願いっ！」

助けて、女神様！

第６６話

竜帝さんを呼んで欲しいとのお願いに、ハクちゃんは……。

「嫌だ」

と言って、そっぽを向いてしまった。

絶句する私をよそに、持っていたスプーンをぎゅっと握り……ぐにゃって、折ってしまった。

ちょっとだけ細めた金の眼で、折れたスプーンを数秒間ジーっと見て。

そして、ポイッと放り投げた。

こらっ、お行儀が悪いよ！

「……何故、この場に他の雄が必要なのだ？」

好感度ゼロの冷たい美貌は、相変わらずの無表情。

でも、私に向けられた瞳は……ん、この感じは。

あれれ……なんか、拗ねちゃった？

「おい、カイユよ。我のりこに触りすぎだぞっ、とっとと離さんか。ダルフェ、呆けとらんでカイユを連れて行け。……ここで出産させる気か？」

ハクちゃんの言葉に、ダルフェさんがピクリと反応した。

ゆっくりと立ち上がり、小さな声で言った。

「そうですねぇ、はは……ここじゃぁ、ちょっと無理ですねぇ」

力の抜けたような声。
いつも笑顔が絶えない端正な顔は苦しげに歪められ……私の視線に気づいたダルフェさんは、両手で顔を隠して言った。
「情けないねぇ。みっともねぇ顔してんでしょ、俺？　ハニー……カイユ、カイユ」
ダルフェさんはカイユに歩み寄り、私に巻かれた腕をそっと外してカイユさんを抱きしめた。
「カイユ、ごめん……俺、ちっとも気づかなかった。ごめんな……アリーリア」

アリーリア。
カイユさんのつがい名？

ダルフェさんは私の前で、その名前でカイユさんを呼んだことは一度もなかったのに……。
カイユさんの銀色の長い髪を撫でる彼の手は小刻みに震えていて、私はますます不安になった。
「……何を謝ることがあるの？　なんで、貴方が謝るのよ。おかしな人」
カイユさんはダルフェさんの腕の中で、不思議そうに……小さな声でつぶやいた。
そうだよ、赤ちゃんが産まれるってとってもおめでたいことだよね？
なんでダルフェさんは……。
おかしいよ、変だよ。
「ハクちゃん、とにかく竜帝さんを呼んで来て！　ね、お願い……ハク」
ハクちゃんは私を見て……数回、瞬きをした。
な、なに？
私の顔になんかついてるの？

「お願い？　りこのお願い……わかった」
顔を寄せ、私の唇に軽いキスをしてから転移した旦那様にほっとしつつ。

ふと、気がついた。

「あ。……ハクちゃん、ガウン1枚着てるだけだった！」
ご飯の前に着替えてくればって言ったのに、面倒だからいいって言ってそのままだった。
私のお父さんも面倒くさがりで、お風呂出た後はトランクス1枚で家の中をうろうろしちゃう人だったから、ハクちゃんの格好があまり気にならなかったけど。
（パンツ一丁のお父さんより、ガウンのほうがましだし）
「……もう行っちゃったんだし」
あんな姿でふらふら歩いてるのを見られたら、通報されちゃうのかな？
でも、転移なら廊下をあのだらしない（しかも妙に色っぽい。無表情だから抑えられてるけど、あれが男の色気というやつだろうか？）格好も、人目に触れることはないはず。
「へ……平気だよね？」
手遅れだしね、うん。

私はさっきまで使っていたクッションを、急いでソファーに並べなおした。
出産が近いカイユさんを立たせておくなんて……よし、ばっちりなのです。
ここに横になってもらおう。
「ダルフェ！　カイユをここに……」
ダルフェさんは頷いて、カイユさんをそっと横たえた。

「ハクちゃんが、竜帝さんを連れて来てくれますから。……ダルフェ、大丈夫ですか？」

彼は手の震えもおさまり、顔色もかなり良くなっていた。

でも、私の不安は消えない。

「姫さん、ありがとな。旦那が戻ってくるまで俺と……父様と一緒に母様の側にいてやってくれ」

父様？

父様って……ダルフェさんまで、どうして？

よく冗談で自分のことを‘父ちゃん’って、言ってたけれど。

今のは、そんなんじゃないよね？

「わ、私……カイユっ？」

ソファーの前に膝を付いてカイユさんを覗き込んでいた私を、カイユさんは腕を伸ばし引き寄せた。

胸に抱き、髪を優しく撫でてくれながら言った。

「私の可愛いお姫様。そんな不安そうな顔をしないで、母様は大丈夫よ。……さっきから、どうしたの？　いつもみたいに母様って、呼んでちょうだい。私、あなたの母様なのよ？　私はお腹のこの子とあなたの、２人の子供の母親なんだもの。私はあなたの母様……母様なの」

混乱したように言うカイユさんをなだめるように、ダルフェさんが長い銀髪を手に取り口付ける。

「出産が近づいて気が昂ぶるのは分かるが、娘を不安にしちゃ駄目だよ？　母親の君が取り乱したら、この子が心配する。この子もまだ幼いんだから……親である俺達が、しっかりしなきゃ」

鮮やかな緑の眼を細め、優しく……優しくカイユさんのお腹を撫でながら言った。

柔らかな笑みなのに。

それを見た私の心は切なく……ううん、痛くなった。

「……母様」

私はカイユさんを力いっぱい、抱きしめかえした。

「母様」

なぜカイユさんが私を娘と間違えてるのかは、分からないけれど。

「母様。お産、頑張ってね。弟ができるの、私……とっても嬉しい」

貴女がそう言うならば、それでいい。

「母様。少し休んで落ち着いたら、ダ……父様にお産の場所に、連れて行ってもらおうね。あ、ハクちゃんに術式で送ってもらう？」

抱きしめ、抱きしめられて。

体中に、心に、貴女の優しい香りが満ちる。

不安だった気持ちが……安らいだものに変わっていく。

ああ……そうだったんだ。

やっと、分かった。

カイユさんのあの懐かしい香りは……お母さんの匂いだったんだ。

「……母様。母様がいない間、お城から出ない。母様達が帰ってくるのを、ハクと待ってる」

お母さん。

二度と会えない、大好きなお母さん。

私はずっと、お母さんの娘。
それは永遠に変わらない。

いなくなって、ごめんなさい。

苦しめて、ごめんなさい。

私、なんて酷い娘。

忘れないでって、覚えていて欲しいって思ってしまう。
お母さんを苦しめるの、分かってるのに。

私、なんて酷い娘。

お母さん。

お願い。

お母さん。

「ねえ、母様」

忘れないで。

「弟の名前、なんていうの？」

私を。

忘れないで。

「来い。りこが呼んでいる」

執務室に転移した我は机の上の書類に埋もれていた青い頭を左手で掴み、そのまま持ち上げた。

「うおっ！？　またてめえか、くそじじい！」

＜青＞が足をばたつかせたので使っていた椅子が音を立てて倒れ、乱雑に重ねられていた本や書類が執務机から落ち床に散乱した。

インクがこぼれ、周りに黒い染みを作った。

「ぎゃあっ、せっかく仕上げた書類がー！　やっと終わって飯が食えるはずだったのに……しかも、んな格好で現れやがって！　くおらぁっヴェル、猥褻罪で牢にぶち込むぞ！」

目的の物体を手にした我が、すぐ転移しなかったのは＜青＞が暴れたからではない。

もちろん、猥褻罪がどうのと＜青＞が喚いたからでもない。

邪魔が入ったからだ。

執務室の内部に外への転移を防ぐ術式が展開され、天井の照明によるものではない薄青の光が細かな点滅を繰り返し室内に満ちていく。

「陛下は大怪我をしている……貴方のせいで。手荒なまねはやめていただきたい」

居たのはわかっていたが、用があったのは＜青＞なので気にも留めていなかった。

＜青＞の竜騎士達と同じ騎士服を身につけた、人間の男……契約術士クロムウェル。

彫りの深い顔立ち。

浅黒い肌に濃茶の目。

白髪混じりの黒髪を短く刈り上げ、鍛え上げられた大柄な身体は竜族の＜青＞よりも長身で……体躯的にはちびの＜青＞より、この男のほうが竜族のようだ。

猛禽類を思わせる容貌には、以前には無い皺が加えられていた……白髪も無かったな。

人間が老いるのは、やはり早い。

「この馬鹿っ、下がれクロムウェル、死にてえのかっ！」

アンデヴァリッド帝国の将軍の地位も大貴族としての名も捨て、ただのクロムウェルとして＜青＞の契約術士になったこの男は、術士としても武人としても優秀な人間だが。

「愛しい貴方をこのように傷つけた男に、文句の一つくらい言わせて下さい。貴方に恋焦がれ、帝都に移住して２４年。この方にはいろいろ苦労させられましたが……今回の＜監視者＞殿の仕打ちは目に余る。あのような惨いことを……陛下は私の未来の花嫁なんです。万が一、死んだらどうするんですか？」

我から見ても。

少々、変わっていた。

「誰が花嫁だ！　そんな未来は存在しねえっ。あのなぁ～、クロムウェル。何度も言うが俺様はつがいの雌を嫁にもらうんであって、お前の嫁にはなれねえよっ！　２４年間ずーっと言ってんだろうが！」

この男は＜青＞に‘片思い’しているのだと、ダルフェが言っていた……楽しげな笑みとともに。

「つがいに出会うまででかまいません。人間の私は後数十年で死ぬんですから、少しくらい付き合ってくれても良いと思います。貴方が結婚して下さらなかったから私は独身のまま、今年で５２になってしまいました。情人にすら、してくださらない。貴方は理想の女王様です。……絶対、諦めません」

クロムウェルよ。
お前は我に、文句を言いたかったのではないのか？
我の存在を無視しておる気がするのだが。

「じょ、女王様！？　気持ち悪いこと言うな！　さすが、あのダルフェのマブダチだな……もう喋るな黙れ、変態！　第一なぁ俺様は男は駄目だ、嫌だ。ごつごつした岩石みてぇなお前より、乳のでかい女が良いに決まってんだろうがっ！」

＜青＞は乳にこだわりがあるのか。
ふむ。
やはり、まだ子供だな。

「愛の前には性別や巨乳なんて、関係ありません」

躊躇い無く言い切ったクロムウェルに、＜青＞が叫んだ。

「かっ、関係大有りだーっ！！」

ダルフェ、そしてりこよ。

これが‘変態’というものなのではないのか？

世情に疎い我では、他に変態の見本に心当たりが無い。

男色家であることが変態だと思わぬが、クロムウェルは変態だと＜青＞が以前からよく言っていたので、我の中では変態＝クロムウェルなのだ。

この男は帝国からの使者として＜青＞に謁見し、その場で即求婚した。

異種である竜族に、しかも竜帝に衆目の前で堂々と言ったのだ。

ー陛下、私と結婚してください！　婚姻が不可能ならば、情人でもかまいません。あぁ、私はこれより生涯……この命尽きるまで、美しく気高い貴方様の＜愛の奴隷＞です。

土下座し＜青＞の足に口付けた大柄な将軍は、瞬時に＜青＞に蹴り飛ばされたが。

血反吐を撒き散らしつつ……何故か恍惚とした表情を浮かべ、さらに大声で愛を誓った。

アンデヴァリッド帝国の将軍としてだけでなく、優れた術士と軍人の才を兼ね備えた傑物として有名だった男の異様な行動・発言に、城内は騒然となり……その醜聞は大陸中を駆け巡った。

その後、国を出奔したクロムウェルは契約術士として＜青＞に自分を売り込んだわけだが。

＜青＞は頷かなかった。

理由はこの男が本物の変態だからだと、＜青＞は言った。

＜青＞が変態だと指摘する、よくわからん性癖はともかく。

術士としても武人としてもなかなかの逸材であったので、渋る＜青＞にこの男を買えと我は言った。

＜青＞の貞操問題など、はっきり言って我はどうでも良いからな。

つがいを得るまでこの男を情人にしようが奴隷にしようが、我には関係ないことだ。

「相変わらずだな、術士クロムウェル。お前の趣味は我には全く理解できん。これのどこにそんな魅力があるのか、さっぱり分からん。女王？　成長不良でちびの＜青＞だが、れっきとした雄竜だ。確かに哀れなほどささやかなものしか、こやつには付いとらんがな」

我の言葉に、＜青＞が暴れだした。

またも顔が赤くなっていた。

りこが顔を染める姿はとても愛らしく、我の繊細な心臓は‘どきどき’してしまうのだが、こやつが赤くなっても我の心臓は‘どきどき’しない。

ふむ。

りこは、我を‘どきどき’させる天才だな！

「ぐぎゃーっ！！　な、な、何を言って……てめぇっぶっ殺すぞ、じじい！」

＜青＞が我を蹴ろうとしたので、右手で両足首を一纏めに掴んだ。

まったく、手間がかかる。

「は、離せ～ヴェル！俺よりちょっとでかいからって、いい気になりやがって！　鍛える、俺様は筋肉だるまになってやる！」

的外れな文句を言う＜青＞に、クロムウェルが言った。

「やめてください。貴方はそのままでいいんです。それに鍛えたって、肝心な場所は変わりません。で、＜監視者＞殿は何故そんなことを知っているんです？　男は駄目だと、以前に言っていたと思うのですが……何故です？」

剣呑な視線を隠さず、我に問うてきたので答えてやった。

「＜青＞を不能にしようかと思ったので、成り行きで確認するに至っただけだ。ふむ……男だけでなく女も、我はりこ以外は全て駄目になった気がするな」

「貴方の下半身事情は、訊いとりません」

クロムウェルは、なかなか面白い。

この男は我が竜体だろうと人型だろうと、我に向ける＜眼＞が変わらぬ。

これは竜帝を……＜青＞を全く恐れない。

それは生物として異常なことだ。

人間という種は、強者である竜を本能的に恐れるものだ。

好意を持とうと、根源にあるものは無くせない。

竜族に恋情を抱く人間も多いが、それは竜族が人型を持つためにおこる【錯覚】に近い現象だ。

竜としてではなく、自分と同じ＜人間＞として好意を抱く。

脳の表面では竜と認識しているのに、同時に竜であることをその脳内で否定し受け入れていない。

心の奥底では竜族本来の姿……人間共が大蜥蜴と皮肉る竜体には畏怖と恐怖、そして嫌悪感を持つ。

‘竜族だろうとかまわない’
竜に愛を囁く人間の使う文句には、竜族という異種への抵抗感がよく表れている。
＜青＞もそう考え、クロムウェルに暫く竜体のみで接したが……この男は竜体の＜青＞にも愛を告げ、変わらず欲情した。
つまり。
この男の目には人型も竜体も、＜青＞という個体として認識されている。
生まれて初めて遭遇した【変態】の扱いに困り果てた＜青＞に乞われ、これの頭の中を視たが……＜青＞への恐れが、存在しなかった。

これは少々、面白い。
そう思った。

人間であるりこをつがいにした我にとって、クロムウェルの脳は以前よりも興味深い。
我はりこの頭の中を視れぬ。
視ようと思えば可能だが、それはしてはいけないと強く思う。

何より……怖くて無理だ。

りこは竜族である我を夫として受け入れ、愛してくれている。
知っている、分かってはいるが……りこは人間であり、異界人なのだ。

我の【気】と体液の影響で意識の半分がまどろんだ状態のりこに、我は問うてみた。

ーりこ、りこよ。我が人型を失っても、夫でいさせてくれるか？

竜体の我とも、こうして交わってくれるか？

自分で聞いておきながら、なんだが。

りこの答えには、さすがに驚いた。

りこは躊躇いなく答えたのだ。

ーうん。竜体のハクちゃん、好き……大好きだもの。

我に向けられた金の眼は蕩け、潤んで……我はとてつもなく、どきどき、してしまった。

どきどき真っ最中の我に、りこは自分から、ちゅう、をしてくれた。

竜体の我を、非常に好んでおるのは知っていたが……そこまでとは。

嬉しかった。

嬉しかったが……。

むむっ？

自分で自分に、嫉妬してしまいそうだ。

己の敵（ライバル）は己だ、という言葉を聞いたことがあったが……このことなのだろうか？

恍惚とした笑みを浮かべ我に身体を撫でられるりこを見ていたら、この状態はいつもと逆だなと思い。

軽い気持ちで訊ねたのだが……。

竜体での交尾は不可能だ。
言ってみただけで、実際には有り得ない。

すまん、りこ。

がっかりさせてしまったな。
期待に添えない、不甲斐無い夫を許してくれ。
その分、人型で頑張るのでな。
ん？　そういえば。

「クロムウェルよ。お前は＜青＞の竜体にも欲情しておったが、どう扱うつもりだったのだ？　参考までに教えろ。実演するならこれを使え。我が許可する」
＜青＞を差し出した我に、変態術士は言った。
「私がするんじゃないです。道具……とりあえず鞭を部屋から取ってきます。陛下は他に何か希望がありますか？　なんなりと、仰ってください」

道具？
鞭……はて？
全く想像ができん。
が、こやつは我の参考にならん気がする。

「て、てめえら！　ふざけたこと言ってんな、腐った会話は止めてくれ～！　じじいっ、さっさと連れてけよ。いかにも事後ですってままのヴェルを寄越したんだからな。よっぽどの事なんだろうし……何があったんだよ？　ってか、てめぇ～、おちびに嫌がられるような変なことしたんじゃねぇのか？　じじいの下半身についての苦情なら、勘弁してほしいんだけどなぁ。いくら竜帝だって、どうすることもできないからな」

そうだった。
りこの、お願い、は＜青＞を連れて来ることだったな。
変態と会話している場合ではないのだ。

「おい、術式を解けクロムウェル！　このじじいは、お前にどうこうできる相手じゃない。反対に跳ね返ってお前が怪我するだけだ。自分でもわかってんだろう？　……下がれ、術士クロムウェル。俺の命令がきけぬならお前は首だ。帝都から出て行け」
表情を消し、感情を抑えた＜竜帝＞の顔で＜青＞は言った。
クロムウェルは＜青＞の髪を一房手に取り口付け、深々と頭を垂れた後。
「＜監視者＞殿。ふしだら極まりない貴方に育てられたのに、陛下はなぜこのように真面目でまともなんでしょうか？」
我に茶の眼を向け、不満を隠さぬ声音で言った。
確かに、他の四竜帝と比べると＜青＞は、真面目でまとも、だが。
「我は、これを育てとらん」
我は＜青＞を育ててなどいない。

ただ、居た、だけだ。

「俺、育てられてねぇし！」

本人もそう言っておるぞ？
お前は面白いことを言うな、クロムウェルよ。

「……自覚が無いって、恐ろしいですね。陛下、私は食堂に行って夜食を用意してきます。なるべく早めに帰ってきて下さい。新婚夫婦の所に長居するものではありません」
変態は、そう言って笑った。
笑うと目元の皺が、深まった。

「さっさと行こうぜ、ヴェル。おちびが呼んでんだろう？　よしっ！　鬼サド男の嫁になっちまったおちびの愚痴を、俺様が聞いてやろうじゃないか！」

我に頭頂部と両足首を掴まれた状態のまま、＜青＞は妙に晴れやかな笑顔を浮かべて言った。

「違う。カイユが産気づいたのだ。雄しか孕んでいなかった事が分かりダルフェが使い物にならんので、りこはお前を使うのではないか？　我と交尾後の艶やかなりこを、雄竜であるお前に見せるのは非常に気に入らんが……りこのお願いには、我は逆らえんからな」

笑顔が消え、困惑気味に青い眼が我を見た。

「え？　ちょっと待て！　ダルフェの……＜色持ち＞の子は双子のはずだろうがっ！」

ダルフェの子は双子。

雄と雌。

誰もがそう思っていた。

「今回は双子でなかったようだな。そんなことより……我はカイユをりこの＜母親＞として、黒の大陸にも同行させる。手続きをしておけ＜青の竜帝＞よ」

この城の、この大陸……世界中の竜族がそう思っていた。

カイユの周り全てが、双子だと決め付けていた。

母体であるカイユと、異界人であるりこ以外は。

「母親？　な……なに言ってんだよ？　それに雄だけって！？　双子ができるから、＜色持ち＞の寿命は……どうしてだよっ、そんな！　なぁ、教えてくれよっ、ヴェル！」

「さあ。我は知らぬな」

双子であるべきは胎の子は、雄しかおらず。
体と心に開いた穴を、カイユはりこで埋めた。

＜色持ち＞のダルフェは数十年で死に、カイユと子は残る。

それだけのことだ。

「知る必要も、興味も無い」

我は忙しい。
いろいろ、途中なのだ。

菓子でのあ～んが途中であるし。

何より……りこの身体が【途中】なのだ。

りことしては力を込めて、我をクッションで叩いたのだろうが。
あれでは羽虫も殺せまい。
そよ風のようで、心地よいほどだった。

今回も。
肉体強化は、うまくいかなかった。

やる気など。
やはり、当てにならん。
やる気だけでは、竜体で交尾することもできぬしな。
「カイユの子も貰っていく。……雄というのが、気に入らんがな」
ラパンの花が咲いたら、この大陸を出よう。
我と、りこ。
そして。
りこの竜騎士達と共に。

第67話

竜帝さんはハクちゃんに頭を掴まれた状態で現れた。
見てるこっちが悲鳴をあげるほど乱暴に放り投げられたのに、いつもは機関銃のように捲くし立てる彼が文句のひとつも言わなかった。
厳しい表情でダルフェさんに何か言い、竜帝さんに気づき起き上がろうとしたカイユさんの動きを視線だけで止めた。
包帯で包まれた指で、そっとカイユさんの額に触れると……。
カイユさんの水色の瞳が、ダルフェさんを見ながらゆっくりと閉じ。
何か言いたそうに唇が動いたけれど、言葉にはならなかった。
力の抜けたカイユさんの体をダルフェさんが慎重に抱え上げ、部屋から出て行った。
私も廊下までは、一緒に行った。
ハクちゃんがそこまでなら良いって、言ってくれたから。
つまり、それ以上は駄目ってことだ。
ハクちゃんに術式で送ってもらったほうが……と声をかけた私に、ダルフェさんは苦笑しながら首を振った。
ダルフェさんとカイユさんを見送った後に竜帝さんが話してくれたこと、教えてくれたことは。
この世界が‘御伽噺みたいな夢の国’なんかじゃないことを、私に改めて突きつけた。
戻ってきたハクちゃんは私にお菓子を食べさせたかったみたいだ

けど、どうしても食べる気になれなくて蓋付きの保存容器に移して戸棚にしまった。
しまう前に、竜帝さんに「食べますか？」って聞いたけど。
彼は「食えない」って言った。
食べたくないんじゃなくて、「食えない」って……サファイアのような瞳を天井に向けて、そう言った。
ハクちゃんはあ～んができなくて、ちょっとだけ不満そうだったけれど。
特に何も言わなかった。
竜帝さんがカイユさんのことについて話をしてくれている間、私の足元にぺたんと座り。
ソファーに座った私の膝を枕にして、眼を瞑っていた。
竜帝さんの話には、全く関心が無いようだった。
竜帝さんが帰るまで一度も眼を開けず、声を出すことも無かった。
大人しい大型犬のようなハクちゃんの髪を撫でながら、私は竜帝さんの話を聞いた。
涙を我慢できたのは、ハクちゃんの髪の優しい感触のおかげだったのかもしれない。
「カイユは出産に適した場所に移る……そういう決まりなんだ。大丈夫、竜族は安産が多いんだ！　おい、おちび。ただでさえ地味なんだから、そんなしょぼくれた顔をすんなって！」
竜帝さんの笑みは乱暴な言葉と反対に穏やかかで、柔らかだった。
見た目は私より若いけど、この人は私なんかよりずっと大人で……優しい人だ。
「俺様も……ずっと、不思議だったんだ。母親を人間に殺されたカ

イユは人間嫌いなのに、なんだっておちびには……いくら妊娠中で母性が強まるからって、変だった。カイユのおちびへの接し方を見て、俺様はお前がまだ成人前なのかと思ったんだ。餓鬼にしちゃ老けてたけど、そのっ、異界人だからそういうのもありなのかって」

カイユさんのお母さんは、人間に殺されていた。

友人だと思っていた人間に裏切られ、惨い殺され方を……。

だからカイユさんは人間が嫌い、大嫌いなんだと竜帝さんは言った。

カイユさんとダルフェさんについての話しを終えると、竜帝さんは青く長い髪をポケットから取り出した紐で手早く結んだ。

まとめきれず残った髪が肩に流れ、なんだか色っぽかった。

向かいのソファーに座った竜帝さんは、私の膝枕で寝てしまったかのように動かなくなったハクちゃんを見ながら言った。

「明日は降水確率ゼロだ」

ハクちゃんにお手伝いしてもらいながら、食器を洗った。

私は踏み台の事を、すっかり忘れていた。

それどころじゃなかったし。

今日は、本当に大変な1日だった。

踏み台。

無くて良かった。

今の私には踏み台じゃなく、ハクちゃんの大きな手の方が必要なのだから。
私の身体をしっかりと支えてくれるこの手が、私の心まで支えてくれている。

ダルフェさんは片付けながら料理を仕上げる人だから、洗い物は茶器とかが数点だけだった。
「……2週間位で帰ってくるって、言ってたね」
結婚祝いの食事会は、とても楽しかった。
チャペルで結婚式をしなくても、ホテルで披露宴をしなくても。
婚姻届けを役所に出さなくても。
異世界人の私は妻で、竜族のハクちゃんは夫。
私とハクちゃんは夫婦として、認められてる。
すごく、嬉しかった。
「出産は竜体でする。産後暫くは身体が不安定なので、人型になれぬのだ。現代は生活様式が人型に合わせてある。竜のままでは日常生活に支障が出るからな」
カイユさんの竜体。
きっと、とても綺麗なんだろうな。
「そうなんだ。だからお城から出るんだね……」
いつもは全部飲んで空になっているカップには、飲みかけのお茶が半分以上残っていた。
食器を洗いながら、さっき竜帝さんが言っていたことをもう1度、頭の中で考えた。
赤ちゃんは、本来は双子で……男の子と、女の子だったのだと竜帝さんは言った。
竜族は一組の夫婦(つがい)に、子供は一人。
双子どころか、兄弟姉妹もできない……普通は。
ダルフェさんがずっと双子だと思っていたのは、彼が珍しい＜色

持ち＞の竜だったから。

＜色持ち＞の竜。

竜帝しか持たないはずの色を持って生まれた、特殊な竜。

めったに生まれない竜で、この千年ぐらいの間ではダルフェさんだけ。

髪・瞳が揃った竜帝と違い、どちらかだけ＜竜帝の色＞を持っている。

普通の竜より竜帝に近い、とても強くて優秀な竜。

ハクちゃんやカイユさんに乱暴に扱われても大丈夫なのは、彼が特別な竜で高い再生能力を持っているから。

普通の竜族は、あんなに早く治らない。

でも。

いいことばかりじゃない。

＜色持ち＞の竜は、寿命が他の竜族よりずっと短かい。

半分か……それ以下。

彼が後何年生きていられるかなんて、誰にも……ハクちゃんにも正確には、分からない。

数十年という曖昧な単位でしか。

数十年。

人間の私には長いけれど。

長命種である竜族にとっては、とても短い。

赤ちゃんが成竜になるまでは、絶対に生きられない。

「ねえ、ハクちゃん。私……2人にいっぱい助けてもらってるのに、何もしてあげられない」

＜色持ち＞の子供は必ず双子。
それはずっと昔からの、決まり、だった。
だから。
ダルフェさんをはじめ、竜帝さんも……竜族皆が絶対に双子だと思っていた。
固体数の少ない竜族にとって、子供は一族の宝物。
竜族全体で、双子の誕生を楽しみにしていて。

皆がカイユさんに期待していた。
竜族の期待。
それはとても大きく、重い。

ダルフェさんは、お裁縫がとっても上手だった。
カイユさんと結婚して彼女のためにお料理を作るようになり、カイユさんが妊娠して……彼はお裁縫にこりだした。
子供といつまで一緒にいられるか、分からないから。
遺せるものを、考え始めた。

だから、お裁縫が上手。

小さい時に着るものも、成竜になったお祝いで着る晴れ着も少しずつ仕上げて。
２人分のお洋服。
男の子、女の子……２人分の。

遺していく子供達を想うダルフェさんの姿を、カイユさんはずっと隣で見てきて。
言えなかったんだと思う。

愛してるから。

ダルフェさんを、愛してるから。

心から想い合った、恋人同士なら。

愛し合ってる者同士ならなんでも話せるって、以前の私は思ってた。

けど、ハクちゃんを好きになって分かった。

愛してるからこそ、口に出来ないこともあるんだって知った。

ずっと1人で秘密を、悲しみを抱え込んでいたカイユさんは精神の均衡を保つため……この世界に＜存在するはずの無い私＞を＜存在するはずだった娘＞にしてしまったんだろうと、竜帝さんは言った。

さっきのカイユさんの状態は分娩が迫り、いろいろなバランスが崩れたために思い込みが前面出てしまったのかもしれないと……。

出産後も今の‘思い込み’が続くかどうかは竜帝さんにも分からないって、宝石のような眼を閉じて言った。

竜帝さんはカイユさんの主だけど、幼馴染でもあるのだから。

彼も竜帝としてではなくランズゲルグとして思うこと、感じることがあるのかもしれない。

カイユさん。

カイユ。

綺麗で強くて、優しい……竜の母様。

もう、1人で苦しまないで。

ダルフェさんは、貴女がそうして苦しむのが何より辛いはずだもの。

彼がショックを受けたのは、赤ちゃんが1人だったことじゃない。

愛しい人が、ずっと1人で苦しんでいたこと。

愛しい人の心を無意識に傷つけていたこと。

一番大切な、護りたい人を傷つけてた自分に気づけなかったこと。

「りこ。この続きは明日にしろ」

ハクちゃんは止まっていた私の手からお皿をとり、流しにそっと置いた。

結局、なに1つ洗えていなかった。

「ハクちゃん、私っ……」

ハクちゃんは私を床に降ろした。

跪いてゴム手袋をはずし、エプロンもとってくれた。

リボン結び……結べないけれど、解くのは上手だもんね。

着る事はできないのに、脱がすことはできるって……今朝、知ったもの。

「あ……ありがとう、ハクちゃん」

ハクちゃんは私の両手をひんやりとした大きな手で包み込み、目線を私にしっかりと合わせて言った。

「りこは、言わぬのだな」

「えっ！？　な、何を……？」

他の竜族の人達とは違う、透明感の無い黄金の眼。

その眼の中に、同じ眼を持つ私がいた。

ハクちゃんの眼の中に、住めたらいいのに。

そうしたら、貴方の中で死ねるのに。

私、きっと……ダルフェさんより早く死んじゃう。

「あれが＜色持ち＞として産まれた時……父親は跪き、我に息子の延命を祈った。母親は自分の寿命を息子と取り替えてくれと願い、我に縋った。りこは我に祈らぬのか？　願わぬのか？」

ダルフェさんの寿命を、カイユさんと同じにしてって頼むの？
私がハクちゃんに？

「……おかしなことというのね、ハクちゃんは」

私が咳しただけで、焦る貴方に？
私が食欲が無いって言っただけで、お医者様を呼べって騒ぐ貴方に？

いくら女医さんだからって……。
支店で……私が体の奥まで診察されるの分かってたのに、貴方は許した。
自分以外が私の体に触るのを、あんなに嫌がるのに。
カイユさんだって、ハクちゃんの視線をちゃんと確認して私と接している。
彼の許容範囲内で、私に触れているのだから。

今日、ハクちゃんとして……改めて思った、実感した。
竜族であるハクちゃんの私に……つがいに対する執着心・独占欲は、人間の私の考えてる以上のものだ。

「神様じゃないハクちゃんに、お祈りなんかしないよ」

そんなハクちゃんも、私の事ではお医者様を必要とする。
それって……彼は私の病気や怪我を、治すことはできないってこ

とだ。

ハクちゃんは万能の存在じゃない、ってことだ。

私のお願いならなんでも叶えたいと言ってくれる優しい貴方に、不可能な事を頼んだりできないよ。

そんな残酷な事、言えない。

「……貴方みたいな怖がりな泣き虫さんが、神様のはずないでしょう？　神様なんかじゃないって、私は知ってる」

腫れてた頬に、優しいキスをしてくれた。
腫れてた頬を、そっと……いたわるように舐めてくれた。
貴方なりに、私を癒そうとしてくれた。
頬の腫れだけじゃなく……怖い思いをして萎縮した心を、慰めてくれた。

ねえ、ハクちゃん。
ハクちゃんは、恐れてる…怖がっているよね？

私が病気になったり、傷つくことを。

死ぬことを。

神様じゃない貴方は、私が死んでしまったら……生き返らせることなんて、無理だから。

「ハク」

怖いよ、ハクちゃん。

自分が、怖い。

いつか、貴方に言ってしまいそう。

死にたくない。

ずっと、貴方と生きたいって。

そんなことを言ったら、貴方を苦しめてしまうのに。

「私、好きなの。貴方が大好き」

貴方を愛してるから、口に出来ないこともある。

知られたくない事も、想いもできてしまった。

「つがいにしてくれて……愛してくれて、ありがとう」

ねぇ、貴方も。

貴方も私に言えない事や、知られたくない事ってあるよね？

それは、私を愛してくれてるからだよね？

「……りこ？」

私はハクちゃんの手から抜いた両手で、ハクちゃんに抱きついた。

しっかりと腕を絡め、真珠色の髪に顔を埋めた。

今の。

私の顔、見せたくない。

貴方に、見られたくないの。

「あのね、名前……＜弟＞の名前を教えてもらったの」

＜母様＞と＜父様＞が帰ってきたら。

ケーキを焼こう。

竜帝さんに材料とかの相談をして……。

彼は、ダルフェさんのお菓子作りのお師匠様らしいから。

「……ジリギエっていうんだって」

ふわふわのシフォンケーキを焼こう。

お母さんが教えてくれた、お母さんの一番得意だったケーキを。

この世界の＜家族＞のために。

「ふふっ、楽しみだな～！　ハクちゃん、一緒にお祝いのケーキを作ろうよ。ねっ、いいでしょう？　卵をしっかりと泡立てなきゃだから、手伝って欲しいなっ」

ハクちゃんの髪から顔を離し、金の眼に映る自分の顔を確認しながら言った。

大丈夫。

笑えてる。

私は、笑えてる。

もっと、もっと。

たくさん笑おう。

私の笑顔が好きだと言ってくれた、貴方のために。

私が死んでも。
私の笑顔が。

愛しい貴方のその眼の中に、残るように。

いっぱい、笑おう。

「楽しそうだな、りこ。りこはケーキを作るのが好きなのか？　…そうして笑っていてくれると、我はとても嬉しい。りこ、我は全力で卵を泡立てるぞ！　必ずや期待に応えて見せようではないか」

私、笑うから。
いっぱい、笑うから。

「うん！　うふふっ……頼りにしてるよ、旦那様」

ねぇ、ハクちゃん。
約束したよね？
私が死んだら。
全部、食べてね。

閑話

「ハクちゃん、狩りに行ったんだよね？　竜帝さんにあげるお肉を捕りにいったんでしょう？」

温室の金魚にパンをあげていたら、ふと、気になったので……。

あの時は頭がぽわ～ん状態だったけど、狩りに行くって言ってたのは聞こえていた。

狩り→お肉→竜帝さんにあげる

そう思ってた。

私はお肉より、お魚が好きだし。

「肉？　まあ、あれも肉ではあるな。りこの元に帰る前に、贈り物として渡してきた」

ハクちゃんは私の指先から視線を離さず、言った。

パンをちぎって、指の腹でくるくるして丸める作業を彼は見ているのだ。

金魚の食べやすい玉を作るのを、興味深そうに見ている。

これのどこら辺がそんなに凝視するほど面白いのか、私には分からないけれど。

なんたって謎感性の持ち主だしね。

そして本日も黒い服。

いろいろあったあの日、白を着てくれたけど。

何故か魔王様パーセントがアップしちゃってた。

なんか、もう。

黒でもいいかなぁ～って、思うようになってきてしまった。
う～ん、重要なのは色じゃなくてデザインなのだろうか？

「ふ～ん。じゃあ、晩御飯に間に合ったね！　ねぇ、狩りで獲ってきたのは何のお肉？」

狩り。
狩り……う～ん。
私のイメージとしては鹿とか、鴨とかなんだけどな。
あ、あと猪……。

「豚」

豚？
豚。
野生の豚がいるの？
野良豚？

「狩りで豚……そうなんだ。ハクちゃんが豚さんを……むふふっ」

なぜか。
大きなピンクの豚をおんぶする、怜悧な美貌の魔王様を想像してしまった。

「豚の頭部をやったのだが、喜ばなかった。……りこ、我もパンを丸めてみたい」

差し出された手のひらに、ちぎったパンをのせてあげた。

「はい、これを丸めてみてね。……豚の頭だけなの？　喜んでもら

えなかったのは、頭は食べるところがあんまり無いからだと思うの。1頭丸ごとプレゼントすれば良かったのに……あれ？　ほかの部分はどうしちゃったの？」

大理石でできた池の枠縁に2人で並んで腰掛けて、せっせとパンをちぎって丸めた。

真珠のような爪を持つハクちゃんの指が金魚用のパンを丸め、出来上がると私の膝に広げたハンカチに置いてくれる。

なかなか上手だね、うん。

「他の部分？　うむ、まあ……手違いで、潰してしまったのだ」

潰した？

ハクちゃんは握力（？）が強いみたいだから、加減を間違えたのかな……。

彼の私に対する力加減は、もう完璧だと思う。

でも。

まだ時々、無意識に手をにぎにぎしているときもある。

基本的に力加減が苦手なのかな？

そんな自分をけっこう気にしてるのかも。

ハクちゃんは無表情悪役顔からは想像できないくらい、繊細なときもあるんだから……。

「そうだったの。頑張りすぎて、力が入り過ぎちゃったのかもね。竜帝さんも分かってくれるよ、きっと」

もしかして。

だから帰ってきた時の様子が変だったのかな？

失敗しちゃって、落ち込んでたのかな……。

「……あ、けっこうな量になったね。ほらハクちゃん、見て。金魚が水面に集まってるよ！　お口をぱくぱくして、ご飯頂戴っておねだりしてる。可愛いね～、やってみたかったんでしょう？　さあっ、ハクちゃんも餌をあげてみて」

切れ長の眼を細め、ハクちゃんは首を傾げた。

「はて？　我は魚に興味など無い」

あれ？

「魚に餌を与えるりこの表情が、我は好きなのだ」

は？

「餌を多く作ればいつもより長い時間、餌やりができるだろう？　我は魚を愛でる可愛らしいりこをその分、長く堪能できるということだ」

ぶぶっ！？

ぎょわわあぁ～！

は、恥ずかしいことをっ……ハクちゃん、貴方の目はやっぱり変だよ。

「多くの餌を毎日与えれば、この小魚も食用に適する大きさになるのではないか？　色も朱紅魚に似ておるし……うむ。これらがもう少し育ったら、釣りの練習ができるな」

釣り……このお洒落なお池を、釣堀にする気ですか！
それに食用って言った!?

「いっ……嫌よ！　私、この金魚は食べたくないっ」

そう言った私にハクちゃんは。

「……そうか、これは美味くない種だと＜青＞が言っていたな。すまぬ、りこ。我が悪かった」

まずいから食べたくないんじゃなくてですね！
む～ん。

「さあ、りこ。これらに餌をやるがいい。我はここで見ているのでな」
「え、あ……うん」

ちょっとばかり、理由が違うんだけど。
ま、いいか！
今日はこれから新しい先生と顔合わせだから、私としてはそっちの方が気にかかるんだよね。
昨日……竜帝さんにどんな人って質問したら、彼はハクちゃんをちらりと見て……言った。

ーヴェ、ヴェルの許容範囲だと思うぞ。

それって、どういう意味なんだろう？

ハクちゃんが金魚食用計画をあっさり止めてくれたので、「まあ、

いいか」とこの件をそのままにしたのを後悔したのは数日後の朝だった。

「あれっ？　金魚さんがいないっ、１匹もいない！　……うわわっ、なによこのでっかくてグロテスクな生き物は！？」

日課となった金魚の餌やりをしようとした私が見たものは。

１メートル弱はありそうな、黒くてぬるっとした……鱗の無い丸々と太った生き物だった。

「この帝都周辺で獲れる魚は、これが最も美味だと＜青＞が言った。りこを驚かせようと深夜にこっそり入れておいたのだ！　嬉しいか？　肉より魚が好きだろう？」

竜体のハクちゃんが、水面ぎりぎりをふわふわ飛びながら得意げに言った。

勉強会のある週４日は、ハクちゃんは夕方まで竜体で過ごしている。

私の勉強を念話でサポートしてくれてるのだ。

優しい旦那様なんです。

しか～しっ！

「ハクちゃん。こ……これ、鯰だよね？　き、金魚さんはどこに……？」

鯰って、小魚を食べ……うそっ、まさか。

「金魚？　さあな、我は知らんぞ。りこは不味い観賞魚より、美味い食用魚の方が喜ぶかと……むむっ？　もしかして、鯰は魚ではないのか？」

げげっ、やっぱり！

金魚を他へ移してから鯰を入れたんじゃないんだあぁぁ～。

「ち、ちがーう！　そうじゃなくて、違うよぉ～！　ハクちゃん、なんてことすんのよ！！」

「やはり鯰は魚なのだな。では、何を怒っているのだ？　りこはこれが気に入らぬようだな。うむ……大きさか！　よし、もっと大きいものを＜青＞に捕獲させよう。これを獲るのに適した時間は夜中なので、今日はこれで我慢してくれ」

な、なんですとぉー！

まさか……竜帝さんに鯰を捕まえに行かせたの！？

あの美しい女神様に、鯰獲りをさせるなんてっ！

しかも深夜にかー！！

「こ・こ・こ、これでいいから！　うん、気に入りましたから！」

これもやっぱり、自業自得？

あの場できちんと、話し合うべきだったんだあぁ～。

竜帝さん・金魚さん、ごめんなさい！

「そうか、気に入ったのならば良い。人間の女共には、これの煮込み料理が美容に良いと流行っているらしいぞ？　儲かりそうなので、＜青＞が年明けから養殖を始めるらしい」

小さな白い竜の姿をしたかわゆい旦那様は、金の目を細め。
池の中の鯰を満足気に眺めて、そう言った。

一晩で金魚さん達を完食したこの鯰さんは、図鑑で飼育方法を調べていたら雌だと判明した。
私は彼女を‘ナマリーナ嬢’と名づけた。

図鑑によると生後半年で、３メートル位に育つらしい。

春になったら湖に放そう。
秘かに誓った私だった。

閑話（後書き）

＊背景画像はねおばーど様にいただきました♪
ねおばーど様、ご指導ありがとうございました。

第６８話

カイユさんとダルフェさんが出産の為に、お城を出た翌日。
竜帝さんの執務室で、新しい先生に会った。

竜帝さんが淹れてくれた紅茶を飲む彼女の左手の薬指は、藍色をした貴石の指輪で飾られていた。
藍色の貴石が丸みのある銀のリングにちょこんとのっていて、可愛らしいデザインだった。
桃色の大きな眼が印象的で、ふわふわの栗色の髪に緋色のリボンをつけて……愛らしいお人形のようなこの少女に、とても似合っていた。
彼女は私より１０歳は下に見えるけれど、竜族の学習院（義務教育の学校）で教鞭をとる才女なのだ。
（竜族だから実年齢は……彼女の方が年上ですね、きっと）
期間限定で、私の臨時講師をしてくれるそうで……。
私の視線に気づいた彼女は、嬉しそうに言った。
「ふふっ。これ、バイ君が求婚の時にプレゼントしてくれたんです。バイ君の眼と同じ色……私の宝物です」
向かいのソファーに座った私によく見えるように、左手を差し出してくれた。
既婚者である彼女は、私と同じように首元はもちろん手の甲まで隠れる服を着ていたけれど。
クリーム色のロングスカートは、チューリップを思わせるような初めて見るかわいいデザインだった。
まるで童話に出てくる花の妖精さん……某ネズミーランドの世界から抜け出してきたみたい。
でも、やっぱり私より背が高い。

竜帝さんが背で悩むはずだよね……。
「私のためにバイ君が自分で作ってくれたんです、これ」
「わぁ～素敵……シスリアさんに、この指輪はとても似合っていますね！」
本当に、似合っていた。
彼女のほんわかとした雰囲気に、ぴったりで。
お世辞抜きで、とっても良い感じです。

でも、バイ君。

いや、バイロイトさん。

支店長さん、貴方の奥様……未成年なんじゃないの？

コナリちゃんよりは育ってますが。
まさか、バイロイトさんってロッ……！？
私の戸惑いを察してくれた竜帝さんが、散らかった机の上でがさがさと何かを探しながら言った。
「シスリアは成竜になってすぐ、バイロイトのつがいになったんだ。確かに歳が離れてるが、竜族じゃよくあることだ。シスリアは人間で言えば１５、１６位かな？　息子はシスリア似で、可愛いんだぜ……あったあった。これだ、おいヴェル！　これ、一応確認してくれよ」

息子！？
お子様がいるんですか……そ、そっか。
竜族の人達はつがいと結婚したら、まず子供を作るんだもんね。
じゃあ、ハクちゃんもちょっと変わってる人だけど竜族なんだから……早めに子供が欲しいのかな？

ん？
竜族同士だと子供は１人。
私は人間だから……どうなんるんだろうか？

数枚の用紙を手に取り、束ねて差し出した竜帝さんをハクちゃんは無視した。
「……じじい。てめぇ、とうとう耳まで耄碌したのかよ！？」
ハクちゃんは私の隣で長い足を組み、ふんぞり返ったまま……ぴくりとも動かない。
冷たい美貌は前に向けられてるけれど、シスリアさんを見てはいない。
見てない……金の眼には確かに彼女が映ってるけれど。
ただ、それだけ。
ハクちゃんは、見ようとしていない。
見るつもりが無いのだ。
「おい。お前が昨夜手続きしとけって言ったんだろうがっ……ヴェル！」
視線すら、竜帝さんに向けない。
完全無視状態だった。

ハクちゃんは、ご機嫌斜めになってしまったのだ。

新しい先生は、バイロイトさんの奥さんであるシスリアさんだった。
年の差夫婦……まあ、私達もそうだけど。
バイロイトさんとシスリアさんって。
ずばり。
見た目は１０代の妻と、４０代の夫って感じです。

ハクちゃんは執務室に呼ばれた彼女を見て、言った。

「……嫌な匂いのする女だな」

なんて失礼なことをって、私はぎょっとした。

ハクちゃんに注意しようとした私を、シスリアさんは大慌てで止めた。

「い、いいんです！　ご不快になって当然なんです。私の夫が支店で大変失礼な事をしたと聞いてます……申し訳ありませんでした。今度、バイロイトに会ったら私がきつく叱っておきます！　本当に、ごめんなさい」

嫌な匂い。

それは、バイロイトさんの匂いのことだったのだ。

私には匂いなんか全く分からないけれど、ハクちゃんは違った。

支店。

匂い。

キス。

私は何も言えなくなった。

だって。

ハクちゃんは多分、知らないから。

あの時バイロイトさんが私に触ったのは、匂い、で察したみたいだった。

キスされたのは、きっと知らない。

どこに触れられれか、ハクちゃんは私に訊かなかったし……言えなかった。

ダルフェさんとカイユさんにはハクちゃんがお鍋に入ったまま行方不明（？）中に、彼には絶対に言っちゃ駄目だって念を押された。

ハクちゃん本人に確認したわけじゃないから、はっきりとは言い切れないんだけど……。

「これがりこの教師か。……なるほどな」

温度の感じられない冷たい金の眼で。

シスリアさんを背に庇うように立った竜帝さんに、ハクちゃんはそう言った。

それから徹底して、無視しているのだ。

竜帝さんはため息をつき。

艶やかで気品のある……牡丹のような美しい顔に苦笑を浮かべ、言った。

「まあ。ぶっとばされないだけマシか。ほんと、おちびの前じゃ大人しいっつうか……シスリア、今日はもう下がっていい。……これはメオナにやってくれ。テテの花びらの砂糖漬け、好きだったよな？」

慣れたしぐさでシスリアさんの手をとりソファーから立たせ、金糸でラッピングされた小箱を彼女に渡した。

「はい。ありがとうございます陛下。あの子、大喜びします。……トリィさん、ヴェルヴァイド様。失礼いたします」

「あ、はい！」
竜帝さんは彼女をエスコートして、執務室から彼女と共に執務室から出て行き……。
数分で帰ってきた竜帝さんは、ソファーにどかっと腰を下ろした。
こきこきと首を左右に振り、指の先まで包帯にきっちり包まれた自分の両手を握って麗しいお顔をぐりぐりと押した。
「ん～、眠いなぁ。今夜は早めに寝るかな……おちび、あと2日間は遊んでていいぜ？　当初と状況が変わったから、カリキュラムを組み替える必要があるんだ。詳しい理由はそこの陰険じじいに訊け。午後は他の竜帝達と伝鏡の間で会議だから、早めに飯にすっかなぁ～。ああ、そうだ！　しばらくは昼飯を一緒に食おうぜ？　今日の昼は食堂から、おちびの分も持ってくから。先に南棟に戻ってろ」

状況が変わった？
どういうことかな……後でハクちゃんに質問すればいいんですね？
お昼、一緒に食べてくれるんだ……にぎやかで、嬉しいな。

感謝です、女神様！

「はいっ。いろいろありがとう、竜帝さん」
頭を下げた私に、竜帝さんはつぶやくように言った。
「……カイユに頼まれてるし」
はにかむような笑みを浮かべた竜帝さんの青い瞳は、とても澄んでいた。
昨夜。
彼もきっと、いろいろ考えたと思う。
カイユさんのこと、ダルフェさんのこと。
そして、お腹の赤ちゃんこと……。
「おい、くそじじい。夕焼け見るなら、塔の部屋に行けよ。あそこが帝都で一番綺麗に夕焼けが見れるんだって、昔ミルミラが言って

たぜ？」
夕焼け。
昨夜も、お天気を教えてくれた。
竜帝さんはなんだかんだ言っても、ハクちゃんに優しいと思う。
セイフォンでの印象は悪がき風だった。
帝都では、ちょっと……かなり彼に対する考えが変わった。
確かに口調は乱暴なままだけど、彼は＜悪がき＞なんかじゃ無かった。
とても優しい人だった。
それに。
じじい、じじいって言いつつも。
ハクちゃんのことを、とても慕っているようだし。

あ。
そうだ！

「竜帝さん。昨日、ハクちゃんの贈り物が頭だけになっちゃったみたいで……でも、ハクちゃんなりに頑張ったと思います！　次こそは、まるごと持ってお肉をお腹いっぱい食べれるように……！？」

私は、言葉を止めた。
だって。
竜帝さんの顔がっ女神様の麗しいお顔が！

眼が点。
そう、まさに点になり。
艶やかな唇が……パカーンと、有り得ないほど開いた。

「りゅ、竜帝さん？　私、何か変な事言いました！？」

やだっ、単語を間違えたかも……むむむっ？
さすが、女神様。
ハイレベルな美人さんは凡人とは違って、こんな表情でも美しい。
微かに震える唇が、妙に色っぽく……。

「……ハクちゃん」

昨日のハクちゃんと竜帝さんのキスシーンを、鮮明に思い出してしまった。
お似合いだったな、美男美女（？）で……。

「りこ？」

「……ハクちゃんは、見ちゃ駄目」

隣に座って彫像のように動かないハクちゃんに手を伸ばし、両目を手の平で覆った。

どうやら。
私もハクちゃんに負けないくらい、焼きもち焼きみたいです。

番外編　～ハロウィン～

私は毎日、お城の食堂に行っている。
食堂は西棟にあり、お城で働いている人達の社員食堂的な施設で２４時間開いていた。
しかも食べ放題で、無料……社長、ありがとう！

ここのお城は＜王様の家＞では無かった。
竜帝さんの経営する会社の本社兼、社員寮。
竜族の役所も兼ねていた。
見た目はお城だけど、実際はずいぶんと現実的な場所だった。
まあ、その方が馴染みやすい気も……晩餐会とか舞踏会とかあったら、かえってひいたと思うしね。

昼食・夕食は食堂からテイクアウトし、居住区で食べている。
夕食後に食器を返却に行った時に、翌日の朝食用のパン他をいただいていくのだ。
前触れも無く転移で現れる私とハクちゃんに、少々おっかなびっくりしていた厨房の人達も最近はすっかり慣れてくれていた。
竜帝さんが厨房の責任者の方と話し合って、私が食事を取りに行く時間をきちんと決めて。
指定された時間に、ハクちゃんが術式で連れて行ってくれている。
ハクちゃんが現れる時間が分かっているので、厨房の男陣はさりげな～く下がってくれているのだ。
そして、昨日。
厨房の隅にごろごろと置かれた‘あれ’を発見したのだ。

オレンジ色の大きなかぼちゃ。

スイカ程の大きさの、鮮やかなオレンジ色をしたかぼちゃだった。
帝都は秋。
秋といえば。
近年、お菓子メーカーも力を入れてきたからすっかり日本でも定着しつつあるイベント。
そう、ハロウィンです！
このかぼちゃはハロウィンのジャック・オー・ランタンに、ぴったりだと思った。
かぼちゃを凝視する私の視線に気づいた厨房職員の方が、１個あげるわよと言って下さり……。
私はお礼を言って、ずうずうしくも１番大きなかぼちゃをいただいてきた。
私が選んだ大きなかぼちゃをハクちゃんが抱え……かぼちゃを抱っこするハクちゃんから、厨房の皆様がささっと目を逸らしたのはなんでだろうか？

私がかぼちゃをルンルンで貰っていったことは竜帝さんにすぐに報告されたようで、私１人では食べきれない大きなかぼちゃをどうするんだと、女神様は南棟に現れた。
竜帝さんの怪我はすっかり治ったようで、５日前には包帯も全部とれていた。
露わになった指を飾る爪は、髪と同じ綺麗な青色だった。
ハクちゃんも爪と髪は同じ色だけど、カイユさん達の爪は私と変わらなかった。
四竜帝とハクちゃんが特別なのかな？

かぼちゃでランタンを作るつもりなのだと話をしたら、彼も参加することになった。
カイユさんとダルフェさんがお城を出て今日で１１日目。
あと数日で帰ってくるだろうと、ハクちゃんは興味なさそうに言

っていた。
カイユさん達がいない間、私とハクちゃんは竜帝さんと過ごす時間がぐんと増えていた。
表情豊かな彼は、笑ったり怒ったり……どんな顔も美しい。
でも。
ふと、寂しげな眼でハクちゃんを見ている時がある。
ハクちゃんは春になったら、黒の竜帝さんの大陸に引っ越さなくてはならない。
ハクちゃんと四竜帝の間には、いろいろな決まりがあるみたいなのだ。
拠点を移すだけでハクちゃん自身の移動は自由だから、全く会えなくなるわけじゃないけれど。
今までのように、いつでも会うことは出来なくなる。
竜帝さんは自分の大陸から、出てはいけないから。
彼が赤ちゃんの頃から、ハクちゃんはこの大陸に居た。
そのハクちゃんが、彼の側からいなくなる。
口では「これで鬼畜じじいの面倒みなくて済んで、せいせいするなぁ～」なんて言ってたけれど。
サファイアのような青い眼からは、彼の本当の気持ちが溢れていた。

今日の勉強会は午前中で終わり（シスリアさんは午後から学習院で講義が入っていた）だったので、昼食後に温室で作業に取り掛かった。
竜帝さんは自分の分だけじゃなく、ハクちゃんの分も厨房からもらってきてくれた。
私とハクちゃん、そして竜帝さんの三人でそれぞれかぼちゃのランタン……ジャック・オー・ランタンを作ることになった。

ハクちゃんと竜帝さんにハロウィンやジャック・オー・ランタンについて、一応ざっとは話したけれど。

私自身が詳しくは知らなかったのでハロウィンの説明は、非常に適当なものになってしまった。

私の住んでいた国に最近入ってきた外国の秋の行事で、かぼちゃで怖い顔のランタンを作り悪い霊やお化けをびっくりさせて追い払うお祭りである……と、あまりに大雑把な説明をした私に竜帝さんが言った。

「つまり魔除けの祭りか？　ははっ……おちびにはおっかねぇじじいがくっついてるから、どんな魔物だって怖がって近寄らねぇと思うぞ」

あまりに美しい女神様の笑顔は、まるで後光がさしているかのように眩しくて。

思わず拝んでしまいそうになり。

ハクちゃんとの決まりで、竜帝さんと私は2ミテ離れてて良かったとつくづく思った。

ハロウィンのランタン作りは、私自身も初めてだった。

家で飾ってるのはプラスチック製で乾電池式だったし……第一、アメリカのハロウィンで使うようなかぼちゃはめったに売っていない。

売ってても高くて手がでなかった。

かぼちゃに数千円出す気には、とてもなれないしね。

でも、いつかはジャック・オー・ランタンに挑戦したいと考えていた。

だから今日の私は、うっきうき～なのだ。

底を切り取って中身をかき出し、かぼちゃに目と口を書いて切り取れば良し……楽勝だって考えていた。

なめてました、ごめんなさい。

こんなに大変だと思わなかったんです！

「うう～。な、何よこれ……岩石かぼちゃ？」

硬い。

とてつもなく、皮が硬かった。

私の知ってるかぼちゃと全く違った。

ナイフを刺すことすら出来なかった。

野菜の硬さじゃないよ、これ。

無理したら、ペティナイフの刃が折れそう。

でも、このかぼちゃは食堂のメニューにも良く使われてる。

つまり、調理が出来てるってことだから……。

むむ～、コツの問題なんだろうか？

胡坐をかいた竜帝さんは足の間にかぼちゃを置き、難なく作業を進めてるし。

私が不器用なだけ？

でも、でもね！？

かぼちゃの煮物は得意なのよ～！

「煮物……まあ、あんまり関係無いけど」

床に置いたかぼちゃの前に座り、ちょっとだけいじけモードになった私だった。

「りこ。無理はするな、怪我をするぞ？」

「え……うん。思ってたより硬くて。どうしようかな」

竜体のハクちゃんが私の手からナイフをとり、ぽいっと放り投げた。

投げたナイフが竜帝さんのかぼちゃにサクッと刺さった。

竜帝さんが文句を言ったけれど、ハクちゃんは知らん振りしていた。

あれれ？
ずいぶん簡単に刺さったね、やっぱりコツ？
「どれ、我が‘お手伝い’をしてやろう」
ふと見ると。
ハクちゃんは自分のかぼちゃの底だけでなく、目・鼻・口も綺麗にくり抜き終わっていた。
私がかぼちゃと格闘している間に……なんて仕事が早い！
彼のかぼちゃは、中身をかき出せば出来上がりですね。
ナイフ、持ってなかったのに。
「ハクちゃん、どうやったの……わっ！？」
ハクちゃんの４本の指のうち１本の爪がシャキーンと伸びた。
「わあっ……ハクちゃん！　すごい、すご～い！」
伸びた爪でまるで柔らかなゼリーように、難なくかぼちゃの底の皮を切ってくれた。
な、なるほど。
こんなに切れ味抜群、伸縮自由自在の爪だったなんて。
ハクちゃんが自分の爪を気にして、にぎにぎするはずだ。
「すごい？　そうか。うむ、この爪がりこの役に立ったうえに褒めてもらえて、我は良い気分だ」
オレンジのかぼちゃにちょこんと腰掛けて、短い足をぷらぷらさせたハクちゃんが。
嬉しそうに、そう言った。

爪。

ハクちゃんは、いつも爪を気にしてた。
鋭い竜の爪だからって……。
なんか、こう……胸がじ～んとしてしまう。
「ハクちゃんの爪、とっても綺麗で素敵だと思う。私は好きよ……ありがとう、ハク」

かぼちゃに座った可愛い旦那様に、思わずキスしてしまった。

「俺様、ここにいんだけど？」

あ、そうでした。

つい、その……うわあ、いつもの習慣でついついしてしまったあぁー！

呆れたように言う竜帝さんに、ハクちゃんは切り取ったかぼちゃの底を投げつけた。

「いって～、このくそじじい！　なにしやがるっ」

「無粋だぞ。お前には‘デリカシー’が無いのか？　さっさと作業を終えて、帰れ」

デリカシー？

ハクちゃん、貴方……デリカシーって言葉知ってたんだ。

「……お前さえいなければ。我は即、りこにお手伝いのご褒美をおねだりし、閨に直行しておるのだぞ！？」

閨？

閨……まさかっ！？

ぎゃあああ～、なに言ってんのよぉ。

今の貴方は念話で会話してるから、閨なんて難しい言葉使ったって私にも意味が分かるんですからね！

閨って、つまり……べ、ベットってことでしょうがっ！

「ハ……ハ、ハクちゃんっ！　何言ってんのよ！？」

一昨日、ちゃんと2人で話し合いをしたじゃないですか！

人間の私には竜族のつがいみたいな、濃密でハードな蜜月期をハクちゃんと過ごすのは無理でして。

私もそれに関しては、ハクちゃんに申し訳ないと思っていたから……かなり恥ずかしかったけど、和解案（？）を提案したのにぃ～。

「もお～っ……デリカシーが無いのは、ハクちゃんだよ！」

真っ赤になっているであろう顔を隠して叫ぶ私に、竜帝さんは嫌そうに言った。

「おちび。誤解されるのが嫌だから言うが。良識ある俺ら竜族と、このじじいを一緒にすんのは勘弁してくれよ？　このじじいははっきり言って、変人……別の生き物だと思ってくれ」

ううん、竜帝さん。

了解です。

私も薄々、そう感じてます。

今まで会った竜族の人達と比べて、あきらかに……。

ハクちゃんって、ちょっとへ……じゃなくて、個性的ですよね？

竜帝さんは自分の作品を満足気に眺めながら、言った。

「今まで皮は捨ててたが、これなら皮も利用できて良い考えだな。切り込みの模様を工夫すれば、民芸品としても売れそうだ。かぼちゃの菓子とセット販売……季節商品としていけるな。南街の直営店で試験販売してみっか。製造部と打ち合わせして……でかしたぞ、おちび。褒めてやろう！」

貿易会社だけじゃなく、鯰の養殖から何から……すごいですね、社長！

あっぱれな商魂です。

「え、はい、女神様……じゃなくて、竜帝さん。今日はハクちゃんの分のかぼちゃを、ありがとうございました」

にっこり笑顔の可愛らしいジャック・オー・ランタンを抱えた女神様は、そろそろ仕事に戻らなくてはと立ち上がった。

「気にすんな、ついでだったからな。あ、中身でパイを焼こう！

これだけありゃ、学習院の餓鬼んちょ達に配れるくらい出来るな…
…生地は今夜仕込んで、明日に仕上げをすっかなぁ」
かぼちゃのパイ。
ダルフェさんのお菓子作りの師匠である、竜帝さんのパイ……う
わぁ、美味しそう！
ん？
大き目のお鍋に満タン状態の、大量のかぼちゃの中身。
1個1個が大きかったから、3個分の中身はかなりの量になった。
パイもかなりの量になるんじゃ……。
「竜帝さん！　私も今夜の仕込みを手伝います」
竜帝さんはぎょっとした顔で即答した。
「駄目だ。おちびを夜に連れ出すなんて……そこでかぼちゃを素手
でほじってる、凶悪じじいに蹴り殺されるだろうが！　おい、ヴェ
ル。作業が終わったら、その鍋は厨房に持ってっといてくれ」
ハクちゃんは黙々とかぼちゃに手を突っ込んでかき出し、せっせ
と横に置いたお鍋に中身を移してくれていた。
オレンジ色の大きなかぼちゃと、小さな白い竜……まるで童話の
ワンシーンみたいで、とても微笑ましい。
ビデオに撮って、永久保存版にしたいくらいだった。
メルヘン、そう……まさにメルヘンの世界！
こんなに可愛いハクちゃんの奥さんにしてもらえてたなんて……
うう～、貴方はやっぱり世界一可愛い旦那様だよ。
「そんな大げさな。ハクちゃんも一緒に……」
「おっお前、こないだの悪夢を忘れたのか！？　じじいにを厨房に
入れるなんて、俺様は二度と嫌だあぁ～！」
あ！
シフォンケーキの試作の時……。
確かに、想像以上のことが起こりましたが。
私は、楽しかった。
ハクちゃんのすごく一生懸命な姿に、私は感動したんだけど……

確かに、竜帝さんは大変だったかもしれない。
「あの時の地獄絵図は思い出したくも……ぶぎょっ！？」
ひっ！？
女神様の麗しいお顔がっ！
「我のりこを夜に連れ出すだと？　＜青＞よ、貴様……よほど早死にしたいようだな」
ハクちゃんのしっぽびんたを顔面にくらって、竜帝さんがよろめいた。
「ちょっ……こら、ハクちゃん！」
ふわふわ飛びながら短い足をあげたハクちゃんを、私は慌てて捕獲した。
さすが竜帝さん。
ハクちゃんと赤ちゃんの頃からお付き合いしてるだけあって、お見通しですね。
しっぽびんたをして、さらに蹴ろうとするなんてぇ～！
あぁ、私のメルヘン世界が台無しだよ。
メルヘンからバイオレンス！？
「行かない、行かないから！　ほら。かぼちゃランタンを仕上げよう！　晩御飯を食べ終わったら、かぼちゃランタンに火をつけようね？　ランタンの明かりで、ゆっくりとお茶するの……素敵でしょう？」
私に抱っこされたハクちゃんは、金の眼をぱちぱちと瞬かせ。
「なるほど。それは……‘素敵’だな」
かぼちゃの付いた両手をにぎにぎさせて、言った。

夕食後。
ハーブティーとお菓子を準備して、温室に厚手のマットを敷いて

……。

こうして床に座ると、なんか落ち着く。

ソファーよりこっちの方が、私的にはまったり出来るんだよね～。

ハクちゃんと並んで座り、ジャック・オー・ランタンの鑑賞会を開催した。

今夜は満月。

月明かりで、ランタンをつけなくても結構明るかった。

かぼちゃの中に立てた蝋燭に、竜帝さんが用意してくれたマッチで火をつけてみる。

マッチは万国共通（？）なのか、私の知ってるものと変わらなかった。

「わあっ、いい感じだね」

お店で売ってるような完璧なジャック・オー・ランタンは、ハクちゃん作。

左右の目が離れてる上に、いびつで……涎流してるみたいな口をしてるのが私の作品。

かぼちゃへの下書きの段階で、変な顔になっていたんだけど。

切り取る時に微調整してなんて考えていたら、ハクちゃんはあっという間に下書き通りに綺麗に切ってくれて……。

でも。

こうして蝋燭のやわらかな炎を灯すと、私のかぼちゃさんだってなかなか素敵だと思う。

まあ、ちょっと不気味だけど。

ハロウィンなんだから、不気味さも必要よ！

「……ハロウィンかぁ」

ハロウィンはお盆に近いものなんだと、妹が言っていた。

日本では先祖や亡くなった家族が迷わないで帰ってこれるように迎え火をするのに、西洋では霊を追い払うためにランタンを用意するんだって言っていたような……。

死んだ人の魂、霊。
私……死んだら、どうなるのかな？
元の世界にある死後の世界に、強制連行？
元の世界。
ここじゃない世界。

ハクのいない世界。

嫌。
絶対に、嫌だよ。
離れたくない、この世界から……ハクちゃんから離れたくない！
こんなに貴方への未練たらたらな、焼きもちやきの私が死んだら。
きっと、お化けになってしまう。
もしも。
お化けになった私を追い払うために、貴方が他の誰かと作ったジャック・オー・ランタンを用意したら……。
ううっ、凹むどころじゃない。
号泣ものだよぉ！

妹のりえは、疑問を感じたらとことん調べるほうだったから話がちょっとマニアックというか、難しかった。
私はハロウィンの飾りは可愛くて、大好きだったんだけど。
由来にはあんまり興味が無かったから、ほとんど聞き流してしまっていた。
真面目に聞いておけば良かったな。
霊を追い払うためのかぼちゃ……それって、私の聞き間違えかも知れないし。
ごめんね、りえちゃん。
せっかく教えてくれたのに……。
ごめんね。

いなくなって、ごめんなさい。
私はりえちゃん達より、ハクを選んでしまったの。
許してなんて、言えない。
家族を捨てた私には、許してなんて言う資格は……。
「うふふっ……ナスときゅうりのお馬さんより、ここにはかぼちゃが似合うね」
泣くな、りこ！
顔に出しちゃ、駄目。
ハクの前では……。
「ねえ、ハクちゃん。来年はカイユさんとダルフェさんと……ジリギエ君も一緒に皆でランタンを作ろうね。黒の竜帝さんの大陸にも、オレンジ色のかぼちゃがあるといいな」
笑おう。
私は、笑える。
貴方の隣にこうしていられることが、私の幸せだと気づいたの。
私は、幸せ。
とても、幸せ。
貴方が私の‘幸せ’なのだから。
だから、笑える。

私は、笑える。

「ハクちゃん……『Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　Ｔｒｅａｔ?』……ふふっ！」
ハロウィンといえば。
かぼちゃ……そして、これよね。
「異界の呪文か?」
ハクちゃんがほんの少しだけ首を傾げた。

呪文……彼の耳には、そんな風に聞こえたのかな？
そっか、今は人型だから言葉の意味が通じないものね。
「トリック・オア・トリート。お菓子くれなきゃ、いたずらするぞって意味なんだって」
多分、これはあってると思う。
以前買い物をしたハロウィン用のお菓子コーナーに、そう書いてあったしね。
「いたずらと菓子か。異界は変わっているな、人間とは菓子より金品を好むと我は思っていたのだが。ふむ、菓子……甘味か。りこ」
ハクちゃんはまるでマジシャンのように、一瞬でどこからか出した真珠色のかけらを1粒摘み。
「りこ。あ～ん」
私の口に、ころんと入れた。
「むふ、甘～いっ」
右手を私の顎に添え。
甘いかけらを味わう私の唇を、ハクちゃんは親指でゆっくりとなぞった。
「ハクちゃん？　……っ」
見下ろす金の眼に、間抜けな顔をした私が映っていた。
眼を見開き、半開きの口……。
そうなっちゃうのも無理は無い、と思います。
だって、そのっ！

「……りこ」

蝋燭の明かりは女性を綺麗に見せるんだって、前に聞いた気がするけれど。
男の人だって、綺麗になるんだと知った。
オレンジの明かりに照らされて、真珠色の髪も白い肌も色を持ち……黄金の眼が、いつも以上に妖しく輝いて。

綺麗というより幻想的で。
眼が、離せない。
目の前にいるのに、私から貴方に触れたら……消えてしまいそう。
全ては夢だったと……この世界も、貴方も。
貴方が、消え……っ。
「ハクちゃ……ん。私っ……！」
なんだかとても怖くなって、ハクちゃんをしっかりとこの手に掴んでおきたくて。
夢なんかじゃないって確かめたくて。
ハクちゃんに両手を伸ばし……あれ？
「ちょっ！？」
仄かなオレンジ色に染まった長い髪が、私にふわりと降り注ぎ。
正面には、ランタンの明かりが眩しいのか……細められた切れ長の眼を持つ、怜悧な顔が。
か、顔が近っ……！
いつの間にか左腕を、私の腰に絡めるように回し。
顎に添えられた右手で、私の顔をゆっくりと撫で上げ。
ハ、ハクちゃん！
これは……お茶を飲む体勢じゃないと思います！
「りこ、『Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　Ｔｒｅａｔ？』だ」
はい？
「お菓子くれなきゃ、悪戯するぞ……だったな？」
「ハ……クちゃ！？」
い、い……たずらですか！？
「りこよ。くくっ……さあ甘味をくれ。それとも我に悪戯されるか

？」

ハクちゃんが悪戯なんて、想像できない。

でも。

ハクちゃんが、甘いものを欲しがるなんて初めてだ。

食べる必要とその気が無いだけで、食べることが出来ない身体ではないって……こないだ言ってた。

シフォンケーキを試作したり、かぼちゃと触れ合ったから……食べ物に興味を持ったのかな？

甘味……お菓子！

「え～っと、クッキーとチョコがあるけど。どっちが欲しいの？両方？」

ナッツのクッキーはパスハリス君、ドライフルーツが入ったチョコレートはオフラン君がくれたのだ。

彼らがよく行く、市街にある小さなお菓子屋さんの人気商品なんだと言っていた。

甘さ控えめで男の人にも食べやすい味だったから、ハクちゃんにも受けるかも……。

「どちらもいらぬ。我は菓子は食わぬ。……我の味覚は、りこ専用なのだから」

ハクちゃんは私の左の耳に微かに触れさせた唇で、囁くように言った。

「ちょっ……んっ！」

ひいぃ～っ、絶対にわざとだぁ！

「りこ……『Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　Ｔｒｅａｔ？』」

うぎゃああ！

くわっ、くわっわわぁ……咥えたまま喋るのは、やめてって昨日も言ったでしょうがぁ～。

これはちょっと苦手というか、困るというか弱いというかっ……

そのですねっ！

どわわぁ～！

な……ななな舐めっ！？
「ハ、ハクちゃん！　やめっ……」
ハクちゃんの腕から逃げようとしたけれど。
「菓子などいらぬ。我が欲しいのは、りこだけだ」
貴方の声に、言葉に……捕らわれてしまった。

りこ　だけ

「……私、だけ？」
それは魔法の言葉。
「そうだ。我にはりこだけだ」
貴方の事しか考えられなくなってしまう、秘密の呪文。
「わ……私もっ」

夢中で縋り。
引き寄せた。

頭の中が、真っ白になる。

「ハクだけっ……貴方だけで、いい！」

貴方の色に、満たされる。

あなた　だけ
ハク　だけでいい

「なるほど。ハロウィンとはなかなか‘素敵’だな。……年1回ではなく、我は毎日でも良い」

ん……ハクちゃんの声だ。

何？
なんて言ったの……ふわぁ。
身体がふわふわして、手足の先までほかほかして……とっても眠いの。
ハクちゃん、私……寝ても良い？

「ああ。安心して休むが良い……ランタンなど無くとも、りこには我がいる。我が全てをかけて、貴女を護る」

うん。
じゃあ、ずっとこうしていてね。
私が眠っても……離さないでね？

「……我はりこの望むままに」

うん、ありがとうハクちゃん。
おやすみなさい。

「おやすみ。我のりこ」

その夜の夢は。
ハクちゃんに一番似合いそうなドラキュラの衣装を注文すべく、ネットで探しまくるというものだった。
来年は。
仮装も提案してみようかな？

>i2558_201<

番外編　～ハロウィン～（後書き）

＜～ＨａｌｌｏｗｅｅｎＮｉｇｈｔ～＞

吸血鬼ハクと魔女りこの素敵なイラストを「やえ様」が描いてくださいました！

注：このイラストの著作権はイラスト作者である「やえ様」にあります。

（いくつかの注意事項を厳守すれば小説家になろう運営様から第三者のイラスト使用許可が出ます。詳しくは活動報告に記入しておきますので、そちらをご覧下さい）

番外編　～カイユ～

「お断りします」

私はきっぱりと言った。

セイフォンに行き、皇太子の誕生祝賀会へ出席しろ？
冗談じゃない。
人間の餓鬼のくせに、私の陛下を、義父上、などと呼ぶあいつ。
あの甘ったるい顔など、二度と見たくない。

嫌い。

人間など、大嫌い。

陛下が許して下されば、この大陸中の人間を駆除できるのに……。
父様と私はずっと、我慢している。
竜騎士である私達には、その力がある。

でも。
竜騎士ゆえに、竜帝に……＜主＞に逆らえない。

「バイロイトが行けばいいのでは？　あれはそういった事が得意ですし。……私は愛想笑いなどできませんから。そうね……ついでにセイフォンを滅ぼしてこいと仰るなら、喜んで行きますわ」

セイフォン。

母様を殺したあいつの生まれた国。

「バイロイトは動かせねぇ。あそこはあの親父以外、幼竜ばっかだし奴には他に……とにかく、メリルーシェからは出せねぇ！　おい、ダルフェ～、てめえからもカイユに言ってくれよ。騎士団の頭であるカイユは俺様の側近だって、各国上層部は認識してるんだ。そのカイユが顔を出せばダルドにも箔がつくっていうか、セイフォンを狙ってる奴等への牽制に……」

陛下は数年間、あの皇太子を手元に置いていた。
だから奴を贔屓している。

皇太子というより、あの古い国自体を。

理由は知らない。
知りたくない。

「陛下。クロムウェル風に言うなら、俺はハニーの＜愛の奴隷＞ですからねぇ～。ハニーが嫌だって言ってんなら俺も嫌です」

私と同じ騎士服を着た赤い髪の竜族。
赤の大陸から来た＜色持ち＞の竜……私のつがい。
私はダルフェの子を宿している。
竜の雄にとって妊娠中の妻は、絶対的な存在。
蜜月期とこの期間は、竜騎士の性質よりも雄の本能が勝る。
竜帝の＜命令＞と妻の私の＜お願い＞ならば、ダルフェは私の＜お願い＞を優先してくれる。

「クロムウェルの話はやめてくれ、鳥肌が立つ！　カイユ～、頼むから引き受けてくれよ」

執務室の机の上で、小さな青い竜が地団太を踏んだ。
私達とは全く違う竜体。
小さいけれど……とても、とても強い竜。
四竜帝とあの方は、私達とは‘違う’のだ。

「産休前に一仕事してく……ぎょわあっ！？」

絶妙なバランスで積み上げてあった本と書類の山が崩れ、陛下が埋まった。

「……相変わらず、お馬鹿さんね。竜体で鳥肌が立つわけないでしょう？　鱗なんですから」

竜騎士である私がこうして竜帝に歯向かえるのは、彼が私に‘お願い’をしてるからだ。

「う、うっせー！　お馬鹿な俺様を助けるのがカイユの仕事だろうがっ！　よし、これならどうだ？　竜騎士団の予算は誰かさんのせいで、もう残り少ないよな！？　カイユがセイフォンから帰ってきたら、追加予算を出す！」

優しいこの子は私に‘命令’するのを好まない。
小さい時から、私に優しかった。
私だけじゃなく、皆に優しい。

優しいからこそ苦しみ続ける、青の竜帝。

雪よりも白く、氷のように冷たいあの方のようになれたなら。
もっと楽になれるのに。

「予算……わかりました。引き受けますわ、陛下」

私はもう、名前で呼んであげられない。

ランズゲルグ。

その名を口にできるのは、貴方を殺せるあの方だけ。

セイフォンに行くことを父様に報告するため、騎士団本部のある北棟に向かった。

団長である私が留守の間、他の竜騎士を野放しにはできない。

ダルフェなら彼等を押えられるけれど、あれは妊娠中の私からは離れられない。

特に。

パスとオフは、まだ幼い。

幼いからこそ陛下の優しさを……甘さを敏感に感じ取り、好き勝手に行動する恐れがある。

父様にお願いしよう。

父様は幼竜だろうと容赦はしない。

留守を任せるのには適任だ。

ヒンは駄目。

あの子達に甘いから。

予算。
増えたから……父様は喜んでくれるだろうか？
それとも。
私がセイフォンに行くことに、反対するだろうか？

帝都の短かい夏が終わり、城の木々は秋の準備を始めていた。
一ヶ月ほどで紅葉は盛りを迎えるだろう。
そして冬が来る。
帝都の冬は長く、厳しい。

でも。
私は好き。
冬は。
母様が好きだった季節。

ー私、冬が1番好きなの。だって、カイユが産まれた季節だもん。
カイユの眼は、晴れた冬の空みたい、私の大好きな色！　カイユ、
カイユ……私の可愛いお姫様！

竜族にしては珍しいく小柄で、折れそうなほど華奢で。
幼竜である私の方が、背が高かった。

雪の玉を作り、待ち合わせに遅刻した父様に投げつけて。

中に石を仕込むのがポイントなのよ、と言い。
大きな声で、笑った。

無邪気で……まるで、幼い少女のような人。

竜騎士である私や父様と違い、穏やか優しい普通の竜族だった。
私のように刀を振るう事もなく、拳で他者を殴り飛ばす事も出来ない人だった。
だから。
人間などに、狩られてしまった。

珠狩り。

ここ数年、また発生しはじめた。

今度こそ、奴等を仕留めてみせる。

母様を殺したあいつは、つがいである父様の獲物。
この手でずたずたに引き裂きたいけれど。
殺さぬ程度で、我慢しなければ。

「ダルフェ、見て。真夏の花なのに……遅れて咲いたせいか、色が薄いわね」
「あぁ、今の時期に咲くなんて珍しいなぁ～」

木の根元に隠れるように咲く青い花。
私の小指の先ほどしかない、小さな小さな花。

求婚する時。
ダルフェはセランで作った小さな花束を、私に差し出した。

小刻みに震える手で。

あの時は、ばらばらだった体がまだ安定していなくて。
1日の大半は溶液の中にいなくてはならないような、酷い状態だった。

継ぎはぎだらけの。
歩くことさえ困難な、あの身体で。

地面に生えた小さなセランを摘み。
花束を作った。

私のために。

セランを受け取ると同時に泣き出した私に驚いたのは、目の前の雄以上に……私自身だった。

涙。

母様が死んだときに、一生分使い切ったと思っていたから。

これと出会った時。

頭部以外はまともな形をしていなかった。

死体だと思った。

でも、緑の瞳が私を見たから。

燃え立つような、鮮やかな緑色。

その眼を見て。

これは私の‘つがい’だと。

あの眼を見て、すぐに分かった。

赤の大陸から来た、私の雄竜。

私のつがい。

「ハニー。親父殿に報告したら宿舎に帰って飯食って、昼寝をしような？　子供達のためにも栄養たっぷりとんなきゃ。デザートにハニーの好きなカカエのプリン、作ったんだぁ～」

腹の子の父親。

「昼寝はしない。午後は鍛錬場で過ごすわ。セイフォンの事を考えるとイライラして、しょうがないの。体を動かして気分転換したい……」

ダルフェ。

私のお腹には。

子供達は、この子は……。

駄目。
言えない。
口にしたら、きっと……私、泣いてしまうから。
私は強くなきゃ駄目。
強く。
貴方を笑って送り出せるほど、強くならなくては。
貴方の前では、強い私でいなくちゃ駄目。
先に逝く、貴方の為に。
強い妻であり続け、強い母になってみせる。
「そっかぁ、分かったよハニー。今日は全員そろってるし、久々に団長のしごきも刺激的でいいかもなぁ」
ねえ、ダルフェ。
私のお腹にいるはずの娘は、何処に行ってしまったの？
私と貴方の娘は、迷子になっちゃったのかしら？
早く見つけてあげないと。
きっと、どこかで泣いている。

早く、見つけないと。
間に合わなくなってしまう。

私……私はっ！

「けどな、騎士連中を壊すなよ？　前回はやりすぎだった。溶液にぶち込まなきゃなんないとこまで、やっちまったからなぁ。手足をもぐのは禁止、特に頭部損壊は絶対駄目だからな、さすがに死んじまうぜ。了解？　アリーリア」

片目を瞑って言う夫に私は言った。

「善処するわ、テオ」

早く、戻ってきて。

母様のお腹に、帰ってきてちょうだい。

ねぇ。
どこにいるの？

私の可愛いお姫様（むすめ）。

もうすぐ、帝都に冬が来る。

私が生まれ。

母様が死んだ、冬がくる。

番外編　～カイユ～（後書き）

第69話

山盛りの唐揚げをのせたワゴンをガラガラと音を立てて押し……竜帝さんが南棟に現れた。

「よう！　待たせたな。昼飯にしようぜ、おちび」

温室に置かれたベンチにハクちゃんと座って本を読んでいた私に、竜帝さんは唐揚げを1つ口に放り込み……もぐもぐしながら言った。

摘み食いですか、女神様。

きっと食堂からの道中、唐揚げを摘み食いしながら来たに違いない。

唐揚げ……鶏肉かな？

うわ～、一個一個が大きい。

お母さんが作る唐揚げの3倍はありそう！

「なに読んでんだ？　なになに……『初めての帝都！　お勧めスポット・ベスト10』って、おい。まさか2人で市街観光に出かける気かよ！？」

油のついた手をハンカチで拭きながら、竜帝さんは本とハクちゃんを交互に見た。

「今度、カイユ達と行くんです。あ、でも当分は延期かな？」

カイユさんにはゆっくりしていて欲しい……。

お産後の彼女を帝都観光に連れ回すなんて、絶対に駄目。

赤ちゃん……ジリギエ君、もう産まれたのかな？

お母さん似かな、それともお父さん似？

むふふっ、楽しみ！

あ、お祝いのシフォンケーキ作りの事を竜帝さんに相談しなきゃ。

そんな事を考えてた私の隣から、ハクちゃんは立ち上がり。

「＜青＞よ。昨夜は気づかなかったが、母親その他が同伴では、でぇと、の枠から出てしまうのではないのか？」

ハクちゃんは私の膝から本……ガイドブックを取り、表紙を竜帝

さんに向けて言った。
「見ろ。この本の表紙も、人間の男女が仲睦まじく南街を散策する様子が印刷されておるぞ？　保護者同伴ではない。ん？　お前に訊いても無駄か、未だ情人の1人すらおらんのだし……ふむ。こういったことに詳しいダルフェが居らんのでは、確認しようがないな」
人間向けの帝都観光本。
一昨日の晩御飯前に、ダルフェさんがハクちゃんに貸してくた数冊の中にあったこれ。
ハクちゃんが珍しく一緒に読もうって、言ってくれたんだけど……けどぉ～！
表紙にはらぶらぶな人間のカップルが、あはは・うふふ・べたべた的に……ううっ、ダルフェさんのチョイスにはなんかこう変な共通性がある気がする。
私だったら、この表紙じゃ買わない。
レジに持っていく勇気が無い。
「で……でぇとってデートって言ったのか！？　おちび、このじじいは正気なのか？　お前の旦那は＜ヴェルヴァイド＞で＜監視者＞で最強、いや最凶最悪の竜が……デート？　鬼畜じじいが、でぇとぉおおおー……いってぇー！？　なにすんだ、このドS！」
青い眼をまん丸にして叫ぶ竜帝さんの額に、ハクちゃんはいきなりでこぴんをしたのだ。
でこぴんにしては、ちょっと異様な音がしたけれど。
竜帝さんの額は少し赤くなっただけだったので、ほっとした。
「煩い、＜青＞。お前は知らぬようだが……人間の男女にとってでぇとは恋文同様、非常に重要な儀式であると書物にも載っておるのだ。もっと本を読め」
ハクちゃん。
私は人間だけど、一応は異世界人なのですよ？
言ってなかったけど、私の世界では恋文はかなり廃れてるんです。
う～ん、平安時代が恋文最盛期だったのかな？

それにだいたい……デートが儀式って、どういう事!?
「こ、恋文？　……おちび、お前の旦那はいったいどんな本を読んでんだよ!?　なんか……言ってることが妙っつーか、変じゃねぇか？」
宝石のような青い眼を瞬かせる女神様に、私は＜原因＞を告げた。
「あのっ……ハクちゃんが読んでるのはダルフェのお勧め本ばかりでして、そのっ、あのっ」
ダルフェ本ばかりじゃ、ハクちゃんに変な情報ばかりが詰め込まれてしまうかもっ!?
実録新婚シリーズは、最悪だった。
ちらっと見たけれど……あれは絶対に、実録じゃな～い！
異世界人の私から見たって、あんな……あんな赤面新婚生活は有り得な～い!!
「うわっ！　そりゃ災難だな。あいつは俺にも時々、ここでは言えねぇようなすげぇタイトルのを持ってくんだぜ!?　ダルフェとしては親切心で貸してくれてんだろうが……」
竜帝さんと私は顔を見合わせて……溜め息をついた。
ダルフェさんは悪気ゼロ。
だから断れないんですよね～。
「はあ……飯、食おうぜ」
でこぴんされた額をさすりながら、竜帝さんは言った。
ハクちゃん、でこぴんを知ってたんだ。
こっちの世界にも、でこぴん文化（？）があるんだね。
「はい。ハクちゃん、竜帝さんがお昼ご飯を持ってきてくれたから部屋に戻ろう。あ、昨夜のスープの残りを温めようっと！　けっこう残ってたから2人分は有るから……ハクちゃん？」
ハクちゃんは長身をかがめて、ワゴンを覗き込んでいた。
何をして……？
「また魚か……昨夜も魚だったな。りこ、肉も食べなければ駄目だぞ？　昨夜読んだ本に、健康はバランスのとれた食事が重要だと書

いてあった」
竜帝さんの押してきたワゴンの料理を1つ1つチェックしつつ、ハクちゃんは言った。
昨夜？
あれから1人で本を読んでたんだ。
ハクちゃんは、眠らないから。
私が寝てる間に、ハクちゃんはいろいろな本を読んでいるんだね。
「……なんていう本？」
「［目指そう長寿・正しい食事で快適シルバーライフ！］だ」
長寿……。
いろんな本を貸してくれてるんですね、ダルフェさん。

ダイニングキッチンに移動して、3人でのランチタイム。
温めなおした朱紅魚のスープは、お魚の風味が少しマイルドになっていた。
昨夜も美味しかったけれど、また違った味わいが……カレーと同じで、翌日の味も楽しめるスープだった。
まあ、カレーは飲み物じゃないけれど。
お父さんはカレーが大好きで、某タレントをまねてカレーは飲み物だってよく言ってたな……。
お父さん。
ちゃんと禁煙を、続けられてるだろうか。
お父さん……あ、駄目。
今は考えちゃ駄目だ。
「竜帝さん、カリキュラムが変わるっていうのは……？」
私はスープを飲んでいた手を止めて。
唐揚げをスナック菓子のように、ぱくぱくと平らげていく竜帝さ

んに質問した。
彼のパンとサラダは、ほとんど減っていない。
そういえば。
昨日、カイユさんに野菜も食べなさいって注意されてた。
野菜が苦手なのかな？
「じじいに聞いてないのか？」
質問しましたが。
ハクちゃんの答えは。

一四竜帝の都合だろう。我は関与しておらん。

それだけだった。
私の表情から察してくれたのか、竜帝さんはハクちゃんをチラッと見て溜息をついた。
「おい、ヴェル。ちゃんと教えてやれよ。ああいった重要な事は、夫であるじじいがきちんと話すべきだと思う。……って、聞いてんのかよ！？」
「……黙れ、ランズゲルグ。気が散る。舌を引き抜かれたいのかっ」
私の横に座ったハクちゃんは、鮭に似た魚のムニエルと格闘していた。
「すまぬ、りこ。スープを飲んで待っていてくれ」
「う、うん。ありがとう、ハクちゃん」
魔王様はフォークとナイフを武器にちまちまと、勇者とではなく小骨と戦っていた。
さすがの無表情冷酷悪役顔の魔王様もイライラＭＡＸのご様子で、普段よりさらにつりあがった金の眼で魚を忌々しげに睨んで……。
はっきり言って、すごく怖い顔。
あんな殺人光線を発射しそうな顔で睨まれたら、心臓麻痺を起こす人もいそう。
お魚さん、魔王様に遭遇するのが料理された後で良かったね。

心臓麻痺を起こそうにも、心臓ないし。
切り身だから目も無い……このおっかないハクちゃんを見なくて済んだね。
まあ、顔がどんなに怖くても。
私は全然怖くない。
私のために小骨をとってくれてるんだし。
「ううっ、骨の件は俺様が悪かったよ。さっきも謝ったじゃねぇか、そんなに怒んなくたってよぉ」
竜帝さんは食堂のランチメニューから、お魚がメインのコースを私の為に持って来てくれた。
彼自身はもちろん、お肉コース。
そして。
食べ始めて、すぐに問題が発生した。
お魚の小骨はそのまま食べれる程度のものだから、下処理されてなかった。
でも、竜族と人間の私とでは小骨レベル（？）が違ったのだ。
竜族にとっては全く気にならず食べれる小骨が、人間の私にとっては小骨だなんてかわいいものじゃなくて。
竜帝さんが骨ごと食べれると言ったので、ハクちゃんは小骨満載の魚を私の口に入れた。
私もなんの疑いも無く噛んでしまい。
そして。
痛い目にあいました。
数本の骨が歯茎に刺さった。
でも、少〜し血が出ただけ。
もうなんともない。
この事から。
ダルフェさんは人間である私の為に、下処理を徹底して料理を作ってくれていたのだと知った。
彼が帰ってきたら、改めてお礼を言おう……。

「あのっ、竜帝さんは悪くないです。私が確認しなかったから……ハクちゃん、ごめんね。びっくりさせちゃったね？」

骨が刺さった本人よりも、ハクちゃんがショックを受けたようで。

私が口を押さえた瞬間、真珠色の髪の毛がぶわわ～って広がった……怒った猫みたいに。

私的には小骨より、そちらにびっくりしてしまった。

「うむ……りこ。すべての骨を取ったぞ！　あ～んだ、あ～ん！」

鮭フレークに変身したムニエルをスプーンにのせて、ハクちゃんは私に差し出した。

術式で骨を取り除けば確実で簡単だと、竜帝さんは言ったけれど。

ハクちゃんはそうはしなかった。

なぜ、術式を使わないのか。

私にはなんとなく、分かる気がした。

「ありがとう、ハクちゃん。……うん！　骨、無いね。すごく美味しいっ」

竜帝さんが居なかったら。

きっと、我慢できずに……私は泣きながら食べてたと思う。

嬉し泣きなら、してもいいから。

ハクちゃんが食べさせてくれた、元ムニエルの鮭フレークには。

ハクちゃんの心がいっぱい……いっぱい、入っていた。

ゆっくりとランチをとって……アクシデントもあったし。

竜帝さんの持参したで茶葉で、お茶を入れた。

台湾旅行のお土産にもらった高級烏龍茶にそっくりで、すごく美

味しいお茶だった。
まさか異世界で、またこのお茶を味わえるなんて！
忘れてたけど竜帝さんは、なにげにセレブさんでしたね。

あれ？

よくよく考えると、超がつくほどのセレブさんなのかな？
「え～っと。じゃあ、じじいの変わりに俺様が説明すんけど。小難しい部分は省くからな……あちっ、まだ熱いな」
女神様は猫舌なのか、カップのお茶になんどもふ～ふ～と息をかけていた。
それでもまだ熱いらしく、いったんカップをソーサーに置いた。
彼にお茶を出すときは、温度に気をつけてあげなきゃ……今度は少し冷ましてから出そう。
竜帝さんはカップの縁を包帯で包まれた指でなぞりつつ、ハクちゃんを青い眼で流し見た。
「難しい事を言っても、まだわかんないだろうからな。まったく、ヴェルは……しょうがねぇな～」
むむ。
相変わらず時々妙～に、色っぽいですね。
ハクちゃんの審美眼がかなりずれてて、良かったかも。
ハクちゃんはこんな美人が同席してるっていうのに、私に食べさせるお菓子選びに夢中だった。
テーブルに置かれたクッキーの缶から、全く視線が動かない。
竜帝さんがくれたクッキーの缶には１５種類も入っていたので、ハクちゃんは「我は非常に忙しい。移動の件より、今はりこに与える菓子選びが重要なのだ」といって会話に参加する気ゼロ。
私だったらクッキーより、女神様を見るけどな～。
「このじじい……＜監視者＞は新しい、若い四竜帝の居る大陸を中心にして動くんだ。ヴェルと竜族の古～い盟約……盟約は難しいか。

簡単に言えば＜約束＞か？　俺が赤ん坊の頃、ヴェルは＜黄＞の所から移ってきた」

約束？

赤ちゃんの頃……。

ハクちゃんと竜帝さんは、赤ちゃんの時からの長いお付き合いなんですね。

「まあ活動拠点がそこになるってだけで、じじい自体はいつも世界中のおん……い、いやっそのっ！　りゅ、竜宮とかをふらふらしてんだが、以前とは状況が変わった。じじいは‘つがい’を得たからな、今後はおちびを拠点にヴェルは動くことになる。これは竜の雄の本能的なもんだから、俺様達四竜帝にもどうにもできない」

状況が変わった……私がつがいになったから。

「つまりお前が大陸を移動しないと、ヴェルも動かないんだ。でも＜約束＞は守ってもらわなきゃなんねぇから、おちびに＜黒＞の所に移ってもらう。……＜黒＞はもうすぐ代替わりするんだ」

ハクちゃんの＜監視者＞ってお仕事は、世界中に出張（？）するってこと？

独身時代（なんか違うかな？）は出かけたっきり、世界中の竜宮で自由気ままにぷらぷらしてたけれど。

今のハクちゃんはつがいである私の所からお仕事に行き、私の所に帰ってくる。

だから私自身が、黒の竜帝さんお城に居る必要が……黒の竜帝さんが代替わり？

「竜帝さん。代替わりって、引退？」

代替わりって、子供さんに地位を譲るって事？

「ちょっと違うな。今の＜黒＞はもうすぐ死ぬんだ。新しい＜黒＞に変わるんだ」

死ぬ？

「黒の竜帝さん、死んじゃうの!?　病気?」
そんなっ、死んじゃうなんて……。
「老衰だ。まあ、すぐにぽっくり逝くわけじゃねぇし。黒の爺の次に歳食ってんのは＜赤＞だけど、あのおば……＜赤＞の姉ちゃんは、まだまだ現役だ。だからおちびはこれからの人生……かなりの期間を次代の＜黒＞んとこで過ごすことになる」
竜族はとても長生きだって言ってた。
人間の私は黒の竜帝さんの大陸で、寿命を迎える事になる。
そう言いたかったんだね、女神様。
貴方は優しいから。
ハクちゃんの前で私の寿命……死を口にするのを、避けてくれた。
「俺の大陸の事より、あっちの大陸の事を知ったほうがいいだろう？　俺様の所とあそこは……嫌になるくらい、全く違う。＜黒＞ん所は戦も多いし、四大陸の中でもかなり特殊だ……おちびには、俺様の大陸の方が性に合ってると思う。あんな大陸に……すまん」
竜帝さんは青い眼を伏せ、艶やかな唇を少しだけ噛んだ。
戦……黒の大陸って、いったいどんな大陸なんだろう?
竜帝さんは黒の大陸に、良い印象を持っていないみたいだし。
でも、大体は分かった。
私は青の大陸から黒の大陸に、お引越しが決定したってことだよね?
カリキュラムが変わるのは、私の生活する場所が変わるから。
この大陸についての知識だけじゃなく、引越し（?）先の事を予習しておくべきってことになって……。
ハクちゃんは人間の日常生活に疎いので、私自身ががもっとしっかりしないと困るだろうと……女神様はなんとも言えない、微妙な表情で仰った。
う〜ん、確かに。
ハクちゃんはセイフォンで、トイレの使い方も知らなかった。
トイレ事件、なつかしいなぁ〜。

大陸が違うと和式・洋式みたいに、トイレ文化も違うのかも。
「あ、うん……はい」
これから＜伝鏡の間＞で開かれる竜帝さん同士の会議は、ハクちゃんの移動について……と、いうより私のことに関しての話し合い。
この大陸からの移動時期・手段等の問題が山積みなんだと、女神様は苦笑した。
人間である私を安全に、確実に運ぶのはそれほど難しいことじゃなく。
繭に入って籠を使えば、安全に海を越えられる。
でも、それだとハクちゃんが耐えられないらしいのだ。
セイフォンから支店への移動のさい、ハクちゃんは【面会謝絶は3日が限界宣言】をしたのだそうで……。
そうなると、黒の大陸に行くのは最短の海峡経由で赤の大陸に渡り。
赤の大陸から黄の大陸を通って黒の大陸に入るという、とんでもなく長い移動になってしまう。
繭で一気に移動する案はハクちゃん的に無理なので、私の移動には通過する大陸に居る赤と黄の竜帝さんのサポートが必要不可欠になり……。
なんか私って、竜族の皆さんに迷惑ばかりかけてる。
この世界に連れてこられてから、周りに迷惑ばかりかけて。
「このじじいは、お前の顔が3日以上見れなければ狂うんだとよ！　すでに狂ってる気がしなくもないが……いい年して我儘ばっか言いやがって。我慢って言葉が、このじじいの脳内には足りてねぇな！　あ、そうだ、おちび！　今後、ヴェルにお前の許容範囲を超える変なことをされそうになったら、はっきり嫌だって言うんだ。迷わずきっぱり言うんだぞ！？　俺様はこの大陸から出れねぇから、

助けてやれねぇ。……ここを出るまでに、もっと強くなるんだ」
人間の私が……しかも異界人がハクちゃんの‘つがい’になっちゃった事は。
竜族にとって、あまり歓迎できない事だったのかも知れない。
私とたった3日間でも離れるのを拒む、寂しがりやで怖がりなハクを。
数十年で置き去りにする、人間の私なんか……。
赤ちゃんの時からハクちゃんといる竜帝さんは、じじいだとか憎まれ口ばかりだけど。
ハクちゃんを自分にとって‘特別な人’にして、想ってくれているのがよくわかる。
竜帝さんは。
私がいなくなった後の事を、今から考えてるはずだ。
とても優しい人だから。
私がハクのつがいになったのを知った瞬間から、避けられない未来に眼を向けて……心を痛めてる。

私、頑張らなくちゃ。

「は、はぁ……はい。あの、質問してもいい？」
もっと、もっと。
頑張らなくちゃ駄目なんだ。
「なんだよ？」
ありがとう、竜帝さん……ランズゲルグ。
この大陸から出たら、人間の私はもう二度と貴方と会えないけれど。
女神様のように綺麗で優しい貴方を、ずっと忘れない。
「竜帝さんの言う変なことって、なに？」
ハクちゃんて、基本的に変……というか変わってるし。
でも、嫌って言うほど変かというと……そうでもないし。

まあ、デリカシー皆無な奇天烈思考回路にも慣れてきたけれど。
変が多すぎて、竜帝さんの言う‘変’が分からないのです。
「なんで質問がそれなんだよ！？　普通は移動についてとか＜約束＞についてとかに疑問をだなっ……。変な事だとぉお～っ、おおっ俺様の口からはとても言えぇ～ん！　俺様は仕事だ、会議だ！　忙しいからこの場には居られないのだっ！　さらば、おちびよ！」
顔を真っ赤にさせた女神様は、ふらふらと立ち上がり。
ダッシュで部屋を出て行った。
どうしたんだろう？
ゆっくりしすぎて会議に遅れそうとか……ま、いっか。
「りこ。我はこれが最も良いかと思うのだが……どうだ？」
竜帝さんに無関心な旦那様は、真ん中に穴の開いたリングクッキーを自分の顔の前にかざした。
表面に刻まれたオレンジピールがトッピングされいて、とっても綺麗なクッキーだった。
「穴からハクちゃんの眼が見えて、面白いね。ハクちゃんからも、私が見える？　美味しくて綺麗で……しかも面白いのを選んでくれたんだよね？」
私の言葉に、ハクちゃんはうなずき。
「うむ。りこ、あ～ん」
金の眼を細めて、私にクッキーを差し出した。
「素敵なクッキーを選んでくれてありがとう、ハク」
竜帝さん。
この世界での【私の居場所】は、この人……ハクだから。
どこだって、どの大陸だっていいの。
竜族とハクちゃんとの＜約束＞とか、あんまり気にならないの。

ハクがいてくれれば。
ハクが連れて行ってくれるなら。

「うん。美味しい！　ねえ、ハクちゃん。雨、今日は降らないんだよね？　夕日を見に行くの、すごく楽しみ」

地獄にだって、ついて行く。

意外なことに。

３０分程で彼は戻ってきた。

バーンと音を立てて扉を乱暴に開き、キッチンに突入してきた。

走ってきたのか、結っていた青い髪が乱れていた。

竜帝さんは、頭を両手でがしがしと掻き毟り叫んだ。

「がぁあああー、むかつく～！　じじい、おちびと一緒に伝鏡の間に来てくれよっ、俺様じゃ話になんねぇ～。＜黄＞も＜赤＞もおちびを見せろ会わせろってごねやがるっ！」

さっき使ったお皿を洗っていた私は、言葉を失った。

みっ、見られたぁ～！

ハクちゃんにつかまれてお皿を洗う、この恥ずかしくて情けない姿をー！

「断る」

うろたえ、あわあわしてお皿をシンクに落として割った私とは対照的に、ハクちゃんは全く動じていなかった。

「なんでだよ！？」

竜帝さんを見ず、私を床に下ろし。

私からゴム手袋を外しながら、ハクちゃんは言った。

「嫌だからだ。りこ、手を……ああ、良かった。怪我はしておらんな。＜青＞よ、割った皿でりこが怪我をしていたら、この城を潰し

ていたぞ」
　私の両手を確認したハクちゃんは、竜帝さんから隠すかのように私を背中のほうに移動させ……。
「おい、あと一歩で2ミテを越える。首を落とされたいのか？」
　私はぎょっとしたけれど、竜帝さんはひるまなかった。
「首～？　目玉をえぐるんじゃなかったのかよ！？　どうせ、おちびの前じゃやんねえクセに。ヴェルじゃ話になんねぇな。おい、おちび。お前だって他の竜帝を見てみたいよな？　ほら、じじいに‘お願い‘をするんだ。他の竜帝に会ってみたいって……このじじいは、基本的にはおちびに逆らえないからな」
「え？　は、はい」
　私も他の竜帝さん達には興味津々だけど。
　ハクちゃんがどうしても嫌なら、諦める。
　ハクちゃんの気持ちを最優先してあげたいし、我侭を言って優しいこの人を困らせたくない。
　でも、竜帝さんもお手上げ状態みたいで気の毒だしな……。
「ハクちゃん、なんで嫌なの？」
　背中をつんつんして、訊いてみた。
　ハクちゃんは竜帝さんを睨んだまま、言った。
「あのような陰気くさい場所は、小さな花のように愛らしい我のりこに相応しくない」
　ぶほっ！？
　は、花ですか？
　私なんか、雑草です。
　ぺんぺん草です！
「しかも＜伝鏡の間＞は照明が一切ないのだぞ、転んだらどうするのだ？　りこは明るい所でも時々躓くのに。あのように暗くては危険極まりないではないか」
　そ、それはその。
　単に私が鈍くさいからであって……気づいてたんだ。

ううん、恥ずかしいな。
私って昔から、何も無い所で躓くんだよね。
妹もそうなんだけど……。
心配してくれるのは、ありがたいけれど。
そんな理由なら（私が鈍くさいからなんて、ううん情けない）、
他の竜帝さん達に会えるチャンスを逃したくない。
「じゃ、じゃあ！　ハクちゃんを掴んでる」
私はハクちゃんの腰の辺りを両手で掴んだ。
うん、これでオッケー！
「こうして服を掴んでるから、真っ暗だって平気だよ？」
「服？」
振り向いたハクちゃんは。
私を見下ろし、金の眼を細め。
「……なるほど」
あれ？
ハクちゃん、一瞬だけど微かに口元が上がったというか。
ニコッ、じゃなくてニヤッて……。
見間違いかな？
「良い案だな」
そう言って。
「きゃっ！？」
私をひょいっと抱き上げ……ぎょわぁ！？
「ちょっ、ハクちゃん！　高いよ、怖いっ……下ろしてぇ～！」
右肩に座らされたので、目線が有り得ないくらい高くなってしまい。
さすがに怖くて、ハクちゃんの頭にしがみついた。

いくら私が小柄だからって、さすがに肩には……リス猿じゃないんだし、肩に乗せるなんて無茶苦茶だよ！

「何故だ？　これなら転ぶ恐れが無い。安全で安心だぞ……我の頭部に、そうやって掴まれば良かろう？」

何言ってるのよ、もうっ！

安全かもしれませんが、安心できませんって！

恐ろしく高いし、上半身が不安定だから怖くてハクちゃんの頭が離せない。

ハクちゃんは私を落としたりしないと頭では分かっていても、怖いものは怖いのだ。

「や、これ嫌……高くて怖い！　だったら、せめて抱っこにしてよ。ねぇ、お願いハクちゃん。抱っこにしてっ！」

そう‘お願い’すると、ハクちゃんはすぐに私を抱えなおしてくれた。

「そうか、りこは我に抱っこされたかったのだな。最初からそう言えば良いのだ……夫の我に遠慮など無用だぞ？」

私の両腕を自分の首にしっかりと絡ませ、腕に座らせて……ひえぇ～、お子様抱っこじゃないですか！

「おちび、同情するぜ。ったく、狡猾なじじいだな～」

呆れたようにハクちゃんと私を見る女神様……うう、視線が痛い。

今回は正式な奥さんとして他の竜帝さん達に会うのに、抱っこ状態でご挨拶なんて……うう、こんなの嫌だぁあ～。

あれ？

目の前の女神様は、小さくてかわいい青い竜だったよね？

他の竜帝さんも、かわゆ～いちび竜！？

会議……竜体だといいなぁ。

かわゆ～い鱗のちび竜さんが、会議だなんて！

なんて、素敵な光景でしょう！？

想像するだけで……ああ～んっ、堪んない。
うっとりしちゃうよぉ！
「おい、おちび！　顔、緩んでるぞ？　何を考えてんだか想像つくけどよぉ……俺様の時みたいになんのは勘弁してくれよ！？　あそこにある大型伝鏡を全部あわせたら、国家予算並みの金額になるんだからな！　絶対にヴェルを暴れさせんなよっ！」
私は慌てて妄想を止め、ハクちゃんの顔を見た。
げっ！？
わ……笑ってる。
笑ってるけど、この笑いはやばい方の笑い方だぁあ～！
「良い機会だ。誰が1番かわゆいか、はっきりさせようではないか。くくっ……なあ、りこよ」
ハクちゃん。
貴方……会議を＜かわゆいコンテスト＞にするおつもりでしょうか？
貴方の奥さんの移動方法が主な議題の会議だそうですから、お手柔らかにお願いいたします。

第７０話

竜帝さんは＜電鏡の間＞に徒歩で戻った。
私と一緒に術式で、ハクちゃんに連れて行ってもらったほうがと提案したけれど。

一歩きながら頭ん中を整理すんから、いい。……＜黄＞の野郎、調子に乗りやがって！

真っ青な髪を結い直しながらぶつぶつと何か言い、大股歩きで去っていった。
お顔以外は全身包帯という状態なのに、あんなに動いて大丈夫なのかな～。
食欲もすごくあるし、ダルフェさんよりも丈夫な身体らしいから……仕事しても、平気なのかな？
とりあえず。
他の竜帝さん達へご挨拶に＜伝鏡の間＞に行くことは、決定したんだし。
よし、軽くお化粧直しをしようっと……一応ね。
こっちの世界に来てから、私は中学生以来の薄化粧なのだ。
以前は化粧下地にコンシーラー２種、ファンデに仕上げのパウダー等々。
アイメイクも気合を入れていたけれど。
今は軽～くお粉をつけ、チークをちょっと入れて……口紅を塗ってぱぱーっと、終了。
３分もかからない。
最初は、物足りない気もした。
でも、すっかり慣れてしまった……とっても、楽だし。
私の周りには綺麗な人ばかりだったから、かえってメイクへの情

熱（？）が失せた。
カイユさん、セシーさん、ミー・メイちゃん……侍女さん達だって美人さんばかり（採用基準に容姿が入ってるとしか思えない）だった。
天然美人さん達に囲まれてたら、もうすっぴんでもいいやとさえ思えてくる。
私なんかお化粧しても、しなくてもたいして変わらないんだって……。
そうは言っても、お化粧を捨てきれないのが女心よね～。
あ、カイユさんがくれた口紅をしていこう。
ハクちゃんが、似合うって言ってくれた色……。
「ハクちゃん、いったん下ろして。ちょっと準備をし……きゃっ！？」
一瞬で景色が変わった。
視線の高さも……ハクちゃんが座ったここは、寝室のベッドじゃありませんか？
「りこは、したいのか？」
はっ！？
「りこは移動したいか？　確かに我は大陸を移るつもりだったが……。りこが此処を気に入っておるなら、無理に移動せずとも良い」
あ、お引越しの話ですね……。
つい、そのっ。
昨夜の食事中にカイユさんから竜族の結婚について、少々お話があったので……一瞬、勘違いをしちゃいました。
だって、そのっ。
竜族のハクちゃんは、蜜月期とかいう特別な期間真っ最中らしいのだ。
蜜月期は、竜の繁殖期間。
奥さんが妊娠するまでその状態が続くって、カイユさんが言っていた。

妊娠したら、出産までは生殖機能が止まる。
その代わり、蜜月期は……帝都への道中でも簡単な説明を受けてたけれど。
私、そのことについてはあんまり考えてなかった。

ハクちゃんは一言も、私に不満を言わない。
私が、人間だから。
私は人間だから、竜族の女性と同じような蜜月期を要求したら。
身体が壊れちゃう……支店の時みたいになってしまう可能性があるから、ハクちゃんは絶対にそうはしない。
だから安心していいって、カイユさんは教えてくれた。

私は安心・安全。
爪を気にして自分からは私に触れられなかったあの頃と……貴方が竜体だけで暮らしていた時と同じ。
ハクちゃんは＜蜜月期の雄竜＞である自分自身から、人間の私を護ってくれてる……。
優しい貴方は何も言わない……言ってくれないけれど。

ねぇ、ハクちゃんは？
ハクちゃんは、本当は……どう思ってるの？

今回のカイユさんのことで……個体数の少ない竜族にとって【一族の子供】は、とても重要視される問題だって知った。
ハクちゃんが子供について私に何も言わないのは、人間の私に気を使ってくれてるのかもしれない。
子供……ハクちゃんと、私の赤ちゃん。
竜族のハクちゃんとの子供ならきっと、人間の私より長生きしてくれるはずだ。
妻の私がいなくなっても、ハクちゃんに【家族】を残してあげら

れる。
何も持っていない私が、唯一……貴方にしてあげられること。

ハクちゃん。
私、欲しい。
このお腹に、貴方の赤ちゃんが。

私、早く貴方の子供が産みたい。
貴方と家族を作って、家庭を持って……。

貴方に【家族】を。
人間の私は、貴方とずっと一緒にいられないから。
私は貴方と、私達の子供と過ごせる時間が……少しでも長く【家族】で過ごしたい。

あっ……私。
この世界に来てから、生理が止まってるんだった。
このままじゃ、ちゃんと妊娠できないかもしれない。
婦人科のお医者様に看てもらうべきなのかな？
でも。
まだ生理不順ってレベルだよね？
う～ん。
あと2ヶ月こなかったら、カイユさんに相談してみよう。

「りこ？」
おっと、いけない！

今は他に考えなきゃならない事が。
黒の大陸にお引越しする……ん？
今、移動しなくてもいいとか言ってた？
あれ？
「でも、＜約束＞なんでしょう？」
ハクちゃんは私を抱いたまま、ぽすんとそのまま後ろに倒れた。
真珠の色の長い髪が、寝具にふわりと広がる……。
ハクちゃんの髪の毛って、本当に綺麗だと思うけれど。
あんなに長いんじゃ、洗うのは大変そう……人型でお風呂に入ったら、湯船に髪が入らないようにタオルを巻くか結んでアップにしないと邪魔かもね。
ふと、脳内に浮かんだのは。
○×温泉旅館とプリントされたタオルを頭にまいて、某アヒル隊長と露天風呂に入るハクちゃんの姿だった。
「＜約束＞……まあ、そうとも言えるか。どちらかというと、＜取り引き＞が近い気がするのだが。遥か昔、我は竜の始祖と＜取り引き＞をした。それが盟約……＜約束＞となり今日まで続いているが、厳守する必要は無い。＜約束＞の履行を必要としているのは我ではなく、四竜帝なのだ」
私と竜帝さんの会話、ちゃんと聞いてたんだ。
「我は考えもしなかった……りこの気持ちを。りこが何処に居たいのか、どうしたいのか。そして黒の大陸がりこに合うかなど、そのような事を思いつきもしなった」
ハクちゃんの手が、私の顔にそっと添えられた。
ひんやりとした、大きな手。
「我はランズゲルグのように、りこの事を考えることが……出来なかった」
私の大好きな、優しい手。
「＜青＞が言ったように、黒の大陸は四大陸の中で最も争いが多い。人間共は絶えず戦をし、それがあの大陸の科学技術を発展させ経済

を潤している。りこが産まれ、育った世界は平和で穏やかな世界なのだろう？　りこを見れば、我にも想像がつく」

戦争と経済。

こっちの世界も私の世界も、そこは同じなんだ……。

「りこは嫌なものを目にするかもしれない、悲しい思いをするかもしれない。人間同士の殺し合いはどの大陸だろうとある。だが、あそこは……りこ？」

私はハクちゃんの目元に触れた。

金の眼。

この綺麗な眼には、私はどう見えているんだろう？

「ハクちゃん。私の世界にも戦争はあったよ？　惨い犯罪だって、いっぱいあるし」

貴方の眼に、私は……。

「戦争の映像を見ながら、家族でご飯を食べることだって……」

私の住んでいた国は平和だった。

でも、【世界】が平和だったわけじゃない。

「戦争の映像はしょっちゅうだから、見慣れてしまってた。自動的に流れるそれを真面目に見るなんてしたことなくて、自分には関係無いって……」

同じ世界の中で起こっていたのに。

あんまり実感が無かった。

戦争映画みたいに残酷な場面は、ニュースではやらない。

画面に映るのは戦車や戦闘機、銃を肩に下げた迷彩服の大柄な兵士。

壊れた建物。

真っ黒に焼けた乗用車。

私にとって、それは全く現実感が無くて……。

「ひどいでしょ、私って」

テレビの中のそれは、同じ地球であったこと。

同じ世界であったこと……続いてることなのに。

保健所で処分を待つ捨て犬達のニュースは食い入る様に見て、可哀相だと泣いたけど。
遠い砂漠の国の軍事施設が、爆破される瞬間をとらえた人工衛星からの映像を見ても。
今の科学ってすごいんだってことくらいしか、考えなかった。
そこにだって、人が居たはずなのに。
大勢、亡くなったかもしれないのに。
「私は貴方が思ってるような、綺麗で優しい人間じゃない。ずるくて、自分勝手で……嫌な女なの」
貴方を好きになって、自分の命のことを……死を考えるようになった。
命。
大切だって、尊いものだって知ってるつもりだったけれど。
今までの私は、知ってるつもり、なだけで、ちゃんと考えたことなんかなかったんだと気がついた。

優しいのは、貴方。
綺麗なのは、貴方。

「なぜ、そのような事を言うのだ？　我のりこは、綺麗で優しく温かい。……＜化け物＞の我などとは、違う」
化け物？
貴方のどこが化け物だっていうの？

誰かにそう言われたの？
言われ続けてきたの？

泥棒のおじさんは、私がハクちゃんのつがいだと分かると。

眼が、私を見る眼が変わった。

眼……私を見たあの眼は。

セイフォンの侍女さん達が、先生候補の人達が。
隠そうとして、隠し切れずに滲み出ていた……あの眼と同じ。

泥棒のおじさんは、私を怖がったんじゃない。
ハクを……＜ヴェルヴァイド＞を恐れたんだ。

ハクの〝つがい〟になった私は。
この世界の人達からすれば、怖い存在で。
もう、同じ人間としては見てもらえないのかもしれない。
私は異世界人だから。
この世界の人達から冷たい眼で見られても、珍獣扱いされたって当然だと思う。

でも。
ハクちゃんは、この世界の住人で。
＜監視者＞っていうお仕事だって、誰かがやらなきゃならないんでしょう？
＜処分＞なんて、ハクちゃんが好きでやってるはずないのに。
この人にそんな〝役〟を押し付けてるのは、この世界の【人間】なの？
竜族は術式を使えない。
術式で私の居た異世界から好奇心で何かを出して、後始末を押し付けてるのは……【人間】だ。

嫌。
貴方をあんな眼で見る人達は、嫌。

「ハクちゃんが＜化け物＞なら、私だって同じだよ？　なんたって、

異世界人だしね」

竜帝さん……竜族と人間は、なんでこんなにハクちゃん対して違うの？

「ねえ、ハク。黒の竜帝さんが亡くなってしまう前に、黒の大陸に着けるようにしなきゃね！」

さっきの竜帝さんの話だと。

老衰でもうすぐ亡くなる黒の竜帝さんも、赤ちゃんの頃から……長い期間をハクちゃんと過ごしたはず。

青の竜帝さんと同じように、ハクちゃんには特別な想いがあるはずだから。

会わせてあげたい、ハクと黒の竜帝さんを。

伝鏡越しじゃなくて。

「お引越しかぁ～。他の大陸も通っていくなんて、まるで世界一周旅行みたいですごいねっ」

帝都で与えられた部屋は、すごく素敵で。

大きな温室まで併設されて。

衣装室にはハクちゃんのものだけじゃなく、私の衣類までたくさん用意されていた。

全てが、準備されていた。

ハクちゃんの事を大事に思ってる彼は。

ハクちゃんの為に。

私を【満足】させようと、仕事まで、用意、してくれようとした。

竜帝さんが私に良くしてくれるのは、ハクを想っての事で。

人間は……＜監視者＞のハクが怖いから。

術式を使わずに、小骨を一生懸命に取ってくれた貴方。

味覚が無い貴方は味見が出来ない。

だから美味しそうなだけじゃなく、綺麗で面白いクッキーを選んでくれた。

外見以上に、真っ白な心を持つ貴方。

「ハクちゃんって、時々すごく綺麗過ぎて。……私なんかが触ったら、雪みたいに融けて消えてしまいそう」
貴方の心に触れるたび。
自分が汚い人間だって、思い知らされる。
「……おかしなことを。りこが触れても、我は消えはしない」
目元に触れていた私の手を取り。
指先にキスをして。
「我の鱗は白いが、雪ではない」
眩しそうに眼を細め、言う貴方。
「だが。温かなりこを抱いて、こうして接吻をすると」
ハクちゃんは手も唇も、体温が低くてひんやりしているけれど。
「ハ……ふっ……んぁっ……」
唇を深く、深く合わせて。
貴方とこうして触れ合っていると。
私の心も身体も。
全てがあたたかいもので満たされる。
「……りこ。我は雪ではないのだが」
キスしてもらえて嬉しいのに、同時にとっても恥ずかしくて。
両目をぎゅっと閉じた私の瞼に、ひんやりとした唇の感触……瞼の内側から、じんわりと熱が生まれる。
なんだろう、これ……この感じ。
うわぁ、ぽかぽかして気持ち良い。
ホットタオルをのせてるみたいな心地良さ……。
「舌先から、融けてしまいそうだぞ？」
ゆっくりと開けた眼に見えたのは。
目元を微かに染めた……大好きな貴方。
「ハクちゃん……ハク」
汚い私と、綺麗な貴方。
どこまでも……底の底まで混じり合ってしまいたい。

貴方が私を置いて。
その白い翼で、飛んでいってしまわないように。
私は汚い、嫌な女。
心のどこかで。
「うん。私も……」
貴方の翼を、この手で折ってしまいたいと願う……嫌な女。

「そうであった！　我は寝台に用があったので、ここに転移したのだった」
ハクちゃんは自分の上から私をベットに下ろし、ごそごそと枕の下に右手をいれた。
「これだ、これ！」
医務室でもそうだったけれど。
ハクちゃんはなぜか、私の枕の下にパジャマセットをしまうのだ。
やっぱり変……というより、不思議君かも。
取り出したパジャマを手に、ハクちゃんはベッドの上で正座をした。
「うむ、これが我の‘勝負服’なのだ。りこがくれたこの、我への愛の結晶であるぱじゃまを着て行く。そして奴等に、我のかわゆさを思い知らせてやろうではないかっ」
パジャマが勝負服!?
ちょ……何を言ってるんですか！

「りこよ。申し訳ないのだが、ぱじゃまを着るのを手伝ってくれるか？　我は、そのっ……まだ1人ではだなっ……りこ？」

びっくり仰天状態の私に、旦那様はパジャマを握ったまま首をかしげ。

「りこ、口が開いておるぞ？　どうし……ああ、そうであったな！　すまぬっ、りこ。今すぐするので、怒らんでくれっ」

そう言って。

私の足と自分の足（改めて見ると、かなり大きい。これって何センチ？）からあたふたと靴をもぎ取り、ぽんぽーんと放った。

こらこら、ハクちゃん。

あんな遠くにぽんぽーんてしたら、履くときに困っちゃいますよ？

靴をそろえるのを伝授した後、私とハクちゃんは揉めた。

ベッドの上で揉めてるのに、内容は色気ゼロだ。

パジャマを着て勝負（かわゆいコンテスト？）に出ると言うハクちゃんに、それは寝巻きだから公の場には着ていかないでと私は言った。

だいたい勝負に行くんじゃない、竜帝さん達の会議に行くんだよ！？

私の作ったベスト風パジャマが自分の一張羅だと言い張るハクちゃんを、思い止まらせるのは想像以上に大変だった。

パジャマを取り上げようとすると、ささっと後ろに隠してしまうし。

私があげたパジャマをそんなに気に入ってくれてたのは、とっても嬉しい。

でも、それとこれとは別問題。

どこの世界に、パジャマ姿の夫を喜んで会議に送り出す妻がいるかぁ～！

「ハクちゃん、それは駄目だよ！　今、着てるのだって素敵だし…もっとおしゃれしたいなら、衣装室に竜帝さんがくれたのがいっぱいあるからっ、ね？」

服だけじゃない。

アクセサリーだって、いろいろあった。

「嫌だ。我は‘おしゃれ’などに興味は無い。ぱじゃまが良いのだ」

両手でパジャマを握って放さないハクちゃんに、とうとう私は言った。

「もおぉ～うっ！　分かったわよ、ハクがそれを着て会議に行くなら私もパジャマを着ていく！」

駄々っ子のようなハクちゃんに、私もさすがにかっち～んときてしまい。

私は少々やけになり、勢いよく服を脱ぎだした。

ダルフェさん作のふりふりエプロンをとり、ハクちゃんのまねをして次々と脱いだものを放り投げた。

それにはハクちゃんも、かなりびっくりしたようで。

「なっ！？　や……やめてくれ！　りこの足を堪能して良いのは我だけだー！　悪かった。我が悪かった、りこ！　服を着てくれ、頼むっ」

私が脱いだものを慌てて拾い集めたハクちゃんは、残ったスリップドレスを脱ごうとしていた私を毛布でくるんで……むぎゅぎゅ～っと抱きしめて、言った。

「すまなかった、りこ！　さっき、抱っこをして連れて行ってやると約束したのに、我が竜体で行くと言ったので拗ねてしまったのだな？　竜体では、りこを抱っこをしてやれぬものな。そんなに我に抱っこされたかったとは！　このように遠まわしにおねだりせずとも……さきほども言ったように、夫の我に遠慮は無用なのだぞ？」

抱っこ……おねだり？

は？

それ、違います。

しかも……堪能って何ですか！？
当分、あのぼろパジャマを着るのはやめよう。

「遅っせーぞ、ヴェル！　おちびが来るって言ったら、＜黄＞達はもっとお洒落するとか阿呆なことほざいて引っ込んじまった。すぐ呼び直すから、ちょっと待っててくれ」
ハクちゃんが術式で＜伝鏡の間＞に連れて行ってくれた。
恥ずかしながら、もちろん抱っこで。
私はセイフォンではちび竜のハクちゃんを、抱っこしまくっていた。
常に抱っこしているか、お膝にのせてるかだった。
他の人が居ようがいまいが、関係なしだった。
彼に間違った抱っこのＴＰＯ（？）を教えてしまったのは、私なわけで……くっすん。
腰に手を当て、鼻息荒く言う女神様はもちろん人型だった。
あ、そうか。
他の竜帝さんだって人型かもしれない。
「はい。竜帝さん、遅くなってごめんなさい」
ハクちゃんだって、人型だし。
かわゆいちび竜さん達が勢揃いは、夢のまた夢……ううう、残念。
「いいって。どーせ、そのじじいがなんかごねたんだろう？」
じろりと青い眼が、ハクちゃんを睨んだけれど。
ハクちゃんは全く気にする様子が無く。
「ランズゲルグ。今夜のりこの夕飯には、脂身の少ない肉を使ったものを用意しろ。あと、カカエの卵を使ったものが1品欲しいのだが……我は料理の種類に疎く、よく分からんのだ。ふむ。ダルフェ

がおらんと、いろいろ不便だな」
と、相変わらずマイペースだった。
ごめんね、ハクちゃん。
晩御飯の話を今、ここでする必要性が私にもちょっと……。
「おちび、ダルフェってすげえなぁ。……あのカイユのつがいになった時も、すげぇ勇気だと思ったけどよ。一ヶ月以上この謎感性の凶悪じじいの面倒みて、五体満足で生き残ってんだもんな～。臨時賞与もんだぜ」
そう言って、女神様はこきこきと首を左右に動かした。

明かりの無い暗い場所だとハクちゃんは言ってたけれど、真っ暗って程じゃなかった。
＜伝鏡の間＞は想像していたよりもずっと狭く……12畳あるかないかだった。
壁には大きな鏡3つ……ほほ～、これが超お高いという大型伝鏡ですか！
幅は2メートル位で、高さは……4メートルはありそう。
不思議なことに、眼をこらして見てもそこには何も映ってはいない。
見た目は鏡なのに……何も映っていないのだ。
ハクちゃんの髪を軽くひっぱりつつ、私は言った。
「ハクちゃん。あの伝鏡に他の竜帝さん達が現れるの？　ねえ、これなら私の眼にもなんとか見える暗さだよ？　またまた大げさに言ったんでしょう！？」
「否、ここは夜より暗い闇の中だ。ふむ、どうやら少しは効いているようだな」
「え？」
嘘、だって見えてる。
お月様の出てる夜みたいに、見えているのに。

「先ほど、りこの中にある我の気を少々いじった。……長くは持たぬだろうが、我は長居するつもりは無いのでかまわん」
いじるって、何？
さっきって……あ、瞼にキスしてくれた。
そうしたら、瞼や眼がぽわ～んて温かくなって……。
「ハク、あの……あれ？」
確認したかったけれど、先に部屋に居た竜帝さんの動きが気になってしまい。
ハクちゃんへの質問は後回しになってしまった。
何も映ってない不思議な鏡を、竜帝さんは包帯で包まれた右手で1枚1枚ノックして歩いていた。
温室でも手の平サイズの伝鏡をこんこんってして、カイユさんと喋ってた。
ああやって、相手を呼び出すのかな……あれ？
最後の1枚はノックしなかったよ？
私の視線に気づいた竜帝さんが、なんとも言えない微妙な顔で言った。
「ああ、これは＜黒＞のなんだ。爺さん、寝込んじまってて会議には出られないんだってよ。補佐官の話じゃ、なんか強い精神的ショックを受けて寝言で‘ぶ、ぶぶっうぶぶう～’とか魘されてるんだと。ヴェルは爺さんに昨日、会ったんだろう？　どんな様子だった？」
そうでした。
ハクちゃんは黒の竜帝さんから話があるって言われて……何のお話だったのかな？
「ベルトジェンガか？　老いのせいか、呂律が回っていなかったな。仕方あるまい、あれはもう次代に変わるほどの歳だ。体調が悪くて当然だろう」
呂律がおかしかったなんて、脳梗塞でも起こしかけてたとか！？
かなりの高齢らしいから、容態が気になる……大丈夫かなぁ、黒

のお爺さん。
「ま、そうだけどよ～。ぶぶなんとかって、何なんだろうな？」
竜帝さんが首を傾げていった。
「さあな」
ハクちゃんも、少し首を傾げた。
ハクちゃんと竜帝さん。
２人の動作が似ていて、なんだかとっても微笑ましかった。

「お待たせ～！　へえ～貴女がイドイドのつがい！？　異界人って、見た目はまるっきり人間なんだ～、つまんな～い。どう？　私って可愛いでしょう！？　私のお城に遊びに来てくれるなら、特別に抱っこさせてあげてもいいわっ！　きゃははははっ、私って最高にかっわい～いっ！　光栄に思いなさいよ、異界人」
黄色…レモンのように、鮮やかなビタミンカラー。
頭部に淡いピンクのリボン。
小さな身体は白いレースで飾られたリボンと同じピンクのドレス。
まず最初に伝鏡に現れたのは、黄色い竜だった。
ハクちゃんや女神様と同じ、小さな竜。
予想通り、私の目は釘付けだ。
が！
それは可愛いからじゃなく。
「きゃははははっ！　イドイドなんて、しょぼしょぼしおしおなお爺ちゃんでしょう？　私は若いからピチピチで抱き心地も最高よ？」
確かに見た目も凄かった。
でも、それ以上に強烈な発言が炸裂したからだった。
イ……イドイド。
イドイドって誰？

しょぼしょぼしおしおなおじ……お爺ちゃん……この場にいるお爺ちゃんっていったら、まさかっ!?

イドイドって、ハクちゃんのこと!?

しょぼっ……失礼なっ、ハクちゃんだってピチピチパンパンです!

「リィリィちゃんは、きっとかわゆ～い私の虜になるわね。きゃはは、そうなったらイドイドは……きゃあはははぁ～っ! 想像するだけで、笑えるー! きゃはははははぁ! うける～! きゃーはっはははははぁ」

なっ……なんなの、このド派手衣装のレモン竜帝は!?

ハクちゃんに喧嘩売ってるの?

しかも、この妙に甲高くてイラッとしてしまう笑い方……あんたは○家ぱー○か!?

リィリィ……トリィのリィ?

じゃあ、イドイドはヴェルヴァイドのイド!?

「おい! ＜黄＞、うるせぇ黙れ!」

女神様がレモン竜の映っている伝鏡を、バンって右手で叩いた。

怒ってる……竜帝さん、怒ってる。

ハクちゃんにぷりぷりしてる時とは、ぜんぜん違うもの。

竜帝さんは、怒ってる。

竜の生態を熟知しているはずの＜竜帝＞が、蜜月期の雄竜であるハクちゃんにあんなこと言うべきじゃない。

私だって、そう思う。

「なによ＜青＞! あんたはいっつもそうやって、良い子ちゃんぶってイドイドとべったりで……。だいたい、あんたは生まれるのが早すぎなのよ! あんたが私のとこからイドイドを、あっと言う間に持っていっちゃったんじゃない! ……私だってまだ、幼竜だったのに! あんたなんか、あんたなんかっ」

え?

このレモン色の竜帝さんは……。

「もうお止め、＜黄＞」

凛とした女性の声。

強い口調で言ったわけじゃないのに、黄の竜帝さんはびくりとして……ぱっと、レモン色の歯を持つ口を小さな両手で押さえた。

「見苦しいまねは、止めてちょうだい」

いつの間にか、もう1つの伝鏡に赤い竜が映って……現れていた。

部屋は薄暗くても。

竜帝さん達が現れたら伝鏡自体がぽうっと明るくなって、その姿をはっきりと見ることができた。

「初めまして、トリィさん。私は＜赤の竜帝＞……お会いできて、嬉しいわ」

真っ赤な竜は光沢がある緋色の生地に金糸の刺繍が施されたクッションを小さな手で引き寄せて、ふわりと座った。

「ごめんなさい、トリィさん。あの子も悪気があったんじゃないの……ヴェル、＜黄＞を怒らないでちょうだい。……まあ、貴方が‘怒る’なんてこと、今まで一度も無かったけれど」

上品に両足をそろえて座る姿は気品があり、かわいいというよりも……上品で綺麗。

真紅の鱗に、真紅の瞳。

赤……この鮮やかな真紅は。

この色は。

＜色持ち＞のダルフェさんと同じ赤だ。

この赤が、竜帝の赤であり＜色持ち＞の赤なんだ……。

ギリッ

「いえ、あの。私こそ、こうしてお会いできて……ハクちゃんっ？」

今の音、何？
ギリッって……ハクちゃんから聞こえたような。

まさか、歯軋り！？

赤の竜帝さんは存在そのものが、宝石の様な美しい竜だった。
でも、見蕩れている余裕が私には無かった。
「ブランジェーヌ、リンエルチィル」
ハクちゃん、お顔がちょっと……お目々が少々怖くなってます。
お口元もちょびっと引きつってるというかっ……。
そのお顔では貴方の言っていた＜世界一かわゆい＞から、どんどん遠ざかってますって！
うわわぁ～、かわゆいとは反対方向に向かっていますよ！？
「貴様等……なぜ、竜体なのだ。＜赤＞と＜黄＞は、人型で過ごすのを好んでおったではないかっ！……ランズゲルグ、お前かっ」
室内の温度が急に下がり。
部屋中に、きらきらした白い光が雪のように舞い始めた。
わあ……綺麗！
テレビで視たダイヤモンドダストみたい……なんて言ってる場合じゃな～い！
ひいい～！？
これは離宮での展開とちょっと似てる気が……。
「お、俺様はっ！　ヴェルがなかなか来ないから世間話っていうか、おちびの話をしてて。そんで、ついぽろっと、おちびは鱗が……竜体が好きだって言っちまっただけでっ！　そしたら、＜黄＞が＜赤＞にもっとお洒落しようとか言ってよ！　まさか人型から竜体に変えてくるなんて、俺様も考えなくてだなっ」
あぁ、女神様。
貴方はなんて、正直なんでしょうか。
「……言い訳はそれだけか？　ランズゲルグよ」

女神様。
自分で自分の首を絞めていますよ？

＞ｉ１８７９―２０１＜

第７０話（後書き）

＊イラストの著作権はイラスト作者である「やえ様」にあります。

第71話

「あら。ヴェルって、怒れたのね……意外だわ」
クッションの下から出した飾り羽のついた扇子で口元を隠して、＜赤＞の竜帝さんが言った。
＜赤＞の竜帝さんの前では、ハクちゃんは怒ったことが無かったってこと!?
「きゃーあははははっ！　ざまーみなさい、＜青＞！　あんたなんか、イドイドにずたぼろにされちゃえっ……きゃははあはっつ」
レモン色の○家○ー子っ！
まさかわざと……最初からハクちゃんに、竜帝さんが怒られるのを狙ってたの!?
「て、てめぇ！　俺様は、こないだぼろぼろにされたばっかなんだよ！　これ以上やられたら、さすがに死んじまうだろうが！」
ハクちゃんは私を抱いたまま、女神様に向かってゆっくりと進んだ。
その動きに合わせるかのようにきらきらした小さな光の粒が、緩やかに流れて……。
「だめっハクちゃん、やめて！　竜帝さんにもう酷いことしな……ハク?」
ハクちゃんの意識を私に向けさせようと、白い頬に両手を伸ばしたけれど。
その両手が頬に届く前に、ひんやりとした大きな手が私の後頭部に添えられて……顔をハクちゃんの肩に軽く押し付けられた。
え?
見るなってこと?
「ぎゃあああ!?　何すんだ、くそじじいっやめろ!」

ハクちゃんの長くてでっかい足が狙いを定めたのは、女神様じゃなかったようで。
「や、やめろ！　それを蹴るなら、この俺様を蹴ってくれぇえ～！」

ドババッシャーン！

まるで。
大量の水が天井から落ちてきたような音がした。
何があったか確認したいのに、ハクちゃんの大きな手に頭を固定されてしまい見ることが出来なかった。
女神様は無事!?
「うぐぎゃあああー！　＜黄＞の電鏡がああ～ぁ、１４０００００ジンが割れちまったぁあああ！……げほっ、げほほっ」
竜帝さんの悲痛な叫びから彼の無事を知った。
ハクちゃんはレモン竜帝さんの映っていた電鏡を、蹴って……割った?
さっきのは、伝鏡が割れて粉々になった音?
「ハ……ぷへべっ!?」
喋ろうとしたら、さっきより強く押し付けられたので変な声が出てしまった。
「りこ、我から顔を離すな。細かな破片が舞っている。吸い込むと肺が焼けるぞ」
見るなじゃなく、破片を避けるためだったってことですか……肺が焼ける!?
ちょっ……女神様がさっきから、むせてるんですが!
「げほほっ、げふ！　おちび、眼をつぶれ！　絶対に開けるなよ!?　息は浅く、最小限にしろ！　ヴェル、さっさとおちびを室外に

連れて行け！　これは人間には、やばいんだっ……げほほっ」
私は竜帝さんの指示通りに、眼をぎゅっと閉じた。
「我とりこは戻る。＜青＞、＜赤＞と話を詰めろ。報告は明日で良い」
咳き込む竜帝さんをまったく気にしていない反省ゼロなハクちゃんに、一言いわなければと思った私に聞こえてきたのは。
「ま……待ってちょうだい！　私、訊きたい事がっ……待って、ヴェル！」
踵を返したハクちゃんを呼ぶ＜赤＞の竜帝さんの声。
大魔神なハクちゃんを前に、余裕すら感じられたさっきのものとは……違う。
「ハクちゃん、待って！　＜赤＞の竜帝さんがっ」
ハクちゃんに＜赤＞の竜帝さんの話を、ちゃんと聞いてあげて欲しい。
きっと、彼女にとっては私の事より重要な事……大切な話だと思うから。
今のは……感情的な声だったもの。
「喋るな、りこ。我の口で塞ぐぞ？　両手が空いとらんのでな」
慌てて黙った私の髪をひんやりとしたハクちゃんの手が撫で、指が梳いた。
むむっ～、空いてるじゃないですか、手。
その髪をいじくってる手でがばっと口を覆えば良いじゃないの？
「ブランジェーヌ、手短に言え」
ハクちゃんは、振り返らなかった。
でも、足を止めてくれた。
「＜青＞にカイユのこと、聞いたわ。あの子は……ダルフェは大丈夫だった？」
カイユさんと、ダルフェさん？

あ、この人はダルフェさんの事を訊きたかったんだ……知り合い？親しいお友達とか……血縁関係では無いだろうし。

＜色持ち＞は遺伝とかじゃなく、突然変異に近いってハクちゃんが……昨夜、眠る前に教えてくれたもの。

「さあな。お前の息子が何を思い、考えているかなど我には分からん」

息子。

息子？

「息子っ！？　ダルフェのお、お、お母さん！？」

がばっとハクちゃんから身体を離し眼を開けて、ダルフェさんの‘お母さん’の姿を確認してしまった私に答えてくれたのは‘お母さん’じゃなかった。

「……なるほど。そんなに我に接吻して欲しいのか、りこ。夫である我に遠慮は無用だと、何度言えば分かるのだ？」

なにトンチンカンな事、言ってるのよ！？

今はダルフェさんと＜赤の竜帝＞さんの……うわっ、ハクちゃんったら転移しちゃったぁああ。

赤い竜の姿は一瞬で視界から消え、薄暗かった＜電鏡の間＞になれた眼には少々まぶしい明るさを感じ……。

「それ、違う！　ダルフェのお母……え！？」

寄せられた白皙の顔を、力いっぱい両手で押し戻した私が見たものは。

温室にあふれる鮮やかな緑ではなく。

「こ……ここ、どこ？」

「塔だ」

塔？

「塔の部屋だ」

部屋……ここが部屋？

塔、部屋。

カイユさんが言っていた、塔にあるハクちゃんの部屋？

竜帝さんが、言っていた。

ミルミラ……カイユさんのお母さんが、ここから見る夕陽が綺麗だって言ってたって。

「我はりことここで、夕陽を見るのだ」

貴方は金の眼を細めて、そう言ったけれど。

「ここが？　貴方の……っ」

抱かれたまま見回したここは……。

壁、天井……床まで。

全てが乳白色。

石……でも、継ぎ目が見当たらない。

床だけが平面で……壁が内側に迫るかのように、天井と一体化し

ていた。
ドーム……ううん、これは完璧な半円。
３０畳以上はありそうなのに、部屋の構造のためか……なんだか息苦しい。
巨大な乳白色の水晶珠の内側に、間違って入り込んでしまったかのようだった。
乳白色のそれは半透明で、微かだけれど天井と壁から外の陽の光を室内で感じることができた。
中央には、大きなベッド。
使われた形跡の無い真っ白な寝具。
それが、この乳白色の空間にある全て。

部屋？
ここが！？

ぞくりと、寒気がした。

小さな白い竜がここで……１人で過ごす姿が、頭に浮かんだから。
暗い青色をした鉄製の扉だけが、この部屋にある‘色’だった。
窓の１つすら無い、綺麗なだけの冷たい空間。
「うむ。この地を帝都と定めた＜青＞が造っ……りこ？　どうした、寒いのか？　ここは城より古く、暖房設備は一切無いからな」

私の目に。

ここは。
牢獄に見えた。

女神様……竜帝さん。

ハクちゃんは、帝都では庭で暮らしていたんだって。
そう私に言ったんだよ？

落ち葉のベッドが、彼はお気に入りみたいだった。

「ハ……ハクちゃ……わた……っ」
ダルフェさんと＜赤の竜帝＞さんのことを、ハクちゃんに訊きたかったのに。
この【部屋】を見たら。
ここを【部屋】だと言い、ここで夕焼けを見るのだと眼を細めるハクを見たら……。
胸が、痛くて。
頭の芯が、冷たくなって。
「……」
もう、私の不出来な脳はハクの事でいっぱいで。
ダルフェさんと＜赤の竜帝＞さんのことを、考える余裕がなくなってしまった。
「城内は暖房がきいておったものな。すまぬ、ここはりこには寒かったな。……うむ、これを使えばよいか」
ハクちゃんは、私が黙ってしまったのは寒さのためと勘違いしたようだった。
ベッドに歩み寄り布団を無造作にまくって私を下ろし、跪いて私の履物をとって足元にきちんと揃えて置いてくれた。
あ……さっき、教えてあげたから。
「すまなかった、りこ。我は寒さを感じないので、つい……これで、どうだ？」
ベッドに腰掛けた私に、掛け布団をそっとかけてくれた。
それはとても軽く……薄くて。

冷え切っていて、冷たかった。

ここの寝具は私に用意されてたものと、まったく違う。
私に用意されていたのは肌触りの良い、温かな素材だった。
柔らかな毛布に、ふわふわの羽毛布団だった。
ハクちゃんが私を包んでくれたこれは、真っ白で艶があって……
綺麗な生地で作られていた。
見た目はとても綺麗。
でも。
気温の低い帝都で使うような生地じゃない。
使われることを前提に用意したものとは、思えない。
ハクちゃんは膝立ちのまま……真っ白な薄い掛け布団を隙間が無いように前でしっかりと合わせて、私を包んでくれた。
ハク。
この布団。
とっても冷たい。
「……うん、ありがとうハク。もう、寒くない」
こうしていてもちっとも、暖かくないの。
でも、言えない。
靴を脱いだら揃えるんだって事を教えてあげたように、教えてあげなきゃって……本当の事を言うべきだって分かってるのに。
意気地なしの私は、また嘘をついてしまった。
「我に人間のような体温があれば、この身体に抱いて暖めることもできるのだが。我が直に抱いては、りこは冷えるだけだからな」
ああ、だから。
今朝、貴方は竜体で枕元にいたの？
眠る前は、私を腕に抱いていてくれてたのに。
目覚めたら、貴方は隣にいなかった。
貴方は昨日、服を脱がなかった。
濡れた外套だけ、放り投げて。

昨夜だって。
ガウン、脱がなかった。
あんな状態じゃ……着てても着てなくても、たいして変わらないのにね。

そんなに、私と肌が触れ合うの……嫌だった？

「ハク……」

そんなに、私に触られるのが怖かった？

私は何度も、言った。
貴方の冷たいその手が、大好きだって。

「まだ寒いのか？　ふむ、いったん戻って防寒着を準備し……りっ！？」

私の言葉は、信じられなかった？
私の心は、伝わっていなった？

「な……涙が出そうだぞ！　ど、どうしたのだ……もう寒くはないのだろう！？　……術式で全て遮断したつもりだったが、もしや電鏡の欠片が眼に入ったのかもしれんっ！　泣くほど痛むのかっ！？い……医者をっ」

違う、そうじゃない。
足りなかったんだ。
もっと、言ってあげるべきだったんだ。

貴方のひんやりした手が、大好き。
それだけじゃなく。

貴方の冷たい身体も、とても愛しいと。
ちゃんと、はっきり言うべきだった。

「ご……ごめんなさい。ハク、ごめんなさっ……」

泣かないって。
泣かないって、決めたのに。

貴方の前では、笑うって決めたのに。
もう、失敗してる。

「ごめ……大丈夫よ、ハク。お医者様はいらない。布団もいらない」
私は掛け布団をはらって、ハクちゃんに抱きついた。
強く、強くハクを抱きしめた。
「わ……私、こうしていたい」
言葉を覚えるのは、生きていくためだった。
ハクちゃんとの念話だけではこの先、生きてくのに不安だった…
…足りないって思った。
根性なしで努力家でもない私が自分でも驚くくらい、一生懸命に
勉強したのは不安だったから。
「りこ？」
竜のハクちゃんは、いつか人間の私から離れていく。
きっと、私は要らなくなって……捨てられるって。
「りこ、我より寝具の方が暖かいと思うのだが？　寝具を使え」
どうやらハクちゃんは、納得できないらしく。
両腕を不自然にあげ、手をにぎにぎしていた。
私の身体を抱きしめてくれなかった。

「私は布団よりハクちゃんが……ハクが良い」
あのね、ハクちゃん。
貴方が人型になれると知ったとき、貴方のこの姿を見たとき。
いつか、私は貴方に必要とされない時が来る。
それが、確信に変わった。
小さな竜の貴方に、人間の私を‘妻’にしてもらうのは無理だって分かってた。
私の膝で丸くなり、満足気に眼を細め……撫でられていた貴方。
抱っこ抱っこと私に甘える貴方にとって、私は妻ではなく‘お母さん’の代わりなんだと思った。

女としては、見てもらえない。

人間みたいな外見になったって。
竜の貴方が私なんかをどうこうしたいなんて、有り得ない。
うぬぼれちゃいけない、望んじゃいけない。
後で惨めになるだけだって。
ハクちゃんの‘お母さん’にさせてはもらえても、恋人にはなれっこない。
だから、ダルフェさんが言った‘ハクちゃんは私の夫になれる’って意味も、よく分かってなかった。
「ハク。私……自分でもおかしいんじゃないかって思うくらい、貴方が好き」
貴方に竜の恋人ができても邪魔しないなんて、離宮で言ったこともあったけど。
本当はね、嫌だった。
この私が小竜の貴方の恋人に……奥さんに、妻になりたかったんだもの。
「だから、もっと側に……もっと近くに、来て欲しい」
支店で求婚してくれて。

すごく嬉しかった。
「私、欲張りだから」
支店で抱いてくれて。
本当に嬉しかった。
「全部。貴方が全部、欲しいの」
好きだったから。
竜体で出会ったとき、こんなに私を想ってくれる人はいないって思った。
「我はりこのものだぞ？　全て、りこのものだ……やはり、南棟に戻ろう。りこの身体が冷えてしまう」
小さな竜の貴方に。
私は恋をした。
子供のように純粋で、まっすぐな心に魅せられた。
貴方の恋人に、妻になれなくても……、お母さん、でもいいから、私を側に置いて欲しかった。
「待ってハク、私！　そのっ、お願いがあるの」
言葉を学ぶ。
「お願い？　りこのお願い……我が全て叶えてやろう。何をしたい？　何が欲しい？」
その理由が、変わった。
言葉を覚える理由は、生きていくためじゃない。
「あのっ！　私、こここん、今度からはそのっ」
貴方に気持ちを伝えたいから。
「こっ……こっ交……ちょっと耳、貸して下さい」
ハクちゃんは自分の両耳を、びよーんと引っ張りながら言った。
「耳？　好きに使え。千切るか？」
貸してって、そういう貸してじゃなくて。
「千切らないで。くっついた耳でお願いします」
見てる人も、聞いてる人も。
ここにはいないけど。

貴方にだけに、知って欲しいから。
だから、耳を貸して。
これ、内緒話なんです。
内緒よ？
貴方だけが、知ってればいいの。
いつもみたいに他の人にぺらぺら喋ったら、絶対に駄目なんだからね！？
持ち主に引っ張られてちょっとダンボな右の耳に、口を寄せ。
わかりやすいように、伝わりやすいように。
ストレートに、言ってみた。

「わ、私ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘんですっ」

ああ、語彙が少ないって嫌だ。
これじゃあ、私が変態みたいだよ。
いや、もうすでに変態の世界に片足つっこんでた感のある私ですが。
ストレート……直球どころか、今のは暴投！？
「えっと、その……ハクちゃん？」
ハクちゃんの顔に視線を向けると。
ハクちゃんの眼が、点になっていた。
まさに、点。
金の眼の中にある縦長の黒い瞳孔が、点状態になっていた。
「……」
ハクちゃんは固まってしまった。
イメージぴったり、まさに氷の彫像のように。
瞬きすら止まり。

無言。

ひいいぃ～！

嫁の変態さに、びっくりして……ショックを受けちゃったとか！？

「だ、大丈夫？　ハクちゃ……うぎょっ！？」

ハクちゃんの両腕が私の身体を強く。

今までで、一番強く。

背骨が折れちゃうんじゃないかと思うくらい。

強く。

強く、抱いてくれた。

ああ、私。

貴方にこうして……ぎゅって、してもらうと。

身体の奥から、じんわりと何かが沸いてきて。

あたたかいもので、満たされるの。

暖房が無くても。

貴方のかけらを口にしなくても。

貴方のその冷たい身体が、私を内側からあたためてくれる。

「あのね、ハクちゃん。私の国では……手が冷たい人は、心が温かい人だって言われてるんだよ？」

返事はかえってこなかった。

ハクちゃんはずっと無言のままだった。

いつものような、奇天烈謎発言も無く。

私を抱いて、黙ったまま……まったく動かなかった。

私はハクちゃんの胸で眼をつぶり。

私だけが知っている（と、思いたい）優しく甘い香りに包まれて……。

どれくらいそうしていたのか。
いつの間にか。
部屋が淡いピンクに染まりだし。
夕焼けが始まったのだと知った。

「……その扉の向こうに、露台がある。狭いがな」
ハクちゃんはゆっくりと私を離して、立ち上がった。
「そこからの眺めが見事だと、カイユの母は＜青＞に言ったのではないかと……多分な。我は夕陽を観賞しようと思ったことが無かったので、断言できぬが」
そう言って。
私に右手を差し出した。

「手を。……行こう、りこ」

初めて。
初めて、貴方から。

私。
貴方と手を繋いで歩きたかった。
普通の恋人同士みたいに。

「……はいっ！」

私と貴方は、繋がれる。
それは身体だけじゃなく。

触れ合ったそこから、何かが生まれていく。
私にはまだ、うまくそれを言い表せない。
愛とか恋とか情とか……どの言葉が一番いいのか分からない。

どれか一つなんて、決めなくていいのかもしれない。
それは、とてもあたたかで……。

「りこ、手が常より熱いぞ？　頬も赤いな……まさか、風邪か！？」
「違うよ。……ちょっとのぼせちゃったというか。あったまり過ぎちゃっただけ！」

ほらね？

貴方の冷たい身体に触れていると。
私の身体は熱くなる。

10～11月の小話（1）　～ある日のハクとりこ～

「ハクちゃん！？」

お風呂から出て、髪をふきながら寝室に戻ると。
先にお風呂から出ていた竜体のハクちゃんが、寝室にある大きな鏡の前に立っていた。
彼が鏡……初めてのことだった。
しかも。
ただ立っているだけじゃなく、いろんなポーズをとっているのだ。
片足をあげたり、万歳したり。
しっぽをふりふりしたり。

かわゆい。
すごく、かわゆ～い！

私は後ろからぎゅぎゅーって抱きしめ、頬擦りしたい衝動を押さえた。
どんなにかわゆくても、この超ラブリーおちび竜は旦那様なのだ。

我慢……我慢よ、りこっ！

こないだ、竜帝さんに言われてしまった。
竜体のハクちゃんを見る眼が、なんか怪しいって！
私はとうとう他人からも変態疑惑をかけられるまでに、レベルアップ（？）してるってことで……ま・まずいよね！？
＜監視者＞の奥さんが変態なんて、世間に知られたらハクちゃんが恥かいちゃうよぉ～。
ただでさえ不釣合いな私なのに……。

鏡の前にぺたんと座ったハクちゃんの隣に腰を下ろし、訊いてみた。

ハクちゃんには鏡を使う習慣が無い。

その彼が、鏡を見てる……使うなんて、とても気になる。

「ハクちゃん、どうしたの？」

鏡越しに視線を合わせ、ハクちゃんは答えてくれた。

「りこ。りこは竜体の我をかわゆいと言ってくれる。抱っこをして撫でてくれるし、風呂も一緒に入って体を洗ってくれる。それは我が、かわゆい、からなのだろう？」

「え？　うん、まあ……」

ハクちゃんは短い両手で自分のお腹を撫で撫でしながら言った。

「前々から思っていたのだが。……もしや、人型の我には、かわゆい、要素が皆無なのではないか？」

はい？

え～っと……。

「人型だとりこの好んでいる鱗も無いし、、ぽっこりしてとっても素敵！、と言ってくれた腹も、ぽっこり感、が失われている。りこの好きな、かわゆさ、が見当たらん。……どうしたら人型の腹をこのように、ぽっこり、にできるのだろうか？」

ぽっこりお腹？

人型のハクちゃんのお腹がぽっこり出てたら……メタボなハクちゃん？

あの外見でお腹がぽっこりなんて、想像……うわぁぁ～（汗）！

「な……な、なに言ってるの！？　お腹がぽっこりしてなくたって、ハクちゃんはかわゆいよ！」

私は非常に焦った。

これは、久々のいじけモードだ。

なんで、急に……。

あ。

今日のお茶の時間は竜帝さんの執務室にお呼ばれして……カイユさんとダルフェさんが留守中は竜帝さんと1日1回、お茶をすることになったのだ。

で。

竜帝さんが私に、ハクちゃんのどこが好きなのかって質問した。

だから、答えた。

熱く語りましたとも！

ハクちゃんがどんなに可愛いか！！

そうしたら。

竜帝さんが「お、おちび！　わかった、もういい。訊いた俺様が悪かったっ！」って、ハクちゃんの可愛い所を次々に言う私を止めたのだ。

私はもっと言いたかったのに。

あれ？
今、思うと。
私は人型については、特に何も言ってな……っ！？

あの時隣に座っていた人型のハクちゃんは、クッキーを右手で摘んで私に差し出した格好で……止まっていた。
私が喋ってるから、あ～んを待っててくれてたのかと思ってたんだけど。

「ハ、ハクちゃん！　えっとね、私……」

鏡の中のハクちゃんは金の眼を、ぎゅっと閉じ。

「すまぬ、りこ。我にはわからぬ……人型の腹を‘ぽっこり’させる方法が」

そう言った。

言葉だけなら、笑えるような内容だけど。
ハクちゃんは、冗談を言えるような人じゃない。

鏡の前で短い手足を丸めてうずくまってしまったハクちゃんを抱き上げ、ベットにあがった。
広いベットの真ん中に座り、膝に乗せた小さな旦那様に話しかけた。

「ハクちゃん、ごめんね。話が途中になっちゃったから、人型のハクちゃんのとこまで進められなかったけど」

真珠色の鱗を、流れに沿って撫でながら……。

「人型のハクちゃんだって、かわゆいところがいっぱいあるよ？例えばね……うきゃっ！？」

瞬きひとつの間に、竜体から人型になったハクちゃんは。
私の膝に白い頭を押し付けながら言った。

「りこ、りこ。この我のどこが、良いのだ？　言ってくれ、我に教えてくれ」

ハクちゃんは頭をすりすり……ぐりぐりと押し付けてくる。
小竜と違って、見た目は大人の男性だけど。
おちびじゃなくて、２メートル越えの長身だけど。
竜体でも、人型でも動作は基本的には同じというか。

手をにぎにぎしたり、涙を舌で舐めたり。
そして、この仕種も。
竜体の時と、全く同じ。

セイフォンの離宮に居た時とは違って。
帝都では……こうして２人の夜を過ごす彼が纏うのは、全身を覆う硬い鱗じゃなく。
綺麗な真珠色はそのままに、艶やかで柔らかな長い髪になり。
私の掌にすっぽりおさまっていた４本指の小さな手は、私の手を包みこんでくれる大きな手に変わった。

「私ね、人型のハクちゃんの可愛いところ……好きなところ、いっぱいあるの」

真珠色の髪を撫でながら。

思いつくままに、たくさん言った。
考えなくても言葉がどんどん湧き出てきて……自分でも、びっくりした。
かわいいとこ・好きなとこがいっぱいで……。
デリカシーの無い所さえも、実はちょっと可愛いかもと思っている自分を再発見したりして。

「そうか。この我も、かなり‘かわゆい’ということか……ふむ」

ハクちゃんは私の膝から顔を上げ、私を見上げながら言った。

「つまり……我はりこにとって‘かわゆい’と‘好き’の塊ということか？　我は竜体も人型も‘かわゆい’のだな？　鱗も髪も指先まで、外見も内面も全部……全てりこの好みに合うということだな？」

う～ん。
間違ってはないけれど。
まあ、そう言われればそうなのかなぁ～。
嫌いなところって、特にないし。
奇天烈で謎の思考回路も困ることはあるけれど、嫌いっていうのとは違うしな～。

「我は竜体も人型もかわゆい。うむ、それならば良いのだ。腹が‘ぽっこり’しとらん我でも、りこはかわゆいと思ってくれているのが分かり、安心した」

そう言って。
またまた膝にぺたりと顔をつけるハクちゃんに、私は言った。

「で、でもねハクちゃん！　さすがに……奥さんの前とはいえ、いきなりの素っ裸はどうかと思うよ？　ちょっと、まだ、その……困っちゃうよ」

やっぱり、親しき仲にも礼儀あり。

て、いうか。

眼のやり場に困るというか、まだ免疫がちょっと足りてないというかですねっ！

せめて、一言いってくださいませ。

「何故だ？　りこは‘何も着てなくたって、ハクちゃんはかわゆい‘と医務室で言っておったぞ？……くっ」

「なっ！？」

うじうじモードから脱した旦那様は金の眼を細め、微かに笑いながら言った。

最近、こうして少し笑ってくれるのは嬉しい変化だけれど。

「くっ、くく……顔、真っ赤だな」

完全復活した魔王様は仰った。

「とても……とても‘かわゆい‘な、我のりこは」

ぶはっ！？

またまたそんなことを～！

「私はかわゆくなんかないもんっ！　どうせアダの実みたいなアダモちゃんです！　笑わないでよ、ハクちゃんの馬鹿」

私の言葉に、魔王様の片眉が微かに動いた。

「アダモちゃん？……りこ、少々確認したい事があるのだが」

その後。

なんとか誤魔化そうと頑張る私に、魔王様による誘導尋問が行われ。

がっくりとうなだれる私と対照的に。

なんか妙～に、ご機嫌になったハクちゃんだった。

１０～１１月の小話（１）　～ある日のハクとりこ～（後書き）

活動報告・１０月１４日掲載

10~11月の小話（2）　~初めての餌やり~

「これがナマリーナ嬢のご飯なの!?　……ぶぐっ」

目の前に置かれた金属製のバケツの中には、謎の物体が入っていた。

灰色の粘土にマーブルチョコが加えられ……ううっ、なんか気持ち悪い。

それに、臭~い!

思わずハクちゃんの背中に隠れた私に、女神様は言った。

「失礼な奴だな。これはな、俺様が作ったスペシャル配合飼料だぞ!　おちびの鯰なんだから自分で餌をやれ。で、これからはいろんな配合をナマリーナで試すから、食いつき等のデータをとっとけよ?」

そういう竜帝さんだって、ごっついマスクしてるじゃないですかー!

でも、言えなかった。

私は自分の口・鼻をしっかりと押さえていたので……。

竜帝さんは今日は特に忙しいらしく、足早に去って行った。

ナマリーナ嬢、お腹空いてるだろうし……がんばれ、私!

「りこ。大丈夫か?」

ハクちゃんの白皙の美貌は、全く変わらない。
平然として、臭いとも言わない。

鼻がいいのか、悪いのか……謎だよね。

「う、うん。なんとかなる……します！」

ハクちゃんの背中から出て、ハンカチを簡易マスクにしてバケツに近寄った。

ぶぶおうっ！？

目に匂いが染みる～、なんて強烈！

「よいしょっと……」

池の淵にバケツを移動し、腕まくりをしてからスコップを手に取った。
え～っと、ナマリーナ嬢は……底にいる。
金魚と違って動きが無いなぁ。
夜行性だから？
ま、とりあえずこの竜帝さん特製スペシャルご飯を……。

「く、くさ……とうっ！」

竜帝さんの指示に従い、スコップ山盛り４杯を池に投入した。
ナマリーナ嬢がちゃんと食べてくれるか気になって、池を覗き込んだ。
あれ？
無反応？

「ナマリーナ！　ご飯だよ～。食べなよ、おいしいよ……多分」

身を乗り出し、水面すれすれで声をかけた私に悲劇が起こったのは数秒後。

「きゃあっ！？」

「りっ……！」

いきなり浮上したナマリーナ嬢が、水面にぷかぷか浮いていた餌に激しくアタックしたのだ。

全身で水をはね上げ、がつがつと餌を食べ始めた。

私はその水しぶきをまともにかぶってしまい……。

顔に、水以外のぺたりとした感触が……ひぃぃ～！！

顔も髪も……上半身がびしょぬれ、しかもあの激クサ飼料まみれになってしまい。

「うぅ……ひどいよ、ナマリーナ」

「り、りこが！　我のりこがぁああ～！　なまっ、なっままま！？」

私以上にハクちゃんがびっくりしたようで。

びちゃびちゃでクサクサの私を抱えて、お風呂に転移してくれたものの。
湯船に直接転移してしまい。
上半身どころか全身びしょぬれになってしまった。
ナマリーナを殺すだなんだと物騒な事を言うハクちゃんをなだめつつ。
ふと、気がついた。
鯰の餌やりは。
スコップじゃなくて、柄杓にすべきなんじゃ……。
明日、社長に進言することにした私だった。

１０～１１月の小話（２）　～初めての餌やり～（後書き）

活動報告・１０月２３日掲載

10~11月の小話（3）　~ハク~

鯰給餌用の備品が届いた。
我のりこが鯰の餌にまみれるという惨劇から、既に3日が経っていた。

＜青＞の指示でそれらを持参したヒンデリンが、見慣れぬ衣装に戸惑うりこに手際良く装着し。
「特注で作らせましたので、時間がかかり申し訳ありませんでした」
そう言うと一礼し、足早に去っていった。
我がりこに向けた視線を見て、長居は無用と判断したのだろう。

「ハクちゃん、やっぱり変？　ううっ、それにちょっと重い……鏡を見てくる。ハクちゃんは、ちょっと待っててね」

温室には鏡がない。
りこは不出来な自動人形のような動きで居間へと向かった。
我は池の淵に座り、りこを待つことにした。
全てはりこの反応次第なのだから。

我の足元にある鯰の餌が入ったバケツは、特注の蓋でしっかりと封がされているので悪臭はしない。

悪臭。

最初にこの物体が運ばれた時、我とて臭うとは思っていた。
だが、その臭いが悪臭かどうかという判断が出来なかったのだ。
初めて経験した異様な臭いだったために、どう反応するのが‘正しい’のか分からなかった。

数分でりこは戻ってきた。
普通のものより柄が3倍程長い柄杓を右手に持ち、弾んだ声で言った。

「ハクちゃん！　すごいね、これ……ダース〇ーダーみたいっ！」

どうやら気に入ったようなので、我は＜青＞に仕置きをするのを止めることにした。
＜青＞が用意したものは。
赤の大陸にあるドラーデビュンデベルグ帝国の特殊部隊が使用する、軍事用マスクだった。
シュノンセルの城にある竜宮に滞在していた折に、我は同じ物を見たことがあった。
これを装着した人間共がやってきて、我に化学兵器を使ったのだ。
どうやらシュノンセルの夫が指示したことらしかったが……。
残念ながら。
我は特に、どうということも無かったな。
効果があれば面白いと、少々期待しておったのに。

まあ……つまり。
飼料の悪臭どころか有毒ガスや細菌兵器に対処するものであり……黒光りするそれはりこの頭部をすっぽりと覆っていた。
＜青＞よ、お前は何故このような物を持っているのだ？
ああ、なるほど……伝鏡石か。
鉱山で性能の良い防毒マスクが必要なのだな。

青の大陸は遥か昔、行き過ぎた科学力が原因で文明が滅びかけた。

そのため、代々の＜青＞はどの大陸よりも科学力に細かな【規制】をかけて……裏側から慎重にコントロールしてきた。
危険極まりない大海に四方を囲われた青の大陸は、他の大陸へ渡る事が人間の力では不可能だ。
空を飛ぶ竜族のみが、海を越えられる。
異大陸の文化・物品は＜青＞が慎重に選別したものだけが……大陸の未来に害なす物ではない【安全】な物のみが、この大陸に輸入されているのだ。
人間共は自分達が思っている以上に、竜帝に支配され……守られている。
それが双方にとって良いことなのか……正しいことなのか、我には分からんが。

我の前に立ったりこは、軍事用マスクに蜥蜴蝶を素材に用いた指先から足首まで覆う黒い、特注割烹着、なるものを身につけていた。
「このマスクね、深く息をすると……」

シュゴ～。
シュゴゴ～ン。

「この呼吸音！　ぶふふっ……完璧だよ、おもしろ～い！」

小さな体躯に大きすぎるそれは、りこの頭部を2倍以上大きくしてしまい。
首から下との釣り合いがとれておらず、我から見ると面白いというより異様だった。
どこがそんなに面白いのか、全く理解不能だ。

「……そうだな。面白いな」

我にはよくわからんが、りこにとってこれは、面白い、ことなのだな。

楽しそうに柄杓をふるりこ……りこが楽しいなら、我は満足だ。

しかし、笑んでいるはずの可愛らしい表情が見えんのは如何なものか……損した気分だぞ。

ん？

ダース〇ーダーとは、なんなのだろうか？

１０～１１月の小話（３）　～ハク～（後書き）

活動報告・１１月１０日掲載

10~11月の小話（4）　~パスハリス~

「僕達からって渡すの？」

緋色のリボンと花柄の包装紙で飾られた贈答用の菓子箱。
これは、僕とオフもお気に入りの菓子屋のだ。
陛下の両親が始めた小さな菓子屋。
今は弟子が継いでいて……帝都で人気の菓子屋だ。

「うん、そうして。成竜の雄である僕からより、君達からだってことにしたほうがいいんだよ。……パス達にもお駄賃として、同じものを買ってきてあげたじゃないか。何かご不満でも？」

昨日の【狩り】は午前中に終わった。
制服を返り血で汚してしまった僕たちを先に帰して、セレスティスさんは買い物に行った。
食堂で昼飯を食べてたら、おみやげだよって同じのをくれた……
こんな洒落た包装はされてなかったけどさ。

「あの方には……あのお二人には近寄りたくないんです」

オフランが差し出されたそれを見ながら言った。
よし、いいいぞ！
受け取ったら、終わりだからな！

「ふ~ん、そう。僕の頼みを断るのかい？」

「ぶぐっ！？」
「げぐっ！？」

僕とオフは、背中の真ん中を蹴られた。
手加減してくれたから、骨まではいってない。

「さあ、いってらっしゃい。渡したらすぐに帰っておいでね？　今日は西街に【狩り】に行くんだから」

整った顔に、年中無休で穏やかな笑みを浮かべる前団長。
肩のラインで切り揃えられたまっすぐな銀の髪に、水色の瞳。
セレスティスさんは、城内好感度ＮＯ１の竜騎士だ。
城の雌竜の間では［つがいに出会う前に抱いて欲しい雄・第一位］に１０年連続で輝いてるらしい。
頭も良いし、腕もたつ。
穏やかな口調に、優しい微笑み……理想の王子様なんだってさ。
阿呆くさっ。
見た目にだまされてんだよ、みんなは。
ほんと、そっくりな親子なんだよ？
カイユさんとセレスティスさんは。
見た目も中身も……蹴りの角度まで同じだし。
まあ、どっちがより怖いかっていえばカイユさんだけどね。
ほんと、物騒でおっかない親子。

でも。
この方よりはまし、ずっとまし。

「こんにちは。ヴェルヴァイド様、奥方様」

南棟の庭園に置かれたベンチに腰掛け、色づいた木々から落ちる葉を眺めている2人に3ミテ手前まで近づいた。
そんでもって、とりあえず挨拶をしてみた。
奥方様は返事を返してくれたけれど。
膝の上に座っている白い竜は、特に美人でもない奥方様を見上げたまま動かない。
細められた金の瞳。
なんだって、あんな恐ろしい目付きで奥方様を睨んでるのかな？
ああ、睨んでるわけじゃないのか。
奥方様はにこにこしてるもんね。

「これ、あげる。南街にある菓子屋ので、僕達もお気に入りなんだ」

奥方様が立ち上がる前にささっと、ベンチの空いている部分にすばやく置いた。

「ありがとう。パスハリス君、オフラン君」

名前。
覚えてたんだ。
しっかし、地味な女だよね～。
昨日の帰り道で見かけた人間の女のほうが、ヴェルヴァイド様に似合いそうだったな。
なかなかお目にかかれないような美女だった。
美女もどきの陛下と違って、本物の美女ってやつだね！
胸のでっかさを強調したドレスが、嫌味にならず似合ってた。
あれは観光に来た貴族のお嬢様だ……かなりの上位貴族。
術士と武人の護衛が付いてたし。

今……頭の中、視られてないよね？

必要な場合以外は、他人の思考をよんだりしないって陛下が言ってたし。

「これからお茶の時間だから、お部屋に来ない？　竜帝さんも来るし」

「あ～、うん。ごめんなさい。僕達、仕事中だから無理」

「じゃあ、また今度。お休みの時にでも……」

「そうさせてもらうね。奥方様、誘ってくれてありがと！」

行くわけないじゃん。

阿呆だな、この女。

あの人のテリトリーに入るのは、遠慮したいんだよ。

はっきり言って、今だって限界に近い。

オフなんか、喋る余裕すらない。

こうして耐えていられるのは、あんたの膝にいる白い竜が僕達を無視してくれてるから。

透明感の無い金の眼が、僕たちには全く向けられていないからなんだ。

「あ！　私ね、温室の池で鯰を飼い始めたの。ナマリーナって名前で、とっても不細工で可愛いのよ？　興味があったら、いつでも見に来てね」

なんだよ、突然。

ああ、話題が無いからか。

鯰？

ああ、こないだ陛下と取りに行ったっけ。

不細工で可愛い？
あの鯰をペットにしたの？
僕は鯰なんか見たくない、食べるの専門だ。
やっぱ変な女だなぁ、しかも異世界人だしさ。
異界人。
なんか、気持ち悪いんだよね。
人間の皮を被った謎の生物って感じだ。
必要以上に関わりたくない。

ヴェルヴァイド様は純粋に‘怖い’だけ。
だけど、この女は。
この異界人は‘怖い’だけじゃない。
嫌悪感？
なんだろうこれは。

まあ、でも。
この女のおかげで【狩り】が楽しめてるんだよな。
最近は、毎日とっても面白い。

「じゃあ、またね。ほら、帰るよオフラン！」

さあ【狩り】に行こう。
このお祭りは期限付き。
だから、今のうちにいっぱい楽しまなきゃね！

第７２話

我が塔で観賞したものは夕陽ではなく、りこだった。
手を繋ぎ、我の横に立ったりこだった。

さらに正確に言うならば。
我が見ていたのは、りこの目玉だ。

塔は城の建つ小島の端にあり、狭い露台は湖に迫り出すように造られていた。
染められた空と、それを映す湖。

朱を纏う黄金。
紫と混じりあう薄紅。
揺らぐ陽と輝く湖面。

言葉も無くそれらを見つめるりこの眼に、我は見惚れていた。
視線の動きに合わせ、夕陽に染まった世界が金の眼の中で形を変え色を変え。
まるで、万華鏡のように。
華やかに煌めき、生まれて……消える。

一瞬一瞬。
刹那の美しさ。

美しい。
そう思った。

言葉は知っていた。

意味も分かっていた。
だが、我は美しいなどという想いを持ったことが無かった……りこに会うまでは。

咲誇る花は盛りを過ぎれば散り、鮮やかな葉を持つ木々もいつかは枯れて朽ちる。
人間共が美しいと讃える女と醜女と蔑む女の違いは、単なる容器の差。
剥いてみれば中身は同じ。
赤い血肉が詰まっているだけだった。
老いれば皺に覆われ、やがて腐って土になる。

花も、木も、獣も。
人間も竜も。
行き着く処は、辿り着く場所は同じなのだ。
我にとって同じようにしか見えぬそれらに、美しい、という想いなど湧いてこなかった。

空も海も。
陽も月も、輝く星も。
太古から世界にあるそれらを、人間や竜は、美しい、と評したが我にはどの部分が、美しい、のか分からなかった。

ーふふっ、ハクちゃんの髪も顔も……夕陽に色になってる。

りこが眩しそうに眼を細め、我を見上げて言った。
我が貴女に差し出したこの手は、多くを引き裂きたくさん殺した。

ー感動しちゃった！　今までこんなにすごいの、見たこと無かったの！　とっても綺麗……また来ようね。

我の手は穢れているのに。
繋がれたそこに視線を移し、頬を染め。
嬉しそうに微笑んだ。

―そうだな。……美しいな。

答えた我が眼を細めたのは、陽の所為ではない。
りこが眩しかったからだ。

貴女のその輝きが。
我の中の闇を、濃いものに変えていく。

―りこが望むなら、毎日来ても良いぞ？

我は言えなかった。
この夕陽を美しいと感じることなど、我には出来なかったことを。
りこと同じようにまた此処へ来たいなどと、我には思うことが出来なかったことを。

真実を告げたなら。
幸せそうに微笑むその表情を、曇らせてしまうのではないかと…
…また泣かせてしまうような気がした。
この世の美しいもの全てを捧げたいのに、我には‘美しいもの’が分からない。
貴女以外は、美しいと……綺麗だと思ったことが無いのだから。

だから我は［人間にとって美しいと感じられるであろうもの］を差し出すしかない。
りこがこの世界をもっと、もっと欲しがってくれるように。

異界人のりこも、夕焼けを綺麗だと言った……やはり、美意識や感性はこの世界の人間や竜とほぼ同じだと確認できた。
我の竜体に強い執着を持つからといって、りこは美醜に関して特殊な嗜好を持っている訳ではなかった。

我は今後もりこが美しいと、綺麗だと感じるものをもっと見つけなくてはならない。
それらでりこの周りを埋め尽くし、りこの好む世界、を……それなのに我は。

我が染め上げたりこの眼を、いっそう美しく染め変えてみせた沈む陽が憎らしく。
りこに綺麗だと讃えられた夕焼けが、妬ましかった。

夕陽など、二度と見せたくないとすら思った。

りこは我に感情を……心をくれた。
この我の心は。

美しさなど見当たらず、綺麗なものでも無かった。
それでも貴女に、我の心を欲しがってもらいたい。

澱んだ沼の底に溜まった汚泥のような、この我の心を。

最近のりこは【お勉強】で、日々忙しそうだった。
早朝散歩に使っていた時間も【お勉強】に変わり、夜も必ず【お勉強】をしてからでないと床に入らない。
そして今日は【まとめの試験】なるものが午前に行われ、先ほど返却された。
昼食時に自信が無いと言っていたりこだったが、シスリアから追加の課題と共に手渡された用紙を確認し……口が少々、開いてしまっていた。
どうやらりこの想像以上の結果が出たようだった。
シスリアが学習院に戻っている数日間、勉強会が休みになるのでしっかり復習しておくようにと言われ何度も頷いていた。
南棟の2階に用意された学習室から部屋に帰ってくると、我を抱きかかえたまま寝台に駆け寄り勢いよく倒れた。
いつもは午後の勉強会の後、そのまま＜青＞の執務室に茶を飲みに行くのだが。

「む～ん。書き取り試験、駄目だった」

試験。
試験と茶に行かんのは、どう関係するのだろうか？

「会話試験はとっても良かったって、褒めてもらえた。でも、書き取り試験が……シスリア先生が出題する単語が聞き取れても、書けなくて。綴りがきちんと、覚えられてなかった。やっぱりなって、感じだけど」

りこは寝台に寝転び、胸に抱いた我の背をゆっくりと撫でた。

「短期間で驚くくらい……不思議なくらい、喋れるようになったから。私でも頑張れば、やれば出来るんだって嬉しかったんだけどな。

うぅ～、書き取りは５０点満点中６点。人生最低点を取っちゃった」

我はりこの胸に耳をつけ、心臓の音を聞いた。

規則正しく打つそれと、我を撫でる手の動き。

ああ、なんと心地良いのだろう。

りこはこうして‘素敵’なものを、我にたくさん与えてくれる。

我もりこにもっと与えてやりたい。

「とにかく喋れないと困るから、セイフォンでもセシーさんにお願いして会話優先にしてもらってたし。文字を後回しにしすぎちゃった……ううっ６点、６点かぁ～。竜帝さんの所には、気持ちを切り替えてから行かなきゃ……」

点数。

りこは６点。

我もりこのやっていることを体験してみたいと思い、竜体のまま試験を受けてみた。

まあ、無意味な会話試験には参加しなかったが。

会話試験か……。

りこは気づいておらぬようだが。

あのシスリアという雌は、会話に関しては試験をしたのではない。

あれは［確認］だな。

「りこ、りこ！　我は５０点だった。我の点数を全部りこにやる。そうすれば５６点で満点を超えるぞ？」

我ながら、良い考えだ！

りこの『足りない』を夫である我が補う……。

いろいろ『足りない』我がりこの『足りない』を補えることなど、めったに無いぞ！？

「５６点って……ハクちゃん、それじゃあ試験の意味が無くなっちゃうよ」

試験の意味？
高得点を取る事ではないのか？
「気持ちだけ、もらっておくね。ありがとう、ハクちゃん」
気持ちをもらう？
ダルフェ同様、りこも時々難しい言い回しをするな。
でも、りこが微笑んでくれたので良しとする。
「うむ。では、今後も我の気持ちは全部りこにやる」
顔をあげ、りこに接吻した。
竜体の我に接吻されるのを、りこは非常に好む。

りこの鼓動が大きく跳ねた。

微かな振動が、触れ合った身体に伝わってきた。

「……りこ。満点を取った我に、ご褒美をくれるか？」
４本指の手をりこと同じ5本の指を持つ手に変えて。
一瞬硬くなった細い体を、逃がさぬように抱きしめた。
何か言おうと動いた唇を塞ぐように口付けると、躊躇うかのようにおずおずと。
りこの両腕が我の身体に伸ばされた。
背に触れる……小さな手の、あたたかで柔らかな感触。
「先ほどのように……もっと撫でて、りこ。もっと我を、愛でてくれ」
欲情という言葉の意味を。
我はりこと会ってから、正しく理解した。

目覚めたりこが風呂に入ってる間。
我は長椅子で‘ころころ’をして、りこを待っていた。
この‘ころころ’とは、なかなか面白い。
ふむ。
もっと長距離でやってみたいものだな。
トラン火山の山頂から麓まで、そして麓から山頂までを往復してみるか……。
赤の大陸にある砂丘も‘ころころ’に、適している気がするな。

温室に繋がる扉がノックと同時に開かれた。
＜青＞がやってきた。
「おい。今日は茶に来なかったな。まあ、俺様も忙しかったから丁度良……じじい、なにやってんだ？　老化防止の体操か？」
＜青＞の手には、特注の蓋をしたバケツ。
「鯰の餌は温室に置いて来い、居間には持ってくるな」
それと紙袋。
「つい、持ってきちまった。ふっふっふ……これは新作なんだ！　栄養価はそのままで、臭いを半分以下にすることに俺様は成功した。さすが、俺様だ！」
鯰。
りこはあの鯰がお気に入りだ……忌々しいことにな。
「おちびは？　おちびに見せたいもんがあるんだけど。……６点なんてある意味すげぇ点数取っちまって、落ち込んで出てこれないのか？」
＜青＞は寝室の扉に顔を向け、首を傾げた。
６点。
すでに報告済みか。

まあ、そうだろうな。
「違う。風呂だ」
もうすぐ出てくるはずだ。
長湯はしないと言っていたからな。
「風呂？　まだ夕飯前……ああ、そっか！　おちびは異世界でも特に風呂好きな人種なんだって、こないだ言ってたもんな」
そうなのだ。
りこは日本人という人種で、風呂に対して強いこだわりと執着を持つ変わった種族らしいのだ。
「りこは風呂が好きだ。ここの風呂をとても気に入っている。でかしたな、ランズゲルグよ」
我も、りこと入る風呂は好きだ。
だが。
交わった後の入浴は、りこには一人で入ってもらう事にした。
理由は簡単・単純だ。
我は竜の雄で、りこは人間の女だからだ。

１０日程前。
我は、失敗をした。
蜜月期の雄としての自覚が、少々足りていなかった。
交尾後のまどろみから覚めたりこと、竜体で風呂に行き。
のぼせてしまったりこを、人型で抱えて出る羽目になった。

我は反省し、りこに‘ごめんなさい’をした。
りこは真っ赤なってしまった顔を我から隠すように俯き。

―ごめんね、ハクちゃん。私っ……ごめんなさい。

小さな声で、そう言った。
なぜりこが謝るのか、我にはさっぱり分からなかった。

行為を強いた我が悪いのだ。
りこの身体に負担をかけた我が悪いのであって、りこは悪くない。
ふむ、ダルフェが帰ってきたら問うてみるか。

鯰の餌を温室に置き、居間に戻ってきた＜青＞はソファーに腰を下ろした。
「夕べ、作ったんだ。おちびにやろうと思って、持ってきた」
＜青＞は持参した紙袋を逆さにし、中身をテーブルにばら撒いた。
丁寧に個別包装された焼き菓子の山の中に、見覚えのある四角い物体があった。
「なあ、じじい……おちびがいねぇから聞くけどよ」
青い爪を持つ指で焼き菓子をどかし、四角いそれを脇へと置いた。
＜青＞の眼は、菓子を見ていた。
数を確認しているようだった。
「あいつの身体に何した……何してるんだ？」
りこの体に、何をしているかだと？
心当たりが多すぎて、返答できんではないか。
「何とは、なんだ？　それでは分からん。具体的に言え」
＜青＞は続けた。
焼き菓子を見ていた青い眼を、我に向けて言った。
「シスリアが、おちびは異常だって言っている。短期間であれだけ会話ができるなんて、あり得ないと。……俺様もそう思ってた。はっきり言わせてもらうが、おちびの知能は人間としては並みだろ？　だから書き取りは６点だった。まあ、６点だと並以下の可能性も

……睨むな、冗談だ」
セイフォンを出てから、りこは格段に会話が上達した。
正しくは。
我が傷つけてしまった肉体を、メリルーシェで［再生］してから。
「シスリアは初日の段階で、おちびが特に優秀でもない普通の人間だと判断した。だがな、会話に関しては疑問を持ってた。だから今回の会話試験には、学習院の卒業学年に出すような単語も混ぜた。あいつが知らないはずの単語を使ったんだ。それなのに会話が成立しただと!?　どう考えたって、変だろうがっ！　ヴェル、おちびの頭になんかしたのか!?　脳をいじるなんて、危険すぎる。これ以上はやばいだろうがっ」
りこは我と同じ金の眼になった。
「脳を直に触るなど、りこにはせぬ。我はお前とは違う。組織を潰さずに、脳をいじることは出来ぬからな」
それは。
我が望んだものではない。
「俺様ができんのは、消去だけだ。知能をどうこうなんて、できねぇ」
我はりこの黒い瞳が大好きだった。
りこの眼の色に染まってしまいたいほどに、あの黒い瞳を愛しいと思っていた。
「我にも無理だ。りこは知能が向上したのではない、あれは単なる副作用だ」
セイフォンに居た頃と違い、りこは我と交わるようになった。
「りこは言葉を理解する能力を、多少だが……確かに得た。我と頻繁に性交渉を持つようになり、それは格段にあがった。苦労して【お勉強】せずとも、会話が出来るのだ。なんの不都合がある？　良いではないか。りことて便利だろう？」
りこ。
会話が上達しているのは、努力の成果ではない。

早朝の勉強も、我としている会話練習も。
してもしなくても、結果はたいして変わらなかったのだ。

６点。

書き取りが６点なのには、根拠がある。
我の念話能力が歪んだ形でりこを侵食したのだ。
発する者が意識せずとも、言葉には念に近いもの……意思が込められている。
それを受け取り、理解するのは念話能力。

念は無形、文字は有形。
文字は覚えなければ書くことはできぬ。
それゆえ、６点なのだ。

交わることで竜珠が力を増し、我の予想外の結果をもたらした。
不安定ではあるが、強い再生能力。
＜青＞が指摘した言語能力の向上。

それらは、代償を伴った。

りこがシスリアとの勉強中は、我は竜体で同行する。
セイフォンで魔女に学んでいた時同様に、通訳が……我の念話能力が必要だと考えたからだった。
異界の言葉でりこが我に質問する、そう思っていたからだ。

初日、りこは我に対して異界の言葉を使わなかった。

疾患ではないので体液に変化は見られず、我にも確証は持てなかったが……。

以前は感情が昂ぶると、異界語で喋っていたのに。
我と交わり意識が混濁した状態になっても、その唇が紡ぐのは公用語のみだった。

りこは気づかない……気づけない。

異界の言葉を忘れたわけではない。
配置が変わっただけだ……今は、まだ。
消えてはいない。

だが、確実に奥へ奥へと追いやられている。
そう遠くない未来に。
淡雪のように……融けて無くなる日がくるのだろうか？
それは我にも解らない。
「りこには言うな。りこは会話が出来るようになりたいと、努力、した。この世界に来てからずっと、りこ自身も、努力、し続けたのだ。それに……シスリアに試験ではなく［確認］されたと知れば、りこは傷つくかもしれん」
眼に見えぬが確かに存在する【心】というもの。
それも肉体と同じように傷つき、壊れるものなのだと我はりこから学んだ。
「わかってる。……俺だって、あいつが頑張ったって知ってるよ」
りこ、我のりこ。
我は劇薬のような気と体液を。
日々、貴女に注ぎ入れ。
貴女という存在が持っていた枠を崩し、壊して……創り直している。

甘く美味いと、我の欠片を口にすればするほど。
親しい者達から遠ざかり、我の元へと堕ちてくる。

貴女を我と同じ＜化け物＞にしたい。
それが我の望み。

異界の言葉も、家族のことも。
全て忘れてしまえば良いのに。

あの小さな頭も、華奢な身体も。
我のことだけ考え、我だけで満たされればいい。

忘れさせたい。

そう願うのに＜青＞の能力を使おうとは、思わない……思えない。
心とは。
複雑怪奇で、やっかいなものなのだな。

「それと……カイユの様子を見に行ってたセレスティスが、戻ってきた。明後日には帰ってこれるってさ。俺様はちょっと心配だったんだが、子は全く問題の無い普通の個体だった。＜色持ち＞じゃない。＜竜騎士＞かどうかは、まだ暫く様子を見ないと分からないな」
カイユとダルフェ。
支店での性交後にりこの会話が不自然なまでに上達しようが、あの2人はそれに関して何一つ我に言わなかったな。
「そうか。我からりこに伝えておく」
カイユ達が戻ってきたら、りこは喜ぶだろう。
だが。
りこは竜の子を……【弟】を見て、どう思うのだろうか？
この世界の人間のように嫌悪するのか、それとも……。
「＜黄＞用の電鏡、やっと新しいのを用意できた。さっき設置作業が終わったんだ。今回は予備のものが役に立ったけど、あれだけの

もんはめったにねぇんだ。二度と壊すなよ？　＜黄＞……試運転兼ねて連絡したら、ヴェルを怒らせちまったってわんわん泣いてたぜ？　謝りたいって言ってた。俺様にはごめんのごの字もねぇけどよ」

＜黄＞か。

「怒ってなどいない」

あれのことなど、思い出しもしなかったな。

「じゃあ、後で＜黄＞に顔見せてやれよ」

りこは、他の竜帝に会うのを楽しみにしていた。

「あれに会う気は、我にはない」

だが。

＜黄＞はりこの〝存在〟を無視した。

我のりこを。

「謝罪は不要」

我の妻として他の竜帝達に会える事が嬉しいと。

鏡に向かい、紅をひきながら言っていた。

自分の髪を梳かした後、りこは我の髪を梳かしてくれた。

自分自身にしていたよりも長い時間をかけ、丁寧に梳かしてくれた。

そのりこを。

＜黄＞は見下し、最初からその存在を〝無視〟したのだ。

りこが我のつがいであることを、否定した。

認めようとしなかった。

りこに話しかけていたのではない。

あれはりこを拒絶していたのだ。

「我にリンエルチィルは［不要］だ」

＜青＞が息を呑んだ音がしたが、言葉を発することは無かった。

リンエルチィルを廃し、次の＜黄の竜帝＞に替えるのは簡単だ。

＜処分＞すればよい。
だが、時期が悪い。
ベルトジェンガが、もうすぐ死ぬ。
代替わりをほぼ同時で行なわせるのは、今の我にとって少々都合が悪いのだ。

風呂から出てきたりこは、机の上に置かれた四角い玩具を見て眼を輝かせた。
念話で＜青＞が来ていることを告げてあったので、きちんと身支度をして現れた。
「ハクちゃん、お待たせ！　竜帝さん、こんにちは。……ん？　もう、こんばんはかな？」
りこは成人した女だというのに他の者の眼が無いと、幼女のような行いをするのだ。
風呂上りの身体にタオルを巻きつけただけというとんでもない格好で、室内を歩き回ったり飲み物を飲んだりする時がある。
下着姿で柔軟体操を始めることさえあるのだ。
その行動をセイフォンで初めて目の当たりにした時、我は強い衝撃を受けた。

同じ人間の女でも、身体の構造が同じでも。
異界人であるりこの生態は、我にとって謎と不思議に満ちていた。

この我を驚愕させるとは。
りこ、恐るべし。

寝台の使い方も、りこは変わっていた。

―ハクちゃん、私は大丈夫だからもっと強くしてっ……あいたたたぁ！

りこは寝台で体操をする。

多くの女といろいろな寝台を使った我だが、このような使用方法は初めて知った。

股を限界まで開いて座ったりこの背を、請われてさらに押しながら……妙に感慨深く、異界人の生態はなんと奇異なものかと……昨夜もそう思った我だった。

「ね、ちゃんとした格好してきたでしょ？　念話で何度も確認しなくたって、大丈夫だよ。私、２６だよ？　言われなくたって、人前に下着で出てくるなんてしないよ！」

りこは足元に駆け寄った我を抱き上げて、我の右頬を指でつつきながら言った。

りこ。

我の知るこの世界の＜大人の女＞と、異界人の＜大人の女＞であるりこは少々違うのでな。

つい、いらぬ心配をしてしまう傾向が……言わんほうが良さそうなので、我はそれを口にはできんのだが。

「竜帝さん、今日はお茶に行かなくてごめんなさい。え～っと、そのっ！　昨夜は試験勉強で寝るの遅かったから、お昼寝してしまいまして……」

まあ、嘘ではないな。

りこは昼寝もした。

「いいって。俺も忙しくて茶をする余裕が無かったしな。ほら、おちび！　これ異界の物だろう？　前に買ったんだ、けっこうな値段したけど面白そうだったからさ」

菓子と共に＜青＞が持ってきた物は、異界の玩具。
向かいのソファーに座ったりこに＜青＞が玩具を放った。
りこは両手で受け取り、顔を綻ばせた。
「うわぁっ、懐かしい～！　これ、お父さんが持ってた……なんて名前だっけ、んーっ!?　あれ？　ここまででかかってるのに、名前が出てこない。え～っと」
ガチャガチャと音を立て、上下左右にマスを動かしながら。
りこは手の中の玩具から眼を離さず言った。
視線が、全く動かない。
膝に座っている我が、そっとりこの右袖を掴んだのにも気づかない。
瞬きすらしていなかった。
りこの眼には玩具を通し、他の何かが見えているのかもしれない。

かぼちゃでランタンを作っている時とは、明らかに様子が違う。
異界の行事……ハロウィンの事を遠慮がちに口にした時、その眼にあったのは懐かしさではなく。
好奇心に近いものだと我は感じた。
話を聞くと、それは異国の行事であり……かぼちゃでランタンを作るという作業は、りこにとって［初めての遊び］だった。
「まあ……そういう時もあるって、気にすんな。それ、おちびにやるよ」
＜青＞の言葉に、りこの手が止まった。
揃った色は1色だった。
「えっ？　もっ……もらえない。さっき、高かったって言ってたもの」
＜青＞は10年程前に、人間の商人からこの［貴重な珍品］を購入した。
異界の品には高値が付くからな。
「俺様はそこらの王族なんか足元に及ばない、桁外れの金持ちだぜ

？　遠慮すんな、懐かしいって言ってたじゃねぇか」
違う。
金の問題ではないのだ。
りこは我の為に異界の物を欲しがらない……欲しがれぬのだ。
以前、りこは言った。
りこが異界の話をすると、我が不安そうな眼をするのだと。
だから、りこは……。
「ありがとう、竜帝さん。でも、いらないの。ほら、１色しか出来なかったでしょう？　私はお父さんと違って、頭を使うおもちゃって苦手なの……ハクちゃん、やってみる？」
りこが我の右手をとり、のせてくれた正方形の集合体。
面の色をあわせる玩具。
りこの世界の玩具。
「あ！　『ルービックキューブ』だよ、これ！　思い出せたぁ～」
我が捨てさせた、りこの世界の。
「ぎゃあ!?　じじい、なにすんだよ！」
手のひらのそれは体積を失い。
鮮やかな色をした、細かな破片へと変わった。
「ハ、ハクちゃんっ大丈夫!?　手を切らなかった!?」
りこは我の指を開き、玩具だったそれらを全て払い落として掌を確認した。
我の手には、当然ながら傷などない。
竜の皮膚は硬い。
りこは我の手を撫でながら、息をはいた。
「ハクが怪我をしてなくて……良かったぁ」
我が染めてしまった瞳は床を……壊れた玩具を見なかった。
金の瞳に映るのは、我の４本指の手。

刃物も通らぬ、鱗に覆われた竜の手。
「あ～あ。おちびにやろうと思って持ってきたのに、このじじいは全くよぉ！」
「ハクちゃんは力加減をちょっとだけ、間違えちゃったんだよね？竜帝さん、ごめんなさい。ハクを許してあげて」
りこが見るのは我。
異界の玩具ではなく。
父親との……家族との思い出があるであろう、玩具ではなく。

りこは我を選んでくれたのだ。
この我を。

我に。
もっと我に侵食されて。

異界の事など、愛する者の記憶など。
この玩具のように壊れ、無くなってしまえば良いのに。

「ありがとう、りこ。玩具を壊してごめんなさいなのだ」
金の瞳の中。
小竜の我が、頭を下げた。
「ううう……かわい……っ！」
りこの頬が、一瞬で染まった。
「おちび、だまされんな！　じじいっ計算だろう、それっ！？」
貴女に、ごめんなさい、と。
その言葉を口にする時は、小さな幸せを感じ……喜びすら感じるのに。

ありがとう。
感謝を伝えるはずのそれは。

我にとって。
貴女への謝罪の言葉。

「ありがとう。りこ」

この世界に落ちてきてくれて。
この我へ堕ちてきてくれて。

ありがとう。

「ハクちゃん。晩御飯をもらいに、竜帝さんと食堂に行こうよ」
菓子の入っていた紙袋に壊れた玩具の欠片を全て入れ終わったりこが、上部を折って封をしながら言った。
「りこは待っていろ、我とランズゲルグだけで行く」
りこの黒髪は、まだ乾いていなかった。
服を湿らせぬように上げた黒髪は、薄紫の水晶で作った小花のついた数本の装飾ピンで留めてあった。
細いうなじが、立て襟の衣装の隙間から微かに覗いていた。
「交尾後なうえに風呂上りで色香の増したりこを、雄共がいる食堂へなど連れて行けん。＜青＞はりこの気に入りだから許しているが……ほら、まだ濡れている」
濡れて艶を増している髪に手を伸ばした。
爪で傷つけぬように注意しながら、ほつれた髪を耳にかけなおし

てやった。
曲げた指の間接で左耳をなぞるようにすると、りこの唇が微かに震えた。
「っ……な、何でそういうこと言っちゃうのよ！　もうっ、ハクちゃんが変なこと言うからだよ！　わ、私に色香なんてあるわけないんだからっ。竜帝さん、大丈夫！？」
胸を拳で激しく連打しはじめた＜青＞の背をさすろうと、りこが腕を伸ばした。
「変なことではない、事実だ。我は間違っていないぞ？　……下がれ、りこ」
りこはあわてて手を引き、数歩下がってから我と＜青＞を交互に見て言った。
「大変……お菓子がつまっちゃったみたい！　お願いハクちゃん、竜帝さんの背中を叩いてあげてっ」
お願いとな？
りこのお願い。
「わかった」
我は＜青＞の背の中央を叩いてやった。

尻尾で。

＜青＞の口から出たのは、菓子と怒声だった。

「ぶぎゅうっ！？　いってえぇぇ～っ！　なにしやがる、このドS！　背骨が折れちまうだろうが！？」
＜青＞よ、お前が食っている菓子はりこへ持ってきた物ではなかったか？
何故かテーブルには3個しか残っておらぬようだが……。
「ハクちゃん！　強すぎだよっ。こんな感じでとんとんって、してあげなきゃ！」

りこが我の背を軽く、数回叩いた。
「とんとんか、うむ。覚えた」
とんとん……これは、なかなか気持ちが良い。
撫で撫でも良いが、りこの‘とんとん’も我は好きになった。
我も菓子が詰まったら、りこが‘とんとん’をしてくれ……っむ
む、我は菓子を食わぬとりこは知っておるな。
自作自演だとばれたら‘とんとん’をしてもらえん可能性がある。
では、違うものを……何を気管ににつめたら、りこに‘とんとん
’をしてもらえるのだろうか。
石が良いだろうか？
むっ、石では少々不自然か……なかなか難しい問題だな。
「もおぉ～っ！　竜帝さんがむせちゃったのは、ハクちゃんの所為
なんだからね！？」
はて？
なぜ我の所為なのだ。

意地汚く数個の焼き菓子を口に放り込んでいた＜青＞が、それら
を咽喉に詰まらせたのは……どう考えても自業自得だと、我は思う
ぞ？

番外編　～クリスマス～

雪が降った。

初雪。

この世界に来て、初めての雪だった。

「あ、あの！　ハクちゃん、お散歩に行かない？」

私はずっと考えていた。

この４日間、ずっと迷っていた。

でも、とうとう決心した。

昨日、雪が降ったから。

初雪だったから。

「散歩？　こんな時間にか？　駄目だ」

居間のソファーで本を読んでいたハクちゃんに、私は衣装室から持ってきた外套を差し出した。

それは黒に近いほど濃い紫で、襟にあたたかそうな銀色の毛皮があしらわれていた。

豪華だけれど品の良いそれは、ハクちゃんによく似合うのだ。

難点はちょっと重いことだけど、ハクちゃんにとっては気にならない程度の重さらしい……これ何キロ！？　ってくらい、私には重

たいんだけどね。
　私は上着だけじゃなく手袋もして、靴を防寒ブーツに変えた完全装備でハクちゃんに‘お願い’した。
「お願い、ハクちゃん。こんなに着たから、私は風邪をひいたりしない。　ね、少しで良いから夜のお散歩に行こう？」
「……」
　ハクちゃんは本を閉じ、脇へ置いて立ち上がった。
　私の差し出した外套を受け取り、長身をかがめて私の顔を覗き込むようにして言った。
「今夜はまた‘七夕’なのか？　今宵は満月なので、星はあまり見えんぞ？」

昨夜。
夕食に使ったお皿を洗っている時。
木製の窓枠にちょこんと置かれたユニの実に目をやった。
私の宝物。
洗物をしていると、ついつい視線がそこへいってしまうのだ。
ユニを見てにやける私の視界に、ふわりと揺らぐ何かの影。
窓の外で、ゆっくりと上から下に……。

雪。
それは雪だった。

心が弾んだ。
初雪を見ると、何歳になっても少しだけうきうきしてしまう。

私は‘お手伝い’をしてくれてたハクちゃんに、外は雪だよって言った。

―そうか。では、帝都は今夜から、冬、だな。

雪に興味は無いようで、ハクちゃんは外を全く見なかった。
彼の視線は、洗いかけのカップを握る私の手に注がれていた。

冬。

引越してきた時、帝都は秋だった。
相手は安岡さんじゃないけれど、私は予定通り秋に結婚した。
都心のホテルでの披露宴は、お母さんの希望で１１月１日だった。

この世界に来て、２ヶ月位経っていた。
私はこちらの世界に来てからの日にちを数えるのを止めたので、
日本が何月何日なのか正確には解らない。
ハクちゃんが薬草園を真っ白な空間に変えてしまった……私とハクちゃんの、時間の違い、を強く意識するようになったあの日から、数えるのを止めた。

セイフォンは初夏のような気温だった。
引っ越してきた帝都は秋だった。
そして雪が……短い秋が終わり、冬に変わる。

ハクちゃんと過ごす、初めての冬が始まったんだ……そう思った。

手を繋ぎ、私は早足でハクちゃんを目的の場所へと連れて行った。
毛皮で飾られた外套を着たハクちゃんの真珠色の髪が、お月様に照らされてほんの少し青みがかった金色に見えた。

「もうちょっと、先なの。すぐよ、すぐなのっ」
私の吐く息は白い。
ちらりと見上げたハクちゃんの口元に、白いそれは無かった。
ハクちゃんは寒さも気にならないらしい。
でも、私と同じように気温にあった冬服を着てくれている。
黙ってそうしてくれるハクちゃんは、やっぱりとても優しい人だと思う。
寒くないからって、ハクちゃんが真夏みたいにタンクトップ&ハーフパンツだったら……それを見てる私が寒くなっちゃう。
ハクちゃんは、それをちゃんと分かってるんだよね？
だから外へ行くときも、厚く重い外套を黙って着てくれる。
ハクちゃんは変わってるし、すぐ手足がでちゃう暴力的な部分もあるけれど……デリカシーに縁遠い奇天烈な人だけど。
本当は繊細で、深い優しさを持っている……私はそんなハクちゃんをどんどん、ますます好きになっちゃうばっかりで。
なんか、もう……うう～っどうしようもなく好きって、こういう気持ちのことだよね？

急いだから考えていたよりも、早く到着した。
早足で歩いたせいで、体がとてもあたたかくなった。
「ふ～っ！　着込みすぎちゃったかな～、あつっ」
目的の場所はこの木。
この木というより、この木にくっついているモノというか。
ハクちゃんは私に引っ張られるようにこの木の下に連れてこられて、さすがに疑問を感じたらしかった。
そりゃそうだよね、一直線に競歩状態でここへ来たもの。
「りこ、これは散歩ではないな。ここに我を連れてくる必要があったのではないか？」
顔は私を見下ろしたまま、金の眼だけを動かして周囲を確認する

ように眺めながら言った。
「え～っとですね、その……」
私は緊張した。
でも、言わなくちゃ。
「今ここでっ、私……わ、わわ私にキ……キ、キキッ！　キスして下さいませんかぁあ！？」
自分でもぎょっとするような、変な声が出た。
キスどころか、それ以上のことをいたしている間柄なのに。

‘私にキスして下さい’

それを素面で口にするのは、想像以上にパワーが必要で……。
すごく。
ものすごく緊張してしまった。
周りを見ていた金の眼が、ぴたりと私に固定された。
「何故、ここで接吻する必要があるのだ？」
うわっ！？
こんなときに限って、なんでそう切り返してくるんですかぁ～！
「何故だ？」
いつもは突然無言でぶちゅーっ、としてきたりするくせに。
なんで今ここで、こんな時に限ってまともで普通なこと言っちゃうのですかぁあああ！
うわあぁ、それだけ私が不自然で挙動不審だったってこと！？
は、恥ずかしい～！
「う……う、上に。この木に宿り木を見つけて、だからキス……」
「宿り木？」
４日前。
お散歩中に見つけた。
木の幹と枝の間にぽこんとくっついた、丸い緑色の物体。
葉の落ちた木々の中で、緑の茎で編まれたボールのようなそれは

とても目立っていた。

宿り木。

宿り木といえば、クリスマス。

そのことが頭から離れなくなった。

あれは中学生の時。

期末テスト後のＨＲでのことだった。

担任の先生が留学中の写真を見せつつ話してくれた、ヨーロッパのお洒落なクリスマスの話。

宿り木の下で恋人にキスしてもらうと、２人は結ばれて幸せになれる……まあ、諸説あるみたいだけれど。

（宿り木の下でなら、誰にでもキスしていいとか等）

先生のちょっと自慢も入った異国での過去形恋愛話は、らぶらぶクリスマスを夢見る中学２年の女子（もちろん彼氏無し）だった私にある野望を植えつけた。

将来結婚したいと思えるほど好きな人が出来たら、クリスマスに宿り木の下でキスをする。

そして、その人と結婚して末永く幸せに暮らします的な……なんて単純だったんだろう。

今思うと、自分でも幼稚園児みたいだと感じてしまうけれど。

当時は本気も本気、大真面目だった。

大人になり、憧れは残ったけれど野望は消えた。

就職すると恋愛の一大イベントだったクリスマスは、売り上げアップの好機に変わった。

特別な日のために新しい口紅や香水を熱心に選ぶお客様と接していると、自分までわくわくした幸せな気持ちになれたな……。

ある意味、２０代未婚女性としてかなり寂しい域に達していた気

も……。

ま、それは置いといて。

大事なのは……大切なのは今、この瞬間なのだ！

がんばれ、私！

野望復活だ！

「こっこれはクリス……冬のおまじないでしてっ！　宿り木の下で好きな人にキスしてもらうと、その人と結婚できてずっと一緒にいられるの。私、ハクちゃんが好きでっ、すごくすごく好きだから。もう結婚してるけど、でもっ！　ずっと側に……だ、だから……キ」

ちゅっ。

「……へ？」

ハクちゃんがキスしてくれた。

ほっぺに、ちゅって。

一瞬の出来事で、前ふりも余韻も無かった。

あまりに意外で、リアクションできなかった。

うん、嬉しいんだけど……あれ？

私は口にしてもらう気満々だったというか。

予定ではもっとこう、いつもみたいにお口に……あれれ？

「ハクちゃ……？」

ハクちゃんは、私を見ていなかった。

金の眼は頭上の木に……宿り木に向けられていた。

「持って帰ろう」

は？

「重要なのはこれの下ということであって、この場所ではないのだろう？」

掲げた左手には、木にくっついていたはずの宿り木が……。

「りこ、帰るぞ」

ばさりと外套の前を広げ、ハクちゃんは私を仕舞い込むように包

み込んだ。
月明かりさえ届かないそこは。
甘い香りに満たされた、私だけの場所。
痛いほど冷たかった空気が、やわらかなあたたかいものへと変わった。
「んっ！　まぶしっ……」
ハクちゃんの懐から出て見たのは、すっかり見慣れた部屋だった。
月明かりになれた眼に、天井の照明は少し眩しかった。
「これは寝室（ここ）に吊るすことにする」
ハクちゃんは、ぽいっと宿り木を床へ投げた。
吊るすって、今言ってませんでしたか？
続いて外套を脱いで、それも無造作に放った。
ハクちゃんの‘ぽいぽい癖’は、私のお父さんにちょっと似ているかも……。
「我は野外だろうと構わん。だが、りこに風邪をひかせるわけにはいかんからな」
私の手から手袋を外し、またまたぽいぽいっとして。
「お呪いの接吻は、ここで仕切り直しだ」
そう言って、ハクちゃんがしてくれたキスは。
またまた私の予定とは違った。

く……く、唇にしてくれるだけで良かったんだけど？

翌朝、目覚めた私が見たものは。
ハクちゃんが寝室に吊るすと言った宿り木が、ベットの天蓋にピンクのリボンで結んで……うわっ！？
大きいの、小さいの……さまざまな大きさの緑色のボールがこれ

でもかと言うほどぶら下がっていた。
1個ならかわいい宿り木だけど……。
これだけの数が隙間無くぶら下がっていると、ちょっと不気味だ。

枕元に座った竜体のハクちゃんは右手にリボン、左手に西瓜サイズの宿り木を持っていた。
「な、なんで数が増えてるの？　3・6・8……16・17……だめ、多すぎて数えられないよ」
ハクちゃん、まさか。
私が寝てる間に……。
「冬のお呪いなのだろう？　春になるまで毎日必要なのかと思ってな」
毎日？
春まで毎日1個…！？
ち、違～うっ！
クリスマスだけだから、1シーズン1個で充分なんです。
あ、クリスマスの事は全く言ってなかったぁああ～！
「おはよう、りこ」
ハクちゃんは金の眼を細め。
呆然と宿り木を見上げる私にちゅっと、小さなお口でキスしてくれた。
「お、おはよ……」
私の為にたくさんの宿り木を……。
苦手なリボン結び……立て結びになってるけれど。
こんなにリボンがしわしわになるくらい、何度もやり直して結んでくれたんだね？
「おはよう。……宿り木をありがとう、ハク」

貴方の想いがつまった、このたくさんの宿り木にお願いしよう。
愛しい人と、貴方とずっと一緒にいられますようにって。

「りこ。質問があるのだが」
「ん、なあに？」
明日も明後日も、宿り木の下でキスしよう。
願いを込めて。
愛しい貴方と。
たくさん、たくさんキスしよう。
「寝言で言っていた＜ケンタタベタイ＞とは、どういった意味の呪文なのだ？」
「ね、寝言っ！？　ケン……そ、それはそのっ！」
ロマンチックな甘い雰囲気が続かないのは、ハクちゃんの謎思考回路の所為だけじゃなく。
私自身にも問題があるのだと痛感した。

第７３話

カイユさん達がお城を出て１７日目の夜。
新しい家族を連れて、カイユさん達が帰ってきた。

月明かりの差し込む夜の温室で、私は初めて【弟】と対面した。

「わあ～！　この子がジリギエ君？　かわいいっ、とってもかわいい！　あ、でも……えっと諸事情ありまして……１番かわゆいのはハクちゃんで、ジリギエ君は２番目です」

かわいい……かわゆい事に並々ならぬこだわりを持つハクちゃんの手前、私はすぐに言葉を付け足した。

カイユさんに抱かれて眠るこの子が……ジリギエ君。

なんて綺麗で、かわいい赤ちゃんなんだろう。

そう思った。

「トリィ様。この子を……【弟】を、抱いていただけませんか？」

カイユさんに抱かれた＜赤ちゃん＞は私が知っている＜赤ちゃん＞ではなかった。

「え……いいの？」

ハクちゃんにお許しをもらい（彼は抱っこにもこだわりがあるようなのだ）、カイユさんにジリギエ君を抱かせてもらった。

私の腕の中にカイユさんがそっと、ジリギエ君を置いてくれた。

間近で見た【弟】は、想像以上に可愛くて……綺麗な存在だった。

「わぁ……素敵な鱗」

青みがかったグレーの鱗は１枚１枚は半透明で、それが重なり合い全身を覆っていた。

蛇のような細長い体に、短い手足がちょこんとついていた。

平たいお顔に、大きなお口。

眼の脇に小さな突起物……お耳かな？

「姫さん、ほら。見てごらん？　この翼は幼生の時だけなんだ」
ダルフェさんがジリギエ君を起さないようにそっと、開いて見せてくれた翼は広げるとけっこう大きくて……淡い月光を通すほど薄い皮膜がついていた。
シャボン玉で作ったようなそれは、ため息が出るような美しさだった。
「綺麗……竜族の赤ちゃんって、本当に綺麗だね」
ジリギエ君の重みを腕に感じながら、ハクちゃんそっくりの小さな竜の赤ちゃんを胸に抱く‘お母さんなった私’を想像して……自分の口元が緩むのを感じた。
カイユさんが私に抱かせてくれた小さな【弟】は、見た目よりも体重があり、羽毛のように軽いハクちゃんとは全く違った。
ハクちゃんと四竜帝は、ダルフェさんやカイユさんとは竜体の大きさも能力も……いろいろ違う点が多いみたいだった。
人型と竜体を持つ竜族。
竜族だけど、普通の竜ではない＜監視者＞のハクちゃん。
そんな彼と私の赤ちゃんは、どんな姿をして産まれてくるんだろうか？
「ジリギエ君、姉様ですよ～……ふふっ、これからよろしくね」
すやすや眠るジリギエ君を抱っこしてにやける私の姿にカイユさんは硬かった表情を和らげ、いつもの透明感のある微笑を浮かべてくれた。
ダルフェさんはいつもよりさらに目じりを下げて、なぜか爆笑した。
「やっぱ、すげ～なぁ姫さんは！　心配して、損しちまったなぁ……ぐげべっ！？　いててっ……むへへへぇ～っ」
ジリギエが起きてしまうでしょうって、カイユさんに注意され……背中を蹴られたダルフェさんは、とっても嬉しそうだった。
カイユさん……帝都ではセイフォンの時に着てたメイド服じゃなく、アオザイのような衣装だから蹴りやすくなったのだろうか？

「あぁ、久々の蹴り……俺的にはもっと激しく連打して欲しいっ」
ひえぇ～、嬉しそうを通り越して恍惚としている気が……ちょっと不気味ですよ、ダルフェさん。
青い騎士服を着て見惚れるような姿をしていても、やっぱりダルフェさんはダルフェさんなのだ。

「ダルフェ、なにを心配したの？」
ジリギエ君をカイユさんにかえしてから、訊いてみた。
私とダルフェさんの距離は、かなりぎりぎりな2ミテをずっとキープしている。
ダルフェさんにも竜帝さんと同じく、ハクちゃん2ミテルール、が適用されることになったからだ。
カイユさんは出産し、妊娠期間が終わった。
だからダルフェさんは近いうちに【雄】の成竜に戻る。
蜜月期中のハクちゃんにとって本来は排除対象になってしまうんだけれど、ハクちゃんは2ミテ宣言をしただけでダルフェさんを受け入れてくれた。
「ん～、心配ってのは……まぁその。竜族の赤ん坊は人型じゃないからねぇ」
なるほど！
ジリギエ君が……赤ちゃんが＜人間＞の姿をしてないから、私がもっと驚くかと思ってたんだ。
私は赤ちゃんが人型じゃなくても、別に驚かない。
竜族っていうくらいだから、本来は竜体がメインな種族なはずだし。
小竜の旦那様を持つ私だもの、確立（？）は半々かなぁって漠然と考えていた。

ちょっと意外だったのはハクちゃんみたいな‘いかにも竜です’って小竜じゃなくて、爬虫類っぽいちびちゃん竜だったことで……。

私はハクちゃんに視線を向けた。

初めて見た竜族の赤ちゃんに大興奮の私とは違い、ハクちゃんは竜体で大人しく池の淵に座っていた。

会話に入ってくる様子もなく、ただ静かに。

私達を透明感の無い金の眼で、眺めていた。

その眼からは彼がジリギエ君を見て何を思い……考えてるのか、私には読み取れなかった。

もしも。

私と同じように、未来の自分達の姿をカイユさん達に重ねてるんだったらと思うと……一瞬だけ、お腹の中がきゅっと痛んだ。

カイユさん達はお城に帰ってきて、まず私のところに来てくれたのだ。

これから竜帝さんの所に行って簡単な挨拶と報告をして……正式な‘挨拶’は後日、大広間でお披露目会のようなものがあるらしい。

お披露目会。

それを聞いて、竜族にとって新しい一族の誕生はそれだけおめでたいことで……重要視されることなんだと改めて感じた。

子供は一族の宝……子供といえば。

ダルフェさんは赤の竜帝さんの子供……息子だった。

彼女はダルフェさんの事を心配していた。

「あのっ、ダルフェ！　私、赤の竜帝さんに電鏡の間で会ったの。ダルフェのお母様だったなんて、びっくりしちゃった。あれ？　うわわぁ～、もしかしてダルフェさんって王子様ってこと！？」

ダルフェさんはぎょっとしたように後ずさりした。

手をぶんぶんと自分の端整な顔の前で振り振り、言った。
「げげぇっ、母ちゃ……ブランジェーヌに会ったのか!?　王子様……ぶぶっ！　やめてくれよぉ、がらじゃねぇし。それに竜帝は世襲制じゃないからねぇ。母ちゃんが竜帝だろうが俺は庶民よ、庶民。俺の父親は赤の竜帝の帝都で食堂やってるごく普通の親父なんだぜ？」
明日の午前中に‘お祖母ちゃん’になった赤の竜帝さんに、電鏡の間でジリギエ君を会わせるのだと……ダルフェさんは頬をかきながら言った。
ちょっと照れたようなその仕草は、それを見た私の心をほっこりと温めてくれた。

カイユさん達は２０分程で帰った。
明日のお茶の時間にゆっくりしていってくれることが決まったので、今夜は書き取りの練習は止めてシフォンケーキを作ることにした。
いつでも作れるように、材料の準備はしていた。
さっき、ダルフェさんが私に教えてくれたのだ。
竜族の子供は長い妊娠期間を経て、ある程度育ってから生まれてくる。
ジリギエ君は厳密に言うなら赤ちゃんではなく、幼生……人間でいえば3才児くらいの知能があり、お乳も飲むけれど大人と同じものも食べられる。

つまり、ジリギエ君はケーキを食べることが出来るのだ。

私はダルフェさん作のいつものエプロンをして、竜体のハクちゃんには唐草模様の緑のスカーフをエプロン風に巻いてあげた。
ハクちゃんと私。
初めて、２人でケーキを作った。

竜帝さんとの試作はちょっと失敗しちゃった私達だけど、今回はちゃんと……うまく焼けた。

ハクちゃんが卵白を完璧な状態に泡立ててくれたのが、成功の秘訣だと思う。

ハンドミキサー愛用者の私では、泡立てのパワーが不足していたのでとても助かった。

試作では１１本のホイッパーを壊しちゃったハクちゃんだけど、練習の成果が本番にこうして発揮され……彼もとても満足そうだった。

明日のお茶の時間に出すお祝いのふわふわシフォンケーキからは、卵とバニラの甘い香りがした。

部屋に漂う優しい香りに……ほんのちょっとだけ、切なくなった。

「ジリギエ君、出ておいで」

私は膝をついて身をかがめ、ソファーの下を覗き込んだ。

「……大丈夫、ハクおじちゃんはジリギエ君をいじめたりしませんよ～」

いじめるどころか、ハクちゃんはこの子に無関心のようだった。

フォークを握ってちょこんとテーブルに座ったハクちゃんの視線は、ケーキに釘付けだった。

ダルフェさんがケーキをカットしてくれるを、じっと待っている。

昨日の夜、私とハクちゃんで作ったシフォンケーキ。

バケツサイズのビックなシフォンケーキ……ハクちゃんのハンドパワー（？）が遺憾なく発揮された作品でございます。

「ジリギエく～ん。姉様達とケーキを食べよう？」
「……」
ジリギエ君からは返事が帰ってこない。
そんなに怖いの？
かわゆいおちび竜のハクおじちゃんが……。
ハクちゃんはジリギエ君に何かしたわけじゃない。
午前中のシスリアさんとの勉強会からず～っと、私にぺとっと張り付いて……。
いつもより甘えん坊さんなハクちゃんは、朝からずっと竜体のまま私にくっついていた。
お茶の時間に合せてカイユさん達が来てくれたのに、私の胸から顔をあげようとしなかった。
カイユさんに抱かれたジリギエ君を見もしなくて……ハクちゃんまで赤ちゃんになってしまったかのようだった。
外せない用事があってお茶会に参加できなかった竜帝さんがこの場にいたら、絶対に突っ込みを入れていたはずだ。
そんなハクちゃんの姿とジリギエ君を見比べ、苦笑するカイユさんの腕の中を背伸びして覗き込むと。
ジリギエ君は震えていた。
小さな眼は、私に抱っこされたハクちゃんに向けられていた。
初めて見たジリギエ君の眼は、ダルフェさんと同じ鮮やかな緑をしていた。

カイユさんが居間のソファーにジリギエ君を下ろすと同時に、彼はソファーの下へ潜ってしまった。
ダルフェさんは気にするなって言ったけれど、私には無理だった。

ハクちゃんが原因なら、なおさらだ。
「トリィ様、お茶にしましょう。トリィ様の焼いてくださったケーキ、とても美味しそうですわ」
カイユさんが茶器をテーブルに置き、にこにこしながら言った。
母親であるカイユさんも、隠れてしまったジリギエ君をなだめて席に戻す様子は無かった。
それどころか、嬉しそうに微笑んでいる。
「カイユ。ジリギエ君、このままじゃ可哀相だよ。どうしよう？」
うう～っこの状態は、私的にはかなり悲しいのだ。
「この子はヴェルヴァイド様に恐怖し、身を隠しました。ふふっ、検分にかける手間が省けましたわ」
ふわりと紅茶の香りが漂い、４つのカップにお茶を注ぐ音がリズミカルに響いた。
「検分？」
それって、なに？
「ええ。＜竜騎士＞かどうか、通常は専門の判定機関で調べるんです」
カイユさんはジリギエ君の隠れたソファーの前にしゃがんでいた私を立たせ、向かいのソファーに座らせた。
「いいかげんになさい。姉様が心配してるわ」
そう言ってジリギエ君の隠れているそこに腕を差し入れ、手足を踏ん張って抵抗するジリギエ君を引きずり出した。
カイユさんの右手に長い胴を掴まれて、短い手足で宙をかきながらジリギエ君は叫んだ。
「ギキッキキューギー！」
青みがかったグレーの細く長い胴をくねらせて、皮膜の張った翼をばたばたと動かしていた。
「この子は間違いなく＜竜騎士＞ですわ。ヴェルヴァイド様を絶対的強者と認識したからこそ、怯えたのです。まあ、そのうち慣れますからご心配なく」

竜騎士……それって職業名じゃないの？
警察官みたいに試験を受けてなるんじゃなくて、生まれ持った才能が重要だってことなのかな～。
悲痛な叫びをあげ続けるジリギエ君を自分の膝に押し付け……じゃなく、座らせたカイユさんの前に上手にカットしたシフォンケーキに生クリームを添えたお皿を置いて、ダルフェさんが言った。
「こらこら騒ぐなって、しょうがねぇだろ～ジリ。このおっかねえ旦那は、お前の姉様のつがいなんだから。お前はこの旦那と一生付合うんだぜぇ？　多分、お前の子供も孫もなぁ。腹くくっとけよぉ、ジリギエ」
薄いピンクのシャツに真っ白なふりふりエプロンをしたダルフェさんは、ジリギエ君の額を指先でちょんちょんとつつきながらニヤリと笑った。
「さあ、愛娘の作ってくれたケーキを食わんとねぇ。父ちゃんは幸せもんだなぁ」
カイユさんの隣に腰を下ろして、ダルフェさんはお皿のシフォンケーキをぱくっと1口で食べてしまった。
「うん、美味いじゃないの！　なんつうか……あったかい味のするケーキだねぇ～。俺、好きだなぁ。丸ごと食いたいくらいだ。ありがとな、姫さん……と、旦那。旦那？」
ハクちゃんはシフォンケーキにぐさっとフォークを突き刺して、ぐりぐりと生クリームに押し付けていた。
あわわ、そんな風にしたらせっかくのふわふわ感が台無しだよ！？
「食え」
「え？」
あ～んじゃなく、食えって言った！？
「ハクちゃん？」
ふわりと浮いたハクちゃんが、カイユさんに捕獲されたジリギエ

君の口元にシフォンケーキを差し出した。
私に言ったんじゃないのね、びっくりしたぁ～。
ジリギエ君はぴたりと鳴き止み、固まってしまったように動かなくなった。
宝石のような緑の瞳が突き出されたケーキと、それを突き出している白い小竜を交互に見た。
「食え」
ハクちゃんはジリギエ君の口を左手でぱかっと開けて、シフォンケーキを突っ込んだ。
「美味いか？　幼生よ」
ハクちゃんはフォークをくるくると回しながら、言った。
「お前は我のりこの＜竜騎士＞だ。たくさん食い、強くなれ。四竜帝共を討てるほどにな」
ジリギエ君がごっくん、とケーキを飲み込む音がした。
「旦那ぁ。あんた四竜帝と戦争でもおっぱじめるつもりっすかぁ～！？　まあ、確かにそいつは強くなりますよ、なんたって俺とカイユの子ですからねぇ」
ダルフェさんが楽しげに、とんでもないことを言った。
「ああ、そうだ！　そのうち俺らで、世界征服でもしますか？　とりあえず、セイフォンぶっ潰してのあの皇太子君を血祭りにしましょうやぁ～！　ははははっ、想像するとかなり面白いっすねぇ～！
舅殿も連れて、派手にやっちまいましょうぜぇ！」
ダ、ダルフェさん？
ひょぇ～、そんな物騒な事をなんでとっても楽しそうに言っちゃうのですぅ！？
今のは悪の手下が、親分さんの前で言うようなセリフでしたよ？
「まあっ。それ、良い考えだわ。私も賛成よ？　父様も喜ぶわ。あ、セシーは私の獲物よ。あの糞生意気な女はこの手で……うふふ」
カイユさん！？
賛成しちゃうんですか！？

しかも、それじゃまるで悪の組織の女幹部のようですぅ～！
ああ、指をぽきぽきしないでぇ～、洒落になんないよぉ！
「ふむ。我は別にかまわんが……りこはどうしたい？」
ハクちゃん、なんで私にふるんですかあぁぁ！？
そこは即、否定すべきでしょうが！
今の会話、まずいでしょう！？
このままじゃ私達、完全に悪役……世界征服を目論む魔王様御一行（しかも子連れ）になっちゃうじゃないですかー！
「世界征服なんて、そんな暇はないよ！　ひ……引越し準備しなきゃ、引越し！　皆で大陸間大移動なんだよー！？」
言ってから、自分のお馬鹿加減に泣きたくなった。
皆は冗談で言ったのに、つい……だって、ダルフェさん達が妙に生き生きして言うんだもの。
ちょっとだけ‘マジですか、そりゃいかんでしょう！？’って本気で思ってしまった。
「ぶ……ぶはっ！　暇がないから世界征服計画中止かよ！？　さすが俺の【娘】だなぁ～……あはははははっ」
ダルフェさんが噴出きだして、笑いが止まらなくなって。
そんなダルフェさんの頭にカイユさんが拳骨を落として。
ハクちゃんが‘りこ、あ～んだ。あ～ん’と私にケーキを差し出して……。
賑やかで、楽しい時間はあっと言うまに過ぎてしまった。
大きな窓から入ってくる光が、部屋をオレンジ色に染め始めていた。

ハクちゃんが着替えに行ってる間、私はカイユさんのお膝で丸くなって眠る弟の姿に見入った。

本当に、かわいい子……姉様は君にめろめろでございます。
「しばらく起きねぇな、こりゃ。旦那が離れたから、一気に気が抜けちまったんだなぁ。ハニー、俺がジリを部屋で寝かせてくるよ」
ダルフェさんは両手でそっとジリギエ君を抱き上げ、私にウインクして居間から出て行った。
「うふふっ、かわいかったな」
あ、男の人がいないから……よし、質問しちゃおうっと！
こういうことは、やっぱり女性同士が話しやすい。
「カイユ、あのっ。私も早く子供が欲しいなぁって思ってるの。私は人間だから、そのっ……頑張れば2～3人は産めるの？　人間と竜族の間の赤ちゃんって、どちらで生まれるの？　この際言っちゃうけど、実は生理が……カイユ？」
カイユさんは私を見ていなかった。
私の……後ろ？

「……ヴェルヴァイド様っ、なぜです！？」

着替え終わったハクちゃんが立っていた。
いつものように漆黒の服。
そしてなぜか。
外套を持っていた。
銀色の毛皮のついた、黒に見間違えそうなほど濃い紫の……おでかけですか？
あ、私のコートも持ってる……。
私もお出かけってこと？
「あなたは……まだ言ってなかったんですか！？」
カイユさん、急に怖い顔して……どうしたの？
ハクちゃんが何かした？
「私、トリィ様はもうご存知なのかと。だから私……あぁ、なんてこと！？　ジリギエをその腕に抱いて、母になれると夢をみさせて

……後で……トリィ様がっ、この子が妻として女としてどんなに辛いかっ！」

何の話しているの？

「ヴェルヴァイド様、なぜなんです！？」

どうしてハクちゃんを怒るの？

「人と竜の間にはっ……なぜ言って……教えてさしあげなかったのですかっ！？　なぜ伝えなかったのですか！　まさか……人間であるこの子に、蜜月期の雄として交尾を要求したのですか！？　私は蜜月期は繁殖期間だとこの子に教えましたっ……子孫を残す為の期間であると……雄は子を得る為に雌を強く欲するのだと……」

人と竜。

それって。

私とハクちゃんの事だよね？

「つがいである貴方が……この子の夫である貴方が言うべきことだと思ったからっ！　だから、だから私はあえて口にしなかったのに！　貴方がこんなにも酷い仕打ちをこの子になさるのならば、私が最初から全て……‘全て’を話すべきでしたっ！　子供が出来ないことも含めて全部っ……！」

赤ちゃん。

ハクちゃんの子供。

コドモガデキナイ？

「カ……イユ」

こどもができない？

子供が出来ない！？

「カイユ……な、なに言ってるの？　私、カイユの言ってることの意味が……あ、あれ？　聞き間違い……」

そうだよね？

違う、そんなはずないもの。

「あ……カ……カイユ、カイユ！　ハクちゃんを怒らないで！　……いつだって、すごく気をつけてしてくれてるの。私は大丈夫だから安心して……あ……そうだ、カイユ！　私、生理がきてないの。ちょっと早いけど……支店で妊娠したのかもしれないし！　お医者様を呼んで、調べてみたいの。まだはっきり分からない状態かもしれないけどっ、一応……」

私の言葉に、カイユさんは水色の眼を見開いた。

晴れ渡った冬の空に、私の顔が映っていた。

あ。

変な顔。

何、これ……口元が歪んでる。

ああ、今の私はなんてひどい顔してるんだろう。

こんな顔、したらだめ。

ハクちゃんが心配しちゃう。

笑え、私。

笑いなさい、りこ！

「……ありえませんわ」

なんで？

なんで否定するの？

そんなことカイユに……【母様】に言われたら、笑えなくなっちゃうのに。

「おね……お願い、カイユ」

私はカイユさんにしがみ付いた。

アオザイに似た衣装はシルクのようになめらかな生地で、しっかり掴まらないと……今の私のこの手では、するりと滑り落ちそうだった。

「カイユ……カイユ。お医者様を呼んでよ、お願い！　あのね、私……カイユがいない間……ハクちゃんと……身体に負担がかかるから毎日したらいけないって、ちゃんと断りなさいってカイユに言われてたけどっ！　ご、ごめんなさいっ。でも……だって、だって……赤ちゃん、早く欲しかったから」

自分の声が、他人の声のように聞こえた。

「ごめんなさい。私が悪いの……ハクちゃんに、私がお願いしたの……」

手が、震えていた。

足に力が入らなかった。
立ってられなくて、両膝を床についてしまった。
「ハクちゃんは子供の話をしなかったけど、内心は早く子供が欲しいんじゃないかと思って……竜族は結婚したら子供が……だから、だから私……人間の私……ダルフェと同じで時間が……だから……急がなきゃって……」
どうしちゃったの、私……。
身体、変。
誰かが私の心臓を、がんがんと叩いてる。
頭の中がぐちゃぐちゃのばらばらで……気持ちが悪い。
なに、これ？
助けてカイユさん、カイユ……！
「カイ……カイユ！　あぁ、私……生理が遅れて……そうよ、私は赤ちゃんが出来てるかもしれない……は、早く……早くお医者様、お医者様に診てもらわなきゃっ！」
大変。
お腹に赤ちゃんがいるかもしれないのに。
ハクの赤ちゃんが。
私の赤ちゃんが。
いなくなちゃう。
いなくなっちゃう？
赤ちゃん、いなくなっちゃう！
「トリィ様？　しっかりして……しっかりなさい！　どうか、カイユの話を……母様のお話を聞いてちょうだいっ！　とても大事な事なのよっ！？　人間をつがいにした竜はっ……ぐっ！？」
ハクちゃんの左手が。

カイユさんの首を正面から掴んだ。
「黙れ、カイユ。それ以上は許さん」
私の肩を掴んでいたカイユさんの手が離れ、ハクちゃんの手の甲に爪を立てた。
「なにし……や、やめ……ハクちゃん、やめてぇ！　カイユを放し……！？」

カイユさんが消えた。

転移だ。
転移、させちゃったんだ。
なんで？

「カイ……ユ。どこに？」

ハクちゃん、なんで？

支えを失った私の身体は、そのまま床に吸い込まれるように……
濡れたハンカチみたいにぺたりと落ちた。

「……りこ、おいで」

私に差し出された右手。
大きくて、優しくて……大好きな貴方の冷たい手。

「我の手をとれ、りこ。塔に夕焼け観に行こう……約束したろう？
また連れて行くと」

大好きなのに。
私はその手を、とれなくて。

「さあ、我と行こう？　急がねば陽が沈んでしまう」

震えの止まらない手を、ハクちゃんの視線から隠したくて。
強く握って、自分の胸に押し付けた。

「きょ……今日……行か……」

お祝いのお茶会だった。
お母さんに習ったふわふわのシフォンケーキで。
昨夜、貴方と2人で作ったケーキで。

「い……行かない。今日は塔には……行かない。ジリギエ君が起きたら、また抱っこさせてもらうの……」

そうよ、今日はお祝いだもの。
ジリギエ君……竜族の赤ちゃん。

「抱っこ……？　りこはあの幼生が、人間共が蛇獣と蔑む異形がそんなに気に入ったのか？」

異形なんかじゃない。
あの子、とっても素敵よ？

竜族の赤ちゃんは、宝石のように綺麗だった。

「ハクちゃん……カイユは？　カイユをどこにやったの！？　ここへ戻してよ……お医者様を呼んでもらわなきゃだし……まだケーキ、残ってる。お祝いなのに……だから……だって、ケーキ……ダルフェとジリギエ君と……皆でお祝いの続きしなくちゃ……ケーキ……

ハクと作ったケーキだから……」

皆がいる、あの優しい場所に帰りたい。
温かいお茶と、ふわふわのケーキ。
カイユさんの……【母様】の澄んだ微笑み。
ダルフェさんの……【父様】の明るい笑い声。
口の周りの生クリームを一生懸命舐める、ジリギエ君の……【弟】のかわいい仕草。
私の膝にちょこんと座って、短い手足をにぎにぎする貴方……私の【夫】。

怖いことも、辛いこともない穏やかな時間。
あそこは。
あの場所は。

「そうか。では、夕焼けでぇとは中止だな」

貴方が、用意、してくれた、私の世界。

「ふむ……りこ。先ほどのカイユが言っていた件だが」

だめ、言わないで。

ハクちゃん、私が聞きたくない事を言うつもりでしょう？

お願い、言わないで。
後で聞くから。
今はやめっ……！

「竜族と人との間に、子は出来ぬ」

ハク。
貴方は竜で、私は人間。

「我とりこの間に、子は出来ぬのだ」

愛してる。

氷のように冷たくて、お日様のようにあたたかく。

全てを隠す雪のように残酷な。

私の愛しい白い竜。

第７４話

ハク。
貴方は竜で、私は人間。

子供が出来ない？

なによ、それ！？
だめ、そんなのだめよ。

貴方に子供を遺してあげなきゃなのに。
私が貴方にしてあげられる、たった一つの……。
「ハ……ハクちゃん、ハク、ハク！　ねえ、体液で身体のことがいろいろ分かるって前に言ってたよね！？　わ……私っ、もしかして妊し……」

私、貴方の子供が欲しい。

「りこの体液に妊娠の兆候などない」
ハクちゃんは持っていた外套を無造作に床へ放り投げた。
いつもはお行儀が悪いよと注意する私だけれど、今はそれどころじゃなかった。

子供。
ハクと私の赤ちゃんのこと。

私は家族を失った。
でも、この世界で新しい家族を作れる……家庭を持って、家族を作る。
そう考えていた。

私とハクと子供達。
ハクの子供なら女の子でも男の子でもとってもかわいくて、美人さんにきまってる。
何人だって……ハクが欲しいなら何人だって、頑張って産んでみせるって考えていた。
子供達に囲まれた賑やかで楽しい毎日が……幸せな日々が待っている。
そう思っていた。
思い込んでいた。
「で、でも！　わ、私は異世界人だよっ！？　この世界の人間じゃないんだから、可能性があると思う！　私だったら妊娠出来るかもしれないっ……ね、そうでしょうハクちゃん？」
時間がないの。
私は人間だから。
人間の私が、竜族の貴方と一緒に過ごせる時間は何年？
５０年？
６０年？
それとも、もっと……短いの？
「諦めないで、２人で頑張ろう！？　何かいい方法が見つかるかもしれないし……すぐには無理かもしれないけれど、いつかは貴方の赤ちゃんがっ！」
貴方にとって。
きっと、それはとても短い時間だから。
「人間が竜の子を産む【方法】など……存在せん」
ハクちゃんは床に座り込んでしまった私を見下ろしながら、顔に

流れ落ちる長い前髪を鬱陶し気に左手でかき上げた。
「人間と竜は、種としてかけ離れすぎているのだから」
ハクちゃん、なんで？
なんで、なんで……そんなこと言うのよ。
一緒に頑張るって、言ってくれないの？
カイユさんと同じように、夫である貴方まで……可能性を否定するの？

「我にはりこに、我の子を産ませることはできん」

いつも無表情な貴方だけれど。
こんな時まで、そのままなの？
ちっとも辛そうじゃない、悲しそうじゃない。

なんで貴方はそんなに冷静でいられるの！？
私を愛してるって言ってたじゃない！
私に自分の子供を産んで欲しいって思わないの！？

私との間に子供が出来ないんだよ！？
蜜月期は、子孫を残すためのものなんでしょう？
貴方は蜜月期だから、子供がすごく欲しいから……だから私を……。

「我がりこを孕ませる事は無い。何度身体を繋げても、どんなに深く交わろうとも」

子供がいれば。

「子はできん」

私がいなくなった後。

「や……やめてよ。なんで貴方までっ……！」

子供は私が貴方を愛したと……貴方が、りこ、を愛してくれた証になるって思ってた。

りことハクが、愛し合ってたと。

「りこ、りこよ。何故、そのような顔をする？」

子供がいれば、その子がまた命を繋いで……。

そうすれば。

長い時間を生きる貴方が私のことを、忘れたりしない……忘れることができないって。

遺された血が、ずっと貴方を私に……。

「泣くな、りこ。そのように泣かないでくれ、悲しまないでくれ。我がそばにいるだろう？　子などいなくとも、我がずっとりこといる。りこには我が……」

「嫌！」

ハクは長身を屈め、私を覗き込むようにして真珠色の爪を持つ指先をゆっくりと私の顔へと……その右手を、私は両手で払い落とした。

音がするほど強く払っていた。

「私に触らないで！　私は子供が欲しいっ……私には子供が必要なの！！」

その音で、自分がハクの手を拒んだのだと知った。

私、今……ハクに……ハクを拒んだの？
嫌って……触らないでって……今のは私の声よね？
「あ……わ……た！？」
ハクからそむけていた顔を上げた。
金の眼は、私を見ていなかった。
ハクは払われた自分の右手を見ていた。
綺麗な爪を持つ長い指。
陶器のようなきめ細かい白い肌を持つ甲に、うっすらと赤い筋が2本。
血は出てないけれど……。
あ……さっき、私の爪が！？
「ハクちゃっ……ごめ……な……わ、私が……」
私に傷つけられた手から視線を動かさず、ハクは呟くように言った。
いつもはっきりと物事を口にする彼らしくないそれは。
初めて聞く小さな声だった。
「りこは……子が欲しいのか……そんなにも、必要なのか？」
必要？
子供が必要？
「あ……わ、わたっ……しは！」
子供は。
血は。
愛しい貴方を私に縛り付けるための。

永遠の鎖。

私が死んだ後も。

ハク。
貴方を私から逃がしたりしない。
私は貴方を離さない。
「わ、私……あああぁっ！　私、私……私!?」
気がついた。
知ってしまった。
醜い本心。
「……そうか」
怖がりで寂しがりやの貴方を独りにしないためにも、家族を作ってあげたかった。
その気持ちは、想いは嘘じゃない。
でも、どこかで。
「りこは……りこは【子】が欲しかったのだな」
子供という存在を、利用しようとしていた。
「……我だけでは、足りない、のだな」
私に傷つけられた手を見たまま、そう言った。
流れ落ちてきた真珠色の髪が、私からハクの表情を覆い隠してしまった。
いつもだったすぐに、大きなその手でかき上げる貴方なのに……。

「ちがっ……私はっ！」

違う。

そうじゃないの。

ああ、私は貴方になんて言えばいいの？

言えない。

きっと、嫌われちゃう。

絶対に軽蔑されるにきまってる。

貴方に嫌われたくない。

だから、言えない。

私、ずるい。

私の心。

なんでこんななの？

この世界に来てから、どんどん真っ黒になっていくみたい。

ああ、そうじゃない……きっと元から真っ黒だったのに、それに気がつかなかっただけ。

綺麗な貴方には見せられない、知られたくない。

私は貴方につりあうような人間じゃないって、嫌ってほど分かってるから。

せめて心だけでも、貴方が好きだと言ってくれる‘綺麗なりこ‘になりたいのに。

言えない、言えないの。

私の本当の気持ちを知ったら、貴方に嫌われるかもしれないから。

怖くて、言えない。

「なるほど。りこは子を得る為に、我と交わったのか」

違う！

「ハク！　わた……しはっ」

違うよ、そんなんじゃない！

好きだったから、したの。

好きだから。

「私……あかちゃ……子供……だ、だって……だって！」

自分でもおかしいんじゃないかと思うくらい、貴方が好きだから。

私だけのハクでいて欲しかったから。

だから、子供が欲しかったの。

「りこは」

あぁ、私は……あなたに＜りこ＞を、遺したかったのかもしれない。

「孕ませられぬ男が夫では、さぞかし不満なのであろうな？」

「ふ……不満？」

何言ってるの！？

不満なのは、ハクのほうなんじゃないの？

竜族の本能を抑えて接しなきゃ、壊れちゃうようなやわな身体の私が奥さんで……貴方は我慢してばかりだった。

それが、とても申し訳なくて……自分が人間だということが、辛かった。

竜族の女性になりたかった。

カイユさんみたいな、竜族の妻になりたかった。

「りこ」
ハクは膝をつき、私へ腕を伸ばした。
異様なまでにゆっくりと……。
その手は、いつものように私を抱きしめるために動いたんじゃなかった。
ハクは私の腹部に白く大きな手を添え、身を屈め……両手の上に、自分の額をあてた。
私からは彼の表情は、全く見えなくなった。
「りこ。この胎に……」
彼が喋ると微かな振動がお腹の中に伝わってきた。
まるで小さな小さなハクの分身が、私の体内で同時に喋っているかのような……不思議な感じがした。
「異界人であるりこが、この胎に赤子を得る方法はある」
え？
私、妊娠でき……。
「生殖能力のある人間の男に抱かれれば良い。りこは異界人だが、この世界の人間とのかけ合せは可能だ」
なっ……！
「城を出て街に行き、そこいらにいる人間の男共と交われればいい」
ハ……ハク！？
「つがいにのみ強い執着を見せる竜族の雄と違い、人間の男は金銭を使ってまで女を欲しがる者も多い。娼館の前をうろつく輩に金は要らぬからと声をかければ、短時間で数人の男は集まるだろう」
独占欲がとんでもなく強いハクが。

「我以外と、交われば良い」

貴方がそんなこと言うなんて。

「竜族の我と違って、りこの望みどおりに孕ませられる人間の男となな」

ハクが私の腹部から顔を上げ、私を見上げた。
その動きにあわせて緩やかにうねる髪が流れ、金の眼が露になった。

透明感の全く無い。
黄金の瞳。

「簡単なことだろう？」

ハク。
今の貴方の眼。
作り物みたい。
まるで、黄金で作った宝飾品のように綺麗。
とても綺麗。
でも、その眼差しは。

私を内側から凍りつかせてしまいそうななほど……冷たい。

そんな眼で私を見るなんて……。
こんな眼で、私を見ることが出来たなんて知らなかった。

私なんかを奥さんにして……もしかして、後悔していたの？

だからそんな酷いことを言うの？

だからそんな眼で、私を見るの！？

「ハ……ハク……？」

私はもう、違うの？

私はもう＜我のりこ＞じゃないから？

「な……何言ってるの！？　わ、私は貴方以外となんてできなっ……」

私を。

私を嫌いになったの？

私を、捨てるの？

「そうか？　そんなはずはないと思うが……蜜月期だろうが、我は他の女ともできるぞ？　我は普通の竜族とは少々……かなり違うからな。今までだってそうだった。女なら誰でも……美姫だろうが醜女だろうが、我は全く気にならん」

他の人……女性なら誰でも？

蜜月期の雄竜はつがいのことだけ盲目的に愛するんだって……カイユさんは私に、そう教えてくれたのに。

普通の竜族じゃない貴方は、私……つがい以外が相手でもかまわないってこと？

蜜月期の強い欲求を満たしてくれるなら、私じゃなくてもいいの！？

「う……うそでしょ？　そんな……そ……ぁ」

なんで……どういうこと？

「嘘？　我が嘘をつく必要など無い。ふむ……証拠が必要なら、りこの目の前で試してもかまわんぞ？　幼女だろうが老婆だろうが、りこの望みの女で試してやろう」

竜族はつがいの相手だけをずっと、たった1人だけを愛するんだ

ってカイユさんに聞いてたのに。
ハクが他の竜族とはいろいろ違うっていうことは、特異な存在だっていうのは分かってた。
でも、でも……！
「なに言っ……目の前？　証拠？　や……やめ……てよ、やめてぇ！」
私は自分の両耳を手で塞いだ。
ハクの声が聞こえないように強く、強く……もう聞きたくないっ！
「や……やめて……。も……わた……無……理」
いつだって、貴方は優しかった。
他の人には冷酷なところが確かにあった、乱暴で残酷な行動をとることもある人だと知っていた。
でも。
私には。
私には、優しかった。

それが、とても嬉しかったのに。

独占欲を隠さず示す姿に、こんな私でも貴方に愛されてるのだと安心できた。
自分に自信が無い私にとって貴方のその束縛は、心地良いほどだった。
私は貴方に強く愛されているのだと、感じられたから。

なのに。
どうして。
どうして？

ついさっきまでは、いつもの貴方だった。
私の膝でご機嫌そうに、尾をゆらゆらしてたのに。

私の頭と心は貴方に粉々に砕かれて。
まるで。
潰れてしまった生卵みたい。

シフォンケーキの試作の時に、貴方が握り潰した卵みたいに。
外側は粉々で、中身はぐちゃぐちゃのどろどろ。

もう、駄目。
駄目だよ、私。

私はこんな世界、来たくなかった。
でも、貴方に会えた。

貴方がいてくれたから。

だから、耐えられた。

貴方が私を捨てるなら。

1人じゃ寂しくて、辛くて。
耐えられないよ。

ハクが私を捨てるんだったら。

私も。
私も＜私＞を捨ててしまおう。

いらない。
こんな私、この世界にいたってしょうがないもの。

「ハ……ク。わた……しを」
約束したよね？
私が死んだら、この身体を食べてくれるって。

私。
貴方から離れたくないの。

もう、これしか……ないのかな？
「私を……こ……きゃっ！？」
ハクの手が私の手を耳からはずし、そのまま私を乱暴に引き倒して頭の上で両手首を片手で押さえ込んだ。
「ハ……？」
それは私にとってあまりに衝撃的で……強い力で掴まれた手首の痛みも、テラコッタの床の硬さも感じなかった。
触れ合うほど側にある冷たい美貌から顔をそむけようとしたら、大きな手で顎を掴まれた。
私へと流れ落ちてきた真珠色の長い髪が、私の視界からハク以外を奪った。

「聞け。そして我を見ろ」

肌に触れる吐息は、真冬の温度。
私を凍えさせ、動きを奪う。

見下ろす金の眼は、真夏の太陽。
私を熔かし、焼き尽くす。

「ハ……ク？」
手首を押さえつけていた手が……顎を掴んでいた手も、私の身体をなぞるようにして移動した。

両手を私の首元からゆっくりと這わせ、大きな手で優しく優しく……私のお腹を撫でた。
ハクは顔を寄せ、服の上からそっと口付けた。
「貴女は我のりこだ」
まるで、そこに我が子がいるかのように。
居るはずの無い赤ちゃんを慈しむかのように。
何度も何度も、口付けた。
「我だけの、りこだ」
我のりこ？
ハク。
ハク！

ああ、この人は。
まだ私を……愛してくれている？
「ハ……ク、ハク！　私っ」
私の言葉を遮ったのは。
愛しい人の、艶やかな声だった。

「我はこれより、この世界の男を殺し尽くす」

な……に？
今、なんて？

「赤子も子供も……老人も、全ての男を＜処分＞する。貴女は我のつがい。この身体は……心も全て我だけのものだっ！　……他の者には渡さないっ」

処分？

「男を殺し尽くせば人間は絶えるが、我は一向にかまわん。竜族を残せば良い。りこは何も心配いらぬ。茶も菓子も、花も衣装も溢れるほどに竜帝共に用意させよう」

人間が……絶える？

「我が留守の間、カイユ等と待っていてくれ。あの幼生と遊んでおればいい……四大陸全ての男を殺し尽くすには、我とて数日はかかるのでな」

ハクは私を抱き上げて、ソファーに座った。

私を自分の膝に座らせ、乱れてしまった私の髪を手で梳き……撫でた。

まるでお人形を可愛がる小さな子供のように、満足げな笑みを浮かべていた。

「うむ、良い考えだな。我は少々賢くなったのだ……りこのおかげでな」

この表情は、違う。

彼は【笑って】はいない。

逆。

これは、支店の屋上で見た、貴方、だ。

「あ……なに言っ……」

ハクは冗談を言ったりしない。

本気だ。

これは本気で言っている。

この人には、それを実行する力がある。

「だっ……駄目っ！　や、やめて……誰も殺さないで！」

私の汚い心を隠すための嘘で、たくさんの人が死ぬ？

私のせいで？
「聞いて、ハクっ！お願い……聞いてっ！」
私はハクの胸に、握った両手を押し付けた。
自分の爪が手のひらに食い込むのを感じた。
「言うからっ！　もう、隠さないから……言うからっ……！」
言わなきゃ、駄目だ。
大変なことになる前に、取り返しがつかない事が起こる前に！
「違うの！　子供が欲しかったのはっ……私はっ！」
本当の気持ちを、暴かれた心を。
私は、貴方に差し出すしかない。
「あ……なたを、ハクをっ」

お願い。
嫌いにならないで。

「りこ？」

知られたくなかった、こんな私を。
こんな私だけど、嫌いにならないで！

「ハクを私に縛り付けるために、私には貴方の赤ちゃんが【必要】だったのよ！」

私の髪を撫でていたハクの手が、動きを止めた。

第75話

ハクの手は、動きを止めたままだった。

ハクの膝から降りるべきだ、私はそう思った。
降ろされる前に、自分から降りた方がいいと思った。
思ったけれど……思っただけで、降りる気にはなれなかった。

ハクに、触れていたかった。
少しでも長く、この人の側にいたかった。
「驚いた？　……騙されたって、思ったんじゃない？」
私は、目を瞑った。
今のハクがどんな表情をしているか、見たくなかった。

怖い。

見れない。
貴方の顔を、眼を見ることができない。

怖くて、見れないの。

さっき、知ったから。
貴方があんな眼で私を見ることができるんだって、知ってしまったから。
「ハク。私は……」
ハクは私に触れたくないから、自分の手で払いのけないでいるの

かもしれない。
さっさと降りろって、ここから出て行けって思っているのかもしれない。
こんな女、もう触りたくないよね？
でも。
あと少しだけ、我慢してほしい。
「私……ハクが……貴方が欲しかった」

とうとう、言ってしまった。
汚い本心。

「こんな世界、私は来たくなかったんだもの。……無くしたものの変わりに欲しいものを手に入れたって、いいじゃない？　勝手に連れて来られて、帰れなくて……家族も何もかも、全部捨てなきゃならなかったのよ？」

ばれてしまった。
醜い心。

「幸せになりたいって思って、なにが悪いの？　帰れないんだから、ここで幸せになるしかないのにっ……私がここで見つけた‘幸せ’は貴方だった」
ハクといられるなら。
ハクが私を必要としてくれるなら。
貴方が愛してくれるなら、帰れなくてもいい。

失ったもの全てより、無くしたもの全部より……貴方が欲しいから。

「私が死んだ後だって、他の人に渡したくないっ。ハクが他の誰か

を愛するなんて、嫌なの……許せないっ」
心の隅っこに溜まって……日々増していった真っ黒な想いは、一度流れ出したら止められなかった。
「ハクは私になんでもくれるって、世界だってくれるって言ったよね……あれは嘘なの？　誰にでも……今までの恋人にも言ってたの？」
こんな言い方、したくないのに。
「なによ、なによ……貴方のあの言葉はなんなのよ…嘘吐きっ、ハクの嘘吐き！」
貴方を責めるような、こんな……っ！
「嘘じゃないならなら……貴方を私に、全部ちょうだいよっ！」

ああ、私って。
最悪。
最低。

ハク。
ごめんなさい。
私。
綺麗に別れてあげるには、貴方が好き過ぎた。

「りこ」

貴方の声。
初めて聞いた時、とってもびっくりしたっけ。
可愛いちび竜の貴方の姿からは、全く想像できない、声、だったから。

まだ。
名前、呼んでくれるの？

りこって名前、あんまり好きじゃなかったけれど。
貴方のおかげで、好きになった。
大好きになれた。

「子が欲しかったのは、必要だったのは」

大好きで、愛してるのに。
愛していたから。

私は。
子供という鎖で貴方を繋いで。

「我を捕らえるためか？」

貴方を永遠に……＜りこ＞という檻に閉じ込めようとしていたの。

「……そうよ」

私の愛し方、間違ってるんでしょう？
愛ってもっと、綺麗なものなんでしょう？

どうして私の愛は、こんななのかな？
想像してた……憧れてた‘愛’と、ぜんぜん違う。
「そうよっ！　わ……私は、貴方の子供を利用しようとしてたのよ！」
私は。
貴方が欲しかったの。
「最低でしょう？」
今の貴方も、私のいない未来の貴方も。

「……軽蔑したよね？」

貴方を、独り占めしたかった。

「は……あははははっ。私って、嫌な女でしょう？」

ばれちゃった。

「つがい……もう、くび決定だね」

もう誤魔化せない。

「私から貴方の竜珠……取り返したいよね？」

酷い女だって、貴方にばれちゃった。

貴方とあたたかい家庭を作りたかった。

ハクに寂しい思いをさせたくなかった。

大好きな貴方の赤ちゃんが産みたかった。

本当に……この気持ちは、嘘なんかじゃないの。

好きな人の赤ちゃん、産みたかったな……。

「あはっ……さっきの、無しね。こんな私なんか食べたら、ハクちゃんが食中毒になっちゃう」

ごめんね、お母さん。

お母さんが望んだようには、なれなかったみたい。

りこ、幸せになるのよって……結納の日に、涙を浮かべて言ってたのに。

ハクがいない未来に、私の‘幸せ’は無いの。

ここには……この世界にはもう、私の居場所なんか無い。

「と、とりあえず……私、ここを出てセイフォンでお世話になろうと思う。生活はダルド殿下が保障してくれ……んひゃっ！？」

ハクが私の両方の耳たぶを無言でつまんで、軽く下にひっぱった。
感情が昂ぶっていたせいか、体温が上がっていたらしく……今の私には、そこに触れたハクの指先がいつもより冷たく感じた。
「……はぁ」
同時に溜め息が……えっ!?
「貴女のこの可愛らしい耳は、飾り物なのか？」
ハク？
耳が何……？
「この耳に我の言葉は、我の声が聞こえていなかったのか？　今まで何度も言ったと思うのだが」
指先で耳の内側をなぞるようにしながら……ハクは自分の額をこつんと、私の額と合わせた。
「ハ……ク？」
冷たい指先と、触れ合った額から伝わるひんやりとした温度。
それはじわりとじわりと皮膚から染み入って……荒れ狂う私の心をそっと、包み込んでくれた。
「ずっと、願っていた……貴女に強く求められたいと。我だけを望んでもらいたいと」

ハクの、願い？

「なに……言って……」

私に……求められること？

「う、そでしょう？　嘘でしょう？　だって私……こんな私、嫌じゃないの？」
私は眼を開けて、ハクを見た。
「嫌？　何故だ？　りこの言う‘こんな’という言葉が、りこのどの部分のことをさしとるのかが我にはよくわからん」

彼の顔を、眼を見たかった。
「ふむ。我のりこは少々記憶力が悪く、そして意外に疑い深い。これでは我はいろいろ心配で、りこを置いて男を根絶やしに、お出かけ、などできぬ。……困ったものだな」
怖い。
とても、怖いけれど。
「この我に溜め息をつかせ、さらに困らせるとは……やはり、りこは凄いな。さすが我の選んだ女だ」
しっかりと見なきゃいけない、そう思った。
「何度でも。何百回でも、何千回でも我は言おう」
ハクの顔を見たいのに。
やっとの思いで眼を開けたのに。
ハクとの距離が近すぎて、金の眼に焦点をうまく合わせられなかった。
「この小さな脳がしっかりと覚えるまで。きちんと理解し、信じてくれるまで」
だから、私は何度も瞬きをしてみた。
そうすれば焦点が合うと思ったから。
なのに。
瞬きするたびに、視界はどんどん歪んでいった。
「我には」
ハクの金の眼は、すっかりぼやけてしまった。
それは……池に映ったお月様のようだった。

「ハクには、りこだけでいいのだと」

昨夜、温室の池を2人で覗いた。
夜行性のナマリーナは、昼間より夜に動くから。
夜のナマリーナを観察することが、すっかり日課になっていた。
心配性の貴方は私が池に落ちたら大変だからと、ずっと私の服を

握ってた。

水面をゆったりと泳ぐナマリーナの大きな身体が、池に映っていた月を揺らしていたっけ……。

「う、そ。うそ……嘘」

都合の良い、幻聴？

私、とうとうおかしくなっちゃったの？

「りこ。我のりこ」

ねえ、ハク。

今夜もまた、２人でナマリーナを見に行ける？

明日も明後日も。

「りこだけだ。貴女がいてくれれば……他はいらない」

私は貴方と過ごせるの？

「でも、でもハク……竜族にとって、子供はとても大切な……。貴方の赤ちゃ……産めなっ……それなのに、私っ」

伝えたいこと、言いたいことが一気に押し寄せてきて、きちんと喋る事ができなかった。

たくさんの言葉が我先にと咽喉に向かったせいで、胸が詰まってしまい息苦しかった。

ひゅうひゅうと……聞きなれない音が、咽喉から出た。

焦れば焦るほど、呼吸がうまくできなかった。

もっとちゃんと喋らなきゃなのに、この大事な時になんで！？

そんな自分が情けなくて……酸素が足りなくて苦しくて、自分の胸を叩こうとした時だった。

「駄目だ、りこ。ゆっくり、息をしてごらん……大丈夫」

ハクの手が私の髪をなで、背中を優しくさすってくれた。

いつもみたいに、いつものように。

私に、触れてくれた。
「う……うん」
貴方に触れてもらえるということ。
それがどんなに幸せなことなのか、私は知った。

私の呼吸が元に戻ったのを確認してから、ハクは話し始めた。
「りこ。異界人であるりこが知らぬのも当然だが、竜族と人間の交配が不可能だという事は周知のことなのだ」
「あ……」
私以外は皆、知っていたんだ。
もちろん、カイユさんも。
誰も私に教えてくれなかったんじゃなく、誰もが私はそのことを知っていると……ハクから説明されてると思ってたのかもしれない。
そうよ……。
貴方は最初から、知っていたんだよね？

人間と竜族の間に子供が出来ないと知っていたのに、私を妻にした。

「人間の寿命は竜族に比べ短い。その分、繁殖への欲求が強いからな……次代へ繋げなければ、種は滅びる。人間の女であるりこが子を産みたいと考えるのは、生物として当たり前のことだ」
知っていて……私をつがいにしてくれたんだ。
私をつがいに選んでくれた、あの時から。
セイフォンで竜珠を私に食べさせたあの瞬間から、彼は子供をあきらめなきゃならなかったんだ。
「つがいになってくれたりこの望みは、なんであろうと叶えてやる。

我は貴女にそう言ったのに」
知っていて。
分かっていて。
私を‘つがい’にしてくれたんだ。
「我はりこに、我の子を与えることはできぬ」
竜珠をくれたあの瞬間から。
「りこが先ほど言ったように、我は‘嘘吐き’なのだ」
貴方は、私を選んでくれてたんだ。
「あ……わた……」
私だけを、選んでくれてた。

私だけを！

なのに。
私は……！

「ご……ごめんなさっ……ごめんなさい！　私、私が……！」
私がこの世界に来なければ、貴方は他の女性と……竜族の女性をつがいにしてたのかもしれない。
私をつがいにしたから、ハクは竜族としての‘普通の幸せ’が……全部無くなっちゃったんだ。
そんな貴方の前で私は赤ちゃんを……ジリギエ君を抱いて、はしゃいで。
子供が欲しいと泣き喚いて。
ずっと子供が出来ないことを言い出せなかった貴方を、貴方の心をまた傷つけた。
酷いことしてしまった。
私はなんて酷いことを、貴方にしていたんだろう。
「ハク、ハク！　わた……ハ？」
ハクの指が、私の唇をそっと押さえて言葉を封じた。

「りこ。我は我が竜で良かったと……りこを孕ませられぬことに、安堵していた」
指はそっと……肌の上を滑るように移動して、私の左の目元からこぼれる寸前の涙を拭った。
「ハク……？」
安……堵！？
「我は、子など要らぬのだ」
ハクは私を囲い込むように抱きしめた。
「こ……子など要らぬって……ハク！？」
私との間に隙間ができないように……まるで私達の間に何も、何者も入り込めないように。
「子が欲しいとは思うことが、我にはできぬ」
縋るように、強く……強く。
「りこは我の……我だけのりこだ」

我だけの　りこ

貴方のその言葉は。
その言葉の持つ意味は……。

ハク、貴方は。

貴方は子供を望んでなかったの？
子供達に囲まれた家庭を夢見たのは、私だけ？

子供が居れば貴方を独りにしなくてすむなんて、私の思い違い？
私に自分の子供を産ませたいなんて考えは……貴方の中には、ほんの少しも無かったの！？
「……ハク。あ…なたは」

貴方は子供を諦めたんじゃない。

「子になんの意味がある？　そのよう存在は、我には邪魔なだけだ」

じゃ……邪魔？

貴方は【家族】を必要としていなかった。

望んでいないんだ。

「りこが我の子を産み、母になったら……りこは子を愛してしまうのだろう？　そうなったら我はどうなるのだ……どうしたらいいのだ？　我はりこしか愛せぬのに、りこは他の者も愛するのか？　それとも子だけを愛し、我を捨てるのか！？」

他の者。

自分の子供を、他の者、と言う貴方。

「幸いにも、人間のりこに我の子は産めぬ。……我はそれがとても、とても嬉しい。貴女が竜でなくて、本当に良かった……我のつがいが人間で良かった。りこも我がおれば子などいらぬのだろう？　ああ、もっと早く言ってくれれば良かったのだ」

貴方の心。

私の想い。

「我はいらぬ心配をしてしまったな。りこもこの世界の女と同じかと思っておったが、違うのだな……りこが異界人で良かった。りこの望みは、我と同じなのだな？　あぁ、カイユの言った通りだ。我とりこは、似ている、のだ」

ハク。

私と貴方は確かに、似ているのかもしれない。

でも、でもね。

私は貴方の子供を愛せる……愛したかった。

「りこの愛は、我だけに……」

あぁ……この人は。

この人は子供を愛さない。
愛せないんだ。

もし、竜族と人間に子供ができたとしたら。
私とハクの子供を、貴方は排除したかもしれない。
＜処分＞してしまうのかもしれない。
躊躇うことなど、一切無く。

自分の血を引く子供を。
私達の子供を。
私の前で、小さな命を踏み潰す。
「ハ……ク。あな……たは」
竜帝さんも言っていた。
貴方は‘違う’んだって。

竜族とも、四竜帝とも‘違う’小さな白い竜。

貴方は独り。
今までも、これからも。
ずっと、独りきり。

「りこ……りこ。我は何でもする、何でも手に入れてみせる。我の子を産ませてやること以外なら」

私が側に居ても、どんなに愛しても。
貴方の心が完全に満たされることは、ないのかもしれない。

永遠に孤独なまま。
自分が孤独だということにさえ、気がつけない……寂しく悲しい

貴方。

それは、なんて悲しい事実。

「りこ、りこよ。貴女が望むなら月に咲くという月雫花を採ってこよう、夜空の星を全て落して貴女に捧げよう」

永い時を生きる貴方の中には、子供を受け入れる【場所】が存在しないのかもしれない。

「りこにこの手を拒まれた時、我は……」

隠していた想いを引き摺りだされるほど、貴方に追い詰められたのは……私。

貴方にあんな事を言わせるほど、追い詰めてしまったたのは……私？

「我を欲してくれるなら……先ほどの言葉が真なら、子が出来ぬことを嘆かないでくれ。子の為に……我以外の為にそのように泣かれると、我はっ……先ほどよりもっと酷い言葉を吐き、惨い仕打ちをしてしまうだろう」

違うの。

私が泣いたのは子供のためじゃない。

貴方には、それが分からないの？

「我はりこを泣かせた。傷つける言葉を、わざと選んだのだ」

何かが床へと落ちて、小さな音をたてた。

支店でも耳にした、不思議な響き。

どこか懐かしいそれは……小学生の時に聞いた、鉄琴の音色のようだった。

「我がりこを、泣かせてしまった。壊れてしまえと、我を拒むなら壊してしまえと……。我は、我が怖い……」

ハクが泣いているのだと分かった。

真珠の涙。

「……泣かないで」

それは貴方自身。

「そんなに泣いたら、ハクの中身が無くなっちゃう」

貴方のかけら。

「ハク……泣かないで」

広い胸に抱きしめられた私からは、ハクの顔が見えなかったけれど。

絶え間なく聞こえてくるかけらの音色が、私に貴方が泣いているのだと教えてくれる。

今、泣くなんて。

私を傷つけることが自分にできることを知り、怖いと泣くなんて。

なんて、ずるい人。

なんて、酷い人。

狂おしいほど、愛しい貴方。

「ねえ、ハク。私も自分が怖いって思うようになった……貴方を好きになってから」

強いのに、とても脆くて。

優しいのに……切ないほどに、残酷な貴方。

「愛って、なんなんだろうね……。この気持ちは、心は……どうな

っていくのかな？」
私が死んでも。
貴方は、私を忘れたりしない。
できない。
きっと、貴方の心には＜りこ＞が残る。
そう、思えるようになったのは。
綺麗で真っ白な貴方の中に……真っ黒な何かを垣間見たから。
深い闇のような、貴方の心。
「ハク。さっきの言葉、そのまま返すよ？　私の言葉、ちゃんと訊いてたの？　すごく長生きしてるみたいだけれど……耳が聞こえないほど、おじいちゃんじゃないんでしょう？」
それは私と同じ。
ううん。
私より深く、暗い……。
「ハク、私は言ったわ。貴方が欲しいって。私は子供より世界より、ハクが欲しかった」
もう逃がさない、逃がしてあげない。
きっと、さっきが最後のチャンスだったのに。
「私には……りこは、ハクだけでいい」
私は貴方を離さない。
「貴方の顔が、見たい。貴方の眼が……私と同じ金の眼が見たいの」
離さなくていいんだって、貴方が教えてくれたのよ？
「……分かった。これでいいか？」

ハクちゃんは私の腰と背中に腕をまわして、少しかがむようにして私から顔がよく見えるようにしてくれた。
「うん、ありがとう。あ……かけら、止まったね。良かった」
ハクは少し眉を寄せ、切れ長の目を細めた。
「りこの白目が、真っ赤だ。目元も腫れてしまったな。我の所為だな」
この表情は他の人から見れば、かなり怖い顔かもしれない。
「その通りです。まあ、私の自業自得が大部分ですけど、ハクちゃんの所為も少しはあるんだからね!?　反省して下さい」
でも、私には、心配、している時の表情だとちゃんとわかっている。
「ふむ……そうだな、我が悪い。こんなに泣かせるつもりは無かったのだ……少々意地の悪い事を言ってしまったようだ。すまなかった、りこ」
「しょ……少々!?」
あれが貴方には少々ってレベルなの!?
ううっ……少々なんかじゃないよ、私にとっては理性崩壊レベルの破壊力だったんだよ～!
「こっ……今回だけは許してあげる!　私も悪かったと思うから。手を引っかいちゃったし、貴方に酷いこと言ったもの。もう二度とあんな悲しいこと、ハクも言わないでね。全部殺すとか……次は、怒るよ?」
とりあえず、そう言ってみた。
うん、次はすご～く怒りますよ、私は。
今回は衝撃的すぎて、悲しさの方が強かったけど。
「お、怒るなりこ!　我はりこに本気で怒られたら、ショックで仮死状態になってしまうやもしれんっ!　我は日々忙しく、仮死状態になっとる暇は無いのだ」
なによ、それ?
どんだけ怖がりなのよ!

あたしゃ、鬼嫁かっ。
「大丈夫よ、もしそうなったらとっておきの‘お呪い’でハクちゃんを、起こしてあげるわ。私の世界では有名で、とっても強力な‘お呪い’なの」
私は真珠色の髪を掴んで、ちょっと強引に引き寄せた。
「お呪い？　りこはまじないに詳しいな。どうやるのだ？」
首をちょっと傾げるハクちゃんの仕草は、私にとってはかわゆさ満載の大好きな姿だけど。
「内緒。秘密です」
ついさっきまで真珠の涙を流していたのに、もうけろっとしている旦那様には教えてあげない。
「ふむ。では、そうなったら‘お呪い’を　頼む。直ぐにしてくれ、絶対だぞ？」

王子様のキスで、お姫様は目覚める。
私はお姫様じゃないし、貴方は王子様なんかじゃない。

「はい。任せてください、旦那様。ハクちゃん、なにがそんなに忙しいの？　私と会ってからお仕事も特にしてないようだし……暇に見えるんだけど」
仕事かぁ。
大陸移動が決まったから、私の就職の件は保留になってしまった。
ハクちゃんの‘お仕事’か……。
＜監視者＞だから世界中に別荘（？）を建ててもらって、おまけに貢がれて……いろんな意味でウハウハ独身ライフを満喫してたわけで。
ん？
そう言えば……おんな、女。
この泣き虫君は、とんでもないこと暴露してなかったかぁああ！？
「＜監視者＞として‘お仕事’はめったに無いのでな。り、りこ。

口元が少々おかしな角度に曲がっておるぞ！？　むむっ、そのだなっ！　我はりこをか……いかん、内緒なのだ。まだ内緒だ。うむ、我も、秘密、なのだ」

挙動不審な動きをする金の眼が、なんかとっても可愛く思えてしまう私は貴方以上に、変、なのかもしれない。

「ふ～ん、秘密なの？　ま、いいけどね」

秘密。

私も、まだあるから。

貴方の秘密も、そのままでいいの。

貴方が私のために、多くの人を殺めると言ったとき。

私の中の悪魔が、歓声を上げた。

私、嬉しいと思ってしまった。

お願い。

もう、これ以上出てこないで……私の中の悪魔。

悪魔（わたし）のキスが、魔王（あなた）を起こす。

第７６話

「ハクちゃん。私、顔を洗ってくる。このままじゃちょっと……」

私はハクちゃんの膝から降りた。

自分から降りた。

さっきと違って、素早くさっさと行動した。

私はこれからも、彼と一緒にいられるのだから……。

「顔を洗う？　なぜだ、もう寝るのか？」

私が降りるとハクちゃんは長い足を組み、ソファーの背に両腕を……ふんぞり返ったその姿は、さっきまでのしおらしいめそめそ君の面影はゼロだった。

切り替えが早すぎです。

でも。

その切り替えの早いところに、私はとても救われているのだと思う。

「違うよ。いっぱい泣いたし、それに……ぐずっ」

鼻をすすった私に、鼻水なんかとは無縁に違いないハクちゃんは……。

「りこ、鼻水が少し垂れとるぞ？　鼻水、りこの鼻水……よし！　責任を取って我が舐めるか！？」

鼻水垂れっ……気がつかないふりとかできないのかな、この人は！

「そういうことは、女性にはっきり言わないの！　しかも、舐めるなんて……ばっちいでしょう？」

やたらなんでも舐めるのは、やめなさ～いっ！

「ばっちい……汚いという意味か？　りこはばっちくない。鼻水が垂れようが、涎が出ていようが我のりこは綺麗で愛らしぞ？　安心

するが良い、りこが鼻水を垂れ流しにしようと我の愛は変わらん」
「あ……ありがとう、ハクちゃん」
そのお顔で鼻水って単語を連発ですか。
しかも微妙に論点がずれてるし……私自身が汚いんじゃなくて、鼻水がって意味で言ったのに。
それがなんで、鼻水垂れ流しにからませての熱烈愛情宣言になるのかな？
なんかこう……複雑な気分というか。
ん？　よだ……！？
涎を垂らした覚えなんか、私にはなーいっ！
「とにかくっ！　私は顔を洗ってくるから。洗顔したらカイユさんのところに行って、２人で謝ろうね？」
「謝る？　はて……何故だ？」
首を傾げるとその動きに合わせて、長い髪が揺れた。
本当に綺麗な髪の毛……なんて言ってる場合じゃない。
ハクちゃんって……ううっ。
しらばっくれてるんじゃなくて、本気で分かってない所が本当に困っちゃう。
「ハクちゃんは、さっきカイユさんの首を絞めたでしょ！？　あれはとってもいけない事なの。怪我してるかもなんだよ！？　私もいろいろ謝らないと……言いつけ、破っちゃったし。あぁ、もうっ！　恥ずかしいこと、いろいろ言っちゃたよぉ～」
あわわぁ、思い出すと脳が沸騰してしまいそう！
「とにかく、あやまっつ……わわっ！？」
温室と居間の間の扉が激しい音をたてて開いた。
私がそこで見たのは……。
「トリィ様！　トリィさ……トリィ、トリィ！　母様が迎えに来たわよ！　母様とお家に帰りましょう！？　離せ、この役立たず！」
カイユさんがダルフェさんに後ろから羽交い絞めにされつつ、上げた右足を下ろす姿だった。

「よ、よう姫さん！　ほら、大丈夫だって俺は言ったろうハニー……ぐがぁあ！　腕抜けたー！！」

扉を蹴って開けたカイユさんが、自分を抑えていたダルフェさんの両腕をぐいっと変な方向にひっぱると同時にダルフェさんがしゃがみ込んだ。

あっけにとられて固まった私を、走り寄って来たカイユさんがぎゅっと抱きしめて言った。

「怪我は無い！？　あぁ、無事で良かった。可哀想に、たくさん泣いたのね……泣かされたのね」

前半はとっても優しい声で、後半はまさにブリザードだった。

水の妖精さんみたいなカイユさんだけど、時々……まるで＜氷の女王様＞みたいな雰囲気に変わる。

セイフォンでもセシーさんやミー・メイちゃんを見る眼は、私に向けるものとはあからさまに違っていた。

その理由を、私は知ってしまった。

カイユさんは、この世界の人間を憎んでいる。

お母さんを裏切った人間という生き物を、嫌悪している……。

「カイユ、ごめんなさい。いろいろ心配かけて、ごめんなさい……母様」

カイユさんの‘思い込み’は出産後も変わらなかった。

かえってひどくなった気がする。

前よりも【自分はトリィの母親】だという意識が、こうしてはっきりと表面に出てしまっている。

「さっき、ハクちゃんが酷いことをっ……！　さあ、謝ってハクちゃ……えっ？」

カイユさんの腕の中で、くいっと顔だけハクちゃんに向けて言った。

さっきまでソファーでふんぞり返っていたハクちゃんは、なんと……。

「な、何やってるの？」

居間の中央で体育座りをしていた。

２メートル越えの大きな身体で、ちょこんと体育座り。

あ、床からちょこっとお尻が浮いてる……。

「ん？　人型でも、ころころ、ができるか、試そうかと思ってな」

ころころ……前転のこと？

なんで今、このタイミングで！？

「あ……後でにして。ころころ実験は、後回しにして下さい。謝るのが先」

「嫌だ。我は今、やってみ……」

「ハクちゃん！　カイユの首を絞めたこと、ちゃんと謝って！」

ハクちゃんはしゃがんだままで、立ち上がる気配は無かった。

そのままの格好で、私を見上げていた。

「……カイユの首を触っ……絞めて、ごめんなさい、なのだ」

ハクちゃんは、上目使いでそう言った。

この上目使い……おちび竜の時とそっくり。

悪役決定みたいな容姿の人型だって、かわゆい小竜と同一人物なんだから動作は何気に似ているのだ。

ちょっと……ふふっ、かなり可愛いかもっ。

そう思ったんだけど。

「ひぃっ……こっ、こえぇぇ～よ旦那！　俺達の心臓、止める気ですかぁ！？　勘弁してくださいよ。ハニー、大丈夫か？！」

両腕を大きく回しながら、ダルフェさんはハクちゃんに抗議した。

「え、ええ。なんとかっ」

カイユさんは軽く頭を左右に振ってから、心配そうなダルフェさんにそう返事をした。

あ……あれれ？　意外と不評みたいです。

ころころ実験を中断し、ソファーに戻ったハクちゃんの向かいにはダルフェさんがちょっと引きつった笑顔で座っていた。
ハクちゃんは相変わらずの好感度ゼロな俺様的態度で、彫像のようにぴくりとも動かない。
作り物のような冷たい美貌はダルフェさんに向けられて、黄金の眼球だけがゆっくりと私とカイユさんを追って動いていた。
「さあ、トリィ様。お顔を洗いましょう。御髪も整えましょうね？」
そんなハクちゃんの視線を綺麗にスルーして、カイユさんは私の手を引いて寝室へ向かった。
カイユさんは歩きながら、そっとハンカチで私の鼻を拭いてくれた。
ううー、情けない。
顔を洗ってから会うつもりだったのにな。

カイユさんはドレッサーの前に私を座らせて、琺瑯の洗面器にお湯を入れてきてくれた。
柔らかな布をお湯に浸し、軽く絞って丁寧に顔を拭いてくれた。
私は小さな子供のようにされるがままで……。
温かで優しい手の感触に、絡まった糸くずみたいだった心の奥がほぐされていく。
「……ありがとう、カイユ」
鏡に映る自分の姿は、なりたかった〝大人の女〟とはかけ離れていた。
涙の後を＜お母さん＞に拭いてもらい、髪を梳かしてもらって…
…すっかり安心したように＜お母さん＞に全てを任せ、甘えている私がいた。

小学生の時の私が、鏡の向こうに見えた気がした。
そんな自分を見たくなくて、眼をぎゅっと瞑った。
「……トリィ様」
洗面器を片付け、私の髪を梳かしてくれていたカイユさんの手が止まった。
こつんという、小さな音。
ドレッサーに置かれたブラシの木製の柄が、そこにあった口紅にあたった音だった。
カイユさんがくれた……ハクちゃんが似合うと言ってくれた口紅だった。
そう言ってくれたハクちゃんの口元にも、この口紅がちょっと付いていて……。
ハクちゃんも意外と似合うねと、私は笑った。
「カイユの前でなら、お泣きになってもいいのです」
貴方とたくさんキスした。
「……貴女は私の娘なのだから。母様の前でなら、いくら泣いてもいいのよ？」
これからも、いっぱいしてもらえる。
こんな私なのに、側に居させてくれる。
でも。
だから。
約束した。
子供の事では、もう泣かないと。

なのに、私は。

「ううぇっ、うう……カイユ、カイ……私は産みたかった！　ハクの……あの人の赤ちゃんがっ」

この涙は、絶対に会えない私と貴方の子供への……さよならの涙。

さよなら。

さよなら、赤ちゃん。

名前をいっぱい考えてた……日本語でこっそり書いていたノートは、暖炉で燃やそう。

1人で夢見た【家族】の未来は、捨ててしまおう。

2人だけの未来で、もう充分だから。

さよなら。

ハクの……私の赤ちゃん。

「あ～あ。泣いてますねぇ、姫さん。こんなときは耳の良さが恨めしいっつうか。旦那、行かなくていいんですか？」

竜族は人間の数倍の聴力がある。

会話の詳細は分からなくても、厚い扉の向こうで姫さんが号泣しているのははっきり分かる。
「行ってどうなる」
「へ？」
かなり、驚いた。
「なんつうか、意外ですねぇ。旦那がねぇ～。子ができねぇって、こんな形でばれちまったこと……後悔してんですか？」
姫さんが泣いてんのに、この態度。
大人し過ぎて、かえって不気味だな。
何があったんだ……旦那は姫さんに、何をしたんだ？
「後悔？　後悔などしたことが無いので分からん。だが、反省はしとるな」
さっき。
旦那はハニーに謝ったんじゃない。
姫さんに言ったんだ。
「反省ねぇ」
竜騎士であるカイユにとって、あれくらいはなんともない。
しかも、あの＜ヴェルヴァイド＞がちゃんと手加減までしてくれたんだ。
でなけりゃ、俺んとこには死体が転移してきたはずだ。
「我は加減を誤った」
だから、俺もカイユも感謝はしても恨んだりはしない。
だが、旦那の想像以上に姫さんはショックを受けた。
‘自分には優しいハクちゃん’がカイユにしでかした事に対し、ショックを受け……悲しい思いをしたに違いない。
旦那はまだ、姫さんを分かっちゃいないんだ。
この人には、永遠に分からないのかもしれない。
「その様子じゃぁ、他にもなんかしちまったんじゃないんすかぁ？」
姫さんを悲しませた。
それはちゃんと分かってるんだな。

「ダルフェよ。お前は＜赤＞に、母親に似ているな」
で、反省か。
「……苛つくほどに」
旦那はそう言って、ほんの少しだけ口元を綻ばせた。
微かな動きなのに。
とんでもなく艶やかで。
目にした者全てが魂まで捕らえられ……恍惚状態のまま、地獄に引きずり込まれて行くような。
＜白金の悪魔＞……＜冷酷なる魔王＞の笑み。
「……そりゃ、親子ですからねぇ」
俺達の部屋に転移させられ、取り乱すハニーをなだめて話を聞いた時。
やられた。
そう思った。
俺はあの人が、子を望んでいないと知っていた。
俺はカイユには言っていなかった……言えなかった。
旦那が＜黒の竜帝＞に言った言葉を、姫さんと同じ女で、母、であるカイユには言えなかった。
竜騎士であるカイユは旦那には逆らえないはずなのに、カイユは支店で旦那に刃向かおうとした。
【娘】を傷つけられた母親としての想いが、あの時は本能を超えた。
だから、言えなかった。
カイユを……アリーリアを守るために。

俺は、カイユにはあの事を喋らない。

「我はお前達を利用する、お前も我を利用する。それでいい」

旦那はそれが、分って、いたんだ。

この人は、やはり恐ろしい。

「お前は自分の大切な者達のために、我を……正確に言うならば我のりこを、利用する。死に逝くお前には＜りこ＞という我を御する……動かせる存在が必要なのだ。ゆえにお前は、りこを裏切らない……裏切れない」

そうだ。

カイユが……アリーリアが望むなら、俺は姫さんの父親を演じきる。

‘2人の子’を持つ＜色持ち＞の竜として振舞う。

＜色持ち＞のつがいであるアリーリアには、‘2人の子’が必要だ。

アリーリアの心を守るためなら、俺はなんだってする。

「……旦那、あんたねぇ」

この人にとって俺達は、駒の1つに過ぎない。

うまく利用され、使われて……動かされている。

どこからどこまでが仕組まれたことで、どこまでが偶然なのか。

「顔に出ちまうほど反省してんなら、もっとそれらしくしましょうや。……あ、鍋使いますか？」

「いらん。ここにある3種の鍋は、どれも反省部屋に適しておらんかったのでな」

あんたは俺等が居ない間に【反省部屋】に入るような事をしでかしたのかぁぁああ！？

咽喉まで出掛かった言葉を、俺は気合で飲み込んだ。

「は……ははは、左様でございますか」

この人。

もしかして。

計算じゃなくて、行き当たりばったりなのかもしれねぇな。

「ダルフェ。ジリギエ君は？」

居間に戻って来た姫さんの顔は、すっかり元通りだった。

涙の跡どころか、泣きすぎて腫れていた目元も……。

再生能力の件は、旦那はまだ話していないようだった。

とっとと言っちまえばいいのに。

さて、旦那はどうする気なんだかなぁ。

「ジリ？　ああ、舅殿が来て見てくれてる。なぁ姫さん、明後日は勉強会の無い日だろ？　街に行こう。俺らも買いたいものがあるしねぇ。……ハニー、もう城から出てもいい？」

セレスティスが言うには、２日程前から間者が見当たらないらしい。

旦那がペルドリヌに残してきた‘脅し’が効いてきたのか、それとも……さぁて、どっちなんだかねぇ。

「そうね……いいわよ。トリィ様、雪が降り出す前に帝都をいろいろ見て回りましょう。貴女を連れて行きたいお店が、私には何軒かあるんです。ふふっ……楽しみにしていて下さい」

「わぁ！　あ、でもカイユはお産後だし、ゆっくり休んでいたほう

がいいんじゃない？」
　旦那の隣に腰を下ろした姫さんは、カイユの袖を右手でそっと引きながら言った。
　この小さな手が手に入れたものは、とてつもなくでかい。
　あのね、姫さん。
　あんたが思っている以上にそれは大きく、とんでもなく重いんだ。
「お気遣いありがとうございます。私はそこの役立たずほどではありませんが、かなり丈夫な方ですから……さあ、これでいいわ」
　ハニーが優しく微笑みながら、温室から採って来た四季咲きの白いナナヌの花を姫さんの髪にさした。
　仕上がりに満足げにうなずいて……あれは＜母親＞の表情だ。
　本当の子であるジリギエを見る眼と、変わらない。
　ブランジェーヌが俺を見る眼と同じ……。

　アリーリアの壊れちまった【心】は、もう治らないだろう。
　母親を無惨に殺され、夫である俺は＜色持ち＞でいつ死ぬかも定かじゃない。
　明日にはぽっくり死ぬかもしれないし、うまくいけば後１００年位は生きられるかもしれない。
　おまけに双子で、当たり前、な子供は……そんな君の前で、俺はっ。
　どんなに、辛かっただろう。

　俺が君を、こんなにも追い詰めた。

　君はずっと、、夫の死にも動じない強い女、であり続けようとするんだろう？
　俺が生きてる間も……死んだ後も。
　俺のために。

なぁ、アリーリア。
寝ている俺が息をしているか、毎晩確かめてるよな？
風呂で湯に沈んで、泣いているだろう？

ごめんな。
俺、知ってるんだよ。

そんな君に、俺はなにをしてやれるんだろうか？

「ダルフェ。街に行ったら、義母様達へのお土産も見たいわね。何がいいかしら……明後日までに調べておきなさいよ、役立たずっ」

ごめんな、姫さん。

俺はあんたを利用する。
遺していく愛しい者達の為に。

あんたという存在を利用する。

だから、その変わりに。
あんたを俺の＜娘＞にしてあげる。

「了解！　よし、姫さん。甲斐性なしの旦那の変わりに、高給取りの父ちゃんがなんだって買ってあげちゃうよぉ？」

俺が、あんたを地獄に落とすのかもしれない。

番外編　～花鎖～　前編

「りこ？」

隣に座った我に寄りかかったりこからは、規則正しい呼吸音……寝たのか。

寝ているのに。

りこの手は、膝に乗せた作りかけの＜花鎖＞を大事そうに持っていた。

この＜花鎖＞は、明日の夜に使う。

春告げの花と呼ばれるクラックの黄色い蕾が、解け始めた雪の間から姿を見せたと観察官から知らせが入った４日後に城で、舞踏会が行われる。

それに参加するために、必要なものなのだ。

気に入りの場所である温室の長椅子で作業を開始し、休憩もせず夢中で手を動かしていた。

昼食後にはじめた＜花鎖＞を編む作業は、すでに2時間。

りこが寝入ってしまうのも、無理はない。

今日の午前に行われた書き取りの試験に備え、昨夜は常より遅い時間まで机に向かっていた。

朝も早めに起床し［お勉強］をしていたのだから。

このまま寝かせてやろう。

カイユが茶を持って現れたら、起こしてやればよい。

試験勉強……それをしている時のりこは、我の相手をしてくれない。

試験勉強は、我からりこを奪う。

我は試験勉強なるものが、嫌いになった。

帝都に移り、3ヶ月。

りこの強い希望により文字の習得に重点をおいた授業が行われ、当初の予定と違い月4回の頻度で試験が行われるようになっていた。

つまり。

試験勉強の時間は、我の想像以上に増えてしまったのだ。

我は試験勉強なるものが、大嫌いになった。

本人には言っておらぬが、言葉は苦労して学ぶ必要性が（我の所為で）あまり無くなっていた。

文字や知識は確かに［お勉強］しなければ身につかぬが……それらが必要な時は、我を頼れば良いのだ。

まあ、我とて世情には疎いが……＜青＞が言うには我はある意味‘箱入り’なのだそうだ。

箱入り？

我は鍋に入ったことはあるが、まだ箱に入った経験は無いのだ。

それはさておき。

りこがそのように苦労し、学ばなくとも常に我が側にいるのだ。

我を使えば良い。

だから試験を失くせ、もしくは減らせ。

我はダルフェに先日、そう言った。

返ってきた答えは、我の望んだものではなかった。

―ああっ！？　餓鬼か！　あんたねぇ……あの子が必死こいて勉強してる理由、分からねぇんですか？

日常生活において、文字が読めぬと不便だからだろう？

先日も調味料を間違えて、慌てておったしな。
それに、魔女に出した手紙が赤字で添削されて帰ってきたのだ…
…魔女めっ！　夫である我は1通もりこからの［お手紙］を、もらったことなどないというのにっ！

そう答えた我に、ダルフェは緑の目玉を天へ向けて言った。

―かぁああっ！　こんな男の嫁さんになって、ほんと苦労すんなぁ～姫さんは。

ダルフェはりこにやる衣装を縫っていた手を止め、絹糸のついた針の先を我に向けて言った。

―俺らがジリを連れて帰ってきて、何日後でしたかねぇ。姫さんがカイユに紙切れ渡して、初めての試験で6点なんて点数とっちまって、あんたに申し訳ないって言ったそうですよ。こんな自分じゃこれからもあんたに恥かかせる、どうしようって……あの子の気持ち、旦那は分かります？

恥？
りこは我の自慢の妻で、宝物だ。
だいたい我は恥などという感覚を持ち合わせておらんので、恥はかかん……かけんぞ？

―あのねぇ～、いっちゃってるあんたと普通のあの子は違うんすよ。異界人だって、こっちの女と同じです……ほんの少しでも、あんたに手が届くように。あの子なりに必死でもがいてんですよ？

手が届く？
出会った時から届いておるぞ？

竜体だとりこのほうが背が高く、腕も長いしな。
もがく必要性皆無だと思うが。

―ふう。まったくっ、困ったちゃんだねぇ……ブランジェーヌがあんたは女にとって最悪な男だって、よくぼやいてたっけなぁ。そのあんたが＜俺の娘＞の男になるなんてねぇ。カイユに会えたし子供もできて……しかも、旦那とこんな会話するようになるなんてなぁ～。運命って面白いっすねぇ？　生まれてきて……産んでもらってブランジェーヌには感謝っすよ、ははははっ！

溜息をついたと思ったら、大笑い……我には理解不能だった。
我が理解したいのはりこだけなので、晴れやかに笑うダルフェは放置してりこの眠る寝台へと転移して戻った。
りこを起こさぬように慎重に枕の下に腕を入れ、ぱじゃまを取り出した。
竜体は腕が少々短いので、結局は肩どころか頭部まで入れることになってしまったが……ふむ、奥に入れすぎたな。
我は独力で、ぱじゃまが脱ぎ着出来るようになったのだ。
ぱじゃまで人前に出てはいけない……どんなに自慢したくともな。
我はちゃんと、りこの言いつけを守っておるのだ。
偉いぞ、我よ！

ぱじゃまを身につけ、帽子を被ってから枕に顎をのせた。
その夜2回目のおやすみの接吻をし、我はりこの寝顔に魅入った。

今日の午前中。
我は試験を受けているりこの正面に座り、書き取りをする姿を……真剣な顔を堪能していた。
当初は竜体で同行していた我だが、最近は人型の日も多い。
２０分程すると、ヒンデリンが現れた。
シスリアとりこに侘びをいれ、＜青＞が我を呼んでいることを伝えてすぐに退室した。
＜青＞は観察官からの知らせを受け、舞踏会の準備で忙しいようだった。
南棟にはこの数日、顔を出していない。
我はりこを堪能中なので行きたくはなかった。
だが。
「いってらっしゃい、ハクちゃん。竜帝さんによろしくね」
と、りこが笑んで言うので……思わず頷いてしまった。
離れたくない、共に行って欲しいという我の‘お願い’は即、りこに却下された。
書き取り試験の最中で‘とっても忙しい’ので、りこは我と同行してくれなかった。
そういえば。
暇なのは我だけだと、ダルフェが言っておったな……我はりこと出会ってから、暇だと感じたことはないのだが。
まあ、確かにダルフェは忙しそうだが……いろいろと。
他人から見て暇人である我は、執務室に転移した。
＜青＞は我に、＜赤＞と決めた移動日程を提示してきた。
「これでは遅い。ラパンの花が咲いたらこの大陸を出る」

我は＜青＞にそう言った。

＜青＞の決めたこれでは、間に合わん可能性が高かった。
りこはベルトジェンガが死ぬ前に、我と会わせたいらしいのだ。
我は会わんでもよいのだが、りこが会った方が良いと言うので会う事にした。
渡された数枚の書類を＜青＞の手に戻しつつ、その顔を見ると。

＜青＞はまた、唇を噛んでいた。

我を見上げる顔に右手を伸ばし、指で唇を食む歯をはずした。

「噛むな。出血しようが、我はもう舐めてやれん」

口は無闇に使ってはいかんのだ。
うむ、我の‘お口‘はりこ専用なのだ。

そう言うと＜青＞は我の手を払い、その場にしゃがみこんだ。
青い髪が床に広がる様は、生まれたての小さな海のようだった。

他の者の眼が無いとはいえ、＜青の竜帝＞が床に丸くなるなど。
＜黒＞が見れば竜帝にあるまじき姿だと怒ったかもしれぬが、これは幼い頃から過去の竜帝達と少々違っておったので我は全く気にならなかった。
我は＜青＞の唇の傷のほうが気になった。
竜帝は自分自身でつけた傷は治りが遅い。
これはりこが気に入っている個体だ。
りこにとっては‘女神のように美しく、綺麗で優しい竜帝さん‘なのだ。

顔に傷をつけたくない。

ふと、脳裏に＜青＞が幼い頃の情景が浮かんだ。
こやつはよく我の背に登り、張り付いておった。
特に不便も感じなかったので好きにさせていたが。
最近はせんな。
ちびのままのランズゲルグだが……一応、成竜になったからか？

「ランズゲルグ。その癖は春までに治せ」

背にくっつく癖同様、この癖も放っておけば自然と無くなるのかもしれんが。
我が去るまでに、治させた方が良い気がした。
頭を抱えるようにして顔を隠していたランズゲルグが頷いたのを確認し、我は南棟へと戻った。

シスリアの試験を終えたりこが、転移して戻った我を微笑んで迎えてくれた。

眠るりこの顔を楽しんでいた我は、その手元へと視線を移した。
花。
りこは花が好きだ。
＜青＞が衣装室に用意しておいた宝飾品を見ても困ったような笑みを浮かべ、自ら進んで身に付けようとする事はなかった。
我のりこは花が好きなのだ。

花を髪に挿してやると、嬉しそうに微笑んでくれる。
色のついた石は見た目は良いが香りが無い、だから花のほうが好きなのだろうか？
花は食えるものもあるが、石は食えんしな。

カイユがりこにと持ってきた、藤籠に溢れんばかりの色とりどりの花々。
これは出荷できぬ規格外のもので、昨夜のうちに城内へと大量に運び込まれ＜花鎖＞用に無料配布されているのだとカイユが言っていた。
温泉の熱を利用して栽培をしているので真冬だろうと、帝都では花の出荷が行われている。
自然界で花々が姿を消す時期に出荷すると、数倍の値になるのだと＜青＞が言っていた。
先代の＜青＞は繁殖実験にのめり込み、散財した。
そのために、後を継いだランズゲルグは幼い頃より金の工面に明け暮れた。
今では金儲け自体が菓子作りと同様に、趣味になっているようだが……。
趣味。
菓子作りを趣味にしとるのは、ダルフェも同様か。
りこに＜花鎖＞の編み方を教えながら、ダルフェが息子を連れジャムと砂糖漬けを作るために雌共に混じって花を貰いに並んでいるのだと、カイユが苦笑していた。
＜花鎖＞は雌が作るものなので、普通の雄は遠巻きに花の配布を眺めることはあっても自らは並ばんからな。
趣味……我の趣味はなんであろう？
ころころか？

「むっ……落ち葉よ、何故我のりこに落ちてくるのだ。りこは我の

妻だぞ、勝手に触れるな」

りこの艶やかな黒髪に、温室に植えられたカヤの葉が1枚。
我はりこを起こさぬように細心の注意をはらい……そっと手を伸ばし、葉を取り除いた。
りこの髪を飾るべきは、作りかけの＜花鎖＞だ。
カヤではない。

雌の編んだ＜花鎖＞でつがいの竜が互いの頭上を飾り、繋がったそれが切れぬように1曲踊る。
切れなければこの1年間、無病息災。
丈夫な種である竜は、めったに病気になどならんのに無病息災とは。
だいたい年1回のダンスに、健康を維持出来るほどの運動量など無い。
つまり、踊る必要性皆無ではないか？
そんなに踊りたいのなら、普段も踊っておればいいのだ。
我のりこを見習え。
りこは健康で長生きするという目標をたて、毎日きちんと体操をしとるのだ。
この我も背を押し、お手伝いをしておる。

胡散臭い＜花鎖＞の舞踏会など、我は全く興味がなかった。
だが、りこは違った。
城の大広間で＜花鎖＞の舞踏会が行われると聞き、自分も＜花鎖＞を作りたいと願い出た。
当初は舞踏会に参加する気は無かったようだが、カイユの勧めでりこは参加を決めた。
通常、蜜月期のつがいは参加せぬのだがな……。

1時間ほどで我の頭に乗る分を、四苦八苦しながら編んだ。
だが我との身長差の為に、通常のものより長く作らねばならず本人の想像以上に苦労することになった。
茎から染みでた成分が肌にあわず、手先が荒れてきても。
祈りを込めるかのように、何度もやり直しながら丁寧に編んでいた。
小さな手で、一生懸命編んでいた。

我はカイユが作業の手本を見せた時、りこと共にそれを眼にしていた。
我の頭の中にあるカイユの手の動きを術式で［まね］すれば、簡単に仕上がる。
りこが苦労する必要も、この可愛らしい手を痛ませることなど無い。
だが。
言ってはいけないと、思った。
りこがこうして＜花鎖＞を作るのは何故なのか……誰の為なのか。
感情に疎い愚かな我だとて、分かる。

ダルフェよ。
これは、我にも分かったのだ。
だから我は言った。

りこの作ってくれた＜花鎖＞で踊るのが楽しみだ、と。

我の言葉に、りこは嬉しそうに頷いた。
照れたような笑みと、染まった耳がとても愛らしかった。

りこ曰く、りこは『激不器』……とても不器用らしく。
カイユが３０分ほどで出来るだろうと言っていた作業に、カイユ

の想像したよりも数倍の時間が掛かっていた。
ん？
未完なので、さらに掛かるのか。
我はこうしてりこと2人で居られるならば、1日どころか10年、いや100年だろうと……。
まあ、ずっと寝たままの状態では困るが。
りこの眼が我を見て、この唇が我の名を呼び……この手が我に触れてくれねば、我はもたんな。
困るどころではない、気が狂う。

舞踏会は明晩だ。
急くことはない。
カイユが来たら茶を飲んで、菓子を食べ。
その後、再開すれば良い。

それに。
我に寄り添い、うたた寝をするりこの寝顔はとても愛らしい。
すぐに起こすのは、もったいないのだ。

さて。
一番の問題は。
何故か誰も我に訊かぬので、言っておらなかったのだが。

「我はダンスなど、全く出来んという事だな」

貴女とならば、踊ってみたい。

＞i1093―201＜

番外編　～花鎖～　前編（後書き）

＊イラストの著作権はイラストの作者様である『やえ様』にあります。

このお話は『やえ様』が描いてくださった　～うたたね～　から林が妄想し、やえ様にもらっていただいた小話（非公開）に大幅に加筆・修正したものです。
やえ様の「四竜帝の大陸」のイラストは提携サイト「みてみん」で見ることができます。
カイユやダルフェにも会えます♪

番外編　～花鎖～　後編

＜花鎖＞は、夕食前に出来上がった。
特殊な溶液を薄めていれた盥の中に、くるくるっと巻いて保管してある。
この液にこうして浸しておけば、数日間はベストな状態がキープできちゃうらしいのだ。

＜花鎖＞はできた。
なんとか自力で編めた。
ハクちゃんは私の両手を手の平に乗せ、撫でながら……良いできだって褒めてくれた。
ドレスはダルフェさんが娘さんの為に作っていたものを、私に着せてくれることになっていた。
2日前にサイズ合わせの為に試着したそのドレスは、優しいピンク色の可愛らしいドレスだった。
娘さんの為のドレス……私なんかが着てしまうなんて、申し訳なかったけれど。
とても楽しそうに袖や肩幅をチェックしていくカイユさんの顔を見たら、それを口にしてはいけないと思った。

準備万端……私自身以外は。
お祭り（舞踏会？）は明日の夜だというのに、私はワルツのような優雅なダンスが踊れるようにはなっていなかった。
「カイユ。……やっぱり、ここでハクちゃんとお留守番してようかな」
夕食時に、私はカイユさんに言った。
＜花鎖＞を作るときは夢中だったけれど、よくよく考えたら無謀というか……。

弱気になった私に、カイユさんが首を振った。
「大丈夫です。ヴェルヴァイド様がフォローして下さいますから。雄が巧ければなんとかなってしまうものですわ。ねえ、そうよねダルフェ？　心配ないわよね？」
「まあ、そうだなぁ。旦那にひっぱってもらって、まかせてりゃぁ‘それなり’には見えると思うよ？」
ダルフェさんは食卓の上にちょこんと座っているジリギエ君の口に、鯰の切り身を入れてあげながら答えた。
私用に小さくカットされたものと違い、大きくて骨がついたままの鯰をジリ君はもごもごと美味しそうに食べていた。
５人で囲む賑やかな食卓の上には、大きな土鍋が中央に置かれていた。
今夜の献立は、ダルフェさん特製洋風鯰鍋（私が勝手に言っている……）と食堂からいただいてきた酸味のあるパン、黄色と桃色の小菊の花サラダ。
それと食堂のチーフさんの超お勧めの一品である、若鶏の唐揚げを少々……これは竜帝さんの大好物で、彼は3食中2食は食堂の唐揚げ定食を食べているのだ。
鯰鍋はトマトベースで、数種のきのことかぶのような根野菜がたっぷり入っていた。
ナマリーナを飼っている私だけど、鯰を食べることに抵抗はほとんどなかった。
でも、ナマリーナは食べれない……とても、無理。
小学生の時に学校で飼われていた真っ白な鶏と、スーパーの精肉コーナーで【肉】になって並んでいる鶏とがまったく別物に感じていたあの感覚と似ているかもしれない。
ナマリーナが食用になる種類の鯰だと分かっているのに、鍋の鯰さんとは私の中では‘違う’のだ。
「第一これは祭りであって、競技会じゃねぇんだから。遊びっつうか、楽しむもんだからねぇ。心の狭い旦那にしちゃ珍しくその気に

なってんだから、姫さんも思いっきり楽しむべきだと、父ちゃん、は思います。な、ジリもそう思うだろう？」

ダルフェさんがそう言ってウインクすると、それを見たジリ君も緑の眼をぱちぱちと瞬かせた。

最近のジリ君はこうして大人のまねを一生懸命することが多くなり、とってもかわゆいのです。

「お祭り……うん！　そ、そうだね」

そ、そうよ。

ハクちゃんが一緒なんだもの。

ハクちゃんはとっても長く生きてるんだから……亀の甲より年の功！

きっと、なんとかなるに違いない。

カイユさんとダルフェさんの言葉に、ちょっと……かなり安心した私だったけれど。

私を安心させる一因となった旦那様から、爆弾が投下された。

「おい。皆、誰も我に確認せぬので自分から言うがな。我は踊れんぞ？」

え？

私の隣の椅子に座っているハクちゃんに、全員の眼が集中した。

大人達のまねをして、ジリ君も数秒遅れでハクちゃんを見た。

「えーっ！？　ハ・ハ……ハクちゃん、踊れないのぉおお！？」

サラダに入っていた小菊をフォークに刺して、ドレッシングの容器にずぼっと突っ込みながらハクちゃんは言った。

「ああ、踊れん。見たことはあるが、記憶しようと思ったことが無いのでな。まあ、なんとかなるのではないか？　そんな事より……ほら、りこよ。あ～んだ、あ～ん」

と、自信満々で暢気君な発言をして下さった。

ハクちゃん。

ドレッシングはかけるものであって、チーズフォンデュみたいにしちゃ駄目だよ。

いや、重要なのはドレッシングの使用方法じゃなくてっ。

踊れないのに、なに余裕ぶっこいてんの！？

なんとかなるはずないでしょうがっ！

私がカイユさんに教わってる時に、なんで言わなかったのよぉ～。

「そ、そんなぁ～。ど、どうしようっカイ……ぶごっ！？」

衝撃の事実に思わずぱかっと開けてしまった口に、ハクちゃんはドレッシングがしたたる小菊をさっと投入した。

ビネガーが強めのドレッシングのせいで、私は少しむせてしまった。

そんな私の背中を、カイユさんが素早く背後に来てさすってくれた。

「りりりこっ、すまぬっ！　大丈夫か！？」

ハクちゃんがあたふたと差し出したグラスを、私が受け取ったのを確認したカイユさんは……。

「ヴェルヴァイド様！　まったく貴方って人は、何故いつまでたってもこうなんですか！？　いい加減になさって！　ああ……なんてことっ。くっ……私としたことが！　こんな方をあてにするなんて、私が間違ってたわっ！　さっさと陛下に相談してこい、役立たずっ！」

カイユさんはすらりとした長い足で、ダルフェさんの後頭部に一発入れた。

「へぐっ！？　了解！！」

ダルフェさんは頭を揺らしながら、竜帝さんの執務室に駆けてい

った。
ふと、視線を食卓へ移すと……。
「ジ……ジリ君!?」
むぎゅむぎゅごっくん、むぎゅむぎゅっ。
食卓の上のジリ君はちょっと固めのライ麦パンと唐揚げを、なんと両手に2個ずつ持って食べていた。
席に戻ったカイユさんは、パンと唐揚げをがつがつとむさぼるジリ君を見て、ため息をつきながら言った。
「お行儀が悪いわよ、ジリ。姉様の為にも、貴方は立派な紳士にならなくては……。ヴェルヴァイド様みたいな大人には、なりたくないでしょう?」
そう言われたジリ君は、さっとパンと唐揚げから手を離した。
その様子に、私は軽いショックを受けた。
まっ……まずいよ、ハクちゃん!
ジリ君の中で‘あんな大人には、なりたくない’って思われてるのかもよ!?
「トリィ様。今夜は早く休んで、明日に備えましょう。……カイユにおまかせ下さい。必ずこのしょうもない男を、使えるように仕込んでみせますわっ! 覚悟なさって、ヴェルヴァイド様」
カイユさんの水色の瞳が、ハクちゃんを睨んだ。
睨まれた本人は、銀のスプーンでスープをぐるぐるかき回しながら宣戦布告(?)したカイユさんに言った。
「覚悟とな? したことが無いので、覚悟の仕方がよく分からん」
ハクちゃんの言葉を聞いたカイユさんの口元が、ひきつったようにぴくぴくと動いた。

こうしてハクちゃんに、カイユさんから地獄の猛特訓が宣告された。
幸いにもお祭りのためにシスリアさんの授業は、お祭り当日と翌日の2日間は休講が決まっていた。

だから朝食を1時間早くとって、ダンスを練習することになった。

南棟にいると分かりづらいけれど、この数日はお城中が大変なことになっているらしかった。

つがい持ちの竜族が各地から帝都に里帰りして、お城に集まってくる。

シスリアさんも、この為に支店から返ってきたバイロイトさんと参加する。

皆さん、竜体で飛んで帰って来る。

年に1度の帰省ラッシュで、お城の発着所勤務の人は大忙し。

よっぽどの緊急事態でない限り、決められた発着所以外に竜体で降りてはいけない。

帝都で発着所があるのは、お城だけ。

だから大混雑。

上空待機の竜達が帝都の空を旋回する様子は、季節の風物詩となっているらしい。

なんか、お盆みたい……盆踊りにしては、舞踏会なんて華やかすぎるけれど。

う〜ん、盆踊りかぁ。

浴衣と金魚すくい。

そしてカキ氷。

私はやっぱり、定番のイチゴ味が好きかなぁ〜。

でも、帝都は寒いからカキ氷は……。
「トリィ様。どうしました？」
あ、いけない！
逃避している場合じゃな～い！
「ううん、なんでもないですカイユ！」
朝食後に温室で開始された練習は強力な助っ人を得て、順調に進行していた。

ワルツ……3拍子だよね？
ゆったりとした、3拍子のリズム。

ずんちゃっちゃ～。
ずんちゃっちゃ～。
ずんちゃっちゃ。
ずんずん……ちゃっちゃ。
ずんちゃ、ずん。
ずんずん、ずんどこ、ずんずんずん。
ずん、ずん、ずんずんぱっぱ……あれ？

「トリィ様、声が出てます。しかもそれ、かなり違いますよ？」
カイユさんがてんぱる私を宥めるように、優しく頭を撫でてくれた。
「あ、はいっ！　ううっ、ごめんなさい」
私の目の前にはダルフェさんの手拍子で踊る、美男美女。
ハクちゃんと女神様……美女な竜帝さんだ。
温室に射し込む柔らかな陽を浴びて、ひらりひらりと蝶のように舞っていた。

ハクちゃんにダンスを叩き込むべく、竜帝さんが参戦（？）してくれたのだ。

竜族の慣習により、つがい持ちのカイユさんは他の男性と踊るわけにはいかない。
つがい持ちのハクちゃんが、妻である私以外の女性と踊るのももちろんNG。
だから竜帝さんが女性役を押し付けられたのだ……ダルフェさんに。
ダンスセンスゼロっぽい私に時間をかけるより、ハクちゃんに教えたほうが手っ取り早いという、ダルフェ作戦、なのだ。
あぁ女神様ぁ～忙しいのに、本当に申し訳ありませーん！
ダルフェさんは「俺と旦那じゃ、組み手にしかみえないからねぇ」と、女性役を女神様に丸投げしたわけでして……。
さすが女神様。
女性役を完璧にこなしている。
そして、我は踊れんぞ宣言、を堂々したハクちゃんも、ちゃんと踊れていた。
「……ねぇ、カイユ。ハクちゃん、ちゃんとできてるよね？　だから昨夜、なんとかなるって言ったんだ……」
さっき、ダルフェさんとカイユさんがお手本で1曲踊ってくれた。
音楽は女神様の美しい御手による手拍子だった。
終わると同時に、私は拍手喝采！
2人は息もぴったりで、とっても素敵だった。
私の横に立って一緒に見ていたハクちゃんは、顎に右手を添えて。
ー覚えた。
と、一言。
それを聞いた私は、思わずハクちゃんの顔を見上げてしまった。
白皙の美貌が私を見返し、言った。
ーふむ……これは、ぱじゃまを着るより簡単だな。

そして。
ダルフェさんがカイユさんにしたのと同じように、優雅な仕草で竜帝さんに一礼した。
竜帝さんがハクちゃんに手を差し出し……2人は踊り始めたのだ。

結果はこの通り。
完璧だった。

昨夜、2人でお風呂に入ってる時。
ハクちゃん、明日はいっぱい練習しようね。
2人で頑張ろう！
励まそうと思い、ハクちゃんの小さな手をぎゅっと握ってそう言った私ですが……。

ひえぇぇ～っ、頑張らなきゃいけないのは、私だけだぁああ！

ハクちゃん、貴方いったいどんな脳みそしてんのよ？
まあ、確かに賢そうな顔してるけどさっ。

踊り終わったハクちゃんは、竜帝さんをぽいっと投げて私に訊いて来た。
「りこ、我は覚えた。偉いか？」
金のお目々がきらきらしているような……。
これは、ほめてほめてモードですね。
「う、うん偉い。すごく上手だったよ！　すごいねハクちゃんって、カイ……あれ？」
カイユさんとダルフェさんは次の段取りの話をしていた。
竜帝さんは肩をぐるぐる回して、眠み～っと呟いて大きなあくび

をしていた。
誰もハクちゃんが1度見ただけで踊れてしまう事に、驚かない。
「りゅ、竜帝さんっ。ハクちゃんて、まさか……」
もしかして、ハクちゃんはめちゃくちゃ頭良いの？
それを皆は知ってたってこと？
見た目はともかく、中身は奇天烈&頓珍漢で超天然なこの人がぁあぁっ！？
「ん？　ああ、じじいの記憶力の良さは異常だぜ？　ヴェルは基本的には、すげぇ頭してんだよ。普段は生かされてねぇっていうか、覚える気が無いってだけで……短時間で済むと分かってたから、俺様は引き受けたんだ。おい、ダルフェ。俺は仕事に戻るぜ？」
女神様はあくびをしたために少し潤んだ青い瞳を、乱暴に手でこすった。
「お疲れ様っす、助かりましたよ。陛下の案で、問題無しでしたねぇ」
カイユさんと話していたダルフェさんが、感心したように言った。
ハクちゃんが記憶力がすごく良い事を知っていたのは、竜帝さんだったんだ……。
あれ？
記憶力がそんなに良いのに、パジャマの脱ぎ着をマスターするのにあんなに時間がかかるの？
なんか、変……おかしい。
矛盾に気がついてしまい、少し不安を感じた。
私の表情から竜帝さんは、ダンスが上手くできない事にまた落ち込んでいるのだろうと思ったようだった。
「おちび、気楽にやれ。単なる祭りなんだしよ？　主催者の俺様としては、楽しんで参加して欲しいしな！」
微笑む竜帝さんのお顔は美しすぎて……クロムウェルさんがお嫁さんにしたいと熱望するのも、無理ないなぁ～って、思ってしまった。

「よし！　じゃ、次は姫さんと踊ってくださいよ、旦那。そんで細かいとこ確認しましょうや」
　竜帝さんを廊下まで見送ったダルフェさんは、戻ってくるとすぐにハクちゃんにそう言った。
　ダルフェさんはベンチに歩み寄り、ジリギエ君を抱き上げて自分の頭に乗せた。
「姫さん。ぱっぱと終わらせて、早めの昼飯にしよう。午後は姫さん達の身支度の時間もとらなきゃだから、けっこう時間がねぇからね」
「はいっ！　ハクちゃん。よろしくお願いしますっ」
　私はびしっと背筋を伸ばし、深々と一礼してから両手をハクちゃんへ突き出した。
「……そこからすでに違うし。雌は堂々としてなきゃ。頭下げんのは雄だけ、姫さんは後から片手を差し出すだけね？」
「は、はいっ！」
　しまった、ついついっやる気が先走ったというかっ……恥ずかし～い！
　ダルフェさんの注意を受け、慌てて手を引っ込めた私だった。
　これで問題解決。
　誰もがそう思ったのに……。
　踊り始めて数秒で問題が発生し、ダルフェさんが頭を抱えた。
「なんでっすかぁ！？」
　その声に赤い髪の中で寝ていたジリ君が、ぱっと顔を上げて私達を見た。
　ハクちゃんが、うまく踊れなくなってしまったのだ。

動き的にはあってるけれど動きが変、というか硬い。
まさに、かっちんこっちん。
私を見下ろす眼が、徐々に剣呑なものに変わっていく。
眉間に縦線が発生した。
かなり怖い顔になっていた。
私は怖くないけれど、ジリ君はささっとダルフェさんの髪に潜ってしまった。
全身隠れるなんて無理だから、お顔をダルフェさんの頭に押し付けてるって感じだった。
ハクちゃんは踊るのを止め、私と……ダルフェさんの隣で仁王立ちしているカイユさんを、じーっと睨んだ……じゃなくて、見た。
「やはりな。……模倣はできるが、応用は難しい。カイユと踊るダルフェの動きを我は記憶した。だがりことカイユでは身長……体躯が大きく異なるために我の中でずれが生じ、修正がうまくできん」
応用……ずれって何？
私にはよくわかんないけれど、つまり……ハクちゃんを当てにする作戦は、駄目だってこと!?
ううっ、不安的中。
見ただけでなんでもできるなら、パジャマにあんなに手間取るわけないものっ！
おかしいと思ったんだよぉおお～。
漫画や小説なんかだと……。

？女の子が「私、踊れないわっ！　どうしましょう!?」とか可愛く言う。
？恋人役（まあ、王子様とか騎士とか御曹司とか）が「僕がリードするから平気さ！」と、たいした練習も無く一発オッケーで周囲を魅了する華麗なダンスをしてしまう。

ああ、やっぱりこんなの嘘なんだぁああ～！

そんなうまい話は有り得ないのだ。

円舞曲……ワルツなんて、今までやったことなんか無い。
リズム感なんて素敵なものは、お母さんのお腹に忘れてきてしまった気がするし。
ああ、嫌な記憶が蘇る……。

体育教師の趣味なのか、中1の時にマイムマイムという謎めいた踊りをやらされた。
足の動きが覚えられなくて、ロボットみたいだと先生に失笑されたのは悲しい思い出だ。
さらに遡ること数年。
小学4年の運動会では、よさこいをやった。
26になった今でもよさこいの記憶が残っているのは、本番より練習が苦痛だったためだ。
普段の練習はクラス単位でやっていた。
その為に私は悪い意味で目立ってしまい、新任の若い女性教師に放課後もしごかれた。
私は運動会が来るのが嫌というより、怖くなってしまった。
結果的には。
4・5・6年合同で大人数だったのでごまかしがきいて、本番で間違えても怒られなかったけど。

これが私のダンスの歴史なのだ。
できるなら闇に葬りたい、暗黒史です。
「りこ？　疲れたのか？　立ち通しだったしな、休憩を……」
黙ってしまった私を心配したのか、ハクちゃんが顔を寄せてきた。
「……大丈夫」
私はハクちゃんの手を、ぎゅっと握った。
私もハクちゃんも、ダンスは初めて。

それなのに、私はハクちゃんを当てにして……ずるかった。
「練習しよう、ハクちゃん。基本的な動作はハクちゃんが覚えてくれたんだから、後は私が頑張る！」
過去にダンスを見たことがあるハクちゃんが踊れなかったのは、今まで覚える気が無かったから。
ハクちゃんはダンスに、興味が全く無かったってことだよね？
「ハクちゃんも言ってたじゃない？　なんとかなるって。うん、そうだよ！　なんとかなるよっ」
なのに、記憶してくれた。
私のために……私と踊りたいって、思ってくれたからだ。
「私、ハクと〈花鎖〉を付けて踊りたいの」
私は踊りなんて、嫌いだった。
下手くそで、そんな自分が惨めで……。

でも、貴方となら。

「ハクと踊りたい」

私も。
貴方となら、踊ってみたいって思ったの。
「ああ、我もだ」
表情を柔らかいものに変えたハクちゃんとの‘かっちんこっちんダンス’は、温室から見る空が紅く染まり始めるまで続いた。

カイユさんは姿見の前に私を立たせ、ドレスを当ててくれた。
竜族の式典用ドレスは私の知るダンス衣装とは全く違って、肌の

露出が一切ないデザインだった。
普段も既婚の竜族の女性は、肌を出さない衣装しか着ないからこれは納得だった。
指は出てるけど、手袋は男女ともしない。
つがいと触れ合い、繋がる場所だから……。
男性の衣装は意外なものだった。
カイユさんが好んで着ているアオザイ風の衣装が、竜族男性の正装だったのだ。
ＴＰＯに合わせて無地だったり柄物だったり、派手な刺繍や細工物が付いたりする。
ある意味、竜族にとってはスーツ的伝統衣装ってことなのかな？
だから竜帝さんが、いつもアオザイ風衣装を着ていたわけで……。
ちなみに。
近年、竜族男性の間では普段着には、シャツにパンツといったラフなものが好まれている。
アオザイ風の衣装は冠婚葬祭のみって人も、多いらしい。
カイユさんは動きやすい（蹴りやすいから？）という理由で、以前から好んで着ているのだと教えてくれた。
「大丈夫ですよ、トリィ様。昨日より踊れるようになりましたし、ドレスで足捌きなど見えないのですから……ああ、貴女にこのドレスを着せることができるなんて……」
水色の目をゆっくりとカイユさんは閉じた。
何かに耐えるように、銀色の睫毛が揺れた。
「ダルフェが……父様は貴女が生まれる前から、＜花鎖＞の舞踏用衣装を準備していたのよ？　とっても似合う……私達の自慢の娘だわ。ジリが大きくなったら着るのも、もちろんあるの。ジリギエ、ヴェルヴァイド様は姉様を妻に出来て、幸せ者よね？　貴方も姉様みたいな、可愛いお嬢さんを見つけなさいね」
父様……母様。
カイユさんは多分、もう元には戻れないだろうと……竜帝さんが

言っていた。
ハクちゃんはカイユさんを私の【母親】として、黒の大陸に同行させると四竜帝に宣言した。
カイユさんは自他共に、この世界での私……トリィの‘母様’になったのだ。
それは本当に正しいことなんだろうか、きちんと専門治療を受けさせてあげるべきなんじゃ……。
「かかっ……ねね、キキュゥィイ！」
高く響く楽器のような明るい声が、私のそれた思考を引き戻してくれた。
カイユさんの右肩にいたジリギエ君が、ダルフェさん譲りの緑の目をくるりと回しながら弾んだ声で鳴いた。
【かか】……これは‘かかさま’のこと。
ダルフェさんは【とと】で、私は【ねね】。
ハクちゃんは……悲しいことに、いまだに無し。
ハクちゃんもジリ君を幼生って呼んで、名前を使わないからお互い様なのかなぁ～。
２人の仲って、未だに微妙なんだよねぇ。
「さあ、着替えましょうね？　私もここで、着替えさせていただきます。あぁ、髪も結わなくては……どれにしようかしら？　ああ、私としたことが！　もう、時間ぎりぎりですっ」
カイユさんはいくつかの髪留めを見比べ、さっと１つを選んだ。
「これにしましょう！　さあ、急ぎますよ！？」
「はい、カイユ！　着付け、よろしくお願いします」
ダルフェさんは、このドレスを私にくれた。

一娘の為に作ったんだから、これは姫さんのモノなんだよ。

そう言って、このドレスをくれたのだ。

春に咲くプレリの花をイメージして作ったのだと、試着をした時にダルフェさんが照れたような笑顔を浮かべて教えてくれた。

プレリは、この大陸では見ることはできない。

赤の竜帝さんの大陸だけにある植物だから。

ダルフェさんの、故郷の花……。

来年も再来年も……その先も。

このドレスを着て、ハクちゃんと踊りたいと思った。

この世界での宝物が、また1つ増えた。

「とりあえず、今着てる服を脱い……うわっ!?」

見ていた鏡に、釣り目をさらに吊り上げたハクちゃんがいた。

慌てて振り返ると、ハクちゃんがカイユさんの肩からジリ君を鷲掴みにするところだった。

「ちょっ……ハクちゃん!?」

「我としたことが、うっかりしておった！　こ、この痴れ者めがっ。りこの‘お着替え’を目にして良い雄は夫である我だけだっ！　我の妻の肌を見たら、貴様をトランの火口にぶち込むぞっ!!」

「ゲギギギュッ!?　かか、ねね……キキュウィ!」

そしてジリギエ君は。

微妙な発言をしたハクちゃんに拉致された。

お……‘お着替え’ってなにぃい～!?

ちょっといろんな意味で心配になって、着替える前にジリ君とハクちゃんの様子を確認しに温室へ戻ろうした私をカイユさんが止めた。

「トリィ様、ジリは大丈夫です。さあ、脱いで!」

自分で脱げますと言う前に、カイユさんがぱっぱと私の服を脱がし始めた。

なんだかとっても、楽しそうだった。

着替えが終わった私とカイユさんが居間に行くと、アオザイ風の衣装を着たダルフェさんとハクちゃんが私達を待っていた。

ダルフェさんはドレスに着替えて美しさ倍増のカイユさんの手をとり、キスをした。

「ああ、俺はなんて幸せ者なんだろう……とても綺麗だよ、カイユ」

緑の眼をさらに垂らして、うっとりと自分に見蕩れるダルフェさんにカイユさんは……。

「綺麗？　ふっ……当然よ。私はミルミラとセレスティスの娘、美しくて当たり前だわ。不細工な要素なんて、私には無いのよ」

超上から目線なセリフも、ダルフェさんの前ではいつも女王様なカイユさんらしかった。

実際、ドレスを着たカイユさんは物語に出てくる精霊の女王様みたいで……本当に綺麗だった。

思わずうんうんと頷く私のドレスを、くいくいと何かが引っ張り……ハクちゃんだ。

「どうしたの？　あ、ハクちゃんの服も素敵！　く、黒だけど……とっても似合う。うん、すごく格好良いね」

ダルフェさんは紫系で、割とシンプル。

ハクちゃんはいつもと同じように黒。

でも、華やかな金糸の刺繍が豪華な雰囲気で……この美麗な（悪役顔だけど）人が私の旦那様なんて、鳥居家の面々が知ったら卒倒するに違いない。

「そうか？　ランズゲルグが、これを着ろと持ってきたのだ。……格好良い？　我は格好良いのか！？　かわゆくて、格好良いのだな！？　りこにそう言ってもらえて……うむ、とても良い気分だ」

私のドレスを両手で握ってご機嫌なハクちゃんの姿に、ダルフェさんが呆れたように言った。

「あのねぇ～、普通は雄が着飾った雌を褒めるもんなんです。旦那が褒められてて、どうすんですかぁ!?　姫さんになんか言ってやんなさいなっ!」

ダルフェさんの言葉に、ハクちゃんは軽く首を傾げた。

細めていた両眼を一度ぎゅっと瞑ってからしっかりと開き、長身を屈めて私の顔をのぞきこんだ。

「りこ」

ドレスを握っていた手が離れ、私の頬を包み込んだ。

「我は眼が潰れるかと思ったぞ?」

私が反応する前に、ダルフェさんとカイユさんが突っ込みを入れてくれた。

「潰れって……それ、微妙。あ～あ、１５点っすね」

「いいえ。マイナス６０点よ」

２人は厳しい‘採点’をしたけれど。

私は、そうは思わなかった。

「……ううん、１２０点!　ありがとう、ハクちゃん」

私にはちゃんと伝わった。

これは、直球すぎて分かりにくい……ハクちゃんなりの褒め言葉。

だから１２０点。

眩しいくらい綺麗だって、ハクは言いたかったんだよね?

特別に美人の私じゃなくても、貴方は‘綺麗’だって感じてくれた、思ってくれた。

お世辞なんか言えるほど器用な人じゃないって、私は知っている。

「ははははっ!　あんたらって、なんかこう……不思議だねぇ」

嬉しくて思わずハクに抱きついちゃった私に、ダルフェさんが笑い……カイユさんにぺしっと頭を叩かれた。

私達はそれぞれお互いの‘つがい’の頭に＜花鎖＞の冠をのせた。
手が届くようにしゃがんでくれたハクちゃんの頭に、私の作った＜花鎖＞をそっと置いた。
ハクちゃんも私の頭に＜花鎖＞の冠を慎重にのせてくれた。
なんだか……指輪の交換みたいで、甘くて幸せな気持ちになった。
昨日も感じたけれど、ハクちゃんはお花の飾りもけっこう似合うのだ。
真珠色の長い髪の上では、色とりどりの花が鮮やかさを増すような気がした。
仕上げは＜花鎖＞の冠を、カイユさんが数本の隠しピンで固定してくれた。
なるほど、そうしないと踊ったら落っこちちゃうもんね。
「さあ、行こうぜぇ。……あ、旦那達は先に転移で移動してください。俺等はジリを舅殿に預けてから行くんで。あっちでは陛下の指示に……っておいっ！？」
ハクちゃんはダルフェさんの話の途中で転移してしまい、私には最後まで彼の言葉が聞こえなかった。
陛下がなんとかって、言っていたような……おわわっつ！？
「ハクちゃ……あ。竜帝さんっ！」
目の前には、腕組をした竜帝さんが立っていた。
彼も普段とは装いが、少し違った。
さらさらの青い髪を高い位置で結い、金細工の髪留めで飾っていた。
瞳と同じ色のアオザイ風の衣装は、上半身を中心にさまざまな濃さの青で細かな刺繍が施されていた。
まさに、女神さま！
この世界で私のミス・ユニバースは……現在の所は竜帝さん、貴方ですっ。

「よう、おちび。ん？　なに呆けた顔してんだよ、雰囲気にのまれちまったか？」
「え、う、まあ……っははは？」
女性のような美貌がコンプレックスの彼に、本当のことは言えず。笑ってごまかした。
初めて来た大広間は、音楽と多くの竜族で溢れていた。
ずっと見上げ続けると確実に首が痛くなりそうなほど高い天井、薄い青色をした石造りの床。
巨大なシャンデリアがいくつも吊り下げられ、輝いていた。
広さは……市民体育館何個分だろう？
ひえ～、お掃除が大変そうっ。

舞踏会は四時頃から始まっていて、好きな時に踊りに加わって良かった。
だから踊っている人だけじゃなく、踊りを見学する人や立食ブース（？）で歓談しながら食事をする人も大勢いた。
＜花鎖＞を付けているペア以外は、つがいのいない竜族さんってことだよね？
若い男女が集まってますなぁ～……うんうん、なんか合コンみたいだ。
このお祭りは、つがいとの出会いの場でもあるのかもしれない。
ハクちゃんが転移したのは大広間の奥の方で……最奥の壁際だった。
つがいのいない竜族がいっぱいいるのを知っていたから、隅っこに転移したのかな？

「じじい、今夜は大人しくしといてくれよ？　独身の雄共には死にたくなかったら、ヴェルの半径５ミテに入るなって言ってあるからよ。おちび！　ダンスに参加中も、お前の側にはカイユ達が常にいるから安心しろ……おっ？　バイロイトじゃねえか、あいつ報告書

がまだ出てねぇんだ！　ちょっくら話してくるか。おちび……そのドレス、よく似合ってるぜ、じゃあなっ！」

一瞬、恥ずかしそうにうつむいてから、竜帝さんは人ごみを避けるために壁際を選んで、早足で去っていった。

カイユさん達が来るまで、とりあえずこのままここで待つことにした私は、つがいの先輩方の踊りを見学することにした。

弦楽器の演奏に合わせて、＜花鎖＞の冠をつけた竜族さん達が……誰もがにこやかに微笑みながら踊ってた。

いろんな年齢の人達が……若い人達もいるし、シルバー世代も。

食堂で見かけるなじみのある顔も、ちらほらと。

私の視線に気づいたチーフさん……ステイラさんが、手を振ってくれた。

私のお母さんと同世代（実際の年齢は数倍だろうけど）の彼女は、葡萄色のドレスがとても似合っていた。

彼女をエスコートしている旦那様は恰幅の良い紳士で、ステイラさんとピンクの花を多めに使った＜花鎖＞で繋がっていた。

彼女の隣にいるのは、娘さんかな？

目元と鼻がそっくりで、くりっとした大きな眼。

体のラインがはっきり分かる、セクシーなホルダーネックのドレスを着ていた。

肌が見えるドレスを着ているから、彼女はフリーってことで……うん、ここで良い人に巡り会えるといいね。

１５分程、きょろきょろと周りを見回していると。

竜帝さんの避けた人ごみの中から、ダルフェさんの腕をひっぱるようにしてカイユさんが現れた。

「トリィ様！　ああ、やっと見つかったわ。さっさとしろ、役立たず。……さあ、私達も踊りましょう。去年はどうしても抜けられない、仕事、があって、出られなかったんです」

カイユさんが浮かべた笑みは、どこまでも澄んでいて……綺麗過ぎて。

「ねえ、ダルフェ……今年は娘と一緒ね……私、夢を見てるみたいだわ。貴方と私の赤ちゃん……帰ってきてくれたんだもの」

ダルフェさんがカイユさんを抱きしめ、額にキスをした。

「そうだね、ハニー。セイフォンに‘迎え’に行って、ちゃんと‘連れて帰って’これて、良かった……良かったね、アリーリア」

ダルフェさんはカイユさんをそっと離し、数歩下がった。

片腕を胸にあて、もう片方の腕を斜め横に優雅な動きではらうようにしてから一礼し、カイユさんに手を差し出した。

カイユさんは初めて見る……少女のようなはにかんだ笑顔で、ダルフェさんの手に自分の手を乗せた。

私はそんな2人の姿に釘付けだった。

踊り始めたダルフェさんが、ぼーっと見蕩れている私にウインクをして‘あんたらも踊りなさいな’と合図をしてくれたので、あわててハクちゃんから数歩離れた。

私達も、踊らねば！

うん、参加することに意義がある。

オリンピック精神でGOなのだ！

さあ、練習通りに私を踊りに誘ってくださいなハクちゃん……あれ？

「ど、どうしたの……ハクちゃん？」

周りの人達が踊り始めたのに、ハクちゃんは私を見下ろしたまま動かなかった。

側にいたカイユさんとダルフェがさすがに異変に気づき、こちらを気にしながら踊っている……。

彫像のようだったハクちゃんが突然、動いた。

床に両膝を着き、ゆっくりと頭をたれて……私の手を取って両方の甲に、それぞれ1回づつキスをした。

「ハハ……ハクちゃん！？」

練習と全く違うことをするハクちゃんに、私は少し焦ってしまった。

これもありなの？

これは別パターンだとか！？

こっ、こういう場合はどうしたらいいのっー！？

「りこ。我がぱじゃまを独力で身に付けられるようになったのは、りこのおかげだ」

プチパニックの私にお構いなしに、私を見る眼を細めてハクちゃんは言った。

えっ……　ぱじゃま？

なんで今ここで、ぱじゃまの話なの？

「りこは我が出来ぬことを、いつも手助けしてくれる。我もりこを手助けしてみたい。りこが苦手な事……出来ない事があって、我は良かったと思う。６点で良かったと思う。りこが全てにおいて完璧であったなら、我はちと……困る。我が手助けする余地がないと、かなり困るのだ」

「……あ……ハクちゃ……」

私だけを映す、金の眼に囚われて。

ハクちゃんの言葉に心臓をぎゅうっと、掴まれて。

「りこが我にしてくれるように。りこの不足は、我が補う。それができる、我になる……なってみせる」

ああ、私。

貴方以外、見えなくなってしまう。

「我と踊って欲しい、鳥居りこ」

音楽が止んだ。
ううん、違う。
聞こえないだけ。

貴方の声しか、私には聞こえない。

この世界には。
私達だけになる。

私の望んだ。
貴方との【世界】になる。

「……言い忘れてたけど。私の国では、結婚したら苗字が変わるの。竜族のハクちゃんは苗字が無いから、私はもうただの‘りこ‘。貴方の‘りこ‘なの」
色素の薄い唇が動く前に、そっと口付けた。
子供の事を私が知ってから。
貴方はこの冷たい唇も艶めく髪も、輝く鱗も……‘ハク‘は全部私だけのものだって、毎日言ってくれるようになった。

世界をくれると、言わなくなった。

「私と踊って下さい、ハク。来年も再来年も……ずっと、ずっと。私だけと」

私だけと。
永遠に。

ちょっと……だいぶ遅れて踊りだした私とハクちゃんだったけれど、数分で皆の動きにうまく混ざれた。
ハクの大きな手が、私をしっかりと導いてくれていた。
温室での練習とこうも違うのは、お互いの気持ちのせいかな？
かっちんこっちんは半分の‘かっちん’程度か、それ以下になったと思う。
私達はカイユさんとダルフェさんのような、優雅なダンスは踊れていない。
でも。
上手に踊れなくても、間違っても。
こうして貴方と踊れることが、嬉しくて……幸せで。
上手に踊れなくても、こんなに心が弾んでる。
ダンスが、好きになった。
ハクちゃんもきっと、踊ることが好きになったはずだ。
私に向けられる彼の金の眼は、穏やかで優しい色をしている……
2人きりでいる時みたいに。

私達は無事に1曲を踊りきった。
あっという間だった。

＜花鎖＞は切れなかった。
調子にのって、それから3曲も踊ったのに切れなかった。

私にも周囲を少し見る余裕が出てきた。
さっき竜帝さんがバイロイトさんを発見したってことは、シスリアさん……彼女も居るはず。
シスリアさん達、どこにいるのかな？
ちらちらと周りを見てみたものの。

2メートル級の竜族のつがいの皆さんが視界を遮る壁になり、私にはわからなかった。
「残念、見えないや……きゃ！」
ふわりと抱えられて、視界が高くなった。
「どうだ、見えるか？」
ハクちゃんのこういう所、すごいと思う。
私の顔の……眼の動きで、察して行動してくれる。
つまり。
彼はいつも私を見ていてくれるって証拠で……。
「うん！　ありがとう、ハクちゃん。あっ、シスリアさん発見！　わぁ、妖精さんが踊ってるみたい～可愛い……わわっ！　ハクちゃん！？」
私を腕に座らせたまま、ハクちゃんはゆっくりと踊り始めた。
周りの人達はそんな私達を全く気にする様子は無く、それぞれのパートナーとの時間を楽しんでいるようなので私もこれはこれでいいかな～って思った。
少々恥ずかしいけれど。
履きなれていない靴せいか、靴擦れをおこしかけていたのでちょっと助かったかもと……正直、ほっとしてしまった。
カイユさんとダルフェさんは、にこにこしてこちらを見ていた。
良かった。
これ、怒られるようなマナー違反じゃないってことだよね？
まあ、カイユさん達以外は私とハクちゃんを気にする人達はいないし……。
「＜花鎖＞切れなかったね、ハクちゃん」
自称とっても丈夫なハクちゃんだけど。
「ああ。りこのおかげで、我は今後も無病で長生きできそうだな」
内臓を吐きそうだとかって言ったり、かけらの涙が出しちゃうし……高齢者な旦那様なんだから、やっぱり病気とか心配だった。
私自身も、元気でいなきゃと強く思う。

心配性で怖がりなハクの前で、病気になったりしたらいけない…
…元気な、りこ、でいなきゃって。
ハクのために、自分自身のために……。
「ふふっ。私もこれから1年間、元気でハクちゃんと暮らせるね！」
ハクちゃんは私の髪に手を伸ばし、＜花鎖＞の冠に触れた。
少しずれかかっていたらしいそれを、もとの位置に戻しながら言った。
「もちろんだ。これでりこも、無病息災決定だ」
竜族は生涯ただ一人の、つがい、しか愛さない。
愛せない。
「来年も再来年も、りこは息災だ。……世界が終わろうともな」

愛しい人への想いを込めて＜花鎖＞は毎年、編まれる。

「ふふっ。世界が終わるなんて、私は嫌よ？　これから貴方といっぱいいろんな所に行って、いろんなものを見て……たくさんの素敵な思い出を、私達は作るんだからっ！」

それは、まるで。
年に1回だけ見ることができる＜赤い糸＞のよう。

「では、【世界】を遺そう。……我は貴女の望みのままに」

＜花鎖＞、それは華やかで甘い。
〝想い〟の鎖。

>i6421—201<

番外編　～花鎖～　後編（後書き）

＊やえ様が挿絵を描いてくださいました。いつも素敵なイラストをありがとうございます！
提携サイト『みてみん』でやえ様のオリジナル作品も見ることができます♪
（注）このページのイラストの著作権は作者である『やえ様』にあります。

１２月～１月の小話（１）　～ある日のハクとりこ・２～（前書き）

＊２００９年１２月４日の活動報告からの転載です。

12月~1月の小話（1）　~ある日のハクとりこ・2~

「ふわあ~、紅葉が綺麗だね。でもこの1週間で葉っぱもずいぶん落ちちゃった……」

午後の陽射しの中。

赤や黄色の葉がきらきらと輝いて、はらりはらりと舞い落ちていく。

葉がほとんど落ちてしまった木々よりも、地面のほうが華やかな絨毯みたいだった。

落ち葉を踏む乾いた音とふわりとした感触に、もうすぐ冬なんだと改めて感じた。

「りこ。寒くないか？」

ナナカマドに似た葉を持つ木を見上げていた私に、ハクちゃんが言った。

ハクちゃんは、人間の私が風邪をひくのを心配し……怖がっている。

この世界では風邪で人が亡くなることも珍しくない事で、数年前には大流行がおこり大勢の人が亡くなったそうだ。

風邪……インフルエンザかな？

ちなみに。

竜族は風邪をひかないのだと竜帝さんが言っていた。

種族が違うから、ウィルスに感染しないのかな？

私は数日前から、セイフォンからずっと日課にしていた早朝散歩

をしていない。

最近、朝晩は特に冷える。

だから。

ハクちゃんは朝の散歩を許可してくれなくなった。

ー気温が低く、体に障るから駄目だ。風邪をひいたらどうするのだ？　り、りこが風邪……我のりこが風邪！？　想像しただけで、臓腑を吐きそうだぞ……ぅぐっ！

口を手で覆い前屈みになるハクちゃんの広い背中をさすりながら、早朝のお散歩は春までお休みすると約束した。

そんなに簡単に口から内臓が出ちゃいそうになるなんて、一度人間（竜？）ドックとかに行って身体を調べてもらったほうがいいのかな？

なんたって、実年齢はかなりのお年寄りらしいし……。

今度、竜帝さんに相談してみよう。

「りこ、必要なら我が外套をとってくるが」

「大丈夫よ、ハクちゃん。このショール、すごくあったかいの。チルチルっていう動物の毛で編まれたもので、竜帝さんの冬の一押し商品なんだって。毎年、すぐ売り切れちゃうらしいよ？」

竜帝さんがくれた真っ白なショールは大判で（私はこの世界の女性より小柄だから、よけいに大きいのかも）肌触りも最高だった。

しかも、とっても暖かい。
チルチルの製品は、貴重で高級品。
さすが社長、太っ腹です。
図鑑で調べたチルチルは、アルパカみたいで可愛かった。
長い睫毛に縁取られた、大きくてつぶらな目がラブリー！
しか～し、あの見た目で人間を襲うこともある凶暴肉食動物なんて。
なんか詐欺だ。
チルチル、撫で撫でしてみたかったのにな。

ハクちゃんと手を繋ぎ、盛りを過ぎた紅葉を眺めながらのんびり歩いていると何かを踏んだ。

「ん？　あっ」

これ……どんぐり？
右正面にある黄色い葉を持つ大きな木の下に、私が知ってるどんぐりより少し大きい実が無数に落ちていた。

「ハクちゃん、これ……」

「ユニの実だ。りこ、それは食えないぞ？　毒ではないが、食用には適さない」

ハクちゃん。
貴方、自分の奥さんがこれを拾い食いする女だと……そんなに食い意地がはってる印象をもたれてるなんて、かなりショックなんですが。

「ユニ……拾っていこうかな」

キッチンの窓枠の並べたら、とってもかわいいと思う。

「腹を壊すぞ？」

「食べないよ！」

2人でしゃがんで、地面に落ちているユニを拾い始めた。
右手で拾い、左手に集めて……たくさん落ちているから、すぐに私の手はユニが満員御礼状態になった。
ふと、斜め前で黙々とユニを拾うハクちゃんの手を見ると。

1個。
大きな手のひらに1個だけ。
意外だったのでユニを拾うのはやめ、ハクちゃんの様子をさりげな〜く観察することにした。

ハクちゃんはしゃがんだまま、金の眼で地面をじーっと睨み。
数分後、1個だけ拾って手のひらにのせ。
先に拾ってあったユニの実と並べ、それをまたまた数分間じーっと見て。

ポイッと、せっかく拾ったユニを捨てた。
彼の手には先にあったもの1個だけ……。

それを延々と繰り返していく。

あ、もしかして……。

私はハクちゃんの隣に移動して、手元を覗き込んだ。
大きな手の平にのった小さなユニの実を見ている私に、ハクちゃんは言った。

「我は、りこに1番良いものをやりたい」

たくさんじゃなく。
1つを。

「うむ。……りこ」

私の手に、ユニの実を1つ置いてくれた。
これは、私のために選んでくれたユニの実。

「ありがとう、ハク。私……すごく、すごく嬉しい！」

ハクちゃんの選んでくれたユニの実だけを、私は持って帰った。
自分で拾っていたものは、ユニの木の根元に置いてきた。

ハクちゃんのくれたユニの実は、虫にかじられたのか……いびつな穴が3箇所開いていた。
まるで、笑っている顔みたいだった。

１２月～１月の小話（２）　～似たもの同士？～　お宝展示室（１）も掲載

２０１０年１月２０日の活動報告からの転載です。

「お宝展示室」は、読者様の描いてくださったイラストを掲載しています。

「かんさつ……鑑札？」

ナマリーナに＜鑑札＞を付ける為に、人間の男性が南棟にやってきた。

それがこの人だった。

「そうです、これは陛下の所有印です。奥様の鯰につけておけば将来的に湖に放し、捕獲されたとしても食用にされることはありません」

竜帝さんが契約している術士のクロムウェルさん。

ダルフェさんと同じ青い騎士服を着たおじ様の手には、１円玉大の薄いコイン……コインでは無く、鑑札ですね。

この人も私が見上げるような長身だけど、竜族ではなく人間の男性だった。

４０代……後半くらいかな？

ハクちゃんと対照的な浅黒い肌に、濃茶の目。

短くカットした、白髪混じりの黒髪。

彫りの深い顔は、お母さんがファンのドイツ人俳優に少し似ていた。

全体的な印象は俳優さんというより、軍人さん……Ｋ１選手みたい。

同じ制服なのに、ダルフェさんはどう見ても＜騎士＞でクロムウェルさんは＜軍人＞さんだった。

「これで術式による追跡、また安否確認も可能となります。他大陸

は範囲外ですが……装着完了です」

捲くっていた袖を戻しながら、クロムウェルさんは私に言った。
彼は大きな網でナマリーナを捕獲して、手際よく作業を進め……ほんの数分で、鑑札をつけ終わった。

「ありがとうございました。クロムウェルさん」

春になったら大陸を移ることになったから、ナマリーナは引越し前に湖へ帰してあげることにした。
巨大鯰のナマリーナを、ずっとこの池で飼うのは無理だし……。
そう考えているのだと、私は竜帝さんに一昨日のお茶の時間に会ったときに話した。

そして本日。
女神様から彼が派遣されたのだ。

クロムウェルさんは濃茶の目を細め、私の腕の中大人しくしているハクちゃんを見た。
そうすると目じりに皺が増えて、少し柔らかな雰囲気に変わった。

「……＜監視者＞殿。いつも奥方様に、そうして抱っこしてもらっているんですか？　竜体の貴方にも好意を持ってくれる花嫁で良かったですね。久しぶりに竜体の貴方に御会いしましたが……ああ、やはり私の陛下はなんと美しい！　小さいだけの貴方などとは全く違う！」

はいっ！？

「私の陛下は＜監視者＞殿などとは、品格が違う。鱗の輝き、絶妙

な手足のバランスに優雅な尾……こうして＜監視者＞殿を見ていると、あの方の美しさが改めて実感できる！」

な……なによ、この人！？

「カイユ殿、君もそう思うだろう？」

池の前に立つクロムウェルさんと、ハクちゃんを抱っこして鑑札を付ける作業を見ていた私の間にはカイユさんが腕組をして……仁王立ちしていた。

水色の瞳がクロムウェルさんを睨んだ。

どうやらカイユさんはクロムウェルさんを少々……かなり嫌っているみたいだった。

「私には色の違いしか分からない。終わったのならさっさ退室しろ、クロムウェル。この子に……トリィ様にそれ以上近寄るな、汚らわしい！　この変態めっ……あと一歩でも近寄れば、私がお前を切り刻むっ！」

へ、変態？

「心配無用だ。私は陛下にしか興味がない。あぁ竜帝陛下、私の女王様！　人型は言うまでもなく、竜体の陛下もぞくぞくするほど美しい！　それに比べ、＜監視者＞殿のこの姿は……いや、比べるレベルに達していないか」

言動から察するに、クロムウェルさんは竜帝さんを？

も……もしかして、この人がダルフェさんが言ってた彼に求婚した人間の男性なんじゃないの！？

でも、それにしたってハクちゃんへの評価がひどすぎる！

ここは妻として、断固抗議すべ～しっ！！

「ちょっ……良く見てください、クロムウェルさん！　ハクちゃんだってとても綺麗ですし、すご～く可愛いです。特にこのぽっこりしたお腹のライン、見蕩れるちゃうくらい素敵だと思いますよ？」

私はカイユさんの隣に立って、クロムウェルさんからよく見えるようにハクちゃんを両手で突き出した。

私にとってハクちゃんは、世界一かわゆ～いおちびちゃん竜なのだ！

青・赤・黄の竜帝さんに会ったけれど、やっぱりハクちゃんが一番綺麗で可愛いかった。

ま、まぁ確かに人型のお顔は悪役系で、好感度ゼロかもしれませんが……。

ゼロどころかマイナスかもしれないけれど……くっすん、一応美形なのにな。

しか～しっ！

竜体のハクちゃんのこのかわいさったら、もうっ……堪んないんです！！

「綺麗で可愛い……この＜監視者＞殿が？　ふっ……ご冗談を。私の陛下こそ、世界一綺麗で可愛らしい竜です。あぁ、異界人である奥方様にはこの世界の［美］が、正しく理解できていらっしゃらない。それとも元々の美的感覚が狂われているのか……どちらにしろ、お気の毒なことだ」

くううう～！　鼻で笑ったよ、このおじさん！

「……私のハクちゃんは、世界一かわゆいおちび竜です」

「……私の陛下こそ、世界一愛らしく美しい竜です」

私とマッチョ術士の間に、火花が散った。

ーーー

＊提携サイト『みてみん』に、かぼちゃ様が投稿してくださったものを転載させていただきました。
（『みてみん』　ｈｔｔｐ：／／ｍｉｔｅｍｉｎ．ｎｅｔ／　とは、『小説家になろう』へのイラスト転載が可能な提携サイトです）

12月〜1月の小話（3）　〜ハク・2〜

竜族は人間と違い、非常に温和な生き物だ。
動物ではもっとも長命種であり、力も強く天敵が存在しない。
そのため攻撃性が徐々に薄れていった。
近代種にいたっては、自分が人間に短剣で腹を刺されても「これくらいで死にゃしねぇんだから、報復しなくともいいんだ。ほっときゃ、治るしな」などとほざく個体まで出始めた。
自己防衛本能まで低下してるというか……。
まあ、これはランズゲルグのことだが。
そのような性質に生まれてしまっただけのことなので、責める気も叱るつもりも無い。
しかし。
生まれ持った性質そのままに竜騎士に接していては、飼い犬に手を咬まれる結果になるだろう。
甘やかせば、増長する……あの幼竜共のように。

「ハク、ハクちゃん！　オフラン君達、すごいねっ。これが練習試合なんて……！」

「そうか？　これはりこにとって、すごい、のか……ふむ。なるほどな」

ダルフェに誘われ、りこは竜騎士共の屋内鍛錬場に【見学】に来た。
鍛錬場といっても、単なる、何も無い場所、だ。
大広間の半分ほどの空間には壁と床、そして高い天井があるだけ

だ。

同行したカイユはりこの為に椅子とひざ掛けを用意した後、父親に話があると言い隣接された騎士団本部へと向かった。

ダルフェは幼竜共に二言三言指示し、練習、を開始させた。

自分は参加せず、数ミテ離れた床へと腰を下ろした。

鮮やかな緑の目玉が幼竜共の動きを追っていた……。

赤い頭にのった幼生も、父親と同じように幼竜共を見ている。

ダルフェが息子だけでなく、りこにも、これ、を見せる意味。

それは、我にはどうでも良いことだ。

積もった雪で散歩ができぬりこにとって、暇つぶしになればそれで充分なのだ。

「ねぇ。ハクちゃんも、こういうの出来るの？　……剣や刀を持ったり、使ったりするの？」

我を抱く細い腕に力がこもった。

りこの金の眼がどこか不安げに、我を見下ろした。

ふむ、これは……。

剣技に感心はしても、楽しんではいない。

「いや。我は剣も刀も……そういったものは持たぬ」

「そ、そう……」

りこの口からは、かすかな吐息……これは、安堵したということだろうか？

この幼竜共。
我が見たところ素材自体は、悪くない。
だからこそ。
ダルフェは＜青＞の為に、これらを＜青の竜騎士＞に仕上げようとしている。
問題は【主】である＜青＞だ。
うまく調教すれば、こやつ等はそこそこの猟犬になるだろう。
まあ、このままでは駄犬だがな。
愛玩犬ではなく、猟犬として＜青＞はあれらを扱わねば駄犬以下……野良犬になりかねん。
竜騎士の躾けは技術なので、＜青＞は学べば良い。
在位中の四竜帝で最も躾けの技術に長けているのは、ベルトジェンガだ。
あれは手持ちの竜騎士を完全に掌握し、手足のように使うことが出来る。
ランズゲルグは奴に教えを乞えば……ふむ、あの2人は相性が悪かったか。
相性？
くだらんな。
ベルトジェンガはもうすぐ死に、ランズゲルグには生きる時間が残っている。
奇跡のように交差したその一瞬を、そのようなくだらん理由で無駄にするとは。

「そうなんだ……ちょっと、ほっとしたかも。ハクちゃんは剣とか興味ないの？」

「ない。りこが望むなら、剣技を＜覚える＞が……」

こやつ等は、わざと極端に遅く動いておるな。
刀ではなく剣を使っておるのも、ダルフェの指示だろう。
ふむ……なるほどな。
この幼竜共は、力の調整が課題か……。

「い、いいよ覚えなくて。ハクちゃんが剣なんて、物騒というか…
…あ、でも包丁は使えた方がいいかもね。結婚したら旦那様と一緒
にお料理するのって、憧れてたし。そうだ！　今度一緒にご飯を作
ろうよ！？　ケーキができたんだから、きっとお料理もできるよね
っ」

りこが楽しそうに言った。
りこが楽しいと、我は嬉しい。

「そうか。ならば我も、ダルフェにエプロンを縫ってもらわねばな」

「えっ！？」

りこが楽しいなら……望むなら。
我はりこと、お料理、がしてみたい。

「唐草模様のスカーフではなく、我はりこと、お揃い、が良い」

「お……お揃いって…フリフリの花柄がいいの？　ほ、本当に！？」

りこの声は、後半部分が少し高くなった。

はて？
何故そのように驚いたのだろうか？

「うむ。我はりこと同じものが良い」

「そ……そっか。う～ん、それはそれで……ま、いいかっ！」

後日。
ダルフェが我に、念願のりこと揃いのエプロンをくれた。

何故か。
竜体仕様だった。

人型でりこと‘お料理’してみたかった我は、少々不満だった。
だが。
ダルフェ作のエプロンを装着した我を、りこが強く抱きしめながら‘ちゅう’をしてくれた上に、これ以上はないというほど讃えてくれたので良しとした。

りこ。
我には剣も刀も必要ないのだ。

貴女を守るのは、この我。

貴女が綺麗だと褒めたこの爪で、あらゆるものを切り刻み。
愛しい貴女に触れる、この手で全てを引き裂こう。

第77話

週末は、セシリアさんの授業はお休み。
だからいつもより遅くベットから出て、のんびりと朝のお風呂を楽しんだ。
お風呂から出てキッチンに行くと、私とお揃いのエプロンをしたハクちゃんがダイニングテーブルにマグカップを置くところだった。
小さな手がそっと置いたマグカップには、桜によく似た花と2羽の小鳥が描かれていた。
初めて街に行った時に、カイユさんのお気に入りの雑貨屋さんでダルフェさんが買ってくれたのだ。
私は陳列されたそれを、思わず手にとってしげしげと眺めてしまった……桜、大好きだったから。
そんな私に、お店のご主人は花の名前を教えてくれた。
桜かと思った花は、ラパンの花だった。
「私のカップ、用意してくれたんだね。ありがとう、ハクちゃん」
毎朝このマグカップで、私は飲み物を飲むようになった。
それに気づいたハクちゃんは、こうしてマグカップを戸棚から出してテーブルに用意してくれるようになっていた。
私もエプロンをして保冷庫から牛乳瓶取り出し、中身を小さな片手鍋に移して弱火にかけた。
隣の焜炉で、鋳物のフライパンを使ってスクランブルエッグを作る。
フッ素加工のフライパンに慣れていた私は、最初の頃は鋳物のフライパンだと卵を焦がすことも多かった。
今はこつをつかんで、うまく使えるようになっていた。
ハクちゃんがお皿を差し出してくれたので、そのお皿にスクランブルエッグ、ロールパンとハム・カットした果物を盛った。
全てのせ終わると、お皿を両手でしっかりと持ったハクちゃんが

ふわふわ飛びながら、ダイニングテーブルに運んでくれた。
ランチョンマットの上にはフォークとナイフ、スプーンも並べてくれていた。
私はハクちゃんが準備してくれたマグカップに、温めた牛乳をたっぷりと注いでから席に着いた。

それは、すっかり日常になった朝の風景。

「では、いただきます」
「いただきます、なのだ。りこ、あ～ん」
うふふっ。　なんかこういうのって、とっても幸せ気分になれちゃうんだよね～。
ほのかに甘いホットミルクを飲みながら、そう思った。

温室の床に毛足の長い暖かな絨毯を敷き、ローテーブルの前に正座をして手紙を書いている。
セシーさんへ出したお手紙が添削されて戻ってきたので、もう一書き直して……それと一緒に封に入れる新しい手紙の下書きも、今日中に終わらせる予定だった。
前回の内容はお世話になったことへのお礼と、お別れの挨拶ができなかったことへの謝罪。
それと近況報告。
元気で暮らしていること、初めて街に出かけた時の事も書いた。
ハクちゃんとの‘結婚’の事は、セシーさんは察してくれる気がしたので書かなかった。
彼女はハクちゃんが人型になれるのを、知っていたんだと思う。

今思うと、そうとしか思えない言動の数々が……。
ハクちゃんと毎晩一緒にお風呂に入っているのだと、私が話した時のあのセシーさんの表情……。
あの顔、絶対誤解してるよぉ！
うう、恥ずかし～い。
頬が火照ってきたのを感じ、どきどきする心臓を落ち着かせるために視線を便箋からガラスの向こうに移した。
温室の外は銀世界。
春を告げる花が現れ、＜花鎖＞のお祭りが1週間前に行われたんだけど……う～ん。
私的にはまだまだ春じゃないんだけどな～。
日本の立春だって実際は真冬だから、それと似た感覚なのかな？
はっきり言って、私から見ればまだまだ帝都は真冬だ。
朝晩どころか、日中だって外は氷点下だし。
「まずは、セシーさんへのお手紙を直さないと。次はミー・メイちゃんで……」
新しい手紙には＜花鎖＞のダンスの事とかも、書こうと思う。
あと、春になったら大陸を移ることも。
前回はまだ色々決まってなかったからそのことには触れなかったけれど、もうだいたいの日程が決まったようだっだし……私は意見を言える立場じゃないし知識も無いので、移動の事はハクちゃんと四竜帝さん達におまかせしちゃってるのだ。

ダルド殿下への手紙を最初にに書くべき（資金援助してくれてるし……）だとは思うけれど、彼とはほとんど交流が無かったので手紙を書こうとしても、全く筆が進まなかった。
だから……つい、後回しにしちゃっている。
私は当初、＜ダルド殿下の良心を利用して、こちらの世界で生き抜こう計画＞を実行していたので、なんとな～く後ろめたいというか……彼に苦手意識を持つようになってしまった。

彼が提案した余興の失敗で、私はこの世界に連れて来られた。
そのおかげで、ハクちゃんの側にこうしていられる。

許せない。
ダルド殿下も、ミー・メイちゃんも。
家族の悲しみを思うと、許してはいけないって……。

でも、感謝もしている。
ハクと会えたから……。

矛盾した思いが頭の中をぐるぐる回り、複雑な感情が胸をちくちくと刺す。
セイフォンを離れても、彼は私の後見人として生活費を援助してくれている。
彼は一生、死ぬまで＜慰謝料＞を払い続けるのだとカイユさんは言っていた。
援助してくれるダルド殿下に、どの程度の頻度で礼状を書くべきかと質問した私に……ダルフェさんは、言った。

―礼状？　基本的には礼状なんて、書いてやる必要はない。まあ、姫さんの性格じゃ向こうに非があるとはいえ、金にかんしちゃ礼の一つも言いたいのは分かるんだけどね。そうさねぇ～年1回、一筆書いてやれば充分なんじゃないかぁ？　ああ、注意が一点。どの大陸にいようと＜竜帝＞を通してくれな。

援助してもらっているに、それでいいのかと訊いた私にダルフェさんは苦笑した。

―姫さん。あの坊ちゃんは＜慰謝料＞を払い続けることで、罪悪感から多少なりと救われる。あいつは自分自身の為にも金を払うっ

てわけだ。しかも竜帝公認の＜監視者のつがい＞の後見人の座を手に入れた。それにはあいつが払ってる金額以上の、価値があるんだ。俺から見れば今回の件で、セイフォは‘得’をしたって感じだなぁ～。

得をした……後見人は得なんだろうか？

ハクちゃんは、彼を嫌っている。

ものすごく、嫌っている。

あのハクちゃんに、＜監視者＞に嫌われてしまったのに得することなんかあるんだろうか？

＜監視者＞の奥さんになった私は、王族とか貴族とか……特権階級の人からは、距離を置く必要があるようなのだ。

権力者の中には私に取り入って＜監視者＞であるハクちゃんを利用しようと考える人もいるから、気をつけなきゃいけない。

私みたいな‘甘ちゃんなお子様’は、海千山千の彼等にかかればコロッと信用して、懐柔されちゃうから……竜帝さんが、そう言っていた。

竜族と人間の均衡を保つ為にも、人間側について欲しくないのだと彼ははっきり口にした。

竜族は世界の覇権とかには興味が無く、人間との平和的な共存を望んでいるから……ハクちゃんの【力】を利用しないって言った。

その言葉に、嘘は無いと思う。

どうみても竜帝さんは、ハクちゃんを大事に思ってるもの。

四竜帝の総意により、現在の私は人間社会から隔離されている状態。

そんな私が唯一お付き合い（？）してるのがダルド殿下達……セイフォンだ。

この世界で、人間の国の中でセイフォンとだけだ。

セイフォンだけ。

政治的に得することが、何かあるのかもしれない。

政治・得……。

最初、彼の良心にすがってこの世界で生き抜こうと考えた私だけど。

利用されてるのは……私？

彼は誠実な人だった。

セシーさんやミー・メイちゃんも良くしてくれた。

「ハクちゃん……これ合ってる？　赤字のところ、直してみたんだけど」

もし、ハクちゃんが私をつがいにしてなかったら。

私って、どうなってたんだろう？

ハクに会えなかったら。

この世界で私は……誰か他の人に恋をして、結婚して暮らしてたんだろうか？

有り得ない。

元の世界が恋しくて、独りだってことが寂しくて。

ダルド殿下達を憎んで、恨んで……。

「どれ。……ここと、ここは良い。ふむ、後はここだけだな。綴りが違う」

ハクちゃんが、間違ってる箇所を指してくれた。

全身に沁み込んでくるかのようなその声に、暗い場所に入りかけ

ていた意識が引き戻される。

「……りこ？」

無意識に。

私はペンを置き、両手でハクちゃんの服を握っていた。

ぎゅっと、強く握り締めていた。

「あ……ご、ごめんなさい。つい、その。なんでもないの」

ハクちゃんの膝から慌てて手を離した。

腕が触れ合うほど近くに寄って正座をして、彼は私が手紙を書くのを見ていた。

私が言わなくても靴を脱いで絨毯に上がり、しかも靴をきちんと揃えることが出来た。

私のすることを見て、同じようにしてくれたのだ。

ハクちゃんのそういうところって、すごいと思う。

「ありがとう、ハクちゃん。辞書を見て、書き直すね」

ハクちゃんは私が質問しない限り、一切口を出さない。

側で見ているのだから、間違ったものを書いてるって気づいてるはずだけど言わない。

ここもまた、彼がすごいと感じるところで……。

私が彼の立場だったらつい必要以上に口出ししてしまい、ちっとも勉強にならなくなる。

小学生の時、宿題をしていて分からない問題をお父さんに質問しながら勉強したら、ますます分からなくなったことがあった。

お父さんはヒントをくれつつ……私がもう少しで答えを出せそうなのに、それを言ってしまうのだ。

そして「答え、分かったろう？　ほら、次やろう！」って、どんどん進めてしまう。

間違った答えを書いていると、書きかけのそれを消しゴムでさっさと消してしまって……。

普段は忙しくて遊んでくれないお父さんが、にこにこしながら相手をしてくれるのが嬉しかったから……だから、言えなかった。

答え、言わないで。
私が書いてるのを、勝手に消さないでって。

お父さん、どうしてるかな。
禁煙、ちゃんと続けられてるかな……。

安岡さんとお見合いして、結婚を決めた時。
お母さんは喜んだ。
お父さんは「……いいのか？」って、言った。

ハクちゃんもすごいけど。
お父さんも、やっぱりすごいよ。

あの言葉はとても重いものだったんだね。
あの時は、分からなかったけど。
ハクちゃんと……心から好きになった人と結婚した今は、お父さんが何故そう言ったのか分かる。

お父さん。
お母さん達を支えてくれてるよね……守ってくれてるよね？

「あ……なんかお腹空いてきたかも」

ああ、駄目だよ。
こんな気持ちのままじゃ、手紙を書けない。
「りこは腹が空いたのか。では茶に……いや、昼食にするか？」
私は持ち直したペンを置いた。

気持ちを切り替えなきゃ。
ハクちゃんの前で、しょんぼりしてちゃいけない。
元気で笑ってなきゃ……。

【元気】といえば。
生理がこないことを気にしていると知ったカイユさんは、人間のお医者様を手配してくれた。
でも、ハクちゃんは診察を受ける事を許してくれなかった。
体液から病気でないことが分かっているので、必要ないのだと言って折れなかった。
話し合いの余地皆無なハクちゃんの態度に、私もカイユさんも診察は断念した。

I女医だろうと、りこは診せん。医者が必要であるかどうかは、我が判断する。月経の件は心配無い、りこの身体に現時点で異常など無い。夫である我が毎日きちんと体液を採取し、確認しておるのだから安心しろ。

あの過保護なハクちゃんがそこまで言うなら、私は健康に違いない。
急な環境変化（なんたって、違う世界に来たんだしね）によるものだろうから、今後何ヶ月もこなかったらその時にお医者様に相談しようって事になった。
「この続きは、午後にするね。……約束した時間よりちょっと早いけど、竜帝さんの執務室に行こうか？　今日はお昼を一緒にしようって言ってくれたの。あ、なんか大事なお話もあるんだって……何だろうね」
カイユさんとダルフェさんは急な出張が決まり、昨日の早朝にはお城から出て……ジリ君は、カイユさんのお父さんに預けられていた。

私はジリ君が【おぢい】と呼ぶセレスティスさんに、まだ会ったことが無い。

会ってみたいとカイユさんに言ったら、彼女はちょっと困ったような顔をしたから……。

無理にじゃなくて、機会があったらでいいのと慌てて私は言った。

だいぶ譲歩してくれるようになったハクちゃんだけど、基本的には男の人を周りから排除したがる。

そんな危険なハクちゃんに、自分のお父さんを近寄らせたくないってカイユさんが考えるのも当然だもの。

言うんじゃなかったと、後悔した。

カイユさんを困らせちゃ、駄目。

カイユさんといえば。

あのカイユさんが……水の妖精みたいなカイユさんが、ダルフェさんが所属している青の竜騎士団の団長さんだったのだ！

カイユさんが連れて行ってくれた雑貨屋さんの店長さんが「団長」って、呼んだ事から分かったこの事実。

しかも、竜騎士団の順位は実力で決まるらしいのだ。

つまり。

カイユさんが最強ってことになる。

ハクちゃんが言うには、ダルフェさんの方が強いけれどつがいであるカイユさんに頭が上がらないため、彼は副団長。

騎士団は、在籍たった8名。

団っていうより、それだけしか居ないならどっちかっていうと……チームみたいな気がしなくも無い。

竜騎士の素質のある人は、超貴重。

ジリギエ君は竜騎士だった。

個体数の少ない竜族の中で、両親が竜騎士なんてことは宝くじ的確立らしく……すごいぞ、ジリ君。

君はスーパーエリート竜騎士ってこと！？

だからハクちゃんが、四竜帝を討てるほど強くなんて言ったんだろうか？

数が少ない竜騎士団の皆様は、必然的に多忙なわけでして。

私が帝都での暮らしにもすっかり慣れたので、カイユさんも本職（？）に復帰した。

カイユさんは渋ったらしいけれど、お父さんが説得したのだとダルフェさんが言ってたっけ……。

あのカイユさんのお父さんなら、きっとカッコいいおじ様なんだろうな～。

バイロイトさんみたいな、渋い系かな？

前団長さんだって言ってたから、クロムウェルさんばりの筋肉マッチョ系だったりして。

「このまま転移してよいのか？」

筆記用具と便箋を文箱にしまい、靴を履いた私にハクちゃんが言った。

あ、時々お茶菓子とか持っていくから……。

ハクちゃんって、本当に私のこと良く見ててくれる。

ありがたいな～。

最近、すごく丸くなったし。

「うん、今日は手ぶらです。お願いします、ハクちゃん」

もう魔王様は卒業（？）かもね。

「こんにちは、竜帝さ……」

ハクちゃんがいつものように転移して、連れていってくれた執務室。

女神様は書類が積み上げられたデスクからぱっと顔を上げ、私達を見た。

「げっ！？　おちびっ、急いでじじいを抑えろっ！　おい、お前はそこから動くなっ」

竜帝さんにそう言われ、とりあえずハクちゃんのお腹にしがみついた。

抑えるって、これでいいのかな……え？

竜帝さんの青い眼を追うと。

こちらに背を向けて、ソファーに座っている人がいた。

動くなと言われたのにその人は立ち上がり、ゆっくりと歩いて私の正面で止まった。

そこにいたのは青い騎士服を着た……。

「カイユ？」

違う。

「……吃驚したよ、ここで御対面とは」

声、低い。

背も高いし、体つきも……ほっそりしているけれど、男性だ。

「パス達に聞いてはいたけど、なんというか……貴方、いろんな意味で損な顔だね。で、お嬢さんが噂の奥方様だね？　ふふ、陛下が仰ってるように、確かにおちびちゃんだね」

ハクちゃんに蝉のようにくっついていた私を、彼は覗き込むようにして顔を近づけた。

私も彼のその顔を見上げて……凝視してしまった。

似てる、すっごく似てる。

肩で切りそろえられた真っ直ぐな銀髪に、水色の瞳。
カイユさんと同じ、髪と眼の色。
顔もそっくり……双子？
お兄さん？
でも、竜族なんだから兄妹なんて有り得ない。
じゃあ、この人は……誰？
他人にしては、似すぎてる。

「駄目だっ！　それ以上はやばいっ、下がれセレスティス！」

竜帝さんが怒鳴った。
机の上の書類が音を立てて、床に落ちた。

セレスティス？
今、セレスティスって……まさかっ！

私はハクちゃんの腰に回した腕に、さらに力を込めた。
「駄目、ハクちゃん、駄目よ！　この人っ、セレスティスさ……むきゃっ！？」
私の背中と腰に添えられていたハクちゃんの両手が、ぐっと私を自分の身体へと押し付けた。
「これ以上りこに寄るな、抑えがきかなくなる。……我はお前を傷つけるわけにはいかん。カイユが泣けば、りこが悲しむ」
ハクちゃんの冷たい声にも、涼しげな微笑は消えなかった。
「残念。殺してくれれば、ミルミラを追えたのに。ああ、僕が死んでもあの子は泣かないよ？　……そういう約束だからね。……おっと、珍しく乱暴だね、舞った。
銀色の髪が数本、舞った。
彼は一瞬で3メートル程後ろに下がり、床に方膝をついた。
彼の前には女神様が左手を掲げて立っていた。

上げられたその手には、青く鋭利な5本の刃物……爪!?
あの手でセレスティスさんを払い除けたっってこと!?
だから髪の毛が……ひょ、ひょえぇえええー!
「いい加減にしろ、セレスティス。ヴェルを困らせんな……それから、何度も言わせるんじゃねぇ! 死ぬのは許可できねぇんだ」
竜帝さんの艶のある青い爪が、30センチ位伸びていた。
竜体のハクちゃんがかぼちゃを切った時みたい……。
「おちび~、来るのがちょっと早かったな。まあ、いいけどよ。もう分かったみてぇだけど、こいつはセレスティス……カイユの父親だ。ま、顔見りゃ分かるか。そっくりだもんな」
竜帝さんが右手を軽く左右に振ると、長かった爪が一瞬で元の状態に戻った。
「ちっ……父親」
どうみても20代にしか見えない。
あ、そうか。 竜族は長命種だから……それにしたって。

違う。

私のお父さんと違いすぎるっ。
揚げ物を食べつつ特保飲料をがぶ飲みし、加齢臭に悩む私のお父さんとは全く違う~っ!!
「初めまして、おちびちゃん。僕はセレスティス、カイユの父だよ」
立ち上がったセレスティスさんは、ソファーに寄りかかりながらにっこりと笑った。
カイユさんとよく似ている端整なお顔に浮かんだ微笑みは、とっても穏やかで……甘い。
自分の頬に熱が集まるを感じて、急いで眼をそらした。
「は、初めまして! カイユさんにお世話になっている……ト、トリィです。あの、ご挨拶が遅くなって、申し訳ありませんっ」
「気にしないでいいよ。カイユが許可しなかったんでしょう? 僕

もずっとこうして会ってみたかったんだけど、あの子のお許しがでなくてね」

白い手袋をした右手で、自分の顔を撫でながら言った。

「僕とカイユ、そっくりでしょう？　会わせなかったのは、この顔だからだと思うよ。ふふっ……あの子は、意外と恥ずかしがりやさんなんだよね」

この人、まるで水の妖精の……王子様だ。

そう、王子様。

ダルド殿下は本物の王子様だったけれど、私的にはセレスティスさんこそが＜理想の王子様＞よ！

小さい時に憧れた、物語に出てくる王子様が本から飛び出しちゃったみたいっ。

女神な竜帝さんがお父さんと並ぶと、なんてお似合いなんだろう……クロムウェルさんには悪いけど。

やっぱり、女神様の隣にはマッチョより王子様が良い。

「僕の娘であるカイユは、君の母親になったようだから……君もジリと同じように僕のこと、おぢい、って呼んでもいいよ？　あ、ヴェルヴァイド様は駄目ね。貴方の方が年寄りだから、おぢい使用不可です」

おぢい。

女の子が夢見る理想の王子様みたいな、この人を？

おぢい……！？

「お、おぢいなんて、無理ですっ。王子さ……セレスティスさんって、呼ばせてください！」

「うん、いいよ。ふふっ……、おじいちゃま、でも大歓迎なんだけどな」

セレスティスさんは水色の瞳を細めて優しく……甘く微笑んだ。

私とハクちゃん、竜帝さんはソファーに座った。
セレスティスさんは扉の横に立った。
一緒に座って欲しいとお願いしたけれど、彼は微笑むだけで頷かなかった。
「気にすんな、おちび。ヴェルは蜜月期続行中……普通の竜族なら、雌を他の雄に見せることすら拒む期間なんだ。じじいなりに、人間のおちびに合わせてるんだ……この点じゃ、ヴェルは凄ぇよ」
向かいに座った女神様の言葉に、私は口を噤むしかなかった。
また、失敗してしまった。
穏やかな‘普通の生活’は、ハクちゃんが私の為にいろいろ抑えて……我慢してくれて成り立っている。
ハクちゃんは隣に座った私の左手にしっかりと指を絡め、握っていた。
こうしていないと……私とどこかが触れ合い、繋がっていないと蜜月期の雄の本能に引きずられて他人を傷つけてしまうから。
私は繋がった手の上に、右手も置いた。
「ハクちゃん。ありがとう……」
‘ごめんなさい’じゃない。
ありがとうなの。
感謝でいっぱいだから。
私は貴方に‘ありがとう’って言うの。
色素の薄い唇が降りてきて、私の唇と重なって……ゆっくりと離れた。
「う……まあ、仕方ねぇな。じじいがそれで大人しくなってくれんだから」
女神様は両手で顔を押さえ……隠していた。
竜族は人前で手や髪にキスすることはあっても、口にはしない。

それは竜族のつがいにとって、特別な……深い愛情表現だから。
でも、ハクちゃんは全く周りを気にしない。
私としてはちょっと……かなり恥ずかしいけれど。
今は、ハクちゃんの好きなようにしてくれてかまわない。
必要な事だって、分かるから……。

「もう話していいか？　飯食いながら話そうかと思ってたんだけどよ……カイユ達はダルドを迎えにシャイタンに行ったんだ。あの2人が城から出てる間はセレスティスが竜騎士達を仕切ってるから、ダルド達が滞在中の警備のこととか打ち合わせしてたんだよ。おちびが来る前に終わらせるつもりだったんだがな、ちょっと揉めて長くなっちまった」

ダルド……セイフォンのダルド殿下？

彼がこ、ここに来るのー！

初耳なんですがっ！？

「セシーと宮廷術士が一緒なんだが……道中ちょっと色々あって、セシーが怪我をしたって連絡が入ったんだ。あれに怪我をさせるような連中が相手のようだから、カイユとダルフェをやった」

セシーさんが怪我！？

宮廷術士って……ミー・メイちゃんも一緒ってこと？

「あのセシーさんが怪我したなんてっ！　まさか……カイユ達、危険なお仕事に行ったの！？」

壁に叩き付けられても、なんともなかったあの人が怪我するなんて。

連中って、何？

何があったの……どうしてそんなにまでして、帝都にダルド殿下達は来るの！？

「心配いらねぇ、あの2人が揃えば勝てる人間なんていねえって。明日の昼頃には、城にダルド達を連れて帰ってこれるはずだ……よし、今夜はあいつの好きな菓子を作るとすっかな～」

「りゅ、竜帝さん！　ダルド殿下達はどうして帝都に……」
「ん？　3年に1回は来るんだ。ダルドは餓鬼の頃、俺が面倒見てたんだよ。セシー達はあいつの護衛でついてきたんだが……あいつ等の今回の最大の目的は、おちびへの謁見だな」

竜帝さんの顔つきが変わった。

「＜監視者＞のつがいの後見人として、セイフォンの皇太子には貴女に会う権利がある」

深い青の眼から、感情が消えた。
これは……感情を消した‘表情’が無い顔は。
ハクと。
＜ヴェルヴァイド＞と同じ。
竜帝さんは、＜青の竜帝＞として私に言ったんだ。
「……はい。ダルド殿下に会います」
ハクちゃんと繋いだ手に、意識する前に力が入った。
そんな私の手を、ハクちゃんは口元に運び……冷たい唇に添えたまま言った。

「ほお……セイフォンの‘イケメン’王子か」

そう言ったハクちゃんのお顔には。
冷たい笑みが……ひえぇぇ～！
イケメンって言葉をそんなに根に持って、じゃなくて気にしていたなんてっ！
「あ～あ、だからぎりぎりまで黙ってたんだよ。おい！　おちび、じじいの抑えは任せたぞ！　これもお前の、大事な仕事の1つなんだからな!?　俺様は食堂に行って飯とってくるから、座って待ってろよ。俺様は唐揚げにすっけど、お前は本日のお勧め定食でいい

よな？」
いつもの竜帝さんに戻った彼は素早く立ち上がり、ソファーから扉に向かって走った。
ドアノブに手をかけながら、私に向けた顔は……苦笑していた。
「俺様が戻って来るまでに、じじいの機嫌を直しといてくれ！　じゃあな、頼んだぞっ」
「え？　ちょ、まっ」
少々乱暴に扉を開けて、女神様は廊下へと消えた。
「おちびちゃん、‘おぢい’からも頼むよ。この方がセイフォンの皇太子君の首をちょんぱしちゃったら、おぢいの老後の楽しみが減っちゃうから。よろしく頼むね……待ってよ陛下、僕もお昼にしますから。唐揚げ……じゃなくて、さっぱりしたものが食べたいな。う〜ん、歳のせいかな？　じゃあ、またね。おちびちゃん」
ハクちゃんと私にニコニコ笑顔で手を振って、セレスティスさんも竜帝さんの後に続いて執務室から出て行った。
扉がぱたんと閉まり、私とハクちゃんが執務室に残った。
「……ちょっ……あれ？」
今。
何気にとんでもない事、言ってなかった？
王子様なお顔で。
さらりと、言わなかった？

首をちょんぱ。
ちょんぱぁああ〜！？

老後の楽しみって、普通は温泉旅行や園芸とかじゃないのぉおおおお！？
ダルド殿下。
帝都にはハクちゃん以外にも貴方とって、危険な人物が生息していますっ！

なんで……どういうこと!?
貴方はハクちゃんだけじゃなく、セレスティスさんにまで嫌われてるんですかっー!!
座ったまま呆然と扉を見ていた私に、‘魔王様’は仰った。

「くくっ……明日が楽しみだな、りこよ」

ハクちゃんが私の指を真っ赤な舌で、ぺろりと舐めた。

「そ、そうかなぁ～?」

魔王様はご健在のようでございます。

お宝展示室（2）

～お宝展示室（2）～

読者様が描いて下さったイラストは私の『宝物』です。
宝物は側に集めておきたい。
そう思い、『お宝展示室』を作ってしまいました。
（提携サイト「みてみん」は、パソコンに疎い私でも、小説ページにイラストを転載できるので）
絵心ゼロの私にとって「四竜帝の大陸」のイラストを描いていただけたことは、とっても嬉しいことです♪

☆☆☆

―――

～お礼小話～

「似合うよ、その服。すんご～く、素敵。でも、でもぉ！」

本日もハクちゃんは黒い服を選んでしまった。

どことなくオリエンタルなデザインで、丁寧な刺繍が施されたそれは。

お世辞抜きに、似合う。

惚れた欲目とかじゃなく、１００人中１００人が「似合う、似合いますとも魔王様！へへ～」と、土下座をしてしまいそうな。

威圧感プラス恐怖少々というか。

「似合うなら問題なかろう？　帝都行きを決めた時に＜青＞に言って、黒いものを揃えさせておいたのだ」

ソファーに腰掛けたハクちゃんは、自分の腿の辺りをぽんぽんと叩きながら言った。

ムム？

初耳ですよ、今の。

セイフォンの衣装部屋より数倍も黒系の服が揃っていた謎が、解明しましたね……。

いかにも高価そうなものばかりだったから、竜帝さんは凄い出費だったのでは（汗）

ハクちゃんって、無一文って事も貢がれることも全く気にしてない。

ある意味、尊敬してしまうというか。

鋼鉄どころかダイヤモンド級の神経だよね。

繊細で、泣き虫なのに。

ホントに、不思議な人。

「りこ。早く、ここだここ」

ちょっと考え込んでいた私を、ハクちゃんが焦れたように呼んだ。

「ここ？」

ぽんぽん。

ぽんぽんぽんぽん。

まさか……。

「りこがいつも我にしてくれるので、我もしてみたい。りこを膝に乗せて、愛でたい」

ぐはっ！？
め、め、めでで？？
愛でるってなにー！？
私の膝の上でハクちゃんは『我は今、愛でられとるな』って思ってたの！？
確かに、可愛くて無意識に撫でたりしてるけど。

「りこ？」

真珠色の長い髪に飾られた金の眼が、私を不思議そうに見た。
ちょっと首をかしげる動作は、冷たい美貌に不似合いで……ちょっと、ううん、かなり可愛い。
ううん、どうしよう。
誰も見て無いけれど。
２人きりだけど。
自分からハクちゃんのお膝に座るのは、抵抗が……。
理由があれば。
座る理由。
必要性。
私は室内を見回し……花瓶の花を見て、とても良いアイデアが浮かんだ。
一石二鳥（？）だね、うん！

「ちょっと待ってて、ハクちゃん」

ハンカチを取り出し、柔らかなピンク色の花を花瓶から取り出し水滴をきった。
うっふっふ。
自然に膝に乗れて、しかも！

「ハクちゃん、お花つけて良い？　ほら、私もつけるからお揃いだよ！」

手早く一輪だけ、自分の髪にさして言った。

ハクちゃんは視線を動かし、ハンカチの花と私を交互に見て。

「りことお揃い？……うむ、良いぞ」

金の眼を細めて、うなずいてくれた。

魔王様なハクちゃんだけど。

けっこう乙女チックなのだよね。

彼はお揃いって言葉に、弱いのです（笑）

「では、失礼します……」

ハクちゃんの膝に腰を下ろし、真珠色の髪を手に取ったら恥ずかしさは吹き飛んだ。

変わりに闘志（？）が沸いてきた。

イメチェンだ！

魔王様だって、こんなに可愛いお花で飾ったら……もとは美形なんだから天使様になったりして！？

「ちょ、ちょっと！　駄目だよ、ハクちゃん。足りなくなっちゃうよ！？」

ハクちゃん用のお花なのに。

「りこの方が似合うぞ」

と、次々に私の髪に挿してしまい。

全く作業が進まなくて。

大きな手で私の頬を撫で、計画座礁に焦る私をあやすように優しいキスを顔中に落としながら。

「ずっと、思っていた。我もカイユのように、りこの髪に触れたいと」

金の眼に映る私は、ハクちゃんを飾る予定だった薄いピンクのお花をたくさん髪につけていた。

「ハクちゃ……んっ！」

広い胸に引き寄せられ。

抱きしめられると、ハクちゃんの香りがいっそう強く香り。

「っ……ふぁっ」

深い口付けに、頭の中が蕩けるようで。

「ああ、花を飾った我の妻はとても愛らしい。……このまま、喰らってしまいたいほどに」

「へ？」

これはまずいかも、と思ったときには手遅れで。
背中に当たる柔らかな寝具の感触に、寝室に転移したのだと確信し。

「我が飾った花を、我が愛でて……散らすのか。ふむ、これが風流ということか？」

違う、風流の使い方全く違ってますって！
どういう感性なのよ～！！
しかもまだお昼前だよ、午前中だよ！？

「ハクちゃん、何とんちんかんなこと言ってんのよ！？　ちょッ…
…やっ！」

結局、イメチェンへの野望は今回も。
魔王様の天然系策略によって、崩れ去ってしまった。
悔しいけれど、やっぱりハクちゃんにはかなわない。

だって。

魔王様のハクちゃんも、大好きだから。

ーーー

すがお許しください（汗）

ｙｕｍｉ様、掲載をお許しくださりありがとうございました。

番外編　～バレンタイン～

帝都のチョコレートは美味いと、りこが言った。
茶とともにカイユが用意したのは数種のチョコレート。
寒さの厳しい帝都ではこの時期、竜族はこの菓子を特に好んで食べるのだ。

「街にチョコレートを扱うお菓子やさんが何件もあるし。帝都ってすごく栄えてて……竜族って、とっても豊かなんだね」

銀のトレーに並べられた菓子を、摘もうとしていたダルフェの手が止まった。

「……姫さんは、なんでそう思うの？」

膝にのせた我の頭を撫でながら、りこは答えた。

「え？　お菓子の中でも、チョコは特別高価なもののはずでしょう？　竜族の皆さんは頻繁に買って、たくさん食べるんだってカイユが言ってたもの」

「姫さんはこれの原材料を他大陸から輸入し、加工してるってことが分かるんだなぁ。そのチョコを大量に消費する竜族は経済的に‘特別’豊かだってことも……。なるほどねぇ……姫さんの国は教育制度が整ってるんだな。つまり金持ちな大国だってことだ」

我がチョコレートという菓子の存在を知ったのは、りこと暮らすようになってからだった。
これが高価なものであるなど、我は知らなかった。

りこは「帝都のチョコレートは美味しい」と、言った。
この事からも、高価な菓子の味が分かる食生活を送っていた……
りこは庶民であったと言うが、この大陸の【庶民】とは大きな隔たりがある。
この黒い小石のような菓子を口にできる【庶民】が、この大陸に如何ほどいるだろうか？

「ううん、小さい国です。……島国なんです」

りこは我の咽喉を撫でながら答えた。
りこの‘お膝’はとても居心地が良い。
人型では‘お膝’に乗れぬので、我は竜体で過ごす時間の方が多い。
竜体だと抱っこもしてもらえ、その上‘ちゅう’も……良いことずくめなのだ。
人型の我には、あまりちゅうをしてくれんのでな。
ちゅう頻度は、竜体＞人型。
うむ……何故であろう？
身長差で顔に届かんからか？

「竜族と同じで、義務教育が……あ！　私の国では、チョコレートを渡して好きな人に告白する日があるんですよ？　異性への告白だけじゃなくて、お世話になってる人や友人にも……大切な人達にあげるんです」

むっ！？
チョコレートを渡しつつ告白とな？

告白。
我はりこに、告白すべき事があるな。

2日後。
我はりこにチョコレートを渡しつつ、告白をした。

「りこよ。実は、そのっ……セイフォンに居た時から、我はりこにおやすみの接吻をしていたのだ。我はりこが大好きであったので、触れてみたくてだなっ！　求婚しておらぬ身でそのような行為に及びっ……す、すまなかった！」

我の差し出したチョコレートの塊を食い入るように見つめたまま、りこは黙ってしまった。
も、もしや怒ったのであろうか！？

「旦那、それは告白じゃなくて、懺悔っていうんすよ。姫さん、後生ですから……それ、もらってやってください。けっこう大変だったんですよ、それ作るの」

「は、はい」

ダルフェに促され、りこは我の手からチョコレートを受け取ってくれた。

「うわ、……けっこう重い。ありがとう、ハクちゃん！」

りこが両手で持ったそれは。
我をかたどったチョコレートの塊。

りこが寝ている深夜に我自身が石膏に埋まり型をとり、それを元にダルフェがチョコレートで製作した『等身大チョコ』なのだ！

「うわ～！　良く出来てる……ハクちゃんチョコ、すごく可愛い！　食べるのもったいないよ!?　飾っておきたぁ～い！！」

りこの顔に笑みが浮かんだ。
怒っておらぬようだ。

「飾るのではなく、食べてくれ。本物の我の肉は硬く不味そうで、りこに食わせられんのでな。……さあ、りこ。この我を味わってくれ！」

ああ、その口で。
我を舐め。
齧って、含み……咀嚼し、喰らってくれっ！

「そお？　じゃあ、さっそくいただいちゃおうかな～。カイユ、今日のお茶菓子はこのハクちゃんチョコにしよう！」

「はい、そうしましょうね」

りこは我の分身チョコレートを居間のテーブルに置くと、キッチンへいそいそと入っていった。
その後を、カイユと幼生がついて行った。
居間には我とダルフェが残った。

ソファーに腰を下ろした我に、ダルフェが言った。

「……やっぱ、あんた本物の変態だな。さっきのあんた……姫さん

を見る眼が、妖しいを通り越して怖かったっす。変なこと考えてたでしょう？」

我が変態？
違うと思うぞ……多分。

「ハクちゃん。テーブルの上の読みかけの本、片付けてね。カイユ、真ん中にまな板を……」

りこが戻ってきた。
その右手には、刃物……包丁。

包丁？

「トリィ様、カイユが押さえておりますから。さあ、どうぞ」

カイユが我のチョコレートを持ってきたまな板に横たえ、両手で押さえた。

「はい！　こうしないと食べられないから……もったいないけど、仕方ないですよね？」

りこの言葉に、カイユは満面の笑みで答えた。

「そうです。仕方のない事ですわ」

りこは包丁の刃をあて、押した。

「そうですよね！？　ちょっと可哀相だけど……えいっ！」

ごろりと。
まな板の上を転がったのは。
我の頭部。
「私の力じゃ、胴は無理かな？　ここと、ここなら……よいしょっと！」
手足が根元から切り落とされた。
続いて、尾が……。
「はい、ダルフェ！　右足をどうぞ」
りこが微笑んでダルフェの手に、我の足をのせた。
「……」
ダルフェの緑の目玉が、我を見た。
緑の眼は、人型の我の下半身……足に向けられていた。
その眼に憐れみの色があるのは、気のせいだろうか？
「カイユには左足、ジリ君には尻尾ね。両手は後で、竜帝さんにあげようっと！」
りこに我の尾を手渡された幼生が、ダルフェの赤い髪の上に移動して尾を喰らい始めた。
「私は頭を…可愛いのになぁ～、食べるのがもったいない。胴は……あ、そっか！　後でハクちゃんに一口サイズに、細かくしてもらおう。よろしくね、ハクちゃん」

我の隣に腰掛けたりこの右手には刃物。
左手には我の頭部。

「り……り、りこ。そのっ、我の予定していた食い方と少々、いや、かなり違うというかだな……」

我の言葉に、りこは首をかしげた。

「だって、大きいからそのまま齧るなんてできないよ？　それに、こんなに可愛いハクちゃんチョコに、そんな残酷なことっ……私には無理！　こうすれば皆で食べられるしね」

ダルフェは無言でチョコレートでできた我の右足を見つめ続け。
その息子はすでに我の尾を平らげ。
カイユは左足を手で折り始め、それを皿に並べていた。

我はりこだけに、我を喰らって欲しかったのだが……。

「ハクちゃん。私……あ、あのね！　おやすみのキスの事は、嬉しかったよ？　だって、私……好きだったから。ずっと、竜の貴方が好きだったから」

りこはほんのり頬を染め、恥らうように小さな声でそう言うと。
我の頭部をまな板に置き、さらに細かく切断した。

「そうか。我もずっと、りこが好きだった。今も、これからも……」

我はそのうちの１つを摘み、りこに差し出した。

「りこ。あ～ん」

我はりこの口に、我の成れの果てを入れた。
チョコレートの我は、りこの温かな咥内でゆっくりと溶けるだろう。

「……うん、とっても美味しい。ありがとう、ハクちゃん」

内緒にしていたおやすみの接吻の件は、許された。
嬉しかったと言ってもらえ、ずっと好きだったという、告白、まで得られた。
我のチョコレートを微笑みながら食すりこを見れたので、これはこれで良しとすることにした。

「美味いか……。ならば、それで良い。我は満足だ」

貴女の腕の中では。
我は無力なチョコレート。

貴女の熱で溶かされて。
貴女の中に、消えてゆく。

「りこ、我のりこ。……もう1つ、告白、してよいか？」

愛しい貴女を捕らえるために。
極上の、甘い罠を仕掛けよう。

お宝展示室（３）

～お宝展示室（３）～

＜お宝展示室＞は、読者様が書いてくださったイラスト（宝物）展示室です。

ここには汀雲様のイラストと、もらっていただいた妄想小話を再掲載しています。

心がほっこりあたたくなるような、とっても素敵なイラストです。

りこに抱っこしてもらい、とっても満足気なハクです！

お鍋で反省中のハクも、すご～っく可愛いのです！！

汀雲様。転載のご許可を下さり、ありがとうございました。

＊注：このページに掲載されている３点のイラストの著作権は、イラストの作者様である汀雲様にあります。

　汀雲様がイラストを掲載してくださってるのは、こちら　ｈｔｔｐ：／／ｔｅｉｕｎｎ．ｈｐ．ｉｎｆｏｓｅｅｋ．ｃｏ．ｊｐ／４Ｄｒａｇｏｎ．ｈｔｍｌ　です。

＞ｉ４７６２－８０４＜

＞ｉ４７６３－８０４＜

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「さあ、好きなの使いなさい！　姫さんが作る異界の料理、楽しみ

だなぁ～」
「ありがとうございます、ダルフェ。汁物って、どの鍋が適してますか？」
ダルフェさんが5種類の鍋を居間のローテーブルに並べながら、首をかしげた。
「そうだなぁ。長時間に込むなら鋳物がお勧めだが……。姫さんの説明だと細かい具材を使うらしいから、そんなには煮込まないってことだよなぁ～」
私は『豚汁』を作ってみようと思い、ダルフェさんにお鍋を貸してほしいとお願いした。
セイフォンより寒い帝都で暮らしていたら、無性に豚汁が食べたくなってしまい。
材料も似た様な物（味噌っぽい調味料も市場見学に行ったときに発見し……あの時は、嬉しくて涙が出そうだった）が手に入ったし、お世話になっている皆さんにも食べてもらえたらって。
彼は自分の‘鍋コレクション’から数点持って来てくれて、どれにしようか迷っていたら……。
「りこ！我に任せるが良い。鍋選びには、自信があるのだ」
へ？
「ハクちゃん？」
「旦那？」
ソファーに腰掛けた私の膝で丸くなっていたハクちゃんは、ピョンッとテーブルに飛び移った。

食べることに全く興味無しのハクちゃんが鍋に詳しいなんて、ありえない無い。
私とダルフェさんは顔を見合わせてしまった。
私たちの戸惑いなど全く気づかないゴーイングマイウェイな旦那様は、小さな手で鍋の側面をこつこつ叩いていた。
いったい何を調べ……あー！！

「これは不可だな」

ガチャン！

「これも」

ゴトン！

「む、これもだ」

バキーン！

「これもいらんな」

ドスン！

「ちょっ！　何すんのよ、ハクちゃん！！」

ハクちゃんは次から次に鍋を蹴り落としてしまった。
さすがに怒ろうとした私だけれど。
次の行動で、怒るが失せてしまった。
ハクちゃんは1つだけ残った寸胴鍋の蓋をずらし、するりと中に入ってしまったのだ。

ま、まさか。

「りこ！　これが最も居住性に優れているぞ。反省部屋として合格だ！」

反省部屋？

蓋からちょこんと顔を出し、金の眼を輝かせるハクちゃんの言葉に私はぎょっとした。

純粋な彼に、鍋の間違った使用方法を刷り込んだ犯人は。

絶対、私だよね（汗）

「ハハハ…姫さん、その鍋は俺から旦那にプレゼントするよ。きっと今後も必要だぜ？」

ごめんね、ハクちゃん。

鍋に入ってる貴方はとっても可愛くて。

使用方法を訂正できない私です。

ーーー

お宝展示室（3）（後書き）

＊挿絵機能を使うにあたって、提携サイト『みてみん』に林が代理投稿させていただきました。

番外編　～第５７話編・その朝の出来事～（前書き）

＊第５７話でりことカイユの会話にあった『朝の出来事』のお話です。苦手な方にはお勧めできない内容（Ｒ１５）となっております。ご注意下さい。

番外編　～第57話編・その朝の出来事～

「ハクちゃん、こっちをひっぱると……ほら、リボン結びがとけたでしょう？」
「うむ、なるほど」

まだパジャマが上手に脱げない、小さな竜。
だからちょっとだけ手を貸してあげた。
パジャマを脱いだ白い小竜は、私の大事な旦那様。
ベットの上でちょこんと正座をして、パジャマを畳むその姿は……見蕩れるほど、可愛らしい。
ハクちゃんはパジャマを丁寧に畳み終わると、何故か私の枕の下へと押し込んだ。
不思議。
なんでかな？
本人がそうしたいみたいだから、別にいいんだけど。
「りこ、その……おはようの接吻を、人型でもして良いか？」
あまりに愛らしい旦那様をぽーっと見ていたら。
手をにぎにぎさせながら、ハクちゃんは金の眼で私を見上げて言った。
「え、う……うん」
瞬きより短い時間で人型になったハクちゃんは。
「りこ」
座っていた私を囲うように抱き、そのままベットに……。
うわぁ。
なに、この体勢はっ。
おはようの接吻を、こんな本格的（？）な体勢でするんですか！？
「りこ……おはよう」
そっと触れて、離れた唇。

小竜の時にしてくれたのと同じ、優しい口付け。

なのに、私は。

昨日の温室でのキスを思い出してしまい。

少し物足りないって、感じてしまった。

「お、おはよう。ハクちゃん」

昨日。

温室で、私とハクちゃんは……。

うう～っ何考えてるのよ、私ったら。

駄目、眼を開けてられない！

だって、貴方の吐息が。

あまりに近くて。

思い出してしまう。

「りこは我がぱじゃまを脱ぐのを、お手伝い、してくれた。礼に我が、りこのパジャマを脱がして畳んでやろうではないか！」

……へ？

脱がして、畳む……ぎゃあ！

しなくていい！

「そんなお礼いらな……ひゃんっ！　……ぁ」

ひんやりした手が、指が。

いつの間にか裾から進入して。

何か確かめるように……私に触れていた。

もちろん、パジャマの下は何も着ていない。

腰に添えられた大きな手が、動き。

ひんやりとした指先が肋骨を1本1本、ゆっくりと中心へ向かってなぞっていく……。

「んんっ！　ハクちゃ……っ」

「りこ……」
あ。
これって。
つまり……もしかして、お誘い、ってやつなの？
お手伝いがどうのっていうのは、遠まわしな言い方で……。
絶対そうだよね！？
男の人って、朝からそういう気分になることもあるって聞いた事がある。
朝から、今から？
どどど……ど、どうしよう！？
「大丈夫だ、我は……これは巧いのだ」
緊張で硬くなった身体に気づいたハクちゃんが、額にキスをしてくれた。
巧い……自分で言う？
さすが、ハクちゃん。
あ、まあ、確かにそうかも知れません。
昨日、身を持って体験致しましたから。
「う、うん。よ……よろしくお願いします」
ハクちゃん。
昨日の続き、私に教えてください。

「ハ……ク。ハクちゃんっ」
ボタンを1つずつ外しながら。

大きな手が、１０本の指が。
「……あ……っん！」
布の上から胸に触れ、撫でた。
撫でながら、転がされ。
大きな手で優しく包まれ……息が止まりそうになる。
「ぁあ……ハクちゃっ……」
「……りこ」
貴方の声。
大好き。
「りこ。我のりこ」
あぁ、なんて声。
耳から溶けちゃいそう。
ハクちゃん。
昨日は、ごめんね？
もう、朝とか夜とかどうでもいいから。
私だって貴方と……したかったんだもの。

今度こそ、ちゃんと記憶に残すから。

「ハクちゃん……」
よし！　思い切って。
私からキスしてみようかな？
「ハク……大好……」
ハクちゃんの首に両腕をまわし、引き寄せようとして。

拒まれた。

「へっ！？……ちょ、なんで外すのよ！？」
しかも、ハクちゃんは私の腕からすぽっと頭を抜いてしまったのだ。

「何故って……これではぱじゃまが脱がせられぬだろう？」
肩からパジャマをずらし、ささっと両腕を袖から抜いて。
私の背を左手でひょいっと少し持ち上げて、パジャマをするりと取り去った。
「よし、‘お上手’に脱がせられた。後はこのぱじゃまを畳むのだ！」
私の上から足元の方へ移動し。
ハクちゃんは正座をした。
そして、無表情ながらどことなく真剣な目つきでパジャマを畳み始めた。
「！？　……う……そっ」
私達が居るのは大きなベットの上で。
新婚で、２人っきりで。
私は貴方にパジャマを脱がされて、下着１枚身に着けてるだけ。
つまり、胸丸出しのパンツ１丁の情けない姿で。
真っ裸で正座してパジャマを畳む、冷酷系悪役美形顔の旦那様を見ていた……。
「うむ、上出来だな！　畳むのは我ながら、かなり巧い。脱がすのも‘お上手’なのだ。そうであろう？　りこ！　……りこ？」
畳むのが、巧い。
脱がすのは……お上手？
ふ～ん。
誰に‘お上手’なんて言ってもらったんでしょうかね？
「りこ？」
貴方の腕に抱かれてるのは、私じゃなくて……パジャマ。
「……」

する気が無いなら、なんであんなエッチぃ脱がせ方して、エロい触り方したのよぉ～！

ボタンいじりながら、違う所もいっぱい触ってたクセに！

も……もしかして、あれは単なる偶然？

あれが貴方の仰いました‘お上手な脱がし方’であって、その気なんて無かったってこと？

ぎゃあああ～、そんなあぁあああ！？

する気満々になっちゃった自分が恥ずかしいー！

勘違いしちゃった自分が、情けないようぉおおお！！

「な、なんでもない。……あははは……はあっ」

ねぇ、ハクちゃん。

やっぱり、胸がCじゃ駄目なの？

毎日お風呂でマッサージしたら、少しは大きくなるんだろうか……この歳じゃ、もう無理か。

私はぴちぴち女子高生じゃない。

もう限界まで育って、この胸なんだよね……。

「りこ、どうしたのだ？　自分で乳を揉んだりして……痒いのか？」

「か、痒くなんかないです！　くすん……ほっといてよ」

「乳をいじっとらんで早く服を着ろ、りこ。散歩に行くのだろう？」

乳。

揉む。

痒い。

いじる。

その顔でそんな単語を連発しますかっ、魔王様ー！

「お散歩、行きますとも！　ハクちゃんも早く竜体に戻って。抱っこでお散歩したいって言ってたでしょう？　……人型じゃ、抱っこしてあげられないよ？」

「む！？　それは困る。我は今日はりこの抱っこで散歩すると、昨夜から決めておったのだからな」
そう言いながら小竜に戻ったハクちゃんは、私のお膝にちょこんと座り。
「乳が痒い時は、遠慮なく我に言うが良い。‘お手伝い‘してやるぞ？」
「……けっこうです」

奇天烈謎思考回路ハクちゃんとこんな私の新婚生活。
はたして、夢見たような甘～いものになるんだろうか？
ちょっと、自信が無くなった私だった。

第78話

「ふん……弱いクセに」

ブーツの踵を物言わぬ男の顔面に落とし、水色の瞳を不機嫌そうに細めてカイユが言った。

「なんて馬鹿なのかしら、この男達。武人だろうと、人間なんかが私に勝てるわけないじゃない。私を誰だと思ってるの？　……＜カイユ＞よ？」

その死体が生きていて、耳が聞こえたならば。

それを知り、どう思うのだろうか？

後悔するのか、恐怖するのか。

＜カイユ＞に剣を向けたことを。

それとも。

その手で死ねた僥倖に。

武人として望むところだと、歓喜するのだろか？

まぁ、俺としちゃ。

んなことよりも、こっちの方が気にかかる。

「ハニー。それ踏み潰すんじゃないよ？　君のブーツが汚れるからねぇ」

機嫌の悪かったハニーは、止める間もなく3人をさっさと始末しちまった。

まあ、ハニーなりにちゃんと考えての行動だったから、術士には手を出さなかったが……。

「確かにそうね。おろしたてのブーツが汚れるのは、嫌だわ」

刀を払って血液を落とした後、ハニーは自分の手から外した白い

手袋で刃を拭いた。
柄から先端まで丹念に汚れを取り去り、俺の母親から送られた朱塗りの鞘にそれをしまった。
ハニーには、返り血の一つも付いてはいなかった。
赤いそれが噴出す前に、ちゃんと距離をとる。
それを計算した斬り方ができる。

血の臭いを怖がる母親……ミルミラの為に。

「ハニー。残りの2人はまだ殺しちゃだめだ。俺がもらっていい？」
それができる技量を持った竜騎士に、君はなった。
「そうね。私は手加減が苦手だから、口を割らせる前に殺しちゃうわね。……ダルフェにまかせる」
「了解、団長」
片眼をつぶって礼を言った俺に向けられた顔には。
「ふふっ……それ、最近ジリがすごく上手にまねするのよ？」
帝都を出てから、初めての笑顔。
セイフォンで＜娘＞を見つけ。
息子を産んでから。
カイユの笑顔が変わった。
いや、舅殿に言わせると‘戻った’が正しいらしいが。
「さっさと済ませるよ。子供達が、帝都で帰りを待ってるもんな」
透明感のある澄んだ……綺麗なだけじゃない、眩しい笑顔。
その微笑みを向けられた俺の胸は、まるで初めて会った時のように高鳴り。
君に初めて触れた時のように、温かいもので満ちていく。
「ジリには舅殿が付いてるから安心だけど、困ったチャンな婿殿といる俺達の娘が心配だもんなぁ～」
「そうね、まったく……あの方には新しい‘反省部屋’をプレゼントしたいくらいだわ」

君がもっと笑ってくれるように。
俺は俺にできる事をする。

シャイタンの王城からセイフォンの皇太子達を積んだ……乗せた馬車の御者台から降りて、濡れた石畳の上に立った。
街道の両脇は、俺の身長の倍はある雪の壁。
シャイタンと帝都を結ぶこの街道は、高い通行料をとるだけのことはある。
一般人の使う物より大きい、貴族用車両が対面通過可能な幅を持った2車線道路。
ここは完璧に除雪されている。
あまりに有名な……通称‘金づる街道’。
正式名称は入り口の門（ここで通行料を払う）に書いてあったみたいだが、見なかった。

帝都は湯が豊富なので、真冬でも多くの人間が訪れる。
治安が良いうえに、金持ち共を満足させる高級店も多い。
年間を通して観光地・保養地としての人気が高い。
だが、冬季は高地にある帝都への道中は雪深く険しい。
そのため以前は移動手段として、最高に高額な＜籠＞を使わねばならなかった。
シャイタンの先代王はそこに目をつけ、この街道を整備した。
専門の術士が練成した固形燃料が一定の間隔で埋め込まれ、雪を溶かしている。
ここを通れば、真冬だろうと馬車で帝都まで行くことができる。

通行料は＜籠＞の５０分の１の金額。
かなり、お得で……数倍危険。
＜籠＞よりは安い。
しかし、ここの通行料を払えるのかなり裕福な者だけだ。
金持ち限定ゆえに、強盗するにはもってこい。
ま、護衛に返り討ちって事が多いみてぇだが。

俺が手綱を取り、不機嫌なハニーは馬車の屋根に仁王立ちの状態でこの‘金づる街道’を通っていたら、予想通り刺客が現れた。
閣下に手傷を負わせた面子だった。
俺達の目的はこいつらであって、馬車にいる‘お荷物’はついでだ。

シャイタンにセイフォンの皇太子が寄ったのは、ここの王妃に会うためだった。
数年に１度、帝都に来る際には必ずセイフォン王の実妹である王妃に会うのだ。
陛下が手配した籠をシャイタンで降り、陸路で帝都に入る予定だった。
シャイタンの王城から帝都までは、整備された街道を馬車で急げばたった半日の距離だ。
竜体になって、馬車を掴んで飛べばあっという間の距離。
竜体で飛ぶ？

この餓鬼の連れて来た術士が、カイユの母親・ミルミラを殺した。
そのカイユを妻に持つこの俺が、こいつ等のために？

冗談じゃない。

最初は断った仕事だった。

セイフォンの皇太子のお迎えなんざ、まっぴらごめんだった。
側で聞いていた舅殿はいつものようににこにこ笑っていたが……
あれは‘王子様’の笑い顔じゃ無かった。

魔女閣下がやられた聞き、俺とカイユは行く気になった。
あの閣下に手傷を負わせるほどの刺客なら。
腕の良い術士とつるんでいるはずだ。
腕の良い……世界の暗部に生きる術士。
まっとうな生き方を選んだ術士達は、暗殺なんてことには関わらない。
術士は数が少なく、貴重だ。
大商人、貴族や王族、国家。
どこだって高待遇で雇ってくれるからな。
この大陸では、誰もが羨む華やかな職種だ。
俺は、俺達は。
ミー・メイのような表の仕事ではなく、裏の仕事に回される術士に。

俺達＜竜騎士＞の主である＜四竜帝＞は、訊きたいことがある。

陛下が考えていた通り【餌】の効果は絶大で、俺達が姫さんをセイフォンから帝都へと連れて行った後は諸国の刺客が皇太子に群がっていた。
だが、あの国には＜魔女＞が……セシー・ミリ・グウィディス将軍閣下がいる。
あの女は人間にしておくには惜しいほど強いし、頭も切れる。
皇太子を守りつつ、陛下の思っていた……それ以上の成果をあげていた。
成果。
皇太子の命を狙う者……＜監視者のつがい＞の後見人の座を欲す

るような、身のほど知らずな輩のリスト。
それと。
捕らえた術士からの【情報】。
どっちかっていうと、こっちのほうが価値がある。
裏の世界に生きる術士の持つかもしれない【情報】が、今の竜族には必要だ。

先月、陛下は姫さんの大陸移動の件を後見人である皇太子に告げた。
皇太子は姫さんが移動する前に、会いたいと望んだ。
陛下は了承し、籠を手配してやりこいつ等をシャイタンまで運んでやった。
表向きバイロイトがセイフォンからの仕事請け、旅客課のやつを派遣し……シャイタンの城までの契約だった。
そこで2日過ごす間に、魔女閣下が手傷を負った。
予想外だった。
予想外の……幸運だ。
皇太子の暗殺がいつまでも成功しないことに痺れを切らせた連中が、子飼い以外の術士も使い出したんだろう。

＜監視者＞を怒らせたペルドリヌは教主と上層部の術士達を失い、内乱状態。
姫さんに取り入る為の情報が欲しいと帝都に間者を送り込んでも、かたっぱしから‘行方不明’で成果ゼロ。
そういったことから＜監視者＞とそのつがいには、今は近づかない方が良いだろうと各国は考えたんだろう。
だから出来る事に……皇太子暗殺にさらに力が入るって訳だ。
今回は明らかに今までとはレベルが違う術士が、刺客として送られてきている。
＜監視者＞のつがいの後見人という【餌】は、俺等の探していた

モノを闇から引き出し始めていた。

ハニーが片付けたのは3人。

残ったのは＜星持ち＞であろうの術士と、武人が1人。

「銀髪の雌……あの＜カイユ＞か！　＜青の竜帝＞の側近中の側近だ。大陸最高位の竜騎士だぞ!?　どうする……ひくか?」

人間にしちゃあ大柄で、厚い外套を着込んでいる武人の顔は蒼白だった。

でかい体と黄ばんだ歯が見世物小屋の子猿みたいに震えてんのは、寒さのせいなんかじゃないだろう。

「ひく?　残念だが、それは無理だ。＜カイユ＞を竜帝が寄越したって事は‘皆殺し’って意味だぞ?　ちっ……昔から竜帝はセイフォンを贔屓してるって話は有名だが、ここまでとはな」

背中の曲がった術士は、かなり高齢のようだった。

赤紫に染め、金細工が縫い付けられた悪趣味な毛皮を身に着けた術士はしわがれた声で言った。

「どの道死ぬなら、やるしかあるまい。低俗な大蜥蜴共は術式が使えん。私が押さえている間に首を落とせ。……赤い髪の雄も＜青の竜騎士＞だ。外套の間から、青い騎士服が見えとるからな。いいか?　竜騎士は再生能力がそこらにいる竜族とは，桁違いだぞ?　一気に首をとらんとまずい。2匹同時に【檻】に入れるから、手早く始末しろ。無駄口を叩くな……竜は耳が良い」

へえ、ふ～ん。

この老人は、竜騎士に詳しいんだなぁ。

竜騎士は竜帝陛下の親衛隊っつうか、近衛っていうか……そうい

った認識の方が、この大陸では強いってのに。
俺らの本職が汚れ仕事だってのを、ちゃんと分かってる。
この術士はそれだけ知っている術士ってことか。
「その通りだよ、爺さん。で、さっさとしてくれるかい？　俺らもうすぐランチタイムだからさぁ～」
フードに隠れて老人の表情は見えない。
見えるのは、皺だらけで病的に白い手から生まれる微かに青い光の霧。
瞬き1回の時間で、俺とカイユは青白い霧が作った三角柱の中に居た。
「爺さん、なかなかだねぇ」
まあまあ。
だがクロムウェル以下。
術の‘輝き’が違う。
厚みはあるが、造りが粗い。
術士の技量は経験じゃ無い。
生まれ持った才能が全てだ。
この爺さんなりに努力してここまできたんだろうが、あのドM術士以下なんて……哀れなもんだな。
「でもねぇ。これじゃ普通の竜騎士は足止めできても、残念ながら俺達にはちいっと役不足だねぇ」
ハニーは大人しく【檻】に入ってる。
理由は簡単。
手加減が苦手だから。
自分では【檻】を壊す時に、術士も一緒に壊してしまうと分かってるから動かない。
「簡単単純なんだよ、術式を破るなんてのは。それ以上の＜力＞で、叩き潰せばいいだけなんだよ？」
術士の持つ術力と、俺の腕力。
より強い方が勝つだけ。

硝子の窓に石を投げつければ、割れる。
強度を上回る力をぶつければ、モノは壊れる。
それと同じだ。

＜ヴェルヴァイド＞に四竜帝が勝てないのと同じ。
単純明快な世界の理。

より＜力＞が強いものが、勝つ。

「安心しろ、あんたは殺さない。……まだな」
剣を抜く必要は無い。
左足で、目の前の青白い霧に回し蹴りを一発。
空気が微かに揺れるような独特な振動と、小さな破裂音。
跳ね返った力で、術士が吹っ飛んだ。
檻が消えると同時に、俺の顔面に剣の切っ先。
「あのねぇ、あんたは行動が遅せぇんだよ。爺さんは直ぐ殺れって言ってたでしょうに……こんな使えないのと組まされて、爺さんは災難だったなぁ」
武人はいらない。
必要なのは＜星持ち＞の術士だけ。
指で挟んだ剣先を折って、武人の眉間に入れると同時に腹を右足で蹴った。
雪の壁に2箇所に分かれて、男の身体が埋まった。
こいつはもう要らない。
だから、右足。
「爺さん、大丈夫？　腰を打ったのかい？」
俺はハンカチを内ポケットから取り出し、ブーツを拭きつつ術士に声をかけた。
術の‘跳ね返り’に合い、濡れた石畳にうずくまって呻く老人は赤紫の毛玉のように丸くなっていた。

死んではいない。
意識もあるし、たいした怪我もしてないはずだ。
強い‘跳ね返り’にならないように、加減して【檻】を壊したからな。
うんうん。
我ながら器用だな～って、感心しちまうねぇ！
「俺はあんたに訊きたいことがあるんだよ、術士の爺さん。雇い主……それと」
たぶん、ホークエの刺客だな。
セイフォンの国土をぶん取ってのし上ったあそこは、今回の後見人の件で大慌てだ。
せっかく大きな戦をしかけようって、この数年間準備してたってのになぁ～。
「＜珠狩り＞について聞きたいことがある……あんたは＜導師＞を知ってるかい？」
本命は、こっち。
でも、こいつは俺の髪を見ても驚かなかった。
事情通とは、思えない。
望み薄な……気がするなぁ。

なあ、バイロイト。
てめぇ、どうやってシャゼリズ・ゾペロを見つけたんだ？
ねえ、陛下。
あんた、どうしてシャゼリズ・ゾペロを生かしとく？

さっさと締め上げちまえばいいのに。
泳がすなんざ、まどろっこしい。
「＜青の竜帝＞はなんだってこう、甘ちゃんなんだろうねぇ？　短気なあんただったら、俺と同じ手を使うだろうなぁ……＜赤の竜帝＞さん」

やっぱり、俺は母さんの子供なんだな。
陛下みたいに、待てないし。
カイユみたいに、優しくないから。

楽に殺してやるのは、得意じゃない。

「おい、術士殿。なんで俺が刀じゃなく、細剣使ってるか教えてやるよ」
刀は斬れ過ぎる。
それじゃぁ、面白くないんだよ。
俺にはこれが、丁度良い。
「俺、母親に似て器用なんだ」
なあ、陛下。
あんたが大好きな＜ヴェル＞は、俺に言わせりゃドSなんかじゃないんだけどねぇ？
旦那は他人を傷つけることに、抵抗感なんか少しも持ってない。
何も感じていないんだ。

何も感じない……あの人、ちっとも愉しんでないんだよ。

俺は違う。

「くくっ……俺は料理と裁縫が、得意なんだぜ？」

刃物も、針も。
斬るのも、刺すのも。

俺、大好きなんだよなぁ。

第７９話

汚れた手袋は捨てた。

「……ったく、何も無しか」

術士は俺が知りたいことを、吐かなかった。

吐かなかったんじゃなく、吐けなかったが正しいか……。

知らないんだから、言いようがねぇな。

雇い主の名前は口にしたが、分りきってるそれに興味なんかない。

欲しかったのは竜族から竜珠を盗む＜珠狩り＞の奴等の情報と、尻尾すら掴めない＜導師＞の事だ。

陛下は旦那についこないだも、めげずにまた協力を求めたが……あっけなく断られてたっけ。

旦那を動かすには姫さんを‘使う’のがてっとり早く確実なんだが、陛下はそうはしなかった。

もし、陛下が。

四竜帝が竜族のために、あの子を使ったら。

旦那は……。

「ダルフェ、行くわよ。あそこにいる獣達が死肉を待ってるわ。餌が少ない時期ですもの、じらしちゃ可哀想」

雪の壁からこちらを見下ろす、数頭の狼。

頭の良い動物だから、俺達が立ち去るのを大人しく待っている。

「ああ、そうだね。しっかし、１０年以上追っかけて、こうまで結果が出ないってのは……」

皇太子達が出てこれないように外から施錠した馬車を流し見て、カイユは苦笑した。

「……仕方ないわ。簡単には辿り着けない。だから陛下は贔屓にしているあれまで【餌】にした。あの方の性格にしては、思い切った選択だっだわ。あの子……陛下なりに、必死なのよ」

「陛下なりに……か。ハニーは陛下にゃ甘いからなぁ～、妬けちゃよ」

陛下の両親は、陛下が幼竜の時に死んだ。

親同士が親しかったため、城の宿舎に住んでいたハニーの両親が面倒を見てやっていたらしい。

幼い時を、共に過ごしたせいだろう。

当代陛下に、姉のような……家族のような感情をカイユは持っている。

カイユが＜青の竜帝＞を＜主＞としているのは、竜騎士だからじゃ……強者への恐怖心なんかじゃない。

俺のアリーリアは、＜ランズゲルグ＞を守るためなら喜んで命を捨てるだろう。

「私には父も子供達もダルフェ……テオ、貴方もいる。陛下は……＜青の竜帝＞は、独り、で立たなくてはいけない。優しく哀れなあの子の変わりに、私があの子の敵を狩る。約束したの……カッコンツェルと」

「カッコンツェル？　誰、それ？」

「……私の初恋の人」

寂しげな笑顔を浮かべた顔に手を伸ばし、引き寄せて唇を合わせた。

他人の目のある所では、唇にはしない。

でも、死体だったら目が開いてようが見えないしな。

「ふ～ん。そいつ、もう死んでる？　……だったら殺す手間が省けるんだけどなぁ」

唇を触れ合わせたまま、言った。

俺は。

竜の雄は。

死人にさえ、嫉妬しちまうんだ。

ここで今すぐ君と繋がり、俺への想いを確かめたいほどに。

唇への接吻は。
‘貴女が欲しい‘というサイン。

「テオ。大人気ないわよ？」
「アリーリ……ぐげっ！？」
唇への懇願に、返ってきたのは腹への膝蹴り。
「まったく。竜の雄はこんなんだから、私達雌が‘強く‘ならざる得ない。ほら、さっさとしなさい役立たず……あそこを踏み潰すわよ？」
黒光りするブーツの踵がカツンと、石畳に強く当たって音を立てた。
「君になら、喜んで」

跪き。
愛しい人の手をとり、指先に口付けた。

「……馬鹿な人」

俺の心が狭いんじゃなく。
竜の雄なんてのは、そんなもんだ。
愛した雌に全てを持っていかれちまう。
心も、身体も。

全て……総て。

本当は。
君を放したくない。
どこまでも、どこまでも。
君を一緒に連れていってしまいたいんだ。
格好つけて、強がって。

独りで逝くって、決めたけど。

ねぇ、旦那。
俺は意気地無しだから。
あんたみたいに、なれないんだよ。

子より、俺を選んでなんて。
怖くて。
そんなこと怖くて、俺には言えないんだ。

昔。
ブランジェーヌの膝で丸くなって、俺が昼寝するような歳……幼竜の頃。
竜族の個体減少の一因には雄が持つ雌への〝狂気〟もあるのかもしれないと、黒の爺さんが電鏡で母さんに言ってたっけ。
そんときゃ餓鬼だったからピンとなかったけど。

「愛してる、カイユ」

今の俺は、爺さんの意見に素直に頷ける。

「俺の、アリーリア」

慈しんでくれた両親よりも、血を分けた我が子よりも。

「……アリーリア。君を、誰より愛している」

細い腰に両腕を巻きつけるようにして、顔を押し付けた俺に。
アリーリアはそっと……優しく髪を撫でてくれた。
「そんなの、知ってる。嫌ってほど……分ってるわ、テオ」

雄は雌が‘全て’だ。
だが、雌はそうじゃない。
俺の髪に触れる君のその手を、独占したいと。
この、胸の……心の奥で。
ダルフェではなく、テオが吼えているんだ。

それは、永遠の恋心。

君が、俺の全て。

「さぁ～て、ぼちぼち出発しようかねぇ」
俺の……竜騎士の制服の内ポケットには、新しい手袋がいつでも2組しまってある。
御者台に戻り、予備の手袋をはめて手綱を握った。
カイユは俺の隣に腰をおろした。
軽く膝に添えられたその手にも、真新しい白い手袋。
この手袋は人間と違い、防寒の為なんかじゃない。
竜騎士をやってると、手袋は1年中必需品だ。
汚れ仕事が多いからな。
特に雄は雌よりも、手が‘汚れ’ることに対して嫌悪感が強い傾向がある。
雌に強い執着・独占欲を持つ竜族の雄は、愛しい雌に触れるその手が他者の体液で汚れるのを嫌がる。
旦那が蜥蜴蝶で作られた外套を羽織り、手袋をはめながら現れたあの時。
狩りを……自分の手で殺しをする気だと覚った。

手を使わずになんでもぶっ壊せる人が、手袋をした。

それは警告じゃなく、宣告。

オフとパスは殺され、姫さんに手を上げた術士とその関係者も…
…国も土地も、この世界から消え去るんだと俺は思った。
蜜月期の雄は、雌に関する事には理性なんて吹っ飛んで当り前だからな。
だが、想像していた以上に旦那は冷静に動いた。
かなり‘我慢’したんだろうが。
怒りを抑え、姫さんの事を考えてあの‘結果’を選んだ。
普通の竜族では考えられない、本能を越える強い理性。
あの＜ヴェルヴァイド＞に、それを与えたのは異界の娘。
陛下が望んだ通り。
あの子は＜ヴェルヴァイド＞から……最凶最悪の竜から、この世界を守るだろう。
旦那はあの子の為に【世界】を維持し続ける。
花も菓子も、ドレスも。
姫さんが好きなものや、生きるのに必要なものを。
その全てを魔法のように無から取り出し、旦那が与えられるわけじゃない。
＜りこ＞が存在する限り、＜ハク＞は世界を放棄しない……出来ないんだ。
たった1人の女の為に。
この世界が旦那にとって、無くてはならないモノになった。

旦那は四竜帝と一部の人間共に、自分の‘つがい’である姫さんが＜監視者＞に強い影響力を持つことを思いしらせ、本来は処分されるべき異界人の娘の存在価値を揺ぎ無いものとした。

善い存在だとは思われないが、必要な存在だと思わせる効果は充分だ。

旦那は、本当に頭が良い。
姫さんが世界を望まなくても。
竜族も人間も。
＜世界＞が姫さんを必要とするように仕向け。
旦那はこの世界全体を姫さんの【檻】にして、竜族と人間という【枷】で雁字搦めに縛る気なのか。

あの子は。
救いを求める手を振り払えるほど、強くはなれない。
旦那はその事を、ちゃんと分かっている。

「急ぐか……ポルの街に寄って、坊ちゃん方に昼飯食わせなきゃだもんな」

だがね、幸か不幸か。

可哀想なあの人には、一番大事なことは分からないんだよ。

第８０話

街道沿いにある唯一の街、ポルに昼食休憩をとるために寄った。
俺とカイユに休憩は必要ないが、セイフォン御一行様には‘快適な旅を提供しなきゃならんのだ。
面倒くさいが、仕方が無い。
陛下の可愛がってる皇太子君に飯抜きなんてことをしたら、後で陛下が五月蝿いからな。
ポルは高い城壁で囲まれた小さな街だ。
出入り口は一箇所。
この一箇所ってのは一般用であって、公になっていない出入り口があるらしいが……。
数人の屈強な男達が管理するはね橋を馬車で渡り、客は街に入る。
はね橋の手前に立つ係員に、俺の手のひら程の銅板を御者台から手渡した。
銅版には文字などは書かれていない。
ただ、中央にシャイタン王家を表すイチテイの花が刻印されているだけだ。
街道料金を支払った際に渡されるこの領収証が無ければ、街には入れない。
街というより。
シャイタン王家直轄の商業施設の集まりだな。
商店や宿泊施設だけでなく、公営賭博場まである。
ポルという街は。
金持ちが集まる、金持ちの為だけに造られた特殊な街だった。

鍵をはずし、重厚な造りの扉を開けた。

「殿下方、1時間半程こちらで昼食休憩をとって下さい。閣下、手を貸しましょうか？」

「いえ、セシーは私が連れて行きます。ミー・メイ、先に降りてくれるかい？　足元に気をつけて降りるんだ」

ダルド殿下は術士の娘に手を貸してやっていた。

女に対するそういった態度は、帝都で待つ陛下を俺に思い起こさせた。

閣下を自分の外套に包み腕に抱いて、ゆっくりと馬車から出てきたその姿は人目をひいた。

数人の人間が足を止め、美女を腕に抱く青年に無遠慮な視線を向けていた。

均整のとれた体躯に整った甘い顔立ち。

澄んだ青い眼、肩にかかる柔らかな茶の髪。

中央にスリットが入ったベルベットのチュニックは品の良い濃緑色。

アイボリーのスラックスに、黒い皮のブーツ。

閣下に掛けられた殿下の外套の襟と裾は、銀のファーで飾られていた。

この坊ちゃんは‘本物の王子様’だ。

普通の人間の女なら、小竜よりもこっちのほうに恋心を抱きそうなんだがなぁ。

姫さんは離宮で暮らしている間もセイフォンの若い娘の憧れの的である‘王子様’には興味が無いようだった。

俺にも……人間の女にも受けが良いこの俺にも、そういった感情は全く持たなかった。

あの子の眼は、心は。

いつだって白い竜に向いていた。

自分の膝に座った小竜を優しく撫でるその眼にあったのは、強い恋情。

この人間の娘は、自分より遥かに小さい異種族の小竜に恋をして

いるのだと俺にも分かった。
異世界から余興の失敗なんかで連れてこられたあの子が心を、精神を保っていられたのは旦那に恋をしていたからだろう。
カイユも俺も、魔女閣下も姫さんの気持ちに気がついていたのに旦那ときたら……あんなに鈍い人だとは思わなかった。
まあ、感情ってもんに縁遠かった人だからなぁ。
愛玩動物扱いなんて姫さんに俺が言ったのは、あの子自身にも自分の気持ちをはっきり認識して欲しかったからだった。
姫さん、支店までは雌と雄……自分と旦那が女と男だって事をあんまり意識して無い気がして、こっちが気を揉んじまったもんなぁ。
数ヶ月前の事を苦笑と共に思い出しつつ。
空になった馬車の室内に、腰から外した細剣を置き施錠した。
店内に刃物の持ち込みは遠慮して欲しいと、従業員に言われたからだ。
「ダルフェ殿、先ほどの者達は……セシー？」
俺に質問しようとした殿下の口元は、閣下の人差し指が当てられていた。
「ダルフェ殿、ごめんなさいね。殿下、それは貴方が知る必要の無い事です」
セシー・ミリ・グウィデスは姫さんが紅茶の様だと言った赤茶の眼を細め、甥にあたる皇太子の髪を撫でた。
「セイフォンの皇太子である貴方は、全てを知る必要は無いのです」
視界の隅で。
俯いたままずっと無言で殿下から三歩程離れた位置にいた術士の娘が、小刻みに震えている手をケープでそっと隠した。
隠したいなら、隠せば良い。
偽りたいなら、偽れば良い。
お前等は帝都で＜監視者＞にその頭の中を、想いを全て暴かれるのだから。
知らなければ。

覗かれても、見られても。
晒されても。
「閣下の言う通りだよ、殿下。あんたは知り過ぎないほうがいいんだ。世界のためにもね」
「……失礼しました、ダルフェ殿」
納得はしていないようだったが、不満を口にするにはこの坊ちゃんは賢すぎた。
「いや、いいさ」
セイフォンの皇太子君。
知らないほうが幸せなことがあるのだと、俺は餓鬼の時に思いしったんだぜ？

「ダルフェ。後はよろしくね」
御者台から降りたカイユが、俺達とは反対方向に向かおうとしたので殿下がカイユに声をかけた。
「カイユ殿、どちらにいかれるんですか？　昼食は……」
外套を羽織ったカイユは指先で刀の鍔をなぞりながら、嫌悪感を隠さず吐き捨てるように言った。
「寄るな、喋るな。荷物が私にしゃべり掛ける権利など無い」
カイユの言葉に、ダルド殿下は口を噤んだ。
「殿下、カイユのことはかまわんでください。店に入りま……」
「ま・待ってください、カイユさん！　あの、トリィ様はっ」
術士の少女がカイユに走り寄って、カイユの外套を掴んだ。
「……私に触るな、人間」
冷気さえ感じるような声音に、少女は一瞬大きく震えてから固まってしまった。
離すに離せないその手を、俺がカイユから離してやった。
「お嬢ちゃん。質問は、このお兄さんにしなさいな」

「あ……私……カイユさん？」
紫の瞳が困惑の色を隠さず、俺を見上げた。
カイユは離宮で、この少女には寛大だった。
口もきいてやったし、茶や菓子も微笑みながら出してやっていた
……この術士がまだ幼かったからだ。
出産した今、カイユの母性は元に戻った。
本来の人間嫌いが全開だ。
特にミルミラの件で、セイフォンを憎んでいる。
しかもこの術士は、姫さんを異界から落とした張本人だ。
正直なところ、俺としては結果的には感謝すべきだと思うんだが。
姫さんの消えぬ悲しみを知る【母】としては、カイユはミー・メイを許せないんだろう。
それに。
ジリと姫さん。
子供達と離れてイラついてる。
こりゃ、危ないな。
今のカイユはこの少女の腕を斬り落とすくらいなら、躊躇い無くやる。
「……ハニー、駄目だよ？　これもあれも、全て旦那の獲物だ」
妻を傷つけた者への報復は、夫の権利。
こいつ等は姫さんの心に、一生消えぬ傷を付けた。
「分かってるわ、ダルフェ。私は子供達へのお土産を買ってくるから、この荷物達をみててちょうだい。私、あの子の黒髪に合う象牙の髪飾りが欲しいのよ」
「ああ、この街ならきっと手に入るよ。いってらっしゃいな」
片目を瞑ってそう言うと、カイユの氷のような眼差しが和らいだ。
俺の真似をするジリの姿を思い出したんだろう。
振り返らず歩き出したカイユの背に手を振って、俺は術士の少女に言った。
「さあ、昼飯にしようねぇ。ここでの飯は、竜帝陛下の奢りだぜ？

なんでも好きなもんを、好きなだけ食いなさいな。……殿下もね」
最後の食事かもしれないから。
帝都に着いた途端、旦那にぶっ殺されるかもだしなぁ……とは、流石に言わなかった。

飯を食いに入った店は、街の入り口で領収書兼通行許可証の銅版を渡した時に係員が教えてくれた『ポルで一番高い店』だった。
元は荘園領主館かなんかだったんだろうが、今は宿屋も併設している洒落た内装のレストランになっていた。
建物自体は古いが、よく手入れされている。
建築様式は時代遅れだがかえってそれが味わい深く、上品な印象を持たせていた。
石灰で塗り固められた白壁は雪に負けぬほどの純白。
建物の外壁は斜材を組み入れた意匠的な木組みで装飾され、純白の壁に漆黒のそれが映えていた。
個室を中心とした造りは、あの街道を使うような富裕層のみが客だからだ。
お忍びの王侯貴族も多いしな。
黒のバトラージャケットを着た従業員に通された個室は、庭が眺められるなかなか良い部屋だった。
この店は先を急ぐ旅客用に短時間で提供できるものから、食い終わるのに三時間かかるコース料理まで揃えてあった。
陽がたっぷりと入る明るい部屋での昼食中、俺は術士の少女に質問攻めに合ってしまった。
刺客を相手にする方が楽だったなぁと思いながら飲んだ食後の珈琲は、豆の煎りが俺には浅かった。
べらぼうに高い分、けっこう期待していたのでかなり損した気分になった。
陛下の金だから、実際は損しちゃいないんだが……まぁ、気持ち

的にって事だな。

予定より少々早く、1時間ほどで昼食休憩を終えて店を出た。
今度は俺が閣下を抱いて運んだ。
皇太子と王宮術士は、先に馬車に戻っている。
皇太子が自分が抱くと申し出てくれたのに、閣下は俺を指名した。
「……閣下、俺に何か？」
指名したって事は、俺に話があるってことだろう。
皇太子抜きで話したいってことだ。
ダルド殿下はそれを察し俺に閣下を任せ、王宮術士を促して足早に馬車へと戻った。
あの坊ちゃんは、王族にしちゃ‘頭が良い’からなるべく姫さんからは遠ざけたい。
俺としちゃぁ姫さんに、必要以上の好印象をあの皇太子には持ってもらっちゃ困るんだ。
まあ、いろいろとこっちの都合があるんだよなぁ。
先のことに思いを廻らせていた俺に、閣下が話しかけてきた。
「カイユ殿、ご出産されたんでしょう？　御息女には髪飾りをお土産にするなんて……いまどきの幼生には、髪の毛が生えてるのかしら？　しかも、黒髪の？」
この女。
ったく、油断ならねぇな。
「何が言いたい？　セシー閣下、いや……＜魔女＞さん。余計なことを【記録】するんじゃない」
この女は只の女……人間じゃない。
世界で唯一の＜魔女＞。
「御気に触った？　ごめんなさいね、赤のご子息様……ふふっ。女の子みたいだった貴方も、もうお父さんになったのね。きのこも食

べられるようになったみたいだし」
俺がさっき食ったのは、三種のきのことを木の実が入った牛乳仕立てのリゾット。
姫さんは米が好きだ。
ジリはきのこが好物。
だから今度作ってやろうと思い、参考の為に注文した。
「……ちっ。きのこ、食えるようになったけど。やっぱり俺はきのこが今でも好きじゃないんだよ、オテレばあちゃん」
オテレばあちゃんは。
俺が餓鬼の頃、父さんの食堂に飯を食いによく来ていた。
いつも、珍しい虹色の飴玉を俺にくれた。
それを陽にかざすと、餓鬼の俺の眼にはどんな宝石より綺麗なモノに見えたんだ。
もったいなくて、なかなか口に入れられなかった。

＜魔女＞オテレ・ガンガルシーテ。
あのばあちゃんが死んだのは、俺の所為だった。

「ふふっ。ごめんなさいね？　私はあのキャンディーを持っていないのよ」
「……」
旦那が……女ならなんでもいいって、寄ってくる女に片っ端から手を付けてたあの旦那が。
＜魔女＞だけは駄目だって言う気持ちが、なんとなく分かった。

お宝展示室（４）

～お宝展示室（４）～

『四竜帝の大陸』の挿絵を描いてくださっている、やえ様のイラストのお部屋です。
（掲載のご許可をいただけたので、さっそく作ってしまいました♪）

ほのぼのとした日常風景が、なんとも良い感じです。
（勝手に会話をつけちゃいました）

＞ｉ２６６１―２０１＜
りこ　「うわっ、大きい！　その豚さんは！？」

ダルフェ　「ああ、これはステイラに頼まれたんだ。特１級の最高に美味い豚なんだぜ？」

カイユ　「さっさとその豚をチーフに届けて来い、茶が冷めるだろうがっ！　さあ、トリィ様。カイユとお茶にいたしましょうね」

ダルフェ　「あ、このアダを切ろうか？　よし、父ちゃんがうさぎさんを作ってあげちゃおう！」

りこ　「うさぎさん？　わぁ、懐かしい。うさぎさん、可愛くて好き！　でも、私が切ると左右のお耳のバランスがいまいちになちゃうんです。何でかな～」

ハク　「むむっ。りこは兎が好きなのか？　ふむ、我もあのような耳にしたら、もっとかわゆくなれるだろうか？」

りこ　「ハクちゃん、うさ耳をつけてみたいの？」

ダルフェ　「うっ……うさ耳の旦那（汗）」

カイユ　「っ！　……危うくお茶を落とすところだったわ」

りこ　「（うさ耳の被り物をしたチビ竜ハクを脳内で想像中）……うん、とっても可愛い！」

ダルフェ&カイユ　「「えっ！？」」

☆カイユとダルフェが想像したのは、人型ハクのうさ耳姿です（笑）
白いうさ耳のハクと、黒いうさ耳のハク。
皆さんはどちらがお好みでしょうか？

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
セイフォンでのメイド服カイユとりこも描いて下さいました。
ちなみに、カイユは父親似です。
＞ｉ２２３３―２０１＜

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
にぎにぎが、微笑ましいです♪
＞ｉ８５１―２０１＜

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
?を選ばせていただきました（＾＾）
＞ｉ８５２―２０１＜

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
番外編＜花鎖＞で使わせていただいた～うたたね～のラフ画です。
＞ｉ１０３２―２０１＜
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

他の作品は小説ページにて掲載中です。
やえ様の作品は『みてみん』にて見ること出来ます。
最新作＜～ケーキ作り～＞は番外編ページに、後日掲載させていただく予定です。
（『みてみん』　ｈｔｔｐ：／／ｍｉｔｅｍｉｎ．ｎｅｔ／　とは、『小説家にになろう』へのイラスト転載が可能な提携サイトです）

（注）このページのイラストの著作権はイラストの作者様であるやえ様　にあります。

お宝展示室（5）（前書き）

お宝展示室は読者様にいただいたイラストのお部屋です。
ここはもちのこ様のお部屋です（＾＾）

お宝展示室（5）

もちのこ様が描いてくださった四竜帝です！
それぞれの性格がイラストを通して伝わってきて、とっても素敵～！
もちのこ様、ありがとうございました。

＜青の竜帝＞
「俺は肉を食って、でかくなるんだ！！」
たくさん食べて、もっと大きくなりたい。
縦がだめなら、このさい横でもいいらしい。
＞ｉ９０８２―１３３７＜

＜黄の竜帝＞
「きゃははっは～！　あたしからイドイドとった、あんたなんかだいッ嫌い、＜青＞！！」
ピンクのフリフリドレスがとってもキュート☆
癇に障る甲高い笑い声が聞こえてきそう♪
＞ｉ９０８３―１３３７＜

＜赤の竜帝＞
「ジリに会うのが、楽しみだわ……ふふっ」
赤い瞳がとっても妖艶なダッ君ママ。
＞ｉ８８１７―１３３７＜

＜黒の竜帝＞
「寿命で逝く前に、ヴェルヴァイドに憤死させられそうだった。あ

の方はもっと年寄りを労われんのか！？」
ハクにはそんなことは無理だと思いつつ愚痴らずにはいられない、
現在最高齢のおじいちゃま竜帝。
＞ｉ９０８０―１３３７＜

そしてハク。
嫁絶賛のお腹がかわいい！
この尾で＜青＞は顔面びんたをくらってるのですね……痛そう。
＞ｉ８８９６―１３３７＜

もちのこ様の他作品は　ｈｔｔｐ：／／１３３７．ｍｉｔｅｍｉｎ．ｎｅｔ／　で見ることが出来ます（＾＾）
なお、掲載させていただいた上記４作品の著作権はもちのこ様にあります。無断転載等禁止です。

お宝展示室（6）（前書き）

お宝展示室は読者様にいただいたイラストのお部屋です。
ここは暁様のお部屋です（＾＾）

お宝展示室（6）

暁様が描いてくださったハクです！

絵本の一ページのような、あたたかでやさしいイラストです……。

暁様、ありがとうございました。

＞ｉ８９２１―１３３４＜

ｈｔｔｐ：／／１３３４．ｍｉｔｅｍｉｎ．ｎｅｔ／ｉ８９２１／

イラストから小話を妄想させていただいちゃいました。

暁様、妄想のご許可をありがとうございました。

ーーー

ある。

ーーーねぇ、ハクちゃん。これ食べられるのかな？

先日、三大毒キノコとして有名なヤピン茸を散策中に見つけた際など。

ーーーハクちゃん！　マツタケだよ、マツタケ～！！

喜び勇んでそれを大量に持ち帰り、カイユに窘められておったな。
我もカイユに怒られた。
りこがあまりに嬉しそうにヤピン茸を摘むさまが可愛らしいので、
我も一緒になって毒キノコ狩りを楽しんだことが『駄目』だったようだ。

あのように楽しげに集めた毒茸を、一つ残らずカイユに没収されたりこがなんとも哀れで。
我はそんなりこになにかしてやりたくとも、どうして良いやら全く分らず。
ダルフェから渡されている本の中から、その術を探すことにした。
我が見つけたのは、花を贈るという行為は人間の女にとって万能であるという項目。
我はそれを採択し、行動した。

「これは花も葉も根も食えるからな」

南のある地域では天候不良や災害による食糧不足に備え、野生種のこれをわざわざ栽培しておるところもある。
非常食、だな。

りこは花が好き。
りこは食い物も好き。
ゆえに。

「華美で食えぬ園芸種より、りこは食える野草が良いに決まっておる」

泥つきは掘りたて、新鮮さの証。
帝都の市場を散策しておる時にダルフェがそう言っておったので、あえて泥は落とさない。

うむ、これでより美味そうに見えるはず。

「贈り物はリボンで飾るのが定番らしいが、リボンで飾らなくともこれがきらきらしておるので……おっと、零さぬように気をつけねばな」

夜露が陽に輝くさまも、貴女への贈り物。

ーーー

番外編　～ぷれぜんと～（前書き）

ホワイトデー用番外編でしたが、間に合いませんでした。
遅れてしまって、ごめんなさい。

番外編　～ぷれぜんと～

「りこ、りこ！　何か欲しい物はあるか？」
愛用のマグカップを洗っている私にハクちゃんが突然、こんな質問をしてきた。
朝食に使った食器は1人分なので作業はすぐに終わり、私はゴム手袋を外しながら踏み台から降りた。
「欲しい物……う～ん、特に無いよ？　だって、必要な物は竜帝さん用意してくれてるもの」
何から何まで……生活するのに必要の無い贅沢品まで、用意されているのだ。
服やアクセサリーだけじゃない。
毛糸の腹巻から、ちょっとセクシーなランジェリーまで何でもある。
私の好みが分からなくて、とりあえずあらゆるタイプのものを揃えてくれたんだろうけど。
腹巻は使っても、ひもひもセクシーおパンツには手が出ない私です……。
あれは、女神様の方が似合うと思うなぁ～。
男の子だけど美女な竜帝さんに、エロかわ下着……。
「それでは困るのだ。頼むから何か言ってくれ、りこ」
ちょっと変な妄想世界に片足を突っ込んでしまいそうになった私だけど、ハクちゃんの小さなお手々が袖を引っ張ってくれたので生還（？）することができた。
「……なら、ハクちゃんがいい」
私は流しの縁にちょこんと腰掛けていたハクちゃんを、むぎゅーっと抱きしめた。

「私はハクちゃんが欲しいのっ！　むふふっ、も～ら～いっ！」
ダルフェさん作のフリフリ花柄エプロンをしたハクちゃんは、それはもうかわゆいのだ。
うんうん、お揃いで正解でした！
「んん～っ、かわゆいっ。ハクちゃんは世界一かわゆい旦那様だよ～！　あぁんっ、たまんな～いっ」
私達はダルフェさん作の、お揃いのフリフリ花柄エプロンをしている。
ハクちゃんは人型用が欲しかったみたいだけど、ダルフェさんが作ってくれたのは竜体用だった。
ナイスです、ダルフェさん！
この可愛らしいエプロンは、私なんかよりハクちゃんの方が似合ってます。
あぁ、夢見心地ってこのことかしら！？
「はぁ……人型の我も、このように欲しがってもらいたいものだな。……努力が足らんのか？」
あまりに可愛い旦那様にうっとりしていた私の脳は、呟くような念話をうけとりそこね……私は聞き返してみた。
「んっ？　なあに、ハクちゃん？」
「……いや、なんでもない」
金の眼が、くるんと回った。

「むっ……なぜ逃げるのだ？」
その夜。
ベットの上で後ずさりした私の右足首を、大きな手がさっと掴んだ。
「なぜって……だって、だって！」
なんだってこんな事になっ……うわわぁあああ！
「りこ、我はもっと努力せねばならんのだ。竜体と比べ、人型はか

わゆさで劣るらしいのでな」
竜体。
かわゆさ。
あっ、それって今朝のっ！？
「う……嘘つきー！　なんでもなくないじゃないのよぉおお！　ここっ……これ以上、努力しなくていいからっ！　とにかく、ちょ……ちょっと待っ……」
「待たん」
ハクちゃんの謎思考回路完全理解への道は、果てしなく遠く険しいのです。

翌日の午後。
ハクちゃんが何故、「欲しい物を言ってもらわないと困る」なんて言ってたのか分かった。
シスリアさんとの勉強会が終わった後、恒例となった雑談タイムの会話の中でその話題が出たために、私は理由を知ることができた。

今週は竜族のつがいがお互いにプレゼントを贈る、ちょっと特別な週だったのだ。
この期間中ならプレゼントをあげるのはいつでもよくて、花やお菓子・アクセサリーなどなんでもあり。
愛情と日ごろの感謝を込めて、相手の好みそうな物を……普通は相手に内緒で用意する。
これ、鉄則。
でも。
ハクちゃんは今までそういった行事に全く興味が無かったから、それを知らなくて私に直接リサーチしてしまい……。

「……」

私とシスリアさんの会話から自分の間違いに気づいたハクちゃんは、私の膝の上で真ん丸くなって顔をお腹に隠してしまった。

「ハクちゃん……」

しょんぼりしてしまった小さな旦那様の姿に、私は少し焦ってしまった。

私も、知らなかった。

今日が最終日なのに、何も用意していない。

カイユさんやダルフェさんが特に何も言ってなかったのは、ハクちゃんがそういったことに興味を持つとは考えなかったからかもしれない。

皆は知らないと思うけれど。

ハクちゃんは、意外と乙女ちっくな所があるんです……お揃いで喜んだりするし。

「ハクちゃん。ねぇ、お顔を上げて……」

彼の艶やかな鱗を撫でながら、私は言った。

「気にすること無いよ、ハクちゃん。貴方の気持ち、とっても嬉しい。ごめんね、私は何も用意してなかった……。私と貴方は種族が違うんだから、欲しい物を相手に訊いたっていいと思う。私だって貴方に何をあげたら喜んでくれるのか、まだ分からないもの」

「わ、私もそう思いますっ！　トリィさんは異界の方のせいか、お好みも普通の人間の女性とは若干……かなり異なる部分もあるようですしっ」

そう言って、シスリアさんも援護してくれた。

ちなみに彼女のバイロイトさんへの贈り物は、お子さんと作ったクッションだと教えてくれた。

「ほら、シスリアさんだってそう言って……ん？　好みが異な……？」

「あの、えっと！　で……では、私はこれで失礼致します！」

逆さにしたピンクのチューリップのようなワンピースを着た、妖

精さんのように可愛らしい先生は机の上の教材を手早くまとめ、去っていった。
シスリアさんの言葉には、多少ひっかかる部分もあったような……。
ま、いいか。
「りこ」
ハクちゃんが顔をお腹から出し、私を見上げた。
「では、訊くが。りこの欲しいものはなんなのだ？」
「……前にも言ったよ？」
真珠色の鱗を持つ世界一かわゆい旦那様の頬に、私はキスをして……ゆっくりと、唇を離した。
「私が欲しいのは、貴方だけ」
ハクちゃんの大きな金の眼が、糸のように細まった。

私は居間のソファーに座ってハクちゃんを待っていた。
何気なく目を向けた窓からは、丸いお月様が見えた。
「ハクちゃん、何してるんだろう？」
夕食も2時間前に済ませたし、シスリアさんから出された課題も終わった。
もう今夜はお風呂に入って、寝ようかな～って思ってたんだけど。

ハクちゃんはここで待っているようにと私に言って、短い足でてけてけ走って居間から出て行った。
なぜかキッチンへと……キッチンからは、がちゃがちゃと騒がしい音が聞こえてきていた。
音が止み。
数秒後。
床を土鍋が走って……じゃなくて。

頭の上に土鍋を乗せ、小さな両手で支えながらハクちゃんが走って戻ってきた。
「……ハクちゃん？」
「我は、良いことを考えたのだ！　りこ、蓋を取ってくれ」
私は立ち上がり、ハクちゃんの頭に乗った土鍋の蓋をおそるおそる外した。
いったい何が入って……あれ？
「これ、ハクちゃんのかけらだよね？」
土鍋には、まるで真珠のようなそれが容量ぎりぎりまで入っていた。
あ、だから蓋……そのままじゃ、こぼれそうなほどの量だもの。
ハクちゃんはぱかっと開けた口に、鍋いっぱいのかけらをざざーっと投入した。
「ひっ！？」
絶句する私の前で、最近お得意の‘ころころ’をやり始めた。
縦横無尽に居間の床をころころころころ……。
「ハ……ハクちゃん？」
3分ほど床でころころをして、ハクちゃんは私の膝にちょこんと顎をのせた。
「りこ！　ひっぱってくれ」
ハクちゃんは私に向かって、ぱかっと大きく口を開けた。
身をかがめて覗き込むと、真っ赤な舌の上には真っ白な……えぇ～！！
な、なにこれっ！？
まさか……ハクちゃんは、これをひっぱれって言ってるの？
「こ、こんなの引っ張り出したら咽喉を傷めちゃう！　危ないよ、やめ……」
ハクちゃんは爪先立ちして、かがみこんだ私の頬を握ったで両手くりくりと撫でて言った。
「大丈夫だ。我は世界一かわゆく頑丈な竜なのだから」

「でもっ」
「……頼む、りこ」
このままじゃ、この状態じゃ。
さすがにハクちゃんだって、辛いのかも……やるしかない！
「う、うん。わかった」
「よし、一気にいけ！」
「せ、せ～のっ……えいっ！」
ハクちゃんの口に右手を突っ込んで、半泣きでそれを引き出した。

出てきたのは真珠のようなかけらが連なった……紐？　鎖？
「うむ、上出来だな！」
ハクちゃんは満足げに眼を細めた。
用意してあったハンカチで丁寧に拭いた後。
自分で回転して、全身にくるくるとそれを巻きつけた。
次々と目の前で展開される、旦那様の奇行……。
私は呆気にとられ、呆然とその様子を眺めていた。
そんな私の手に、ハクちゃんはかけらチェーンの片方の先を握らせて言った。
「りこの希望通り、我からのプレゼントは我だ！」

「え？」

プレゼント。
私の希望……あっ！
「ハクちゃん……」
真珠（本当はかけらだけど）の鎖でぐるぐる巻きになって、床にコテンと転がった旦那様は。
「りこ。さあ、どうぞ、なのだ」
上目遣いで、そう言った。
「……うっ！！」

私はとっさに鼻を押さえた。
旦那様のこの姿に感動の涙じゃなくて、興奮で鼻血が出そうだなんて。
ああ、私。
おちび竜の貴方に関しては、やっぱり変態になっちゃったのかもしれません。
「うん、うん。遠慮無くもらいます。ハクちゃんを、貰います……ハク」
ぐるぐる巻きになった小さな旦那様を、胸に閉じ込め抱きしめた。

心配した鼻血は出なかった。
でも、鼻の奥がつーんとした。
「ぁ……ありがとう。ハクちゃん、ハクっ」
ハクちゃんのあたたかな舌が、私の顔を舐めてくれた。
鼻血じゃなくて、涙が少しだけ零れてしまったから。
「うむ、甘い。この涙は、とても甘い……嬉しい時の味だな。りこ……」

「ハクちゃ……ん……」

人型のハクちゃんがしてくれる、身体の芯まで痺れるようなキスも。
小竜のハクちゃんがしてくれる、心を優しく撫で上げるようなキスも。

「……大好き、ハク」

貴方のしてくれるキスは。
全部、好き。

ハクが。
貴方が、大好き。

「りこ。申し訳ないが、ちと離してくれるか？」
「え……なんで？」
「我は元々りこのモノなのでな。我だけではなくこれも、プレゼントなのだ」
本当は離したくなかったけれど。
このらぶらぶな雰囲気を察して、誘ってくれないところがハクちゃんらしいというか……。
ハクちゃんは私からさっさと身体を離し、つま先立ちでバレリーナのようにくるくると回転して巻きつけていたかけらのチェーンをはずした。
「くすん……どんかん」
「何か言ったか？」
「な、なんでもないです」
ソファーにちょこんと座ったハクちゃんの隣に腰を下ろすと、彼は定位置である私の膝に移動してきた。
「りこ、両手をこうしてくれるか？」
ハクちゃんは自分の両手首を軽くつけるようにしてみせた。
ん？
つまり、お縄ちょうだいいたしますって動作かな？
「はい、これでいい？」
私は言われた通りにしたものの、頭の中は？？？な状態だった。
「ほら……こうすれば装飾品のようだろう？　妻へのプレゼントは装飾品が多いと、ダルフェの本に書いてあったのだ」
そう言いながら小さな手で、私の両手首にかけらのチェーンを巻いてくれた。
ダルフェ文庫、まともなものもあるんですね！
装飾品。

アクセサリー……なるほど。
「うん、とっても素敵。私はこのかけらで、ネックレスとブレスレッドとか作りたいかもっ。ありがとうハクちゃんっ！　……ハクちゃん？」
ハクちゃんは、何故かじーっと……瞬きもせず、かけらでぐるぐる巻きにされた私の手首を見ていた。

「……」

これで作るアクセサリーのデザインとか考えてるんだと思った私は、ハクちゃんが自分から喋るのをそのままの状態で待った。
無言のまま、数分。
「……ねえ、ハクちゃん。とりあえず外してくれる？　かけらに手首を縛られたままじゃ困るよ」
私の手首に添えられた、４本指の小さな手がぴくと跳ねた。
「……り……りこっ」
「ん、なあに？　いい案、浮かんだの？」
「う……浮かんだともっ！　とても良い案がな」
私を見上げた金の眼が、きらきら輝いていた。
ハクちゃんのこういうところは、無邪気な小さな子みたいでとってもかわいいのだ。
むふふっ。
かわゆいなぁ～。
「ふ～ん、お風呂でのんびりお湯に浸かりながら、教えてもらおうかな？」
「風呂……りこは風呂で使いたいのか？　それの提案も捨てがたいが、またりこがのぼせたら困るので駄目なのだ」
使う？
作るんじゃなくて？
「これをお風呂に持っていくわけないじゃない、ハクちゃんったら

変なの～。それにのぼせるほど、長湯なんかしないよ～。じゃあ、お風呂に入る前にハクちゃんの考えた‘とても良い案’を教えてくれる？」

「ああ、我がりこに……教えてやろう」

私の膝に座っているハクちゃんの尻尾が、ご機嫌そうに左右にゆらゆらと動いた。

「ダルフェとカイユは、お互いに何を選んだの？　あ、もしかしてその簪！？」

翌日のお茶の時間の話題は、贈り物のことだった。

「ええ、私はダルフェにこの簪をもらったんです」

それは綺麗な銀髪を引き立てる、鮮やかな色の紅珊瑚の簪。

丸い珊瑚の珠が幾つも連なっていて、カイユさんの動きに合わせて揺れていた。

カイユさんの肩に乗ったジリ君が珊瑚の珠に触りたくて、短くて小さな手を一生懸命伸ばしている姿はなんとも言えぬ可愛さだった。

「で、俺はハニーの愛がたっぷり入った拳をもらったの。モノだけが、贈り物じゃないからねぇ～。要は愛よ、愛！」

カップに琥珀色のお茶を注ぎながら、ダルフェさんは目じりを数倍増しで下げた満面の笑みで言った。

拳。

こ、拳ですか……確かにダルフェさんにとっては、最高のプレゼントかもしれませんね。

「ハクちゃんは私に、これをくれたんです」

私はシルクのスカーフで包んでいたかけらのチェーンを、ダルフ

ェさんとカイユさんに見せた。
それを見た2人は目を見開き、数秒間固まった。
あ、あれ？
しかもダルフェさんの眉間に縦皺が2本現れましたよ！？
「お……おい姫さん。それって、まさか」
「はい、ハクちゃんのかけらです。ハクちゃんが、これを作ってくれたんです。真珠みたいで綺麗だから、とりあえずネックレスをを作ってみようかと思って。あと、ブレスレッドとか……とにかく、この長〜いままじゃまずい……じゃなくて、困るんです」
「これ、元々は旦那の一部なんだろう？　つまり、自分自身で姫さんに首輪と手枷かよ……うへ〜っ、おっかないねぇ。どんだけ独占欲丸出しなんだかなぁ」
向かいのソファーに腰を下ろしたダルフェさんの頭の上に、ジリ君はカイユさんの肩からぴょんっと飛び移り赤い髪の中に潜った。
ちょこんと出したお顔を私の隣に座るハクちゃんに向け、緑の瞳を細めてじーっとハクちゃんを見た。
「首輪と手枷？　……かっ、考えすぎです」
「そうっすかねぇ〜、旦那ぁ」
ダルフェさんは否定した私ではなく、ハクちゃんを見ながら言った。
ハクちゃんは無反応。
彼の視線は私の膝にあるかけらのチェーンに向けられていた。
「トリィ様。装飾品に仕上げるのをご希望なら、専門家に任せましょう。ダルフェ、どこの店がいいかしらね？」
「そうだねぇ……スキッテルんとこかなぁ。旦那のかけらなんて物騒なモン、そこいらの職人に任せられねぇしな」
物騒？
ハクちゃん自身が物騒だからって、かけらは別に……。
「ダルフェ！　トリィ様、お気になさらないで。ダルフェは大げさなんです」

私ににっこり微笑んだカイユさんの踵が、ダルフェさんのつま先をぐりっと踏んだ。

こんなことでは全く驚かなくなった私って……ま、いいか。

ダルフェさん、嬉しそうだしね。

「あぁ……そっか。ごめん、ハニー。　え～っと……そういや、姫さんも旦那に何かあげたの？」

うっ。

訊かないで欲しかったのに～、ダルフェさん！

カイユさんはさり気に避けてくれてたのにな……。

「え！？　あ……ま、まぁ一応、あげたというか……そのっ」

「ああ、我も望みのものをもらったぞ？　昨夜、り……」

私は慌てて、色素の薄い唇を持つ口を両手で押さえた。

「ちょ……ハクちゃんっ！？　し、信じられない……なんで言おうとすんのよっ！？」

ー我も。

昨夜。

真珠のような貴方のかけらの鎖を、私の身体に巻き付けて。

ー我も、りこからの贈り物が欲しい。

そう言って。

艶めく微笑で、私の心を絡めとり……。

「……っ」

きゃあああ～！

ここで思い出しちゃダメ～、考えちゃダメっ！
「何故怒るのだ？　あのようによろ……んべっ！？」
隣にふんぞり返って座っていたハクちゃんの白い頬を、私は慌ててひっぱった。
「だ、駄目っ～！！」
「ふぃ、ふぃごっ！？」
引っ張りすぎてその無駄に綺麗過ぎるお顔が崩れたって、知るもんですかっ！
少しは私を見習って、地味な顔になっちゃえばいいのよ！
「ハクちゃん！　言わないでって、あれだけ念を押したのにぃい～！」

貴方のかけらは。
真珠のように、綺麗で。
砂糖のように……とっても甘い。

「あれは貴方がっ……だって、ハクちゃんがっ！」

それは。
とんでもなく、甘い鎖。

「ハクちゃんが、ハクがあんな……あんなことするからっ」

心の底まで、縛られて。
貴方に酔わされ、蕩けてしまった。

身体の奥まで、嬲られて。
貴方で溢れて、溺れてしまった。

「あんな意地悪なこと、言ったり……したりしたから……だから私

っ、私っ……」

もっと欲しいと、冷たい身体を引き寄せた。

もっと欲しいと、すがって泣いた。

貴方が欲しいと。

何度も言った、言わされた。

「うう～っハクちゃんのドS！　もう、絶～対にあんな使い方は許さないんだからねっ！？　これは今日中にアクセサリーにします。カイユ、スキッテルさんのお店に行きましょう！　……ハクちゃんはお留守番してて」

貴方のかけらに縛られて。

「り、りこ！？　おい、我を置いて行く気なのかっ！？　待たんか……待ってくれっ！」

この世のどんなお菓子より。

「‘待たん’ですっ！」

甘い時間を過ごした事は、２人の秘密。

☆ーーーーー☆ーーーーーー☆ーーーーーー☆ーーーーーー☆ーーーーー☆

＊お揃いのフリフリ花柄エプロンを着たハクとりこを、やえ様が描いてくださいました♪
と～っても可愛いです！
これも2人の‘甘～い時間’ですね♪
やえ様、ありがとうございました。

＞i59682201＜

「む、むむ？　りこのお手本通りにはいかんのだ。この作業は難しいな」
「初めてにしては、上手だと思うよ？　ハクちゃんの絞った所、クリームたっぷりで美味しそうだから私が食べたいな」
「そうか！？　うむ、では我があ～んをして食べさせてやろう」

最近の2人はダルフェ作のお揃いのエプロンをして、キッチンに立つ事も多くなりました。
シフォンケーキからステップアップして、デコレーションケーキに挑戦。
この後、皆で午後のティータイム♪

番外編　～ぷれぜんと～（後書き）

＊イラストの著作権はイラストの作者様である　やえ様　にあります。

2～3月の小話　～ランズゲルグ～

じじいのつがいになったおちびは、異世界人だ。
本来なら＜監視者＞にとっては処分対象である【異界の生物】だが、おちびは生き残った……自分を殺しに来た＜監視者＞の‘つがい’になったからだ。
つがいを得たじじいは、変わった。
いろんな意味で。

「へ～、豆で鬼を追い払うのか？　またへんてこな祭りだなぁ」

皿に盛られた豆菓子を食いながら、おちびの異界話を俺は聞いていた。
自分からはあまり故郷の事を話さないおちびだが、俺は異界文化に興味がある。
かぼちゃの祭りも興味深かったし、多少だが実益を生んだ。
だからこうして執務室に呼んで茶をしている時などに、さりげなく話をふって異界話を楽しむ。

「う～ん。お祭りっていうか、伝統行事かな？　小さい時は、毎年やってたっけ……」

膝に座ったじじいの腹を撫でながら、おちびが言った。
あの＜ヴェルヴァイド＞が、嫁に腹を撫でられご満悦……すっかり日常となったヴェルのこの姿を目にしたら、他の四竜帝もさすがに驚くはずだ。

「おちび、最近はしてなかったのか？」

数日前、おちびはカイユ達と南街に観光に行った。
その時に買ってきたのが、これだった。
乾燥させた豆を炒って、色づけした砂糖をまぶした駄菓子だ。

「うん。懐かしいな……お父さんを鬼役にして、力いっぱい豆を投げつけて……楽しかったなぁ～」

「なっ……なんだってぇ！」

父親を豆で攻撃するのか？　家族なのに！？
力いっぱい……人間だから許されることだな。
竜族が力いっぱい投げたら、豆だって凶器だ。

「それでね、歳の数だけお豆を食べて……お父さんはお豆が大嫌いだから、いつもお姉ちゃん達と協力して無理やり食べさせたの」

嫌いな食い物を、歳の数だけ！？
歳の数……竜族だったら軽い拷問だな、そりゃ。

「豆まきとやらをしたいのか、りこ？　ふむ、ランズゲルグを鬼役にするか」

そう言いながら、じじいは数粒の豆菓子を手に取った。
おちびに向けられていた金の眼が、俺様へと視線を移した。
俺様は即、叫んだ。

「おっ、おちび！　豆は……これは駄目だ、勘弁してくれぇ！」

このじじいに、フルパワーで豆を投げつけられたら。

俺様、死ぬ。

豆で死んだ初めての竜帝として記録に残るなんて、嫌だぁあああ！

「？　ええっと、はい。しません、しませんから……ちょっ、女神様っ！？」

立ち上がり、とりあえずじじいの射程圏内から逃走した。

おちびがなにか言っていたが、無視して執務室を飛び出した。

しかし、あのおちびが……父親に豆をぶつけ、大嫌いな豆を強制的に食わせるなんてっ！

なんてことだ！

あのドSじじいの嫁になるだけのことはある。

「この俺様を一瞬で窮地に追い込むとは……さ、さすがじじいの嫁！　鱗フェチなうえ、もしや無自覚ドSなのかっ！？　おちび、恐るべしっ！！」

どこかにいる、俺様のつがい。

頼むから‘普通’の雌であってくれー！

廊下を走りながら、そう願った俺様だった。

2～3月の小話　～ランズゲルグ～（後書き）

＊活動報告欄に　２０１０・２・３　掲載。

2～3月の小話　～セレスティスとジリギエ～

「ねえ、ジリ。おぢいの眼、どう？　う～ん、見た目は朝と変わらないか。……不思議だね」

手鏡に映るのは、娘と良く似た自分の顔。
カイユと同じ水色の眼……の、はず。

僕のこの眼は。
色を失った。

無くしたのではなく、放棄した。

君を失ってから。
僕にとって、この世界は白と黒の濃淡でしかない。

なのに。

「おぢいね、さっき……とっても驚いちゃったんだ」

陛下の執務室で。
【色】を見た。

それは、金。

黄金の輝き。

「異界人か。あの子……こちらの人間とは、やっぱりどこかが違うのかな？」

＜ヴェルヴァイド＞も竜帝も。
全てが白黒。

なのに、あの子の眼だけが。
鮮やかな‘色’を纏っていた。

「ミルミラにも、あの金色を……見せてあげたかったな」

君が去った、色の無い世界。

「ぎゅいぃ！　おぢっ、おぢい！」

娘の中に、君の想い。
孫の中に、君の面影。

そして。
僕の中には、君の竜珠が遺ってる。

でもね、ミルミラ。
それじゃ、足りないんだよ。

「君がお姫様になりたいって言うから、僕は‘王子様’になったのに。先祖返りの【獣】じゃなくて、お姫様の君にふさわしい王子様に……」

セイフォンの皇太子。
あれが災厄を連れて来た。

そして、君はいなくなった。

僕の側から、奪われた。

「ねぇ、ジリギエ。おぢいはもう、疲れちゃったんだよ。相手がいない、王子様ごっこ、なんて、不毛だしね……」

やめられないのは、君の竜珠が僕に囁くから。

―約束よ？　セレを私の王子様にしてあげる。その代わり、私をセレのお姫様にしてね？　ずっと、ずっとよ……。

「ジリギエ。お前に、お願いがあるんだ」

「ぎゅぎゃ、ぎゃっ！？　おぢい？」

「誰にも言っちゃ駄目だよ？　ふふっ……男同士の約束なんだからね」

きっと。

お前はおぢいよりも、強くなる。

「ジリ。お前は、どの竜帝にも縛られない存在になれるはずだ。ジリの＜主＞は……あの＜魔王＞なのだから」

＜青の竜騎士＞である僕は、陛下の命には逆らえない。

生きろと命じられたら、生きるしかないんだ。

「この生き地獄から、憐れなおぢいを救っておくれ」

あれは、希望の光。
幸福への、灯火。

「もう、独りは嫌なんだ」

金の魔王よ。
貴女のお慈悲を、どうか僕へお与えください。

2～3月の小話　～セレスティスとジリギエ～（後書き）

＊活動報告欄　２０１０・２・２１　掲載。

2〜3月の小話　〜ハク・3〜

「見たな」

魔女の手には、我の文箱。
漆黒の漆に、淡く輝く牡丹の螺鈿細工が施されていた。

「ええ、見ました」

離宮に数ある木の中で、ひときわ大きなデル木陰で寝入ってしまったりこを寝台に移し。
数時間後、文箱を取りに戻ると魔女がいた。

「で？」

忌々しいことに。
この魔女はりこの‘お気に入り’なのだ。

ヒュートイルの血肉を喰らい育ったこのデルの木も、りこの‘お気に入り’だ。

「‘で？’って、何ですの？　トリィ様じゃないんですから、それじゃあ私には分かりませんわ。主語・述語をお使いください」

魔女は文箱を開け薄紅一枚の紙を取り出し、色を付けた爪を持つ指で摘み。
身をかがめ、竜体の我に視線の高さに合わせ。
ひらひらとそれを泳がせた。

「我の渾身の作である恋文をお前は読んだ。我はお前を地面へと叩きつけ、その厚かましい脳を潰してしまいたい。だが、りこに怒られるのは嫌なので我慢する。りこのおかげで生きながらえている貴様に、この恋文の感想を述べさしてやろうではないかと、我は言ったのだっ」

「言ってませんわ。うふふ、いやぁね～。脳が溶けて無くなってるんじゃありませんか？　あ！　あの夜着、素敵でしょう！？　うふふっ。ヴェルヴァイド様、お気に召しました？」

「……」

「ふふっ。これ、トリィ様には読ませられません」

「何故だ？　ダルフェが相手のことを褒めつつ、‘2人で過ごす明るく楽しい未来への希望‘なるものを入れるとなお良いのだと助言をくれたので、125回も書き直した成果がそれなのだぞ！？」

それを清書し、りこに渡そうと我は考えていたのだが。
どこがいかんというのだろう？
傑作だと思うのだが……。

「はっ？　希望！？　これは‘欲望‘って言うんですわ。お返ししします……添削しておきました」

渡された紙は数箇所、文字が黒く塗り潰されていた。

「……我はお前が嫌いだ」

りこを想って書いた字が。

黒く、黒く。

「あら、光栄ですわ。嫌うほど、意識してくださるなんて」

字は塗り潰せるが、我の内にあるモノは。
初めてしった『欲望』は。
我自身にさえ、塗りつぶせない。

我も。
貴女に。
愛されるモノになりたい。

第８１話（前書き）

＊本文中に性的表現（Ｒ１５）が含まれています。苦手な方はご注意下さい。

第81話

カイユさん達がお仕事から帰ってきた。
夕陽でオレンジ色に染まった温室で、ナマリーナにご飯をあげる準備をしている時だった。
ハクちゃんはベンチに座って、私とカイユさんのやりとりを眺めていた。
彼は何も。
何も言わなかった。
陶器のような白い肌も、真珠色の長い髪も夕陽色になっていた。
縦長の瞳孔の黒さが際だち、黄金の眼には夕陽の赤みが加わっていた。
何も言わず。
私達を見ていた。

青い騎士服を着たカイユさんの腰には刀……朱色の綺麗な鞘だった。
カイユさんは、それに私の視線が向けられているのに気がついていた。

ーあの皇太子が帝都にいる間は帯剣をお許しください、トリィ様。

刀や剣。
今まで、テレビや映画でしか見たことがなかった。
この世界に来て本物を見た……見せられた。
カイユさんはそれを察してくれたみたいで、私の前ではセイフォンでも帝都でもそういったものは一切持っていなかった。
ダルフェさんに誘われてオフラン君達の練習を見に行ったことがあったけれど、興味より怖い気持ちの方が強かった。

―今の私は……母様は、刀を放せないの。ごめんなさい……不安にさせてごめんね、私の可愛いお姫様。

寂しげな笑みを浮かべて、お土産だと言って私に象牙細工の髪留めをくれた。

八重の花が彫られた綺麗な髪留めだった。

柄杓とバケツを持って立っていた私の髪に、それをつけてくれたカイユさんの手は白い手袋をしていた。

ダルフェさんはダルド殿下の警護担当になったので、彼が滞在中はここには顔を出せないとカイユさんが言った。

柄杓とバケツを持ったまま、私はカイユさんを見送った。

軍服のような＜青い竜騎士＞の制服の背に流れる銀色の髪は長くまっすぐで。

刃物のように、煌いていた。

私が見送ったのは＜母様＞じゃなく、カイユさん……＜青の竜騎士・カイユ＞だった。

ご飯がお預けになり焦れたナマリーナが立てた水音は、激しい雨が温室の天井に打ち付ける時の音とよく似ていた。

雨は降っていない。

今日の夕陽は塔から見たら、とっても綺麗だったと思う。

明日はきっと、快晴だ。

明日。

私はダルド殿下に会う。

彼に直接会うのは、あの日以来。

あの時、ハクちゃんは＜処分＞……あの人を殺すつもりだった。

「ねぇ、ハクちゃん。私、明日……」
ハクちゃんに、そんなことをさせたくない。
「……りこ、湯が沸いたぞ」
「え？　あ、うん」
私はキッチンでお湯を沸かしていた。
茶葉をポットに入れ、カップを用意している間に1人分のお湯は音をたてるほど沸いていた。
オレンジの香りがするこのお茶は、最近のお気に入り。
銅製の小ぶりなやかんからは、勢いよく蒸気があがっていた。
カップにお湯を注ぎ、温めてる間にポットへお湯を入れた。
ガラス製のポットは茶葉が泳ぐ姿と、お湯が染まっていく様子が見える。
「綺麗……それにとっても良い香り」
温めたカップにお茶をいれ、居間に持って行こうとしたら。
私の背後に立っていたハクちゃんの、真珠色の爪に飾られた長い指がカップの取っ手に添えられた。
「‘お手伝い‘だ」
あつあつのお茶がたっぷり入ったカップを口元に持っていき。
「この温度は、りこが教えてくれた‘ふーふー‘が必要だろう？」
金の眼を細めて、そう言った。

居間にはソファーが長方形のテーブルを囲んで、3つ置かれている。
1人用が1つと、向かい合わせに3人用が2つ。
身体のサイズが竜族は大きいから、ソファーも私の家のものとは規格が全く違う。
1人用に私なら3人座れそうだし、どちらも深く座ると私では足が床に着かない。
だからいつも手前に座っている。

「りこ。熱かったら遠慮無く言え。さらにふーふーしてやろう」
「ありがとう、ハクちゃん」
いつもと同じように並んで座り、ハクちゃんが手渡してくれたカップに口をつけた。
お茶を飲む私を覗き込むようにして、ハクちゃんが言った。
「りこ。今日は夕食を半分以上残したな」
「ごめんなさい。お昼、食べ過ぎたみたい。お腹がいっぱいだったから……」
女神様が持ってきてくれた本日の定食は、コロッケだった。
ハクちゃんの手みたいな、巨大コロッケが山盛りのサラダと一緒に3個。
がんばって1個は食べた。
それが限界。
残り2個は女神様がぺろりと平らげてくれた。
始めからそのつもりだったんだと、コロッケにソースをたっぷりかけながら笑っていた。
「ハクちゃん。明日ダルド殿下に会う時、貴方を抱っこしてていい？」
一口だけ飲んで、カップをテーブルに置いた。
「あのね、私。ちょっとだけ、怖いの」
空いた手で、ハクちゃんの長い髪を手に取った。
鼻先に持っていき、匂いを嗅いだ。
良い香り。
甘い、花の香り。
私の大好きな、ハクの香り。
「怖い？」
すっかり嗅ぎなれて。
この香りがなくちゃ、なんだか落ち着かないくらい……。
大好きな、ハクの匂い。
「皇太子がか？　あれを恐れる必要などない。目障りなら、います

ぐ＜処分＞してきてやろう」
処分。
それは、駄目。
「違うの、違うのよ」
絶対に、駄目。
なんで『駄目』なのか。
貴方は気がついてるのかもしれない。
「自分が、怖いの」
私、あの人を恨んでる。
術式を失敗したミー・メイちゃんじゃなく。
あの人を、恨んでるの。

夢の中で。
彼を何度も罵った。

私と同じ目に遭わせてと。
彼から全部奪ってと。
夢の中で、貴方に願った。

復讐したいと、貴方に縋って泣き叫んだ。
何度も。
夢の中で。

「お願い、ハクちゃん。明日は貴方を抱っこさせて」

憎しみを知った、この暗い想いを持つ胸を。
愛しい貴方で、抑えてしまいたい。

「お願い、そうじゃないと私っ」

私の想いを。
貴方の綺麗な鱗で、覆い隠して。

私の中の悪魔を。
貴方への想いで、封じてしまいたい。

「我は」

私の頬に、優しく触れる貴方の唇。
私だけに与えられる、淡い微笑。
魔王様の微笑みは。
きっと、天使の微笑み以上に魅惑的。

「我は。りこの望むままに」

白皙の美貌に見惚れている間に。
膝にのせられ、引き寄せられた。

「ハクちゃん？」

左耳を熱い舌で弄られ、食まれて。
頭の中まで舐められてるかのような感覚に、震えが走る。

「ハ……っ、ぁ！」

冷たい手が。
当然のように。
遠慮の欠片もなく。
私の肌を這い。
こんな時だけ器用な指先で、私の羞恥心すら散らしてしまう。

「だ、だめっ……だって私っ……ハクちゃんっ」

私だけを食む、その唇で。

「だめ？　我にりこの‘嘘’は通じない」

私を暴く、その指先で。

「今、すぐに。ここで」

ここで……淹れたてのお茶が香る、この居間で？

オレンジの。

柑橘の香りは、あの人の顔を私の脳内に浮かべてしまうのに。

「貴女を、りこの身体も心も我で埋め尽くそう。それがりこの望みだろう？」

大きな手が私の髪を梳き、カイユさんのお土産の髪留めを外した。

「ち、ちがっ……わ、私はお茶、を飲もう、とっ……おもっ」

嘘吐き。

私は嘘吐き。

もうお茶なんてどうでもよくなってるのに。

「あの皇太子の事など、思い煩うな。我がりこの‘怖い’をここから、この脳から押し出し消してやろう」

嘘吐きで、卑怯な私をねじ伏せて。

身体だけじゃなく、この暗い心も喰らい尽くして。

「ハ……クッ」

貴方が、私を罰して。

「我は、貴女の望みのままに」

温かなお茶よりも。
熱い貴方で、私を満たして。

「ハ、ク……っん」

竜体じゃなくても。
念話が使えなくても。
触れ合う場所から、繋がるそこから。
私の想いは、貴方に届く。

「りこだけだ。我がこのよう触れるのは……我が欲しいのは、りこだけだ」

貴方に触って欲しい。
貴方に触れたい。

「りこ、我のりこ。他の男のことなど考えるな。我は拗ねてしまい、ついセイフォンごと皇太子を消してしまうやもしれんぞ？」

「やっ、ちがっ……そんなんじゃないの、分かってるクセに……意地悪言わないでっ！　も、もう喋ら、ないでっ」

いつも思うんだけど。

なんで？
なんでこんな状態でも、この人は普通に喋れるんだろう？

「ハク、お……願っ……明か……を、消し……てっ」

私と同じ金の眼を持つ顔に、小刻みに震える両手をゆっくり伸ばしたら。
ハクが大きな手を私の手に添えて、白く滑らかな頬にしっかりと導いてくれた。
自分から引き寄せなくても、ハクの顔が真珠色の髪と一緒に私の元へと来てくれた。

「好……き」

想いを込めて。
深く……深く、口付けた。

キスの仕方は。
貴方が教えてくれた。

「……真っ暗に……して」

私の心みたいに。
暗く、暗く。

「我は貴女の望みのままに」

でも、きっと大丈夫。

「それにな」

貴方のくれた、この金の眼は。
どんな暗闇だろうと。
私の貴方を見失うことは無いのだから。

「我はこの通り、抱っこ、が大好きなので、明日の抱っこは大歓迎なのだ」

抱っこ……抱っこ？
ハクちゃん。
確かに抱っこに近いですけど。
これは、抱っこ、じゃないと思うよ？

「りこ、我のりこ」
りこの望んだ闇の中。
明かりを消し。
月明かりさえ入らぬように、全てのカーテンを閉めた外より暗い室内で。
我は寝入ったりこの顔に魅入った。
寝室より術式で運んだ暖かな毛布にくるまれて、冷たい我の身体の上で安らかに眠るりこの顔はとても美しい。
もっとも我の美の基準はりこなので、鼻水が垂れていようが泥まみれだろうが我の目には美しく感じるのだが。
頬はほんのりと朱に染まり、額には微かに汗が残っていた。

「……甘いな」
りこの細く小さな身体に右腕を回し、左手で肩まで包んであった毛布をゆっくりと剥きながら額の汗を舐め取った。
「りこ」
腕の中にいる愛しいモノを我は見た。
我の片手で易く掴める細首に。
我が愛しんだ胸元に。
我が与えた刻印が、我が与えた再生能力によりゆっくりと消え行く様を眺める。
至福と同時に寂しさも感じるこのひと時が、我は好きだ。
「……りこが唯一、知っている、人間の男か」
柑橘の香りを嗅ぎ、あの男の匂いだと言ったことがあったな。
皮を剥こうとして、実まで潰してしまった果汁にまみれた我の指を拭きながら。

ーダルド殿下って、柑橘系の爽やかな香水を使ってるみたい。あの夜、貸してくれたマントから仄かに香ってたのが……忘れられないの。

忘れられない？

忘れられない……そうだろうとも。
あの夜、りこは異界から落とされてしまったのだから。
強烈な記憶とともに、香りは脳に深く刻み込まれる。
そして、その香りは永きに渡り記憶と結びつく……消えることはないやもしれぬ。
りこ自身にはどうしようもないことだ。

我のものよりも先に、りこの脳が覚えたのはあやつの匂い。
この我のりこに、忘れられない、と言わせた男。

「……あのイケメン王子は、どこまで我を苛立たせる気なのだ」
柑橘の香りか。
「ふむ……」
柑橘……蜜柑は、りこの好物の1つだな。
「この我が、蜜柑にまで嫉妬せねばならぬ。……竜というのは、難儀な生き物だな」
だが。
竜をやめようとは思えない。
＜無＞に戻りたいとは思わない。

我はりこに会い、好きなものができた。
我はりこに会い、嫌いなものもできた。

この我が。
世界一好きなものは、我のりこ。

この我が。
世界一嫌いなものは。

「……お前だ」

我のりこの心に、消えぬ傷をつけた。

「セイフォン・デイ・シーガズ・ダルド」

我のりこの心に、我より先に触れた。

「我がこの世で最も嫌いなものは、お前だ」

明日。

我の腕で眠るこの人は。

りこは我に、何を望むのだろうか？

第８２話（前書き）

＊このページには残酷な描写があります。ご注意ください。

第82話

「……なっ」

昨夜……あれから。
ソファーで寝てしまった。

「……な、なななっ」

人型ハクちゃんの腕の中で目覚め、頬にキスをしてもらった。
ハクちゃんのひんやりとした唇が、寝起きの鈍い脳を優しく刺激して……。
私はこの事態を把握した。

やってくれたわね!?　ぽいぽい大魔王～!

「なにこれ～っ!　ふ、服が……うわっ!?」
床に落ちているもの。
向かいのソファーに引っかかったもの。
そして昨夜ハクちゃんが着ていたものも、あっちこっちに投げ捨てられていた。
天井の照明器具から下がっているのは、あれって私のっ……!?
「いいいいい、今、何時……ひぃ～っ!」
私は壁にとりつけられたお花の形をした時計で時間を確認し、慌ててハクちゃんから降りた。
8時を過ぎているではありませんかっ～!
カイユさんが来ちゃう!
この惨状を見られたら、恥ずかしいなんてもんじゃなぁあああい!!

「おおお起きて、ハクちゃん！早く、早く～！！」
私を蓑虫のように包んでいた毛布を大雑把に畳んでから、ソファーで寝そべったまま私を見ているハクちゃんの左腕をひっぱった。
ハクちゃんは身体を起こし、右手で顔にかかった真珠色の髪をかき上げた。
「起きて……はて？　我はずっと起きてりこを見ていたぞ？」
そんな何気ない仕草が相変わらず妙に色っぽい旦那様のお腹に、畳んだ毛布を押し付けた。
「その起きるじゃなくてっ！　と、とにかく片付けないとっ」

恥ずかしがれとは言いませんが。
うう～っ、少しは隠しなさい！

「ハクちゃん、この毛布を寝室に置いて来て！　私は服を片付けるからっ」
「りこ」
私は一番近くにあったワンピースを拾うためにしゃがんでいたので、顔だけをハクちゃんに向けて返事をした。
「はい？」
ソファーから立ったハクちゃんは、私を金の眼で見下ろしながら言った。
「なにやら慌てているせいか、いつものりこらしくないぞ。以前のように我が‘失敗’したら、困るのはりこだろう？　少しは隠せ。我は蜜月期の竜なのだ……襲うぞ？」
「……え？」
隠せって、それは私のセリフ……ん？
以前の失敗？

失敗……おそっ！？

うわぁあああ～、あれだっ！
ジリ君のお産でカイユさん達がいなかった時の、お風呂事件のことだぁ～！！
ええ、貴方様の仰る通りでございます！
とっても困ります、いろんな意味で困りますともっ。
「ハハハ、ハクちゃん！　そのももも毛布っ、毛布をかかっ貸してくださいっ！」
床でだんご虫のように身体を丸め、ハクちゃんに右手を伸ばした。
ハクちゃんは毛布をお腹から頭の上へ、ささっと移動して言った。
「さて。我はこれを置いてくるとしよう」
へ？
ちょっ……！？
「待っ、待って！　毛布っ……ハクちゃんの意地悪～！」
私の叫びを背に受けながら、ハクちゃんは一度も振り返らずに去っていった。
「うう……ハクちゃんの意地悪大魔王！」
竜帝さんの言うとおり、ハクちゃんは時々S系。
ハクちゃんのドS疑惑は深まるばかり。
女神様は確定に決まってるだろうって、こないだもハクちゃんに頭を鷲掴みにされながら言ってたけど。
きっぱりとドSと言い切る女神様と違って、私の疑惑は疑惑のままだった。
「だって」
誰にも言って無いけれど。
実は。
「だって。ハクちゃんは‘がじがじ’が……私に噛まれるのが好き

なんだもの」

がじがじ。

それはハクちゃん命名の行為。

私は覚えてないんだけど。

支店でしちゃったらしく、ハクちゃんは以後‘がじがじ’が好きになったそうなのです。

彼は‘がじがじ’が、すごく好き。

食い千切るほど噛んでくれとせがまれた時は、この人ドM！？って思った。

ハクちゃんのドM疑惑。

これは竜帝さんには内緒。

私だけが知っていたい、ハクの秘密だから。

がじがじは。

ハクと私だけの、2人の秘密。

「はぁ……なんでこうなんだろう、私達って」

脱がされたモノを昨夜の記憶が脳に残っている状態で拾い集めるというのは、誰も見ていなくてもとんでもなく恥ずかしかった。

誰も見て……あ、違った。

居ましたね、1名様。

私の羞恥心を嘲笑うかのように堂々と、真っ裸でてくてく歩いて毛布を寝室に片付けに行った御方がいらっしゃいましたね。

今は可愛い小竜の姿で、一緒に服を拾い……あぁ、現実って切な

い。
切ないというか、厳しいというか。
ありがた～いご忠告に従い、最初に手にしたワンピで胸等を隠しつつ、部屋中に散らばった衣類を拾って歩いた。
「無い……し、下着が……」
うう～っ……ハクちゃんのぱいぱい大魔王め！
ま、まあその、きちんと畳んであったらそれはそれでかなり怖いけど。
「りこ。ほら」
向かいのソファーの下からほふく前進で出てきたハクちゃんが、4本指の可愛いお手々を私に差し出した。
その手にある布は白くて、レースが……ぶほっ！？
「きゃあああ～、そそそれ私のっ……！」
ソファーの下！？
なんだって、そんな所にあるのよ～！
ぱいぱい大魔王の馬鹿ぁあああ！！
私は差し出されたそれを瞬時に奪い、ワンピースと胸の間に突っ込んだ。
「ハクちゃん、私のはいいから自分のを……えっ！？」

温室へと繋がる扉から。
コンコンッと、ノックの音が。

「トリィ様、おはようございます」

ひっ……カイユさんの声！？
うきゃあああ～、待って！
待ってぇえええ～！！
「ちょちょちょちょっとだけ、待ってください～っ！　ハクちゃん、後はよろしく！！」

私は両腕に掻き集めた衣類を抱え、寝室に駆け込んだ。
そして。
「うきゃっ！？」
転んだ。
扉を開けて直ぐの床に毛布が置いてあることに気がつかず、足を引っ掛けて転んだ。
「痛たたぁ～……なんでこんな所に……あっ！」
ううん、ハクちゃん。
毛布を寝室に置いてきてっていうのは、ベッドに戻してって意味だったんだけどな。

私がかなり派手に転んだので、ハクちゃんはプチパニック状態だった。
「りこ、すまなかった。我は置き場所の選択を誤った。我は毛布を床の隅に置くべきだったのだな？」
う～ん。
それもちょっと違うんだけどな。
ハクちゃんは転んだ私に走り寄る時は混乱のあまり、２足歩行じゃなくて４足歩行になってしまっていた。
竜体のハクちゃんの体型は、幼生のジリ君体型と違って４足歩行に向いていない……。
ぎこちない動きで近寄って来て、握ったお手々をぷるぷるさせながら私の左太腿にぺたっと張り付き、顔を擦りつける姿を見てそう思った。
竜体で良かった……人型だったらと想像しかけて、急いで止めた。

大急ぎでチュニックワンピとワイドパンツを身につけ、扉を開けずに待っていてくれたカイユさんに部屋へ入ってもらった。
「お待たせしました！　おっ・おはようございます、カイユ」
「おはようございますトリィ様、ヴェルヴァイド様」
昨日と同じ青い騎士服を着た凛々しいカイユさんは、銀のトレーを持っていた。
「さあ、トリィ様。朝食にはこれをどうぞ、ダルフェがこれを貴女にと……」
トレーに乗った白い角皿には、三角形のサンドウィッチ。
綺麗にカットされた断面から見えるのは、たっぷりの生野菜とハム、そしてチーズ。
コーンの甘い香りがふわりと漂うポタージュ。
定番となったカカエのプリンには形良く絞られた生クリームと、数種のベリー類が添えられていた。
「わぁ～、美味しそう！」
ダルフェさん、お仕事が忙しいのに……ありがとうございます！
トレーを受け取った私は、満面の笑みを浮かべていたに違いない。
カイユさんのこの言葉を聞くまでは。
「朝は電鏡で連絡してから参りましょうか？　あのように慌てて行動されては、危ないですわ……いろんな意味で」
「えっ！？」
トレーを持って固まった私の顔の横で、ふわふわ飛びながらハクちゃんが言った。
「竜族は人間よりも聴覚が良いと、我はりこに言ってなかったか？」
言ってないよ、ハクちゃん（涙）。

銀のトレーをダイニングテーブルに置き、私は椅子に腰掛けた。
自分ですると言ったんだけど、カイユさんは白い手袋をしたまま

私の手からミルクパンを奪い、にっこり笑いながら言った。
「料理は苦手ですが、これくらいは出来ますわ。カイユにおまかせください」
「え？　お料理苦手なの！？」
才色兼備で完璧な女性だと思っていたので、その言葉にちょっと驚いてしまった。
「はい。必要性が無いもので……ダルフェがああですから」
なるほど。
すごっく納得です。
「私、母に似て料理も裁縫も駄目なんです。唯一できる料理は……お茶を淹れることかしら？」
お茶？
お茶って料理なんだろうか……。
「カイユの淹れてくれるお茶はとっても美味しくて、私は大好き」
「そうですか？　ありがとうございます」
ほんのちょっと頬を染めて嬉しそうに微笑むカイユさんは、とっても綺麗で可愛かった。
お茶は料理。
うん、そういうことに致しましょう！

ミルクパンで冷えてしまったポタージュを温めながら、カイユさんは『本日の予定』を教えてくれた。
午前１１時に、私はダルド殿下に会う。
私がダルド殿下に会う場所はお城の大広間でも、竜帝さんの執務室でもなく。
私が暮らしている南棟……温室に決まったのだと教えてくれた。
ハクちゃんにも相談は一切しないで、竜帝さんが全て１人で決めた。
それに対しての不満は、私には無い。
＜青の竜帝＞として、彼が決めたことだったから。

「セイフォンの皇太子か……ふむ」
ハクちゃんは昨夜私がお願いした通り、今日は竜体でいてくれるんだけど……あれ？
「ハクちゃん、それ……」
いつの間に寝室から持ってきたのかな？
彼の白い手には、赤いチェックの布。
私のパジャマで作ってあげたナイトキャップを両手で握り、ダイニングテーブルにちょこんと座ったハクちゃんが私を見上げて言った。
「りこよ、ぱじゃまはどんなに自慢したくとも着ていったら駄目なのだろう？　ならばこの‘お帽子’だけなら良いか？　あのイケメン王子に、これを装着した我のかわゆさを見せ付けてやろうと思うのだ」
は？
「我はイケメンとやらでは無いので、かわゆさで勝負するつもりだ。まぁ、我のかわゆさは世界一であるとりこに言われておる程なので、よく考えたら不戦勝だな。あの男は全くかわゆくないのだから」
勝負！？
またまたそんなこと言って……勝負じゃな～い！
「さあ、召し上がれ。熱いですから、気をつけて下さいね。……ヴェルヴァイド様。あの皇太子は羽虫以下の存在。トリィ様のお作りになられた貴方様の宝を、見せてやる必要などありませんわ」
湯気の立つポタージュを私の前に置いてくれたカイユさんの声には、前半と後半の温度差がすご～くあった。
「うっ……カイユ」

あぁカイユさん、貴女もダルド殿下に手厳しかったんですね。
「と、取りあえず食事にしましょう！　腹が減っては戦は出来ぬって、昔から言うしね！」
ん？
戦。
戦……勝負！？
ハクちゃん、私達ってやっぱり似たもの夫婦なのかなぁ？

南棟に来る前にジリ君と食事を済ませたからと、カイユさんは私が朝食をとっている間に衣装室で今日の勝負服（？）を選んでくれた。
彼女が衣装室から抱えてきたドレスは、白いドレスだった。
光沢のある白地に、袖と襟に金糸の細かな刺繍。
長い裾には無数の小さな真珠が縫い付けられていた。
あわわわ～、ちょっと豪華過ぎるのでは？
そう思ったのが、顔にばっちり出てしまったみたいだった。
そんな私にカイユさんは、にっこりと微笑みながら言った。
「ここはセイフォンなどという田舎の弱小国とは全てが違うのだと、あの皇太子に思い知らせてやるのです。ふふっ……この居住区もあの温室も衣装も、陛下がトリィ様の為に揃えたものです。セイフォン側で用意された生活環境などとは、比べるまでもありません。トリィもそう思うでしょう？」
カイユさんの言葉に、私はなんと答えてよいか迷い……曖昧な返事で誤魔化してしまった。
セイフォンでの暮らしも、私がダルド殿下に要求した以上のものだった。
セシーさんも良くしてくれた。

それはハクちゃんという存在が影響していることを差し引いても、十分すぎるものだった。

でも、それを彼女に……今の‘状態’の彼女に言うべきじゃないと思った。

食後に手早く入浴を済ませた私を寝室にあるドレッサーの前に座らせ、カイユさんは丁寧に髪を拭いてくれた。

「カイユ……」

さっき、またトリィ様とトリィが混ざっていた。

カイユさんの中で。

私は異界人で＜監視者＞のつがいの『トリィ様』であり、異界から帰ってきた『トリィ』という娘でもある。

「……うん、カイユ」

膝にいるハクちゃんのお腹を撫でた。

お腹を撫でる私の手の甲に、小さな手がそっと重なった。

小竜のハクちゃんは、人型の時以上に私の心の動きに敏感。

竜体だと念話が使えるせいかな……。

私の感情が無意識に彼へと流れてしまい、彼はそれを感じとっちゃうみたい。

「あ……そうだ！　私、セレスティスさんに会ったのよ！？」

昨日、お土産を持ってきてくれた時は言い出せる雰囲気じゃなかった。

ちょっと話題を変えたかったし、私は竜帝さんの執務室でセレスティスさんに偶然会った話をした。

「絵本に出てくる王子様みたいで、とても素敵な人ね！」

あの首ちょんぱ発言については、黙っていよう。

「父は貴女と……ヴェルヴァイド様の前でも‘王子様’だったんですね？」

髪を拭いていた手が、止まった。

タオルをドレッサーに置いてから、カイユさんは膝を床について私と視線を鏡越しに合わせた。

「私が貴女に会わせるのを許さなかったと、父は言いましたか？」
「え？　はい、そっくりだから照れてるんだろうって言っ……」
私の言葉を遮るように。
「違います。父を失いたくなかったからです」
カイユさんは言った。
「カイユ……」
やっぱり。
うん、そうだよね。
ハクちゃんは優しい。
私の言葉をそのまま受け取ってしまうほど、素直な心を持っている人。
小さな子供のように、床でころころを楽しんだりする無邪気な人。
でも、とても……とても怖い部分も持っている人だから。
人間である私と彼の間には子供が出来ない。
だから竜の雄である彼は未だに蜜月期中で、他の雄の存在に過敏に反応してしまう。
ハクちゃんが子供を望んでいなくても、それは変わらないようだった。
「ある一線を越えれば、貴女の前であろうと蜜月期の雄であるヴェルヴァイド様は父を＜排除＞します。だから……父は貴女に会いたがっていたのに、私が拒んだんです」
「ハクちゃんがもしお父さんを……って、考えるのも無理ないと思

う」

カイユさんはセイフォンと帝都で、竜帝さんにハクちゃんがした事を知っている。

ハクちゃんがした事を、間近で見てきた。

「でもね、ハクちゃんはセレスティスさんを傷つけたりしなかった。カイユが泣くから駄目だって言ったの。カイユのお父さんに酷いことなんてしないよ？」

これだけは、知って欲しいの。

ハクちゃんは、ちゃんと分ってた。

お父さんに何かあったら、カイユが泣くって。

カイユが泣いたら、私が悲しむって言ったの。

今のハクは、他人の気持ちや感情を考えることができるようになってきてるって、カイユにも知ってもらいたい。

「カイユ、ハクちゃんは変わっ……」

「ヴェルヴァイド様なら父を殺して下さると、父同様私も思っていました。無傷なんて、予想外でした」

――父を殺して下さると……

「カ……イユ？」

まるで。

それじゃあ、まるで。

「私が父を貴女から遠ざけたのは、ヴェルヴァイド様の蜜月期の雄竜であるがゆえの性質を、父が利用するのを恐れたからです」

利用……どういうこと？

「母は殺されたのです、人間に」

それは、私も知ってる。

竜帝さんが話してくれたから。

お母さんのことと、ハクちゃんを‘利用’するっていうのと……繋がりが？

「あの皇太子が初めて帝都に来た時に同行した、王宮術士の女に殺されたんです。生きたまま腹を裂かれ臓腑を荒らされ、竜珠を奪われました」

「……カ……イ…」

そ……んな。

「あの女は母にうまく取り入って‘お友達’になり、母を騙して……殺したんです」

そんなの、知らない。

「私の父は、あの女を連れて来た皇太子を憎んでいます」

惨い殺され方をしたって言ってた。

惨い？

惨いなんて言葉ですむことなの！？

「陛下は皇太子を殺すことを、父に＜主＞として禁じています。ですが最強の存在であるヴェルヴァイド様が城内にいらっしゃるので、竜騎士が本能的に持っている竜帝陛下への＜恐怖＞による服従心が薄らいでしまうのです」

待って。

よく分らない。

蜜月期で危険なハク。

ダルド殿下の連れてきた術士に、お母さんは殺された。

だから、セレスティスさんはダルド殿下を怨んでいる。

殺したいほど……それを竜帝さんは、禁じて……。

命令……拘束力……恐怖による服従心？
「陛下がダルフェにあの皇太子の警護を命じたのは、父からあの皇太子を守るためです。陛下は政務がありますから、四六時中あの皇太子に構っていられません。陛下以外に父を止められるのは＜色持ち＞のダルフェのみ」
待って、カイユ。
まだ頭と心が、まとまらないの。
「父の望みはつがいとしての復讐。あの人は私の＜父＞である前に、ミルミラの＜セレスティス＞だったんです。復讐心を……‘望み’を越えるあの人の強い‘願い’は……」
望みは、復讐。
じゃぁ、願いは……願いは？
「あの人の願いは【死】です」

死。

「父には自殺する権利が＜主＞から与えられていません。‘生きろ’と命じられているのです」
自殺……奥さんの後を……？
そんな。
ハクちゃんに、自分を？
利用って、そういうことなの？
「じ……じさ……」
なんで？
子供が、カイユさんがいるのに？
あんなに可愛いジリ君が、孫が生まれたのに？
「セレスティスさん、死にたい……の？　あの時、ハクちゃんに殺して欲しかったの！？」
そんなの、勝手すぎる！
あの時。

私の目の前で、カイユの大切な人、に、ハクはそんなことをしたくなかったから。

私の気持ちを、心を想ってくれて……耐えてくれた。

「殺されたいなんてっ……死にたいなんてっ」

お父さんが、死んじゃったら。

カイユはっ。

セレスティスさん。

貴方は、ダルフェさんとの辛い別れが待っているカイユさんを……たった一人の娘を、支えてあげる気がないの？

カイユさん、普通の状態じゃないのにっ……心が壊れかけてるのに！！

父親なのに。

娘（カイユ）を……見捨てるの！？

「トリィ様。私は酷い娘なんです」

「カイユ！　何言ってっ……」

酷いのはセレスティスさんでしょう！？

「父が苦しんでるを知っているのに。おいていかれるのが、どんなに辛いか……私には分るのに」

カイユ……。

「父様に、生きていて欲しい」

ーー生きていて欲しい。

「カイ……ユ」

その言葉。

セレスティスさんに、お父さんに言ってないんでしょう？

言えなかったんだね……。

お父さんを、愛してるから。
苦しめたくないから。

私がハクちゃんに言えないように。
カイユも、お父さんに言えなかったんだね。

「私、酷い……娘なん……です」

ミー・メイちゃんに預けるつもりの、私が両親に書いた手紙に使ったその言葉を。
貴女から、聞くなんて。

私達、血は繋がってないけれど。
やっぱり、どこかで繋がっている。
不思議なほどに。

詰まった言葉。
カイユの唇が、微かに震えていた。

「カイユ……泣いていいんだよ？」

カイユ。
この世界で私を待っていてくれた、綺麗で強い竜族の母様。
「駄目です。私は父のことで泣いてはいけない。母を失ったあの日、父と約束しました」
「カイユ……」
はっきりとした、迷いの感じられない強い口調。
なのに、その顔は鏡に向けられていて私を見ない。

「ハクちゃん」
私は膝にいるハクちゃんに、声をかけた。
「ハクちゃん。眼を少しの間だけ、瞑っていてくれる？　お耳も塞いでいてね」
「分った。これでよいか？」
ハクちゃんは金の眼を閉じて、両手で頭の横を押さえた。
何も訊かないでそうしてくれる、優しい貴方。
口で言わなくても、念話を使わなくても。
私の心を、貴方は感じてくれている。
「ありがとう、ハク」
ハクちゃんのしっかりと閉じた目蓋に感謝のキスをして、膝にいた彼を床に下ろした。
私は立ち上がりカイユさんに向き合って、白い手袋をした両手に触れた。

「カイユ」

強さ。
貴女の強さは。

「はい。トリィ様」
「私を見て」
「……お許しください、トリィ様」

今の貴女の瞳は、私を避けている。
とても綺麗で。
胸が締め付けられるほど悲しい水色の瞳は、私を見ない。

「カイユ」

あの時、貴女が言ってくれたように。
私も貴女に、そう言うの。

「私の前では弱くても、いいの……私以外、見てないから。私の前でなら泣いていいのよ、母様」

カイユさんがしてくれたように。
彼女の髪を撫でた。
何度も、何度も。

貴女が私に教えてくれたの。
これは、貴女が……母様が教えてくれたのよ？

「カイユ……私の母様」
「……ッ」

カイユさんはそっと私の手を髪から外して、立ち上がった。
そして水色の眼で数秒間、白い手袋をした自分の両手を見た。

澄んだ冬の空から、お天気雨が降って。
白い手袋に落ちた。

「……私」

昨日から、私の前でもずっとしていたそれは。
ポタージュを温めるときも、髪を拭いてくれるときもしたままだった。

ハクちゃんが手袋をしていた時のことを思い出した。
白い手袋は、あの時は私からハクを……今はカイユさんを遠ざけ

てしまう気がして。

「貴女のお側にいる時は」

ちょっと、寂しくて。

悲しくなってしまう。

「＜青の竜騎士＞ではなく、私は‘カイユ’です」

そう言って。

手袋を外しながら微笑んだ。

カイユさんは私を見てくれた。

その濡れた水色の瞳の中で、私がゆらゆら泳いでいた。

ゆらゆらして見えるのは、私も泣いているからだと。

私の頬をそっと舐める、ハクちゃんの温かな舌が教えてくれた。

この涙の味を、ハクちゃんは口にしなかった。

言わないでいてくれて、ほっとした。

「……ありがとう、ハク」

この涙は。

きっと、ちっとも甘くなかったはずだから。

4～5月の小話　～お花見～

「ラパンの花は、桜に似てるの」

カップ描かれたラパンの花を、私の指先がなぞった。

「さくら？」

シンクにちょこんと座ったハクちゃんの金の眼は、私の指の動きを追っていた。

「お祖父ちゃんの家には大きな桜の木があって、花が満開になったらお花見をしてたの」

食器棚に片付けようと、洗い終わったカップを手にしたら。

そこに描かれたラパンの花を無意識になぞっていた。

なぞりながら、もう会えない家族の顔を淡いピンク色をした花びら1枚1枚に重ねて思い浮かべ……。

「花見とは、花を愛でるということか？　……りこは花見がしたいのだな？」

「皆で……家族皆で、お弁当を食べるの。毎年やってたのよ？」

前の日から下ごしらえをして、朝早くからお母さんの指示でお弁当を作った。

煮物に揚げ物、太巻きと甘く味付けしたお稲荷さん。

お祖父ちゃんの好物のエビチリに、お父さんの好きな春雨のサラダ。

りえちゃんの好物の杏仁豆腐。

メニューは毎年ほとんど同じ。
でも、飽きたなんて思ったことは無かった。
毎年同じってことが、私には嬉しかった。

「できる。この世界でも」

視線をカップからハクちゃんに移すと。
ハクちゃんは花柄のふりふりエプロンの裾を、ぎゅっと握っていた。

「ハクちゃん？」

大きな金の眼は瞬きもせずに、私の持つカップを見ていた。

「りこには夫である我だけでなく、【母】も【父】も【弟】もいる。りこが望むなら祖父も祖母も……【家族】を用意してやろう。……子以外なら、全て与えてみせる」

家族。
子供以外の家族を、用意、すると言う貴方。
家族は、用意、することなんか出来ないということが、貴方には分らない。

「……ハクちゃん」

カップを食器棚にしまい、シンクに腰掛けたハクちゃんの前に立った。

「ハク」

エプロンを握っていた小さな手を取り、頬擦りした。
きゅっと握られた４本指の手は、まん丸でとても可愛らしい。
なんだか、赤ちゃんの手みたい。
小さな貴方の手がとても愛しくて。

「ハク。私は、貴方がいてくれればいいの。それが私の望みなの」

愛しくて。
胸が、痛い。

「……ラパンの花が咲き、りこが花見を楽しんだらこの大陸を出よう」

ラパンの花が咲くのは春。

「うん。どこへだってついて行く。どこまでだって、世界の果てまでだって一緒に連れてって」

私達は、離れちゃ駄目。

「果て？　世界に‘果て’など無い。この世界は竜珠同様球体で、‘端’が存在せんのだからな」
「……なんで世界が丸いって知ってるの？」

カップを見ていたお月様のようなハクの瞳が、私へと視線を移し。
くりんと回って、細まった。

「独りで、暇だったからだ」

果ても端も無いこの世界。

「……今は忙しい。空の上の上に行く暇など、我にはもう無い」

ハクちゃんの尻尾が、ゆらゆら揺れた。

「ハクちゃん。ラパンの花でお花見をする時は、一緒にお弁当を作ろうね」

きっと、宇宙から眺めれば。

「では、我はりこの為に最高のゆで卵を作るとしよう」

「うん。ありがとう、ハクちゃん」

この世界も。

地球と同じ、青い星。

4～5月の小話　～お花見～（後書き）

この可愛らしいお花の背景は、ねおばーど様にいただきました♪
ねおばーど様、ありがとうございました（＾＾）

4～5月の小話　～かわゆい？～

「目をつぶって１０数えるの？」

それは、お茶の時間の出来事だった。

本日のおやつはパイ生地を小さくカットし、真ん中をひねってリボンの形にして砂糖をまぶして焼き上げたお菓子だった。

食堂でパイ生地を少し分けてもらってきて、私が作ったお菓子。

鳥居家ではお母さんがアップルパイを作った翌日に、必ずこれが登場する。

あまった生地で作れる、簡単おやつなのです。

私は『りぼん』と言ってるけど、正式には『パピヨン』というらしい……蝶っぽいからかな？

「りこ！　目だ、目！」

小竜のハクちゃんは私の膝からふわりと飛び、向かいのソファーに座っていたダルフェさんの膝に移動した。

「ちょ、旦那！？」

ハクちゃんを膝に乗せたダルフェさんは、口の右隅をヒクヒクと動かした。

嫌そうですね～、ダルフェさん。

きっと彼の脳内では人型ハクちゃんが、お膝にちょこんとしちゃった映像が流れているに違いない。

「ダルフェ、例のものを。さあ、りこは１０数えるのだ！」

小さな手を腰にあて、ダルフェさんのお膝の上で仁王立ちした可愛い姿に見蕩れていた私に、ハクちゃんは焦れたように言った。
おっと。
はいはい、了解です。

「う、うん。1、2～……」

私は目を手で押さえ、数え始めた。
なんなのかな？
また、妙なサプライズとか……！？

「5～6～……」

隣に座っていたカイユさんが、席を立つ気配。

「ギュィッ！？　ギュブブ～ッ！」

ジリ君の声、なんかこう……びっくりというか、笑ってるような？

「7～8～9……10。ハクちゃん、いい？」
「うむ、良いのだ。さぁ、目を開けて我を見、堪能するが良い！」

は？
また変なこと言って……え！？

「ハ……ハクちゃ……」

見ました。
見ましたとも。

「ううううううさっうさっ！？」

ダルフェさんの膝からふわりとテーブルに移動し、私を見上げるのは。

「うさ耳～っ！？」

白いもこもこのうさぎの被り物つけた頭部からは、ぴょこんとした長いお耳。

カチューシャタイプじゃなくて、すぽっと被るタイプだった。

「かっかかか……かわいぃ～～～～いい！！」

私はハクちゃんを抱きしめ、ふわふわのお耳に頬擦りした。

可愛い。

めちゃくちゃ可愛いっ！

サン＊オさんからスカウトされてもおかしくないほどの、とんでもない可愛さなのです。

「どうしたの、これ……あ！　こないだの！？」

こないだのうさ耳がどうのって会話、私はすっかり忘れてました～！

「ハクちゃん、とっても似合う！　やっぱり元が可愛いから、何でも似合っちゃうのかな～」

「気に入ったようだな。ダルフェに作らせたのだ。黒兎のものもあるのだぞ？　あちらも見るか？」

黒うさヴァージョンもあるの！？

白いハクちゃんに黒うさ……パンダうさぎ風で、超ラブリーなんじゃないかな♪

「うわ～、見たい見た～いっ！」

鼻息荒く答えた私に、ダルフェさんがぎょっとしたような顔で言った。

「ちょ、姫さんっ」

「ダルフェ？」

「よし。黒いのに、お色直し、なのだ。ダルフェ、お前の部屋に取りに行くぞ。こい」

「だ、旦那っ！　あれは……うわっ！」

何か言いかけたダルフェさんはうさ耳ハクちゃんに強制連行され、消えた。

ハクちゃんはダルフェさんを連れて転移してしまった。

そっか。

一人じゃ付けれないから、さっきもダルフェさんに手伝ってもらってたんだ～、うんうん納得納得。

5分後。

ハクちゃんとダルフェさんが戻ってきた。

「ひっ……ハクちゃん！？」

予想と違い、ハクちゃんは人型だった。

真っ黒なゾロ～とした長衣に、黒うさ耳をつけて仁王立ち。

しかも今度はカチューシャタイプ。

うう～、バニーガールさんが付けてるのみたい。

しかも2メートル越えのハクちゃんがピーンとたった長いウサ耳をつけたので、3メートル近くなっていた。
威圧感4割増ですよ、魔王様。

「く……黒うさ？」

違うよ、これ。
パンダうさぎさんでも、黒うさぎさんでもない。

確かに形はうさ耳なのに、なにかが違〜うっ！
うさ耳をつけてるのに、なんで禍々しくなっちゃうの〜〜っ！？

「ブギュギョッ〜！？　かかぁ〜！」

ジリ君は怖がってカイユさんの背中に隠れてしまった。
カイユさんは氷のように冷たい視線をハクちゃんとダルフェに交互に送った後、深いため息を一つ。
あぁ、カイユさんは絶対、あきれてるよ！？

「かわゆいか？」

首をかしげて、訊く貴方。
あ、眼がきらきらしてるかも。

「……えっと、あのっ」

この凍りついた空気、感じないんだね。
さすがです、ハクちゃん。
ダルフェさんはハクちゃんの後ろで私に‘すまん、すまん’と目で謝り、拝むように手を合わせていた。

「りこ？　かわゆいだろう！？　これはダルフェ渾身の作なのだぞ？　も、もしや……かわゆくないのか！？」
「……え～っと」

金の眼が細まった。
むむ、この細まりかたは……まずい、これはちょっとご機嫌斜めっぽいほうです！

「あの、そのっ」

視界に入るダルフェさんの手の動きが忙しなくなった。
拝むようにしていた手を、自分の首に水平にあててひいていた。

「……かっ、かっ」

あれは、首ちょんぱ。
首ちょんぱのジェスチャーでは！？

「かわゆいですともっ！！」

やっとの思いでそう言うと。
黒うさ耳のハクちゃんが、両手をにぎにぎしながら言った。

「さあ、りこよ。我を思う存分愛でるのだ。　先程のようにぎゅうぎゅうして、すりすりするが良い！　ん？　よし、今度我がしてやろう。遠慮は無用だぞ、りこよ」
「ううっ……は、はい。ありがとう、ハクちゃん」

私をぎゅうぎゅうしてすりすりする黒うさ耳ハクちゃんの背後で

は。
　ダルフェさんの頭部に、カイユさんの踵が垂直に下ろされた。

＜～おまけ～＞

ダルフェ「あの、え～っと。これ、姫さんの分もあんだけど……どうする？」

りこ「え！？」

カイユ「ダ～ル～フェ（怒）！！」

4～5月の小話　～ヒュートイル～

チテセの木の下で。
無数の針の集まりのような花の透き間から空を見た。
チテセの花は赤い。
白ばかり集められた此処では目立つ。
だから我は此処にいるのだろうか？

「この木、気に入った？　先月移植させたんだよ」

死体のように寝転がり。
花の色を。
空の色を。
何故。
見続けているのだろうか？

「もう3日間もここに寝転がってるけど。何してるんだい？」

セイフォンの離宮に。

「また無視？　聞こえてるクセに。……ねぇ、化け物」

何故、此処に来たのだろうか？

＜処分＞するべきモノなど、存在せぬのに。

「化け物は世界で一番の年寄りなんだろう？　皺一つ無いなんて、

若作りにもほどがあるよ。動かない……表情が無い、良くできた作り物みたいな顔だよね」

ヒュートイルは我の腹に跨り、両手で頬を撫で回すようにして触れてきた。

「睫毛に触れても瞬きひとつしないなんて。反射神経って言葉が世の中にあるの、知ってる？」

ヒュートイルの右の親指が、我の目元をなぞるように触れた。

「あんたと寝れば、不老不死になれるって本当？　ははっ、そんなわけないか！　あの女、首切ったら死んだしね。一応、僕の妃の一人だったんだけど……ま、いいや」

ヒュートイルの左の親指が、我の唇に触れた。

「体温、低いんだね」

ヒュートイルの指が2本、咥内に入り我の舌に触れた。

「うわっ、舌まで冷たい。これじゃ、ショコラが溶けないね。まあ、化け物には菓子を味わうなんて高尚な感覚は必要ないか」

ヒュートイルは言った、我の口から出した2本の指を眺めながら。

「あのさ、化け物。僕が思うに……あんた、この中にはいないんじゃないかな？」

人という生き物は。

「さあな。我にも分らん」

時に、我の中の何かに触れる。

それが何か。

「我には分らん」

番外編　～ナマリーナ～

ナマリーナは鯰だ。

「ねぇ、ハクちゃん。ナマリーナって夜のほうが活発で、かわ……面白いと思わない？」

最近の私は‘かわゆい’や‘可愛い’の使い方に、非常に慎重になっているのです。

そうならざる得ないといいますか……。

「りこはこの鯰が‘活発’だと面白いのか？」

今夜は満月で、明かりをつけなくても温室内は明るかった。

私は池のふちに頬杖をついて、ナマリーナを見ていた。

水面をゆらゆらと、漂うようにナマリーナが泳いで……。

竜体のハクちゃんは、私の左腕に寄りかかるようにして座っていた。

「む……我には解らぬ。我は鯰に興味はないが、りこが面白いと思うならそれで良い。りこ、そのような薄着で寒くないのか？」

「うん、お風呂で少し長湯しちゃったみたいで、暑くて……」

夜行性のナマリーナは昼間はこんなに動かない。

だからこうしてお風呂上りに池をのぞくのが、私の夜のお楽しみなのです。

水族館でしか見た事が無かった鯰も、帝都ではポピュラーな食材扱いだった。

（私は観賞魚というかペットにしてるけど、数メートルに育つこの鯰さんを普通は飼ったりしない）

この帝都のソウルフード（？）は鯰のフライらしく、市街には屋台なんかもあって味を競っているのだという。

味付けはハーブ系やスパイシーなものが主流だけど、中には砂糖をまぶした甘いのもあった。

鯰はこのお城の周りにある大きな湖にたくさんいる。
誰でも自由に獲って良い。
でも、美容食としても人気が出たとたん、人間の密猟者が現れ始めてしまった。
鯰を食べる習慣は竜族独特のもので、今まで人間は鯰をゲテモノ扱いして好まなかったのに。
美への飽くなき追求は、どこの世界も一緒なのよね～。

竜族の人は、大きく育った（数メートル級）鯰だけを獲る。
大きいから1匹でたくさんのフライが作れる。
人間の密猟者は手に負えない巨大なサイズの鯰ではなく、扱いやすい幼魚を大量に獲ってしまう。
このまま乱獲が進むと生息数が激減してしまうので、竜帝さんは密猟者の取り締まりと同時に養殖もすることにした。
鯰の養殖事業は絶対に儲かると、鼻息荒く女神様は言っていた。
「鯰……確かに美味しいけど」
鯰のフライ。
ダルフェさんの作ってくれた鯰のフライバーガーは特製タルタルソースがたっぷり入って、美味しかったな……。
唐揚げにしてきのこや野菜のあんかけソースと合わせても、美味しいんじゃないかな？
甘酢のあんかけも捨てがたいかも……。
あんかけ。
ああ、あんかけ炒飯が食べたくなってきた。
あんかけ焼きそばも好きなんだよね～。

つん、つんつん。

駅前の小さな中華料理店の絶品あんかけ炒飯を思い出し、うっとりしていた私をハクちゃんが鼻先でつついた。

きらきらしたお星様のように輝く金の眼が、私を見上げて……うぅ、なんてかわゆいの！

「りこ、寝室にもど……ごぶぶっ！？」

一瞬でハクちゃんが消えた。

豪快な水音とともに。

「ひっ……きゃあ！　ハクちゃん！？」

慌てて池を覗き込んだ私が見たものは。

ハクちゃんの尻尾をナマリーナがくわえ、水面を泳いでいる光景だった。

「ナマリーナ！　ハクちゃんは私の旦那様よ！？　食べ物じゃないし、ナマリーナのお婿さんにもなれないんだからっ」

手を伸ばしたけれど、ハクちゃんには届かなかった。

小さな身体はあっという間に、池の底に引きずり込まれてしまった。

「ちょっ……！？　こら、ナマリーナ！」

月明かりでは、底のほうまでは見ることができない。

この池の深さは、私の身長よりある。

でも、ハクちゃんはとっても上手に泳げるって知っていたから。

だから暢気に構えてたのに。

「……ハクちゃん？　ふざけてないで、あがってきてよ」

数分たっても白い体が水面に現れなくて……。

「なんで？」

見通しのきかない暗い水底に、連れて行かれてしまった。

消えてしまった、小さな白い竜。

「……ハ……や……だ」

だめ。

「ぁあ……うそっ……やぁ」

私を。

おいていかないで。

「い……や」

私を。

独りにしないで。

「い、いやぁぁああ！　ハクちゃん！　ハクちゃ……ハク、ハク！」

猛烈な孤独感に襲われて。

「ハク！！」

気づいたら、池に飛び込んでいた。

池に飛び込んだはずなのに。

私が落ちたのは。

私を受け止めてくれたのは。

「りこ」

ハクだった。

「どうしたのだ？　池に落ちるぞ……心配させたようだな。すまない」
腰にまわされた腕が、さらに私を引き寄せて。
目元に、キスが落とされた。
「ハ……ぇぐっ……」
私の両膝は池の淵。
「水中から見た景色が、なかなか興味深くてな。……池を覗き込むりこの眼が」
上半身はハクちゃんがしっかりと抱きとめてくれたので、池には落ちなかった。
「りこの金の瞳が、水面に揺らぐ月のようでもあり星のようでもあり。……美しかった」
池には落ちなかったけれど。
「見蕩れてしまったのだ」
「見蕩れてって……そ……そんな……」
ハクちゃんの髪から落ちる水滴で、私の顔はびしょびしょだった。
「泣くな、我が悪かった。……すまなかった」
貴方が濡れてるから、私も濡れちゃったの。
だから、これは涙じゃない……と、そういうことにしてほしい。
「ハクのば……か、ばか！　ばか！！」
濡れた硬い胸を、荒れ狂う感情のままに叩きたいのに。
私の手は、私の言うことをきいてくれなかった。
「泣くな、りこ。もう泣くな」
「ひっぐ……う……泣いてないもの」
ハクの肌から、離れてくれない。
叩くのではなく、すがってしまう。
私のこの手は。
持ち主よりも正直だ。

「泣いておらぬと？」
いたわるように……優しい舌が目元から顎先まで何度も往復し。
「涙でないなら、なぜ甘いのだ？」
小刻みな震えが止まらない私の唇を、ハクの冷たいそれが優しく……優しく何度も噛んでくれた。
「我の愛しい妻のこの口は、可愛らしい嘘をつくからな」
優しい貴方に嘘をつくのは、とても難しい。
「んぁ……っ……ハクちゃん、ハク！私……すごく怖かったのっ。だって、だからわ……たしっ……怖かった！」
「我はりこを置いていったりせぬ」
私、貴方への依存が……分離不安が、病的にまで進んでるって自覚があるの。
「りこを置いていくことなど、我にはできぬ」
私達の間に子供が出来ないのだと知ってから、それがますます酷くなっている。
どうしよう、どうしたらいいの？
このままじゃ、私……こんな私じゃ、貴方の負担にしかならないよね？
「どこまでも……我は貴女を連れて行く」
「……うん」
もっと。
もっと、強くならなきゃ。
私はもっと、強くならなきゃ。
「うん」
強く、ならなきゃ。
「りこ、もう1度風呂に入れ。我が濡れていたので、りこも濡れてしまった」

ハクちゃんは左腕で私を抱きあげ、右手で顔に張り付いた真珠色の髪をはらいながら言った。
あ。
ハクちゃんは冷たい池に現在進行形で入ってるんでした！
しかも裸だ！！
「だが、その前に。この鯰めを＜処分＞し……」
しょっ、処分！？
「ま、待ってハクちゃん！　私がナマリーナを叱るからっ……こら、ナマリーナ。ハクちゃんに謝りなさい」
別に返事が欲しかったわけじゃなくて。
被害者（？）であるハクちゃんへの手前、言ってみただけだったのに。

きゅう

鳴いた。
ハクちゃんの横で、ぱくぱくと大きな口を開けていたナマリーナが。
「ハクちゃん、今の聞いた！？　すごい、すごいっ！」
竜帝さんの貸してくれた本に書いてあった通りだった。
鯰は鳴くのだと書いてあったけれど、いまいち信用してなかった……疑ってごめんなさい、図鑑の著者様！
「……笑ったな、りこ」
ハクちゃんの眼が、細まった。
「鯰。命拾いしたな……だが、次は無い」
鯰のナマリーナにそんなことを大真面目に言う裸の魔王様……。
これはこれで、メルヘンな光景なのかなぁ？

「りこ」
竜体の我を抱いたまま。
りこは湯に浸かり、目を閉じて居眠りをしている。
「……我はりこを、また泣かせてしまった」
風呂に入るため、衣類を脱ぎながら。
りこは常に我へと視線を向けていた。
我の存在を確認するかのように……。
「怖い思いをさせたな。すまなかった」
鯰が鳴いたと、幼子のようにはしゃいでいたが。
口元は笑んでいるのにその眼は。
瞳孔は、りこの黒髪のように細くなっていた。
りこの抱く感情……不安感や恐怖心は、当人が思っている以上にその金の眼に現れるのだ。

りこは弱い。
先程の反応からも分るように、精神が不安定だ。
異界人であるからか、この世界に落とされたことが原因なのか。
＜青＞はそのことを案じている。
だが、我は。

「りこ」

我は。
その弱さが。
とても愛しい。

「んん……あれ？　私、寝ちゃってた？」

貴女は。
強くなど、ならないで。
貴女の分も、我が強くなるから。

貴女を支えられるような、我になるから。

「ああ、少しな。眠いのだろう？」
「……うん。でも、大丈夫。私は大丈夫だから……えっと、その」

もっと。
我を頼って欲しい。

もっと。
我を必要としてくれ。

「りこ」
鋭い牙でりこを傷つけぬように。
舌を伸ばし、りこの唇を舐めた。
「んっ、ハ……クちゃ……ん……」
口付けに応えてくれながら。
我の鱗の流れに添って、誘いかけるように指先が動く。
「ハ……ク」
我の染め上げた黄金の瞳が、蕩ける視線が。
蜜のように我へと注がれる。
我の名を紡ぐ、その唇。
我を酔わせる、甘い吐息。
我を撫で包みこむ、柔らかで温かい身体。
「……今宵はもう、眠るがいい」
「え？　寝ちゃって……いいの？」
我が蜜月期の雄であることを、りこはとても気にする。

「でも、あのっ、ハクちゃんは……その、平気？」
竜族の雌のようになれぬ自分を、りこはとても気に病む。
時には行為の最中に、泣きじゃくりながら我に詫びる事すらある。
身体の昂ぶりに、押さえつけていた心が引き出されてしまうようだった。
「ああ、大丈夫だ。我が寝台に連れて行く。安心して休め」
人型になり、白濁の湯からりこを抱きあげた。
我とは違う、黄を帯びた肌を湯が伝い流れるさまを見ながら。
額に口付け、りこの中にある竜珠に眠りを促す。
「さあ、眠れ」
「ん……ありがと……う、ハクちゃん」
りこは我を、好いている。
得体の知れぬ＜化け物＞である我の子を、孕みたいと願うほど。
それほどに、貴女が我を愛しているのだと分かっている。

だがな、りこよ。
まだ足りんのだ。

池の中から、我はりこを見ていた。
その表情（かお）から、目が離せなかった。

我は。
歪んでいくりこの表情に、暗い喜びを。
我を案じ、我を求めるその顔に。

我を想うが故の歪みに。
狂気の色に見惚れたのだ。

我の愛しい女。
もっと、我を愛して。

もっと。
我に溺れて。

我が支えねば、立ち上がれぬほど。
我を頼り、依存すれば良い。

我がおらねば、正気を保てぬほど。

「おやすみ……なさい、ハク」
「おやすみ、我のりこ」

もっと、もっと。

我で。
我に。
狂って。

第８３話

オフラン君とパスハリス君が、温室に大きなテーブルを運び込んだ。
厚い天板の縁には百合のような花が彫られていた。
大きな長方形で……5メートル位あるそれを、彼等は2人で軽々と持って庭から現れた。
先に温室に来て待機していたヒンデリンさんが温室の扉とその両隣のガラスを外しておき、そこからテーブルを温室へと入れて中央に設置した。
ヒンデリンさんは数ミリ単位で場所を指示していた。
その細かさ、几帳面さにパスハリス君は不満気に頬を膨らませ、オフラン君は忙しなく何度も瞬きをしながらテーブルの脚の位置を確認していた。
温室の隅の方でハクちゃんを抱っこしながらその様子を眺める私に、パスハリス君は言った。
「ねぇ、奥方様。すんごい面白い日になりそうじゃない？　僕、わくわくしちゃうっ……痛っ！？　いててててっ～、なにすんのさっヒン！」
「……」
パスハリス君の薄いブルーの瞳が、ヒンデデリンさんを睨んだ。
ヒンデリンさんがパスハリス君の右ほっぺを、無言でつまみあげていた。
「面白がるな、パス。私達は本部で待機だ。……失礼致します、ヴェルヴァイド様、奥方様」
「あ、ありがとうございましたっ」
ぼーっと3人のやり取りを見ていた私は、あわてて頭を下げた。
ハクちゃんは彼等の方を見もしなかった。
金の目を瞑り、まるでお人形さんのように静かだった。

ヒンデリンさん達が帰って数分後。
いつものアオザイ風の衣装に着替えたカイユさんが戻ってきた。
その手には、金魚鉢のようなガラスのポット。
「カイユ、それは？」
「とっても珍しい花茶なんです。味だけじゃなく、湯で花が開くさまも楽しめるんですよ？」
乾燥した花の蕾は薄い桃色をしていて、とっても綺麗だった。
「羽虫皇太子が帰ったら、お昼を食べてゆっくりお茶にいたしましょうね」
「は、はい。カイユ」
羽虫皇太子。
うん、そこはスルーしておきましょう。
「あら？　このテーブル……ヒン達が持ってきたんですか！？　無駄に大きくて邪魔ですね。邪魔だから半分に折っちゃおうかしら」
ひえ～っ。
うん、そこもスルーしちゃいましょう！

午前１１時。
私はハクちゃんを抱き、椅子に座ったままで彼等を迎えた。
席を立つな・頭を下げるなと竜帝さんに言われていたので、座ったままでいた。
ダルド殿下はやっぱりイケメン君だった。
整いすぎて逆にひいてしまう残念美貌のハクちゃんとは対照的な、誰もが好印象を持つような端整なお顔。
品の良いベージュの膝丈チュニック。
ベルト……帯とかサッシュっていうのかな？
光沢のある灰青色のサッシュには、紫・金・赤の３種類の飾り紐

が絶妙なバランスで合わされていた。
足元はダークブラウンのショートブーツ。
これには足首部分に鋼色のファーがあしらわれていた。
さすが本物の王子様。
文句なしに格好良い。
私と眼が合うとダルド殿下の口が数秒間、1センチ程開いた。
そして。
ぎゅっと、噛みしめるように閉じられた。

あ。
もしかして。

私の眼に、驚いたの？
そっか。
黒い目が金色になっちゃってたら、誰だって驚くよね。
此処にはカラーコンタクトなんて無いんだし。

その後。
彼の視線は前を歩く竜帝さんの背中を、瞬きもせず見つめていた。
私の目を、顔を見なかった。
ダルド殿下から数歩下がって歩くミー・メイちゃんは、相変わらず外国のお人形さんのように愛らしかった。
俯いていても、その顔はとっても可愛い。
美少女なぶん、今日の衣装はちょっと残念だった。
てるてる坊主のようなぞろ～っとした地味な灰色の長衣より、ふりふりワンピとかを着て欲しい。
セイフォンの離宮で会うときは、可愛いワンピースを着ていることが多かった。
この地味なてるてる坊主コスチュームが王宮術士である彼女の正装らしいから、仕方ないのだけれど。

彼女の視線は温室の床から離れなかった。
今日の彼女は意識して、私を見ないようにしている感じだった。
セシーさんはいなかった。
この場に、彼女は来れない。
ハクちゃんの、＜監視者＞の＜処分＞対象者じゃないから。
はるばるセイフォンから来てくれた2人の前を歩くのは、青い髪を高い位置でしっかりと結った竜帝さん。
濃い……というより深いという表現の方があっているかな？
深い青色をしたアオザイ風伝統衣装・レカサを着た竜帝さんは、本日も女神様～っと拝みたくなる美しさ。
今の彼は、ハクちゃんと少々過激などつき漫才みたいなじゃれあいをしている表情豊かな＜ランズゲルグ＞ではなく、無表情に近い……＜青の竜帝＞の‘顔’だった。
ちょっと、似ている。
ハクちゃんに。
ハクちゃんは一番若い竜帝の大陸、つまり一番若い四竜帝の側で過ごす。
ハクちゃん自身が幼い四竜帝のお世話をしなくても、育てなくても。
四竜帝の皆さんは＜監視者＞であるハクちゃんに、やっぱり育てられ‥‥ているんじゃないのかな？
女神様を見ていると、彼の中に。
ハクちゃんが。
ううん、＜ヴェルヴァイド＞が。
確かに‘いる’のを感じる。
ねぇ、ハク。
女神様……貴方をじじいと呼ぶ青の竜帝さんも、イドイドって呼ぶ黄の竜帝さんも。
きっと他の竜帝さん達も。
貴方のことがとても、とても好きなんだと思う。

＜四竜帝＞と＜ヴェルヴァイド＞。
まるで。
＜四竜帝＞という存在は。
貴方の……。

「……」

なんか。
ほんのちょっと。
ほんのちょっとだけ。
寂しいと感じたのは、貴方には内緒。

最後に入ってきたのはダルフェさん。
軍服のような騎士の制服を着た彼が後ろ手で扉を閉め、その前に立った。
いまさらだけど。
彼の、彼等＜青の竜騎士＞の制服の色は竜帝さん……＜青の竜帝＞の髪と瞳の色なんだと思った。
こちらを向いて立っている彼は私の視線に気づくと、にこりと笑って右手を顔の高さまで挙げた。
ひらひらと私に振ったその手は、白い手袋をしていた。
私の側に立つカイユさんを見て、端整な顔がにっこり微笑んで…
…目じりが下がった。
カイユさんが騎士服から私服に着替えてきたことに、その意味に。
彼は気がついてくれたんだと思う。
ダルフェさんは鮮やかな緑の瞳を細めたままを、視線を庭に向け

た。
何を見てるのか気になって、私もつられるように外を見た。
暦の上では春になったとはいえ、緑の芽吹きにはもうちょっと時間がかかりそうな木々。
雲が全く見当たらない今日の空は、１人だけ腰掛けた私の後ろに立っているカイユさんの瞳と同じ色だった。
冬の空。
お母さんが亡くなったのは今日のように良く晴れた冬の日のことだったと、私の髪を結いながらカイユさんが言っていた。

椅子が用意されているのに、誰も座らなくて。
私一人が座っているこの状況は、想像以上に居心地が悪かった。
人数分の椅子は単なる‘お飾り’。
直ぐ退室する。
長居はしない。
それを示すため……ハクちゃんへの配慮らしい。
前もって女神様が「慣れろ」って言ったけれど、やっぱり…うう～、慣れそうにありません。
「お、お久しぶりです。ダルド殿下、ミー・メイちゃん」
「トリィ殿。お元気そうでなによりです」
ダルド殿下の表情は硬かった。
ミー・メイちゃんは俯きっぱなし。
テーブルを挟んでるから5メートル以上距離をとって立ってる殿下達と会話って、そうとう微妙だった。
私はセイフォンでの待遇、援助のお礼とかを言いたかったんだけど口にしなかった。
ダルド殿下が来る３０分位前に竜帝さんが部屋に来て、すべきで無い事の他に言うべき事・言う必要の無い事を私に教えてくれてた。
女神様は私が嫌った態度をとったら、ハクちゃんがどう思うか・

感じるかを忘れるなと言った。
挨拶の時に頭を下げるのが嫌った態度と言われても、日本人の私としては挨拶とセットといいますか……無意識にやってしまいそうでちょっと不安。
私に抱っこされっぱなしのハクちゃんだけど、今のところ不満は全く無いみたいだった。
どちらかというとさっきから妙にご機嫌で、尻尾をゆらんゆらんと楽しげに動かしていた。
「りこ」
きゅっと握ってまん丸になった両手が、私の左右の肘をぽんぽんと軽く叩いた。
私は膝に座ったハクちゃんを、無意識に抱え込むようにして抱きしめていた。
「あ……ごめんなさい。苦しかった？」
「いや。我はりこの‘ぎゅっ‘が好きなので問題無い。もっと‘ぎゅぎゅっ‘とされたいぐらいなのだ」
私を見上げる金の眼が、くるんと回った。
このお目々の感じは……うん、良い感じだと思う。
セイフォンではダルド殿下のお手紙を問答無用で破いたり、その嫌いっぷりはそれはそれは凄かったから……今日は大丈夫だよね、きっと。
良かった～。

「さて。どのように＜処分＞する？」

うわっ！？
良くな～いっ！
大丈夫じゃな～いっ！！
「ハクちゃん、＜処分＞は無しって言ったでしょう？」
あぁ、なんていうか……デジャブ？

セイフォンでもこんな会話をした気がするよぉ～。
しかもハクちゃんったら、皆に聞こえる方の念話で言ってるし。

あ。
これ、わざとだ。

「ふむ、そうだったな。＜処分＞は無し……りこが我にそう望むなら」

わざと。

ハクちゃんは意識してダルド殿下に、私達の会話を聞かせてる。
この場にいる全員に、聞かせてる……言ってるんだ。

「ならば、りこの望みは何なのだ？」

私の望み？
私の……。

「わた……私は、家族に無事を知らせたいの。だから手紙を送る術式を……」
生きていることを、無事だということ。
そしてハクと結婚したことを……愛しい人といることを選んだのだと、知って欲しい。
ハクとは離れらない、離れたくない。
「ダルド殿下。さっき、私の眼に驚かれてましたよね？　私、この人と結婚したんです。この人の妻になったんです。この眼は……その証なんです」
この世界で、この人の側で生きていきたい。
「私、この世界で生きていく……生きていきたいと心から思ってい

るんです。ミー・メイちゃん、あらためてお願いします。異界の家族に手紙を送る術式を、1日も早く完成させてください」

私はここでハクを……『幸せ』を見つけたのだと、もう会えない大切な人達に知っていて欲しい。

「ダルド殿下はこれからもミー・メイちゃんに、協力と援助をお願いします。術式の研究には時間だけじゃなく、費用もかかるものだとクロムウェルさん……竜帝さんの契約術士の方が、教えてくれました」

ちなみに。

クロムウェルさんは異界に関する術式に、全く手を出さない主義なのだと言っていた。

正しくは主義というより‘合わない’らしい。

術士さんというのはそれぞれ得意分野……‘合う’ものがあり、ミー・メイちゃんのように『空間』関係が秀でてる人はとっても珍しい。

（彼女は転移が得意という貴重な術士）

ハクちゃんは合わないどころか‘駄目’レベル。

転移が……『空間』関係に強いハクちゃんが、なぜ‘駄目’なのかは「知らん」の一言で終わってしまった。

ハクちゃんは何でも出来る、万能な人じゃない。

出来ないことがあって当たり前だと思うので、私もそれ以上は訊かなかった。

「トリィ殿」

視線を私にしっかりと合わせたダルド殿下の声が、温室に響いた。

よく通る声で、彼は言った。

「貴女は私達を、私を許す必要はないのです。どうか死をお望みになって下さい。ご安心ください、私が亡き後もセイフォンはミー・メイへ術式開発援助を続けるとお約束します」

死を望むっ!?

何言ってるの、この人っ!

死んで責任をとってなんて、一度も考えたことなんかないっ！
確かに夢であなた達を責めて、罵った。
「ちがっ……！」
でも、死んで欲しいなんてっ……そうじゃないのっ、違う、違うの！！
私の望みは……っ！

「わ、わたっ……しは、そんなことはっ！　ハク！？」

私の腕の中から、白い竜が消えて。
ダルド殿下の目の前の空間に浮かんでいた。

「黙れ」

ダルド殿下の額に、ハクちゃんの右の中指が。
真珠色の爪が。

「いつ我のりこがお前等を、お前を『許す』と言った？」

刃物のような切っ先が。

「思い上がるな、履き違えるな」

柔らかな茶の髪を、数本散らした。

「術士ミー・メイ。お前は我が妻の望みを叶えるため、術式の練成に励め。我等はこの大陸を去るゆえ、定期的に＜青＞の監査を受けろ」

ダルド殿下の身体は微動だにしなかった。

「我はお前等を＜処分＞せぬ」

動かないんじゃなくて、動けない……？

「我はお前等を殺さぬ」

ハクちゃんの翼が広がり、ダルド殿下の表情が私には全く見えない。

ダルド殿下の左隣に立っているミー・メイちゃんは私の視線に気がつくと、ゆっくりと顔をあげた。

彼女の唇はプールで遊びすぎた子供のように紫で、小刻みに震えていた。

潤んだ大きな瞳が、私を見た。

何か言いたげに口が微かに動いたけれど……声が出ないようだった。

ハクちゃんとの距離が近く、怖がってるのかもしれない。

あんなに怖がるなんて……ハクちゃんに、こっちへ戻ってきてもらおうかな？

「ハクちゃっ……」

「ミー・メイ、セイフォン・シーガス・ダルド」

ハクちゃんがそう言うと。

ミー・メイちゃんの震えが止まった。

紫の瞳を見開き、私とハクちゃんを交互に見た。

「ミー・メイ。お前は術式が仕上がったら、その後は生きるも死ぬも自由だ。セイフォン・シーガス・ダルド」

動きを止めた翼が、私からダルド殿下の表情を完全に隠していた。

「お前は生きるのだ。セイフォン・シーガス・ダルド」

私からは、ダルド殿下の顔が見えない。

「覚えておけ。セイフォンの皇太子」

見えるのは、ハクの白い翼を広げた後姿だけ。

「我がこの世で最も嫌いなモノは、お前だ」

え？

「ハクちゃ……ん、今……」

今、さらっとすごいこと言わなかった？

「旦那、そこまでにしてくださいな」

ダルフェさんが白い手袋をした左手で軽くハクちゃんの胸を押し、ダルド殿下から距離をとり2人の間に入った。

「これ以上はこの坊ちゃ……殿下が持ちません」

竜族であるダルフェさんはダルド殿下より背が高く、体格も良い。彼を庇うように立ち、ダルフェさんはハクちゃんから……私からダルド殿下を隠した。

「ったく、大人気無いですよ？」

「ダルド、ダルド！？　……じじいっ、こいつに何しやがった」

ハクちゃんにくってかかった竜帝さんの顔には、さっきまで消していた表情があった。

これは言いがかりだと思う。
ハクちゃんはダルド殿下にお得意のしっぽびんた等の暴力行為はしていない。
私からは見えなかったけど、断言でき……あ、前髪を爪で切ちゃってた！
「騒ぐな＜青＞」
ハクちゃんはテーブルにちょこんと座って、短い足をぶらぶらさせながら言った。
「我は何もしとらん。何も、な」
あれ？
むむむ……。
あの態度、なんかちょっとあやしいなぁ～。
女神様はテーブルに座ったハクちゃんの顔を覗き込み、言った。
「この糞じじいっ、すっとぼけやがって！　……うぎゃぁああ、いってぇえ～～！！」
額を両手で押さえ、上半身を活きのいい車海老のように曲げて悶絶した。
どうやらハクちゃんは、女神様の麗しいおでこにでこピンをしたようだった。
音、しなかったのにあの痛がりかたって……。
恐るべき、ハクちゃんのでこピン。
涙目の女神様に、ダルフェさんが溜め息をつきつつ言った。
「ちょい待ち、です陛下。じゃれてる場合じゃないっすよ？」
「じゃれてねぇっ！　俺様はいま、このじじいに虐待されてたんだっ！」
「陛下、顔、顔！　＜青の竜帝＞じゃなく餓鬼に戻ってますよ？……ん！？」
ダルフェさんは＜赤の竜帝＞さんの鱗と同じ真っ赤な髪を持つ頭を、ぼりぼりとかいた。
「うへぇ、クッキーのカスかよ。ぎゃあっ！？　食いかけの飴玉ま

でっ……ジリの奴、人の頭で菓子食いやがって」
クッキー……そういえばジリ君って、ダルフェさんの頭部をマイルームにしてるかも。
こないだはダルフェさんの髪の中に、庭で見つけた松ぼっくりをしまってたし。
「まったく。陛下は旦那がいると、途端にお子様になっちまうねぇ～。困ったもんだ……術士のお嬢ちゃん、見なかったことにしてね？　でないとお兄さん、セイフォンにいるあんたの父上様を解体しちゃうからねぇ～……くくっ」
ひいいぃ～！
ダルフェさんったら、そんなきつい冗談……冗談だよね！？
「はっ……はいっ！」
「よし。良いお返事だ」
にっこりと笑うダルフェさんに、黒い尻尾が見えた気がした。
「で、どうします陛下。ほら、見てみなさいな。舅殿、笑顔満開でご登場ですよ？」
ダルフェさんは背にはダルド殿下を、顔は庭に向けていた。
緑の瞳と青い瞳。
２人の視線の先にはセレスティスさんがいた。
セレスティスさんはダルフェさんの視線に気がついたらしく、笑顔のまま右手を振った。
それを見たダルフェさんの手が、答えるかのように動いた。
「ちっ……ダルフェ、頼めるか？」

でもそれは、セレスティスさんに振りかえされるためではなく。

「お優しい＜青の竜帝＞陛下に舅殿を、上手に、半殺しにしろってのは、少々酷ですからねぇ」
「……すまない、ダルフェ」

白い手袋をしたダルフェさんの右手は、剣の柄に添えられていた。

第８４話

私はカイユさんの言っていたことを思い出した。
セレスティスさんを止められるのは、竜帝さんとダルフェさん。
＜色持ち＞のダルフェさんは、とっても強い。
そのダルフェさんが、半殺しって言ったよね？
舅殿って、セレスティスさんのことでしょう！？
娘のカイユさんがここにいるのに、なんてことをっ……。
「ダルっ……カイユ？」
立ち上がって抗議しようとした私の肩を、そっと押さえたのはカイユさんだった。
「ダルフェに任せておけば、大丈夫です」
「カイユ、でもっ！」
「ダルフェは私の父を‘半殺し’になどしません……この私の前でそのようなこと、できやしないのですから」
「え？」
カイユさんはにっこり笑って、きっぱり言った。
「もしあの馬鹿が私の前で父に抜刀したら、私があれの首をこの手で折ります」
「！？」
ダッ、ダルフェさ～んっ大変です！
貴方の奥様が、ここで白魚のような指をぽきぽきしていますよぉおお！？

「あ、あのっ。竜帝陛下、私が術式を使って殿下を……」
ミー・メイちゃんが小さな声で言った。
その声は私が知っている彼女のものと違って、掠れていた。

「駄目だ。今はクロムウェルが城に【障壁】を張っている。お前の手足が吹っ飛ぶぞっ！」

竜帝さんは自分と同じ位の身長のダルド殿下を、ひょいっと抱き上げた。

「りゅっ！？」

「黙れ、ダルド。餓鬼ん時にも散々してやっただろうがっ！　顔色が悪い……医務室に行こう」

ダルド殿下より細い身体で、軽々とお姫様抱っこしちゃうなんて。

カイユさんもそうだけど、女神様も怪力……竜族の人って皆がそうなんだろうか？

「あのっ！　竜帝陛下っ……いえ、なんでもありません。ありがとうございます」

青白かったダルド殿下の顔が、あっという間に赤く染まった。

無理ないと思います、うん。

罪作りですね、女神様。

でもね、ヴィジュアル的には女神様がダルド殿下にお姫様抱っこされるほうが自然な気が……う～ん、残念。

「カイユ、お前はおちびと奥の部屋にっ」

「お断りします」

カイユさんは背後から私の髪に触れ、飾られた花の位置を直しながら言った。

「私、嫌です」

その白い花はジャスミンのような良い香りがして、目をつぶると初夏の庭が脳裏に浮かぶ。

母がホームセンターでジャスミンの小さな鉢を買ってきて、数年で庭のフェンスを覆うほどに成長した。

「カイユ！……頼んでるんじゃない、これは＜主＞として命じてい

る。青の竜騎士カイユ、＜監視者＞のつがいとこの場を去れ」

南国を思わせる爽やかな甘さ。
その香りが大好きだと、母は……小さな可憐な花が満開になるさまを、満足げに眺めていた。

「嫌です」

今、ここにいるのは。
私の髪を、頭を優しく撫でてくれているのは。
カイユ。
母様。

「嫌、です。私はい……や」
「……カイユ、お前……」

竜帝さんの青い瞳が、私を見た。
何か言いたげなその青い瞳を、私もしっかりと見つめ返した。
髪に触れていたカイユさんの左手を私は手を伸ばして握り、頬にあてた。
ハクちゃんと違って、あたたかい手。

「竜帝さ……陛下」

＜主＞に逆らったためか、小刻みに震えるこの手は。
私の髪を優しく梳かして、結ってくれる。
私のためにお茶を‘お料理’してくれて。
私の涙を拭いてくれた。

「カイユは私の母です。夫がそう定め、貴方が……四竜帝全員が認

めた私の母様です」

カイユさん。

カイユ。

私はなんの力も無いけれど。

貴女を守りたい。

「青の竜帝陛下」

貴女の心を、護りたい。

「ここにいるのは青の竜騎士のカイユではなく、カイユです」

ハクちゃん……ヴェルヴァイドの存在が＜竜騎士＞を＜竜帝＞の鎖から開放する。

畏怖が恐怖を食い千切るのだと、髪を結いながら『母様』が教えてくれた。

今、竜帝さんは＜主＞として命令した。

でも、カイユさんは嫌だと言った。

嫌って、はっきりと口にした。

「おちび、俺はっ……」

「お引取りください、陛下。ダルド殿下、もうお会いすることは二度とないと思います」

「……トリィ殿。私はっ！」

黒の竜帝さんのお城に移ったら、もうこの大陸に私は戻ってこない。

ハクちゃんは、一番若い……幼い竜帝さんの大陸を拠点にして＜監視者＞のお仕事をするのだから。

長命な竜族である女神様が次代に変わるまでなんて、私は生きられない。

貴方だって、それは同じでしょう？
私達人間は、竜族とは与えられた時間が違うのだから。
「ダルド殿下、ミー・メイちゃん」
「トリィ殿……」
ダルド殿下。
ミー・メイちゃん。
ハクのいるこの世界に、連れて来てくれてありがとう。
もう会えない人達のことを考えると、感謝の言葉は口に出来ないけれど。

「さようなら」

ありがとう。

「竜帝さん。早くダルド殿下を医務室に連れて行ってあげてください」
セレスティスさんと、彼を会わせないで。
「おちび、お前……？　そうか、ミルミラの事を聞いちまったんだな」

「ん？　僕のミルミラがどうかした？」

「ちっ、ミルミラのことになると地獄耳だな」
女神のような美貌にはふさわしくない舌打ちをしながら、竜帝さんは右足を使って椅子を自分へと引き寄せた。
これまた、お行儀が悪い。
でも、ダルフェさんもカイユさんも（もちろんハクちゃんも）注意しなかった。

皆の視線は、彼に向けられていた。
ハクちゃんは興味が無いのか、全くそちらを見なかった。
セレスティスさんは笑みを浮かべながら、銀細工で装飾された温室の扉の前に立っていた。
「皆様、御機嫌よう。ふふっ……呼ばれてないけど、来ちゃった」
そう言って、片手を胸に当て優雅な動作で一礼した。
開ける時も、閉める時も。
「セレスティスさん……」
全く音がしなかった。
私が開け閉めすると、キィって音がする扉なのに……。
「セレスティス。ニングブックとプロンシェンはどうした？　お前を見ておけと……あいつ等から電鏡での連絡が来てねぇ」
足で引き寄せた椅子にダルド殿下を座らせて、竜帝さんは彼をセレスティスさんから隠すようにその前に立った。
「ああ、あの2人？　溶液でお昼寝させてあげてねって、オフ達に頼んできたから大丈夫。でも今週いっぱいはお休みにしてあげてね」
「お前、あいつ等をっ！？」
「大丈夫。ニン達は僕にぼこられるの慣れてるから」
「あのなぁ、あいつらだって慣れたくて慣れたんじゃねえだろうがっ。しょうがねぇな～、あいつらの家族には任務で他国に行ったって言っとくか」
艶のある青い爪でこめかみをぐりぐりしながら、女神様が言った。
ああ、女神様の麗しいお顔に……眉間に縦皺が！
「こんにちは、おちびちゃん。今日は良いお天気だから、ランチは外で食べたら？　カイユ、ジリはシスリアがみてくれてる。中庭でメオナちゃんと泥んこ遊びしてるから、後でお風呂に入れてあげてね」
「父様……」
私に握られていたカイユさんの左手が、私の手を握り返してきた。
セレスティスさんは笑みを絶やさぬまま、池の縁に歩み寄った。

「セレスティスさん……こんにちは。お客様がお帰りになったら昼食にしますから、ご一緒にいかがですか？」

心の動揺を押さえ込み、微笑んで言ったつもりだけど……失敗。

顔が強張っているのが自分でも分る。

「お誘いありがとう。でも、遠慮しておくよ」

サラサラの銀髪は右わけの前下がりワンレングスで、肩のラインで切り揃えられていた。

カイユさんの髪は、お父さん譲り……髪どころか、お顔もとても似ている。

親子ではなく、双子の兄妹みたいな父と娘。

その端整な顔には、常に笑みが浮かんでいて……砂糖菓子のような甘さを含んだ、優しげな微笑み。

私には、その微笑が偽物であるようには見えない。

偽物だとは思えないけど、あまりに、王子様、過ぎて現実味が無い。

本の中の住民が、話して動いているような……。

この微笑みは、ここにはいない誰かに向けられているの？

王子様が微笑みかけているのは。

王子様が微笑みかけるのは。

お姫様？

「おちびちゃん。おぢいは今、食欲が無いんだ。胸がいっぱい……あぁ、どっちかっていうと胸がむかつくが正しいかもね。う～ん、胃の調子が悪いのかな？」

白い手袋をした右手で胃の辺りを撫でながら、セレスティスさんは言った。

「あんなに好きだった唐揚げも、あれからどうでもよくなちゃったし。ふふっ、歳はとりたくないね」

彼の望みを、願いを知っても。
私にとってセレスティスさんは『王子様』だった。
本物の王子様以上に完璧な。
存在するはずのない、絵本の中の……女の子の理想の王子様。
「舅殿。俺とたいして歳が違わねぇのに、年寄りぶるのはやめてくださいよ。申し訳ないんですが、俺と外へ出てくれませんか？」
今まで黙って私たちのやりとりを見ていたダルフェさんが、セレスティスさんの前に立った。
セレスティスさんの視線が、ダルフェさんの顔から腰へと移動した。
「婿殿、そんな怖い顔しないでよ。あらら……物騒だね。ほら、見てごらん僕は丸腰でしょう？」
「丸腰ねぇ～……あんた、素手で大型鎧鬼獣を楽々仕留めるクセに何言ってんだか」
「ふふっ、君だってそうじゃない。安心しなさい、婿殿。僕は皇太子を今、此処でどうこうするつもりは無いんだ」
セレスティスさんは指先を噛んで左右の手袋を外し、それを丁寧に合わせて畳んでから制服のポケットに押し込んだ。
その動作をダルフェさんの緑の瞳が追い、剣から手を離した。
「分かりましたよ……ま、そういうことにしときましょう。陛下、俺はニングブック達の様子を見に行ってきます。溶液濃度を確認してきますよ、オフは雑ですからねぇ～。ヒンデリンが一緒だとしても、溶液に関しちゃあいつはド素人ですし」
振り返って、竜帝さんにそう言い。
「じゃあね、ハニー。姫さん、‘母様’を頼むね」
竜帝さんの返事を待たず。
カイユさんと私にウィンクをして、廊下へ続く扉から早足で出て行ってしまった。

「あ、この子がナマリーナ嬢？　うん、なかなかの美人さんだ。ナマリーナ嬢、僕はセレスティス。よろしくね」
セレスティスさんは池を覗き込み、底にいるナマリーナを見ながら言った。
この人って、何気にマイペースというか……。
「術士のお嬢さん。初めまして、僕はセレスティス……あぁ、君は名乗らなくて良い。挨拶も要らない。僕はよろしくするつもりも、されるつもりもないから」
視線はナマリーナから動かさずに言った。
セレスティスさんはミー・メイちゃんを見なかった。
ミー・メイちゃんは自分の右手を左手でぎゅっと握って、横に立つ竜帝さんを見上げた。
竜帝さんはミー・メイちゃんに軽く頷き、視線をセレスティスさんに戻した。
「ひさしぶりだね、セイフォンの皇太子。ふふっ……もう陛下より身長が高くなったのかな？　人間はあっという間に成長するね」
池の縁に腰掛け、膝に左手を置き。
右手を顎に添えて……ダルド殿下の姿が、水色の瞳に映っていた。
見てる、ちゃんと。
セレスティスさんはミー・メイちゃんの時と違って、ダルド殿下をしっかりと見て言った。
「あれ？　顔色が悪いね。気分が悪くなってしまったのかい？　ああ、そのままでけっこう」
椅子から腰を上げようとしたダルド殿下に、セレスティスさんは‘座ってなさい’と右手を上下に動かした。
相変わらずの、優しげな笑み。
カイユさんにお母さんの事を聞いていなかったら、その笑みを見てこんな不安な気持ちにはならなかった。
それほど自然、だから不自然。

「……貴殿はカイユ殿のお身内ですか？　よく似ていらっしゃる」
ダルド殿下の言葉に。
その笑顔が。
「……陛下」
消えた。
「陛下……僕に内緒で、やってくれたね？」
水色の瞳に。
刃物のような鋭さが。
「酷いんじゃない、これ」
それは一瞬。
「酷いよ、陛下」
セレスティスさんは。
両手で、顔を覆った。
「セレスティス……俺はっ」
「ふふっ……＜青の竜帝＞は2代にわたって、僕に意地悪ばかりするんだね」
銀の髪が、さらりと流れた。
「……すまない」

竜帝さんの声は。
いつもより低く、重かった。

＝ハクちゃん、ハクちゃ～ん！

私はハクちゃんに話しかけた。
口には出さずに。
皆に聞こえないほうの念話モードを使った。
ハクちゃんは直ぐに気づき、テーブルの上をとてとて走って戻ってきてくれた。

＝りこ、どうした？　皆には‘内緒’の話か？
＝うん。だって、雰囲気が……ねぇ、ハクちゃん。ダルド殿下とセレスティスさんの会話も変だったし、竜帝さんは謝ってるし…どういうことかな？

ハクちゃんはテーブルからピョンッと跳び、私の胸にくっついた。
小さな頭をすりすりしつつ、念話を続けた。

＝あれは消去だな。
＝消去？

当然ながら、セレスティスさんはダルド殿下を知っていた。
でも、ダルド殿下は……消去って、まさか！？

＝ランズゲルグは他者の記憶を消せるのだ。
＝ええ～！

胸から顔をあげたハクちゃんは、金の眼をくるんと回して言った。

＝なかなか便利な能力だぞ？　こっそりおいたをしても、被害者の記憶を消せば、片っ端から目撃者を殺さずともばれぬしな。

なぬ！？

＝……ハクちゃん。後でお話があります。

＝りこ！？　ご、ごめんなさいなのだ！

うわわっ～！？

‘ごめんなさい‘って……ハクちゃん、貴方は心当たりがあるんですね！？

ひじょ～に、気になりますが。

とりあえあず今は、セレスティスさん達のことが……。

「すまない？　君まで僕にそれを言うの！？　陛下は陛下によく似ているね。ねぇ＜監視者＞殿、貴方もそう思わない？」

急にこちらに話をふられて、内心焦りまくりの私と違い。

「思わん」

ハクちゃんは即答した。

そして、言った。

「見れば判るだろう？　これは雄であれは雌だった。カイユよ、お前の父親は目玉の機能が衰えているうえに、痴呆を患っておるのか？」

「……は？」

「ち……痴呆！？　あのね、僕は貴方より若いんだけど」

うっ……なんという会話。
カイユさんとセレスティスさんの口の端……右側がぴくってなった！
さすが親子、見た目だけじゃなくこんなとこまで似てるっ～！！
温室にいる全員の視線が、頓珍漢なハクちゃんに集中を通り越してぐさぐさ突き刺さる。
私から離れてテーブルの中央にとてとてと歩いて移動して、仁王立ちしたハクちゃんはさらに続けた。

「これはちびなうえ、このような見目をしておるが雄だ」

ハクちゃんの人差し指が、女神様をびしっと指した。
ん？
心持ち指先が下向きなような……。

「確かにこやつには哀れなモノしかついとらん。だが、雄だぞ？」
「糞じじい～っ、もうそれは忘れろっ！　いらんこと言うなっ～！！」

哀れなモノって……うん、聞かなかった事にしよう。
ううう～！　もう、ハクちゃんったら。
セレスティスさんの質問の内容・意味が通じてなぁ～いっ！！

「これを母体から出した我が言うのだから、間違いない」
「へ？　おおおっおい、じじい！？　それ初耳だぞっ！」

え？
母体から……ハクちゃんが赤ちゃん竜帝さんのお産婆さん！？
突っ込みどころ満載な会話だけど。

セレスティスさんの戸惑いを隠さない呆けた顔と声が、私の意識をひっぱった。
「ねぇ。この人ってこうなの？　こないだはもっとまともだったような気が……」
こないだ……竜帝さんの執務室でのことだよね？
あの時は会話らしい会話をしたとは言いがたいですし……。
「は、はい。その、そこが彼のチャームポイントといいますかっ。あの……なんか、あの、す、すみません。悪気は無いんです！　ちょっと天然なだけでっ」
「セリアールはランズゲルグより長身だった。セリアールは……ふむ、我の尾1本分は背が高かったな」
「……ハクちゃん」
私はがっくりと肩を落とした。
そんな私の背中を、カイユさんが無言で撫でてくれた。
ああ、なんということでしょう。
一生懸命に愛する旦那様をフォローしようとする私の努力を、その旦那様自らぶち壊してくださいましたぁあ～。
「いや、だからあのね。外見とかじゃなく、内面の……まあ、貴方にはどうでもいいことか。ははは、貴方と話してたら、なんか色々馬鹿馬鹿しくなってきちゃったよ！」
笑った。
声をあげて。
『王子様』が、笑った。
「ねぇ＜監視者＞殿、皇太子はどうするのことになったの？　いずれ＜処分＞するの？」
「否。生かすことにした」
ハクちゃんが答えると。
「生かす？　生かすね。ふ～ん、成る程ね。……じゃあ、もういい

や。帰る」
セレスティスさんは背を向けて、ドアに向かって歩き出した。
「お、おい。セレスティス!?」
竜帝さんの呼びかけに足を止め、振り返った彼の顔には王子様の笑み。
「陛下。僕は予定を早めて、今夜飛ぶことにします。あ、クロムウェルも連れて行くね」
「……分かった。おい、今回もあいつを乗せてやんねぇのか?」
「うん、足で掴んで飛ぶ。僕に乗っていいのは、可愛い女の子だけだもの。あ、もちろん人間はどんな美少女でもお断りだけどね」
あ、足で掴んで飛ぶ!?
ひえぇえ~、籠を使わないってこと?
「ったく。前みたいに、クロムウェルの肋骨折るんじゃねえぞ?」
「加減が分らなかったからだよ。今回は大丈夫……多分ね」
「多分とか言ってんじゃ……なんだよ、じじい!」
竜帝さんの頭の上に、ハクちゃんがちょこんと立った。
「さっさと出て行け<青>。りこは食事の時間なのだ。健康な身体でいるには、規則正しい食生活も重要なのだぞ?」
「へ? 昼飯? そんなことより……どわぁあっ!?」
うわっ、転移させちゃっいました~。
女神様だけじゃなく、ダルド殿下、ミー・メイちゃんをまとめて転移させちゃいましたよ!?
「ちょっと、ハクちゃん! クロムウェルさんが何かしてるから、転移は駄目だって竜帝さんがっ!」
「問題無い」
「……本当?」
ふわふわ飛びながら短い腕を組み、ハクちゃんは偉そうにふんぞり返って言った。
「‘吹っ飛ぶ’のは契約術士だ」

「なっ！？」

問題大有りだぁああ～！

「大変！　どうしよう！！」

慌てふためく私と違い、この見目麗しい父娘（おやこ）は冷静……冷静を軽やかに飛び越え、冷酷だった。

「ご安心ください。あれは見た目通りに丈夫な人間ですし、使い物にならなくなっても替えはいくらでもおりますわ」

ひぃ～、カイユさん！？

「クロムウェル、運が悪かったね。今夜、出発できるかな？　……うん、＜監視者＞殿の仰るとおり、問題無しだ。最初からいろいろ折れてるなら、もう気を使わなくて良いし。ふふふっ。多少追加したって、ばれないかもね～」

うわっ、セレスティスさん折る気満々でしたの！？

クロムウェルさんにはナマリーナの件でお世話になったし。

小竜の竜帝さんを絶賛してるところとか、親近感があるし。

「あ、あの！　セレスティスさんっ」

ちょっことだけでも、優しく掴んであげて欲しいのですっ。

陳情（？）しようとした私に、セレスティスさんが笑みを深くして言った。

「ふふっ、生かすか……うん。なんて素晴らしいんだろうね、おちびちゃん」

「……セレスティスさん？」

生かす。

生かす？

それって、さっきハクちゃんがセレスティスさんに……。

「ねえ、おちびちゃん」

額にかかる銀の髪を、綺麗に整えられた爪を持つ指がはらった。

気障な仕草だけど、この人がするととても自然。
指先の動きまで洗練されている。
大きな手で無造作に前髪をかき上げるハクちゃんとは、対照的というか……。
「ミルミラのことをカイユから聞いたね？　だから皇太子を僕から逃がそうとした」
「……は、はい」
やっぱり、気づかれてたんだ。
誰も口にしなかったけど、皆……ダルド殿下以外、気がついているよね。
「おちびちゃんは、極刑と終身刑。どっちがより辛いと思う？」
「え？」

極刑と……。
終身刑？

「セレスティスさん？　私、意味が……」
「待って……父様っ！　この子は、そんなつもりではっ」
「カイユ。甘やかすのもいい加減にしなさい。後々苦しむのはこの子なんだよ？」
「とっ……」
叱咤を隠さぬ硬い声音に、カイユさんは言葉に詰まった。
「おちびちゃん……トリィ、君は僕の孫になった。だから言うんだ。分らないなら、考えなさい。君の夫は誰で‘何’かな？」
夫。
「ハクちゃんが私の……」
ハクちゃんは、＜監視者＞。
人間にとって、とても……とても怖い存在。
しかも、全ての＜四竜帝＞に強い影響力を持っている特別な存在で。

私は彼がどんなに強いのか、どこまでのことが出来るのか知らない。
でも。
セイフォンで竜帝さんは、私に言った。
――＜ヴェルヴァイド＞は最強の存在だった。だが、今では、最凶最悪、だ。
そのハクが。
言った。
皆に聞こえる念話で。
――我がこの世で最も嫌いなモノは、お前だ。
彼は皇太子。
彼の未来は、セイフォンの未来。
彼はセイフォンの未来を担う王族。
――我がこの世で最も嫌いなモノは、お前だ。
セイフォンで。
ハクちゃんはダルド殿下を嫌って、手紙を破いたり燃やしたり。
まるで駄々っ子のようで……。
焼き餅をやくかのようにすねる姿も、ちょっと可愛いなって思ってた。
「……ぁ」
ハクは。
最強で最凶最悪の竜。

「あ……わ、たし？」

その彼が。

――我がこの世で最も嫌いなモノは、お前だ。

ダルド殿下を。

セイフォンの皇太子を。

この世で最も嫌いだと。

そう『宣言』した。

それを胸に。

彼は、生きる。

「セ……セレスティスさんっ、わた……私はっ！？」

私は。

ダルド殿下に。

とんでもなく残酷な仕打ちを……したの！？

「ふふっ……ありがとう、おちびちゃん」

彼の。

セレスティスさんの。

満足げな笑顔と、感謝の言葉。

あぁ、この人は。

生かされている、人だから。

「ありがとう」

それが。

あなたの。

答え。

第85話

「……おい」

俺が騎士団本部に駆けて行くと。

「あんたら……そこで何してんすか？」

「見りゃわかんだろ？　ランチしとるんだ」

ここの地下室にある液槽に入れられているはずのニングブックとプロンシェンが、のん気に昼飯を食っていた。

やられた。

「ちっ……ぴんぴんしてんじゃねぇか！」

やってくれたな、舅殿！！

中庭に面したウッドデッキに茣蓙を敷き、親父2人は胡坐をかき談笑しながら洗面器のようなでかい皿から豪快にパスタをすすっていた。

「ダルフェ、なんでここに……ああ、そっか！　お前……セレスティスにひっかけられたんだろう！？」

竜族の中でも長身の部類に入るプロンシェンは、俺より頭3つ程

背が高い。
その身体は縦に長く、そして横にも広がっている。
「……あんたら、ぐるだな？」
莫蓙の上に無造作に置かれた携帯用電鏡は、鏡面が下になっていた。
連絡をとる気が全くない証拠だ。
「ははははっ！　さすがダッ君、お頭の回転が早いな」
「ダッ君って言うな、この肥満竜」
父親と同じ歳のこのおっさん竜が、俺は少々苦手だ。
「はいはい、分りましたよ、ダッ君、」
「あのなぁおっさん。……そんなに死にたいのか？」
「まさか！　可愛い孫娘につがいが見つかるまでは、おっさんは死にたくないんだ」
角ばった頬骨のうえにちょこんとついた錆色の目玉を細めて、プロンシェンは笑った。
「あ、そうだ。これ似合うだろ？　先週の赤の大陸からの便で、エッ君が送ってくれたんだぜ！？」
プロンシェンは青い制服の上に可愛らしいひよこのアップリケのついた、ピンクのエプロンをしていた。
ひよこのようなほわほわした淡い黄色の髪に、ファンシーなエプロンをした巨漢の姿は滑稽を通り越して不気味だった。
胸元に輝く黄色いひよこのアップリケは、親父の店『ひよこ亭』のトレードマーク。
可愛いもの好きの俺の父親エルゲリストは、何故か特にひよこが好きだ。
このエプロン、きっと父ちゃんとペアだな。
「……それ、多分うちの母ちゃんが作ったんですよ」
「赤の陛下が！？　うおおぉっ～、汚れる前に聞いて良かった！
よし、これは家宝にしよう！！」
巨漢おっさんプロンシェンは独身時代に、前陛下の命を受けて赤

の大陸に渡った。
その時に俺の親父と知り合い、意気投合。
今でも頻繁に手紙のやりとりをする仲だ。
息子の俺から見てもちょっと変わっている親父はひよこ頭のこのおっさんをいたく気に入り、＜プーさん＞と＜エッ君＞と愛称で呼び合うほど仲が良い。

プーさんとエッ君……。
ひよこ好きのエッ君は、プーさんのほわほわひよこ頭が大好きなんだそうだ。

「すまんな、ダルフェ。心配してくれたんだろう？　安心しろ、俺等はあいつにぼこられるのに慣れてるが、ぼこられないように危険を避けることだって出来るんだ。じゃなきゃ、とっくの昔にセレスティスに殺られてる」
二ングブックが皿を持ったまま立ち上がり、ウッドデッキの柵にもたれていた俺に近寄ってきて謝罪を口にした。
最年長の青の竜騎士である二ングブックはこの数年で、顎の辺りで切りそろえた暗褐色の髪に白髪が目立つようになっていた。
鉛色の瞳を持つ面長の顔を飾っているのは、銀縁の伊達眼鏡。
一見すると品の良い紳士。
が。
なぜか箸でパスタを食っているし、しかもその手にある皿は洗面器みたいなんじゃなく。
本物の洗面器だった。
「ミルミラが絡んでる時のセレスティスには、近寄らないのが一番なんだ。陛下は俺達にあいつを止めろとは＜命令＞しなかったしな」
するわけないさ。
そんな無理なことを、あの陛下が＜命令＞するはずがない。
「もうその件はいいですよ。……なんで洗面器で食ってるんすか？」

気になるのは、こっち。
洗面器でパスタ。
フォークじゃなく、箸なのは問題無し。
個人の好みだしな。
けどなぁ、洗面器は有り得ないだろ？
しかもそれは。
それはどう見ても、この建物の2階にある宿舎の風呂で使っているやつだぁああ～！
「なんでって、皿が無かったからさ。パスタを茹でてから気がついたんだ。昨夜、パスとオフが皿投げ競争して遊んで全部駄目にしたんだとよ。カイユにばれてぶっ飛ばされる前に、ヒンが同じの買ってきてごまかす計画らしいぜ？」
そう言って。
二ングブックは俺の目の前でパスタを勢い良く啜った。

俺は、プロンシェンがエプロンを付けてた理由を悟った。
そして家宝予定のそれを素早く外し、小さく畳んで制服のポケットに押し込んだ訳を身をもって知った。

ズゴズルズチョッという耳障りな音とともに、パスタが派手に踊り。

はねたトマトソースが、俺の顔と胸部にヒットした。

「……」

箸で食うとフォークのように麺を巻き取れないから、啜ることになる。
だから俺は箸では食わない。

「あ、すまん」

謝りつつ、二ングブックは再び箸でパスタを口元へと運んだ。
ズゴズルズチョッというイラつく音が響く。

そして俺はまた被弾した。

「まあまあ、気にするなダッ君。制服は蜥蜴蝶でできてんだから水かけりゃ落ちるんだしよ！　ほれ、これ使えよダッ君」

ひよこ頭のおっさんが俺に差し出したのは、どうみても飲みかけの水が入ったグラスだった。

「……」
「ほら遠慮すんなって、ダッ君」

陛下。
俺がこいつ等を溶液送りにしてもいいっすか？

俺は騎士団本部の前で、セレスティスを待っていた。
２０分程で目的の人物は現れた。
南棟へと続く石畳の上を音を立てずに歩きながら、俺の姿に気づくと片手を揚げて……その顔には見慣れた微笑み。
「舅殿」
「ごめん、待たせちゃったね。僕の部屋で話そう」
セレスティスはカイユが俺と結婚してからは、騎士団本部2階の

独身寮で月の大半を過ごしている。
ここにはヒンデリンとパス達も住んでいる。
セレスティスは寮長兼生活指導係りみたいなもんだ。
ヒンはともかく、パスとオフは歳のわりに餓鬼過ぎるから、押さえ、が必要だからな。
「ふふっ……ニン達、何してた？」
「飯食ってました」
カイユの育った家に帰るのは月に2回ほどらしい。
セレスティスは、ミルミラの死んだあそこを恐れているのかもしれない。
幸せだった記憶を凌駕する、果てない憎しみと哀しみと孤独が。
あの家でこの人の帰りを待っているから。
「トマトソースのパスタでしょう？　あ～あ、まだ顎と胸元に少しついてる」
＜王子様＞は白いレースのハンカチを差し出して言った。
「僕が朝四時起きで作ったんだよ。赤に赤って、面白いかなと思って」
赤（おれ）の行動も、お見通しかよ。
「あんたねぇ」
全部、舅殿の計画通りに進んだってことか？
旦那もおっかねえけども、この人もやばい人だよなぁ。
「ごめんね、ダッ君」

へ？

「ダッ！？」
おい、なんであんたまで！？
「こないだ、プロンシェンが教えてくれたんだよ。お父さんには、未だにそう呼ばれてるんだってね」
「……部屋に行く前に、プロンシェンのおっさんをもう一発殴って

きます」
「そう？　一発と言わず好きなだけどうぞ」
ひよこ好きの父ちゃんよ。
そっちに帰ったら覚悟しておけよ！

俺はおっさんを殴りに行かなかった。
おっさんの追加分は、貯金、しておくことにした。
セレスティスの部屋は2階の一番奥に位置していた。
装飾の一切無い木製のドアを開けて、セレスティスは手招きした。
「どうぞ。……ごめんね、お茶は切らしてるんだ」
「いえ、おかまいなく」
初めて入ったその部屋は、えらく殺風景だった。
向かって右の壁に、扉が一つ。
多分、クローゼットだな。
かなり広い部屋なのに、向かって左の壁際にベッドと本棚があるだけだ。
ベッドの上には、セレスティス愛用の刀が無造作に置かれていた。
それだけが、ここの全てだった。
「座るとこないから、ここにどうぞ」
ベッドに座ったセレスティスは、自分の隣をぽんぽんと軽く叩いた。
「ここでいいです」
俺はセレスティスの前に立って言った。
舅殿とベッドに並んで座るなんて、嫌だっつーの。
「お互い忙しい身ですから、さっさと済ませましょうや。で、旦那と話したんでしょう？　どうでした？」
「う～ん、あの人ってかなり面白いね。想像してたのと違ってた」

あの旦那を‘面白い’か。
ハニー、君の父親はすげぇなぁ。
「おちびちゃんは、まだよくわかってないみたいだね。まぁ、無理ないかな」
セレスティスは頬に流れた銀の髪を耳にかけ、笑みを深くした。
「＜監視者＞のあれは、単なる嫉妬だね。……この世界の秩序や善悪がどうなんてご立派なものじゃないぶん、たちが悪い。まぁ、僕的には大歓迎だけど」
「嫉妬……ね」
姫さんは、皇太子を恋愛対象と見ていない。
旦那だってそれは充分に分かってるはずだ。
分かっていても、どうしよもない……それが竜の雄なのだから。
姫さんへの旦那の執着は、竜のそれを越えちまってる感があるけどな。
「まあ、今のあの子に言っても良い結果にはならないだろうから口にしなかったけど。僕の考えはおちびちゃんとは違う。ダルドが後悔し恐れたのは、自分がこの世界に大きな災厄をもたらしたことだ。自分の軽率な行いが、異界から＜監視者のつがい＞なんてこの世界にとって物騒極まりないモノを……ふふっ、太古にあったっていう大量破壊兵器の方が、よっぽど安全だよね？」
災厄。
姫さんはこの世界にとって『災厄』だとあんたは、あんたもそう言うのか。
「……あの子は災厄でも兵器でもない。そうなるとしたら、それは……」
「そう。兵器と違ってあのおちびちゃんには意思があり、心がある。あの子がこの世界の災いとなるか救いとなるかは、僕達竜族と人間次第だ。無駄に賢く育ったダルドにはそれが分かっている。だからこそ、死んで逃げたかったんだよ」
大きすぎる罪から。

「絶対に……逃がすものか。寿命が尽きるその日まで、苦しみのた打ち回ればいい」
世界を覆いつくす恐怖から。
「あいつをこの世界で生かす！　最高だよ、首ちょんぱなんかより数百倍も素敵だと思わない!?　胸のむかつきも治っちゃった！　ああ、久しぶりに清々しい気分だよ、婿殿」
いるはずの無かった＜魔王＞を、この世界に堕とした。
「気分爽快ついでに教えてくれるか？　セレスティス」
気になっていたことがある。
この人なら、何か知っているかもしれない。
「なんだい？　ダルフェ」
先代の側近だったというセレスティスなら。
あの件を。
「青の竜帝セリアールは、人間の女に竜族の子を産ませようとしてたんすか？」
俺の問いに。
セレスティスは涼やかな目元に人差し指をあてて、鼓動の速さでリズムを刻んだ。
「……セリアールねぇ。今日は懐かしい名前をよく聞く日だ。……ふふっ、どうしてそんなこと僕に訊くの？」
「以前＜黒＞の老いぼれと旦那の会話で、ちょっと気になる部分があったんすよ」
黒の竜帝が気にしていたのは、旦那が人間の女を孕ませられるかということだった。
爺さんははっきり言った。
人と竜の混血実験を、先代がしていたと。
「なるほど、黒の竜帝か。あの人、意外と口が軽いんだね。ははっ……ねぇ、婿殿」
「セ……レスティス？」
俺に向けられていた眼差しが、瞬時に変わった。

「あの糞爺も、さっさとくたばりゃいいのによ」

カイユが冬の空なら、この人はその空を映した氷河のようだ。
凍てついた心、そのままに。
けっして融けない氷の瞳。

「竜族と人の交配？　そんなくだらねぇことは、黄泉に行った後にクソババア陛下に聞きゃあいいんだよ」

仮面が消え去り、苛烈極まりない本性が現れる。

「てめぇは俺の娘と孫のことだけ考えてりゃいいんだ。……時間はそう長くは残ってねぇんだろう、ダルフェ？」

その言葉に。
俺の疑問は吹っ飛び、先代の交配実験のことなど考える余裕が無くなった。

「あんた、な……んでそれをっ……」

絶妙のタイミング。
話をすげ替えられたってことは、俺にも分かってる。
だが、そこから抜け出せない。

「ん？　大事な娘の結婚相手を調べる父親は珍しくねぇだろう？てめぇの親父はプロンシェンと仲が良いからな。そこんとこをちょっと利用させてもらった」

意識せずとも。

腰の剣へと、手が動いた。

そんな俺に気づいて、セレスティスは苦笑した。

「大丈夫だ、プロンシェンは口が堅い。それに俺はカイユには言わねぇ……言えねぇよ」

「……俺……は、ま……だもちます」

頭の中はこの事態に対処すべく、冷静に『計算』を始めてるのに。

漏れた言葉は、取り繕えなかった。

「ま……だ、死ね……ない……」

俺は。

やらなきゃいけないことがある。

まだ、死ねない。

「なぁ、ダルフェ。カイユは俺に似て腕っぷしは強いが、内面はミルミラに似て脆い娘だ。これ以上、あの子を追い詰めたくねぇんだよ」

俺の愛する者とよく似た顔の、この竜騎士は。

遺される者の哀しみを、容赦なく俺に突きつける。

カイユ。

俺は君を。

父親と同じように。

哀しみの世界に。

愛しい君を、置き去りにするのだろうか？

「カイユが生まれた時、すごく嬉しくかった。ちっちゃなあの子が可愛くて、可愛くて……だからクソババアのせいですっからかんになっちまった財政を立て直すために、人間にだって頭を下げれた。餓鬼だった陛下と一緒に踏ん張って……必要なら何だってしてきた」

俺達は、竜の雄は。

「クソババアの言ってた竜族の未来なんて、どうでも良かった俺だけど。カイユのために‘未来’が欲しくなったんだ、必要になったんだ。こんなにあの子を愛してんのに、なんで俺は……竜の雄は、こうなんだろうな？」

雌を想い過ぎるから。

「あの子の為ならなんでもしてやりてぇって、心の底から思うのに。俺はカイユを‘俺の一番’にしてやれないんだ」

「……俺だって、そうですよ」

恋が、愛を噛み砕く。

「俺の‘一番’はカイユです」

ジリギエ。

お前もいつか、わかるだろう。

お前もきっと、知るだろう。

狂気のような恋情に食い尽くされる、喜びを。

「なあ、ダルフェ」
セレスティスはそのまま後ろに倒れ、ベッドに仰向けになった。
水色の眼を閉じ、封をするかのように両手で覆った。
「俺、お前がカイユに求婚するつもりだって知った時、お前を殺そうと思ったんだぜ？」
親だったら＜色持ち＞のつがいになんか、させたくないと思って当然だ。
「知ってましたよ。俺が入れられてた液槽の前で、あんたは何度も刀を抜いてたでしょう？」
「はは、さすが＜色持ち＞！　気づいてたんだな」
この大陸に来た時。
旦那のせいで、俺の身体は生ごみ寸前だった。
「＜色持ち＞のてめぇには、先がないって分ってたのに。俺、できなかったんだ……」
セレスティスじゃなくたって、＜色持ち＞の俺を簡単に殺せた。
「ごめんな、ダルフェ」
「いえ……生かしておいてくれて、感謝してますよ」

産んでくれた母さんにも、育ててくれた父さんにも。
感謝することが、できる俺になれた。

俺はつがいを探す気が無かった。
こんな俺だから、相手の雌が不幸になるだけだと思った。

それは格好付けた建前で。
本心は、怖かったから。

たった1人の雌（ヒト）と、別れるその時が怖かったからだ。

カイユに会って。

俺は‘生きたい’と初めて思った。
心の底から‘生きたい’と願った。

アリーリア。

もっと早く、君と出会いたかった。
もっと長く、君と過ごしかった。

アリーリア。

俺。

もっと。
君と生きたいんだよ。

「おい、婿殿」
「っ！？」

腹に。
蹴り。

「……いきなり、なにすんですか」
一応、抗議した。
「避けれるに避けないてめぇのそういうとこ、俺はけっこう気に入ってるんだぜ？」
ベッドに腰掛けたまま伸ばした右足で俺の腹を蹴ったセレスティスは眼を細め、口の端をあげて笑った。
「笑えよ、ダルフェ」
その笑みには王子様の‘お’の字すらない。
「カイユとジリギエの前じゃ、そんな顔するんじゃねぇぞ？　俺に

も出来たんだ、てめぇにも出来るさ。そんなしけた面してちゃ、男前が台無しだぜ」

生きたい雄と、死にたい雄。

「ほら、いつもみたいにへらへら笑えよ」

言いながら立ち上がり、両手で俺の頬を数回軽く叩いた。

「セレスティス……へらへらは余計ですよ」

「そうかい？　そりゃ悪かったな、婿殿」

俺の右足を踏みつける踵にさらに力を加えながら、舅殿は言った。

この足の指の骨を押し砕く感じの絶妙な踏みつけ方……ほんと、そっくりな父娘だ。

「ああ、そうだ。俺……じゃなくて僕、しばらく帝都に帰らないから後はよろしくね」

王子様に戻ったセレスティスは何事も無かったように俺の足から踵をどかし、制服のポケットから手袋を取り出した。

仕事中しかそれをつけない俺と違って、この人は手袋をしていない時の方が珍しい。

つまり。

この青の竜騎士は、いつだって臨戦態勢……殺る気満々ってことだ。

「帝都を出るんすか？」

あの時は反対にそれをしまった。

セイフォンの皇太子が目の前にいるのに、だ。

だから本当に手を出す気が無いのだと解った。

それは竜騎士なら確認する必要の無い合図。

今後、この人はもう。

あの皇太子には手を出さない。

結果に満足したからだ。

生きる辛さを。
生かされる辛さを、知っているから。
誰よりも。
「それ、初耳なんですけど。どこに行くんですか？」
「クソバ……前陛下の息子の所に行って来る。さぁ～て、荷物作らなきゃ……鞄どこにしまったっけ？　ああ、ここじゃなくて家の方か」
「舅殿、先代の息子って……？」
息子がいたのか。
子供が残ってて当たり前だが……。
セレスティスは俺に背を向け、手袋をした右手でベットの上に置いてあった刀を掴んだ。
それを腰に戻しながら俺へと顔を振り返り、小首を傾げながら言った。
「あれ、意外だね。君、知らなかったの？」
「興味も必要性もなかったんすよ」
ハニーにそっくりな端整な顔に、いたずらっこのような笑みが浮かんだ。
「ふふっ、メリルーシェ支店長のバイロイトだよ」
「え？」
バイロイト。
あのお節介狸親父かっ！

第８５話（後書き）

＊「先代の交配実験？　なにそれ？」というお方はこちらをどうぞ。

『僕が、君のティアラ』

ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ０００４ｋ／

小話　～爪・前編～

「お風呂から出たら、今夜は爪のお手入れをしようかな～」

寝台に腰掛けたりこが、両手を眺めながら言った。

我はりこの‘お膝’に座って、りこの手を見上げた。

「これからは、もっと短く仕上げて……。うん、そうしよう！」

爪。

今よりさらに、短くするのか。

セイフォンではもっと長く仕上げておったと記憶しているのだが。

「爪を伸ばし色をつけ、飾る女は多い。りこはせぬのか？」

黄の大陸にあるリーチセルの貴族の中には、宝石や羽毛をつける輩もいたな。

「うん」

即答か。

「りこは今後も伸ばさぬのか？」

「……うん。だって」

りこの視線が泳いだ。

「だって、ハクちゃんの身体に傷が……痛かったでしょう？　ごめんなさい」

「傷？　……ああ、あれか」

なるほど。

我の為か。

我の為に、爪の手入れを……。

「……む？」

つまり。

爪の手入れとは。

「！？」

「どうしたの！？　やだ、ハクちゃんったら、お口がパッカ～ンッて開いちゃってるよ！？」

な、なんと！

あのりこがっ。

めったに人型の我にちゅうしてくれぬ‘恥ずかしがり屋さん’のりこが！

（りこは‘恥ずかしがり屋さん’なのでちゅう頻度が竜体＞人型なのだろうと、ダルフェが言っておった）

‘爪のお手入れ’。

こ……これは、りこが我との交尾の準備をしておるということな

のではないかっ～！？

「口……ああ、すまぬ」

外れた顎を、我は自分で治した。

ダルフェの本に書いてあった。

妻が‘恥ずかしがり屋さん’の場合。

性交をいたしたいと女から申し出るのは少々難しく、いたしたい時はさまざまなサインを出す。

奥ゆかしく可愛らしいそれを見逃すべからずと、赤字で書いてあった。

りこに会うまで。

我は勝手に盛る女しか知らなかった。

経験不足の我には、あの一文は少々難解だったが……。

うむ、こういうことなのだな。

「りこ」

つまり。

りこは我と。

今夜、いたしたいのだな！

それは良いことだな、とても良いことだ。

「りこになら」

しかし。

嬉しいが。

だが。

「皮膚を裂かれようと、肉を抉られようと。我はいっこうにかまわんぞ？」

むしろ、望むところなのだ。

「ふふっ、気を使って言ってくれたの？　そういうところ、優しいよね……ありがとう、ハクちゃん」

「……む？」

気を使う？

そのような高度な事は、我にはまだ難しいのだ。

本心なのだが、通じなかったのか。

「りこ……いや、我はっ……」

言いかけ、止めた。

消え入るような小さな声で、りこがこう言ったので。

「ハクちゃん。私、きちんと爪のお手入れをするから……いっぱいぎゅってしてもいい？」

言えなくなった。

「うむ。いっぱい、ぎゅっ、をしてくれ。我の骨が折れるほど、ぎゅっとするがいい」

竜体の我を抱きしめるりこの顔は、アダの実のように赤く。

思わず齧りつきたいほどのに、美味そうだった。

齧るわけにはいかんので。
舌を伸ばして舐めた。

舌に伝わる体温が。
我の冷たい身体をあたためる。

りこ。
りこよ。

この感情は。
なんというべきか。

我のために爪を丹念に手入れしてくれるのは、嬉しい。
とても、とても嬉しい。

が。

嬉しいのに、何故か少々残念なのだ。

うむ。
『残念』だな。

なんということだ！
この我に『嬉しい』と『残念』の合わせ技とは。

「……ふっ」

我のりこは、やはり凄いのだ。

「きゃっ！？　ハクちゃん、急に人型にならないでよっ。お、重い

っ。ちょっと、どいてよっ」
「り、りこ!?」

我はりこの細腕に突き飛ばされ、寝台から落ちた。

「ご、ごめんなさいハクちゃん！　大丈夫!?」
「……だ、大事無い」

この我を床に這わせるとはっ！

我のりこは、やはりとても凄いのだ。

小話　～爪・後編　＝Ｅｕｃｈａｒｉｓｔｉａ＝　～（前書き）

（注）Ｒ１５　このお話は性的特殊嗜好表現等を含みますので、ご注意ください。

小話　～爪・後編　＝Ｅｕｃｈａｒｉｓｔｉａ＝　～

風呂上りのりこが寝台に座り、足の爪のお手入れをしている間。
我は寝台の前に座ってその作業を見ていた。

我は良い子さんなので。
床に正座をし、りこにより差し出された毛布をきちんと頭から被ってお手入れ……『準備』が終わるのを待っていた。

風呂上りのころころを竜体で楽しんでいた我だが、爪を整え始めたりこを見ていたら何時の間にやら人型になってしまい、りこに毛布着用を言い渡されたのだ。

ころころも‘いけません‘と言われた。

良い子さんの我は、りこの指示に従った。
ふっ……我はあの幼生などより、良い子さんでかわゆいのだ。

「うん。上出来～、お手入れ終了です！　お待たせ、ハクちゃん」

濡れた髪を結い上げたりこが、我に微笑む。

お手入れ終了。
つまり。

準備万端整いました、とういう事だな。

我のりこは『恥ずかしがりやさん』に分類される女なので、はっきり口に出せぬらしいのだ。

夫として。
我が妻の意を汲んでやらねばならぬ。
口に出せぬ想いを察し、我がりこを、抱擁、してやらねばならぬ。
抱擁力なのだ。

年上の夫は、抱擁力……包容力も重要なのだとダルフェの本に記載されていた。

包容力。

抽象的で、実はよくわかっとらんのだが。
ほうよう……抱擁ということだろう。

抱擁するときの力加減が重要ということだ。
我は日々の努力のかいがあり、りこを潰さず抱擁できる我になった。

ラパンの実での練習は、無駄ではなかったのだ。

「うむ、りこの気持ちはわかった。安心するが良い、りこの愛は我にきちんと伝わったぞ？」
「は？　また謎発言を……きゃっ！？」

跪いて、りこの両足を手の平に乗せた。
この小さな足も手同様に。
我のために、爪のお手入れを……。

先日、手の爪を整えるさい。

りこは言った。
我の肌を傷つけたくないので、爪を短く整えるのだと。
我のために。
そう思うと。
この手の中の華奢な足を飾る、爪一枚一枚への愛しさがさらに増す。

「な……ハ、ハクちゃん!?」

顔を寄せ、手の中にある左右の甲に接吻した我を見下ろすりこの顔は。
頬だけでなく顔全体が赤かった。

「りこ」

我の好きな、りこの表情。
我はりこの肌が染まるさまを見るのが好きだ。

我がその身を塗り替えたように感じられ、臓腑の奥が熱を持つ。

＜氷の帝王＞などという、珍妙な異名を付けられたこともある我が。
この我が、身の内にに焼けるような熱さを感じるなど。

りこにより。
我はどこまで変わってゆくのだろう?

我がりこを変え、りこが我を変えてゆく。

「は……離して、ハクちゃん」

りこはその細い腕で、我の頭部を押した。

「何故だ？」

いつもしていることだぞ？

体勢はちと異なるがな。

「とにかく、はなしっ……」

「何故だ？」

いつもと違い、我が寝台ではなく床に膝をついとるからか？

些細な違いだが、りこには重要なのだろうか……我には分からぬな。

「だ、だだだって！　これはちょっと、そのっ……えっと、やっぱり、もうちょっとしようかなぁ～なんて思って……あ、体操もしなきゃだしっ」

「……」

我はりこの手から爪用のやすりを奪い、背後へと放り投げた。

「ああ～っ！？　こら、またぽいぽいしましたね！　ぽいぽい大魔お……う、んっ！？」

「……」

手の平に乗せた小さな足を指先で撫で。

その足首に歯を当てた。

「自分で終わったと言ったばかりではないか。りこに言われた通り、我は良い子で待っていたのだぞ？」

咥えたまま答えた。
触れていたい。
我はりこと、離れたくないのだ。

本当は、ずっと。
繋がっていたいのだ。

りこの言うように。
我は怖がりで。
寂しがりやさんなのだから。

「ハクちゃん、そ……そのまま喋るのやめてって、いつも言って……るでしょ！？」

踵に唇を這わせ。
甲との境を外側から舐めあげた。

「ぁ、それ、だ……だめっ。足、はな……し、てぇ」

小指から親指へ。
舌をゆっくりと流した。
指と指の間を、縫うように進んだ。

「駄目、だと？」

我が染め上げた金の眼を。
そのよう熱く蕩けさせ。

火照り震える指先で、我の髪を握り締めているクセに。

「嘘付き」

嘘吐きな、我のりこ。

「うそつ……？　あ……わ、たし」

我の言葉に、一瞬で顔色が変わる。

「ごめっ……なさ……違うのっ！　そうじゃなくて、ハクちゃ……わたっ……し」

我の視線で、声が震える。

「ちがっ……私、駄目って言ったのは……駄目じゃなくってっ！　ごめっ、ごめんなさい」

あぁ、金の目が。

塔から貴女と見た、夕を漂わせる湖のようだ。

「ごめ……なさ……ハク……」

いい。

「りこ」

その表情も。

とても、いい。

「困ったことに」

嘘吐きで、この上なく素直な我のりこ。

我の言葉を聞き、青ざめ震える唇がなんとも可愛らしい。

「嘘吐きなりこも、我は好きなのだ」

「ハクちゃっ……」

貴女の心が、我のこの手の中にある。

この手の中で。

我の思うさまに揺れ動く。

不安定で、脆い貴女が。

「好きだ」

いとおしい、ひと。

「……ハク」

その小さな脳が何を思うか暴かずとも、貴女の内からそれは溢れ出ている。
溢れて零れて、我を飲み込み。
我は。
貴女に溺れる。

「りこ」

りこの指先が、我の目元をなぞった。
触れられたそこから、鎔け出しそうになる。

「もっと、触ってくれ」

闇夜に咲く花のように。
貴女は甘い香りを濃くさせる。

「我に、触れてくれ」

それに抗う術などなく。
我は翼を?がれ、囚われる。

「我の、りこ」

我は幸せな虜囚。
貴女という鎖に縛られ、歓喜する。

「りこ」

我のために整えられた爪は。
食まれ嬲られた爪は濡れて艶めき、陽に輝く波打ち際の貝のよう

だ。

綺麗だ。
とても。

我は貝を綺麗などとは微塵も思わない、思えない。
思う必要など、無いのだ。

我の綺麗は世界にひとつ。

貴女だけ。

貴女だけで、いい。

「我のりこ」

夜着の上から左右の膝に接吻し。
細い足に手を這わせながら、夜着の合わせ目を開いていく。

「りこ、我は空腹なのだ」

現れた脹脛に接吻し、柔らかな肉に歯を立てた。
このまま噛み千切ろうと、りこは我を怒らぬだろう。

‘ぽいぽい‘はいけませんと言うが、その身を我に傷つけられても。
貴女が我を責めないと知っている、分かっている。

貴女は喜んで、我に血肉を差し出すだろう。

「りこ、我は咽喉が渇いた」

この渇きを潤せるのは。
我を潤せるものは。
貴女だけ。

「りこ」

酒も茶も。
水も。
我のこの渇きを抑えてはくれぬ。

我には、貴女だけなのだ。

「我はりこが」

貴女の望むままに。
その身を優しく愛で。

「りこを」

我の望みのままに。
その肉を貪り喰らおう。

「貴女を食べたい」

それは永遠に続く飢餓。

日々繰り返される、聖餐。

「我は、いただきます、と言うべきか？」

含み。
舐め上げ。
齧り。

「ちが…ッ…それ、使い方が違うって、な……何度も言ったで……しょっ！？」

この濡れた爪先から。
その震える指先まで。

「そうか？　我はそうは思わん。細かいことは気にするな」

全て。
余すところなく。

貴女を啜り。
飲み干そう。

「、いただきます、」

さあ、今宵も。

貴女を味わおう。

番外編　～さよなら、ナマリーナ～

「ナマリーナ、ナマリーナ！」

柄杓でこんこんと、池の淵を叩くと。

「あ、来た来た。うん、ナマリーナは良い子さんだね～」

鯰のナマリーナ嬢は、私が考えていたよりもずっと賢かった。

餌やりの時に‘ご飯の合図’として柄杓でこんこんっと叩くことにしたら、ほんの数回で覚えてくれたのだ。

今では餌が無くても、この合図をすれば底からゆっくりとあがってきてくれるまでになっていた。

本当は時代劇みたいに……錦鯉に餌をやる殿様みたいに、手をぽんぽんと叩くのをやってみたかったけれどダー○ベー○ー姿では無理だった。

そして今日、私は彼女に初タッチするつもりなのです！

「もうちょっと……もう少しこっちにおいで、ナマリーナ」

私は柄杓を足元に置き袖をまくり、池に腕を入れた。

驚かさないように、そっとナマリーナの身体に指先で触れてみる。

「いじめたりしないよ～、怖くないよ～。ちょっとだけ触らせてね？」

ナマリーナの身体は、私の想像通りの感触だった。

ぬるっとして、むちっと……むふふっ。

鱗はないけれど、これはこれで……。

ぬるむちっ。

これは……今までに無い触り心地です！

「あ……なんか良い感じ。気持ちいいかも。かっわいい～！」

新境地開拓って感じ！

ぬるぬるしつつも、しっかりとした弾力があり……。

ナマリーナが大人しいので、私は身を乗り出してさらに深く腕を池にいれた。

ナマリーナのお腹、前々から狙っていたのよね～！

「良い子だね～。ここもちょこっと、触らせてくださいな」

ぷりり～んっとして魅力的なお腹を、指先で撫でてみた。

「むふふっ……お嬢さんはぷりっぷりの、ぬるぬるだねぇ」

こんなに触れるなんて思っていなかったうえ、妙にはまってしまいそうな独特な触り心地のせいせか変な笑いが……。

うむうむ、悪くないの～。

「ナマリーナ、かわゆ……」

「……りこ。何をしている」

ん？
ハクちゃんの声。
竜帝さんに呼ばれて出かけてたけど……帰って来たんだ！
「お帰りなさい、ハク。見て、すごいでしょう！？　私、ナマリーナに触ってるんだよ！」
私のすぐ横に転移してきたハクちゃんに、ナマリーナの魅惑的なボディから手を放さず顔だけ向けて言った。
「ぬるぬるむちむちの魅惑的……ハクちゃん？」
あれ？
金の眼は私を見てはいなかった。
池に……ナマリーナに向けられていた。
「あ！　ハクちゃんもナマリーナを触ってみたいの？」
私はぬるぬるむっちりボディーを撫で撫でしつつ、聞いてみた。
「りこの」
切れ長の眼が、ナマリーナを凝視し。
「りこの‘なでなで‘は」
大きな両手でがしっと私の手首を掴み。
「痛っ、ちょ……？！」

ナマリーナから離して、自分の服に濡れた私の手を擦り付けて拭き。

ひょいっと肩に担ぎ上げた。

ちょっと！

私は米俵じゃな～い！

「り……りこの‘なでなで‘は夫である我だけのものだっ！」

え！？

なに言って……。

「この鯰めがっ……調子にのりおって！　今まで我慢してきたが、今回ばかりは許さぬっ……りこのこの手は、我のものなのだ！！」

言いながら長い足で……嘘っ！？

「ハっ……きゃああ！？」

ハクちゃんが大理石でできた池の淵を右足で一発、がっつ～んと蹴ったために池の淵が吹っ飛んでしまった。

大量の水とともにナマリーナも温室の床をすべるように流れていった。

ショッキングな光景に、呆然としちゃった私だったけれど。

床でべろーんと動かなくなった黒い体を踏み潰そうとする大魔神様なハクの動きに気がついて、ぎょっとした。

「っだ、だめ！　お願い、やめてハク！！」

真珠色の長い髪の毛を思いっきり引っ張り、叫んだ。

翌日。

りこがシスリアと2階で‘お勉強’をしている間、＜青＞の頭の上から池の修復作業を眺めていた。

＜青＞の連れて来た雄の技術者が、手際良く作業を進めていた。

「ヴェル。なんであの鯰を逃しちまったんだよ？　けっこう捕るの大変だったのに……」

あの時。

我はあの忌々しい鯰めを踏み潰せなかった。

破壊音を聞きつけてやってきたカイユがすばやく鯰を抱え上げ、我から遠ざけた。

我はりこの強い‘お願い’により、動けなかった。

足を中途半端に出したまま、りこという存在に縛られていた。

りこの心の底からの‘お願い’は、この我を縛るに十分な力があるのだ。

りこは我を動かし、止められる唯一の絶対者。

カイユは携帯用電鏡を懐からだし、ダルフェに桶を持ってこさせた。

数分で木製のそれを抱えたダルフェが温室へと駆け込んできた。

ダルフェの用意した桶にカイユが鯰を入れると、担がれていたりこは我の肩からおりたがった。

我はりこを濡れた床に立たせるのは嫌なのだと断った。
りこの目を見ずに言った我の頬を、りこは指先でつついた。

「じゃあ、抱っこにしてくれる？」
「……うむ」

我が嫌なのは濡れた床などではないのだと、りこには分ってしまったのだろう。
我はりこを担ぐのではなく、抱っこの体勢に変えた。

カイユが鯰が入った桶を抱えて、りこが伸ばせば触れられるほどに近づけた。
これをどうするべきか。
声には出さず、問うていた。

もちろん。
我ではなく、りこに。

りこは水色の目玉を見て、一度だけ顔を横に動かしてから。
鯰の入った楕円形の桶を覗き込み、言った。

「あなたが居てくれて、とっても楽しかった。……ありがとう」

そう言って鯰へと伸ばされた右手は、それを撫でることはなく。
鯰の頭部の上で、左右に軽く振られたのみだった。

「さよなら、ナマリーナ」

りこのその言葉を聞き。
カイユは桶をダルフェに持たせ、退室を促した。

足元に目をやると。
月が水面を泳いでいた。

「……我はあれを逃がしてなどおらぬ。りこが我からあれを逃したのだ」
「あん？　おちびが？　意味わかんねぇ。ま、じじいが分けわかんねぇのは昔っからだけど」

池を修復するのは、つがいを得ていない若い雄竜。
りこが戻ってくる前に作業を終わらせると＜青＞が言うので、入室を許可した。

我が嫌なのは、この雄が我のりこに懸想するといったものからではなく。
りこが我以外の雄に惹かれてしまうやもしれぬのが嫌なのだ。

我はりこの心を得たが、その心を縛ることは出来ぬのだから。

人間であるりこは、我以外の雄……男も愛せる。
他の者を、りこは愛せるのだ。

「あ！　また前と同じ観賞魚を入れとくか！？　おちび、あれ気に入ってたんだしよ」

我はあの鯨……ナマリーナが大嫌いだった。
我以外にもりこは易く名を、寵を与えた。

この我の前で。
微笑みながら、それは行われ。

満足げなその笑顔に我は見惚れながら。
脳髄が頭蓋を割って吹き出しそうだった。

「要らぬ」

我のりこなのに。
我のりこだと貴女はその口で言い、その唇で誓ってくれたのに。
なぜ。
貴女は他のモノも、その手で愛でる？

「あのなぁ……それじゃ、池の意味がねぇじゃん。からっぽじゃ、寂しいしよ。あぁ、四季咲きの睡蓮でも入れとくか！？　１つの株から４色の花が咲くやつ。去年かけ合わせに成功したんだ、新種だぜ？　まだ市場にも出してねぇんだ」

花。

「じじい、おちびはきっと喜ぶぜ？　あいつ、花が好きだろう！？」

好き。
好き？
好きだと？

「……そうだな」

なんと忌々しい。

「りこは花が好きだ。花も鯰も菓子も……そしてお前も、りこに好かれている」

「じじい？」

花も鯰も……竜も。

貴女が好きなモノ。

微笑みかけるものは全部、この世から捨ててしまいたい。

すべて無くしてしまいたい。

消してしまいたい。

ケシテ　シマイタイ

「……去れ、ランズゲルグ」

「へ！？　ヴェル？」

スベテ　消シテ　我ダケニ

「今の我は少々まずい。お前はりこの気に入りだ……壊したくない」

「壊すって……？　おい、じじぃっ……おわっ！？」

我は＜青＞を転移させた。

我は我から＜青＞を逃がした。

「……」

消シテ　シマエレバ　ラクナノニ

我ダケニ　スレバ

「……りこ」

寝室に転移し、枕の下からぱじゃまを取り出した。

それに包まり、寝台に寝転がると。

「りこの匂い」

あぁ、まるで。
りこに抱かれているようだ。

熟れて腐り落ちそうだった心が、穏やかになってゆく。

「りこのいいに……おい、だ」

我は大好きだ。
りこの匂いが。

「……りこ」

世界より我が欲しいと貴女は言った。

本当に、我の全てをもらってくれるのか？

鱗も髪も、冷たい血肉（からだ）も貴女は欲しいと言った。
では、解けぬ矛盾を抱えるこの醜い心も。
貴女は欲しいと望んでくれるのか？

「りこ」

かわゆくなく、綺麗じゃない我でも。

貴女は愛してくれるのか？

「りこ」

我ヲ　モット愛シテ

「我を」

我ダケヲ
愛シテ

我ダケヲ

ワレダケヲ
アイシテ

「ただいまっ、ハクちゃん！」

りこが帰ってきた。

少々乱暴に寝室の扉を開け、早足で寝台へと歩み寄り言った。

「どうしたの？　ベットにいるなんて、珍しい……まさかっ、体調悪いの！？」

「いや。……ここでころころをしておったのだ」

我はぱじゃまを畳みながら答えた。
この世界で我の体調などというものを気にかけるのは、りこだけだ。
我は高齢なのだからいろいろ気をつけなければいかんと、りこは時々珍妙なことを言うのだ。

我が思うに。
りこの方こそいろいろ気をつけるべきなのだ。
りこ自身は体調どころか身体そのものを我に変えられておるのというに、苦情の一つも言ってこぬ。
かなり変わってきておるのだが。
……そろそろ気づいてもよさそうなのだが。
鷹揚というより、無頓着。
いや、鈍いと言うべきか。
異界人だからではなく、りこだからか？

「あれ？　パジャマを着て、ころころしてたの？」

りこが右に首を傾げた。

「うむ」

我もつられて首を動かしてしまった。
りこは気づいてないようだが、我が首を傾げるという動作を得たのはりこからなのだ。
りこは空っぽだった我に、りこ、を分けてくれているのだ。
あたたかで、やさしいそれを。
りこは我に与え続ける。

底無しの我に。

りこは、与え続けるのだ。

「いや。確認しておっただけだ」

ぱじゃまを枕の下へと収納しながら答えた。

「確認？」

想いを、確認していたのだ。

我は寂しがりやさんなのでな。

「確認……ふ～ん……」

りこは多少の疑問を感じたようだったが、それを口にはしなかった。

「ハクちゃんは高齢だって聞いてるし、内臓が目からでちゃったり……いろいろ繊細だから、奥さんとしては心配しちゃうの」

大地も空も我とたいして変わらぬ高齢だ。

だが、りこはそれらの心配はせず我の体調だけを気にかける。

心配。

されると、嬉しい。

我はりこの特別なのだと、そう思うことができる。

だから体調などというよくわからんものは、我は持っておらぬことは内緒なのだ。

心配。

されると。

胆の裏辺りが、良い感じになる。
りこの飲む茶の湯気のようなものが、胆の裏から沸くような。
なんともいえぬ、良い感じなのだ。
それは。
肉で感じる快楽とは、異なる不思議な心地好さ。

「我は、その……りこ」

我は背伸びをし、寝台に両膝をつき我を覗き込んでいた愛しい女の唇に口付けた。

触れる一瞬に。
貴女がいるという、至上の喜びを得る。

「……ハクちゃん？」

触れるだけのそれでも我は満たされ、そのまま後ろに倒れた。
りこはこうして。
いとも簡単に我を満たしてくれる。

りこは我を満たし、尽きぬ飢餓を植えつける。
慈悲深く、残酷な。
我の女神。

「そ、そんな……私って、そんなに口臭ひどいの？」

両手で自分の口を覆い。
半泣きで、りこが言った。

「お池が直ってたね」
「＜青＞が新種の睡蓮を入れると言っていた」
靴を脱いで寝台に上がったりこと、中央部分で向かい合って座った。
なぜか、お互い正座だ。
お互い。
言わねばならぬことがあるからだろうか？
「え……そうなの！？　うわ～、楽しみ！　お礼言わなきゃ」
笑った。
りこが笑った。
我はりこの笑顔が好きだ。
笑んでくれるなら、我はなんでもしよう。
このどうしようもないこの嫉妬心を、握り潰そう。
まあ、時に失敗することもあるだろうが。
我は。
今はまだ、それができる。
「楽しみ、か。そうか……良かったな。りこが喜ぶと我も嬉しいのだ」
軽く首をかしげ、両手を頬で握った。

これはダルフェの貸してくれた本に載っていた技だ。
通常は幼女風のものがするらしいのだが……。
先日りこに試してみたら、素晴らしい効果が得られた上級技だ。
我は日々、かわゆい動作を研究しているのだ。

うむ。
けな気というやつだな。

「ぶふっ！？　ハクちゃ……ううっ……かかかっ！」

りこが鼻を押さえた。
鼻血など出ておらぬのだが、りこはよく鼻を押さえる。
癖なのだろうか？

「それっ、すごくかわゆ～い！」
「そうか」

我はかわゆくなりたい。
りこは＜かわゆい我＞が好きだから。
世界で一番、かわゆくなりたい。

もっともっと、貴女に好かれる我になりたい。

「ならば。りこよ、かわゆい我を抱っこするがいい」
「は、はいっ！」

りこは鼻を押さえていた両手で、素早く我を抱き上げてくれた。

「りこ……りこ。ぎゅってしてくれ、もっと強く抱いてくれ」

隙間のないように、強く。
何者も入り込めぬよう。
空気さえ、我等の間に入り込めぬように。

強く、抱いて欲しい。

「ハク？　……どうしたの、竜帝さんと何かあった？」
「いや。あれとは何もない」

あたたかな貴女に抱かれ、愛されて。
優しい手で触れられ、その柔らかな唇で接吻をしてもらい。

「さあ、りこよ。遠慮せず我を怒るがいい」
「ハクちゃん？」

我に向けられる微笑みが、他のものに与えられている笑みよりも。
りこが我に向けるそれが。

「我はりこの気に入りの鯰を捨てさせ、気に入りの池を壊した」

特別なものだと、我にも分かっている……知っているのに。
何故。
暗い感情に囚われる？

鯰も。
竜も。
花も。
菓子も。
空も、海も。

世界も。

全て消して。
我だけの貴女にしたい。

我だけに微笑んで。
我だけを見て。

「なんで、私が怒るなんて……」

だが。
我は。

我慢できる。
きっと。
耐えられる。
せねばならぬ。

貴女が我を。
愛してくれていると、知っているから……分かっているから。

「りこは何故」

貴女は我を、選んでくれた。
我が貴女を、選んだように。

「何故、我を怒らぬのだ？」

名を呼ばれるより先に、惹かれていた。
竜珠を与えるより前に、囚われていた。

「なぜって……狭い池より広い湖のほうが、ナマリーナは幸せだもの。仲間だっているしね。それに……引越し前には湖に戻さなくちゃって、私は考えてたの」
「りこはあの鯰を捨てるつもりだったのか？」
「捨てるっていうのとは、ちょっと違うけど。……言っておけば良かったね」

貴女の細い腕の中が。
この華奢であたたかな体の中が、我の居場所。

「ごめんね、ハクちゃん。また……私が貴方を傷つけた。許してくれる？」

許してくれ、だと？
この人は、まだ解らぬのか？

許されたいのは。
貴女ではなく、我だ。

「では」

貴女が我の世界。
捕らえられたのは、我。

「ちゅうしてくれたら、許す」
「……ありがとう、ハクちゃん」

りこは膝に乗せた我を撫で、冷たい鱗に覆われ鋭い歯を持つ口に柔らかな唇を与えてくれた。

「ハクちゃん、ハク……好き」

我の全身にゆるゆると手を這わせ、りこはやさしく撫でてくれた。

「りこ……」

こうしてりこに竜体を愛でられると、我は溶けてしまいそうになる。

「大好き、ハク」

普段はもどかしいほどに奥ゆかしいりこであるのに、竜体の我が相手だと何故か非常に積極的というかなんというか……。

まあ、竜体の我の嫁になりたかったほどこの姿に執着……愛着があるのだと言っておったしな。

少々複雑な気もするが、これはこれでとても気持ち良いので追及はしないでおこう。

顎の下をりこの指先で擦られると、我は脳の右下が弾けそうになる。

ああ、我の‘ふぁーすときっす’はりこなのだ。

竜体の我に接吻する女など、この体に触れようとする者など居なかった。

鱗があって、良かった。

人型は前にりこが言っていた‘イケメン’では無いので、自信が持てぬ。

ん？

りこはあの鯰の触り心地が気に入っていたようだったな。
ぬるぬるがどうのと言っておった。

ぬるぬる？
鯰の表皮の滑るさまを指しているのだろう。

うむ。
りこがぬるぬるが好きなら、我もぬるぬるに……いや、さすがに鯰のように皮膚から粘液は出せんな。

「りこ……あぁ、りこよ」

ああ、こうして度々我は思い知らされるのだ。
己の無力さを……。

「ん、なあに？」

ぬるぬるは無理だが。
むちむちは、この腹が多少はむちむちしとるのでこれで勘弁してもらうとしてだな。

「りこよ。我はあの鯰のようなぷりっぷりのお嬢さんにはなれぬ」
「へ？　やだ、聞いてたの！？　ハクちゃんたらっ……あはは っ」

声を上げて笑う貴女。
我を照らす貴女のその笑顔が。

まぶしくて。
貴女がまぶしくて。
我は目を細めてしまうのだ。

「りこ」

貴女という光は、我の中に影を作り闇を生む。
貴女を想う我のこの心は。
いつかみた宇宙（そら）のように、果てなく暗い。
だが、暗いそこに煌くものがあるのだと。
今の我は知っているから。
貴女を、幸せにするために。
この胸にある宇宙（そら）に散らばる星をこの手に集め、愛しい貴女に贈ろう。

「りこの気に入りを一つ……気に入りの池を壊し、すまなかった」

だから、もっと。

「ハクちゃん……」

とりあえず。
今は謝っておこう。

「我は‘ぬるぬるの魅惑ぼでー’にはなれぬ。つるつるでごめんなさい、なのだ」
「ぶぶっ！？」

もっと。
笑って。
我の、りこ。

貴女を幸せできる、我になるから。

もっと。
貴女を。
愛させて。

第８６話

「舅殿がメリルーシェに……いったいあそこで何があったんです？」

あのお節介おっさんバイロイトが先代の息子。

確かに驚いたが、俺的にはこのことは全く問題が無い。

問題無いどころか、関係ない。

問題は。

……この人が行くって事だ。

セレスティスは、強い。

竜騎士の凶暴で残忍な本能に流されることなく、冷静な思考のまま全開で戦える数少ない……本当の意味で強い竜騎士だ。

カイユには無理だし、俺もまだ自分を完璧にコントロールする自信は無い。

だからこそ俺達『竜騎士』は、竜帝に管理される必要がある……自我を失い、獣にならないためにも。

「残念ながら、まだ何も無いよ」

まだ、ね。

しかも……‘残念’か。

セレスティスはベットに投げ出してあった刀を左手に持ち、何かを確かめるように鍔を右の人差し指で撫でた。

「あ、クロムウェルも連れて行くから……君ってあいつと仲良しだったよね？　後で会っておいでよ……最後になるかもしれないから」

ゆっくりと歩み寄り、セレスティスは窓を開けた。

火の気は一切無いが城内と同じ湯による暖房設備が床下に張り巡らされいた室内に、冷たい外気が一気に流れ込んできた。

頬に感じる冷気が、今の俺には心地良く……ありがたかった。

この人を相手にするには、旦那を相手にする以上の冷静さが必要だと思い知ったからな。

「つーことは、対術士戦ってことっすか」

星持ちの術士だって簡単に片付けちまうセレスティスが、クロムウェルを連れてくってことは。

力技だけじゃ、勝算が無い相手ってことか？

「あんたがついていながら、あいつが負けちまうかもしれないほどの術士を討ちに行くんですか？」

クロムウェルが負けるかもしれない相手。

あいつは強い。

人間にしておくのが惜しいほど、強い。

あの旦那が陛下に「買え」と言ったほどだ。

そのクロムウェル以上の……この大陸に片手ほどもいないはずだ。

まさか……！？

「いや、そうじゃなくて僕があいつを守る気が無いだけだよ。だって、あのド変態が嫌いなんだもの」

は？

「なぁ～に大人気ないこと、堂々と言ってるんすか！　仕事で組むんだから、そこんとこは割り切ってくださいよ。それに、あいつは真性ド変態ですが良い奴ですよ？　無害で有能です」

「無害！？　僕は陛下の父親から、あの子をくれぐれも頼むって言われてるの。あんな変態男、近づけたくなかったのに……だいたいね、君が割り込んだんじゃないか！」

俺が？

どこに割り込んだっつーの。

「それ、どういう意味っす？」

「カイユはね、現陛下のつがいになる可能性が高かったんだ。あの子の父親は、僕の顔が好きだったから僕に似たカイユを息子の嫁にして、僕そっくりの孫を手に入れて、僕の顔に囲まれた老後を過ごすっていう夢を持ってたんだ。まあ、死んじゃったから無理なんだ

けど……君が赤の大陸から来るなんて反則技を使ったんじゃない」
カイユが陛下の!?
んなの、冗談じゃねぇ!
やっぱ、旦那に感謝だな。
生ごみ寸前になろうが、カイユと会えたんだから。
「反則って……そもそも俺は来たくて来たんじゃねぇし。文句は旦那に言ってくださいよ! ってか、陛下の親父さん……そこまでいくと重度の変態なんじゃないっすか!?」
俺の言葉に、セレスティスは即反論してきた。
「違うよ。カッツェは変態なんかじゃない、単なる顔フェチなだけだ」
「舅殿、それを世間じゃ変態って言うんです」
「え? そっ、そうなのか!? 俺、知らなかった……カッツェが変態の仲間なんて……」
あ~あ、俺になってるよ、この人。
本当に知らなかったんだな。
「……納得できないから、街に行って変態に詳しいガルデウッドに確認してくるよ。荷物も作んなきゃだし、忙しいな~……じゃあね、婿殿」
セレスティスは妙に軽い足取り俺の前を通過して扉に……おい、こら待ちやがれ。
「まだ話が済んでないでしょうがっ!」
「覚えてたんだ」
銀の髪をさらりとはらい、振り向いた顔には胸焼けしそうな甘い微笑。
「何気に俺のこと、馬鹿にしてません? ……俺には王子様スマイルは通じねぇぞ」
「ダッ君のいけず」
「ダッ君言うな!」
ああ、嫌だねぇ~。

この人相手だと、なんでこう本題からするっと方向転換されちまうんだろう。

俺もまだまだだな……。

「話、戻しましょうや。俺も団長であるカイユも、メリルーシェの件は一切何も聞いてません。セレスティス、あんたと陛下は俺達……いや、俺達と旦那を蚊帳の外にする気なんですか？」

セレスティスはともかく、陛下まで俺達に一言も無いなんてなぁ。

うん、これはけっこうショックだぜ。

「あ、やっぱ君は流されてくれないね。……気分悪くしちゃった？　ごめんね、婿殿」

「いえ。流されかかった俺が未熟なんです」

もともとよそ者の俺はいいが、カイユは……。

「君とカイユを蚊帳の外とか……そういうわけじゃないよ？　君たちは今、四竜帝にとって非常に扱いが難しい立場であり存在なんだ。理由は、分るでしょう？」

「あぁ……なるほどねぇ」

姫さんか。

異界の娘。

＜監視者＞の伴侶（つがい）。

「つまり、四竜帝は俺等の所有権を旦那に……ってことですかね？」

カイユはあの子の母親になった。

驚いたことに、あの旦那がそう希望したんだ。

ーーーカイユをりこの『母親』にする。

はっきり言わせてもらうと、無茶苦茶だ。

だが、四竜帝は是と言うしかない。

「うん。君達……君・カイユ・ジリギエを‘貰う’って、あの人は陛下に言ったんだ。四竜帝全員、了承している」

俺の息子・ジリギエは、四竜帝以外を＜主＞をする初めての竜騎

士になる。
実際、ジリギエは＜青の竜帝＞に頭を下げなかった。
あいつはカイユの希望で竜帝より前に＜ヴェルヴァイド＞と、そのつがいである姫さんに会った。
ジリはあの時、寝ていたんじゃない。
感じていたんだ。
ジリは卵からかえった雛のすり込みのように、竜帝より強い存在を……＜ヴェルヴァイド＞がこの世で唯一膝を折り、頭を下げる異界の娘を＜主＞にした。
「陛下が君とカイユに言わなかったのは、この件には係わらないって＜監視者＞に言われたからなんだ。陛下が何度頼んでも駄目だった」
いろいろ整理して考えると、俺達に言わなかったのは……確かに、良い判断だったかもしれない。
カイユが聞けば、自分も行くと言い張っただろう。
セレスティスとクロムウェルが組んで相手をしなきゃなんねぇほどの術士なら、珠狩りの情報も持っている可能性が高い。
カイユは母親を殺した術士を、ずっと探してきたのだから……命すら惜しまない。
だが、旦那はそれをよしとしないだろう。
カイユは旦那にとって現時点で最高の‘部品’なのだから。
「旦那、この件に全く興味無いみたいです。竜族の危機より、嫁に食わせる献立のほうがよっぽど気になるみたいでしたからねぇ」
「あの人、僕達以上の嫁狂いみたいだったからね。冗談に聞こえないよ、それ」
「これ、マジっす」
「……はぁ。陛下に同情しちゃうよ」
セレスティスの水色の眼が、天井に向けられた。

「さっきもちょっと言ったけどね。青の竜族は先代の散財のせいで、国庫がすっからかんだったんだ」

散財……国庫が空になるほど、先代は金を使ったわけだ。

先代は雌だったが、紅さえ注さない……華美を好まない性格だったと母さんに聞いたことがある。

まともなことに使ったんじゃねぇな。

もしかして。

金が無くなったのは……。

「ちょっと賢い猿みたいな人間を空から見下ろして、竜体で気ままに暮らせてた時代じゃないんだ。竜族が人間と平和的に共存していくのに必要なものは、近代種の特徴である穏やかな性質なんかじゃない」

セレスティスは手に持っていた刀を腰に差し、柄を指先で数回弾いた。

「金だよ、金」

水色の瞳には確かに俺がいるのに、セレスティスが見ているのは俺じゃなくて……違う何かなのかもしれない。

「手っ取り早く稼ぎ頭だった貿易事業を強化して、販路の拡大を計った。人間の商人を達出し抜くために、各国の権力者を取り込んだ……父親に似て、あの子は稀有な容姿を持って生まれた。僕等はそれも最大限に利用した」

目の前にいる俺を見ながら。

「あの子の手にたった一度口付けるためだけに、民から吸い上げた富を丸ごと差し出すような馬鹿も多かった。あの子を一目見るため

に、数分の謁見に莫大な金が動いた」

もっと遠くを。

戻らない時間を。

「あの子に堕ちぬ輩は、僕等竜騎士が排除した。竜騎士が暗躍し、都合の良い者を各国の要職につけるようにして……奇麗事だけじゃやってけなかったから、人間のやり方を真似たのさ」

失ったものを。

「あの頃の『裏』を知って生き残ってるのは陛下と僕、ニングブックとプロンシェン。そしてバイロイトだ」

俺にはけっして見ることの出来ない何かを。

この人はずっと見て……見続けて生きてきた。

時々、俺は思うんだ。

この人は地上に残った幻のような存在で、本物はミルミラの側にいるんじゃないかって。

「現陛下がセイフォン王家を特別扱いする理由は、ここのところにあるんだけどね。もう皆、死んじゃったんだから気にしなきゃいいのに、陛下はいつまでもいろいろいじいじじめじめ気にしすぎなんだよ……同じような顔でもカッコンツェルは、もっとからっとしてたんだけどな」

カッツェ……カッコンツェル。

陛下の父親。

父親もあんな顔だったのか、美女顔遺伝子って強いんだな。

「珠狩りなんて過去に類の無い邪術の存在を四竜帝が知ったのは、ちょうどその頃だった」

珠狩り。

最初の被害が起こったのは、確か黒の大陸だったはずだ。
「邪術を練成した特定の術士が、竜の長寿や強化能力を得るために珠狩りしているのだろうと考えられていた。けどね……ずっと被害は数十年に数件だったのに、最近は全大陸で多くの被害者が出ている」
それが今では全大陸に広まった。
その点が、おかしいんだ。
人間は海を越えて他大陸に移動できない。
大陸間移動が可能なのは、渡り鳥などの野生動物と竜族だけだ。
なのに何故、手の付けられない疫病のように珠狩りが世界中に広まったんだろうか？
「多分、奴は今までは自分の延命のために、単独で珠狩りをしていたんだと思う」
カイユの母親・ミルミラを殺し竜珠を奪ったのはセイフォンの元王宮術士だ。
「世界中で珠狩りの被害が急激に増えたのは、ミルミラが殺された後だ。導師は邪術を伝授することに成功したのを確認し、次々と珠狩りの術（すべ）を信者（でし）共に授け竜珠を集めだした」
珠狩りが可能な術士は、導師だけじゃないってことだ。
「今までは陛下だって、＜監視者＞の力を借りずに竜族だけで解決しようと努力してきた。でも、正直ここまで被害が拡大したら僕達竜騎士だけでは、対処できる限界をとっくに越えている」
「悔しいことですがね、後手後手にならざる得ないですよ」
竜族は個体数が少ないうえ、術士と互角以上で戦える『竜騎士』は年々数が減っている。
全体の出生数自体が下降の一途なのだから、当然の結果だ。
「けどね、君達がセイフォンに行っている間に事情が変わってね。陛下も他の四竜帝も、＜監視者＞……＜ヴェルヴァイド＞をこの件に関わらせようとしたんだ」
普通の竜族は人間よりは強いが、術士には敵わない。

このペースで狩られていけば、人間の乱獲により絶滅させられた他の生物と同じ末路だ。

「そりゃ、旦那の力を借りれれば助かりますがね……旦那が竜族にこれ以上、近く、なったら、人間共は危機感を強めて、竜族を……だから、今までだって……」

「だから、それは事情が……状況が変化したからさ。僕達が追っている導師が真に欲しているのは、＜監視者＞……＜ヴェルヴァイド＞だと分ったからだ」

ヴェルヴァイド？

「なっ……」

＜ヴェルヴァイド＞……旦那を！？

「導師にとって僕等竜族は素材であり、実験としての役割もあったんじゃないかと四竜帝達は考え始めている」

旦那が人間に……どんなに優れた術士だろうと、負けるはずが無い。

竜族だけじゃなく、人間だって嫌ってほど分っているだろうに。

「正直言って、メリルーシェの契約術士が使える可能性は低かった。あいつが導師とつながってるか、半信半疑だったんだけど……やっと、動き始めたんだ」

竜騎士じゃないバイロイトに、術士は抑えきれない。

契約術士は契約中は雇い主と結んだ『理（ことわり）』によって、雇い主を殺害することはできないが……。

「それって、いつぐらいからです？」

「＜監視者＞がペルドリヌの教主をミンチにした後」

ずいぶん時間が経ってるな。
それだけ慎重に、陛下は機を探ってたってことか。
「あの人、贈物だって言って教主の頭部を陛下にくれたんだって。なんで喜ばないのかって、おかんむりだったらしいよ？　面白い人だよね」
「……陛下は血を喜ばない。逆にそんな旦那を見て、辛い思いをしたんじゃないんですか？」
陛下にとって‘ヴェル’という存在は、特別だ。
陛下だけじゃない。
俺の母親も……四竜帝にとって＜ヴェルヴァイド＞は特別な存在だ。
だから、か。
だから。
陛下は、旦那を守りたかったんだ。
負けるはずがないことを知っていても、不安だったのかもしれない。
特別な、大切な人だから。
「ペルドリヌ……あれは予想外だったね。怒り狂って、ついでに人間全部処分しちゃうの期待してたんだけど。上手くいかないもんだね」
予想外……。
予想！？
「まさか、あんた……」
なんてこった。
勘弁してくれよ！
「ふふっ。僕は君達が首尾よくおちびちゃんを連れて城に戻って来る前から、カイユに頼まれて帝都のお掃除の準備をしてたんだ。……おちびちゃんに手をあげたあの術士は、わざと城に入れてあげたんだよ」
ちったぁ、手加減してくれよ。

「あ、陛下は関係ないからね。この件に関しては僕だけ……＜監視者＞の怒りが僕個人にくるのも大歓迎だったし、どう転んでも損は無かったんだ」

ああハニー、君の親父はとんでもねぇにもほどがあり過ぎだ！

「……ねぇ婿殿。君が先日、四竜帝に提案した方法は最終手段だ。ぎりぎりまで、待て……待ってくれ」

セレスティスの顔から、笑顔が消えた。

四竜帝への提案。

「っ……」

その事をこの人が知っていると思っていなかった俺は、答えに窮した。

あのなぁ陛下、カイユの父親であるセレスティスには、俺としちゃぁ知られたくはなかったんだけどねぇ。

「陛下は……あんたにゃ何でも、ぺらぺら喋っちまうんですねぇ……」

俺は電鏡の間で四竜帝に集まってもらい、ある提案をした。

「……他に方法があるって、あんたも言うんですか？　不死どころか個体強化にも失敗したって、旦那は言ってんですよ！？　人間の寿命は短い。のんびり構えてちゃ、手遅れになる」

＜監視者＞のつがいをこの世に留めおくために、導師の‘やり方’を使えないかと。

俺は四竜帝に、そう提案した。

「俺の中にあるこの竜珠を姫さんに使ってくれって言ったら、＜青＞と＜赤＞が黙りこくっちまって……採決までには至りませんでした」

俺はどの道、長くないから。

この命を。

あの子が、１日でも長く生きるように。

「竜珠が延命に使えるのは、竜のつがいになった人間が長寿になることからも……導師が数百年も生きてるらしいってことでも証明されている」

カイユとジリギエに。

遺したいんだ。

「舅殿」

この世界を。

君達に。

「クロムウェルを生きて……今後も使える状態で帝都に帰してください。あいつが……陛下の為ならなんでもする、高品質、の術士が必要なんです」

竜族は術式が使えない。

一説では竜族独自の特殊な能力……竜体と人型を持つせいらしい。

その変化に莫大な力が必要なために、術式を使うための力を溜めておくことが出来ないからだといわれているが……。

「おちびちゃんは異界人だ。こっちの人間と全く同じ結果になるかは分らない」

もし、うまくいけば。

そうすれば、姫さんは死なない。

死なせない。

「だから、俺で試して欲しいんですよ」

姫さんは死ねなくなる。

あの子は捧げられた命を、投げ出すことなど出来ないだろう。

俺は。

俺の愛しい人のために、大切な存在のために。

姫さん、あんたを。

あんたには。

生贄の命を喰らって生かされる地獄(せかい)を……。

「……わかったよ、婿殿。クロムウェルは必ず、使える状態、で戻す」

あんたには。
地獄を。

「ダルフェ。＜監視者＞……＜ヴェルヴァイド＞の存在を快く思わない者は過去にも、そして現在にも多く存在する。あの人は常に怖れられ疎まれ、憎まれてきた。昔から人間の勇者だか英雄だかか何度も倒そうと、封じようとしたが誰も成功しなかった」
「……導師は旦那を殺して‘世界を救いたい’んですかね？　どんだけ阿呆なんだ。くだらねぇ」

ごめん。
ごめんな。

「導師が世界を救う？　ははっ、まさか！　僕、さっき言ったでしょう？　導師は＜監視者＞を……＜古の白（ヴェルヴァイド）＞を手に入れたいんだよ」
「っ……導師って奴は狂ってる」

旦那は、ヴェルヴァイドは。
＜ハク＞はあんたが側にいなきゃ、駄目なんだ。

「狂ってる……そうかな？　その尽きぬ欲望が、人間の進化の原動力なのさ。それを狂気といい、畏れを感じてしまうから……竜族は滅び、この世界には人間が残るんだよ」

この世界には。
姫さんが。

「ダルフェ。僕はもう二度と間違わない、失敗しない。僕の生きる理由は、君と同じだ」

「セレスティス……」

カイユ。

この世界には。

「君の望みは……願いはなんだい？」

＜りこ＞っていう贄が、必要なんだ。

「言葉にすれば、もう引き返せない。それでも、君は……カイユに愛を誓ったその口で言えるかい？」

アリーリア。

こんな俺を、君は軽蔑するか？

「俺は……愛しい者達が生きるこの世界を、遺す」

君が、愛しいから。

一緒に死んでくれるとまで言ってくれた、君を。

俺は君を、裏切る。

第87話

寸胴鍋の中で泳ぐパスタを眺めた。
ダルフェさん作の踏み台に乗り、覗き込むようにして……。
あつっ……蒸気が顔にあたって、毛穴が開きそう。
お湯の中で絡まりそうで絡まずに、上下左右に激しく踊るパスタの姿はなんだか今の私の気持ちみたいだった。
答えは出ているのに、あっちこっちへとぐらついて……。
ああ、私って。
なんでこんななんだろう。
「トリィ様、火力を少し弱めましょうか？　……トリィ様？」
重たそうな鋳物のお鍋に入ったトマトソースを横で温め直していたカイユさんの声で、マイナス思考に陥りかけていた脳をあわてて引き戻した。
「は、はい。そうですね！　これじゃ、吹き零れちゃいますよね！？」
火力調整のレバーを少し戻せば、火は直ぐに適度なものへと変化した。
でも、頭の中で浮かんでいたダルド殿下の蒼白な顔とセレスティスさんの満足げな微笑は、この火のようには抑えられず……消えてくれなかった。

本日のランチはトマトソースのパスタ。
なんと、セレスティスさんのお手製のトマトソースなのです。
パスタは食堂で毎日作られている生パスタで、リングイネとフェットチーネの中間のような平たいパスタだった。

ハクちゃんが竜帝さん達を転移させて、その後セレスティスさんもまたお庭から足取り軽く去っていき……入れ替わりでパスハリス君達が来て、腕組みをして仁王立ちカイユさんの視線を避けるようにして大きなテーブルを運び出した。

何かを点検するかのように元通りになった温室内をカイユさんは見て周り、最後にお庭側の硝子戸に内側から鍵を閉めた。

彼等に15分程遅れて現れたヒンデリンさんは、ちゃんと廊下側の扉から入ってきた。

ヒンデリンさんはカイユさんに、セレスティスさんからだと鋳物の鍋を届けてくれた。

彼女はハクちゃんを抱っこして居間のソファーに座っていた私に会釈して、カイユさんに鍋を手渡して足早に帰っていった。

あれからずっと厳しい表情をしていたカイユさんだったけど、受け取ったお鍋の中を確認したらお顔のこわばりが和らいだ。

「これは……父特製のトマトソースです。何年振りかしら？」

冬の空のような水色の瞳に、春の日差しのような柔らかな光。

「セレスティスさんの？」

鍋を持ちキッチンへ向かうカイユさんのあとを、ハクちゃんをソファーに下ろしてから追った。

横に並んでカイユさんの顔を見上げて、その穏やかな表情に内心ほっとしつつ訊いてみた。

「ひさしぶりなの？　何年振りって、どれくらい？」

「……母が亡くなってから。三人で暮らしていた時は、月に数回は作ってくれてたんです」

「あ……私、ごめんなさいっ」

「トリィ様」

鍋をこん炉に置いてから、カイユさんは長身をかがめて私の頬を両手で包み込むようにして撫でてくれた。

「今度、父にこのトマトソースの作り方を一緒に習いませんか？」

「え？」

「ダルフェとジリギエに作ってあげたいんですけど、一人じゃ自信が無くて……。私、剣の扱いは得意なんですが包丁は苦手なんです」
あたたかな手は私から離れ、キッチンの壁に取り付けた真鍮のフックにかけられていた花柄のエプロンへと伸びた。
「私も……いいの？」
カイユさんは私の白いドレスの上に、ダルフェさん作のエプロンを手際良く着せてくれた。
胴に両腕をまわし、きゅっと縛って……微笑んだ。
「ええ。ぜひ、お願いします。私も貴女とおそろいのエプロンをダルフェに作ってもらおうかしら？……あら、ヴェルヴァイド様」
水色の瞳の動きを追い、私も後ろを見た。
「ハクちゃん。お手伝いに来てくれたの？」
そこには花柄ふりふりエプロンを着て、短い両手でお皿を抱えたハクちゃんがいた。
「うむ。我は気が利く男なので、皿を持ってきたのだ！」
ふわふわと飛びながら寄ってきて、私にお皿を手渡しながらカイユさんに言った。
「カイユよ、お揃いは許可できぬ」
「……どうやら諦めたほうが良さそうです。あぁ、残念だわ」
カイユさんは溜息混じりに言ったけど、その顔から澄んだ微笑は消えていなかった。

「では、いただきます」
ダイニングテーブルにはセレスティスさん特製トマトソースがたっぷりかかったパスタと、レースのような不思議な葉とお豆のサラダ。
少なめに盛られたのが私、その3倍の量が盛られている迫力あるお皿がカイユさんの分。

「今日のトリィ様には食堂のランチはちょっと胃に重たいでしょうから、ちょうど良かったですね」
食堂の数種のランチメニューは揚げ物が多い。
肉・魚・野菜、どれがメインでも揚げ物となっていることがほとんどだった。
竜族は揚げ物を好むから、ということらしい。
そういえば、意外なことに砂糖より油が（もちろん人間を含む）動物は好きなんだって、中学の時に先生が言ってたっけ……。
「……ヴェルヴァイド様、エプロンをとってしまわれたんですね。大丈夫ですか？」
向かい合わせの椅子に腰掛けたカイユさんが、サラダを小皿に取り分けてくれながら言った。
テーブルの上にちょこんと座り、銀のフォークを左手で握り私のお皿を無言でじーっと見つめていたハクちゃんは、パスタから視線を動かさず答えた。
「うるさい黙れ。気が散る」
うわっ！？
カイユさんに、なんて言いかたすんのよ～っ！
「こら、ハクちゃん！」
「トリィ様、お気になさらないで。……そうですか、出すぎたことを言いまして申し訳ございませんヴェルヴァイド様」
ハクちゃんは脱いでしまったけれど、私はエプロンをしたままだった。
こんな高価なドレス（しかも白！）を着たままランチタイムに突入するんだもの、エプロンをしなきゃ怖くて食事なんて無理です。
なんたって、トマトソースだし。
「さあ、温かいうちにいただきましょう」
「はい。ありがとう、カイユ」
お腹は空いてないし、食欲も無いけれど。
ハクちゃんが心配するから、ちゃんと食べなきゃ。

ダルフェさんに借りた【目指そう長寿・正しい食事で快適シルバーライフ！】を熟読しているハクちゃんは、私の食事に関して並々ならぬ情熱を注いでいる。

シルバーライフ……なんかひっかかる点もありますが、私のことを考えてくれてのことなのであえてその部分は見て見ぬふりをしちゃったのです。

それに、セレスティスさんが作ったというトマトソースを残すわけには……ん？

「ハクちゃん？」

食欲が無くても食べなきゃならないのは、ハクちゃんが心配するからっていうのが大きな理由だけど。

そのハクちゃんが半強制的に私に‘あ～ん’をするせいでもある……のに。

ハクちゃんはフォークをパスタに突き刺す寸前の姿勢で、置物のように固まっていた。

「どうしたの？」

「りこ。実は……我はまだくるくるがうまくできんのだ」

「くるくる？」

くるくる……あ！

「麺類をフォークに巻くのは、まだ習得しておらぬのだ」

なるほど。

うん、これはある意味好機なんじゃないの！？

「あのね、ハクちゃん。パスタを‘あ～ん’ってするのはとっても難しいから、パスタ……麺類の時はやめない？　私、自分で食べ」

言いかけて、やめた。

大きな金の眼が私を見上げて、中央にある縦長の黒い瞳孔がシャーペンの芯のように細くなったから。

あわわ、ご機嫌斜め！？

「りこ、期待に添えぬ我ですまぬ。そのように残念そうな顔を……そんなにも、りこは我にあ～んされたいのだな」

は？
あれれ？　なんでそうなるの！？
「案ずるな、我は“くるくる経験値”が足りておらんだけだ！　これからは夜の＜お勉強＞の項目にくるくるも加えて精進するぞっ。どれ、少々練習をしてみるとしよう」
ハクちゃんはフォークを両手で持ち直して背をそらせ、反動をつけて一気にお皿の中央に振り下ろした。
その勢いのまま、両足を踏ん張って円を描くようにフォークを動かした。

「んぬぅっ！？」

その結果。
ハクちゃんのお顔にもお腹にも、真珠色の体の全体に赤い斑点が。
「……ハクちゃん、力入れすぎだよぉ」
あぁ、私の頬にも異物感が……。
「ヴェルヴァイド様。……だから言いましたのに」
ひぇ～！？
口元がぴくぴくってなってるカイユさんの顎に、赤い点々がっ！！
「あれ、ご自分でお掃除してくださいね」
カイユさんが視線は上へと移動した。
私とハクちゃんの眼も、それを追い……。
「うわっ！？」
「……むっ」
赤いトマトソースは、天井にまで到達していた。
「……ハクちゃん。フォーク没収ね」
「……ごめんなさい、なのだ」
今日のランチは久しぶりに、自分でフォークを使って食べることが出来た。

食後は飛び散ったトマトソースの掃除をした。
カイユさんが食器を洗ってくれてる間に、私が床・ハクちゃんが天井を拭いた。
ハクちゃんは飛べるから天井もささっとお掃除できて、思っていたより早く掃除は終わった。
この白いドレスで床掃除はまずいと思い、先に着替えようと思ったんだけど……ハクちゃんが珍しいことを言った……言ってくれたので、着替えるのはやめた。

――そのままが良い。その衣装、我は気に入った。我のりこに、とても似合うのだ。

小さなお手々に雑巾をぎゅっと握ったかわゆいおちび竜は、金の眼をくるんと回してそう言った。
大好きな人にそんなふうに言われたら、ずっと着ていたくなっちゃうというか……。
と、いうことで。
今日はこの豪華衣装で過ごすことに決めました。
ハクちゃんは掃除終了後、着替えてくると寝室にふわふわ飛んで入っていった。
う～ん、ちょっと凹んでるみたい。
くるくる練習……今夜からするのかな？
よし、私も特訓にとことん付き合ってあげましょう！
「トリィ様、こちらは終わりましたから居間でお茶を……あら？ヴェルヴァイド様は？」
「ハクちゃんは着替えに……あ！　カイユ、お願いがあるのっ」
「はい、なんなりと仰ってくださいませ」

「私、セシーさんに会いたいの」
セシーさんは温室には来れなかった。
ハクちゃんの処分対象者じゃなかったから。
だからまだ、会えていない。
「……トリィ様。何故あの女にお会いになりたいのですか？　カイユはあれが嫌いです」
「セイフォンでとってもお世話になったのに、挨拶もしないで帝都に来ちゃったから……今度は引越し前に、ちゃんとお礼とさよならを言いたいの」
私は彼女に会いたい……お礼はもちろんだけど、聞きたいこともある。
怪我をしたっていってたから、お見舞いもしたいし……。
「分かりました。では、陛下に連絡を……少々お待ちください」
カイユさんの着ているレカサには、ぱっと見は縫い目にしか見えない腰のところにポケットがついていた。
そこから小さな電鏡を取り出し、鏡面をこんこんと中指の爪で数回弾いた。
1分程であちらと繋がったらしく、カイユさんが会話を始めた。
「陛下？　……ええ、そうです。トリィ様のご希望です」
竜帝さんと会話をしているようだけど、私に聞こえるのはカイユさんの声だけ。
前に竜帝さんが使ってた時も相手の声は聞こえなかった。
でも、会話が成立してる。
う～ん、不思議です。
「あの女に……え？　あの王宮術士の娘がですか！？　……折り返しご連絡致します」
カイユさんは折り返しって言ったのに。
「あの小娘っ……！」
電鏡を両手でぎゅっと握って割り、シンクへ投げ捨ててしまった。

「カッ、カイユ!?　どうしたの？　ミー・メイちゃんがどうかした？」
「あの王宮術士は厚かましくも、トリィ様と2人だけで話をしたいと……先ほど陛下に、そう申し出たそうです。なんという身の程知らずなっ……！」
嫌悪感と苛立ちを隠さずに言うカイユさんはすごい迫力で、私はなんて言っていいか分からなくなってしまった。
「……ヴェルヴァイド様のご判断は？」
振り向くと、そこに居たのは。
白いレカサを着たハクちゃんだった。
「ハクちゃ……」
「おそろい、だ」
レカサのデザインはアオザイに似ていてシンプルなものなんだけど。
ハクちゃん着ていたのは光沢のある純白、袖と立襟には瀟洒な金細工……まあ、地味とは言えないけれど。
それにしたって、なんでこうなっちゃうのかな……この人って存在自体がド派手なのかな？
前にも思ったんだけど。
なんで貴方は、黒より白のほうが凶悪度&魔王様度がアップになっちゃうの～っ！？
「……ヴェルヴァイド様、本当によろしいのですかっ？！　あの王宮術士はっ」
殺気立ったカイユさんの冷たい声を。
「黙れ。口出し無用だ」
それ以上の冷気を帯びた声が遮断した。
「りこ」
ハクちゃんは両膝を付き、私の顔を覗き込むようにして視線を合

わせた。

「りこ。我のりこ」

真珠色の爪に飾られた長い指が、私の手に絡められ。
艶やかな長い髪に縁取られた白皙の美貌が、吐息が触れ合うほどに寄せられて。
黒い服でも白い服でも、どうでもよくなる。
だって。
見えない。
近すぎて。
私に見えるのは、貴方の黄金の瞳だけ。

「ハク……。ミー・メイちゃんと会ってきてもいい？」

唇が触れ合う前に、口にした言葉を。
言葉も想いも。

「貴女がそれを望むなら」

触れ合うそこから。
私の全てを奪い取るような口付けで、魔王様は答えてくれた。

第88話

ゆっくりと唇が離れ。

「……ぁ」

「りこ？」

ハクちゃんの声で。

無意識に、名残惜しげに温かな舌を追ってしまった自分に気づいた。

そんな私を首をかしげて見つめるハクちゃんの金の眼から、あわてて視線をそらした。

「ふむ、なるほど。りこの気持ちが、我には分ったのだ」

私の、気持ち？

私の……。

――――もうちょっとだけ、キスしていたかったな……。

う……うきゃあっ！？

ひぃい～！　言わないでぇえ～！！

「足りなかったのだろう？」

「っ！？」

ぎゃぁああ～っ！

ばれてる？

ばれちゃってるの！？

「ちちち、ちがっ……！」

ハクちゃんは真珠色の前髪をかき上げ、金の眼を細めた。

「我のりこは恥ずかしがりやさんだからな」

「は、恥ずかしがりやさん？」

私が？
「うむ、りこはかなりの恥ずかしがりやさんなのだ」
「……」
そんなこと無いと思うなぁ～。
う～、ま、まあ。
人前で今みたいなキスはちょっと、かなり困るけど……。
困るんだけど。
嫌じゃないから、さらに困ってしまうのです。
「とにかく、それ以上は言わないでっ」
「大丈夫なのだ。りこの代わりに、我が言う」
ん？
なんか噛合わない会話……いつのもことだけど。
「りこ」
ハクちゃんはそんな私をひょいっと持ち上げ、脇の下に手を添えた。
彼が立ち上がったので私の両足は床から離れ、ぶら～ん状態になった。
「カイユよ」
「はい」
あぁ、カイユさん。
いらっしゃったんですよね……すぐそばに。
さすが青の竜騎士の団長さんです！
気配を消せるって、すごいというか……いつも気を使わせてしまって、ごめんなさい。
バカップルと罵ってくださいませぇえええ～！
「りこは腹が空いたらしいぞ？」
ハクちゃんはカイユさんと向かい合い、そう言った。
「ハクちゃん？」
セレスティスさんのトマトソースをたっぷりかけたパスタで、私はお腹いっぱいなんですが！？

「トリィ様が……空腹？」
カイユさんはハクちゃんの顔を数秒間じ～っと見てから、にっこりと笑った。
「それ、違うと思います。まだまだですわね、ヴェルヴァイド様」
「……りこ。違うのか？」
「うん、これ以上食べたらお腹痛くなると思う」
この歳で、食べ過ぎで腹痛になったら恥ずかしいよ。
「……そうか。我はまだお勉強が足りておらんということか」
ハクちゃんは私を床へ下ろし、一人で居間へと戻っていった。
歩きながら何かぶつぶつ言っていたけれど、ご機嫌が悪くなった感じはしなかった。
「まったく……鈍い方。さあ、お出かけの支度をしましょう、トリィ様。誰かさんのせいで、紅が落ちてしまいましたから。軽く化粧直しをいたしましょうね」
「え～と……はい、カイユ」
ハクちゃんって、やっぱりちょっと鈍いのかもしれない。
妙に鋭いときも、たま～にあるんだけれど……。
でもね、カイユ。
私はハクちゃんのそういうとこも、大好きだったりするんです。

「ハクちゃん、行ってくるね」
私とカイユさんは徒歩で竜帝さんの執務室まで行くことになった。
隣接するに応接室でミー・メイちゃんとセシーさんが待っててくれている。
居間のソファーにふんぞり返って、ハクちゃんは言った。
「今日はりこは日課である散歩をしておらぬからな。足腰の機能維持のためには、歩くことはとても良いと本に書いてあったのだ」

「……そ、そうだよね。うん、歩くのは大切だよね」
ハクちゃんって、好感度ゼロ系悪役美形顔からは想像つかない程の健康オタクなのです……。
まあ、情報源がダルフェ文庫ってところが難点ですけれど。
「カイユ。＜青＞の執務室への道中、＜青＞の指定したところ以外は使うな。りこ、帰りは我を呼べ。迎えに行く」
あ、ソファーの上に本が一冊……これを読みながら待っててくれるのかな？
「はい。ありがとう、ハクちゃん」
「さあ、トリィ様。カイユと参りましょう」
カイユさんが私へと手を差し出した。
「……ぁ、あのっ」
これは。
お手をどうぞってやつですよね？
いいのかな？
前にハクちゃんは、カイユさんの首を絞めた。
もうあんなことは、嫌。
私がもっと、もっと気をつけなきゃいけない。
私の常識じゃなく、ハクの考えや思いを尊重しなきゃいけない。
「ハクちゃん、カイユと手を繋いでもいい？」
ハクちゃんを見たら、頷いてくれた。
「転ばれるより、マシだ」
「え？」
「祭りの日のように」
主語述語が無くても、彼の言いたいことが私には分かった。
花鎖のお祭りが終わった後。
戻ってきた温室でドレスの裾を踏んでしまい、私は盛大に転んだ。
「ハクちゃん……お願いだからもう忘れてよ、それ！」
間一髪でハクちゃんが首根っこを掴んでくれたけれど。
床に左膝をついたから、内出血して紫色になった。

見た目よりたいしたことなかったみたいで、寝る頃には治ってたけど。

……治るのが早すぎだと感じたけれど。

青痣の消えた膝を嬉しそうに撫でるハクちゃんの姿を見たら、そんなことを気にするのが馬鹿らしくなってしまった。

傷の治りが早いのは、いいことだもの。

「忘れろと？　りこのお願いといえど、無理だ」

ハクちゃんは右横にあった本をとり、膝に置いた。

「りこと過ごした今までも。りこと過ごすこれからも」

左手の人差し指で、真珠色の爪で表紙を一筋なぞり。

私を見ていた金の眼に、ゆっくりと目蓋が落ちた。

目元を飾るのは真珠色の睫毛。

金の眼を閉じて、ハクは言った。

「我がりこのことを忘れるなど、無理だ」

なぜ。

「どんな些細なことも、記憶していたいのだ」

なぜ？

今此ここで、それを言うの？

離れるのは少しの間だけなのに。

そんなこと、言われたら。

まるで。

もう、会えないんじゃないかって不安になっちゃうのに。

「……ハクちゃんは、ずっと私のことを覚えててくれるの？　百年

経っても、千年経っても？」

訊けなかった。

私がいなくなったその先も。
私が死んだ、その後も。
ずっとずっと。
絶対に、私を忘れないでいてくれるのって……。

「……りこが我を忘れても。我はりこを、覚えている」

私がハクを？
貴方を忘れることなんて出来ない。

「私がハクを忘れるなんて、そんなことない……」

切ない想いにぎゅっと掴まれた胸の奥から、絞り出した言葉は。

「りこの場合、無いとは言えぬ」

ばっさりと斬られて、散ってしまった。

「ひど……い。なんでそんなこと言うのよ！？　ハクは私を信じてくれないのっ？」
目の底が、熱くなった。
怒りではなく、悲しみで。
そんな私に、ハクは……。
「書いてあったのだ」
「は？」
文庫本を掴むと表紙を私に向け、嫌味なほど長い足を組み直しな

がら言った。
「りこ。この書物によると、人間の女は頭部を強打すると愛する男を忘れるらしいのだ」
「頭部？　この本って……『迷走の愛・記憶の金砂　第1巻』？」
これって、ロマンス小説？
「この本の女は転んで頭部を強打し、将来を誓い合った男を忘れる。そして別の男に言い寄られ、その男と郊外の別荘で交尾寸前の状況となる。だからりこも転んではいかんのだ」
ダルフェさん。
昼メロ系はやめましょうよ！
「……う……うん。でも、あのねハクちゃん」
恐ろしいことに、ハクちゃんの脳は実際あったことの記録として読んでますよ！？
「それは物語といいますか、作り話だよ？」
「ぬっ！？」
ハクちゃんのつり眼がさらにつり上がったけれど、気づかなかったことにした。

執務室へと続く回廊には全くひと気が無かった。
誰もいないのを幸いに、遠慮無く周囲を見回した。
聞こえるのは自分の足音と、外で鳴く鳥の声。
アーチ型の高い天井やそれを支える円柱が整然と立ち並ぶここは、ヨーロッパの古城とイスラムの建築様式が混じったようだっだ。
「カイユ、執務室までそれを持って行くの？」
ずっと気になっていたけれど。
カイユさんは左手に刀を持っていた。
ミー・メイちゃんとセシーさんに会いに行くのに、武器持参というのは……でも、はっきりとは言い難い。

カイユさんはお母さんの事があるから、どうしても過敏になっちゃうのかもしれない。
「トリィ様」
私の視線に気づいたカイユさんは、足を止めた。
「どうぞ」
いったん私の手を離し、そこに刀をのせてくれた。
「わわっ！？」
それは想像以上に重たくて、急いで両手で持ち直した。
「すごく重い……とても、綺麗。まるで美術品みたい」
朱色の鞘に、優美な柄。
細かな装飾が施された鍔には、真っ赤な宝石が４箇所に埋め込まれていた。
すごい……なんて濃く、深い赤色。
これって、もしかしてピジョン・ブラッド！？
たまたま入ったジュエリーショップで見たときは、あまりの高額に即効あきらめました。
「ええ。これは特別な物ですから……。この刀は結婚祝いに、赤の竜帝陛下が下さったんです」
結婚のお祝いに、刃物。
日本では縁が切れるってことを刃物は連想させるから、結婚のお祝いでは避けるんだけど。
竜族の社会は違うんだ……お祝いの品も実用本位ＯＫ？
う～ん、刀が実用っていうのもなんでございますが。
「トリィ様。ふふっ……こうして２人きりでお話する機会は、なかなかありませんでしたね。ヴェルヴァイド様ったら、トリィ様にべったりですもの。立ったままで申しわけありませんが、少しだけお話しませんか？」
「はい。カイユ」
見上げた先にある透明感のある美貌には、いつもと違う表情。
「カイユ？　どうしたの？」

私を見下ろすカイユさんの顔には、笑顔は無く。
「トリィ様が望まれるのなら、あの者達にお会いするのも仕方ありません。でも、できることなら貴女に人間を近づけたくない。私は人間が嫌いですから」
眼を逸らせないほど冷たく。
「貴女は私の手を微笑んで握り返してくれます。ですが私のこの手は、多くの人間を殺した手なんです」
ぞくりとするほど、冴えた水色の瞳。
「人間共は私を凶悪無慈悲な雌竜と恐れ、嫌悪します。それは私にとって最高の賛美。私は望んで刀を取り、喜びのなかで殺戮を行うのです。私は……カイユはそういう〝生き物〟なのです」
刀を握る手に、私は意識せず力が入った。
握った両手からは肌に吸い付くような感触と、その重さが伝わってきた。
口を開いても、言葉が出てこなかった。
何かを噛むように、顎が数回上下しただけだった。
「そのことで貴女を悲しませるは辛い。でも、それが私（カイユ）なんです」

言いたい。
言いたいのに。

「私を怖がってもいいんです。人殺しの竜だと嫌悪してくださってかまわない。でも、私が私（カイユ）であることを、悲しまないで」

カイユさんに、私の思いを言わなきゃならないのに。

「私にとってそれは当然であり、必然なのです」

言葉が。

「他者の首を落とせることが出来る『私』に生まれて、良かったと思っています。私は今まで多くの者の命を奪ってきました。そしてこれからも他者を傷つけ、殺し続けるでしょう。そして何時の日か、多くの者を屠ってきた私も強い者に負け、討たれる時が来るでしょう」

声が出ないの。

「それを、悲しまないで」

出たのは、涙。
この涙は。
何のためのものなんだろう？

「覚えていてください、トリィ様」

自分の為じゃない。
カイユさんの為でもない。

「この世にある心の数だけ、多種多様な善と悪があるのです」

ああ、そうか……。
この涙は。
涙なんかじゃない。

「覚えておきなさい、トリィ」

私の中で、何かが壊れて。

「貴女の母様は多くの人間にとって、忌まわしき者なのです」

私の中で。
また、新しい何かが生まれたんだ。

「この世には完璧な善も完全な悪も、そんな都合の良いものは存在しないのです」

カイユさんは。
母様は。

「竜族は人間より遥かに長く生きます。善だったものが悪とされ、悪だったものが善となるさまを目の当たりにし、過ぎたものを見送っていく……。私の考えは人として育った貴女には、受け入れられないものかもしれない。それでもいいの。心の隅にでも、母様の言葉を置いておいてくれれば充分」

私に、その何かを与えようとしてくれている。
私が持っていなかった、何かを。

「……トリィ。貴女がヴェルヴァイド様を愛するように、私はダルフェを愛しているの。先に逝くダルフェを選んだことに後悔などない」

この世界で生きる私に。
ハクを愛した私に。

「確かに共に生きられる時間は短い。だからなんだと言うのです？かわいそうだと、哀れだと？　冗談じゃありませんわ。それは私への侮辱。誰がどう思おうと、私は幸せなんです」

カイユさんの両腕が、私を引き寄せた。

「私は、カイユは幸せなんです」
包み込むように。
あたたかさを分け合うように。
「いいこと、トリィ。貴女の幸せは貴女が見つけ、何が幸せなのかは貴女が決めなさい。セイフォンの術士や死にぞこないの女将軍などには、貴女の幸せは分からない。もちろん、私にも分からない」
柔らかな胸に耳を押し付けると、心臓の音が微かな振動と共に伝わってきた。
それは子守唄のように、優しく響く。
「答えは誰にも分からない。貴女にしか分からないの。貴女の幸せは……私達の‘幸せ’は他の者や夫が選び、決めることではないのだから」
カイユさんは私の手から刀をとり、そっと床へ置いた。
体を離して再び見上げた顔には、少しだけ困ったような……澄んだ笑顔。
「ふふっ、竜の雄は本当に鈍くて駄目ね。いつまでたっても、雌の心を理解できないのだから。私がこんなにも幸せであると、つがいであるダルフェすら分かっていない。まったく、あの馬鹿にも困ったものですわ。私はお馬鹿で意気地なしのダルフェを、こんなにも……誰よりも愛しているのに」
不満げな口調とは裏腹に、ほんのりと頬が染まっていた。
「うん。そうだね、女心を察して欲しいよね」
私は足元に置かれた刀に手を伸ばした。
白く艶のある床石は、刀をいっそう美しく見せていた。
本物の刀は見た目以上に重いことを学んだので、もちろん両手で持ち上げた。
「はい、カイユ」
カイユさんに、それを手渡した。
綺麗な綺麗なこの刀は、大勢の人を傷つけ殺めた。
それを知っても。

綺麗だと思う心は変わらなかった。
「……ありがとうございます」
刀を受け取るカイユさんの銀髪が眩しいほどに輝いていて、私は眼を細めてしまった。
私達しかいないお城の廊下は、明かり取りの窓から陽が絶えず降り注ぎ。
それは天から伸びた光のリボンのようだった。
「行こう、カイユ。」
私から手を差し出し。
カイユさんが私の手に触れるのを待たず、手を握った。
「さすがにもう転ばないけど、繋ぎたいの。カイユと、母様と手を繋いで歩きたい」
朱と白。
「……トリィ。私の娘、異界から帰ってきてくれた私の可愛いお姫様」
白と朱。
それは悲しいほどに、互いを引き立てあうのだと知った。

「母様のように、貴女も」
刀を振るって命を奪うその手は。

「幸せに、なりなさい」
大好きな母様（カイユ）の。
優しい手。

白でも朱でも。

「……はい。母様」

大好きな。
母様の手。

第89話

「……っ」

ミー・メイちゃんのお人形さんのような可愛らしい顔は、私の顔を見た途端。

全てのパーツがくしゃりと中央に集まった。

「トリィ様！　私、お話したいことがっ」

腰掛けていたソファーから立ち上がり、私の方へと駆け寄ってきた彼女に答えたのは。

「下がれ、王宮術士」

木製のドアを開け、先に室内に入ったカイユさんだった。

伸ばされた左手を遮ったのは、煌めく銀の光。

「この子に近寄るな……手をひけ。さもないと、落とす」

多くの人を傷つけ命を奪いながら、カイユさんを守ってくれた刀。

ヒンデリンさんが私に剥き身の刀を見せたことを叱ったカイユさんが、私の前で躊躇い無く刀を抜いた。

「あ……なぜです！？　カイユ殿、私はこの方を傷つけたりしませんっ！」

温室で会った時と同じ灰色の長衣の美少女は、自分の胸の前で両手をあわせてぎゅっと握るようにして言った。

「あの女もそう言った」

カイユさんの声は冷たく、硬かった。

「あ……あの女？」

なんのことか分からず、戸惑う少女にカイユさんは言った。

「あの女も。私と父にそう言って母を私達から……父から奪った。人間の言うことなど、私も父も二度と信じない」

「カイユ殿、貴女は……」

よろりと数歩後ろに下がったミー・メイちゃんとカイユさんの間

に、ふわりと青い影が現れた。
「入り口でもめるな、カイユ。おい、おちびが困ってんぞ？」
竜体の竜帝さんだった。
「え、あのっ！」
急いでカイユさんの横に立った私には、青い鱗が鏡のような銀の刃に映っているのが見えた。
こんな状況なのに、久しぶりに見たその姿に目を奪われてしまった。
「カイユ、これは俺が預かる」
「……陛下」
青いおちび竜。
あぁ、なんてかわいいの……！
サファイアで作ったみたいな鱗は、なんともいえぬ美しさ……。
クロムウェルさんが絶賛するのも頷けます。
でも、私にはハクちゃんが一番綺麗でかわいいおちび竜です！
「ほら、よこせ」
青いおちび竜は、カイユさんの手から刀をちょっと強引に奪った。
「カイユ、鞘もよこせ」
「……」
カイユさんは無言のまま、竜帝さんに鞘を手渡した。
短い手で器用に刀を鞘へとしまいうと、竜帝さんはくわっと大きくお口を開いて言った。
「おちびっ、お前もやっぱ変態なのか！？　そんな目で俺様を見るな！　頬を染めんな！！」
へ、変態っ……？
「お前は全世界の鱗のある生物にとって、捕食者以上に物騒な存在だ！　この鱗フェチ！」
鱗フェチって仰いましたか、竜帝さんっ！？
鱗生物にとって物騒な存在なんて、言いすぎですと反論しようとしたら。

「ふふふっ……お2人はずいぶんと仲がよろしいのね」
ミー・メイちゃんの後ろから現れたのは、セシーさんだった。
セシーさんは車椅子に座っていた。
「刀持参で来るなんて。相変わらず凶暴ですわね、カイユ殿は。ふふっ、そのほうが貴女らしくて私は好きですわ」
胸元が広く開いた濃紺のドレスには、袖と裾に灰色のファー。
こぼれんばかりのバストの谷間に、銀の台座に飾られたターコイズのペンダントトップがはさまれていた。
……ハクちゃんがお留守番しててくれて、良かった。
「こんにちは、トリィ様。このような姿でごめんなさいね」
淡い色の金髪は結い上げられて上品にまとめられ、白いうなじがとんでもなく色っぽかった。
相変わらずの大人の色気に、同性の私もちょっとどきっとしてしまう。
「セシーさん、お久しぶりです。あんなにお世話になったのに、お礼を言わずセイフォンを出てしまってごめんなさい。あのっ、足のお怪我は……」
足はドレスに隠れていて、私からは足のどこに怪我をしているのかが分からない。
でも、きっと重症に違いない。
車椅子を使ってるぐらいだもの……。
セシーさんの座っている車輪のついたそれは、私の記憶にあるものより少し古めかしいデザインだけど私の世界のものとほとんど同じに見えた。
「そのことはお気になさらないで。怪我も問題無しです。ダルド殿下の命で大事をとっているだけですわ」
さすがに電動タイプじゃなくて、押してもらうか自分で車輪を動かすタイプの車椅子だった。
もしかして。
車椅子があるくらいだから、自転車もあるの!?

でも、街で自転車を見かけたことは一度も無かったな……。
「ミー・メイ、向かいの部屋で帰国準備をしていらっしゃるダルド殿下のところにいてちょうだい」
何かを探ろうと……見つけようとするかのようにカイユさんをじっと見ていたミー・メイちゃんは、セシーさんの言葉にすぐに反応した。
「閣下？　なぜです！？　嫌です、私はトリィ様に……カイユ殿の仰っていたことも気になっ…」

「お黙り！　竜帝陛下の御前で、これ以上セイフォンの恥をさらすな！」

容赦無い一喝に、灰色の長衣が揺れた。
「あ……か、閣下……も、もうしわけ……ご……ざ…」
小さな声が愛らしい口元からもれた。
その声は震えていて、語尾が散って消えていく。
「ねぇ、ミー・メイ」
真っ青になってしまった彼女に、声音をいつのものに戻したセシーさんが語りかけた。
「殿下にも言ったけれど、知らないほうが良いことも世の中にはあるの。知り過ぎたら、戻れない……貴女には、私とこの方の会話を聞かせたくない。貴女を私のようには、したくないのよ」
車椅子から腕を伸ばし、ミー・メイちゃんの右手に自分のそれを重ねて。
「閣下……」
セシーさんは、微笑んだ。
綺麗な笑みなのに、隠せぬ悲しみがそのふくよかな唇から滲むような……私の胸まで痛くなるような、悲しい微笑み。
「おいき、ミー・メイ。私とトリィ様のお話が終わったら呼ぶわ」
「はい、閣下」

でも、セシーさんの眼は。
両手を胸で交差させ、片膝をついて深々と頭をさげたミー・メイちゃんを見る紅茶色の瞳は。
とても優しいものだった。

「おちびはさっさと座れ。カイユ、お前はジリギエを迎えに行け。ついでにセレスティスのとこに寄って、これを渡してくれ」
「……」
青い竜の小さな手が返事をしないカイユさんの左手をとり、ピンクの紙袋を手渡した。
「セレスティスの好きな、四花亭のマシュマロだ。さっき買ってきた。俺様、昔からあいつになんにもしてやれなくて……」
あ。
竜帝さんはあれからいろいろ忙しかったはず。
時間が無くて、すごく急いでたから竜体でお買い物に行って……帰ってきてから人型になって、着替えるなんて時間がなかったのかも！
だから、竜体で……。
「カイユも……いろいろ、すまない」
ハクちゃんと同じ４本指の手が、カイユさんのすらりとした指をぎゅっと掴んだ。
「カイユ……俺っ」
宝石のような青い瞳が、カイユさんを見上げた。
「陛下。カイユに【約束】をしてください」

凛とした声が、小さな竜の動きを止めた。
「青の竜帝＜ランズゲルグ＞は、いかなる時も私の娘を守ってくださると。何者からも、あの子を守ってくださると、カイユと約束してください」
真っ青な眼が、これ以上はないというほど見開かれ。
「カイユ、お前っ!?　名を口に……俺を……俺は……ヴェルがっ……だからっ」
詰まった言葉には、隠せないほどの驚愕と戸惑いが……。

「貴方と共に育った私に、最初で最後の【約束】をしてください。陛下」

重ねられた言葉に、青い竜はかたく眼を閉じて。

「……分かった。俺はカイユと【約束】をする」

握っていたカイユさんの指から、ゆっくりとその手を離した。
カイユさんはうなずき、竜帝さんから刀を返してもらうと私へと視線を移して言った。
「トリィ様、私はこれで失礼します。陛下もこれからは貴女を守ってくださいます。陛下が【約束】してくださいましたから、この場にいる誰も……誰も貴女を傷つけることは出来ません」
小さな子供にするように、私の頭を撫でながら言うカイユさんはとっても嬉しそうだった。
「これで、大丈夫。何があっても、貴女が何をしても。陛下は貴女を……あぁ、これで安心して私は……」
細められた目には、うっすらと涙が……。
私はあわてた。
「カイユ、どうしたの!?　ここには私を傷つける人なんかいないのよ?」

カイユさんは心が不安定なのに。
今日はお父さんとお母さんのことで、辛い思いをしたから……！
「私はいつだって、大丈夫！　皆もハクちゃんもいてくれるんだもの……だから、安心していいんだよ？　カイユはジリ君をお迎えに行ってあげて……母様、私は大丈夫」
大丈夫と言いながら。
私は不安でいっぱいだった。

カイユさんが。
母様が。

いつの日か。
私の前から……。

「母様、私は大丈夫！　……大丈夫」

この『大丈夫』は自分に言ったものだった。
長命種である竜族、そしてとっても強いカイユさんがいなくなるなんてことは無いはずだ。
私のほうが先に寿命がくる。
私が置いていかれることなんて、無いはずなのに。
カイユさんの言葉が、頭の中で何度も浮かぶ。

ーー何時の日か。多くの者を屠ってきた私も強い者に負け、討たれる時が来るでしょう。

そんなの、だめ。
絶対、いや。

「……大丈夫」

ワタシ　ノ　母サマ。
ワタシ　ノ　母サマ　ヲ　イツカ　ダレカ　ガ？
ユルサナイ。
ゼッタイニ　ユルサナイ！

「大丈夫、大丈夫」

この身体の中で、泣き叫ぶ怪物にも言い聞かせるように。
何度もその言葉を繰り返した。

第９０話

カイユさんがジリ君を迎えに行き、ここにいるのは私と竜帝さんとセシーさんになった。
竜帝さんは青い爪を持つ指で窓の側にあるソファーを指しながらここに座れと私に言い、その向かいのソファーの背凭れの上に青いおちび竜がちょこんと座った。
セシーさんが車椅子で移動するのを自分が座る前に手伝おうとしたら、はっきりきっぱり断られてしまった。
「私にお気遣い無用ですわ。さあ、お座りください」
彼女はは車椅子の車輪を慣れた様子で操り、話がしやすいように竜帝さんが示したソファーの傍へと移動してくれた。
「……トリィ様。私に訊きたいことってなんですの？」
ソファーに座ると同時にセシーさんらしからぬ強張った顔でそう言われ、とても困ってしまった。
「あ、あの」
うう、なにこの微妙な空気！
訊きたい事っていうのは、よくよく考えるとたいした事じゃないというか……。
「ほら、言えよおちび。あんまり時間かけてっと、じじいが痺れ切らしてここへ来ちまうぜ？」
短い足をぷらぷらさせてる竜帝さんはとってもラブリーだった。
でも今はそんな彼に見蕩れている場合じゃないことぐらい、私にも分かっていた。
「あの、セシーさんはハクちゃ……＜監視者＞が人型になれるってことを、知っていたんですね？」
セイフォンの竜宮でハクちゃんが人型になることを知ってから、ずっとこのことが気になっていた。
これは私には大問題だったけど……わざわざミー・メイちゃんに

席を外してもらうような重大で深刻な内容じゃない。
ただ、ちょっと私が恥ずかしいだけで……。
「やはり、その件でしたか。ミー・メイを下がらせて正解でしたわ」
「え？」
セシーさんの言葉は、私が想像していたものとは違った。
竜族が竜体と人型を持ってるのは、この世界の人にとっては常識なんじゃ……。
紅茶色の瞳が細められ、なにかを思案するかのように目線を床へと落ちた。
「確かに竜族が人型を持つことは広く知られています。ですが＜監視者＞について、今の時代の人間はあまり知らないのです。表向きは、ですが」
表情を柔らかなものに変えたセシーさんは、視線を私へと戻した。
金髪に飾られた妖艶な美貌に、笑みが浮かんだ。
その微笑みはどこか意味深で……私は彼女が次に何を言うのか、ちょっとだけ不安になった。
綺麗に整えられた爪を持つ指先で、額にかかる髪を優美な所作ではらいながらセシーさんは言った。
「お察しの通り、＜監視者＞が他の竜族同様人型を持っていることも、人間の女性と性交が可能だということももちろん知っていましたわ」
せ。
せいこう？
性交！？
「お、おいセシー！　もっと他に言い方ねぇのかよ！？　婚姻関係とか……はぁ～、年増といえ未婚の女がよぉ～。せめてもうちょっと恥らって言えないのかよ？」

竜帝さんの突っ込みに、セシーさんは笑みを深めた。
「ここで恥じらっても一文にもなりませんもの。私の恥じらう姿がご覧になりたいなら、陛下の私室でお見せしてもいいですわ。ふふふ……クロムウェル殿に遠慮なんてなさらないで、チャンスですわよ？」
「ぶっ！　恥じらうお前なんか見たかねぇっ！　それに俺様がクロムウェルに遠慮って、なんだよそれ！？　俺様とあいつの関係はただの雇用関係だ！」
竜帝さんは短い足をばたばたと動かし、激しく抗議したけど……え～っと、その焦りようが逆に……。
「あら？　クロムウェル殿は青の陛下の愛人なのでしょう？」
「だぁああ！　なんでそんなことになってんだよ！？　冗談でもそんなこと言うな！」
背凭れから前のめりに落ちた竜帝さんは、叫びながら藍色のソファーの上でごろごろと転がった。
「冗談なんかじゃありませんわ。色仕掛けでクロムウェル殿をアンデヴァリッド帝国から奪ったという逸話は、あまりに有……」
「それ以上言うなっ！　ぎゃぁあああ～！　なんで、どこからそんなデマがぁああ～！！」
セシーさんと竜帝さんの微妙なやりとりも、私の耳から耳へと抜けていった。
私の頭の中はお祭り騒ぎで、花火があがっていた。
なんでセシーさんは、そんなずばっと言っちゃうのですか！？
人型→人間とお付き合い可能→結婚できるんですよ！
そんな感じでお願いしたかったのです。
「セ、セセセシーさんっ！　あの、そうじゃなくてっ、言いたかったのは、聞きたかったのはっちちちがっ！」
ああ、今の私はきっと顔面茹でタコに違いない。

知らなかったから最初からお風呂も一緒に入っちゃったし……まあ、人型になれるって知ってる今だって竜体のハクちゃんと入ってるけど。

カイユさんやダルフェさんが人型について口にしなかったのは、竜族である彼等は蜜月期の雄の特性を熟知しているためだった。

ーーーいずれなるようになるもんだ。そうなっただろぉ？

なぜセイフォンで言ってくれなかったのかと訊いた私に、ダルフェさんはお得意のウィンクをしながらそう答えてくれた。

竜族であるダルフェさんはそう言ったけれど。

「な、なんでセイフォンで教えてくれなかったんですかっ!?」

なんでセシーさんまで教えてくれなかったのか、ずっと不思議だった。

「なぜって……そのほうが面白いからですわ」

思わず立ち上がって言った私に返ってきた声は、面白いという言葉が似合わないほど低く沈んだものだった。

「……セシーさん？」

「トリィ様。私は＜魔女＞なんです」

セシーさんは両手を膝におき、ふっと息をはいた。

「魔女？」

魔女。

急にそう言われても、私には話のつながりが見出せない。

ハクちゃんの人型のことから、なんで魔女？

私は魔女……セシーさんが魔女!?

「術士とはいえ、これは普通の人間であるミー・メイが知る必要の無いことであり、知って欲しくないことなのです……ふふ、魔女ってご存知かしら？」

魔女って。
魔法を使ったり箒に乗って飛べる、あの魔女？
竜がいるんだから、この世界には魔女がいるって言われても「そうなんだ～」って感じですけれど。
「そのお顔……やはり、まだ魔女をご存知ありませんでしたか。陛下、私の口からでもよろしいかしら？」
短い両手を突っ張って、むくりと起き上がった青いおちび竜はくわっとお口を開いて言った。
「かまわない。あのじじいはおちびに話さなかっただけで、意図して教えなかったわけじゃないからな……多分」
竜帝さんの言葉にうなずき、セシーさんは話し始めた。
「魔女はこの世界の『記憶』であり『記録』。私が死ねばそれがこの世界の誰かへと移り、その者が魔女となるのです。術士のように生まれつきのものでも、望んでなるものでもありません」
「魔女は……移る記憶……記録？」
この世界の魔女は、私の世界の魔女とは全く違うんだ……。
前にハクちゃんがそんなようなことをちらっと言ってたけど、私には意味がさっぱり分からなかった。
「私は代々の魔女の知識を受け継いでます。ですから人間社会では一部の者しかしらぬとされている事を……＜監視者＞が＜ヴェルヴァイド＞であり、竜族同様に人型へと変化する存在であることも知っていました」
じゃあ。
竜族では誰もが知っていることも、人間には知られていない……＜監視者＞が＜ヴェルヴァイド＞ってことも？
「私はさきほど面白いからだと言いましたが、少し違います……私はあの方が苦悩するさまが見たかったのだから」
「苦悩……セシーさん？」
セシーさんは膝においた手を、ぎゅっと握った。
「ヴェルヴァイド様は貴女を傷つけるのを恐れるあまり、竜体のま

ま過ごされていた。幸いにも貴女の教師役を予定通り手に入れましたから、間近であなた方を観察することが出来ました」

教師役を予定通り……観察？

「あの＜監視者＞が、＜ヴェルヴァイド＞が！　あの方が貴女に自由に触れたいのに触れられず苦悩して、小さな竜の姿で幼子のようにふるまって……ふふっ。あの方らしからぬ姿が日々見られて、私は大満足でした。もっと、もっと貴女に恋焦がれ、理性と本能の狭間で苦しめばいいと思いましたわ！」

自嘲するかのような笑みは、セシーさんに似合わなかった。

「セシーさんは」

膝で握られたその手は、『将軍閣下』の手とは思えないほど綺麗な手で。

セイフォンでもここでも。

彼女の爪は可愛らしい桃色に塗られていた。

はじめてみた時に、意外な色だと感じたことを思い出した。

「セシーさんはハクを、＜監視者＞を憎んでいたの？」

私の言葉に、セシーさんは首をふった。

「いいえ。そうではなく……逆ですわ」

逆？

それって……。

「私が＜監視者＞が人間と関係を持てるのだと知っていたのは、受け継いだ知識によるものだけでなく……その場にいた【記憶】があるからです」

「その場って……い……た？」

それって、まさか！？

立ち上がっていた私の身体から力が抜け、すとんとソファーに吸い込まれた。

分かっているつもりだった。

ハクは人間の女性の扱い方を知っているって、カイユさんもはっ

きり言ってた。

「私の中の＜魔女＞はあの方を」

それが普通で当たり前のことだって、割り切ったつもりだったのに。

つもりだっただけだって、思い知った。

「＜ヴェルヴァイド＞を」

未来のハクだけじゃなく。

過去のヴェルヴァイドも。

独り占めしたいなんて。

なんて無茶苦茶で、身勝手な私。

「あの方を、愛していたのです」

ハクちゃん。

ハク。

私のこの醜い嫉妬心も。

貴方はその小さな白い手で、そっと包んでくれますか？

小話　～白いひと～

白い人。

腰まで届く、真珠色の長い髪。
つくり物みたいな、肌の色。

この人は怖い。
なんか、とっても怖いんだ。

どこが怖いっていうんじゃなくて。
全部が怖い。

だから今までは、遠くからしか見たことがなかったけれど。
近寄らないようにしていたんだけど。

今日はとっても気になった。

だから勇気を出して、声をかけてみた。

「あのっ……」

もう夕方なのに、朝見た時と同じ場所に。
まだ、そこにいた。

今朝、窓の外から見えた白い人が、まだそこにいたから。
思い切って。
逃げ出したい思いを、踏みつけて。

ピンク色に染まった後ろ姿に、話しかけてみた。

「ずっと、ここにいたの？」

白い人は、白くなくて。
白い髪も、白い服（レカサ）も。
夕焼けと同じ、ピンク色になっていた。

「……あの、そのっ」

幼竜の僕でも、腕を伸ばせば届く距離まで近寄ってるのに。
返事が無いどころか、背を向けたままでぴくりとも動かない。
これって、無視！？

「ねぇ、おじさんは……」

ここでずっと何してるのって、言う前に。

「変わるさまを」

お腹と後頭部にずんとくるような、深い声が聞こえた。

「え？」

白いおじさんが、しゃべった！？

「紅から薄青」

あ、わかった。
それって、花の色の変化だ！

「もしかして、昨日の夜からずっとここで立って見てたの!?」

この人が立ってるのは、アゼンチカの前だ。
アゼンチカはママが大好きだから、城のいろんな場所に植えてある。

「そんなに気になるならその枝を切って、部屋で観察すればいいのに!」
「なぜだ?」

え?
いっぱいあるから、誰でも自由に切って持ち帰っていいってことになってるし……。

「なぜって……そのほうが観察が楽でしょう? 僕が切ってあげようか? 部屋に持っていって見ればいいよ」
「なぜだ?」

なんで、また『なぜだ?』なの!?

「……僕、あなたのなぜの意味がわかんないよっ」

ちょっと、むっとした。
僕、親切で言ってるのに……。

「我は死なん」

突然、なに?
え〜っと……この人、死なないの?

「千年ここに立ち続けても、何も変わらない」

変わらない？

「ゆえに」

変わらない……変わらないこの人が見てたのは。

アゼンチカの花の、色の変化。

「我はお前の‘わかんないよ’が分からんのだ、＜赤い髪＞よ」

変わらないモノと、変わるモノ。

「そっか……うん、そうだね。その花は2晩でしおれちゃうから、切ったらかわいそうだよね」

横に並んで。

袖からにょきって出ている大きな右手に、左手でそっと触った。

「あのね。僕、ママとパパより先に死んじゃうだって」

その手は僕の肌より白くて、真珠で作ったみたいな綺麗な爪を持っていた。

「僕は＜竜帝＞の出来そこないだから。他のみんなみたいに、長く生きられないんだって」

冷たい手だった。

パパが作ってくれた、アイスクリームみたいだった。

お墓に入る時のガルガンデおばあちゃんの手より、冷たい手だった。

「僕はそれがすごく嫌で……とっても、とっても怖いんだ」

見上げた先にあったのは、底の見えない黄金の瞳。

「ガルガンデおばあちゃんが言ってた。……生も死も……『世界』って不平等なんだって。ねぇ、そうなの？　＜ヴェルヴァイド＞」

あたたさも冷たさも。

「不平等？」

なんにもない、金の目玉がゆっくりと動いて僕を見た。

「……不平等、か？」

それは花を見る目と同じ目で。

「さあな、我にはどこが不平等なのか、わかんないよ、なのだ」

同じ目で。

赤の竜帝のママを見るときと、同じ目で。

僕を見た。

「わかんないよなのだ！？　あははっ、あなたが言うとおもしろいねっ！　そんな賢そうな顔してるのに……ねぇ、本当はちょびっとお馬鹿なの！？」

同じ目で、見てくれた。

「お馬鹿？　ふむ、我はお馬鹿なのか」

「賢くなるには、ご本をいっぱい読むといいって黒のおじいちゃんが言ってたよ？　ご本、持ってるの？」

花の色はゆっくりと時間をかけて、今夜も変わるから。

この人は、明日の朝もここにいるんだろう。

「ご本？　……無い」

この先も。

この人は。

花を手折らず、見続けるんだろう。

「え～っ！？　そうなんだ。じゃあ、僕はいっぱ～いご本持ってるから、貸してあげる！」

ねぇ、ヴェルヴァイド。

永遠も一瞬も。

その金の眼の前では、同じなのかもしれないね。

小話　～白いひと～（後書き）

＊この小話はブログからの転載です。

小話　～赤いひと～

「おい、ヴェル！」

姫さんがシスリア嬢のところでお勉強中に、陛下が温室にやってきた。

その美貌に見慣れた俺でも思わず見惚れてしまうような笑みで、陛下は言った。

「じじい。俺様、名案があるんだ！」

「……」

旦那は『お宝』を白い手で握ったままベンチに座り、陛下を見ようともしなかった。

旦那ぁ～っ、陛下がこんな顔すんのはあんたにだけって分かってないっすね？

う～ん、クロムウェルにも見せてやりたいなぁ。

あいつは心底、陛下に惚れている。

減るもんじゃなし、冥土の土産に一回くらい寝てやりゃいいのに。

男の相手は嫌だって陛下の気持ちも分かるが……俺にとってはしょせん他人事だしな。

「こっちむけ、無視（シカト）すんな！　返事しろじじいっ！！」

陛下は旦那につかつかと歩み寄り、青い爪を持つ両手で白い頭を無理やり自分へと向けさせた。

こういうとこ、陛下はすげぇ。

母さんも竜帝だが……陛下と旦那のような感じじゃねぇもんなぁ～。

「ったく、じじはこれだから困るぜ。聞こえてんだろう？　いい歳どころか世界最高齢の大人として、返事くらいしろよ」
「……」
乱暴なそれにも、旦那が怒る気配はない。
「あ。そうだヴェル！　こないだもおちびにそのっ、え～っと……無理させただろう！？　朝っぱらから何やってんだよ……シスリアの授業に遅れてもヴェルは気になんねぇだろうが、普通は……おちびは気にするんだぜ？」
姫さんのことをだされると、旦那は視線を陛下へと向けた。
「……その件は我も反省し、後日自ら反省部屋に入った」
あのねぇ陛下。
旦那は蜜月期の雄竜なんだぜ？
それを考えれば姫さんへの旦那の接し方は、蜜月期を経験した俺からみりゃ満点以上の評価なんだがなぁ。
陛下は蜜月期の雄を頭で知識として知っていても、本当の意味ではまだ理解していない。
そのうちつがいが現れれば、旦那の理性の強さに土下座するんだろうな……。
「反省部屋？　なんだ、それ？　ダルフェ、それって城の何処の事だよ？」
結い上げた真っ青な髪が、俺へと振り向く動きにあわせてさらりと流れた。

俺の名を呼んだ唇は紅を塗らずとも艶やかで、形の良い白い歯がその隙間からのぞき……不必要な色気を無自覚に撒き散らす若き竜帝の問いに、俺は笑顔で答えた。

「鍋っすよ、鍋」

人間は＜監視者＞を恐れるが、竜族は＜ヴェルヴァイド＞に人間のように過大な恐れを抱かない。

俺達は知っているから、知っていたから。

＜ヴェルヴァイド＞が『怒る』ということが出来ないことを。

俺達のような『心』を持てない存在であるということを。

俺、餓鬼ん時に「おじさん」とか「お馬鹿なの？」とか他にもいろいろ言ったが、一度だって旦那は怒らなかった。

ま、姫さんとつがいになった旦那は怒るどころか……恐ろしい事に、微笑むなんて高等テクニックまで使うようになったけどなぁ。

この人、姫さんがいねぇと今でも感情が動きにくいっつーか……。

「鍋？　……そういや、セイフォンでおちびが鍋にじじいを寝かせてたな。ふ～ん、煮炊き以外にも幅広く鍋を使うんだな。かぼちゃで魔除けを作ったり、家族を豆責めにしたり夫の形をしたチョコを食ったり、異界の文化っていろいろと面白いなダルフェ」

「そ～ですねぇ。面白いですね」

俺は陛下の勘違いを訂正せず、全て肯定してさしあげた。

なぜなら。

そのほうが面白いから。

「あのな、ヴェル。ヴェルはその変なふ……じゃなく、パジャマが上手く着れないんだろう？」

「……お前には関係なかろう」

あ。
陛下、変な服って言いそうになったな。
姫さんのいないとこでそんなこと言ったら、また仕置きされちまうますって（汗）！

「まあ、聞けって！　俺が竜体になってそれを着てみるから、じじいは見て真似ればいいだろう！？　似たような身体なんだしよ」

あぁ、なるほどねぇ～。
花鎖の祭りの時に知ったっけなぁ、旦那は模写が出来るって。
ま、応用がきかねぇみたいだから、あんま使えない能力だな。
ん？
能力じゃなくて、中途半端に良い記憶力か？

「我にお前の動作を真似ろと？」
「そうだ。こっちの方法の方が簡単だろう！？　さっすが、俺様！頭良い～っ」

陛下は喜色満面な体で、両手をぶんぶんと振り回した。
女神のような美しい容姿をしていながら、この人は未だに幼い子供のようだ。
＜ヴェルヴァイド＞の前では、竜帝でなく＜ランズゲルグ＞になっちまう。

「断る」

自分の思いつきを名案だと浮かれていた陛下を、冷め切った声が容赦無く。
善意も厚意も切り捨てる。

「お前を模写してぱじゃまを着れるようになろうと我は思わんし、思えん」
「でも、ヴェルッ……」
「それはずるというやつではないのか？」
短い足を折り正座をした旦那は、赤い格子模様のそれを両手を使って丁寧に畳んだ。
「第一、我はすでに自力で着ることが出来るようになっておるのだぞ？」
陛下の青い目が1．5倍になり、だらしなく半開きなのにそれが逆に色香を増してしまう口からは間抜けな声がこぼれた。
「へっ？！」
「で？」
先程以上に冷たい声が、温室を極寒の地へと変えていく。
「で、って何だよ？」
答える陛下の顔は、ふてくされた子供のようだった。
さっすが陛下、旦那の冷気に慣れ過ぎて危機感が持てないんだなぁ～。
気の毒っつーか、なんつーか……。
「で。先程お前はりこの我への愛の証であるこのぱじゃまを、なんと言おうとしたのだ？」

あらま。
旦那、意外と地獄耳！
「げっ！？」
「思考を読むまでも無いな。仕置き決定だ」
パジャマをベンチにそっと置いてから、白い竜は指の関節ををコキコキと……。
それを見た美し過ぎると評判の青の竜帝は、俺に向かって叫んだ。
「ダダダダッ、ダルフェ！　急いでおちびを連れて来いっ！！」
「こりないねぇ、陛下も……はいはい、了解っす！」
俺は姫さんを呼びに行くために、廊下へと飛び出した。
湧き上がる笑いを抑えきれず、にやけた顔のまま大理石の床を駆けた。
「ぶっ……ぶはははっ！　笑いすぎて腹痛っ！」
姫さんと居る時の＜ハク＞もいいけれど、陛下と居るときの＜ヴェルヴァイド＞もかなり面白いと思えるようなった。
この妙に可愛らしい性格をした＜青の竜帝＞がいるこの大陸を去るのがかなり残念だと、最近の俺は思ってしまう。
「ははっ！　くくくっ……ったく、あの2人はなんつーか、妙にいい感じなんだよねぇ」
白い竜に甘える若き竜帝にふと餓鬼の頃の俺を重ねてしまうのは、この2人の姿をどこか懐かしく感じるのは。
天上の女神のように美しいのに照れ隠しのためか乱暴な口をきく、

穏やかで優しい＜青の竜帝＞との別れの時が近いからだろうか？

「……ははは……ぐっ！？」

何かが咽喉をせり上がる感覚に、咄嗟に口元を押さえた。

「……っ」

咥内に満ちたそれは、指の間から床へと落ちた。

「……ちっ」

分かりきってるその色を確認する気にもなれず。

俺は足で踏みつけた。

「俺の予定より、早いな……」

俺は祈らない。

神など信じない。

望みを。

俺の願いを叶えるのに必要なのは、不確かでいんちきくさい神様なんかじゃなく。

「……まだ、大丈夫だ。俺は大丈夫だよな？　カイユ……アリーリア……アリーリアッ」

必要なのは。

この俺自身だと、知っているから。

第９１話

「あの方を、愛していたのです」

ハクの。

ヴェルヴァイドの過去を。

彼のいないここで聞く、私は卑怯？

だって。

知りたい。

どうしようもなく、あの人を愛してるから。

「先代魔女はサーテメルンという小さな国の巫女でした。彼女は受け継いだ魔女の記憶を知識として最大限に利用し、巫女王……統治者となりました」

車椅子に座るセシーさんの視線を感じていたけれど。

私は顔をあげることが出来なかった。

彼女の綺麗な紅茶色の瞳を、しっかりと見ることが出来なかった。

「……その人が」

なぜ出来ないのか。

分かってるだけに……そんな自分が嫌だった。

これは。

焼きもちなんて、可愛い感情じゃない。

もっと深くて暗い、底の見えない独占欲。

顔も上げられない弱虫のクセに。

それでも聞いてしまう私は、ずるい。

「恋人、やっぱりいたんですね……。うん、それが普通ですよね」

言ってから、後悔した。

ハクの恋人。
頭の中に浮かんだそれが音となって、自分の耳に入り込んだから。
ハクの……ヴェルヴァイドの恋人。
それは聞きたくない、言葉。
でも、知りたい言葉。
『恋人』という言葉は『夫』という言葉よりなぜか。
身体の奥に、甘い響きを持つのだと知った。
「セシー。誤解されるような言い方はよせ。あのな、おちび。ヴェルには世間で言うような『恋人』なんかいたことねぇよ。そもそもあの腐れじじいの頭の中には、恋人とっていう枠が無かったっつーか……肉体かんけ……じゃなくって、え～っと、つまりだなっその、あの、あああああい……愛人？　いや、そうじゃなくて、いわゆるヒモ？　ヒモ、うん、じじいはヒモだっ！」
竜帝さんは青い目を天井に向け、左右に忙しなく動かしながら言った。
言いながら小さな手をぎゅっと握り、自分の膝をぽこぽこ叩いていた。
そのなんとも言えぬ愛嬌のある姿に、古い床板のようにみしみしと音を立てていた私の心が落ち着きを取り戻す。
「あのじじいは、魔女とは絶対にしない。本人がそう言ってんだぜ？　嘘をつくなんて高尚なこと、基本的にはヴェルにできねぇし……だから周りがもめるっつーか、被害を受けるっつーか」
「じゃあ、先代の魔女だった巫女王っていう人は……」
私がセシーさんに顔を向けると、華やかで妖艶な美貌には苦笑が。
「ええ、お察しの通りです。彼女は＜監視者＞の寵を得ようとあらゆる手を尽くしましたが、一度としてヴェルヴァイド様は彼女とは関係を持ちませんでした。……サーテメルンでは＜監視者＞と交われば不老や長寿を得られるという、他国ではすっかり廃れた古い言い伝えが残っていたんです。それが彼女を苦しめ、追い詰めることになりました」

その笑みに滲むのは、隠しようも無い……哀しみ。
窓から差し込む陽をうけて、柔らかな金の髪が艶を増して輝く。
輝きが増すほどに哀しみの色は濃く、切なさを感じさせるものへと変化した。
「……不老と長寿？」
「そんなのは迷信だ。じじいとやって不老長寿になれるなら、おちびはとっくになってる。だからヴェルが……ま、この問題は俺様が今此処でどうこう言うべきじゃねぇな」
竜帝さんは尻尾をゆらゆらと揺らしながら言った。
「はぁあ～……ったく。ダルフェの奴、でしゃばりやがって……」
天井に向けられてた目をつぶり、大きな溜め息をついた。
つぶやくような小さい声には乱暴な口調なのに力が無く、心底困ったような……あれ？
今、ダルフェさんって言ったよね？
「竜帝さん、ダル……」
「トリィ様」
「え？」
竜帝さんにダルフェさんのことを尋ねようとした私は、セシーさんの突然の行動によってそれを中断することになった。
セシーさんの右手が私の髪をそっと掴んだから。
「セシーさん？」
彼女は車椅子から立ち上がっていた。
右腕が私へと伸ばされ、濃紺のドレスの袖を飾る銀の透かし細工のブレスレッドが煌めく。
その冴えた輝きは、ミーメイちゃんに向けられたカイユさんの刀を私に思い出させた。
「不老長寿を得たいがため、＜竜宮＞へと忍んでくる者達が……女も男も多くいました。ですが女で拒まれたのは、魔女である巫女王だけ……」
＜監視者＞と交わると不老長寿になれるという迷信。

不老長寿を得たいがため、＜竜宮＞へと忍んでくる人達がいて。
その女性達を、ハクは。
その女性達は……ハクと？
「それは気位の高い彼女にとって、耐え難い苦痛となり……ヴェルヴァイド様に恋焦がれた彼女はその欲念のまま、自分と容姿の似た女を＜竜宮＞に集めたのです」
ハクは。
巫女王以外は……。
拒まれたのは、先代魔女だけ。
「目鼻の形……顔の作り、髪や目の色や声。自分と一つでも共通点がある女達を、国中から集めました」
理由は、魔女だから。
彼女は恋焦がれ、拒まれ……似た女性を？
それって。
それって、つまり。
「セシーさ……」
「ふふっ。巫女王はその女達と過ごすヴェルヴァイド様を、日々眺めていたんです」
「……眺め？」
セシーさんの言葉が。
「ええ、すぐ傍で……手を伸ばせば触れられるほど近くで。彼女は飽くことはなく、それを繰りかえしました」
耳から入って、私の胸の中をゆっくりと這い回る。
「彼女は非常に激しい性格でした。嫉妬心を抑えられず、やがて身代わりにした女を殺害し始めました。身代わりにしては殺し……そうせずにはいれぬほど、一人の男としてあの方を愛していたのです」
「……身代わり……殺し……そんなこと、そんなっ」
額にかかる金の髪を長い指で払った後、その指先は胸元を飾る宝石へと移った。
優しく撫でるように指先を青い石の曲面を滑らせる仕草は、思わ

ず目を逸らすほど……優雅で妖しい。
「貴女は愚かな女と先代を軽蔑されますか？　それとも哀れみますか？　……トリィ様は先代が狂うほどに欲したあの方を得られた。その貴女は、彼女をどう思われるのでしょうか……」
「わた……し？　私は……」
巫女王。
先代の魔女。
彼女は自分と似た女性といるハクを見て。
その女性を『自分』にして……自分ではない『自分』に嫉妬して、殺してしまうほど愛していたの？
「っ、なんだよそれ!?　人間は同族をそんなくだらない理由で簡単に殺すんだ！　なんでなんだよ!?俺様には理解できねぇよっ！」
吐き捨てるように言う竜帝さんと違って。
私は。
私には。
「私は……」
その人の気持ちが。
「……ハクはその人を止めなかったの？」
分かる。
分かる、気がする。
以前の私だったら理解できない、その強い想い。
今の私には。
ハクと出会った私には……。
「たくさんの女性が犠牲になってるって、ハクは気がつかなかったの？」
巫女王を責める資格が、私には無い。
私、あの時。
竜帝さんの薬草園で。
世界を見捨てて、ハクを選んだ。
カイユさんのこともダルフェさんのことも、竜帝さんのことも。

この世界の人達全てを、見捨てた。
私には、ハクだけでいいと……。
「さぁ、どうでしょうか？　知っていたとしても、気になさるような方ではありませんから。トリィ様、貴女の思っている以上にあの方は……あの御方はっ」
「セシーさん？　きゃっ！」
「セシー！？」
私の髪を掴んだ手に力が加わり、強い力で引っ張られた。
セシーさんはそのまま私を引きずり上げ、息がかかるほど顔を寄せて言った。

「あぁ、あの御方は何故っ！　何故お前のような者を選ばれたのか！？」

セシーさんの紅茶色の瞳が見開かれ、瞬きもせず私を凝視した。

「わた……くしが、こんなにも……こんなにもぉおおおおお、巫女王であるわたくしがぁあああああっ！　こんなにも愛してっ……なのに、なのにぃいいいいい！！　異界の邪人などに渡すものかぁあああああっ！！」

「ひっ！？」
狂気としか言いようの無いその目と言葉に、私は驚きとそれ以上に恐れを感じて身体が石のようになってしまった。
「お前もあの下賤な女達のように、わたくしのこの手でっ！　くびり殺してやるぅうううっ！！」
セシーさんは両手で私の頭を髪ごと掴み、そのまま床へ投げ捨てた。
絨毯の柔らかな感触を頬に感じると同時に、わき腹に抉るような痛みが走る。

セシーさんは私のわき腹を右足で踏み、そこをさらに捻じるようにしながら……。

「っ！？　セシーさんやっ、やめっ！」

血走った目。

違う生物が彼女の白い肌の下で這いずり回ってるかのように、妖艶な美貌を凄惨なものに変えながら青筋が蠢く。

それはセシーさんの顔中に広がり、首や胸元までも覆い始めた。

その異様な姿を間近で見て、身体の芯から恐怖心が一気に湧き上がる。

「い、いやぁっ！　ハッ……んんっ！？」

脳と口が同時に動いた私の顔を、小さな青い竜が全身で包み込む。

「やめろっ、おちびっ！　ヴェルを呼ぶな、セシーが殺されちまう！」

「！！」

竜帝さんに言われ、ハクを呼ぼうとしていた自分に気がつき、そんな自分を止めるために歯を噛み締めた。

呼んだら駄目！

駄目！！

竜帝さんがいてくれるんだから、絶対大丈夫っ！

カイユさんと約束してくれたものっ。

ハクを、あの人を呼んじゃ駄目っ！

薬草園を何も無い『白界』に変えた。

子供が欲しいと泣き喚いた私に、世界中の男の人を殺すと言った。

寂しがりやで泣き虫で真っ白なあの人を、私が＜魔王＞にしてしまう。

だから。

駄目。

私があの人を呼ぶのは、今じゃない。

私は。

居間でロマンス小説を真面目な顔して読みながら、私が呼ぶのを待っててくれるあの人の。
呼べば直ぐに迎えに来てくれて、「我のりこ」って言ってくれるあの人の腕の中に。
笑顔で、帰るんだから。

「＜青の竜帝＞を舐めやがってっ！　《失せろ、亡霊！！》」

部屋の中の空気が一箇所に圧縮されるような、この部屋自体が押し潰されるような有り得ない感覚に、私は目を開けていられなくてぎゅっと瞑った。
同時にどすんという鈍い音と、振動。
「ったく、あの女が出てくるなんて……。おちび、どこか痛むか？」
私を気遣う穏やかな声音に合せるように、凝縮した空間がふわりとやわらぐ。
「い……いえ」
答えながら、ゆっくりと眼を開けた。
脇腹の痛みは身体の中に散るようにして徐々に薄まって……痛みというより痒みのようになっていた。
私はハクと結婚してから、確かに傷の治りが早くなっている。
彼と関係を持てば不老長寿になれるというのは、迷信だって竜帝さんは言ったけれど。
私のこの身体は……。
「無理すんなよ？」
私の頭部を抱き込むようにしていた竜帝さんの鱗は、ハクと違ってほんのり温かかった。
それは優しい温度。
触れ合ったところから、突然の事に息苦しいほど心臓が激しく胸を打ち続ける私を、じんわりと温めて……癒してくれるような気がした。

「だ……だ、だいじょ……ぶ、大丈夫です」
海の青に包まれて見たのは、ソファーに横たわる藍色のドレスの……。
「セ……セシーさん？」
結っていた髪が解けて広がり。
まるで金のヴェールのように、彼女の顔を私の視線から隠していた。
「竜帝さん、セシーさんがっ！」
「武人の身体は普通の人間より頑丈だから、大丈夫だ」
あ。
武人……そうだった。
セシーさんはセイフォンで、壁にめり込んだのになんともなかった。
「ほら、ゆっくり立てよ？」
「え、あ……」
竜帝さんは私の手をとり、飛びながら引き上げて立たせてくれた。
ハクと同じ小さな手は、躊躇無く私の手を甲の上からぎゅっと掴んだ。
ハクは、しない……できない。
自分の鋭い爪を気にして、どうしても、にぎにぎ、してしまう彼にはできない。
「……ありがとう、竜帝さん」
真珠色の小さな竜が、両手をぎゅっとにぎりこんで、にぎにぎ、しながら私を見上げる姿が脳裏に浮かんだ。
会いたい。
早く、ハクに会いたいと思った。
「俺がいながら、こんな目に合せてすまなかった。……え～っと、じじいには内緒だからな？　あ、俺がお前に触ったのもだぞ！？」
「は、はい！」
「よし！　おい、セシー！」

私の手を離し、飛び立った竜帝さんはソファーに倒れこんでいるセシーさんの顔に小さな両手を添え、ぐっと上向かせた。
その動きに、彼女の髪が左右に揺れた。
現れたその顔に先程の異様さは見当たらない。
「聞こえてるよな？　いいか、その［想い］は単なる記憶であり単なる記録だ。巫女王は死んだ。あいつに引きずられるな！　お前はお前！　セシー・ミリ・グウィデスだっ！」
セシーさんの肩が、その声に反応したかのようにびくりとはねた。
「あ……」
ゆくりと目蓋が動き、紅茶色の瞳が青を映して。
何度も瞬きをしながら、自分を覗き込むようにしている青い竜を見た。
「りゅ……竜帝陛下？」
戸惑うような、不思議そうな表情。
でも、その声はしっかりとしていた。
「私……いま……なにを？　わたっ……あぁ！　なんということをっ！」
セシーさんの顔から手を離した竜帝さんは身を起こした彼女から離れ、私とセシーさんの中間に移動した。
翼を動かしながら、頭を抱えてうずくまってしまったセシーさんへと視線を向けていた。
「前に、俺は言ったよな？　辛くなったら、耐えられなくなったら……お前が望むなら、＜青の竜帝＞がお前をその重荷から開放してやると」
＜青の竜帝＞の声に。
「陛下……」
セシーさんは。
すがるような瞳で。
「私もあの時、言いましたでしょう？　逃げるのは性に合いません、と」

震える声で、答えた。
でもその言葉には、強い意志。
竜帝さんはセシーさんの答えを聞き。
「そうか。……小さい時は天井の染みが怖いって、べそかくような臆病な娘だったのに。お前も大人になっちまったんだなぁ」
懐かしむように、青い目を細めた。
「陛下。もし私が魔女達に私を食い尽くされたら、その時はよろしくお願い致します」
「ああ、任せとけ」
任せとけと言いながら、それを竜帝さんは望んでいないのだと感じた。
左右に揺れている尾が。
彼の本心を表すかのように下向きで、動きが緩慢だったから。
「ありがとうございます、陛下。……トリィ様」
セシーさんは姿勢を低く這うようにして、ソファーから降りてた。
私の正面の床へとよろめきながら移動し、膝を着いた。
「トリィ様、私が未熟ゆえこのようなことに……如何様にも罰してくださいますよう、お願い申し上げます」
魔女は記憶を継ぐ。
「罰するなんて……足が悪化してしまいます。ソファーか車椅子に座ってください」
「ですがトリィ様、私はっ」
「じゃあ、一つだけ質問に答えてくれますか？」
それは。
それはなんて、残酷な事なのだろう。
「好きなんですか？」
「え？」
「おちび？」

記憶が移るってことは、想いも引き継ぐの？
そうだとしたら。

「セシーさんも、ハクが……ヴェルヴァイドを愛しているの？」

ハクを。
セシーさんも、ハクを。
「あの人を、愛し……」
「まさかっ！　有り得ません！」
間髪入れず否定の言葉がかえってきた。
そのすばやい反応と強い口調が、私の考えが間違っていたことを教えてくれた。

「私、そこまでもの好きではありませんもの」

セシーさんは。
心底嫌そうに、そう言った。

「えっ？」

も。
もの好き？
それって。
もしかして、私のことですか！？
私が口に出して言うより先に。
「セシー、それは違うぞ。お前は例外だ。竜族の雌には全くもてないヴェルだけど、人間の女はけっこう寄って来るからな。だからおちびは、もの好きな女なんかじゃない。じじいの選んだ嫁に、失礼なことを言うな」
「……竜帝さん」

私は感激してしまった。
竜帝さんが、こんな風に私を……嬉しいです！
「いいか、セシー。こいつはなぁ～」
ぱたぱた飛びながら、ぽっこりお腹を突き出して。
腰に手を当て、うんうんと頷きながら。
なぜか得意げに、青いおちび竜が言った。
「こいつは、真性鱗フェチ女だ！」
「は？　鱗？」
「う～ん……はっきり言うと、変態か？　異世界産の新種の変態？
う～ん、おちびはどう思う？」
サファイヤのような美しい瞳がクルンと回った。
「なあ、どう思う？」
その澄んだ瞳には、悪意の『あ』の字も存在しない。
「……」
竜帝さん。
私に訊かないでください。

第92話

「ま、おちびのことは置いといて。おい、セシー。これの……車椅子の代金は、どこに請求したらいいんだ？　それは黒の大陸で青の大陸輸出用に作った試作品で、まだすっげぇ高いんだ。あっちで普及してるのは機械化が進んでて、そのままじゃ規制にひっかかって輸入できな……え～っと、＜黒＞からの納入証明書がここら辺に……」

竜帝さんは翼をぱたぱたと動かし、本や書類が積み重なった机の上に移動した。

そこを漁るようにがさがさと書類の山を崩し、一枚の紙を取り出した。

「ほら、見てみろ。＜黒＞の爺さんの直筆サインだ。性格の悪さが滲み出てるだろ！？」

くすんだ朱色をした本の上にちょこんと座って、車椅子に座ったセシーさんに向かってひらひらとそれを振った。

「ふふっ、相変わらず達筆ですわね。そんなに高価な物でしたの、これ。そうですわねぇ……請求書は成り上がりの盗賊国家、ホークエのガスティエン坊ちゃん宛てでお願いします。この足のお礼もしたいので、私が自分で届けますわ」

ふっくらした唇に指先を添えて言うセシーさんに、竜帝さんは尾をゆらゆらと左右に揺らしながら言った。

「ガスティエン王子にお前が届ける、か……ほどほどで頼む。入金を確認する前に死なれると困るからな」

「殺しはしません。個人的にお仕置きをしてさしあげるだけですわ。……トリィ様」

「は、はいっ」

２人の少々バイオレンスな会話にどきどきしていた私に、セシーさんが言った。

「ミー・メイの……あの子の話を、聞いてやっていただけますか？」
「はい、もちろんです。竜帝さん、ミー・メイちゃんとはお庭で話しをしてもいいですか？　今日は日差しが暖かくて、気持ちがいいから」
ミー・メイちゃんは私と2人きりで話をしたいようだった。
ここではちょっと……竜帝さんとセシーさんに席を外してくださいなんて、言い難いし。
「ん～……別にいいけどよ。ここから見える範囲にしてくれ。おちびなんかあったら、俺様がじじいにぼこられちまうんだからな……ま、慣れてるけどよ」
竜帝さんは四本の指を器用に使い、喋りながら手に持っていた紙を折り始めた。
あっという間に、紙飛行機が出来上がった。
それって、大事な納入証明書なんじゃ……。
「セシー。おちびと会ってる時はミー・メイには一切の術式の仕様を禁止する。もしそれを破ったら、俺様があいつを処罰する。あのミー・メイが、おちびに何かするはずはないけどな……もし、おちびに何かあったら、セイフォンはとんでもない災厄に見舞われることになる。俺様……四竜帝といえど＜監視者＞が報復行動に出たら、止められない」
＜青の竜帝＞として言う声は抑揚がなく平坦で、もしそうなった場合の事態の深刻さを強く感じさせた。
でも、続いたセシーさんの声はどこか楽しげだった。
「あら？　陛下のお考えは少々甘いのでは？　ふふふっ……私はセイフォンそのものが地上から消えると思いますわ。それにあの方がなさるなら災厄ではなく、『天災』が正しいのではなくて？」
「天災、か。そうだな……そうかもしれないな」
紙飛行機を左手に持った青い小竜は、セシーさんの言葉に目を細めた。
それは満足気でもあり……悲しそうでもあった。

どちらなのか、私には分からなかった。
もしかしたら、その両方なのかもしれない。
「天災は誰にも防げず、止められない。我々はただそれが過ぎ行くのを地に伏して願うだけ……。さぁ、トリィ様。先に庭でお散歩でもして待っていらして。すぐにミー・メイを追わせますわ」
「はい。ありがとうございます」
天災。
その言葉にハクの……この世界での＜ヴェルヴァイド＞の存在の重みを、あらためて知った気がした。

――四竜帝といえど＜監視者＞が報復行動に出たら、止められない

竜帝さんは、そう言った。
報復行動。
つまり、私の……私のせい。
言外に。
竜帝さんは私に、釘をさしたんだと思う。
軽はずみに、不用意に。
ハクに助けを求めるな、と。
「……じゃあ、私はあのガゼボの近くでミー・メイちゃんを待ってますね」
1年中綺麗な緑色のままの芝生に覆われた庭に建てられている、白いガゼボを指差した。
八角形の屋根を持つ可愛らしいガゼボには備え付けのベンチがあり、お話しするには良い場所だと思った。
あそこなら、ここからでもよく見える。
「トリィ様、先程の話なのですが……私は過去の記憶を持っていたに過ぎないのです。記憶を持っていた分、あの方には良い印象など皆無でしたわ」

「セシーさん……」
車椅子を上手に操り、セシーさんは竜帝さんへと寄って行き……。
「私はこの青の陛下のように、たおやかな美しい男が好きなんです。ヴェルヴァイド様にはまったく欲情出来ません。うふふっ……ねぇ陛下、私はいつでも大歓迎ですわよ？」
言いながら、青い竜の右手をぐいっと掴んで自分へと引き寄せた。
「あ？　乳がでかくても、俺様もじじいと同じくお前は無理だっ。うわっ！　乳で窒息させる気か！？」
セシーさんは両腕で囲うようにして、竜帝さんを豊かな胸の谷間に押し付けるようにして抱きしめていた。
「ち、ち……乳！？」
ああ、久々に聞きましたその単語！
「こら、おちび！　なんだよ、その目はっ！？」
竜帝さんがお口をぽかっと開けて、乳という単語に過敏に反応してしまった私を見た。
「だ、だって！　女神様な竜帝さんが乳なんて……でかい乳なんて言うからですっ！」
でかくない乳の持ち主である私は、力を込めて言い返した。
「は？　女神？　おい、俺様だって雄なんだぞ！　でかい乳が好きで何が悪い！？　身体の好みに女顔だってのは、関係ないだろうがっ！」
「かかかっ、身体の好み～っ！？」
竜帝さん、もしや巨乳が好きなのですか！？
そ、そんな……あの美しい女神様が巨乳をどうにかしてる姿なんて、想像できないっ！
女神様な竜帝さんに胸がある姿のほうが、すんなり想像できます！
「ったく、まな板セシーがこうなるなんて。女ってすげーなぁ」
竜帝さんは柔らかな膨らみに顎を乗せ、青い爪で自分のこめかみをぐりぐりしながら言った。
「陛下。６歳の時と比べないでください……」

セシーさんは竜帝さんから片手を離し、車椅子の横に付けられている小さな革鞄を開けた。
そこから何かを取り出し、私へと差し出した。
「これ、ヴェルヴァイド様の忘れ物ですわ。トリィ様からヴェルヴァイド様にお渡しくださいませ」
それは。
薄いピンク色の可愛らしい封筒だった。
「ハクの忘れ物？　ありがとうございます……」
受け取った封筒には、宛名は記入されていない。
封もされてなかった。
「トリィ様、私の質問にも答えていただけます？」
ハクちゃんの忘れ物だという封筒を見ていた私に、セシーさんが言った。
少しだけ、硬い声だった。
「セシーさん？」

「貴女は、幸せですか？」

問いは、簡潔。
でも、深い。
「＜魔女＞として私が持つ記憶では、あの方に関わった女性達は……伴侶（つがい）になったからといって、幸せになれる保証は無く……むしろ……。私はこの先の、トリィ様の事が……」
続いた言葉は、私を案じるものだった。
彼女らしくなく口ごもる様子から、魔女の記憶がセシーさんに告げる過去があまり良いものではないのだと想像できた。
先代魔女のことだけでなく、魔女以外にもハクと関わった人達がいて。
その人達は……。
「セシーさん」

意識せず、自然と。
「私、幸せです」
笑顔で、言えた。
あの人のことを想いながら、『幸せ』という言葉を口にしたら。
心の中に、愛しい気持ちが満ち溢れてくる。
「ハクが……あの人が私の幸せだと思っています」
私が笑えるのは、ハクが居てくれるから。
ハクの居る世界に、生きているから。
もし、元の世界に帰ったら。
あの人の居ない世界では、私はもう……きっと、笑えない。
「そうですか。……今の貴女には、その金の瞳がよくお似合いですわ」
「ありがとうございます、セシーさん」
ハクと同じこの目を。
ハクがくれたこの色を。
似合うって言ってもらえて、本当に嬉しかった。
彼との結婚を、セシーさんなりに祝福してくれたことがその言葉から伝わってきた。
「おい、おちび。ここから行け」
セシーさんの胸から脱出した竜帝さんが、テラスへのガラス戸を開けてくれた。
締め切っていた室内に、温度の違う空気がふわりと流れ込んでくる。
「はい。竜帝さん、ありがとう」
私はそこから庭へと降り、白いガゼボへと歩いた。
数歩歩いて振り返ると、ソファーの背もたれにちょこんと座ってこちらを見ている青い瞳と視線が合った。
小さく頷く彼に、私も同じ動作を返した。
慣れないドレスの裾を踏まないように注意して歩きながら、空を見上げた。

見上げた空には、今ではすっかり見慣れた飛行物体。
青みがかった銀色の竜が、お城の上空を旋回するように飛んでいた。
大きな翼に長い尾……陽に輝く鱗。
その美しさに見蕩れていると、その銀色の竜はどんどん高度を上げていき、白い雲の向こうへ消えた。

「トリィ様」
後ろからかけられた声に振り向くと。
こわばった表情を浮かべる紫の瞳の美少女がいた。
「ミー・メイちゃん」
彼女の衣装は温室で会った時と同じだった。
てるてる坊主のような、地味な灰色の長衣。
セイフォンの王宮術士である彼女の正装。
「ミー・メイちゃん。2人で話したいってことは、ハ……＜監視者＞に聞かれたくない話なんでしょう？　そこのガゼボにベンチがあるから、座って……ミー・メイちゃん？」
私はミー・メイちゃんをガゼボへと誘ったけれど、彼女は首を左右に動かした。
「私が竜帝陛下より与えられた時間は、そう長くはありません。申し訳ございませんが、このままで……トリィ様、私はトリィ様にお聞きしたいことがありました」
ミー・メイちゃんは胸の上で左手で右手を握り、目を閉じてから大きく息を吸い込んだ。
ぐっと何かを飲み込むように咽喉を鳴らし、ゆっくりと目を開けて視線を私へと向けた。
その瞳には、強さがあった。

「トリィ様は本心では、＜監視者＞から逃れたいとお思いなのではありませんか？」

思ってもみなかった言葉に、私は驚きと戸惑いを感じて紫の瞳を見返した。

私の表情から嘘と真実を見極めようとしている必死さが、瞬きすら惜しげに私を見つめる彼女から伝わってくる。

「思わない、逃れたいなんて……あの人と結婚したって、私は温室で言ったでしょう？」

そう答えた私を見るミー・メイちゃんの顔付が変化した。

悲しげな……哀れみさえ含んだその眼差し。

「トリィ様が感じられている感情は、異界から落とされた恐怖心や孤独感による……保身のために生まれたまやかしの愛情のように、私には感じられます。でなければ、あのような恐ろしい者の妻になど……」

「……保身のための、まやかしの愛情？　そんなこと、そんな……」

彼女の言葉は私の心臓を内側から掴み上げ、きりきりと締め上げた。

この痛みは、ハクへの想いを否定されたからなのか、それとも……。

言葉に詰まった私にかまわず、ミー・メイちゃんは語気を強めて続けた。

「セイフォンからトリィ様が去られた後、私は＜監視者＞に関する文献を読み漁りました。研究者にも直接会い、話を聞き……＜監視者＞は時代によっては魔物の王や邪神といった禍々しく、悪しき存在であり、＜ヴェルヴァイド＞という通り名を持つ恐ろしい存在であることを知りました」

魔物の王……邪神？

ハクちゃんが！？

ハクちゃんは、ハクは。

あの人はパスタをフォークでうまく巻けなくて、しょんぼりしち

ゃうような人なのよ？
ご機嫌だと長いしっぽがゆらゆら揺れるのよ？
素直でまっすぐな、とっても可愛い人。
確かに、怖い面もあるけれど……。
ねぇ、ミー・メイちゃん。
この世界の人達は、知らなかったの？
あの人が寂しがりやで泣き虫で。
真冬のお日様のようにやわらかく、微笑むことが出来るんだって。

「あのような得体の知れぬ、危険な者の伴侶になることを自ら望まれるなど……正気とは思えません。選択肢の無いこのような状況下では、偽りの心を本心だと思い込んでしまうのも……心を病まれるのも無理のないことです。辛い、認めたく現実から目を背けるようになって……微笑みながら、内側から壊れてしいく。祖母がそうでした……だから私に分かるんです」
ミー・メイちゃんは喋りながら、満足気に何度もうなずいた。
「ご安心ください、私が貴女をそこから救い出します。四竜帝すら敵わぬという＜監視者＞から逃れるには、異界にお帰りになれば良いのです」
「ミー・メイちゃん、あなたは何を言って……か、帰るっ！？」
帰る？
帰る！？
元の世界に。
ハクの居ない世界に、帰る？
「＜監視者＞は近いうちに黒の大陸に移るのだと、青の陛下にお聞きしました。これは好機です……大丈夫、秘密裏に進めます。ダルド殿下もきっと協力してくださいますから。手紙を送る術式の研究をしつつ、術の精度を高めてトリィ様を異界へ御帰しできるように……あぁ、そうよ！　そうなのよ！　トリィ様を居るべき世界に戻すことは、貴女だけでなくこの世界の為にも必要な事なんだわ！」

ミー・メイちゃんの瞳は爛々と輝き。
紫の瞳には情熱を越える狂喜の色。
「……や……やめてっ！」
ハクの居ない世界なんて！
いや！
そんなの、嫌！！
「好きなの！あの人が好きなの！　この気持ちはまがいものなんかじゃ、嘘なんかじゃないっ！」
この気持ちは、偽物なんかじゃない！
「彼が魔物の王や邪神だとしても！　あの人がっ、ハクが好きなの！！」
ハクの過去を知っても。
この想いは強くなるばかりで。
強く、強く……どこまでも堕ちていく。
「＜監視者＞を、ヴェルヴァイドをっ」
先代魔女の狂気の中に。
未来の自分を重ねてしまうほど。
「あの人を、ハクを愛しているのっ！　だから……だから、お願い！」
「トリィ様！？」
私はミー・メイちゃんに頭を下げた。
彼女が焦ったように何かを早口で言っていたけれど、かまわずに。
身体を折り、深く深く……。
「お願いっ、お願いします！　あの人の側にいさせてっ！」
私がこの世界にいることは。
間違ってるのかもしれない。
ーーー居るべき世界に戻すことは、貴女だけでなくこの世界の為にも必要な事

私。
知っているし、ちゃんと分かってる。
こんな私じゃハクにつり合わないって、自分が一番知っている。
人間で、しかも異界人の私なんかがハクのつがいになったことは、
この世界の人達にとって歓迎できないことだと分ってる。

この世界に居るはずのなかった私。
この世界に居るべきじゃない私。

「お願い……」

芝生に膝を付いて、深く頭を下げた。
胸にピンク色の封筒を抱きしめて。

「……お願いします」

額に、見た目より硬い芝の感触。
鼻に押し込まれるような、強い草の匂い。

「私を、あの人の傍に……」

この世界に存在することを許して。
ハクの『世界』に、いさせてください。

「この世界に、いさせて下さい」

ミー・メイちゃんだけでなく、この世界の全ての人に。
この世界に、許しを求めて。
地に伏せて、この世界に請い願う。

今の私には。
こうすることしか出来なかった。

ミー・メイちゃんには一人で竜帝さんの執務室に戻ってもらった。
私の腕を掴み、引き上げるようにして立たせたミー・メイちゃんの顔は真っ赤だった。
真っ赤な顔で、ぽろぽろ泣いていた。
もう二度と言わないと。
私を異界に帰す術式など研究しない、家族への手紙を向こうに送る術式だけを研究すると約束してくれた。
彼女が竜帝さんの居る部屋に戻り、開けられていたガラス戸が閉められたのを確認したら全身から力が抜けて、その場にぺたりと座ってしまった。
なぜ、ミー・メイちゃんは泣いたんだろう？
なんで、あんなに泣いてたんだろう？

「……ぁ」

私が泣かせた？
私のせい？
私が悪い……私は、私は……私は『悪い存在』？
私は、私は、私は……。

「……ハク」

頭の中は、ふわふわしてるのに。

心臓の裏側がちくちく痛む。

「……来て、ハク」

ハクを呼んだ。

呼べば、貴方は来てくれるから。

あの時みたいに、すぐに来てくれるから。

「りこ」

声。

それは深くて重くて、身体の奥の奥まで染み入るような……。

陽が、暗くなった。

日がかげったんじゃなくて。

「話は済んだようだな」

ハクが立っていた。

ハクが居る。

居てくれる。

それだけで、ぼやけていた私の意識がはっきりとしたものへ戻る。

「ハ……ク」

見上げる私と。

見下ろす貴方。

「……なぜ地に座っているのだ？」

ちょっと首をかしげるその姿は、冷たい美貌とのギャップがあって微笑ましい。

「あ……え？　あ、ううん！　な、なんでもないの、その、ちょっと……そう、芝生の座り心地を確認してたのよ！　今度ここで、皆でピクニックしようかな～なんてっ」

「……」
黄金の瞳が芝生を数秒間じ～っと見て、ゆっくりと瞬きを3回。
我ながらなんて下手くそな誤魔化しかと思ったけれど、ハクはそれ以上何も言わなかった。
ドレスを掃いながら立ち上がる私の様子を、無言で眺めていた。
「お迎えに来てくれてありがとう、ハクちゃん」
ハクは白いレカサの上に、頬まである立襟の外套を羽織っていた。
丈は彼の踝まで隠すほど長く、装飾の一切無い漆黒のそれを真珠色の長い髪が柔らかな曲線を描きながら流れていた。
「ハクちゃん、ハク。貴方に会いたかった……」
ハクちゃんの胴に両手を回し、ぎゅっと力を込めた。
贅肉なんかとは無縁の体は、服の上からでも分かるほど硬い。
その硬さが、心地よかった。
「りこ？」
「……私、ちょっとだけ寒いの」
嘘。
身体は寒くなんかない。
心が、冷えたの。
「……りこ」
こうすると。
とっても、安心できる。
「前にも言ったと思うのだが」
ハクちゃんを抱っこするのが、私は好き。
「我の体温では、暖はとれぬのだ」
小さな竜のハクも、見上げるほど長身の人型のハクも。
この私の腕の中に閉じ込めて、貴方を独占したい。
「私も前に言ったよ？　貴方に触れてると、私……身体も心もあたたかくなれるの」
こうしていれば。
誰も私達を引き離せないから。

「私にとってハクちゃんは、存在自体がお日様みたいに暖かいの。こうしてるとね、心がほんわかしてきて……」
誰も。
私から貴方を奪えないように。
「我がりこのお日様……太陽？」
私を見下ろしていた金の瞳が、空を見上げた。
「我がりことこうしていると、内に感じるこの感覚がりこの言う‘ほんわか’なのか？」
切れ長の目を眩しそうに細めて、ハクは言った。
「うん。そう、それが‘ほんわか’なの」
こうして触れ合ってると、離れていた数十分が何時間……何年もの長い間だったような気がしてくる。
離れてた時間を埋めるように、ハクの白いレカサに頬を押し付けた。
香ってくるは、嗅ぎ慣れたハクの匂い。
「2人でいれば、いつも……ずっと。ほんわか、だね」
貴方が、私の幸せ。
ねぇ、ハクちゃん。
私は貴方の幸せになれているのかな？
「そうだな。ほんわか、なのだ」
そっと私の髪を撫でるその手の感触に……違和感。
目で確認すると、彼の手には白い手袋。
「……ハクちゃんが手袋なんて、珍しいね」
「ああ、これか。必要になるかと思ったのだが」
必要？
今日は手袋するほど寒くないけど……なんで手袋したんだろう？
「りこも我もほんわか中であるので、今日はやめておく。ふむ、りこに触れるのに、これは邪魔だ。要らぬ」
ハクちゃんは色素の薄い唇に指先を添え、中指の先を前歯で噛んで手袋を取った。

まずは左手、そして同じようにして右手も外して。
「あぁ～っ！？」
横を向いて……竜帝さんの執務室の方に顔を向けて、口から手袋を離した。
「…こらっ、ぽいぽいしないの！　……え？」
地面へと落ちたはずの手袋を、私は見失ってしまった。
私の落下予測地点には、ハクちゃんが口から落とした白い手袋が無い。
……わざわざ、転移させたの？
私がいつも、ぽいぽいしちゃいけませんって言ってたからかな？
「りこに、なのだ」
「え？」
真珠色の爪に飾られた左手の人差し指が、私の手にあるピンクの封筒をつついた。
「それ、だ」
「ハクちゃんの忘れ物だって、セシーさんがセイフォンから持ってきてくれたこれ……私へのお手紙だったの？　わぁ、嬉しい……」
両手で封筒を持ち直し、私への手紙だったことに感動していると。

「恋文だ」

腕組みをして仁王立ちしている無意味に偉そうな態度のハクちゃんが、そう言った。
「こっ？」
こ、恋文～っ！？
恋文って、ラブレター！？
生まれてこのかた、そんな甘酸っぱいモノ貰ったことも書いたこともないんですけどっ！
「あ、あ……ありがとう！　今ここで読んでもいい！？」
「良いぞ」

セイフォンで、ハクちゃんはずっと竜体だった。
小さな手で四本の指でペンを握って、一生懸命に文字を練習していた姿が浮かんでくる。
「……あ」
封のしていないピンクの小花模様の可愛らしい長方形の封筒の中には、同じ柄の便箋が1枚。
そこには同じ言葉が、繰り返し書かれていた。
隙間無く。
縦横無尽に。
文字が紙面を埋め尽くしていた。

『好きだ』

その言葉だけ。

「……ハクちゃ……ん、これ……」

たくさん。
たくさん、たくさん。

ひしめき合い、重なり。
溢れんばかりに、同じ言葉が。

好きだ。
それだけで。
それだけが。
ここに書かれた、全て。

「我はりこが好きだ。だから、好きだと書いたのだ」

ああ、私。

なんて幸せな女なんだろう。

「我はりこが大好きなので、この紙に書けるだけ書き込んだのだ」

「嬉しい、とっても嬉しい……ありがとう、ハク」

手紙を胸に抱いてお礼を言う私の腰をハクの左腕が引き寄せ、2人の距離がまたゼロになった。

見上げる私の頬を、大きな手が包み込む。

ハクちゃんの右手の親指が私の唇を右から左へ、そっとなぞるように動いた。

「……冷たいな」

「そう？　外に居たからかな？」

溢れそうになる涙は、ハクちゃんの恋文を胸に強く抱くことで抑えた。

ハクは私の笑っている顔が好きだと、言ってくれたんだから。

この気持ちに相応しいのは泣き顔じゃなく、笑顔。

「ふむ。こうすれば良いか」

言いながら。

「え……んっ！？」

私の唇に、舌を丁寧に這わせ始めた。

「ん、ちょっ、ハ……クちゃっ」

唇の上をゆっくりと、滑るように動く熱く濡れた感触に。

顔が火照り、指先までもがじんじんと……熱を持ち、疼く。

「肉は冷たい我だが」

自分の持つ熱を。

全て、残さず私に与えるように。

あたたかさが染み込むように、丹念に。

「我の妻が言うには」

なぞるように。

包み込むように。

「我も舌は温かいようだからな」

離れることなく与えられる、舌の熱さに酔う。

「……ハク」

ねぇ、ハクちゃん。

私が。

もしも、貴方にこの世界を捨てて私の世界に来てって言ったら。

貴方はきっと、躊躇い無くこの手を取ってくれるんでしょう？

だから、言わない。

だから、言えない。

「……明日、スキッテルさんのお店に行ってもいい？」

ハクのかけらで、スキッテルさんにアクセサリーを作ってもらっていた。

出来上がったと連絡が入ったと、ここへ来る道中にカイユさんが教えてくれた。

「りことならば。何処へでも」

差し出した手を、貴方はすぐに握り返してくれる。

「我は、行く」

貴方の黄金の瞳は。
私にとって。
太陽以上に、眩しい。

「ありがとう、ハク」

第９３話

自分で言うのもなんだけど。

「俺って、働き者だよなぁ」

舅殿と別れた後、俺は第二医務室へ向かっていた。

「2日間全く寝ずにお仕事……ま、一週間くらい平気だけどねぇ」

この青の大陸に来て。

カイユのつがいになって……青の竜騎士団に入ってから、赤の竜騎士だった頃の3倍は働いてる気がするな。

「＜赤＞の頭やってた時より忙しい……ま、いいけどねぇ」

今、俺が歩いているのは青の竜帝の城……西棟二階にある第二医務室へと続く渡り廊下だ。

石作りではなく硬い木板が敷かれ、それは光沢のある黒い色をしていた。

黒檀ではないということは俺にも分かるが、この珍しい木材が何かは全く見当がつかなかった。

左右の壁に等間隔につけられた嵌め殺しの窓は、アーチ型で縦に細長く、床から天井近くまであった。

そこに映る自分の姿に、ふと足を止めた。

詰襟の青い騎士服。

腰には細身の剣。

赤の大陸に居た時は深紅の騎士服を着て、剣ではなく刀を持っていた。

髪も、腰に届くほど長かった。

「……父さん。俺、髪を前みたいに伸ばす気はねぇんだ。ごめんな」

俺の父親は、この赤い髪が大好きだと言ってくれた。

だから、伸ばしていた。

父さんが嬉しそうに俺の髪を、背でまとめて一つに……三つ編みにするもんだから、髪を切れなかった。

「……」

髪に触れると、蘇る。

幼い日が、脳裏に浮かぶ。

幼生の頃を思い出す。

「母さん……」

＜色持ち＞に生まれた俺を、母親は過保護に扱った。

小さな俺を長く伸ばした真っ赤な髪で包んで頭部に仕舞い込み、幼生の俺を1日中離さなかった。

その頃の俺にとって『世界』とは、母親の真紅の髪の中だった。

「……はは、これも遺伝って言うのねぇ？」

ガラスに映る俺の髪の中から、ここにはいないジリギエの緑の瞳がこちらを見ているような気がした。

「心配するな。大丈夫だよ、ジリギエ」

大丈夫だと口にしているクセに、心の奥では何かが燻る。

目の前の窓ガラスを叩き割りたい衝動を奥歯で噛み砕き、俺は医務室へと向かう足を早めた。

客人専用の第二医務室で、顔色が冴えないセイフォンの皇太子を拾い……伴って、俺は陛下の執務室へ向かっていた。

「……ダルフェ殿、私は……」

うわ、陰気臭っ！

そう思っても、許されるだろう。

憂いを帯びた端整な顔に胸がキュンッなんてしたら、俺は寿命が来る前にそんな自分に絶望しショック死する。

「あのね、俺に何か言う必要はないでしょう？　俺はあんたの部下でも友でもない、知り合い以下の間柄だ」

黙って後ろを歩いていたダルド殿下からかけられた言葉に足を止め、振り返ってその陰気臭い顔を見下ろしながら言った。
竜族である俺の方が、当然ながら背が高い。
皇太子がちびなんじゃなく、人間としては普通なんだが……この身長差では、どうしても見下ろす形になってしまう。
「俺にはあんたを救うことも、その重荷から開放することも出来ない」
俺を瞬きもせず見つめていた青い瞳が、ゆっくりとふせられた。
「……申し訳ない」
その端整な顔に、影が増す。
この王子様は、王族のくせに素直な所がなんともむず痒いっつーか……俺としては、ちょっと苦手だな。
「いや、謝る必要もねぇし」
俺が着たら地味としか言えないだろう落ち着いた色のチュニックも、この坊ちゃんが着ていると地味ということはなく、逆にその生まれ育ちの良さを強く感じさせた。
この皇太子君は。
『王子様』としちゃ、なかなかなんだが……将来王となる皇太子としては、どうなんだろうか？
まぁ、俺には関係ねぇけどね。
「殿下、あんたは神にでも祈ればいいさ。神に祈る……人間はそれが得意だろう？」
竜族は神には祈らない。
祈るのは……。
「だけどね、殿下」
見下ろす俺の目には。
握られた拳が見えた。
甲に骨が浮かぶほど強く握られたそれは、予想に反して震えてはいなかった。
「あんたを救うのは、あんた自身しかいないと俺は思うぜ？」

震えを許さぬその矜持が、憐れだと思った。

セイフォンの皇太子を陛下の元に連行……じゃなく、御案内した俺は。

「陛下、ダルド殿下をお連れ……げっ！？」

開けたドアを、閉めたくなった。

正面の窓から見える庭。

目に入ってきた庭のそれが、出した足を後退させた。

「じゃ、失礼します！　俺はジリを迎えに行こ……」

背後に居る皇太子君を置き去りにしてとんずらしようとした俺を、青い竜が目ざとく見つけて制止した。

「あ！？　てめぇ、こらぁああ！　逃げんなダルフェエエエエ～！！」

ぱたぱたと青い翼を小刻みに動かして怒鳴った青の竜帝陛下の右手には、白い手袋が握られていた。

「……陛下、それは？」

陛下は手袋をしない。

刃物が好きな俺の母と違い、刀を持たないこの竜帝は自分の爪を使う。

爪を伸ばすたびに手袋を駄目にするなんてこと、金にうるさいこの坊ちゃんはしないからだ。

大陸トップクラスの金持ちのはずなんだが……竜族のためには湯水のように金を使うクセに、自分のこととなると倹約家で質素を好む。

「……これは、これはだな！　落っこちてたっていうか、落ちてきたっつーかっ」

言いながら、陛下の視線が一瞬庭へ……ああ、なんか嫌な予感がするんですけど。

「正直に言いなさいな、陛下」
「じじいが……ヴェルがここに落としたんだと思う」
「……そうでしょうねぇ」
予感じゃなくて、確定だな。

庭へと続くガラス戸の前に横一列に整列し、俺達はある人物を見ていた。
緩やかに波打つ真珠色の長い髪が、漆黒の外套の背に流れ落ちていた。
氷点下の美貌に、黄金の瞳。
「……旦那」
＜ヴェルヴァイド＞が、そこに居た。
ダルド殿下も王宮術士の娘も、車椅子に座る魔女閣下も。
誰もが無言で、庭に立つ存在に魅入る。
それは人外の美しさに引き寄せられるなんて生ぬるいモノじゃなく、誰もが魂の奥の奥に隠し持っている闇が咽喉から這い上がって、白き麗人へと這いずっていくような……。
「あんた方、いったい何をしたんすか？」
「っ！？」
俺の問いに反応したのは、灰色の外套をまとった少女だった。
ふ～ん、なるほどねぇ。
そっか、この子か。
「ダルフェ、じじいは……大丈夫だと思うか？」
はっきり言って、俺はこの場に居たくないし見たくない。
だが、俺の袖を握る小さな青い手を振り払うことも出来ない。
それは、この小さな竜が青の竜帝だからではなく。
俺個人として。
この人を気に入ってるからだろう。

「大丈夫っすよ。……多分、ね。姫さんが一緒のようですからねぇ……まぁ、ここでセイフォンご一行様皆殺しってこたぁないですよ」

ここからは姫さんの姿が見えない。

旦那が外套の中に……こちらの視線から意識して隠しているとしか思えなかった。

一瞬で転移して南棟に戻れる旦那があそこに居る、留まっている理由……それを想像すると、ぞっとした。

「あの御方は……まさか……陛下、あの御方は……」

「はぁっ……」

呟きのような問いに返されたのは、青い竜の溜め息と悪態。

「なんのために俺がセイフォンで記憶を……ったく、自己中俺様クソじじいめっ！　ぐわぁああ～、むかつくぅうううう！！」

尾を激しく上下に動かし、小さな手で自分の頭をがつんがつんと連打するかなり情けない状態の青の竜帝の姿に目を向けることなく、皇太子の眼は庭の一点から動かない。

「あれは……黒い髪の女性は、トリィ殿……あのように触れているということは……あれが＜監視者＞の人型？」

セイフォンの皇太子が言葉を詰まらせ、何かに押されたかのように後ろへと背がそり、足が数歩下がる。

それは。

黄金の眼が、こちらを流し見たからだ。

「……うわっ！？　旦那、怖ぇ～」

旦那はすぐにその視線を戻し。

身をかがめ、囲い込むように抱いていた腕をずらし……黒い髪を指先で梳いた。

ほんの少し、姫さんの顔が露になる。

そして。

顔を寄せ、唇を重ねた。

それはすぐに、離れたここからでも分るほど深いものへと……。

人間である皇太子達より視力のいい俺と陛下には、皇太子達以上に見えちゃってるわけで。

「あ～あ、なんでここでそうきますかねぇ」

元から青い陛下が青ざめてるかどうかなんて、はっきり言って分からない。

まあ、どっちかっていうと、陛下は赤くなってんじゃないのかねぇ。

他の連中は……見る間でもない。

旦那。

確信犯っすね。

あんたは、ちゃんと分かってる。

自分の人型がここにいるセイフォンの人間達に、こいつらそれぞれに与えるその意味を。

この3人は、考えるだろう。

＜監視者＞がわざわざ人型で現れた意味と、理由を。

答えには辿りつけないのに、考える。

「まるで……＜白金の悪魔＞……あの方は……」

＜監視者＞に生きろと言われた皇太子。

この男は逃げ道を塞がれ、唯一楽になる術を奪われた。

舅殿が……セレスティスがその筋に＜監視者＞の意思をうまく流すことで、この皇太子を暗殺する者もじきにいなくなるだろう。

もう誰も、この皇太子を殺さない……殺せない。

こいつは生かされるのだから。

王宮術士の少女は姫さんに『いつか手紙が送れる』という希望を与え、あの子の持つ家族への罪悪感を……罪の意識を軽減させるため、存在そのものを旦那に利用されている。

誰も口にはしないが、誰もが異界に手紙を送るなんて『無理』だと感じているし、本人も本心では必ず出来るなんて、おめでたい考えは無いはずだ。

そして、記録と記憶を持つ魔女であるこの女は……。

魔女閣下は車椅子を器用に操り、皇太子の傍へと寄って硬く握られた右手へと触れた。
「ダルド殿下、セイフォンへ帰りましょう。ここで私達がすべき事は、出来ることはもう何も無いのです」
「セシー……」
ふ～ん、この魔女は俺が考えてた以上に賢い女だねぇ。
でもねぇ、残念。
あんたは今までの魔女達から継いだの記憶のせいで、その賢さがいろいろ邪魔をしているんだよ。
閣下は考えすぎだ。
この旦那の行動は、単純明快。
あれは簡単に言えば、ちょっとした嫌がらせみたいなもんだ。
だが、こいつらにはそれが分からない。
……まぁ、姫さんの様子次第で方針をころっと変えて、この連中を消しちまうつもりだったんだろうが。
「なるほどねぇ。まぁ、仕方ないっつーか……」
舅殿の言うように、旦那がこの皇太子を嫌う理由は嫉妬心だ。
姫さんが皇太子に恋愛感情を持つことはない。
でも、姫さんの頭の中からこの皇太子の存在が消えることは無い。
姫さんが内に隠し、押し殺した皇太子への……他の男への強い感情。
だから、旦那は言った。

一一一我がこの世で最も嫌いなモノは、お前だ

嫌い、か。
そりゃそうだ。

一一一万が一にでも、奇跡が起きて孕んだならば

あの人は。
黒の爺さんにはっきり言った。

――我のりこに入り込んだ異物を引きずり出し、この手で引き裂いてやろう

自分の子さえ、異物と言い切った旦那だ。
つがいに対しての独占欲と執着心はどこまでも深く……暗く、激しい。
「……閣下の仰る通りっすよ、殿下。陛下、籠の準備は終わってます。いつでも出れます。一応、護衛としてヒンデリンをセイフォンまで同行させます。あいつでいいですか？」
俺の言葉に陛下はうなずき、青い翼を動かして皇太子へと寄った。
「適任だ。さすが、手際が良いな。ダルド、お前達はもう発った方がいい」
青い爪を持つ手を、皇太子の両頬に添えて言った。
「ダルド、俺様はお前を助けてやれない……すまない」
皇太子の額に、こつんと自分の額を合わせて。
陛下は言った。
「元気でな」
「義父上……青の竜帝陛下」
誕生日にハニーを使者に使うほど、陛下はこの人間を可愛がっていた。
特別扱いしていた。
「さよなら、ダルド」
陛下は額を離し、とがった口先をそこへ軽く触れさせた。
この皇太子が幼い時、陛下は数年間手元に置いた。
何故、セイフォンの皇太子を＜青の竜帝＞が……気にならないわけじゃないが、自分から訊く気にもなれない。
訊いて、知って、何が変わる？

「俺が発着所までご案内しますよ、ダルド殿下」
今、この皇太子を映す陛下の青い瞳を見たら。
知りたくないとすら、思ってしまった。
「……ダルフェ」
「ん？　なんすか、陛下」
「……いろいろ、ありがとう」
そう言われて、思わず。
「いえ。俺は陛下が好きですから、いいんですよ」
素直に答えてしまった俺に。
「え？　好きって……その、え～っと、すまんっ！」
「？　すまんって、なにを……」
「俺様、じじいと同じく雄とは交尾無理だ！　すまんっ、ダルフェ！！」
「はっ！？」
陛下は短い腕を自分の胸部にぴたっとくっつけ、翼で身体を包むようにして俺から距離をとった。
同時に一斉に俺を見たセイフォンの連中の視線が、なんとも痛い。
皇太子の驚愕。
王宮術士の困惑。
魔女閣下の好奇。
それぞれの視線が、俺に突き刺さった。
「……」
痛いというか。
なんか、この種類の痛みもこれはこれで悪くないと思ってしまった俺は。
変態なんかじゃなく、前向きだってことにしておこう！

第９４話

ダルド殿下達に会った翌日、私とハクちゃんはスキッテルさんのお店に来た。

もちろん、カイユさんとジリギエ君も一緒に。

スキッテルさんは宝飾品を作っている職人さんで、個性的な見た目からは想像できないくらいとっても話し易いおじいさんだった。

彼に会うのは今日で2回目。

2回目の今日は、注文していたアクセサリーの受け取りのためだった。

「そうだ、カイユちゃん。ケーチザンの店に例の緑茶が入荷したらしい。あれ、セレスティスが好きだろう？　せっかく南街に来たんだから、ついでに買っていってやれば？」

言いながら、スキッテルさんは腕に抱いて頭を撫でていたジリ君に銀色のコインを3枚渡した。

お店に来てからずっと、スキッテルさんはジリ君を抱っこしていた。

まだ人型になれない幼生体のジリ君の可愛さに、スキッテルさんは頬が緩みっぱなしだった。

うんうん、分かります！

ジリ君は、本当に可愛いくて綺麗な子だもの。

スキンヘッドのサンタクロースのようなスキッテルさんが、小さなジリ君にめろめろ～んな姿はとても微笑ましい。

それを見ている私の心までほっこりしてくる、ほのぼのな光景。

「ギュギィン？」

小さな手でぎゅっとコインを握りながら、ジリくんはシャボン玉で作られたような美しい皮膜を持つ翼をぱたぱたと動かしてスキッテルさんの腕から飛び立ち、カイユさんのお膝に戻ってきた。

「教えてくれてありがとう、スキッテル。前回の入荷の時は買いそびれてしまったって、父様が言ってたのよ。いつもすぐに売り切れてしまうから……近所だし、ちょっと行ってこようかしら」

カイユさんの着ている若草色のレカサには裾と袖に白い小花が刺繍されていて、澄んだ美貌に可愛らしさを添えていた。

とっても似合う……カイユさんが竜族男性の伝統衣装であるレカサを普段着にしてるのは、動きやすいからだって言っていたけれど、アオザイに良く似たレカサのすっきりとしたラインを持つデザインは、彼女にすごく似合っていると思う。

「ジリ坊、ついでにテル爺ちゃんの分もそれで買って来てくれるか？　お釣りはお駄賃だ」

「ギュ？　ギュギョン！　テルぢぃ～、ちゃっちゃ！」

ジリ君は尾を左右に振りながら、元気良くうなずいた。

彼の鱗は青みがかったグレーで1枚1枚は半透明でそれが重なり合い、細長い体全身を覆っている。

ちょこんとついていた短い手足がなんともラブリーで、大きなお口もチャームポイントなのです。

「スキッテル。買い物の代金よりお駄賃が多いなんて、変だわ。ジリギエ、今此処でスキッテルに返しなさい」

カイユさんは膝の上で嬉しそうにコインを握り締めているジリ君を見ながら、そう言った。

「ギィギュン～。かか……テルぢぃ～」

ジリ君はダルフェさんと同じ色の瞳を真ん丸くして、カイユさんとスキッテルさんを交互に見た。

「たまにはいいじゃないか、カイユちゃん」

毛先が斜め上にはねている真っ白太い眉と対照的に、つるりと剃りあげられた頭部をぽりぽりとかきながら言うスキッテルさんの首には、亡くなった奥さんの牙と鱗で作ったという個性的なデザインのネックレス。

初めて会ったとき、象牙色の牙を指先で優しく撫でながら『紹介』

してくれた。

――俺のリセータです。とても綺麗で最高に美しいでしょう？

その時の彼の顔にあったのは悲しみではなく、溢れ出すような愛情だった。

彼も、先に亡くなった奥さんも。

とても幸せだったのだと……今でもその幸せは続いているのだと、スキッテルさんの誇らしげな笑顔が言っているような気がした。

「駄目」

カイユさんはジリ君の胴を両手で掴んで立ち上がり、作業場の間仕切りに寄りかかっていたスキッテルさんに歩み寄った。

「ジリギエ。自分の手で返しなさい」

「かか……テルぢぃ、ギギギュ！」

数秒間、ぎゅっと目をつぶってから。

ジリ君はスキッテルさんに向けて左手を伸ばした。

その手には、コインが2枚。

「……同じだなぁ」

スキッテルさんの笑顔が深くなった。

ジリ君からコインを受け取り、右の手のひらに乗せて転がしながら。

「ミルミラちゃんも“駄目”って、言ったんだよ」

嬉しそうに、言った。

「スキッテル。私……私も母様のような母親になれるかしら？」

カイユさんはジリ君の身体を胸に強く押し付けるように、両腕で抱いた。

水色の瞳が言葉以上の問いを帯び、答えを求めてスキッテルさんの暗褐色の目を真っ直ぐに見た。

「なれるかだって？　君はもう、母親になっているだろう？」

「そうね、そう……私は……」

スキッテルさんの言葉を聞いて、カイユさんの表情がやわらかいものに変わった。

「トリィ様。私とジリはこの先にある店で、父の好きな茶葉を買ってきます。此処でカイユを待っていて下さい」

「はい、カイユ」

席を立ったカイユさんはアイボリーのショールをはおり、ジリ君を右肩に乗せた。

ジリ君はカイユさんの肩で上半身を起こし、お店の奥にある作業場に品物を取りに行ったスキッテルさんに向かって小さな両手をぶんぶんと振る。

「テルぢいぃ〜！　ジリ、ちゃっちゃ！」

その手には、銀色のコインが一枚。

「お使い頼むな、ジリ坊！」

作業場とお店を仕切っているガラスの向こうで、スキッテルさんも手を振り返していた。

カイユさんは鋳物のドアに手を添えながら、念を押すように言った。

「いいですか？　絶対ですよ！？」

私にではなく。

ハクちゃんに。

「此処で、待っていてくださいね。いいですか、ヴェルヴァイド様！　転移で先に帰るのは無しです。スキッテルの店の後、四花亭にトリィ様をお連れするのですから……聞いてますか！？」

前に街に来た時、ハクちゃんは途中で飽きたのか私をひょいっと抱いたかと思ったら、いきなり転移して南棟に帰ってしまったのだ。

そして残されたカイユさん、ダルフェさん、ジリ君は大迷惑を被

ったという前科があるので、カイユさんが語気を強めるのも無理ないと思うのですが……。

言われてる当人は全く気にする様子が無いどころか、その魔王様系好感度ゼロのお顔は明後日の方角を向いていた。

「……網。細かな根、無数の糸。這い、伸びて広がる」

色素の薄い唇から、音。

「ヴェルヴァイド様？」

カイユさんの眉が寄った。

「ハクちゃん？」

私がスキッテルさんとカイユさん、そしてジリ君のやり取りを見ている間、私の向かいのソファーにふんぞり返って嫌味なほど長い足を組んで無言で座っていたハクちゃんが言葉を発した。

ここへ来てから、初めて彼が喋った言葉は私には意味不明だった。

「ヴェルヴァイド様、今のは？　……トリィ様」

硬い表情のカイユさんが、私を見た。

カイユさんの問いにハクちゃんは無反応だった。

視線すら、動かなかった。

彼がこういう時は、カイユさんが何度訊いても『無理』だとこの数ヶ月の生活でカイユさんも私もよく分かっている。

カイユさんが答えて欲しくても。

ハクちゃんは答えない。

彼に悪気がないのは、カイユさんも分かってくれている。

悪気も無いけど、返事しようという意欲も皆無。

だから、私が訊かないと！

「ハクちゃん、答えて。今のどういう意味？　どうかしたの？」

「……」

白い額にかかる真珠色の髪を大きな手でかき上げて、黄金の眼を露にしてハクちゃんは言った。

「意味は無意味。どうも無い」

その視線は、私を見ている。
透明感の無い、黄金の瞳。

「……ハクちゃん？」
「我にとっては」

ハクの金の眼の中には、確かに私がいるのに。

「貴女以外、無意味なのだから」
「ハク……」

今。
彼が見ているのは。
目の前に居る私だけ……では、ないような気がした。

「すぐ、戻りますから」
鋳物製のドアは私の力ではびくともしないほど重いけれど、カイユさんは特に気にする様子なく軽やかに押し開けて出て行った。
「さて、と。トリィさん。保管庫から例の品を出してくるから、少し待っててください」
「はい、スキッテルさん……え！？」
カイユさんとジリ君を手を振って見送ったスキッテルさんは作業場から私へ声をかけ、中央に立ち右足でトンっと床を踏んだ。

するとその部分の床板が跳ね上がった。
「驚きました？　床下に保管庫があるんですよ。帝都は治安が良いので普段は使ってないんですが、あれをそこいらに置いておくような度胸は無いのでね。……よいしょっと」
スキッテルさんは開いたそこに頭を突っ込んで、そのままくるりと落ちて……じゃなく、降りた。
「‘あれ’って、ハクちゃんのかけらのことだよね？　度胸って、どういうことかな？」
「臓腑だったものを店に置くのは問題があるからではないか？　ここは肉屋ではなく石屋であろう？」
「……」
臓腑。
肉屋。
え～っと。
それを『お菓子みたいで美味しい！』と食べてる身と致しましては、なんというべきか……返答に困るのです。
「どうしたのだ？　そのような顔をして。心配するな、我のかけらは腐敗せねので臭わぬ。りこが身に着けてたとしても、何等問題は無いのだぞ？」
腕を組んで自信満々に言うと、ハクちゃんはソファーから立ち上がり、スキッテルさんの作業場の前へと移動した。
その動きにあわせ真珠色の髪が揺れ、天井にある螺旋状の照明器具の灯りに宝石のように煌めく。
「賞味期限も消費期限も無い。今後も安心して食らうが良い」
漆黒のレカサとの対比が見蕩れるほど幻想的ですらあるのに、その冷たい美貌からは想像出来ないほど天然君な発言……。
「……あ、ありがとう。ハクちゃん」
「うむ」
やっぱり。
オチビ竜の姿じゃなくても、ハクちゃんは可愛らしい人だと改め

て思った。

竜族であるスキッテルさんは、何も言わなくても初めて会った時からある一定の距離を保って接してくれていた。

蜜月期であるハクちゃんを刺激しないように、なおかつ私と会話が成り立つ絶妙な距離感。

床下の保管庫から戻ってきたスキッテルさんは、仁王立ちのハクちゃんを見て暗褐色の瞳を細めた。

「……蜜月期を経験した雄として、あなたには頭が下がります。さあ、奥様につけて差し上げてください」

「……」

店内奥の作業スペースを背に立つスキッテルさんと、通りに向かって右手にある商談用の応接セットに腰を下ろした私の間に壁のように立つハクちゃんに、平たい長方形の木箱の蓋を外して差し出した。

ハクちゃんは無言でそれを両手で受け取り、首だけ動かして私を見た。

「……りこ」

ハクちゃんのつり眼度合いが、3割り増しになっていた。

「うっ！？」

その顔に運悪く遭遇してしまったスキッテルさんが、よろよろっと後ろに数歩下がった。

すみません、スキッテルさん！

文句なく美形で整ってるのに、な必要以上に怖い顔ですみませんっ！

「ハクちゃん？　どうしたの？」

私は急いでハクちゃんに駆け寄り、その凶悪極まりない目元に手を伸ばした。

背伸びをして精一杯伸ばした指先が、私を見下ろす彼に触れる。
「りこ。我は……我はっ」
今までの経験から、彼の言いたいことが私には分かった。
私は彼の奥さんだもの！
「大丈夫！　パジャマが一人で着れるようになったんだから、これだって出来るわっ！」
私がそう言うと同時に、鋳物のドアから微かな音。
「おっ！　お客様か？」
スキッテルさんは腰をとんとん叩きながら、早足でドアへと向かった。
ハクちゃんと私の横を通る時、ちらりとこちらを見た暗褐色の瞳には恐怖心ではなく好奇心といいますか……。
「本当に面白いご夫婦だ。春になったらこの帝都から去ってしまうなんて、つまらないなぁ……あぁ、でも俺ももうすぐ逝かなきゃだから、いいか」
ドアを開ける前にこちらを振り返り、スキッテルさんは立派な眉毛を右手でこすりながら言った。
「え？　あの、いかなきゃって……お引越しされるんですか？」
聞き返した私にスキッテルさんは顔を左右に2回動かし、答えた。
「いいえ、そうではなく……そんなことより、多分、外に居るのは人間のお客様ですよ。竜族ならこの程度のドア、片手で開けますからね……まぁ、カイユちゃんなら指1本ですけど。人間のお客様なんて、久しぶりだな」
スキッテルさんは両手を使ってドアを広く開け、閉まらないように押さえた。
「いらっしゃいま……！？」
スキッテルさんはドアを押さえたまま、固まった。
『いらっしゃいませ』の『せ』の形を作ったまま、口の動きが止

まっていた。
そこに居たのは。
その人は。
この世界に来てからカイユさんを筆頭に美人さん（もちろん女神様もここに入れちゃいます）に囲まれて生活して以前より美人慣れ（？）した私ですら、言葉を失うほどの美女だった。
赤ワインのような深みのある緋色のベアトップのロングドレス。
ウエストがきゅっとしまったドール型のドレスで、腰周りには優雅なラインを描くドレープが入っていた。
胸元から腰にかけて、金糸で刺繍された花々が輝いていた。
黄色人種の私とは違う白い肌、セシーさんに負けていないほど豊かな胸と細い腰。
うわわわっ！？
美人でスタイルも抜群です！
「き、綺麗……」
頭頂部で巻かれた明るい赤茶の髪には、宝石が煌めく金細工の髪飾り。
ボリュームのある長い睫毛に、薄い茶色の瞳。
華やかで品のあるローズ系の口紅が塗られた唇は、下唇がふっくらして色っぽさと可愛らしさが絶妙なバランス。
「わたくし、ずっと貴方様に御会いしたかった……」
薄茶の瞳が見ているのは店主のスキッテルさんでも、もちろん私でも無い。
「＜監視者＞様。御久しゅうございます」
ハクちゃんだ。
ハクちゃんの知り合い！？
彼女の言葉……スキッテルさんのお客様なんじゃなくて、ハクちゃんに会いに来たハクちゃんのお客様ってこと？
私とスキッテルさんは“会いたかった”と美女に言われたハクちゃんを、同時に見た。

彼の反応は……あれ？
ハクちゃんはスキッテルさんに渡された箱を、瞬きもせず見ていた。
どうやら、珍しくとても興味を持ったらしい……まぁ、自分が目から出したものがアクセサリーになったんだから、当然といえば当然だけど。
でも、でもですね。
少々、かなり場違いではありますが豪華絢爛に着飾った美女を完全に無視してますよ、この人ったら！
「ハクちゃん、ちょっと！」
私は小声で言いつつ、彼の脇腹を肘でつついた。
さすがにまずいでしょうと焦っていた私に、彼女はどこからか出した羽毛に飾られた扇子で口元を隠しながら言った。
「よろしいのです。わたくしが用があるのは＜監視者＞様ではなく、貴女ですから」
「え？　私ですか？」
「わたくし、異界の品を手に入れたんですが何に使うものか分からなくて……貴女、異界人なのでしょう？　見ていただけないかしら？」
聞き返した私を閉じた扇で指して。
そう、言った。
身に着けているものからも、身分の高い人なんだろうなとは思ってたけれど。
でもその動作、ちょっと失礼なんじゃ……。
「わたくし、急ぎますの。明後日には帰国しなくてはなりませんから……そうですわね、明日午後が良いでしょう。明日の午後2時に、竜帝陛下の城にお伺いしますわ。よろしいわよね？」
ああ、でも。
しょうがないよね。
ここは日本じゃないんだから、見るからに貴族のお姫様なこの人

から見れば私なんて……あれ？
この人、知ってる？
私が異世界人だって言ったんだもの！
竜帝さんのお城に居させてもらってることも、知ってる……。
つまり、この人は私がハクちゃんの、＜監視者＞のつがいになった人間だって知ってるんだ！
明日の午後にお城に！？
人型のハクちゃんを＜監視者＞って言ったし、私の事も知ってるなんて……この人、普通の人じゃない。
改めて会うなら、カイユさんや竜帝さん達に相談すべき相手なんじゃないの！？
「え、あのっ！　明日って！？　そんな急に言われても無理で……」
「では明日」
私なりに必死で考えた結果、とりあえず明日は断ろうとしたのに。
「え！？　ちょっと、待っ……転移！？」
美女は、消えた。
私の答えを聞かずに、居なくなった。
転移したってことは、彼女は術士だ。
多分、貴族。
そして、術士。
あの人は私を知っていたけれど。
当然ながら、私はあの人を知らない。
……あの人、名乗らなかった。
鈍い私だって、さすがに分かる。
うっかりなんて有り得ない。
絶対、意識的に名前を言わなかったんだ。
自分の名前も、自分が誰であるかも。
ハクちゃんが知ってるから。
だから、言わなかった。
うがった見方をするならば。

――わたくしのことが知りたければ＜監視者＞様にお聞きになればよろしいわ、おほほほほ～。

私の脳内で、バックにヴェルサイユ宮殿を背負って扇子の羽毛を撒き散らしながら、さっきの美女が高らかに笑った。

……ちょっと、かなり違う気もしますが。

ハクちゃんは彼女を無視というか、興味がかけらで作ったアクセサリーにあったから、彼女を見ようともしなかった。

酷い態度だけど、彼女は顔色一つ変えず微笑んだままだった。

慣れてる。

そう感じた。

彼女はハクちゃんのあの態度に、慣れている……普通はカチンとくるもの。

「……ハクちゃん」

立ち去るまでずっと、彼女の笑みは消えなかった。

自分を見ないハクちゃんを、ずっと見ていた。

嬉しそうに微笑み……でも、切なげな瞳で。

「あの人、誰なの？」

「あれか？」

『あれ』ですか……やっぱり、居たってことは分かってたんだ。

彼女の存在を認識してるのに、居ないものとして扱ったの？

ハクちゃんは右手にかけらで作ったネックレスを持ち、指先でひっかけるようにして自分の目線まで上げた。

連なる真珠のようなそれを、赤い舌でぺろりと舐めて。

「メリルーシェの第二皇女だ」

そう、教えてくれた。

「メリルーシェ？」

メリルーシェ。

帝都に来る途中に寄った、バイロイトさん達のいる国。

メリルーシェの第二皇女……皇女様ぁああ！？
本物だ、本物のお姫様だ！
「お、お友達？」
お友達。
一応言ってみたものの、そうは思えない。
「お友達？　我にお友達はいない」
あ。
ちょっと待って、私。
これ以上、訊かない方がいいかも……あぁ、駄目！
訊きたい、知りたい。
思い切って、訊いちゃおう！
「でも、知り合いでしょう？　あのお姫様とは、そのっ……」
元恋人、だったとしても。
先代魔女さんとの事を知った私だもの、それくらいじゃ驚かない自信が……正直、複雑な心境ですけれど。
「あれは」
ハクちゃんは、言った。

「我の“愛人”」
「あっ、愛人っ！？」

あ、あああ、あいじっ……恋人じゃなく、愛人！？

「……らしいのだ。ランズゲルグが言うには、な」

しかも、女神様公認のっ！？

「ハクちゃん、あ、ああ愛人がいたのっ！？」
「さあ？」
「さあって、ハクちゃんったら、なに言ってるのよ！　自分のこと

でしょう!?」
　ハクちゃんの髪を両手で力いっぱい掴んで声を上げた私に、天然系魔王様な旦那様は容赦無い追撃の一言。
「愛人の認定基準が、我にはよく分からぬのだ。我とあれの間には単なる肉体関係しかないのだが」
「……に、肉体関係しかって」
「あれの地位と身体は知っておるが、名すら知らぬ女なのだ。それでも世間一般では愛人となるのだろうか?」
「なっ!?」
　知ってるのは地位と……かっ、身体!?
　しかも、名前は知らないなんて!
　なによそれ、有り得ない～っ!!
「りこはどう思う?」
「え、あの、それはっ」
　うわっ、なんで私に訊くのよ!
　首をかしげて可愛らしく訊いたって、内容がちっとも可愛くないよハクちゃん!

第９５話

「メリルーシェの第二皇女が、おちびにちょっかい出すなんてっ…
…ぐわぁあ～！　だからちゃんと別れてこいって、あの時俺様が
言ったのにぃいいい～っ！　ヴェル、どうすんだよ！？」
＜青＞は結い上げた髪を掻き毟り、言った。
我は、答えた。
「あの時も今も、我は忙しい」
前の時は、りこが与えてくれた重石が行方不明になっており。
今は……。
「急いで戻らねば、りこが風呂から出てしまうではないかっ！」
りこは入浴中なのだ。
間に合わねば、我は身体を洗ってもらえぬ。
糞尿も汗も排出せぬこの身は汚れておらず、洗浄する必要は無い。
だが、我はりこに洗って欲しいのだ！
「そんなこと、偉そうに言うな！　このエロクソ鬼畜じじいっ！！」
「ランズゲルグよ」
唾をとばして喚く＜青＞に、我は以前から疑問に思っていたこと
を訊いた。
「お前がよく使用する“えろ”とはどういう意味なのだ？　糞と鬼
畜と爺は分かるのだが、“えろ”は我には分からぬ」
「っ！？」
口を開いたまま固まった＜青＞を、右手に海綿・首にタオルをか
け入浴準備万全の状態で執務室の床に立ち、我は見上げた。
「くっ！　この箱入りじじいめっ……エロの意味はっ、意味は！
俺様にはとても口にできねぇっ……ダルフェにパァアア～スッ！」
＜青＞は扉の前に立っているダルフェに向かって、両手を突き出
した。
「陛下、今の俺には無理っす。見りゃわかるでしょうっ！？」

「離せ、ダルフェ！　そこの馬鹿共を殴らせてちょうだいっ！！」
拳を振り上げるカイユを、ダルフェが背後から押さえ込んでいた。
「馬鹿って……じじい、カイユのご指名だぜ？　殴らせてやれよ」
「カイユは“共”と言っておったぞ？　つまり、お前も馬鹿に含まれておるのだ」
「え？　俺様もっ！？」
我は床を蹴り、＜青＞の頭に乗った。
持っていた海綿でその頭頂部を軽く叩いた。
「ふむ、背だけではなく脳も伸び悩んでおるようだ。お前の脳はこの海綿のようなのかもしれんな」
「がぁあ～！　俺様の脳が海綿だって！？　ふざけんなっ、このボケがぁあ……うっ、ごめんカイユ！　そんなに睨むなっ、怖いじゃねぇか……じゃなくてっ、美人が台無しだぞっ！？」
「……」
「ううっ、だからごめんって！」
無言でありながら確かな圧力を感じるカイユの冷たい視線に、現四竜帝で最強の個体であるはずのランズゲルグは、少々腰が引き気味だった。

「＜青＞、話とはなんだ？　手短に済ませろ」
夕食後、風呂に入ろうと支度をしておったら。
＜青＞が来た。

一一一ちょっと顔かせっ！　このクソじじい！！

我は断った。

――頭部を切断し＜青＞に貸すのは、りこの前では不適切なので断る。

そう言った我の胴をりこが両手で素早く掴み、＜青＞へと差し出した。

――竜帝さんはハクちゃんに来て欲しいって意味で、言ったの。

その顔は、微笑んでいるのに抗えない気迫があった。

ーーいってらっしゃい、ハクちゃん。

――はい、なのだ。

帰宅後、りこは様子がおかしかった。

我を凝視したかと思えば、目を逸らし。

溜息を連発しつつ、いつもの倍量の夕食を平らげた。

あれだけの食欲があるのだから、体調に問題は無いはずなのだが……。

「なんの話だとぉおお!?　決まってんだろうがっ！　つーか、さっき俺様ちょっと言っただろう!?　メリルーシェの第二皇女の件だっ！　帝都に逗留してるのは知ってたんだけどよ、まさかスキッテルのとこに来るなんて……しかもおちびにっ……！」

「なにか問題でも？」

＜青＞の頭に座る我に答えたのは。

「問題？　大有りですわ。ヴェルヴァイド様」

ダルフェを床に這わせ、その背を右足で踏みつけているカイユだった。

「私が席を外している時に来店したのは、ヴェルヴァイド様が支店で仰っていた“術士として使えんが探知能力だけは並以上”という皇女ですね？　間違いございませんか？」

「そうだ」
あれは我へと『網』を広げた。
細かな根、無数の糸。
それらを這わせ、我へと伸ばし居所を探し当てた。
我が城から出るのを、待っていたのだろう。
「あれは探知能力だけならば、星持ちに値するが」
『網』を帝都中に広げられたのは。
「それ以外は術士として無能だった」
青の契約術士が負傷し、あの男が作り出した帝都を護って『壁』がもろくなっていたからだろう。
負傷の原因は我。
というより、あの程度で半死状態になるクロムウェルの落ち度だな。
我は悪くないのだ。
「例えるならば。ランズゲルグのクロムウェルは昆布、皇女は藻なのだ」
意外に脆弱であったクロムウェルだが。
優秀な術士であることは確かだ。
「こ……昆布、藻？　藻ですか？　わかめではなく？」
「藻、だ。わかめはセイフォンの王宮術士ミー・メイだ」
「……昆布に藻。そしてわかめ……私達は第二皇女の話をしていたはずなのですが」
眉を寄せて言うカイユの水色の瞳に濃く浮かぶのは……我にはうまく表現できぬが、これは呆れや軽蔑に近いような気がするな。
「誰が誰のだって！？　気持ち悪い言い方はやめろクソジジイ！
それに例えが意味不明で、カイユにも俺様にも理解不能だ！！　こんな時は、またまたダルフェにパァアア～スッ！」
＜青＞は我を掴み、腕を回転させながらダルフェへと投げつけた。
「！？　陛下、やめっ」
我の身体は、ダルフェの後頭部に直撃した。

「痛ってぇえええ～っ！！」
＜色持ち＞ならば避けられた速度であったのだが、未だにカイユに踏みつけられている状態のダルフェは我を避けなかった。
痛みに悶絶するダルフェを見下ろすカイユの満足気な笑みに、ダルフェが避けなかった理由を見た気がした。
「はぁ～全く……陛下、さっきから実は第二皇女の件で脳内大混乱でしょう？　なんか痛々しい域に到達してますよ？　金勘定は得意でも色恋ネタは苦手ですもんねぇ～」
ダルフェは床石にめり込んだ顔面をあげ、右の小指を耳の穴に突っ込みながら言った。
「あ～あ、鼓膜がいかれちまった。ま、すぐ治るからいいけどね……え～っと、昆布と藻の件ですが、数日前にわかめサラダを姫さんが美味そうに食ってるのを見て、旦那は海草に興味持ったんです。で、海草の本を読んでる途中で……海草がマイブーム？　的な？　昆布は料理の素材にも出汁にもなる優秀な食材で、藻は腹の足しにもならないって感じです。分かりましたか？」
「……ダルフェ」
＜青＞は目を閉じ、額を押さえながら答えた。
「俺様、菓子は作るけど料理はしねぇからいまいち分からん。簡潔に頼む」
「旦那の評価がクロムウェル＞第二皇女ってことです」
「最初からそう言えよ……専門の解説員が必要な例えなんかやめろ、ヴェル！」
「いつから俺が旦那専門解説員に就任したんすか？　ま、手当て増えんならいいですけど……カイユ？」
カイユの足が、ダルフェの背から床へと移動した。
その足先を名残惜しげに目で追いながら、ダルフェが起き上がった。
立ち上がると制服の裾をはらい、カイユの横に立った。
「ヴェルヴァイド様。トリィ様はその藻皇女が転移でスキッテルの

店から去ったと、そう仰っていました。藻レベルの術士では、転移は不可能なはずです」

「確かに、それって変だよなぁ～。さっすがハニー！」

転移といっても。

店外へ移動しただけだが。

「低レベルの術士が、転移なんて高等なことをやったわけか……まさかっ！？」

あの程度のことなら。

術士であるなら、それなりの代償を払う覚悟があるならば可能だ。

金銭的にも肉体的にも、な。

「その女、魔薬（ハイドラッガー）を使ったのかっ！？」

「ダルフェ？　なに言って……」

この様子では、カイユはそれに関しての知識はないな。

ダルフェは……当然ながら、知っている。

＜赤の竜騎士＞であったダルフェは、それを知っている。

ダルフェの言葉に、＜青＞が目を見開いて我を見た。

「魔薬（ハイドラッガー）だって！？　そんな、馬鹿なっ」

魔薬。

それは＜黒の大陸＞で軍事目的に開発された。

術士の能力を強化、向上させる薬物。

「ちくしょうっ！　俺様を出し抜いて、密輸した奴がいるってことかっ」

「魔薬（ハイドラッガー）……私は初めて聞く名です。しかも密輸なんてっ、あれだけ徹底して管理を……陛下、どうなさいます？」

それを投与した術士を戦に大量投入した結果、多くが死んだ。

戦ではなく、薬の副作用で。

そのため＜黒の大陸＞では、術士が絶滅寸前だ。

「あ～あ。魔薬撲滅に熱心な＜黒＞の爺さんが知ったら、憤死もん

だなぁ。ま、どうせもうすぐ死んじまうけど。旦那、皇女を捕らえて調べますか？」

＜黒＞の息子の死には。

魔薬が関わっている、と。

「否。捨て置け」

以前、＜赤＞が言っておったな。

我は詳細は知らぬが。

「所詮、いかに足掻こうと、藻は昆布にはなれぬのだから」

もっとも。

藻が昆布になりたいなどと、考えるかどうか。

我には分からぬし、興味も無い。

「いいかげん海草から放れろ、じじい！　つーか、藻って海草なのか？」

「……ダルフェ。我の問いに答えよ」

「なんっすか？」

「この海綿も海草なのか？」

海綿を握った手を掲げて訊くと。

「……なんで旦那はこうなんだかなぁ。はぁあああ～……」

返ってきたのは、溜め息だった。

我の大切なりこに使用するこの海綿の正体のほうが。

皇女が魔薬を使ったかどうかより。

四竜帝等の探す『導師』の正体より、我には重要なのだがな。

「ヴェルは興味なくても、俺様……＜青の竜帝＞としては大問題だ。密輸は絶対に許せない。大陸間貿易は青印商事の稼ぎの大黒柱なんだ！　俺様は俺様で動く！　カイユ、バイロイトに連絡をっ」

「陛下……前々から思ってたんですが。青印商事って名前やめて、もっといいのに変えません？」

「黙れ、ダルフェ。陛下のセンスにケチを付ける気！？　バイロイトに連絡する前に、カイユは陛下に確認したいことがあります」

「？　なんだよ、カイユ」

「陛下は皇女が帝都に居るのを、ご存知だったのですね？」
「うっ！？　えっと、そのっ、カイユ、黙っててすまんっ！」
「カイユはトリィ様に夫の元愛人と面会なんてこと、させたくありません」
腕を組み仁王立ちするカイユに、主である＜青の竜帝＞が両手を顔の前で合わせて謝っていた。
＜黒＞が目にしたならば文句どころか、卒倒するやもしれぬが。
我は気にならぬし、ダルフェも苦笑するのみであって声に出して何かを言う様子もない。
「実は謁見申し込みがなん回もあったんだけどよ……いろいろ理由をつけて、ずっと断ってたんだ」
「ヴェルヴァイド様と関係のあった女など……。問答無用で、帝都から追い出してくだされば良かったのに。面倒ですから、今からカイユが殺してきましょうか？　殺すついでに拷問にかければ、魔薬の入手経路も分かって一石二鳥です」
殺すついでに、拷問。
カイユよ、ついでの使用方法が少々変なのではないか？
「それは駄目だ、カイユ」
嬉々として言うカイユを、＜青＞がたしなめた。
「まだ魔薬を使ったと決まったわけじゃねぇし……転移ができたのは、皇女が術士として鍛錬を積んだ成果だってこともあるだろう？　とにかく、殺すなんてことは絶対に駄目だ！」
これを甘さととるか、美点とすべきか。
我が『藻』と言ったのを＜青＞は聞いておったのに、有りもしない『可能性』を口にする。
術士に必要なのは努力ではなく、才能。
昆布は生まれつき昆布であり。
昆布になれぬ藻は、藻のままで朽ちるのだ。
「カイユ、あの皇女はヴェルことがすっげぇ好きなんだ……今までの他の女達と違って、ヴェルに会いたくて帝都に乗り込んできて、

俺様にライバル宣言するくらい愚かで真っ直ぐな女だ。考えようによっては、いい機会なのかもしれない。ちゃんと別れさせて……先に進ませてやりたい。だってよ、あの皇女は１５ん時からヴェルと……嫁にもいかないで、１０年間ずっとヴェルだけなんだよ。……だから……」

答えたのはカイユでは無く、緑の瞳を細めたダルフェだった。

「なら、なおさらやめましょうや、陛下。女ってのは、陛下が思っている以上に怖い生き物っすよ？　人間の女と5股で付き合ってたのがばれて揉めた俺が言うんだから、間違いないです。ここは修羅場経験者である俺の意見を……ぶごっ！？」

ダルフェの口には、我の海綿。

カイユが我の手からそれを奪い取り、ダルフェの口に押し込んだのだ。

「黙れ、役立たずがっ！　……5股ってなに！？　後で詳しく話してもらうわよ？　ヴェルヴァイド様、新しい海綿を用意いたしますからご心配なく」

カイユは手を伸ばし、ダルフェの口を凝視しつつ後ずさりをした＜青＞の両手を握った。

「ひぃっ！？　カカカ、カイユッ、俺様はそのっ！」

強引なまでに硬くその手を握り、カイユは笑んだ。

これがりこが褒め称える、透明感のある微笑みという笑みだろうか？

我には透明ではなく、なにやら濃いものに感じられるのだが。

「分かりました、陛下。そうですわね、よくよく考えれば憐れな皇女です。帝都から追い出すなんて、そんな意地の悪いこと言うべきじゃなかったわ……。陛下、明日は皇女を歓迎して差し上げましょう！」

その言葉に、ダルフェと＜青＞が怪訝な視線をカイユへと送る。

「カイユ？」

「ハニー？」

カイユはいっそう晴れやかな笑顔で、言った。
「ヴェルヴァイド様とトリィ様の仲睦まじい様を見せ付けて、皇女の未練を完膚無きまでに踏み潰して粉砕してやりましょう！」
「げっ！？」
「ぶはぁあっ！　ハ……ハハッ、ハニー！？　それって、意地の悪いを越えてるって！！」
ダルフェは海綿を勢いよく吐き出し、袖で口を拭いながら言った。
「もうっ、汚いわね。……ふふふっ、新しい恋への後押しと言ってちょうだい」
新しい恋への後押し……後押しした場合、前の恋はどうなるのだろうか？
恋とは後押しすると古いものが押し出され、次々発生するものなのか！？
我にはよく分からぬな。
我の恋は、後にも先にも一つだけなのだから。

第９６話

ダルフェが開けた扉から、勢いよくこちらへと突進し。
「＜監視者＞様！」
＜青＞が各国要人との会談に使っているいくつかの部屋のうち、最も色彩豊かな内装のそこで。
メリルーシェの第二皇女は、その細い腕で我を捕獲した。

「貴方様がわたくしを、こうして出迎えてくださるなんて！　あぁ、夢のようですわっ」
我の胸部に顔を押し付け、皇女は擦るように動かした。
「……」
出迎え？
そのようなつもりは全く無いのだが。
「……嬉しい……わたくし、とても嬉しいっ……」
皇女が嬉しいかろうと、我には関係が無い。
「あぁ、わたくしの愛しいお方……こうして貴方様に再び触れることができるなど、思ってもいなかった……わたくしは、わたくしはっ」
途切れた声と、溢れる涙。
我を抱く腕に、さらに力が加わる。
「貴方様に妻がいようと、他に愛する者がいようとわたくしの想いは変わりませぬっ」
この皇女は、他の女達と少々違う。
「わたくしは初めて御会いした日より、貴方様を……この世で最も貴方様を愛しているのは、このわたくしですわ……」
自分の思うままに我に触れ、愛を告げる。
欲しがらぬ我に、自分の全てを叩きつけてくる。

「＜監視者＞様……」
我を見上げる潤んだ瞳より。
微かに震える艶やかな唇より。
乳白色の衣装から、せり上がるようにその存在を主張する乳房より。
「……」
我が気になったのは。
高く結い上げた髪を飾る、大粒の真珠で作られた花。
この真珠のように。
我のかけらでも髪飾りが作れそうだな。
「……」
りこの黒髪を、我のかけらが飾る様を想像していたら。
「なににやけてんですかっ！　もしや、あんたも陛下同様巨乳好きなんですかっ！？」
我から皇女を剥がし、＜竜騎士＞の言動に目を見開く皇女の肩を軽く押し、用意されていた椅子に座らせるとダルフェは言った。
「ハニーに旦那の貞操（？）を死守しろって言われてるんです。俺の目が黒いうちは他の女と乳繰り合うのは許可できませんっ！　ま、俺が死んだらジリが見張りますがねぇ……ったく、一応あんただって竜族なんですから、つがいだけにしときなさい！」
「ダルフェよ、お前の目は緑だ。黒くないので、つまりは『許可』しているということか？　だが、我はりこの乳以外興味が無いので許可は要らぬぞ？」
「は？」
ダルフェの口の端が、ひくひくと動いた。
それは、カイユによく似ていた。
夫婦とは。
似るものなのだな。

りこに会わせる前に、我がこれと会う必要がある。
我がりこと共に南棟にてこれを迎えなかったのは、＜青＞が強く主張し提案した結果であって、我の意思で此処に居たとは言い難い。
「皇女よ」
＜青＞は皇女が魔薬（ハイドラッガー）を使ったかどうか、徹底的に調べると言っておったが。
我に、これの頭を見ろとは言わなかった。
頼みもせず、願わず。
＜青＞は……ランズゲルグには。
我を使おうという考えが、あれの脳内には全く無いのだ。
「出せ」
ランズゲルグの頭の中を見ずとも、それが分かる。
何故、分かるのか。
何故、我はランズゲルグの提案に従ったのか。
海綿疑惑のあるランズゲルグの脳の思考回路より、我にはそちらのほうが分からない。
我としても、不思議ではある。
が、不快ではないので良いのだ。
「出せ」
「え？　あのっ……？」
立ち上がり、皇女は我へと数歩寄った。
皇女の座っていた椅子が我の視界に入り、その脚の彫刻が複雑な球根形の細工を施した珍しい物だと気づいた。
「旦那、それじゃ分かりません。せめて『出せ』じゃなく『見せろ』って言えばいいでしょうに。あのね、皇女様。あんたが持ってきた異界の品を見せろって、この人は言ってるんですよ」
壁に寄りかかるようにして立っていたダルフェが、皇女に歩み寄った。

毛足の長い緋色の絨毯の上を、黒革の長靴が移動する。
「……ふ～ん、シュノンセルとは違うタイプの美人だねぇ。まぁ、あの女帝とあんたじゃ格が違うけど」
竜騎士専用のそれは戦闘用に作られたものであり、通常のモノより数倍硬く重い。
使い様によっては武器にもなる、特殊な品物だ。
だが、ダルフェが身につけると黒い猫のようにしなやかで軽く見えた。
蜥蜴蝶を素材にした詰襟の青い制服の腰には、細身の剣。
それに添えられた手には白い手袋。
「……シュノンセルとは、どなた？」
皇女はダルフェを見上げ、問うた。
硬い声だった。
「＜赤の大陸＞にいた、旦那の女だよ。あんたと違って優秀な術士でね、＜監視者＞に殺されることが出来たんだ」
「そうですか……つまりその方は、自らの意思で異界の生物をこちらへ落とし、処分対象となられたのですわね？　確かに優秀ですわ」
我はシュノンセルを＜処分＞した。
我がこの手で殺したのに、それはシュノンセルの『自殺』だったのだとブランジェーヌは言っていた。
息子を足蹴にしながら、シュノンセルは我の情人だったと言っていたな……。
＜赤＞も＜青＞も、情人やら愛人という呼称に何故拘るのだろう。
あれもこれも、女は女。
我と交わっただけの女という生き物であり、以下でも以上でも無いのだ。
「俺が見てきた“お手付き”の女達の中じゃ、見た目も中身もシュノンセルがやっぱり一番っすねぇ～。　ったく、なんであんな簡単に殺しちまうかねぇ……あんな良い女、もったいない」
皇女を見下ろし、口の端をあげて言うダルフェに皇女の眉が微か

に動く。
それ以上変化は無く、それだけだった。
傅かれることに慣れた皇女だが、ダルフェの態度や言葉に不満を露にするほど愚かではないようだった。
メリルーシェの第二皇女であることは、竜騎士にとっては頭を垂れる理由にならぬことを理解しているのだろう。
皇女は乳白色の衣装の布の間……腰のドレープ部分に右手を差込み、白い絹布に包まれたものを取り出した。
手の平に収まるほどの大きさのそれを包みから出し、両手に乗せ我に差し出した。
「わたくし、＜つがいの君＞にこの異界の品をお見せし、もしご希望ならば差し上げたいと考えております」
「ふ～ん、それをうちの姫さんにくれるの？　金属製の玩具か？」
軽い口調とは反対に、緑の瞳には鋭さが増す。
ダルフェは皇女を観察し、魔薬の痕跡を探っているのだろう。
「さあ？　これが何であるか異界の方ならご存知でしょうから、ぜひお聞きしたいと思っていますの」
「異界の物は宝石類なんかより貴重で高価だから、手放さない人間が多いんだけどねぇ。ま、こんなんで＜監視者＞とこうして会えるんだったら、安いモンか」
この皇女を、ダルフェはわざと刺激している。
感情を昂ぶらせ、術式で攻撃されることを望んでいる。
「あんた、分かってたんだろう？　お人好しの＜青の竜帝＞なら、姫さんに会わせる前にあんたと旦那が話す時間を作るって。だからスキッテルの店で旦那じゃなく姫さんに……皇女様の計算通りに進んで、満足だろう？」
それが最も簡単な魔薬使用者判別方法だからな。
ダルフェは警戒し、剣から手を離さない。
我を守る為などではなく、自分の身を守るためだ。
「……＜つがいの君＞は異界の御方。故郷の品は、多少なりとお心

を慰めることができるかと……＜監視者＞様、貴方様の奥方様とわたくしは良き友人になれると思います。力ある者が后を複数持つ事は当然です。今後は妾妃の一人として、わたくしをお側に置いてくださいませぬか？」

妾妃？

妾妃など、我には不要だ。

「……異界の品か」

我はこの第二皇女に興味が無い。

金属で出来たこの異界の品物にも、興味は無い。

これとりこを会わせることも、異界の品をりこに見せることも反対する気が無い。

「我のりこは」

我が興味があるのは。

異界の品を手に取ったりこがどのような表情をし、感情を抱くかということだ。

以前、＜青＞が異界の玩具をりこへと持ってきた時。

我はそれを、この手で壊した。

りこは、我を責めなかった。

「喜ぶ、だろう」

我に与えられたのは。

不注意を罵る言葉ではなく、刃物も通さぬ硬い鱗に覆われた手指を案じるモノだった。

それは罪悪感では無く、快感を我に与えた。

何度でも、味わいたいほどの悦楽。

「り……りこ？」

だから。

「りこ？　……ひぐぅっ！？」

我は右手で掴んだ皇女の首を、すぐに放した。
痕が出来るやも知れぬが折らなかったので、我ながら上出来だ。
「その名は夫である我だけのものだ」
同じ過ちを犯した豚教主は挽き肉した我だが、この皇女は挽き肉にはしない。
「二度は無い」
座り込んだ皇女の前に膝を着き。
緊張ゆえか、汗ばんだ額に張り付いた前髪に触れた。
指先が触れると、青ざめた顔が一瞬のうちに変化した。
「＜監視者＞様、わたくしは……貴方様を……」
熱いほどに、あたたかい皇女の肌。
肌を重ねた時は感じなかった、気づかなかった温度……体温。
我から触れたのは、初めてだからか？
意思を持って我がこの皇女に触れたのは、これが最初であり最後。
「ダルフェ。これの化粧を直し、髪を整えろ。これの首に装飾品を」
「俺は料理は出来ますが、化粧は無理っす。専門の者を呼んで、すぐに済ませます。ったく、一国の皇女が侍女の一人さえ連れこないなんてね……それと、首ね。装飾品……う～ん、ハニーのを借りるかなぁ」
この皇女は、我の前に他の女を同行させたことは無い。
「皇女よ」
皇女の管理するメリルーシェの＜竜宮＞で我が目にしたのは、男のみだった。
どの国の＜竜宮＞も女ばかりだったことを思うと……。
今まで気にしたことはなかったが。
皇女が女より男が好きだからか？
それとも、この皇女は自分以外の女が嫌いなのだろうか？
「我はお前が昨日のように、美しい女であることを望む」
昨日のこれがどうであったかなど、我には記憶が無い。

居たのは分かっていたが、見てはいないのでな。
「あぁ、貴方様がわたくしを美しいと……＜監視者＞様っ……」
昨夜、りこはこれが『綺麗な皇女様』だと言った。
＜青＞のもとから南棟に戻ると、りこは寝台にいた。
夜着に包まれた膝を抱くように座っていた。

――おかえりなさい、ハクちゃん。
――――りこ……風呂から出てしまったのか。
――――ねぇ、ハクちゃん。メリルーシェの皇女様……綺麗な皇女様だったね。
――――そうか？
――――うん、すごく綺麗な人だった……綺麗過ぎて張り合う気にもなれないから、明日はある意味気楽かなぁ～ははははっ……はぁああ。

りこはカイユを綺麗だと言い、ランズゲルグも綺麗だと賞賛する。
カイユもランズゲルグもりこの気に入りだ。
りこは、綺麗なモノが好きだということ。
ゆえに、我はりこの好む綺麗なモノを集め、りこの周りをお気に入りで埋め尽くす……この世界をりこにとって好ましい、価値あるものにするために。
だが、我にはりこの好む綺麗が分からない。
カイユとランズゲルグだけでなく、我までも綺麗だと言うりこの綺麗が分からない。
「皇女よ」
我はりこから生まれ育った世界を奪い、家族を捨てさせた。
我はりこにこれから生きる世界を与え、望む全てを得させたい。
手に入れたそれらを、手放したくないと望む世界を。

最高の檻を、貴女に。

「我のために、美しく……綺麗な皇女であれ」
「＜監視者＞様の……貴方様のために？」
顔色が悪く、髪の乱れた女では困るのだ。
「そうだ。我を失望させるな」
温室に咲く花のように、りこの目を愉しませるモノであれ。
「は、はいっ！」
午前中のシスリアの書き取り試験で合格点まで１２点足りなかったことで落ち込むりこの、よい気分転換になれるやもしれぬ。
「貴方様がわたくしを美しいと言ってくださるなんて……あぁ、夢のようです……妃になり老いた姿をお見せするよりも、美しいと思ってくださったわたくしを憶えていていただくほうが良い……えぇ、そのほうが、きっと……。ずっとお断りしていましたが、決心がつきました」
我に向けられた皇女の笑みは。
今までのものとは、何かが違った。
それがなにかは、我には分からなかった。
分かろうとする気力も起こらぬので、考えるのはやめた。
「貴方様の妃ではなく、わたくしは隣国に嫁ぐことにします」
嫁ぐ？
りこがこれを気に入ったならば、メリルーシェの王に貰おうと思っていたのだが。
鯰の代わりにしようかと……。
「そうか、嫁ぐのか」
鯰は老いても見目がたいして変わらぬが。
これが老いたら……人間の女は、すぐ老いて死ぬ。
「最後に、お願いがございます」
この皇女をりこの観賞用の愛玩動物としても、短期間しか使えぬし。
よくよく考えてみれば、“ぬるぬるむちむち”でないこの皇女で

は、鯰の代わりにはならんしな。
「わたくしの名を、呼んで頂けませんか？」
立ち上がろうとした我の左腕に、皇女の手が伸びて。
「出来ぬ」
寸前で、止まった。
「な、何故ですか！？　抱いて欲しいと願ったわけではなく、ただ……ただ一度、わたくしの名を貴方様にっ……」

「我はお前の名を知らぬ」

「……う……う、そで……そんな……わたくしと貴方様は１０年もっ……」
見下ろした皇女の目は、淡い茶色をしていた。
今日。
今、それを。
我は、初めて知った。
「わ、わ、わたくしの名はっ……」
「名のらずともよい」
鯰の目玉は何色だったのだろう？
皇女の名は知りたいとは思わぬが、あの鯰の目玉の色が何色かは知りたいとは思う。

「我にはお前自身もその名も、必要の無いモノなのだから」

ナマリーナよ。
皇女のことよりお前のことが、我は気になるのだ。

第97話

昼食後、ハクちゃんは迎えに来た竜帝さん手を引かれ、部屋から出て行った。

竜帝さんは「俺について来い！　逃がさないぞ、このクソじじいっ！！」と言った手前、どうしても前を歩きたかったみたいで、まるで競歩のような歩き方でハクちゃんを強引に引っ張って去っていった。

女神様はハクちゃんに皇女様を会わせるのだと、ちゃんと私に教えてくれた。

だから、私はハクちゃんに「行ってらっしゃい」と言うことができた。

正直に言うと、内心はとても複雑だったけれど……行かないでという言葉を、飲み込むことが出来た。

「トリィ様、本当に良いのですか？　お嫌ならカイユが追い払っ……お断りしてきますよ？」

今日のカイユさんはレカサではなく、青い騎士服を着ていた。

腰には朱塗りの鞘……＜赤の竜帝＞、ダルフェさんのお母さんから贈られた刀。

高い位置で一つに結われた銀の髪には、澄んだ空色の宝石が煌めく銀の髪飾り。

「ううん、大丈夫。……ありがとう、カイユ」

鏡台の前に座る私の髪を梳かすカイユさんの手には、白い手袋。

鏡の中の水色の瞳が、膝の上に置いた両手をぎゅっと握った私に気づき……細められた。

「陛下のくださったドレス、とてもお似合いですわ。この青はトリィ様の黒髪を引き立てますし、かけらのネックレスも深海に舞う真珠のようです。ふふっ、これが元々はヴェルヴァイド様の中身だな

んて、見た目はだけでは全く分かりません」
「……カイユ。ハクちゃんは皇女様の名前を知らないって、私に言ったの。それって、酷い……あの皇女様は知っているのかな？　スキッテルさんのお店で会った時、あの人がハクちゃんのことをすごく好きなんだって私にも分かったのに……」
　ずっと、思ってた。
　ハクちゃんの過去の女性に会ったら、私はすごく嫉妬してしまうって。
「名すら知らぬと？　まったく……＜赤の竜帝＞陛下が以前、ヴェルヴァイド様は女にとって最低最悪だと仰っていましたが、本当に酷いものですね」
　嫉妬して、嫉妬して。
　感情が荒れ狂って、ハクちゃんに八つ当たりしてしまうんじゃないかって思ってた。
　でも、ハクちゃんの皇女様への態度、言動を目の当たりにした私には……これは同情なんかじゃく、同じ人を愛している女としての……。
「ハクちゃん、ちゃんと皇女様とお話できたのかな……」
　彼女からすれば、私はいきなり現われて愛する人を奪っていった女だ。
　嫌われて……憎まれて当然だし、私が彼女の立場だったら……どうしただろう。
「無理でしょうね。ヴェルヴァイド様のことですから何も言わないか、いらぬことを口にして皇女を傷つけるだけでしょう」
「そんなっ」
「どんなに皇女がヴェルヴァイド様を愛そうと、その想いはあの方には伝わらない。ヴェルヴァイド様には彼女の辛さや苦しさを理解できない……しようという気すら、お持ちでは無い。そんなあの方に皇女を会わせるなんて、陛下も残酷なことを……まぁ、良かれと考えてのことですが、あのような酷い男に心を奪われた女の気持ち

が、恋を知らぬ陛下にはまだお分かりにならないのです」
カイユさんは持っていたブラシを鏡台に置き、膝で握ったままの私の手に右手を重ねた。
「トリィ様、貴女が」
長身を屈めて、右手で私を後ろからそっと引き寄せて。
「皇女を救って差し上げてくださ い」
私を優しく抱きしめて。
「ヴェルヴァイド様への報われぬ想いから、解放してあげてください」
そう、言った。
「……」
答えることが出来ない意気地無しな私の手を、カイユさんがぎゅっと握ってくれた。

ダルド殿下と会った時のように、温室にテーブルと椅子を準備した。
今回はカイユさんが1人で運び込み、温室の中央部分にあるドーム型の天井の真下にセットした。
前回使ったような大きなテーブルではなく、ティーセットを置くのがやっとなサイズの猫脚のローテーブルだった。
私が手伝えたのは、テーブルの上にガラス製の八重咲きの造花を置くことだけだった。
皇女様なんてセレブな人種をお迎えするのにこれで良いのだろうかと、カイユさんに尋ねると。
一一一あれは人間の皇女であって、竜族にとっては『皇女』であることに意味などありません。
そう言って、にっこりと笑った。
「……ねぇ、カイユ」

天板が淡いローズピンクの大理石で、透明なガラスでできた花に色が透けてとても綺麗だった。

「どうして竜帝さんは、これを着て皇女様に会えって言ったの？」

今朝、竜帝さんがわざわざ持ってきてくれた、青いドレス。

裾には銀糸で細かな刺繍が施され、肌の露出を最低限に抑えるために長めに作られた袖も裾と同じように丁寧な刺繍で肘部分まで飾られていた。

このドレスの青色は、カイユさんの騎士服と同じ色だった。

「トリィ様がこの色のドレスを着ていれば＜青の竜帝＞が貴女のことをとても大切にしているのだと、誰が見ても分かるからです。陛下が同席しなくとも第二皇女にはそれが伝わり、第二皇女が帰国すればそのことは父親である王に報告されるでしょう」

「王様に……報告？　それって……」

私といる時はいつもレカサを着ているカイユさんも、今日は青い騎士服だった。

そのことにも、意味があるんだろうけど。

騎士服を着て、刀も手袋もしてる……＜青の竜騎士団＞の団長って立場で、今日は同席するってことなのかな？

「政治的な事は、陛下にお任せください。陛下は恋愛問題には全く使えない方ですが、政治家としては優れた面もお持ちですから。……やっぱりもう少し右にしましょう。この位置では陽が当り過ぎます」

カイユさんは薔薇の刺繍が鮮やかに浮かぶ張り布がされたソファーを、片手で軽々と持って右に移動した。

ソファーの位置に合わせて、他のものも動かす……もちろん片手で。

「さぁ、ここにお座りください。２人がけですから、ヴェルヴァイド様とお使いくださいませ……あら？」

胸ポケットから電鏡を取り出したカイユさんは小さく頷き、満足気な笑顔を私に向けた。

「ダルフェから連絡です。ヴェルヴァイド様が皇女を伴い、こちらへ向かうと……転移ということは、すぐですわね！　さぁ、急いでお座りください、トリィ様」

その言葉に、私はいつ切り出そうかと考えていたことを思い切って口にした。

「……え～っと、カイユ。これじゃなくて、1人がけの椅子で揃えない？」

だって、だって！

皇女様の前でハクちゃんと2人がけソファー……それは商品名的には、ラブチェアってやつですよ！？

なんかいろんな意味でまずいっていうか、別れ話をされたであろう皇女様の前では嫌味っていうか、すべきじゃないっていいますかぁあああ！

ラブチェア、ラブラブチェア、ラブラブ…胸が痛むどころか、頭が痛いんですけれど！

カイユさんったら、さっきは皇女様を思いやるような発言をしていたはずなのに……うう、その笑顔が逆に怖い。

「ふふっ……2人がけに仲睦まじく座っていただき、トリィ様とヴェルヴァイド様の間に皇女が入りこむのは不可能だと思い知ら……教えて差し上げるのです。遠慮なさらず、普段通りにしてくださいね？」

「普段通り……そ、それはちょっと、さすがにまずいかと……」

今日のハクちゃんは人型。

人型のハクちゃんは日本人基準では、スキンシップ過剰なんです！

お客様、しかも元愛人（元って言わせて！）の前で普段通りになんてっ！！

「……トリィ様。1人がけの椅子の場合、ヴェルヴァイド様の膝に座っていただきますよ？」

ひっ！？

お客様（しかも元カノというか、元愛人！）の前で、ハクちゃん

の膝に座れと!?
「えぇ～っ、そんなの無理っ……っ!?」
ハクちゃんに座るって……うわっ!?
なんで思い出しちゃうのよ、私ってば!
今朝、おはようの挨拶(キス)をしてたら、何故かあれよあれよと突き進んでしまい……うわっ、うわわわっ～今ここで思い出しちゃ駄目よ!
「あああああのっ! 今朝はいつの間にやらあの態勢というか、状態になってたわけでしてっ! けっして自分から、ハクちゃんのお膝にのったわけじゃなくてっ!」
今朝は書き取りテストに備えるために、いつもより2時間早く起きたのに……勉強では無いことに時間を使ってしまった結果、また合格点を取れなかったわけでしてっ!
「トリィ様? どうなさいまし……」
「あ、え、いいです、それでいいです! ラブラブなラブソファーに、喜んで座らせていただきます!」
真っ赤であろう顔をカイユさんの視線から両手で隠し、かくかくと頭部を上下に動かして頷くしかなかった。

「りこ」

沸騰しそうな顔に、すっかり馴染んだひんやり感。
ハクちゃんの、体温。
「りこ」
ハクちゃんは私の両頬に大きな手を添えて上向かせ、額にキスを1つ。
「お帰りなさい、ハクちゃん……きゃっ!?」
ひょいっと抱き上げられ、黒いレカサを着たハクちゃんの腕に座らされた。

ううう、またお子様抱っこだ。
お姫様抱っこよりお互いの顔が近いから、最近のハクちゃんはこのお子様抱っこがお気に入りなんだよね……。
「なぜ踊っていたのだ？　珍妙な動きであったな」
頭部だけじゃなく上半身までも動かし、熱くなった顔を両手を開いてぱたぱたと扇ぐようにしつつ、カイユさんがラブラブ演出しようとしているソファーの前で立ち往生（？）している私を、ハクちゃんは“踊っている”と思ったようだった。
「踊り？　これはそのっ……あっ！」
ハクちゃんの後ろに立つ華やかな人影を発見して、彼の首に回した両腕に思わず力が加わった。
こちらを見上げる美女としっかりと目が合ってしまい、逸らすに逸らせず……結果、お互いを凝視することになって、気まずい空気が漂った。
「……御機嫌よう、つがいの君」
さ、さすが皇女様。
どうしていいか分からずに固まってしまった私とは違い、さっと切り替えて笑顔でご挨拶！
「こ、こんにち……はっ！？」
視線をずらした私の目に飛び込んできたのは……うわわっ！
今日はこの数日で一番寒いのに、お胸がぐぐっと露出した際どいラインで……でも、容姿がノーブルなせいかちっとも下品じゃない。
ウエスト部分に金糸で大きな牡丹に似た花が刺繍された光沢のあるミルキーホワイトのプリンセスラインドレス、真珠でできた髪飾り、胸元には大粒のルビーが輝く透かし細工の金の首飾り。
皇女様は、本日もなんて綺麗……ああ、同性の私ですら見蕩れるほど美しいです！
私に向けられた美貌に浮かぶ笑みには、昨日は無かった儚さが……ここへ来る前に、ハクちゃんに別れ話をされたから？
その儚さが彼女を昨日より、さらに美しく見せていた。

「あの、私っ……ハクちゃん、おろして！」
当然の要求をハクちゃんはスルーして、私を抱いたまま皇女様の方へと身体の向きを変え。
「皇女よ、我のりこは愛らしいだろう？」
などど、目と脳が腐れていると思われてもしょうがない発言をしてくださった。
「ちょっ！？　ハクちゃん！」
こんな美人から見たら私なんてどう考えたって底辺容姿なのに、あああ愛らしいとか言いましたか！？
きゃあああ～っ、なに言ってんのよぉおお！
「……」
ほら、皇女様のお口が呆れてちょこっと開いちゃったじゃないの！
「我のりこは綺麗なモノが好きなのだ。りこ、りこ！　どうだ？皇女は昨日と同じように“綺麗”か？　“綺麗”が不足しておらぬか？」
「ハクちゃん？　綺麗なモノが好きとか不足とか、また変なこと言って！　もうっ、とにかくおろしてよ！」
「……わかった」
真珠色の髪を軽くひっぱって抗議をすると、意外にもハクちゃんはすんなりと私を床へ立たせてくれた。
「ハクちゃんはここに座ってて」
私はハクちゃんの背を押してカイユさんの用意してくれたソファーへ誘導し、座ってもらうことに成功した。
あ、皇女様にも座ってもらって、お茶を……え？
無言で私達を見ていたカイユさんが、腰の刀に手を添えたまま皇女様へと歩み寄り……。
「メリルーシェの第二皇女。もしお前が術式を使おうとしたら、私はその首を落とす。陛下にもご許可をいただいている」
その冷たい声音に、背筋がぞくりとした。
「カ……イユ！？」

皇女様にも座っていただいて、とりあえずお茶を……なんて暢気に考えていた私の脳に、冷水を通り越して氷の塊がガツンときた。

首って！？

竜帝さん、なんでそんな許可を……この皇女様が逆恨みで何かするんじゃないかって、疑って？

彼女の気持ちを考えると……頬を叩かれるくらい、仕方ないかなと思けど。

ハクちゃんの目の前で、私が叩かれるわけにはいかない。

皇女様だろうと、ハクちゃんは……もしかして、だからなの？

竜騎士団の団長であるカイユさんの存在と言葉で、彼女を牽制することで彼女自身を守る……？

「銀髪に空の瞳の、美しい竜騎士……貴女はあの＜カイユ＞ね」

皇女様は自分を見下ろす長身のカイユさんを澄んだ薄茶の瞳で見上げ、愉快気に目を細めた。

「＜青＞の衣装に、青の竜騎士団の団長であるカイユ殿までお付けになっていらっしゃるなんて。青の陛下は随分と、つがいの君を気に入っていらっしゃるのね。……竜帝陛下の気に入られたつがいの君の前で首を落とすなんて、貴女には出来るのかしら？　この方は平民のご出身でしょうから、きっと耐えられませんわよ？」

「……貴様っ」

うわっ、この皇女様すごい！

カイユさんに負けてない。

あ、そっか。

世間で＜監視者＞として怖れられて、しかも悪役魔王様顔のハクちゃんと付き合ってたくらいだから、根性が座ってるっていうか、精神的にも強い女性なんだ……昨日、ハクちゃんに完全無視されてもめげなかったくらいだし。

「カイユ、申し訳ないんだけどお茶を淹れてもらってもいい？　あ、あの！　どうぞ、こちらにお掛けくださいっ……お、皇女様……」

あぁ、今日も名乗ってくれないから名前が分からないっ、皇女様

としか呼べない！
　この雰囲気の中で私がいまさらトリィですって名乗るのも微妙だし、あちらからお名前を教えてくれないと訊くに訊けない。
　気のせいかもしれないけれど……この皇女様、今日も自分から名前を言う気が無い気がする。
「トリィ様、カイユはお側を離れるわけには……」
「ハクちゃんがいるから、大丈夫！　ね、カイユが心配するようなこと、何も起こらないから」
　美女2人が作り出す剣呑な空気をなんとかしたくて、そう言ったけれど。
「お構いなく。用事が済み次第、お暇致しますから。邪魔ですから、どいてくださいカイユ殿。つがいの君、わたくしはカイユ殿ではなく、貴女に用があって来たのです」
　当の皇女様は空気が悪かろうと雰囲気が重たかろうと、お構いなしだった。
　一気に眉が釣り上がったカイユさんを完全無視に無視し、皇女様は私へと近寄って……私へと差し出した腕の動きに合わせるように、彼女の香水がふわりと香った。
　華やかさを甘さが包み込んだような、フローラル系の香りだった。
　それは誰もが使えるような香りではなくて、強いを感じさせる香りで……この香り、昨日は気がつかなかった。
　昨日はつけてなかったのかな？
「これが何か、わたくしに教えていただけるかしら？」
　彼女が私へと差し出した手には、光沢のある白い布に包まれた平たい物体。
　手入れされた爪を持つ指先で、皇女様は包みを取り去った。
　現れたのはルビーピンクの……。
「それ……携帯電話っ！」
　しかも、妹のりえが前に使っていたのと同じ機種！
　確か着信時やケータイの開閉時に、背面ディスプレイに綺麗なイ

ルミネーションが……りえのと同じ機種なんて！
りえ、りえちゃん……やだ、泣きそう！
「あ、あの、これは遠くの人と連絡をとる道具なんです」
「つまり、伝鏡のようなモノかしら？　あら、お手が震えてますわ」
手が震えているのは、自分でも分かってた。
家族の顔が、声が。
頭の中で膨張して弾けそうなほど、一気に浮かんでくる。
「用途は基本的には伝鏡と同じですが……これには……画像や音楽も入れられて」
もし……もし、もしもこの携帯が使えたらっ！
この世界から家に電話できるはずないって、中継アンテナ塔さえ無いんだから使用不可能だってことも頭では理解しているのに、心のどこかで奇跡に期待してしまう自分がいる。
「ハク、ハクちゃん！　これ、すごい物だよ!?　妹も同じの持ってたのっ！」
興奮を抑えきれずに勢いよく振り返って、私がハクちゃんにそう言うと。
いつものようにハクちゃんは足を組んで座り、金の眼で私を見ていた。
瞬きもせず、真っ直ぐに。
「そうか」
色素の薄い唇が、ほんの少しだけ孤を描く。
整い過ぎて作り物のような顔の印象が、それだけで随分と変わる。
氷の彫像に、命が芽吹く。
「すごい、か。良かったな、りこ」
「ハクちゃん……」
ハクちゃんの顔と声に、興奮がすっと冷めた。
あぁ私、またやってしまった。
ハクちゃん……今の私を見て、どう思っただろう、どう感じただんだろう？

「ハク、私……えっ！？」
皇女様が私の手をとり、携帯を強引に握らせたことに驚いていると。
「差し上げますわ、遠慮なさらないで」
私より背が高い皇女様は顔を寄せ、私を覗き込むようにしてそう言った。
「あ、ありがとうございます。でも、私にはこれは必要の無いものです……お返しします。見せてくださってありがとうございました」
握らされたそれを手放したくなくなる前に、今度は私が皇女様の手をとって携帯を渡そうとしたら。
先に皇女様が私の手をとり、携帯を握っている私の手の甲を優しく撫でた。
「……あ、あのっ、手……」
柔らかな手のひらで、８の字を書くように。
「ねぇ、聞いてくださる？」
それは、とても優しい動きで。
優し過ぎて……振りほどけない。
「え、あっ……」
私を見ていた茶色の瞳が、動いた。
薄茶の目が私ではない、誰かを映す。
「あの方。わたくしの名を知らないのですって」
それは、白い……。
ハク。
「あなた、それを知ってらしたんでしょう？」
「わ、私は……つっ！？」
私の手を掴む皇女様の手が、熱湯のように熱くなった。
「りこっ！！」
あ。

ハクちゃん……ハク？
ごめんな……さい、ハク。
答えたいのに声がっ、声が出……ないの。

「……りこ？」

あ……やだ、なんで！？
貴方に触れたくて、腕を伸ばしたはずなのに……届かない。
私の手、どこにいっちゃったんだろう？

「ハニーッ！　カイユ、カイユ！」

アナタ　二　トッテ
ナ　モ　シラヌ　オンナ

「ダ……ルフェ？」
「しっかりしろ、カイユ！　何があったんだ！？」

コノ　ワタクシ　ガ
アナタ　ノ　ココロ　ニ

「ダルフェ、ダルフェ！　トリィ様がっ……トリィがっ！」
「まだ動くな、カイユッ！　やめろっ、立ち上がるんじゃないっ！
左腕が千切れちまうぞっ！！」

ツヨク　フカク　キザマレル

「っち！　天井が落ちたのか……めちゃくちゃじゃねぇかっ！」
「腕なんかどうでもいいっ！　ダルフェッ、テオ！　動くなと言うのなら、あの女をここへ引きずって来て！！　この手で引き裂き、咽喉笛を喰いちぎってやるっ！　あの女だけじゃないっ、メリルーシェの人間を全部八つ裂きにしてやるっ！　許さない、許さないっ！！」

アナタ　ガ　イラヌ　ト　イッタ

「落ち着けっ、カイユ！　お前は俺やセレスティスとは違うんだ、無理するんじゃないっ！　姫さんはどこだっ？　旦那はっ！？」
「あぁっ、なんてことっ！トリィ、私のトリィが！　ダルフェッ……テオッ！　あの女がっ、あの女が！」

ワタクシ　ノ　ナ　ハ

「あの子が、私のあの子が！　あの女がっ……あの女が私達の娘をっ！」

ワタクシ　ハ

「私の娘を殺したっ！！」

ワタクシ　モ
リコ　ナノ　ニ

第９８話（前書き）

＊流血表現あります。苦手な方はご注意を！

第９８話

「私はっ……私はまた、守れなかったっ！！」

胸を裂かれるようなその叫びに、俺はハニーを抱く腕にさらに力を込めた。

「カイユッ！　落ち着くんだっ、大丈夫だから！　旦那がいるんだから、大丈夫に決まってる！」

大丈夫と言いながら。

何がどう大丈夫なんだか、言ってる自分も分かっていない。

今の俺の頭を占めるのはカイユのことだけで、姫さんのことなど考える余裕など無い。

カイユは、カイユが俺の全てなのだから。

これ以上心に負担がかかったら、カイユは……完全に壊れ、狂ってしまった竜騎士は生かしておくには危険すぎる。

自我を失い獣に堕ちた竜騎士は、『飼い主』である竜帝が始末するのが決まりだ。

そんなこと、させるものか！

「なんで？　なんでこんなこと……になったのよ！？　母様だけじゃなく、あの子まで私から奪うの！？　ねぇ、ダルフェ……テオ、テオ。あなただって私とジリギエを置いて、逝ってしまうんでしょう！？」

混乱した激情に押し出され、普段は口にしない秘めた想いが震える唇から吐き出された。

「ア、アリーリアッ……」

「ねぇ、ダルフェ……テオ、テオ。お願い、置いていかないで……独りにしないで。側にいて」

俺には答えるべき言葉が、言うべき言葉が見つからない。

たとえその場しのぎの嘘だとしても、ずっと側にいると言えない自分に吐き気がした。

見開いたままの水色の瞳が痛々しくて、こんな自分が情けなくて。

俺はすがる思いでカイユの頬に、自分のそれを触れ合わせた。

「……愛してる、愛してるよアリーリア。俺は誰よりも、君を愛している……だから、だからっ……」

触れ合う肌はあたたかかく、俺はその体温にカイユが生きていることを改めて実感し、腕の中の愛しい人が無事だったことに感謝した。

姫さんが殺され……なにかがあったその場にいて、生き残れたなんて。

生き残れた、なんて。

生きてる、なんて。

世界が、残ってるなんて。

「……あ」

あの子を失ったら旦那は……何故だ？

なんで俺達は生きてるんだ！？

俺のカイユは生きていて、世界も変わらずここにある。

それは、つまり。

「カイユ、大丈夫だ」

つまり。

「姫さんは、生きている」

て、ことだ。

「きっと、大丈夫さ。すぐに旦那が、姫さんを抱いて現れるって！」

「ダルフェ……」

俺は足で瓦礫を掃い、カイユを座らせた。

立ち上がろうとするカイユの肩に手を置き、言い聞かせるように言った。

「腕を治すのが先だ。旦那が姫さんと戻って来た時、その腕を見たらあの子は泣くよ？」

俺の言葉にカイユが徐々に落ち着きを取り戻していくのが、触れ

た身体と俺を真っ直ぐに見つめる瞳から伝わってきた。
「ハニー、君が思ってる以上に旦那は強い……無意味に強すぎて気の毒になるほど、強いんだ。その旦那が姫さんを守れないなんてことはないさ」
餓鬼の時から＜ヴェルヴァイド＞を見てきた俺は、カイユの知らない旦那を知っている。
あの人は確かにちょっと……だいぶ変だが、自分の強さを分かっている。
その旦那が同席していて姫さんが死ぬなんて、有り得ない。
そうだ、有り得ないんだ。
あっちゃ、いけないんだよ！
俺達の＜ヴェルヴァイド＞は世界最強でなきゃ駄目なんだ！！
「でも、ダルフェ。あの女はトリィ様をっ……ヴェルヴァイド様っ！？」
池の手前の瓦礫の山が、派手な音を立てて崩れた。
温室の天井に使われていた強化ガラスが床に叩きつけられ、耳の奥が切り裂かれるような叫びをあげる。
「……背中重そうっすね、旦那」
旦那の背には、天に向かって5枚の羽が生えていた。
漆黒のレカサを貫く、透明なガラスの羽。
まるで人間共の好む天使という架空の存在のようだった。
だが、この旦那を見て天使と思う人間はいないだろう。
「……」
どうみたって、その逆の存在だ。
冷たいガラスの翼が羽ばたくのは闇がふさわしく、誘うのは楽園ではなく地の底にある煉獄。
「……邪魔だな」
赤く染まり身体に張り付いた髪をうざったそうにはらってから、

旦那はその背に突き刺さったガラスを無造作に左手で引き抜き、投げ捨て始めた。
同じ動作を5回。
その都度、磨きこんだ刃のようなガラスの破片……破片というにはでかすぎるそれが床に落とされると同時に、天から落ちた星のように煌めきながら、砕け散った。
赤く染まった星々が、地上に広がり陽に輝くさまは美しく……表情の無い見慣れた美貌を目にし、困惑と不安が湧き上がる。
旦那の目の前で。
姫さんはメリルーシェの皇女に何かされたはずなのに。
怒り狂って、半狂乱だっておかしくないのに。
「旦那？　……っ！？」
そこにはあるはずの怒りも、憎しみの色も何も無く。
黄金をくりぬいてはめ込んだような、無機質な冷たさ。
温度の感じられない凍てついた金の瞳は、俺を見ない。
その瞳が見ているものは自分の右手。
「なんでそんなもん、持ってるんですか！」
その右手が掴んでいるのは……。
「なんで皇女なんだよ！？　姫さんはどこです！？」
俺がそれを皇女だと判断したのは。
その干物が見覚えのあるドレスと、旦那が掴んだ痕が残る首をカバーするために俺が急遽用意した装飾品を身に着けていたからだ。
ミイラというより干物と言ったほうがいいその物体は、魔薬により能力以上の……限界を越えた術式を使った術士の行き着く姿。
「やっぱり、皇女は魔薬を……畜生っ！　甘ちゃんな陛下の言うことなんざ無視して、さっさと殺しちまえば良かったんだ！！」
赤の竜騎士時代に見たものと同じだった。
髪は硫黄色に変色し、縮れて頭皮に張り付き。
肌は魚の燻製のような色に変わり、骨に食い込む。
半開きの口からは枯れ枝のような舌が垂れ、瞳は干し葡萄のよう

にしぼんでいた。
「これは、転移を使ったのだ」
「なっ！　じゃあ、姫さんはっ」
俺は理解した。
何故、カイユが姫さんは殺されたのだと言ったのか。
「なんてこった……」
転移は術式の中で最も高度であり、特殊なものだ。
リスクも桁外れに高い。
旦那が『藻』認定したレベルの皇女が姫さんを……人間を転移した場合、それは……。
肉体が少々いかれちまっても、姫さんには強い再生能力がある。
だが。
心臓が潰れていたり、頭が落ちていれば当然死んでいる。
カイユは……カイユは旦那が手を抜いて転移させた時の俺の状態を見ている。
だから殺されたと言ったんだ。
魔薬を使ったとはいえ、藻レベルの術士に転移させられた姫さんが無事でいるはずがないと……俺は＜色持ち＞だったうえ、処置が早く適切だったから助かった。
すぐに溶液を準備できるのは、竜帝の関連施設でもごく一部だ。
姫さんは目玉の色も変わってしまったし、普通とは言い難い身体にされちまってるみたいだが一応人間で……。
旦那の手前、口には出せねぇけど絶望的だ。
「……干し肉では、脳も使い物にならぬ」
皇女だったモノを、旦那は無造作に後方へと放り投げた。
姫さんの気に入りの池の縁に、それはボロ雑巾のように引っかかった。
豪華なドレスと宝飾品が、浮き出た骨に引っかかるようにして皇女だったモノを生前以上に飾り立てていた。
「使い物って……それって、転移先が探れなかったってことっすね

？」

俺はカイユを背にかばうようにして、旦那と向き合った。

旦那に感じた困惑と不安が膨張し、破裂しそうなほど膨れ上がってきた。

増した困惑と不安は、目を逸らしたいモノへと変化を始めている。

それは『恐怖』。

この場から逃げ出す気力も一瞬で喰らい尽くしてしまうほどの……。

割れたガラスの壁は鋭利な刃物のように先を尖らせ、外から吹き込む風を切り込む。

その風に、真珠色に赤を纏わせた髪を舞わせた旦那が。

「……」

膝を着いた。

地に吸い込まれるかのように、両膝を着いた。

「旦那？」

瞬き一つしない黄金に瞳。

彫刻されたように、動かない表情。

「……旦那、どうしたんです？」

俺の問いに、口は動かず。

動いたのは、旦那の手。

左手を色素の薄い唇にあて、旦那は動きを止めた。

「だん……ヴェルヴァイド？」

「ヴェル！」

青い竜が、空から垂直に降り立った。

温室の天井は見事なまでに消え、澄んだ空が広がっていた。

「うわっ！？　血だらけじゃねぇかっ！　おちびはっ！？　皇女はどうし……じじい？」

「……」

床に立ち、翼をたたんだ陛下は膝をついたままの旦那を見上げ。
「おちびはどこだよ!?　なにがあったんだよ、ヴェルッ！」
返事をしない旦那に苛立つように、声を荒げて言った。
真っ青な爪を持つ４本指の手が、旦那へと伸ばされると。
「……我から離れろ＜青＞。汚れる」
だんまりだった旦那が、喋った。
その言葉に、陛下の手が止まる。
「は？　汚れる？」
「間に合わんな……すぐに風呂へ行け。お前は“綺麗”でなくてはならぬのだ」
黄金の目が。
小さな青い竜を見ながら。
ゆっくりと、伏せられた。

「え？」

ゴトンと、鈍い音。
真っ赤なカーテンが舞うように広がり、旦那と陛下を覆い尽くした。

「や……なんだよ、これ」

血溜まりに落ちたそれに。

「……ヴェッ……」

短い足をもつれさせながら、陛下がそれへと歩み寄る。

「ヴェルーッ！！」

濡れた床に足を滑らせ、転んだ青い竜はそのまま床を這い。
全身を使って、旦那の頭部を抱き抱えた。
「だ、んな……」
旦那の頭を必死に抱える陛下の目の前には。
いくつかに分れてしまった、旦那の身体。
黒いレカサが血潮を吸い、重厚な艶を手に入れていた。
「……ヴェル、ヴェルッ！？　どうして元に戻らないんだよぉ！
ヴェルは死にたくても死ねねぇんじゃなかったのかよ！？」
陛下は旦那の頭を元に戻そうと、床に伏せられた胴に……それが
あるべき場所に、ぐいぐいと切断面を押し付けていた。
俺は指先すら動かすことができず、ただそれを眺めていた。
「くっつけ！　さっさとくっつけろって言ってんだよ、このクソじ
じい！　頼むからくっついてくれよっ……」
そうだ。
旦那はいつだって、何があったって『大丈夫』だと。
「なんでくっつかないんだよぉ……なんで心臓止まってんだよ？
死にたくても死ねないんじゃなかったのかよぉおおおおおお！！
うわぁあああ！　イヤだ、こんなのイヤだよっヴェル！　ヴェル
ー！！」
青い竜の絶叫が、俺の脳を揺さぶり砕く。
「う……そ、だ」
俺は、俺達は思っていたんだ。
＜ヴェルヴァイド＞は『永遠』なのだと。
餓鬼の時に握ったその手の冷たさと、大きさを。
今も、覚えている。
「だ、旦那」
初めて会った時から、その真珠色の髪も黄金の瞳も変わらなくて。
変わったのは自分の方で。
目に見える『永遠』が、あんただったんだ。

永遠。
人間達は、それを『神』と呼ぶのだろうか？
だから。
陛下も俺も。
この事態を認識できない、理解できない。
「ヴェ……ヴェルヴァイド？」
『大丈夫』じゃない＜ヴェルヴァイド＞なんて……。
「ぼさっと突っ立ってるなっ、この役立たずっ！」
衝撃が、俺を襲った。
「ぐごぉっ！？」
馴染んだ感覚に、揺らいでいた思考が強制的に戻される。
「ハ、ハニー！？」
「ダルフェ！　のん気に床にめり込んでないで、さっさと立て！」
好き好んでこの状態になったわけじゃなく、有無を言わさず強制的にっつーか……。
俺の背に蹴りをいれたカイユは、次の標的へと容赦無く牙をむく。
「陛下、そのような情け無い顔をなさいますな！　お立ちなさい！　つがいを奪われたまぬけな雄の首など、そこら辺に転がしておけばよいのです！」
仁王立ちしたカイユの怒声に、陛下がびくりと尾を上下に動かした。
「カイッ……っ！」
口を開いた陛下を睨みで黙らせ、カイユは自分のポケットに手をいれ伝鏡を取り出し……床に叩き付けた。
「ひびが入ってる、これじゃ使えない！　ダルフェ、伝鏡！！」
「へ？　あ、はい！」
差し出された手に、俺は自分の伝鏡を出して手渡した。

思わずひざまずいて伝鏡を差し出した俺を笑う奴は、ここにはいなかった。

陛下は旦那の頭を抱いたままぺたりと座り込んでしまっているし、第二皇女は干物と成り果てて二度と笑うことなどできないのだから。

「プロンシェン、聞こえる？　特大サイズのゴミ箱を温室に持って来て！　ニングブックは溶液を準備！　濃度！？　調整なんて必要無いっ、原液でいい！」

団長の顔になったカイユが、待機中のプロンシェン達に指示を出す。

ゴミ箱って……溶液ってことは、それにこの状態の旦那を入れて運ぶ気かよっ！？

「ゴミ箱！？　おい、そりゃあんまりなんじゃっ……ごぶうっ！！」

間髪入れず俺の頬を拳が襲う。

ああ、これぞいつものハニーだ。

「術式を仕掛けた皇女を斬ろうとした私の腕を折って邪魔したのは、そこの生ゴミ……ヴェルヴァイド様よ！？　ゴミ箱で充分よっ！」

「なっ！？　旦那がカイユを！？」

「ええ、そうよ。……折れただけですんだのだから、手加減してくれたんでしょうけど」

カイユは折れていた腕を付け根から回し、完全に治ったのを確認すると、俺の腰から剣を抜いた。

抜き身の剣を手に、横たわる旦那へとカイユはその足を向ける。

「ふふっ……見事なまでに、ばらばらね」

旦那の身体を水色の瞳で見下ろし、言った。

「私、これを見たのは2回目だわ」

躊躇い無く旦那の右腕に刀を突き刺して、俺の顔に突き出す。

切断面が、良く見えるように。

「見て。似ているでしょう？」

そのカイユを陛下は床に座ったまま見上げていた。

陛下の大事な『じじい』の一部をぞんざいに扱うカイユを見る目

にあるのは怒りではなく、期待。
「ほら、切断面がぐちゃぐちゃで汚いでしょう？　あら、覚えてないの？」
カイユの言葉に、陛下も気づいたんだろう。
なぜ、旦那が俺と同じように……俺以上にばらばらになっちまったのか。
「あのねぇ、自分じゃそんなの見れないだろう？　それに俺が見てたのは……」
転移は術式の中でも一番リスクが高い。
探知能力以外並以下の術士じゃ、魔薬を使って転移が使えたって術の精度は低い。
その分、負荷は数倍のもにになるはずだ。
旦那が皇女を討とうしたカイユを止めたのは、中途半端にしたらまずかったからだろう。
その上で姫さんにいくはずだった負荷を全て、自分に転移させたのか！？
「そうね。あの時、貴方が見てたのは私だけだった」
「その通りさ、ハニー」
カイユは皇女が姫さんを転移させたので、負荷で死んだと思った。
だが、旦那の状態と過去の経験から判断したのか……なるほどな。
「カイユ。……竜帝は自分でつけた傷は治りが遅いんだ……身体の再生がうまく働かないっていうか……もしかして、だからヴェルもっ」
「そうです、陛下。ヴェルヴァイド様はトリィ様が受けるべき負荷を、全てご自分に転移なさったのでしょう」
そう答えながら、カイユは笑った。
艶やかな唇からのぞくのは、鋭い牙。
額には空色の鱗が浮かび上がる。
怒りのために、肉体が竜体へと傾いているのだろう。
「この世界のどこかで、トリィ様は生きている」

カイユは旦那の腕が刺さった剣を、床へと捨てた。
それを合図に、青い竜が立ち上がる。
血潮を踏みしめ、背筋を伸ばし。
大事な大事な『じじい』をそっと床に置き。
「カイユ、電鏡の間に四竜帝全員を呼び出せ」
＜青の竜帝＞として、＜青の竜騎士＞に命じた。
「はい、陛下」
深々と一礼し、嬉々としてカイユは答えた。
俺はそのカイユの姿に見惚れ、眩暈がした。
あぁ、カイユ。
俺のアリーリア。
君は。
世界最強の＜ヴェルヴァイド＞の血溜まり立つ君は、最高に気高く。
牙を隠さぬその微笑みは、残酷なまでに美しい。

第９９話

「＜青＞っ！　あんたの所為よ！　あんたが無能だからよ！！　さっさと死んで代替わりしちゃえ、馬鹿、馬鹿！　キィイイイッ～！」

＜黄の竜帝＞が陛下に投げつけたティーカップの砕ける音に、＜黒の竜帝＞が閉じていた目を開けた。

黄色い竜はこちらの脳細胞を破壊しそうな超音波じみた声をヒステリックにあげ、身に着けていた花柄の洋服を黄色い爪で音をたてて引き裂いた。

「落ち着かんか、黄よ。自ら衣服を乱すなど、女子として……まぁ、言うだけ無駄か」

黒曜石のようだった爺さんの鱗は艶を失い、まるで炭のようなものへと変化していた。

死期が近いんだろうに、こんな事態になったらのんびり死に仕度している暇も無くなっちまうなぁ。

「そうね、無駄だわ」

億劫そうに目蓋をゆっくりとあげた＜黒の竜帝＞とは逆に、＜赤の竜帝＞は緋色のクッションに寄りかかり、その真紅の目を閉じた。

「過ぎたことを責めるより、今はすべきことがある……。＜四竜帝＞としてそれが分かっていても、私達は貴方に怒りと失望を感じ、あの人がここに居ないことを悲しまずにはいられないのよ、＜青＞」

当然ながら、＜黄の竜帝＞が投げたカップは陛下へは届かない。

遠く離れた竜帝達は、美しい＜青の竜帝＞に傷一つけることは出来ない。

だが陛下の表情にあるのは、隠し様の無い苦痛。

大陸間通話を可能にする巨大な3枚の伝鏡がそびえ立つ室内の中央に立つ青い麗人は、事実だけを簡潔に報告し。

「……」

その後は、四竜帝達の感情を隠さぬ視線を正面から受け止め立ち尽くすだけ。

若き＜青の竜帝＞を強く責めているのは、竜帝達の言葉ではなく。きっと、自分自身なのだろう。

「だいたいねっ、こんな大変なことになってるのにお風呂入ってからくるなんて、あんたどういう神経してんのよ!?　イドイドはどろべちゃな溶液で、あんたはつるすべな温泉……キィイイイッツ！　ムカツク、ムカツク、ムカツクゥウウウウ～！！」

カイユが伝鏡の間に四竜帝を呼び出し、俺が伝鏡の調整作業を終わらせ全ての準備を終えてしばらくしてから現れた陛下は“綺麗”だった。

血塗れだった青い竜は風呂に入り汚れを洗い流し、身支度を整えて四竜帝の待つ伝鏡の間に現れた。

それがヒステリックな＜黄の竜帝＞を、さらにヒートアップさせた原因の一つだろう。

――間に合わんな……すぐに風呂へ行け。お前は“綺麗”でなくてはならぬのだ。

あの場に居て旦那の言葉を聞いていた俺は、この世にある『青』の持つ美の頂点に座すかのような美しさに納得し、満足した。

そうだ。

この若き＜青の竜帝＞は“綺麗”でいなくてはならない。

どんなに辛く、苦しくとも。

陛下は“ヴェル”の望んだように、“綺麗”であり続けるだろう。

「キィイイイッ～！　黙ってないで、なにか言いなさいよ＜青＞！」

短い足を踏み鳴らし、黄色い竜が喚く。

「＜青＞、私は一分一秒が惜しい身だ。お前の考えを述べよ」

自分の額を爪でこつこつと叩き、黒い竜は陛下に言葉を求めた。

「躊躇いも遠慮も無用よ、＜青＞。答えられぬならば、そのような者は不要。＜黄＞の言うように代替わりなさい。ダルフェ、そうなったら貴方が次代が四竜帝として使えるようになるまで青の一族を守りなさい。＜色持ち＞であるお前には拒否権は無く、これは決定事項よ」

扉の前でカイユと並び立つ俺へと投げられた＜赤の竜帝＞の言葉に、カイユは眉一つ動かさなかった。

その水色の瞳は、主である＜青の竜帝＞からそれることは無かった。

「赤の竜帝陛下、俺の所有権は四竜帝から＜ヴェルヴァイド＞に移ったはず。……あんた等四竜帝には俺に指図する権利なんかねぇってこと、わかってるんすか？」

わざと笑顔で答えた俺に、＜赤の竜帝＞は尾先で床を3回打ち付けた。

その様はなぜか楽しげで、叱咤されると考えていた俺はかなり驚き。

少し、困った。

「おちびの転移先はヴェルにも分からなかった。青の大陸か他の大陸か……ヴェルが負荷を引き受けたとしても、状況はこれ以上ないほど悪い……でも、なんとしても探し出さないと」

陛下の声は硬く、低かった。

転移の負荷を旦那が全て引き受けたから、姫さんが無事？

そんなおめでたい考え、この場にいる誰1人持ってないさ。

「蜜月期中の雄竜がつがいを失えばどうなるか。未だつがいを得られぬお前でも、それくらいわかっているのだろう？　状況は悪いどころか絶望的と言うべきではないか？」

黒の爺さんの言葉に＜赤＞はうなずき、＜黄＞は超音波のような

怪音を発し続けていた口を閉じた。
「大海に揺らぐ木っ端をどう探す？　砂漠に落ちた塩粒を見つける術はあるのか？　ちっぽけで無力な異界人を探し出すなど、不可能だ。甦った＜ヴェルヴァイド＞によって世界は滅ぼされ、消え去るだろう。ふむ……種として人間などに負け、ぶざまに滅ぶよりはその方が良いのではないかな？」
「や……やだ、弱気な＜黒＞なんてらしくないよ。お願いだからそんな事言わないで！　＜黒＞は頭良いってイドイドが言ってたんだから、あんたがなんか良い案考えてよ！　私には、どうしていいか分からないもん！　なんで、なんであんな子のために世界がっ……なんでよ、イドイドォオ～！　ううう……ううっ……ぶうえぇえええ～んっ！」
＜黄の竜帝＞は泣き出し、黄色の目玉から噴水のように勢いよく涙を溢れさせた。
「……これが四竜帝とは、なんと見苦しい」
軽蔑を隠さぬ＜黒＞を＜赤＞が諫めた。
「皆の前では泣けぬ＜黄＞です、見逃してやってください。この子がこうなのは我等とあの人の前でしか許されぬのですから……」
人格的、知能的に優れた優秀な者が四竜帝に選ばれるのではなく。
なりたいと望んだ者が四竜帝になるのでもない。
それは強制された、逃げることなど出来ない……許されない、生贄の道。
なりたくて、なったんじゃない。
そう口に出来たら、楽になれるのに。

「……俺は諦めない」

陛下の声に、他の四竜帝の視線が一点へと集まる。
「じじいは諦めてなかった、狂ってなかった。だから俺も諦めない」
世界の青が凝縮したような瞳が、灯りの無い伝鏡の間で星のよう

に煌めく。
「じじいの“りこ”を見つけ出すんだ！竜族（おれたち）が、生き延びるために！！」

結果としては。
各大陸の竜族総出で姫さんを探すという、なんとも地味で気の遠くなるような……人間達に知られぬように、秘密裏に行動するということに決まった。
非効率的極まりないことだが、人間側にこの事態を知られることを避けるため探知能力のある術士を雇うこともできない。
陛下を「私の女王様！！」と崇め敬うクロムウェルなら情報の漏洩の可能性は無いが、奴には探査能力が無いので使えない。
もっとも術士を使う案だって、非現実的だ。
術士一人の探知可能範囲は個人差があるが、ある程度の範囲に限られる。
各大陸各国各都市に配置できるほど人数、世界中の術士を掻き集めたって足りない。
術士ってのは、希少な人種だからなぁ。
「はぁ～……お先真っ暗だねぇ」
旦那の様子を確認するため陛下がカイユを伴い退室し、黒の爺さんと黄の超音波娘はそれぞれの補佐官に指示を出すために戻った。
伝鏡の間に残ったのは、俺と……。
「ダルフェ」
＜赤の竜帝＞が俺を呼んだ。
「なんです？　赤の竜帝陛下」
俺は黒の爺さんが使っていた伝鏡に覆いをかけていた手を止めず、訊いた。

「カイユは大丈夫なの？」
黒の爺さん用の伝鏡の次は、黄の使っていた伝鏡を専用の布で覆った。
黄の伝鏡を旦那が割ったあの時、俺はこんな未来が待っているなんて思いもしなかった。
「ええ、今はまだ大丈夫です」
「貴方は大丈夫？」
真紅の瞳が、まっすぐに俺を見た。
色は全く違うのに、それはカイユの瞳と重なった。
ああ、これは。
「……どういう意味です？」
この眼は。
母親が、子を見る時の眼だ。
「相変わらず、強情ね。誰に似たのかしら？」
「あんたに決まってるでしょうが、母さん」
終末へと駆け出した『世界』を俺達は必死で追い駆け追い着き、その足を止めなくてはならない。
どんな汚い手を使っても、どんなに犠牲を払おうと。
「母さん……もしも姫さんが死んでたら、カイユは今度こそ駄目だよ」
「ダルフェ……」
俺達は分かってる。
救いたいと願うのは、『世界』の全てなんかじゃなく。
「……俺、あんた等の話聞きながら、考えてたんだ……旦那が嘆き狂って世界を失くしてくれたなら、世界を道連れにカイユと心中できるんだなって……カイユが俺だけのものになるかもしれないって」
それは抗いがたい、甘い誘惑。
「俺、心のどこかで姫さんが死んでくれてたらいいのにって……ははっ、俺ってやつは自分勝手で最低な野郎なんだよ」
手を、伸ばしていた。

伝鏡の向こうにいる近くて遠い存在に。

「母さんっ、俺はカイユを愛してる……誰よりも、何よりもっ！　でも俺はっ……ジリや母さんや父さんだって愛してる！　この想いだって嘘なんかじゃない！　だから、母さん……お願いだ。もしもあの子が生きていたら、俺の竜珠(いのち)をっ！！」

それは懺悔ではなく、懇願。

両膝を着き、冷たい伝鏡越しにぬくもりを求める。

震える俺の手に、赤い竜が小さな手を重ねる。

「ダルフェ。ダルフェ……私の可愛いダルフェ。貴方のためなら、母さんはなんだってしてあげる。あの人……ヴェルヴァイドだって、裏切れる」

それはとても小さい手なのに、俺の全てを包み込んでくれるような気がした。

「か……あさん？」

「赤の大陸に戻ってきなさい」

世界のためなんてお綺麗な大義なんかじゃなく。

「母さんの所に帰っていらっしゃい、ダルフェ」

愛しい人のためだけに、俺達は前へと突き進む。

第１００話

――母さんの所に帰っていらっしゃい、ダルフェ。

「……」

＜赤の竜帝＞の使っていた伝鏡も他のものと同じように専用の布で覆い、俺は伝鏡の間の扉へと足を向けた。

「赤の大陸に戻るべきか？　でも、今は姫さんを探すのを優先してぇしなぁ。どうすっかな～」

各大陸の竜族が姫さんを探すとして。

小柄で黒髪の人間の娘なんか、無数に存在する。

あの子は人目をひく飛び抜けた美しい容姿でもないし、顔の作りにこれといった特徴も無い。

絵姿すらないあの子を探す手がかりは、金の目だけだ。

旦那と同じ、あの黄金の瞳だけ……。

竜族だって旦那に会ったことがあるって奴の方が少ない。

本物を見た事の無い奴等に旦那と同じ目玉って言ってもなぁ～。

「う～ん。あっちに戻って、俺が赤の竜騎士団の指揮とったほうが効率いいか？」

赤の大陸での捜査には、姫さんをよく知る俺が……そうすっと、黄と黒の大陸にも姫さんを知ってる青の竜騎士を派遣したいところだが。

「舅殿が導師関係で動いてる……この状態で、青の竜騎士を手薄にすべきじゃないねぇ。ただでさえ人数少ないんだから、無理だなぁ」

伝鏡の間の扉を閉め、背を預けた。

寄りかかると、溜め息が出た。

吐き出したのは息だけではなく。

「……母親にあんな顔させるなんて、俺もまだまだ餓鬼ってことだねぇ」

自己嫌悪が情け無い声音とともに、俺の口からこぼれる。
つがいと出会い、夫になって。
子を得て、父親になったのに。
大切なもの全てを守る力が、強い心が俺には足りない。
俺はまだ、こんななのかよっ！
「……畜生ッ」
背に当たる固い感触が、妙に居心地が良くて。
俺はしばらく、動けなかった。

青の麗人が髪を掻き毟りながら、こちらへと渡り廊下を駆けてきた。
アーチ型の天井を支える列柱の間に等間隔に置かれた陶器の植木鉢には青い絵付けがされ、八重咲きの白い花が華やかに咲誇っている。
その美しい花々すら霞んでしまう、天上の美貌の城主。
その後ろを早足で追うカイユの眉が釣り上がっていたのは、見なかったことにした。
「陛下、どうかしましたかぁ？」
カイユの視線が俺に突き刺さるのを感じつつ、興奮で頬を染めた陛下に声をかけた。
「ダルフェ、大変だ！」
陛下は俺の胸倉を掴み、左右に振りながら言った。
「ヴェルがいねぇんだ！」
この青の竜帝は俺よりずっと背が低……いや、これは禁句だな。
竜族の雄にしては小柄で体も細いが、竜帝のできそこないの俺なんかより強い個体だ。
その気になれば俺を殺せるそのパワーで、俺をぶんぶんと激しく

振った。
「ゴミ箱にじじいがっ！　ヴェルがっ！　生ゴミがぁあああっ！！」
ゴミ箱と生ゴミ。
あのままゴミ箱を使ってたんですか……温室でカイユがゴミ箱に旦那を無造作に突っ込むのを見て、文句言ってたクセにねぇ……陛下、カイユには強く出れないからなぁ。
「まさかっ……俺の部屋に置いといたから、塵収集担当が間違って生ゴミ処理場に!?　だから普通の水色ゴミ箱なんて、使うべきじゃなかったんだ！　俺様の『青』に塗装した特注品を使えば、こんなことにはっ！！」
「……くくっ……ぶはぁっ！」
「陛下、落ち着いてください。ダルフェ、笑ってないでなんとかしてちょうだい」
思わず噴出した俺から陛下をはがし、カイユは陛下の乱れた髪を手櫛で整えながら言った。
俺は自分の制服の襟を緩めながら、愛する妻の要望に答えるべく腹の内部がよじれそうになるほどこみ上げてくる笑いを全力で押し戻した。
うん、いいねぇ。
この陛下、本当に面白くて好きだ。
「あのね、陛下ぁ……生ゴミとして回収されたなんて、そんなわけねぇでしょうが。手足と頭がくっついて、姫さん探しに行ったんじゃないんすかぁ？」
＜青の竜帝＞としてじゃなく、旦那の事が絡んでくると小さな子供のようで……その愚かさが、逆に愛らしくさえ感じてしまう。
「おちびを探しに!?　じじいは自分で転移先が分からねぇって言ったんだろう!?　当てずっぽうで探すってのか!?　しかも一人で!?　俺達と協力して効率よくやろうってっ考え、じじいの頭ん中にねぇのかよ!?」
「あると思います？」

わざとそう訊いた俺の問いには、当然の答えが返された。
「思わねぇ！」
「でしょう。ねぇ、ハニー。君の意見は？」
カイユは水色の瞳で俺と陛下を交互に見て、ため息をつきながら言った。
「はぁ……なぜ分からないのかしら？　ヴェルヴァイド様は南棟にいらっしゃるはずよ」
「え？　なんでだよ、カイユ？」
「は？　どうしてハニーはそう思うんだ？」
なぜそう言い切れるのか分からず、俺と陛下は顔を見合わせた。
そんな俺達に苦笑しつつ、カイユは答えた。
「私は竜族の雌で、妻で母親だからよ」
「……そっか」
妙に説得力のある言葉に、俺は思わずうなずき。
陛下は首をかしげた。
「そういうもんなのか？」
困惑したような顔で訊く陛下に、カイユはきっぱりはっきり言った。
「そういうものです。さぁ、行きましょう」
南棟へと躊躇いゼロで歩き出したカイユの後を、陛下と俺は3歩離れてついていった。
俺と並んで歩く陛下の瞳の中で、前を歩くカイユの銀髪が輝いていた。
視線に気づいた陛下が、俺を見上げて微笑んだ。
「カイユって、すげぇよな。あのな、ダルフェ。カイユとつがいになるのは自分だって、餓鬼の頃は思ってたんだ。今思うと、うぬぼれっていうか勘違い野郎だったつーか……はは、やっぱ俺様なんかじゃカイユは駄目だ……ダルフェがカイユのつがいで良かった。本当に、良かった」
「陛下……俺は」

吸い込まれるような深い青の瞳に映る俺の顔は。
「俺、赤の大陸に戻ります」
陛下の柔らかな微笑みとは対照的に。
「うん……そうか。＜赤＞によろしくな」
不出来な人形のような、硬い表情をしていた。
「はい、＜青の竜帝＞陛下」
青い瞳の持ち主は俺のこの顔を目にしているのに、気づいているのに。
その微笑みは変わらない。
俺はそれに感謝し心の中で膝を折り、頭を垂れた。

俺と陛下の先を歩くカイユは折れた骨組みと瓦礫が散乱する温室を足早に通り、居間へと繋がる扉を開けた。
扉を開けたカイユはそのまま奥へと、足を進める。
カイユは池に引っかかっている変わり果てた皇女を一度も見なかったが、陛下はその前で足を止めた。
「……メリルーシェの第二皇女がおちびと同じ名前だって、ダルフェは知ってたか？」
陛下は池の縁にひっかかっているそれを、壊れ物を扱うかのように両手でそっと持ち上げると床へと置いた。
「知ってましたよ。まぁ、知ったのは昨夜ですけど。魔薬の件で調べた時に知ったんです。旦那は知りませんでしたよ。あの人らしいっちゃ、らしいですけどね」
「そうか。……あとで支店のバイロイトから、メリルーシェの王に連絡をいれさせる。遺体を国に帰してやらなきゃな」
娘の死を知ったメリルーシェの王がどう出るか。
皇女の死の理由と原因を、どこまで明かすか。
「……そうですね」

まぁ、支店長のバイロイトが間に入るなら、うまくやるだろう。
あっちにはセレスティスも……舅殿は王子様面してやることが過激だが、頭は切れる。
あの2人だけじゃなく、さらにクロムウェルもいるんだしな。
全て任せて大丈夫だろう。
「……あれ？　カイユ、どうしたんだ？　ヴェル、いねぇのか？」
室内に入ると、開かれた寝室の扉の前にカイユが立っていた。
「ハニー？」
「……」
陛下と俺の声に振り向いたカイユは、主である陛下にその場所を譲るように無言で数歩下がった。
陛下はそんなカイユの様子に微かに目を細め、寝室へと足を踏み入れ……3歩半で止まった。

「なっ……なんだよ、これ……」

つぶやくように言った陛下の靴先は、柔らかな波に埋もれていた。
その波をつくっているのは、思いがけないものだった。
床一面に散乱した布切れが、陛下の足の進入を拒んでいた。

「陛下、これ……服ですよね？」

陛下は姫さんのためにあらゆる色の服を用意した。
どんな色や素材があの子の好みか分からかった陛下は、必要以上に多くのものを揃えて‘じじいのつがい’を迎え入れた。

「ああ、おちびの服だ。納品のさいにはこの俺が、ひとつひとつ確認したからな」
「じゃあ、これは……服だったってことですね」

衣装室にしまわれているはずのそれらで、室内が鮮やかに彩られていた。
引き裂かれ、千切られて。
布切れに成り果てて。
細切れになった色達が床一面に重なり合う異様な光景は、声にならない絶叫を俺の脳へと叩きつけてくる。
無音のそれは、狂気の匂い。

「じ……じじい？」

そこだけ切り取られた異空間のような、大きな寝台。
全く乱れのない寝具の上に、うずくまるは小さな白い竜。
旦那は小さな両手で赤い格子模様の布を握りしめ、それに顔を埋めていた。
押しつけるように。
すがるように。
微動だにせず。
その布……姫さんが旦那に贈ったそれは、あの子がこの世界に落とされた時に身に着けていた異界の衣類。
その衣類を使って、姫さんは旦那に贈り物をした。
旦那は少々色褪せた生地で作られたそれを『宝物』だと言い大切に、大切にしていたのを俺は知っている。

「ヴェ……ヴェルッ……」

陛下はその場に、すとんと座り込んでしまった。
その背を流れる長い髪が色の洪水の中に、青を加えた。
どんなに多くの色があろうとも。
陛下の青はなにものにも染まらず混ざらず、そこにある。

「……だ……んな……」

消えたつがいの残した香りを、気配を、想いを求め。
無力な赤ん坊のように……尾で自分の身体を守るかのように丸くなり、『世界』を拒むその姿。
自分の傍らにつがいの居ない世界、その現実を拒否しているのかのような。
そこに居るのは最強の竜ではなく……。
その姿を、これ以上見ていられなくて。
見てはいけない気がして。
俺は、目を閉じた。
「……陛下、私達は外でお待ちしています。行くわよ、ダルフェ」
カイユは深々と一礼し、俺の左腕を掴んで退室を促した。
俺の腕を掴むその手が、指が。
肉だけでなく心にも食い込んで。
俺を、支えてくれた。

「あんた、こんな小娘に“輪止”をするのかよ？」
聞いたことが無い声に、起こされた。
目を開けようとしたら強い眩暈と強烈な吐き気を感じて、ぎゅっと目を閉じた。
この感じ……知ってる、覚えてる。
お城に不法侵入したっていう術士にさらわれそうになって、無理やり転移を……転移？
転移……まさか、あの皇女様が！？
「必要で無いと思う根拠は？　……意識がもどったようだ。寝てい

ただけか、のん気な女だ」
両腕で体を支え上半身をあげると、私を見下ろす人達がいた。
2人。
男の人だ。
知らない、この人達を私は知らない。
皇女様に転移させられたとして、此処はどこ？
周囲を見ると、どこかで見たことのあるような景色……中央アジアや中近東を連想させる乾いた大地。
私を見下ろす2人は、ベージュの布で頭部を覆っていた。
布の透き間から僅かに覗く目は、2人とも濃い茶色。
長袖の貫頭衣に、腰には黒い布の帯。
帯に重なるように二重に結ばれた真鋳の飾りがついた革紐には、半月を思わせる曲線を持つ小ぶりな剣。
咽喉が痛むような熱を持った乾いた空気と、硬い土。
ついた手にあたる小石……砂じゃないから、砂漠じゃないよね？
とにかく、この人達に訊いて……あれ？
声が……出ない？
「へぇ、変わった目をしてるな。人間の女に輪止なんて高い拘束具を使うのもたいねぇじゃん、拾ってくつもりなら縄で手枷でもすりゃ十分だろ？」
吐き気が治まると、言葉がはっきり聞き取れた。
好意的でないどころか、拘束具や縄、手枷なんて物騒な単語に心臓がどくんどくんと暴れだす。
「私から見ても人間に見える……見た目は。だがね、この娘の着ている衣装は特別なものだ。輪止は保険さ」
輪止？
あっ……なに、これ？
私、首に何かつけられてる。
ダメだ、首だから目で確認できない。
恐る恐る触ってみると、硬い革と金属の止め具の感触。

これ……犬の首輪に似てるかもしれない。
やだ、これなんなの？
この人達、なんで私にこんなモノをっ！？
「あ、服？　……まぁ、確かにえらく高そうだ。それにこのネックレスって、真珠じゃねぇか！？　人間に見えるって、どういう意味だよ？　角が生えてるわけでもねぇしよ。なぁなぁ、こいつの服とネックレス、街で換金しようぜ！」
「換金？　本当に無知な男だな。これは既婚の竜族の雌がよく着るモノで、肌の露出を最小限に抑えているんだ。竜族の雄は妻の肌を他人に見られるのを、とても嫌がるからな」
「は？　竜族～！？　このちんまい女がか？　どう見たって人間だぜ、竜族の雌ってでかいんだろう？」
頭上で交わされる会話に、心臓の音が頭の中でどんどん大きくなってくる。
女神さまが用意してくれたドレスの奥で、足が震えて立ち上がれない。
「人間だってそれぞれ身長差がある。同じように竜族だって、個体差があるのさ。それにこの目をよく見ろ、確かに金色の目の人間も稀にいるが、この娘の色は人間の持つものじゃない」
声を出せないなんて……ハクちゃんを呼べない！
どうしよう！？
きっと、この首輪のせいで声が出ないんだ。
「ふ～ん、そうなんだ。俺は竜族を見たことねぇし、あいつらとは商売の付き合いもねぇから知らなかった」
この人達……背の低い人のほうが、竜族に詳しいみたい。
でも、私のこの目がハクと……＜監視者＞と同じだってことは、知らないんだ。
ハクの瞳を、この人は知らない。
「だろうな。低俗で無知なお前のような闇市の商人が竜族に関わることなんて、普通は一生無い」

「……ったく、嫌な奴だな」
どうしよう、どうしよう!?
頭の中で姿を思い浮かべて呼んでも、ハクから返事が無い。
彼には私の“声”が聞こえていない。
ああ、ダメ……念話は私の能力じゃなく、ハクちゃんの能力だもの。
彼が竜体でいてくれて、なおかつ“意識”を向けてくれないと届かない。
それか……考えたくないけれど。
彼の念話が届かないほど、私は遠くに来てしまったの?
「ははっ、お前ほどじゃないさ。輪止をしてるから竜体になって暴れることも出来ない。声も出ないから、つがいの雄を呼ぶこともできやしない。既婚の雌が帝都から遠く離れたここで1匹でうろうろしてるなんて、有り得ない。何か問題が起きてつがいの雄とはぐれただけだろう。近くに雄がいるはずだ、『声』を使って雄を呼ばれちゃやばい。竜族は基本的には大人しい種族だが、雄はつがいのこととなると途端に凶暴になるからな」
ハクは絶対に、私を探してくれている。
きっと、とても心配している。
「おいおい、トラブルはごめんだぜ? これを探している雄がいるかもしれないんだろう? なら、こいつは此処にそのまま捨てておきゃいいじゃないか。あ! それか帝都に連れて行って赤の竜帝に引き渡せば。謝礼金がたんまり貰えるんじゃねぇか!?」
え?
今、赤の竜帝って言ったよね!?
赤の……じゃあ此処は、赤の大陸なの!?
「何を言っている。もったいないだろう? 竜族にどれだけ価値があるか知らないのか? その筋の人種にこのまま売ってもいいし、飼って血肉を卸してもいい。さて、この大蜥蜴の雌はいくら稼がせてくれるやら」

う、売る!?
飼って血肉って……この人達から逃げなきゃ駄目!
この人達、怖い。
竜族をまるで動物のように考えてる、『人』だと思っていない!
「竜族か人間か、簡単に判別する方法を知っているか? 知らないだろう? せっかくだから教えてやるよ」
「何する気だよ?」
震えて立ち上がれない足を握った手で叩き、動けと命令しても地面をするようにつま先が小石を蹴るだけ。
この人達は、私を赤の竜帝さんとは絶対に会わせてくれない!
逃げなきゃ駄目。
なんとかして自力で逃げなきゃなのに、焦れば焦るほど足は言うことを聞いてくれない。
「簡単だ。竜族は人間とは治癒速度が違う、これも個体差があるらしいが……それ、貸してくれ」
足を叩いていた右腕を強く掴まれ、袖をまくられた。
背が高く、がっちりとした体格の人が腰に差していた剣を抜き、私の側に膝をついた男の人に手渡した。

一一一やっ、なに!? まさか……ハク、ハクッ、ハク!

もっと大きな声で、強い気持ちを持てば声に音が戻ってくるかもしれないと、もう一度叫んだ。
これ以上無いほど大きな声を出したはずなのに、私の声には音が無い。

一一一ハク、ハク!!

ハクは名前を呼べば、いつだってすぐ来てくれた。
だから、安心していた。

この世界で、私が独りになることは無いのだと。
ハクがいてくれるから、ハクがいるから。

ヴェルヴァイドは、＜監視者＞は。
この世界の人の畏怖の対象。
彼の報復行動を怖れ、私を肉体的に傷つける人などいない、できないのだと……。

安心しいてた。
慢心していた。

「そんなに口開けたって、無理だよ。輪止してるから、声が出るはずねぇし。へぇ～、竜族も泣けるんだな、ははは！　大蜥蜴のクセに、人間様みたいに泣いてやがるぜっ」
地面へと押し付けられた手に、弧を描く刃が近づく。
それは私の手の甲に……。

――う、うそ！　や……やめてっ、やめてっ……やめてぇえええ！！

目の前起こっていることを現実だと思いたくなくて、ぎゅっと目を瞑った。
さっき見てしまった銀の刃と、肌に触れる切っ先の感触から逃げ出すように、白い姿へと頭の中で必死に手を伸ばす。
怖いという言葉も、助けを求める言葉を思う余裕も無く。

――ハクちゃっ……ハク、ハクッ、ハクッ！！

頭の中にはあの人の名だけ、あの人だけ。
閉じた目蓋に浮かぶあの人は、小さな身体を丸めて泣いていた。

第１０１話（前書き）

＊流血・残酷な表現が文中にありますので、苦手な方はご注意ください。

第１０１話

――ハクちゃん、ハクちゃ……ハク、ハクッ！！

身体の中で、強く激しく血液が駆け出して。
まるで心臓が身体から剥きだしになってしまったかのように、激しい鼓動が傷つけられた手から全身に広がった。

――ハクッ、ハクッ！　ハク！！

どんなに叫んでも、声にはならなくて。
でも、そうせずにはいられない。
私の手の甲には、信じ難い異物感。
刺された刃物が貫通する感覚など、知りたくなかった。
痛みと、それを上回る恐怖が私をがんじがらめに縛って動けない。
声が出ないと分かっていても、ハクの名を叫ばずにはいられなかった。
彼の名を口にしないと、自分を保っていられなくなりそうだった。
ここにいないハクに、心の中で必死にしがみつく。
そうしていないと、そうしないと私は……。
怖い。
怖い！
この人は、この人達は。
笑いながら他人を傷つけることができる。
「ほら、ちゃんと見とけよ？　手のひら中央に刃先が出ただろう？」

――っ！！

地面に押し付けられていた右手は、手首を掴み直されて無理やり

向きを変えられた。
　増した痛みと、次は何をされるのかという不安と恐怖でうまく息が出来ない。
「一気に抜くぞ。……さて、この雌は治癒にどれくらいかかるか……ん？　思っていたより、早いな」
　視線を、手に感じる。
　２人の濃い茶色の瞳は、血だらけの私の手を見下ろして……。
　布の透き間から僅かに覗く濃い茶色の目は、私を＜人間＞ではなく＜竜族＞として観察している。
「うわっ、傷が塞がってくぜ！？　ぱっと見は普通の女だけど、やっぱ大蜥蜴の雌なんだなぁ」
　驚きを隠さぬその言葉に、私は自分の手を見た。
　まるでそこだけ時間の流れが違うかのような速度で、まだ乾かぬ血の下で傷が……消えていく。
　傷が治るのと同時進行で痛みが和らぎ、皮膚が軽い火傷をした時のような感覚だけが残った。
　やっぱり、私の身体は以前と違う。
　ハクは何も言わないけれど、私の身体はどうしちゃったの！？
　この傷の治りを目にしたら、この人達は私を普通の人間とは絶対に思わない……竜族と勘違いして、当然。
　口が利けるようになって私が人間だと主張しても、きっと信じてはもらえないだろう。
「竜族の血肉が古くから秘薬として取引されるのは、この能力のせいだ」
　言いながら自分の黒い帯を片手で器用に解き、血のついた刃物でそれを２０？ほど切った。
　それで刃先についた血液を拭き取って、背の高い人に返した。
　帯は長く、端を少々切ったくらいでは使用するのに全く問題無いようだった。
　そして帯を手早く締め直し、言った。

「まぁ、効果のほどは定かじゃないが。それでも買いたって、目の色変える阿呆な金持ちは多い」
「なるほどねぇ～。う～ん、でも血肉売るために飼うってのは、やっぱり無しだな。俺、餓鬼ん時から蛇とか蜥蜴とか嫌いなんだよ。よっしゃ、来月の競りに出すか！」
返されたそれを鞘へと仕舞い、空を見上げながら言う彼の言葉に私は耳を疑った。
競り？
競り！？
それって、私は売られるってこと！？
「私にも半分寄越せよ？　独り占めしようとしたら……どうなるか、分かっているな？」
「わ、分かってるって！　この雌、顔は地味だけど伝説の＜監視者＞みたいな黄金色の目玉だし、人間の女に飽きたモノ好きな客には受けるかもな。娯楽用だけじゃなく、血肉にも金になる価値があるってんだから、すげー高値になるな！」
興奮気味で高くなった声とは対照的な冷めた声で、右手に私の血を吸った布を持ったままその人は答えた。
「＜監視者＞が伝説？　とことん無知だな」
＜監視者＞。
ハク、ハクのことだ！
会話にハクのことが出てきたので、私は地面に倒れこんだまま顔だけあげて2人を交互に見た。
「＜監視者＞は伝説なんかじゃない、＜監視者＞ってのは確かにいるんだ。絶世の美女で有名だったドラーデビュンデベルグ帝国の皇帝が死んだのは、術式に失敗して異界の生物をこっちに持ってきちまって＜監視者＞に処分されたんだ。知らないのか？」
私が見ていること、聞いていることに気づいているはずなのに。
それを全く気にする様子はなく、彼等は会話を続けた。
「そんな遠い国の事なんか、知らねぇよ。ふ～ん、そうなのか……。

でも俺達には＜監視者＞なんて得体の知れない物騒な奴、関係無いだろう？　異界からやばいモン持ってきたりしねぇもん。あ、俺は蜥蜴嫌いだから、その女に触りたくない。あんたに頼んでいい？」

「……ったく、仕方ないな」

背の低い人……私の手に刃物を突き刺した人が、私の胴に左手を回して持ち上げた。

彼はまるで荷物のように私を脇に抱えると、右手に持っていた布を地面へと投げた。

そこは、私の手から流れ出た血で色が変わっていた場所で……。

私を抱えたまま、彼は右手で顔を覆っていたターバンのようなベージュの布を外した。

露になった顔は日に焼けた肌、はっきりとした二重の目。

口元は白髪の混じった黒い髭が囲み、目元にはまるで傷跡のような深い皺。

５０代後半から６０代……くらいかもしれない。

髪は全て剃られ、両耳には乳白色をした雫形の大きな耳飾。

その耳飾を片方取り、投げ捨てた布へ勢いよく叩き付けた。

耳飾は音をたてて割れ、中から真っ黒で粘度のある液体が流れ出た。

「くっ、くっせー！　あんた何してんだよ!?」

鼻をつく異臭が広がって、私も鼻と口を手で覆った。

塩素系の匂いと石油の匂いがごちゃ混ぜになったような、強烈な匂いだった。

「これか？　この雌の血臭を消したんだ。竜の雄ってのは、つがいの体液に敏感だ。ちゃんと処理しておかないとまずい。血臭を辿ってこられたら困る……今の私では、つがいを奪われて怒り狂った雄には勝てない」

頭部からはずした布で抱えている私の身体と自分の身体を結びながら言う彼に、戸惑うような……少し警戒するように、もう一人の人が言う。

「あんた……なんだってそんなに竜族に詳しいんだよ？　術士って、皆そうなのか！？」

術士。

この人、術士なの！？

どうしよう！

私、また転移でどこかに連れて行かれちゃうの！？

「……いや、そういうわけじゃないさ。私は以前、竜族と揉めて痛い目にあったんでな。……なぁ、アリシャリ。お前は今後、竜族を【商品】として扱う気があるか？　人間より金になるぞ？」

「え？　俺？　俺は伯父貴んとこで働いてるから今は人間専門だけどよ～、金は欲しいなぁ。伯父貴の商売敵が昔、帝都から竜族の餓鬼1匹浚ったんだ。そしたらそいつ等すんげぇ～ひでぇ目にあったんだってさ！　だから伯父貴は、竜族と関わらない主義みてぇ……でも、この雌は売って金に換えたい。俺、もう伯父貴からは独立して商売してぇんだよ。だから金が、資金が欲しいんだ」

私には術士の人が、わざとお金の事を前面に出して話題をすり替えたような気がしたけれど。

この人……アリシャリと呼ばれた人には、自分で口にした疑問よりお金の話の方が重要のようだった。

「大丈夫さ。伯父貴殿にばれないように、この雌を売ればいい。私が協力してやる。……しかし、竜族の餓鬼を竜帝のお膝元である帝都から浚うなんて、＜赤の竜帝＞の両頬をひっぱたいて唾吐きかけたようなもんだ。それはひでぇ目に合わされるだろうな」

「だよな～。餓鬼浚った3日後に竜族の雄が一人で乗り込んできて、その村の奴等全員殺されたんだってさ。全部殺しちまうなんて、もったいねぇよな～。女と子供は確実に売れて、いい金になるのによ」

帯に重なるように二重に結ばれた革紐から下がる真鋳の飾りを、左手でいじりながらそう言った。

その内容に、私はぎゅっと手を握った。

「見せしめの為の皆殺しだな。……その雄は＜赤の竜騎士＞だ。普

通の竜族はこっちが拍子抜けするほど大人しくてお人好しだか、竜騎士は違う。あいつ等は獣……狂犬だ」

吐き捨てるように言うその術士の言葉には、剥き出しの嫌悪。

竜騎士が多くの人間を……それを嘘だと思うことが、私にはできない。

カイユさんは、私に言ったもの。

＝＝私のこの手は、多くの人間を殺した手なんです。

竜族は……必要なら人間を傷つけるし、命も奪うのだと私は教えられた。

＝＝人間共は私を凶悪無慈悲な雌竜と恐れ、嫌悪します。それは私にとって最高の賛美。私は望んで刀を取り、喜びのなかで殺戮を行うのです。私は……カイユはそういう〝生き物〟なのです。

それでも、私は。

カイユさんを怖れることなど、嫌いになることなど出来ない。

今の私が怖れるのは、嫌悪するのは。

子供を奪う返しに来た竜族に殺されてしまった人達を『もったいない』と言う、この人の心。

この人は、人が殺されたこと自体はなんとも思っていない。

この人にとっては竜族だけじゃなく、人間も商品であって……。

もし、誤解が解けて私が竜族じゃなく人間だと分っても。

「おい、先に帰って馬を持って来てくれ。私はこれから嫁を貰う若いお前とは体力が違うんだ。この荷物を持つのはいいが、皆の所まで歩くのは無理だ」

「しょうがね～なぁ、わかったよ。じゃあ、また後でな！」

彼は、彼等は私を助けない。

同じように、競りに出して売るだけ。

「ああ、早めに頼む」
竜族だろうと、人間だろうと……。

――……。

私はこの世界のことが知りたくて、本を読んだ。
竜帝さんが用意してくれた本には他の大陸の気候や風土、美しい自然や綺麗な町並みが描かれていた。
丁寧に描かれ彩色された挿絵を見ながら、これからのハクとの暮らしに想いをはせた。
＜青の大陸＞から他の大陸に移るのは確かに不安だったけれど、ハクやカイユさん達と＜黒の大陸＞に移動する道中を『旅行』として楽しみだと……楽しもうと考えていた、思っていた。

――私……私は……。

握りこんだ真っ赤に染まった右の手は、乾いた血液が皮膚を……毛穴を押さえ込むような嫌な感触がした。

ゆっくりと。
ゆっくりと、彼は歩いていた。
あれから一言も話さず、私を脇に抱きかかえたまま歩いていた。
静かだった。
革のサンダルが地面を踏んで進む音と、乾いた風が駆けぬける音。
その静けさが、私に考える冷静さを与えてくれた。
2人から1人になったけれど、私の胴に回されたこの手を振りほ

どいて逃げるのは無理だと感じていた。
1人でも逃がさない自信があるから、だからこの術士の人は背の高い人を先に行かせた。
それに、もし逃げられたとしても。
見える範囲に建物も町も……誰もいない、人工物が何も無い。
誰かに助けを求めることも、これでは出来ない。
太陽がなければ東西南北すら分からない私じゃ、陽が完全に落ちたら……ここで逃げられても遭難するに決まっている。
競りにって言ってたから、殺される可能性は低い……よね？
竜族だと思われている私は、人間より『お金』になるらしい。
彼等にとって生かしておく『価値』がある。
逃げ出す機会が、きっと……絶対にある。
ハクだって、私を探してくれてるに決まってるもの！
カイユさんだってダルフェさんだって、ジリ君や竜帝さんだって……。

――大丈夫！　とにかく機会を見つけて逃げて……この大陸の竜族の人を探して赤の竜帝さんに連絡をとってもらえれば、ハクに私の居場所が伝わるもの。場所さえ分かれば、ハクがすぐに迎えに来てくれる！

術士であるこの人から逃げられるか……それに、人間より個体数が少ない竜族に会える確率は、私が考えているより低いのかもしれない。
でも、それでも。
大丈夫だと強く、強く思わなければ。
二度と立ち上がれなくなりそうだった。
やがて空の色がオレンジの混じった淡いピンク色に変わり始め、此処へ来てからそれだけの時間が経ったことを私に教えてくれた。
「……以前の私なら。この先にある野営地まで転移可能な術士だっ

た」

低くなってきた太陽に向かって歩きながら、ずっと黙って歩いていた彼が口を開いた。

「私は＜赤の竜帝＞の契約術士をしていたんだ」

足を止め。

前を見たまま。

その声は小さいけれど、風の音しかないここでは十分だった。

「だが、術式に不可欠な＜基点＞を竜騎士に……狂犬共を仕切ってたあいつに壊されて、今では術士としては底辺だ。＜赤の竜帝＞の契約術士にまでなった私が、辺境の奴隷商人などにはした金で雇われて……」

この人が、＜赤の竜帝＞さんの契約術士だったの？

だから竜族に詳しかったんだ……えっ……な、なにっ！？

彼は顔は動かさず、茶色い目だけを動かし、私の顔から足先までゆっくりと見始めた。

その視線は身体を“見る”というよりも……。

＜青の竜帝＞の『青』に包まれた私の身体ではなく、その下……皮膚のさらにその下の、私の中を探られるような……まるで視線が体内を通り抜けるかのような、奇妙で不快な感覚。

「お前の竜珠の位置は……」

竜珠……竜珠の位置？

それって、まさか……。

カイユさんのお母さん……ミルミラさんは、術士に竜珠を奪われ亡くなった。

この人、まさか。

竜珠を……この身体の中にあるハクの竜珠を奪うつもりなの！？

あの時、カイユさんは言った。

＝母は生きたまま腹を裂かれ臓腑を荒らされ、竜珠を奪われました。

生きたまま。
奪われる。
――ハッ……っひ!?
声が出ないのを忘れ、ハクの名を叫びそうになった私の髪が強い力で引っ張られた。
同時に苛立ちと失望が濃く滲む声が、叩き付けられる。
「くそっ！　今の私の術力では、竜珠の在りかすら判らないっ！」
私の顔を覗き込むようにして、深い皺を刻んだ顔が間近にせまる。
「私を見捨てた赤の陛下に、大事な大事な同族の竜珠を贈って差し上げたかったのにっ！」
吐息のかかる距離で、黄ばんだ歯を剥き出しにして言う彼から私は顔をそむけた。
「……くくっ。竜珠を奪われ死ぬほうが、競りに出され人間に飼われるより幸せだと思うぞ？」
幸せ？
死ぬより飼われる事が？
違う。
違う、違う！
その“幸せ”は違う！！
あんたなんかに！
あんたなんかに、私の“幸せ”を奪わせない！！
「うっ！？」
黄ばんだ歯と煙草と漢方が混じったような口臭のする口を持つ顔を、ぎゅっと握った両手で思いっきり叩いた。
「この雌蜥蜴めっ！！」
怒鳴り声と同時に、後頭部に強い衝撃。
「くそっ、意識が無くなると重くなるからしたくなかったってのに

……もう歩くのは止めだ！　ここでアリシャリと馬を待つ！」

急に意識が下へ下へと吸い込まれるように、まるで柔らかなゼリーに飲み込まれていくかのように沈んでいく。

私はそれに逆らわず、全てを委ねた。

――目が覚めたら、おはようってハクが言ってくれる。約束したんだもの……。

私の“幸せ”は、私が決める。

私の“幸せ”は、ハク。

貴方が。

私の“幸せ”。

第１０２話

あれから5日が経った。
未だにどの大陸からも、姫さんを見つけたという報告は無い。

「ねぇねの……ぎゅぎゅっ！」

床一面を覆う切り裂かれた大量の布を小さな手でかき分けるようにして、ジリギエは寝台へと近寄って行く。
「ぎゅぃ、ぎゅ。ねぇね、ねぇね？」
幼生体の特徴である細長い胴を揺らし、まるで泳ぐかのように…
…ジリギエは旦那の居る寝台に上ることはせず、頭部をのけぞらせて緑の瞳をこちらに向けた。
「……ねぇね……とと、ねぇね？」
ジリギエは、日に何度も俺に問いかける。

ねぇねはどこ？
ジリのねぇねは、どこにいるの？

母親であるカイユには、それを問うことは無かった。
「ねぇねはまだ、見つからないんだよ」
ジリギエは、知っているから。
姫さん消えたあの日から、カイユは食事をとらず、一滴の水さえ口にしていないことを。
そして、眠ることを拒むようになっていることも。
「ごめんな、ジリ」
竜騎士であるカイユは1週間以上絶食し、不眠でいようと肉体的には問題無い。
だが、内面は……。

「とと……」
ジリギエは緑の目を細め、寝台から少し距離をとった。
尾で上下に激しく動かしながら布切れを掴み、両手で丸めて寝台の上へと投げつけた。
「おき、おっき！　がぶうううう～っ！！」
せっせと布を拾い、小さな両手で丸めて次々と投げつける。
「おさっ、おっさん！　おっさん！　おっき、おっきぃいいい！！」
それは寝台の上の旦那の頭や背に当たっているが、相変わらず反応は無い。
反応したのは、俺。
「お……おっさん？」

今確かに、“おっさん”って言ったよな！？
「おい、ジリ。おっさんって、旦那の事か！？」
「ぎゅ？　おぢい、おっさん！　おぢいっ！　おっさん！」
ジリギエはうなずきながら、旦那に布切れ玉を投げ続けた。
「おっさん……おぢい？」
うわっ、舅殿かよっ！？
セレスティス……ったく、あの人は！
四竜帝すら敵わぬ＜ヴェルヴァイド＞におっさんを連呼する我が子……それが問題かというと、問題無しだなぁ。
「“おっさん”ねぇ。まぁ、旦那がそれに怒るなんて事はないだろうしなぁ。好きに呼べばいいさ」
俺も餓鬼ん時に“おじさん”って言ったけど、旦那は全く気にしてないようだった。
世界最高齢竜なんだから、おじさん・おっさんというより“おじいちゃん”が正しいような……いや、旦那に“おじいちゃん”を適用するとなると、全世界の［おじいちゃん基準］が乱れる気がする。
「おっさん！　おっき、おっき！　おっさん、ジリ、おっき！！」

おっさん呼ばわりされようと、旦那は赤い格子模様の色あせた布を握ったまま置物のように動かない。
あれからずっと、＜ヴェルヴァイド＞はここにいた。
竜族が総力をあげて姫さんを探すと言う陛下に、返事も意見も口にせず。
ただ、そこにいた。
「……旦那」
ジリギエが次々に投げた布に、その身体が埋まっていく。
投げやすいように丸めた布は白い鱗に当たり、ふわりと広がる。
ジリギエの投げつけたそれらは、瞬時に花弁を開く蕾のようだった。
布切れで出来た蕾は色とりどりの花となり、旦那を俺の視線から隠し……俺は幼い日に見たある光景を思い出す。
棺に収められた魔女オテレ・ガンガルシーテの遺体は、彼女が愛した花々で満ちていた。
華やかで色鮮やかなそれは、絵本にあった妖精の寝床。
横たわる老女の蝋のような肌を、隙間無く入れられた花が美しく飾っていた。
それが、オテレばあちゃんが最も“お洒落”していた姿だった。
「……ねぇ、旦那」
彼女が俺のせいで寿命前に死んだ七日後に、俺は＜ヴェルヴァイド＞と初めて会話した。
俺は、初めて会ったあの時から。
あれ以降も、旦那に会うたびによく話しかけていた。
幼い俺は一方的に喋り“聞いてもらった気分”になって、それで満足していた。
言いたい事を言い。
訊きたい事を訊いた。
返事がもらえなくても、かまわなかった。
必要な時のみ……これも違うな、必要な時に喋るなんてことはで

きない人だと、子供心に感じていた。
他人との意思疎通を望むこともなければ、拒否するでもなく。
拒まず、受け入れず。
ただ独り、そこに居る。
それにあの時の俺は救われた。
でも、俺は変わり。
＜ヴェルヴァイド＞も変わった。
ねぇ、旦那。
そこに居るだけでは、俺もあんたも救われないんだよ。
「俺は」
姫さんというつがいを得て、旦那は変わった。
まるで幼い時の俺のように。
俺に言いたい事を言い。
俺に訊きたい事を訊いて来る。
旦那を動かす原動力は、異界から来た黒髪の娘。
「数日中に赤(あっち)の大陸に戻ろうと思います。陛下には大陸間飛行の許可をいただきました」
姫さんと旦那の、噛み合わない様で噛み合っている会話。
その会話が作り出す空気が、俺は嫌いじゃなかった
あの子に“伝えたい”という気持ち。
気持ちを口にし、声にして出す。
愛しいつがいと“声”で繋がる『会話』は、身体を繋げることにも似て……俺達雄竜にとって、至福の時間になるのだから。
「……とりあえず、俺だけ発ちます。あっちで赤の竜帝陛下を補佐し、捜索指揮を執ります」
『あの子が生きていることを疑っていない自分』が言うであろう言葉を、脳内で組み立ててから口にした。
＜ヴェルヴァイド＞を刺激しないように注意をはらい接することを、俺は四竜帝に命じられていた。
本当は。

大声で言いたかった。
ジリギエのように言いたかった、叫びたかった。

起きろ！
起きて、此処から出て行け！
あんたのつがいを探しに行けっ！
世界を駆けずり回って探してこいよ！
死んでいたなら……あの子を食うって、約束したんだろう！？
あの時あんたが、そう言ってたじゃないか！！

それを口に出来ない自分に、腹の底から怒りがこみ上げる。
この5日間、俺はそれを表面に出さないようにしてきた。
だが、そろそろ限界だった。
俺は短気な性質（たち）じゃないと思っていたんだが……。
いつまでたっても動かない、予想外の旦那の態度が俺の神経を日々削っていた。
「カイユとジリギエは置いていきます……どこの大陸で姫さんが見つかるか分からないんで、発見され次第その大陸にカイユとジリギエを直行させます」
「と、ととっ～！？　かか、ジリッ……ぎぎぎゃぁあああっ！！」
俺の言葉を聞いたジリギエが不満げに鳴き、丸めた布を両手を使って俺へと投げつける。
短い足を踏ん張るようにして立ち上がり、翼を広げて威嚇するかのように小刻みに震わせて鈴の転がるような独特な音をたてた。
「こ、こらっ、ジリッ！　やめっ……」
その音は特殊な周波数で、聞いた者は耳を押さえずにはいられない不快なものだ。
まだ幼く弱い竜族の幼生が自衛手段として持つ能力で、成長とともに失っていく能力だ。
「ぎょぎぎげぇえええ～！　ジリ、ととっ！！　ぎ・ぎぎ・ぎぎぎ

ぎゃぁあああ！！」

俺は両耳を手で覆いながら、いつになく反抗的な態度に出た息子に怒鳴った。

「いいかげんにしろっ、ジリギエ！」

大人気ない気もするが、普通の竜族よりも聴覚の優れている俺にとってはこれはかなり“痛い”。

脳内で鋼鉄製の超小型ハリネズミ数百匹が、大運動会をおっぱじめたって感じだ。

「あ！？　なに馬鹿なこと言ってんだ、お前も連れて行けだって！？　父ちゃんは最高速で飛ぶんだぞ！？　餓鬼のお前が一緒になんて、無理だって！　……ん？」

内ポケットにしまっていた電鏡が、微かに熱を持つ。

熱で伝える型はまだ試作品の段階で、本体強度を五割り増しにすることに成功したものの、温度が一定しないのが問題点だった。

体温より数度上がるだけだったり、熱湯のように熱くなったり。

まだまだ完成には程遠い状態だった。

俺は耳から右手を離し、電鏡を取り出した。

それを見たジリギエは口を閉じ、翼をたたんだ。

ジリギエは幼いがちゃんと分かっている。

仕事の邪魔になるようなことはしない。

「はい、陛下。電鏡の間っすね？」

鏡面に映るのは、俺自身。

新型電鏡は映像を捨て、音声だけを届ける。

情報量を音声のみにしたことで、携帯用サイズでも安定した大陸間通話を可能に……が、目標だ。

「母さ……赤の竜帝陛下から、緊急連絡？　俺を出せって言ってる？　赤の陛下じゃなく？　え？　すみません、もう少し落ち着いてくださ……はい？　誰がです？」

電鏡越しに、陛下の同様と困惑が伝わってきた。

「……ひ、ひよこ男？」

俺は陛下の『ひよこ男』という単語を聞き、ジリギエを電鏡の間に連れて行かないことにした。

「ジリ、父ちゃんは仕事だ。お前は食堂に行って、飯を食って来い。今日はステイラが特製お子様ランチを作ってくれるって言ってたぞ？」

「ぎゅっ？　こーちゃまごは！　ごは、ジリ、もぐもぐ！」

俺と同じ緑色の瞳をぱちぱちと瞬かせ、両手をぎゅっぎゅと握って言うジリギエの頭を撫でて、俺は寝室から駆け出した。

「ひよこ男って……ったく、勘弁してくれよ！」

俺は＜青の竜帝＞をドン引きさせている『ひよこ男』に心当たりがある自分に、ちょっとだけ切なさを感じてしまった。

その切なさが纏うのは哀愁ではなく、郷愁。

口の中に、餓鬼の頃大好物だった卵焼きの甘さが広がった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9714f/

四竜帝の大陸

2011年11月18日13時30分発行